

BIOHAZARD 【V+ α 】

☒蒼龍☒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バイオテロが世界的に認知された世界。

琴葉葵は何処にでも居る普通の女子高生である……であつたのだ。

しかしその日常はバイオテロにより脆くも崩れ去ってしまう。

そして彼女の危機を前に現れた謎の少女……それは幼い頃、バイオテロ事件により命を落とした筈の双子の姉、琴葉茜だった。

響き渡る悲鳴、阿鼻叫喚の地獄絵図、葵は友人や母、生きていた茜や彼女達の前に現れる歴戦の戦士達と共にこの惨劇を生き延びられるのか？

追記：現在本編は完結し外伝のオリジナルシナリオ、VILLAGESシナリオが完結

致しました。

目次

149	EP	IX 『集結し始める者達』	
129	EP	VIII 『一難去って』	
	EP	VII 『防衛戦』	114
	EP	VI 『合流』	98
	EP	V 『レオンとB・Y.』	72
	EP	IV 『CLOWN』	55
	EP	III 『避難民達』	39
	EP	II 『戦闘』	18
	EP	I 『惨劇の幕開け』	1

	EP	X 『悪夢の真相』	177
	EP	XI 『疑念』	204
	EP	XII 『S・W・K/A・K』	224
	EP	XIII 『舞い降りた英雄と葵の決意』	241
	EP	XIV 『作戦開始』	260
	EP	XV 『クリス、ゆかり達の戦い：現れる「能天使」』	276
	EP	XVI 『レオン、葵達の戦い：感染拡大とエクスシアの脅威』	297
	EP	XVII 『ジエイク達の戦い：動き出した道化師』	325

EP	XVIIII『ジェイク、セイカ達の戦い：完成した希望』	347	ゆかり達の戦い・脅威の【智天使】と現れるウリエル』	488	
EP	XIX『幕間・手渡された希望と新たに動く道化』	368	EP	XXIV『クリス、ジェイク、ゆかり達の戦い：VSウリエル戦』	
EP	XX・i—1『レオン、葵達の戦い：深淵への扉①』	394	508	EP	XXV『幕間・これまでの情報共有』
EP	XX・i—2『レオン、葵達の戦い：深淵への扉②』	414	EP	XXV・V『幕間・それぞれのお話』	
EP	XXI『レオン、葵達の戦い：V S ラグエル戦』	437	EP	XXVI『作戦説明とヨナの憎悪』	
EP	XXIII『レオン、葵達の幕間：白龍の遺言、紅の日記』	459	EP	XXVII・i—1『レオン達&葵達の戦い：VSラファエル&セラキエ』	
EP	XXIII『クリス、ジェイク、				

	EP	XXVII:1-2 『レオン達&葵達の戦い:VSラファエル&ゼラキエル戦』	629		
	EP	XXVIII 『最終幕間:ヨナの過去と最終決戦の幕開け』	653		
	EP	XXIX 『覚醒』	677		
	EP	XXX 『最終劇、開幕』	706		
	EP	XXXI:1-1 『終焉の刻①』	726		
	EP	XXXI:1-2 『終焉の刻②』	753		
	EP	III 『マキルート:マキ流オニゴッコ』	842		
	EP	IV 『ラオの最期と作戦完全変更』	865		
	EP	II 『食い違いと『ゲーム』』	818		
	EP	I 『新たななるハジマリ』	794		
		fection]			
		resident evil Side			
		story [Mother, safe			
		LAST EP 『それぞれの未来』			

	EP V 『ヨナルト：トランプ殺しと 増える参考人』	888	EP I 『ヨナルト：トランプ殺しと 増える参考人』	1026
	EP VI 『葵ルート：『親』と『愛』』	912	EP I 『葵ルート：『親』と『愛』』	eat father
	EP VII 『B・Y・ルート：『人間』 と『責任』』	935	EP I 『巻き込まれたウィンターズ 家と巻き込んだ葵達』	1048
	EP VIII 『茜ルート：怪物と『守 る』事』	959	EP II 『現状把握と『村』とライカ ン』	1076
	EP IX 『レオンルート：『正義』と 『使命』、そしてイヴの『決意』』	980	EP III 『襲来と老婆と村人』	
1004	EP X 『ダールトン一族の最期』		EP IV 『救えぬ命と弄ぶ者』	
	LAST EP 『得られた『自由』と『未 来』』		EP V 『ショール』とデュークと蟲人	1129

- 1301 EP XI 『道標とベネヴェイェント邸』
 1276 EP X 『新たな銃とそれぞれの戦いの始まり』
 1250 EP IX 『絶望と苛立ちと他が為の涙』
 1227 EP VIII 『ドミトレスク家の最期』
 1202 EP VII 『ドミトレスクの怒りと葵達の怒り』
 1181 EP VI 『ドミトレスク城潜入』
 1154 EP V 『間』
 1421 EP XVI 『交渉、その結末』
 1447 EP XVII 『鋼の軍団と合流のB.Y.』
 1469 EP XII 『工場攻略、そしてシュルムとの戦い』
 1399 EP XV 『交渉台と砦へ』
 1376 EP XIV 『情報交換と襲撃のモロー』
 1349 EP XIII 『更なる化物と怪人モローと再会』
 1323 EP XII 『暴かれた幻覚』

EP XIX 『ハイゼンベルクとの決
着』 1492

EP XX 『襲撃、そして…』

1514

EP XXI 『菌根とポイントゼロと

繋がった希望』

1538

EP XXII 『イーサン・ウィンタ

ズ』

1563

EP XXIII 『最終決戦』

LAST EP 『全ての終わり、そして

…』

1606

EP I 『惨劇の幕開け』

●●●は夢を見ていた。

これはいつも見る夢、幼い頃であろう記憶、しかして知らない記憶の夢。決まって厄日になる時に限って見る夢。

それは知らない筈の施設らしき場所、其処で●●●である●●●が壁にもたれ掛かっている父に拳銃を向け引き鉄を今にも引きそうな場面である。

「や、止めるんだ!!」

あ『ズドンツ!!』あ……」

「あ、アナタ……」

「……」

父の静止しようとする言葉を無視し、●●●は引き鉄を引き、弾丸は父の頭に一直線へ向かって放たれ壁に鮮血が走り、床に脳漿が止めどなく流れて行く。

そう、●●●は父親を殺害したのだ、今この時に。

「ど、どうして……どうしてなの……」

「……すまん、●●●……」

●は一言、●に謝罪の言葉を投げかけ、母親に対しては射抜く様な視線を向け、まるで逃げずにこの場に残す●を育て上げると言わんばかりの殺気を放ちながらそのまま昇降機の操作を始め、自身と父親の死体を残して母と●を地上へと上げ始めた。

●は何とか腰の抜けた身体を腕の力で端まで持つて行き、距離を離して行く自身の双子の姉妹の姿を捉えていた。

「どうして…どうしてお父さんを撃つたの…お姉ちゃああああん!!!」

悪夢の最後の場面、地上へと向かい始めた昇降機から双子の妹、琴葉葵は姉である琴葉茜に何故父を殺したのか答えを求め叫んでいた。

しかし、茜は何も答えず葵を悲しげな表情で見つめ、そして昇降機のフロア間の壁により葵の視界は塞がれ、二度と茜の姿を見る事は無かった。

そんな悪夢から高校生となった琴葉葵はベッドの上で目を覚まし、身体を起こして一言だけ言葉を発した。

「…ああ、今日も厄日確定だ」

この夢を見た後は決まって葵の厄日となり、様々な厄災が降り掛かり良い事が起きた試しが無かった。

その為この覚えの無い悪夢に辟易し憂鬱な生活を送っていた。

月日は2014年7月、世界にバイオテロが蔓延りウィルス兵器やBIO・ORGANIC・WEAPON（通称B.O.W.）が実在すると言う非現実的な事実が受け入れられ、昨今もニューヨークで大規模バイオテロが引き起こされた世界。

この物語はそんな世界の日本に生きる少年少女達がこれから先に待ち受ける惨劇に巻き込まれてしまい、如何に生き延びて行くか否かの瀬戸際に立たされる物語である。

葵はベッドから起き上がり、私服に着替え洗面所で顔を洗い、歯を磨き髪を整えてから居間に向かう。

其処には葵の母である琴葉藍が居り、朝食の焼いた食パンとベーコンエッグ、サラダをテーブルに並べて始めており葵はその手伝いを始める。

「おはようお母さん。

朝ご飯を並べるの手伝うね」

「おはよう葵、いつもありがとうね」

葵は藍と他愛ない挨拶を交わしながらテキパキと朝食を並べ、そのまま椅子に座り「いただきます」と礼儀正しく朝食を食べた。

そして食器を洗い片付けている最中、葵の顔色に気付いた藍はまた悪夢を見たのかと思いを掛けていた。

「葵、また例の悪夢を見たのね」

「ああ、うん、本当に変な悪夢だよね。」

お姉ちゃんもお父さんも事故で亡くなった筈なのにそのお姉ちゃんがお父さんを殺した、なんてあり得ない夢。

しかも妙にリアリティがあつてそれがかえつて気分が悪くなるって奴：最悪だよ、本当に」

葵はまた悪夢を見た事を素直に話し、その妙な程リアリティがある悪夢に気分を悪くしているとも言いそのまま食器を片付け終え、手を拭きテレビを点ける。

無論悪夢を忘れたい為に何でも良いので番組を観たかったのだ。

しかし今の時間は8：30を過ぎた頃、既に子供向け番組も終わりどの局もニュースを流すだけであり葵は少し失敗したと思っていた。

何故ならニュース番組はどこもかしこも先日起きたニューヨーク州でのバイオテロ事件の特集ばかりであり、葬はこの手のニュースを母の藍共々様々な意味で嫌気を持っているのだ。

『では、グレン・アリアス氏がバイオテロを引き起こした理由は復讐心からであると言
う訳ですね?』

『はい、これはBSAAの公式会見でも公言されており、彼が亡くなった婚約者や親友、その親族達を奪った世界への復讐心から今回のバイオテロへと走ったとされています。

また、BSAAは此度のバイオテロを未然に防げなかったのかと問われますがアリアス氏のそのキャリアから為される手腕によりBSAAもアメリカ政府も出し抜かれてしまったと認めざるを得なく、彼の復讐心が如何に強大で負の連鎖を起こさせていたかを物語るものであります。

そしてー『ブツンッ!』

「はあ、朝から嫌な物見た…2週間も同じニュースばかり…最悪」

「そうね…けど、それだけバイオテロが日常的になって来ちゃったって事でもあるのよね。

バイオテロで亡くなった茜達が聞いたら酷く悲しくなると思うけど、それだけ

生物兵器やウイルスが世界中に知れ渡っている事にもなるわ……」

葵はテレビを消し、そのままソファに背を掛け気分が悪いと言う表情を見せた。

琴葉家は一見すると普通の一家ではあるが、その実は海外旅行中に発生したバイオテロ口により葵の父琴葉紅と葵の双子の姉である琴葉茜を失っており、この手のバイオテロに關してはB・O・W・やウイルス兵器を利用する者達に対して嫌悪し、また出歯亀の如くニュースで嬉々と報道し、犠牲者を弔う精神を持たないこの手の報道も消えるべきだと藍共々思い複雑な感情を抱いているのだ。

そんな琴葉家の次女葵はバイオテロで亡くなった筈の姉が父を殺害する悪夢を見る為この日常に余計に嫌な思いを抱きその感情が災いを呼ぶと学友が教えてくれており、しかしこの悪感情や悪夢から逃れる術が無くそんな日々に対してこう口にするのだ。

「ああ、憂鬱」と。

「葵、確かに悪夢を見た日は運が良くないかも知れないけど余り気にし過ぎるのも良くないわ。

だから、気分転換に散歩に行きましょう」

藍はそんな葵の様子を見かねて散歩に行く事を提案し、いつの間に用意したのかバスケットと日傘を見せ、気分転換の散歩は確定と言う事を葵に知らせる。

葵は藍の包容力と行動力に苦笑し、散歩に出掛けようと自身も準備して自身の分の日

傘も用意するのだった。

東京都練馬区、葵達の家から近くにある自然公園へと足を運び、そこで長閑な風景を満喫する琴葉一家。

周りには自分達と同じくこの長閑で暖かな風景を楽しみたい来客者が居り、朝に見た

悪夢を忘れさせるのに十分な心地良さを感じていた。

「どう葵、悪夢なんて忘れられたかしら？」

「…うん、それくらい落ち着けたよ。」

ありがとう、お母さん

葵は気分転換に連れて来てくれた母に感謝しながら空を見て、澄み渡る青い空と心地良い風に身を委ねる様に瞳を閉じていた。

これなら悪夢に連動した厄日は起きない、そんな期待が葵の中で生まれ重く沈んだ心を弾ませていた。

「本当にありがとね、お母さん。」

お蔭で元気になれたよ！

「ふふ、それは良かったわ。」

母さんも張り切ってサントイッチ作ってお出掛けの準備をした甲斐があったわ

琴葉親子は笑顔溢れる日常を今謳歌し、悪夢を見た日ではあるが神様が居るなら感謝したい程良い1日を過ごせる、葵は不思議とそんな気分になり早速次の場所へ行こうとベンチから腰を上げ立ち上がった。

「じゃあお母さん、次は何処に『ドオオオオオオッ!!!』きやあ???

!!!

い、今の何?!?」

葵が母に手を伸ばした瞬間、後方にある街から爆音が響き黒煙が幾つも上り始める。葵と藍は、否、自然公園に居る者全員は思考が一瞬遅れるが街の方で爆発事故が起き、それが大規模と呼べる程に凄まじい物だと理解する。

「ば、爆発……?」

何だか危ない予感が……お母さん、今から指定の避難場所に『P i l l l l l l l l l l l l l l i i i !!?』って電話?!

誰なのこんな時に……って、マキさん?

もしもしマキさ『葵、アンタ今何処に居るの?!?』

えっ、家の近くの自然公園だけ……それよりあの爆発って『早く其処から逃げて、これはバイオテロだよ!!?』バ、バイオテロっていきなり何を「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!?』今度はな……あ……あ……『もしもし葵、葵どうしたの?!?』

ねえ返事しなさいよ葵!!?』

爆発に困惑しながらも母に手を伸ばし緊急災害時の指定避難場所（この自然公園は避難場所ではない）に移動しようとした所で葵のスマホから着信音がなり、葵は誰からの電話かと見ると葵のクラスメイトで帰国子女な人気者『弦巻マキ』が電話を掛けて来た為、電話に出るとマキは慌てた様子でこれはバイオテロだと叫び、逃げる様に叫んでい

た。

更に電話先に耳を傾ければ爆発や悲鳴が相次ぎ、マキの方も明らかに異様な事態に巻き込まれている事が窺い知れた。

しかしバイオテロと言う確かに日常を蝕む非現実が実態としてあるこの世界でも日本はバイオテロとは余りにも無縁だった為その話が飲み込み切れず困惑していた葵だが、そんな彼女の近くで悲鳴が上がる。

何事かと思いきや葵は視線をそちらに向けると信じられない光景が広がっていた。

何と……公園の客の何人かが、公園の外から来た集団に組み付かれ、首筋を喰い千切られたり押し倒された人は複数人に腹や胸を貪り喰われている先程の光景とは全く逆の地獄絵図が葵の瞳に映っていた。

「そ、そんな……これは……ウイルス感染者の……あ、葵、早く逃げるわよ、葵!!？」

「……あ、お、お母さん……うん、逃げ……あつ……『葵、どうしたのよ葵、葵!!?』」

藍は葵の手を引き、目の前の地獄絵図……ウイルス感染により生まれたゾンビが隣人を喰い殺す忌むべき光景から逃げようと感染者いる方向から逆の方の出口に向かつて手を引こうとし、葵も漸く反応してそちらに向かおうと視線を外した所……ゾンビが3体そちらから歩いて来ており、既に前方も後方もゾンビに囲まれてしまっていた。

更にゾンビに喰い殺された人達もまたゾンビと化し、葵達は夥しい数になったゾンビ

に追い込まれてしまっていた。

「……このままじゃあ無理ね。」

葵、お母さんが囹になるから逃げて！」

「お、お母さん何を」「このままじゃ2人共死んじやうからよ！」

それなら私が囹になって葵を逃すのがお母さんの役目よ！」そんなのダメだ

よ!!?」

お母さんも一緒に逃げてよ!!?」

藍はゾンビ達から葵を逃がそうと囹を買って出ようとしたが、葵が手を離さず一緒に逃げようとその場で口論になってしまう。

が、ゾンビ達はそんなのをお構い無く葵に詰め寄りそして血塗れの口を大きく開けながら葵達に襲い掛かろうとしていた。

「ッ、葵!!?」

「お、お母さん……!!?」

ゾンビ達が葵達目掛けて覆い被さろうとした瞬間藍は葵をゾンビの居ない方へと押し出しゾンビ達から一瞬でも引き離す。

その方が葵がこの場から逃げおおせると考えた藍なりの最善手であった為である。

一方葵は藍のこの判断に納得出来ず押し出されようとも母を救い出そうと必死に手

を伸ばしていた。

しかし押し出された関係上葵と藍は距離が離れ、ゾンビ達は藍を今にその血塗れの口で喰い千切ろうと迫っていた。

そして…。

『ズダダダダダダダダダダダンツ!!?!』

『ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”…』

突如として銃声が鳴り響き、ゾンビ達は脳髄を撒き散らしながら身体も撃ち抜かれ完全に活動が停止した。

葵、藍は何が起きたのかさっぱり分からず銃声をした方向、丁度葵が押し出された方の更に背後に視線を向ける。

すると其処には如何にも不審者ですと言う黒い服の上に防弾ジャケットに防弾ヘルメット、更に鼻元までを黒フードで覆い隠しゴーグルで目も隠している体型的に葵と其処まで年齢差が無い少女が明らかに改造されているAKモデルのアサルトライフルを構え、そしてゾンビ達の活動停止を確認してから葵達に近付いて来る。

「……………どうやら、囁まれて感染はしとらへんらしいな。」

間に合うて何よりや」

「……………」

「…ああ、ウチがこうつ物騒なもんを持つとつたり怪しそうなカッコしとるから警戒が解けへんやね。

安心せえてええよ、ウチは葵と、オマケで其処にいる『お母さん』の味方であるさかい「動くな、今直ぐ武器を足元に置いて遠くに蹴って跪け」……」

不審者らしき人物は葵とオマケ扱いではあるが藍の味方だと話し、武器の構えを解きつつ葵達に手を伸ばそうとした所でその不審者らしき人物の背後から葵の聞き慣れた声が武装解除と跪く様に要求して来る。

その人物は先程葵に逃げる様に電話越しに叫んでいた弦巻マキであり、手にはハンドガン、アサルトライフルにストラップを付け肩に携帯し、更に防弾チョッキと肩パット等を付けた完全武装状態であり、更に肩には国連公認の対バイオテロ組織『BSAA』のワッペンまで貼られ、佇まいも訓練された兵士のそれであり葵の素人目からもマキがBSAA隊員だと一目で判る様な雰囲気醸し出していた。

「あんなあBSAAの隊員さん？

ウチは敵じゃのうて「そんな言葉でこの銃を下ろせると思ってるならバカとしか言えないね、『A. B. F.』の『オメガ1』。

アンタ等の所為で私達の仲間がB. O. W. ごと絨毯爆撃で殺されてるんだ、其処までされてこの銃で警告無しにアンタの脳天をブチ抜かないだけでも人間だか

らつて言う温情があると思え。

分かつたらさつさと武装解除して跪け、このクソビッチ「クソビッチは幾ら何でも言い過ぎぢやうん？」

まあええわ、それでそつちがウチに危害を加えないならそうするわ、ほら『ガチャ、ガツ』で、次は？」

マキの有無を言わさぬ警告に不審者らしき人物：A. B. F. のオメガーと呼ばれた少女は武装解除し、次に銃やナイフを蹴りそのまま跪き次の指示を仰ぐ。

するとマキはハンドガンを後頭部に突き付けながらヘルメットを外し、フードとニット帽を無理やり外す。

するとその下からはやや肌やロングヘアの一部をサイドテールに結んだやや赤が目立つマゼンタカラーの髪は荒れているが整えれば間違い無く美少女の部類に入る容姿が見て取れた。

そしてマキはそのまま後頭部に銃を突き付けたまま手を縛り上げ始めた。

「うーん、此処までやられると流石にウチも傷付くわ。」

確かにウチはあんさん等の仲間を爆破しとつたのも事実やしBSAA以外からも良い目で見られとらんのも自覚しとるけど此処までされたらウチはゾンビ達の餌になってまうな。「黙れ、素手でB. O. W. を殺せる化け物擬きが」いやそれ言っ

たらあんさん等の英雄のクリスはんも「アレは鍛え抜いた末だから例外、アンタは明らかに私と余り変わらない見た目なのに同じことをやってるのが異常だって言ってるのよ」あくそれ言われるとウチもちよい反論出来へんわ〜」

そうして漫才の様な、しかして完全に犯罪者をもその場で縛り上げるそれをやって残り
はGoogleを外すだけになりマキはその手をGoogleに手をかけ始めた。

その間葵達は蚊帳の外であったが、葵はこのオメガの言葉一つ一つを聞くと何故か心が安らぎ、その髪や整った容姿に何処か懐かしさを感じGoogleの下にある素顔に対して興味を惹かれ始め視線を外せずにいた。

「さあオメガ、アンタの今まで隠して来たその素顔を拝ませて貰うわよ。」

そしてそのままB S A Aの手配リストに載せてやるわ!! 『ガッ!』?」

そしてGoogleが力づくで外され、その素顔が白日の下に晒された。

その顔は何処か葵と良く似て：否、葵と全く瓜二つであり、唯一違うとすれば葵がシアンカラーの髪の毛と瞳の色に対しこの少女は逆のマゼンタカラー。

更に髪の結ぶ位置も葵と左右対称であり葵をそのまま反転させたかの様な素顔が其処にあった。

そして葵はその顔に見覚えがあった。

それは記憶の中に残る物からそのまま成長させたかの様な、しかし間違い無く葵が最

も良く知る人物の容姿であり、同時に幼い頃に死んだ筈でもう2度と会えない筈の人物であつた。

「あ……えつ……う？」

「……ふう、久しぶりやな葵。」

『お姉ちゃん』が帰つて来たで」

そう、其処に居たのは紛れも無い葵の双子の姉である『琴葉茜』その人であり、その顔を見た藍、及び初めてオメガ1の素顔を見たマキは驚きを隠せず呆気に取られてしまつていた。

そして今この時にも街では爆発が起き、悲鳴がそこから中から上り感動の再会とは無縁の阿鼻叫喚の地獄絵図、バイオテロによる惨劇の渦が更に広がり始めていた…。

B
I
O
H
A
Z
A
R
D
【
V
+
 α
】

EP I I 『戦闘』

街で惨劇が繰り広げられる中、葵は死んだ姉である茜と再会を果たし空いた口が塞がらずにいた。

すると茜はそんな葵達を尻目に縛られている腕を解放する為手首や肩の関節を意図的に外し縄を緩めてそのまま解き、更に外した関節を押し込み縛り上げられる前の状態に戻る。

「あ、おいアンタ!!？」

誰が自由にして良いと「はあ、あんさんなあ、今はウチに構うよりバイオテロ鎮圧が最優先やろ？」

ウチもそれは同じやさかい、だから今の所はあんさんが邪魔にならんのかならうちは葵と『お母さん』を逃す為なら手え貸しても良えよって訳なんよ分かる？

分かるんならさっさとウチにそのごっつい銃を向けはるのは止めるんや、良えな？」

くつ、屁理屈を……HQ、此方『デルタ2』!

バイオテロ鎮圧中にA・B・Fのオメガ1を確認、逮捕許可を申請された

し!!? 『ザザツ』「此方HQ、A・B・F. のオメガ1確認は理解した。

しかし優先すべきは民間人の救助及びバイオテロ鎮圧である、逮捕の許可は今は下ろせない、そのまま任務に当たって貰う、以上」

ちよっ、HQ!!?

……………ドククシヨウが、あのクソ司令部!!?」

「まあクソ上司って言いたいのはウチも分かるよ、BSAAって隊員を消耗品か何かと勘違いしとるとしか思えんフシがおもつくそあるう訳やし「アンタが言うなクソビッチ!!?」おお怖い怖い、でもウチに当たらんといてな。

当たるならウチにあんさん等のお仲間ごとB・O・W. 吹っ飛ばすようウチに命令しはったボスカB・O・W. に当たって欲しいわ。

現に今バイオテロが起きて辺り一体バイオハザード地区が出来上つとるんさかい、このままゾンビやら何やらを始末せえへんこの国、滅菌作戦でぜえくんぶ核で焼き払われてまうで?

そうなる前に救える命を救う、それがアンタ等正義の味方BSAAとちやうん?」

「滅らざ口を…チツ…!」

マキはHQに茜の逮捕許可を仰いだが却下され、バイオテロ鎮圧を命じられ苛立つて

いる所に茜が如何にも分かる的な雰囲気と口調でマキに同調するが、マキは目の前でA・B・F、特に強襲、特攻突撃部隊であるオメガ小隊のグレネードや戦車、迫撃砲等による絨毯爆撃で仲間を失った経験からオメガ小隊長のオメガIたる茜に憎悪を抱いており、この屁理屈等にバイオテロが起きていなければこの手で殺してやりたいとすら考えていた。

が、茜の屁理屈でもある正論に同意せざるを得ない状況である為茜に構えたハンドガンを下ろし、直ぐにアサルトライフルを構え周りの警戒に移り葵や藍の安全の確保に専念していた。

「あ、あの……本当に、お姉ちゃん……なの？」

「ん？」

ああせやで、ウチは可愛い可愛い葵のお姉ちゃんの茜ちゃんやで。

……本当に久し振りやな、『アレ』から8年やな。

よう此処まで可愛くなってくれたなあ……『お母さん』には感謝せなああらへんなあ」

「……………」

葵はそんな2人の会話が終わった所で漸く茜に声を掛け、その素振りや口調は正しく茜その物であると確信し死んだと思っていた姉に再会出来て嬉しさ5割、しかしバイオ

テロと言う非日常に戸惑いを隠せないのが3割、そして友人のマキの口から語られた茜のBSAA隊員に対する所業に信じられないのとバイオテロで死んだ筈なのに何故生きていると言う困惑に2割の感情が入り乱れ上手く言葉紡げずにいた。

一方茜は葵が立派な美少女、しかも今の時までバイオテロとは無縁な生活を送り青春を謳歌していた事に嬉しさ7割、そんな風に葵を育てた『母』に何処か棘のある感謝が1割、そしてバイオテロ鎮圧に2割の感情を割き今こうしてる間にも装備を回収して武装を整え周りの警戒に入った。

しかし茜はふと何かを思い出したかの様に葵に振り向き太腿に付けてあるホルスターからハンドガン：但し世間一般のハンドガンでは無く、ミリタリーマニアでその手の動画を漁ってるが、あくまで民間人である為素人目しかない葵が見ても明らかに魔改造してますと言わんばかりに原型が何の銃だったか分からない様なハンドガンを取り出して葵にグリップを向けて手渡す素振りを見せていた。

「えっ、お姉ちゃん……？」

「ほら葵、これ使うて。」

今こんな状況やさかい、葵も自分の身を守るんならコレが必要さかい。

だからウチの予備の銃とマガジンをあげるわ。

使い方は分かるんやろ、銃を構えて引き鉄を引いてゾンビを撃つんや。

ウチもフォローするから安心してこれ使うとき、ええな？」

如何やら茜は葵に護身目的で予備のハンドガン、及びマガジンを手渡すらしく、軽くフォローを入れると言つて使い方の軽いレクチャーをしていた。

こうして見れば仲の良い姉妹だが、状況が状況だけに異様な光景でありマキも友人が姉を名乗る不審者に銃を手渡されている事に複雑な気持ちを抱くが、葵が戸惑いながらも銃を疑いもせず受け取つた事でこの2人は姉妹なんだ、2人には自分では分からない絆があるときまざまざと見せつけられていた。

「葵、もし銃を持つのが嫌なら」

「大丈夫、使い方なら動画とか見て分かつてるから。」

それに……この人『だった』モノを目の前で見たからには、もうコイツらには話し合いなんか通じない、引き鉄を引いて自分の身やお母さんを守るしか無いって何となく分かつたから……心配しないで、お母さんは私が守るから、離れないでね……」

藍は幾ら感染者の成れの果てとは言え人に銃を向けるのが嫌なら葵に自分から銃を持つと買って出るが、葵は茜から銃を受け取り安全装置を解除し一旦マガジン内に何発弾丸が入ってるか確認し、全部で17発入っているロングマガジンであることを確認し、更に弾丸の形状が45ACP弾であり、一体何を如何に改造すれば45口径弾が17発も装填可能なロングマガジンのハンドガンが出来上がるのか、又それに対応し且つ

銃が壊れない様に仕上がるのか不思議に思ったが今はそれより藍を守りつつ自分の身を守る事を優先的に考えるべきだと頭の中で摩訶不思議銃の事は頭の隅に追いやり、マガジンを再装填しヨーロッパピアンスタイルでスライドを引き、ハンドガンをいつでも撃てる状態にしつつ右手人差し指をいつでも引き鉄に掛けられる様に伸ばしながら銃を持った。

「良い葵？」

連中は先ず胴体を撃つても効き目なんかあらへん、あのゾンビ共を活動停止にするには脳を撃たんきやならへんよ。

つまり頭を撃つんや。

それと……頭を撃つた後もある程度弾をぶち込んどかんとあかんで」

「？」

オメガ1、今回はTウイルス由来のバイオハザードが起きてるなら其処まで過剰にせず頭1発撃てば「本当に今回の件がTウイルスで起きたんならそれに越した事あらへんよ。

けどもしかしたら……ウチ等A・B・Fで確認しはった新型ウイルスでのバイオテロとも考えられるんや今回は。

何せウチ等がそのウイルスの性能テストのダシにされた後こんなバイオ

テロが起きたさかい、警戒したくなるんや」……ふーん、新型ウイルスね…取り敢えずH Qに報告しとくか。

此方デルタ2、H Qへ、今回のバイオテロ事件で使用されたウイルスが新型ウイルスの可能性ありとA. B. F. のオメガ1より情報提供あり、警戒として頭を撃つた後もある程度弾丸を感染者に撃ち込む必要ありとの事。『ザザツ』『H Qよりデルタ2へ、了解、出動中の全隊員への警戒を促す。

H Q、オーバー」

…とまあ、アンタ等テロリスト同然な連中の話なんか信じたく無いけど、もし本当にそうなら厄介だから報告だけはしといた。

これで唯のTウイルスでのバイオハザードならそれはそれでワクチンがあるから早々と鎮圧出来るし、一応警戒だけはしとくよ」

茜からの葵への警戒話にマキは疑問符を浮かべ、茜に問い正すとそれが新型ウイルスの可能性があると返された為H Qに念の為の報告を入れ、そのまま警戒態勢で自然公園から1歩外へ出る。

するとその光景はゾンビ達が現れる前から一変していた。

綺麗な石垣には夥しい血が付着し、道路も血塗れ。

更に道端には死体を喰い漁るゾンビが何体も居り、まだ此方には気付いてないがそれ

も時間の問題であった。

「さて、A・B・F. のオメガ小隊長様はこの時如何やって切り抜けるかな？」

「んなもん、邪魔な奴だけ排除しといて後は無視や無視。」

逆にBSAA極東支部のデルタ2さんは如何しはるん？」

「勿論、通り道に居る奴だけやって無視。」

弾はある程度残したいからね…言つとくけど民間人を救助する為にアンタ等みたいな準テロリストと手を組むんだから下手な動き見せたら容赦無くその脳天ぶち抜くから「おお怖い怖い、んじゃ葵を守る事に専念しとこか」ふん……じゃ、突破開始」

マキと茜は皮肉を言い合いながら（但しマキは殺気全開）ゾンビ達の群れを潜り抜けてつづつ邪魔になる個体にはのみ弾丸を集中、その火力でゾンビの活動を停止させ公園から出て直ぐの街道を抜けゾンビ達を巻きつつ裏道を辿り避難指定されている葵の出身校近くの住宅街へと向かい始める。

「…そう言えばマキさん、貴女BSAAだったんだ。」

それから、さつきから言ってるA・B・F. って何なの？

お姉ちゃんが居る組織って言う事は分かるんだけど…」

「あゝ、うん。」

私中学2年、今から大体2年位前にBSAA極東支部に入隊志願してね。

子供の遊び場じゃないって門前払いを受け掛けたけどこっちも絶対に入隊しなきゃいけない理由があったからその門前払いの人を投げ飛ばして強引に入隊訓練を受けたんだ。

それで1年前の6月30日、訓練を終えて新兵に成り立ての時に中国の蘭祥^{ランシヤン}でのバイオテロ事件に駆り出されてね。

あの時は今のデルタ1共々何度死ぬかと思つた事やら「あーあの時確かにマキさん休んでたね。

でも新兵になつたばかりであんな世界史の授業に盛り込まれちゃう位大規模なバイオテロ事件に出撃させられるなんてBSAAってブラック組織？」いや〜否定し辛いね〜で、A. B. F. っていうのは『Anti. Bioterrorism. Forces.』の略称で、文字通り反バイオテロを理念に掲げる組織なんだけど：ハツキリ言つてやり方はテロリストのそれとあんま変わらない国連非公認組織。

違うとしたらBIO. ORGANIC. WEAPON. (B. O. W.) を使うかわからない位「ひどいなあ〜、ウチ等はバイオテロを憎み民間人の命を守る一応BSAAと同じ正義の味方やつてるんやけどなあ〜」黙れクソビッチ、アンタ等は確かに民間人の救助はしっかりやるけどBSAA隊員を囮に使つてB. O. W. を一ヶ所に集めた瞬

間グレネード弾や迫撃砲やらで絨毯爆撃して私等の仲間を殺してる癖に偉そうに正義の味方面すんな、このテロリストが」

そんな避難行動中に葵はマキがBSAA隊員だった事に今更気付き、姉の茜が所属するA・B・F.と云う組織の事も聞いてみると、如何やらマキはBSAA隊員歴3年目の兵隊のようで、1年前に世界史の教科書に新たな一頁が刻まれる事になった中国での大規模バイオテロ事件に駆り出されデルタ1と云う相方と共に命辛々生き延び今がある様で良く見ればその佇まいは地獄を生き延びた戦士の風格があると葵は気付く。

そしてA・B・F.の方をマキの口から聞くと辛辣な、と言うよりも憎悪を明確に抱いている棘のある説明をし、茜がチャチを入れると今にも撃ち殺してしまいそうな殺意の籠った視線を茜に向け、仲間の仇だと堂々と云った上でテロリストと断じていた。

葵は生きていた姉がそんなテロリスト同然な組織に与していると思いたくなくなかったが、茜の肩のワツペンにはA・B・F.とΩ・Platoonと書かれており、更に茜はやれやれと口にしつつもBSAA隊員ごとB・O・W.を爆撃した事は否定せず、オマケに公園での会話を思い出しこれが全て事実だと葵は思い知り、2人の間には埋めようが無い溝があり、葵も茜のこれまでの事をまるで知らない為仲介になる事も出来ず、また茜のこれまでを知ろうとする事に何処か一抹の不安を覚えてしまうのであった。

そうして避難させるべき民間人が居る為口喧嘩のみで済ませられていた葵一行は此処まで来る間もゾンビが居たが、通るのに邪魔になる個体だけを射殺し、葵達は残りのゾンビは巻いて無駄弾を使う事無く避難所の学園近くにまで辿り着いていた。

「…うん、避難所の学園の目と鼻の先まで無事に来れたね。」

後は校門か裏口から入れたら良いんだけど…此処から校門が見えるけどそんな都合良く行かないよね」

「せやなあ、横転させた車に机やら何やら山の山にそれを固定するバスまで配置されとって見事に登れなくされとるバリケードやな。」

で、ゾンビが万一登れば中の生存者がそれを処理する流れになつとる感じかな、アレは」

葵は学園内に入れば上々と考えていたが、矢張りそんなに物事は上手く行かずこの短時間で見事なバリケードが貼られており中に入れない事が見て取れた。

茜やマキもこれにはお見事と考えており、如何やって中に入ろうか考えていた。

するとそんな葵達の視線の先に如何にもワルと言う見た目のチンピラが走つて来ており、その手には警察官の銃である、しかしグリップに付いている盗難防止用のホルスターに繋がれているワイヤーチューブが切られたニューナンプが握られており警官から奪った事が容易に想像出来、更に背後からはゾンビが1体追い掛けて来ており今にも

追い付かれそうにいた。

「チ、チクシヨウ!!?」

いい加減くたばれゾンビ野郎!!? 『ダンダンダン!!?』

カチカチカチ』「づあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”『ドタツ』

……へ、へへへ、見たかこのゾンビが…」

痺れを切らしたチンピラはニューナンプでゾンビを撃つが3発で弾切れになり2発が空を切り周りの家の壁やら窓ガラスに直撃したが1発はゾンビへの脳天にヒットしそのままゾンビは倒れ込み活動停止状態になった。

チンピラは気が抜けたのか、或いは調子に乗ったのかヘッドシヨットを決めたゾンビに近付きガシガシと蹴りを入れ典型的なチンピラの巫山戯た態度を見せていた。

「…あのチンピラは放つて置こう、関わったらなんか面倒に「あかん、其処の兄ちゃんそのゾンビから早く離れるんや!!?」って、お姉ちゃん?」

「あん?」

何だよガキンチョが…って、なんかカッケエ銃を持つてんなオイ。

お前らそれを俺に寄越せよ「早くソイツから離れとき!!?」

死にたいんか!!?」「んだよ、こう言ったゾンビは脳天ぶち抜きや終わりなんだよ、何ビビって…えっ?」

葵はこのチンピラが緊迫した状況下でニューナンブを警官から奪い盗った事が容易に想像出来た為関わりたくないと感じ、学校の周りを探り中に入れる場所を探そうと考えていた所、茜はニューナンブが残弾切れになつてる事を確認した上でチンピラに活動停止したゾンビから離れる様に叫んでいた。

対してチンピラはゾンビ物の定番である頭を撃つてそれで終わりだと調子に乗りつつ茜達の銃を見て興奮しそれを寄越す様に茜達に言つたが、茜にはそれ所では無い状況が目映っており、葵達も茜が焦る理由がゾンビにあるとふと視線を向けると……脳天を撃たれたゾンビの身体から煙が噴き始め、更に活動停止した筈なのに身体が引きつけを起こしたかの様にビクビクと動き出しており何やら異様な状態になりつつある事が見て取れ、チンピラも漸く足蹴にしているゾンビの様子が変だと気付いたのか視線を移した；が、次の瞬間ゾンビの背中から爪が刃の様に伸びた第3の腕が肉を裂きながら新たに生え始める異常事態が発生し、その腕の爪を腹に刺されチンピラの身体はゾンビの、否、ゾンビだった何かの力で宙に浮いてしまう。

そしてゾンビだった何かは再び立ち上がり、背中から更に第4の腕が生え、その新たに生えた腕からは巨大な眼玉が付いており、更に煙を吹いた身体は筋肉が膨張し身長その物まで伸び始め、服は千切れ去り体表は赤く染まり上がり更にゾンビだった何かが顔を上げた瞬間、その顔は人の形だった事が辛うじて分かる程度に口が裂け、異様に伸び

た牙が生えた口を開けダラダラと涎を地面に啜り落とし、元々ある手の爪も鋭利に伸び、目は二つのみならず頬や額等にも小さな目が作り出され、その姿は正に化物と呼ぶに相応しき物に変わっていた。

「ガボツブツ?!

な”に”これ”……があ”ぢや「GISYAAAAAAAAAAAAAAAA
A!!」ガツ……ポ……」

そしてチンピラはゾンビが変異した化物に喉元を喰い千切られ悲鳴にもならない声を吐血しながら上げて絶命し、しかし化物は死体と化したチンピラの身体に何度も齧り付き、まるで味見をしてるかの様な仕草を見せ吟味が終わった所で爪に刺さった死体を放り投げ頬や第3の腕の爪に付いた血をその長い舌で舐めずり獲物を仕留めた獣の仕草を見せ、しかし第3の腕や額、頬に付いた目玉は葵達を捉えており今は余韻に浸ってるから襲わない、しかし次はお前達の番だと言葉など話せないソレが発する殺気からそれをマキ達は理解し直ぐ様銃を構え応戦態勢に入る。

更に先程死体が変わったチンピラはウィルスに感染してから死んだ為かゾンビに変わり腹から内臓を垂らしながら起き上がり始めていた。

そしてB・O・Wもゾンビも互いに無視し合い生存者、葵達に狙いを定めてにじり寄り始めていた。

「チツ、やつぱコレはウチ等が遭遇した新型ウィルスのバイオテロや……デルタ2は
ん、あのバケモンの胴体に鉛玉ぶち込んでも余り効果はあらへん、新しく生えた腕に付
いとる目や頭を徹底して狙うんや!!？」

後アイツは再生能力が高うて1発1発鉛玉叩き込んだいても無駄やで!!？」

だからアイツが再生仕切るまでにソレを上回るダメージを与えるんや!!？」

せやないとアレは殺せへん、アレはそう言う新型のB・O・W・や!!？」

「……情報どうも……HQ、新型のB・O・W・と遭遇、これより排除に移る、オーバー
!!？」

茜とマキは前に躍り出てゾンビが変異した新型B・O・W・との戦闘を開始、2人は
アサルトライフル（茜はAKをモデルに改造を施しグレネード弾発射機構が付き、更に
マガジンもダブルマガジン式のロングタイプになっておりジャムが怖くないかと言わ
んばかりに装弾数が多くなっているタイプ、マキはHK416に銃剣とライトを付け、
更にマガジンもロングタイプにしたシンプルなカスタマイズをしたタイプ）を頭や第
3、第4の目に叩き込み怯ませて行くが新型B・O・W・はそんな茜達の弾幕に対し突
撃してその新たな両腕で2人を引き裂こうとし、それをマキと茜は避けて2人で前後を
挟む形になりタクティカルロードを挟みつつ的確に銃撃していく。

一方葵の方にはノタノタとゾンビが迫っており、マキ達はそれに気付きゾンビを始末

しようとするがB・O・W・再生能力、及び変異により更に更に身体が巨体になって行き俊敏性まで増してしまい2人はB・O・W・の対処に手一杯となっていた。

それにより葵はマキ達の助けは期待出来ないかと判断して藍を庇う様に前に立ち茜から渡された改造ハンドガンを構え、そして1発試しに胸辺りを狙って撃ってみた。

すると通常の45口径銃以上の反動が発生しウィーバースタンスで構えてたが腕が頭の後ろに行きかけるまで持ち上がってしまい通常の構え方では隙無く連射は出来ない事を理解し、更に今までの茜達の言葉や先程起きた変異現象を思い出し頭の中でそれをまとめ始めた。

「この銃の反動は動画で見たガバメント、デザートイーグルの反動なんかより更にマシマシで大きい！」

これを普通のハンドガンみたいに連射するには構え方を変えるしかない……それとお姉ちゃんが言っていた頭に弾を撃ち込んだ後もある程度弾を撃たないとダメって言っていた事をこのゾンビになったチンピラが教えてくれた……改めて見ると腸や胃が露出して垂れてて気持ち悪い。

……なら、この銃の正しい構え方はこれかな？」

すると葵はウィーバースタンスに腰を更に深く落とすし、腕を引き締める様にして顎の7cm前辺りに銃を構え、更に其処から手を斜めに傾けて固定する様にそのまま先程と

同じ様に、次は頭を狙って銃を放つ。

すると反動で腕が持ち上がる事は無くなったが代わりに手首、肩、腕、オマケに腰等に反動の衝撃がダイレクトに伝わりそれらの部位に反動によるダメージが入るが葵は先程の変異を思い出し更に鉛玉を連発する。

最初の試し撃ちを含めて計8発ゾンビに鉛玉を叩き込み、ゾンビを観察する。

チンピラがゾンビの頭を撃つてそのままにしたら5秒で身体から煙が噴き上がり更にピクピクと身体が最初から動いていたのに対し、葵が過剰とも取れる弾丸の撃ち込みに対しては身体はピクリとも動かなくなり更に5秒経過しても煙は噴き上がりず変異の様子は見られなかった。

よってこの元チンピラのゾンビは完全に活動停止し2度と起き上がらないだろうと予測が出来た。

同じ頃マキ達の戦闘にも変化が起き、埒があかないと判断した茜が手榴弾を持ち、B・O・W・の懐に潜り込みながらその口に手榴弾をねじ込み、ピンを外しながら蹴り上げて距離を離させた所で手榴弾が炸裂、頭の半分が吹き飛びB・O・W・が腕を苦しむ仕草を見せた所でマキと茜はアサルトライフルの弾丸を第3、第4の目と半分になった頭に叩き込みB・O・W・は化物らしいうめき声を上げながら倒れ、ピクリとも動かなくなった上に第3の目等が破裂し、更にその後上半身まで破裂して残ったのは肥大化した

下半身のみとなり、茜は過去に戦った事例でこれが絶命の合図だと知ってた為銃の構えを解きつつリロードを始めた。

マキも茜の様子からこれで終わりかと判断し銃をリロードし、一息吐いた。

「ハア、ハア………ふう………HQ、新型B・O・Wの排除完了。

それとB・O・Wはゾンビから変異して誕生するタイプの奴だった。

特徴としてゾンビの頭を単純に撃ち抜いただけでは変異阻止が不可、A・F・Bのオメガ1の忠告通りに対処しなければ約5秒後身体から発煙、第3、第4の腕が背中から生えて身体が赤くなって元からある手の爪も刃物並に先鋭化し肉体も膨張、オマケに新たに生えた腕に大きな目玉、顔にも小さな目玉が幾つも増えてた。

更に異常な再生能力と変異スピードを獲得して時間経過で戦闘力を大幅に増して行く事も確認出来たわ。

以上の特徴からこの変異はTウイルス変異種にあるV-ACT現象とGウイルスの変異に酷似しているわ。

更に敵B・O・Wとゾンビはまるで互いが味方であるかの様な動きまで見せていた。

此処までの推察により矢張り新型のウイルスが使われている可能性が非常に高し、バイオテロ鎮圧の為の大部隊の編成が必要だと現場判断し、更なる増員をさ

れたし、オーバー」

「『ザッツ』此方HQ、デルタ2の報告、及び部隊編成の要請を受諾。

今派遣している部隊に加え直ぐ様救助部隊と鎮圧部隊の両者を編成する、それまで生存者を集め安全確保を優先されたし。

鎮圧部隊にはデルタチームも編入させる、部隊到着後はデルタ2もそちらの指揮下へ入る様に。

なお今作戦との関連は不明だがデルターがDSOのエージェント『レオン・S・ケネディ』と共に数日前から日本へ潜入任務中である。

可能であるならば両名と合流しデルターが追っていた組織と此度のバイオテロが関係性が存在するか情報交換せよ、HQオーバー」

マキはアンブレラ等が作り上げたウィルスやバイオテロ事件の資料を熱心に読んだ為それらに学があり、新型B・O・W.の異様な特徴：ラクーン事件の裁判の際にアンブレラ管理コンピュータであるレッドクイーンのデータに記されたアークレイ研究所のTウィルス変異体を引き起こすV-ACT現象と言うゾンビの体色の赤色化及び凶暴+再活動化によって誕生するイレギュラーミュータントの中でも凶悪な1体『クリムゾン・ヘッド』への変異と、アンブレララクーン支部ウィルス研究主任『ウイリアム・パークン』がアークレイ研究所のとある研究対象から偶然発見し、其処から培養、開発され

たバーキン博士の傑作と言われる『Gウイルス』が起こす無限に等しき進化と呼ぶに相応しき変異による再生力、戦闘力向上に極めて似ている事、更にゾンビとB・O・Wが互いを味方だと認識した様な動きを見せたをHQに報告。

これを聞いたHQも今派遣してある部隊に加えて更に民間人の救助部隊とバイオテロ鎮圧部隊の更なる編成と派遣を決定し、その中にBSAA極東支部の精鋭部隊デルタチームの派遣も決定し、マキは慣れ親しんだチームの皆と行動し背中を預けられそうだと聞き少々の安堵を感じるが、A・B・Fに人的被害を出されデルタチームにも死傷者が出ていた事もあった上その張本人のオメガ1たる茜が居る為頭の端にまた仲間がコイツ等に殺されてしまうのではと言う不安感も覚え、以前みたく此方を巻き込んでB・O・W殲滅を図った、又はその素振りを見せた瞬間射殺すると決心し警戒感を更にかけていた。

しかし、HQは通信終了間際にデルタチームの隊長たるデルターがレオン・S・ケネディ……ラクーンシティのバイオハザード事件から生還した1日警官だった現アメリカ大統領直轄エージェントDSOの一員と曰くとある組織を捜査する為に日本に数日前から潜入していたと聞き、デルタ副隊長の自分が知らない任務で隊長が動いていると知りそれを問い質そうと再び通信を開いた。

「ちよつと待つてHQ、デルターが既に日本に居るとはどう言う事ですか？

とある組織とは一体何ですか、H Q通信どうぞ！『ザザアアアアア』
……切りやがったなああのクソ司令部!!」

マキは中途半端にしか情報を伝えないH Qに苛立ちを覚え、その辺に捨てられていた空き缶を蹴り上げ民家の壁に跳ね返りつつ道路端に直立させると言う何気に磨けばサツカー選手になれそうなコントロールを見せていたが、それはそれとしてBSAAの通信対応を聞いていた茜はやれやれと思いつつ学校の周りを見て入れそうな場所を探し、そして葵は藍が死なない様に藍の前に立ったまま待機しつつハンドガンの現マガジンの弾丸が9発残った状態で予備マガジンにリロードし、これから如何なるのか不安に駆られつつも母を守る為にまだまだ慣れない銃を握りいつでも撃てる様にするのだった。

EP III 『避難民達』

葵達はB・O・W.の討伐後にバリケードが張られている避難所たる葵、マキの母校に如何に入ろうかと周りを見渡したがフェンスには幾つかのバッテリーが連結させて作り上げられた電線トラップが仕掛けられており電圧でショック死間違い無し、ゾンビも電圧で頭が吹き飛ぶ程のモノが流れており此方を渡るのは不可能だった。

一方正門、裏口のバリケードも下を潜るのも上に登る事も出来ない鉄壁のガードを誇っておりヘリ等で屋上から入る以外に中への進入するしかない結論付けられた。

「このバリケード作った人相当のプロだよ。」

コレならゾンビ程度は入れないし、フェンスに触ったゾンビはあの新型になる前にダメージ過多で完全に活動停止するわ。

バッテリーの連結のさせ方も上手、作った人にはトラップ&バリケードマスターの称号を贈りたいわ」

「確かに素人には作れへんバリケードやな。」

しかもご丁寧に迂闊にバリケードを登ろうとすると狙撃されてまうみたいやで、ほら」

「えっ、狙撃？」

……あ、昼間だから分かり難いけど確かにレーザーポインタがバリケードの上に照準されてたりするねお姉ちゃん。

これ、ポインタがすっかりバリケードの上に照準を合わせられる位置から計算すると屋上に人が居るね」

「良く分かるわね貴女達…葵は兎も角、弦巻さんや茜は修羅場を潜り抜けた経験則からかしら？『そだね／せやなく』『私はミリタリーマニアだからだよお母さん』」

…なんだか葵の将来が心配になる趣味が聞こえた気がしたわ……」

マキはバリケードの頑強さ、フェンスへの電圧トラップ等に仕掛けたのはプロの仕事と判断に至り、更に茜はバリケードの頂点を少し離れて観察するとバリケードにレーザーポインタが照準されている事に気付きそれを他3人に伝えると、葵もその照準を逆算して屋上からバリケード上を狙っていると判断し見やると、昼間の為分かり辛かったがレーザーポインタ特有の赤点が其処にありマキ達も同じ様に見つけて生存者、武装した民間人が居ると確認出来た。

藍は茜達は兎も角葵がそれを分かった事に驚いていたが、葵は趣味でミリタリー動画ばかり見てた為こう言った物にある程度の理解が出来上がった為分かったのだ。

「さて、私等の中に入らなきゃならない。

けどバイオテロ発生から短時間で見事なバリケードを作り上げた人は未だ狙撃を止めようとしなない……なら此処は一つやるかな」

するとマキは何を思ったのか適当な民家の敷地内から長い木の枝を降り、更にゾンビに成り果てたチンピラの服（ズボン含む）を木の枝に巻き付ける一見奇行に思える行動を取った。

が、次の瞬間にはマキの意図が分かる事が起こされた。

マキは服を巻き付けた部分にライターで火を着け、即席の松明に仕立て上げたそれを右手に持ちしつかりと大振りし、学園内の人間に意地でも此方を救出に動かせようという動に出た。

茜も流石に先程あれだけの銃撃戦があつた為生存者がそこに居ると分かる筈なのに屋上の人間が動かないのは銃撃戦の音の所為でゾンビが集まって来る事を理解しており、しかしそれで狙撃者が動かないのなら別の人間を動かせば良いと言うのは定石だと考えていた。

そう、マキの行動は初めから屋上に居る人間に気付かせるのでは無い、他の避難民に自分達はまだ生きている事を知らせバリケードを登らせてそのまま中に入らせて貰うと言う算段だったのだ（因みにマキは木の枝を拝借すると同時に民家内に侵入してバケツに水を汲み火を消す準備もしていた）。

そしてマキはそうは思つてないが、茜はこれでも避難民が動かないならマキの手から松明と化した木の枝を奪い取りバリケードに火を放とうとするジエスチャーを見せてやれば良いと考えていた。

これは狙撃を避けつつそれを実行に移せる事が可能な為茜が独自に思い付いた非常手段である。

そうこうしている中でバリケードの奥から梯子を運び出している音が聞こえ、バリケードの上に一人の少女が立ちロープを下ろした。

その少女は葵、マキと同じこの高校の一つ上の学生『東北じゅん子（愛称ずん子）』、更にマキ達の担任教師、及び国語の教師の『水奈瀬コウ』であった。（因みにレーザーポインターはバリケードの上側から移動している）

「あ、マキちゃんに葵ちゃん！

それに葵ちゃんのお母様に……あれ、葵ちゃんに瓜二つの女の子が……？

それにマキちゃん達が持つてるそれ「ずんちゃんに先生、それより私等の引き上げを手伝つて、もう音に寄つてゾンビ達が来てる来てる!!？」

あ、そ、そうだった！

皆さん早くロープに捕まつて下さい!!？」

「引き上げは此方でやります、急いで下さい!!？」

「じゃあ先ずは非戦闘員の『お母さん』と葵からやな。

ウチ等はゾンビの足止めや」

ずん子やコウは友人のマキや葵、葵の母である藍の生存に安堵するが、葵と瓜二つである茜の存在や茜、葵、マキの持つ銃やマキ、茜の完全武装状態に困惑してしまいが、マキが急かしたお陰で直ぐにその疑問を頭から追いやり葵達にロープを渡し、それに捕まえる様に促した。

そんなやり取りの間にも先の戦闘音でゾンビ達が正門に続々と集結しつつあり、マキと茜は背中合わせにアサルトライフルを構え足止めを兼ねて発砲し始めた。

「さあ葵、早くロープに「私は銃があるから先にお母さんが行つて！」

お母さんは武器を持ってないから私より危ないから！」そんな事を言ったら葵や茜を残す方が「どっちでも良えから早よロープを掴んで登つとき、足手纏いやで!!」うっ……なら葵、私が登り切ったら早く登るのよ!!？」

バリケード内への避難開始時に先に葵か藍かどちらが先にバリケードの上に登るか少々揉めたが、茜が両者を足手纏いとバツサリと切った為藍が先に登る事になり、コウやずん子、更にバリケード奥のロープを引っ張る人達のお陰で藍はバリケード上に直ぐに登れ、その後に葵も続いて登り2人は梯子を降りてバリケード内に避難が出来た。

次にマキか茜かどちらが先に登るかになったが、マキの方はゾンビの数は比較的に少

なかったが対して明らかに茜の捌く必要があるゾンビの数が明らかに多く、更にこのゾンビの数からして自分達の想像以上にウイルスの感染が広まっていると悟り茜は舌打ちをし、マキは焦りを感じ始めていた。

「もう此処まで感染が広がるなんて……仕方ない、オメガアンタに殿を任せたわ！

ロープを登り切ったら援護を『ズダアーン!!?!』っ、今の音はスナイパー、しかもアンチマテリアルライフルの発砲音!!?」

屋上の奴の援護射撃!?」「こらあちよつくら楽になるわ。

デルタ2はん早く登つとき、お望み通り殿はやつたるで」

……よし、任せる」

マキや茜はゾンビの数から逆算したウィルスの感染スピードの速さに辟易し始め、此処で無駄に粘っても意味が無いと判断しマキが先に登りバリケード上から一応利敵行為を見せない茜を援護しようとして提案した瞬間に学校の屋上からアサルトライフルの発砲音よりも更に大きな単発の発砲音が鳴り渡りゾンビの首から上を完全に吹き飛ばした。

マキは銃声から使われた狙撃銃はアンチマテリアルライフルだと判別し、茜も首から上を一撃で吹き飛ばすその威力なら変異させる事無くゾンビの息の根を完全に止められると余裕を見せ、マキの提案に乗り殿を務める。

そしてマキはロープを自力で早々と攀じ登りバリケードの上から茜が対処して居る側、更に自分が対処した側の茜に近いゾンビを撃ち活動停止させる。

この間にも屋上からの援護狙撃は続き、頃合いだと思つた茜もロープを攀じ登り、ずん子やコウにジェスチャーで先に降りる様に促し2人は梯子を使い降り、そのまま校舎内へと走り去つて行つた。

そして残つた2人は再びゾンビ達に発砲し、ある程度活動停止させた瞬間バリケードの上から飛び降りマキは受け身回転しながら、茜はそのまま着地して茜が梯子を持ちながら校舎内へと走つて行つた。

マキと茜はゾンビ達の侵入が無い事を最終確認し、マキの先導の下2人はある教室へと走る。

何故其処に向かうかは、葵やマキがその教室に馴染み深いからであった。

「ふう、取り敢えず私のクラスまで来たけど……あ、マキさんにお姉ちゃん！」おっと、やっぱり此処が避難場所になるか……見事なまでに私や葵達の机も椅子が綺麗さっぱりバリケードに使われてら」

マキと茜はマキの教室である1-Aに来るとそこには先に避難させた葵や藍、更にはずん子やコウの他に何人も避難民が居た。

その数はマキ達を入れて11人、それもゾンビに噛まれた様子は無く一見してウイルスに感染はしていない者達だった。

そして一名だけは不明だが残りは皆この『ROICE学園』の教師及び初等部、高等部の生徒と保護者であった（初等部の子には専用の名札が渡されており2人の小さな女の子、1人はずん子の妹でその隣の女の子もその名札をしている為マキには分かった）。

そして教室の窓際には椅子と机で作られた高台に1匹の犬が外を見ていたがマキはそれを気にするよりも生存者一同に声を掛ける事にした。

「マキちゃん、良く無事だったわね。」

それで、その武器とかなんだけど……」

「ずんちゃん達こそ良く無事だったね、ずんちゃんのお姉さんや妹ちゃんも入れて。」

……オホン、改めまして顔見知りの皆様はこんにちは、初めて会う方達は初めまして。

私はBSAA極東支部SOU、デルタチームのコールネームデルタ2、弦巻

マキです」

「じ、BSAA!?!?」

国連公認の対バイオテロ組織の!?!?

つまり我々の救出に来てくれたのかね!?!? 「いえ、私はとある任務で日本に帰国してその任務着任中にこのバイオテロに巻き込まれた形になります。」

よってガツカリさせるのは忍び無いです、装備は今持っている物に先程からの戦闘で予備マガジンが数少なくなり、私も現在は救助と私のチームが装備を持って来るのを待つ側です」

………」

マキは葵にずん子やコウ達顔見知りやその親族、そして見知らぬ避難民に自身の所属を告知し、しかし現在は装備が少なく更に別任務で帰国していた所にバイオテロが発生

した為どちらかと言えば救助を待つ側であるとも言い、救助が来たのかと喜んでいた初老の男性をぬか喜びさせてしまった。

しかしバイオテロに詳しい者が居るか否かでかなり安心感は違う為その点に関してマキは見事な場をコントロール出来る側に立つ者で間違い無かった。

するとずん子の妹：『東北きりたん』がマキと茜の近くに寄り、2人を値踏みする様にマジマジと見ると何か理解したのかふむふむと口にしていた。

「確かに、弦巻さん「あ、マキで良いよきりたんちゃん」あ、じゃあ私も呼び捨てでOKです。

で、確かにマキさんの装備は全部BSAAの制式採用銃と本物の所属ワツペンをしています。

オマケにこれ実銃だからマキさんは本当にBSAA隊員で間違い無いですね。

で、その横に居る葵さんの劣化レプリカみたいな人の装備は動画サイトにアップされていた国連非公認組織A. B. F.、Anti. Bioterrorism. Forces. の装備ですね……準テロリスト組織とは言えバイオテロの専門家が2人居るのは心強いですね、籠城するにしても脱出するにしても」

「おうおう、お嬢ちゃんウチを葵の劣化レプリカと呼んで蔑むんは止めんかい。

ウチには琴葉茜っちゅう名前があるんやで「あ、そうですか。

じゃあ初めまして、東北きりたんです。

生意気な口調に關しましては生まれつきなんで諦めて下さい」……まあええわ、きりたんやな。

改めてよろしゅうな」

きりたんはマキが本物のBSAA隊員である事を動画でBSAA隊員の活躍集を觀ていた為判別が完了し、更に茜の方も一部のミリオタ、しかもバイオテロに關する方面の情報を集めてないと分からないA・B・F.の所屬と改造武装である事等も見抜きバイオテロの専門家が2人この場に居ると宣告した(但し茜に対し葵の劣化レプリカやら準テロ組織の一員だと不安を煽る余計な一言まで付けていたが)。

そして次に茜が自己紹介をする番となりマキの前に立ち口を開き始める。

「んん、じゃあ改めてウチの自己紹介やな。

ウチは琴葉茜、A・B・F.の強襲突撃、及びB・O・W.殲滅専門部隊オメガ小隊隊長をやつとるもんや、あんじょうよろしゅうな」

「琴葉……失礼だけど葵君、彼女は君と瓜二つで苗字も同じなのだけれど、君の姉妹か何かなのかい？」

「えっと、はい……8年前にバイオテロで亡くなった筈の、双子の姉です……」

茜の自己紹介を聞いたコウは葵に茜との関係を聞くと、葵も戸惑いながらありのままを話した。

此処で下手に隠したり誤魔化せば葵自身に謂れの無い何かを被せかねられてしまう為であり、そうなれば自動的に藍にも被害が及ぶ為包み隠さずに言った方が身の為だと判断したからである。

コウも葵や態度から茜が生きて現れたのは想定外所では無く死人が目の前にポツと出て来た衝撃をそのまま受けていると見て取れた為それ以上の深掘りはしない様になっていた。

「じゃあ見知った仲の人も居るけど改めてこの場に居る生存者一同の自己紹介もしようか。

古今東西、挨拶や名乗りは大事な事だからね。

僕は水奈瀬コウ、葵君やマキ君、それと屋上で外を監視している子の内の一人の担任教師だよ」

「では私も、私は東北イタコ、ずんちゃんやきりちゃんの姉ですわ。

皆様どうぞよろしくお願い致しますわ」

「私は東北じゅん子、皆はずん子って呼んでくれるわ。

葵ちゃんやマキちゃんの友人だからよろしくね、葵ちゃんのお姉さん「あ、茜

で良えよ〜」はい、分かりましたよ茜ちゃん」

「どうも、この学園の初等部の東北きりたんです。

ずん姉様やタコ姉様の妹です、よろしく願います。

あ、それから彼処で見張りをやってくれている犬は我が家の番犬ずんだもんです。

利口な子なので可愛がってあげてください」

「ウナは音街ウナだよ。

東北のクラスメイトなんだ、よろしくね〜」

「初めまして、私は京町セイカです。

まあ見ての通り酒が大好きなマダオ（まるでダメなお姉さんの略）だから戦力に数えないでね〜、避難活動とか救助活動には困にされて死にたく無いから協力するけど『カチツ、プシャー』ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ、ぷはあ、一仕事した後のビールはサイコー!」

「えっと、琴葉葵です、皆様よろしく願います」

「琴葉藍です、茜や葵の母です…」

「フン、救助に来たBSAA隊員かと思えば逆に救助を待つ側とは…しかも準テロリストとその家族がこの場に居るとはな!

大方その家族もテロリストでこのバイオテロを喉けたんじゃないのか!!「金淵さん、そんな言い掛かりを吐いて場の和を乱さないで下さい。」

今はこの学校に居る皆で力を合わせて上手く生き残らなければならないのですから、場の空気を乱す発言は控えて下さい」

フン……金淵剛だ、兎に角そのテロリスト女とその家族をワシの近くに居させるなよ!!?」

後で何をされるか分かったもんじゃない!!?『ガラツ』「じゃあ今寝てなさい」

はぶべら!!?」

今この場に居る生存者全員（屋上で監視中の人は除く）が自己紹介（+ずんだものの紹介）を終えるが、金淵と言う初老男性が明らかに場の空気を悪くする映画で良く見る身勝手なタイプの人間だとその主張から見て取れ、更に茜が準テロリスト組織の一員と聞いただけでその家族である葵や藍にあらぬ言い掛かりを付け、きりたんが口にした反バイオテロ組織だと言う事も全然聞いていなかった事を露呈させており、葵は懸念していた事と少し違うが謂れの無い言い掛かりを掛けられたと思いい藍を庇いながら金淵に嫌な顔を見せ、一方茜はと言えば葵に言い掛かりを吐いた事に完全にキレており、養豚場の豚を見る様な目付きをしながらハンドガンに手を掛けようとしていたが、一応バイ

オテロから命辛々いきのびた生存者の為、それを殺してはA・B・F.の理念に反すると頭で律しくまで目付きだけの態度を示す程度に留めていた。

更にマキも藍や葵がバイオテロを起こした側では無い事を理解しており金淵に詰め寄ろうとしたがB S A A隊員が不祥事を起こす訳には行かない為怒りの表情を見せるしかなかった。

そんな時にいきなりI—Aのドアを勢い良く開けて紫髪の少女が金淵に詰め寄り、そのまま回し蹴りを顔に食らわせて金淵を気絶させてしまった。

これにはその場に居た一同は呆気にと取られたり、一部はザマアと言った感情を向け金淵を蹴り上げた少女を讃えていた。

「ゆかりんナイス超ナイスだよ!!?」

「……はあ、ゆかり君にあかり君、屋上での監視はどうしたのかい?」

「丁度ゾンビ達が他の獲物を見つけてそっちに向かつて行つた為これ以上の監視は必要無いと判断して皆さんが居るこの教室にあかりちゃんと共々向かいました。」

その獲物になってしまった人には悪いですが武器を含めて此方の物資も有限の為そのまま囿になってもらいました、運が良ければ生き残るでしょう。

で、マキさんが自己紹介をしていた所で教室に入るタイミングを失つたら其処のブタさんが寝言を起きながらほざきやがっていたので眠らせました。

あ、初めましての人は初めまして、結月ゆかりです」

「そして私がゆかりさんと一緒に外を監視していた中等部の継星あかりです。

担当はゆかりさんと同じく屋上からの狙撃と監視です！

よろしくお願いしますね」

金淵を蹴り上げた少女、結月ゆかりとその後ろに付いて来ていた継星あかり（ゆかりがアンチマテリアルライフル、あかりがセミオートライフルを背負っている）も初対面の茜やウナ達に挨拶をし、葵は金淵を蹴り上げた事にも驚いていたが、ゆかり達がライフルを背負っていた事にも驚きを隠せず頭の理解が少し追いつかずに居た。

如何やら葵が生存者一同のそれぞれの立場を理解するにはほんの少しだけ時間が必要な事が様々な要因で確定してしまったのであった。

そして、今来たゆかり達を含め今この場には13人の生存者が居る事になった（内1名気絶中）。

果たして葵達はこの後無事生きてバイオハザード地区からの脱出ができるのか、一抹の不安を抱えつつ全員は、因縁がある者も含めて寄り添い合う事になるのであった。

EP IV 『CLOWN』

ゆかりが金淵を気絶させた後、ライフルを一旦分解し、それに続きあかり、マキ、茜（葵に渡したハンドガンも併せて）も整備を開始する。

黙々と、しかし手慣れた手付きで（あかりはチョコレートを食べながら）簡易的ではあるが整備を進めて行くマキ達にプロとしての風格が見えていた。

が、その中に何故ゆかり、及びあかりが入っているのかさっぱり分からず葵はそれを問い質してみた。

「あの、ゆかりさんにあかりちゃん？」

マキさんやお姉ちゃんはそう言う分野の人だから銃の扱いに慣れているのは分かるんだけど、何でゆかりさん達までそんなに銃の扱いに手慣れているの？

しかもあかりちゃんやんはセミオートスナイパー、ゆかりさんに至ってはアンチマテリアルライフルとか言う物騒を通り越した代物だし……」

「あ、それ私も気になってました。

ゆかりちゃんやあかりちゃんには答えて貰う義務がありますよ。

幸いあの五月蠅かったおじさんはゆかりちゃんのお見事としか言えないプ

口の回し蹴りで未だ伸びたままですから変に拗れる心配はありませんよ？」

葵に便乗してずん子もゆかり達に銃の扱いに慣れた理由や回し蹴りにその道の人の動き：弓道と言う格闘技とは無縁な物ではあるが培われた目はある為、何か格闘技を齧っていた等の半端な理由では無く明らかに身体に叩き込まれた技術をずん子はその目で捉えており、それはずん子が幼い頃からやっている弓道の様な幼少期から培われた技術であると考え聞いたのだ。

ゆかりは金淵を一瞥し、自身が暫く喋らない様に蹴り上げるのを失敗する訳が無いと考えつつ一応確認だけして口を開き始めた。

「まあ、こんな状況ですから言いますが、このバイオテロが鎮圧されたら他の人には黙って下さいね、私が上司にああだこうだされるので。

それで、何故私やあかりちゃんか此処まで手慣れているかと言うと、私もあかりちゃんも元は海外で少年兵とかやらされまして、色々あって日本へ来て国から日本国籍を獲得した後、この無駄に培われた技術を腐らせるのは勿体無いからと後首輪を付ける目的で日本の諜報員、所謂エージェントをやっています。

任務は：まあ保護観察プログラムに守られている要人の護衛から今回みたいなバイオテロの犯人の調査、逮捕又は殺害が主ですね」

「mgmg、チョコレート美味い♪」

だからゆかりさんも私もこんなにも手付きが慣れてるんですよ。

お分かり頂けましたか？ ずん子さん、葵さん？」

葵とずん子、更にゆかり達の素性を知らなかった者達（教師である為素性を聞かされてしまっていたコウ、割とドライなきりたんや年齢相応の思考を持つ程度のウナは除く）はゆかり達の経歴と現在の役職：日本国政府の諜報員と聞き驚きを隠せず絶句していた。

まさか身近な人間が幼い頃は少年兵、現在は諜報員だったりBSAAの隊員だったりと表の顔からは想像出来ない素性持ちだった為何を言えば良いのか頭の中に浮かばずにいた。

するとゆかりは、何時もの態度を見せながら絶句中の葵達に話しかけ始める。

「ふふ、まあ今回の件が無ければこんな素性は明かさなかつたので私達への接し方は何時も通りでお願いしますね葵ちゃんにずん子さん、そしてイタコさん」

「あーはい、分かりましたよ。」

なるべく何時もの気の合う友人の対応をしますよ、と言うか頭が少し追い付かないからそれしか出来ないってのが本音ですが」

「へえ、エージェントにBSAA隊員に何かテロリストみたいなのがこの場に居るってすつごいなあ〜！

「じゃあマキさんや茜さんはどうして今の組織に入ったの？」

ゆかりの友人として接して欲しいと言うお願いに葬はそうするとハッキリと言い、ずん子やイタコもそれに同意して領きゆかり達はそれらを見え何時もの他愛の無い普通の友人の笑顔を見せる。

所が此処で好奇心の塊であるウナが割と、否、地雷原でタツプダンスを踊るかの如き質問をやつてしまい、隣に居たきりたんは「おバカ」と一言言つて頭を小突き、ウナに次やつたら同じ事をやると頭に植え付けた。

「えっ、何索性暴露大会始まつちやつたのこれ？」

……まあ、其処の無駄に騒ぐだけのおっさんは未だ寝てるから話しても大丈夫かな。

私がBSAAに入隊したきっかけは親の名誉回復の為だね「名誉回復？」そう。

私の父方の遠い親戚がね、あのアンブレラ社のウイルス研究部門に所属してたらしいんだ。

その人はロシアのコーカサス研究所……アンブレラの今までの悪事の情報
が何処かの誰かが漏らして倒産のきつかけになった研究所で当時の最新B. O. W.
の『Tテ-Aアイ-LロOス』開発に携わつてたらしいんだ。

まあそいつは哀れっていうか何と云うか、今のB S A Aの母体になった施設対バイオハザード部隊が研究所に突入した時にはゾンビに成り果ててみたい。

だけど身内がアンブレラの関係者、しかもウィルス研究部門の人間だったからお父さんや私は他のアンブレラ社の関係者とその血縁関係にある人達と同じ誹謗中傷を受けてね、お父さんはそんなクス野朗とは一切関わりが無いって事を証明する為にとあるP M Cに入社してバイオテロと戦う決意って言うか、身に覚えの無い罪への贖罪をしちやつてるから私もお父さんの負担を減らしたい、苦しみをちゃんと分かってくれたいって理由からB S A A極東支部に無理矢理入隊訓練を受けに行く事にしたんだ。

勿論お父さんに猛反対されたけど、何とか折れて貰ってその次いでに入隊訓練を受ける為の護身術を9歳から叩き込まれて中学2年に漸く入隊訓練を受けて今があるんだ。

これが私の経歴、次は消去法でアンタだよオメガ1、いや、琴葉茜」

ウナの質問に対してマキは金淵が寝てる今なら話しても痛くない為に包み隠さずB S A A極東支部に入るまでの経緯を話した。

ゆかりやあかりは諜報員、茜はA・B・F。故に知っていたが、葵やずん子達はその経歴を聞いてゆかり達の話を聞いた並かそれ以上に絶句をしてしまい、ウナは自分の質

問がかなりヤバい物だったと初めて気付きオドオドとし始めたが、それをきりたんは「落ち着け音街」と一言掛けて肩に手を掛け慰め：否、アイアンクローをやりウナは完全に痛がり先程までの後悔等のネガティブな気持ちを抱き飛ばしていた。

それを見ていた者達はこれがきりたんなどの励ましかと思いつつ自分達も腫れ物に触れるみたいな態度は止めようと一同（金淵以外）の心は一致した。

そしてマキは次にオメガ1、琴葉茜の経歴について問い直し始めた。

ゆかり達も琴葉茜は死亡扱いであり、A・B・Fのオメガ小隊長をやっているなど独自の情報網を以ってしても知り得なかつた情報である為それだけは必ず聞かなければならないとし、ゆかりとあかりも何処か射抜く様な視線で茜を見つ応える様に促していた。

また葵も姉が何故生きていたかを知りたい為に話して欲しいと視線を送り、茜はやれやれと思いつつ口を開き始めた。（なおセイカはこの間もマダオつ振りを発揮しビール缶を3本目を開けてグビグビ飲み始めていた）

「ウチの話なんか聞いてもおもしろい事なんか一切無いんやけど、まあ葵が知りたかつた様な様やし応えたるわ。」

ウチは確かにバイオテロで死んだ、いや死ぬ予定やったんや間違いない。

せやけどウチはその場で死んどつたらアカン理由が出来てもうてしもうた

んや。

せやからさつきとバイオハザード地区から脱出して後は野となれ山となれの放浪の旅と死ぬに死ぬんくなつてもうた理由の所在探しをしようとたんや。

そしたら今のA・B・Fのボスとあるカフエテリアで丁度出会つてもうてな、ウチに「お前はこれから如何したい？」って聞かれたんやけどウチの中の答えは一つで「ウイルスとB・O・Wの存在を抹消をしたい」って答えたらな、それを待つてましたと言わんばかりに周りの客一同がウチを囲つて歓迎パーティーの幕開けやつたわ。

それがA・B・Fの結成秘話の一部とウチの何故生きとつたかの理由やな。

あ、それと死ぬに死ぬん理由に関してはこちらとだけ話すのは待つとつて欲しいんや、後で話す場面が来よつたらちゃんと言つて話したるから待つとつてくれや」

茜は葵が知りたいと言う理由で話し、如何やら葵の知る様にバイオテロで死ぬ筈だったが何らかの理由が発生してしまい生き残らざるを得なくなり脱出し、其処からA・B・Fのボスやメンバーと出会い組織を結成し今に至ると話した。

しかし肝心の死ぬ理由については話す時が来たらと暈し、それ以上は葵の頼みでも話さないとマキ達は理解してそれ以上の追求は避ける様にした。

だが葵は此処でふと、茜が生きてるなら父も生きているのではと考えてしまいそれを直接茜に聞き出し始めた。

「待つてお姉ちゃん。」

お姉ちゃんが生きてるならお父さんは？

お父さんもお姉ちゃんと同じパイオテロで亡くなった筈だよ？

けどお姉ちゃんが生きてるなら……」

「……………悪いな葵、期待させといて何やけど『お父さん』は死にはったよ。」

記録通り、もう死んどるよ。

もうこの世には居らへんよ」

しかし、茜は父は死んだと言いその目は一切の嘘を吐いていない事が見て取れ、葵はガツクリと項垂れ父の生存は無いと落胆してしまった。

そんな中でできりたんは持ち込んでいたWi-Fiと大型タブレットを操作し、生きているニュースが無いか如何かを確認しつつこれからの事を口にした。

「暴露大会は其処までにして現実を話しましょう。」

今現在Wi-Fiが使える、私のタブレットの充電も出来ていて水道も使える事から電気等のインフラは未だ死んで無い事が分かりました。

それからコウ先生やタコ姉様、ゆかりさん達や其処でビールを飲んだくれて

るセイカさん、集まった教師一同が偶然の思考の一致からか買物中にありつたけの食料や飲料水を詰め込んでこの学園に運んで、更に私達は脱出可能なバスを数台残して残りの車等はガソリンとバッテリーを抜き机や椅子ごとバリケードやトラップに使用、更にこの教室以外にも当然人は居ますからその総人数を言えば45人。

これしか此処まで来れませんでした：いや、これだけ来ただけでも運が良いのでしょうかね？

兎に角それだけの人の食事等を2週間賄える分は確保出来てます。

因みに水道に関してはトイレ以外はウイルスによる水質汚染の可能性をゆかりさんが指摘して使用禁止です。

そして問題は武器の方です。

ゆかりさん達のライフルやマキさん、茜さん達の武装含めてアサルトライフルマガジンの数が最大装填数入ったマガジンが茜さんが4、マキさんが3、中途半端にマガジンに弾が入った奴がそれぞれ5、4、ハンドガンは一切使っていないにしてもマキさん達の武器が増えても心許無いと言わざるを得ません。

そしてライフルの残弾数も其処までに多くなく、手榴弾やグレネードを此処で使うのは以ての外、迂闊に使ってバリケード方面にそれが行ったら折角ゆかりさん達の指導の下に築き上げたバリケード壊れて無駄になります「あ、バリケードはゆかり

んとあかりちゃん考案だったんだ。

よっ、バリケード&トラップマスター！」

はいそうですよ。

で、籠城出来るにしてもゾンビ達が私達以外の獲物を仕留めて此処まで集まってくる時間は先程の外の夥しいゾンビの数からして数日しかないでしょう。

ならそれまでに次の方針、脱出か籠城かを考えるべきだと不詳東北きりたんが進言しました」

きりたんの言う通り此処で籠城出来るにも時間が限られている事をマキ達は自身らの武器を見ながら理解しており、更にウィルスの感染スピードがかなり早くこのままではバリケードを突破されゾンビの餌食になるオチまで見えていた為、何とか何処かで救出戦を実行出来ないかマキは思案し、地図を広げ睨めっこを開始した。

するときりたんのタブレットに生きているニュース番組が映り、その音声に皆がそれに注目すると丁度東京都の足立区を映り出した。

警官隊と自衛隊がゾンビを相手に戦っていたが、ヘッドショットを決めてから約5秒で新型B・O・Wに変異するなど知らずにいる為その新型に追い詰められてしまいその数を減らし、逆にゾンビ等の数ばかりが増して行く一方だった。

そんな時突如として空からロケットランチャーの弾が新型B・O・Wに直撃し、周

りのゾンビも爆風に巻き込まれ倒れていた。

そのロケットランチャー弾の飛んで来た上空を見やると其処にはBSAAのロゴが入った戦闘ヘリが数機飛んで来て居り、中からBSAA隊員が続々と降り立ちゾンビ達や新型B・O・Wと戦闘を開始した。

『ああ、ご覧下さい！』

空からBSAAがこの地獄の様な現場に到着しました!!?

これで我々も助かると『うわああ、後ろお???』えつ、キヤアアアアアアアアア!!? 『ズダダダダダダ!!?』『お”お”う”…』

……えつ?』

『其処のテレビ局、早く此処から離れてろ。』

連中の仲間入りして鉛玉をぶち込まれたいなら別だが、そうじゃなかったら全力で逃げろ、良いな! 『あ、は、はい……』

よし、じゃああつちのチャーリーチーム達の戦闘に参加するぞレオン!!?』

『ああ……お嬢さんとお兄さん方、さっきの隊員に言われた通り報道よりも早く避難した方が良い、此処から先は地獄になるぞ』

そんなBSAAが到着した事で油断したのかニュースアナウンサーの女性の背後からゾンビが迫り、生放送中のゾンビによるカニバリズムショーが幕を開け掛けたが、そ

の横からゾンビに対し銃弾が放たれ、その方向にあった路地から別のBSAA隊員とアメリカ人男性が姿を現しニュースアナウンサー、及びカメラマンを救助しつつBSAA隊員達の戦場へと走り去って行った。

するとニュースが一旦切れてしまい、アナウンサー達が多分避難している事だと分かり次にはニュース局の方に場面が移り、その瞬間きりたんはこれ以上情報は出ないと思いつつ一旦タブレットを消し自分の側の床に置いた。

「……とまあ、足立区も見事にゾンビパラダイスになってる所を見るにこの分ですと東京都全域でバイオハザードが発生していると思つた方が良いでしょうね。」

それからマキさん、先程のBSAA隊員達はあれが救助部隊でしょうか？
「ううん、アレは第一陣である私等極東支部所属のバイオハザード封じ込め部隊の1つのチャージャーチームだよ。」

だからアレに此処まで来て貰つて救助して貰えるとは思わない方が良いでしょう、それに救助隊が来たなら私の方に連絡が届く筈だから」

ですよね」

「それよりデルター、本当にレオンさんと一緒に行動してたし……全く何なのよアイツ等が追つてる組織って！

クソ司令部は相変わらず情報を寄越さないしいい加減にしながら言いたい

わ!!?」

きりたんは状況からBSAA隊員達は救助ではなく最初のバイオハザード封じ込め部隊が来たのかと思い一応マキに確認した所で予想が的中し、まだ救助には暫く掛かるとあつさり予測出来家宝は寝て待つ様に寝転がった。

するとマキは先程のニュースの最後辺りに自身の所属するデルタチームの隊長デルター1とレオン・S・ケネディが一緒に映った事に困惑し、彼等が追ってる組織とは何なのかと頭を抱えていた。

「……ふう、こりゃこの事件、そうすんなり解決出来そうにあらへんな『ザアアアアアアアアア!!?』って皆、ウチ等のタブレットなんか可笑しいで!!」

「うわ、何これ!!?」

こんなの初めて『日本に居る全国民の方々にこんにちわ、我々の名は『CLOWN』』と言う、全てのテレビ、タブレットの電波をジャックさせて頂いた』

……はっ、電波ジャック?」

茜はレオンが日本に来ていた事はある理由から理解しており、更に彼がそう言う星の下に生まれてしまったのかレオンが動く事件となれば決まって簡単に解決しない事件だとその経歴から理解しており、一山抱える様な事件になると先程の足立区の映像から確信した所で全員のスマホやタブレットに一昔前のテレビの砂嵐が発生し全員が困惑

していた所で画面に映像が映り、其処には仮面を被った白衣の男達が並んでおり、その中心のリーダー格と思しき人物が一步前に出てボイスエンジャー特有の機械音声で話し始め、自身等を『CLOWN』、道化と名乗り堂々と電波ジャックした事を宣言した。

これにはマキ達も真剣に見やり映像の録音を開始した。

『今現在東京、神奈川、千葉、そして埼玉と複数の県、そして首都でバイオハザードが発生しているであろう？』

これ等は全て我々が引き起こした物だ。

この新型ウイルス、『T—Genesis』を使つてな』

「CLOWN：…そしてT—Genesis、これが今回の…」

マキ達はタブレットに映る男が大振りにバイオテロを引き起こしたのは自分達だと宣言する姿に怒り、或いは呆れを抱き、そして男が懐から取り出した薬液アンブルに入った紅く禍々しい色をしたそれを見せ、男はその中身が『T—Genesis』と言うマキ達も聞いた事の無い、名前からして恐らくはTウイルスを媒体に開発された新型ウイルスだと判断し男達の次に話す内容が何なのかを耳を傾けて聞き始める。

『我々がバイオテロを引き起こした理由は至つて単純だ、それは、我らが総帥オズウェル・E・スペンサー卿が掲げた理念である『人類の高次への進化』の達成、そして世界が切り捨ててしまったアンブレラ社の復活である』

「はあ!?？」

アンブレラの復活って何言ってるのコイツ「マキはん静かに、話が聞けへん」
…チツ!!？」

マキはCLOWNのリーダー格が話す理念、そして旧アンブレラ社の復活を目的としている事に憤り声を荒らげるが、茜が聞こえないと言って律した為マキは舌打ちをしながら再び画面に目、耳をを傾ける。

そしてそれは未だ気絶している金淵を除いて全員同じ気持ちであった。

『これは現人類への宣戦布告であり、我々の要求を受け入れる事への啓示でもある。今の人類は他者を受け入れず、己を滅ぼす最終戦争へと歩を進めてしまっている。』

故にこのT—Genesisを使い、争いを捨てられぬ現人類からの脱却と新人類の創世の時代を切り開く他に道はないのである。

人類よ、受け入れよ。

愚かで力無き者が統治するこの世には破滅しか道が残されて居ない事を。

この高次への進化を受け入れてこそ人類は新たなるステージへと進む事が出来るのだと言う事を』

『我らの理念は、偉大なるスペンサー卿と共にあり』

CLOWN達のスペンサーが掲げたとする人類の高次への進化に対する演説と宣戦布告、全員のスペンサーへの忠誠心の発露が終わった瞬間全てのタブレットは元のホーム画面に戻り電波ジャックが終わったとマキ達は理解し、そしてCLOWN達の身勝手な要求に憤りを隠せない者、戸惑いを隠せない者、呆れを通り越して無表情な者と様々な反応を葵達は見せ、更に自分達の敵の存在を明確に認識した。

「何なの……何なの、これ……」

「まるで宗教団体の信者達の演説でしたね、いやそのままでしたか」

「CLOWN…T—Genesis…それが今回の…!!？」

「スペンサーが掲げた理念とか馬鹿げてますね。」

今の世界も捨てた物じゃないのに」

「そうですね、美味しい食べ物だって沢山あるし楽しいゲームもあるのにそれをすてるなんてとんでもないですよ！」

「それが分からんからスペンサーの理念つちゆう妄信に縋るんよ。」

さて………これはウチも本腰入れて道化連中を叩かんとあかんなあ…」

葵、ゆかり、マキ、きりたん、あかり、茜がそれぞれの思った事を口にし、それ以外の（未だ気絶中の金淵や未だ酒を飲んでるセイカは除く）は葵の様に絶句し、CLOWNの盲信的な発言とそれに伴うバイオテロに戸惑いを隠せずにいた。

そしてそれはこのクラスに居る者のみならず他のクラスに居た者、他の場所に避難したり家に立て籠もった者、テレビ局の報道者や政府関係者、そして足立区のゾンビ達との戦場に居るBSAA隊員やレオン達はそれぞれの思いを胸に秘め、特にラクーンシテイの生き残りであるレオン・S・ケネディはCLOWNの理念に対して完全に怒りを静かに燃やし、久々に胸が熱くなる事を感じていたのだった。

E P V 『レオンとB・Y.』

時は遡る事バイオテロ発生より4日前。

B S A A 極東支部の隊長『B・Y.』（本名不明）はグレン・アリアスが引き起こしたバイオテロ事件の事後報告書を再度確認し、あの事件の際にアリアス一味の一員だった『マリア・ゴメス』の死体が確認されていない事に一抹の不安を覚え、アメリカの地で足取りを追っていた所であった。

そんな時に目の前にリムジンが停車し、中から見知った顔の男性が現れる。

それは1年前、アメリカ、中国での同時大規模バイオテロ事件でマキ共々駆り出された中国での初任務で共に戦い、更に此度のニューヨーク州でのバイオテロ事件でもまた共に戦った『レオン・S・ケネディ』その人であった。

「レオン、一体何用なんだ？」

俺は今マリア・ゴメスの死体の是非の確認任務を帯びているんだが」

「そちらの方は北米支部の別隊員に引き継がせろ。」

此方は大統領からの緊急依頼で腕の立つB S A A 隊員が近くに居ないかと探していた所にお前を見つけたんだ。

悪いが一緒に来てもらうぞ」

「アメリカ大統領からの緊急オーダー？」

…仕方ないか。

デルターよりHQ、DSOのレオン・S・ケネディがこちらと接触、アメリカ大統領からの緊急オーダーがあると同行依頼を受けた。

マリア・ゴメスの死体の確認任務は北米支部に一旦引き継がせて欲しい。『ザザツ』「HQよりデルターへ、此方も大統領からの緊急依頼の確認が取れた。

レオン・S・ケネディと共に行動する許可をする、HQオーバー」

これでOKだ。

じゃあ大統領の下へ向かいますか」

B. Y. はHQに確認と許可を取り、そのままレオンの隣に座り込むとリムジンは大統領の下へと走って行った。

そしてホワイトハウスの大統領の事務室にてアメリカ現大統領と対面し敬礼をして直立立ちをした。

「良く来てくれた、君が腕の立つBSAA隊員かね？」

「はい、中国でのバイオテロを初任務としてあの死地から生きて帰った程度には腕があると自負しております大統領閣下「あの事件を初任務で生きて帰るか…聞けばニュー

ヨークでのバイオテロ鎮圧にも参加してた様な、その節は我が国の国民を救ってくれてありがとう」いえ、あの事件での最大の功労者は此方のケネディ氏と北米支部のアルファチーム隊長クリス・レッドフィールド氏、そしてシルバーダガー隊の皆とレベッカ・チエンバース氏です。

自分はその事件の際はバックアップ担当でした。「ふふ、謙遜もそこそこ君の事を益々気に入ったよ、では今回の緊急オーダーの話をしよう」

はっ！」

大統領と中国でのバイオテロやニューヨークでの事件の話をし、其処で腕はそこそこあるアピールはしつつニューヨークでの事件ではバックアップでしたよとしつつレオンの顔を立てる会話運びをし、大統領にそれ等の点を気に入られ好印象のまま緊急オーダーの話に入る。

大統領は机にあるボタンを押すと、窓ガラスにシャッターが下ろされ、更に執務室に巨大なモニターが現れレオンとB. Y. はそちらに目を向けるとある映像が流れて来た。

『初めましてアメリカ現大統領殿。

我々はCLOWN、君達に分かり易く言えば旧アンブレラの意志を継ぐ者かな？

我々は来たる日に日本の埼玉、神奈川、千葉、そして東京の4ヶ所で我々が作り上げた最高傑作のウイルスをばら撒く。

このウイルスには未だワクチンは存在しない。

君達が我々を来たる日までに逮捕出来たのならバイオテロを止める事を約束しよう。

だが、来たる日までに逮捕が出来なければ我々は容赦無くウイルスをばら撒く。

そして次の様な光景と化すだろう』

『クソオオオオオ、この化け物共がアアアアアアアアアア!!? 『ズダダダダダダッ!!?』 『GISSYAAAAA!!』

がアアアアアアアアアア……!!?』

映像中でCLOWNと名乗る複数人の集団はアンブレラの名を口にし、更に日本でバイオテロを画策していると言う事を暴露しレオンとB. Y. は映像の者達を睨み付けていた。

更にこの集団はまるでゲームの様に自身らの逮捕が出来ればバイオテロはしないと公言し、次の映像には新型ウイルスを使ったと思しきB. O. W. と何者か…B. Y. はギリギリ見えた肩のワッペンから戦闘しているのは自分のチームにも被害を与えて

いるが大局的に見ればバイオテロを画策する者達の敵、A・B・Fの隊員である事を確認した。

そしてA・B・Fの隊員は練度的に言えばB S A A一般隊員と比べて頭一つ飛び抜けており、間違い無くB・O・Wの殲滅の専門家の一つであると言える組織である。

その隊員が新型B・O・Wにより虐殺されるシーンが延々と流れ、更にB・O・Wに殺された者はゾンビ化する部分まで映っており、これを見た2人は拳を握り、C L O W Nと名乗る集団に対し怒りの感情を露わにしていた。

『如何かな、我々が作り上げた最高傑作のデモンストレーション映像は？』

これが日本でこれから起きる未来のヴィジョンでもある。

我々を止めたくば止めてみるが良い、最も、我々もそう簡単に捕まる気は無いがな。

なお来たる日の日時は敢えて伏せさせて貰おう。

その方が君達もやる気を出して我々を追ってくれるしこのゲームも盛り上がるだろう……では、君達の健闘を祈る』

そしてC L O W Nの中央にいるリーダー格の人物はハッキリとゲームだと言い放ち、更にバイオテロの日時も伏せると言う完全に自分達に有利な条件での宣戦布告を行い、其処で映像は途切れモニターには世界地図が映し出されていた。

「ふん、完全にゲーム感覚か……アンブレラの意志を継ぐ者と名乗ったのも大方此方に本腰を入れて自分達が画策しているテロに挑戦しろと言ってるものだな……舐めた真似をしてくれるな」

「それにあの映像で戦っていた連中はA. B. F. だった。」

連中の部隊が彼処まで一方的にやられるとは普通に考えてあり得ない、何か罠が仕掛けられてダシに使われてしまったと考えるべきか……大統領閣下、今の映像の逆探知は出来ていますか？」

レオンはCLOWN達のテロ宣言にはつきりとした嫌悪感を示し、アンブレラの意志を継ぐ者と名乗った為その感情が余計に表に出ている様で今のレオンは正に火に油を注がれた状態である。

対してB. Y. も嫌悪感はあると極力冷静に事を考えるべきと心掛けている為か表面上は冷静に映像を分析し、A. B. F. が罠に嵌った可能性も考えだした上で大統領に映像の逆探知に成功しているかを聞くと次にボタンを押すとモニターにDSOをサポートする『FOS』の『イングリッド・ハニガン』が映し出され、リアルタイム会話が始まる。

『逆探知に関してだけど、残念ながら此方は南極のとある場所からこの映像が送られて来たのとその場所は既にA. B. F. が先に調査して、先程の映像通りの結果になっ

たわ。

彼方の被害は調査に訪れていた3部隊の内ベータ小隊が小損害を負い、シータ小隊に至っては隊長含む数名以外は全員死亡、オメガ小隊に関しては被害はゼロだけれどベータやシータを守りきれなかった時点で任務失敗とオメガから直接言われたわ。

そしてこの件にA・B・Fは本腰を入れてCLOWNに対し報復行為に出ると訴えてるけど、日本政府はA・B・Fの入国を拒否して警察と自衛隊に何時でも総動員態勢をする程度にしてバイオテロ予告を受けている事を国民にすら伝えてないわ。

現在このバイオテロに対して動けるのは実質私達だけよ』

「何だよ日本政府、微温湯に浸かり過ぎて頭の中がお花畑になってるのか？」

B S A Aにすら伝えないとは嘆かわしい……いや、それとも連中に必要以上の情報を拡散したら即バイオテロを敢行すると脅されてるのか？」

『その予測は当たりよB・Y。』

日本政府は国民にバイオテロを予告された事の通告、及びB S A Aや日本国のエージェントの必要以上の介入、具体的にはB S A A側は選んだ1人以外を送り出す事、日本国エージェント側は1人たりとも動かしてはならないとし、オマケとして我々

アメリカ側も日本に行けるエージェントは1人だけとA. B. F. のバイオテロ発生前の介入に対して即バイオテロを行いその被害は日本全国に及ばせると脅迫されているわ。

だからこそ彼方は最低限の行動しか出来ないのよ、日本国民の生命を天秤にかけられた所為でね」

逆探知に關してはA. B. F. が調査していた場所からの発信、脅迫により予告以上のバイオテロを起こされる危険性がある事等をハニガンの口から聞いた為レオンとB. Y. は頭を抱え、B S A Aも迂闊な手出しも出来ない状況下にあると理解し、2人はチェスで例えるならクイーンやナイトを取られた上にビショップやルークは死に駒になり、相手のポーンの幾つかはプロモーションでクイーンに昇格し何時でもチェックを掛けられてしまう最悪な盤面になっていると考えていた。

「最悪寸前の盤面だな……だがあつちは日本と場所を指定してバイオテロを宣告した。

なら日本の何処か、それも神奈川、千葉、埼玉、東京の何処かに潜伏している筈だ」

『その通りよレオン、CLOWNは4つの県、及び首都にマーキングを書いた地図を送って来ているわ。』

けれど最速の飛行機をチャーターしたけど時間の都合上全てを回る事が不可能な数のマーキングよ。

しかも予告状に書いてある通りならダミーの隠れ家には足止め用のトラップが仕掛けられているそうよ。

それでも貴方は、いえ、貴方達は諦めていないわよね？」

「勿論さ……行くぞB・Y、ゲーム感覚で人の生命を弄ぼうとするテロリストを捕らえるぞ」

「ああ……ああそれとハニガン、ちよつと屁理屈臭い奇策を使うが構わないか？」

レオンはCLOWN達が態々日本の3県1都を指定した事から彼等がそれらの内何処かに潜伏していると考えその予測を口にするハニガンはその言葉を待つてましたと言わんばかりにCLOWNから送られて来た潜伏場所がマーキングされている地図を表示し、レオンとB・Yの通信タブレット端末にもそれが送られ2人はそれら一体全ての数を見た。

その潜伏場所は有に400を超えており、2人がバラバラに行動しても全て周り切れない程でCLOWNの自信の高さやダミーもあるだろうが400以上の潜伏場所を用意する周到さと強かさや慎重さに逆に関心を2人は覚えてしまっていた。

そしてレオンは早速日本に向かおうと一歩歩いた所でB・Yがハニガンに対して

奇策があると口にし大統領を含めた全員がB. Y. に注目する。

『奇策？』

B. Y. ; 貴方先程の会話や映像から何か策を思い浮かべたの？

それに屁理屈って一体何なの？』

「何、彼方が用意したゲームに恐らく想定していないであろうイレギュラーを混じらせるだけさ。」

ハニガン、直ぐに機密通信でA. B. F. に連絡を取ってくれ。

そしてオメガ小隊長のオメガ1を日本に送る様に要請して欲しい」

「なつ、君は今の話を聞いていたのかね？！？」

A. B. F. を介入させれば全ての日本国民をバイオテロに晒させてしま
うのだぞ？！？」

B. Y. の考えた奇策とは何とA. B. F. のオメガ1を日本に送り込むと言う先
程の脅迫文に反する物であり、その何処が奇策なのか全員困惑し何を考えているのか
とB. Y. を見ていた。

が、B. Y. はそんな返答もお見通しと言わんばかりにニヤリと笑みを浮かべレオン
達にその奇策の詳細を話し始める。

「確かにA. B. F. の介入は許されない、それも恐らく日本のエージェントみたく

ただの1人であろうが無理でしょう、一見すれば「一見？」はい大統領閣下。

我々BSAAはオメガ小隊長長のオメガ1と言う存在は知ってはいる、けれどその素顔、経歴、更にはDNA照合から指紋照合に至るまで全てのデータが存在しません。

だからこそ其処を突くんですよ、オメガ1を一観光客に扮して日本に送り込むのですよ、そう、素顔で。

恐らくCLOWNもオメガ1の正体が誰なのか分かってない、分かっているのは自分達と同じく恐らく16、7歳の少女の体格をしている程度、です。

体格からオメガ1を割り出そうとしても我々でも絞りきれなかったのです、なら彼方も同じ筈。

だからこそこの1手は有効打となり得る、自分はそう考えましたよ、たった今」

「し、しかしそれはCLOWN側がオメガ1を知らない前提の話だ！

それでもしも彼方がオメガ1の正体を知っていて脅迫通りに日本国民全てがバイオテロに巻き込まれてしまったら我々は「その時は自分に全ての責任を押し付けて下さい、我々の感知していない所でB・Y・と言う重罪人が脅迫文を無視した行動に出た、と」う、うむ……」

「兎に角今は時間が無いのです。

決断するのは今しかありませんよ閣下。

この策を執行するか、否か」

B. Y. はB S A Aや各国の情報網を駆使しても掴めなかったオメガIの正体をC L O W N側も恐らく知らないと話し、それを逆手に取り観光客に紛れ込ませてオメガIを日本に情報を共有させ潜伏場所の捜査を共に行わせるとし、これには確かにC L O W N達がオメガIの正体を知りさえしなければ上手く行く策であった。

が、逆に知っていれば即日本全国でバイオテロと言う余りにもリターンに合わないハイリスクを伴っていた。

その為大統領もこの策を執行すべきか否かを悩み、しかしB. Y. は時間が無いとしてこの場での決断を促した。

そしてアメリカ現大統領が下した決断とは…。

「……分かった、君の策に賭けてみよう。

但し、この策が失敗し日本国民全てが犠牲になつてしまふなら全ての罪を君が被つて貰う事とする、良いかね? 「元よりそのつもりです、大統領閣下」

うむ…ハニガン君、機密通信を使いA. B. F. にたつた今話した策を伝え、そしてC L O W Nの潜伏場所の情報を共有せよ。

事は一刻を争う、直ぐにB S A A極東支部デルター1、B・Y・の策を決行せよ！」

『了解です大統領閣下。』

機密通信の周波数をA・B・F・に合わせて策を……』

「じゃあ行くこうかレオン。」

……大丈夫さ、この策は上手く行く、そんな確信があるんだ」

「……これでバイオテロの被害が大きくなればお前一人に罪を被せても俺達の世界からの信用は失せるか、泣けるぜ」

B・Y・の策を決行すると決断し、ハニガンに対してA・B・F・に通信を送る様に命じその間にレオンは愚痴を零しながらB・Y・と共にチャーター機へと向かい、日本へと入国した。

結果としてB・Y・の策は上手く行った。

CLOWNもオメガ1の正体……それが琴葉茜だと知らずにまんまと日本に入国させ、茜は千葉から、レオンは神奈川、B・Y・は埼玉からしらみ潰しに潜伏場所を洗い出し、最後は東京に向かいこの間の4日後には3人で合わせて東京の潜伏場所を残り数カ所にまで絞り込む事に成功したのだ。

だが、無情にもバイオテロは実行され、3県1都はT—G e n e s i sの脅威に晒される事となってしまった。

そして現在、7月27日PM:15:30。

レオンとB. Y. は合流して足立区のテレビ局の放送にあつた降下して来たBSA A隊員達と共にゾンビやB. O. W. と交戦しその場の鎮圧に成功する。

因みに2人は新型ウイルス産のゾンビと言う事もあり警戒していた為かゾンビと初交戦した際に映像にあつた新型B. O. W. に変異を許していたが単独でこれを鎮圧、

そのまま足立区付近にて合流してBSAAヘリが降下する地点を通信で拾いこの場に
来たのだ。

そして犠牲になった警官、自衛官にレオンとB・Yは鎮魂の意を捧げ、CLOWN
達への怒りを燃やしていた所だった。

『ザザツ』HQよりデルタ1へ。

デルタ2が練馬区にあるROICE学園付近にて最終通信を行った。

A・B・Fのオメガ1も共に行動し、生存者の安全の確保に移っている。

デルタ1とケネディエージェントはそのままデルタ2達と合流、そして生存者
の安全の確保を強固にせよ。

救助部隊、及び鎮圧部隊の編成は最長3日は掛かる、それまで保たせし、H

Qオーバー」

「…と言う訳でHQからデルタ2と合流する様に命令が下った。

恐らく彼方は武器の弾薬不足になつてる筈だし、チャーリーチームの皆、武
器の弾薬、医療キットと車の融通をしてくれないか？」

「全く、司令部は何時も無理難題を押し付けてくるな。

ほら、そう言うと思つて渡せるありつただけの弾薬と武器に医療キット、後車
を一台自衛隊と交渉して用意してやったぜ。

この任務が終わったら何か奢れよデルター1!!?」

「ああ、ありがとうチャーリーの皆。」

「良い店を知ってるから其処で奢ってやるよ、全員分な!」

HQからレオン、B. Y. はデルタ2、マキと合流して最長3日は保たせる様に命じられそれを実行に移そうとするが、恐らく、否、自分達の用意した武器(レオンはカスタムハンドガンのセンチネルナイン、デザートイーグル、ショットガン)。

B. Y. はBSAA制式採用アサルトライフル@ロングマガジン+フラッシュライト+グレネード弾発射装置カスタマイズ、グロック18C@フラッシュライト+ロングマガジンカスタム、BSAA制式採用アサルトショットガン、手榴弾×2。

両者複数回の戦闘により残弾少な目)とマキ達の武器を合わせても3日も保たせられる訳が無いと考えこの場に居たBSAA極東支部のバイオハザード封じ込め作戦部隊のチャーリーチームより任務に支障が無く、且つありったけの予備の武器や弾丸、手榴弾を渡され更には自衛隊用車両をチャーリーの交渉で一台拝借出来た事を伝えられ、後部荷台にそれらを上手く詰め込み2人は運転席、助手席にそれぞれ乗り込みB. Y. はチャーリーチームに敬礼をして車を走らせ、チャーリーチームや生き残った警官、自衛官達も走り去って行く車に敬礼をし見送った。

「結果的にオメガガーを潜伏させたのは上手く行ったな。」

これで奴等の潜伏場所は残り僅か……バイオテロは止められず、大規模感染を許してしまったが必ずツケを払わせる用意が出来る筈だな」

「ああ……欲を言えばバイオテロを未然に防げればよかつたんだが、後1手詰めきれなかつた……たく、俺の見通しも甘過ぎたか「だが通信を拾った限りデルタ2やオメガ1が生存者を確保している。

なら俺達は今から3日は耐え忍ぶ時だ。

それからは……存分に反撃する時さ」……そうだな」

B・Y・はゾンビを避けながら運転しつつバイオテロを防げなかつた事を悔いていたが、レオンの方は既に次を見据えておりCLOWN達への反撃の準備をし思う存分やられた分をやり返すとB・Y・にニュアンスで伝えていた。

それにB・Y・は静かに肯定し、更には此れが数多のバイオテロを生き抜いた戦士、レオン・S・ケネディなのだと改めて思い知りその頼もしさと佇まいにBSAA北米支部アルファチーム隊長であるクリス・レッドフィールドと同様の勇気を与えてくれた。

そうしてROICE学園に向かつている途中でB・Y・はスーパーマーケットを見つけ其処に（食品コーナー側の自動ドアの少し前）駐車しエンジンを止めた。

「スーパーマーケットか。

成る程、彼女達の下に向かうついでに食料や飲料水をありったけ持つて行くうって訳だな」

「そゆこと。」

後洗剤とかボディソープとかな。

年頃の女の子は手見上げとかに五月蠅かったりするからな。

くれぐれも連中に嘔まれて感染しちやいましたくは無しだぞ「お前もな」ふふ、じゃあ行こうかレオン」

レオンとB. Y. は軽口を言い合いながら開かなくなつた自動ドアをこじ開け、ハンドガンを構えながらスーパーマーケットの中に入ると其処は矢張り床が血塗れであり、人が居る気配がしなかつた。

代わりにゾンビの気配だけは一丁前にあり、2人は辟易しながら食品コーナーへと来た。

そしてカートに籠を乗せ、血が付いて無く無事な食料品と飲料水、更には恐らく趣向品も必要と考えた2人は菓子類や酒類もありったけ籠へと詰め、それが終わったら更にカートと籠を用意して同じ様に詰め込みそれを6往復分やりカートを自動ドアの検問機前まで走らせて置き、次に女性用コーナーに行きまたありったけのシャンプーにボディソープ、洗剤、更にマニキュアやリップクリーム、更に男性用コー

デイネートコーナーで男性用シャンプーや髭剃り等まで籠に入れ、そしてB・Y・は何を思ったのかドッグフードまで籠に入れて何から何まで至れり尽くせりな状態にしてゾンビに見つかる事無く入って来たドア前まで来た。

「…で、代金は？」

「……ハハッ、この状況で代金ねえ」

するとレオンは冗談混じりに代金の事をB・Y・に聞き、B・Y・は笑いながらレオンを見やり、するとレジが動いてない為財布から足元に代金、その額何と25万円を置きそのまま店の奥を見やりながらB・Y・はこう呟いた。

「釣りは要らないよ」

実際B・Y・は代金の計算を行い、それら全てを含めてギリギリ20万円の範囲で収まる買い物をしており、こんな状況故に釣りの差額すら店に置いて行くと言う気前の良さよこの店で買い物中に犠牲になった客と店員に哀悼の意を込めてお金を置いたのだ。

そしてその一言を合図にレオンとB・Y・はカートを走らせ入り口を潜り抜けさせると案の定万引き防止用の警報機だけは作動しており五月蠅い音が鳴り響きゾンビ達が一斉にレオン達に気付き向かって来るがレオンとB・Y・はそれよりも早く後部座席に籠を置きまくり、ゾンビ達が入り口に迫り着くよりも早く荷物を全て詰め込みそのままドアを閉め、ロックを掛けた上でエンジンを蒸しそのまま早いギアスロットルで

スーパーマーケットから去りそのまま車に付いていたカーナビからROICE学園へと走り出し、しかしスーパーマーケットから抜けてからは余りゾンビに気付かれず追い付かれずスピードで車を走らせ足立区を出て北区に入った。

幸い大通りは事故車だらけだったがレオン達の車が通れる分のスペースは運良くありこのまま行けば1時間以内には練馬区のROICE学園へと辿り着けると2人は考えていた。

「…よし、ゾンビ達は車に追い付けず諦めて別の奴を追い求めているな。」

それと事故車の中の死体に夢中なつてこつちを見向きもしない間抜けばかり。

コレなら上手く行けば…」

「ああ、1時間以内にはカーナビの指定場所に辿り着けるな『pipipi、pipipi、pipipi』?」何だ、ハニガンからか? 『ザザア』こつちも通信が…」

……まさか。

『pipi!』ハニガンか?」

それとも……道化の団体様か?」

「HQ?」

それとも間抜け共か?」

その同時に互いの通信機器に連絡が入り込みタイミングが合い過ぎていた為偶然

ハニガンとBSAAのHQの通信ががち合ったか、それともCLOWNが通信機の周波数を合わせて此方に通信ジャックを仕掛けて来たのか互いに見やりながら通信機器に皮肉混じりでCLOWNか否かを聞くと、レオンの通信タブレットに映像が映り其処にはハニガンでは無くCLOWNのリーダー格が映っていた。

『君達、良くルール違反を犯してのうのうと買物に洒落込んでいられるな？』

我々は言つた筈だぞ、A・B・F.の介入は許さないと』

「ああ確かに言つてたな。」

だからお前達がこんな馬鹿げたバイオテロを起こした時点でオメガーが動き事態の鎮圧に当たつた筈だが？』

『その点では無い、我々は『バイオテロ前にA・B・F.の介入を許さない』と告知した筈だ。』

にも関わらずお前達はA・B・F.のオメガーをこの国に予め潜伏させていた、このルール違反には罰を負つて貰う「罰ねえ、オメガーの潜伏に気付かなかつたお前達がそんなゲームマスター気取りをまだ続けるのか？」…何？』

CLOWNのリーダー格は脅迫文に叛いたレオン達に対し強い口調でそれを追求し、レオンはオメガーが動いたのはバイオテロ後である為問題は無かつたと言うが、CLOWNは矢張りバイオテロ前にオメガーが日本に来ていたのが気に入らなかつたらしく

罰を受けさせると言い放つもB. Y. がゲームマスター気取りと貶してその先の言葉を遮る。

「本当にお前等は唯の道化師、しかもド3流で観客に見向きもされない哀れな哀れなピエロだ。

罰を負って貰うって言うならオメガ1が観光客に扮して日本に入国した時点であの脅迫文通りに日本全国をバイオハザード塗れにするべきだったんだよ。

だが、お前達は誰一人として『素顔も素性も分からないオメガ1が日本に来ている事に一切合切気付かずゲームと称したバイオテロ計画をルール通りに続行』していたんだ。

つまりだな」

「お前達はゲームマスターとしても道化としても脚本もルールも何もかも抜け穴だけに気付かず続けた間抜けな三流の犯罪者って訳だ。

B. Y. の言う通り、オメガ1が日本に来た時点でバイオテロを引き起こしておけばまだお前達が全てを出し抜いた一流の役者だったんだよ。

だが結局それに気付かないままお前達はこの状況を作り上げた。

それからオメガ1の協力もあってお前達が潜伏している場所は残り数カ所にまで絞り込めた。

このまま俺達に反撃されて逮捕されるか、それとも死んであの世に行くのか震えて待つているが良いさ。

幸いしてお前達の生死は問わない事になってるんでな、安心して引き鉄を引けるぞ、こっちはな」

B・Y・とレオンはCLOWNのリーダー格に自らが課したルールの穴：『一切の情報の無いオメガ1の素顔』と言う一点物の抜け穴について指摘し、更にオメガ1、琴葉茜が日本に居る時点でもう既にルール違反だったにも関わらずそれに気付かないままバイオテロを計画通り実行した為結局オメガ1が日本に居た事によるルール違反の罰則を与えるタイミングを完全に失いCLOWN達の言い分は既に理論が破綻している状態になっていた。

それらを2人はCLOWNのリーダー格に伝え、更に茜の協力により潜伏場所は残り僅かに絞り込んだ事まで伝え、逮捕されて詰むか死んで詰むか何方にせよスペンサーの理念と言う馬鹿げた妄信が叶えられない状況になりつつある事を告げ、2人は眉を顰めて怒りを静かに露わにしながら三流の道化師に震えて待つている様に処刑宣告をした。

それに対してCLOWNのリーダー格の態度と言えば…。

『……ふむ、確かに我々はオメガ1が日本に居た事に気付かず計画通りに事を進めてしまった。

更にそんな抜け穴を指摘されるまで頭の中で考えず一方的に罰を与えようとした事は詫びよう。

そして認めよう、君達は確かにバイオテロを止められなかった、だがその代わり我々の首元にまでその牙を静かに近付けさせていた、我々に悟られる事無く。

試合には勝ったが勝負には負けた、こんな状態であると認めよう。

そして讃えよう、我々にその獵犬の牙を突き立てた事を。

その称賛に対して我々は潜伏場所は変えないと約束しよう。

だが、あくまで試合に勝ったのは我々だ。

未だワクチンの無いこのT—G e n e s i sの脅威に対し君達もまた震えて待つていると良い。

何せ此方のカードは君達が新型B. O. W. と呼ぶ『ネフィリム』のみでは無いのだからね。

では楽しみに待つてるとするよ、君達が我々の下へと辿り着くその時をね……
ふふふふ『プツンツ！』

怒りでも焦りでも無く、ただこの状況を楽しむかの様な、未だ余裕がある態度であった。

更にCLOWNのリーダー格は新型B. O. W. ……『ネフィリム』と呼んだあの化

け物以外にカードを残していると言ひ、更に根本的な事としてワクチンが未だ存在しないこのT—Genesisの齎す脅威にレオン達側も震えて待つ様に笑いながら言ひ放つと通信が同時に切れ、レオン達は道化との会話に少し疲れが出てしまったのか座席に肩深くまで腰を下ろし、B・Yも運転を止めてゾンビが居ない場所で一時停止をしていた。

「ふう………T—Genesis……創世記にネフィリム………神の子が墮天して人との間に成された子の名を冠するか。」

本格的に連中は世界の有り様を塗り替えるつもりらしいな」

「ああ、だがその脅威にも此方も対処が無い訳じゃない。」

俺達が伝えなかつた更なるルールの穴、それを最大限活用してこのバイオテロを早々に鎮圧させて守るべき生命を守ってやるさ」

B・Yは『Genesis』、創世記と『ネフィリム』、墮天した神の子と人が婚姻を成し産み落とした巨人の名を冠する事にCLOWN達の妄信的な理念だけは本物だと確信し、スーパーマーケットで買った自分のグレイプスカッシュを開けて飲み、窓の外を見やりながら道化達のスペンサーに対しての忠誠心にはある意味では凄いと感じ、またある意味では馬鹿らしいと思ひ耽っていた。

だがレオンはそんな恐るべき存在に対して無策では無いとして彼方側が見落とし、更

に此方側も全く指摘しなかった『もう一つの抜け穴』に対して希望を託し、自分達はそちらに目が向かない様に盛大に暴れてやろうと言う気で満々であり、そして守るべき生命を救う最大の1手をレオン達は彼方に先の会話で気付かせずに会話を運んでいたのだ。

その最大の1手とは……。

「(頼むぞ『シエリー』、『ジェイク』を見つけてこのバイオテロを鎮圧させる最大の1手:T—Gene-sisのワクチン生成に漕ぎ着けてくれよ)」

『アメリカ側は日本にエージェントを1人しか送り込めない』、それを逆手に取りB. Y. の奇策の後に出発直前に打った1手。

DSOのエージェントの『シエリー・パーキン』が嘗て世界を滅ぼそうとした男、『アルバート・ウエスカー』の実子であり彼の凡ゆるウィルスに耐性、適応能力を継いだ青年『ジェイク・ミューラー』を見つけ出し、T—Gene-sisのワクチンを作り上げると言うこの世界にある希望の1手である。

そうして休憩が済んだ2人は車を走らせ、遂にROICE学園の校門前へと辿り着くのであった……。

E P V I 『合流』

時刻はPM：16：45、バイオテロ発生から約3時間が経過した。

きりたんがタブレットを眺めているが流れて来るニュースは相変わらずバイオテロばかりではにはニュース局にゾンビが押し入りニュースキャスター達を殺害する凄惨な場面が生で流れてしまう番組があったり、セイカがビールをグビグビ飲んだり警察や自衛隊がBSAAとの情報共有で漸く今回のゾンビ達に対する有効打を知る事が出来、BSAAと共にバイオハザード封じ込めが成功しつつあったり、セイカが今度は赤ワインを堪能したり避難した日本政府首脳陣が海上で緊急事態宣言を行い自衛隊等の指示に従い指定された避難所（自衛隊基地等）へ行く様に避難命令が下されたりなど様々なニュースが流れ、更にネットのスレ板にきりたんは『131：バイオテロで学校にバリケード【避難ナウ】』や『200：BSAAとA・B・F・隊員キター!!?』【続・避難ナウ】等を投稿し注目を集めたりしていた（因みに銃の特徴や防具等も全て正確に伝えており、コールネームのデルタ2、オメガ1も伝えておりスレ板はオメガ1降臨に沸き上がってたりしている）り、セイカがまだ酒を飲みそうになつた為コウにとうとう酒を全没収され掛け「それだけはお勘弁をおおお!!?」と空中回転ダイナミック土下座を

したり等様々な事が起きた。

更に3時間間に金淵は起き上がり、回し蹴りをされた事に怒りそれをゆかりは「蚊が飛んでいたのでそこからウィルス感染する恐れがあったから潰しただけです」と太々しい嘘を吐き金淵の頭に血を上らせたり、東北家と音街家の両親がまさかの同じ会社と同じ部署で働いていてこの時期になって揃ってオーストラリアに海外出張し、ウナはずん子達の家で預けられていたり（その為東北家とウナは親の心配はしていなかった）、東北家に飼われている番犬ずんだもんは葵や茜、マキ達は気に入られて懐かれたり（なおセイカは酒臭かった為か懐かれなかった）、ずんだもんは外の変わった様子を逐次（状況を理解しているのか小さく）吠えて皆に伝える優秀な監視役の1匹と讃えられ専用の椅子と机で窓の外をジ〜と定期的に見たり、葵が学園の敷地外でゾンビに追われている人を見かけてそれをゆかりがアンチマテリアルライフルで頭を吹き飛ばし人助けしたりと本当に様々な事が起きた。

そうする中でゆかり達は銃の手入れをしたり、金淵は苛立ちを隠せず貧乏ゆすりをしてたり、ずん子も自分の弓道部の弓矢（いぎと言う時に弓を引きゾンビの頭を射抜く為）の手入れをしたりセイカもコウに酒を取り上げられ掛けたのが堪えたのかずんだもんと共に窓の外を見張ったり、茜は銃の手入れを終えた後に他の生存者の確認をし、怪我をした人も転んで怪我した程度でゾンビに噛まれたり等で感染はしていない事を確認

していた。

するとセイカとずんだもんは学園の正門前に自衛隊用車両が止まった事を確認し、全員に知らせ始める。

「ワン、ワン！」

「皆、自衛隊の車が一台正門前で止まったよ！」

「えっ、自衛隊の車が『ザザツ』此方H Q、デルタ2 応答せよ」あ、はいデルタ2 通信確認！

外に自衛隊の車が一台止まりましたが、アレは何でしょうか、デルタ2 オーバー！」

ずんだもんの吠え立てやセイカの知らせから皆窓の外を見やり其処には本当に自衛隊の車が止まっており、更にマキの通信機にH Qからの通信が入りそれに応答しつつ外の自衛隊車が何かを問い直す。

すると通信機の中からマキの待っていた一言が入る。

「H Qより、その車両はデルタ1とケネディエージェントが乗っている物だ、此方でもデルタ1よりそれを確認済みである。

今からデルタ1と通信を繋げる、H Q オーバー『ザザツ』

「マジ、あのバカ隊長が来たのか「あーあーテストス、此方デルタ1、デルタ2は生き

てるなら返事しろ、死んでるならウーウー唸れ」つ、此方デルタ2!!?

私はちゃんと生きてるよ!!?

と言うか、何で数日前から日本に居るのよ、それにレオンさんと一緒って如何言う事なのよ!!?

説明をしなさいよ!!? 「あー、分かつてる。

その説明をしてやるから俺達を中に入れてくれ。

それから喜べ、チャーリーチームから武器弾薬、医療キット、それに食料や飲料水や趣向品、洗剤等をスーパーマーケットから持って来たぞ」

えっ、アンタ遂に盗みを「盗んでねえよ!!?」

レジの電源落ちてたから出入り口前に25万円置いて来たわ!!?

良いから早く受け取りに來い、それと俺達を入れろ、以上!!? 『ザッ』あーもうマキちゃんの可愛いジョークだったのに……さて皆、食料とかが来たし頼れる人間2人が来たから早いとこ中に全部入れようか!

……琴葉茜、アンタも手伝うよな? 「モチやで〜」

OK、じゃあテキパキ動こうか」

マキはHQよりデルター1、B・Y・とレオンが到着した事に嬉しさ満載で他愛の無い会話と状況説明を求め、B・Y・はそれを中に入れたらすると言いい武器弾薬医療キッ

ト、更には食料等日用品やら何から何まで揃えて来ていた事からマキは校内の生存者一同にそれ等を伝え、45人の生存者の内それぞれの代表数名が受け取りに正門前のバリケードまで来て梯子を掛け、マキと茜、葵がそれぞれの物が入った籠を受け取っては渡してを繰り返し、最後は自分達を使う武器や弾薬、そして代表者達に医療キットを渡して怪我人の治療に使う様にと言付けをして生存者の代表達から感謝されながら彼らが無事学園の中に入るのを見届けた。

そしてB・Y・はゆかりの指示から学園のバリケードにこの自衛隊車両も使う事を確認し、まだ少し不安があつた裏門まで車を回しガソリンとバッテリー等を抜き取つてから外に出たマキ、茜、ゆかり、コウ達6人で車を横転させ、バリケードの一部として固定化させた。

そしてレオン、B・Y・は生存者一同から歓迎されそのままマキ達が居る1-Aクラスに入りポテチを開封し摘みながら状況説明を始める。

「mgmg、ポテチウマ〜」

「さて、先ず何故俺が日本に先に来ていたかと言えば、アメリカでのアリアス事件の中で生死不明だったマリア・ゴメスの死体確認の任務中にレオンが俺に接触、クリス達北米支部の優秀な一同は別任務でアメリカに居なかつた為偶然アメリカに来てた俺に大統領閣下からの白羽の矢を立てられたのさ。」

その大統領閣下からの緊急オーダーは先のバイオテロ宣言をやったCLOWNの捜査、及び逮捕だった。

奴等はアメリカ政府に宣戦布告を、日本政府には脅迫をしてアメリカのエージェントとBSAAの隊員の代表1名ずつが自分等を逮捕出来るか挑戦状を送り付けていたのさ。

俺達を馬車馬の如く走らせる為にバイオテロの正確な日時を伏せやがらないながらな」

「更に奴等は日本政府がバイオテロを国民に通告したりエージェントや警察、自衛隊を捜査に使ったりバイオテロ開始前にA・B・Fを介入させたり等の禁止ルールを設け、それに違反をすれば日本全体にT-Genesisをばら撒くとしていた為、日本政府は最低限の準備しか出来ず俺達も急ぎ400以上ある隠れ家の内当たりを一つ当てなければならなかった。

だがダミーの隠れ家には中に閉じ込めるトラップが仕掛けてありこの4日以内に俺達2人だけでは如何足掻いても見つけ出すのは無理だった。

だが、B・Yは奇策として素性が一切割れていないオメガ1を観光客として紛れ込ませて3県を1人ずつに分担して奴等のアジトの洗い流しをしていた……が、結果は見ての通り俺たちは間に合わなかった。

後は東京の残り数カ所の隠れ家の何処かに居る事迄は絞り込めたがそこでタイムアップだった。

それからB・Yの策が初めから失敗した場合はB・Yに全ての責任を押し付ける手筈になっていた」

「んで、ウチは丁度葵の近くに來やつたから妹や『お母さん』を守りに走つとつて何とか間に合わせとつて今の状況になつとつたんやで。

後通信機器は連中ジャックしとる可能性が高い所為で互いの情報漏れを避けるにはウチ等が情報統制するしか無かつたんや、マキはんには悪い事はつたと思つとるよ、ウチ達は。

そしてA・B・Fはあのクソ道化共にT—G e n e s i sの性能実験に使われとつてベータ小隊が小規模の被害を、シータ小隊は隊長と他数名残しいほぼ壊滅状態にされてもうたわ。

せやから奴等には報いを受けさせたるつて決めとつて日本へ來たんや。

此処までは分かつたかいな、弦巻マキはん？」

葵やマキ、ずん子達は日本政府がそんな脅迫を受け、またアメリカには巫山戯た挑戦状を送り付けていた事を知り絶句し、日本の諜報員であるゆかりやあかりはそれ等を思い出し自分達は証人保護プログラムで守られている人の護衛にしか動けなかつた事に

苦虫を嘔み潰した表情を浮かべ、マキはH.Q.が自分に最低限の情報しか渡さなかった事に対し腑に落ち、そしてB・Y.の分の悪過ぎる賭けに葵達は全員冷や汗を掻き、結果的にはCLOWN達も茜がオメガ1とは知らなかった為日本全土のバイオテロは避けられたが、これがもし知っていたとなれば自分達は今頃ゾンビのお仲間になっていた可能性すらあったと知りB・Y.に対して葵やマキ達はジト目で見つめ、しかしB・Y.は悪びれず、しかし失敗しない自信があった振る舞いを見せながらそのジト目に応え始める。

「いや、BSAAや各国の総力を挙げても誰一人としてオメガ1の正体は今になるまで分からなかったんだ、だからCLOWNなんてウィルスの実験と性能にしか興味が無い連中がオメガ1の事を碌に調べ上げる筈が無いとあの挑戦状を見た時点で気付いたのさ。」

だから失敗する心配は無かったし、オメガ1：琴葉茜も仲間の仇を取れて俺達は奴等の生死問わずの逮捕に全力を尽くせる、WIN—WINだったのさ、今回ばかりは本当にな」

「いや、ウチも何とか日本へ行きたかったんやけどA・B・F.が介入しはったら日本全土バイオテロとかトチ狂った要求されとって身動き出来へんと思つとつた所にそないな策をB・Y.はんがやってくれたんで乗った訳や。」

結果はあの道化共がド三流の大根役者やった事が知れて死にはった仲間達も少しは報われたと感じたわ……まあ本当に報われる時は奴等をこの手で地獄に送ったその時だけなんやけどなあ」

B・Y・の説明についてマキやゆかりも納得せざるを得なく、事実自分達が幾ら調べ上げてても茜〓オメガーに辿り着けた者は居らず、そもそも公的には茜は死んだ事になって為余計にその〓に辿り着く要素が欠けており、せめて髪の毛一本や汗が一滴付いた物でもあれば良かったのだがそんな物は茜は一切落とさないしその場に残さなかった為最早オメガーの正体を知れるには超能力で透視をする等の奇想天外且つ先ず有り得ない方法しか残っていないかった。

その為B・Y・の言葉には説得力が生まれ、またCLOWN達が文字通り道化である事を知りマキ達は幾らか付け入る隙があると確信が持っていた。

「しかし懸念材料が無い訳じゃない、T—Genesisによる何等かのカードは彼方がまだ幾つか見せていないと公言した事、その自信の表れか潜伏場所の変更はしないと発言した事、そしてT—Genesisにネフィリム……あのゾンビから変異するB・O・W・にそんな名前を付けてスペンサーが掲げていた『人類の高次への進化』をやり遂げようとする狂信的忠誠心。

これ等全てが如何転ぶか俺達にも予測が付かない。

だから救助部隊が辿り着く3日間は俺達が此処に居る生存者40名以上を全員守る、必ずな」

「もうこれ以上アンブレラの名に振り回される人が生まれたい様にする為にも、それは絶対条件だな。

……全く、こんなに時が経つても未だアンブレラの影がチラついて離れないなんてな、泣けるぜ」

そうしてB・Y・が纏めに入り相手のカードがまだ割れていない状態ではあるがせめてこの学園内に居るマキ達含め45名の生存者全員を守る事を宣言し、レオンもアンブレラの名に振り回される人間がこれ以上増えるのはたくさんだと口にし、更に何時もの口癖である泣けるぜも出ていたがその目には戦う者としての意志が宿り茜も含めて覚悟は完了していた雰囲気をも3人は醸し出していた。

その3人に当てられ戦える者達全員は戦う意志を、戦えない者は何が何でも生きると言う意志を胸に宿し覚悟はほぼ全員完了していた（金淵は3日も救助が来ない事に折れてしまい隅でガタガタ震えていた為話を聞いていなかった）。

そして葵も一度銃を握り人だったモノを撃ち殺した為戦う者としての覚悟を決め、この後の武器選択、弾丸補給会議に参加する事を心に決めるのであった。

1—Aの銃を扱える者達……葵や意外な事にマダオなセイカを含み全員集まり、茜は葵が此方側に来た事に驚きつつ、何処か矢張りこうなるかとも考えた素振りを見せて特に何も言わずに迎え入れ、他のメンバーも此方に立ったなら戦って貰うと雰囲気を出して2人を迎え入れた。

そして葵、茜、マキ、ゆかり、あかり、セイカ、B. Y.、レオンで円陣を組みながらチャーリーチームより渡された武器、弾薬等を広げて誰がどれを使うか話し合いを始める。

「じゃあ武器の相談からなんだが、先ず武器を持っていなかったセイカに先に武器を選んで貰う。

この中で唯一銃を持っていなかった人物なんでな、悪いが優先して選ばせて貰う「じゃあお言葉に甘えて私は此れと此れ、後これ選ばせて貰うわ」…ふむ、ベレッタM92FとイサカM37にFN P90か。

じゃあマガジンと弾薬を取ってくれ。

通常散弾からスラッグ弾もチャーリーは用意してくれたよ、全く羽振りが良

過ぎて涙が出てくるよ。

それじゃあ次は既存武器を持つ俺達だ、誰か追加で武器を欲しい奴は居ないか？「あ、じゃあ隊長BSAA制式のアサルトショットガンと12ゲージ弾くれないかな？」マキがそう言うと思つて既に渡す準備はしていたさ。

ほら、お前用にカスタマイズされた愛用の奴じゃないが十分可愛がつて使つてやれよ、お前ショットガンの扱いだけは荒くて専用のカスタマイズにしなきゃ引き鉄やグリップの損失に銃身の叩き付けてそのまま撃つんで銃その物にダメージを与えて直ぐお釈迦にするんだからな「分かつてますよ」私の愛用品じゃないから荒い使い方ではありませんよ」……」

先ず武器を此処に集まったメンバーの中で唯一銃を持たなかったセイカに優先的に武器の選択権が与えられ、ベレッタとイサカ、更にFN P90と前者2つは映像作品やゲームに出る為それを手に取るのは分かるが、後者はゲームに出てもかなり銃器を取り扱うミリタリー物でしか出ない為素人には選べない物だった故に、B・Y・やレオンの中で京町セイカは銃の撃った事があるだけのマダオな民間人では無く、何処かプロ臭い何かを匂わす人物像に更新されやや警戒を内心で向上する事にした。

次に追加で武器を貰いたい者が居ないか聞いた所でマキが真つ先に手を挙げてBSAA制式アサルトショットガンを所望しており、B・Y・はどうせそれを要求すると考

えて既に手に持つておりマキに銃身を横にしながらそのまま渡す……かと思いきや、
B・Y・は直ぐには渡さずマキに何時もの荒い使い方……B・O・W・に銃身を叩き
付けてゼロ距離でぶつ放して銃口や銃身、銃内部にすら過度なダメージを与えてしまつ
たり、クイックショットを乱用してグリップや引き鉄と凡ゆる部分にダメージを与えて
これまで何丁もの同銃がマキの手によりスクラップ場に葬り去られてしまい、B S A A
極東支部の間では『撲殺マッキー』やら『アサルトショットガン』等のあだ名が
付けられ、B・Y・は流石に最長3日は保たせないとならない為そんな風に銃を使つて
お釈迦にして予備銃も全部無くなる事態を避けたい為態々それ等の事例を口にしてか
らそんな事するなと雰囲気で伝える。

しかしマキは口先だけでやりませんとしか言つてない事をこの場に居た全員が悟り、
B・Y・はせめて初めに渡すこの一丁が2日目の日の目を見る事を祈りつつ渡してい
た(因みに同じ理由でアサルトライフルにマキのみ銃剣を付ける事を禁止され、しかし
マキは流石にフルオートでそれをやる勇気が無いのか、それともショットガンにのみ異
様な使い方をする程愛着が湧いてしまうのか不明だがアサルトライフルやハンドガン
等『では』同じ事は精々壊れない程度のクイックショットだけである)。

B・Y・はマキの事は諦めて次に誰が追加武器が欲しいか見やると、葵が手を挙げて
B S A A制式採用のUMPに指を指し、葵のその姿勢に蛮勇か、或いは本当の勇気を出

しているのか見定める為にレオンが質問を始める。

「アオイ・コトノハ、と言ったかな？」

君は聞けばオメガ1に銃を渡されて初めて撃つたらしいな。

これは簡単な質問なんだが、そんな君が何故この銃を選び、またこれを手に取ろうとした理由は何か？」

「先ずBSAA制式採用のコレは弾丸が、40S&W弾を使ってるから殺傷力が、45ACP弾と9×19mmパラベラム弾の中間にあるから今外を彷徨してるゾンビをパラベラム弾を使うよりも早く変異させる前に活動停止させられる事、後お姉ちゃんも私が持つてるハンドガンが、45ACP弾を17発も使う代物だから余り弾丸被りして弾丸の消費を早くしない為、それがコレが選んだ理由です。

コレを手にしようとする理由は……私はゾンビとは言えちよつと前迄は人だったモノをこの手で撃つてしまいました、ならもう私は一般人だから戦いたく無いとか幼稚な理由は使えなくなりました。

そして……何より、私の姉が戦い、また母は戦えない人です。

この銃器選びの場に来る時にも集まれなかったから、多分公園での私の代わりって言うのは恐怖を押し殺して私を守ろうとしてそう口にしたんだと思います。

だからお母さんを守る為、そして死んだ筈のお姉ちゃんがまた私の前から

居なくならない為に、この銃を手にする事を私の中で決めました」

葵はレオンの問い掛けに対して一言一言全てにおいて視線を外さず瞬きをせず、自身の想いをありのまま伝え、その葵の決心が決して蛮勇から来る変な高揚や戦えないのの前に出ようとすする所謂瘦せ我慢等では無い事を見抜き、更にその姿はまるで自身がラクーンシテイにて一日警官の時に持つていた今は冷め気味なつた熱い正義感も感じ取り、やや青いながらもこれなら手渡しても大丈夫だとレオンはB・Y・に視線を送る。

そしてB・Y・もそれを聞いた後で手渡す際に一つ付け加えて置く事があつた。

これはB S A Aと言うB・O・W・との戦闘の最前線に立つ者としての忠告であつた。

「琴葉葵、君のその勇氣には確かに頼もしく感じるよ。」

だが君は俺達から見ればまだ一般人だ、俺達が生命を懸けて守るべき者達の人なんだ。

戦う決意をしてくれたのは有難いが、B・O・W・との戦いと言う物に関して君は素人なんだ。

だからこれだけは約束して欲しい。

周りに居るプロ達に、無茶や無理とを感じる前に助けを求めてくれ、良いかな？」

「……はい」

B・Y・は葵がまだ一般人の線に立っている事とこのB・O・W・やバイオテロとの戦闘に関しては素人だとハッキリと伝え、無理や無茶と感じる前と言うその素人に判断は難しいが、絶対にやって欲しいその判断をして周りに居る自分やレオン、マキ達に助けを求める様に約束させてUMPを手渡した。

そして後は各々の銃の弾薬を手に取りマガジンに詰める作業に入り始めた。

葵は、ミリタリー動画で見ていたUMPの操作をきつちりと思い出しつつ、茜とマキ、ゆかりとあかりがそれぞれレクチャーをしてどの状況で誰に助けを求めるかの分担も頭の中で整理して銃の手入れをBSAA制式採用の方はマキから、A・B・F・式改造ハンドガンは茜から教わりながら時間を潰していく。

時刻は19:50。

バイオテロ発生から約6時間が経過して生存者一同が集まり夕食を食べ始め、雑談をしながら夜の番をどの順番でやるか決めて、更にB・Y・がスーパーマーケットの最後の方で何故か買ったドッグフードは丁度ずんだもんの大好きな物だったらしく、レオンはいざと言う時にあれを食べるのかと言う奇行に走らなくなりB・Y・の人間性を元の評価に戻すのであった。

E P V I I 『防衛戦』

時刻はAM：10：37、バイオテロ発生から1夜を明かし、夜番の人全員の仮眠が終わり朝食を食べてそれぞれの教室に戻りレオンやB・Y、あかりにずんだもんはそれぞれ双眼鏡や犬自慢の聴覚嗅覚視覚を利用して外を見張り、昨日と違い街には火事で焼けてしまった家が多々あったり偶にゾンビが電線トラップに引つ掛かり頭などを吹き飛ばして自滅していたり、しかし1番の変化は昨日夜の見張りでも結構見掛けたゾンビが余り見掛けず何処か不気味な静けさを学園内の生存者一同は感じ取っていた。

しかし、それでパニックにならないのはB S A Aの隊員が2名、準テロリスト扱いとは言えB S A A同様B・O・W、殲滅の専門家であるA・B・F、の最強の一角オメガ1が居る事、更にレオンがラクーンシティの生存者でありこの手の事は誰よりも深く事態を理解出来ている事を昨晩の夕食前に説明したお陰であった。

そしてイタコ、コウ、セイカは各生存者の状態確認をレオン、マキ、茜、B・Y、の要請で行い、理由としてはウイルスに感染しているならそろそろ発症するか発症直前の状態になっていると話された為であり、学園内の不安材料を無くす為3人は確認し回ったりこの学園設備分かる限りでの血液検査（一応マキや茜達も蚊を媒体に感染してない

か血液検査をしている、茜はかなり注射を嫌がったが）をした結果誰一人としてウイルス感染した兆候が無い事を知り、昨晚の夕食時に水道を使い試しに飲んだ勇氣ある人（一応事前にスキャン装置『ジェネシス』をB・Y・が持ち込み水を流して汚染されてない）とスキャン結果が出てた）が居てその人すら感染症状が無かった為、未だ水質汚染はしていないかつたと判断し、その後はB・Y・とマキが30分置きにジェネシスのスキャンを行い今日の朝食時や今この時も水質汚染は発生しておらず、未だ水の心配は要らないと判断しつつもジェネシスのスキャンングは怠らなかつた。

そうして時間が過ぎて行きAM11:49、そろそろ昼食の時間となりイタコ達が立ち上がり家庭科室に向かおうとした。

「さて藍さん、水奈瀬先生。

他の教室の料理当番の皆々様をお呼びして昼食を作りますわよ。

今日の献立はカレーライスを中心に何か他の品も作り上げましょう♪」

「そうですね。

特にこの生存者組の中でマキ君やレオンさん達は戦闘組の担当、腹が減っては戦は出来ぬとも言いますし、彼等に力を付けられるとっておきを作りましょうか」

「はっ。

ふふ、葵が好きな物と言えば…」

そうしてイタコ達が教室の外を出て行った後、残ったきりたんとウナはまだタブレッ
ト端末やWi-Fiが機能している事を確認してゲーム動画を見ており、ゆかりやあか
りは屋上から外を監視し（予備の通信機をB・Y・はゆかり達に渡している）、残った者
達はずんだもんと共に窓の外を双眼鏡で覗いて監視し、何か妙な物が無いか神経を張り
巡らせていた。

しかし、セイカは酒が切れた為集中力が同時に切れ始め、床に寝そべってしまふ。

「あーもう！

早くお酒飲みたーい!!?」

ビールでも良いから飲ませて〜!!?」

「セイカさん、お願いだから後少し頑張つて下さい。

昼になったら幾らでも飲んで良いつて事になったんですから外の監視を……
ん?

「今のは?」

葵は地団駄を踏み始めたセイカに後少しだけ頑張る様にエールを送りながら一度視
界を窓から外し、セイカの方を見てから再び外の監視に戻る……すると葵の気の所為な
のか、はてまたは本当に居たのだろうか、何やら体色の赤く、4足歩行で異様なスピー
ドで動き、且つ『肌や脳が露出し、背中に巨大な眼球が付いた』如何にも化け物と言う

べき何かが葵の視界に一瞬だけ映り、気になり周りを見渡してみる。

するとその化け物は実際に存在し屋根の上に鎮座し、しかもそれが5体程此方に舌を伸ばしながら威嚇を開始しており、更に他にも『体色が赤く爬虫類を思わせる体表と顔に2足歩行で俊敏に動き、腕に鉤爪が付き更に両腕に眼球が付いた』別の化け物まで姿を現し、そして学園に続く道路の向こう側にはネフィリムの大群が押し寄せて来ており、全ての数を合わせて50体以上のB・O・W・が一斉にこの学園に向かつて来た。

マキや茜、B・Y・や屋上のゆかり達もそれに気づきあかりは後ろの方を念のため見たが後ろからは来ておらず、あくまで正門側からB・O・W・達が押し寄せて来ているのだ。

「な、何あの2種類の化け物!!?」

片方は見た目爬虫類で二足歩行してるし、もう片方は皮が全部剥がれて内肌が露出して脳まで肥大化しててそれでどっちも眼球がなんか付いてて気持ち悪い!!?」

「アレは、『リツカー』タイプと『ハンター』タイプのB・O・W・か!!?」

しかもネフィリムの大群まで来てやがる、戦える奴は下に降りろ!!?」

迎撃準備だ!!?」

「えっ、マジで敵!!?」

ちよつと家庭科室からお酒キメて来るから少し遅れるわよ!!?」
「ちつ、合流たつた1日目から大規模籠城戦か。」

ふつ、しかもランチ前にB・O・W 団体客様が押し寄せてくるとは、泣けるぜ。

キラタン、ウナ、君達は他の生存者達に声を掛けて決めてられた避難部屋に全員で戦闘が終わるまで入り口にバリケードを張って置くんだ、勿論ズンダモンも一緒だ、分かるな?」

「サー・イエツサー。」

ほら音街、ずんだもん、早く行くよ」

「ああ、待つてよ東北く!!?」

葵は初めて『リツカー』や『ハンター』を目撃し、ハツキリと気持ち悪いと嫌悪感を示しながらB・Yの指示を聞き自身の武器をマキ達（セイカは集中力増強で酒の補給と家庭科室に向かった人達に避難指示を出す為にやや遅れる）と持ち下に向かい、きりたんとウナはずんだもんと共に他の避難民一同に襲撃の際に避難する様に決められた頑丈な一室に避難する指示をする様にレオンに言われて走り（金淵はさつさとその部屋に逃げていた）、最後にB・Yとレオン、茜が武器と予備弾薬等を運び出そうと弾薬やマガジンが分けられた袋を持ち運ぼうとした時、ずん子が屋上のゆかり達用の予備弾薬

(予め屋上に置いてあるのとは別) の袋を持ち上げていた。

「ずん子はん何してはるんや、早よ避難を」

「私にはこれ位しか出来ないですから！」

窓の外を見てアレだけ早く動く相手にゆかりちゃん達が作ってくれた私の炸裂弾付き弓矢は当てられそうに無いですから……だからお願いします、この学園に居る皆を守り抜いて下さい!!?」

茜はずん子に避難を促そうとしたが、それを遮り今の状況ではゆかり達に弾薬を届ける役しか出来ないとしつつも必ずそれを届けてから避難し切ると葵と同じく決意の目を見せ、それを見た3人はチラツと互いを見やり考えは一緒と判断し、レオンが3人を代表して口を開いた。

「ならズンコ、それを送り届けたら必ず避難するんだ。」

その代わり約束する、俺達が此処の生存者達を守り抜くと『カチャツ!』
「はい、分かりました!」

……琴葉、茜ちゃん。

葵ちゃんやマキちゃんは私の大事な友達なんです、だから助けてあげて下さい「それがあんさんからのウチへのオーダーなら受けたるで、代わりにお代は今日のランチはウチだけエビフライカレーにして欲しいんやけどOKなんかな?」…はい、それ

ならこの戦いが無事終わったらイタコお姉様達とよりを掛けて美味しい物を作り上げますよ！

では皆さん、またお昼ご飯と一緒に食べましょうね！」

レオンがずん子に生存者達を全員守り抜くと約束をしながらセンチネルナインのスライドを引き、何時でも行ける事を示し、代わりにずん子も無事に避難する様に指示してそれを聞いたずん子はドアの前まで走り、出る直前に茜に対しマキや葵達友人達を助ける様をお願いをした所で茜は返しのお代としてエビフライカレーを要求し、ずん子は元気に作ると宣言した後屋上へと走って行った。

それ等を見てたB・Y・は2人、特に茜がお人好しだと思いきや不敵に笑っていた。

「まさかエビフライカレーでBSAAの俺達を囷にしようと思わずあまつさえ助ける約束までするとは、オメガ1も人の子だった訳か」

「ウチはボス、アルファ大隊長からの命令が無い限りは絨毯爆撃はせえへんよ。

単純にボスがその方がB・O・W・殲滅に効率が良いと判断したからそうするだけや。

それとウチ等はB・O・W・抹殺と生存者救助の両立が1番やけど、余計な犠牲者を出さずに効率良くB・O・W・殲滅の手があるならボスが決めた方針に異議を唱える事もあるで。

……これマキはんには言わんといてな、絶対ウチとは拗れるだけやしな」

「ふっ、検討してくわ。」

じゃあ行くぞエージェントケネディ、オメガ1」

「ああ、デカイゴミ掃除と洒落込むとするか……」

茜に今までの任務では見れなかった人間性を見つけB・Y・はB・O・W・絶対殺すウーマンのオメガ1も人の子と思ひ、茜も流星に毎毎毎回絨毯爆撃でB S A A隊員すら死なせるのは気が引けてるらしく、別の手を模索して可能なら異議を唱えると告白し、自分が率いたデルタチームに被害を出して来た謎の存在オメガ1は、本当は繊細な部分も持ち合わせているが任務の為に非情になつてゐる女の子だと知れ、死んでいった部下達の事を思えば許せるかと言えば否だが、それでも人間が仮面を被り感情を殺してただけで相手はロボットでは無かつた事に何処か安堵感を覚える自身がいる事にB・Y・、デルタ1はふと気が付き自身も甘いと感じていた。

そうして茜、オメガ1はマキ、デルタ2に先程までの会話を聞かせれば話が拗れる事が容易に想像出来た為デルタ1に釘を刺し、それを検討すると返された直後にレオンを中心に3人はドアから出て下へと向かい、正面玄関から出てB・O・W・を迎え撃つ準備を整えに行つた。

それから45秒後に全員配置（正面玄関外はマキ、茜、B・Yの大型フルオートライフルや手榴弾等を持つ者、正面玄関と階段の間にレオン、葵、セイカの小回りが効く組が避難部屋に続く道を守る事になっていた）に着き、屋上のゆかり達はずん子から更なる予備弾薬を受け取った後スコープを覗き込み、先にハンタータイプとリツカータイプが学園内によつてくる事を予測し、更にリツカーとハンターが連携するかの如く散開して3方向から襲撃を掛けようとして来ている事を目撃し、1体でも減らせられる内に狙撃を開始しつつ全員に通信機で報告を入れた。

『皆さん、ハンタータイプとリツカータイプが連携して3方向から攻め上がり始めてます。』

私が3時、あかりちゃんが9時方向を狙撃して1体でも多く減らせる様にしますが侵入自体は止められません』

『なので中のレオンさん達は中に入って来た奴等を片っ端から撃ち殺して、マキさん達は正面から来る散開した集団の一編成と正面玄関に真っ直ぐ向かって来るネフィリム達を相手取って下さい!』

「ああ、B・O・W。どのダンスには慣れてるんでな、中の方は俺が2人を援護しつつ片付ける。

「デルタ達とオメガ1は態々正面から来る律儀な奴らを中心に入れさせるなよ?」

「ふん、ウチがそんなハマする訳あらへん。

無論BSAA極東支部の精鋭隊のツートップも同じやろな。

ちゆう訳やし外は任せとき」

「……来たぞ、戦闘開始!!?」

『ガシヤアアン!!?』

『G A A A A A A A A A A A A A A A!!』

ゆかり達の報告と通信機先から聞こえる狙撃音を聞きながらレオンが軽口を出して余裕ある歴戦の戦士の風格を見せ、外のBSAA、A・B・Fの混成チームも正面から来るB・O・W。如きを態々校舎中に入れるミスなどしないと自信を見せた瞬間、正門前の住宅の屋上にハンタータイプ、リッカータイプが現れそのまま正門のバリケード

をジャンプで乗り越え、それと同時に一階の左右端の窓ガラスが破られB・O・Wが侵入して来て戦闘が開始された。

先ず正門側から来たハンタータイプ、リッカータイプの数は左右側の数の比ではなく倍以上の数が押し寄せて来ており、しかし3人は俊敏なハンタータイプやリッカータイプにも的確に弾丸を浴びせて殺傷して行き、特にオメガ1の射撃は7・62×39mm弾をばら撒くAKに魔改造を施した物でありじゃじゃ馬銃に成り果てる筈なのに正確無比過ぎてリッカータイプとハンタータイプの頭が風穴だらけ所か吹き飛び、更にリッカータイプが怯んだの胸を撃ち抜き背中巨大眼球を撃ち抜いて腕かせて置いた所にまた頭を吹き飛ばし、近付いて来たB・O・Wにはカウンターで身動きを取らせなくした後頭を撃ち続けて頭を弾け飛ばす等倒し方にバリエーションを生み出して戦場のエンターテイナーと化していた。

それにデルタ2も負けじとハンタータイプの頭を守る仕草をした瞬間両腕先に着いた眼球を撃ち抜き怯ませては倒し、リッカータイプの頭も勿論風穴だらけにして倒していたがリッカータイプの1体がデルタ2に急接近して鉤爪の生えた腕を振りかぶりながら飛び掛かって来た……が、デルタ2はそれを見てからアサルトライフルからアサル

トショットガンに武器を早替えしつつ、アサルトショットガンの銃口部をリッカータイプの口突つ込みながら地面に叩き落とし、そのままゼロ距離発砲してリッカータイプは頭を惨たらしく吹き飛ばされ腕いていたがデルタ2にはその腕は当たらずそのまま事切れ、更に接近して来たハンタータイプ2体に近距離のアサルトショットガンを頭目掛けて撃ち込み2発ずつでハンタータイプを沈め、アサルトショットガンの弾丸をリロードした後に再びアサルトライフルに切り替えタクティカルリロードを行い新品のマガジンに交換する。

デルターも他2人に負けずリッカータイプとハンタータイプ、両者を寄せ付けずアサルトライフルで頭を風穴だらけにし、リロードの瞬間にリッカータイプが飛び掛かって来てはスライディングしながらリロードを終了させ腹を何度もすれ違い様に撃ち抜き背中巨大眼球を弾の貫通で完全に潰した瞬間リッカータイプは絶命し、デルターはリッカータイプに関しては巨大眼球も弱点だと瞬時に理解し、次の戦闘に移り始め正面から来たリッカータイプとハンタータイプが全滅した頃合いにネフィリム一行が到着、3人はそれぞれのやり方でネフィリムの処理を始める。

一方校舎内では屋上の援護射撃が続き中に入ってくるB・O・Wの数は比較的少

ないが矢張り油断ならない俊敏性を誇り、特にリツカータイプは壁や天井すら這う為室内戦では部類の強さを発揮し、その長い舌を葵、セイカに向けて串刺しにしようとしたが2人は避けてセイカはカウンターでFN P90の弾を頭部に叩き込み絶命させ、廊下に倒れ込んだ葵は代わりにハンタータイプを相手にしハンタータイプの頭を風穴だらけにして倒し、2人は今のでそれぞれの役割分担が決まり2種のB・O・Wを相手取って行く。

一方レオンは無双が如き戦闘力を発揮し、リツカータイプが飛び掛かって来たら避けて蹴りで逆に壁に叩き付けた瞬間ショットガンで頭を吹き飛ばし、ハンタータイプの場合は鉤爪の手を振りかぶった瞬間にその手を持ち別のハンタータイプの頭に突き立てつつセンチネルナインで手を持つてる方のハンタータイプの頭に何発も弾丸を叩き込み一気に2体倒すと余裕を見せて背後の葵達の援護でリツカータイプの頭を正確に撃ち抜いて怯ませ、葵とセイカはそれに合わせて鉛玉を叩き込みレオンはそのままセンチネルナインのリロードをし、更に来たハンタータイプには飛び掛かりにカウンターキックを叩き込み壁に叩き付け、更に地面に倒れる前に顎を持ち柱の角にハンタータイプの頭を叩き付けて潰して殺す等明らかに人間離れした、正に数多くのバイオテロ事件を解決に導いた戦士であり余りにも格が違い過ぎる事を葵達に見せ付けていた。

そしてハンタータイプ、リッカータイプは屋上のゆかり達の報告で全滅の確認を取った後3人は回り込んで来たネフィリムに対し相手取り、此処でもレオンがネフィリムに対し第3、第4の目をセンチネルナインで何度も撃ち抜きつつ懐に飛び込み、顔面に強烈な蹴りを炸裂させて次にデザートイーグルで頭を撃ち再生、変異させる間も無く此れをいち早く倒して葵達を援護してそちらも一緒に倒して行く大立ち回りを見せ中に入ってくるネフィリムを先に全滅させ、外に残ったネフィリム達に中の3人も外に出て援護を始め(この時茜達外の3人組は「早っ!!?」と少し驚いている)、更に屋上のゆかりの狙撃でバリケードを超えようとするネフィリムを撃ち抜き絶命させ、あかりは正門の内側に入って来たネフィリムの方にダメージを与え他の人達の援護に回り、こうして全員の歯車が上手く噛み合った結果第一次防衛戦は生存者一同の負傷0、戦闘をした者も負傷0と大勝利を遂げたのであった。

「あ、私のショットガン壊れた」

「ああ、やっぱり今回もダメだったよ…」

しかしリツカータイプのみならず、ネフィリムにすら銃身叩き付けや銃口部を口に入れてのゼロ距離射撃を繰り返した結果マキのアサルトショットガンは殉職となり、使えるパーツと中に入った弾薬のみを回収して後はスクラップ品としてバリケードの上に置かれるのであった。

EP VIII 『一難去って』

PM13:58、生存者全員が怪我無く防衛線を乗り切り、また窓ガラスを破られて侵入を許した事から破られたか所、及び1階と2階の窓ガラス(1—Aは3階にある)を木材と釘打ち機で補強し、内部の守りもある程度改善させる。

しかしあくまで気休め程度なのでゾンビなら兎も角今回みたいなりツカータイプやハンタータイプのB・O・Wやネフィリムに対しては効果は薄いとレオンや葵達は理解しており、此れもまた生存者の気を落ち着かせる為の措置であると割り切っていた。

そうこうして窓ガラスの補強組(マキ、茜、レオン、B・Y.)も含む全員が家庭科室に集まりジェネシスで水質汚染はまだ無いと確認してから水道で手を洗い、カレーライスを作り上げた。

因みに茜はオーダーをキッチリこなした為エピフライカレーライスにランクアップしており、他の戦闘に参加した人達も労いを込めてカレーライスのランクアップが許され、レオンはシンプルな大盛りを、葵は野菜マシマシカレー、B・Y.はカツカレー、マキはボンデリングカレー、ゆかりはカレーライスの味を辛口目にする様に、あかりは超

大盛りカツカレー（具体的にはレオンの大盛りカレーの更に倍、B・Y・のカツも合わせて3倍以上の量）、セイカはカレーライスのランクアップはせず代わりに大量の酒類を注文し、戦闘組の注文はしつかり通り、更に生存者全員の中で一番若いきりたんとウナにもカレーライスのランクアップが成されており、全員に主食と副菜のポテトサラダ、更はずん子手作りのずんだ餅がデザート枠として生存者全員に行き渡り、更はずんだもんにドツグフードと水を出し皆一斉に手を合わせて頂きますと言ひ（レオンはこれが食事前のお祈りと同じ意味を持つと知ってた為合わせて頂きますと言っている）、ずんだもんは皆が頂きますを言い切るまで待てをして一斉に食事を始めた。

「んん、やっぱりエビフライ美味いわ。」

カレーライスも美味しいし、ポテトサラダまで美味しいと来たもんやし、最高やわ。」

「ああ、美味しいな……これが俺達が生存者全員を守り抜いた末に得た物なら、噛み締めないとな」

「皆さん、ずんだ餅も含めてお変わりには沢山ありますから一杯食べて下さいね。」

特にずんだ餅は私が渾身の出来で作り上げましたのでオススメですよ！」

「あー、確かにずんちゃんはずんだ餅は美味しいよね。」

同じ様につづるのにあの美味さが引き出せないから本当に凄いやつて思

うよ」

「そうですね、お昼ご飯のおやつに偶に出て来るずん子さんのずんだ餅は頭の糖分補給にも適してましたから試験の時は何時も助かってました」

「mgmg、mgmg。」

カツカレー美味しい〜！」

「ぶはあ、お酒がこれだけ飲めて幸せ〜!!？」

皆が思い思いの味の感想や、生存者全員の無事から生まれた物だと噛み締める様に食べたりし、特にレオンは生存者がバイオテロに巻き込まれた挙句に1人以上は必ず同行者が死に、酷い時にはアメリカ、中国での同時大規模バイオテロの様にツールオクスの7万人もの住民や盟友だったアダム・ベンフォード前大統領、更に中国に移動する際の旅客機の乗客やパイロット、CAに至るまでCーウィルスに感染し墜落、そのままレオンと当時パートナーであったヘレナ・ハーパー以外全員死亡し、その中国でも大規模バイオテロで民間人とBSAA隊員が大勢死亡すると言う生存者をバイオテロから守り切れず失う経験も何度も何度も負い、その度に十字架を背負い生きて来た為今回の様に生存者を無事に守り抜くのは稀な例でもあった。

故にレオンはこの戦鬪組の中でも特にこのカレーライスやポテトサラダ、更に初めて食べるずんだ餅と言う和菓子の味を深く深く噛み締めていたのだ。

更にレオン程では無いがマキやB・Y、茜も似た様な経験を何度も負つてゐる為か表面上は普通に食べているがその内面は感傷に浸る様に味を噛み締め、2度とこの満ち足りた味を忘れない様にしたいとし、そして既にこのバイオテロで亡くなつた者達の間も含めて食べると戦闘組は、否、生存者一同（流石に金淵も同様に）は味わつていた。

しかし葵は何か腑に落ちないのかスプーンの運びが遅く何か考えている様であり、近くに座っている戦闘組（今回の功労者の為同じテーブルを囲む様にされている）は何かあつたのかと思ひ茜が我先にと問いかけ始めた。

「葵、どないしたんや？」

野菜カレーは好きなんやろ？

なのに他の皆と比べても食べるのが少し遅めやで……あかりちゃんの食べる量やセイカさんの酒の量は省くんやけど。

何か考え事でもあつたりするんかいな？」

「あ、うん……あのね、素朴な疑問なんだけど、ウィルスを用いて作られたB・O・W。つて其処まで知能が高く無くて言語は解しても単純な命令だったり、連携みたいな行動を取るにしても同じ種類のB・O・W。しか本能的に獲物を追い込む為の連携しか取れない筈だよな？」

授業でもそんな感じに習つてたし。

でも、今回の襲撃に来た：リツカータイプとハンタータイプ、だよな？

あれは全く別種のB・O・W。だしネフィリムだつて知能が低下したゾンビから変異して生まれた奴でしょ？

そんな物があんな風に互いの役割を理解して散開して襲い掛かったり、1体が獲物に襲い掛かったらもう1体が確実に相手を仕留める様な連携をしたり、ハンタータイプ達との戦闘で疲弊された所でネフィリム達が追い込み猟の様に襲い掛かったりするのつて有り得るのかなつて」

茜の問い掛けに葵は先程のB・O・W。達との戦闘でその場で気にする余裕は無かつた為今振り返つてみると単純な命令と行動しか出来ないと言葉で習つたりした筈なのにあのハンターやリツカーと呼ばれた別種のB・O・W。、更にネフィリムは明確な連携を取り、更に別種のB・O・W。同士を作戰に同時投入したりゾンビ等とB・O・W。が遭遇した場合は潰し合いが発生してマトモな連携など出来ないとも葵は教わっていた。

しかし先の戦闘でのB・O・W。達の挙動はそれら教科書に載つたものとは全く違う完璧な連携、散開して襲い掛かったり1人を確実に倒す手段を講じるなど明らかに知能とは別次元の知性を感じさせる行動を取っていた。

それが腑に落ちず何故なのかと考え耽つてた為に食べるスピードが落ちていたのだ

(因みに茜に聞かれた瞬間から食べるスピードを元に戻し始め、口に含んだものを飲み込み切つてから話したりする様になつていた)。

それを聞いてマキは確かに可笑しかったと戦闘中にも感じ取り、葵の言葉を聞き今までのバイオテロ事件の資料を漁つた自身の記憶フォルダから該当する事例を探し始め、すると似た様な事例を頭の中で思い出し、その事例には今この場に居るレオン・S・ケネディが何らかの形で関わつている物であると思案しハツとレオンの方を見る。

すると茜やB・Y・も同じ事を考えたのかレオンの方を見て、ゆかり、あかり、セイカ、そして葵もレオンに視線を向けると、レオンも成る程と思ひ自分の中にある経験を思い出しながら口を開いた。

「成る程な、『プラーガ』、又はその遺伝子を利用したウイルスによるバイオテロだとお前達は感じたんだな。

確かにアレならば、今回みたいな完璧な連携を取らせる事も可能だと俺も思う。

ただプラーガその物の場合は『支配種』が近くにいないければ完全な統制は無理だが、遺伝子を組み込んだタイプならその欠点を補う事が出来る。

先のニューヨーク州でのバイオテロでそれは証明されてしまつてるからな」

「『プラーガ』？

あの、ウィルスとは別の物なんですか？」

レオンはプラーガの事を口にし、茜達もやっぱりかと思いい何処か面倒になったと仕草で見せ、ゆかりとあかりはプラーガの存在は聞いた事があるがこれが初事案の為成る程と思いいレオンの言葉一つ一つを漏らさず聞いていた。

対して葵はプラーガと言う存在は聞いた事が無い為疑問符を浮かべながらレオン達に問い掛けていた（なおセイカはラム酒を口にしながら彼女なりに真剣に聞いていた）。「ああ、プラーガとは俺がある事件の際にスペインのとある地方を訪れた際に遭遇した寄生生物で、これが人間や動物の中に入ればその生物を見た目は余り変わらない化物に変えたりするんだ。

最も実験で複数のプラーガを一つの生物の中に組み込めばその限りじゃ無いがな。

話を戻してプラーガのその特性上、宿主を乗っ取る為その宿主の知性を失わせ事無く、また真社会性生物でもある為武器を扱ったり同じプラーガ同士のコミュニケーションを取り、宿主の記憶から寄生前の行動をとるが外敵にはかなり攻撃的な性質を持つ様になり、寄生生物の性質上肉体と思考の主導権はプラーガ側に移る。

その様相は宛らエイリアンの侵略だったさ。

そしてプラーガの中には『従属種』と『支配種』が存在し、支配種は文字通

り他のプラーガを支配する女王蟻や女王蜂に相当する存在であり、これらの存在から従属種を既存のゾンビ等のイレギュラーミュータントやB・O・W・に植え付け、支配種を投与した人間がそれらを操り今まで連携が不可能だったモノに連携を取らせる事も可能になった。

一度は大元は絶つたんだが、プラーガの闇市場流出は止められずアフリカや東スラブ共和国で大規模な改良プラーガによるバイオテロが起きたりしてな、未だ根絶の目処が立たない状況にあるんだ。

更にプラーガの遺伝子を組み込んだウイルスがメキシコやシカゴ、そして大規模的な物をニューヨークで使われてしまい、ゾンビが敵味方を区別して主犯のグリーン・アリアスを襲わなかったりゾンビ同士の連携やエレベーターを使ったりラジコンを操作する若干の知性が残す事を証明させてしまった。

だからこそあのB・O・W・共、いや、T—G e n e s i s にプラーガの遺伝子が組み込まれている可能性が高いと、B・Y・やマキ達は言いたいんだろ？」

レオンは葵に寄生生物プラーガの説明を行い、その寄生生物が蟻や蜂の様な真社会性生物でありコミュニケーションを取り、支配種が存在する事。

此れ自体や遺伝子を組み込んだウイルスには先の防衛戦の際にB・O・W・達が見せた連携を取らせる事が可能な点を説明され、レオンもT—G e n e s i s にプラーガ

の遺伝子が組み込まれている可能性をマキ達に問い掛けると首を縦に振り、羨も恐らくではあるがその可能性が高いと感じ嫌な汗が頬を伝うのを感じ取っていた。

「……B. O. W. の死体を1体ずつ、燃やさずジエネシスで解析する様に残して正解だったな」

B. Y. はハンタータイプ、リッカータイプ、上半身が吹き飛んだネフィリムの死体を1体ずつ念の為解析用に残し、この解析データをワクチン開発に流用しようと考えていたがプラグの存在の可能性があり、昼食後に直様解析し（解析後は二次、三次感染を防ぐ為燃やす手筈）、自身が今回の事件の際に持つて来た情報共有タブレットに入れて来たデータ……今までのウィルスやプラグのデータが詰まった物を極東支部に打診して持ち運んで来ており、昼食を味わいながらも急いで食べて自身は早速解析作業に行動を移していた。

それに伴い戦闘組の全員も食事を終え、B. Y. の後を追った（なお戦闘組は此処まで美味かったカレライリス、そしてレオンに至っては初めて食べたずんだ餅の味に感服し、ずん子達に礼とご馳走様の挨拶をしてから部屋を出ていた）。

B・Y・はジェネシスでB・O・W・の死んだ検体を解析後に燃やし、皆が待つていたパソコン室に入りパソコンを起動、そのままジェネシスとタブレットをUSBケーブルで繋げ、解析データと今までのウィルスやプラーガ等との照合を始めた。

そして3分後、照合結果が出てT―Genesisは矢張り名の通りTウィルスを媒体にされてる事、更にレオン達の予測通りプラーガの支配種、従属種両者の遺伝子が組み込まれていた事、そして……このウィルスはTウィルスと、マキが報告した似た変異の素である『Gウィルス』が遺伝子レベルの融合のみならずウィルス自体も進化し、一つの完成されたウィルスとして存在する事が判明した。

かつてとあるアメリカ統合戦略軍対アンブレラ追撃調査チーム工員と中国安全部所属の工員により滅されたTとGの両者を同じ様に遺伝子レベルで組み合わせた『T＋Gウィルス』が存在したが、このウィルスはそれを更に進化させるべく改良に改良を重ねられ、それを遥かに上回る感染力と変異スピード、プラーガの敵味方識別能力を持つ想定以上の危険な代物である事が判ってしまった。

「……マジかいな……」

「TとGの名前があるから薄々そうじゃ無いかと思ったが、其処にプラーガまで組み込んだ上にウィルス自体すら何段階も進化させた代物だったとはな……俺はTだけじゃ

無くGやプラーガとも引かれ合うらしいな、泣けるぜ…」

「…コイツは本当にヤバイ!!」

この解析データを基に作ったバイオハザードマップでは今は日本の3県1都に留まっているが、ウイルスの進化は今もなお続いているから6日もすればネフィリムも更に変異を引き起こして更なる化け物に成る試算が出ている!!?」

それに伴ってウイルスの感染範囲は更に広がって行き、1ヶ月もしない内に全人類はT—Gene-sisに感染し、地上は全てT—Gene-sisに汚染されてしまう!!?」

バイオテロ発生から1日経過、タイムリミットは後5日しか無い!!?」

HQにこのデータを急いで送信しなきゃ:『ザザツ』如何かな、T—Gene-sisの齎す進化の渦は?」

つ、また通信ジャックか!!?」

T—Gene-sisの最悪の解析結果を目にしたB・YはHQに急ぎこのデータを送り届け、部隊を編成を早めて貰わねばならないと判断してHQに送信開始した瞬間、通信機にタブレット、更に現在データ送信中のパソコンすらジャックされ(但しデータ送信は続いている)、CLOWNのリーダー格が其処に映し出されていた。

「道化め…お前達は矢張り狂ったテロリストだな。」

こんな事をすれば人類は死滅するしか無い事が分かってないらしいな!

お前達が継るスペンサーの理念とやらが実現しない事を理解せず盲信し、この馬鹿げた事をするなんて」

「それは違うさスコット君、このT—G e n e s i sは確かに全ての人類に感染はするだろう。

だが人類が進化の道を歩む為には破滅を伴わない、しかし確かな痛みある道が必要不可欠だ。

そうしてT—G e n e s i sが世界に広がり切る中で、感染した人の中には完全適応し、新人類となりT—G e n e s i sに組み込まれた支配種プラーガの遺伝子を使い、従属種プラーガの遺伝子しか発現しなかった哀れな子達ネフィリムやその他B．O．W．を統率する者達が生まれるだろう。

現に我々C L O W Nは全員このT—G e n e s i sに完全適応した存在なのだからな」

「何だと?」

レオンは道化師達の狂った思想に辟易し、全人類がゾンビ、ネフィリムになり死滅する事を告げ高次への進化などと言う妄想など実現しないだろうと口にしその先も言おうとしたが、C L O W Nのリーダー格はC L O W Nの全員がこのウイルスに完全適応

し、ネフィリム達を操る新人類……スペンサーの掲げた高次への進化を遂げた人間だと告げる。

これにはB・Yも驚きキーボード横のテーブルを思い切り叩いてしまう程の衝撃的な情報であり、つまりCLOWNのメンバーは皆かつてウィルスの力で超人化した男であるアルバート・ウエスカーと等しき存在になっていると言う物であった。

マキや茜、諜報員のゆかりとあかりもウエスカーの資料は漁って存在を知っており、BSAA北米支部の英雄クリス・レッドフィールドが死闘の末に倒したがその過程は壮絶だったとされる程厄介な存在であり、レオンもクレアやクリスからウエスカーの事は聞いている為CLOWN達が如何に凶悪な力を得ているか知っているのだ。

『アルバート・ウエスカーのウロボロス・ウィルスによる人類の選別、モーフィアス・D・デユバルのT+Gウィルスと言う二つのウィルスの融合、ロス・イルミナドスのオスムンド・サドラーのプラーガによる人類の統治、更にプラーガによるB・O・WのコントロールやAウィルスを作り上げたグレン・アリアス。

そしてそもそものGウィルスを作り上げたウィリアム・バーキン博士やTウィルスを作り上げたジェームス・マーカス博士。

彼等が行って来たその全てはスペンサー卿の理想実現に全て必要なファクターだった。

特にモーフィアス、ウエスカー、サドラー、彼等が残した功績はT—Genesisの完成に重要な基盤となり、アリアスのAウイルスと言うプラーガ遺伝子を組み込むと言う我々と同じ着目点を持った事には感心したよ。

しかし、彼等は間違いを犯した、ある意味ではスペンサー卿自身も…スペンサー卿に關しては寿命に縛られてしまった事がきつかけであるから我々は失望しないしその理想は正に今の人類に必要だったと言えよう。

話を戻し彼等の何が失敗だったかと言えば、サドラーとウエスカーは自らが支配者、神になろうとした事、モーフィアスは美に固執し過ぎて己を見失った事、アリアスは一人の死人に囚われていた事、バーキン博士とマーカス博士は研究成果に没入し、それぞれ自身の成果を独り占めしようとしたり権力を欲した為に命を落とした事。

こんな欲に満ちた者達では人類の高次への進化など体現など出来はしない、故に我々が志半ばで死したスペンサー卿の代わりにその理想の実現しようと言うのだよ』

CLOWNのリーダー格はウエスカー達の功績の一つ一つがT—Genesisの完成に結び付く基盤となっていた事、更に彼等が犯した失敗を口にし、その欲を捨てなければスペンサーの理想は体現出来ないとし、そうであるが為に自身らが代わりにその理想を実現させると口にした。

が、どう考えてもこの男の話は矢張り新興宗教のそれであり、特にマキは胡散臭さを通り越して自分達が支配者になりたいだけではとすら考えていた。

「はん、こゝ高説を垂れ流すのは良いけど実際アンタ等も失敗した連中みたく自分が支配者になりたいだけじゃ無いのさ！」

だからT—Gene-sisの完全適応者だつて私達に言つたんだろ！」

『それは違うよBSAA極東支部デルタチーム副隊長、いや、『セルゲイ・ウラジミール』大佐の指揮の下、T—A—L—O—S^{テロ}を作り上げた研究員を血縁者に持つ弦巻マキ君？

我々は確かにT—Gene-sisに完全適応したが、我々以外に完全適応者が現れ、その者が我々を上回る力を持つならその者が支配者に相応しいとすら考えている。

ウエスカーも同じ事を口にしてはいたが、結局自身以外に神になれる者は居ないとすら腹の底では考えていただろう。

だが我々は違う、我々は例えば君達の中でT—Gene-sisに完全適応し我々すら下すなら新人類の頂点に立ち、我々は支配者となりし者に叛逆せん愚か者を処する剣なりし盾と成る意志がある!!？

……しかし、もしも本当に全人類がT—Gene-sisに完全適応しない者しか居なかつた場合、非常手段として我々の中から支配者を選別しなければなら

い、断腸の思いではあるが』

マキの指摘に対しCLOWNのリーダー格は自分達はウエスカーと違い本当に力有る者が現れた瞬間、それこそが高次への進化を遂げた新人類の支配者となるべき存在だと話し、しかもマキの血縁者にT—ALOSに關わつてた者が居た事を把握しており、本当に知らなかつたのはオメガーの正体位だつたと情報収集能力の高さを示唆し、B・Y・の賭けが本当に分の悪い賭けであつた事を暗に示していた。

そしてこの場に居る者の中で完全適応者が現れ、更にCLOWN全員の能力を上回るならそれが支配者となる様に計らい、それに氣に食わない者を排する様になるとすら話し仮面越しで有るので声色で判断するしか無いが、レオンもB・Y・も、自身の触れられたく無い部分をあっさり触れられ頭に血が上つたマキやゆかり達、そして葵や茜もコイツは嘘を吐いていない、本気でそうする様に動くし捨て石になる用意が有ると感じその狂信的なまでのスペンサーの理想への遵守に人間性が感じられず、そうなる様に動く機械か菌車にしか全員感じられなかつた。

『さて、長話は済んだ事だし後10分後に第2ラウンドを開始しよう。

君達が生き残るか、我々のB・O・W・が勝つか。

現在犬型B・O・W・『エンゼル』と『ハンターG』、更に我々が培養槽から生み出したT—Genesisの感染媒体となる中型B・O・W・『グリゴリ』、そしてネ

フィルム達を向かわせている。

ああ、戦力図的に『リッカーG』は今回投入しないで置くよ。

話を戻すが、ウイルス感染したくなくればグリゴリには気を付けると良い、彼等はウイルスを含んだ縫い針程の大きさの針を飛ばして来る。

飛距離は約7メートル、マキ君はコイツに一度遠目で確認したはずだから更なる特徴を伝えると良い。

さて、この針は避けようと思えば避けれるが…ふふ、どうなるかな？

ああ因みに避難している生存者諸君に言い給え、1ヶ所に恐らく避難しているだろうから其処から出ず、君達B・O・Wと戦う勇者が死なない限りは決して襲わないと。

まあ、B・O・Wが居る状況で外に出て逃げ切つてやろうと言う蛮勇を見せるなら別ではあるが、ね』

するとCLOWNのリーダー格の男は第2ラウンドと称し、パソコンのモニターに有る一箇所に纏まって走り出しているB・O・W達の映像を見せ、この時マキは画面端に小さく、しかし昨日のバイオテロ発生時に姿を現した人の形をギリギリ保った巨大な瘤と其処にある眼球が全身の至る所に存在し、そして指から画面の男の言う針を飛ばしてT—G e n e s i sの感染を広げ、バイオハザードを引き起こした張本人たるB・

O・W・の姿を捉え怒りの表情を向ける。

更に矢張りゲーム感覚なのかB・O・W・達は避難している生存者を襲わせず、あくまでレオンや葵達8人としか戦わせず、更にリッカータイプ、リッカーGと呼ばれたそれを今回は送らなかつたり、彼等が敗れ去り死ぬまで生かすとすら言っており、此れすらも声色的に嘘は吐いておらず益々この者達が呆れ果てる様な思考しか持ち合わせて無いとレオン達は思い始めた。

「またゲーム感覚か…つくづくお前達は能天気な暇人だと感じるな。」

そんなにゲームをしたいならプレス●を買えよ「はあ？」

SW●●chでしょ？」「いや●b●xでしょ？」「ゲー●●キュ●●こそ至高」「セ●サ●●ンしろよ」…兎に角TVゲームでもやってろよ」

『ふふ、暇人、ゲームか…確かにそうだろうな。』

神は6日で世界を創り上げたときれる。

だから我々は新たなる新人類、神となるべき人を6日で創り上げようと言うのだ。

これはそれまでの時間を楽しむ余興でもあり儀式なのさ…では、戦いに赴く諸君、健闘を祈るよ、ふふふ『ブツン』

レオンは皮肉混じりに暇人でゲームでもするならTVゲームでもしたらどうなのか

と言い（その際茜達の間でゲームハード論争が起きたが）相変わらずの口癖と、声色的にその内にはゲーム感覚で人の命を奪うCLOWN全員に怒りを抱いている事は誰の目から見ても分かり、実際葵達も同じ気持ちだった。

そしてその皮肉に対してCLOWNのリーダー格は暇人やゲームである事を否定せず、其処から神は6日で世界を創り上げたと言う聖書の話を用いし、そして自分達は同じく6日で世界を統治する新人類、神を創り上げると言い、このレオン達に対する挑戦は余興と儀式を兼ねているとして、本当に自身等を箱庭ゲームのゲームマスターの様に振る舞いレオン達の神経を余計に逆撫でさせた。

そして健闘を祈ると言った瞬間パソコン画面は元に戻り其処にはデータ送信完了が表示され、同時に10:00からのカウントダウンの画面も表示され、本当に何から何までゲーム感覚であるテロリスト達に全員の怒りのボルテージは上がり続けていた。

「……あいつ等絶対地獄見せたるわ……」

「そうだな……先ずは武器を整えてまたイタコやキリタン、それとズンダモン達生存者をあの部屋に避難させるぞ。」

それからマキ、グリゴリと言うB・O・Wの特徴を「全身に瘤とその瘤に眼球が生えたギリギリ人の形を保ってる中型B・O・W」、指先から油断しなければ避けられる程度の速さの針を飛ばして来て、その針は壁に刺さった所を見るにウィルス混じり

の体液が染み込んでるんだと思う。

だから絶対避ける様にして、指で受け止めたりしない様に、感染する恐れがあるから。

後其処まで足速く無い、大体ゾンビよりちよつと早い位」…それ位分かれれば十分さ、行くぞ皆。

…勇者か、ならお前達は人々の平和を乱す魔王だな」

茜の怒りの声にレオンも賛同しつつマキからグリゴリの特徴を伝え聞き、十分に聞き終えた瞬間センチネルナインのスライドを引き、皮肉を口にしながら部屋の外へと行き武器保管場所にもなっている1-Aに向かい出す。

B・Y・はジェネシスとUSBケーブルを外しパソコンの電源を落として走りながらH・Qに連絡を入れ、送ったデータから予定通りでは間に合わない為部隊の編成を急ぐ様に伝え(レオンもハニガンに逐次情報を伝えている)、葵は武器を持つてから生存者達に避難部屋に行く様に促し、ゆかり達は狙撃と監視をとそれぞれがそれぞれの役割を担いながら急ぎ迎撃準備を整わせ、CLOWN達の言う馬鹿げたゲームを終わらせようと奔走するのであった。

EP IX『集結し始める者達』

AM9:15 (日本時間PM15:15)、イラク某所の廃墟の街、否、バイオテロが発生し住民達が一斉避難して廃墟と化した街にて。

穴が空いてしまった民家の屋根から中にいる1人の男に向かつて現在日本で起きている大規模バイオテロ事件において確認されたリツカーGの原種、リツカーが飛び掛かり首を切り裂こうとする。

しかし、その男はリツカーの行動を完全に予測していた為最小限の動きで避けた後その筋肉隆々の足で地面に着地寸前のリツカーの背中を踏み付けて地面に叩き付け、更に手に持ったBSAA制式採用アサルトライフルを脳が剥き出しになった頭に向かつてフルオートで発砲、頭を風穴だらけにした挙句吹き飛ばして完全にリツカーを沈黙させる。

更にリツカーがもう1体やって来て再び飛び掛かってきたが今度はその丸太の様に太く、鍛え抜かれた筋肉の塊である右腕でカウンター気味にアッパーを喰らわせ、リツカーは余りのパワーに地面に仰向けに倒れた後ビクビクと震えて動けなくなり、そして男はその隙は逃さずリツカーに対し止めめのフルオートで放たれる5・56×45mm

NATO弾を叩き込み短時間でリックカー2体の活動を完全に沈黙させてしまった。

この鍛え抜かれた筋肉隆々の男こそ、始まりのバイオハザード事件たるラクーンシティのアークレイ山脈の洋館事件、アンブレラ私有の監獄島ロックフォード島や南極基地に於けるバイオハザード、及び『T-V e r o n i c a』の脅威からレオンの友人にしてこの男の妹『クレア・レッドフィールド』を救い出し、更にラクーン警察のエリート部隊『S. T. A. R. S.』の同僚にして現在もB S A Aに同じく所属し、共に創立メンバー『オリジナル・イレヴン』の称号を持った『ジル・バレンタイン』と共に『テラ・グリアパニック』と言う大規模バイオテロ事件の真相を『クイーン・ゼノビア事件』で暴き、そしてアフリカのプラীগ、『ウロボロス・ウィルス』を使ったバイオテロから世界を救うと同時にウィルスの力で超人化した因縁の敵であり首謀者のアルバート・ウエスカーに引導を渡し、1年前の中国での大規模バイオテロ事件でも活躍し、2週間前のアリアス事件をレオンと共に解決に導いたB S A A北米支部が誇る英雄『クリス・レッドフィールド』その人である。

その歴戦の勇士たる彼に憧れB S A Aに入隊する者は少なくなく、彼自身も多くの物を背負い、自らが率いているアルファチームは家族であり友人である、必ず生きてバイオテロ事件から帰投せよと部下に命令を下し、2014現在ではオリジナル・イレヴンの地位は既に捨て去り41歳を迎えてもなお鍛え抜かれた筋肉は衰えず部下達も生き残

る様に鍛え上げ、全てのB・O・W・やウィルスウィルスをレオンとはまた違う形ではあるがこの世から消し去るべく日夜戦い抜く為である。

そして今日この日もリツカーを使い、更にプラーガで従えてバイオテロを引き起こした者に引導を渡し、残ったリツカーを追い込み獵の如く掃討する作戦を展開中であり、そしてそれがたった今終わった瞬間であつた。

『ザザツ』隊長、此方B地区です。

残ったB・O・W・の掃討を完了しました、此方の人的被害は0です』

「此方アルファ1、D地区のB・O・W・も殲滅完了した、全員無事だな！ 『ザザツ』はっ!!?」

よし、現時刻を以て作戦は終了する！

残りはバイオハザード沈静化確認部隊に引き継ぎ帰投するぞ!!? 『了解!!?』

……ふう、確か日本ではマキ・ツルマキやB・Y・、レオン達がバイオテロに巻き込まれたと聞いた。

彼等は無事だろうか?

……いや、レオンやあの蘭祥ランシャンでのバイオテロ事件を初任務で生き延び、ニューヨークで

のバイオテロでも協力してくれた彼等なら無事な筈だ、ならば何時でも救助に動ける様に準備は怠るべきでは無いな」

通信機から部下全員の無事を確認した所で作戦終了の命を下し、全員に帰投命令を出してクリスもその場から去り始める。

が、この任務直前にH Qから日本で大規模バイオテロが発生し、マキヤとある組織を捜査していたと言うレオンとB・Y・がそれに巻き込まれたと言う報告を聞いていた。

が、彼等なら無事であると信じこの任務を焦らず、しかし着実に1秒でも早く解決する様に行動と命令を下した結果、想定された作戦終了時間よりも40分程時間短縮に成功していた。

そして部下を全員確認し、引き継ぎ部隊に後を任せた後最後にへりに乗り込み、隊長席に座りアルファチームを乗せたオスプレイが2機イラクの地を飛び去って行った。

「此方アルファ1、バイオテロ鎮圧作戦を終了させた。

此れより出向地であるB S A A極東支部へと帰投中である物とする、アルファ1オーバー」

『ザザツ』此方H Q、北米支部アルファチームの作戦終了を確認した。

流石はクリス・レッドフィールドと言った所だ、想定よりも大分早くバイオテロを沈黙させたな。

ではアルファチームは極東支部に帰投後、そのまま装備を整えて次の任務に当たって欲しい」

クリスはコールネームアルファーとしてH Qに連絡を入れ、作戦終了を報告して出向中であるB S A A極東支部に帰投中である事を伝え、それを聞いたH Qはクリスと彼が率いるアルファチームの目ざましい活躍に舌を巻き流石歴戦の勇士とすら感じていた。

しかしH Qは帰投後に装備を整えて直ぐ様次の任務に当たる様に命令を下し、アルファチームの部下達は何事かとクリスの方を見やり、クリスは矢張り来たかと想定していた事を直視し、H Qに任務の詳細を尋ね始めた。

「了解、B S A A極東支部に帰投後に装備を整えて次の任務に当たる。

その詳細を報告されたし」

『ザザツ』H Qよりアルファチームへ、現在作戦地点である日本では首都東京を含めた3県1都に於いて大規模なバイオテロが発生している。

アルファチームは始めに民間人達の救出、次にこの事件の首謀組織C L O W NとB・O・Wの鎮圧を任せたい。

詳細はこのまま通信を開きながらアルファチーム全隊員の情報共有タブレットに日本でバイオテロに巻き込まれながらもデータを送り続けている極東支部デルタチームのデルター1、及びデルタ2とアメリカ諜報機関D S Oのレオン・S・ケネディエージェント、そして現地協力者、更に日本に先行していたA・B・Fのオメガ小隊長オメガ1が得た全てのデータを共有する」

クリス達アルファチームはレオン、マキ達の救出の救出と首謀組織CLOWNと言う者達とB・O・W・鎮圧作戦を受理し、全員一斉に（パイロットは運転席前に付けてある）情報共有タブレットから情報を共有し始める。

其処には5日前に首謀組織CLOWNがアメリカ政府に宣戦布告、日本政府には脅迫声明を出した事、南極のとある基地に於いてA・B・F・が新型ウィルスT-Gene-sisによる性能実験により複数の小隊に被害を負った事、レオンとB・Y・が代表してCLOWNのアジトを、CLOWNが設けたルールの抜け穴を使いA・B・F・オメガ1を観光客に紛れ込ませ、3人で潜伏先を洗い残りは東京の数カ所になったがバイオテロ阻止に失敗した事、別任務中だったデルタ2、マキがバイオテロに巻き込まれ現地協力者やオメガ1、合流したレオン達と共に東京都練馬区にあるROICE学園に生存者（自分達4名は含まない）41名と籠城中である事、T-Gene-sisはTウィルスやGウィルスを融合させ、プラーガ遺伝子も混ぜ込んだ上に前例のウィルスと比べても比較にならない進化を遂げた代物で、今なおも進化、変異を繰り返した後5日もすればこのウィルスの封じ込めは不可能となり地球全体が一気にT-Gene-sisに汚染される事、T-Gene-sis由来のゾンビの適切な処理法とネフィリム、グリゴリ含む複数の新型B・O・W・のデータ、そしてCLOWNはウエスカーの様にT-Gene-sisに完全適応した旧アンブレラ、特に総帥だったオズウェル・E・スペンサーの

理想である人類の高次への進化を遂行の為にこのバイオテロを引き起こした旧アンブレラの意志を継ぐ者等々、クリスを含めたアルファチーム全員を驚愕させる内容が其処にはあった。

「アンブレラ……スペンサーの意志を継ぐ者？」

人類の高次への進化と現人類への宣戦布告、そしてT—G e n e s i s によるバイオテロでその実現だと……巫山戯てる!!？」

『ザザツ』ああ、アルファ1、奴等は狂つてる。

そしてこれを阻止するには極東支部のみならず他の支部や欧州本部からも救助隊や鎮圧隊が編成され日本に向かっている。

更にB S A A 欧州本部や日本政府、アメリカ政府の3者は事態を重く見た為A・B・F・にもバイオテロ鎮圧依頼をオーダーした。

B S A A はあの準テロリスト達と因縁があるが、矢張りバイオテロ根絶と言う根底にある思想は共通している為この際は遺恨を捨てて本格的な共同作戦を行う事が決定された。

そしてアルファチームには敵の親玉を潰す役割を担って欲しい………白状すれば、我々極東支部のみではこの事態、そして仲間であり我々の中心であるマキ・ツルマキやB・Y・を救う事が出来ない。

だからクリス・レッドフィールド、数多くの事件を解決し、あのアルバート・ウエスカーを倒した英雄である貴方と、その部下達に力を貸して欲しい…!!?」

現在デルタチームも全員貴方達が来るのを待っている、だから……!!?」

クリスはスペンサーの理想を叶えると言う狂信者達に怒りを露わにして膝を叩き、極東支部HQもまたCLOWNが狂ってる事をハッキリと言い他の支部や欧州本部もこの事態解決に乗り出している事を伝え、その上でクリス達にウイルスに完全適応したこの狂った者達を潰す役割を担わせようと告げていた。

更に事態の重さから日本政府、アメリカ政府、BSAA欧州本部はA・B・F.に協力依頼をオーダーし、初の本格的共同作戦を行う事も告げていた。

しかしクリス以外のアルファチームの部下達は新型B・O・W.の戦闘力に加えてあのウエスカーの様な存在が複数人居ると言う事、更にウイルスの脅威的な変異スピードに恐怖すら感じ幾ら自分達やA・B・F.が頑張ってもこれは無理なのではと不安からざわつき始めていた。

が、極東支部HQはマキ達の通信では表に出さなかった自身らのみではマキ達を救う事の出来ない無力さに対する怒りと極東支部の現在のツートップであり心の拠り所となっているマキ達を失ってしまうかもしれないと言う絶望感に啜り泣きながらクリス達アルファチームの助力を乞い願っていた。

それを聞いたクリスの部下達は不安からのざわつきを次第に止め、戦士の顔付きで互いを見やりながらクリスに視線を再び向け『自分達は何時でも行ける、命令を』と言う無言の肯定をクリスの背中に感じさせていた。

当然ながらクリスはレオンやマキ達見捨てる選択など最初から無く、またH Qが漏らした本心を聞き彼等の為にも、そしてアンブレラの意志を継ぐ者によつて無意味に流される血と涙をこれ以上落とさせない為、『英雄』であるクリス・レッドフィールドは決断を下す。

「…ああ、俺達に任せろ。

必ず民間人やマキ達を救い出した上でこの巫山戯たバイオテロを鎮圧してやる。

だからH Q、その啜り泣きはもうしなくて良い、俺達は必ずやり遂げて見せる！」

『ザザツ』……ありがとうクリス……情け無い姿を見せて悪かった。

先程も言った通り此方ではデルタチームの全員がアルファチームの到着を待っている。

そちらのドレスが仕立て上がったら直ぐ様デルタチームと共に東京都練馬区のR O I C E 学園に降下、そのまま輸送機は民間人を救助し搭乗させ次第離脱、そのままA・B・F・のオメガ小隊やレオン・S・ケネディ、現地の日本国エージェントと共に更なる民間人の救助とC L O W N 達とB・O・W・の鎮圧に乗り出してくれ。

因みに欧州本部はCLOWN達の逮捕は不可能だと判断し、彼等自身もまたB・O・Wの1体だと定め殺害許可が降りている。

残りの作戦の順は極東支部に帰投し日本へ向かい次第に伝える、H Qオーバー！」

「以上だ、俺達は此れより極東支部で装備を整え次第日本へと向かう！」

この任務はこれまで以上に危険な任務だ、だが俺達全員が力を合わせれば仲間を、家族を守る！

だからこそアルファチーム隊長として全員に命じる、作戦を無事成功させ生きて俺達を待つ者達の下に戻るぞ!!? 『了解!!?』

うむ、気合は十分だな。

ならば言う事は無い、このまま任務を受理するぞ！

……レオン、マキ、B・Y；待っている、必ず助け出してやるからな……！」

クリスはアルファチームとして任務を受ける事、H Qにもう泣かないで良い事を告げた。

それに伴い極東支部H Qも元の精神状態に戻り、作戦の大雑把な概要を伝え、詳細な部分は帰投後に極東支部の精鋭部隊デルタチームと共に向かう際に知らせる事を伝える。通信を切る。

そしてクリスはアルファチーム隊長として部下達全員に鼓舞し、部下達全員は通信機

越しからも期待通りの返答をして覚悟を決め極東支部に帰投するのを待つだけになった。

こうしてクリスマス達アルファチームは日本へ向かう事が決まり、クリスマス個人もレオン達を必ず助け出すと独白しBSAA極東支部に向かう機体に揺られながら決意を胸に日本に向かう時を待った。

フランス、AM8:i5（日本時間PM15:i5）、クリスマス達がBSAA極東支部に帰投してると同時刻、評判の良いカフェテリアでB・O・W.の討伐等の依頼を引き受ける傭兵である青年『ジェイク・ミューラー』はフレンチトーストとコーヒーを食べ優雅なブレックファーストを楽しんでいた。

が、その足元にはフランスの新聞紙が発行した『日本での大規模バイオテロ発生、政府は緊急事態宣言発令』及び『BSAA極東支部の初動部隊現地に着任』と言う記事が

あり、その記事の写真の中には自身が1年前、中国蘭祥^{ランシャン}で出会ったあのラクーンシテイから生きて帰り、自分やその時同行したパートナーに協力、救出をクリスに依頼した男であるレオンが映っており、関係の無い他人では無い為その動向を知るべくインタネット^{インターネット}で日本のスレッド板(英語翻訳)を読み漁り少しでも情報を集めようとしており、その大体がガセネタだったりしたがあるスレッドにBSAAとA・B・F・隊員のオメガ1が来たと言うとある学園に籠った者のスレを見つけ、更にそのスレの続きには『689：一緒に籠ってるBSAA隊員の隊長とラクーンシテイ帰りの超イケメンキタ——(。▽。)—!!【続々々・避難ナウ】と言う投稿や『817：B・O・W・襲撃ヤベエ【避難ナウの人】』と『856：BSAA隊員2人とオメガ1にラクーンシテイ帰りの超イケメンTUEEEEEEEEE!!?【続・避難ナウの人】』と言う投稿を見つけ取り敢えずレオンは生きていて、傭兵達の間では死神とされて関わらない様にとされる準テロリスト指定の反バイオテロ組織A・B・F・の中でもボスの『アルファ』と共に素性、経歴一切不明で体型から16、7歳としか分からないツートップ部隊の隊長オメガ1とBSAA隊員2名と現地協力者と言う奇妙な共闘下で生き残っている事を確認し、フレンチトリストを頼張っていた。

「流石ラクーンの英雄様だ、幾らバイオテロに巻き込まれても死にはしないか。」

しかしA・B・F・、しかもオメガ1と協力してやがるのか……アレは死神の称号に

相応しい民間人にのみ寛容だがB・O・W. や自分らの作戦の邪魔になる奴はB S A Aや他の傭兵だろうが構わず爆撃して来やがるヤベエ女だ。

さて、如何した物かな「あ、見つけたわジェイク!!?」ん?

お前、『シエリー』じゃねえか!

何でアメリカのエージェントが此処に居やがるんだ?」

更にちよつとだけ甘めのコーヒー(店1番の味と評判)を飲みながらオメガ1の死神つぷり……2ヶ月以上前にアフリカの地でB・O・W. の退治と依頼者の身内の救助をしていた時偶然B S A A東部アフリカ支部や極東支部の部隊、そしてA・B・F. オメガ小隊と遭遇し、依頼者の身内はオメガ1が救出していたらしく安全圏に避難させた後再び戦場に戻った際にB S A Aごと絨毯爆撃に晒され命辛々生き残りその時にA・B・F.、特にオメガ1は命令があれば効率良くB・O・W. の殲滅が出来るなら自分達以外の戦場に居る戦闘員も纏めて吹き飛ばすヤベエ奴と改めて思い知り、更に個人の戦闘力もB S A A隊員のそれとは余りに練度が違い過ぎる為2度と関わり合いを持たない様にしようと心に決めていた事を振り返っていた。

そして次の自分の行動は如何するか考えていた所、約2年前にイドニア共和国で出会い、そして1年前の中国のバイオテロを共に生き延びたその時のパートナーであり、アメリカD S Oのエージェント『シエリー・バーキン』が其処に居り、何故フランスに居

るのか尋ねた。

「アメリカ政府とレオンからの依頼で貴方を探していたのよ！」

お願い、一緒に来て！

今日日本で T—G e n e s i s と言うワクチンの無い新型ウイルスによるバイオテロが発生していて、貴方の力が必要なのよ!!？」

「あー、レオンの奴も巻き込まれた事件だな。」

ほら、写真写りが良くて新聞でも映えてるぞ。

それに俺の力つてアルバート・ウエスカアの息子として受け継いだ凡ゆるウイルスに耐性を持ち、適応する血の事だろ？

さて、またアメリカに良い様に使われて献血募金をする事になるか……如何するかな？」

如何やらシエリーはジェイクの血、アルバート・ウエスカアの息子である彼が父から完璧に受け継いだ特性からこの日本で使われている新型ウイルスに対するワクチンの精製を手伝う様に写真写りが良いレオンやアメリカ政府から依頼されたらしく、自身がアルバート・ウエスカアの息子だと知るきっかけとなった『イドニア紛争』、及びアメリカ・中国同時多発バイオテロ事件と似た様な事になり、ジェイクは冗談混じりで如何するかと曖昧な返事を取った。

するとシエリーは相席に座りジェイクの目を真つ直ぐ見ながら自身の中にあるこの事件に対する決意を話し始めた。

「ジェイク聞いて。」

私は今、自分の過去の因縁がこの事件に絡んでしまっているのよ」

「過去の因縁？」

俺の親父がアルバート・ウエスカードだったのと同じ様にか？」

「ええ、私は前に話したよね？」

私の両親はアンブレラのウィルスの開発者で、その人が作ったウィルスが私の中に残ってて色々検査されたって。

今回の事件で使われたT—Genesisは、その両親が作ってしまったウィルス、Gウィルスも使って作られた悪魔のウィルスなのよ！

そして今、それを使った人達は人類の高次への進化なんて言う馬鹿げた盲信からこの事件を起こし、そしてT—Genesisは今この時もGウィルス由来の進化とも取れる異常な変異を繰り返していて、後5日もすればT—Genesisは誰も手が付けられない程に変異して1ヶ月もしない内に全世界に広まって罪の無い全ての人達が死んでしまうのよ！

今レオンが色んな人の手を借りて戦ってるけど、とても彼や今日本に向かう手筈に

なってるクリス達だけでは止め切れない、だから此処に来たのよ、貴方の力を借りる為に!!?

お願い、アメリカ政府に使われたくないなら私の過去の因縁を断ち切る為に力を貸して、ジェイク!!?」

ジェイクはシェリーの決意：Gウイルスを作った両親やそのGを使って作られたT—Genesisと言う悪魔のウイルスが齎す最悪のシナリオを止める為に此処に来た事、自身がウエスカーの息子だと言う因縁と同じくパーキン夫妻の娘と言う因縁が絡んだこの事件の解決にはレオンやクリス達だけでは無理だと断言し、過去のアメリカ・中国同時多発バイオテロの首謀者の1人であるデイレック・C・シモンズに利用された時と同じ様な事になるのが嫌なら自分の因縁を断つ事に力を貸して欲しいと強い決意が感じられる言葉を投げ掛けられた。

その言葉を聞いたジェイクは1年前の自分と同じ様な状況、特に両親が作り上げてしまったウイルスが関わってしまったている為ある意味自分以上に過去からの因縁が巡って来たのだと感じ、少し思い耽る仕事を感じながらシェリーに視線を戻し口を開く。

「……良いぜ、その願いを聞いてやるよ」

「!」

ありがとうジェイク!!?

それで依頼料の事なんだけど「要らない」えっ?」

「別に金は要らない、今回はお前の個人的な願いから動くんだから金なんか取らない。

まあ、それでも何か払いたいわって言うなら……お前が知ってる良い店の一番良い料理を俺に食べさせな」

「……OK、とっておきのお店を紹介してあげるわ!」

ジェイクはシエリーの願いを聞き入れる選択をし、更にシエリーの個人的な願いを聞き入れるだけである為金の請求はしなかった。

しかしシエリーは真面目なので何らかの対価を要求されれば上司に交渉して払って貰ったり、また借りも返さないと気が済まない事を1年前の事件を通して知っている為条件としてシエリーが知っている一番良い店の一番良い料理を奢って貰う事に対価として要求し、シエリーもそれに応じてとっておきの店を紹介する様に約束する。

それを聞いたジェイクはカフェテリアでのブラックファーストを終え、支払いを済ませながら新聞をゴミ箱に捨てアメリカがチャーターした機体へと向かった。

自分が2度と関わり合いたくはないと思つたオメガ1が居るが、シエリーの因縁が待つ日本へと降り立つ為に。

日本時間PM15:30。

某国の軍事施設にて動きがあった。

此処は反バイオテロ組織A・B・Fの本部であり旧アンブレラが使っていた軍事施設の1つである。

現在日本政府、アメリカ政府、更には自分達が絨毯爆撃等を行い被害を齎しているB S A Aの欧州本部から日本で起きた大規模バイオテロ事件解決のオーダーを受け、隊員達が慌ただしく装備を整えて出撃準備をしており、特に旧アンブレラが南極に持っていたアシフォード家の基地とはまた別の基地の調査中に被害を受けたベータ小队と隊長と数名の部下を残し全員が死亡、アンデッド化し、仲間を撃たざるを得なくなつたシートタ小队の生き残りや、隊長が日本へと観光客に扮し潜入し、現在バイオテロで現地協力者やアメリカエージェント、B S A A隊員等の協力で何とか生き延びている茜率いるオメガ小队の隊員達が気合を入れまくったりC L O W Nへの復讐の炎を燃やして居る者が集っていた。

すると隊員達の背後の自動ドアが開き、全員が後ろを見やると其処には『アルファ』……A・B・F・で唯一部下を持たず、その場に応じて各小隊の中に入り指揮を取り、そして彼だけは『昔から地獄の様な状況でも必ず生きて帰ってくる』武勇伝……否、彼の実力から裏打ちされた結果が彼の生きた歴史に単に刻まれただけであるそれを、人はこぞつて1人生き延びて任務を達成する事から『死神』と称し、彼に狙われた者は生きて帰らないとすら言われるA・B・F・のオメガ1とツートップの存在である（逆を言えばそんなアルファと並ぶオメガ1が異常存在とも言える）。

そのアルファが皆の前に既に昔から愛用しなお劣化や傷が付いてないガスマスクと迷彩服、新品同様だが同じく昔からの愛用ヘルメットと防弾チョッキ等のフル装備をして現れ、全員敬礼してアルファを迎え入れた。

「全員準備は万端だな？」

これより我々A・B・F・は総力を上げて日本へと赴き、CLOWN達B・O・W・共を掃討する作戦を執る。

この戦場にはB S A Aも来る事になるがこれまでの様な偶然居合わせた任務の邪魔をしてくる連中では無く、共にCLOWNと言う共通の敵、旧アンブレラの意志を継ぐと抜かす愚者達を屠る背中を預ける者達だ。

これまでは絨毯爆撃等を行いB・O・W・ごと殲滅する事が最効率の選択だった為

命じたが今度は違う、ただ悪戯に『味方』の戦力を減らす愚策だと肝に銘じよ。

そして我々の理念通り民間人の救助とB・O・W・抹殺を行いつつ、己の運命を自ら
の手で切り開け、理解したな？」

『サー・イエツサー!!?』

アルファは今作戦でのB S A Aの立ち位置を明確化し、以前の様にB・O・W・抹殺
任務の際に邪魔になる様に部隊を展開し実際射線に立ったりなどして自分達の任務の
障害となつてた側面があり、それでは1秒でも早くB・O・W・抹殺を行えない為止む
を得ず絨毯爆撃等による鎮圧作戦を行なつたりするなど両者の溝が埋まる事の無い事
象が戦場で発生していたのだが、今回は完全な味方である為向こうも過去の遺恨は表に
出さずC L O W Nの抹殺に協力すると言つて来た為B S A Aも戦力の一つとし、その戦
力を維持しつつA・B・F・の理念を貫き、アルファの信条でもある戦場では運命は自
ら切り開く事を肝に銘じさせる。

そうしてアルファが見ている中でシータ小隊は更なる復讐の炎を燃やしたりし、更に
オメガ小隊の一員のオメガ3、オメガ2はB S A Aと漸く本当の意味で共に戦える事に
安堵の表情を見せながら口を開いた。

「ふう、B S A Aと本格的な共同作戦か……ジルが今の俺を見たら呆れるか、怒るかな
？」

「俺もレベツカに顔合わせが出来ないと感じていた……彼女はアドバイザーとは言え仲間のB S A A隊員をこの手で殺す真似をしてしまった……かつての過ちを繰り返す俺に嫌気を感じていたさ、お前みたいな」

オメガ3とオメガ2……バイオハザードが起きたラクーンシティでアンブレラ所属の傭兵部隊『U. B. C. S.』として民間人救助等の為に戦い、最後はラクーンシティが核で焼き払われる直前に死の街からクリスの仲間であるジルと共に脱出した本名『カールロス・オリヴェイラ』と、洋館事件の発端となった『黄道特急事件』でとある無実の罪でその近辺を護送車で運ばれてた途中でバイオハザードに巻き込まれ、近くに止まっていた黄道特急列車にて偶然出会ったクリス、ジルと同じくラクーン市警のエリート部隊S. T. A. R. S. のブラヴォーチーム（クリス、ジルはアルファチーム）の隊員にしてS. T. A. R. S. メンバーの中で最年少だった女性『レベツカ・チェンバーズ』と共にその事件の元凶を斃し、レベツカの計らいにより報告資料で死亡扱いにして貰いその後は行方知れずとなっていた元海兵隊少尉『ピリー・コーエン』は、かつてそれぞれが共に戦ったジルやレベツカが隊員を務めたり、アドバイザーを請け負う組織の人間に銃口を向けてしまう行いに嫌気が刺しており、B. O. W. 憎しで此処まで戦えたがB S A Aが国連公認組織となり、その規模を巨大させた弊害により彼等と戦場で鉢合わせる事が増えてしまい、特に2012年以降はバイオテロが蔓延化した為にそれ

まで相手していた規模とは比べ物にならない数のB・O・W・と戦う事になり、その関係でB S A Aといざこざが絶えず遂には絨毯爆撃等を行いB S A A隊員すら巻き込む作戦すら増えて来てしまい、終わりの見えない戦いの両者の板挟みになり常人なら精神的に耐えられず銃を捨ててしまおうだろう。

しかし、それでも2人が銃を捨てなかつた理由は3つある。

1つはアンブレラが齎したB・O・W・やウィルスを根絶する為、2つ目は先の絨毯爆撃等の作戦により命を落としたB S A A隊員やアンブレラ関連の事件で命を落とした者達の十字架を背負っている為。

そして3つ目は……彼等は『絨毯爆撃等の作戦に反発し、任務放棄し掛けた』自分達の代わりにそれらの作戦を、自分達の分までやったオメガ1、茜を裏切ってしまう為である。

そう、ビリーとカルロスは決してB S A A隊員を直接手に掛けてはいないのだ。

しかし、任務放棄がバレてしまうと如何なる理由があつてもバイオテロとの戦いを戦場で放棄した扱いになる為、正式の除隊以外で銃を捨ててしまうと重い罰則を課されてしまうが故に茜が彼等の分までそれらの作戦を行い、任務放棄はしていない様に装っていたのだ（無論オメガ小隊全員がこの隠し事の共犯である）。

その為今此処で銃を捨て、戦う事を止めてしまえばその命を奪ってしまう結果になつ

たBSAA隊員達やかつての仲間達やその他全ての十字架も捨てる事になり、またビリーはレベツカ、カルロスはジル、そして自分達の罪まで被った冷徹ながらも優しい琴葉茜と言う矛盾に満ちた自分達より遥かに若く儂い少女にしてオメガ小隊の隊長すら裏切ってしまうからに他ならなかったからだ。

だからこそ2人は前に進んで来たのだ、茜の被った罪を本来の自分達の方へと戻す為に。

そしてそれはこれからも変わらないだろう、彼等が戦いを捨てない限り。

「さて、感傷に浸るのは終わりにしましょうかビリー、いやオメガ2」

「ああそうだな、オメガ3。」

アカネ：オメガ1や民間人達を救助しに行くぞ」

そして2人はそれぞれのコールネームで呼び合った後、マスクと暗子ゴーグル、ヘルメットを被りオメガ小隊としての仮面を被りロツカーから振り返り一步前に進もうとした。

所が其処に未だアルファが居り、このパターンはアルファがオメガ小隊の指揮をすると言う物だと2人は悟り、無言で首を縦に振りアルファの指揮下に入る。

そしてビリーとカルロスとアルファ……嘗てアンブレラ社の諜報部隊『U・S・S』アルファチームに所属し、アンブレラ社崩壊にすら立ち合いその後は死地を求め、しか

し嘗てのアンブレラ社の職員達が集まり旧アンブレラの負の遺産の根絶を目的とした贖罪の企業『PMCアンブレラ』にその素性から合流する事は出来ず、しかしならば己の運命を切り開く為彼等とは違う自分なりのやり方で旧アンブレラの遺産の根絶を行うと決めA・B・F.を立ち上げた男、実はビリー達の隠し事にも気付いているが茜の思いを汲み2人に対して処罰を与えなかつた人間性と冷徹性が遺伝子螺旋の様に上手く組み上がっている死神『HUNK』もまたそれぞれの贖罪と十字架を背負い、死地と化した日本の首都東京へと向かうのであった。

日本時間PM17:56、東京湾にて海から防水バッグを片手に持った水中スーツを着込んだ女性が地上に上がって来る。

その女性は近くの洋服店に入ると誰も居なくなつた店の入り口付近で水中スーツを脱ぎ捨て裸体を晒し、その容姿はアジア系の美人であり10人中10人が美女と口を揃えて言う程整つた容姿をしていた。

そんな女性は防水バッグの中から地上用の着替えである下着と赤と黒を基調としたチャイナドレスを着こなし、更にハイヒールを履きハンドガンとクロスボウ、そして愛用のフックショットを装備して通信タブレットを開き、既に日本に長い事ある任務に就いている『女性』からの連絡を待ち、丁度タブレットを開いてから5秒の辺りで通信が入りボイスオンリーの会話を始める。

「時間にキツチリなのは良い事ね貴女。

『彼』みたいなせつちちな奴じゃなければ時間にルーズと言う訳でもない、しかもしつこい訳でも無いし私からしてみれば今回のオーダーのパートナーには相応しいわ」

『ああはい、ありがとう。』

後私の前で『奴』の話は止めて欲しいかな？

奴は私にとってみればただの汚点だし、貴女からしてみてもつまらない男だつたでしょう？

そんな面白く無い奴の話なんか捨てといて本題に入るわよ。

私は今T—G e n e s i s のサンプルをゾンビやら何やらから回収して、更に私の任

務の監視対象だった『彼女』のサンプルも十分確保出来た。

その上柵からぼた餅が出て来てもう1個のサンプルの入手が出来たわ……かなり苦しい理由だったから怪しまれたかも知れないから、なるべく早く合流してサンプルを渡したいわ。

まあ貴女が観光を楽しみたいならその限りじゃないけど』

2人の女性は通信越しにビジネススライクな話到他愛の無い会話を混ぜてこれからこの地獄の街会う人間とは思えない様な楽しさを滲ませる会話運びをしており、しかしこれも互いの機嫌を損ねない為の打算的な物だところの2人の女性は通信越しに理解しており、こう言った見返りをキツチリ用意しつつオンオフを切り替えるタイプこそ互いがビジネスパートナーとして信頼出来るとすらお互いに考えていた。

『じゃあある程度楽しみながら此処迄おいでね、ただB S A AやA・B・Fがそろそろ動き出しそうだからそうなたら合流が面倒臭くなるから気を付けてね』

「ふふ、貴女の『力』を以てすればそんなの火の粉を払う様に簡単に巻けるじゃない。

まあ良いわ、タイミングを見計らって合流してあげるわ。

それまでそつちに居る『お友達』に目を付けられて捕まらない様にね、助けるのが面倒になるから『はいはい、じゃあ次は直接対面で話そうね』『P i』……ふふ、キツチリサンプルを集めるだけじゃ無く追加の手見上げまで用意するなんてあの碌でなし

な『親』と違ってキツチリしてて良い子ね。

しかも身に余る欲をかかない点も『親』とは大違い、一体どんな風にアレの遺伝子からこんな子が産まれるのかしらね」

そうしてビジネス話を終え互いに面倒になる前に合流し合う事を肝に命じて置きながら通信を切り、女性性は記憶にあるつまらなかつた『男』からこんなに自分の妹分に欲しくなる位優秀で分を弁えた子が生まれるなんて信じられないとし、これから面白くなりそうと感じながら通信タブレットを閉じ……ようとした所で通信してきた女性が次いでに送って来た画像を見て感慨に耽っていた。

「……ふう、本当に私が行く所にはいつも貴方が居るわね。

本当にこの世には運命の赤い糸って物が存在するのかしらね。

ねえ、レオン……」

タブレットに映った画像……レオンが東京で戦う場面を捉えた写真画像を見ながらとある組織のスパイであるアジア系女性『エイダ・ウォン』は、レオンと何時も引かれ合う運命の悪戯が如き巡り合わせに運命の赤い糸などと言う不確かな物が本当にあるのかと思う程彼との思い出、1つ1つの出会いや別れ、そして共闘等を全て思い返し、それが終わった所で店から外に出て移動を開始しようとした。

すると周りはゾンビだらけであり今にもエイダは取り囲まれそうで、しかし全く動揺

せず余裕の笑みすら浮かべてゾンビ達を一瞥した。

「悪いんだけど今の私は仕事だから構ってあげられないわ。

それに、私は身なりを整えない腐った死体モドキも大嫌いなものよ。

だから貴方達とは此処でお別れよ、それじゃあ、アディオス」

エイダはゾンビ達が嫌いと言いつつ相手をしないと告白した瞬間、フックショットを使い3階建ての店の屋根に飛び移りゾンビ達を一度に撒く。

そしてフックショットを連続で使いながらBSAAの初動部隊や警察、自衛隊にテレビ局に見つかからない様に移動を繰り返してビジネスパートナーが待つ場所まで焦らず、しかし大胆に近付いて行く。

こうして東京と言う舞台を中心に役者は揃った。

後はこの混沌とした舞台が如何なる幕を下ろされるのか？

それは未だレオン達も葵達も、ましてやエイダやCLOWN達すらも分からない。

そう、此処はそう言った混沌を煮詰めた地獄なのだ。

故に誰も物語の結末を知らず、ただただ運命の流れと呼ぶべき物に身を任せて踊るだけなのだ…。

EP X 『悪夢の真相』

CLOWN達の仕掛けた第2ラウンドを退けたレオン達。

その戦闘では矢張りレオンが初遭遇のB・O・W・相手に無慈悲な無双でB・O・W・を逆に翻弄し、デルタチーム2人の息のあつたコンビネーションによる脅威度の高いグリゴリやネフィリムの早期撃破、そしてゆかり達の援護射撃と、マキが呟いたB・O・W・を素手で殺すを弾が勿体無いからとCLOWN達のゲームに完全にキレたのか犬型B・O・WのエンゼルやハンターGにネフィリム、そして中型B・O・W・で迂闊に近付けば針飛ばしでウィルス感染させられてしまう此度のバイオハザードの元凶グリゴリをキックやパンチで吹き飛ばして踵落として頭を潰し、グリゴリに至ってはドロップキックを顔面に当て怯ませた後体勢を直ぐ手直しながら魔改造ハンドガンで瘤に付いた目を潰しながら足払いをして転ばせたら瞬間顔面に地面が衝撃で陥没する強烈な追い討ちパンチを食らわせ、虫の息の所にアサルトライフルで止めを刺し、グリゴリの特徴たる針飛ばしをさせないままほぼ殴り、蹴り殺すと言うレオン曰く「怒った女は矢張り怖いな」と彼の口から冗談混じりで出る等、茜の『本気』にレオン以外の全員はこの中で同じ事が出来るのはレオン位だと共通認識を持ち、マキやB・Y・はオメガ

1の実力を何度も見て来た為、敵に回せば下手なB・O・Wよりも驚異度が高過ぎるが味方に回ればレオン並に心強いのだと改めて思い知っていた……しかしマキは矢張り茜が、A・B・F.が自分の仲間達を絨毯爆撃等で殺した事を未だ割り切れず、本当の味方とは未だ認識しきれず何時でも脳天を撃てる様に警戒心と不信感を隠さずにいた。

そんな2人の下手な仲介は逆に今の連携を崩してしまう為時間による解決と言う当たり障りが無い対応で2人の衝突を避けていた葵達は、2度の襲撃によりマキがまたアサルトショットガンを破損させたり、葵のUMPがジャムを起こしてしまい応急修理をして一応使える状態にし、しかし何時またジャムが発生するか分からない状態の物を使い続ける羽目になり直ぐに変えなければならぬが、2度の襲撃によりチャーリーチームが超越してくれた武器弾薬が一気に消費されてしまい、代わりの銃も限りがある為そんなに取っ替え引っ替えが出来ない状態でもあり葵達はレオン達と合流し武器弾薬の調達が出来たにも関わらずたった1日で再び武器弾薬不足の危機に直面し始めていた(その割にマキがアサルトショットガンを2度も壊しているが割愛)。

そしてPM21:28、戦闘組で現在部屋の真ん中で元から持ってた自前の武器を含めた武器弾薬の残りを並べ、更にチェス盤も用意しながらレオンを司会に話し合いを開始していた。

「……残った弾薬は12ゲージ弾が36、俺とB・Y・とマキとセイカで使うから9発ずつ、スラッグ弾も同様に9発ずつ、但しアサルトショットガンの予備はもう2丁しかない。

7. 62×39mm弾はアカネしか使わなかったから結構余裕があると思つたが、ダブルタイプな上にロングマガジンだから弾丸の消費が予想以上に激しく3マガジン分が残つただけマシな方、40S&W弾は1人しか使わないから未だ余裕があるが、そもそもアオイの銃がジャムを起こしてポンコツになり掛かつてる、UMPの数も残り2丁だから余裕がある様に見えて此方も余り無い。

セイカの使うFN P90の弾である5. 7×28mm弾も残り2マガジン分、アンチマテリアルライフル用の12. 7×99mm NATO弾もこの2回の襲撃でかなり使われ、屋上にハンターが飛び込んだ際にユカリ、アカリは護身用のサブマシンガンやハンドガンを使わされたりもした。

そのアカリのドラグノフ（セミオートスナイパー）用の弾丸である7. 62×54mmR弾もユカリの残り弾数並に少なくなり、そして、45ACP弾はアカネとアオイしか使わないからかなり余裕があるがユカリのサブマシンガンを含めて9×19mmパラベラム弾は俺達の殆どが使うからかなり多めに持って来たが、もう全員分を分けたらそれぞれ3マガジン分しかなく、今銃に込められた弾も中途半端……ハッ

キリ言おう、俺達は後1回、今日立て続けに起きた2回の襲撃と同じ規模かそれ以上の襲撃があればその時点で弾薬は全て枯渇し、護身用のナイフ一本だけで戦わされる羽目になる。

つまりは俺達は上手く立ち回ったが、相手が反則の隠し駒を何度も使った結果此方はチェックを掛けられてしまった状態な訳だ」

レオンはそれぞれの弾丸を確認し合い、全員がそれに頷きながらマキはもうアサルトショットガンを何時もの様に使っちゃダメだと感じていよいよ慎重に使う様に心掛け、葵は何時でも故障しかねないポンコツ銃を使い続けて使えなくなつた瞬間に予備に取り替えなければならぬと頭で考え、更にレオンがチェス盤で自分達8名の白駒（茜の提案でレオンがクイーンになり、ビショップはマキとB・Y、ルークが葵とセイカ、ナイトはゆかりとあかり、茜はレオンをクイーンと言う役割が多過ぎる大役にした事に対する彼からの腹いせにクイーンにプロモーションしたポーンにされ、非戦闘員の生存者達をキングに見立てている）を並べてCLOWN側の黒駒を次々と取っているが、その黒駒が取った後に次々に配置され、2回の戦闘から算出したそれぞれの動きを反映させた結果、現在白駒が取ったら配置される黒駒に取り囲まれ、身動きが取れない状態と化しキングに黒のポーンやナイトが近付きチェックメイト寸前である事Ⅱもう抵抗手段が無くなり掛けている事を分かり易く伝えた。

これにはマキやB・Yも頭を押さえてしまいゆかり達は静かに目を閉じ、セイカはビールを飲むスピードがゆっくりになり、葵は頭の中でこの状況を如何打開するかチェス盤や武器を見ながら何通りも考え出し、しかし思い浮かぶ手は悉く自分達が無惨に命を落とし、キングを取られてしまうとと言う最悪解しか無い状態となり、もしも1回だけは上手く凌げたとしても2回目は無いとして葵は自分の力不足に涙を滲ませてしまっていた。

「葵、自分を責めるとき。

悪いのは葵じゃあらへん、CLOWNとか言うクソ野郎達や。
ウチ達は出来る事を限り無くやって此処まで耐え忍んだんや。

寧ろ、1回の支援だけであるだけの襲撃を凌いだのが良い結果やったんや
で。

だから、葵が泣く必要なんかあらへんよ。

それに、今までが上手く行ったんやし今度だって上手く行くで！」

「お姉ちゃん……」

すると今にも泣きそうな葵に茜は励ます為に声を掛け、葵が涙を流して自分を責める必要は無いとし、更には今度も上手く行くと締め括り茜を知らない人からすれば樂觀的な答えが、しかし茜の戦闘能力を知っている戦闘組の皆はそれが裏打ちされた実力から

来る自信なのが6割、残り4割は葵を励ます為に着いた優しい嘘の様な物だとレオン達は悟り、それを楽観的だと言う者は誰一人居らず葵の気がしつかりと戻るまで黙って皆見ていた。

そうして葵は無言のまま茜に抱き着き、茜の胸の内でも啜り泣き押し潰されそうな心を曝け出し、茜もまた黙ってそれを受け止めながら葵を抱きしめ、葵の気が済むまで泣かせてあげようと姉らしい行動を見せ、レオン達もまた葵が泣き止むのを静かに待った。

それから30分ずつと泣き続けて疲れたのか、葵は直ぐに眠ってしまい茜やマキ、ゆかりに抱えられイタコやずん子達の近くで毛布を被り寝かせられていた(因みに金淵も葵や茜が命懸けで戦っていた為なのか近くで寝るな等文句を一切言わず、葵や藍、茜をテロリストやらバイオテロ犯扱いたした事を内心悔いている、そしてウナときりたんは既に寝ている、あかりは監視時間の為屋上に居る)

「ぐっすり寝てもうたなあ」

「無理もないですよ、大人でマダオで凶太いセイカさんなら兎も角「ちよつと聞こえてるわよ〜！」(無視)葵さんは私やあかりちゃんみたいな諜報員だったりマキさんみたいにBSAAの隊員じゃない、本来ならずん子さんやイタコさん達側の人間なんですか

ら

「こんな事が起きなきや葵ちゃんは銃なんか取る事の無い、普通の女の子として生きて皆でワイワイ日常の中で明るく照らされてる人だったんですよ。」

それがこんなバイオテロに巻き込まれて……

「初めはお母様を守りながらもマキちゃん達に守られる側だった、それがこの学園に着いてからは守るべき人が増えて、それで銃を取って茜ちゃん達のように本格的に戦場に立ってしまいましたわ。」

それも、自分も感染するか、その場で死ぬかの恐怖とも戦いながら。

其処から来る様々な重圧を考えてしまいますとこんな風に責任に押し潰されそうになるのも無理ありませんわ」

「……すまない葵君、我々身近な大人が戦う力を持たないばかりに君に責任全てを押し付けてしまつて。」

無力な僕達を、君は恨んでも良いんだよ……」

「それ言うなら私達戦える人間ですよ。」

確かに葵が戦つて助かった部分は多々あるけど、私達BSAAやゆかりん達やレオンさん、そして茜……オメガ1……これだけ戦える人間が居るのに私達は民間人を戦場に巻き込んだ。」

これは一生私に付き纏う罪だよ。

それに私は葵に未だ隠し事を……『琴葉一家の監視』とか言うごく一般家庭を見張るなんて訳の分かんない任務で葵の隣にいたんだ。

先生達以上に罪深いし、友人としても、B S A A 隊員としても全部失格だよ、私……」

茜達は出来るだけ静かに見守り葵がゆっくり寝れる様に言葉を紡ぐ。

それらの中でゆかりが本来なら守られるべき側だと口にするるとこんな事が無ければとずん子が呟き、イタコが R O I C E 学園に来てからの計り知れない重圧と恐怖に押し潰されそうになったのは無理もないと言い、コウは大人でありながら戦う力が無く責任を押し付けた事を恨んで構わないと紡ぎ、マキは戦える人間が居たのに巻き込んだ事は一生の罪だと口にし、更に B S A A 隊員として何故か『琴葉一家の監視任務』と言う詳細が未だ伝えられていない任務を隠している事から一番自分が友人気取りの罪人だと言ひ友人としても B S A A 隊員としても失格だと呟き俯いてしまう。

それらを聞いていたレオンや B・Y もまた同じ事を考え、全てを聞いた茜は葵の頭を撫でながら悲しい表情でその涙の跡が付いた寝顔を見ていた。

「……………ホンマに、守るって口にしながらいかないな戦いに巻き込んだのは許されへんな、特にウチは……戦えない『お母さん』は兎も角、ウチは戦えるつちゆうのに……ホ

ンマ、お姉ちゃん失格やで、ウチ……」

そして茜は最後に姉失格だと口にし、全てを聞いた藍もまた何も言えないが葵に戦わせた自身も母親失格だと感じ、無言のまま涙を流し、チラ見でそれを見た茜は心の中で「ああ、この人はホンマに『お母さん』なんや」と思い、今まで棘のある言葉を投げかけ近寄せ難くしていた自分がアホであった事を此処で自覚し、しかし今更歩み寄る事は出来ないとも認識しており茜は葵の一番身近に居た味方であった『お母さん』に懺悔の念を送りながら、葵の頭を撫で続けるのであった。

葵は夢を見る。

その内容は2日前にも見たあの悪夢である。

茜が銃を持ち、父を撃ち殺すあの悪夢だ。

そして決まって終わりは昇降機で登って行く足場で姉妹の距離離れて行き、最後は茜のいるフロアの天井の壁により茜の姿を捉えられなくなり其処で終わる悪夢である。

しかし、此処で葵は今まで気付かなかつた事に気が付く。

それはこの場所は記憶にない場所ではあるが、昇降機フロアの直ぐ隣に何らかのガラス張りの部屋……設備からして何らかの研究室的な物であると認識し、其処に入るには昇降機フロアとその研究室を繋ぐ恐らく滅菌室を通らなければならなかつた事。

その研究室の機材が何らかの薬液を合成し、瞬間冷却しアンブルに詰め込む物だと。

そして……父琴葉紅の足元には乱雑に散らばつた研究資料と思しき紙が有つた事。

更に葵の1番近くに落ちていた紙の1枚には今の自分が見聞きした文字が書かれていた事を。

その文字とは……『T—G e n e s i s』、この日本を恐怖と惨劇に満ちた地獄に変えた悪魔のウイルス、その名が記されていたのだ。

「ハッ!!?」

葵は悪夢を見て飛び起き、更にその内容で今まで理解していなかった事を今この場で
気付き理解してしまい、自然と葵の心の中に恐怖心が……死ぬ事やウイルス感染とは違
う、もつと別の恐ろしい物を感じ取り、そしてそれは葵が『一番そうあつてほしくない』
と感じる恐怖心であり、それがふと口から漏れてしまう。

「…………お父さんが、T—Gene—sisを作った……？」

そう、バイオテロで亡くなつた筈の父親が今日日本を、そして果ては世界を地獄に変え
てしまうウイルスを作り出してしまったと言う、謂わば加害者の娘であると言う耐え難
い恐怖に駆られ始め身体が震え両手で震え出した身体を支えるが全く震えが止まらず
脂汗すら流し始め正常な思考が出来ない状態になりつつあつた。

ふと時間を見やれば時刻はA M 2 : 15、22時位に泣き疲れて寝た記憶があり其処
から4時間経過した事になり近くにはずん子やイタコに藍、きりたんやウナ、コウとず
んだもん達が寝ており、しかし今はあの悪夢の内容を藍よりも1番真実に近い人物……
姉である茜にこの悪夢の話を書きたかつた。

今思えばこの悪夢の事を茜に聞くのが怖かつたのだ、もしもこの悪夢の内容が事実で
姉が父を殺害したと彼女の口から聞いてしまう事が。

それと同様に茜と再会してから藍、最愛の母にこの話を聞くのが気が引けており、恐
らく藍も悪夢の真実を知っている筈であつた。

だが矢張り同じ様に聞くのは怖くなっており、また母を悲しませたくないと言う思いからも藍からこの話を聞く事は思考が纏まらない事もあり今現在も選択肢として浮かばずにいた。

其処で茜に話を聞く為に部屋を見渡して姉を探し始める。

すると何時もは見張り番の交代等で部屋に居る筈の茜が居らず、代わりにレオンとマキ、そして交代で寝ているあかりしか居らず、茜の場所を聞こうと横に居るずん子達を起こさない様に起き上がりレオン達に声を掛ける。

「あ、あの、レオンさん、マキさん……」

「ん、アオイ。」

起きたのか……って如何したんだ？

顔色が悪いぞ？」

「起きて顔色が悪い……もしかして、詳しくは言ってくれないけどなんか嫌な悪夢を見たって奴だよね？」

大丈夫？」

レオン達は葵の顔色が悪い事を見て心配し、マキはこれが（詳しくは話して貰えてないが）悪夢を見た後に起きる物だと葵から聞いており、何度かそれを気にしたら悪いのが寄って来るから考え過ぎるなどゆかりと一緒にあってアドバイスしたが、結局悪夢を

見た後は必ず悪い事が起きるらしくこの悪夢を見た日〓厄日なのが確實となっており、実際この悪夢を見て起きた日にバイオテロが起きてしまい今があり、そして再びこの悪夢を見て今まで理解出来なかつた事を理解してしまい精神的に参ってしまった為、この悪夢の事や理解出来た事を伝え真偽を確かめなければならぬと言う衝動に駆られ、正常な思考が出来ず単純な返事しか出来なくなっていた。

「だ、大丈夫……あの、お姉ちゃんは、何処に？」

「アカネ？」

彼女なら外の風を浴びると言つて正面玄関の方に行くと言つてたが「あ、ありがとうございます、じゃあ、行つてきます……『ガラガラ、ガシャン』あ、おいアオイ！

……本当に大丈夫か？

酷く焦燥している様だったが……

「……私心配なんで見て来ます、レオンさんは見張りを続けて下さい」

レオンが茜の場所を伝えると葵は震える身体を両手で支えながら教室を出て走つて行き、レオンはその様子から正常じゃない事を察し何か起きるのではと不安に駆られ、マキも同じ事を思つてた為、例え友人失格だとしても放つて置けないとして見張りをレオンに引き継ぎ葵の後を追つて教室から出て行つた。

そして残されたレオンは窓に向かって口を開く。

「……女同士、しかも姉妹の話に首を突っ込むなんて度胸あるな。」

そしてこの後何かあれば俺がアカネの居場所を教えた所為になるか、泣けるぜ

「クーン……」ズンダモン、起きてたのか……俺を慰めに来たのか？「ワン！」

……本当にお前はよく躡けられて、皆を守ってくれる番犬だよ、偉いぞズン

ダモン」

レオンはこの後何かドロドロした話が絶対あると確信し、その件で葵に茜の居場所を教えた自分がその拗れた責任を負う事になる為軽く皮肉を口にする、横にずんだもんが来てレオンを励ましに来ていた。

そのずんだもんを見てこの子は本当に頼りになるよく躡けられた番犬だと思い知り頭を撫でてもしかしたら普通の人以上に心の拠り所になると思ったレオンであった。

レオンから茜の居場所を聞いた葵は震える身体を必死に支えながら正面玄関から外

に出て、周りを見渡して茜を探すと校庭に備え付けられたベンチの近くで月明かりに照らされ、空の月に手を伸ばして黄昏ている茜が其処に居た。

葵は漸くそれを黙って見ていた……と言うより足が竦み動けなかったのだが、いつまで経っても悪夢の真実には近付けないと考え、恐怖を堪えて茜に近付いて行く。

すると足音に気付き茜は葵の事を見つけるが、双子の姉妹であるが故か俯いていても顔色の悪い事や足音で気分が悪い事を察せたらしく、茜は真剣な目で葵を見つめ口を開く。

「葵……その様子やと寝起きで寝覚め悪かったみたいやけど、何か変な夢でも見たんか？」

「……流石お姉ちゃんだね、うんそうだよ、悪夢を見たんだ……これを見ると決まって厄日になる悪夢を……」

茜の問い掛けに葵は見たら厄日になる悪夢を見たと答え、茜はその顔色の悪さから相当の恐怖心が芽生えている事も察し、茜はそれを口にするんがおとろしいなら言わんで良い、

そう口にしようとした瞬間葵の後ろからマキが走って来て、それと同時に葵は顔を上げて遂にそれを口にする。

「幼い頃……大体8年前に変な施設の中でお姉ちゃんがお父さんを銃で撃ち殺して、

それで私に謝りながら昇降機のスイッチを入れて私とお母さんを上に昇らせて、それで私が叫んだ後昇降機がお姉ちゃんの居る場所の天井まで昇って壁に阻まれた後2度とお姉ちゃんの姿を見なくなるって悪夢を見たなよ、私……」

「ッ!?」

「……えっ?」

茜は葵の口から出た悪夢の内容に目を見開き明らかに驚いている表情を見せ、対してマキは今まで詳細に聞いてこなかった葵の見る悪夢の内容に呆けた声を上げてしまい、葵はマキの声に気づき後ろを振り返り表情でこれが私の見る悪夢なんだよと言った泣き顔とも笑い顔とも取れる様々な感情が入り乱れた表情を見せ、マキはそれを見て葵の一步後ろまで近付き話を聞く姿勢を見せ、それに対し茜は追い返す事はせずそのままいつから悪夢を見ているのかを問い直す。

「…何時から何や、その悪夢をみるっちゆうのは?」

「お姉ちゃんがバイオテロに巻き込まれて死んだって聞いてから大体半年かな……でも可笑しいよね、私とお姉ちゃんは日本で生まれ育って、それでお姉ちゃんとお父さんが旅行に行つてそれで巻き込まれて死んだ筈なのに、全く分からない施設で私の目の前でお姉ちゃんがお父さんを殺すなんて。」

でもね、今日またその悪夢を見て今まで気が付かなかった事に気付いて、

それが怖くなってお姉ちゃんに聞かなきゃいけないって思ったのよ、この悪夢が何なのか、お姉ちゃんは本当にお父さんを殺したのか！

ねえ答えてよ……私、お母さんを悲しませたくないからお母さんには聞けないんだよ……だから、一番真実に近いお姉ちゃんに聞かなきゃ駄目だと思ってたのよ、気付いちやつた物も含めて全部!!？

お願いだよ……お姉ちゃん……」

「……琴葉茜、私は部外者だしとある任務……琴葉藍と娘の葵の監視って詳細を伝えられてない上からの変な任務を隠して来て葵の友人失格だけど、それでも隣に立って来たから一応言っとくよ。

この話は答えた方が良い、それが例えどんな残酷な真実であっても絶対に言わなきゃ駄目だって分かる。

私はアンタにも言ったよね、お父さんの血縁者がTテ-AイLロOスを作ってたクズ野郎だったって。

だからかな、私には分かるんだ、この話はそれに類した話なんだって。

もしも私が居て話せないなら私は見張りに戻る、友人失格だしBSAA隊員としても失格だし。

けど必ず話すんだよ。

じやなきやアンタは後悔するし、葵の心は壊れるよ、間違い無く。

さあどうすんのさ、葵の双子の姉、琴葉茜さん？」

葵は声を荒らげながらこの悪夢と自分の記憶の矛盾と、今まで気付けなかった物を答える様に茜に縋る様に迫り、大粒の涙を流しながら茜の肩に手を掛ける。

更にマキは自身の過去からこの話は自分の経験した事…父の血縁者がアンブレラのウィルス研究部門でB・O・W.を作っていた事に似ている物だと直感的に察し、葵に自分が隠して来た任務を暴露して友人失格ではあるが、茜に対し警告して逃げ道を塞ぐ様に必ず葵の問いに答えなければならぬと迫り、自分が邪魔なら消えるがそれでも絶対答えろと言ひ茜に葵の姉としての責任を果たさせようとした。

それらを聞き、また今まで葵を戦いの場に立たせて来た自分が今更姉を名乗るのは烏滸がましいと感じつつも、同じ立場であるマキが友人失格と任務を暴露して葵から絶交宣言を受けたとしても葵の味方であり続ける覚悟を見せた。

それを見て茜は一度目を閉じ、深く考えた末に結論を纏めて口を開いた。

「……分かったで。

葵の疑問に思う事全部答えたる、答えられる範囲うちゅう条件付きで。

この話はな、一度に話せば話さなかつた場合と同じで葵の心を壊しはるんや。

それだけの劇薬なんや、此れは…。

それと、あんさんは友人失格やつて言つとるけど今まで葵の友達として接してくれたあんさんは嘘偽りなかったんやろ？

なら聞く義務はあるし、寧ろ聞いて欲しいんや。

そして支えて欲しい、ウチの大事なたった一人の妹を。

……2人共、ベンチに座るで。

ゆつくり話したる」

茜は葵とマキに真実を話すと言う決断を、しかし余りの劇薬である為話す範囲をある程度絞つて話すとしながら下し、マキは全部話さないよりも全然マシだと考えベンチの左端に座り、葵も涙を拭きベンチの真ん中に座り、不意にマキを見て彼女もまた何処か泣きそうだと気付いた葵は、隠して来た任務を抜きにしてもマキは友人だと言う視線を送る。

それにマキは申し訳なさそうにしつつもまだ友人で居てくれる葵に感謝し、一筋の涙を流して上を向く。

そして姉失格な茜がベンチの右端に座り、葵を中心にして茜は静かに話を始める。

「……先ず葵の見る悪夢、これは先に結論から話すと全部事実や。

ウチはこの手で『お父さん』、いや……あの男を撃ち殺した、そうする必要があつたからや」

「…そう、事実、なんだね…じゃあ次に、あの施設について答えて、あの施設にはガラス張りの部屋があった。」

その中に通じる扉は今思えば滅菌室で、そしてそのガラス張りの部屋の中の設備は明らかに薬…：それか、ウイルスを作る物だった、違う、かな？」

茜は結論から話し『父親』を撃ち殺したのは事実だとし、更にあの男と言って明らかに父親として見ていない口ぶりで話し、マキは任務の事を含めた全てをパズルのピースを一つ填める様に頭の中でキーワードを並び立てていく。

葵もそれが事実だと確認した後には先程見て初めて気付いた部分の一つであるその施設に薬かウイルスを作る設備があった事を聞き、マキはこの時点である程度察し、黙って震える葵の左手を掴み味方は此処に居ると態度で示し、葵もその友人の手の温もりを支えられながら茜の答えを待つ。

そして予想通りの返答が返って来る

「せや、その施設はあの男が隠し持つとったウイルス研究施設兼隠れ家や。」

あの男や『お母さん』は元アンブレラであの男は『お母さん』の反対を押し切つてウイルス研究を続けとったんや。

スペインサーの理想を叶えたいちゆうアホ臭い妄信に駆られとつてな」

「それって、CLOWNと同じ「せや、全く同じや。」

だから連中とあの男は同志とも言えとるな」全く、イカれた奴って何でその辺にゴロゴロ居るの!!?

…あ、ごめん葵、そんなつもりは」

「大丈夫、大丈夫……マキさんならそう憤るって分かってたし、私もこの事実到现在までのお父さんへの気持ち……崩れて来てるから……」

葵の予想通りあの施設はウイルス研究施設兼セーフハウスだったらしく、その思想も聞きマキが憤るのも無理もないと思ひ始め……そして父に対する感情はマイナス方面へと突き走り、あれだけ大好きだとおもっていた父親にもう冷めた感情しか抱けなくなり始めた自分が居ると葵は認識していた。

そして此処まで予想通りならば、悪夢の中で見た研究資料の1枚に書かれたT—Genesissに対する予想も正しいだろうと感じながら、しかし直接確かめなければならぬと心の中で思い口に紡ぐ。

「じゃあ……その研究施設で研究していたウイルスって……今この日本で地獄絵図を生み出したT—Genesissなの？」

今日見た悪夢で私は気付いちやったんだ、足元に落ちてた研究資料の1枚にT—Genesissって書いてあったのが」

「……………せや、T—Genesissは其処で生み出され、そんで今日本だけやない、世

界中の人達の生命すら脅かそうとしとるんや。

最もウチが知る限りのT—Genesisは偶然の歯車の一致で生み出されたもんやけど、バイオハザード発生から6日で阻止出来へん段階に突入して1ヶ月もしない内にくなんて核爆発級の代物じゃなかったで。

恐らくこの8年で改良に改良を重ねて此処まで漕ぎ着けたんやろな、あの道化達は」

「……そつか、葵も私と似た……だから上層部は、そんな任務を……」

そして研究していた物はT—Genesisだったと言う事実も確認し終え、遂に葵の中の父への感情はマイナス方面を突き抜けて最早彼方まで沈み切って行ってしまうた。

マキはそれらを聞き、T—Genesis事態は8年も前に存在していた事を知り、且つ葵は自分と良く似た境遇であった事を知りつつ何故琴葉一家監視の任務を帯びたのかと言う意味を知り手に込める力が強くなり、しかしそれは葵が痛がる物では無くその温もりをより感じやすくさせ、その上で自分は葵の味方だと言う事をより知らせる物であると葵は気付いており葵の方も握り返していた。

「……んでもって『お母さん』なんやけどな。

さつきも言った通り元アンブレラやけどあのクズと違って本当に葵や……

多分ウチも本当に愛してたんやろうけど、あのクズを見捨てられない板挟みになつてはつたんや。

せやけど……それでも、葵の事をこんなに可愛く育て上げてくれた、元から持っていた記憶操作技術であれ以前の辛い記憶を全部忘れさせて、葵の事を守りながらお天道様の方へ連れ出してくれはつたんや。

せやから『お母さん』の愛情は本物やし、誇つてええで」

「……そう、なんだ。」

だから記憶と事実が食い違つたんだ……お母さん……」

しかし、そんな父への想いに冷めて行く葵に氣遣つたのか、或いは本物の愛の力で葵を此処まで普通の、それでいて可愛い女の子に育て上げた感謝からか、又は突き放してしまつた事への懺悔か母である藍の愛情は本物だつたと告げ、真実の記憶である悪夢を忘れさせたのも彼女が持つていた記憶操作技術による物であり、8年前以前の記憶は全て操作され辛く忘れるべき部分だけを操作してごく一般の女の子として育て上げ、また身見守り抜いたその確かな愛を葵は感じ取り、藍に対し嬉し泣きをしていた。

「…琴葉茜、私が言えた義理じゃないけどアンタ今から藍さんに謝つて来いよ、散々棘のある言葉で威嚇しやがつて」

「…せやなあ……」

するとマキは藍に関する話に口を出し、今まで突き放したり棘のある言葉で威嚇してとても藍の人柄上やっつてはならない事をやって来た事を指摘して謝る様に命令形の言葉を投げかけた。

すると茜は黄昏ながら肯定し、今まであのクズの琴葉紅の事があり何処か信用し切れなかった自身に対し嫌気が差し、藍には今からでも絶対に謝らなければならぬ、そう感じ目を閉じていた。

そうして嬉し泣きも止めた葵は何故自分や茜がああ研究施設に居たのか気になり、またあの悪夢以前の記憶は全て藍の手で操作された記憶であり本当の記憶はなんだったのか、それが気になり茜に問い掛けた。

「……じゃあ、私やお姉ちゃんはなんで幼い頃にあの研究施設にいたの？」

セーフハウスだから居たって考えてもとうさ……うん、お姉ちゃんから聞いた琴葉紅の性格や思想上子育てなんか絶対しないし私達は邪魔な存在になるから捨てていたかもしれないって感じたんだけど、何でなの？

それにあの悪夢以前の記憶もお母さんが忘れさせる様に記憶を操作したならその本当の記憶って何なの？」

「ごめん葵、そつから先はアウトや。」

今の葵の精神状態を考えたら絶対に話したらアカン内容なんや。

言えなくてすまんな葵……けれど絶対話す時が来る。

それまで待つとつてくれへんか？」

しかし如何やらこの先の内容は話せないらしく茜からアウトと言われ、しかし話す時が来たら話すと約束し、取り敢えず葵の聞きたかった事は聞けた為それに領き、マキもこれ以上葵が聞いても話せないなら部外者の自分も口を挟めないとしてそれで納得する事にした。

「……さて、夏とは言え真夜中や、早よ中に入つて暖まるで。」

……ああ、それから」

茜は話が終わった所で立ち上がり、夏とは言え真夜中は冷えるとして中へ入る様に促すと、葵達は立ち上がりその後が続こうとする。

すると茜が何かを思い出したのか立ち止まって2人を見ながら口を開いた。

「京町セイカはん、あの人は信用出来へんで。」

ウチの中で完全に黒や、氣い付けとき」

『……………はい、っ？』

それは、京町セイカが信用ならない人物であると言う爆弾発言だった。

不確かな事は生存者の和を乱す為看過出来ない物であるが、この茜の目や口調からは完全にそうであると言う確信めいた物を感じさせ、葵とマキは驚きを隠せず何故なのか

問い質し始めた。

「ちよ、ちよつと待ってお姉ちゃん、セイカさんが信用出来ないって如何言う事なの!!」

「アンタのその物言いから確信を得てるって感じらしいけど、それを私等にも説明なさいよ!」

「ん、今説明してものらりくらりされるんでB・Y、デルター1の解析待ちやなく。

まあ兎も角早く中入つとくで」

『ちよ、ちよつと!!?』

2人は説明を求めたが茜はB・Yの解析待ちと言う曖昧な返事しかせず、そのまま中に入ってしまい葵達は後を追い走りながら中へと入っていった。

「……やっぱりそろそろ潮時みたいね」

そのやり取りを、葵が茜に悪夢を説明する様にと行ってベンチに座りながら話をして

いた時に、3人の位置から見えない物陰からずっとビール缶を片手にして飲みながら全部聴いていたセイカは、何か意味深な発言をしてビールを飲み終え、アリバイ作りの為に酒を更に飲みたい為に家庭科室の酒類保存用冷蔵庫へと行き新たな酒を手にしてから1—A教室へと向かうのであった。

果たして茜の言葉とセイカの真意とは？

それが分かるのは、そう遠く無い時間の先であった。

EP XI 『疑念』

茜の謎の言葉の真意を確かめるべく葵、マキ2人は先に1—Aに向かった彼女の後を追って小走りで教室に入る。

すると教室の電気が点いており、全員が起きていて、屋上の見張り役交代の為にゆかりもその場に居た。

「あ、皆起きてたんだ」

「はい、マキちゃんや葵ちゃんが何やら茜ちゃんと話があるみたいで正面玄関の外に出て言ったりとか皆この時間に不意に起きちゃったりとかゆかりちゃん達の交代時間やセイカさんがまたお酒を夜中に起きて飲みに行ったりとか色々重なって起きてたんですよ」

すると全員起きていた理由をずん子が話すと、件のセイカは何時もの酒を盗み飲みする為に家庭科室に行っていた事を知ったり、それを聞いている茜は壁際に目を閉じながら背を掛け、何かを待っていますよと言う雰囲気を出しながら其処に居た。

すると藍が葵の方に歩いて行き、マキは少し横にズレて2人で話をさせる場を簡素に設け、葵も一歩藍に近付き2人はジツと見つめ合い、葵から先に口を開き始めた。

「…お母さん、お姉ちゃんから聞いたよ。」

あの悪夢の真実や、お父さんが、琴葉紅が犯した過ちが今日本や世界を脅かしてるとか…お母さんが本当に私やお姉ちゃんを愛してる事とか」

「そう…ごめんなさい葵、私は貴女に伝えるべきことも伝えないうまま今まで悪夢の内容はただの夢だから気にするなとか言つて嘘を吐いてしまつてたわ…だから、私は貴女の母親「ううん、お母さんはお母さんだよ」…えっ？」

葵は茜から聞いた事を藍に分かる様に伝え、更に父である琴葉紅に対する感情が冷め切つた事も分かる様に伝え、それ等を聞き藍は自分母親失格だと口にしようとした瞬間葵は藍を未だ母だと呼び、そのまま抱き着いた。

「あ、葵…？」

「確かにお母さんは嘘を吐いて来た。」

でもそれは私を傷付けない為に、私の心を守りたいからそうしたんでしょ？

なら…：…やっぱりお母さんはお母さんだよ。

何処までも優しく、私の身を案じてくれる、最高のお母さんだよ」

「…：…つ、葵…！」

藍は葵が茜から聞いた話を以つてしても、否、茜が話したからこそなお自分の母は知らない所で自分を守つてくれていた最高の母だと口にし、それを聞いた藍は感極まつて

泣きながら抱き着き、其処には確かな親子の絆があると誰の目から見ても分かる光景が広がっていた。

すると茜は藍に近付き、丁度葵の横に並ぶ様に立つ。

「茜……私は、貴女に何もしてあげられなくて……」

「……ウチは、ウチはあの男が過ちを犯していた、それが未だ許せなくて、あの男の妻だった貴女にウチは何度も突き放す真似をしてもうた。

でも、でも……貴女がウチや葵に掛けていた愛情は確かに本物やった。

あの男が無茶苦茶な事を言えばウチや葵を守ったりもしてくれはった。

けどそれを信じられず今まで……そんな、馬鹿な娘なんやけど……ウチはまだ、貴女をお母さんってちゃんと呼ぶ資格はあるのか……教えてくれへん？」

藍が茜に何もしてあげられなかったと呟くと、それを遮る様に茜は今までの不信感や琴葉紅の妻という部分だけで信用に値しないと決め付けて突き放したとして自身を馬鹿な娘と言って俯き、しかしまだ自分に母と呼ぶ資格があるか如何かを聞く。

すると藍は葵を抱いている片方の腕も伸ばして茜を抱き寄せ答えを示した。

「当たり前よ……貴女達2人は私の大事な、娘なんだから……ごめんなさい茜、遅くなつて……『おかえりなさい』……」

「！」

つ……『ただいま』、おかあ、さん……」

藍と茜は互いにただいまとおかえりを口にし合いながら涙を流し、葵はまた嬉し泣きをしながら3人の家族が漸く互いの壁を崩して確かな親子の形をI—Aの全員に見せていた。

それを見て涙脆いずん子は涙を拭き、きりたんは興味無さそうにしながらも良かったと言う安堵の表情を浮かべたりする等、この場に居た全員はそれぞれの反応を見せるのであった。

それから少し時刻が経過してA M 3 : 30、漸く落ち着いた琴葉一家はこの場に居る全員にそれぞれが話せる事を話し、レオン達は葵達の複雑な関係やT—G e n e s i sの事を更に少し伺い知る事が出来た。

そんな中で日本の諜報員のゆかり、あかりは葵が真実を知った事に何処か安堵やら隠して来た事への後ろめたさ等の表情を浮かべたりしてたので葵はそれに気付き話し掛

けた。

「もしかして、ゆかりさんも私やお母さんの事情を知っていたりした？」

「はい、と言っても藍さんが元アンブレラのウイルス研究兼記憶操作技術開発部門の人で葵さんがその娘だって事と、藍さんは自分のやって来た事全てを日本政府に告白して日本国籍を即取得して保護観察プログラム下に置かれてるって程度でしたが。」

ほら、私言っただじゃないですか、保護観察プログラム下の人の警護も担当してるって。

だから葵さん、と言うより藍さんの監視と藍さんに恨みを持つ人間からの警護だったりをしてたんですよ。

まあ、葵さんの友達になりたかったのは本心ですし藍さんや葵さんの人となりを見たら任務じゃなくても守ってましたよ。

ねっ、あかりちゃん？」

「そうですね。」

ただ、死んだ琴葉紅が何かのウイルスを隠れて作ってたのも聞いたのですがそれがまさかT—Gene-sisの、茜さんの言葉を加味するなら初期型なんて知りませんでしたが」

ゆかりとあかりは琴葉一家、と言うよりも厳密には藍を警護する任務を帯びていた事

を暴露するも、流石にT—Genesisを藍の死んだ夫が作り上げたなど知らなかった為寝耳に水の状態であった。

そして、それを聞いていた金淵はただ短く「今まですまなかつた」と琴葉一家に謝ると言う初期の印象からは考えられない行動を見せ皆を驚かせた。

そんな中でセイカは兎も角B・Y・が居ない事に葵は氣付きレオン達を見ていた。

「あの、B・Y・さんは？」

セイカさんは酒を飲みに行つたらしいんですが」

「ああ、B・Y・はんはな「やつはろく、皆居るく？『ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ』

ぶはあ！」ふふ、やつと来はつたなセイカはん。

酒飲みに行つた次いでにウチ等の話を盗み聞きして如何やつたんや？」

『えつ、？』

「……」

葵がB・Y・の事を皆に聞き茜が何してるか口にしようとした所にセイカがビールを片手に現れ、それを待つてましたと言わんばかりに茜が先程の会話をセイカが盗み聞きしていた事

を暴露し、葵達は驚き、レオンはやはりかと言わんばかりに神妙な面持ちをしていた。

「あゝ、バレちゃつてた？」

ごめんね、盗み聞きするつもりはなかったんだけど家庭科室にビールまた取りに向かつてた途中で見掛けちゃって出るタイムミングを失ってそのまま盗み聞きの形になつちやつたんだよね、本当にごめんねマキちゃん、葵ちゃん、茜ちゃん」するとセイカは出るタイムミングを失い盗み聞きする形になったと弁明しつつも謝り、それから葵の方に近付く……が、茜がまるで庇う様に立ち、マキも茜の様子からか葵の横に立つて威嚇する様な形になった。

「あ、あの、これって如何言う事かな？」

「私何かやつちやいけない事やって警戒されちやつてるのかな？」

「そうやって惚けてられるんも今の内だけやしどんどんやつてくれてかまへんよ。」

ウチ等がその土台を崩したるから『ガラッ』ふむ、役者は皆揃つてゐるみたいだな」待つとつたでB・Y・はん、それでウチの予想は当たつてたかいな？」

「結論を言えば大当たり、協力ありがとう琴葉茜」

すると其処にB・Y・が教室に戻つて来て茜に大当たりと言う言葉を言い、茜はその言葉を待つていてニヤリと笑みを浮かべながらセイカに向き直り話を続ける。

「てな訳やセイカはん、あんさんの主張の正当性はB・Y・はんが完璧に崩してくれはつたで？」

それでもまだ惚ける気ならーから説明したるけどかまへんか？」

「えーと、何処の発言が正当性が崩れたのか分からないけど説明してくれるなら有り難いかな。

何が何だか分からないし」

するとセイカは何の主張が茜に不信感を抱いたのか分からない様子を見せ、説明してくれると話した為それを受ける事にした。

それを見ていた葵達も全く分からない為その説明を聞く事にした。

「先ずあんさんは蚊を媒体に感染拡大が発生するかもっちゅう事でウチを含めて皆の検血しはったやろ？」

それで学園設備やB・Y・はんのジエネシスで検査してウイルス感染はしてないっちゅう結果が出たやろ？「あーあれか、運が良かったとしか言いようが無いわねあれは」

運が良い？

ちやうで、あんさんは初めからそんな予想を立ててからそれでも検血しはったんや……目的もウチの中で明白や。

それをB・Y・はんに話してウチ達は確かめたんや、セイカはんの目え盗んで今のT—Gene-sisの性質そのもんをな」

茜は如何やら蚊を媒体にした感染拡大と言う事に引つ掛かりを感じたらしく、B・Y・にセイカの目的を予測してB・Y・にそれ等を話し、時間がある内にある事……現在のT—Gene-sisの性質の調査を依頼したらしく、B・Y・も茜もセイカの目を盗んで調査したらしく、セイカは顔は疑問符を浮かべた表情を見せている……が、茜はこれをブラフだと断じてそのままB・Y・に説明を始めさせた。

「先ずT—Gene-sisの性質検査なんだが、此れには今の検体だけじゃなくて初期の検体かデータが無いと検証のしようが無かった。

が、琴葉茜は隠し持っていたんだよ、T—Gene-sis初期型のデータを丸ごと保存した記録媒体を「ふえ!?」やつと驚いてくれたかセイカ、まあ俺もまさかその記録媒体を隠し持っていたなんてそちらと同じく思いもしなかったから寝耳に水で急ぎ琴葉茜のオーダー通り初期型と現在の性質比較、そしてある事の検査を我が身を使ってやったよ。

それで結果は大当たりと出たんだ。

話を戻して初期型と現在の比較をした所形質の変換やら何やら相当苦労して現在のT—Gene-sisになるまで改良を施していた形跡が見つかったよ。

そしてその結果……『初期型はあらゆる生物に感染するが感染力が現在の物と比べて弱く、現在のT—Gene-sisは感染力こそ初期型と比べ物にならない

程高くなっているが、感染対象が哺乳類のみに限定されている』と言う事も性質検査で分かった」

B・Y・は茜からT—Genesis初期型のデータを貰った事を口にし、それを聞いたセイカは予想外過ぎたのか鳩が豆鉄砲を喰らったかの如く驚き、B・Y・もそれがあつた事に驚きを隠せなかったが茜が依頼した形質検査がこれで可能になり両者を比較した結果、初期型は全ての生物に感染するが感染力は今の物と比べて低く、B・Y・の中では例え初期型がバイオテロに使われても直ぐ鎮圧可能だと試算しており、そして現場日本で猛威を奮っている方のT—Genesisを初期型と比較した結果かなり形質を交換させたりその他の改良が施されているとし、結果感染力は高くなり過ぎてあのバイオハザードマップが完成したが、代わりに哺乳類にしか感染しないと言う性質の発見に繋がりそれ等を筋道を立てて説明した。

これを聞いた葵達は哺乳類、つまり人間や犬、更に鼠等にしか感染しない代わりに鳥や魚、蜥蜴等の鳥類魚類爬虫類には感染しない事が分かったが、まだ蚊を媒体にする部分崩れていない為B・Y・を見続けるが、B・Y・はそれも予測済みだと言わんばかりに説明をする。

「何故蚊を媒体に出来ないかと言えば先程も言った通り哺乳類にしか感染しない様にされている事に加え、『今のT—Genesisは哺乳類以外の体に付着、又は体内に

入った瞬間死滅する様に自滅形質が組み込まれている』為、蚊がゾンビ達の血を吸っても其処からウィルス自体が組み込まれた自滅作用によりT—G e n e s i s は死滅し、感染媒体にはならないと言う事も判明している。

実際俺が今のT—G e n e s i s 検体、ネフィリムから採取した血を蚊に吸わせてから俺の血を吸う様にして感染が起きるか実験したり、蚊そのものを検体内に入れて変異が起きるか確かめたがどちらも発生しなかった。

両者共に危険で下手したら俺はゾンビ達の仲間入りしていたかもしれないが今こうして皆の前で元気な姿を見せてる、これが答えだよ。

そして今まで犬型B．O．W．やTウィルス産ゾンビが変異したりツカーや人間の遺伝子を持つハンター、そしてグリゴリ見たいな人の形をギリギリ保ったB．O．W．しかないなかったのもこれが原因だ。

さてミス京町、何か弁明があるなら言ってくれても構わないぞ。

俺は琴葉茜からこちらの目的を予想出来ている事も聞いているからそれ等も全て論破する自信があるが……如何かな？」

更にB．Y．は自分と蚊を実験に使いT—G e n e s i s が蚊を媒体に感染拡大をするか検査したと言う無茶苦茶な事を聞き途中マキから「何やってんのさバカ隊長!!？」と言われたが、それを無視して現在のT—G e n e s i s には哺乳類以外の体に付

着か体内に侵入したら死滅すると言う自滅作用形質が組み込まれている事を初期型と比較して判明させており、それにより例え蚊がゾンビ達の血を吸い口器にその血が付着してようとも自滅作用が働く様に徹底されている事を身を以って知り、B・O・Wも人の遺伝子を持つてたり哺乳類（犬）だったり等の物しか居なかつた事も付け加え、これで感染媒体となるのは哺乳類だけだと確信して遂にセイカを論破する算段が付き教室に來たのだ。

葵達はそれ等を聞き次にセイカの方を見ると……笑っていた。

何処か余裕があるが、威圧感に満ちた笑みを浮かべた京町セイカが其処に居り、しかし何かをする訳でも無い様でビールを飲み終えた後ゴミ箱に捨て、今度は茜に近付き話し掛け始めた。

「茜ちゃん、多分私の目的とか色々もう分かつてるんだろうけど、私は貴女の思つてる様な悪い様にはしないって私自身は約束出来るわ「但しあんさんのクライアントを除くが入るがな」ははは、手厳しいわね……茜ちゃん、葵ちゃん、マキちゃん、私はね、君達、いや君達だけじゃなくゆかりちゃん達の事も気に入つてるんだけど、3人は私と似てるから特に共感してるんだ」

「似てる、あんさんとウチ達がか？」

セイカは茜に彼女の想像している様な事はしないと話すが、対する茜はセイカの上に

いるクライアントは自身の想像通りの事をすると言うニューアンスの言葉を使いバツサリ切り捨てる。

するとセイカは何を思ったのか葵やゆかり達を気に入っており、更に茜、葵、マキの3人に共感していると話し、その理由が何なのか茜も興味が湧いたらしく切り捨てる事なくその先を話させる。

「茜ちゃんと葵ちゃんとマキちゃん、3人の身内のクソ野郎に振り回されて今があるって事で、特に茜ちゃんと葵ちゃんは父親がドクズな上に茜ちゃんが手を下す程のヤバイ奴だったって事。

……私もね、自分の父親に振り回された挙げ句の果てに今の組織に身を窶しているんだ。

しかもそのクソ親父は組織に負債を残したまま自分の野望（失笑）を叶えようとして死にやがったから私はその負債を今も支払い中、でもって私も相当アレな奴だけどクソ親父はそれ以上にクソ野郎だったって事。

そう言った部分に共感してるのよね、私は」

セイカは茜、葵、マキの3人に自分を重ねている様に話し、特に琴葉姉妹は父親が相応な屑だった事に自身の、茜達の知らない境遇と似ているとすら話し自身の父親を貶しまくり自傷気味な笑みを浮かべていた。

それらを聞いた中で父親が屑、組織に負債を残したと話した事にレオンはセイカが何処に所属しているか探りを入れ始めた。

「お前の父親の事はこの際良いとして、セイカ・キヨウマチ、お前は何処に所属している？」

返答次第ではこの場で逮捕も視野に入れるが？」

「うゝんそれは『Pilllilllilllilll、ザザアツ!!?』……ごめん、空気読まない道化の通信ジャックがまた来たみたい」

レオンの射抜く視線に下手な隠し事はもう出来ないと感じたセイカは溜める様な口調で話そうとした瞬間、間が良いのか悪いのか再びCLOWNの通信ジャックが発生して全員の通信機、及び通信タブレットがジャックを受けて一斉になり出し、レオンはこの事を有耶無耶には出来ないとしながらもB・Y・や茜、マキを手招きして4人でレオンの通信タブレットからCLOWNの通信に出る事になり3人が近寄り通信タブレットを4人で見れる様に腕を下げながら通信を開く。

すると矢張りCLOWNのリーダー格が其処に映り出され、機械音声の音が響く。

『おはよう諸君、良く寝られたかね?』

「今取り込み中やったのに通信ジャックが来てもうたから間が悪過ぎつちゆう苦情ならあるけど聞いてみたいひん?」

『おやこれは失礼したね。』

なら第3ラウンド開始時間の4:00までじっくり話して貰っても構わないよ、それで戦力を知れず全滅しましたとなっても我々は関知しないがね』

そして通信内容は矢張り第3ラウンド開始の宣言であり現在時刻は3:45、後15分で彼等の『ゲーム』が始まるとしてこれ以上セイカの方には構えないとしてレオン達はいアイコンタクトをし、聞き出す事を予め決めておいたのでそれを言う事にし、更にマキはずん子達に他の避難民を起こす様に合図を送りコウ、ずん子、イタコ、藍、ずんだもん、更には何と金淵まで起こしに回る様に動き始めCLOWNとの会話に専念し始める。

「分かった、お前達のくだらないゲームを受けてやるがその前に幾つか質問に答えて貰うが構わないな？」

『第3ラウンド開始5分前までなら受け付けよう、君達の目ざましい活躍に敬意を評してな』

B・Y.の質問に答えろと言う要求にCLOWNのリーダー格はOKを出し、残り10分迄は聞けるとして時間的に先ずは次に来る戦力↓T|Gene-sisは哺乳類にしか感染しない↓T|Gene-sisを何処で手に入れ今の様に改良したかの3つを質問する事になった。

「じゃあアンタ達の下らないゲームの第3ラウンドに来るB・O・Wの数はどれ位な訳？」

『先ずはネフィリムが10体正門から来る、その後4つのプレゼントが贈られるから其方はネフィリム全滅後に連絡しよう』

「プレゼント？」

……いや、この際は如何でも良いか。

次にT—Genesis、これは初期型からかなり改良して哺乳類にしか感染しない事、更に哺乳類以外、それこそ感染媒体に適した蚊等にすらT—Genesisが体内に入ったたり口器に付着しただけでも死滅する様に自滅作用形質等を組み込んだな？」

先ずマキが戦力について聞くとCLOWNは今更ネフィリム10体と一見少ない数しか送らないとして、しかし何やら『プレゼント』を用意しているらしくそれが疑惑の目を向けられているセイカを含めた戦闘組は疑問に思うが、ネフィリム全滅の際に説明が入るらしく後回しにして次にT—Genesisの解析をしたB・Yが初期型から改良や哺乳類にしか感染しない、更に自滅作用等の事を問い正すとCLOWNのリーダー格は感心した様子を見せ嬉々として話し始めた。

「素晴らしい、其処まで調べ上げるとは。」

そうだ、T—Gene-sisは哺乳類にしか感染しない様に初期の物から改良を施したのだよ。

初期のままでは感染力が高くない上に哺乳類以外にも感染する為人類の高次への進化の最適解になり得なかった故に改良に改良を施し今のT—Gene-sisがあるのだ……長かった、此処まで漕ぎ着けるのに8年を要したのだから「御託は結構だから最後の最後だ、お前達はアオイ・コトノハ達の父であるクレナイ・コトノハが作り上げた初期型T—Gene-sisを如何やって手に入れ、此処まで改良した?」……するとCLOWNのリーダー格は何やら自慢する様にT—Gene-sisの話をし始め、それを延々と繰り返して時間が潰れそうになった為レオンが途中で自慢話を遮り如何にT—Gene-sisの初期型を手にしたか等を問うとCLOWNのリーダー格の肩が震え始め……笑いを堪えた声を出しながらレオンの質問を応える。

『ふ、ふふふ……それは其処に居るオメガ1、琴葉茜が知っている筈だから彼女に聞けば良い……では後10分後、ゲーム開始だ。』

検討を祈っているよ……ふふふ『プツンッ!』

するとCLOWNのリーダー格は茜が知っていると言う曖昧な応え方しかせずゲーム開始は10分後と話し通信を切られてしまう。

時刻は3:50、5分で3つの質問中2つを消化出来ただけでも重畳とし、更にその

3つ目の質問が終わり通信が切れた後に茜を見ると何か考え込む仕事をしつつ、何処か予想通りと言った感じの雰囲気を出しておりこれは茜が何か知っているのは確実な為葵がそれを聞いてみた。

「あの、お姉ちゃん、何か知っているの？」

「…葵すまん、これも禁則事項やで。」

ただ奴等はT—Genesisを悪用所か改造しまくって世界をどうこうしたいクソ野郎達って考えとき。

教える時が来れば全部教えたるで」

すると此れも今の葵が知るのはアウトな情報が含まれているのか、茜は口を割らずただT—Genesisを悪用する道化達が居る事だけを考える様に話すと、葵はそれに納得して話す時が来るのを待ちながらこのゲームと称した巫山戯た物を終わらせようと考え自身のポンコツ気味になったUMPも持ちながら武器弾薬が入った袋を持ち正面玄関へと向かう。

更に急ぎ戦闘態勢に入る為に屋上にゆかり、あかりが向かう。

そしてセイカも隠し持っていたビールを飲み、集中力を上げながら自分の分の武器を持つ。

するとレオン、茜、マキ、B・Y. が背後に立ちセイカに射抜く視線と忠告をする。

「お前の疑念は全く晴れてはいない、この戦闘が終わればお前の全て話して貰うぞ。

それまでに変な動きを見せればお前を撃つ、良いな？」

「……ですよね、分かってますよ。」

私も死にたくないからこの戦闘が終わったら洗いざらい話しますよ。」

レオンの忠告を聞くとセイカはまだ余裕ある態度で死にたくないと言いながら話すと応えそのまま葵の後を追い正面玄関まで走って行った。

「アレ、何処まで本当だと思う？」

「多分死にたくないからって部分だけだろう。」

後は理詰めしなきゃあのタイプは話さないさ。

そう、自分をマダオな一般人を装っている女なんか特にな」

「せやな、ウチもアレは話す気が余りあらへんって分かるわ。」

話すにしても真実に嘘を混ぜるタイプやで」

マキ、B. Y.、茜はセイカは何も話す気は無い事を先程の返答から割り出し、更に話すにしても理詰めが必要且つ真実に混じった嘘を見抜かなければならない強かな者だと気付き、3人はそれぞれセイカが怪しい素振りを見せないか戦闘中も監視し合うと言で確認し合いながら武器弾薬を持ちながら葵の後を追った。

そして最後に残ったレオンはセイカの雰囲気から自分の記憶に強く残る女性と被り、恐

らくは『彼女』と同じタイプの女なのだと察し、武器を持ちながら1人口を開く。

「全くこれだから女って奴は。」

泣けるぜ……」

誰も居なくなつた教室で『彼女』、エイダを思い出しながらいつもの口癖を零しながら葵達の後を追い、律儀に部屋の電気を消しながら正面玄関へと走る。

しかし、この時誰も予想などしていなかった。

CLOWNが用意したプレゼントの中身の事など一切。

それがこの戦いに如何に響くか、誰も知らないのだった。

E P X I I 『 S ・ W ・ K / A ・ K 』

午前4時、避難民は何時もの避難部屋に立て籠り、正門からバリケードを飛び越えてネフィリムがやって来る。

しかし此処まで来るとネフィリムの対処は皆上手くなってしまうっており、ゆかりは飛び越えたネフィリムの頭をアンチマテリアルライフルで吹き飛ばし、あかりは第3、第4の目を撃ち抜き其処へ皆がフルオートの銃やスラッグ弾を叩き込み、10体来たネフィリムはあれよあれよと言う内に全滅。

マキはアサルトショットガンを壊さず、葵のUMPもジャムを起こす事無く『プレゼント』前の前哨戦を早々と終わらせる事に成功し全員リロードを行い次に備えた。

「ふう、ネフィリム位なら更に変異させる前に倒せる様になって来たね」

「手慣れてきたんやな、ウちらは『P i l l e r l e r l e r l e r i !! ?』∴レオンはん出はつてな」

全員一息付いてる所で再び通信ジャックが発生し、再び代表でレオンがその通信に出る事となり通信タブレットを開きCLOWNのリーダー格との会話が再び始まる。

『本当に素晴らしいな君達は。』

最早ネフィリム10体程度なら変異による強化を発生させる前にダメージ過多で殺しせしめるか。

流石はラクーンシティの生還者にしてDSOのトップエージェント、BSA極東支部精鋭部隊デルタチームのツートップにA・B・F.のオメガ小隊長にして『アルファ』と双肩を成すオメガ1、更に日本国が誇るエージェントに……そして『H・C・F.』のエージェント、京町セイカだ』

「何、セイカがH・C・F.の……!」

「あつちや……何で其処の道化はネタバラシをしちやうかなあ……!」

するとCLOWNのリーダー格はそれぞれの所属と経歴を明かして行き、最後にはセイカが『H・C・F.』……嘗てアンブレラのライバル製薬会社にしてあのウエスカーも一時期身を置いていたBSAA等の捜査から煙に撒かれるかの如く闇に紛れB・O・W.を闇市場に売り捌いている第2のアンブレラとも言える企業であり、今なお実態が掴めず裁く事の出来ない存在である。

レオン達はエイダも所属しているこの組織に驚きを隠せず、H・C・F.を知らない葵以外の全員はセイカの方を向き、セイカは此処でバラされるとは思いもしなかつた為頭を抱えながら溜め息を吐き、レオンの方……と言うより通信タブレットに近付いて行く。

『ふふふふ、如何かな？』

我々の情報収集能力は。

唯一我々が掴めなかったのはオメガーが琴葉茜だった事のみで他の情報は』

「良いからさっさと要件を言いなさい！」

女の秘密を仮面で正体を隠してる臆病な男がバラしたのよ、こっちはアンタの事を今直ぐにでも息の根を止めてやりたいわ!!？」

『おおっと、これは済まなかった。』

お詫びに要件を言おう。

今君達の下にプレゼントを4つ向かわせている所だよ、それを受け取り給

え』

「プレゼントか、一体どんな下らないプレゼントなんだ『ドオオオオオオオオンツ!!』

ドスツ、ドスツ、ドスツ、ドスツ』……何……?!!？」

セイカは情報収集能力を自慢するCLOWNのリーダー格に対してさっさと要件を話す様に怒り心頭で要求し、レオン達もまだプレゼントなる物が残っている為セイカの事はこの際は未だ逮捕なりしないで置く判断を下して置き、そのCLOWNのリーダー格はプレゼント4つを受け取る様にレオン達に言いそれがどんな下らない物かとレオンが皮肉ろうとした所、正門のバリケードが突如破壊され門や椅子、車が宙を舞い噴煙

が上がる。

その噴煙の方から大きな足音が4つ重なり当たりに響き渡り、そして噴煙を抜けてそれは現れた。

人間を超える巨体を誇り、防弾性のスーツを身に纏った死体の肌色を思わせる青白く髪の毛が1本も生えていない人間の形はしてるが明らかに人間では無い存在が。

レオンやマキ達B S A A、更に諜報員のゆかり達やA. B. F. の茜、そしてB. O. W. の運用も行なっているH. C. F. のエージェントであるセイカは知っている、この4体の化物を。

その化物達は、T—G e n e s i sの素となったウイルスの1つであるTウイルスから生まれ、Tウイルス完全適応者の『セルゲイ・ウラジミール』のクローンを用いて作られたアンブレラが作り上げたB. O. W.; Tウイルスの頭文字の名を付けられたモノ、『タイラント』である。

更にこのタイラントは東スラブ共和国で確認された通常よりも巨大(具体的には3m程から5m以上に大きくなっている)で知性も上がっているバージョンアップタイプだとレオン達は気付く。

レオンと近くにいたセイカは通信タブレットを睨み付け、するとC L O W Nのリーダー格はレオン達に機械音声のボイスで大振りの仕草を見せながら嘲笑って見せた。

何故ならタイラントの戦闘力は単体ならネフィリムを超えるだけで無く、このバージョンアップタイプは唯でさえ厄介なタイラントが更に厄介な存在になった特注品と言われるにふさわしい性能に仕上がってる為葵が戦える相手では無い事が明白であるからだ。

茜だけではない、マキやB・Yも、レオンもセイカもその巨体に似合わない俊敏性に加え当たれば即死コースのパワーに押され、ギリギリ避けながら戦うので手一杯であると葵の目に映っていた。

だがこの場に居るタイラントは4体、内茜が1体、他が2人で1体を相手にしている為残りの1体が全くのフリーになってしまっていた。

そしてそのフリーになったタイラントは丁度ゆかり達に瓦礫を投げた奴であり、そのタイラントが同じくフリーの葵に目を付け、葵をその身に余るパワーで葬るべく走り出した。

「ツ!! 『ズダダダダダダツガチツ!!?』」

えっ、ジャム!?」

葵は今からでは逃げ切れない上に逃げたら自分を追って校舎を破壊しまくる為生存者を危険に晒すと考えた葵はUMPから弾丸を放つが、40S&W弾が頭に当たっても全く動じず、更に身体は防弾性のスーツを着ている為葵の持つ武器では通用しないと

この時点で判明し、更に最悪な事に葵のUMPが再びジャムを起こし、その時点で弾丸が放てなくなってしまう。

そして葵の目の前にタイラントは迫りその巨腕を振りかぶっていた。

誰の目から見ても分かる、最早葵は助からない。

この巨腕から放たれたパンチによりミンチよりも酷い原型を留めない肉の塊になってしまうと。

「あ、葵イイイイイイイイイイ!!？」

それを見ていたマキは葵に向かって走り出すが最早間に合わない、葵に巨腕が迫り葵自身も自身の死をこの時点で予期し回避が間に合わないとも判断が付き、そして恐怖心で固まってしまうもう視線すら外せなくなっていた。

全員が葵の方を向き、1秒が長くなるのを感じ取りながらそれを見る事しか出来ず、正面玄関に降りたゆかり達も葵に死が迫る場面を見てしまい無駄だと分かっているも手を伸ばしていた。

そして巨腕は振り抜かれ、葵にそれが直撃——

『ズンツ!!?』

する事は無かった。

その巨腕は空を切らず何かに受け止められ、更に葵は巨腕が直撃寸前に何かがその身

体を抱き抱えて葵を救い出す何かの姿がゆかり達の目に人間が捉えられるギリギリの速度で映り、そして葵を襲う筈だった巨腕は『ゆかり達を知る人物の細腕の片手で受け止められていた』

「……………えっ?」

葵は惚けた声を出す。

自身の視界には茜の姿が間近に映っており、しかし茜は先程タイラントを1体相手にしており自分を助け出せる訳が無く、更にあの巨腕が既に迫っていた為最早助からないと自分でも分かっていたのに葵は命が繋がっており、更に茜が目の前に居て自身を抱き抱えている為訳が分からずに居た。

そしてゆかりやマキ達の視界では全員が知る人物……………京町セイカがタイラントの巨腕を片手で受け止めている異常な光景が映り、その上で茜が葵を『訓練された人間がギリギリで捉えられるか否かの超スピードで助け出した』光景まで映ってしまい全員固まってしまっていた。

更にタイラント達もレオン達よりも驚異度の高い存在が現れた事を察知し、茜とセイカの2人に視線を集めそちらを優先的に排除しようとする思考パターンが結論付けていた。

「葵、此処で待つとって、直ぐ片付けて来るからな……………」

「お、お姉ちゃ……」

葵は茜が此処にいる様にと行って抱き抱えられていた身体を地に腰を付ける形で下され、そのままタイラントに向かってゆつくりと歩き始めた。

その表情は葵を安心させる為に笑顔でいたのだが葵には分かっていて、茜が『本気でブチギレてしまっている』と言う事に。

「なあ〜んだ、やつぱり私と『同類』が居たんなら私が動く必要は無かったじゃない。

まあ葵ちゃん達の事を気に入ってるからそうでも助けてただけだね〜」

「……オメガ1特記事項その1、タイラントタイプとの戦闘に入る、及び特記事項その3、オメガ1の『力』でしか救えない民間生存者が居た場合、以上の2つの特記事項に該当する物としてオメガ1の全リミッターを現場判断により解除、タイラントタイプの排除に移行する……」

セイカと茜はそれぞれの思っている事、及び『オメガ1特記事項』と言う恐らくA・B・F・内で決められた事を口にしながら茜はマキ達が相手したタイラントに向かい走り出し……しかしそのスピードは明らかに人間を凌駕した銃弾すら避けるスピードであり、そのスピードを以ってマキ達が相手していたタイラントの懐に入り、その巨体を『片手で持ち上げながら』元から自身の相手していたタイラントに目掛けて投げ付け、

更にセイカはレオンが相手していたタイラントに目掛けて葵を襲ったタイラントを同じく投げつけ（但しレオンには当たらない様に）、タイラント達は互いを投げつけられた為吹き飛びながら身体が重なるが急ぎ互いに身体を起こし合い、目の前の脅威度が上がった者達の相手をし始めた。

「さあ、ウチの妹やその友達を襲ったお礼参りや……」

「さて、私の気に入った子達を殺そうと動いたんだから……」

『覚悟せえや、デクの棒……!!? / 覚悟なさい、不良品共……』

そして2人もまたそれぞれの怒りの言葉を口にしながら超スピードでタイラント2体ずつ（茜は葵とレオンを襲った個体、セイカはマキ達と茜が相手していた個体）に向かって走り、互いに片方を蹴り上げて吹き飛ばして残った片方の防弾スーツの下にある心臓に目掛けてジャンプしながらパンチを放ち、その部位に『風穴が空き』、更に2人はタイラントの肩に攀じ登った挙句『その首を挽ぎ取る』と言う間違いない無くタイラントと同等かそれ以上の化物染みた動きを見せた。

レオンや資料を見たマキ達はこの茜達の動きを知っている。

これは人間が『何らかのウイルスに感染し、完全適応して人外の力を身に付けた』物であると。

そしてそれは今敵対しているCLOWN達や嘗てのアルバート・ウエスカーが得てい

た力であると。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?!!?!!?』

すると茜と戦っていた個体、葵を襲った個体の防弾性スーツが弾け飛び、身体が赤く染まり巨腕が更に肥大化し指からリツカーの様な、しかし比較にならないサイズの鉤爪が生え、心臓が露出し化物が更に化物らしい姿へと変貌する。

これこそタイラントのリミッターが解除され、制御不能の暴走状態になった姿、所謂『スーパータイラント』である。

そのパワー、スピード、凶暴性はリミッターも兼ねていた防弾スーツを付けてた時と比較にならず、完全武装した30人編成の軍隊一個小隊が全滅する程の戦闘能力を發揮するのだ。

「へえ、私達が怖くなって本気出したんだ、こんな細身でちつぽけな女相手に……ふふ、本当に滑稽な欠陥品だわ〜」

「対象タイラントのスーパータイラントの確定、しかし対応は変わらず。」

殲滅態勢に入る……葵の命を奪おうとした報いや、簡単には殺さへんで……

!!?!

セイカと茜はそれぞれ身構えもせずじつとスーパータイラントを見つめ、片や欠陥品と罵り、片や簡単には殺さないと殺意全開ではあるがジワジワ嬲り殺すとも取れる発言

を取り、スーパータイラントの方から動くのを待っていた。

そしてスーパータイラントは動き出し、その鉤爪で2人の肉体を貫こうと巨腕を突き出した。

だが……2人は再び片方で鉤爪を持ちながら受け止め、更にセイカはその手に持つ鉤爪を握り砕いた後再び心臓を拳で打ち抜き、更にまた首を捻じ切り完全に絶命させる。

一方茜は突き出された方の巨腕を腕力のみで引き千切り、痛みによる怒りから咆哮を上げたスーパータイラントはもう片方の腕を振るうがそれも止められまた引き千切れ、更に茜は次に両足を引き千切り達磨状態にして地面に転がし、怒りの表情を浮かべたままその哀れなスーパータイラントをセイカの方に向かって少しづつ蹴って行き、そしてある程度距離が縮まった瞬間心臓を潰し、頭を捻じ切り文字通り鬺り殺しにした。

『……………』

これら一方的な蹂躪を目撃した葵やレオン達は（B・Y・は茜から自身の秘密を聞かされ知っていたがセイカはそうではなかった為）絶句し、しかし2人はタイラント達を惨殺した所為で返り血塗れになり汚れ放題だったり周りの空気を一切気にせず茜はセイカの数メートル前、その力を以てすれば一気に詰め寄れる位置まで近付いた。

「さて、ウチがあんさんを黒認定した理由その3や。

あんさんはウチの血液サンプルが欲しかったからそれらしい理由付けて検査したんや。

さあ早くそれとT—Genesisのサンプル等を返して貰うで。

どうせT—Genesisの方もドサクサに紛れてサンプル回収してる筈やからな。

それとも……今ウチと事を構えるか？」

「うーん如何しようかな。」

これお仕事だし、返し様が無いってのが正直な所なのよね。

……代わりに私が何でこんな力を得たか知りたくない？

それで手打ちに「興味無いわ、返せ」うわバツサリ……うーん……と言つても本当に無理だし、如何しようかな……」

すると茜はマキ達にはつきりと聞こえる声でT—Genesisのサンプルや茜自身の血液サンプルをセイカが欲していた事を告げ、セイカは返せと迫られていて考える素振りを見せながらも無理だと口にして何やら時間稼ぎの様な会話をしており、それに思考が追いついたマキ達はセイカを囲み逃げられない様にする。

「うーん、やっぱり無理だから返さないね〜♪『ヒュンツ!!?』」

「なっ!?」

するとセイカは片手を上げながら無理と話すと、その片手を突如としてワイヤーに吊るされたチャイナドレスを着た女性が空いている片方の手で取り、そのワイヤーに引き上げられながら宙を舞い校舎屋上にセイカと謎の女性の2人は降り立つ。

レオンはその女性を知っている、その女性は紛れも無くエイダ・ウォンその人だった。

「エイダ!!?」

「エイダ・ウォン!!?」

1年前のあの事件で首謀者のシモンズの刺客に殺された筈じゃ…!!?」

「……如何やら、世の中そんな単純な話では無いみたいだな…」

レオンがエイダの名を叫ぶと、マキやB・Y・も『ネオアンブレラの首魁であったエイダ』を見た事がある為、更にクリスの報告で死んだ筈だとマキが困惑した様子で叫ぶが、B・Y・はあの事件すらも何か自分達の知り得ない裏側があり、その関係でエイダは生きていたと想像し、アサルトライフルを構えながら威嚇する。

「悪いわねレオン、BSAA極東支部のトゥートップさん達にA・B・F・の可愛いオメガ1ちゃん。

私達は仕事だからこの場は一旦逃げさせて貰うわ」

「逃がすと思うてんのかエイダ・ウォン」

すると茜はウィルス完全適応者の力を使い校舎屋上まで飛び上がると2人にハンド

ガンを構えながら詰め寄り再びサンプルを手渡す様に強要し始める。

しかし2人は余裕ある態度を見せながら茜の方を向き、エイダが応対する。

「言つたでしょうお嬢ちゃん、私達はお仕事で来ているの。」

だからサンプルは返せないわ。

代わりにこの子の面白い素性を教えるからそれで手打ちにしましょう?」

「んなもん要らんわ、さっさとサンプル返すか此処で死にはるか選ぶんや!」まあ聞きなさい、この子がウィルス完全適応者の力を持つ理由は本当に面白いんだから」

………

エイダはセイカの様子にセイカの素性を明かして手打ちにしようと交渉し、しかし茜は交渉する気など無い為引き鉄に指を掛けいつでも撃てる様にする。

しかしエイダは全然余裕があり、その話を聞かせればこの場を脱せられると確信を持ちながら笑みを浮かべ、セイカは自身の汚点を自分の口以外から話される為やれやれと言つた態度を見せていた。

そして、エイダはそれを口にした。

「この子の名前は京町セイカ、だけど隠している名があるのよ。」

その名前はセイカ・W・京町……Wは、『ウエスカー』よ。

つまりこの子はアルバート・ウエスカーの子の1人なのよお嬢ちゃん、レオ

ン

『なっ!!?』

エイダははつきりとセイカの事をアルバート・ウエスカーの子と言い放ち、レオンはジエイク以外にもウエスカーの子が存在していた事、茜はどうせ偶然何らかのウィルスに完全適応した者程度にしか考えていなかった事でウエスカーの子と言うその言葉に驚いてしまい、一瞬反応が遅れてしまう。

「それじゃあまたねレオン、お嬢ちゃん。」

また近い内に会うかも知れないからその時もよろしくね」

「じゃあね茜ちゃん、皆。」

皆の事を気に入っていたのは本当だから危なくなつた時があつたら助けてあげるね〜♪

後、このウオツカも貰つて行くわね〜! 『ボン、ヒュンツ!!?』

「あ、待ちいや!!?」

エイダとセイカ一瞬の隙をつき、エイダのフックシヨットによりエイダの身体にしがみ付き(但しタイラントの血塗れの為若干エイダに嫌な表情をされながら)、更に何処に隠していたのか先の戦闘中でも割れなかつたウオツカの瓶を見せながら2人は去って行き、反応が遅れた茜達はその後ろ姿を見る事しか出来なかつた。

そうしてまんまとエイダとセイカに出し抜かれてから2分後、茜は東の空から朝日が登り始めたのを見届け、更に輸送機の音が迫っているのを確認したレオン達はその報告を見るとBSAAの輸送機、そして途中で合流したのかA・B・Fの輸送機までが近付いており、バイオテロ発生から2日経過して漸くマキや茜達は仲間達がやって来た事を知り、そして何よりこれから籠城では無く本当の反撃が開始される事を予感しながら輸送機を眺めていた。

「……………」

しかし葵だけは、茜がウィルス完全適応者の力を見せた事に困惑し、それが自分のまだ知り得ない事の1つなのだと悟り、そしてT—Gene-sisは琴葉紅が作り出してしまった悪魔のウィルスである事。

これら全てを加味して、葵には決断の時が迫っているのであった……。

EP X I I I 『舞い降りた英雄と葵の決意』

日の出から数分後、バイオテロが起きた3県1都にB S A A各支部、及び欧州本部からの救助隊と鎮圧隊がそれぞれ現着し、合わせてA・B・F。もまた同じ様にB S A Aに随伴し、そして東京都練馬区のR O I C E学園に輸送機からロープで屋上、校庭にそれぞれ隊員達が降り立ち、輸送機が複数台着地可能な広さの校庭を持つこの学園にB S A A機が2台降り立ち、他の輸送機は此処以外の着陸可能地点へと隊員達を乗せて向かう。

そして降りて来たB S A Aからは北米支部のアルファチームと極東支部のデルタチームが、A・B・F。はアルファを含めたオメガ小隊とシータ小隊の生き残りが降り立ち、生存者達が避難している部屋の安全確保をした後に校庭にB S A A機が2機着陸し、それぞれ生存者達を乗せる準備を始めていた。

そしてアルファチームの隊長であるクリスとレオン、更にデルタチームのB・Y。と副隊長のマキが再会を果たし言葉を交わす。

「レオン、B・Y。、マキ！」

3人共生存者全員合わせて無事だな!?？」

「クリスさん！」

「来てくれたのか、クリス！」

「やっと孤立状態から解放されたか、助かったぞ、クリス」

4人はそれぞれの無事と救援、更にアルファやデルタ、オメガ小隊の隊員達が次々に37名の戦闘組以外の生存者達をガスマスクを付けて連れ出し、最後に葵にガスマスクを付けてウイルス感染の最終確認を行なっていた。

しかしそんな安堵の時間の中でクリスの目にはタイラントが無惨な殺され方をされているのが映り、何がどうやってこの様な殺し方が出来たのか分からずレオン達に問い質した。

「…それと、その辺に転がっているB. O. W. は報告にあつたネフィリム以外にタイラントの死体まであるんだが、あのタイラント4体は誰があんな殺し方をしたんだ？」

「…生存者の中に、ウイルス完全適応者が2人居て、その2人が2体ずつ通常のタイラントとリミッターが外れたタイラントを蹂躪したのさ。」

1人はそこで血を拭かれているあの少女、彼女がA. B. F. のオメガ1、アカネ・コトノハだ。

そしてもう1人はセイカ・キョウマチだ」

「で、そのセイカはH・C・F.のエージェントだったらしく、T—G e n e s i sのサンプルと茜の血液サンプルをまんまと手に入れて生きていたエイダ・ウオンと共に去って行ったよ。

それと……京町セイカは、ジエイク・ミューラーと同じ、アルバート・ウエスカアの娘だったらしいんだ」

クリスはレオンとB・Y.に報告を簡潔に聞くと4重の驚く情報が飛び出た為驚愕の表情を露わにしていた。

そう、レオン達の話はとても飲み込み切れる話では無いのだが飲み込むしか無く、告げられた事を復唱しながら頭の中に整理して行く。

「あの少女がオメガ1……それにウイルス完全適応者……それにエイダが生きていて、もう1人のウイルス完全適応者はエイダの仲間で、ウエスカアの娘……バカな……」

「俺は茜からT—G e n e s i sの性質検査を頼まれた際にウイルス完全適応者だつて事やセイカが怪しいって聞いたんだが、まさかウエスカアの娘なんて今でも信じられないって俺も思うよ。

それにエイダが生きていた件についてだが1年前のあのバイオテロ事件、俺の妄想に近い予想なんだがあの事件にはもつと裏があるんじゃないかってエイダの生存から感じたんだ。

だからB S A Aとしてはアリアス事件で見つかつてないマリア・ゴメスの死体を含めて本当にディレック・C・シモンズが首謀者でエイダは利用されただけの存在で単純な話だったのか、この事件が終わった際に確かめなければならなくなつたと思ふ」

クリスは衝撃の事実を飲み込まざるを得ない状況にB・Y・は1年前の中国のバイオテロ事件すらも何か裏があつたのではと眩き、クリスもそれを聞き調べる必要があるとし、更にエイダの生存を元から知つていたレオンは今思い返してみても、自分達を助けたエイダとクリスが追つていたエイダ、あれは本当にⅡの存在だったのか……そんな疑念が浮かび上がり、レオン自身も確かめなければならぬと感じ始めていた。

そんな中でマキは茜の方に近付いて行き、今にも何か爆発しそうな気配を漂わせて表情も剣幕を張っており、正に一触即発と言つた事態になりクリス達B S A A隊員とオメガ小隊と近くにいたA・B・F・『アルファ』が動こうとしたが、レオンやB・Y・更に茜自身がそれらを止め茜の方からもマキに近付いて行き、話す内容はもう予想が付いている為それに自身の嘘偽りのない考えを伝える氣でいた。

「…琴葉茜、いや、オメガ1。」

「アンタウィルス完全適応者だつたんだ」

「せやな、A・B・F・結成時から既にこの『力』はあつたで。」

但し特記事項4つ……1にタイラントタイプとの戦闘、2にウィルス完全適応者との戦闘、3にこの力でしか救えない民間の生存者が居る事、4にアルファ大隊長の許可が降りる事、この4つの内2つ以上の条件が揃わんと使っちゃあかんってアルファ大隊長から言われとんのや」

「……つまりBSAA隊員はその3番には当たらなかつたからアンタはその力を使う許可すら得られないから私等の仲間ごとB・O・W 殲滅命令を実行したと?」

「せや。」

そこでウチは神様じゃあらへん、だからこの手で救える命は限られてんのや、『人間』やからな、

まあ、だからと言ってあんさんに赦される訳あらへんのは間違い無い訳やし、その恨みも何もかもウチにぶつけてかまへんよマキはん」

茜はマキに問われた事を自身に定められた特記事項と合わせて答えて行き、今までの絨毯爆撃等でBSAA隊員を殺してしまった事に対して変に後悔していると言う態度を見せず、しかし自身は神では無くあくまで救える命が限られた存在、『人間』の枠に収まっている事も告げつつマキの怒りや憎しみ等を受け止めると言う覚悟をこの場で見せ、一触即発の事態が続く。

そしてマキの手がハンドガンのホルスターへと伸びて行き……そのまま溜め息

を吐いてやれやれと言った仕草を見せてハンドガンに伸ばした手を挙げてマキ自身がアホらしいと言う雰囲気を出しながら口を開く。

「はあ、全く……変に謝ろうもんならその頭に1発撃ち込もうとか思ってた私がバカみたい。

良いよ、この件についてはこれ以上は追及しないしアンタに対する負の感情も忘れないけどアンタは葵を守る為に力を使った上に『葵と葵の友達』を襲おうとした其処の肉達磨に怒りを見せた。

それら全部踏まえてこの事件の間は蒸し返さないって約束してやんよ。

……けどその前に、アンタのその力をいの一番に説明する私の友人が居るって事を忘れない様に」

「ああ、葵やろ……」

マキは茜の事を赦すつもりはないとしながらも諸々の理由からそれらをこの事件の間は蒸し返さないと約束し、持ち場に戻ろうとする。

しかし、その前に茜に対しその力の事等を説明しないとならない相手……葵に話し掛けて来いと促し、茜もそれが良く分かっているのか葵の方へと向かい、自身が化物と言われようと聞かれた事はある程度は答えないといけないと考えBSAA隊員達が保護している民間人の中にいた葵の下に向かい、そのまま話し掛け始めた。

「葵、ウチに聞きたい事があるんやろ？」

「答えられるもんを今答えたるから言ってみ？」

「お姉ちゃん……じゃあ先ず、お姉ちゃんがあの力を持つてたのは何時から？」

「どうやって手に入れたの？」

「やつぱ其処やろなあ……答えられへん部分まで混じつとるけど葵が納得するまで答えらるつてウチは決めてるから、取り敢えずこの力を手にしたのはウチがあの男を殺す前から、んでもつてどうやって力が手に入ったかっちゆうと初期型のT—Genesisを使われて、やな」

「茜は葵の問い掛けに自身が知る真実の中で答えられない部分が多く混じるこの力のことについて腹を括り話し始め、それらを聞き葵は何処か納得したような、そんな表情を浮かべていた。」

「……やつぱりそうなんだね。」

「あの人の子育てなんかする人間じゃないのに私達を研究施設に置いていたのは、T—Genesisの実験台にする為だったんだね……」

「……まあ、大体合つとるで」

「じゃあ私も、私にも、T—Genesisが「それは無いで」……えっ？」

「それは無い、何せあの男は確かにウチら2人を実験台にしとったけど、葵にはT—G

genesisはウチが知る限りでは使われてへん。

これは間違いあらへん、その証拠にウィルス検査やら何やらで引つかかった事も今まで変な力が使えたりした訳じゃあらへんやろ？

だから違う……その筈なんや……！」

葵も流石に馬鹿では無い為自分達がT—Genesisの実験台として研究施設で育てられた事を悟り、茜もそれを肯定したが唯一否定したのはT—Genesisが葵に使われたかと言う部分であり、その否定内容通り自身は何らかのウィルス検査に引つかかりもしなかった上に妙な力を発揮した事はこのバイオテロの最中であつてもなかつた為茜の言葉に嘘偽りは無い……と感じたが、茜の悲痛な表情でその筈だと言う言葉を使った事から、茜はまだ話せない何かがあるが、自分にはウィルスの力は無い筈だと言うほぼ確信めいた何かがあると考え、これ以上は茜を傷付けるだけである為それでこの場は納得する事と考え茜を見た。

「うん、分かつたよ。」

これ以上話せないなら私はそれで良いよ。

だからお姉ちゃんも泣きそうにならないでよ、ね？」

「……葵は、ウチの事バケモンと思つたりせえへんの？」

あんなバケモンを一方的に鬪り殺したのに」

「ううん、お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ。

寧ろスーパーガールって感じでカッコ良かったよ！

……ただお茶の間に流せるか分からない位スプラッターだったけどね「あー」茜は自身が化物と否定される覚悟で葵に話し掛けて来たが、その葵は寧ろ茜をスーパーガールと褒め称え、その上で姉である事は変わらないと告げられ何処か心にあつたしこりが取れた事を感じ、たつた一人の妹に嫌われずに済んだと言う安心感に心が満たされていた。

それらを見ていたマキは茜、葵の両者の関係が崩れないで良かったと思いつつ何とか表情に出さない様にしながらB・Y・達の方とまた合流して置き部下達の報告を待っている。とアルファチームとデルタチームの医療班がクリス達の下に来て報告を開始する。

「隊長、全生存者のウィルス感染が無い事の確認が終えました。

何時でも生存者38名と飼い犬1匹を避難地点に輸送可能です！」

「よし、なら今直ぐ生存者達を輸送機へと乗せるんだ！」

俺達は今からこの死の街と化した東京で他の生存者の救出、及びB・O・W・の殲滅任務がある！

彼等を無事に送り届けたのを見届けた後、作戦開始に移る!!？」

「デルタチームもアルファチームと同じだ！」

それからデルタチームの皆、孤立した俺やマキ達を助けに良く来てくれた！

それでいて生存者の安否確認を優先した事も褒めてやるぞ！

……お前達、良く此処まで耐えてくれたな。

これからは俺達は共に行動する、だから今まで通りに行くぞ、良いな!!？」

『了解!!?』

クリスとB・Y・の掛け声にそれぞれのチームメンバーが応答し、その場の士気が上がり全員がこれより1年前の中国でのバイオテロと同等かそれ以上の危険な任務に向かう覚悟を見せ、2人の隊長に納得の行くモノを見せつけた。

同じ様にA・B・F・の『アルファ』大隊長と茜が小隊全員に喝を飛ばし任務に当たる様に士気を高めた。

一方ゆかりとあかりは日本政府からの指示を仰ぎ、すると直ぐ返答が帰って来た為クリス達の方へと向かって来た。

「貴方がBSAA北米支部のクリス・レッドフィールドさんですね？」

初めまして、私達は日本国諜報員の結月ゆかりと継星あかりです。

先程日本政府に今後の指示を仰いだ所、クリスさん率いるアルファチームと共に行動して東京の担当地区の生存者救出後に首謀組織CLOWNの抹殺命令が下され

ました」

「なので我々は生存者とは共に避難せず、貴方の指揮の下 B・O・W の殲滅と民間人救助に当たらせて頂きます。

どうぞよろしくお願い致します」

「こんな若い子がエージェントを？」

日本には労基法が無いのか？「あ、私達は過去に海外の少年兵として活動していた為に諜報員に抜擢されました。

なので見た目通りの者とは思わないで結構ですよ」

……そうか、なら俺のチームに入るからには今からお前達も友であり、家族だ！

だからこそ死なずにこの死地から民間人を救出し、アンブレラの意志を継ぐと言った道化達を討ち斃すぞ、良いな！『了解です!!?』

うむ、では生存者達を輸送機に乗せるぞ！

全員その間に B・O・W が襲って来ないとも限らない、警戒を怠らず警護するぞ!!?」

如何やらゆかり、あかりは日本政府にクリスの指揮下に入る様命令されたらしくクリスに挨拶と部隊下に入る事を伝え、クリスもまた彼女達に自分達流のチームの意義を伝

え任務に当たる様に命じ、更にアルファチームメンバー全員に輸送機に生存者全員＋ずんだもんを乗せて行き、そして周りを徹底して警護している中で案の定ゾンビが輸送機の音に釣られて学園内にバリケードが破壊された正門から侵入、アルファチームとデルタチーム、オメガ小隊達は事前に伝えられたor実践した此度のゾンビの対処法を行いネフィリムに変異させる事無く始末して行く。

そうして葵を含む生存者全員が輸送機に入るとクリス達は直様離陸開始の命令を出し輸送機のプロペラが回り始めた。

だが葵は本当にこれで良いのか？

姉やマキ達に後を全て任せて自分はもう日常へのうのうと戻って良いのか？

知るべき事を知らずにいて良いのか？

愚かな父が作り上げたT—G e n e s i sをこのまま他人任せに、姉に全て押し付けて良いのか？

そんな考えが頭に過り、表情が険しくなっていた。

すると横にいた藍や目の前のずん子達は葵の考えを察しながら微笑み掛けながら話し掛け始めた。

「行きたいんですよね葵ちゃん？

なら行って下さい」

「僕達は結局送り出す事位しか出来なかった。

けれど君は違ったよ」

「葵ちゃんは勇気を出して私達を守る為に戦って来ました。

そして今、茜ちゃん達を置いては行けないと貴女は考えている筈ですわ」

「なら簡単ですよ、さっさと茜さん達のところに行つてやるべき事、知るべき事を知つて来るだけですよ」

「ウナは難しい事は東北と違つて分からないけれど、葵さんが後悔とかするよりも笑つて行ける方に行つたら良いんだつてウナは思うんだ！」

「けど葵、行くからには約束してね。」

必ず生きて帰つて来る事、そして茜やゆかりちゃん達を守つてあげる事よ。

私達には出来ないけど本当に勇気がある貴女になら出来る、だから……………行つてらっしゃい、葵」

「皆、お母さん……………うん、行つてきます!!?」

葵は如何やら自身の考えを皆に察せられる程表情に出してたらしく、そしてずん子、コウ、イタコ、きりたん、ウナ、部外者故に何も言えないが考えが一緒だと言う金淵、更はずんだもんのエールの表情、最後に藍からの行つてらっしゃいの言葉を受けた葵は燻つていた火が灯され、自身が知るべき事、T—G e n e s i s に対する自身の決着、更

に茜達と共に最後まで戦うと言う意志を固めて輸送機の席から立ち、今にも閉まりそうな後部ハッチから飛び降りる為に走り出した。

「ん？」

あ、おい君!!?」

護衛のBSAA隊員が気付いた時には既に遅く、葵は機体から飛び降りそのままハッチは閉まっていき皆の自身を送り出す表情がその先に見え、そして母や友、教師や2夜を共にした生存者達に見送られた葵は最後に手を振り、その直後にハッチは閉まり機体は離陸して行った。

そうして民間人が事件に首を突っ込むと言うややこしい事態が発生しクリスは頭を抱え、マキ達は予想してましたよと言わんばかりの表情を葵に向けていた。

そんな葵に茜は近付き、その覚悟を問い質し始めた。

「ええんか葵？」

こっからは更なる地獄やで？

それに葵は民間人やったんや、それなのに戦場に立つ、その意味は分かつとる

のか？」

「全部分かつてるよお姉ちゃん。

民間人が戦場に立つ程迷惑な事は無いって。

でも私はただの民間人じゃない、この事件の真実を知る権利がある人間なの、だからそれを行使するよ。

私の記憶の真実や、何でT—G e n e s i s が今になって日本を、世界を脅かす事になったのか。

それに……私の父はT—G e n e s i s の初期型をこの世に生み出してしまった、それが改造されてパイオテロに使われた、なのにマキさんやゆかりさんやあかりちゃん、レオンさんにB・Y・さん達に任せ切りにするなんて無責任過ぎるよ。

だからこそ私にはT—G e n e s i s を根絶する責任があるよ、お姉ちゃんと同じく。

だからお姉ちゃん……もう2度と、離れ離れになんかさせないよ、私も戦う……私の意思で」

茜の問い掛けに葵は自分が決めた覚悟を全て視線を離さず口にし、それが嘘偽り無く本当に心に決めた事である事を示す。

茜はそれを聞き一つ溜め息を吐き、しかしこうなると予測出来た事を示すかの様な表情を見せた後肩を持ち、輸送機に乗る際に返却させた予備のハンドガンを再び持たせ、最早何も言わずに葵を守りながら、否、共に戦おうと決め領いて見せた。

葵はこれらの対応から茜が自分が来る事を予め予測し、更に記憶の真実を知ろうとす

るとすら考えていた事を知る。

そしてそれは逆を言えば、その真実の記憶にはこの事件に関わつて来る何かがあると双子故に伺い知つてしまった。

ならば尚更引けないと葵は銃を強く握り、茜に頷き返した。

それらを聞きクリスはこの葵と言う少女は民間人にありながらも真実を知る権利がある特殊な人物だと理解し、ならば自分は如何するべきか、否、此処まで来てしまったなら彼女の思いのままに行かせ、しかし無茶をさせないだけだと即時に判断しB・Y・とレオンにアイコンタクトし、彼等も同じ事を考えており3人は葵に近付き話か掛け始める。

「アオイと言つたか？」

先程の会話から確かに君にはそれらの権利があると言えるだろう。

だがそれは今までの日常を捨て去つてもやるべき事なのか？

ほんの少しだけ俺達にも答えて貰うぞ」

「はい、先程も言った通りこの事件には私達の父、琴葉紅がスペンサー元総帥の理念を叶えると言う妄信から作り出されたウィルスが何らかの経緯でCLOWNの手に渡り、そして同じ思想を持つ彼等に使われてこの地獄の光景が生まれてしまいました。

なら、私達はT—Genesisをこの世から抹消する権利があります。

それに私の記憶は私が傷付かない様にとお母さんが偽りの記憶を与えてくれて今がありますが、私はもう決めたくて、その偽りの記憶に隠された真実の記憶を知ると。

そしてお姉ちゃんの態度から隠された真実の記憶の中にこの事件に関わる何かがあると双子の直感で知りました。

だからもう私は梃子でも動かないし引かないですよ。

ですの……私も戦わせて下さい、皆さん」

「だとさ、如何するよこれ？」

本気で最後まで付いて来るぞクリス、レオン？」

「ならば仕方ないな、俺達が無茶しない様に監視しながら戦うしか無いな。

ふっ、一度覚悟を決めてしまった女はもう男にはその覚悟を変えられないらしいからな。

厄介な事になったなクリス、B・Y。

全く泣けるぜ、本当にな」

クリスの問い掛けに葵は茜にしたのとほぼ同じ返答をし、最早誰にも葵の考えを変えられないとしてB・Y・とレオンが軽口を叩き、クリスも自分の妹のクレアや相棒のジルの様に葵は根底は芯が強く、一度覚悟を決めてしまえば折れる事が無いと伺い知り、

もうそれ以上の問答は無駄だと知り自分達が守りながら戦えば良い、どうせ始末書が少し増えるだけだと割り切り葵の応えに切り返した。

「……分かった、ならこれ以上は聞かない。」

だが無茶はするな、君は確かに戦う覚悟を決めたが民間人である事には変わらないんだ。

だから無茶をして死ぬ事は許されない、良いなアオイ・コトノハ！」

「はい!!？」

そうしてクリス達にも覚悟を示した葵はこれから起きるCLOWN掃討作戦への参加が認められ、しかし無茶は許されないとクリスに忠告され、葵はそれに力強く返事をする。クリス達は頷き、それから全隊員達に隊列を整える様に指示を出し全隊員が隊列を整えて行く。

そんな中で葵の横をマキがすれ違い、少しその足を遅めて葵の耳に届く様に口を開いた。

「良かったじゃん、あのレオンさんと同じ位の英雄のクリスさんに根性を認められるって相当凄いよ」

「クリスさん……そうか、あの人がレオンさんやB・Y・さんにマキさん達が言っていたクリス・レッドフィールドさんなんだ……」

マキからクリスに認められた事を褒められた葵は改めて、食事の時やお風呂の際にマキ達に説明されたアンブレラ打倒に貢献し、B S A Aの創立メンバーとして今なお最前線で戦う道を選び日夜B・O・Wを斃す英雄クリス・レットフィールドの話聞いていた事を思い出し、改めてクリスのその背中を見れば確かに様々な人が彼に憧れ後を着いて行く、そんなラクーンシティ生還者のレオンと同じ様な頼もしく勇気を与えてくれる佇まいだと感じ自分はそんな人に根比べで勝ってしまったんだと知り、ならば彼等からの期待を裏切らない様にしようと思いつつB S A A、A・B・Fの整列に合わせようとするのだった。

E P X I V 『作戦開始』

クリス達の合流から30分経過してA M : 5 : 33。

バイオテロ発生から約2日経過してから漸く反撃の狼煙を上げる時が来たと現地地
戦い続けたB・Y・やマキ、茜や葵、ゆかりとあかり、そしてレオンは感じ取っていた。

そうしてB S A A 隊員は各チームが30人態勢で整列し、A・B・F・はオメガ小隊
とシータ小隊の生き残りを合わせて20人程（オメガ小隊が隊長含め15名、シータ小
隊は元々20名以上だったが現在は隊長含めて6名しか生き残っていない）が隊列を乱
さず整列し、各チーム及び小隊長が壇上前に集まり、レオンや現地協力者の葵やゆかり、
あかりは壇上の横に起立しながらクリス達の話が始まるのを待っていた。

そしてクリスが初めに全隊員に作戦概要を説明し始めた。

「全員整列!!?」

これより作戦概要を説明する!

先ず我々はこのR O I C E 学園から出た後、B S A A はアルファチームとデル
タチームで東西に分かれ生存者の搜索、及び救出を行う!

そしてA・B・F・のオメガ1とエージェントケネディ、デルタ1の潜入調査

によりCLOWNのアジトの座標が残り6ヶ所になった!!?

我々はその6ヶ所に向かいつつ生存者救出を行い、そしてCLOWNとB・O・Wを一気に掃討する、これが我々東京のアジトが集中する位置に来たチームの役割だ!!?

俺達のやる事は多い、だが俺達は1人じゃない!!?

隣には背中を預けるに値する志を同じくする者達が居る!!?

臆せずB・O・Wに立ち向かい、そして此れを斃す味方が居る!!?

故に、全員で生き残りこの馬鹿げたバイオテロを終わらせるぞ、良いな!!?

『了解!!?』

よし、次にデルターからの説明がある!!?」

「アルファより話を引き継いだデルターだ。」

先ず分かれ方に関してだが、アルファチームが東地区に、デルタチームが西地区に向かつて行動を開始する!

どちらも先行隊のチャージャーリーチームの報告から感染者及びB・O・Wの数が相当数居る事が判明している。

そこから逆算して……最悪の場合生存者が全て死亡済みの可能性すらある。

だが我々は僅かな可能性すら諦めずに生存者を救出する任務を帯びている!

よって全力を尽くし任務に当たる様に！

なお協力者としてアルファチームには日本国エージェンツの結月ゆかり氏、継星あかり氏が、デルタチームにはアメリカ大統領直轄組織D S Oのレオン・S・ケネディ氏と民間協力者の琴葉葵氏が同行する事になる。

エージェンツケネディの実力は我々は既に知っている者が多い為敢えて言わないが、日本国エージェンツの両氏と民間協力者の琴葉葵氏はこのR O I C E学園での籠城戦に於いて生存者を誰一人として死なせる事無く守り抜いた勇敢な者達である。

よって我々の背中を安心して預けられ、また彼等の背中も守り互いを支え合いこの絶望的な状況下の中から初めは生存者の発見に尽力せよ、デルターからは以上だ！

次にA・B・Fの行動指針をアルファ大隊長から説明がある。

ではアルファ大隊長、指針の説明を―

先ずクリスとB・Yがそれぞれの持ち味を出した説明を行い、葵はレオンやマキ、茜達と共に西地区を周る事を理解し、奇しくも始まりのメンバーで再びこの街を周る事になったのは恐らくゆかり達がクリス達のほうに行く関係もあるが、それよりもレオンや自分、マキ達がコンビネーションが上手く組める為に決まった事でもあったりある意

味運命の悪戯だったりもするだろうと考えていた。

そんな中でA・B・F.のアルファ大隊長：ガスマスクを被り、素顔を見せぬ不気味にも思える人物の話に耳を傾け始める。

「A・B・F. オメガ小隊、及びシータ小隊へ。

我々は20名余りの部隊であるが此れを更々に半数に分けてBSAAのアルファチームとデルタチームに同伴する。

先ずシータ小隊全員とオメガ2からオメガ5はアルファチームと共に作戦に当たり、残りは私と共にデルタチームに同伴する。

我々はBSAAにとってみれば本来なら歓迎されない者達であるが、そんな我々を彼等は過去の事案を蒸し返す事無く手を組む道を選んだ。

よって我々はその意思を汲み取り共に生存者救出とB・O・W. 抹殺を図る！

以上が我々の行動指針だ。

……最後にオメガ1とアオイ・コトノハ氏、両名より話がある。

両名、前へ」

「え、えっ!? 「大丈夫や葵、ウチに合わせとき」

……ゴクッ」

『アルファ』大隊長からオメガ小隊、シータ小隊の混成部隊はB S A Aアルファチームと、残りの『アルファ』大隊長を含むメンバーがデルタチームと共に行動して任務に当たたる事になり、A・B・F・メンバーはいよいよ生存者救出とB・O・W・殲滅が出来る」と意気込み、特にシータ小隊は復讐心に燃えている為何時導火線に火が着き爆発するか分からない様な状態であった。

そしてB S A Aと共に任務にあたる指針を言い終えた『アルファ』大隊長はそのまま後ろに下り話が終わる：と思いきや茜と葵に話が突然話が振られ葵が困惑していると近場に居た茜が合わせる様にと話し、葵は固唾を飲みながら壇上前へと来る。

そしてB S A A隊員達は今まで知らなかったオメガの素顔と葵を見比べて瓜二つだと感じ一気に視線が集まり葵の緊張が高まり、そんな彼女の肩を解すべく茜、オメガIが口を開く。

「A・B・Fの皆はおはよう、そしてB S A A隊員諸君は素顔では初めまして、ウチこそがオメガ小隊長のオメガIや。

何故『アルファ』大隊長がウチやこちらの現地協力者である琴葉葵に話を振ったつちゆうのは実を言い張るとウチらの過去にその答えがあるからや。

8年前、愚かなウイルス研究者が初期型のT—Genesisを作り上げ、ウチはその科学者を殺してT—Genesisその物及びデータを抹消した筈やった。

が、T—Genesisは改良を施され今この国で猛威を奮つとる。

そしてその愚かな科学者つちゆうのは……他でもない、ウチの父親や。

更に此方の琴葉葵はウチの双子の妹やけど紛れもなく一般人やった。

そんな彼女が何故ウチ達と共に戦う道を選んだのか……それはウチと同じ想いを持つからや!

……葵、土台は仕上げたで、後は野となれ山となれ好きに言つとき」

茜は葵が話しやすい様な土台やキーワードを口にしながら話を進めて行き、最後は自身と葵は同じ思いを持つ者と締め括り葵にバトンタッチする。

そうして此処までの話の中で自分が言うべき事、伝えるべき想い、それらを手探りで纏めながら話し始めた。

「……皆様おはようございます、私は、このバイオテロが起きるまで唯の一般人として、更に姉である琴葉茜は死に、日夜オメガ1として戦い抜いていた事を知らなかった琴葉葵です。

私が現地協力者としてこの場にやらせて頂いた理由は大きく3つあります。
1つは私の記憶に関して。

実は私は今後の人生を生きる中で傷付いて行かない様にと母から記憶操作を受け、姉がウイルス研究者だった父を殺害した記憶とそれ以前の記憶は全て忘れ去

り、先に述べた通り姉が死んだ事になってました。

しかしバイオテロ発生により姉は私の前にオメガ1として現れ私を救いました。

其処から私は詳細を省きますが記憶操作を受けていたと知り、その操作された記憶の真実が知りたいからと言う理由もありこの場に残りましたが、これはあくまで本題ではありません。

本題は、残り2つにあります」

葵はB S A A隊員とA・B・F隊員達に視線を送りながら先程までガチガチに緊張していた一般人とは思えない一言も囁まない話術を見せ、全員がその真剣で強い思いを秘めている葵に視線を釘付けにする。

そして葵は本題2つを口にする為に深呼吸をし、再び口を開き始めた。

「2つ目はオメガ1であり姉の琴葉茜氏が先述した様にT | G e n e s i s を初めにこの世に生み出したのは我々の父です。

その為私には、そのT | G e n e s i s を使ったバイオテロに対して介入し終息させる義務があるのです、そう、ウイルスを作り出してしまった者の娘としてその義務が。

そして3つ目、今回のバイオテロで使われたT | G e n e s i s は確かに私達

の父が作った物ですが、姉の言葉が真実であるなら本来このウイルスは父が死んだ時点で姉が抹消した筈の代物なのです。

しかし今バイオテロは発生し、更に最悪な事に父が作った初期型よりも改良が施され日本を脅かしています。

故に私やオメガ1は知らねばならないのです、何故改良型のT—G e n e s i sが生まれたのか、首謀者のC L O W NはT—G e n e s i sは何処で手にしたのか、それら全てを知り、そして今一度この世からこのウイルスを葬り去らねばならないのです、それが私が此処に留まった理由です！

……しかし私は、ほんの数日前までは銃を握った事の無い唯の一般人でした。

そんな私がこのウイルスと戦うには余りにも力不足なのです、だから……：恥を忍び、バイオテロ鎮圧の専門家の皆様のお借りし、私と姉の目的を果たさせて頂きたいのです。

ですから……今一度お願い致します、こんな力不足な私に、戦う力がある姉とは違う私に皆様のお力を貸して下さい、お願い致します!!？」

葵は残り2つの目的を力の無い一般人目線から話し、抱く想いは姉と同じだが肝心のその想いや義務を果たす力を自身は持たないと口にし、更に恥を忍びと添えながら皆の

力を貸して欲しいと話して締め括りに深々と頭を下げ、バイオテロの専門家達の答えを待った。

すると……先ずマキから拍手が挙がり、それに続き茜や他の皆も拍手を送り、勇気を出してこの場に残った1人の少女にエールを贈っていた。

「皆様……ありがとうございます!!？」

葵は最後に一言感謝の言葉を口にしてか再び頭を下げ茜と共に元の位置に戻って行った。

そして再びクリスが前に出て全員の拍手が止み、再び整列し彼からの言葉を待った。

「以上で作戦概要の説明は終わり、即時作戦行動に移る！」

全員、何か意見がある者は居ないか？

居ないならこのまま作戦開始とするが？

……よし、ならば作戦開始だ!!？」

各自隊列を乱さず作戦行動に移れ!!？」

クリスは最終確認の有無を確認した後作戦開始の合図を送り、全員一斉に敬礼してアルファ、デルタを中心とした2部隊に分かれ始め正門へと走って行く。

茜達は勿論の事レオン、葵、ゆかり、あかりもそれぞれの部隊に合流して小走りで正門を抜け東、西に分かれ始めた。

葵、マキ、茜、レオン、B・Y・の5人は東に向かったゆかり、あかり、クリスやA・Fの仲間達に視線を送り、それに気付いたゆかり達は無言で頷きそのまま走り去って行った。

これが今生の別れでは無く、互いにまた生きて再会すると心で誓い合いながら。
「おっとそうだ隊長と副隊長、2人にそれぞれプレゼントがあるんだった！」

ほら、御守りのカスタムハンドガンと愛用のカスタムショットガンだ！」

「やつと私の愛銃キター!!？」

さあ、これでB・O・W・を全部やってやるわ!!？」

「ふむ、メンテナンス中の為に置いてきたが矢張りグロツグよりもクエントが作ってくれたこのカスタムガバメントの方がしっくり来るな……よし、行くぞお前達!!？」

B・O・W・ 共に一泡吹かせてやれ!!？ 『了解!!？』

するとデルタチームの隊員の1人がB・Y・とマキにそれぞれ愛銃のカスタマイズハンドガンとショットガンを手渡す。

B・Y・のカスタムガバメントは欧州本部技術班の『クエント・ケツチャム』が彼からの依頼により、45ACP弾を素早くB・O・W・に叩き込むべくフルオート化、及びマガジンを15発タイプロングマガジンにし、更に銃身その物が破損しない様に強度強化し、弾丸のブレを無くす為の専用フォアグリップが取り付けられ、威力強化の為

に銃身の長さまで変えられ、更に夜間用にレーザーサイトが取り付けられ暗視ゴーグルと合わせて昼間夜間問わず安定した殲滅率を誇り、ギリギリガバメントと分かる様に仕上がったハンドガンである。

が、ニューヨーク州でのバイオテロの後に定期メンテナンスに入れていた為今事件初期段階では持つて来られなかった装備である。

一方マキは琴葉一家の監視任務の際には一々極東支部に置いて来ざるを得なかったカスタムショットガンを受け取り気分が高揚しB・O・W殲滅に更に力を入れる様になっていた。

このカスタムショットガンもクエントが作成し、マキのアサルトショットガン破損率に悩ませたB・Yが依頼した所3日で仕上げた物で、強化箇所はグリップや銃身、バレル等全体を強化してB・O・Wを此れで殴っても大丈夫な物になり丈夫な金属で作られたバットがショットガンになったかの様な錯覚すらあるらしく、更に銃口も2つになり弾丸装填数も上がりその関係もあつて銃身全体強化に仕上げたらしい(マキはこれには大満足)。

こうしてそれぞれのカスタマイズした武器と、葵はポンコツになったUMPを新品に取り替えて全員小走りで西地区へ行き、更に葵は自分が知るべき事や決着をつけるべき事に対し逃げる事などしないと燃やした決意を誰から見ても分かる程に見せ、しかし無

茶はしない様に心掛けながらT—Genesisによるバイオテロ鎮圧作戦に同行するのであった。

同時刻日本近海にて、アメリカ政府からの依頼で自身の血を届けに来たジェイクはシエリーと共に無事アメリカ軍有する特殊空母にチャーターした輸送機で到着。

その後輸送機を降り艦橋に向かうと其処にはこの空母艦長に加えFOSのハニガンが搭乗して降りこの場からレオンにサポートを加えていた様で、シエリーの到着に胸を撫で下ろしていた。

「シエリー、ジェイク、良く来たわね。」

早速で悪いのだけれど貴方の血を採取させてBSAAから提供されたT—Genesisサンプルを解析させてワクチンと感染した人用の抗ウイルス薬を、そしてCLOWNがT—Genesisのウイルス完全適応者であったり現在日本で発生され始めている特殊なB．O．W．用の為に血清弾も作らせて貰うわ。

本当に申し訳ないけどやや多めに血をらせて貰うけど」

「分かってる、事態は深刻になっていってシエリーの通信を又聞きして知ってるからさっさとやれよ」

「ええ、じゃあ医務室に『ハニガン、定期連絡だ』レオン、丁度良かったわ、ジェイクが無事この特殊空母に辿り着いてくれたわ。」

これで予定通りT—Genesis用ワクチンに抗ウイルス薬、更に特殊B．O．W．やウイルス完全適応者に対する血清弾を作れるわ。

これでこのバイオテロを終息『ハニガン、ジェイクが居るなら伝えて欲しい事がある』：何かしら、レオン？」

ジェイクがハニガンから説明を受け血液を多めに採血されると言われたが輸送機内で日本の状況が更に悪化し始め、通常のネフィリムに加えチャーリーチームが遭遇し、ギリギリで倒した『ネフィリムが更に変異したと思われるB．O．W．』が現れた事も

知っていた為かさつさと採血する様に促し医務室に向かおうとした。

その時丁度レオンからの定期連絡が来てハニガンがジェイク到着を報告して居るとレオンからもジェイクに伝える事があるらしく、その報告を聞いていた。

すると信じられない情報が飛び出し、ハニガンは珍しく驚きを隠せずレオンに確認を促し、そしてそれがレオンとヘレナが死んだ事にして隠していた『生きていたエイダからの情報』と知り、エイダ・ウォンの介入と併せて事態が更に混迷化し始めたハニガンは理解しレオンに通信越しで伝えると言い、ハニガンはジェイクの方を向き口を開いた。

「ジェイク、貴方にとって最悪な情報がレオンから伝わって来たわ、心して聞いて欲しいわ」

「何だよ、さつさと採血しろだったり話を聞けだったり色々慌て過ぎだぞ。」

言いたい事があるんだつたらさつさと言えよ、時間が惜しいんだろ？ 「ジェイク！」

事実だろシエリー」

「OK、なら答えるわ。」

ジェイク……日本でレオンが確認したのだけど、籠城した学園の保険医にセイカ・キョウマチと言う女性が居たのよ」

「はん、そいつがどうしたんだよ？」

ジェイクは自身にとつて最悪な情報と聞き何かと言えば京町セイカと言う自身の知らない女性の名が出て来て興味無いと言う雰囲気を出しながらハニガンから次の言葉を待った。

「そのセイカ・キョウマチなのだけれど実はウイルス完全適応者に加えてある名前を隠していた事分かって、更に何らかの任務で日本に来ていたらしくその次いでで T—G e n e s i s 等のサンプルを回収、それが判明した時には既に遅く拘束に失敗したらしいわ。

そして隠していた名前と言うのは……『セイカ・W・キョウマチ』、Wは『ウエスカー』の頭文字よ。

つまりジェイク、貴方の異母姉弟にしてアルバート・ウエスカーのもう一人の子が、あの国に居た事がたった今判明したのよ！」

「えっ!?」

「…何、ウエスカーだと……！」

つまり……この事件にはシエリーだけじゃない、俺の因縁まで絡んでるって言うのかよ!!？」

「ええ、残念だけどその通りよ」

そしてジェイクとシエリーはハニガンから想定もしていなかった言葉が飛び出た事に驚きを隠せずジェイクはハニガンに詰め寄った。

その情報とは『京町セイカがアルバート・ウエスカーの娘で、今事件に介入している』と言う2人には信じ難い話であった。

あのウエスカーにもう1人子供が居り、それが日本に居る……ジェイクは自身の手を見つめながらそれを確認する様に口にしていた。

「……セイカ・キョウマチ……もう1人の、アルバート・ウエスカーの子……」

ジェイクはシエリーの因縁に片を着けるつもりで極東の島国までやって来れば、まさかウエスカーの娘が居た等と言う自分の呪われた血すら絡み始めて来ていた事を知り、この事件は様々な因縁と思惑が絡み合う正に地獄と言う言葉に相応しきである、ジェイクはそう感じ取りシエリーもジェイクの身を案じ何処か悲痛な視線を送るのであった。

EP XV 『クリス、ゆかり達の戦い・現れる【能天使】』

クリス達はB・Y・や葵、レオン達と別れた後東地区へと進入し、其処から部隊を後衛、中衛、前衛に分けてゾンビが多い方へと進撃して行く。

確かにゾンビが多ければ隊の戦死率も跳ね上がるが、ゾンビが多いと言う事は生存者が其処に居てゾンビ達が寄って来てしまっている、クリスは戦いの経験から逆算して生存者が待つであろう方角に歩を進める。

そんな中A・B・Fの隊員が2名クリスに近付いて来て話しかけ始めた。

「アンタがクリス・レッドフィールドだな、ジルの仲間の」

「それにレベッカのな」

「！」

驚いた、2人を知っているのか？

2人のA・B・F隊員は自分達が知っているS・T・A・R・S隊員の名を口にする。クリスは2人の知り合いなのだ。驚き歩を止めその2人の話を聞き始める。

すると2人はゴーグルとマスクを外して素顔を晒し、自身らの所属とコールネーム、そして素性と本名をクリスに伝える。

「俺はA. B. F. のオメガ小隊所属のオメガ3、そして元U. B. C. S. のカルロス・オリヴェイラだ。

ジルから聞いてないか、ラクーンシティで会った世界が俺が居なきや寂しがる奴が居たって」

「同じくA. B. F. オメガ小隊所属、コールネームオメガ2、元海兵隊少尉のピリー・コーエンだ。

レベッカとは黄道特急で共に生き延びた仲だ」

「そうか、お前がカルロス……それにピリー・コーエンか。

全くレベッカの奴、書類偽装して死んだ事にしてたな。

S. T. A. R. S. が健在だったら処罰対象だったな」

3人はS. T. A. R. S. メンバーの女性2人の繋がりから互いの事は名だけは知っていた為、実際に会えば成る程と感じていた。

ジルやレベッカが背中を預けるに値した者達がそこに居るのだと。

だがそんな談笑をしながら進み続けていたその途中ゾンビ以外にネフィリム、眼球が複数個顔に生成されリツカーの様な牙が生えた犬型B. O. W. エンゼルが行手を阻みに来てクリス達はB. O. W. 用戦闘態勢に入る。

「敵性B. O. W. を確認、各員速やかにこれを排除せよ!!？」

『了解!!?』

先ずクリス達前衛、特にクリスはB・O・Wの気をその身で引き受けエンゼルが迂闊な獲物を見つけたとして3匹突撃して来る。

するとアパートの屋根の上にロープで登った後衛に居たゆかり、あかりが他の隊員が狙撃する前にクイックスナイプして2匹の脳天を撃ち抜き沈黙させる。

それに合わせてクリスは残り1匹のエンゼルに対しカウンターアッパーを食らわせ、その丸太の様な腕から繰り出されたパンチはエンゼルの頭を意図も容易く粉碎し、周りにはエンゼルだった物が3個道端に落ちてるだけになり残りはネフィリム5体になった。

此方はゆかり達のスナイプに触発された後衛が第3の目等を狙撃し、中衛が定点射撃でネフィリムの足を完全に止め、最後にクリス、ビリー、カルロス等を中心にした前衛が止めと言わんばかりに弾丸と体術を叩き込みネフィリム5体の鎮圧を短時間で行った。

「(これがBSAA北米支部アルファチーム、そしてクリス・レッドフィールドの力ですか……成る程、マキさんが英雄視するのも無理無いですね。

間違いない、彼は『英雄』だ、背負っている物が他の誰よりも重く、そしてそれに見合う力を付けた人間だ)』

「少年兵時代を経験したから分かる、あの手合いの人こそが皆の前に立ち、勝利を物にする真に強き者であり、そして重圧を背負って生きる苦労人だ。

あの人を真に理解出来てる人はマキさんやB・Y・さん、それにレオンさんや茜さん、そして私達位しか居ないでしょうね……本当、『英雄』と言うのは十字架の象徴ですね、ゆかりさん」

「あのクイックスナイプ、あれはまるで『ピアーズ』の様な正確で敵を逃さない物だった。

……ピアーズが生きていれば、今頃あの2人とスナイプ対決でもしていただろうな」

この僅かな戦闘でゆかり、あかりはクリス・レッドフィールドと言う1人の人間の人物像を理解し、彼こそが戦闘に於いて最前線に立ち、そして武勇伝とも取れる戦果を挙げるが同時に多くの十字架と重圧を背負い、部下達を最大限に活かして生還させる様に動く『英雄』と言う1つの枷を付けながら戦う誰よりも強く、そして誰よりも力を身に付けなければならなかった人間だと思っていた。

一方クリスはゆかりとあかりの正確無比なクイックスナイプに1年前の中国のバイオテロに於けるジェイク救出任務の際に海底油田基地と共にクリスを生かす為に散つて逝った部下『ピアーズ・ニヴァンス』を思い出し、彼がもしもこの場に居ればゆかり

達と何方が狙撃が上か競い、またB・O・W・殲滅をより冷静且つ着実に行っていたであろう光景が脳裏に浮かび、しかしそれは2度と叶わない儚い幻想なのだと背負い、部隊に周囲の安全確認をした後にそれぞれの立ち位置でゾンビやB・O・W・を撃破しながら進軍し、住宅地からマンション地帯へ入り後衛に高台や屋根等に登らせてマンション地帯周囲の探索を行わせる。

すると廃墟マンションに登ったゆかりのスコープがあるマンションの屋上にHEL Pと書かれた紙を持ちながら周りを見渡す人間が居り、恐らく先程の戦いの銃声から気が付き救援を求めに動いたのだろう。

更に屋上に居る人数は少なくとも10名以上、階段には幾つもバリケードが張られ、エレベーターは様子からして停止中と見て間違い無く、更に生存者の臭いに釣られたのかゾンビやネフィリム達が大多数マンションに集まって来ているのを確認した。

「アルファー、此方ゆかりです！」

此処から南東800メートルのマンション屋上に生存者の一団が10名以上確認出来ました！

更に生存者に釣られてゾンビやネフィリム達がどんどん集まって来ている、その総数60以上、このままではマンションのバリケードが破壊され生存者達が餌食になります!!?」

「了解、全員南東800メートルのマンションへと向かう!!?」

目印はゾンビやネイリム達が教えてくれている、急ぎ生存者を救い出すぞ!!?」

ゆかりの報告からクリスが指示を出して全隊員に南東800メートル先のマンションに全速力で走り出した。

すると南東に近づく度にゾンビの数が増えて行き、これでは満足に進めないとクリスは憤りを見せる。

「クリスの旦那、焦りは禁物だぜ。」

着実に進んで生存者を救う、ただそれだけだろ?」

「最も今回の事件がアンブレラの意志を継ぐと抜かした道化が起こした物だからこそ憤りを隠せないのも分かる。」

だが焦っては隊を全滅させるだけだ、違うかアルファ1?」

するとカルロスとビリーがフォローに回り、クリスの心を落ち着かせる様にしつつゾンビ達をオメガ小隊とシータ小隊の混成部隊が前進し始めながら蹴散らして行く。

それ等を見聞きしてクリスは1年前にエイダへの復讐心から無作為に突撃し、部下を全員死なせてしまった苦い経験を思い出して焦らず冷静に、しかし着実に任務を遂行すると考えアルファチーム全員とゆかり達に指示を出す。

「……よし、前衛はオメガ小隊とシータ小隊に続き先行して感染者、及びB・O・Wの討伐に当たる!!?」

中衛は後衛、前衛との中間位置を守りつつ前進、前衛が安全圏を作り出した後に確保行動に出ろ!

後衛は中衛が確保した安全圏を維持し、前衛の援護をしつつ自身等の周囲を警戒して何かあれば中衛に援護要請を出せ!!?」

『了解!!?』

先ずクリス率いる前衛がA・B・F・混成部隊と共に斬り込みに掛かりゾンビ、ネフィリム、エンゼルを次々に倒して行く。

中衛は安全圏を確保し其処に後衛を誘導し、更に前衛の援護に入る。

最後に後衛は前衛の無防備な部分をカバーしつつ中衛が確保した安全圏を維持、其処から更に援護を加えて行き800メートル有った距離が徐々に縮まり、遂に目標の7階建てマンションの目の前に辿り着き、その1階部分のバリケードにゾンビが手を掛け、ネフィリムがバリケードを無視して跳躍、そのまま屋上へと登ろうとしていた。

「隊長、このままでは生存者が!!?」

「分かっている、後衛に命じる!!?」

ゾンビは無視しネフィリムを叩き落とせ、何としても生存者を守るんだ!!?」

『了解!! 『ズダアアアアンツ!!?』』

クリスは後衛にゾンビは無視しネフィリムを優先的に叩き落とす様に指示し、後衛、特にゆかりとあかりは冷静且つネフィリムを落とす為に跳躍からの偏差撃ちで地上にバタバタと落として行き、そのダメージから変異し掛かった所をクリス達が集中砲火し先にネフィリムを排除して行く。

バリケードの様子からすればまだゾンビはバリケードを破壊出来ない、その上でネフィリムを斃しゾンビを排除すれば屋上へと登り救助用輸送機を呼び出せば良い。

クリスは冷静にその算段を立てつつ後衛ばかりには任せず自分でもネフィリムを撃ち落として行く。

ビリー、カルロスも負けていられずA、B、F、制式採用改造AKは弾幕でネフィリムを撃ち落としながら斃し、遂にネフィリムの排除に成功する。

残りはバリケード破壊に手間取っていたり周りに集まるゾンビ達をネフィリムに変異させずに排除して行き、潤沢に持つて来て補給路も確保済みな弾丸を使いバリケードに集まっていたマンション敷地内のゾンビ、ネフィリムの排除に成功した。

「よし、敷地内のゾンビ共は排除した!

ゆかり、マンション2階から先にゾンビは見当たるか?」

「いえ、見当たりません。」

なのでアルファ1達はバリケードを突破して屋上へ行き生存者達の救助を優先して下さい」

「マンション敷地内にはもうゾンビもネフィリムもエンゼルもグリゴリも入れませんよ!!?」

クリスはゆかり達にマンション内にゾンビが居ない事を確認した後、前衛半数がバリケードを破壊、残りが中衛、後衛と共に敷地内へのB・O・W侵入の阻止を開始した。しかしバリケードが思ったより丈夫な為破壊するには爆弾が必要だった。

其処で爆破班のアルファ5がバリケード前に来て作業を開始する。

「隊長、爆弾でバリケードを一気に破壊して行きます、離れて下さい!!?」

「よし、やれ!!?」

アルファ5がバリケードに爆弾を設置し、クリス達は少し離れてアルファ5にB・O・W達が近付かないか周りを警戒し一切気を抜かずに周囲を見渡す。

そんな中でマンション裏からゾンビとネフィリムが湧き、残りの敷地内の敵だと認識し斃して行く。

そしてネフィリムの1体がクリスのアサルトライフルリロード中に近付き第3、第4の腕でクリスを八つ裂きにしようとした。

「舐めるな!!?」

しかしクリスはその大振りな攻撃を避けた瞬間にラリアットを叩き込み、その鍛え上げられたパワーから繰り出された技にネフィリムは3メートル吹き飛び、倒れ込んでいる隙にネフィリムにリロードしたアサルトライフルを叩き込み絶命させる。

同じ様にビリーやカルロスもキックやパンチで隙を作った瞬間A・B・F・改造ショットガン（此方も原型を留めず銃口が4つ付いている他ポンプアクションで複数の弾丸を出せる他、銃口を1〜4つまで選んで同時に散弾を撃ち出す機能が付いている）で頭と第3の目を同時に吹き飛ばして殺し、ゾンビも赤子の手を捻る様に処理してアルファ5は無事に爆弾を設置完了して離れる。

「よし、爆破します!!? 『ドオオオン!!?』」

アルファ5の手によりバリケードが爆破され階段が露出、そのまま階段を確保する組と突入組に前衛は別れクリス、ビリー、カルロスは無論突入組になり2階、3階とバリケードを爆破して行き、更に集まって来るゾンビ達をアルファチーム、A・B・F・混成部隊とゆかり達が撃ち殺して行き遂に屋上へと辿り着きクリスがドアを蹴破り生存者達の下に駆け付けた。

「BSAAとA・B・F・だ、君達を救助に来た！」

怪我人は居るか!!?」

「や、やっとな救助が来た!!?」

怪我人は居ないけど飲まず食わずの人が居て衰弱し切ってるんだ!!?

早く俺達を此処から連れ出してくれ!!?」

「分かった!!?」

此方アルファ1、東地区のポイントS・E・97-3に要救助者発見!!?」

但し衰弱し切っている者が何人かいる、急ぎ救助用輸送機を寄越すんだ!!?」

『ザザツ』此方救助班了解、急ぎ機体をそちらに寄越すので念の為発煙筒による誘導もしてくれ!」

了解!!? 『ブシュツ!!?』

君達、安心しろ直ぐに輸送機が来る、それまで後少し粘ってくれ!」

クリスは発煙筒を着火しながら輸送機が此方に来る様に合図を送りつつ生存者達を励まし生きる気力を戻させる。

すると直ぐに輸送機が辿り着き、ロープを付けた隊員が降りて来る。

「要救助者はこれだけか!!?」

「ああ、生き残りは俺達だけだよ!」

それと俺は最後までいいから他の皆を先に機体に乗せてくれよ!」

「分かった!!?」

さあ、もう大丈夫だぞ……!」

「よし、俺達は念の為周りを警戒するぞオメガ3、アルファ1、アルファ5」

「頼むから何も来るなよ…!!?」

救護班が衰弱し切って居る人から輸送機内に運び栄養剤を点滴で打って行き、クリス達は輸送機護衛中が1番生存者にとつても危険だと理解し周りを警戒し、下では未だ銃声が鳴り響き戦闘は続くがこれだけ派手に音を鳴らしても周りのマンシヨン群からは反応が無い事からクリス達は嫌でも理解する、この生存者達が運良く今日まで生き延びたこの周りで唯一の生存者だと。

他は衰弱し切り死んだかゾンビになったかの2択でしか無く、これだけ助けられたのが運が良く、ROICE学園の生存者達は本当にこの生存者以上に運良く生きて来たのだと思いき知らされCLOWN達への怒りがより増して行くのをクリス、ビリー、カルロス達は感じていた。

そして最後の生存者が救護班に抱き付くとクリス達を見ながら口を開く。

「助けに来てくれてありがとう、お陰で助かったよ!!?」

「……ああ」

生存者がクリス達に礼を言うと言いつつロープは巻き上がりそのまま輸送機内に2人は入り、後部ハッチが閉じて輸送機は直ちに避難誘導先へと機体を飛ばしその場を去って行った。

それはを確認し終えた瞬間に銃声が止み、丁度戦闘も終わったのだと理解しクリス達は一息吐いた。

「……ふう、よしアルファ5、オメガ2、オメガ3、マンシオンを降りるぞ。」

但し警戒は怠らずにな」

「了解だぜ旦那」

「……」のままマンシオンを降りれば良いがな」

クリス達は後はマンシオンを降りるだけとなり警戒しながら階段を徐々に降りて行く。

しかし何故かビリーはまだ嫌な予感が拭えない。

それはカルロスやクリスも同じくまだ戦場特有の死臭が漂って来ていて自分達に近付いて来ると感じながら4階へと降った……次の瞬間クリスは右側からドアが投げ付けられた事を本能的に察知し急ぎ次の行動に移った。

「危ない!!? 『ヒュウウウンツ、ガラアアアン!!?』」

隣にいたアルファ5を庇う様に倒れ込んだ。

その倒れ込んだ瞬間にクリスとアルファ5の頭上をマンシオンのルームドアが飛んで行き、そのまま左脇の手摺りを破壊しながらドアと瓦礫が下に落ちて行き下に居たアルファチームやA・B・Fの隊員達は急いで退避して事無きを得た。

そしてそれを引き起こしたものにクリスが目を向けると其処にはネフィリムがおり、しかし身体から煙を拭き始めゾンビからネフィリムに変異したのと同じ現象を引き起こしていた。

そしてそれはチャーリーチームが確認し、多くの負傷者を出しながらもグレネード等を何度も叩き込み倒せたと報告した難敵への変異だとクリスは察した。

「大丈夫かクリスの旦那！」

「…これは拙いな、アルファ5は早く退避しろ、此処は俺達が食い止める！」

「は、はい!!？」

「それと、このグレネードランチャーも活用して下さい隊長!!？」

クリス達はネフィリムの急変異間近個体がまだ活動しない内にアルファ5を退避させる、そのアルファ5はクリスにグレネードランチャーと炸裂弾一式を託しマンションを駆け降りて行く。

そしてスコープでその様子を覗いていたゆかり、あかりの2人はネフィリムのダメージによる変異以外の、ゾンビからネフィリムに『進化』した現象を目の当たりにしもしかしたら自分達も今日の前で誕生しようとしている『ソレ』と戦っていたかも知れないと感じ、クリス達の援護態勢に入った。

そして：それと同時にネフィリムは『進化』した。

元々2メートルあった身長が4メートル程になり、第3と第4の腕も肥大化、更に元からあった腕も肥大化しその肩から新たに眼球が誕生し、顔に付いた幾つもの目玉は赤一色になり、頭には角を思わせる突起が生え、胸には心臓部を守る様に硬質の膜が形成され、足にすら眼球が幾つも出来てしまっていた。

更にネフィリムでは弱点となっていた巨大眼球すら硬質になりアサルトライフルの弾丸やショットガンのスラッグ弾すら余りダメージを与えられなくなってしまうている。

チャャーリーチームはこの時1度CLOWNから通信を受けていた、これこそがネフィリムが新たな進化を遂げた存在、スーパータイラントをも殺す者、その名も『エクシア』、能天使の名を冠するB・O・W.と。

「グウウオオオオオ!!」

「ちい、H Q!!?」

ネフィリムの進化形態エクシアと遭遇した、これより殲滅態勢に入る!!?

「『ザザツ』H Q了解、アルファチームはミサイランチャー等を用いてこれを撃破せよ」

ビリー、カルロス、ここでは戦えない、一度屋上に戻るぞ!!?」

「チツ、墮天使の子供が能天使に進化するとかそんな法則聞いた事無いぞ!!?」

「奴等は神話に擬えて単純に相応しい名を付けてるだけだろう、其処に意味などありはしない。

分かったらさっさと登るぞ!!?」

クリス達は急ぎ屋上へと戻り始めると、ネフィリムを超えたりツカータイプ並の俊敏性で一気に距離を詰めて来たエクシアはクリス達に鉤爪を伸ばすが、当たらないと知るや否や階段先に待ち構える知性を見せて出待ちをした瞬間クリスが顔面にグレネードランチャーを叩き込み、一瞬怯ませた内に一気に駆け上がり屋上に駆け込んだ。

するとエクシアが屋上の床を突き破ってクリス達の前に現れ咆哮を上げた。

その瞬間ゆかりのアンチマテリアルライフルの弾丸が頭部に直撃……したが、確かに弾丸は頭に当たった。

しかし少々の血飛沫を上げただけでこれと言ってゆかりの攻撃には気にせず目の前の獲物に集中する。

「何で硬い表皮なの!!?」

アンチマテリアルライフルの弾丸が余り通用しないなんて、もうアレは生き物とは呼べない、タイラントと同じ、いえそれ以上の『化物』ですよ!!?」

「それじゃあ私のドラグノフは通じないじゃないですか……!!?」

ゆかりとあかりは持つて居る狙撃銃が意味を成さない事を知り、タイラントクラス以

上の化物がネフィリムのたつた一回の進化をするだけで誕生するなど反則だと感じ、嫌な汗が流れ始めた。

その間にクリス達は攻撃を避けながらグレネードランチャーやAKのグレネード弾発射機構から炸裂弾を何度も発射するが、エクシアはそれ等のダメージを物ともせずクリス達と言う抵抗を止めない極上の獲物に攻撃を加え続け、やがて追い詰め始めた。が、クリス達もただ黙っている訳ではない。

その頃ゆかり達を含めた後衛にミサイルランチャーが行き渡りエクシアが油断して動きを止める瞬間を待ち狙いを定めていたのだ。

そして動きを止め、咆哮を上げたその瞬間――

「今だ!! 『ボシュツ、ドオオオオオオオオン!!』」

クリスの合図でミサイルランチャーが何発もエクシアに目掛けて放たれる。

それ等を受けてエクシアも漸く後衛の方を向いた瞬間屋上から脱出しようとしたクリスに後頭部目掛けて炸裂弾を放たれそちらを向くとまたミサイルランチャーの雨霰を浴び、エクシアは堪らず咆哮を上げた。

するとミサイルランチャーの衝撃に耐えかねマンションが崩壊し始め、現在6階に居るクリス達は急ぎマンションを駆け降りその間もミサイルランチャーの絨毯爆撃が加えられエクシアは爆炎の中で躑躅き苦しんでいた。

「今だ、飛び降りるぞ!!?」

「せめて骨は折れない様に〜!!?」

「ぐっ!!?」

そしてクリス達は今にも崩壊しそうなマンシヨンの2階にたどり着いた瞬間其処から飛び降り、ミサイルランチャアの爆風を背に受けながら地面に転がりながら着地し、急ぎマンシヨンから前衛、中衛と離れマンシヨンの陰になる場所に退避した。

そしてエクシアの咆哮が響いたままマンシヨンが崩壊し、瓦礫による噴煙が辺り一面に広がりクリス達は身を丸めてそれ等を凌ぐ。

その間もミサイルランチャアの爆撃は続き……瓦礫の噴煙が収まった事にはミサイルランチャアの爆煙が立ち上りクリス達は影からエクシアはどうなったかを確認した。

するとエクシアは仰向けで瓦礫の上に倒れ込み、一見絶命はしている様に見えるが未だ油断ならずクリスは全員に指示を出す。

「全員、ヤツの絶命は未だ確認されてない。

各自爆撃出来る武器を構え、油断するな……!」

クリス達は未だ斃したと確認が取れない為エクシアに爆撃武器を構え、いつ動き出しても良い様に迎撃体制を取った。

『グ、グウウ……』

すると案の定虫の息ではあるがエクシアは動き始め、よろよろと立ち上がりながらクリス達に手を伸ばしていた。

「敵性B・O・Wの生存を確認、攻撃を続行『ヒュウウウンツ、ドオオオン!!?』…何?!?」

クリス達はエクシアに攻撃しようとした所で自分達とは別方向から特殊弾頭のロケットランチャーが1発エクシアに飛来し直撃し、エクシアはそのまま倒れ込みそのまま上半身が破裂した。

此れはネフィリムにも見られた絶命の合図であり、エクシアは何者かによって死んだのだ。

クリス達は急ぎその方向を見ると、其処には赤ワイン瓶を片手に持ち、一仕事を終えてグビグビとワインを飲むセイカが居り、クリスに笑顔を向けながら見下ろしていた。

「セイカさん、いや、京町セイカ!!?」

「セイカだと!」

あれがウエスカの……」

「そう、世界の神様になってやろうとしてバカをやって私や組織に負債だけを残して死んだクソ親父の娘の京町セイカでくす!

なんかネフィリムが進化したのを目撃したからその戦闘記録を保存する次いでに、あのクソツタレ親父を倒してくれた英雄さんにお礼をしたくてトドメを刺してきました。

てな訳でゆかりちゃんにあかりちゃん、そしてクリスさん、ご機嫌よろう!!
？」

セイカはエクシアの戦闘記録を保存と言う目的を最早身バレした為か隠しもせず
にクリスやゆかり達に言い放ち、その上でウエスカーの事を罵りながらクリスにその
ウエスカーを斃したお礼をする意味を込めてエクシアを倒したと発言する。

クリスは声色的にこの子は嘘は吐いておらず、完全にアルバート・ウエスカーの事を
親と認識する事すら嫌がっていると感じながら自分をまるで恨んでいないセイカに対
し、逆に不気味さを感じさせられていた。

そして一通り話し終えたセイカはその超人的な身体能力でマンションからマンシ
ョンへと飛び移りながらその場を去って行った。

「如何する旦那、別働隊に追わせるか？」

「いや、下手に刺激しない方が良いだろう。」

俺は今、彼女には不気味さしか感じなかった。

だからこそ今はB・O・Wを倒す方を先決しよう。

他の隊にも伝えるんだ、セイカ・キヨウマチとエイダ・ウォンは今は放置して任務に集中せよと「：了解だ旦那」……………彼女は何を思っている？

本当にウエスカーを親と認識したくないのか、それとも……………」

クリスはカルロス達に他の東京にきている部隊にエイダ、及びセイカは放置して任務を優先する様にと最前線の戦士としての言葉を送りセイカが去って行った方向を見続けた。

彼女は自分に対して本当に恨みを持たずウエスカーが死んだ事を喜んでいるのか、それとも裏ではジェイクの様怒りの感情を持っているのか？

クリスは後者であるなら未だ人間的ではあるが、前者であった場合は人間としての感情が希薄な為に表面では笑うが、その実何も感じていない人物であるかも知れない、そう思いながら次の生存者を探しに行動を開始するのだった。

EP XVI 『レオン、葵達の戦い・感染拡大とエクシアの脅威』

クリス達アルファチームの部隊と別れ練馬区の西地区と定められた地点へと進入し前後左右を警戒する。

すると住宅街は火事により燃え尽きた家屋が散見し、辺りには案の定ゾンビが跋扈し、中にはネフィリムやエンゼル、リツカーGまでも居り西地区は報告通りにB. O. W. の巣窟と化しており、正に地獄の様相を呈していた。

「こっちは私達の家があつた方だけど……もうB. O. W. 達の、CLOWN達の所為で私達の街が見る影も無い……許せない、人の命を弄ぶあんな化物や道化達が！」

「それはウチらも同じやで葵、B. O. W. やウイルス兵器と戦う道を選んだ奴は皆この地獄に怒りを覚えるんやで……」

「……まるでラクーンシティだな。」

「こちら側は人気が無さすぎる上に化物だけが跋扈している……」

「これは生存者達の存在を諦める時が来るかもしれないな……A. B. F. 全隊員はB. O. W. の掃討に移れ！」

「奴等を1匹たりとも生かすな! 『了解!!?』」

「デルタチームも展開する!!?」

「デルタ2から7は俺に続け、前衛で戦う!!?」

「デルタ8から20までは中衛になり後衛と前衛両者の援護をしつつ安全圏確

保!!?」

「デルタ21から30は後衛になり、後方に注意を払いつつ前衛の援護をし、安全圏を維持せよ!!? 『了解!!?』」

葵は外からでは火事等でしか窺い知れなかった自分達の街の真の有様に絶句し、死体が歩きまたその死体が死体を貪り、生物兵器が跳梁跋扈し人間の生存を許さないこの地獄に怒りを燃やし、葵以外にも茜やマキ、B・Y・達の怒りも最高潮に達していた。

一方レオンはこの有り様をラクーンシティ等と重ね、この状態で生き残る一般市民は最早奇跡的な確率の下に生き残れた類い稀な運の持ち主であり、そうで無い者は皆ゾンビに変わり果てるあの地獄がトルオークスや中国の蘭祥ランシャンと同じ様に繰り広げられている事に静かな、しかし確かな正義感から来る怒りを燃やし、嘗てHUNKハンクのコードネームを持ったA・B・F・『アルファ』大隊長も同じくラクーンの光景を思い出し、最早僅かな可能性すら失せているかも知れないと早くに割り切らざるを得なくなると感じ、西地区担当員達は急ぎ部隊を展開させゾンビやB・O・W・の殲滅に移り始めた。

「オラア、私のショットガンの味を喰らえ!!?」

するとデルタ2たるマキが愛用カスタムショットガンをゾンビの頭に叩き付けるとゾンビの頭が陥没し、其処から陥没した個体と周りに居るゾンビやエンゼルに銃口が2連になっているショットガンを発砲、これらの頭を吹き飛ばしていく。

合わせて茜、『アルファ』、レオン、B・Y、デルタ3達もマキに続きネフィリムやリッカーGを相手取り、B・Y、のカスタムガバメントが火を吹きフルオートの45口径弾が銃身が伸びたその銃から放たれ、通常より更に威力が増した物がネフィリムの頭や第3、第4の目を襲いそれらをリロードを挟みながら素早く沈ませ、更に片手でアサルトライフルを持ち近付くりッカーGを振り伏せ、迂闊に近付いたゾンビには蹴りと鉛玉を喰らわせマキが指揮下にいるデルタチーム隊長の戦闘力を発揮する。

デルタ3から7は蘭祥^{ランシャヤン}を初任務として生き残ったと言うB・Y、マキと同じ経歴を持つ為彼等に引けを取らない戦闘力を見せ、誤ってネフィリムがダメージによる変異強化が入っても4人は冷静に対処して変異強化されたネフィリムすら屠り、更にB・O・W、を次々に撃破して行く。

更にB・Y、の背中をレオンが守りセンチネルナインやショットガンを状況に応じ変えながらリッカーGにカウンタキックをかましてマキにパスし、そのマキはリッカーGの脳が肥大化した頭をそのショットガンの銃身で叩き潰し、更に背中 of 巨大眼球

もハンドガンで撃ち抜き絶命させるコンピネーションを見せる。

一方茜と『アルファ』は改造AKや改造ハンドガン等で次々にB・O・W. を屠り、更に『アルファ』は近付いてきたゾンビの脳天を撃ち抜いた後背後に一瞬で回り、その首をへし折り最後に踵落として潰し嘗てのU・S・S所属の処刑人であり死神たるその力を遺憾無く発揮し、ゾンビをネフィリムに変えずネフィリムはダメージによる強化変異を起こさせず、その他B・O・W. にも何もさせない縦横無尽の活躍を見せた。

一方それら前衛を支えるは中衛に後衛だ。

中衛に陣取った葵は籠城戦で培った戦闘能力により離れたリツカーGに対し偏差撃ちで頭を風穴だらけにし周りを本当に民間人かと驚かせた。

最もこの偏差撃ちを教えたのはあのセイカであり、確かにCLOWN達と別組織のスパイではあったが自分達がお気に入りだから死なせたく無い為にこの技術を教えたのは紛れも無い事実でもあり、その点には葵はセイカに感謝し、再び会えたら何を言おうかと考えながらB・O・W. を捌いて行く。

一方中衛、後衛を任せられたデルタチームとオメガ小隊は負けじとアサルトライフルやセミオートライフルで援護して行き、A・B・F. の中衛は音によって屋内から外に出たゾンビ等に茜達とはタイプが違うドラムロールタイプのマガジンに改造されたAKを乱射し茜達に近付けさせず、屋根の上に登った後衛も後ろから来たゾンビ達を迎撃し

それに気付いた葵や他数名も後衛を援護。

デルタチームとオメガ小隊の混成部隊は住宅街で展開する人数の部隊では無いながらも1つの歯車として全てが噛み合い、辺り一面のB・O・W・達を殲滅しながら前進して行く。

その中で見る光景はやはり先程と変わらない生存者の気配の無い地獄絵図であり、流石に僅かな可能性に賭けたかったB・Y・達はいやでも現実を直視した。

西地区には最早生存者は居ない、そこに居るはず動く屍と生物兵器の群れしかない。

レオン達は無言の怒りをB・O・W・達にぶつけこのバイオテロを一刻も早く終わらせねばと引き鉄を引く。

「……………あつ……………」

だが葵は此処に来て近所の叔父さん叔母さんがゾンビに成れ果てて死体を貪っている姿を目撃し、一度は目を逸らすがこのバイオテロが起きた時点で友人隣人はゾンビになるかも知れない…そんな可能性を考えていた葵は、最後までバイオテロに首を突っ込むと決めたからにはせめて自分で彼らに引導を渡さねばと考えUMPの引き鉄を引き近所の知り合いだったモノは地面に崩れ落ち2度と起きなかった。

そして一度戦闘が一段落着いた所で葵は近所の叔父さん叔母さんの死体に近付き涙

を流しながら手を合わせ、マキもその人達を知っている為一緒に手を合わせせてその魂が安らかに眠る事を祈っていた。

「その叔父さんら、葵達の知り合いやったんか？」

「うん、学校に行く時や休みの日に出掛ける時に何時も私達声を掛けて来てくれた良人だったんだ……」

「それがこんな姿になるなんてね……ホント、嫌になっちゃうよ、この地獄の3丁目は……」

茜は2人に知り合いだったかを尋ね人柄を聞くと共に手を合わせ魂の冥福を祈り、レオン達も自分達は知らない、しかしバイオテロに巻き込まれゾンビになってしまった罪無き者達に手を十字に切り、動く死体の中から魂が天に還る様に祈りを捧げた。

そうしてそれらを終え、銃をリロードし再び前進を始めて行く。

すると葵はふと一軒の家に目が付きそちらを見ており、茜やマキもそれに気付くとマキは直ぐに察し、茜は表札を見てそれが何なのかを理解した。

『琴葉』、つまり葵や藍の家なのだ。

『アルファ』やレオン、B. Y. 達もそれに気付くと歩を止め、茜は葵に話し掛け始めた。

「此処、葵の家なんか？」

「うん、私やお母さんが暮らしてた家……窓ガラスとか割れてないから一度中に入っ

て持つて行きたい物があるんですが、駄目ですか？」

「いや、君は本来なら民間人だ、避難する時にそれが許され今許されない訳では無い。持つて来るものがあるなら取つて来ると良い、但し5分だけだ。

早めに行動するんだ」

葵は自分の家が無事なのを確認すると『アルファ』に家の中に入る許可を貰い、5分のみだが帰宅が許され合鍵使いの中に入る。

すると護衛にマキや茜もついて行き、先ず軍用鞆にリピングに飾つてある葵と藍が写つた家族写真を入れ、次に葵の部屋に入り秘密の宝箱を開け、そこにあつた赤と青の小さなハートの飾りが付いたお揃いのネックレスを取り出し、茜に赤の方を手渡した。

「？」

葵、此れは？」

「お姉ちゃんと私がお母さんから誕生日プレゼントに貰つたネックレス……何だけど、此れも偽りの記憶から来る物だから余りお姉ちゃんとの繋がりが薄いのだ。

だから今お姉ちゃんに渡して、お揃いにする。

これが私のお姉ちゃんへの遅めの誕生日プレゼントだよ」

茜は手渡された割と高めな物だと分かるネックレスが何なのか聞くと、葵は偽りの記憶の中で渡された姉妹の誕生日プレゼントだと話し、茜は如何やら偽りの記憶ではこれ

を置いて旅行に行った際に死んだ事になった記憶を藍から植え付けられ、形見として大事に保管していたのだと察した。

しかし葵は既に偽りの記憶の品物だと知っている為、それを茜に遅めの誕生日プレゼントとして渡し本当のお揃いのネックレスにするのだと言う意図を伝える。

すると茜は無言で領キネックレスを首から下げ、葵も同じくネックレスを首から下げ太陽の光に反射してそれらが淡く光り、まるで姉妹の本当のお揃いの品になった事を喜ぶかの様であった。

葵はそれを見届け感傷に浸ると部屋を出て玄関に向かい始め、そして計2分半で用事を終わらせた3人は外に出て来た。

「もう良いんだな？」

「はい、取って来る物は取って来ました、行きましょう」

『アルファ』は葵にもう良いかと尋ねると本当は肯定し、茜も何処か嬉しそうな様子を見せている事に気づき観察すると先程まで無かったお揃いのネックレスを2人は身に付けていた事に気付き、『アルファ』は大事な物、恐らく家族写真と此れを取る為に家に入ったのだと察し何も言わなかった。

そして葵が再び玄関に鍵を閉めると一度目を閉じ隊列に戻ると再び前進を開始した。

そうして隊列を乱さぬまま偶に居るゾンビを処理しながら西地区のマップピングをし

WNのリーダー格からの通信を開いた。

『流石はラクーンシティの生き残りにBSAA極東支部の精鋭部隊の皆にオメガ小隊達、そしてオメガと嘗てHUNKハUNKと呼ばれた『アルファ』大隊長様だ!!?』

この程度の余興ではもう満足頂けないか』

「御託は良い道化。」

さつさと要件を言え、でなければ切るぞ」

『流石死神、バツサリしてるなあ。』

では本題と行こう、其処の大通りを見たまえ!』

するとCLOWNのリーダー格は何かを見せたのか大通りに全員を誘導しようとし、何か嫌な予感がしたのか前衛のみでそれを確認しに行き、レオン達は影からそれを見ていると1体のネフィリムが立っていた。

しかしそれはゾンビがネフィリムに変わる瞬間の様に煙を拭き始めており、変異と呼ぶには生易しい『進化』が始まっているのだと、ハニガンとの事前情報交換で知っていた。

「ネフィリムが…『進化』を始めている…!」

「ホンマや…アレもしかして、隊長達が学園で情報共有時に言っとった?」

『よくぞ聞いてくれた、これこそがネフィリム達が辿り着く『進化』の形!!?』

らしい！

それに今の通信からするに、恐らく戦闘力はスーパータイラント以上……！」

『グウウオオオオオオオオオオアアアアアアアア!!』

レオン達がそれぞれエクスシアについて話すとそのエクスシアはレオン達に標的を定めリツカー以上の俊敏性を発揮して襲い掛かって来た。

『アルファ』はエクスシア出現後に使用せよとB S A Aから受け取ったグレネードランチャーやミサイルランチャーの用意をする様に命じながら全員が大通りにバラけてそれぞれ銃で攻撃する。

「……ダメだ、全く効いてる気がしない!!?」

マジでやばいよコイツ!!?」

だが、それらは効いている気がせずマキ達を始めレオンや『アルファ』、B・Yも含めた全員が舌打ちをし、このB・O・Wの戦闘力に脅威を感じていた。

『グウウウ……』

エクスシアは放たれる銃弾を物ともせず獲物達を見定めながらゆっくり、ゆっくりと近付いて行き、その姿はまるで狩人が罠に掛けて追い詰めた野ウサギを狩る為に躍り寄るかの如くレオン達に迫って来た。

だが、そんな狩人気取りの化物の邪魔をする者は確かに居る。

『ドオオオン!!??』

『グオオオオオオオ!!』

「なっ、アオイ!」

何と葵が初めて使うグレネードランチャーをエクシアの頭にクリーンヒットさせ、そちらに気を逸らさせたのだ。

勿論この行為には意味があり、この事故車両が多い大通りでは戦うに部隊を展開出来ずただ悪戯に負傷者を出すしか無い場所ではない為である。

故に葵は気を引きつつエクシアもレオン達も全員ある程度開けた場所に連れて行くこうとしているのだ。

「皆さん、この大通りを下って直ぐにスポーツセンターがあります!!?」

そこでなら部隊を展開してコイツを思う存分爆撃出来る筈です、私が案内しますから走って下さい!!?」

「葵、無茶はあかんって…ああもう誰に似たんや!」

大隊長、奴は特記事項その1に該当する物と判断、全リミッター解除の許可を!!? 「暴走したタイラントを殺す力を秘めたB・O・Wだ、良いだろう解放を許可する。

但しスポーツセンターに誘導し、爆撃準備が整う迄とする!」

了解、オメガー全リミッター解放、ウチの蹴りたらふく喰らいなはれ!!? 『ドゴオ!!?』

葵の一件無茶とも取れる、しかしマキが狙いを定められている為この街に詳しくフリーな存在は自分しか居らずその関係から一瞬気を引いてからスポーツセンター側に走り始めるしかなかったのだ。

茜はそんな葵に誰に似たのかと思いつつ全リミッター解放許可を『アルファ』に要請すると、流石の『アルファ』もスーパータイラントを殺せるB・O・W・相手にはオメガーの力の解放が必要と考え、しかしあくまで最後は『人間』の手で殺す為スポーツセンターまでの誘導の為の釣り餌に使う為にリミッター解放に条件を付けていた。

茜もその意図を理解していた為エクシアの腹に全リミッター解放状態の蹴りを喰らわし対角線上のビルの1階ロビーに吹き飛ばす。

この蹴りに餌が余計な抵抗をしたと考えたのかエクシアは獲物を茜に固定し攻撃を開始。

しかしそれを超スピードで避けつつ茜流の挑発を加えて行く。

「はっ、何が能天使や!」

唯の脳タリンじゃあらへんの?

パワーとスピードはあって知性も上がつどつても所詮獣程度じゃ人間様には

勝てへんで!!?」

悔しかったらウチを殺してみい!!?」

『グウガアアアアアアアアアアアア!!』

如何やらエクシアは人語を解す程度には知能や獲物の動きを先読みする知性はあるみたいではあるが、相手が全リミッターを解放した茜では同じ動きと人間の思考が合わさった存在で無ければ攻撃を当てる事は叶わずエクシアの4つの鉤爪はどれもこれも空を切り、髪の毛一本にすら擦りもせず苛立ちを募らせていつているのか攻撃が徐々に単調になり茜はカウンターでピンタやら巨腕にチョップを与えたりしながら葵達の方を見てスポーツセンターに次々と部隊が配置されて行っている事を確認し、このまま時間稼ぎに徹していた。

一方スポーツセンター側では駐車場や体育館の屋根に部隊員が次々に配置され、葵も変わらずグレネードランチャーを構えながら待ち構えていた。

そんな時『アルファ』から先程の行動について詰め寄られていた。

「アオイ・コトノハ、我々は君が無茶をしないなら同行を構わないと言った筈だ。にも関わらずあのような行動をして部隊に損害を与えかねなかつたぞ。

何故あの行動を取ったか論理的に答えよ」

「はい、先ずーにあの場所での戦闘では確実に死傷者が出ます。

その中には私が含まれていたかもしれませんが、ならば場所を変える必要がありました。

2にこの街の地形を完全に把握しているのは私かマキさんの何方かしか居らず、マキさんは狙われていて他部隊員さん達はまだマッピング仕切れてません、なら必然的にフリーの私が行動に移すしかなかったです。

3にあの時エクスシアは間違い無くデルタ2から7の誰かを狙っていました。

そうなるとオメガ1特記事項をあの場で必要なのに規定上使えない可能性すらあり、ならまたしても私が動く事で特記事項の成立に必要なフアクターが揃いやすくありました。

まだ理詰めするなら4、私はあのエクスシアの動きから巨体と俊敏性が上手くハマった物だと一見したら思いますが、その実は巨体になり過ぎて脇が甘くなっています、4つも腕があるにも関わらず。

なら攻撃を即座に計算して避ける行動を取れるフリーの人間がまた気を引く必要が出て来て、丁度私は籠城戦でレオンさんやマキさん、お姉ちゃんにB、Y、さんにセイカさんと攻撃が来たら如何に避けるか頭に叩き込まれました：初めは失敗しましたが、2回目の籠城戦からは実践完了出来ました。

5にエクシアに銃弾が余り効果が無いと情報共有でありましたのでエクシアに狙われた前衛を含めてグレネードランチャー等を行き渡らせる必要がありました。

これらを以て私が動くべきだと判断して動きました、更にマキさん達に聞けば無茶では無いと言ってくれますよ？」

『アルファ』は葵の一件無茶とも取れた行動を咎めようと論理的に答えさせた瞬間、葵は『アルファ』が良く知る誰かさんみたいな理詰めを行い5つも理由を立てて『アルファ』の口を挟ませない様にしていた。

『アルファ』はプロである、これには変わりなくその経験から齎された判断能力から葵が言った様にあの場所での戦闘は無理、デルタ2からデルタ7までの誰かが狙われフリーの誰かが一瞬気を引きオメガ1を囿に使う戦法を取らざるを得なかった事も分かる。

これが4人程度の少数で、半数以上が戦闘のプロなら囿をしつつ誘導なりが屋内外で出来た筈だが、運悪く雑路な上に人が固まり過ぎていた。

これでは遅かれ早かれ部隊に被害が出たのも分かっていった。

そして葵の理詰めはオメガ1を囿に使いたかった『アルファ』からすれば利益が3、葵を死なせる不利益が7と不利益が多いが利益を3割程度出す所すら誰かさんに似ており、矢張りこの2人姉妹だと確信し誰かが手綱を握らないとならない荒ぶるサラブレツ

ドつであり、更に葵には戦闘センスやサバイバル能力が潜在的にあった。

それがこのバイオテロで一気に開花したのがタチが悪く己の運命を切り開く力を持つてしまっており『アルファ』は頭を抱えながら葵を完全に咎め切れない、しかし無茶は許さないと言う思考の末次の答えを出した。

「…もう一度言っておくが次からは許されない。」

同じ事をする様なら帰つてもらおう、構わないか？」

「善処します」

そして姉妹だと更に思う善処しますと言う答え。

今の茜はそうでは無いが、A・B・F、結成当初の茜は丁度こんな感じであり本当に双子の姉妹だと感じ、デルター1とデルター2、レオンを見て手綱を握る様にと無言の圧を掛けていた。

これにはレオンも「泣けるぜ」と口にし、マキもなまじ能力が高いと分かった葵なら何処か平気だと思っていた節があると自戒し、知り合いだったモノをその手で撃つて精神が不安定になっている筈の彼女を次からは自分の側に居させよう、と考えるのであった。

「大隊長、全員配置完了です！」

「うむ、オメガ1、そいつを此方に引き寄せろ!!？」

「了解!!?」

『アルファ』は全員の配置完了を確認した瞬間通信機で茜を呼び出し、茜も超スピードでスポーツセンターの駐車場に来てミサイルランチャーを受け取り構えた。

すると獲物を逃すかとエクシアが追い掛けて来たが哀れエクシアは気付かない、既に狩られる側は自分に移ってしまった事を。

そして各武器の射線に入ってしまったエクシアは第3、第4の目等で見開きながら茜達を見て此処で漸く自分がこの狩る側達の餌なのだど気付いた。

しかし、次の行動が遅れてしまいその号令を許してしまった。

「爆撃開始!!?」

体育館の屋上、駐車場、その他スペースに展開した葵、茜含む全隊員はグレネードランチャーとミサイルランチャーを放ち、エクシアに爆撃を休む間もなく加えて行く。

その様子は宛ら絨毯爆撃、1体のB・O・Wに炸裂弾等が命中し次々に爆炎が上がリ、それでも尚B・O・W絶命確認までは爆破を止めず『アルファ』は攻撃続行を指示、そしてB・Yも同様の命令を加え全ての隊員が重火力による暴力を振るって行く。

この間にエクシアは断末魔を上げながら何とか反撃しようとするも爆撃が止まないうえに歩たりとも動けず、只々その爆撃の雨を見に受ける事しか出来なかった。

そして各武器の弾が切れ爆炎が晴れた頃、B・O・W。まだ立っており全員銃を構え迎撃姿勢を取る。

『……………『ドサツ、バシャツ!!?』』

しかしB・O・W。エクスシアはそのまま倒れ込み、ネフィリムと同様の絶命合図たる上半身破裂を見せ沈黙。

レオン達は1体のB・O・W。相手にこれだけの火力を叩き込まねばならないのかと考えつつ銃を下ろしてまた一段落着いた。

「ふう……………敵性B・O・W。沈黙確認……………なあレオンに『アルファ』、それにマキ、茜と葵、たった1体のB・O・W。を殺す為にこれって効率悪過ぎじゃないか?」

「確かに、通常の銃器を通さない表皮にこれだけの火力でやつと倒せる戦闘能力、そしてチャリーチームの報告を加味すればネフィリムよりも知能が上がっている。

これじゃあ陽気にダンスを踊るんじゃないやなくベートーヴェンの運命を忙しく演奏してるのと一緒さ」

「それにウチの本気の蹴りを喰らってもまだピンピンしとつたでこのケダモノ。

大隊長、これ相手する時はウチが全リミッター解除して殺しに回った方が効率良くあらへんか?」

「…確かにな。」

これでは此方の被害がいくら出かねん、何とか対策を考えねば…」

「……これが、今のT—Gene-sisの力…」

B・Y・やレオン達は1体のエクシアにこれだけの火力集中は悪手だと考え、流石に『アルファ』も本格的な解決策が無い限りはオメガ1の力が必要になると考え思案し、他の対策が無いかを検証しなければならなかった。

一方葵はネフィリムが更なる『進化』によってこれだけの戦闘力を発揮した為、なら今日本に居るネフィリムが全てエクシアになればどれだけの被害を生むか……想像に難くない、恐ろしい被害を齎すと考えており、マキも同じくエクシアの戦闘力に戦慄し、ネフィリムからこれになる為これが複数体現れたら自分達は如何なるかが容易に想像出来た為オメガ1、茜に頼り切りになる彼女の負担が増すと言う案以外の解決策が都合良く見つかる事を切に願っていた。

一方レオンはジェイクがアメリカ軍特殊空母に到着し採血が始まり、其処でT—Gene-sis用ワクチンに抗ウィルス薬、そしてこのエクシアやT—Gene-sisウィルス完全適応者用の血清弾が作られている事をハニガンとの定期連絡で知っており、その完成を待ち侘びるのであった。

「流石はレオン、そしてセイカが気に入った子達にHUN^ハK^ク、やるじゃないの」
一方その頃エイダは双眼鏡で一連の戦い全てを見ており、一応力を貸そうかと思った

がレオンのみならず茜や葵、そして1年前の中国で見かけたマキにB・Y、そしてHUNK、現『アルファ』達の存在により自分の援護無しにエクシアを殺しせしめていた。

これにはエイダも純粋にその能力を、特にセイカの気に入ったマキや葵達のそれを認めていた。

しかしこのままではジリ貧とも考え手元にあるセイカから渡されたT—Genesissサンプルに茜とセイカ本来の任務で回収したサンプル、これら3つをそれぞれ見つめ、あの様な化物が誕生し今の世界が塗り替わる程の力を持つこのウイルスは封印すべきでは？

そんな考えが頭を過り直ぐに思考を変えて次のオーダーたるT—Genesissが齎す力の全容解明に注力しつつ、可能ならばレオン達の助けになる様に動こうと考えてその場を後にしようとする。

するとタブレットにH・C・F. 上層部からの連絡が届き、エイダは少し興味ありげにその連絡を見ていた。

『Piiiiiiiiiiiiii!!?』

するとセイカから連絡が入りそちらの方で何かあったかを確認するべく連絡を取り合い始めた。

『はあい、エイダさん♪』

なーんかネフィリムが『進化』したと思つたら明らかにタイラント超えの怪物が生まれてビックリしちやつたわ。

一応戦闘記録を取つて、後ゆかりちゃんとかかりちゃんにあのクソ親父を殺してくれた英雄さんに助力をちよつとだけやつたわ』

「此方もその怪物を確認したわ。

まさかネフィリムが一度『進化』しただけであれだけの怪物が仕上がるなんて驚異的ね。

これが世界中にばら撒かれたらC—ウイルス以上の脅威と感染で世界が滅んでビジネスが上がったりになるわね。

このウイルスは封印するか否かを上層部に後で問い合わせてみましょう。感染や其処から生まれる生物兵器、ウイルス自体をコントロール出来なければ商品としての価値は薄いもの。

それと貴女の気に入つた子達は面白いわね、貴女の本来の任務対象の子も合わせてレオンと上手くやれてるみたいだし、中々見所があるわ『でしょく！』ゴクツゴクツゴクツ』

ぶはあ！」ふふ、貴女もいつもの調子みたいね。

しらっ？」

ああそうそう、良いニュースと悪いニュース、どちらから先に聞きたいか
 エイダとセイカはそれぞれの状況を連絡を取って情報交換し合い、更にエイダは茜や
 葵達が面白いと伝えセイカはそれに上機嫌らしく電話越しに酒を飲みながら自分の事
 の様に嬉しく語っていた。

するとエイダは上層部から来た2つの情報の内悪い方か良い方かを先にどっちを聞
 くかをセイカに選ばせその反応を見ようとしていた。

『んん〜じゃあ悪い方、良い方は後で取って置いたらあら不思議な旨味が出るから
 』

「じゃあ悪い方から、今CLOWNのメンバー6名の内1名がアメリカ軍特殊空母に
 B S A A機に偽装した輸送機で向かっているわ。」

狙いはT—G e n e s i s用ワクチンに抗ウイルス薬、そして血清弾破壊と
 T—G e n e s i sを更に強化する為に被検体を確保する事よ」

『あれ、意外と早くワクチンとか出来あがっちゃう系？』

何でなの？』

「それが良いニュースよ、先程言った空母でワクチン等の開発が進んでいるわ。」

理由は勿論貴女の様にあらゆるウイルスに耐性を持ち、適応する力を持った者

……ウエスカーの子のジェイク・ミューラーが空母に到着したからよ、シエリー・バーキンの案内でね」

『……………』

エイダは先ず悪い方のニュース、CLOWNの構成メンバー6名の内の1人がアメリカ軍空母に向かいワクチン等の破壊とT—Gene's強化用非検体の確保に乗り出したとセイカに伝え、何故こんなに早くワクチンが出来上がるかを尋ねると良いニュース、ジェイクがシエリーの案内により空母に到着した事を伝えた。

するとセイカはジェイクの名を聞いた瞬間から態度を一変させて黙り込み、しかし吐息からは簡単に想像できる感情が通信越しで伝わり、エイダはセイカも矢張り人間であり、つまらない事ばかりをしていたウエスカーとは違うとしつつも感情の出し方に関してはウエスカーに似ていると感じ、矢張り幾ら本人が誹ろうが親子なのだ実感しつつもそれを口にしたら拗れる為黙って彼女に選択をさせる様にした。

「それで如何するのかしら？」

貴女はこのままワクチン等の破壊を黙認するのか、それともジェイクを救い、ワクチン等の完成まで時間を稼ぎに行くか。

何方を選ぶのかしら？」

『……………はあ『プシュツ、ゴクツゴクツゴクツ』……………分かりましたよ行きますよ。』

行つてワクチン守つてこれ以上 T—G e n e s i s が強化されない様に動きますよ。

と言うか初めからそれが目的ですよね？

エイダさんのイジワル〜』

「あらごめんさい、私は意地の悪い女なのよ。

じゃあ行つてらっしゃい、機体は C 地区の隠れ拠点に用意した奴を使つて良いわよ『はい、それじゃあ行つて来ます〜『P u 』……さて、2 人のウエスカーの子。

その邂逅は世界に何を齎すのかしらね？

T—G e n e s i s がパンドラの箱の厄災なら最後に残つた希望かしら、それとも……」

エイダはセイカにジェイク救出を促すと彼女は嫌々ながらも引き受け、C 地区の隠れ拠点にある機体と言う物を使わせアメリカ軍空母に向かわせた。

そして彼女はこの世に 2 人いるアルバート・ウエスカーの子が邂逅した時何が起きるか、出来ればパンドラの箱に残された希望である事が、レオンや R O I C E 学園で見掛けた子達、そしてセイカが本来の監視対象兼サンプル回収任務を帯びて近づいた『対象 X』の生きる世界の為になると考えつつ、もし仮に更なる厄災が起きるならば自身の次の行動を決定しなければならぬと考え、双眼鏡を仕舞いフックショットで次なる場所

に向かうのであった。

EP XVII 『ジェイク達の戦い・動き出した道化師』

日本近海のアメリカ軍特殊空母、其処では回収されたT—Genesisサンプルとジェイクの血を基にワクチン、抗ウイルス薬、そして日本で確認され始めたネフィリムの進化形態であるエクシアの対応、更にはCLOWNが全員ウイルス完全適応者と言う事からそれらを殺し、力を抑制する血清弾の生成が最新技術の推移を集めて行われていた。

そんな中で採血され暇を持て余したジェイクは甲板に出て日本の方角を見て風に吹かれていた。

「ジェイク、今話し掛けて平気かな？」

「シエリーか、話し相手が欲しかったから丁度良いぜ」

其処にシエリーがやって来てジェイクと話を始める。

その話とは無論、自分達の因縁……Gウイルスを素材に作られたT—GenesisやそのT—Genesisのサンプルを奪ったと言うもう1人のウエスカーの子、京町セイカの事である。

「…お前の親が作ったウイルスを使った新型ウイルス、そのワクチンやらを作れば

この事件は終わると思えば今度は俺と同じ血を引く奴が居ると来た。

全く、俺達はつくづく親の因縁とやらに振り回されてばかりだな。

こうも立て続けにウィルスだのウエスカーの子だのが続くとは、今回の事件は混沌とし過ぎだつて一言言いたくなるな」

「そうね……でも、私の思いは変わらない。

親は親で私達は私達、一人の人間としての生き方に責任を持って行かないといけない。

そして今回、偶々私等の親の因縁が目の前に現れたからそれを葬り去る責任が生まれた、けどやっぱそれは親に振り回されるんじゃないやなく自分の心で決めたからなのよ。

ジェイク、貴方もそうでしょ？」

「……」

ジェイクはシエリーにつくづく親の因縁に振り回される自分達の事に対して皮肉を口にし、しかしそれは1年前の蘭^{ランシヤ}祥でのバイオテロでウエスカーの子であり彼が何をしていたかを散々聞かされ悲観していた物とは違う、まだ心に余裕があるが少し戸惑いを隠せていないと言う物である。

シエリーはそれに同意し、更に1年前に自分を激励した際と同じ様に激励し、いよいよ

よ彼女も目の前に因縁が差し迫った為覚悟を決めたとその言葉から分かる様にジェイクに話していた。

それらを聞きジェイクは確かにその通りであると同時に、戸惑って足踏みするのは質じやないと思ひシエリーの方を向き何時もの彼の表情を見せた。

「そうだな、ならさっさと事件を解決するとするか。」

事件が終わればシエリーが奢ってくれるみたいだからなあ」

「そうね、じゃあ中に戻りましょう。」

貴方のお陰とこの空母の設備のお陰でワクチンや、特にこのバイオテロで好き勝手してるB・O・W。やウィルス完全適応者用の血清弾がそろそろ出来上がりそうってハニガンが『ブーン、ブーン!!?』っ!!?。

警報!!?」

ジェイクはすっかり元通りになりシエリーもこの空母の設備のお陰でワクチン生成や血清弾の完成が間近だと話していた瞬間、空母の警報が鳴り2人は何かがあったと悟り急ぎ艦橋へと向かおうとした所で、遠くの空に輸送機が近付いて来ているのが見え多分それ関連だと悟っていた。

そうして艦橋に向かえば慌ただしく通信機からの応答を処理する兵士達の姿があり、ジェイク達は何かが起きた事は容易に想像出来、更にハニガンが彼等が丁度来た為何が

起きたか説明を始めた。

「ジェイク、シエリー、大変な事が起きたわ！」

今この空母に向かってCLOWNの構成員がB S A Aの輸送機に偽装した機体で此方に向かって来ているわ！

更に最悪な事に如何やら人質を用意してあつて、それを解放させて欲しければジェイク・ミューラーとシエリー・パーキンの兩名を差し出せと脅迫して来ているわ！」

「何ですって!?？」

「まったく、この道化達は理想の実現やら何やら話してるがやつぱり只のテロリストだな、無関係な人間を巻き込んで俺達を誘い出そうとして来やがる。

まあ、こんなバイオテロを起こしていた時点で分かっていたがな！」

「あつ、ジェイク！」

如何やら遠くの空に見えた輸送機はB S A Aの機体に偽装した物らしく、兵士達の慌ただしい会話を盗み聞きした所で信号まで偽装しており護衛艦の射程範囲所かもう空母の甲板から小さく見える位置まで接近を許したと聞き、更にハニガンがジェイク達に人質が輸送機内に居る事、その上で人質の解放には自分達の身柄を要求している事を知り、ジェイクはこの1年で培ったバイオテロ犯に対する様々な感情や身柄要求に対するやり方、そして何より今回のCLOWNが喜びそうな事を頭の中で図式にして並び立た

せて甲板へと向かった。

それを追ってシエリーが追い掛け甲板に出た所で既に甲板では邪魔になるこの空母に残った輸送機等の艦載機を空母前部に退かす様に動かし始め（それ以外の殆どの輸送機はB S A Aの支援に回っている）、そしてその輸送機が遂に艦橋退かした艦載機間の甲板へと降り立ち整備兵達が身構える中でジェイクはC L O W Nの輸送機の7メートル程前に躍り出て、シエリーもそれに随伴し銃を構えようとしていた。

が、ジェイクはそれを制止させ相手が出て来るのを待たせた。

そして人質達7名を降ろした所でそれを盾にする様に輸送機から胸元を開かせた焦茶色のスーツをYシャツを下に着る事無く素肌の上から着ると言う何とも海外ドラマで良くある悪い組織の長ですと姿や振る舞いで語る金髪で仮面を被った男が現れる。

この男は確かにC L O W Nの構成員の1人であり服装の特徴も一致しており、この男がT—G e n e s i sの完全適応者だと思ひシエリーは怒りの表情を見せ、ジェイクは険しくはあるが不敵な表情を見せていた。

するとC L O W Nの男は整備班に手を振りながらジェイク達に話し掛けて来た。

「やあジェイク・ウエスカー、そしてシエリー・バーキン。

お前達と会えて何よりだ。

てつきり正義の味方様のアメリカは少数の人質を切り捨てて俺を殺そうと

輸送機を撃ち落としに掛かると思ってたんだ。

実際護衛艦がロックオンして来ていたからなあ……しかし、こうやって要求に応える辺りアメリカ様もまだ甘いなあ」

「は、何勘違いしてやがる。」

別に俺は誰からの指示も受けてない、俺は俺の意思でこの場に出て来たんだぜ？

寧ろそのアメリカ様や感謝してろよ、お前の要求を通さず撃ち落としていた可能性があるのを俺が甲板に出るのを見てアドリブで対応したんだからな」

CLOWNの男は自分の要求が通り歓迎されたと思いい大振りの仕草を見せながら言葉を発するが、ジェイクは自らの意思でこの場に出た事や自分の行動からアメリカ側がアドリブをしたのだとどちらも皮肉りながら相手が馬鹿みたいな奴、否、スペンサーの理想成就等と言っている連中の一味だとして馬鹿だと認定しながら話していた。

「おや、おやおやおやおや？」

アメリカ様は随分と冷酷でジェイク・ウエスカー殿は随分お人好しだなあ？

ではそのお人好し次いでに此方の要求を呑んで貰おうか、人質の命が惜しくば、なあ？」

「卑怯な……!!？」

「ああ、確かに卑怯で……しかも臆病者だな。

人質が居なきや何も出来ないと考えてご大層に人質捕ってセリフ選んで此処まで来てその上で人質の命と引き換えだと抜かしやがる。

ウィルスの力で新人類とやらになった癖に本当にやり方がセコいなあ、流石道化様だ」

CLOWNの1人はジェイクをお人好しと皮肉りながら人質の命を盾に要求を飲みせようとし、それにシエリーが憤るがジェイクは道化らしいと皮肉り返して相手の出方を待っていた。

しかしその相手はジェイク達が必ず要求を呑むとして手を伸ばし、此方に来る様に促していた。

無論シエリーはこれを受け入れる気は無く、しかし人質を救い出す方法が無いかと思案しジェイクがそれを見て矢張り自分が考えた手が有効だと判断して話を始めた。

「ああ、良いぜ、お前等の要求に応じてやるよ」

「ジェイク!?」

「ふふ、矢張りお人好しだなウエスカーJr.。

では此方に「但し条件がある、これを呑まないなら俺は其方には行かない」……条件？」

ジェイクは条件有りでCLOWNについて行くと話し、CLOWNの男は此方に主導権があるのに何故そんな事を言うと感じつつも話す様に促し、対するジェイクは乗ったなど不敵な笑みを浮かべつつ条件を話し始めた。

「先ず第1、人質連中は解放しろ。」

俺がそっちに行くんだからもう意味が無いだろ？

で、第2条件だが此方が本題だ。

お前等はやたらとゲームが好きだろ？

なら俺にもそのゲームに参加させろよ。

そう、お前等新人類様の力をこの俺に見せつけるって形だな。

まあ要するに、俺と戦って勝てたら着いて行つてやるって言っているんだ、分かるか道化様？」

ジェイクは要約すると人質の解放とCLOWNの力をジェイク自身に示し、その戦闘で勝つたら着いて行くと言う普通ならばそんな事は通らない要求であった。

しかしジェイクにはこれが通る可能性が8割方ある方だった。

何故ならCLOWNのリーダー格はレオン達にゲームと称した籠城戦を3回も仕掛け、更にパイオテロ直前にまでゲームをするかの如き犯行予告を出していたのだ。

つまり相手は最終的に如何転ぼうが自身等の理想が叶うと妄信しており、その過程に

スパイスが欲しいからと『ゲーム』を仕掛けて来たのだとジェイクは判断したのだ。

そうしてCLOWNの男は肩を震わせていた。

これは怒りに震えたのか？

答えは否、ジェイクの提案した『ゲーム』に笑いを堪え切れずに震えていたのだ。

「くはは、はーはっはっはっはっは！！？」

新人類たるこの俺の力を貴様に見せて連れて行くか！！？

良いだろう、実にシンプルな条件だ！！？

ほうら、人質はくられてやるよ！！？」

そして笑いを堪え切れなくなったCLOWNの男はジェイクの要求通りに1人ずつ人質を解放し、シエリーが1人1人人質を抱き抱える。

しかしシエリーは気付いた、人質7名全員的首筋に注射痕がある事を。

シエリーは嫌な予感しかせずCLOWNの男にそれを問い質した。

「貴方、この人達の首にある注射痕はまさか…！！？」

「そう、T—Gene—sisをごく少量だが打たせて貰ったぞ。

お前達の作る薬がすっかり働か確かめさせる為の実験台としてなあ……

ふははははははははは！！？」

「如何やら殴るのに遠慮の要らない相手なのは本当みたいだな！」

シエリーの嫌な予感が当たり、人質は皆T—G e n e s i sを少量ではあるが感染させられ、このまま放つて置けばゾンビ化する未来が待っていると言う目の前のC L O W Nの男の外道振りが際立っていた。

此れにはジェイクも手加減せず殴れると言いつつ彼の中の正義感が目の前の男を許すなど叫んでおり、腕を鳴らしシエリーにアイコンタクトで人質全員と整備班の中に入れるように合図しシエリーは急ぎそれを実行した。

しかしC L O W Nの男は笑い声を上げるのを止めずジェイクに対し嘲笑っていた。

「はははは、幾ら我々と同じステージに立つ資格を持つとはいえ所詮は旧人類の枠に収まっているウエスカーJ r . が俺を相手取るか!!?」

面白い、このC L O W Nが第6位、『レミエル』が貴様を相手してやろうか!!

?」

「はっ、新人類とか言つて所詮ドーピング野郎だろ。

そんな奴に俺が負けるかよ。

それにレミエルだあ?」

七大天使の名前を使うとかいよいよ頭の痛い奴だつて自白しやがったか、ウケるぜそれ」

目の前の仮面の男は自らをレミエル、七大天使の1人の名を名乗りジェイクはこの男

を完全に頭がイカれた奴認定し、皮肉たつぷりの言葉を投げ掛けた後直ぐ様突撃し交戦状態になる。

先ずジェイクが腹、首にパンチ、更に顎にアッパーを加えてから足払いをして倒した後肘を鳩尾に食らわせ其処から仮面に向かって踵落としをすると言う一連の動作を備兵業を営み、更にB・O・Wとの戦いにも1年以上経験を積んだ為10秒と掛からず全てを自身の力を出せる最大の威力で叩き込み、踵落としをやった後に一旦後ろに下り相手の出方を待つ体勢に移行した。

すると流石に踵落としに耐えられなかったのか仮面が割れ姿が露わになる。

その素顔はジェイクより年上だが20代後半の顔立ちであり、目はウィルス完全適応者特有の赤く発光した物であり人間のそれでは無かった。

「ふう、今のは効いたよ。」

「さあ、次はどうする?」

「…余裕ぶってるのも今のうちだぜ!」

一連の攻撃を受けたレミエルは手招きしながらジェイクが次の攻撃をするのを誘っていた。

それに対してジェイクは冷静に距離を詰め、全くガードをしないレミエルの耳や鼻、首、腹にパンチやキックを連続で喰らわせて行き、しかしそれでも余裕を見せてノー

ガードを通すレミエルにジェイクは全身全霊のハイキックを首に叩き込み、レミエルを甲板とキスさせた上に踵落としてレミエルを追撃。

常人やジュアヴォ、ゾンビや首が明確な弱点のハンタークラスの戦闘力のB・O・W・程度ならばハイキックの時点で首の骨が折れ絶命、更に踵落として幾らそれ以上の戦闘力を持つB・O・W・でも大ダメージ必至な一撃となり勝負はこの時点でもう決まっている程の物をジェイクは叩き込んだのだ。

しかし……レミエルは何事も無かった様に立ち上がり、首を鳴らしながらジェイクの一連の攻撃に対し常人では辿り着けない戦闘力を見せた事に矢張り此方側に来る資格がある、そんな意図を込めたジェイクには意味が分からない笑みを浮かべていた。

「チツ、此れがウイルス完全適応者か……シエリーのとは違って更に厄介そうな感じがしやるな」

「その通り、バーキン博士の娘はGの胚をラクーンシティで植え付けられ、それをワクチンで中和して体内に残留したGウイルスとその胚から適応したタイプだ。

我々の様にウイルスを直接投与しつつそれに完全なる適応をしたタイプではないのだ。

よって回復能力とウイルスへの耐性には優れているが……」

ジェイクがこの男に厄介な何かを感じ取り、更にシエリーとは違うタイプのウイルス

適応者と断定するとレミエルは大振りな態度で自分達とシエリーの違いを高らかに説明しながらジェイクを少しだけ見据えた……その瞬間、『5メートル以上離れていた互いの距離が一瞬で縮まり』、ジェイクの目の前にレミエルが右手を握り締め、構えながらそれを突き出そうとしていた。

ジェイクは脳内で『ヤバイ』と感じ取り咄嗟に防御体制に入り、そのガードの上にパンチが繰り出され、ジェイクは『7メートル後ろにある艦橋の下部外壁に叩き付けられ』てしまい、その衝撃で意識が一瞬のみ持つて行かれてしまう。

「グハッ……!!？」

ゲホッ、ゲホッ……!!？」

「この様に身体能力に差が出るのだよ。」

ジェイク・ウエスカー、これで分かっただろう？

これが新人類たる我々の力だ、諦めて我々と共に来い。

そうすればお前もこの素晴らしい力が手に入るんだぞ？」

レミエルは自身とジェイクの間にある歴然たる差を示した所で勝利宣言たる勧誘を開始し、ジェイクが付いて来ればこの力が手に入ると誘惑する。

しかしジェイクはこんな誘惑など受けはしない。

何故なら自身が捕まった事でCーウィルスが強化された事例等を既に経験している

為最早その手の勧誘は全て願ひ下げと言う精神が出来上がっていたのだ。

「ペツ!!？」

へっ、誰がお前等の誘いに乗るかよ。

その誘いを受けた所で人体実験の対象になるだけだつてこつちは分かつてんだよ。

だつたら願ひ下げだぜ、そんな自由もない碌でも無い生活をするなんざな!」
ジェイクは血が混じつた唾を吐き捨てながら再び身構えて抵抗する意思はまだまだあると言う姿勢を見せ、これに対しレミエルはまるで残念だと言わんばかりに大振りに嘆かわしいと言つた様子を見せ、再びジェイクを見つめると今度は交渉では無く『命令』にその口調と勧誘が変わり始める。

「はあ、なら仕方無いか。

無理矢理にでも連れて行かせて貰うぞ、ウエスカーJr.。」

恨むなら愚かな選択をした無力な己を恨むんだな」

「やれるもんならやってみやがれ、道化野郎…!!？」

2人の男の話は平行線を辿り、何方か一方が勝利しない限り……と言うよりも、レミエルの要求が通るにはジェイクを殺さない程度に戦闘不能にするしか無い為面倒だと考えながら無型の脱力した油断も隙も大ありな構えを取る。

これは無論どんなにジェイクが足掻こうが勝てるからと算段が付いている為の油断では無い余裕の姿勢であるのだ。

一方ジェイクは先程のダメージは防御が間に合ったお陰で最小限で済み、しかし自身とレミエルの力の差は歴然だとし、1年前に戦ったストーカーB・O・W. である『ウスタナク』と比べてもパワーはあれ以上、スピードに至っては比較にならない物であり、此れがウィルス完全適応者の力だと嫌でも思い知らされてしまう。

が、だからと言ってジェイクは自身が諦めてしまえばT—G e n e s i s を強化されてしまい、事態を更に悪化させてしまう事が分かり切っている為諦めず距離を離さず近付かせずのまま構え、更に攻撃、防御何方でも出来る様に独自の構えを取りレミエルの出方を待っていた。

「……………」

「……………」『ブロボブロボブロボブロボ!!?』つ、何だ、戦闘ヘリ!!?」

互いに睨み合いをしていた所に突如として空の彼方から戦闘ヘリが両者の間に割って入る様に現れ、ジェイクは一体このヘリは何なんだと困惑し、レミエルも他の同志がこんなヘリに乗って来るなど聞いていない為何なのかと視線を移した。

そして、その戦闘ヘリは唐突に機体に搭載された機関砲を放ち始めた——。

一方その頃医務室では医師達が懸命にT—Gene sisに感染した人質達の治療に当たり、現在完成間近であったT—Gene sis用抗ウイルス薬を投与する準備に入り、シエリーは医務室をガラス越しに覗いており、もしもT—Gene sisの体内からの除去がこれで確認されなかった場合には医師達の生命を優先し人質達の処分をする様にと言われており（しかし流石にギリギリまでは待つてくれると約束してある）、シエリーは藁にも縋る想いでその光景を見つめていた。

「お願い、ジェイクの血で作られた薬なの……このまま無事に効いて……!!？」

シエリーが悲痛な思いを口にし、横に居る武装兵達もシエリーと同じくこの手で民間人を射殺する事態にはならないで欲しいと表情には見せていないがその光景に手に汗を握り締めていた。

そして患者達の血管に完成間近である青色のT—Gene sis用抗ウイルス薬が投与され、医師を含む全員が患者達に薬が効く様にと祈った。

そしてその結果は――。

攻撃へりに搭載された機関砲が放たれ、ジェイクとレミエルの何方かを攻撃したかと言え、へりはレミエルに向けて攻撃し始め両者は明確な敵対者であるとジェイクは理解し、しかしこのままでは何発かは自身も機関砲に巻き込まれると機関砲の弾丸がレミエルに当たつてゐる中でジェイクは判断し距離を離すべく後方に飛び距離を離し、すると案の定ジェイクが居た場所にも甲板に大型弾丸が当たり火花が散り（なおレミエルの乗つていた輸送機にも機関砲が当たり爆発四散している）、一方レミエルも右手で防御態勢に入つてゐるが明らかに直撃を受け続ければミンチになるそれを受けても血飛沫が飛ぶ程度で済んでおり、矢張り根本的に人間と肉体強度が変わり過ぎているとジェイクはこの機関砲乱射で理解した。

「ちつ、邪魔者が、失せろ!! 『グジュグジュツ!!?』」

するとレミエルはへりの邪魔にフラストレーションが溜まつたのか左腕を異形の腕に変異させ、其処からは若干火が吹いておりその腕をを攻撃へりに向けるとその腕先か

ら炎の弾丸が1発飛び、ヘリは慌てて回避して甲板上まで行き、避けられた炎の弾丸は護衛艦の副砲に直撃し爆炎、その威力にジェイクはアレは当たれば此方はミンチ確定だと判断しつつヘリの動きにも注視し、そのヘリは他の輸送機等の邪魔にならない位置に着艦させプロペラとローターが回転を止め完全にエンジンが切られ、そしてコックピットが開くと其処から1人の女性が高々と回転ジャンプしながら降り立ち、そして歩いてジェイク達の下に近付いていた。

「ふう、取り敢えず撃ち落とさない様にアメリカ軍人さんに通信入れてみたけど、話が分かる人が艦長で助かったわ。

で、アレがT—Gene—sis完全適応者……へえ、見た所肉体強度や身体能力やら何やらの向上に加えて左腕を変異させて火炎放射器やらグレネード弾発射機能が付いた異形の腕に変化させるのか。

中々どうして興味深い力を持っているのかしら、是非ともその身体を解剖させて欲しいわね、CLOWNのお1人さん♪」

「な、何だこの女……「貴様はセイカ・ウエスカ―!!?」

何故貴様がこの場に居る!!?」セイカだと!!?」

ならこの女がセイカ・キョウマチ……!!?」

ヘリから降り立った女性……セイカはレミエルを見据えながらその肉体の解剖をし

たいと口にしつつ、ジェイクを庇う様に間に立ちレミエルの出方を待つ。

そのレミエルはセイカは事をセイカ・ウエスカーと呼び捨て目の敵にする態度を取り、一方ジェイクはこの初めて会う女こそが京町セイカであり、もう一人のアルバート・ウエスカーの子として警戒し始め何をして来るのかと身構えた。

するとセイカはレミエルに対し睨み付けを行い、その理由を口にし始めた。

「私の事を何も知らない奴がウエスカーと呼ぶなよ狂信者。」

私の事をそう呼んで良い奴は限られてんのをその身体に叩き込んでやるわ：

!!?

と言う訳でジェイク・ミューラー、貴方と私で共闘しようじゃないの」

「はあ!!?」

お前、いきなり初対面の奴に何を言つてやがるんだ!!?」

セイカは自らを『ウエスカー』と呼ぶ事をレミエルに対し完全に切れた素振りを見せた後、ジェイクの方を見ていきなり共闘を申し込んで来た。

その脈絡の無さにジェイクは困惑し、しかし対するセイカは淡々と共闘する理由を話し始めた。

「まず第1、私はワクチン等の防衛や貴方達を助ける様に命じられた事。

第2に私のお気に入りの子達がコイツ等の所為で危ない目に遭つてる事。

そして第3に……私の事を良く知らない癖にウエスカーと呼んだコイツ等を地獄に叩き落としてやりたいと個人的に思ったからよ。

と言う事でジェイク・ミューラー、さつさと構えなさいよ。

私が貴方と戦う意思が無い今がコイツを殺るチャンスよ？」

ジェイクはセイカの語る3つの理由について頭で整理し、この女の出方が自身に敵対する物では無いと理解はした。

特に第3の理由、此れがレミエルと対立理由の1つとなつて居る点であり、此処から彼女からのウエスカーへの気持ちは憎悪にしか感じられないと考えずジェイクは思い、明らかに自分が知らない物を知ったか体験したかでセイカはウエスカーに恨みを抱いていると感じ取れた。

その地雷にこのレミエルはタップダンスを踊りながら踏み抜いたのでは？

そう思い此処はセイカの力を利用する形でこのレミエルと言う地雷を踏み抜いた道化の1人を斃す事にしよう、そう考えて腕を鳴らしセイカの横に立った。

「要はあの野郎がムカつくって事なんだろう？」

アンタとは違うが俺もアイツにムカついていた所だったんだ。

で、アンタが俺に力を貸すって言うならそれを利用させて貰うぜ。

その方が効率が良い筈だからな」

「そうそう、そう言う素直に私を利用してやる様に動けば良いのよ。

だって私は『貴方の味方では無い、敵の敵』程度の存在なんだから。

だから背中には気を付けなさいよ、何時私が貴方の事を切り捨てるか分からないのだから」

「はっ、その時は俺がアンタをのしてやるさ！

だから予め言つて置くぜ、やれるもんならやつてみやがれつてな」

ジェイクとセイカ、2人のウエスカーと言う父を持つ2人は目障りなレミエルを斃す点のみで一致した利害関係を結び、互いに互いを裏切るのも承知、背中から襲うのも承知と、ジェイクはイドニア紛争以前の傭兵時代にあつた同じ傭兵の裏切りの経験からこのセイカを腹の底から信用はせずにした。

それはセイカも同じらしく彼女の心情なりにジェイクを隙あらば始末したいと思つてすらおり、だが今は葵達自分の氣に入つた子達を陥れた道化に地獄を見せる事に集中し此処に信頼も信用も無い、ただ目障りな物を潰す一点のみの利害から生まれた共闘関係が成立した。

「はははは、新人類になる資格を持ちながらそれを拒む愚者とT—G e n e s i s による物では無いが新人類となり高次への進化を遂げたにも関わらず旧人類とその文明に加担する愚者、2人の愚者が手を組み俺を斃そうとするか!!?」

面白い、このレミエル手心も加えず貴様達に裁きを下そうか!!?」
「言つてろよ道化野郎。」

お前の発言一つ一つが耳障りで仕方無いんだ、オマケに身振り手振りも目障りと来て日本の言葉にある『百害あつて一利なし』つて奴なんだよ。

だからお前みたいな巫山戯た道化は此処で……」

「私の大好きなお酒や葵ちゃん達が消された世界なんて面白みも何も無いつまらない世界になるに決まつてるじゃん。」

じゃあそんな世界にしようとする道化には此処で……」

『潰させて貰うぜー／＼ご退場して貰うわ!』

ジエイクとセイカを見て嘲り、その上で裁きを下すと正に自分こそが神に等しき天の使いであるとその態度と言葉から察せられ、異形化した左腕から炎を吹き上げながらレミエルは2人を迎え討つ用意をし、一方の2人はレミエルに対し走り出し、その上からの物言い等を押し折ると決めながら走り出した。

そうしてかつて世界を滅ぼそうとした男、アルバート・ウエスカを父に持つ2人が七天使の名を騙るテロリストを地に墮とし葬り去る為の一時的な共闘が、ワクチン等を開発して事態の鎮圧を図るアメリカ軍特殊空母上で開始される事と相成るのであった。

EP XVII 『ジェイク、セイカ達の戦い・完成した希望』

空母医務室に置いて、感染させられ中期症状を見せていた人質達に完成間近な抗ウイルス薬が投与されこれで薬が効けば……そう薬に縋る思いで人質達を見つめていたシエリー達。

その結果はと言えば……最新の検査技術も取り入れているこの空母での、抗ウイルス薬の力により人質達の体内にあったT—Gene—sisが消滅して行き、最終的に人質達の容体は安定化し、ウイルスも死滅していた。

つまり、抗ウイルス薬は効果を発揮し人質達の命を救ったのである。

「……良かった……!!？」

シエリーは胸を撫で下ろすと同時に手摺りに捕まりながら一息吐き、ジェイクの血が再び人を救った事に安堵し、同時に完成間近でこの効力ならばしっかりと完成させれば末期寸前の人達にも効力が期待出来ると言う一つの光明が見えた事になりならばシエリーは何が何でもこれらを完成させなければならぬと考え、外に居るジェイクに合流しCLOWNの男を倒さねばならぬと考え空母内から外に出ようとす。

「待つて下さい、エージェントバーキン!!?」

すると自身の背後から声が掛けられ、後ろを振り向くとそこに居たのは血清弾開発担当員の1人であった。

「貴方は……まさか、完成したの!」

「そのまさかです、今は5マガジン分ですが、血清弾がつい今しがた完成しました!!?」

貴女とジェイク氏のハンドガンマガジンにそれらを詰め込みました、早くジェイク氏にも届けてあげて下さい!!?」

それはシエリー達が待ち望んだ物の3手の内の1つ、特殊なB・O・W・やT・G・eの弾丸、血清弾が遂に完成したのだと知らされシエリーのハンドガンマガジン2個、ジェイクのハンドガンマガジン3個にそれらが詰められている計5マガジンを受け取り、血清弾開発者の1人にただ一言「ありがとう」と告げた後シエリーはジェイクの下に走った。

今もこうしている間にもこれらの完成や敵の足止めをしてきている彼の行動に報いる為に急ぎ空母内を駆け抜けて行つた。

一方外の戦闘はウイルス完全適応者の京町セイカがジェイク側に加わり、その2人が同士に走り出しレミエルへと向かって行った。

それに対してレミエルは左腕から火炎放射を放ち2人を焼こうとしたがジェイクはスライディングで避けつつ自身が見つけた銃器店でカスタマイズされたハンドガンでヘッドショットを加えていく。

が、ハンドガンとは言え弾丸が何発も頭に直撃し脳漿も飛び散っている筈なのに意に介さず左腕を徐々に下げようとしていた。

しかし其処にセイカがウイルス完全適応者の耐久力で火炎放射をそのまま走って突っ切り身体が燃えたまま顔面に左アッパー、左腕を右手で押さえジェイクに炎が当たらない様にしつつ自身も左手による首、顔面パンチや膝による鳩尾等を何度も『本気』で

叩き込み、ジエイクも顔面に銃弾を浴びせて行く。

「調子に乗るなよ、ウエスカアの血を継ぐ愚者共!!?」

するとレミエルも此れら全ての攻撃に対し苛立ちを覚えたのかセイカの首をフリーの右手で掴み締め上げると左腕の異形の腕をセイカに向けて火炎放射を直接浴びせ、更に右手で締められている首からは肉が焦げる音がし、右手自体も熱したフライパンを上回る温度に達している事が窺い知れ、ジエイクは捕まったセイカを離させようと起き上がったて再び走り出しレミエルに接近しようとする。

レミエルはそれを予測し左足でジエイクを蹴り上げ肋骨を何本も折ってやろうと考えハイキックを行う。

だがジエイクは傭兵時代での対人戦闘やB. O. W. との戦闘の全ての経験と直感を生かしこのハイキックを避けて懐に潜り込み左脇腹にパンチを繰り出し、其処から流れる様に背中に戻り込み軸になっている右足を払い転ばせ、その瞬間にセイカに向けた左腕もズレて顔面に背後から攻撃が通る様になりジエイクは渾身の力を込め始めた。

「喰らいやがれバケモンが!!?」

ジエイクは膝と肘で頭を挟む様に打ち込み、二つの力を込めた硬い部位に挟まれレミエルの頭から『ブチッ』と何かが切れる音がし、鼻から血が流れ始めながら倒れ込もうとしていた。

其処に空かさずセイカが右手の高速を振り解き、共に倒れ込む勢いでレミエルの顔面に叩き落としを加え、レミエルの後頭部が甲板にめり込む程のパワーを叩き込む。

それらを受けた為か異形化した左腕から炎が吹き止み、2人は先程の走つて来た位置に側転やジャンプで戻り態勢を立て直した。

するとジェイクはセイカの服が『全く焦げてない所か燃えた形跡すらない』事に気が付き話し掛け始めた。

「おいおい、スーパードールだから炎で焦げないのは分かるんだが服が一切燃えてないってどう言う事だよ」

「ふふん、私の服はタイラント達と同じく防弾、防刃、耐熱とあらゆる攻撃に対して高い防御力を誇る特別製のよ。」

まあ、あつちはリミッター目的で付けてる訳だけど私達ウィルス完全適応者
は人間の思考そのままにアレ以上のパワーとスピード等を發揮出来るから単純な防御
力底上げ用の服だと思えば良いわよ♪」

「…最早何でもありだなオイ」

ジェイクはセイカの服がタイラント達がリミッターで着けているスーツ等と同じ物
であると聞かされ、その間に首に付いていた焦げ跡がすっかり再生し切りダメージその
物がシェリーと同じく治り切り何でもありだと称しながら呆れたと言ったニュアンス

要約したら私達の相手が出来て嬉しい、私達を潰すその時が待ち遠しいって所ね……ダメージを明確に与えてこの反応ってマゾなのかしらね、気持ち悪いわ」

レミエルはジェイクとセイカが自身にダメージを与え、確かな有効打を与えた事すらも笑い、だがその言葉にはまるで敗北の2文字が無い事が窺い知れた2人は訳が分からないこの態度にそれぞれの反応を見せて構えをし、出方を窺う。

だがまだ高笑いしてあまつさえ余所見までした事にジェイクとセイカは自分達が舐められていると分析しつつ、先程までのレミエルに与えたダメージが抜け切ってしまつてると判断出来た為2人はアイコンタクトもせず同時に突撃し、セイカはFN P90でレミエルの全身に銃弾を浴びせながら首にハイキックを叩き込みまたレミエルは甲板とキスをしたが、今度は直ぐに起き上がりセイカの頭を右手で持ちながら腹に左腕の炎をゼロ距離で浴びせる。

その隙をジェイクは逃さずマグナムを取り出して頭にクリーンヒットさせ僅かに頭をよろめかせた瞬間全身の急所にパンチ、キック、肘打ち、膝蹴り、そして心臓の上に親子故に無意識に同じ構え、同じ繰り出し方の掌打を浴びせてセイカの拘束を解いた。

するとセイカもお返しと言わんばかりにジェイクみたく連続パンチやキックを格闘ゲームのコンボの様に流れる様に叩き込み、最後は2人同時に小さくジャンプしながらスピンキックを浴びせてレミエルを吹き飛ばし、2人は倒れ込んだレミエルにリロード

止める。

が、此処でセイカは掴んだ、掴まれた部位に対して気付く事があった。

それは何と、先程まで以上の高熱が手から発せられ、レミエルの足と接している甲板もその熱で溶け始めると言う更なる超高熱が全身から発せられていると。

ジェイクもセイカの手や服から肉が焼ける焦げ臭い臭いに加え触られてる部位から煙が噴き上げているその光景を見て、今自分が殴り掛かれればその熱に拳が耐えられず焼かれてしまうと気付きカスタムハンドガンでレミエルを撃ちセイカの拘束を解こうとした。

が、何とハンドガンの弾丸も着弾した瞬間から融解し、レミエルにダメージを与える前に溶け切ってしまうと言う今は何をしても駄目だと言う光景を目撃して攻めあぐねていた。

「コイツ、さつきよりも熱いじゃないの。」

しかも私が焼けてく様を見て笑うとか気持ち悪いし、この熱の温度からして私相手に手加減していた訳？

舐められた物ね…!!?」

「クソが、殴ったら熱で駄目、銃弾も駄目、だったらどうすれば「ジェーイクツ!!?」っ
!!?」

シエリー!!??」

2人は相手が焼ける様を見て狂氣的な笑みを浮かべるレミエルに気色悪さと今まで手加減して相手されていた事、更に現在何をやっても無駄な足掻きにしかならないと言う光景に2人はそれぞれ苛立ち、特にジェイクは人間である自分はこの後何をすれば良いか思案していた所にシエリーの声が響き、そちらを向くと自身に向かつてハンドガンのマガジンを投げられている事が見て取れ、それを受け取りマガジン内を見ると通常の弾薬と違う弾薬が詰められている事が分かりシエリーに再び視線を向けるとその意図を理解してシエリーは頷いて見せた。

だがシエリーも今現在レミエルが発してる熱を目撃しておりハンドガンを構えてはいるが撃つても溶かされると分かっており撃てずにいた。

「このままじゃ無理だよな…ならセイカ・キヨウマチ!!??」

アンタスパーガールなんだろ、だったらソイツの熱が止まる様に隙を晒させてくれ!!??」

「全く、私に命令しないで欲しいっての。

でも、私をウエスカーと呼ばないその気遣いやらしい加減鬱陶しくなってきたコイツを黙らせる為に従ってやるわよ!!??」

其処でジェイクは未だこの熱に耐えられているセイカに対してレミエルが隙を作る

様に言い放ち、対するセイカはジェイクに命令されるのは癪だと言う態度を見せながらも、ジェイクが自分をウエスカーと呼ばないその言葉選びに2割、そしてこの鬱陶しい七大天使を騙る男に対する興味の失せに8割と言ったセイカ自身の感情を込めてその拘束を振り払い再びパンチやキックを肉が焼かれながらも繰り出し、そして最後は矢張りと言うべきかジェイクと同じく掌打を叩き込みレミエルを吹き飛ばす。

しかしレミエルはその吹き飛ばしに対して身体が倒れない様に力を込めて支え、そして受けたダメージに対して笑い声を上げると甲板から発せれた金属が溶けた臭いと煙が消え、レミエルは明らかな隙を晒したとジェイク、シエリーは察し2人は特殊弾頭が込められたハンドガンを構え、セイカは2人の射線に入らぬ様に飛び上がりジェイクの横に立った。

「これでも喰らってろ、バケモンが!!? 『ズダンッ!!?』」

ジェイクがレミエルに対し化物と叫んだ瞬間、シエリーと共に特殊な弾丸……完成したT—G e n e s i s 産B・O・W やレミエルの様なウィルス完全適応者用の血清弾を放ち、それがレミエルに対し直撃し血飛沫が2つ上がる。

その間にシエリーもジェイクの横に立ちレミエルを見据えながらハンドガンを構えていた。

「…はははは、なんだ今のは?」

それが切り札だったのか？」

しかしレミエルはまるで堪えていない素振りを見せながらジエイク達を見やり、これには3人共（セイカは2人の様子から察し）放った血清弾が効き目がなかったのかと焦り、しかし銃の構えを解かずにレミエルに銃口を向け次の出方を待った。

そしてレミエルは先程の様に超高温を発しながら超スピードで近付こうと足に力を込め走り出す……その瞬間に立ちくらみと視界が赤く染まり、更に頭痛や吐き気と言った様々な症状が表れ、その上先程まで纏えた高温を発せなくなり身体の自由が効かない事をたった今察してしまう。

「な、何だ……身体が……き、貴様ら、何を撃ち込んだ……!?」

「ふん、やつとその巫山戯た余裕ぶつた態度を崩したな。

何を撃ち込んだか教えてやるよ、血清弾だよ。

しかもお前等やB・O・W様に調整された特注品だけ。

特別サービスだからもつとたらふく喰らいな!!? 『ズダンズダンズダンズダ

ズダンツ!!?!!?』

「ぐつ、がアアアアア!?!」

レミエルは何を撃ち込まれたか理解出来ずジエイクに叫ぶと当の本人は血清弾だとあつさりネタバラシし、そのまま再び血清弾を何発も浴びせレミエルに更なる苦しみを

与える。

無論これはただのB・O・W・処理などでは無い、ジェイクがこのバイオテロで苦しみ、そして死なざるを得なかった人々の痛みを与える七大天使を騙る男に対する謂わば天に登る力を奪い去る鉄槌である。

そのジェイクに続きシエリーも弾丸を撃ち込んで行き、ジェイクと同じ想いを抱きながら引き鉄を引いて行き、それをセイカはレミエルに対し養豚場の豚を見る様な目で見つめ、様々な感情：特に侮蔑とプライベートに土足で踏み込んだ事への怒りの感情を込めてレミエルが血清弾を受けて倒れていく様を見つめていた。

そしてレミエルは遂に仰向けに倒れ伏してしまい何も抵抗する力を出せずゆっくり近付いて来るジェイクとシエリーに身体を起こして見つめる事すら出来ない状態になり、マトモな言葉を発せぬまま目の前まで来た2人に視線を向け口をパクパクと開けていた。

が、呂律が回っていない為何を話しているのか誰にも分からず、また理解しようともせず2人はレミエルの頭に銃口を向け死刑宣告を口にした。

「罪も無い人達を苦しめたその身勝手な行い、此処で全部断じてあげるわよ…!!?」

「これでゲームオーバーだ、七大天使さん？」

『ズダンッ!!?』

シエリーはCLOWN達の身勝手さに怒りを燃やし、その姿はかつてラクーンシテイで自身を救ってくれたクレア・レッドフィールドに重なりながら引き鉄を引き、対してジェイクはゲーム感覚でバイオテロを引き起こした者に対しゲームオーバーと言う最大限の皮肉を込めて引き鉄を引き2つの血清弾はレミエルの脳天に叩き込まれ、其処でレミエルは腕き苦しみながらもまともに手が動かせずガクガクと震える事でしか苦しんでいる事を表現出来ず、そして遂に白目を向き震えていた手もパタリと動かなくなりレミエルの絶命は確定的となった。

『プシュツ、ゴクツゴクツゴクツ』ぶはあ………ホント、七天使を騙っておいて人間様に負けるなんて滑稽でしか無いわね。

取り敢えずもう聞こえないだろうけど貴方風に言えば………つまらないゲームだったわよ、レミエルさん？」

するとセイカは超スピードで態々ヘリからビールを取り出して来てジェイク達の後ろでそれを飲みながらレミエルの事をつまらなかつたと評し飲酒を進める。

その言葉にジェイクは概ね同意していたがこの女が自分と同じくウエスカーの子であり、更に自分と違い何らかのウィルスに完全適合したレミエルと同等の存在である為警戒心を捨てず酒を飲み切るまでは銃口を向けずに睨むだけにし、そして飲み切つてセイカが缶をヘリのコックピット内に後ろ投げで入れた所を見計らい通常の弾丸を込め

たカスタムハンドガンを構え、射撃モードを単発から3点バーストに変えてセイカを見据えた。

「…そう、それが正しい判断よジェイク・ミューラー。」

アンタと私は所詮はこの天使気取りを倒すだけの共闘関係に過ぎなかった。

だから此処からは…アンタと私の『話し合い』になるわ」

対するセイカもベレッツタを構えてジェイクに銃口を向け『話し合い』と言う単語を出して冷淡な笑みでジェイクを見つめていた。

するとシエリーもジェイクと同じく銃口をセイカに向け、互いに何時でも銃を撃てる状態にしながら距離を保つ。

するとセイカの背後から頭に向けて幾つもレーザーポインタが向けられ、その先をジェイク達を見ると米兵達がセイカにライフルを構えており何時でも狙撃可能な状態になっていた。

が、セイカはそんな事にはとづくに気付いており全く意に介さずジェイク達に視線を外さず銃を向けっぱなしの状態にしていた。

こうして天使を騙る男はかつて世界を滅ぼそうとした男の息子達、更に自身等が使うウィルスの基を作った男の娘に倒され地に堕ち、惨たらしく死んで行った。

そして次はジェイクとセイカ、2人のウエスカーの子の『話し合い』の番と相成った

のであった。

「…先ずセイカ・キヨウマチ、アンタは何なんだ？」

アンタが此処に来た理由は聞いた、だがアンタ自身の考えは聞いていない。

だからこう質問してやる、『アンタ自身の目的は何なんだ？』

「ふふ、私自身の目的かあ。

私が此処に来た理由を聞いたら愚問だつて笑い飛ばしたけど私自身の目的を此処で聞くんて目の付け所が違うわね。

うーん、強いて言うならアンタを見に来た、かな？「俺を？」

そう、ある人のイタズラ心があったとは言え見ておきたくなつたのよ。

ジェイク・ミューラー……私と違つてこれと言つた束縛を受けず、母からも確かな愛情を持たれ、そして自由気ままに生きて来た……謂わば『私のもう一つの可能性』の様な存在、『コインの表側に位置する奴』がどんな人間なのかをね……」

ジェイクはセイカが此処に来た『誰かに命じられたから』では無い『個人としての理由』について問い質すと、セイカは不意に笑みを浮かべて銃を下ろし横をトコトコと歩きながらジェイクを見据えて己の中に秘めた物を垣間見せる様に話をして行き、そして超スピードでジェイクの目の前まで走つて来てその目を見開きながら狂氣的な笑みを浮かべてジツとジェイクの目を見ていた。

そしてその瞳は緑色でありながらその下が赤く輝いた光が漏れており、この緑色の瞳はカラーコンタクトである事をジェイクは察し、更にジェイクとシエリーはセイカの言葉から滲み出る激情の一片を感じ取り冷や汗を掻き迂闊な言葉を発する事が出来なくなっていた。

現在セイカはジェイクとシエリーの目の前に居る、よつて迂闊な言葉を発せば此処で殺されると察した為黙って彼女の言葉を整理し始めた。

ジェイクが自身のもう一つの可能性やら、コインの表側やら、母からの確かな愛情や自身と違い束縛を受けず自由に生きて来た等の言葉を整理した。

すると2人の中でその答えはあつさりと出てしまう。

この京町セイカはジェイクが歩んで来た人生とはまるで別物：と言うよりも真逆の人生を生きて来たのだと、特にジェイクは理解してしまい睨む目は変えてはいないがその内には驚愕の色が浮かんでしまい、それを見たセイカは不気味に笑いジェイクに話し掛けていた。

「ふいふい、そつうよー！」

私は所詮アルバート・ウエスカーが保険の為に私の組織とパイプ役に立たせる様に関係を持った女を母に持ち、その母からはウエスカーが自分を捨てた事を知れば私はお荷物、生まれなければ良かったと四六時中虐待を受け、更にその母はウエスカーが

邪魔になったって理由で殺され、私は実の母からは愛されず、実の父には自身と同じあらゆるウィルスへの耐性や適応力を持つ事から組織にウィルスやB・O・Wの性能実験の検証台として売られて自由もない、何時死んでも可笑しく無い人生、いや、人生とすら呼べない研究対象として生きて来たのよ!!

そうやって私は今の力を得て行っただけ自由なんか無い、ならせめて生き意地汚く生きてやると思っただけウエスカーは私の今居る組織を捨て、更には自身が神になるとか馬鹿らしい野望を抱いて組織に負債を、危うく組織の足が付いてしまう事態を生み出して勝手に死んで行った!!

まあ勝手に死んだのは良い、この手で殺してやりたかったけど殺す権利がある人が殺したから100歩譲ってそれも良い!

けど奴は私の事を捨てる所か殺さずに放置して死んだのよ!!

お陰で組織の私に対する風当たりは更に強くなり、更なる過酷な実験や果ては頭の中を弄る実験までされたのよ!!

その所為で私は喜怒哀楽の中で『喜』の部分しかまともに感じられなくなつて怒りも哀しみも対して感じられない人としてあるべき物が欠落して完全な生物兵器に成り果てた上で組織への負債をエージェント兼自社商品として支払う今があるのよ

!!

しており、彼女の狂気の笑い声を只々見据え、そしてジェイクは独白中に距離が再び開いた事で銃口をセイカに向け、彼女の出方を待った。

そうして彼女が次に行った事は……再び笑みを、しかし先程のとは違う人間的な笑みを浮かべ再び話し始めた。

「……ふふふ、そう、それが正しいわよジェイク・ミューラー、シエリー・バーキン。

私みたいな悪党に同情なんかしたら手痛いしつぺ返しを喰らうだけなんだからそうやって警戒心を捨て去らない事よ。

……それじゃあ、オーダーも終わった事だし私はそろそろ私が気に入った子達の所に戻るわ。

あ、それと、そいつの死体からDNA鑑定してみなよ。

面白い事が分かるって私にオーダーしてくれた人がヘリの中で言ってたわよ。

それじゃあ待ったね〜！」

セイカは同情もせず警戒心を捨てないジェイク、シエリーに自身の中で100点を付けて安易に自分に変な感情を向けなかった事を正しいとしながら再びレーザーポインタが向けられた事にまた意に介さず、更にレミエルのDNA鑑定をする様に勧めた瞬間人間離れたジャンプでヘリのコックピットに乗り込み、エンジンを起動して甲板から

離陸、そのまま空母から離れて行く。

米兵達は銃を撃とうとへりに向けるがジェイクが大きな声で「止めておけ」と一言警告し、この逃亡を無視すればセイカはそのまま去って行くが、そうでなければ相応の痛い目に遭うとオメガー1に似た匂いを感じ取りそのまま去らせて行つた。

「ジェイク……」

「大丈夫だシエリー、それよりソイツのDNA鑑定が先だろ？」

ならさつさとやつとけよ……アレがセイカ・キョウマチ……俺達にあつたかもしれない可能性、か……」

シエリーはジェイクを心配して彼に声を掛けるが、そんなジェイクはシエリーの心配を受けつつ手を挙げて大丈夫だと言いながら艦内の用意された自室に向かつて行く。自身のもう一つの可能性、京町セイカを明確に認識し、今後このバイオテロ解決に向かつて行く先々で出会うであろう彼女に対し次もまた油断しないとしながらカスタムハンドガンホルスターに仕舞い、更にアルバート・ウエスカーは余計な事をして死んだのだと更に理解し京町セイカが敵に回った場合の想定も加えながら今後の行動方針を纏めて行くのだった。

EP XIX 『幕間・手渡された希望と新たに動く道化』

PM14：12、ジエイク達が戦闘を終えてから約7時間経過後。

甲板の応急修理や護衛艦の鎮火作業等が行われて取り敢えず特殊空母は元通り……とは行かない物の機能の8割程は回復し艦載機の搭載等を再び可能にしていた。

そしてジエイク達は艦橋にて回収したレミエルの死体からDNA鑑定を行いその検査結果を待つていた所であった。

そして、その結果はすぐに出るのであった。

「シェリー、ジエイク、貴方達が殺害したウイルス完全適応者レミエルのDNA鑑定結果が出たわ」

「早いな。」

で、何処の何奴が七天使の名を騙ってイキつてやがったんだ？」

「レミエルの本名は『ライナス・メルデイセク』、メキシコのとある麻薬カルテルの長を務め、麻薬のみならずB・O・Wも売り捌いていた容疑が掛けられていたけど明確な証拠が見つからず、他の麻薬カルテルからもB・O・Wに手を出すカルテル間のルール違反を犯していると告発があったけどそれすらも躲されてしまってメキシコ政

府は野放しにするしかなかったの。

そしたら麻薬カルテル構成員共々数ヶ月前に行方を晦ましていた国際指名手配犯よ」

「麻薬カルテル……麻薬を売り捌くだけじゃなくB・O・W・まで……」

ハニガンからレミエル……ライナスの正体を聞かされたジェイクとシエリーは彼が1つの麻薬カルテルの長を務めていた事や麻薬のみならずB・O・W・まで手を出してカルテル間の市場を荒らしていた事すら判明し2人は呆れや嫌悪と言った感情を向けジェイクに至っては死んで世の為になる人間だったのだと理解しライナスの事を内心軽蔑していた。

だがその経歴ではまだスペンサーの理想と繋がらない為ジェイクはもう一言突っ込みを入れる事にした。

「だがそれだと連中の人類の……何たらって妄想垂れ流しな理想に繋がらないんじゃないか？
ねえか？」

奴個人の経歴とかもつと洗い出せなかったのか？」

「そちらの方も大方洗い流せているから心配しないで。」

ライナスの親は如何もアンブレラ社に務めていたらしく、親子2人共々アンブレラ総帥だったスペンサーの熱心な信者だと言う事も判明しているわ。

だからこそ我々の見立てでは何処かのタイミングでCLOWNと接触し部下共々資金を全て持ち逃げしたか、元々CLOWNの構成員で麻薬やB・O・W. による市場独占と荒らしは彼等の資金を集める為の物で、一定額に達したから夜逃げしたかの2パターンを想定しているわ」

「親共々スペンサーの信奉者…それならあの狂信的な思想も理解出来るわね、理解しなく無いけれど…」

ジェイクのもう一つ突っ込んだ話をハニガンに向けた結果、彼と彼の親がスペンサーの信奉者だった事も判明し、CLOWNとの繋がりをどのタイミングであろうが持てる上に何方にせよCLOWNの資金源になっていた事をジェイク達は理解し、益々ライナス・メルデイセクと言う男は救えない者だと発覚しより明確な嫌悪感を示していた。

すると艦橋にワクチン等の開発主任が入室し艦長に敬礼し報告を開始した。

「艦長、並びにアメリカ政府直轄のエージェントの皆様、そして血液提供者のジェイク氏に報告します。

T—Genesis用ワクチン、コードネーム『Apocalypse』と抗ウイルス薬の『Pandora』、そして血清弾の『Fallen Bullet』の完成、及び相当数の生産を開始しました!!?」

現在のそれぞれの備蓄数からBSAA、A・B・F. が避難させた生存者達

の居る各駐屯地に配り切り、並びに各戦線で戦うB S A A、A・B・F、隊員達、特に東京前線に立つ北米支部アルファチームや極東支部デルタチームとA・B・F、オメガ小隊達に血清弾の配備が可能となりました!!?」

「うむ、ではワクチン等を各駐屯地に直ちに配給、そして前線に立ちC L O W N抹殺指令を帯びた戦士達に天使を撃ち墮とす弾丸を渡す準備に取り掛かれ!!?」

…この短時間で良く作り上げてくれたな、諸君の奮闘に敬意を表するぞ「了解しました!!?」

如何やらワクチン、抗ウイルス薬、血清弾が

完成、更に駐屯地に避難中の生存者達にや戦闘中のB S A A隊員達に回す備蓄数が用意出来たらしく、バイオテロ発生から2日後にしてワクチン等の製造に漕ぎ着けた事にジェイクは上出来だと言う表情を浮かべ、シエリーも胸を撫で下ろしこのまま行けばT—G e n e s i sに感染し動く屍となる人々が減ると安堵していた。

そして艦長やハニガンはB S A A各隊員やレオンに通信を入れ、一旦指定した駐屯地に撤退して血清弾の受け取りをする様に命じる通信を送り出し、甲板上の輸送機に次々とワクチン等が運び込まれ離陸準備に入った後そのまま離陸して行き始めていた。

「シエリー、ジェイク、貴女達もレオン達のサポートの為に東京前線に向かつて!」

東京の彼等の居る駐屯地に向かう機体は048号機よ!」

「へっ、民間協力者も前線に出なきやならない程切羽詰まっているみたいだな。

なら良いぜ、俺と俺の血から生み出された洒落た名前のワクチンやらでこのバイオテロを終わらせてやるぜ！」

「分かったわハニガン！」

レオン、クリス、待つてて、私達も行くわ！」

其処から通信を終えたハニガンはジェイクとシエリーに東京の最前線付近の駐屯地に向かう機体の番号を教え2人はそれぞれ走り出し艦橋から外に出た。

そんな中でジェイクはワクチン等が洒落た名前だと言いながら外に出て行ったのを見て艦長は天井を見上げながら独白を始めた。

「…Genesis、創世記の神話を終わらせるべく人が用意した『黙示録』と奴等が振り撒いた災厄の中に残された『最後の希望』、そして『天使を地に撃ち墜とす為の弾丸』、これらこそが我々人類が君の血から用意出来た反撃をより完璧にする駒でありそのコードネームを考え出したのだよ。

……ありがとうジェイク・ミューラー、君の協力には感謝しか無いよ……」

如何やらジェイクの聞いていない所で始まった独白によれば彼こそがワクチンや抗ウイルス薬、Fallen Bullet、清弾の名を考え出した張本人らしく、CLOWN達が齎したバイオテロやそれらに反抗する為の人の叡智、それらの象徴として考え抜いた名前である

として独り言で話し、艦橋に居た船員達は艦長に敬礼をし、ハニガンはこの3つがバイオテロを終わらせる鍵になる事を祈りつつレオン達に的確やサポートを送る準備を進めるのであった。

「んっ、H Qが駐屯地への撤退命令を出したか……よし、デルタチームとオメガ小隊は急ぎ指定された回収地点に行き駐屯地に向かうぞ、誰一人遅れるなよ！」

「ワクチンや血清弾が完成した為それらを俺達に支給する為、か……よし、アルファチームとオメガ、シータ混成小隊は此れより駐屯地に赴き装備を再び整え今度はアジトの洗い出しに向かうぞ!!？」

一方その頃東西に分かれたアルファチーム、デルタチームとA・B・F、各員やレオン達に指定駐屯地への撤退命令が出され、更にそれがワクチン等の開発に成功した事に

よる物であると全員が知り小走りでROICE学園へと向かい、其処から全員が輸送機に乗り込みチャリーチーム達や自衛隊達が懸命な活動により確保された駐屯地に着陸し、其処でアルファとデルタ両チームが合流してそれぞれの情報を交換し合い始めた。

「クリス、全員無事の様だな」

「B・Y・達もな。」

「それで、生存者は…?」

「西地区は…ダメだった。」

通信から聞いてそっちの東地区は居たらしいが…此方は東地区以上の有り様だったよ…」

「…そうか」

クリスとB・Y・が全員の駐屯地到着後の点呼を終わらせた後2人で集まり情報共有を始め、クリスは西地区の生存者救助報告が無かった事が気掛かりで聞いた所、矢張り東地区のあのマンションの生存者達は運が良かったのだと分かり落胆すると同時にCLOWNのバイオテロに対し2人共怒りを隠さず拳を握り締めていた。

一方レオンとは言えば西地区で様々な事があつて不安定な葵を心配し、事前に葵の好きなジュースをマキから聞き買って来ようとした所でマキと茜も便乗して来た為(但し

お金は渡してる）一緒に買って来てやっていた。

そうして葵が休んでいる簡易休憩所に来ればマキや茜のみならずゆかりやあかりも来ており話をしていた所だったらしく機を見計らって声を掛ける事にし一感覚置いて葵達に話し掛けた。

「少し邪魔するが、良いか？」

「あ、レオンさん。

ええ、大丈夫ですよ」

「こっちは粗方お互いの行動やらを報告し合えたからね。

後はガールズトークだけど私達を守ってたレオンさんだから参加許可出す

よ」

「…ふつ、ガールズトークか。

なるべく邪魔にならない様にしないとな」

如何なら残りはガールズトークだったらしくレオンは参加は憚れる筈だが如何やら葵達を守った功績点から参加可能になったらしく、しかしそれでも女の子同士の会話の為なるべく邪魔にならない様に休憩所の椅子に座らないままで居た。

「…それでね、ゆかりさん達も知っているあの叔父さん叔母さんんだけど、ゾンビになつててそれで…」

「そう、だったんですか……葵さん、叔父さん達を救えなかったのは残念ですが、あの人達に鎮魂を与えてあげたって事を忘れないで下さい。

多分叔父さん達も、それ以上葵さん達に醜い化け物になった姿なんて見せたく無かった筈ですから……」

「知り合いがゾンビになった上で引導を渡すしか無い、なんて滅多に無い状況ですが上手く言えませんが、叔父さん達は葵さんに眠らされて安らかになっている筈ですよ……レオンさんも、そう思いますよね？」

葵の思い詰めた表情を見てあの場には居なかったゆかりとあかりがそれぞれ励ますのと叔父さん達の気持ちになって話して行き、マキや茜も頷きながら葵を心配する様子を見せ、当の本人も周りを見てやや俯き気味ではあるがそれでも彼女達の気遣いに頷きゆかり達の話を肯定して行く。

そんな中であかりがレオンにガールズトーク特有のキラーパスを行い、レオンは実際このキラーパスはどのタイミングでも来ても良い様に自身の中にある経験を思い出していた。

そう、2つの苦い悪夢の中で起きた経験を。

「そうだな……俺の経験から言わせて貰えば、葵が引導を渡した人達がそれ以上動く屍として他の人を襲わない様にしてやったのは正解だった筈だ。

俺も2回、感染した知り合いを手に掛けているからな……」

「レオンさんも?」

「ああ、先ず初めは1998年のラクーンシティ……あの時俺は新米警官として着任する筈が、ラクーン市警から待機命令が出て何時まで経っても連絡が来ない事が気掛かりになってラクーンシティを訪れ、其処で俺の忘れられない悪夢の原初が刻まれたんだ。

そのラクーンシティで警察署を訪れた俺は生きていた先輩警察官2人の内1人はシャッター先から救い出そうと引つ張り出したが結局ゾンビ達に食られてみす死なせてしまい、その後にもう1人の先輩であるマービン・ブラナー警部補に俺は助けられて、彼のサポートを受けながらラクーン市警からの安全な脱出法を探していた、

そしてそれを見つけないよ脱出する時には既に負傷していた警部補はゾンビ化の兆候が現れ始め、自我がある内に俺を脱出させた……だが、紆余曲折あつて再びラクーン市警のその場所を訪れた際に警部補は完全なゾンビに成り果てて襲い掛かつて来た。

だから俺は彼を撃ち、ラクーンシティでのバイオハザードを引き起こした原因を探つて解決すると誓つた。

此れが1回目だ、2回目は……今の大統領直轄エージェントになった

後、1年前に起きたアメリカのトルオークスでのバイオテロで、俺はゾンビになってしまった、エージェントになった後の俺の恩人であったアダム・ベンフォード前大統領を、この手で……だからアオイ、君の選択は間違いで無かったと俺は思う。

少なくとも君が撃つた人達はウィルスによるゾンビ化から解放され、もつと言えば人間としては既に死んでいて手の施し様が無かったんだ、だから君の選択は間違いないんじゃない……少なくとも俺はそう思っている」

「……ごめんなさいレオンさん、迂闊に聞いてしまいました……いや、構わないさ。

聞かれたら答えようと思っていたからな……」

あかりからキラーパスを受けたレオンは葵達が想像する以上の地獄と十字架の一端を話し始め、それらの経験から葵が間違った選択をしたか否かを話し、葵は間違っていないかつたと何度も何度も地獄を経験したレオンの口からそれらが出切った後、ゆかりやあかりはクリスマス並に重過ぎる十字架を背負ってしまったていると感じ取り、マキや茜は同じ地獄を経験したがレオンはそれ以上に経験している為矢張りこの中で葵の苦悩を良く理解し、間違っていないと言えるのは彼だけだったと思いガールズトークに参加させたのを正解だと感じ、そして当の葵は自分が思った以上にレオンが十字架を自ら背負った事を話させた事に申し訳なさを感じ謝るが、レオンは聞かれたら答える気だったと気にしない様に話し、それを聞き葵は気にしながらもこれ以上蒸し返さず、且つ茜達の様

に自分の選択を間違つてないと話すレオンに感謝しつつ手に持ったジュースを飲み干すのであった。

「ワン!!?」

「あれ、この子ずんだもんじゃん!!?」

で事は…「あ、葵ちゃんにマキちゃん、ゆかりちゃんにあかりちゃん、それに茜ちゃん、無事だったんですね!!?」あ、やつぱりずんちやんだ!!?」

それに…『ささら』ちゃんに『つづみ』ちゃん、『イア』ちゃんに『オネ』つちじゃん!!?」

皆無事だったんだ!!?」

そんな空気の重い休憩所に避難しただもんが現れ、その後ろからずんだもんを追つて来たずん子やその友人達で前から灰掛かった茶色の髪をサイドテール気味に束ねた少女で早生まれでずん子と同じクラスの『さとうささら』にこのメンバー内では年上の方が誕生日が7月中だった為ずん子達と同じクラスの青髪ショートヘアが特徴の『すずきつづみ』、更に学生でありながら音楽芸術家、俳優を務めるメンバー最年長で高校3年で灰色のロングヘアと少し小さめの身長が特徴の『イア』、葵達と同じクラスでイアの妹にしてイアと同じ事務所所属の金髪のぱつっん癖毛ショートヘアとその他属性盛り沢山の音楽芸術家の『オネ』、皆合わせて葵やマキ、ゆかり達を中心にR

OICE学園で昼食や下校等も一緒にする仲良しグループであり、彼女達の無事を見た途端葵達が席を立ち元気に向かって行った。

「皆、無事だったんだね!!？」

「うん、私達ショッピングモールで買い物中にこのゾンビパニックに巻き込まれて2日間に閉じ込められちゃったのよ」

「でも同じ様に買い物に来ていた『ダン』君が私達を守る為にシャッター操作とかしてくれて何とか生き残ってたんだ……でも、ダン君はB S A Aの人達が来る前に私達を庇ってゾンビに噛まれて……」

「それで今、ダン君のお別れ会をダン君の遺体の前で男子一同がやってるんだよね」

「ダンの奴、『俺が死んだ時はアニソン歌いながらあの世に送って欲しい』とか言ってたから皆律儀に守ってるんだよ、勿論泣きながらね」

「そっか……ダン君……」

如何やらささら達はB S A Aにショッピングモールで救われたらしく、更に男子から一定の人気を集めていたイアとオネの大ファンだった葵のクラスメイトのダンと言う少年がささら達を庇い死んだらしく、男子達はダンが兼ねてから言っていた遺言を実行して泣きながらダンが安らかな眠りに就ける様に彼の遺体の前で特別に送別会を行っているとか聞かされ、葵やマキ達もダンのヲタ芸や知識には驚く物があり（ミリタリーか

らアニメまで幅広い知識を持つていた）ある意味彼を尊敬の眼差しで見ている……が、死に別れとなると矢張りキツいと感じ葵達は胸に手を当てダンの別れを惜しんでいた。

余談ではあるがこのさきら達こそがカイチームが救助した学生生存者であり、ダンが手厚い処置でこの駐屯地まで運ばれて来た感染末期寸前の学生である。

そうして皆がダンの別れに想いを馳せる中、年長者のイアがレオンや茜の前に出て話し掛け始めた。

「あの、貴方がずん子ちゃん達が言っていたアメリカのエイジエントで皆を守ってくれたレオンさん、それと葵ちゃんのお姉さんの茜さん、ですよね？」

葵ちゃんにマキちゃん達を守ってくださりありがとうございます……」

「……いや、俺達だけじゃないさ。」

マキやアオイ達も戦い、ズンコ達も出来る戦いをしたからこそ全員が生きてこの場に來られたんだ」

「せやからウチらに感謝するよりも、葵やマキはん達の勇氣に賞賛を送るんが正解やで。」

それに……本当にウチらは大層な事はしてへんから」

「それでもです、ありがとうございます」

イアは皆を代表してレオンと茜に礼を述べるが、レオン達はそれぞれマキ達も頑張っ

たからこそ最善が取れたと言いその礼を受け取る気はなかったが、それでもトイアは言つて聞かず頭を下げた為レオン達はそれをこれ以上受けるのを拒むのは失礼だとして黙つて受け取り、それから葵達はグループ同士の会話に盛り上がり互いに涙を流しつつ生存を喜び、死んで行つた学友に別れを告げていた。

そんな中、『アルファ』が簡易休憩所を訪れ、軽い手振りで茜達に召集を掛けそれを見た茜達は簡易休憩所を去つて行く。

そして葵、マキ、ゆかり、あかりの4人も行こうとした所でささらがずん子から聞いた今までの戦いの記録を思い返し、4人が再び戦いに行くのだと察して声を掛けた。

「葵ちゃん、マキちゃん、ゆかりちゃん、あかりちゃん、行くんだね、戦いに」

「うん、この馬鹿げたバイオテロを完全に終わらせて来る為に。」

だから皆……」

『行つて来ます』

ささらは4人が戦う者としてレオン達と共に再び死地に向かう事を案じ声を掛けると、葵達は只々シンプルに、しかし力強く行つて来ますとささら達の方を向きながら答えレオン達の後を追い始めた。

するとささら達はその力強い言葉から彼女達の決意は強いと察したささら達もまた死地に赴く学友達に対してただシンプルに、しかし絶対に帰つてくると信じて一言だけ

言つてその背中を見送る。

『行つてらっしゃい』

ささら達の見送りの言葉を背に受け葵達の歩は更に力強くなりこのバイオテロを終息させる決意を新たにクリスやB・Y・達の待つ集合地点へと向かう。

時刻はPM18:44、バイオテロから2日が経過し、火が落ち始めこれから夜戦に入ろうと言う時刻であつた。

ささら達と別れた葵達は直様クリス達の前に整列し、点呼を行い全員が居るかを確認した後クリスが口を開き始めた。

「よし、全員居るな。」

ではこれよりバイオテロ主犯組織CLOWNとB・O・W.の撃滅作戦の準備に入る…が、その前に皆に今作戦に同行する新たな仲間を紹介する！

先ずはエージェントケネディと同じくDSO所属のエージェントシェリー・バーキンと、今回の作戦、及びバイオテロによるウイルスの脅威を下げるべく血液提供を行い『Genesis』用ワクチン『Apocalypse』と抗ウイルス薬『Pandora』、そして撃滅作戦に於いて最大の力を発揮する血清弾『Fallen Bullet』の開発に協力してくれたB. O. W. 討伐を専門とする傭兵ジェイク・ミューラーの両名だ!!?

…シェリー、ジェイク、挨拶を」

「はい、私はシェリー・バーキン。

今事件に於いて使われた『Genesis』の基となったウイルスの1つであるGウイルスをこの世に生み出した両親を親に持っていた現アメリカ大統領直轄エージェントの1人です。

今事件には私の親が残した因縁が絡む為私はその清算にやって来ました、皆様よろしく願います」

「ジェイク・ミューラーだ。

このイカれたバイオテロに特に因縁らしい因縁は無かったんだがシェリーの頼みで献血してワクチン開発に協力してやった……までは良いが、俺の親のウエスカーとか言う馬鹿野郎の因縁も如何やら事件に第三勢力として関わってる様だから首

を突っ込みに来てやった。

取り敢えず言える事は此処までだ、後は勝手に想像しな」

クリスの紹介により前に出て来たシェリーとジェイクはそれぞれ自己紹介をし、葵、茜、マキはシェリー達の経歴を聞き自分達と良く似ていると思ひ、マキは1年前の事件からジェイクの素性を彼の口から、茜は独自の情報網から知っていたがゆかり、あかりはウエスカー、つまりはクリスと死闘を繰り広げたアルバート・ウエスカーの子がセイカ以外に居た事にこれを知らない他の隊員共々驚き、葵は2人の親の因縁に共感を湧き、更にシェリーについてはT—G e n e s i sを琴葉紅がこの世に生み出してしまった事について謝らうと感じながら視線を送っていた。

「全員静粛に！

以上2名の協力者が部隊に加わる事になり、更に彼等は既にセイカ・キヨウマチの協力があつた様だがCLOWNの構成メンバーの1人、コードネームレミエルの処断に成功したらしい！

無論それには完成した血 清 F a i l e n B u i l e t 弾の力があつてからこそであり、またその

力が実証されCLOWN達にも有効であるとされた為撃滅作戦に参加する我々にそれが支給、及び感染予防の為にワクチン A p o c a l y p s e 投与と現地で万が一に感染した場合に処置すべく抗ウイルス薬が支給される事となっている。

全員ワクチンを直様投与した後、作戦予定時刻20:30に武器弾薬を整え死地の更なる奥に向かう!!?

それまでに全員ワクチンApocalypseを打ち、自分の武器の整備を怠らない様に!

以上、全員準備に取り掛かれ!!? 『了解!!?』

「…黙示録に天使に箱を渡された女の名前に天使を地に墮とす弾丸か、洒落た上にごの上無い名前やな」

クリスは全員の視線を集め、ワクチン等が完成した事を告げた後それらの投与と支給を含めて準備に取り掛かる様に命じ、此処で茜はそれらの名前が洒落た名前であり、またCLOWNのコードネームであるレミエルを聞いた為かこの上無く良い名だと口にしたと同時に全員が解散。

それぞれが集合地を離れると葵、マキ、そして茜がジエイクとシェリーの前へ行き話し掛けた。

「あの、貴女達は?」

「ジエイクさんにシェリーさん、私はこの街の現地協力者の琴葉葵です。」

此方は私の姉でA・B・F.のオメガ1である琴葉茜、そして「

「取り敢えず1年振りでお久、元チャージャー23で今はBSAA極東支部デルタチームのデルタ2弦巻マキだよ。」

「は？」

まさかアンタ達とも再会するなんてこの事件は蘭祥ランシャンの同窓会かと思つたわ」

このガキがあのだの死神のオメガかよ「ガキで悪かつたな、ついでに世界平和貢献の為にあんさんの血い更に4リットル位採血してもかまへんで」：その物言いや佇まい、マジな様だな。

で、一体何の用だ？」

葵がシエリー達に声を掛けた所でマキ達も同様に声を掛け、ジェイクと茜は売り言葉に買い言葉の事態になりそれぞれシエリーと葵が宥めてそれ以上いざこざにならない様にしつつ、ジェイクが何の用かと聞いて来た為葵がその言葉を待つていた様に口を開いた。

「シエリーさん、私とお姉ちゃんは貴女に謝らなければならぬんです。

実は…私達の父親の琴葉紅は、今使われている物の初期型とは言えT—Genesisをこの世に生み出してしまった人間なんです。

つまり、貴女の知らぬ所で要らぬ因縁をあの人を作り出してしまったんです。

そんな親に代わり、私達は貴女に謝罪させて頂きます、本当に申し訳ありませんでした……」

「そう、なの。」

貴女達の親が……でも、やっぱり親は親で貴女達は貴女達よ。

確かにお互いに因縁の様な物が出来上がってしまったけれど、私達はそれに振り回されず、また自分の意思でこれを清算する、その為に多分今この場に居るのよね？

なら謝る必要は無いわ、寧ろ一緒に戦ってこのバイオテロを終わらせましよう、アオイ、アカネ」

葵は琴葉紅が T—Genesis をこの世に生み出しシエリーにいらぬ因縁を作り出した事に対し謝罪し、横に居た茜も同様に頭を下げてシエリーに何かを言われるつもりでいたが、そのシエリーは自身の人生観やジエイクとの交流を通じて互いに成長した結果葵達に特に何も言わず、その上共に戦おうと口にし握手を求めて来た。

その大人の対応に葵達は人生観の先輩だと思ひ知らされたまま握手をし、共に戦う事を此処に誓った。

「で、何でお前は此処に居んだよ？」

「何か起きない様に見守る保護者役、文句あるグラサン似合う兄ちゃん？」

「…特に無いな、ギターが良く似合いそうな嬢ちゃん？」

一方ジエイクとマキは軽口を叩き合いながらも1年前に B・Y・共々生き残る為に協力した間柄だった為特にいざこざは起きず互いに拳を突き出し合いながらコツンと

合わせてドジっ子気質なシエリーと精神がやや不安定気味な葵のサポートをやるパートナー役として意気投合し、5人は話し終えるとウィルスに耐性の無い葵とマキは Apocalypse ワクチンの投与に向かい、そして互いの武器の手入れを行い準備を万端に済ませるのであった。

葵達がジエイク達と合流し、A p o c a l y p s e ワクチンを投与していたのと同時刻。

とある施設内に於いて大きな円卓テーブルを囲み5人の仮面を被った者達が空いた1席の椅子を見ながら会議を開始した。

そう、此処はCLOWNのアジトである秘密施設であり彼等はレミエル、ライナスの不祥事の確認の為に集まったのだ。

「『ラファエル』、『ゼラキエル』、現状報告をせよ」

「ええ『ガブリエル』、レミエルは検体ジエイク・ウエスカー及びシエリー・バーキンの捕獲に失敗、更にワクチン等の破壊すら阻止された上にあつさり死んだわ」

「更に監視衛星からの情報を精査すると相当数のワクチン、抗ウイルス薬、そして血清弾が各バイオハザード地区に持ち込まれてしまった様だ。

これではエクシアがあつさり殺されてしまうだろう。

矢張り此処はエクシアの更なる『進化』をさせるか、我々自身が動きBSA AとA・B・F・を殲滅。

そして検体とオメガ1、琴葉茜の回収を最優先に行うべきだと進言する。

が、その雑事を行うレミエルが死んでしまい他が動かざるを得なくなっているが、な」

『I』と書かれた椅子にガブリエルと呼ばれた、映像でよくCLOWNの中心に立ったリーダー格がラファエルと呼ばれた『II』の椅子に座る仮面を被る葵達と同年代程の少女とゼラキエルと言う『V』の椅子に座る男に情報を共有させ、『IV』に座った仮面の男は仮面に手を当てレミエルの失態に頭を抱える様な仕草をし、『III』の数字が書かれた椅子に座ったこの中で最もがたいの良い男が次に口を開き始めた。

「ふん、新人類の資格を得ていたとは言え所詮は末席、『ラグエル』所かゼラキエルにすら及ばぬ愚か者が調子に乗った末路だ、同情する余地すら起きんわ」

「確かに『ウリエル』の言う通りですが……これからその雑事は如何しますかガブリエル？」

矢張りこの私ラグエルが行うべきですか？」

「…：そうだな、ラファエルとゼラキエルは此方の情報網に一役買っている、そんな彼女達を雑事で失うのは惜しい。

なら順当に行けばウリエルかお前の出番になるが、ウリエルもB・O・Wの管理に忙しい。

よってラグエル、お前が行け」

「はっ!!?」

ラグエルと呼ばれたⅠⅤの椅子に座った男はⅠⅠⅠのウリエル達の代わりにレミエルが担った雑事を行う様に進言し、ガブリエルはそれを了承しラグエルを行かせる。

それを見ていたラファエルは興味無さ気ではあるなラグエルの事に関し口を挟んだ。

「良いのかしら、ラグエルでは特殊防御法も攻略され易いわ。

なら私が動くべきでは無かったかしら?」

「別に良い。

B S A A 達や琴葉茜達がラグエル程度を突破出来ぬ様ならばそれまで、突破したなら我等と戦う用意が出来てる物として扱えば良い。

それに……ラグエルを倒した所で私やラファエルは倒す事など出来ぬ、ならば余興を楽しむのも一環だろう?」

ラファエルの言葉にガブリエルはラグエルを切り捨てたも当然の発言を行いラファエルを黙らせ、またラファエルもガブリエル同様ラグエルは倒せても自分やガブリエルは絶対に倒せないと確固たる理由がある為それ以上の進言を止め席を立ち、ゼラキエルと共に情報収集へと動いた。

そして残ったガブリエルとウリエルは仮面の下から不気味な笑い声を上げ、物事が如何に転ぼうが最後は自分達が勝つとしてその円卓テーブルで延々と笑い声を上げるの

であつた。

EP XX:iii 『レオン、葵達の戦い・深淵への扉①』

クリス達はワクチン^{Apocalypse} 投与後に再び輸送機前の集合地に集まり、各々の武器弾薬を保持した後抗ウイルス薬^{Paradiora}と決戦兵器である血^{Fallen Bullet} 清 弾を受け取り点呼を完了していた。

「よし、では此れより作戦概要を説明する！」

我々アルファ、デルタチームとオメガ小隊等は先の編成に加えアルファ側にジエイク、デルタ側にエージェントバーキンを加えて東京にある残り6ヶ所のアジトへ強襲を掛ける！

此れ等は全てROICE学園を中心点に添えた東西南北に点在し、俺達アルファは東と南を、デルタが西と北を調査し、見つけ次第全戦力で強襲を行いCLOWNを全て討滅する!!?

この作戦の是非でこの国の、世界の運命が懸かっている、全員全霊を以て任務に当たり生きて全員で再会する事を心掛ける、以上!!?」

『了解!!?』

クリスが作戦概要としてレオン達で洗い出し残った潜伏地点の最後の6ヶ所を調査する様に説明し、葵は自分達はシエリーを加えた北と西にある3ヶ所を調査する事を頭

に入れゆかり達に再びエールを贈り輸送機に乗り始めた。

だが此処で葵やマキは疑問に思い始めていた。

何故ROICE学園を中心点に添えて6ヶ所もアジトの潜在地が点在しているのか？

これではまるでROICE学園を監視する様に設置したとしか思えない不自然な何かを感じ始めていた。

だが、それを考えている内に降下ポイントであったエクシアを斃したスポーツセンタ―に空中からロープで降り立ち（葵はマキに捕まりながら降りた）、全員周りを警戒しながら近場にあるアジトの潜在地へ行く事となった。

「初めに向かう場所は…自然公園敷地内の森の中。

……私がお姉ちゃんと再会した場所にアジトの潜在地があったなんて」

「すまんな葵、マキはん。

あん時の装備と人員ではまだアジトだつて分かつても突入出来へんかったんやで。

しかも葵やお母さんの避難が最優先やから、あの場では離れる選択肢以外に無かつたんや」

「言わなくても分かつてゐるっての。

「でもマジでこんな場所にそんなのがあるなんて思わなかったわ」

葵、マキはまさか自分達が初めに避難地であるROICE学園に向かう所から始めたあの自然公園敷地内、スポーツセンターのすぐ近くの場所にアジト候補があった事を知らず2人は茜の言う通りあの時点では避難以外に道がなかったが、今は違うと思いつつ暗視ゴーグルを付けて前へと進み始めあの雑路に辿り着く。

「…待て、エクスシアが3体居る。」

オメガ1は念の為全リミッター解除準備に移りつつ全員 Fallen Bullet 血 清 弾の装填をし、射撃用意」

すると『アルファ』がエクスシア3体の存在を確認し、全員ショットガン以外の各武装用に作られた血清弾マガジンを装填。

丁度3体と言う事でレオン、茜、シエリーとバックアップにマキと葵、B・Yが入る形で血 清 Fallen Bullet 弾のエクスシアに対するテスト射撃が行われる事になり、全員息を潜みながらエクスシアの死角に入りレオン達が素早くそれを撃ち込んだ。

『グガアアアアアアアアアア…!!?』

すると如何だろうか、エクスシアは血 清 Fallen Bullet 弾を3発…しかもハンドガンでも3発アサルトライフルでは詰めれる血清の量がハンドガンの弾薬の比では無い為1〜2発で撃ち殺すと言う絨毯爆撃で漸く斃した敵とは思えぬ程にアッサリ殺せしめた。

その威力にデルタチームの中衛達が舌を巻きながらB・Y・の近くまで躍り出て来た。

「ツヒュー!!?」

あの厄介B・O・W・がたつた数発で御陀仏なんてスツゲー虎の子兵器だけこの弾丸!!?」

コイツさえありや天使を名乗ったバケモノ如き幾らでもー」

「馬鹿、今のは不意打ちが可能な状態でやれたから此処までアツサリやれたのであって、正面切つて血清弾を撃ち込もうとすればアツサリミンチにされる可能性が高い事を忘れるな!

兎に角エクスシア相手には血 Fallen Bullet 清 弾 必須、オマケに不意打ちが最適解だつて頭に叩き込め!!?」

血清弾の力を見たデルタ15はそれにより絶命したエクスシアや全員に余裕綽々な態度を見せ、調子に乗り掛けるがB・Y・が好条件だった為と諫めそれ以上の油断は許さなかった。

事実葵もこの弾が無ければエクスシア早期撃破は叶わず、またあの戦闘力に知性を持つ相手に真正面に立ち此れを悠長に撃とうものなら死ぬと思ひ、B・Y・の判断は正しいと思ひながら歩を進めるのであった。

「…着いた、私とお母さんが最初に感染者に襲われた自然公園!!？」

「此処のどつかに連中のアジト、それかハズレがあるって訳か……」

それからネフィリムの団体5名様一行を通常弾薬で手短に倒すと葵は自身と藍が襲われた自然公園内に着き、その襲われた場所には未だゾンビの活動停止した個体があがつており、マキも此処の森の何処かにCLOWN達のアジトか偽アジトの何方かがあると息を呑み、全員散開してそれを探す事となった。

この潜伏地調査で何も無い森の中を探した経験を持つレオンとB・Yは地面を隈なく探し、怪しいと思つた場所で足で思い切り地面を踏み感触を確かめた。

「……あれ??？」

レオン、『アルファ』、皆来て!!」

「見つけたか」

するとシエリーは意識して地面を踏まなければ分からない些細な違和感がある地面を見つけて全員を集める。

また周りの木に何かある事を偽の潜伏アジトの例をレオン達は知っており、それ等を皆に伝え全員で周りの木を探り出し始めた。

すると葵が探りを入れた木の一ヶ所に何か違和感を感じ護身用として渡されたナイフで突き始めた。

すると大凡木の感触に似せているが全く違う材質の何かでこの木が作られており、周りを叩いたりして回った所で木の真ん中付近にパカッと開く音がし、其処にタッチパネル式の機械が取り付けられているのを発見した。

「み、皆さん、これ見て下さい!!？」

「何だ……これは、指紋認証式タッチパネル？」

今までのパスコードタイプとはまた違うがこの違和感ある地面の先を開く物だな」

葵が皆を呼ぶと真つ先にレオン、B. Y.、茜の3人が駆け寄り今までのパスコードタイプロックよりも厳重なロック方式だと気付き、取り敢えず電源を入れてどれだけの指紋が必要かを探りを入れ始めた。

『ロック解除には登録された2名の指紋が必要です。』

指紋認証をお願いします』

「2人……俺達は今までの偽造潜伏地で色々と機械を見たが、指紋登録機なんか無

かったぞ？

此れじゃ中に入るにはハッキングしかないか…皆離れてくれ、ハッキングを試みる」

B・Y・達は今までのパスコードタイプと更に嚴重なロック方式に何か臭うと直感で感じ、ハッキング担当のデルター16を近くに呼びこの指紋認証機の一部を解体してハッキングし、ドアロックを試みようとした。

そんな中いきなり茜が指紋認証機に人差し指をタッチさせ認証開始を行い始めた。

「あ、おいオメガー！

いきなり何やって」

『琴葉茜の指紋を認証しました。』

後3分後に認証がやり直されます、もう1人の指紋認証を直ちに行って下さ

い』

『……………』

B・Y・達が茜の突然の行動を諫めようとした瞬間、茜の指紋が認証され後1人でロック解除に漕ぎ着けてしまう。

それ等を見てB・Y・達はジト目で茜を見るが、本人は行けると思ったと言わんばかりの態度を太々しく見せ反省の色など無く、寧ろ良くやったとすら言う様にと云った具

合の態度を見せた。

そんな茜が指紋認証された事を見て驚いた葵だが、茜が指紋認証されたのならまさか自分も？

そんな疑問を思い起こしながら自身も指紋認証を開始した。

『……………』

全員が見守る中で葵の指紋認証が始まるが、先程の茜と違い一向に認証が確認されずそんな都合良く行かないか、そう葵は目を閉じて指紋認証機から指を離し――

『欠落者、エデンズリーの指紋認証が確認。

ようこそ、EdenIIへ』

てみようとした瞬間、指紋認証が通り先程の違和感があった地面が開き、その空洞から10人程しか乗れないエレベーターが現れ、皆が琴葉姉妹を見つめ、何故指紋認証が通ったのかと言った表情を浮かべていた。

「お、お姉ちゃん、此れって…」

「…はあ、まさかアタリをいきなり引いてまうなんて思わなかったで。

指紋認証が通った理由はこの先にあるんや、ウチが口で説明しても長くなるだけやしとつとと突入するで」

葵も茜に何個も聞きたい事が生まれた為その場で聞きたかったが如何やら説明した

ら長くなる様で、それなら見た方が早いと茜はニュアンスで伝え皆に突入準備をさせようとした。

しかし、1度に乘れる人数が限られてしまっている為レオンやB・Y・達は考え出し、それぞれ口にした。

「…ならば俺とシエリーは固定だ。

彼女も頼りになる」

「ならば俺とマキ、そしていざと言う時の重火力兵器持ちのデルタ4も連れて行く。

先の救出作戦では持つて行くのに邪魔にしかならなかった『荷電粒子砲』、つまりレールガンを今回デルタ4は持ち込んで来ている。

このメンバーは絶対固定だ」

「ならば俺とオメガ1、更に指紋認証の為にアオイ・コトノハも固定だ。

残るは1人か2人、誰にする？」

レオンは自身とシエリーが行くと言い、シエリーもこの先の如何にもな雰囲気因縁をヒシヒシと感じておりエレベーターを見ていた。

次にB・Y・は自身とマキ、更にレールガンを今回持ち込んでいるデルタ4を連れて行くと言いB S A A側はこれが固定メンバーだった。

更にA・B・F・側は『アルファ』に茜、更に指紋認証が通った事から葵も伴い中へ

突入するとしてメンバーが此れで8人が決定して残すは2人だけであった。

其処で如何するかレオン達が考えていた……その瞬間木々が揺れ、夜空の中から2人の女性が現れた。

それは他でも無い、エイダとビールを片手に持ったセイカであった。

「エイダ！」

「それに京町セイカ、一体何の用なの!!？」

「こっちは忙しいんだから早く消えなよ!!？」

「まあ待ちなさいレオンにお嬢ちゃん達、私達は貴方達が悩んでいるから交渉に来てあげたのよ」

「……交渉？」

エイダ達が現れた瞬間、BSAAとA・B・F. 全隊員が銃を構え何時でも撃てる様にする。

が、2人はこれを意に介さず交渉と言う言葉を使い話し合いの場を設ける様に誘導し始める。

無論B・Y. 達としては聞く気はないがこのままでは話が進まないと考え、『アルファ』が話す様にジエスチャーをするとエイダから話し始めた。

「先ず交渉と言うのは私達もそのエレベーターに乗せて欲しいのよ。」

T—Genesisの更なるデータが欲しいからね」

「はあ？？」

「そんなの聞ける訳」

「マキちゃんマキちゃん、この話には続きがあるのよ。」

実は私達のクライアアントにエクスシア等のデータとかも送ったら上層部が大慌てで協議してT—Genesisの完全抹消か市場に流出しない様に永久封印するかの何方か舵取りしたいって言って来た訳。

コントロールのしようが無い物は云々って。

だから私達はT—Genesisの更なるデータが欲しい、でも貴女達の邪魔をしないと誓う。

見返りはこの事件中の貴女達のサポートを約束する。

これが私達の交渉よ、クライアアントの件は信じるか信じないかは皆次第でね♪」

如何やらエイダ達の組織もT—Genesisの商品化を断念して抹消が封印の何方か一方にしたいと言う思惑がある事をエイダ達は告げてレオン達の出方を待っていた。

この話を聞いたレオンはエイダの話は何ら嘘は無い、本当にT—Genesisの事

を上層部とやらに諦めさせたいとすら考えていると2人の間の縁や様々な物から分かり、『アルファ』やB・Y・にアイコンタクトで取り噓は吐いていないと意図を送り、2人はそれを理解して手を横に出し、全員に銃を下ろす様にジェスチャー指示を出して構えられた銃が下ろされた。

「……はあ、なら今から行く固定メンバーで多数決取ろうよ、その方が良いつて。」

因みに私は反対、信じられない」

するとマキがエイダ達を連れて行くか突入メンバーによる多数決を行うと言い早速反対票に入れ、エイダは「あらあら」と血気盛んなマキの態度に大人の余裕差を見せていた。

「なら俺も反対だぜ隊長、ネオアンブレラの女なんか信じられるか」

「んじや俺も反対。」

別にT—G e n e s i sを消すのには賛成だけど流石にお前達の力を貸して欲しいとはまだ思わん」

「…俺は賛成だ、エイダは嘘を吐いていない、これは確実だからだ」

「私も賛成、色々あると思うけど手数はあつた方が良くと思うわ」

「ならば俺はデルタ達と違い賛成だ、手元に置いて監視した方が勝手に動かれるよりマシだ」

「…綺麗に真つ二つに割れおつたな。

ウチは葵の意見に賛成つて事で。

どの道此処でウチか葵が保留にせんと4:4のままになるで。

だからウチが保留、葵の意思次第やで」

すると突入メンバーで賛成反対を決める意見が出てマキ、デルタ4、B・Y・が反対を示し、レオン、シエリー、『アルファ』が賛成を推して茜が保留にし、意見を割りつつ最後は葵の意見によつて決まる事がこの場の話で決まつてしまい、葵は少し悩み始めた。

もしも賛成した場合のメリットデメリット、その逆の可能性を考え様々なルートの中で考え出す。

その中で最適解を導き出して行き残り2つの道に決まり始めた。

そうして葵は考えた中での最適解を口にすべく皆を見据え話し始めた。

「私は……賛成。

『アルファ』さんの言う通り勝手に動かれるよりも手元に置いておいた方が動きが分かり易いですし、それに私はこの先にある物が知りたいと感じ始めてます。

だから手数も多い方がいい方が良いつて考えましたし、何より私はこの先にある何かを知らなくちゃいけない……その為にもこの人達の力を借りましょう」

「決まりやな。」

てな訳であんさん等も乗りたい。

せやないと置いて行くで」

「話が分かる子達で助かったわ。」

では、行きましようか」

葵はハッキリと賛成と言いい切り、その理由も他の皆と大体同じであった。

ただ違う点は、自分が知りたがっていた事がこの先にあると茜の反応から直感で分かり、何が何でもこの先に進めなければならぬ。

と言う個人的な意見が強めに出ており、マキはそう来たかと言わんばかりに頭を押さえ反対派は彼女達が黙ってエレベーターに乗るのを待たざるを得なかった。

「はあ……デルタチーム各員、並びにオメガ小隊員へ。」

中に入ったらエレベーターを上げておくから、突入してから2時間経過しても連絡がない場合は俺達は死亡したと見なし、此処を施設内に侵入後にN2爆弾をセツト、起爆して諸共吹き飛ばせ、以上」

「了解、じゃあ連絡待つてるぜ隊長達」

B・Y・は部下達やオメガ小隊達に2時間後に連絡が無い場合の措置を伝え、その部下達を代表してデルタ3が銃を肩に掛けながら持ち、連絡を待つとしてエレベーターを

操作し、降りて行く隊長達に敬礼等をしつつエイダとセイカを含めたエレベーターが降りて行った。

そして葵は、この先に待つ茜が知る『真実』の事柄を見る事になると感じ様々な思いが交錯していた。

だがそのどれの中でも共通している感情は一つだけあった。

それは、『逃げずに真実を見る事』である。

そんな葵達を乗せたエレベーターは地下深くへと潜って行き彼女達を深淵に招くのであった。

そしてエレベーターは最深部に辿り着き、E^エd^デe^ンn^スI^リI^ーと呼ばれる施設の地上接続部にレオン達は降り立つ。

早速B・Yはエレベーターを操作して上に上がる様に設定した瞬間に降り、エレ

ベーター地上へと向かってしまえば戻りは出来なくなった。

そうして周りの扉を見れば『アルファ』の予測通り指紋認証ロックタイプであり、琴葉姉妹が居なければ先に進めないタイプであった。

「さて、扉は1個だから早速開けて中に侵入してみるか」

「せやな、此処で止まっとつても埒があかんで。

さつさと進むで」

『P i』琴葉茜の指紋を認証しました、ドアロックを解除します』

レオン達は銃を構えながら周りを警戒し、茜が指紋認証をすると扉が開きその先にはエントランスホームらしき場所が広がっていた。

B・Y・は其処にあったパソコンを起動し、タブレットからハッキングプログラムを流してユーザーロックを解除してマップをダウンロードした。

そして全員でマップを確認すると地上の自然公園+路地等のαの広さを持ち、自分達が来た以外にも幾つかの地上への出入り口を持つ広大な施設だと分かりエイダは興味深めにそれを見ていた。

「ふうん、中々広い施設の様ね。

一体如何やって誰にも知られず隠して建造出来たのか気になるわね」

『ブツ！』それは当然ですよ、此処はアンブレラが日本支部にすら隠して作り上げた

秘密施設を改造して我々が使っている研究施設なんですから」

エイダが施設の気になる点を独白した瞬間施設中の放送装置が起動し、其処から若い男の声が聞こえ全員警戒した。

「お前、あの道化師の中の1人だな？」

『その通りですよレオン・S・ケネディさん。』

私の名は『ラグエル』、CLOWNのNo. IVにしてウィルス完全適応者の1人です。

そして初めまして琴葉茜さんに欠落者の琴葉葵さん。

この施設の設備は懐かしいでしょう？

此処は貴女達が育ったE^エd^デe^ンn^ンI^ッIとほぼ同じ設備になっていきますからね。

ああそうそう、此処は我々のアジトの予備ですから皆様は半分当たりと言っておきますね』

放送設備の先から聞こえる声の主はラグエルと名乗り、CLOWNのメンバーの1人である事を告白すると同時に此処はアジトの予備だとあっさり話し、そして葵と茜に此処を懐かしく感じるかと問い掛けた。

対する葵はその問いに応える様に周りをじっくりと見回していた。

すると気付いてしまった、壁の作り等が悪夢の中の施設：名前はE^エd^デe^ンn^ンI^ッIにそつ

くりである事に。

ラグエルもこの施設の設備は葵の見るそれと同じと話し、葵はまるで悪夢の中そのままに入り込んだ感覚に陥り足の力が抜けそうになった。

しかしそれを茜とマキが支え、セイカはレミエルの様な雰囲気とは違うが矢張り気に入らない物を感じビールを飲みながら威圧的な笑顔でラグエルに話し掛け始めた。

「それで七天使の名を騙るお馬鹿さん？」

貴方が私達に話し掛けて来たのは暇だからなのかしら？

だったらそのまま暇で死ねば？」

『まさか、そんな訳ありませんよ。』

皆様を奥に招く為に話し掛けたのですよ。

なので是非此処まで来て下さい、但し私が用意したゲームを突破して、ね』
「またお得意のゲームか、飽きもせず下らない事に力を入れてるんだな、お前達は。」

本当にただの暇人だな」

セイカの話にラグエルは奥への道案内をする為に話し掛け、しかしCLOWNお得意のゲームを突破して辿り着く様に話し、レオンは下らないゲームに辟易し皮肉を口にした。

しかしラグエルは只々平坦に笑い更に会話を進めた。

『あはは、確かに貴方達には下らないゲームですよね。

一応私もこれは唯の暇潰しで下らな過ぎると思っておりますが、私達のリーダーたる『ガブリエル』の方針には逆らえないのですよ。

では皆様、この施設のトラップやゲームに負けず私の下に来て下さい。

特に琴葉茜さんに欠落者の葵さん、貴女達には期待してますよ……ふふふ『プツンツ！』

ラグエルは一方的な会話をしつつも自身もゲームは下らないと独白し、しかしガブリエルと言うリーダーに逆らえないと評しながら全員、特に茜や何故か欠落者呼ばわりされる葵に期待を掛けているとしながら通信を切るのだった。

その会話からレオン達の視線は『真実』を知る茜に向き、対する茜は葵に心配するような視線を向けていた。

そして当の葵は。

「……大丈夫だよお姉ちゃん、大丈夫だから、行こう」

「……そか。」

じゃあ行くで、葵」

「(たく、大丈夫じゃなさそうだったので……葵、心配しなくて良いから。

私達全員がその心を守るから)」

葵は茜に大丈夫と言いながらドアのロックを解除し、奥に進もうとしていた。

茜はそんな葵の脆さに気付きながらも姉として支えて守ると思いつながら横に立ち、更にマキも友人として支え守ると思いつながら葵の左隣に立ち、その前にレオン達が陣取り、殿はウィルス完全適応者のセイカと相方のエイダが担当しながら前に進み始めた。

だが葵達は知らない、茜しか知らない。

この施設に隠された『真実』は深淵に続く扉の先にある更なる深淵の闇でしか無い事を…。

EP XX:i-2 『レオン、葵達の戦い：深淵への扉②』

葵達は通路を進み、ドアロックを茜や葵の指紋認証で解除して行く。縦に広めな通路が現れ茜が前、セイカが後ろ側にただその間にレオン達が隊列を組む形になりゆっくりと油断せず進んでいた。

すると突然葵達が入って来た扉が閉じられてしまい、葵達全員通路に閉じ込められてしまう。

「しまった、罠か!」

『ブツ!』はい、その通りです。

では第1のトラップ、人体切断レーザートラップを突破して下さい!』

レオンが罠と叫ぶとラグエルが通信を入れて来てトラップ内容を晒す。

すると茜達の前の通路両端が輝き、今にもレーザーが出そうになっている所であった。

「大隊長、全リミッター解除許可!!?」

葵を助けて全員で此れ突破する方法あるで!!?」

「よし、なら許可する!!?」

すると茜は葵を救う事をダシにして『アルファ』から自身の全リミッター解放許可を貰い腕をコキコキ鳴らしていつでも行ける合図を出した。

すると茜達の前10メートル先からレーザーが出現し更にそれが直ぐ網目になり回避不能レーザートラップと化していた。

「セイカア、アンタ左イ!!?」

「じゃあ茜ちゃんは右ね!!?」

『ドゴオツ、ブチブチツ×!!2?』

そんな中茜は右の壁に向かってパンチを繰り出し、後ろのセイカも左の壁に向かって同じくパンチを繰り出して壁の中に手を突っ込む。

すると何かブチツと千切れる音が茜とセイカの2回分鳴り、それに関係してか通路の電気が消え去ると同時に茜の1メートル先まで迫ったレーザーも同時に消え去り、最後のドアが開いた。

『警告、第5通路のケーブルに異常が発生しました。』

警告、第5通路のケーブルに異常が発生しました。

エンジンニアは第5通路に直行し異常の調査、修理をして下さい』

但し、この通路のケーブルに異常が発生したと言うアナウンスが流れながら、である。如何やら茜、セイカの考えは両側の壁にあるケーブルを引き千切りこの通路の電源を

無理矢理落とす事で突破すると言う物だったらしい。

そんな事をしなくても後ろに下がればと思う葵だったが、他は直ぐ様後ろを確認して後ろ側もレーザーが出る兆候があつたのを見ていた。

その為茜達の手が最善であり最短のルートであつた。

「さ、早く前に行くで」

『……まさかそんな力技で突破するなんて想定してませんよ。』

本来は後ろ側のレーザーを回避して通路の端にある端末からパスコードを手早く入力して解除するトラップでしたのに』

「あらごめんなさい、私達全員如何もそんなゲームにお上品に参加する程律儀じゃないみたいよ?」

此れにはこの施設のトラップを知り尽くしたラグエルも呆れ果て、対してエイダが何処かで見ている彼に対しゲームに真面目に参加などしないと意識して前側の出口まで歩いて行つた。

そしてセイカが思い切りドアを叩き締めた所ドアが通路の内部まで飛んでいき通路が吹き抜けになってしまう。

これ等を見た葵やマキはこう思っていた、『これはひどい』と。

更にその先にB・O・W.との戦闘する部屋が用意されていたが、このメンツでは最早エクスシアすら抜群のコンビネーションと血Faïen Bullet清弾で早々と沈め、他のネフィリムなど相手にならずあつさり突破を許しその先の大きな通路……茜が知るEdenIIのマップと大体同じだった為この場所は第3連絡通路であり、左に行く道が正解で右が資料室だと記憶していた。

『もうエクスシアすら相手になつてくれませんか……良いでしょう、この先のトラップはまた力技で解除されるでしょうからもう作動させません。

左に真つ直ぐ向かって私の下に来て下さい。

あ、右は資料室でハズレなので寄らなくても結構ですよ……葵さんが知りた
い情報を逃したくないなら、の話ですが』

するとラグエルはもう生半可なトラップ等ではレオン達の進撃を止められないと察したのかこの先のトラップの全解除を宣言し、葵達を自分の方に誘導し始めていた。

……しかし、葵は右が資料室と聞き、そちらの方に自分が知るべき事があると思ひ皆を見ると、マキ達も事件の資料として回収しなければならず、エイダやセイカもT—G enesisのデータが欲しい為資料室に向かう事に反対するメンバーは誰一人居な
かった。

その為葵達は右に向かい資料室へと入った。

「…うつわ、ウチが知る資料室とまんまコピー配置や此れ。

資料も爆破したEde^エne^デII^ニの奴が丸々あるわ」

『ええ、研究施設Ede^エne^デen^{エン}はどれでも等しく同じ研究が出来る様にアンブレラは設計しました。

そして我々はその施設に我々の資料を全てコピーし、送信して置く事で円滑にT—Gene^エsis^{ニス}の研究をする事が出来たのです。

さあ葵さん、どの資料でも好きに取って下さい。

恐らく貴女にとって有意義な物しか書かれていませんから」

茜は自身の過去の記憶、琴葉紅殺害時に爆破した研究施設Ede^エne^デen^{エン}II^ニと全く同じ間取りに遠目から見える資料のタイトルからこの施設はそのまま一緒の構造をしているのだと知り、ラグエルもそれを認めて葵に知りたいを漁る様に促した。

「…あれ、円滑に研究？」

琴葉紅はT—Gene^エsis^{ニス}をお姉ちゃんの言葉から聞くとEde^エne^デen^{エン}II^ニで研究してた…なのになのでCLOWN^{クローン}がそれを円滑に引き継げるの？」

だが葵は此処でラグエルの言葉…円滑に引き継ぐ、と言う部分に引つ掛かりを覚え何

故CLOWNが紅の研究をそのまま引き継げたか、2人の言葉を文面通り受け止めると時系列があやふやになっていいるのだ。

其処に違和感を感じ、しかし葵はその手で資料を取るのを止めずに読み始めた。

タイトルは『T—Genesis』、並びに関連計画一覧』と言う物であった。

茜は矢張りそれを取るかといった表情を見せながら葵の後ろに回り、彼女を見守っていた。

そして葵が初めに目を通したのは以下の物だった。

T—Genesis計画

01：始動

『アンブレラ社が倒産してから2年以上経過した。

このE^エd^デe^ンn^ンI^ッIに籠り始めてから同じ時が流れた。

妻の藍を無理矢理連れて来てウイルス研究を続行させ、そして遂に鍵となる物を揃えた。

スペインにあったプラーガの情報を手にし、闇市場で支配種、従属種両者を手にしたのは正に天啓としか言えなかった…。

後は元から持っていたTウイルスと同じく闇市場で入手したGウイルス、コレ

等とプラーガの遺伝子を組み合わせ融合、進化させれば私の悲願であるスペンサー卿の理想を叶えられる時が来る!!?

名前は既に決めてある、スペンサー卿の理想たる人類の高次への進化、此れの創世記の鐘を鳴らすに相応しき名：T—G e n e s i sである。

早速作業に取り掛かろう、この研究成果をスペンサー卿の下にお届けする為』

如何やらT—G e n e s i s初期型の計画始動は2005年、アンブレラ社倒産から2年以上が経過した時点で始まりに漕ぎ着けた事が資料から読み取れた葵は次のペーヂを流し読みで読んで行った。

曰く、偶然の歯車の一致でウイルス初期型が完成した事。

曰く、藍の反対を押し切りホームレスを使った人体実験を行いゾンビからネフィリム(その容姿から決まった名前)への進化、更には性能実験とウイルス特性からネフィリムは自分と藍には襲い掛からない事が判明した事。

曰く、T—G e n e s i sは既存B. O. W. に投与して強化しようとしても微々たる物でネフィリムには到底及ばなく研究が暗礁に乗り出した事。

様々な事が書かれていたが矢張り茜の言う通り藍を無理矢理協力させていた事が資

料からも分かり葵の手に力が入り始めていた。

しかし……その次のファイルを読み始めた瞬間から葵の表情は青ざめ始めていた。その内容はこうであった。

14：新計画始動

2006：4：1

『駄目だ、T—Genesisをタイラントに投与し理想のB・O・Wを作り出すとしてもタイラント側がT—Genesisに耐え切れず絶命してしまう!!?』

矢張り既存のB・O・WではT—Genesisの効果を想定通りには発揮出来ない、既にキャパシティを割り振られている為T—Genesisが入る余地が無いからだ!!?』

これならホームレスからT—Genesis完全適応者を探して実験した方がまだマシだが時間が足りない過ぎる、もう直ぐスペンサー卿の命の灯火が消えてしまう!!?』

そうなる前に何としても成果を届けなければ、しかしどうすれば……!』

そうだ、何も既にこの世に生誕した人間を使わなくても良いでは無いか。

丁度此処には私と妻の藍が居る。

彼女の未受精の卵子を人工子宮で受精させ、同時に受精卵にT—Genesisを投与すれば人為的な完全適合者、しかもT—Genesisに全てのキャパシティを割り振られた生命が誕生させられるでは無いか!!?

何故早く気が付かなかつたのだ、私は!!?

そうと決まれば彼女の胎内から卵子の抽出を開始しよう。

何、何時もの様に反抗すれば力でねじ伏せ従わせれば良い、全てはスペインサー卿の理想成就の為だからな。

そうなれば計画名も考えなくてはならない、どんな名前が良いだろうか…」

葵は嫌な文字を後半に見つけてしまった。

『未受精の卵子』、『人工子宮』、『受精と同時にT—Genesisの投与』、『T—Genesis用にキャパシティが開いた生命の誕生』等を。

葵は後ろにいた茜を見て何か一言言つて欲しい、せめて違ふと言つて欲しいと言う願望を乗せて見ていた。

しかし茜は険しい顔をしており、左腕を挿んだ右手に力が籠らせながら『その先も読むのか?』と表情で語っていた。

この様子に他の資料を漁っていたレオン達、特にマキやセイカが葵に近付き、嫌な予感を感じその資料を取り上げようとしたが茜がそれを止め口を開いた。

「…葵、ここから先はアンタの自由やで。

先を読むも破くも葵の自由や。

だから決めるんや…：此処で踏み止まるか、それとも踏み抜くか」

茜はこの先は全て葵の自由であると話し、資料は取り上げはしませんが読まないならそれでも良いと言う意思を見せて葵に二者択一の選択をさせる。

対して葵は過呼吸気味になりながらも自分は何の為に此処まで来たか思い出し、資料の頁を巡り次の文を読み始めた。

そして茜は同時に思っていた、葵ならこの選択を間違ひ無くとつてしまうと。

知らなければ良い事を知る、その選択をしてしまうと。

そして此処まで来てしまったからにはもう止める権利は自分には失せてしまったと。

そんな葵に対する様々な感情を込めた目で彼女を見ていた。

そして葵は……絶望の詰まった2頁をみつけてしまった。

15：想定外の誤算

2006：4：25

『何と言う事だ、人工子宮内で受精させ、T—Gene sisを植え付けた胚が2つに分裂し、成長促進で2人の赤子が生まれたでは無いか!!?』

つまりは双子、T—Gene sisの力を全て引き出せる器の子が2人も生誕する事になるとは!!?』

この嬉しい誤算には神が居るならば感謝せねばなるまい、我が計画に新たな息吹を与えたその天啓に!!?』

先ずはコードネームを決めよう、分裂した方をA—2、分裂元をA—1と呼ぼう!!?』

そしてこのまま成長促進させ8歳児になる様にし、藍の記憶操作技術で8年分の記憶も植え付けて其処から経過観察と性能実験をしなければ……?』

だが藍がそろそろ喧しくなって来た、そろそろ黙らせる方法も模索するか』

16：コードネーム、計画名決定。

2006:9:3

『スペインサー卿があのだアルバート・ウエスカーに殺害された、なんたる事だ。

折角の成果をお見せするチャンスだったのを…あのウエスカー計画で生まれ
生き延びただけの男が!!?

こうなれば私がスペインサー卿の理想を真に引き継がなければならない…。
しかし、A-2にはガツカリだ。

知能はA-1と大差無いにも関わらずT-Genesisの力を一切持たず
その形質すら見られない失敗作だとは…。

対するA-1、藍は茜と呼ぶあの子は素晴らしい。

ネフィリム所か8歳児相当でありながらスーパータイラントすら屠る力を見
せるとは…：矢張りこの子こそがスペインサー卿の理想の中で頂点に立つに相応しき子
だ。

これからはA-1、茜は『ミカエル』、熾天使の頂点に立つ者の名を贈ろう！

計画名も決まった、ミカエルを頂点とする世界を導く七大天使を生み出す計画
プロジェクト「アークエンジェル」
：七大天使計画、これがT-Genesisの到達点の一つたる計画だ!!?

そして失敗作の欠落者たるA-2、葵と言うT-Genesisの力を持たぬ
方には『ルシフェル』、墮天使の烙印を押しそう。

そして……そろそろ邪魔になって来た藍共々ルシフェルは殺そう、創世の世界に墮天使の長であり最大の失敗作の居場所など存在しないのだからな』

「うっ、ボオエツ、オエエツ、オエツ……!!？」

『ビチャビチャッ!』

葵は手に持った資料を落とし、部屋の隅へと走り嘔吐してしまう。

自分と茜が普通の生まれ方をしていなかった事、否、生まれながらの生物兵器と言うとても受け止め切れない事実には胃の中の物を全て吐いてしまう。

マキは葵が見た内容を黙読し、葵が受けた衝撃を垣間見た上で茜を睨み何故止めなかつたと言わんばかりにハンドガンを構え一触即発の事態になってしまう。

対する茜は淡々と、しかし止める権利が消えた事実を話し始めた。

「マキはんがウチに銃向けんのは分かる、何でこんな内容が書かれたもんを読ませた

んやつて言いたいのも分かる。

けど、逆にマキはんは止められたか？

此処まで付いて来て、その理由も『真実』を知る為やったんや。

せやからもうウチには止める事は出来ず選ばせるしか無かったんや、この先を知るか否かを。

……ウチが話しちやあかんかった理由も分かったやろ、こないな真実が普通あるんかって殴りたくなる内容やし、葵が真実を見る覚悟を決めなかつたら葵は壊れとつたからや。

それに…マキはんはウチの立場やつたら全部逆の事出来たんか？」

「それは……でも、ならなんでアンタはそうやつて……チクシヨウ!!？」

マキは茜はの言葉に一切反論の言葉が出ず、手に持った資料を地面に叩き付けて近場の机を蹴ると言う方法でしかこの怒りを発散させる事が出来なかつた。

茜の言う通り逆の立場なら同じ道を辿り、そして大前提の葵が真実を知ろうとしている為止められる訳無く何処かで葵に押し切られてしまいこの真実に到達すると思えば過りマキは悔し涙を流すしか出来なかつた。

「……成る程ね、クライアントも葵ちゃんに何らかのウィルスの痕跡があるかもしれないからサンプル取って来いって命令を出したのはこの背景をどこかで知ったからか

…」

するとセイカ、エイダがマキが投げた資料を見て何故態々ウィルスの痕跡があるかもしれないとは言えセイカに葵の血液等のサンプル回収を命じて来たか理解し、同時に茜のサンプルを回収した理由も葵の双子の姉である為に回収し、その後ウィルス完全適合者だと判明した為クライアントのH. C. F. の判断は正しかったとセイカは思っていたが、まさかこんな裏事情があるとは思わず知らなければ良い真実もあると改めて思い知るのだった。

『如何でしたか葵さん、いえA—2、或いはルシフェル…どの名で呼んで欲しいですか？』

貴女の自由意志に任せますよ』

其処にラグエルが再び声を掛けて来た為マキは放送スピーカーに向けて怒りのまま銃弾を放とうとした。

だが其処に先程まで部屋の隅で吐いていた葵がヨロヨロと立ちながら銃を持ち、スピーカーの斜め下へと棚などに凭れ付きながら立ち、それを茜とマキが直ぐに支えて倒れない様にした。

そして胃液が垂れた口を何とか拭いてラグエルの問い掛けに対して答え始めた。

「……………葵よ」

『ふむ?..』

「私は、琴葉、葵よ……」

A-2だとか、ルシフェルとか知らない、私は……琴葉藍の娘で、琴葉茜の妹の、琴葉葵よ!!?」

私は葵、琴葉葵なのよ!!?」

葵は自身を琴葉葵、琴葉藍の娘で茜の妹だと腹の底からスピーカーに向かって叫び自身の存在はA-2やルシフェルと呼ばれる何かでは無いと否定した。

その判断に至れたのは茜の妹、そして人工子宮とは言え藍の受精卵から生まれた存在である為にこの苦し紛れな、しかし自分は自分と言う答えを示し吠えたのだ。

「葵……そうだよ、この子は琴葉葵だよ!!?」

ゆかりんやあかりちゃん、ずんちゃんやささらちゃん達に私の友人で、チョコミント味のアイスとかが大好きで明るくて皆の人気者、そんな何処にでも居る普通の女の子の琴葉葵だよ!!?」

アンタ達と言うなんたら何て訳の分かんないモノなんかじゃないわ!!?」

其処に友人であるマキも吠え、葵が葵たる友人達の存在を口にし、更に自分が知る葵の人物像や好物すらも口にしつつ普通の女の子だとハッキリと言い、この研究資料に載ったモノじゃないと友人として、偽りの記憶の後より本当の自身の記憶から誕生した

友人として葵を擁護したのだ。

これには茜も満足の出来た答えであり、この真実を知つてもなお折れないと心の隅で信じ続けた甲斐があつたと思つていた。

「さて、お前達の研究朗読ショーは此処でお開きだ。

後はお前を倒してこの施設の確保をし、お前達テロリストの悪事を晒してや

るさ」

『テロリスト……確かに世間一般的にはテロリストでしょう。

しかし、見方を変えてみて下さいよ。

本当に今の世界に存在する価値はあるのか、そう考えた時私達CLOWNの目的が正しかった事に』

「ならんわアホ。

アンタ達はテロリスト、ウチ達はそれを倒すアンタ達の言うゲームの主役やで。

せやから絶対CLOWNが正しいなーんて答えは出て来うへんよ！」

そうしてレオンの皮肉を合図に全員が読み漁り、保存した資料室から出始め（葵は茜、マキにまだ支えられている）、ラグエルの下に向かい始めた。

するとラグエルは何処か遠くを見る様な声で見方を変えれば自分達の目的は正しい

のでは？

そんな問い掛けをレオン達にしたが此処で今まで黙っていた茜がバツサリと切り捨て、CLOWNの考えには一切同調しない事を告げた。

口数が少ないエイダも下らないと内心切り捨て、B・Y・達BSAAや『アルファ』もテロリストの言葉に耳を貸す程落ちぶれて居らず、シエリーもレオンと同じくCLOWNは馬鹿げた理想を掲げたテロリストとこれまた切り捨て、最後にセイカは今の世界が滅びたらお酒も無くなる為当然同調せず結局ラグエルの言葉に耳を貸す者は此処には居なかった。

「…さて、この先は第1試験場や、此処にあんさんが居るんやろ、ラグエルはん？」

『ええ、此処で皆さんを迎え討つ事がガブリエルの命じた命令なので待っていましたよ、どうぞ中へー』

『Piiiiiiiiiiiiiiii、ザザアツ!!?』

そして茜の記憶上この先で様々な性能実験を行なっていた第1試験場がある事を知っている為ラグエルに其処に居ると尋ねるとアツサリその通りだと答え全員を中に入れようとした。

が、此処で何時もの通信ジャックが発生し、間が悪い為全員無視しようかと考えていたが、スピーカー越しにラグエルが溜め息を吐き『出てあげて下さい』と言い如何にも

ラグエルとガブリエルは目的は同じだが何処か馬が合っていない様子を垣間見ながらレオンが通信に出た。

『やあ諸君、元気だったかね？』

ラグエルはもう倒してしまっただのかい？』

「資料室の中にあつた物全部漁つた後今から倒そうとして第1試験場の中に入ろうとしたらそつちの通信が今入つたのさ、間が悪すぎるんだよ道化が！」

『……それはすまなかつたね。』

しかし資料室を見たか、となれば琴葉葵君、いや、A—2はあの資料を見たのかね？」

通信機からCLOWNリーダーのガブリエルの相変わらぬ中身の無い通信に辟易していた全員をB・Y. が代弁し、全員でガブリエルを睨んだり興味なさげに見てたりしていた。

そんな中資料室と言う言葉にガブリエルもまた葵をA—2と呼び、煽る様な発言をしたが葵はこれに反応し叫び始めた。

「私は私、琴葉葵よ!!？」

お姉ちゃんの妹で、お母さんの娘で、マキさん達の友達の琴葉葵、A—2だのルシフェルだなんて知らないわ!!？」

それよりも、私はこの施設や資料の違和感や、貴方の正体に気付いた事があるんだから答えなさいよ!!？」

『……ふむ、違和感に正体か、許そう琴葉葵。

違和感を掲示したまえ』

葵はガブリエルの言葉に自分は琴葉葵と言う資料の一部やマキが証明した確固たる自我を以てA—2等を否定し激怒した声色を見せた。

が、そんな精神状態が今までの中でも不安定な状態の中でも気付き頭の中に押し留めた違和感をガブリエルに答えさせるべく通信越しに叫び、ガブリエルも面白そうな為発言を許していた。

「先ず第1、私とお姉ちゃんは確かに普通とは違う生まれ方をしたけどそれはこのEden^{エデン}II^{スリー}じゃない、Eden^{エデン}II^ツの筈よ！」

なのは何でこつちに爆破されて無くなった資料がそのままあるの！

第2に何故T—Genesisの研究が持続出来たか、更に第3に如何やってCLOWNはT—Genesisの初期型を、お姉ちゃんの言葉が正しければ爆破と共に消えた筈なのに入手出来たのか!!？

……これら3つの違和感、もしも琴葉紅とCLOWNが同時期に研究していたらある程度は解消可能な部分があるけど、T—Genesis計画の資料にはCLOWNの文字は一字も出なかった、つまりCLOWNはEde^エn^デII^ッ爆破後に出来た組織である可能性が高い！

そして貴方の正体、T—Genesisの事を良く知りそれを根本から改良出来る人間、それは既に死んだ筈の、この世に居ない筈の人間しかあり得ない筈なのよ!!?」

葵は3つの疑問を提示し、此れらの中でCLOWNと言う組織は資料内に出て来なかった事も併せて話し、更にT—Genesisに詳しく根本からの改良が可能なのはただ1人の人間しか居なかった事を告げた。

此処まで葵が話した結果、レオン達もガブリエルの正体に勘付き始め、エイダも葵の頭の回転は早いと考えセイカが気に入るのも分かるとしつつガブリエルに不敵な笑みを浮かべ画面を見ていた。

「…そっか、葵も自力で此処まで来たんや、なら答え合わせする人には充分な材料を揃えとるな。

なら葵、ウチら姉妹で同時に『ガブリエルの正体』を口にしようや。

それでまるっとこの事件の背景が浮き彫りになって来るで」

「…そうだねお姉ちゃん、ガブリエルの正体は私達が答えなきやいけない。

この事件の根幹に私達が関わっているんだから。

そうでしょガブリエル……いや……」

此処で茜は葵がガブリエルの正体に勘付いた事にいよいよ隠して来た真実の中の一つの内容を答える時が来たと感じ、姉妹で同時にガブリエルの正体を答えようと提案した。

それを葵はOKを出し、絶対姉が持つ答えと同じ自信がある事を示しながらガブリエルを見据え2人で口を揃え、その正体を口にした。

『琴葉紅、それがお前の正体やで／よ!!』

茜と葵は画面向こうに居るガブリエルに対し、既に死んだ筈の人間の名前……琴葉紅の名を出し同時に双子として瓜二つの睨み付けをガブリエルに行っていた。

対するガブリエルと言え……肩が震え小さく笑い声が溢れ始めたと思った瞬間、音

EP XXI 『レオン、葵達の戦い：VSラグエル戦』

ガブリエルの正体が琴葉紅と看破した葵達。

その紅は高笑いを暫くしていたがふとそれを止め、いつも座りながら通信を入れていた為再び椅子に座った。

『…ふう。』

それで葵、何故CLOWNが私の死後に結成され、そしてE^エd^デn^ンI^スI^スI^スI^スI^ス等を再利用していたのか捕捉は出来るかね?』

「出来る。」

先ず第1、お姉ちゃんの間違い無くE^エd^デn^ンI^スI^スI^スI^スI^スを爆破したと言ってるのに同じ資料がそのままあるって事は可能性は2つ：何だけど貴方の性格上同志が居るならファイルに書く筈。

スペインサーの事を熱心に書いたり無理矢理従わせてるお母さんすら記録する位マメだから間違い無い。

E^エd^デn^ン 第2、爆破前なら遠隔操作でも管理者権限を使って研究データを他のE^エd^デn^ンに送れる筈だから。

第3、ラグエルの発言とお姉ちゃんの発言が噛み合わない点からお姉ちゃんが事を起こした後にCLOWN結成やT—Gene-sisの改良を貴方はやった。

貴方の性格上なら死んだ事にしとけば動き易いつてメリツトを最大限利用する筈だから。

他にも理詰め出来る点が幾つかあるけど聞きたい？」

『いいや良いよ、完璧だよ。』

本当にT—Gene-sisの形質が表れなかつた事が惜しくなる程にほぼに完璧だ、真実を知る茜と同程度に理解している…本当に惜しい逸材だ』

紅は葵の理詰めに対してほぼ完璧だと評し、失敗作の烙印さえなければと言うニュアンスの言葉を発していた。

しかし葵は逆に失敗作と見做された事を良かったと思っていた。

こんな男に評価され実験台にされるのはごめんだと言う考えがあり、また其れ等のお陰でマキ達に出逢えた為その点だけは良かったと心から思っているのだ。

『さて、では次に私が生きていた理由だが』

「そいつはウチが説明したるからもう切るわ」

『おや、ちよつと待ちたま』

『プツンッ！』

そして紅が自分語りをしようとした所を茜とレオンが通話終了ボタンを押しキャンセルさせる。

このファインプレーには葵達も無駄話を此れ以上聞かずに済んだと思いい茜とレオンの行動にグッドサインを出していた。

「ナイス、お姉ちゃんにレオンさん。」

それとマキさんありがとう、少し落ち着いたからもう歩けるよ」

「そう……でも葵、無茶は」

「しない、分かってるよ」

すると葵も落ち着きを少し取り戻し、自分の足で指紋認証を行い、全員がまるでコロシアムの様な造りの第1試験場の中に踏み入った（その直前に茜は全リミッター解除許可を得ている）。

すると葵は、この試験場の光景を見て茜が怖い化物から自分を守ってくれていた事を少し思い出した。

これが自身の過去を知った事に関係するかは分からないが、それでも偽りの記憶の先にある真実の記憶が浮上し始めている事を葵は感じていた。

「お待ちしましたよ、皆様。」

ガブリエルの自分語りにはうんざりしたでしょう。

私達も偶に彼の自慢話を聞き流して会議を進めてた時がありましたのでお気持ちは分かりますよ」

するとその真ん中に声から判別出来たラグエルの姿があった。

そのラグエルはゆっくりと葵達の方を向き、それと同時に不要になった仮面を脱ぎ捨てその容姿を見せた。

ラグエルの仮面の下は淡麗なアジア系、しかも中性的男性の容姿をしており、一度見れば忘れそうに無い容姿をしていた。

そしてその容姿は、B. Y. や『アルファ』達のみならずほぼ全員が知っている顔だった。

「お前は…確か中国の政界に影響力を持つ一家の当主で、B S A Aの資金提供をしているスポンサーの1人……『蘭白龍』!!?」

「嘘、確かあの人次期政界の高い役職入り確定とか特集を組まれてた人でしょ!!?」

何でそんな人がテロリストに!!?」

ラグエルの正体…それは中国の次期政界入りで上手く行けば国のトップになると噂され、B S A Aの資金提供をしているスポンサーの1人『蘭白龍』だった。

その人柄はTV特集番組で取り上げられた際は誠実の一言でバイオテロを許さない側として世界に知られた人物である。

そんな白龍がCLOWNのメンバーなのに葵やマキ達は驚きを隠せずにいる。

「ふふ、当てるて上げましょうか？」

こんな人がテロリストに加担するなんて信じられない、でしょう？

…ふつ、私もこの世界はダメだ、作り直す必要があると考えてたんですよ、かなり前から」

「BSAAに資金提供しながらバイオテロに加担、まるでトライセル社だな。

アンタも結局そう言う口だった訳か!!？」

白龍がかなり前から今の思想を抱いていた事を明かすとB. Y. が血清弾を装填したアサルトライフルを構え過去のトライセル社：BSAAに資金提供する製薬会社連盟の一員でありながらバイオテロを行った様なマツチポンプの例を挙げながら何時でも撃てる様に全員で陣取った。

すると白龍は遠目をしながら独白を始めた。

「マツチポンプ…確かにそうですね。」

BSAAに資金提供する者がその傍にバイオテロを行うなんてその一言に尽きますが…私にもあるんですよ、この世界が嫌になる理由が。

私は確かに一見すれば裕福に見えましょう。

しかし、その実は周りは敵しかいない。

家族すらも権力にしがみつく余り私の命を狙った……そんな世界の中で何もかもが意味が無い、こんな欲深き世界に存続する意味があるのか……そう考えると虚しくなっていたのですよ」

白龍は如何やら葵やマキ達の思う様な恵まれた人間では無く、周りが敵しか居なかったと言う彼の言葉を聞き頼りになる人間が居らず、家族すらも敵ならば……。

表には出さずとも荒んだ感情に満たされるのは無理が無いと感じると葵は思っつまう。

更にセイカも自分と同じ様に親にすら愛されない事を理解し、ただ違いがあるならば表舞台に立てたか否かの違いだけ。

彼が裏の舞台に元から居れば自身と同じ道を歩んだとセイカは思いながらも銃を構えていた。

そして更に独白は続く。

「そんなある時、私はガブリエル、琴葉紅と接触しました。

T | G e n e s i s による世界の再編、欲深き者達を一掃し人類全てが高次の進化を遂げさせる。

それを聞いた瞬間……私の心は彼の目的の達成した先に興味が湧きました。

本当に今の人類は進化に足り、欲を捨て去る事が出来るのか……そう思うと、そ

の答えが知りたくて仕方が無かったですよ。

だってこの世界にはもう興味が失せてしまったのですから。

……まあ、紅がこの状況でゲームをし、貴方方に反撃の余地を残す脚本を書いてその通りに計画を進めるのには疑問しかなかったですがね。

例えその理由が、欠落者の葵さんの再評価やR O I C E 学園生の評価をやる為でも、ね」

「……はっ?」

白龍は自身がこの世界には既に諦念しか無く、紅が示した世界の先にしか興味が無いと話した。

その証明こそがウィルス完全適応者たる赤き眼、そしてラグエルと言うコードネームだったのだろう。

だが葵やマキ達はその先の言葉、葵の再評価と言う点は兎も角としてR O I C E 学園の名が出た事に一抹の不安が過り、エイダ等はR O I C E 学園やその周りに点在する戦福地候補からある仮説を立てており、それが現実だと確信を持つに至った。

「可笑しいと思いましたよね、R O I C E 学園の周りに私達の潜伏地候補が点在していた事に。

その理由は簡単ですよ。

ROICE学園の設立、この資金巡りや立地にはCLOWNが根深い所まで関わってたからです。

よって紅の言葉を借りるならあの学園やその周辺は実験場でありT—Genesis完全適応者を探し出す為の土壌でもあったのです」

「マジ…なの…!?？」

白龍は葵、マキにとって衝撃的な独白を開始した為2人は驚き、エイダ達は矢張りかと予想通りの答えが出た事にそれらを淡々と聞き、しかしB・Y・とデルタ4『アルファ』と茜、レオンとシエリーはその言葉に対し静かな怒りを燃やしながら睨み付けていた。

「はい、ただその学園に葵さん、貴女が入学して来たのは紅にとっては想定外だったらしく、この8年でT—Genesisの形質は表れたのか、能力値は上がったのか再評価すると言いだしたのですよ。

まあ、私にとってみれば彼のその行動は科学者気質な物の為理解しかねましたよ、余りにも効率が悪い上に反撃の手を許し過ぎてるのですからね」

そして白龍は独白を続けた結果、ROICE学園とその周辺自体が実験場であった事を知り葵やマキの手に力が籠り始めた。

そんな下らない理由で学友や近所の叔父さん達が死んでしまったのか、自分達をモル

モットにしか見ないその余りの身勝手さに怒りが頂点に達し掛かっていた。

そしてレオン達は矢張りテロリストの思考など理解出来ないとその考えを心の中で真つ向から否定しながら陣形を組み白龍を囲もうとした。

「さて、お話は此処までにして戦いましょうか。」

貴方方の正義と私の思想、それは相容れないのですから。

では改めて自己紹介しましょう。

我が名は蘭白龍、コードネームラグエル。

雷を操る力を見せて差し上げましょう！」

『グジュグジュ、バチイイイ!!?』

そんな中白龍は最後にレオン達と自分は相容れないと宣告した瞬間、右腕を変異させて雷を操ると言うその力を見せ付けるが如く右腕に電気を蓄電させ何かを撃とうとしている光景をマジマジと見せ付ける。

「コイツはまさか…ヤバイ!!?」

するとデルタ4が何かに勘付いたのか全員の前に出てレールガンを構えチャージを開始し、「早くしろ!」と呟きながらチャージ完了するまでの時間を焦っていた。

そして蓄電率100%になった瞬間デルタ4はレールガンを放ち、それと同時に白龍も同様の荷電粒子砲、レールガンを生身で放ち、2つのレールガンの弾はそれぞれが磁

気干渉を引き起こし射軸がぐにやりと曲がり、白龍の放った物が天井に、デルタ4が放った物が第1試験場の壁に当たりそれぞれをその威力で爆発させた。

更に全員その干渉された粒子砲の威力に吹き飛ばされ、その上天井からは巨大な瓦礫が丁度良く全員を分断してしまい半分ずつが瓦礫を挟んで白龍側と壁側に分かれてしまふ。

その内訳はレオン、マキ、茜、葵、エイダが白龍側、『アルファ』、シエリー、B・Y、デルタ4、セイカが壁側に分断されていた。

「全員無事か!?」

「ああB・Y、こっちは無事だ！」

さて、面倒な相手をこっちで引き受けるか、泣けるぜ……！」

B・Y. とレオンが互いに分断された側の無事を確認し合い、レオンは何時もの皮肉を口にしてレールガンの衝撃で舞った埃を払う白龍をこの面子のみで相手する事となり茜の力が攻略の鍵かと思ひ茜を一瞥し、茜も領いていた。

「あのレールガンは脅威的過ぎる、如何したら……!?」

『ガチャッ』

「……これ、デルタ4さんの！」

葵は白龍の放ったレールガンに脅威を感じ、如何すれば良いか考えようと足を動かし、自身の足元にデルタ4が持つていたレールガンと予備弾薬が転がっている事に気づき手に取った。

如何やらデルタ4はレールガン同士の干渉、そして天井等に直撃した衝撃でレールガンを予備弾ごと手放してしまつたらしく、それが偶然葵の足元にまで飛んで来たらしく、
 かつた。

白龍は葵のその運の良さに感心しつつ懐からスイッチを取り出しボタンを押した。

すると瓦礫の向こう側からB・O・Wの鳴き声が響き、葵達は白龍がこの部屋に
 B・O・Wを解き放つた事を理解する。

「彼方の皆様が手ぶらにならない様にこの施設で管理中のB・O・Wと戦わせま
 した。」

これで向こうから京町セイカ参上、とはなりませんのでこの5人で戦う様
 に。

それから葵さん、そのレールガンは上手く活用して下さい。

でないとー」

『ズダダダダダダンッ、バチバチイ!!?』

白龍が葵に向かつて向こう側からの援護やレールガンを上手く使う様に言い放ち、余

裕綽々な態度を見せた所を茜が血Fallen Bullet清弾をアサルトライフルで放つが、その弾丸は白龍に届く前に自身が放つ電力により形成された膜……電磁バリアとも言うべき物に阻まれ、全弾が地面に転がってしまう。

「……この様に此方にはバリアがある為レールガンを当てなければこのバリアは消せない上にバリアが消える時間は約2秒、それまでに血清弾を当てて下さい」

「余裕綽々な態度だな、俺達ではお前に勝てないから弱点を晒す……此れもゲームの一环か？」

白龍の自らの弱点を晒す姿勢にレオン達は此れもゲームの一種かと思いつながらその態度に不快感を示しながら銃を構える。

するとレオンの言葉に白龍は首を横に振り、1度全員、特に葵や茜、マキを一瞥しながら口を開いた。

「いえ、此れは紅の脚本には無い物ですよ。

そう、此れは私個人が貴方達、特に真実を知りなおこの場に立つ葵さんやそれを支えた方々に少し思う所があり、その思う所を証明して欲しいからこうして話しているのですよ。

自分が不利になる様な情報も……最も負ける気など無いから、と言う理由が無いと言うと嘘になりますかね。

さあ皆様、どうかこのテロリスト風情を倒して下さい、今が最大のチャンスですよ……」

白龍は独自に思う事があり葵達にそれを証明する様に話し、そして電撃を全身に放ちながら完全な戦闘態勢に入り、レオン達との戦いに移り始めた。

そして葵やマキは人生初となる人間の思考や知能を持ったB・O・W. と呼べるウィルス完全適応者との戦いに不安が少々あったが、2人は近くに居た互いに見合い、互いが不安を抱きながら此処に居るのだからしつかりせねばと思い何時もの様にB・O・W. を倒すのと同じと考えを改めてマキは特別に作ってもらったスラッグ弾式 Fallen Bullet 血 清 弾 を装填した愛用カスタムショットガンを、更に葵もデルタ4のレールガンを構え白龍に対峙する。

「……ふう、さて、ウチのやる事が多くてちよい辛いけど、葵達のために頑張るしかあらへんな……！」

そんな2人をフォローする様に茜が近くに立ち、レオンとエイダが必然的にコンビの形になり陣形を組み白龍に銃を構えていた。

そうして様々な真実を受け止めた葵はCLOWNのNo. 1Vラグエルと戦闘に入る事になり、リッカーG達やエクシアを相手にする以上の気を引き締めながらレールガンのチャージを開始するのだった。

「さあ行きまますよ!!?」

「ツ!!?」

先ず白龍が先に動き、再びレールガンを放つと葵も合わせてレールガンを放ち、再び2つの荷電粒子砲は干渉し合い射軸を捻じ曲げ、今度は両者共に巨大な瓦礫を削りながら斜め上に飛んで行き、再び瓦礫がB・Y・側^側に落ちて来る事態になった。

一方のB・Y・達はこの瓦礫には巻き込まれず、逆にエクシア等が巻き込まれ圧殺される事になり少しラツキーな事態が発生していた。

「合わせるのは上手いですね、ではこれは如何ですか!」

『えっ、うわ!!?』

するとレールガン同士の干渉による衝撃で目が眩んだ葵とマキの背後に白龍が超スピード、しかも足に磁力を発生させて茜やセイカのスPEEDを上回る速度で回り込み、電撃を帯びた左腕を振るい2人を叩こうとしたが、白龍の言葉が聞こえた為ギリギリ前転で回避し、マキは其処から訓練により身につけた技術により直ぐ様白龍の方を向き

F a i l e n B u r i e t
血 清 弾を撃ち込むが、矢張り電磁バリアに阻まれ銃弾が通らなかつた。

しかもバリアになる程の電圧を身に纏っている為レオン達はキック等の格闘技が繰り出せない為かなり厄介な敵だと感じていた。

「確かにレオンはん達は無理やけどウチなら行けるで!!?」

「来ると思っていましたよミカエル、いや茜さん!!？」

そんな白龍に対して茜はウィルス完全適応者、しかも初期型とは言え同じT—Genesisに適応した自身の耐久性を活かして電磁バリアによる電圧を無視しながら『アルファ』から仕込まれた独自の格闘技を繰り出し、それを予測していた白龍は異形化した右腕も合わせてそれに対応し、パンチやキックを受ける毎に電撃を帯びた八極拳による打撃や蹴りを浴びせ、更に異形化した右腕からはレールガンではなく超高压スタンガンを茜に浴びせ麻痺を狙う。

「これなら如何かしら、坊や！」

するとエイダが2人の間を縫って白龍にクロスボウの矢を放つ。

しかし白龍は矢如きは電圧で焼き切れる為脅威にならないと判断して茜に攻撃を続行……しようとしたが、その鏃に炸裂弾が仕込まれている事に気付き直ぐ様大きめの回避行動を取った。

「中々やりますね、エイダ・ウォン……！」

白龍は幾ら電磁バリアで守られていても爆発その物は守れない為第二の弱点として熟知しており、彼はこのエイダの一連の行動で見せた何重にも及ぶ罠（避けなければダメージ、軽く回避すれば茜の爆発すら気にせず全力攻撃によるダメージ、更に葵のレールガンの狙撃等）に舌を巻いていた。

「茜ッ!!?」

その光景を見たレオン、葵、マキが叫び吹き飛ばされた茜の方を向く。

すると茜は直ぐ様受け身を取り、風穴が開かれた腹はその場で高速回復と再生が成され、服までは流石に戻らないが綺麗な素肌のお腹に戻りながら全員に話しかけ始めた。

「…心配すんなや!!?」

ウチもウィルス完全適応者や、これ位のダメージは如何とでも回復出来るで!

それよりマキはんウチの事を初めて茜って呼んでくれはったなあ、これはウチもマキはんの友達認定かな!」

「…バカ!!?」

んな事より戦闘に集中しろよオメガ1!!?」

茜は再生し切ったお腹を叩きながら大丈夫だと言い放ち、更にマキが初めて茜をフルネームでは無く名前で呼び捨てした事に茶化しを入れてシリアスな空気を壊した。

それに対してマキは照れ隠しか茜をまたオメガ1と呼び戦闘に集中しろとブーメラン気味な発言をしていた。

「(……にしてもレールガンの直撃、思ったより『痛かった』わ。

しかも電磁バリアを無視しながら僅かなダメージを蓄積しながらの大幅再生を余儀なくされはった……こりゃあウチにとってかなり『相性』が悪過ぎる相手や

な……レールガンは頭以外に受けて後3、4発と言ったところか。

これは早々に決着つける様に動くしかあらへんな……」

しかし茜は電磁バリアを無視しながら格闘を行ってた関係でダメージを僅かずつではあるが蓄積され、其処にレールガンの一撃を受けてしまい自身の中でレールガンの様な物を受けたら再生不可な頭(脳)を論外として其処以外の何処かを受けられて3発か4発しか受けられず、それ以上はウイルス完全適応者である自身の体でも耐え切れないと判断を下す。

そしてこの『相性』の悪い相手に対する攻略法は葵のレールガンしか無いとも考え、白龍の攻撃をギリギリ回避しながらリロードをする葵を援護する為に再び電磁バリアを無視した格闘戦を仕掛けに行くのだった。

「お姉ちゃんはある程度言ってたけど、多分お姉ちゃんは痩せ我慢している！」

あのバリア無視のダメージを蓄積しながらのレールガン直撃を耐えられる回数は多分3回か4回の筈……なら私が何とかこのレールガンを当てないと!!?」

その葵も双子故か茜とほぼ同じ思考に辿り着いており、矢張り自分がレールガンを当てるしか打開策は無いとして白龍の攻撃を避けつつレールガンのチャージを始め、彼の僅かな隙を狙う為にその隙を見つけようと構えながら気を窺っていた。

「あら、ならお嬢ちゃん達のお手伝いをしようかしら?」

「チツ、また…!!?」

すると再びエイダが茜と白龍が格闘戦をしていた瞬間を狙いクロスボウを放ち、白龍はまた同じ炸裂弾仕込みの物だと見抜き回避行動を取った。

すると今度は葵が攻撃するのではなく茜から攻撃を開始して先程と同じく急所狙いの全力の一撃を更に多く叩き込み白龍を踉蹌けさせた。

「また、同じ事をつ!!?」

しかし白龍はウィルス完全適応者の耐久力を活かし再び茜の腹に右腕を当ててレールガンを放とうとした。

すると……茜は不敵に笑い白龍の肩を持ち放そうとしなかった。

これらの意図に白龍は僅かに思索し、そしてその答えたる葵を見た。

其処には葵が『茜が巻き込まれるかもしれないのにレールガンの引き鉄を引こう』とする姿が映った。

これがこの双子が何も示し合わせをせずに思考の一致で合わせた最適解、茜の耐久力を信じてレールガンを撃ち込むと言う一手であった。

「しまっ」

「今や!!?」

「ツ!!?」

『ズダアアアアアアアアンツ!!??』

そして葵は茜の合図でレールガンを放ち、その立ち位置関係でレールガンの直撃ギリギリを茜が避け、白龍はレールガンの直撃を受けて電磁バリアが相殺された上に茜の様に身体に風穴が開き再生を始めさせざるを得なかった。

「これで、終わりや!!?」

レールガンの余波で上着がほぼ破けピンク色のブラが露出するのも気にせず茜はレールガンでお釈迦になる寸前の改造AK、更にマキがカスタムショットガン、レオンがセンチネルナイン、葵もUMPに武器交換しそれぞれ装填された血Fallen Bullet 清 弾を白龍に叩き込み始めた。

「ぐつ、うううううううううううう!!!!」

白龍は四方八方から血Fallen Bullet 清 弾を受けてしまい体内のT—Gene-sisが死滅して行き、自身の力のコントロール所か力自体が失われて行く事を感じ、そしてレールガンのダメージだけはギリギリ回復し切ったがその間に相当数の血清を撃ち込まれた為異形化した右腕が普通の腕に戻って行き、そして血Fallen Bullet 清 弾による風穴だけは回復せず、そのまま仰向きに倒れて行った。

これにより葵達は確信した。

自分達がCLOWNのラグエル、白龍と言うウイルス完全適応者に勝利したと言う事

を。

「この醜い化物共が、さっさとくたばりやがれ!!？」

一方その頃、瓦礫の向こう側に居たB・Y・達はレールガンを葵達の方に手放してしまつた……と言うより、立ち位置的にレールガンが自分毎白龍達から離れてしまうと判断しわざと手放したデルタ4の一言を最後にB・O・W・（但しエクシアは瓦礫で潰された分しか居ない物量戦）を制した。

「レールガンの音が止んで銃声が響いた……となれば」

『『ザザツ』此方地上部隊、2時間経過したが隊長達生きてるか？』

「死んでるなら返事するなよ？」

「生きてるぞ。」

それに……如何やら丁度良くCLOWNのNO・IVをレオンや葵達が斃したみたいだ」

するとB・Y・の通信機に地上のデルタ5から通信が入り、2時間経過した事を伝えて来る。

対してB・Y・は中での戦いが全て終えた上で生存を報告し、N2爆弾設置はしなく

ても良い事を地上に残つた全員に示唆させた。

此れによりE^エd^デe^{エン}n^スI^スI^スI^スI^スI^スでの戦いは全て終わりを告げ、残るは後始末のみとなつた。

E P X X I I 『レオン、葵達の幕間：白龍の遺言、紅の日記』

葵達の手によりラグエル、白龍は斃されそれと同時にB・O・W・どの戦闘を終わらせたシエリーやB・Y・達。

分断された5人同士は巨大に瓦礫をレールガンで吹き飛ばす選択肢を取り、葵が瓦礫の隅にレールガンを撃ち込み其処に開いた穴を素早く通り合流した。

「レオン、皆無事!!?」

「はいシエリーさん、私達皆無事です。」

それにラグエル、蘭白龍はあの通りですよ」

シエリーがいの1番に白龍と戦っていた側に駆け寄ると葵が白龍の方を見てその状態を示す。

白龍は一度ウイルスに完全適応したからかまだ生きているが、Fallen Bullet 血 清 弾の影響により既に虫の息だった。

「ゴフツ、ゴフツ!!?」

ふ、ふふ、如何やら私の負けみたいです…やっぱり、私の思った通り、に

なりました、か」

「…蘭白龍、アンタがウチ達に証明して欲しい言うたのは何やったんや？」

勝ったから答えて貰うで」

その虫の息の白龍に茜が詰め寄り、一体何を思いこの戦いに臨んでいたのかを問い質す。

すると白龍は笑みを浮かべながら応え始めた。

「ふふ……簡単ですよ。」

私はこの世界には諦念しか抱けず、世界の再編しか希望が無いと思っていたのですよ……琴葉葵さん達を見るまでは」

「えつ、私達？」

「はい。」

貴女達、特に葵さんは自身の出生の秘密を知ってしまい折れるしか無いと私は思っていました。

しかし、貴女は折れずに此処まで来て、弦巻マキさん達の支えもあり私を倒すに至りました……その為、私はこう思ったのですよ。

ああ、こんな子達が居る世界ならまだ捨てた物じゃない、私にもこんな友人がいれば……と」

白龍は如何やら葵は此処で折れてしまうと思っていた様だが、それが折れず友人や姉、歴戦の戦士等の支えもあり自身を討ち斃す結果を齎した。

この事に彼の心は揺らいでしまい、この世界には紅が示した道以外にまだ希望はあると思ひ知らされたと言う物だった。

「呆れた物ね、この世界に絶望してその道を選んだのなら最後まで突き進むのがセンサーの理想に共感した貴方の使命でしょう？

なのに中途半端に揺らいで貴方達が言う私達旧人類に負けた、本当に中途半端過ぎるわよ」

「しかもレールガンを使える程の電磁力を使えるなら此方の武器を磁石の様に引き寄せてこつちを丸裸にした上で倒せた筈なのにやらなかった。

エイダの言う通り、お前は中途半端過ぎたんだ、何もかも」
「…その通りですね、エイダ・ウォン、レオン・S・ケネディ。

ですが、実際に私はそう感じて負けたのです。

これは揺らがない、葵さん達が手にした勝利なのです……これなら紅を討ち斃し、ラファエル……彼女らの心も救えるかも知れません……

……

エイダとレオンは白龍に中途半端と辛辣な評価を下したが、この場に居た全員が同じ

意見を抱きバイオテロに加担しながらこの世界に希望を抱いた身勝手さにそれぞれ辛辣な意見を抱いていた。

すると白龍は更に言葉を紡ぎ、紅を斃すは兎も角ラファエルを救うと言う言葉に疑問符を抱きシエリーが今度は詰め寄った。

「ラファエルを救う？」

それって一体如何言う意味なの！」

「言葉通り、ですよ。」

彼女は私と同じ様にこの世界に絶望を、抱いてますが……彼女の場合は、身勝手な兄に付き合わされてCLOWNのメンバー入りし、TGenesisにも完全適応してしまい現在のNo.1Iの実力と地位を、得てしまったのです…。

此れ以上は彼女のプライベートなので話せませんが、一つ遺言を、頼みたいです……」

白龍曰くラファエルは彼の様に世界に絶望を抱き、それも身内に振り回された結果そうなったと聞き、茜や葵達、更にセイカはその話に親近感を抱き、特にセイカは自分みたくその道を選択しか出来なかったのかと感じていた。

そして白龍が息も絶え絶えになり始めた時に遺言を頼み始めると、茜がハンドガンを抜き頭に照準を合わせて黙ってその遺言を話させた。

「……ラファエル……彼女の心を救ってあげて下さい。

私と違い、この道を選ばされたCLOWN内に居る加害者でもあり被害者でもある彼女を……」

「……良いで、救ったるわ。

何処まで出来るか分からんけどな」

「……ありがとうございます、ございます……」

『ズダンツ!!?』

茜は遺言を聞き届けた後止めの1撃を頭に打ち、蘭白龍の命を終わらせる。

そしてその光景を見た葵はウイルス完全適応者も矢張り人間で、確かに相手はバイオテロ犯だったがそれを自分達は殺したと罪悪感を抱き自身の手を見ていた。

「アオイ・コトノハ、ウイルス完全適応者で人の心を捨てた者はそれは人間では無い、B・O・Wだ。

故にお前は人を殺していない、だがもしそれでも割り切れないのであれば背負え、蘭白龍と言う男の命を。

それがお前に課せられた、生き延びた者の使命だ」

『『アルファ』さん……私が、背負う……』

葵の様子を見た『アルファ』が任務に徹する彼にしては珍しく、或いは民間人だった

からなのか葵に気に掛ける発言をして遠回しに励ましていた。

それを聞いた葵は最後に白龍を一瞥し、彼の分まで生きよう、彼が自分に抱いた希望を实らせようと思いい言だけ白龍に声を掛けた。

「…分かりました白龍さん……さようなら…」

もう何も言わぬ白龍にそう告げた後、遺体をマキやB・Y・が携帯型死体袋に入れたのを確認して葵達は第1試験場から去って行くのだった。

特に葵は彼の命を背負うと思いいながら…。

「良かった、あんなバカスカレールガン撃つとつたから管理サーバーに1発ぶち当たって無いか心配したけど無事やったみたいだ」

葵達が第1試験場から去った後、茜の案内で連絡通路を通って行き第1管制室に辿り着き、そこで茜はコンピュータに指紋認証とマスターコード(コードはSpencer)

を打ち込みデータが無事かの確認を取りそれが終えた所だった。

「にしても、マスターコードをスペンサーにして8年もコードをそのままにするとは……クレナイ・コトノハは本当にスペンサーの狂信者だな」

「それだけアイツの中でスペンサーに対する忠誠心やはかなりウエイトを占めとるって訳なんや。

さーて、E d e n^{エデン}特有の情報共有化を利用してアイツの8年間の研究やら日記やらを丸裸にしたるで〜」

レオンはマスターコードにスペンサーの名前を使い、それを変えない事に琴葉紅の狂信振りを見て呆れを通り越した何かを感じていた。

それに対し茜はそちらへの興味は0でこの8年姿を晦ました際の研究データや日記等全部を晒し物にする気でキーボードを打ち込んでいた。

「あつちは時間が掛かりそうだから私は……」

その様子を見ていた葵は時間が掛かりそうと感じ別のコンピュータから何かデータを引っ張り出そうとマスターコードと指紋認証をしつつ操作を始めた。

すると興味が惹かれたファイルを一つ見つけた。

「…2006年9月9日の監視カメラの映像記録……この日は確かお母さんがくれた記憶ならお姉ちゃん達がバイオテロに巻き込まれた日……だけど本当の記憶なら……」

葵は2006年9月9日の映像記録ファイルを見つけ出し、自身の記憶と悪夢を照らし合わせ、この日に茜がハンドガンで紅の殺害を行ったと推測し映像記録の再生を行った。

「あら、面白い物を見ようとしてるのね貴女」

「あつちはまだ掛かりそうだから一緒に見せてよ葵ちゃん」

「うわこの2人すっかり葵のプライベートゾーンに入ってる、私が守らなきゃ」

するとエイダとセイカの2名が葵のコンピュータを覗き始め、それを見たマキは悪いお姉さん2人に葵が扱われない様にガードを固めるべく近くに来てその映像を見た。

「…やっぱりこれだ、私の悪夢の光景!!?」

すると映像の先には葵の悪夢通りの光景が監視カメラ越しに流れ、悪夢の内容通りの物が流れた後、複数のカメラ映像から茜が一度ウィルス研究室前通路から第2管制室に移動する映像が流れ、そこで自爆装置を起動する姿を捉えていた。

「お姉ちゃん…」

「あらこれは…お嬢ちゃん少し映像を戻してウィルス研究室前通路の方を見なさい」

「え、あ、はいエイダさん」

するとエイダは何かに気付いたのか葵に少し映像を戻してウィルス研究室前通路を見る様に指示を出す。

それに従い葵は映像の再生を少し巻き戻しウイルス研究室前通路の方に注目した。

「……………えっ、これ!?？」

「うわ、頭撃たれたのに執念で動いて隠してた何かを身体に打ち込んでる」

「ふうん、映像から察するに打ち込んだのは多分T—Gene sisでしょうね」

すると其処には紅が懐から薬物アンプルを取り出し自身に打ち込む映像が流れ、紅が頭を撃たれて今なお生きてるのはこの時にT—Gene sisを打ち込み復活した事による物だろうと4人は理解し、更に頭を撃たれてなお動いたその執念に逆に関心を持たざるを得なかった。

「…あら、すっかり元気になって動いてタブレットで何か操作してるわね」

「多分E d e n I Iの全データを他のE d e nに共有してデータ損失を防いでるんだと……あ、ウィルス研究室に入ってT—Gene sisを取ってる!」

「おつと茜選手此処で気付いて走り出すも紅選手も気付いて緊急脱出用エレベーターに乗り込み逃げ出した!」

紅選手を逃した茜選手此処で痛恨のミス!!?

つと、茜選手も別の脱出エレベーターに乗り込み自爆寸前の施設から脱出しました」

「おいコラ其処、特にセイカ、あんさん人のミスを実況すんなや」

葵やマキ達は紅のT—Genesisによる復活劇を目撃し、更にその後ウィルス研究室でT—Genesisを回収し当時の茜がそれに気付く僅かなタイムラグの間に脱出したシーンが流れ、セイカはこれを嬉々として実況していたが茜に怒られてしまう。

「…よし、8年間の研究データと日記の全コピーは完了した。

後は日記を読んだ後このEdenスリーを爆破するぞ。

どうせ向こうもその気で居るだろうからな、手短に済ませる為に重要そうな部分をピックアップして置くぞ茜」

「サンキューB・Y・はん。

じゃあ日記の朗読会を始めるから葵達も来るんや」

するとB・Y・が全研究データに加えて日記もコピーし、更に今読む分で必要そうな部分を別ファイルに抽出し、茜はその有能さに感謝しつつ朗読会を開始するべく監視カメラ映像に張り付いた葵達を読んだ（なお監視カメラ映像に関する記録は2006年9月9日から途切れ8年間の記録が無かった）。

「此れがそのピックアップした部分ね」

「さて、どんな痛々しい毒日記になってるか晒し者にしてやるか」

シェリーとレオンもコンピュータ画面にある抽出物を確認しどんな内容なのかを見

ようとした。

そして茜は全員が見易い様にコンピュータ画面から全部巨大モニターにそれを映し朗読会が始まった。

『2006:9:12。』

茜の手によりEdenIIが爆破されてしまい、私も危うく死に掛けたが、私の執念のお陰か、それとも元々その素養があつたのか。

兎に角私は隠し持っていたT—Genesisに完全適応し、茜の目を盗み更にT—Genesisを回収し自爆寸前のEdenIIから脱出した。

その後この日本にある施設改造前のEdenIIに辿り着いた。

元から情報共有化等の機能があつて研究再開の段取りは付けれそうだった。

しかし、あの施設にあつた資金やミカエルたる茜の行方を見失つた損失は大きい。

この施設と予備のEdenII改装にアンブレラの隠し資金：研究施設Eden建設計画主任兼ウィルス研究主任だった私が予備に隠した金のみではハッキリ言つて研究再開とか無理過ぎる。

何とか資金の目処を立たせなければ……』

「ふーん、アイツ初めは資金繰りに困ってたみたいやな、良い気味やで」

如何やら最初の抽出日記でマキ達やレオン達が分かった事は紅が元々Edden建設計画や其処でのウィルス研究主任を務めていた事や、偶然T—Genesisに完全適応し死の淵から復活し茜から逃げ切った事等だった。

そして茜は資金繰りに困っていた事を笑い物にしながら次のページへと移る。

『2009...9...25。』

あれから3年が経過した。

スペインサー卿を殺したアルバートの奴が元部下のクリス・レッドフィールドに殺害された為溜飲が幾らか下がった、何度でも言つてやる、ざまあみろ。

資金面は私が計画の2番目であるガブリエルを名乗り集め結成したCLOWNの同志たるメキシコ麻薬カルテルのライナス・メルデイセクや中国政界に顔が効き、BSAAに資金提供している蘭白龍、更にロシアの名家レティシア家の2人である『フォン・レティシア』とその妹にして盟主の『ヨナ・レティシア』、更にアメリカ元統合軍准将『マグナ・グラスホッパー』達のお陰で潤沢になりEddenIとEddenII

の改装、闇市場からのB・O・W・確保やT—Genesisのゲノム編集を行い哺乳類種のみに感染させる様にする改造等の目処が立って来た』

「CLOWNはこの時期から既に活動していたのか。

それに隊長、この名前」

「未だだ、続きを読むぞ」

葵達は2009年時点でCLOWNは既に活動下にあつた事を知り、更にデルタ4はと白龍以外にも目立った名前を見て声を上げるが、B・Y・は完全に読み切るまではその先の言葉を待たせ続きを読み始める。

『だがまだまだT—Genesisのゲノム編集や初期型からの進化等には時間が掛かる。

白龍やレティシア2人による情報、資金操作でBSAAの監視を掻い潜りながらこのゲノム編集をするには何名かの助手達を以てしても難しい。

矢張り偶然の歯車的一致で出来たこのじゃじゃ馬ウィルスの研究は困難を極める…私に『アレクシア・アシユフオード』とは言わずマーカス博士やバーキン博士並の才能さえ有れば…無いものを強請つても仕方ない、研究に集中しよう』

「ふむ、此処で協力者の名前、しかもライナスや白龍達の名前まで出て来たな。

如何やらCLOWNは5年以上前には出来た組織らしいな…しかもレティシア家まで関わってるとはな」

「あの、レティシア家って何ですか？」

『アルファ』が日記の内容からレティシア家の名前が出た事に驚き、そのガスマスクに手を当て思案する素振りを見せた事に葵は疑問符を浮かべ周りに聞き始める。

するとレオンとシエリーが端末を弄りレティシア家の情報を出し説明し始めた。

「レティシア家はロシアの名家で白龍同様政界に顔が効くだけじゃなく、軍部には高性能監視衛星を提供し、幾つもの企業のトップに立つエリート中のエリートだ」

「その盟主は2009年当時僅か11歳、現在16歳で兄を上回る才覚と幾つもの博士号に企業経営の手腕を身に付けていたヨナ・レティシアが務め、秘書には兄のフォン・レティシアがサポートに周り様々な人道支援からBSAAに資金やバイオテロ犯の情報提供をしていたスポンサー組の1人で…ROICE学園設立に関わった建設会社の親元でもあるわ!!？」

「ROICE学園は開校3周年を迎えた…となれば…茜、続き読ませて」

如何やらレティシア家はロシア版白龍とも言うべき存在で、更にROICE学園設立に関わった存在でもあると知り葵は驚き、更に白龍の言葉通りCLOWNが学園設立に関わっていた事を裏付ける証拠となっていた。

そしてマキは続きが気になり茜に次のページを読まれる様に指示し、茜はキーボードを操作した。

『2011:2:15。』

T—Genesisのゲノム編集も漸く目処が立つて来てウイルス完全適応者を探す実験場の基盤となる場所周辺を中心に学園を設立する計画も順調に進み、ROICE学園が開校するまで残り僅かになった。

だが、此処でまさかの誤算：此方にとって嬉しいやら意外やら様々な物だったが、何とルシフェル、葵がこの学園に入学してくる事が判明した!!？

まさか、あの時茜に逃がされ行方知れずだった葵がこの日本に居るとは……日本人は矢張り隠し事が上手い方だな。

だがこうなると気になる事が出て来た。

茜と違いウイルス完全適応者の形質が表れなかった葵は能力をこの約5年で開花させたのか？

T | G e n e s i s の真の完成の暁には葵の能力値検査の為に彼女の下に
B. O. W. を送り込まねばなるまいな、死なす簡単に突破されない程度には：」

「…つまり、今までのゲームは私の能力を知りたいから仕掛けられたの？

じゃあ皆が学園で襲われたのは：」

「葵、それは違うと思う。」

確かに葵のところに B. O. W. を送るって書いてあるけど葵が学園に来たのは意外って書いてあるし、結局 R O I C E 学園は実験場の中心にあるから B. O. W. があの学園にゲームで送り込まれるのは変わり無かった筈だよ。

まさかバリケードを張って安全だと思つた場所が実験場なんて誰が想像出来るのさ、あの腐れ外道が!!？」

葵は日記から自身が学園に居た所為でその性能実験のゲームであるの夥しい数の B. O. W. を送り込まれたと責任を感じ始めていた。

しかしマキがフォローを入れ彼女が要らぬ責任を抱かない様にしつつ近場の機械板に紅に対する怒りを汚い言葉と共にぶつけていた。

茜も紅に苛立ちを覚えつつも次のページに進んだ。

『2013...8...27。』

アメリカ、中国大規模バイオテロから2ヶ月程が経過した。

スペインサー卿を裏切り、死ぬ要因を作ったアレックス・ウエスカも死に、ネオアンブレラを名乗った自称エイダ・ウオンの『カーラ・ラダメス』が起こしたCーウィルスの世界的蔓延もあのレオン・S・ケネディやクリス・レッドフィールド、更に忌まわしいアルバートの子のジェイク・ミューラー達に阻止され、更にアメリカ大統領補佐官シモンズが同じくCーウィルスを使用し大統領を暗殺した事でこの事件の主犯はシモンズとなり、哀れな自称エイダは利用され死んだ者になった』

「何、カーラ、ラダメス……?」

つまり、クリスが追っていたあのネオアンブレラのエイダは偽物だったのか……!

「矢張りシモンズが主犯だったなんて単純な事件じゃ無かつたらしいな、それにしてもこいつ等の情報網は恐ろしいな……!」

「あんな、女の秘密を暴くなんて琴葉紅はデリカシーの無い男なのね。」

最悪な性格してるわ」

続きの日記の2013年8月、ネオアンブレラがアメリカ、中国で大規模バイオテロ

を起こした詳細な事が書かれ、更にエイダが悪戯で秘密にし、更に自身の偽物でありもう一人のエイダと呼ばれたカーラの事まで調べ尽くしたCLOWN、ひいては紅にエイダはデリカシーのかけらも無いと少し苛立ち、レオン達あの事件に関わった者達はあの事件の真実を垣間見て驚きを隠せず、更にCLOWNの情報戦力に脅威を感じていた。

「な？」

あんな奴死んで当然やろ、続き読むで」

茜は回転椅子を回して皆の方を向き紅の唇さを改めて言い表し、葵達も同意見を抱いていた。

そして全員続きを読み始めた。

『だがそんな事は今は良い、葵の知能指数を確かめたが矢張り茜と同程度に頭は回り成績も主席、体育の成績すら首席と普通に見れば完璧だろう。

しかし……矢張り肝心のウィルス完全適応者の形質が表れていない。

最早予定通り早々に始末すべきか？

しかしミカエルだった茜が消え、未だ行方知れずの為幾ら失敗作と言えどその可能性を潰す事は出来ない……。

目障りなBSAAと3年以上前から目立って来たA・B・F等を潰す為にもこのままウイルス完成の優先が先だろう。

そう言えば学園に来た保険医の京町セイカ、彼女は本物のエイダと同じ組織に所属し、ジェイクと同じくアルバートの子であり、またジェイクと違いウイルス完全適応者、つまり新人類となった逸材らしい。

T—Genesisでこのステージに立った訳で無い為、またあの忌々しいアルバートの子であるのでミカエルの称号を与えるのは先送りにし、彼女がT—Genesisに完全適応したならば仕方ないからミカエル候補に入れてやろう。

忌まわしいウエスカーの名を持つてはいるがな』

「私の事まで調べ尽くしやがってあの男、絶対地獄を見せてやる……!」

更にセイカは自身の触れられたく無い部分をこの時点で調べ上げられた事を知りいよいよ以って彼女の普段あまり感じられない怒りが感じられる程に怒りが露わになり、そのカラーコンタクトの下の瞳が赤く輝いていた。

茜も要らぬ敵を作り過ぎるこの男に呆れを感じ、更に次のページに進ませた。

『2014:6:28。』

メキシコやシカゴでバイオテロが敢行され、その主犯のグレン・アリアスは私の T—Gene sis と同じくプラーガの遺伝子を利用したウイルスを使つてほしい。

が、そんな事は如何だつて良い、重要じゃない!!?'

遂に T—Gene sis の真の完成が訪れた!!?'

早速我々同志一同で自身に投与し、私は初期型に加え完成したウイルスを投与した事で更なる強化が為され、そして事前の遺伝子形質から T—Gene sis に完全適応する候補を絞つていた為誰が真の同志となるかは分かつていた。

ライナス、フォン、白龍、マグナ、そしてヨナ。

彼等こそが プロジェクト・アークエンジェル 七天使計画の空席を埋める真の同志だ!!?'

「成る程、ウイルスのゲノム編集完了等はい最近で、元から名前がピックアップされていたのは事前にウイルス完全適応者になるのが分かつていたからか……」

『……………』

B. Y. はウイルスの完成がつい最近である事や白龍やライナス、更にレティシアの 2 人に元アメリカ統合軍准将等の名がピックアップされた理由を知り納得した顔を浮かべた。

対して七プロジェクト・アークエンジェル大天使計画と言う忌まわしい名を見て茜、葵の手に力が入り、マキは2人の肩に1度手を掛けて力を抜く様にジエスチャーをし、再び日記の続きを読み始めた。

『特にヨナはウイルスのゲノム編集に多くのヒントを与えたばかりか、この強化された私には僅かに劣るが、事前にウイルス完全適応して無ければ間違い無く彼女が完全に私の上を行く逸材だった!!?』

更に世界を憎むその想いも含め、ラファエルの称号は彼女に相応しく、残り
は能力値を測りそれぞれ称号を与えよう!!?』

……そして同志になり得ず哀れなゾンビ、ネフィリム達になった者達に鎮魂
を。

そしていよいよスペンサー卿の理想を叶える日が近付いて来た。

計画実行はアリアスのバイオテロが終わってからにし、そして新たに開発した
感染媒体用B・O・W・グリゴリやウイルス、強化されたネフィリムの実験にはA・
B・F・を使ってやろう。

ああスペンサー卿、貴方の理想が叶う時がもう直ぐ其処まで来ました…。

しかし、ただ計画を実行するのは面白くない、旧人類にもチャンスを与えてや
らねばな…』

「成る程成る程、ウチ等をダシに使うのは最初から決定事項やったんか……ふざけやがつてあのイカレ頭が!!？」

「オメガー、落ち着け。」

お前の怒りも分かる、実際俺も同じ想いだ。

だが今は頭を冷やし、続きとなる日記を読むのだ。

B・Y・がピックアップした内容は未だあるのだから」

茜は紅がA・B・F・を最初からウイルス実験に使う魂胆だった事を知り今まで溜めていた怒りが爆発し思わず機械版を叩いて一部凹ませてしまうが、『アルファ』が此れを沈ませ続きを読ませた。

最も『アルファ』も怒りが今にも爆発仕掛けており声色が穏やかで無い事は全員が窺い知れていた。

そんな『アルファ』を見て茜は怒りを収め、続きを読み始めた。

しかもこれは本当に最近の内容だった。

『2014:7:27。』

バイオテロ計画は無事実行に移された。

レオン・S・ケネディとB S A AのB・Y・がルールの穴を突き日本にオメガ1を観光客に紛れ込ませたりシエリー・バーキンをジェイク・ミューラーの下に向かわす等あり、矢張りルールが甘いとラファエルやラグエル達に言われてしまった。

だが………だが!!?

まさか、まさかオメガ1がミカエル、茜だったとは!!?

確かにオメガ1の実力は常軌を逸した部分はあつたが………まさか茜だとは思わなかつた!!?

A・B・F・め、上手く茜の情報を隠してくれてたな……!!?

だが、茜がこの地に来た事で七^{プロジェクト・アークエンジェル}大天使計画の完遂に更に1歩前進したぞ!!?

ははははははは、素晴らしい、なんて素晴らしい日なんだ!!?

この逸る気持ちを出来るだけ抑え、今の茜の限界能力値と、ついでに葵の能力値を検証せねば……ああ茜、早く我が下に来ておくれ……!!?」

『……キモツ!!?』

「成る程あの時の通信の時はかなり昂っていたらしいな………確かに気持ち悪い奴だな。」

壁と話してると言ってるやりたいな」

葵、茜、マキは同時にキモツと同じ感想を言い、レオンやB・Yも同じ意見を持ち特
にレオンは壁と話していると思いき浮かべていた。

すると日記の更新が来て、茜達はその更新された日記を見始めた。

『2014:7:29。』

やあ茜、そして葵やその仲間達。

今頃君達はこの日記を読んでいるのだろう。

監視カメラでラグエルやB・O・Wとの戦闘を見させて貰ったが、茜は矢張りミカエルに相応しい力を持つな。

この8年で進化したT—Genesisの完全適応者だったラグエルと相性が悪い筈なのに互角以上に戦い、更に葵も本当にウィルス完全適応者じゃないのが惜しい程に能力値が高かった。

他の皆もそれぞれ素晴らしい力を持っている、これでT—Genesisに完全適応したら茜と同等以上の力を得られる筈だろう。

更にジェイクの血から血清弾やワクチン等を作り上げた事は賞賛に値するよ。

特に茜、君の力は8年前より更に進化しその能力値が上昇しているのだからね。

同じ身体能力特化のウリエル、マグナ以上の力を持つなんて相当だ」

「やつぱり見てたんか。」

んで日記が赤裸々に読まれて喜ぶとかやつぱマゾちやうんか？」

「お姉ちゃん、言いたい事は分かるから続き読もう？」

茜は紅が日記を更新し、それを読まれている事を前提に書きながら茜達の戦いに喜び、特に茜の力を見て興奮している文に気持ち悪さが込み上げて来ていたが、葵も同じ気分を持っていた為同情しつつ続きを読ませてる事を促した。

『だがそれでも何手か足りないぞ茜。

何故ならジェイクの血で作られた血清弾……Fallen Bulletと言ったか？

アレは確かに進化したT-GenesisのB.O.W.やウイルス完全適応者を殺せるだろう…私以外はな！』

「……はあ!!?」

何言つてんのコイツ……!!?」

しかし、その先の文を読みレオンや葵達は驚いていた。

何と紅は自分には血Fraine Bullet清弾が効かないと書いており、苦し紛れか何かかと茜は思ったが、紅の性格上苦し紛れは書かないと心の中で断じ、その続きを急いで読み始めた。

『更にラファエル、ヨナの力は恐らく今の茜

と同等以上の身体能力に加え氷を操る特殊能力に目覚めている!!?』

水の特異能力しか目覚めず身体能力はそこそこしか上がらなかった彼女の兄であるゼラキエル、フォンを遥かに上回る力を持ち、あわよくば私の計画すら塗り替え真に世界の破滅を願う憎しみの権化たる彼女に果たして勝てるか!!?』

今は高みの見物をして置くとしよう……もしヨナを倒した時は私と戦う時が来たのだと私も腹を括るが、その時までには私の弱点を見つけねば勝てないと知るが良
い!!?』

因みに私はラファエルまでが持つ能力を全て操れる、この言葉の意味も噛みしめて置く様に……ふははは、はははははははは!!?』

『……………』

日記の最後の内容に絶句し、白龍が言っていたラファエル、ヨナの心を救って欲しいと言う彼の願いの原因：紅の言葉を借りるなら憎しみの権化であり、紅の計画も塗り替え真に世界の破滅を願っているとする彼女や紅はそんなヨナの力を含めた全員の特殊能力を使えると書かれており、想定以上の敵が2人居る事に驚きを隠せずにいた。

「…もし紅のこの日記の内容が正しいなら奴の弱点を見つけなければならぬ……H
Qにデータ送信を開始する!!？」

「こつちも同じデータをハニガンに送る。」

ハニガン、緊急連絡だ。

CLOWNメンバー全員の正体が分かったのと奴等のリーダーには今の血清弾が効かない事が分かった！

『何ですって、それは本当なのレオン、シエリー!?!?』

「ええ、敵が余裕や油断からか日記を更新してそれを知らせてくれたわ。」

全てのデータをそちらに送るから解析を…」

これらの事の対応にレオンやシエリー、B・Y・がいち早く動き出し、それぞれの司令部やサポーターのハニガンにデータ送信を開始しながら管制室から外に出て白龍の

遺体袋が置いてある脱出エレベーターに向かい始めていた。

「お姉ちゃん」

「茜」

「分かつとるで葵、マキはん……あの男舐めた真似してくれんなホンマに……絶対に地獄に送つたるから覚悟せえよ腐れ野郎が!!?」

『バギイ!!?』

葵、マキ、茜は紅のその余裕綽々で地雷原でタップダンスを踊る様な日記の内容に遂に完全にキレ、茜はリミッターを解除しながら機械版にパンチを繰り出しそれをぶち抜いてしまう。

此れに『アルファ』は勝手なりリミッター解除を咎めず、そのままエイダ達の後に続いて行き葵達も怒りをそのままに別の制御盤からE d e n I I I Iエデンスリの自爆装置を作動させその後に続いて行つた。

「(…でも白龍さんが言っていたヨナつて人の心を救ってくれの内容が多分憎しみを晴らしてくれて事なんだけど…身勝手な兄に振り回されて今があるって位しか白龍さんの言葉とかからは分からなかった。

何を如何したら良いんだろう…?)」

しかし葵、更に葵と双子故に同じ思考に辿り着く茜、更に珍しく思考が一致したマキ

は紅の弱点判明は上に任せてラファエル、ヨナの心を救うとは具体的にどんな事なのか分からず何をすれば良いのか考えていた。

しかしその場では答えが出ずエレベーターまで辿り着き、この白龍の遺言が今後の課題となったのであった。

EP XXXIII 『クリス、ジエイク、ゆかり達の戦い：脅威の【智天使】と現れるウリエル』

葵達が戦いを終えるのと同時刻、クリス達とジエイク、ゆかり達は東側にある潜伏地候補を既に2つ潰していた。

しかし、そのどれもが罠であり爆弾解除やら頭上からゆっくり降りて来る天井から逃げたりなどしてどれもこれも部下を巻き込み兼ねない物だった。

その為クリスはある決断を下す事になる。

「…仕方ない、最後の1ヶ所は俺とジエイク、ピリーとカルロス、そしてゆかりとあかりのみで潰すしか無い」

「しかし隊長!!？」

「分かってる、もしも俺達が危なくなったら救助に駆け付けてくれ。」

それまでは待機だ、良いな？」

此処でクリスは止む無くこの中で飛び抜けて個々の戦闘力があり、トラップ解除も出来る面子のみで最後の1ヶ所を潰す判断を下し、他の隊員達から反発を受けるが自分達が危なくなれば救援を呼ぶと約束させその場を収める。

「他のA・B・F。隊員もだ。」

特にシータ……アンタらの仲間の仇を討ちたい気持ちは俺達も一緒だ」

「だからこそ此処は一旦任せて欲しい、良いな?」

「…ハマしたら俺達総出で殴ってやるからな」

カルロスとビリーも特に今回復讐心に燃えて危なっかしいシータ小隊を隊長每抑えようとした所、ハマしたら殴られる為逆に頑張らされる事になり苦笑しながらクリスの横に立った。

「さて、行くぜお嬢ちゃん達?」

さっき見せてくれたスナイプをまた見せてくれよ?」

「貴方こそエクシアを徒手空拳で殺したその実力、マグレじゃない所を見せて下さいよ?」

「じゃあ皆さん、しゅっぱくつ!」

そして最後にジェイクとゆかり達もクリス達と並び、直後に走り出しクリス、ジェイクが前衛、ビリー、カルロスが中衛、ゆかり、あかりが後衛と陣形を組みながら周りを暗視ゴーグルで見ながら警戒する。

「敵影、今の所無し!」

「目標地点まで残り800メートル。」

「このまま何もなければ」

「づあ あ あ ……」

「…無い訳も無いからさっさと片付けるぞ!!?」

そして最終目標の潜伏地候補まで距離800まで来た所にゾンビやネフィリム、中にはエクシアも混じりながらクリス達に襲い掛かってくる。

「邪魔をするな!!?」

先ずはクリスがそのパンチでゾンビ達を振り伏せ、更にエクシアすら怯ませた瞬間
Fallen Bullet
血 清 弾を撃ち込み絶命させ。

「オラオラ、能天使だか何だか知らねえがB・O・Wなら問答無用で殴り殺してやるぜ!!?」

ジェイクはクリスよりも身軽くエクシアに弾が勿体無いからと徒手空拳で挑み、カウンターや隙を伺ってからの全力の掌打を叩き込みダメージを蓄積させ、最後もまた掌打で1体を殺し切り残り血 清 弾で仕留め。

「そうら、お前らの大好きな鉛玉だ、たらふく喰らいやがれ!!?」

「消えろ、化物共が!」

カルロス、ビリーはクリス達を援護しながら自身らも次々と敵を撃ち殺して行き。

「もうこれ以上エクシアの誕生は許しませんよ?」

「You are die!!?」

ゆかり、あかりが狙撃手としてネフィリム、ゾンビ等の頭を吹き飛ばし、更には近づいて来た敵にはサブマシンガン等で対処し、完全にB・O・Wを寄せ付けない少数精鋭部隊が誕生していた。

「よし、この周りはもう片付いた!」

目標地点まで走るぞ!」

そしてクリスの合図に全員走り出し、進行先に居たゾンビ、ネフィリムを蹴散らしていよいよ目標地点……とあるビルの200メートル前までやって来た。

「ふう、此処まで順調に來れたな。」

後はこのままアジトか否かを確かめるだけだな」

「…:そう簡単に上手く行くと良いんだがな」

カルロスは小走りで目標地点まで問題なく近付いた事に喜び、このままなら何も問題は無いと思いき軽口を開いていた。

が、ピリーは何か嫌な予感を感じ緊張を解いていなかった。

このピリーの発言を真面目に聞いたクリス、ジェイク、ゆかりもこの場の雰囲気がか異様な事に気が付き始めていた。

「(…:そういうゾンビ達の数が此処に近づく度に減って來ていたな)」

『……………』

「何だ……新型のB・O・W。か……!?？」

クリス達の目の前に降りたその姿は、比較的人に近い姿をしているが、頭は悪魔か何かを思わせる2つの角が生え、胸にはタイラントと同じく心臓が露出し、手の指は3本、足の指は2本になり更に背中には蝙蝠の羽に似た翼が大小合わせて2対、それぞれ背中に大きな翼をはためかせ小さな翼は腰に巻きつき、左手は右肩、右手は左脇腹に添えた佇まいをしたエクスシアと比べるとシャープな、しかし異様な化物が其処に居た。

「な、何なんだコイツは……!?？」

『…我ハ』

「な、喋り始めやがった!?？」

「な、なな何なんですかコイツ!?？」

全員が一様に驚く中、その新型B・O・W。は何と喋り始め、此れにはクリス達も目を見開きその紡がれる言葉を驚愕しながら聞くしか出来ずにいた。

『我ハ『ケルビム』、一部ノエクスシアヨリ進化シ到達セシT|GeneesisノB・O・W。ノ最終進化形態ニシテ支配種ノ形質ヲ持チナガラモ新人類ニナリキレナカッタ智天使ノ名ヲ冠スル者ナリ』

「エクスシアから更に進化した……ケルビム!?？」

血清弾抜きだと冗談抜きで化物だったアレが更に進化したのですか!!?」

『然り、我ヲエクスシア如キト一緒ダト思ツテ貫ツテハ困ル。』

我ガ力、此処テ貴様達ニ見セヨウデハナイカ』

新型B・O・W、ケルビムと自身を名乗ったそれはエクスシアから進化したと告げ、ゆかりは血Fallen Bullet清弾抜きでは重武装による絨毯爆撃でしか殺せなかつた化物が更なる化物となった事もその口で紡ぎ、クリス達に明確な敵意を見せ襲い掛かり始めた。

『ユクゾ』

『ビュンツビュンツビュンツ!!?』

「って何だ、速つ、うおっ!!?」

ケルビムは空中に静止していたかと思えばウィルス完全適応者クラスの超スピードを空中で発揮し、更に右手に炎を纏わせジェイクと直線上に居たカルロス、あかりに襲い掛かるが3人はギリギリの所で回避して態勢を立て直した。

「このっ!!?」

『無駄ダ』

ジェイク達に襲い掛かった直後にクリス、ピリーがアサルトライフル、ゆかりがサブマシンガンを乱射し当てようとしたが、ケルビムは超スピードを活かしてそれ等を回避し、今度はクリス達に襲い掛かり此れをクリス達もギリギリで避ける。

『ナラバコレハドウダ?』

「うわ、火炎弾を発射して来ましたよアイツ!??」

「だが今止まつてるから逆にチャンスだ!!?」

ケルビムは再び超スピードで全員を翻弄した後、火炎弾を手から放ち狙われたジェイク達はこれを回避し、更にジェイクは止まつている今がチャンスだとして血Fallen Bullet清弾入りのハンドガンで露出した心臓部を狙い撃った。

そして数発叩き込み此れで効いてる……と思いきや、ケルビムは空中で静止したまままるでダメージを受けていない様な様子を見せた。

「何だと、俺の血から作った血清弾が効いてやがらねえのかよ!??」

『否、確カニ我ニソノ血清弾ハ効イテイル。』

我が体内ノT—Gene—sisガ抑制サレ死滅シテ行クノヲ感ジル。

ダガ、単純ナ手数ガ足りナイノダ。

旧人類ヨ、死ニタクナクバ我ニソノ血清弾ヲ更ニ当テレバ良イ。

最モ、当テラレルナラバナ』

ジェイクは血Fallen Bullet清弾が効いてる素振りを見せないケルビムに一瞬焦りを感じるが、ケルビムの方から効いてはいるが手数が足りないと明かし、絶対にクリス達に負けない自信があるとその声色から窺い知れていた。

そして何度も何度も超スピードによる接近攻撃や火炎弾による遠距離攻撃を仕掛けて来る。

「クソ、コイツは今までの奴と一味も二味も違う!!?」

「クソが、カウンターで血清弾何発か打ち込んでるのにまだケロツとしてやがる!!?」

此れならまだレミエルの野郎の方が全然マシだったぜ!!?」

クリスとジェイク、否、ケルビムと戦っている全員がカウンターで浴びせた

血清弾が本当に効いているのか怪しくなり、ジワジワと追い詰められて行く焦燥感に駆られ始めていた。

するとケルビムは一旦高速移動を止めて両手で炎をチャージする仕草を見せた。

「今だ、ありったけブチ込め!!?」

「おりやおりやあ、その行動は何か隙ありませんですよおお!!?」

クリス達は止まったケルビムに対して血清弾を大量に撃ち込み、此れにはケル

ビムも仰け反り漸くダメージがまともに入った瞬間を目にし、矢張り撃ち込み続ければ勝てる。とクリスやジェイク、ゆかり達は感じていた。

『コレハドウダ、旧人類達ヨ』

するとケルビムはダメージを度外視にした空中に夥しい数の火炎弾を発射し、それがクリス達に向かって一斉に落ちて来た。

「拙い避けろ!!?」

「くう!!?」

クリスやゆかり達はそれを必死に避け、また止まってるケルビムに何度も
F
a
i
l
e
n
B
u
l
l
e
t
血 清 弾を撃ち込む。

すると全員は気付く、『ケルビムの心臓の鼓動が速くなっている』と。

それはケルビムももう後がなくなつて来た証明であり、またクリス達の攻撃は確かに意味があつたと光明を見出す物だった。

「お前達、奴の心臓の鼓動が速くなっている!!?」

後少しだ、踏ん張るぞ!!?」

『了解!!?』

クリスの号令に全員が目、足に力が戻り再び果敢に攻め続けた。

するとケルビムは再び火炎弾をチャージし、しかし今度はクリス達に向かって直接発射する。

彼等を確実に葬る為に。

『終ワリダ、旧人類共』

『終わるかあ!!?』

これをクリス、ピリー、カルロスは通常弾に変えて火炎弾を狙撃、これらを撃ち落と

して行き拮抗状態を作り出した。

その瞬間を狙っていたジェイク、ゆかり、あかりはそれぞれマグナム、アンチマテリアルライフル、ドラグノフに血Fallen Bullet 清 弾を装填する。

『これで終わりだ／です!!?』

そして心臓部に向かってそれぞれの弾丸を放った。

それはケルビムの心臓部に着弾し心臓を破裂させケルビムは跳き苦しみ始めた。

『グウ……我ヲ退ケルカ……ダガ、才前達デハ決シテラファエルトガブリエルニダケハ勝テヌ。』

ソノ絶望ヲコレカラ味ワイ、地獄ヘト墮チルガイイ……!!?』

『バシヤツ!!?』

そうして苦し紛れとも取れる発言を最後に口にしながら、ケルビムの上半身はエクスシア達同様吹き飛び絶命サインを出した。

これにより初の更なる新型B・O・W 戦をクリス達は制し、一息吐き始めた。

「ふう……全員無事か?」

「何とかな……たく、かなりの血清弾を使わされちまつたぜ。」

「こりや一度撤退して補給しなきゃ拙いな……」

クリスの安否確認に全員が手を挙げ、更に使わされた血Fallen Bullet 清 弾の数を数え、残り残

弾が少なくなった事をジェイクが話すとクリス達も同じく撤退をし、更にその間に先程のケルビムをH.Q.に報告しようとして決めていた。

「そうだな、撤退するぞ。」

H.Q.、此方アルファー！

今し方エクスシアが更に進化したケルビムと言う新型B・O・W.に遭遇した！

戦闘記録をそちらに送るので他部隊に有効活用するよう……」

『バルバルバルバルバルバル!!?』

「っ、へりの音だと!!?」

だがH.Q.にケルビムの報告を入れ、撤退しようとした矢先にへりが急接近しクリス達の前に着地する。

そしてコックピットの中からCLOWNの仮面を被った体付きががっしりした屈強な男が現れた。

一難去つてまた一難、クリス達は智天使の相手をした直後に七天使も相手せざるを得なくなり、疲労を隠し切れぬままCLOWNの男に銃を構えるのだった。

一方その頃、レオン達からのデータを送信されたアメリカ軍空母船員とハニガンはそれらのデータ解析を進めている途中だった。

「……バカな……有り得ない……」

しかし、其処で艦長……『シルバ・ヴァレット』はCLOWNメンバーの一部の名前に見覚え、と言うより本当に自分が知る名前が3つも並び驚きを隠せずにいた。

そのメンバーとはウリエル、ラファエル、そしてゼラキエルの3人である。

何故彼がその3名の名を見て驚いたか、それは…。

「何故なんだマグナ准将、ヨナ、そしてフォン……!!?」

それは、彼がウリエル、マグナの元部下にしてレティシア家からアメリカに嫁ぎ、其処でアメリカ軍人になり現在マグナの部下を経て大佐にまで上り詰めた、部下だった当時中尉だったヨナとフォンの叔父であったからである。

そうしてクリス達は消耗しながらもCLOWNのメンバーに立ちほだかり、何時でも戦闘になつても構えられる様に陣形を組み立てる。

するとCLOWNの男は仮面を外し、其処には右目に眼帯をし髭も生やした如何にも歴戦の戦士の風格を出した男が居た。

「ふつ、流石はBSAAのクリス・レッドフィールドにA・B・F・オメガ小隊の一人、そしてこの国の諜報員達だ、見事にケルビムをも倒したか」

「アンタは……アメリカ統合軍のマグナ・グラスホッパー大佐^ワ？」

「いや、ラクーンシティ事件後に准将になつた後退役したから最終階級は准将だ、ビリー」

その男に反応したのは元アメリカ海兵隊のビリーとアメリカ空軍からS・T・A・R・S・に引き抜かれたクリスであり、マグナを何方も知っておりその印象は『義に生きる者』であり、とてもバイオテロに加担する人物とは思えなかつた……ラクーン事件の端末を知るクリスや独白に彼を知るある2人やその後の彼を知る者以外は。

「何故なんだ、義に生きた軍人のアンタがこんな馬鹿げたバイオテロに^ワ？」

「……ビリー、グラスホッパー元准将はラクーンシティ事件後に退役されたと言つただ

ろう？

恐らく彼がバイオテロに加担した根底にあるのは…ラクーンシティ事件だ」

「流石はアンブレラを憎み、単独でもその捜査を行なっていた男でもあるな…：…：良いだろう、お前達にも俺の過去を教えてやろう。

何故菌車として生きた俺がその菌車の基盤たる世界自体を壊そうとしているか」

ビリーはマグナがバイオテロに加担する理由が分からなかったが、ラクーンシティ事件やアンブレラの捜査をしていたクリスは予想出来た為その発端となったのがラクーンシティ事件だとし、マグナもその頭の回転力と想像性に感心し独白を始めた。

「…：そう、全ては1998年の9月24日から10月1日だ。

ラクーンシティでTウイルスによるバイオハザードが発生して…：其処で俺の家族は全て死んだ」

「矢張り…：」

「しかし、それだと寧ろバイオテロやアンブレラを憎む側になる筈では？

軍退役後に独自のPMCを作り上げ、アンブレラを攻撃したりバイオハザード事故やバイオテロから民間人や現場にいた兵の救助をし、B・O・W やそれを利用した者を殺していた貴方なら」

マグナはラクーンシティ事件で家族を失ったと話し、クリスは想像通りだと思ひアンブレラの影がまたチラつく事に苛立ちを覚えていた。

しかしその後ゆかりは何故其処からCLOWNになったか結び付かず、軍退役後の経歴であるPMC設立等を冷静に話す。

するとマグナは遠い目で空を見ていた。

「…そう、俺は退役後にはPMC設立をし、国や政治家の思惑に縛られない軍隊を作り上げた。

全てはラクーンシティ事件で、その真実を知っていて祖国や他の国々に失望したからだ。

可笑しいと思わなかったか？

アンブレラが生物兵器やウィルスを開発したとして、その買い取り手が居なければ資金など回って来る筈が無い…：後は俺の言いたい事は分かるな、諸君？」

「…アメリカもどこの国もB・O・W. をこぞって欲しがって売値を付けてやがった、そうなんだからアメリカ統合軍元准将様」

するとマグナは祖国アメリカにすら失望して国やそれぞれの思想、政治に縛られない軍隊を作り上げたと話し、更にはアンブレラが何処にB・O・W. を売り付けたかも話す。今度はジェイクがアメリカも含めたあらゆる国が売値を付けたと想像し口にする

とマグナは葉巻を取り出しそれを吸い始めた。

「…そうだ、ジェイク・ミューラー、アルバート・ウエスカーの子よ。」

俺はアメリカ統合軍大佐だった為アンブレラの起こしたバイオハザード事故やB・O・Wの真相を誰よりも深く知ってしまった。

だから国は俺に准将と言う飾りの階級を付けた後退役させ監視下に置いたんだ。

まあ、あの程度の監視など俺から言わせて貰えばザル過ぎてダンボールに隠れただけでも隠れ切れる、そんな馬鹿馬鹿しい監視だったよ」

「そしてゆかりさんの言う通り国に縛られないPMCを設立してアンブレラと戦ったのですよね貴方なりに。」

でもアンブレラが消えてもアメリカが貴方を裏切った事実が消えず、B・O・Wも闇市場まで流れてしまいバイオテロが喉元まで迫ってしまった…」

マグナの国家に縛られぬ軍隊を作り上げた理由がアメリカの裏切りと知り愕然とする者や嫌な想像通りだと思える者に分かれる中でマグナの独白にあかりのアンブレラ倒産後の世界情勢が話され、更にマグナは話を進めた。

「ああ、そしてアメリカは2度も俺を裏切った。」

テラグリジア・パニック：FBCの長官『モルガン・ランズデイル』とテロ

組織『ヴェルトロ』による自作自演の大規模バイオテロ……これを知った時、俺は真に失望し切ったよ！

最早アメリカも、何処の国も己が思想でバイオテロを利用し人々を殺す！

…そう考えると、戦うのが徐々に虚しくなり始めた。

其処に奴が現れた…2008年の10月にガブリエル…CLOWNのリーダーが俺の下に

マグナはテラグリジアの一件で更に国に失望し、B・O・Wをくだらない理由で利用し権力増加を図る輩が世界中に蔓延っていた事に虚しくなりながら生きてきたと胸中を明かした。

そして2008年10月にCLOWNのリーダーガブリエル…クリス達はまだ情報共有出来ていない為知らないが琴葉紅と出会った事を聞く。

「奴は俺に言ったよ、こんな世界に虚しさを感じるなら人類を進化させ、もう誰も悲しまない世界を作らないかと？」

無論初めは断ったさ、バイオテロが憎い俺がバイオテロを起こすなどあつてはならないと

「なら何故今CLOWNのメンバーになつている!!？」

マグナの独白にクリスは血Fallen Bullet清Bullet弾を装填したアサルトライフルを向け、同時にビ

リー達も同じく銃を構えて戦闘

態勢に入る。

するとマグナは虚しさに満ちた笑みを浮かべクリス達を見やる。

「確かに断っていた……だが、そのバイオテロや発端のアンブレラを野放しにし、奴等の作ったウイルスにB・O・Wに売値を付け、ラクーン事件で蜥蜴の尻尾切りを行ったのは誰か？

テラグリジア・パニックを起こしたり、ハーバードヴィル空港のバイオテロを起こした者は誰か……それらを問答し、心の空虚を突かれた俺の想いは傾いてしまつたよ、奴が言う通り人類の進化でしか世界を変えられず、また無意味に死んで行つた者達の魂に真の鎮魂歌レクイエムを奏でさせるには欲深き人間全てを一掃するしか無いのだと！」

クリスやらゆかり達は彼の慟哭とも言うべきその独白を黙って聞く事しか出来ず、しかしそれでも全てを納得する訳には行かず銃を構えたまま彼を見つめていた。

「其処からはPMCを廃業し、部下達を元の国に帰した後はお前達の知つた通りだ。

そして俺はこのバイオテロこそが最後の事件にして人類進化の幕開けとする、その理念の下にこの場所に立っている!!？」

そしてマグナは更なる独白を行い、ガブリエルとの問答でそちら側に完全に傾き、そして独自の信念の下に立っていると叫び葉巻を捨て去り独自の格闘技術の構えを取り

始めた。

「マグナ大佐…もう何を話しても無駄なのか…!!?」

「此れ以上の問答は無用だコーエン少尉!!?」

もしも語り合いたければ戦士として歯車と成り切り、戦いの中で俺の口から
言の葉を吐き出させろ!!?」

「…望む所だ!」

バイオテロを憎んだアンタがバイオテロに加担した、その矛盾を、俺達が正
してやる…!!?」

ビリーは此れ以上話しても無駄かと敢えて問い、マグナは彼やクリス達の知るマグナ
の思想である戦士と言う歯車として戦場で言の葉を吐き出させると叫び、クリスは此れ
に対して同じ土俵に立ち入り、バイオテロを憎んだ者がバイオテロに加担した矛盾を正
すとして銃を構え、遂にCLOWNのNo. IIIとの戦闘態勢に入るクリス達。

そしてマグナを悲壮的な瞳で見るのはクリス達だけでは無かった。

それは日本国諜報員のゆかりとあかり、2人もまたマグナに独自の思いを抱いていた
のだった…。

EP XXIV 『クリス、ジエイク、ゆかり達の戦い：Ⅴ
Sウリエル戦』

「さあ行くぞ!!?」

マグナのこの一言で戦闘が始まり、先ずクリスに超スピードで接近しアサルトライフを叩き落とし、そのまま格闘戦に無理矢理持ち込む。

「ぐっ、うおおお!!?」

マグナのパンチやキックを受けてしまったクリスだが、元よりウエスカーと戦う為に鍛え上げた肉体のお陰で一方的にやられず、その丸太の様に太いパンチを当てたりしてクリス・レッドフィールドは未だ衰えずを見せた。

「俺も相手だ准将様よお!!?」

更に其処にジエイクが加わりクリスのパンチが止められた瞬間に顎にアッパーを、自分のパンチが止められればクリスがパンチを2発当てると言うウイルス完全適応者相手に奮闘を見せた。

「中々やるが、まだまだだぞ!!?」

「はあ!!?」

『ぐあッ!!?!』

するとマグナは足払いをして2人を一瞬中に浮かせた所にそのまま回転蹴りを繰り返して、2人を吹き飛ばしてしまう。

しかし2人が離れた事を良い事にピリーやカルロスがアサルトライフルを掃射し

Failed Bullet

血 清 弾を当てようとする。

「その手は予測済みだ!!?!」

『ブウンブウンブウン!!?!』

しかしマグナは2人の1手を予測し、超スピードによる高速回避により2人に接近してその手からアサルトライフルを叩き落とし無理矢理CCCに入らせる。

「チクシヨウが!!?!」

「ちいつ!!?!」

カルロスも今までの経歴+A. B. F. 仕込みの格闘技術、ピリーも同様の技を見せ2人とも人体の急所を的確に狙いウィルス完全適応者と言えど必ずダメージが入る攻撃を繰り返してダメージを蓄積させようとする。

「この技、A. B. F. 式の格闘技術か!」

「そうさ、ウィルス完全適応者相手を前提にした格闘技術だぜ!!?!」

「簡単に破れると思うな…!!?!」

2人のウイルス完全適応者用格闘戦技にマグナは下を巻き、これを仕込んだ者はウイルス完全適応者の危険性を正しく理解し、人間の手でも鎮圧出来る様になっていると理解する。

「だがまだだ!!?」

「つてうおあ!!?」

「ぐう!!?」

しかしマグナは2人の隙を付き、ダメージを与えられながらもビリーをジェイクの方に、カルロスをクリスの方に吹き飛ばし2人はそれぞれ吹き飛ばされた方の相手に受け止められ態勢を立て直した。

「そおら、これもプレゼントだ!!?」

「つ、グレネードだ!!?」

「やべっ!!?」

更にマグナは4人それぞれに手榴弾を投げ、それぞれが上手く回避行動を取らないと避けられない様に誘導し、再びクリスに急接近し、クリスは今度はカルロスと共にこれを迎え打つ。

「…ゆかりさん」

「分かっていますよあかりちゃん」

そんな中で無視され続けたゆかりとあかりはそれぞれCCCの邪魔になる長物の銃を投げ捨て、ゆつくりとマグナの方に明確な決意を秘めた目を彼に向けながら近付いて行く。

「はあ!!?」

「グハツ!!?」

「うぐつ!!?」

一方マグナはクリス、カルロスのコンビも自身へダメージを入れられつつも去なし、これらを吹き飛ばした。

するとマグナはゆかり達が近付いて来る事に気付きそちらに目を向けた。

「ユカリ、アカリ、無茶するな!!?」

俺達に任せろ!!?」

「…大丈夫です、無茶かどうかは分かっていますので」

クリスは身体能力差が明確なマグナ相手に2人が無茶な行動に出ようとしたと感じそれを止めようと叫ぶが、ゆかり達は大丈夫と言って遂にマグナの前まで歩いて来る。

「すまんなお嬢さん方、厄介そうな奴ばかりを相手にしていたら君達を無視してしまつた。

戦場に立った以上男も女も関係無かつたのにな。

お詫びに暫くは相手になってやろう」

「……はあ、やっぱり気付いて無いのですか」

「?」

マグナはゆかり達を無視した非礼を詫び、暫く相手になると宣言し再び独自の構えを取るが、そんなマグナ相手にゆかりは溜め息を吐き覚えていないと話しマグナを困惑させる。

「覚えていませんか？」

2005年の12月22日、貴方は中東の地のB・O・W・犇めく戦場で2人の少年兵だった女の子を助けた事を」

「そして親兄弟が居ないからと引き取り、自身の下で生き残れる様にあらゆる技術を身に付けさせ、時には戦場に連れて行き経験を更に積ませた日々を」

「そして2007年12月22日、最後の誕生日プレゼントとしてその子達をバイオテロと無縁だった日本へと移住させた事に……」

「……………まさか!!?」

ゆかり達はマグナに彼が助けた少年兵だった女の子2人の話を始め、彼から色々学んだ後日本へ渡らせてもらったと言う話をした結果、マグナはその話に覚えが有り驚きを隠せずにいた。

そう、少年兵に日本に渡り国籍を得た、これはゆかり達の経歴と全く一緒なのだ。つまり……このゆかりとあかりこそが、マグナから様々な技術を身に付けられた子供達なのだ。

「やっと思いついてくれましたか、『お義父さん』。」

そう、私達ですよ、貴方に命を救われ、今こうして日本の諜報員として働く女の子達は！

ゆかりはマグナをお義父さんと呼ぶと、あかりと共にマグナと全く同じ構えを取り応戦態勢に入った。

この瞬間マグナの中でパズルがびたりとハマった。

この娘達こそ自身が救い、また技術を伝授した弟子で有り養子の娘で有り、一時は気を許し心の中の虚しさを和らげてくれた子供達なのだ。

「……ふ、ははは、はははは!!?」

そうかお前達だったのか！

日本でパイオテロをやる以上巻き込まれてしまうかも知れないと考えたが教えられるだけの物は全て教えたから生き残り、運が良ければそのまま脱出していたかと考えていたが、まさか日本国諜報員となつてたはな!!?」

「はい、貴方から教えて頂いた全ての技術を無駄にしない様にと日本政府から諜報員

とならないかとスカウトがありゆかりさん共々お義父さんへの恩返しとしてこの技術を更に磨く道を選びました。

そして今では大の男を振じ伏せるだけの力と技術を持つに至りました。

なので……それら全てを使いお義父さんの間違いを正します!!?」

マグナはゆかり達が諜報員となつたとは知らずに対峙し、そしてゆかり達もまたマグナがCLOWNとなつた事を知らず運命の悪戯で再会を果たしたのだ。

そしてあかりが養父の間違いを正すと吠えた瞬間、2人の雰囲気ガラリと変わりまるでマグナが3人になつたかのような錯覚をクリス達は覚えてしまう。

「間違いを正すか、面白い!!?」

やれる物ならやってみろ!!?」

マグナは2人の決意を聞き届けた瞬間超スピードは敢えて使わず接近し、今の2人の実力を確かめる様にCQCに入る。

2人もまた同じ格闘技術で戦い、そのキレはマグナにも劣っていないかった。

しかしこれを教えたのはマグナ、よつて2人よりも技術の長があるため隙を見つけ其処へ攻撃を始めた。

「隙ありだ!!?」

「いいえ、フェイントです!」

するとゆかりはマグナに指摘された隙を突かれたと思いきやそれを合気道の動きで受け流し、更に教えていない筈のシステマの動きでマグナにダメージを与える。

「何っ!?？」

「今度はこつちです!!？」

次にあかりがボクシングのステップで近付いたかと思えば直ぐに流れる様に八極拳の技に繋げ、更に日本空手の正拳突きを腹に叩き込んだ後柔道の背負い投げに移行しマグナを投げ、そしてマグナが立ち上がり再び襲い掛かって来れば今度はシラットの流し技でゆかりの方へ流し、そしてゆかりが蹴天三でマグナを吹き飛ばし的確なダメージを与えて行く。

しかもどれもマグナが教えてない物ばかりである。

「こ、これは…世界各国の格闘技の技や動きが俺の格闘戦技に組み込まれ、その上でそれぞれの隙や短所を消し長所を劇的に伸ばしているだと…!?？」

「そう、これが私達の貴方への恩返し。」

貴方から教えて貰ったこの技に世界各国の格闘技の技や動きを全て刻み込みました!

「そして何れもが器用貧乏にならない様に、そして短所を全て消す様に貴方の教え通り磨き続けた結果全く隙の無い私達独自の戦技に生まれ変わりました!!？」

さあお義父さん、私達はクリスさん達と一緒に貴方の矛盾を、間違いを、慟哭を全て正し受け止めますよ!!？」

マグナは自身が教えなかつた技を取り込み、更に自身の教えである『短所を消し、長所を伸ばし、先鋭化せよ』を守っていたゆかり達に驚くばかりであった。

そのゆかり達は彼の養女として全てを受け止め正すと吠え、しかしその眼から涙を流しながらマグナを見ていた。

「こりゃ、俺達も彼女達に遅れる訳には行かないな、クリスの旦那」

「ああ、そうだな……マグナ・グラスホッパー、俺達は必ずこの場でアンタに勝ち、アンタの間違いを全て白日の下に晒してやる!!？」

そしてその一連の流れを見ていたクリス達はゆかり達から鼓舞を受け立ち上がり、マグナに真正面から倒すニュアンスの発言をし再び身構えていた。

「…ふ、ははは、はははは!!？」

ならば良いだろう、貴様達全員戦士と言う歯車となりこの俺を殺してみるが良
い!!？」

無論俺もウリエルと言う歯車に成り切り貴様達全員を殺す、例えそれが養女
だったユカリ達だったとしても!!？」

一度戦場に出れば男も女も関係無い、全員死に物狂いでかかって来い!!？」

そうしてマグナも自身の信念通りに行動すると宣言してゆかり達も含めた全員の始末すらやると言う。

これに対しクリスはアイコンタクトで合図し、全員で一斉にマグナに挑み始めた。

「マグナ、アンタは間違っている!!？」

世界を変えたいなら、バイオテロを起こすのでは無くバイオテロと戦い続けるべきだったんだ!!？」

「それが意味がないから虚しさを感じたのだ!!？」

クリス・レッドフィールド、貴様にもいつか分かる時が来るはずだ、この世界を変えるにはこれしかない!!？」

先ずクリスがマグナに突撃し、ウイルス完全適応者の力に負けぬ様にパンチに合わせカウンターフック等を掛けマグナに戦い続けるべきだったと語るが、意味が無いと返された上に耐久力に物を言わせてそれらを無視し蹴りで吹き飛ばしてしまう。

「違う、それは逃げだ大佐!!？」

「逃げだとコーエン少尉!!？」

「そうだ、アンタは虚しくなつてこうなつたと言つたが結局は戦いから逃げてしまつたんだ!!？」

「だからアンタは矛盾して」

「俺は、逃げてなどいいない!!?」

次にビリーがA・B・F・仕込みの格闘戦技を叩き込みつつ、マグナがバイオテロとの戦いに逃げてしまったのだと言い放ち一瞬動揺させるが、此方もアツパーを喰らった後腹にパンチを貰い吹き飛ばされてしまう。

「いいやビリーやクリスの旦那達の言う通りさ!!?」

アンタは結局戦う事を放棄しちまったんだ!!?

そして思考停止してバイオテロを起こしちまった、此れがアンタの抱えた矛

盾なんだよ!!?」

「貴様も言うか、カルロス・オリヴェイラ!!?」

更にカルロスもクリス達と同様の事を語りつつ体格上ビリーよりもパワー寄りに急所を狙って行くが、やはり此方も耐久力の所為で耐え切られてしまい回し蹴りで錐揉み回転しながら吹き飛ばされてしまう。

「それにだ!!?」

アンタはバイオテロで喪う事の痛みを知る筈なのにバイオテロで多くの人を悲しませた!!?」

その時点でもうアンタの主張には正当性は消えてんだよ、それを分かれよ!!

？」

「貴様に分かる物か若造ッ!!?」

最早欲深き人間が蠢くこの世界で戦い抜いたとしてもその守った人間がバイオテロを起こす…ならば此れを最後のバイオテロにするしか方法が無いのだ!!?」

次にジェイクが自身独自の徒手空拳を交えながらハンドガンに込めた血Fallen Bullet清弾を当てようと粘るが、マグナにジェイクの言葉は届かずにクリスの方に投げ飛ばされ、その最中に撃つた弾丸も避けられてしまう。

「いえ、皆さんの言ってる事は正しいです。

そしてお義父さん、貴方は私達の居る国で、私達の友人を巻き込みバイオテロを起こしました!」

「私達はもう怒り心頭な上に悲しいんですよ!!?」

お義父さんが敵になって、しかもバイオテロなんて最低な行動を選択した事に!!?」

お義父さん、どうか此処で止まって下さい!!?」

でないと本当に取り返しが付かないですよ!!?」

「ユカリ、アカリ、例えお前達の言葉でも俺はもう靡かん!!?」

このバイオテロを完遂し、世界から欲深い人間を全て一掃してやる!!?」

「……その欲深い人間がウィルスに完全適応するかもしれない可能性を考えろ頑固親

父!!?」

最後にゆかりとあかりが先程見せたコンビネーションと同じく片方が攻撃し、片方が去なす事をしつつマグナへの説得を続ける。

しかしマグナは靡かず2人のコンビネーションに遂に対応し足払いをして脇腹蹴りで吹き飛ばそうとした。

しかしその瞬間、ゆかりが何時もの口調を捨てた瞬間――

『ズダダンッ!!?』

その足払いを避け、脇腹蹴りも去なした瞬間両手でハンドガン^{Fallen Bullet}を素早く抜き、バレエの動きで超近距離まで接近し血^{Fallen Bullet}清^{Bullet}弾を両足に足に撃ち込む事に成功する。

「ぐつ、今のは……合気道とガン||カタを合わせた物か!!?」

「そうだよ頑固親父、そして血^{Fallen Bullet}清^{Bullet}弾で両足を撃ち抜いた……もう超スピードと反射避けはあんまさせず地に墮としてやるから覚悟しやがれ!」

「やるな……だが俺はウリエル!!?」

ラグエルまでは肉体を変異させなければその力を最大限発揮出来なかつた連中とは違う1ステージ上の者!!?」

血清弾2発ごときで能力を減衰させられる程甘くは無いわ!!?」

マグナはゆかりの動きと流し技が合気道とガン||カタを合わせた物と分析し、ゆかり

はそのまま二丁拳銃を構えてマグナを倒す宣言をした。

だがマグナが自身はラグエル：白龍やレミエル、ライナス達と違い肉体の一部の変異無しで100%の力を発揮すると言いつち再びゆかり、あかりに突撃する。

…そしてゆかりやクリス達はまだ知らないが確かに彼は肉体を一部変異させなくとも100%の力を発揮出来るがその実態は茜やセイカと同じ完全身体能力特化型、故にNo.111に座してしまっているのだ。

「こうして、拳を交えたりしてると思い出しますよね頑固親父!!？」

私達に生き残る術を全て与えてくれたあの頃を!!？」

「あの頃からずつと心を満たされて、それまでただ朽ちて死ぬだけの歯車だった私達は生きた歯車になって本当にキラキラ輝いた人生を送れた!!？」

だからお義父さんもあの頃は心の空虚なんて忘れる事が出来たんじゃない

の!!？」

「……だが結局俺はこの道を選んだ!!？」

心の穴は塞がれていかなかったんだ!!？」

そして事を起こした以上、あの頃には2度と戻る事は出来ないんだよ、ユカリ、

アカリ!!？」

ゆかりとあかりは再びコンビネーションを発揮して何とかマグナに喰らい付きつつ

此れも全て、ウエスカーとの戦いの経験が活きた結果であった。

「今だ、撃てえ!!?」

「…サンキューなクリスの旦那!!?」

「大佐、此処で終わりだ…!!?」

「動くなよウリエルさんよお!!?」

『ズダンッズダンッズダンッズダンッズダンッズ!!X3』

そしてクリスがマグナを取り押さえた瞬間を狙いビリー、カルロス、ジェイクがハンドガンに込めた血Fallen Bullet 清 弾をありつたけ撃ち込み、それが着弾寸前にクリスはマグナを前に押し出し自身は後方に飛んで銃弾を回避し、後ろから同じく血Fallen Bullet 清 弾を弾かれたアサルトライフル分以外を撃てるだけ撃ち込む。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

マグナは大量の血Fallen Bullet 清 弾を受け防御態勢を取るが、体内のT—Gene-sisが死滅して行き力尽きる寸前にまで追い込まれてしまう。

そして銃弾の雨が止んだ瞬間ゆかりとあかりは同じく血清弾入りハンドガンを構え照準をマグナに合わせた。

「これで終わりよ頑固親父!」

「…お義父さん…!!?」

『ズダンツ!!×2』

「ぐう、おおお……!!?」

最後にゆかりとあかりが放った2発の弾丸で遂にマグナは地に倒れ伏し、この戦いに終止符が打たれた。

クリスやゆかり達が正しく、そしてマグナが間違っていたと言う結果を勝敗で表して。

「は、はは、負けたか……当然か、こんな腐り切った老兵が若く強い兵士に負けるのは世の常……矢張り俺は、結果を急ぎ過ぎた訳だ……」

「そうだ、マグナ・グラスホッパー。」

アンタはやり方を間違えたんだ。

だからこそ俺達に、何よりアンタの養女だったユカリ達に負けたんだ……!」
マグナは倒れ、血を大量に流し自身が敗北した事で漸く間違っていたと認めるに至った。

そしてクリスもまた彼が間違っていたからこそゆかりやあかり、そして自身らバイオテロと戦い続ける者に負けたと告げる。

此れにはマグナも笑うしか無く月明かりと星が彩る夜空を見ながら口を開いた。

「そう、だな。」

お前達の言う通り、俺は戦いから逃げてしまった……そのツケが今回つて来たんだろなあ……」

「その通りですよ頑固親父。」

……そして老兵は去るのみ、貴方の口癖の一つでしたね。

今から私とあかりちゃんで貴方を完全に終わらせませす、遺言は何かありますか？」

マグナは心の空虚を言い訳に戦いから逃げたツケが回つて来たと理解し、後は老兵は去るのみとなりその役割をゆかりとあかりが行う事になった。

しかし血は繋がらなくとも親殺しをさせる程クリス達は冷酷では無い為自分達が代わりによろうとアサルトライフルを取りに行こうとした。

『ズダンツ、カラカラ!!?』

「っ、ユカリ、アカリ!!?」

「クリスさん達は下がって下さい、此れは私とあかりちゃん、2人のグラスホッパーの意志を継ぐ者がやるべき最期の仕事なんです。」

さあ、早く遺言を話して下さい。

でないとこのまま撃ちますよ?」

しかし、ゆかりがクリスのアサルトライフルを撃ち、遠くに追いやる事で他の4人に

自分達がこれをやる、やり切ると言う鉄の意志を見せクリス達はやるせない思いを抱きながら動けなくなってしまうた。

そしてゆかりはマグナに遺言を急かし、早く言わねば此処で終わらすと宣言し引き鉄に指を掛けた。

「……ふう、老兵は去るのみだから遺言など要らんのだがなあ……じゃあ2つ、クリスとユカリ達にそれぞれある」

「俺に?」

するとマグナはゆかりの姿勢に根折れし、ゆかり達と、更に何故かクリスに遺言を託すとしてクリスもゆかり達の隣に呼び寄せる。

此れには他のメンバーも面食らい、何が話されるのか気になっていた。

「クリス・レッドフィールド……バイオテロを許さず、戦い続けるその姿勢は正に今の世界に必要な物だ。」

しかし、必要なのはお前個人の折れない意志であり、組織ではない。

B S A Aは巨大になり過ぎた、そして巨大な組織には何処かから綻びが生まれ腐り始めるんだ。

長年軍に与し、そしてラクーンシティ事件の裏側を経験した俺だから言えるんだ。

クリス、もしもの時は組織では無く己が意志、信念を信じて道を進め！

それがお前に残す、老兵からの、忠告だ……」

「……了解した」

クリスはマグナから経験則でBSAAが巨大になり過ぎた故に何処から必ず腐り始めると聞かされ、更に最後に信じるのは自身の信念、意志でありそれを胸に進めと託された。

それを聞いたクリスはただ了解と口にし、マグナの忠告を胸にしまった。

そしてマグナはゆかり達に視線を向け、口を開いた。

「……ユカリ、アカリ、お前達は俺が思った以上に大きく、美しく、そして強くなったなあ……もう俺から教える事は何も無い、自由に、好きに生きろ。

だが……その前にお前達の友人のアオイ・コトノハ、そしてその姉のアカネ・コトノハがこの事件の根幹に、関わってしまっている。

だからどうか、2人で彼女達を支えてやってくれ。

アオイ・コトノハもアカネ・コトノハも、今を生きる普通の女の子なんだか

らな……」

「当然です。

私は葵ちゃんを、そして茜さんを支えてやりますよ」

「だからもう化けて出て来ようなんて考えなくて良いよ、お義父さん」
「…愚問、だったか…」

マグナはゆかり達が自身の想像を超えて強く育った事に感無量な面持ちになり何も教えなくても良い、つまりは『マグナ・グラスホッパーと言う養父を超えた』事を口にし笑みを浮かべた。

しかし直ぐに葵や茜がこの事件の根幹に関わっていると真剣な表情で言い、2人で彼女達を支える様にと最期の遺言を託した。

しかしゆかり達は元より葵、葵の姉の茜の味方の為その遺言が無くとも支える気があった。

そして遺言を聞き届けたゆかり達はいよいよ止めの1発をそれぞれ撃とうとしていた。

「……さあ、やるんだ。」

もう言い残す事は無い……」

「分かりました…では、先にあの世で待っていて下さいお義父さん、遅くなりますがいつか必ずそちらに向かいます」

「それまでは……ささようなら、お義父さん……」

「……ああ、さらばだ」

『ズダンツ!!?x2』

そしてゆかり、あかり、マグナの養親子達は別れの言葉を告げた後、ゆかり達の銃から血Failed Bullet清弾が放たれマグナの命の灯火を完全に吹き消したのであった。

『……………』

クリス達は養父を撃った2人に何と声を掛けたら良いか分からずその場に佇んでしまふ。

幾ら血が繋がらないとは言え戦闘中であつても親子の絆は確かにあつた、そう感じてしまふと余計に何かを口にする事が憚れてしまふのだ。

『パチンツ、ポツ!』

するとゆかりがマグナの遺体のポケットからジツポライターと葉巻を取り出し、それに火をつけて彼の遺体を近場の柱に凭れ掛からせると葉巻を啜えさせ、そのまま2人も佇み、暫くしてゆかりから口を開いた。

「クリスさん、皆さんは少し席を外して下さい。」

「少しやる事があります」

「終わったら呼びますのでどうかお願いします」

「……………分かった。」

行くぞビリー、カルロス、ジェイク!

……『3人』切りにさせてやろう」

『……………』

ゆかりとあかりはクリス達に席を外させ、『3人』切りとなり先程の銃声や戦鬪が嘘の様に静かで、しかし硝煙と鉄分の臭いが辺りに未だ充満した空間にゆかりとあかりは佇み……そしてクリス達が居なくなつて暫くして膝が折れ、その瞳から大粒の涙を2人は流していた。

「……バカ……何で、何で死ぬ道を選んじやつたんですか……バカお義父さん……!!?」
 「う、うう……お義父さん……お義父さん……!!?」

『ああ……ああ　ああああああ……!!?』

ゆかり達は死ぬ道を選んだマグナに涙と嗚咽を漏らし、そして最後には声にならない泣き声を木霊させながら養父の死を悲しんだ。

その悲しみはあまりにも深く……そして今後、どんな事があつても癒されぬであろう『傷痕』として残り続けるだろう。

この2人の命が尽き果てるその時まで……………。

EP XXV 『幕間：此れまでの情報共有』

クリス達が生を外してから30分後、アルファチームとA・B・F。隊員全員が集まり後はゆかりとあかりの2人が『用事』を済ませるだけとなった。

「…皆様遅れてすみません、結月ゆかり、継屋あかり只今戻りました」

「…『用事』はもう済んだのか？」

「はい、もうバツチリ。」

後はこの場所を調べて撤退しましょう！

其処にゆかり達が戻り、『用事』が済んだと話し残る作業を終わらせて撤退すると口にしていた。

しかし…クリス達マグナと戦った者達は気付いていた、ゆかり達の目の周りには涙の跡が残っている、つまりそれ程泣き疲れてしまったのだと。

「そうだな…：…ならこの潜伏地候補を確かめるぞ!!？」

それから先程も言った通り俺達はコードネームウリエルの処断もした、これより彼の遺体を回収し、そして全てが終われば直ぐに撤退するぞ!!？」

…：…ゆかり、あかり、少し休んでいろ、疲れただろう？」

「分かりますよね……では、少し休ませて頂きます」

「ごめんなさい、予想以上に疲れちゃいました……」

クリスは全員に潜伏地候補の洗い出しとウリエル、マグナの遺体回収を命じた直後ゆかり達に休む様に告げると2人は建物の壁際に凭れ掛かり休んでいた。

クリス達はこの時点で気付いていた、彼女達は気丈に振る舞っているが精神的にも肉体的にもかなり参ってしまっている。

「(無理も無いよな……血が繋がってないとは言え親父さんを撃ちちまったんだからな……)」

「(……彼女達を休ませる為にも手早く作業を終わらせなければならぬ)」

カルロス、クリスがそれぞれの考えを心の中で浮かべ、ジエイクやビリーも似た意見を思い浮かべて作業を直ぐに終わらせ駐屯地へ撤退するべく自身達も作業に参加するのだった。

その間ゆかり達は泣き疲れた自身の身体を癒す様に月明かりと星が煌めく夜空を見上げるのだった。

そして結論から言えば、この潜伏先もまたダミーであったが何もなかったか。

恐らくトラップはケルビムその物だったのだろうと考え、ゆかり達を支援マグナの遺体を丁寧に運びながら輸送機に乗り込み消費した血清弾含む武器弾薬の補給に向かうのであった。

時刻はAM：0：07、バイオテロ発生から約3日が経過し、タイムリミットも3日となった瞬間であった。

そして駐屯地に辿り着いたクリス達はレオンとシェリーを見つけ駆け寄った。

如何やらレオン達側も葵の負担やラグエル、白龍や施設内で使った武器弾薬補給の為に戻って来ていたらしい。

「レオン、シェリー、戻って来ていたのか！」

「クリスも戻って来たのか。」

ああ、武器弾薬の補給と、アオイが想像以上に厄介な物を見つけたから精神的

疲労を考慮してな…」

「こつちも似た様なもんだ。」

潜伏地候補は全部空振りだったが、エクシアの進化したケルビムとか言う最終形態のB・O・W。やコードネームウリエルの戦闘で武器弾薬が心許無くなったまっただけじゃなくゆかり達とウリエルが、な。

兎に色々あつて一時撤退だ」

「そう、ユカリ達も…」

レオンとクリス達はそれぞれの起きた事を簡潔に共有すると何方も一部に負担が掛かり過ぎた上にCLOWNメンバーやB・O・Wとの連戦で弾薬が尽き掛けたのを把握し、どちらも本当に似た様な事があり撤退したと感じ、本格的情報共有はこれからする為詳細は何方も伏せていた。

「お話中失礼するわねレオン、それとクリス・レッドフィールドさん？」

「お前はエイダ!!？」

それにセイカ・キョウマチ、何故此処に居る!!？」

「待つんだクリス、彼女達は如何やらクライアントの依頼でT|Genesisの見極めをしに来て、次いでに事件中は此方に協力すると約束してくれている。

それで2人共、そつちのお偉いさん達のご機嫌は如何だった？」

すると其処にエイダとセイカがやって来て思わずクリスは銃を向けジェイクは警戒するが、レオンとシエリーがそれぞれを押さえ2人が今事件中は協力者として動いていると話してその場を収める。

その次いでエイダ達のクライアントのご機嫌をレオンが聞くと、エイダは懐から何かをレオンに投げ渡した。

それはT—G e n e s i s サンプルと茜、葵の血液サンプルだった。

「喜ぶべきね、私達のクライアントに今し方追加で入った新型B・O・W。も含めて話をしたらT—G e n e s i s の商品化は割りに合わない、リスク管理が大変だから抹消する様に、との事よ」

「だからそのサンプルはそれぞれお返しさせて貰うわ。

……まあ、新型のケルビムだっけ？

アレの情報が無くても上層部は抹消に舵切りしたと思うけどね。

こんな代物なんかあっても損しかないし」

如何やらエイダとセイカのクライアント、H・C・F。もT—G e n e s i s は商品化不可能と判断を下し、抹消命令を2人に出した事をレオン達は知る事となった。

しかしクリスはエイダと協力する事に複雑な心境を持つ為手放しに喜べずにいた。

それを察してるレオンは自身達が掴んだ物をクリスに伝え始めた。

「クリス、エイダと協力するのが不服だと思ふなら少し聞いて欲しい。

1年前の蘭祥ランシャンでの事件、アレでお前が追っていたエイダは彼女じゃない、全くの別人だった事が分かった」

「何、レオンそれは如何言う事だ!?!?」

「それをこれから彼女達を交えて説明する。

互いの情報共有も兼ねて、な」

レオンは1年前のバイオテロでネオアンブレラとして活動したエイダとこの場に居るエイダは別人だったと告げ、クリスは当然此れに驚き詰め寄る。

そしてレオンはエイダ達を交えた情報共有をすると話したこの場を収め、そして情報共有に入らせて行くのだった。

時刻はA.M.:i:00、乙女の肌荒れが気になる時刻にクリス、レオン、ジエイク、シエリ、エイダ、B.Y.:『アルファ』、更に葵、マキ、茜、ゆかり、あかり、そしてエイ

ダとセイカが1つのテント内に集まりプロジエクターにそれぞれが集めた情報をタブレットと繋いで映して行く。

「では情報共有に入る。」

先ず東地区だが、此方の潜伏地候補は全てハズレだった。

どれもこれも部下を巻き込み兼ねない罟が仕掛けられており、これを何とか解除し犠牲者0で俺達はビリー、カルロス、ジェイク、そしてゆかりとあかりの少数精鋭で最後の場所に向かい、其処でエクスシアの進化形態にしてネフィリムから続くB・O・Wの最終進化形態、ケルビムと戦闘になった」

「……まさかエクスシアでさえも厄介なのにその上が存在するとはな」

先ずクリス達の方から説明が入り、其処で重要な部分としてエクスシアの進化形態ケルビムが出現し戦闘になったと話した。

これにはレオンやB・Y達もエクスシアの時点でスーパータイラントクラスの戦闘力があり、Fallen Buiet血清弾抜きでは倒すのに重火力兵器による絨毯爆撃が必要だったのに更にながあつた事に頭を抱えていた。

「しかも野郎は言葉を話して如何もプラーガの支配種遺伝子を覚醒させたが自分は人類に成り切れなかった奴ってほざいた上に、その戦闘力もバカかと思う位高くてスピードはウィルス完全適応者クラス、更に耐久力も血清弾数十発を叩き込んでやっと殺

せたマジな化物だったぜ」

「人語を解して話すだけじゃなくてそんな戦闘力が…?」

「…厄介極まる話だな、そのケルビムは」

ジェイクが更にケルビムの詳細を話すと遭遇しなかったレオン達側はその戦闘力や知能に脅威的な物を感じ、Ede^エn^デII^スII^スで遭遇しなかったのは幸運だったとさえ感じている。

但し、自分達が見た資料等を除けば。

「そしてケルビムとの戦闘直後、俺達はCLOWNのメンバーの1人、コードネームウリエル、アメリカ統合軍元准将にしてとあるPMCの設立者、そしてユカリ、アカリの養父だったマグナ・グラスホッパーが襲撃して来た」

「えっ、マグナって人ゆかりさん達のおとんやったんか!?」

更にCLOWNのマグナが襲って来た事に驚くレオン達だったが、更にマグナがゆかり達の養父と知り茜、更に葵とマキ達は驚きゆかり達を見る。

そのゆかり達の反応は只々苦笑しかなかった。

「話を戻そう。」

彼はラクーンシティ事件とテラグリジア・パニックが原因となりCLOWN入りをし、その後はこのバイオテロを最後にし此れまでにバイオテロで死んだ者に鎮魂^{レクイエム}歌

を捧げると言う揺るがない理念で戦って来た。

結果から言えば俺達はユカリ達と協力し合いこの人物の処断に成功した……だが、結果的にユカリ達には養父とは言え親殺しをさせてしまった……

「良いんですよユクリスさん、アレは必ず私達がやるべき事でしたから」

「ゆかりさん……」

更にクリス達側にマグナがやって来た事、更にマグナがゆかり達の養父だったと知った葵やマキは悲痛な目でゆかり達を見るが、ゆかり達は泣き跡がまだ残る顔で苦笑し気にしない様にと話すも、それは何処か痩せ我慢をした物だと葵やマキ、更にほんの少し接しただけの茜にすら分かりやるせない空気に包まれていた。

「……東側の状況は理解した。」

次は俺達西側の方を情報共有する。

俺達は初めに潜伏地候補の自然公園を探索し、其処でE^エd^デe^ンn^スI^スI^リIと言う奴等の予備活動拠点を発見した。

更に潜入する際にエイダとセイカが合流、クライアントがT—G^en^esⁱsの抹消が永久封印が見極める為に同行を願い、更に見返りにこの事件中の協力を約束してくれた」

「因みに最後は葵ちゃんの鶴の一声で決まったんだよね。」

いやあ、お姉さん達は嬉しかったなあ。

効率的だからって打算もあるけど私達を信じてくれて」

次にレオン達側の情報共有が始まり、最初の潜伏地候補の調査でいきなり予備活動拠点を見つけた事やエイダ達が其処で合流し、協力関係となった事をクリス達は理解する。

「いきなり予備活動拠点を見つけるとか持つてんな、流石はラクーンの生き残りさ
んつてとこか？」

「確かに俺達は何か持つてたなあの時。

だが潜入する際に不可思議な部分があった。

それは、琴葉茜、琴葉葵両名の指紋が既に登録されていた事だ。

此れには俺達も驚き茜に説明を求めたが、見た方が早いとされ、メンバーはレオン、俺、エイダ、『アルファ』、デルタ4、マキ、セイカ、そして茜と葵の組み合わせで中に入ったんだ」

「えっ、敵の予備活動拠点で葵さん達の指紋が登録されていた？

一体何故なんですか？」

ジェイクが茶化す中でB・Y・も何か運を持つていたとし、更に潜入メンバーの組み合わせを話す…が、その中でやはり欠かせない敵の予備活動拠点で茜と葵の指紋登録さ

れていた事を切り出し、あかりは何故登録されていたかを確認して来る。

「それは如何やら彼女達はE d e n I Iで出生した事が原因らしい。」

E d e nと言う名の施設はクレナイ・コトノハが主導で建設したアンブレラの極秘施設の1つであり、これらの何れかで研究や登録されたデータは全てクレナイ・コトノハの意思1つで情報共有化され、万一他のE d e nが爆破されても他施設で研究続行が可能だったらしい。

そしてT—G e n e s i sは無論E d e n I Iで開発され、共有化で研究データ等は失われず今日に至った様だ」

あかりの疑問に『アルファ』が少し答え、更にE d e nと言う施設の特性も話し、情報共有化で研究データ等が失われない強みがあった事を教え、この中に指紋登録が入っていた事も示唆させる。

そして葵達が其処で生まれた事も開示する。

「話を戻して、俺達は施設に潜入した時コードネームラグエル、蘭白龍にこれを既に感知されていて数多くのトラップを突破しながら前へ進んで行った。

そしていよいよ奴が待つ第1試験場と資料室を繋ぐ連絡通路に着いた俺達は研究資料やその他の資料を漁る為に資料室へ入った。

其処で俺達……いや、アオイは真実を知る事になったんだ……」

「真実……」

レオンはその後の端末を話し始め、ラグエルが蘭白龍と言うクリスも知るBSAAスポンサーの1人と聞き驚くも、更にその先の葵が知った真実と聞きゆかり達は何か嫌な予感を感じ葵を見つめていた。

「アオイ、もしもお前の口から」

「大丈夫ですよレオンさん、私は向き合うって決めましたから……皆さんに言っけ置きたい事があります。

私琴葉葵と双子の姉、琴葉茜はE^エd^デe^ンn^ンI^ッI^ーで……人工子宮で受精直後にT—Gene^スisを授与され、成長促進で2006年時点で8歳児相当まで成長させられ、そしてB・O・W^ののや私達自身の性能実験をさせられていました。

つまり……私達は、生まれながらにしてB・O・W^と同様の存在みたいだったんです。

ただ私は、思った様な結果が出なかったから失敗作、プロジェクト・アークエンジェル七大天使計画の脱落者ルシフェルの烙印を押されちゃいましたけど」

レオンが気が重いなら自分から言おうとしたが、葵は自分から言う道を選びそして東側に向かっていたクリスやゆかり達に遂に告白した……自らと茜の出生の秘密、何故茜がウィルス完全適応し、双子の妹にその力が無いのかを示す最大の事実を。

『……………』

これを聞きクリス、ジエイク、そして特にゆかりとあかりは絶句し、こんな真実があつて良いのかと言う怒りか、困惑か、いずれにせよ現実離れた感情を抱いていた。

だがプロジェクトに映された資料には同様の事が書かれており、これが否が応でも真実であると示していた。

「でも、葵は葵だから。」

ゆかりんやあかりちゃんが良く知る葵以外の何者でも無い、だから……2人も葵に何時も通りに接してやって」

「ウチからも頼むわ。」

あんさん達を知る葵は間違い無く普通の人間の葵やから。

どんな生まれ方をしても人間やって吠えたんやで葵は、だから…頼みますわ」

だが其処にマキと茜がフォローを入れ、琴葉葵は皆が知る葵以外の何者でも無いと告げゆかりやあかりも自分達を知る葵以外は知らない為、お互いの中で葵への態度はこのフォローの時点で決まっていた。

「…そうですね、葵さんは葵さん。」

その事には変わり無いですね」

「だったら私も何時も通りワイワイやるべきだと思えますね〜」
 「ゆかりさん、あかりちゃん……ありがとう……!」

ゆかりとあかりの言葉に心の重りが幾分か取れたのか、葵は涙を滲ませながら2人に頭を下げて礼を述べていた。

マキと茜もホツとしたのか笑みを浮かべ胸を撫で下ろしていた。

「オホン!

で、俺達は蘭白龍をその後には撃破したんだが……その前後にCLOWNのリーダーガブリエルの正体が判明した。

それは琴葉紅だ。

如何やら茜の銃撃直後に執念でT—G e n e s i sを自らに打ち込み蘇生、完全適応してT—G e n e s i sを回収しつつ逃げ出したみたいだ」

「琴葉紅……成る程、茜さんがそれらを話しながらなかったのは七^{プロジェクト・アーケエンジン}大天使計画に繋がってるから葵さんに言うに言えなかつた感じですかね?」

「理解が早くて助かるわゆかりはん」

次にB・Y・が白龍と戦い撃破した前後に琴葉紅とガブリエルが判明し、それを聞き皆腑に落ちた部分が出来ていた様で、更に茜が頑なに話さなかつた理由も葵を傷付ける七^{プロジェクト・アーケエンジン}大天使計画が関わって来る為初めの頃に話す訳には行かなかつた事を理解し、情報

共有会議が次に進む。

「そして、奴が書いた日記や研究データをE d e n^{エデン}の情報共有化を利用して茜が盗み見し、俺が全てコピーして来た。

その中で残りのC L O W Nメンバーが分かった。

先ず紅は確定として次にゼラキエル、ラファエルがフォン・レティシアとヨナ・レティシア兄妹だった」

「レティシア家だと?!!」

それを本部には連絡したのか?!!」

「ああ、蘭白龍を含めて中国とロシアの当事者一家に尋問中だ。

だがレティシア家の方がのらりくらりしててな：マグナやライナスを引き合いに出してそいつらが2人を利用したのだ、あの2人はそんな事はしないとほざいてやる。

お陰で尋問は難航中だよ」

更にB・Y・は自身等が得た情報からレティシア家兄妹も関わっている事を知りクリスは驚き

対応は如何しているかを問う。

するとB・Y・はレティシア家がのらりくらりとしたり他が悪いと思考停止して難

航中とはなし、マグナが悪いと言われた瞬間ゆかりとあかりは殺気全開になり隣に居たジエイクに「堪えろ」と言われ渋々引き下がっていた。

「それにしてもメキシコ麻薬カルテルにアメリカ統合軍元准将、中国政界の要職入り確定人材にレティシア家兄妹……どんだけ豪華グループなんだよCLOWNは」

「オマケにリーダーは本来死人ですよ死人。」

蘭白龍やレティシア兄妹が情報操作しつつお義父さんが闇市場を押さえて必要なものを取り、レティシア兄妹とライナス・メルデイセクが資金調達しつつ地下に潜ってたからこそ研究が進み、また高性能監視衛星を管理してたりするレティシアや白龍だからこそ情報戦が強かったと……色々繋がりましたね」

そうしてジエイクが死人がリーダーで世界中で有名株が勢揃いな組織に皮肉り、ゆかりも事実としてこのメンバーだからこそ分かった事、資金繰りもB・O・W・調達も全て上手く行っていたと冷静に分析し、全員その手腕には脱帽をしていた。

「で、オマケに分かった事で1年前のネオアンブレラが起こし、シモンズが主犯になったあの事件。」

あの事件でクリスが追っていたエイダは偽者で、本名はカーラ・ラダメスと言う女だったらしい」

「カーラ……それが俺の部下達や大勢を死に追いやった……」

「んでそうなるにあの事件背景は複雑化して、シモンズはエイダに執着していた。

更に偽エイダが居た。

此処からは推察だが、カーラはシモンズにエイダに仕立て上げられた事を恨み復讐を決意、其処からネオアンブレラ立ち上げやCーウィルスを使ったバイオテロを画策し、結果黒幕はシモンズとカーラの両名になる……違うか、エイダさん？」

そしてレオンが1年前の事件の話を始め、クリスが追っていたエイダはカーラ・ラダメスと言う別人だった事を伝え、クリスはある最後の時までエイダに抱いていた憎しみはカーラと言う人物に向いていたと再認識する。

そしてB・Y・が推察で黒幕はシモンズとカーラのそれぞれになると口にし、エイダに確認を取るとそのエイダものらりくらりし、レオンが「泣けるぜ」と漏らし会議が次に進む。

「さて、E^エd^デe^ンn^スi^スi^リは爆破し残りの奴らは3人になったがマグナの情報からウリエル以降は肉体を変異させずに100%の力を発揮する更なる化物と判明。

更にガブリエル、紅は何故か現在の血^F清^aは効かないと宣言し、更にエクシアの最終進化形態ケルビムの存在も確認された。

更に現在時刻はAM1:30を回った。

しかし残りタイムリミットは3日になりはしたがそれでもワク^Aチンヤ^pcalypse

抗ウィルス薬が効かない訳じゃ無いのでそれぞれ今は休み、明日に最終決戦を仕掛けよう。と俺は提案したい。

「クリスマスや他の皆は反対意見は無いか？」

そして最後にB・Y・が時間も遅く、こちらの手が効いてない、後手に回っていない事を考慮して最終決戦を明日にすると話し、反対意見が無いかを募るが全員特に無く手を挙げる様子は無かった。

「…OK、じゃあAM8:30まで全員英気を養う様に!!？」

明日は最後の戦いになるだろう、それまでに身体と心を休め、そしてこのバイオテロを俺達の手で終わらせるぞ!!？」

以上、解散!!？」

そしてクリスの最後の激励を込めた挨拶をし、全員立ち上がり（一応エイダとセイカ、ジェイクも合わせて）敬礼を行いプロジェクターの電源を切り解散となった。

「さーて、寝る前に女子会開くとするか。」

起きてたらずん子さん達もで、マキさんやゆかりさん達は強制参加な〜」

「あ、じゃあお姉さん梓で私やエイダさんも参加するね〜♪」

「うわ出た悪いお姉さん2人組、シエリーさん護衛お願いします」

「えっ、私も!?？」

すると茜が休憩すると言うのに女子会を開くといい、此れに反対する会議参加女子は居らず（強制参加の3人すらも反対せず）、するとエイダとセイカまで参加する為シエリーを護衛役に巻き込みながら葵達はテントを出ていった。

「やれやれ、女子会開く彼女達は元気だな」

「全くだな、明日は早いと言うのにー」

「レオン、クリス!?!」

『クレア!?!』

そうしてレオンとクリスも元気な葵達にやれやれと言いつつ微笑ましく（但しエイダ達が居る為余り気が気じゃないが）見守りながらテントを出ると、其処に2人に声を掛けて来る女性が居た。

その女性はレオンと同じくラクーンシティ事件の生存者にして、バイオテロ被害者の救済やバイオテロを起こした者達を糾弾するNGO団体『テラセイブ』メンバーの1人にしてクリスの妹『クレア・レッドフィールド』だった。

「クレア、まさかお前もこっちに来ていたなんて…」

「それはこっちのセリフよ!」

それより、今出て行った女の子達の中にシエリーを見かけたんだけど。

それとそこにエイダが居ただけど、一体如何言う事なの!」

「はあ、それは本人達に聞いてくれ。

俺達は少し作戦会議があるから席を外すさ……全く、泣けるぜ……」

「あ、ちよつと!!?」

ああ、もう!!?」

クレアはクリスやレオンが此処に居ただけで無く、会議テントから出た少女達の中にシエリーや、ましてやエイダと言う真つ黒な人物が居た事を2人に問い詰めるも2人は話すと長くなる為適当な理由を付けて逃げてしまう。

それに対しクレアは不機嫌になりながら葵達の後を追って行った。

「誰なんだあの人?」

「クレア、俺の妹だ」

「アンタの妹!!?」

全然似て……いや、押しが強い部分が似てる……のか?」

B. Y. やジェイクはクレアがクリスの妹とは知らなかった為それを聞き余りに美人で似てない……と一瞬思ったが、押しの強さに似た部分を感じ少し戸惑っていた。

「おつ、大将達がやつと会議を終えたぜ。

如何だ、これから一杯?」

「いやいや明日は最終決戦用作戦を立てるから今飲んで遅れたら拙いっしょ?」

そもそも俺、マキと同年だから酒飲めないって」

「良いじゃないのか？」

確かにお前は未成年だから飲んではならないが、炭酸飲料位なら融通して乾杯をさせてやろう」

「えっ、ちよつと『アルファ』さん？」

すると其処にベリーとカルロスが現れ、2人はそれぞれ酒を持ちながらクリス達を酒に誘い始めた。

が、B・Y・は意外とこんな時はお堅い部分があり、更に未成年でもあり酒飲みに対票を入れたが、何と『アルファ』が賛成を出し、1：3で賛否が分かれてしまう。

これに対しB・Y・はクリス達に助けを求めたが――

「悪酔いしない程度なら良いだろう。」

それに、気を引き締める為に酒を嗜む者も居る。

様は呑まれないければ良い、そうだろうレオン？」

「それを俺に聞くかクリス？」

……まあ、今回はヤケ酒じゃないからな。

酔わない程度なら大丈夫だろう」

「……賛成5かあ……」

クリスとレオンも飲み会に賛成案を出した為 B・Y・は項垂れながらそれに付き合おうと諦め、トボトボと歩いて行つた。

そうして男の飲み会に付き合わされた未成年の少年はそれから抜け出せない様に包囲網を立てられたのであつた。

一方その頃、CLOWN達のアジトEden^{エデン}ではラファエル、『ヨナ・レティシア』が琴葉紅に詰め寄り、今にも殺そうかと言う雰囲気を出していた。

「ガブリエル、此れは一体如何言う事かしら？」

「如何言う事とは、何の事かなラファエル？」

「惚けても無駄よ、貴方はクリス・レッドフィールド達の始末を貴重なケルビムに任せ、此処までは良い。」

けれど、何故ウリエルが勝手に出撃してあまつさえ奴等に殺されているの？

納得の行く理由を聞かせなさい、さもなければ貴方のその身体を氷漬けにして標本にしてやるわよ？」

ヨナは紅にマグナの出撃とクリス達に殺害された事を問い詰めていた。

理由は単純明快、出撃命令の無かったマグナが勝手に出撃した上でクリス達に殺された事に納得が行かないのだ。

この様な統率の無さにヨナの腹の尾は完全に切れ、紅の世界変革の『ゲーム』に遂に我慢が利かなくなったのだ。

「まあまあラファエル、ガブリエルも困っている事だし少しは手心を」

「黙りなさいゼラキエル、お前から先にこの場で綺麗な彫像にしても良いのよ?」
そんなヨナに対し兄のゼラキエル、『フォン・レティシア』は諫める様に取り持とうとしたが、完全にキレているヨナはフォンから先に殺そうとすらしており、これを見た紅は「ふむ」と一声出し口を開いた。

「確かにウリエルは勝手に出撃して敗北し悪戯に戦力を減らしてしまった。」

が、私はあの場面ではウリエルが行くのもアリだとは思っていたよ」

「何ですって、理由を言いなさい?」

「先ずウリエルは私と君と同じ『2nd Stage』に立つ者だった。」

ケルビム1体のみではあのレッドフィールド達を殺し切るのは不可能だと戦略的判断を下したのだろう。

そして後1手を詰める為に出撃して行ったのだろう、結果的には此方の戦力が減るのみになったが……未だウリエルまでの戦力の替えなら利く、ケルビムを更に用意する事で。

恐らくはウリエルも其処まで考えた上での行動だっただろう、これでは不満かね?」

「……………」

紅はある程度納得が行く理詰め理由をヨナに説明し、更にウリエルまでの戦力の替

えなら未だ利く為大丈夫と言うニュアンスの言葉を投げ掛けヨナの矛を収めようとした。

そして、周りの空気すら凍らしながら冷き怒りをぶつけていたヨナの答えは……。

「……良いわ、貴方の言い訳を今回限りは聞いてあげる。

けど明日は奴等は必ず決戦を仕掛けて来る筈。

ならばその前に奴等を私が叩いてやるわ……このラファエルたる私がね」

「おっと、君はこのCLOWNの中でも大切な人物だ。

だから僕も同行しよう、君の身を守る為にもね、ヨナ」

「……………今更家族面を……………」

ヨナは怒りの矛を収め、部屋の温度が常温になり始めていた。

しかし彼女の計算ではクリスやレオン、葵達は明日を決戦にする気だと計算し、準備

が整いこのE^エd^デe^ンn^ンi^ッを見つけ襲撃する前に終わらせようと紅の言葉を待たずに出撃

準備をする。

それをフォンが兄として、CLOWNの下位メンバーとしてヨナを失わず訳には行かないと同行する気であり、ヨナは断らなかつたが紅にしか聞こえない程度の声で憎悪を漏らし部屋を後にした。

「……ふう、別に君が行かずとも此処で迎え撃てば良いのだがな。

何セラファエル、仮に君が万が一倒れようが私だけは絶対に倒せないのだからな。

例えミカエル、茜がクリス・レッドフィールドやレオン・S・ケネディの力を借りてもな……………ふふふふふふ」

ヨナ達が去り、氷漬けになった部屋に1人座っていた紅は万が一ヨナが倒される可能性はあつても自身は倒せないと言う絶対の自信を持つて不気味に笑うのであつた。

時刻はAM：1：40、この夜が明け朝を迎えれば最終決戦になる。

誰もがそんな予感を抱きながらそれぞれの夜を明かすのであつた……………。

EP XXV. V 『幕間：それぞれのお話』

葵達は女子会を開く為にずん子達がいるテントに向かい、其処にはずん子、イタコ、更にきりたんが起きており、イア達は寝ている所だった。

「あ、東北三姉妹が起きてはる、これなら女子会開けるな」

「あ、茜ちゃんに葵ちゃん、ゆかりちゃんにあかりちゃんにマキちゃんおかえりなさい

！

…でも何でスパイなセイカさんが此処に？」

「あー、それは女子会で説明したいから外に出て貰つて大丈夫ですか？」

ずん子は何故皆の前から去つたセイカがまた居るのか気になり問い掛けると、葵が女子会で説明したいと言い3人にテント外の座るスペースに来る様に伝える。

対する三姉妹は互いを一度見てから葵の問いに応える。

「分かりました、では葵さん達に付いて行きます。」

悪そうなお姉さん2人がいたら女子会もままならないですし」

「あらこの子、見た目の割に毒舌で見る目はあるわね。」

ふふ、将来が楽しみね」

きりたんの物おじしない態度にエイダは将来が楽しみだと感じ、もつと言えばこちら側の才能があるのではとも感じ不敵に笑っていた。

そして全員が外に出ようとして最後尾から最前列になったシエリーが外に出た所で1人の女性にぶつかってしまふ。

「きやつ、ぐ、ぐめんなさい……つてクレア!?」

「いったあ……ふう、久しぶりねシエリー。」

後エイダ・ウオン、産業スパイの貴女が何故この駐屯地に居るの!

また悪巧みしているの!」

「あらら、怖い怖いクリス・レッドフィールドの妹さんが居らしてたのね。」

別に悪巧みはしてないわ、今回はね」

その女性はクレア・レッドフィールド、シエリーの命の恩人にして彼女もまたエイダをラクーンシティで知り、そして地獄の街をレオンと共に生還しその後も何度もバイオテロから生き延びている強い女性であった。

「えつ、クリスさんの妹さん!?」

……確かに押ししの強さが似ているかもですね……あの、今から女子会を開くんですが、貴女もシエリーさんやエイダさんの知り合いなら参加して貰っても大丈夫でしょうか?

悪いお姉さん2人を監視する目は多くあつた方が良いですし」

「ああくん、葵ちゃん酷い〜!」

「女子会？」

……………なら其処でエイダ、貴女の今の目的を洗いざらい吐いて貰うわよ!」

葵はクレアがクリスの妹でシエリーの知り合いと知り、セイカやエイダが何かしない様に監視してほしいと頼み、セイカは葵にウザ絡みをし、エイダは手を竦めながらやれと言った態度を取り、そしてクレアの女子会参加も決まり自販機(ビールのもある)がある広場に全員で行くのだった。

それから20分後、葵達とクレアは自分達の名を、茜やマキ、ゆかりとあかり、更にセイカは所属を(セイカに関してはアルバート・ウエスカーの娘と堂々と父親を誹りながら)話し、クレアはこれまた奇妙な面子が揃っていると理解していた。

「成る程ね、イタコ達三姉妹やアオイ、後ユカリ達日本国エージェントやマキのBSA A隊員は良いとしてアカネがアオイの双子でA・B・Fのオメガ1、そしてセイカはあのウエスカーの娘って…………この国の状況は混沌を極めているわね、まるでラクーンシ

「ティだわ」

「せやな。」

まあウチらもバイオテロやB・O・W・根絶の理念は一緒やし、NGOのテラセイブメンバーが居たらそっちの避難も優先しとったしまあセイカやエイダさんよりかまだマシやろ」

「その代わりB S A Aには絨毯爆撃でB・O・W・毎吹き飛ばしてたのは忘れないかな茜」

クレアはこの国がラクーンシティの様な混沌を極めた状況下にあると理解し、更に茜とマキがやや険悪なムードを醸し出してるが全然衝突する気配が無い所を見ると相当この地獄を共に生き抜いたのだと理解し、まるでレオンと自分達みたいだと感じていた。

「あのお、それで女子会を開いた理由って何でしょうか？」

多分葵ちゃんやゆかりちゃん達が関わるのかなって感じますが。

葵ちゃんは真実を知る為に戦いに行つて、ゆかりさん達は目尻に涙の痕がありますし……」

「あ、ずん子さんは分かるんか。」

せやで、この女子会は葵やゆかりさん達のケア目的も兼ねとる今までのウチら

のおさらいなんや。

ずん子さん達には聞いてもろた方が良いから呼んだんやで。

さてマダオ、はよウチらの飲みもんとアンタのビールを買ってくるさかい」

「あれ、私の扱い酷くない？」

するとずん子は女子会を開いた理由を葵やゆかり達を見て尋ねると、茜はその観察力に感心しその通りだと言い、セイカに飲み物を買って来る様に命じ、そのセイカはとぼとぼと歩いて行つた。

クレアやずん子達はこれから何が話されるか、雰囲気的に深刻なものだと感じながら耳を傾けた。

そうして来たばかりのクレアに此れまであった事、それぞれの目的、そしてずん子達にそれぞれがあの後何があったのかを話した。

ゆかり達の養父との永遠の別れ、葵達の出生の秘密、T—G e n e s i s を作った父が生きていた事等全てを話した。

これを聞きずん子とイタコは悲しい表情になり、クレアも驚きを隠せないと言つた感じであつた。

「…そう、貴女達の父がT—Geneissを。」

そしてユカリ達の養父はCLOWNの1人として最後まで考えを曲げずに生きてしまい撃つてしまった。

更にアオイ、貴女達は普通とは違う生まれ方をして、生き方を強要され掛かったのね…」

「まさか、ゆかりさん達のお義父様が伝説の兵士にしてミリタリーマニアの間では超伝説のPMC『S・W・B』の創設者マグナ・グラスホッパー元アメリカ統合軍准将だとは思いませんでした。」

そして葵さんや茜さんは敵が作った七プロジェクト・アークエンジェル大天使計画の基となる実験台として生み出され見た目通りの年齢じゃないですか…：後半現実離れ過ぎますが、事実なんですわ」

クレアと三姉妹の中できりたんは冷静に話を聞き、その中でマグナと彼のPMCが伝説的な存在と言いつ、そして葵達を見ながら現実離れ過ぎる事実を紡ぎ、3人は頷く。

これに対しずん子やイタコはどう返せば良いか分からず、クレアは長年の経験から話すべき事を考え3人に話し始めた（なおセイカはビール缶を現在4缶目を開けている）。

「…先ずユカリとアカリ、貴女達の決断は恐らく間違っていないわ。」

ずっと空虚に囚われて、それでも躓いていたマグナを解放してあげたのよ、間

違いなく。

だから死んだマグナは間違い無く貴女達に感謝しているし、誇りに思っている
答よ」

「……ふふ、実際会った事無いのにそれが言えますか。

まあ、あのお義父さんの事ですだからクレアさんの言う通りですよ……流石クリ
スの妹さん、年季が違いますね」

クレアはマグナの聞いた人柄から彼はゆかり達に解放……つまり救われた事を口にし、
ゆかりとあかりは会ってない人間に此処まで人物像を当てられる事に年季、バイオテロ
に関わって来た歳月が自分達より多いとし、クリスの妹と言う肩書きは嘘偽りないと感
心していた。

「そしてアオイ、アカネ。

貴女達も親に翻弄されているけれど、それでも貴女達は貴女達、その答えに辿
り着けた事は何より重要よ。

それはこれからの人生でも大切な経験になるわ、絶対に」

「クレア……」

「……ああ、シエリーさんが親は親、自分は自分って事を強く思えたのは多分この人
の影響が強いのかも知れない。」

クレア・レッドフィールドさん……本当に強い人だなあ……」

更に琴葉姉妹、特に葵が出している答えについてそれに辿り着いた事を称賛し、それが経験となり此れからも役立つと力強く答える。

それには葵もクリスの妹だとはつきり分かり、安心した笑みを浮かべていた。

「…そう、ですよね。」

葵ちゃんは葵ちゃん、例え生まれ方がちよつとだけ違つても私達の友人に変わりないですね！」

「ええ、そしてずんちゃんやきりちゃんのお友達なら私も大歓迎ですわ。」

だから葵ちゃん、ずんちゃん達みたいな友達を大切にしてあげて下さいね」

「流石ずん姉様やタコ姉様、私が指摘しなくてもこの答えに辿り着きましたか。」

なら私からは言う事は無いです。

強いて言えばゆかりさん達ですね。

もしもヤケ酒をしたくなつたら付き合つてくれますよ、ずん姉様やタコ姉様、後年齢が来たら葵さんに茜さん、マキさんですよ」

そして東北三姉妹もまた葵達を本当の意味で受け入れ、更にきりたんがゆかり達のケアもし、ヤケ酒を起こしたくなれば年齢的に自分以外が付き合うと言つて周りを苦笑させる。

「あらあら、そのヤケ酒にはセイカお姉さん達を是非とも」

「ダメです、危険人物を側に置きたく無いです」

「ゆかりん達は私達が守るからね!!？」

「ふふふ、すっかり警戒されてるわねセイカ」

そのヤケ酒に乗ろうとしたセイカは（エイダを巻き込んで）お誘いを断られ、本人がこの場でヤケ酒を起こす場面となりビール缶が一気に減り、セイカはビール缶を更に買う為に全速力で自販機に向かつて行つた。

それもウイルス完全適応者の超スピードで。

「ウイルスの力をそない下らん事に使うとは流石セイカやで、マジなマダオやろアレ」

「ふふ、だから私も弄り甲斐があるのだけだね。

……そう言えば、お姉さんからの余計なお節介を2つ貴女達全員に良いかしら
？」

そんなセイカに呆れる茜と苦笑する葵姉妹、そしてそれぞれが微妙な反応を見せる中エイダが突然何か2つを葵達全員に取り上げ、全員エイダの方に警戒や疑問等の感情を込めて見た。

「先ず第1に、こんなバイオテロの真相を深く知ってしまった貴女達、特に民間人のアオイやズンコ達は如何するのかしら？」

下手したら日本政府に飼い殺しにされるかもよ？

ユカリ達みたいなバックボーンが無いと尚更ね」

「貴女みたいな人間が他人を心配するなんて珍しいわねエイダ」

「この子達はセイカのお気に入りなのよ。」

だから下手な事があれば彼女暴れに来るかも知れないから少し聞いてあげて
るのよ」

エイダが民間人の葵、イタコ、ずん子、きりたんはこの先如何するを問い、クレアは
珍しがるがエイダの中でセイカが気に入った子達の未来が勝手な理屈で潰されるのは
面白くない上にセイカの暴走を招く為如何するかと聞いたらしい。

するときりたんが不意に笑みを浮かべ茜を見ていた。

「な、何やきりたん？」

「茜さん、私をA・B・F.のハッカー担当で雇いませんか？」

自慢じゃ無いですが私、ペンタゴンレベルの防衛プログラム程度なら安物パ
ソコンで足を付かせず突破出来る腕があると自負してますよ？」

『き、きりちゃん？！』

何ときりたんはA・B・F.に入隊（但しハッカー担当として）を希望し、此れを聞
いた茜は目をパチクリし、他の面々、特に東北姉妹は取り乱しておりきりたんの言葉を

飲み込めずにいた。

「……基本ウチらは来る者、去る者拒まず何やけど……それはバイオテロやらB. O. W. とバックアップ担当やけど戦うって意味をしてるで？」

その意味は、分かるんか？」

「ええ。

バイオテロ犯の処断、つまり命を奪い事や幾らバックアップでも死ぬ時は死ぬ、そんな世界に足を踏み入れる事になります、此れには幾つか訳がありますが、大きく取り上げるなら3つあります」

茜は普段の様子と全く違う威圧的な態度を取りきりたんに問うとその理由が3つあると話し、茜は何なのか聞きたい為にきりたんに話すジエスチャーを行った。

「では先ず1つ、私達は葵さん達ばかりに戦いを押し付けてしまいました。

例えば葵さんが望んだ事でもこのツケを払わなければなりません。

2つ、このバイオテロ事件の日々更新される犠牲者名簿をハッキングして見てたら、矢張りと言うべきか私達の先生やクラスメイトも犠牲者、或いは行方不明者に入ってしまった。

柄では無いですが、皆さんの無念を晴らしてやりたいと感じています。

そして3つ目は……他2つと比べて餓鬼の意地何ですが、守られっぱなしは

んは押さえられ無いと悟ってる姉妹は必死にきりたんんに付いて行こうとして辺りはてんやわんやになつてしまふ。

此れには見ていた葵達も苦笑いしか出来ずにいた。

「ふふ、キラーパスしてしまつたわね。

それでアオイ、貴女は如何したいのかしら？」

「それは……此れから考えたいです。

証人保護プログラムで守られてるとは言え、お母さんの事も考えて身の振りを決めなきやつて思いますし……それに、今はちよつと別の事……白龍さんから託された事について考えたいので」

エイダはこれを見て不敵に笑い、次に葵に同じ質問を繰り返すが葵は此れを曖昧な答えを出し、それよりも頭にこびり付いた白龍の託したラファエル、ヨナ・レティシアの心を救うとは何をすれば良いか考えたいと答える。

するとエイダは興味深く葵を見て話を続けた。

「あら、丁度聞こうと思つていた事が来たわね。

アカネ、そして反対意見を出さなかつたアオイやマキに聞きたいわ。

貴女達は敵の心を救うとは何なのか考えているのかしら？」

エイダは2つ目の質問に白龍の遺した言葉を如何するか葵のみならずマキや白龍に

手を下し直接受け取った茜にも投げ掛け、シエリーやビールを追加で買って来たセイカもそれは気になり3人を見ていた。

「んん、茜や葵が完全に乗り気だし、その上でレティシア家の尋問状況を聞いたり色々な情報を纏めとくとヨナつて子は多分自分で道選びが出来ない一家の道具であり未来みたいな扱いを受けてたんじゃ無いかな？」

「マキさん良いところ目え付けとるなあ。」

ウチはそれに加えて兄貴の所為でその道を選ばざるを得なかったって事は、その兄貴が勝手にそのヨナさんを巻き添えにして今の称号やら何やらがあったに違いないらへんと考えとる」

「マキさん、お姉ちゃん……うん、だからヨナさんの心は憎しみで満ちてる筈なんだ。」

白龍さんやマグナさんは大人だけどヨナさんは私達と同一年程度……だから、私達はヨナさんに教えなきやいけないんだ、世界はまだまだ知らない事だらけ、滅んだら知る事も知られないんだって。

それにー」

マキ、茜、葵の順で白龍の情報やレティシア家の尋問状況、紅の日記内容から彼女は道を選ばず今まで生きて来てしまい、其処から憎悪で塗り固められてしまい更に兄フォーン・レティシアの所為でCLOWNに入り今の力やラファエルは称号を得たと推察し、

葵達はヨナを救う気である事を何ら抵抗心無くやろうとしていると周りに見せた。

更に葵にそれにと付け加え皆葵を見る。

「ヨナさんは私やお姉ちゃん鏡合わせなんだよ。」

私達は実験体で無理矢理その道を選ばされたけど、後から別々の道を選び、選ばせて貰えた機会があつたけどヨナさんには無かつた。

だから何が何でも助けなきやいけないんだ、私達の手で……絶対！」

葵はヨナが自分達姉妹の鏡合わせと呼称し、初めは短かつたが道を強制され、その後別の道を選ぶ機会があつた自分達と初めから最後まで選べなかつたヨナ。

確かに対比にはなるとエイダは考え、茜や葵が入れ込むのは無理なく、更にマキは父の血縁者に振り回された経験から益々このヨナの心を救う理由があると思ひ、面白い目で見ていた。

「仕方無いですね、マキさん達がやりたいなら私達も手伝いますよ」

「ヨナさんを救う時が来ましたら全力で援護します！」

「ゆかりん、あかりちゃん……！」

其処にゆかり達も同意し、彼女達自身何処までヨナの心に踏み込めるか分からないが3人の為に手伝うと言ひマキや葵達はありがたいと感じ、葵達4人が円陣を組み右手を中心で添い合うと其処に茜が加わり全員で見合ひながら葵がタイミング合わせに声を

出す。

「ヨナさんの事を救う為に、ファイト〜」

『おお〜!!?』

「……なら大人は見守らなきゃ、ね」

5人は一致団結してヨナを救うと決め、シェリーはその結果が如何なろうと見守る事を決めながら笑みを浮かべて見て、5人に反対する者はこの中には居なかった。

「よしそれじゃあ明日の気合入れの為に飲みまくって駄降りまくるわよ〜!!?」
 「うわセイカさん、急に抱きついて来ないでっってお酒臭っ!!?」

一体何本缶を空けたんですか!!?」

「丁度25本ね。」

気を付けなさいよ、その子そんな風に絡むと未成年にも容赦無く飲ませようとして来るから。

あ、私は面倒だから見てるだけにするわ」

『ちよおおおっ!!?』

其処に急にセイカが交わり、5人は余りの酒臭さに鼻を摘むとエイダが25缶空けた事を告げた。

更に余計な絡み酒に巻き込まれない様に離れて見ると宣言し葵達は助け舟がいきな

り沈んだ事に驚き、クレアやシエリー、イタコ達が5人を絡み酒から救うべくセイカを引き剥がそうとした。

そして其処からは本当に女性陣の駄乗り会になり、これがAM:3:00まで続いたのだった。

一方男の飲み会に於いて、巻き込まれたB・Y・は周りを見るとデルタチームの男達まで飲み会でドンチャンしており彼の頭を抱えさせた。

「お前らなあ……明日は起きるのは早いんだからなあ!!?」

2日酔いになっても知らないから俺は!!?」

「まあまあデルタの隊長坊やも気にすんなって。

あの飲み方は呑まれない程度の飲み方さ、明日には支障はないさ」

「それに、仮にもBSAA隊員なんだからその辺り弁えてる筈だぜ」

B・Y・は部下達のネジ外れに呆れ喝を飛ばすが、カルロスとジェイクがそれを宥めながら7人で座れる場所を確保し、其処で酒（B・Y・はグレイプスカッシュ）を回し合いそれぞれの目の前に用意したグラスに飲み物を入れた。

「ヤッ……ッ」

すると『アルファ』も常に付けていたガスマスクを外し、その素顔たる40代後半の姿を皆に見せた。

クリスやレオン、ジェイクやB・Y・はその素顔を見た事が無かった為イメージ像にあった『任務への冷徹さと何処か情がある人間性が遺伝子の様に絡まった』が崩れ、何処にでも居そうな40代後半男性の『アルファ』に驚いていた。

「あ、そうか。」

旦那達は素顔を知らなかったんだっけな？

此方が我等が大隊長『アルファ』になるぜ」

「初めて素顔を晒せば良かったんだが、任務地では絶対にマスクを外さず任務を熟す癖が大隊長にはあつて、任務終了かこう言った中間休憩時にしか素顔を晒さないんだ」
カルロス、ピリーは『アルファ』の素顔を知っており、更に任務ではガスマスクを外さない癖があると説明し、驚いてる4人にニヤけながら話を進めた

「お喋りはグラスに汲んだ物を飲み始めてからだ、カルロス、ピリー。」

さて……明日はいよいよ決戦になるであろう。

それに臨める様に英気を養い、そして勝つ為に飲み交わそう。

では、乾杯」

『乾杯』

青年含めた男7人は『アルファ』の号令を合図に乾杯をし、それぞれの酒とスカツシユの入ったグラスを鳴らし合い口に含んだ。

「ふう……『アルファ』のイメージと素顔が合致しないのは意外だったが、それでも声を聞けばやっぱりイメージ像通りだと思ったな」

「レオン達も同じか」。

そう言えば『アルファ』大隊長の事を俺達余り知らないよな？」

「確かに……最初の酒の肴は『アルファ』の素性話か？」

「おっと、それなら俺達はアルタチームの隊長坊やの事を肴にするが良いか？」

7人は一杯目を口にし、クリス達は『アルファ』の事を余り知らない為それを肴に酒を進めようとしたが、逆にカルロスもこの中でB・Yの素性が余り明らかになつてない為対価に肴にすると言い放ちB・Yは巻き込まれたと感じながら再びスカツシユを口にした。

「……ふむ、俺の素性が……余り聞いても良い物では無いが聞きたいなら聞かせてやろ

う、原罪たる俺の過去を」

「原罪？」

すると『アルファ』は自らの過去を原罪と口にしながら明かす事を良しとし、クリスやレオンは自分の過去を聞き恐らくは気分を悪くするのを承知で口に始めた。

「俺は嘗てアンブレラの特殊部隊U・S・Sのアルファチームの隊員『HUNK』と呼ばれ、あのラクーンシティで部下が放った弾丸がバイオオザードの引き鉄となり、俺自身はGウイルスサンプルを回収しアンブレラ社に届けた……つまり、俺がラクーンシティの崩壊に関与しているのとGウイルスが未だ存在する原因の1つを作ったと言う訳だ」

『アンブレラの？！？』

「…で、そんな人が何でA・B・Fなんて立ち上げたの？」

「確かに、アンブレラの特殊部隊に入ってたなら反バイオテロに繋がる要素が見当たらないんだが？」

クリスやレオンは『アルファ』の過去…HUNKと呼ばれる、あのラクーンシティの悲劇の引き鉄に関わり、更にGウイルスサンプルを回収して今回のT-Gene-sisが生み出される切っ掛けを作った事に驚き、逆にB・Yはそれらの事は資料でしか知らない為ジエイク共々A・B・Fの立ち上げを何故やったかを問い質した。

「…俺はアンブレラ崩壊を見届けた後、死地を求めて彷徨っていた。

例え任務だったとしてもラクーンシティ崩壊に関わり、そしてB・O・W. が闇市場に流れ戦場でそれが使われる事になるきっかけを生み出したのだからな。

許される筈が無い罪を俺は持った」

『……………』

「ならば俺の出来る事は一つ、B・O・W. との戦いに己が運命を置きその戦場の中の運命を自らの手で切り開こうとした。

その過程でカルロスやビリーと合流し、更に当時はセキュリティの甘かったE d e n t e r のデータバンクに侵入しアカネの存在を知り彼女の身を確保し彼女の目的を問い質したのだ。

ウィルスの力で生き返ったクレナイとT—G e n e s i s 抹殺、その次いでに全B・O・W. の消去を。

そうしてその場に集まった者が今のA・B・F. 創立メンバーとなり、B・O・W. との戦闘を激化させたのだ」

『アルファ』は淡々と自らの罪と向き合った結果、アンブレラが遺したB・O・W. と戦い自らの運命を戦場に置く事としたのだ。

クリス達は此れを聞きもしも『アルファ』が罪から逃れる為に戦っているなら許さな
いと思つたが、結局『アルファ』は罪から逃げず戦つていた事で矛を収める形になつた。
更にB・Y・は茜の素性や目的を知りつつA・B・F・を立ち上げ保護した事は英
断だつたと感じ、それが無ければアジトの絞り込みが遅れ世界はT—G e n e s i sの
支配する地獄になつただろうと思つていた。

「此れが俺の過去であり原罪だ。

クリス、レオン、お前達には俺を糾弾する権利がある。

今この場で何とでも言つて構わない」

「…いや、罪から逃げず戦っているアンタに何か言う気はないさ。

それに任務でウイリアム・バーキンを襲撃したんだろ？

なら結局アンブレラが自分から招いたのがあの地獄さ、例えアンタやアンタの
部下が関わらなくてもラクーンシティは地獄になる事は変わらなかつたと俺は思う」

「そして、逃げずに戦う道を選んだのならそれ以上は何も言わない。

もうあのアンブレラは無くなつたんだからな…」

『アルファ』はクリスやレオンに自らを糾弾しても良いと言うがクリス達は逃げなかつ
た『アルファ』を責めず、またラクーンシティはああなる事は『アルファ』が行かずと
もほぼ決まつて居たのと旧アンブレラは無くなつた事からそれらを糾弾する気は無

かった。

寧ろ話した上で戦ってくれる『アルファ』には許しはしないが共に戦おうと言う複雑だが敵対はしない感情を抱き、再び酒を口にした。

「さて、大隊長が告白したんだ。デルタの隊長坊やの事も聞かせてくれないか？」

「うわ、今の流れなら忘れてると思つたのに……しようがないな。」

多分聞いてもつまらないから期待はしないで欲しいよ」

其処にカルロスがB・Y.の話の事忘れず聞いて来た為本人はつまらないと前置きをしつつ口を開き始めた。

「俺が何でB S A Aに入ったかと言うと、この世界の裏側……生物兵器やウイルスが世界に毒を振り撒いてる事がある財閥の会長……親代わりの人に初めは興味本位で聞いたら色々知らされて、その中にはラクーンシティ事件にシーナ島事件やテラグリジア・パニック、キジュジュ自治区事件とかの資料を見せられたんだ」

B・Y.は初めは興味本位から世界の裏側を知りたがってしまい、其処で親代わりの人から様々な事件の資料を手渡され、見せられた事

を話しながら思い出して行き、そしてグラスを持った手にも力が入り始めながら更に思い出して行く。

「そして俺は思つたんだ、こんな物は世界に在ってはならない、速やかに抹消すべき物

だと。

それを言ったらその人がB・Yの名を与えて良いとこの子つて事を消しつつ紹介状を書いてくれた。

そしてマキがB S A Aに入隊訓練を受けに行つた日と同じ日に鉢合わせてマキみたく紹介状があつても追い返されそうになつたからマキを追い返そうとして投げ飛ばされた人と同じ人を俺も投げ飛ばして無理矢理入隊訓練を受けた訳さ」

そしてその場に居た男6人は始まりは興味本位でも其処から在つてはならない物と断じたB・O・Wと戦う道を選んだ事に成る程と感じつつ更に話を聞く為に隣にいたジェイクがグレイプスカツシユをグラスに注いでやり、B・Yもジェイクやクリスやレオン達に酒を注いでいた。

「で、初任務となつた蘭祥^{ランシヤン}で俺は本当の、資料越しじゃない目の前にある地獄をマキと一緒に見たんだ。

その時俺達は思つたよ、この場から生き延びてこの地獄を生み出すモノと戦つてやる、絶対にバイオテロやB・O・Wを許すなつてな。

そうしてクリスやレオン達、後居合わせたジェイク達の力を借りつつ一緒にあの事件を生き延びて、同じ初任務で生き延びた者同士でデルタチームを結成すると極東支部から言い渡されて、で俺とマキは隊長副隊長になつてニューヨークでのバイオテロ鎮

「圧にも参加って訳さ」

そしてレオン達はあの中国のバイオテロに参加し本当の地獄を見たB・Y・の吐露に共感を示し、また彼やマキは必死になり生き延びたのだとも感じながら今ではすっかりエリート隊員になった事にクリス達はこれも因果かと思いつつB・Y・やマキに今この任務で共に戦っている事に感謝していた。

「…そう言えばクリス、アンタマグナ・グラスホッパーに言われた事があるんだろ？」

確かもしもB S A Aが腐つていざと言う時は組織じゃなく自身の信念で行動しろって。

アレについて如何思ってるの？」

「マグナの遺言か…：確かに俺は一理あると思ったよ。」

ラクーン市警は署長がアンブレラと癒着してマトモな捜査が出来ずにいたからな…：もしそんな事が本当に有れば、俺はB S A Aを抜けてでもバイオテロやB・O・W・と戦うだろうな」

するとB・Y・はマグナの遺言についてクリスに問い質すと、クリスもラクーンシティ事件で警察がアンブレラと癒着して捜査が難航所か出来ずにいた事を思い出し、もしもB S A Aが同じ様に腐り始めたら幾ら自身が創立メンバーであったとしても組織から抜け、自分の意志で戦うと応えた。

これにはB・YもBSAA隊員として他人事では無い為そうなった場合の正義の在りかや自分なら如何するかを考え出しながらスカツシュを飲み干した。

「……さて、お堅い話は此処までにして先ずクリスの旦那に聞きたいんだが良いか？」
「俺にか？」

するとカルロスが堅い話を切り上げてクリスに聞きたい事があると言い、ピリーもあーつと言った表情を浮かべカルロスと同じ思考になる。

此れを見たB・Yやレオン、ジェイクは嫌な予感がしつつ耳を傾けた。

「クリスの旦那……アンタジルとは如何言う関係なんだ？」

「……はっ？」

「それなら俺からも、レベッカとは何処まで進んだんだ？」

と言うより、どっちが本命なんだ？」

クリスは突然カルロスとピリーにジル・バレンタインとレベッカ・チェンバース、何方が本命か聞かれてしまいレオン、ジェイクとB・Yは嫌な予感的中し、クリスの次は自分達の番だと明白に理解し身構えていた。

「何を言っているんだ、2人は俺の仲間、それ以上は無いぞ？」

「……えマジで？」

絶対旦那ならどっちかと付き合っていると想ったんだが……」

「此れはいきなり出端を挫かれたな……ならレオン、お前はエイダを如何思っている？」
 カルロス達はクリスが本当に2人は仲間認識程度しかないと感じ、男の恋愛事情の根掘り葉掘りにいきなり失敗し次はレオンにキラークラスを行い、レオンは遂に来たかと覺悟を決め、口を開き始めた。

「エイダの事か……複雑だな。」

彼女は掴み所が無いかと思えば近くに居て、それで且つ色々とあつて………すまない、上手く言葉に出来ないな」

「真面目かよ！」

「じゃあデルタの隊長坊やとジェイクはマキやシェリーにー」

「マキは仲間で部下、それ以上でも以下でも無いさ。」

「と言うかあつちもそう思つてるだろ絶対。」

「なら脈無し、高望み無し、任務に集中、それだけだろ」

「シェリーは……まあ恩人だな、間違い無く」

レオンの複雑な感情の吐露にカルロスは真面目過ぎる解答にツツコミを入れ、次にB・Y、やジェイクにマキやシェリーの事を聞いたジェイクは上手く躲すが、B・Y、はクリスに似た様な回答をしつつ自分から脈無し高望み無しと答え、クリスと違つて多少は意識しているが此方は完全に自分から脈無しと断じてそれ以上考え無い様にして

るとカルロスは思い、やっとお望みの反応が来てニヤリとしていた。

「へー、じゃあお前マキが誰かとくっ付いても良い訳？」

お前マキの事絶対に意識してるだろ？

なら思い切って告白してみたらー」

「別に、マキが誰とくっ付いて結婚しようが仲間で部下つてだけ何だし関係無いね。

それに意識してるとしたらそれは多分それ吊り橋効果だから恋愛とは違う

だろ絶対」

カルロスは更に根掘り葉掘りB・Y・にマキの事を聞いてみたり告白の話を振るが、本人は仲間と部下である以外に何も無い、吊り橋効果と否定し恋愛とは無関係だとキツパリと言い切り、完全に脈無しであるのと勘違いだとアピールし、カルロスとビリー、聞いていたジェイク達はまさか此処まで全力否定されるとは思わず苦笑いを浮かべていた。

「じゃあ逆に聞くけどそつちの2人はクリスマスに聞いたジルやレベツカの事如何思ってるのさっ？」

こつちが答えたんだからそつちも白状しろよ」

「いや、ジルとは背中を預けた仲間だつて思ってるけどそう言う目では見てないぜ」

「俺も同じだな。」

結局の所クリスと同じ様な物さ。

だからクリスの反応に意外さを感じた、それだけさ」

するとB・Y・もキラーパスを行うが2人もクリスと同じ様な物らしく、寧ろ2人がクリスと如何言う関係か聞きたかったのに自分らと一緒にの考えだった為意外と話した。

しかしレオンやB・Y・はこれを逆に自分達の反応で楽しんだなど感じジト目で見つつグラスの中の飲み物を飲み干した。

「……若いとは良い事だな。

俺はそう言った縁は無いからお前達の話を知っているだけで人間らしさを思い出させてくれるな」

「うお、大隊長……」

そんな中『アルファ』が急に口を開き冷徹な自分にも人間らしさはあると吐露をし、カールロス達は意外な所でダメージを受けてしまい『アルファ』に気を使い始めてしまう。

こうして男同士の飲み会もAM3:00頃まで続き、7人は仮眠と言う形で疲労を抜けさせるのであった。

「あ、そう言えばマキさん、B・Yさんの事は如何思っているんですか？」

「あ、ウチも気になったでそれ。」

「同じ年で初任務が一緒であの地獄の蘭祥ランシャンを生き抜いたり色んな任務で背中預けたりしとるやろ？」

「なら恋愛感情はあんのかなって気になってたんよ」

「同時刻女子会も恋バナとなり、葵が1番気になったマキとB・Yの関係について聞くと茜も、否、他の皆も同じ事を考えマキを見て反応を見ていた。」

「えゝバカ隊長と私の関係？」

「うゝん……確かにバカ隊長は蘭祥ランシャンのあのジュアヴォ軍団やその後のゾンビパニック時に私とも無理って思ってた時に肩を背負って『マキ、生きるぞ、絶対に生き延びてやるんだぞ!!?』って励ましてくれたり背中を預けてB・O・Wやバイオテロ犯とドンパチしたりして色々助けて貰ってるんだけど……」

『うんうん』

マキの話聞き葵達は頷きながらそれらを聞き始め、その表情からは満更でも無いと感じつつその先の言葉を待っていた。

しかしその口から出た言葉はと言うと…。

「これ多分ただの吊り橋効果じゃないかなって思うんだよね。」

それに、多分脈無しだと思うから変に拗れない様に今のままが良いと思うんだ」

「あら、恋愛は機会を逃すと2度と恵まれないわよ？」

それでも良いのかしら、貴女？」

「うん。」

だってあのバカ隊長私を意識してる素振りも無いし、多分仲間で部下以外には思っていないと感じるんだよね、私。

だから隊長との関係はただの隊長と部下ってだけだと思ってるんだ」

女子達は知らないがB・Y・と似た様な事をマキも話し、エイダは機会を逃すかもと言うが結局マキは折れず意識はしてるけど相手がそう思っていない止まりの答えしか出さずそれ以上の発展も望めない素振りすら見せた。

此れには葵や茜、ゆかり達は由々しき事態だとして後でB・Y・をしばいてでも彼が

マキに対し如何思ってるか事件が終わり機会があれば友人として問い質してやろうと密かに決めるのであった。

EP XXVI 『作戦説明とヨナの憎悪』

AM : 5:00、クリス、B・Y・達 B S A A 隊員や『アルファ』達 A・B・F・やレオン達は仮眠から目覚め装備の準備や補給部隊の極東支部ラムダチーム等からの武器弾薬の納品等に勤しんでいた。

そんな中でクリスはある B S A A 女性隊員と会話し、納品リストにチェックを入れていた。

その隊員の名は『ジル・バレンタイン』、リハビリを終え前線復帰を果たしたが今回は補給部隊護衛任務に就いたクリスの旧来の仲間である。

「:よし、レールガンの弾薬から新型の小型高圧力バーナーと燃料、更にグレネードランチャーの冷却弾に火炎弾等のチェックは終わった。

流石はジルだな、昨日急で頼んだ物全てを揃えて渡すとは」

「昔からの付き合いだし私も一応はオリジナルイレブンの1人よ。

そんな2人から早く装備をよこせて言われたら本部も慌しくも揃えるわよ。それにしても、A・B・F・と共同作戦な上にその A・B・F・にカルロスが居るなんてね」

クリスはヨナやフォンの能力から何が効くかの予想をB・Y・や『アルファ』達と立て、それらを今日までに揃える様に本部に打診しそれにジルの発言が加わり欧州本部や各支部から集められるだけ装備を集めさせこの納品に至った為ジルに感謝していた。

そんなジルはA・B・F・にかつての仲間であるカルロスを見つけ驚いており、そのカルロスはジルに軽く挨拶のサインを送り自身の装備の手入れと補給をしていた。

「カルロスに幻滅したか？」

BSAAに被害を齎してまでB・O・W・殲滅をやった組織に入ってる彼に

「……いえ、BSAAに入った以上何らかの理由で死ぬ確率が高いのは分かっているし、それが偶々そう言う効率重視なら他の兵を巻き込むA・B・F・だったってだけで彼の事は責めないわ。

寧ろ、今もバイオテロと戦い続けてくれていた事を誇りに思ってるわ。

それが例えA・B・F・であつてもね」

クリスはジルにカルロスの事を幻滅したかと聞くが、ジルはそれを否定した上で彼がなお戦い続けていた事を誇りに思うと口にし視線でカルロスの背中を追って行き、彼が見えなくなった所でクリスに視線を戻した。

そんな気丈なジルにクリスは内心カルロスに良かったなと思いつつチェックした納

品書を彼女に手渡した。

「すみませんクリスさん、たった今起きました!!？」

急いで装備の準備に入ります!!？」

「ああアオイか。

仮眠お疲れ様だな、なら早く装備を整えて来ると良いぞ。

君のUMPの弾丸や新しく申請していたBSAA制式採用のアサルトライフルやグレネードランチャーが届いている。

あつちの補給部隊から受け取って状態や弾丸の確認をして来るんだ」

「了解です!!？」

其処に慌しく葵がたった今起きたらしく、彼女が申請した中々遠距離用のアサルトライフルの納品やUMPの弾丸の補給等が届いた事をクリスは告げ、補給部隊からそれ等を受け取る様に命じる。

それを聞き葵はクリスにミリタリー動画で見た正しい敬礼を行い補給部隊の方へ走って行った。

「ねえクリス、今の子はアオイって言ったわよね？」

もしかして報告書にあったアオイ・コトノハって彼女なの？」

「ああ、そのアオイだ。

あの子は本当に気丈で勇敢で、だが少し無茶をする現地協力者で、今回の事件の根幹に否応無く関わってしまっていた子だ。

姉でありA・B・F・オメガ1のアカネや極東支部デルタチームのマキ達の支えもあつて此処まで戦い抜いた、本当に勇敢な子だよ」

ジルは葵の名を聞き報告書にあつた七^{プロジェクト}大^{エンジェル}天使計画の欠落者にして現地協力者、そして父親が今バイオテロ主犯である琴葉紅の娘だと判断しクリスに聞いた所、クリスは気丈でやや無茶気味だが勇敢な子と呼称し、ジルもその背中を見つめ補給部隊から武器弾薬を受け取る姿を見ると、確かに自分やクリスの妹のクレアに似た様な物を感じ取り、彼女にこれから幸があらん事を祈りつつ笑みを浮かべ葵の事をクリスの言つた通りだと認めるのだった。

AM6:30、Faillenbullet血清弾や新武器に弾丸を受け取つた葵は茜やマキ達と共に武器を整えを終え広場に整列し、クリス達の作戦発表を待っていた（なおエイダやセイカは並ばず、クレアとジルはこの駐屯地で出会い遠目でクリスやレオン、葵達を見つめてい

る)。

「よし、全員揃ったな！」

此れより我々はCLOWN討滅作戦の最終段階に入る!!?

東側は空振りに終わった為西側の残り2ヶ所の何れかに奴等のアジト、EdenIが存在する筈だ!!?

故に俺達は昨日と同じく2ヶ所に部隊を分けEdenIを発見次第合流、全戦力を以つてこの施設内に居るコードネームゼラキエル、ラファエル、ガブリエルの3人とT—Genesis、そしてB・O・Wを撃滅する!!?

なお今作戦の注意点がデルタ1よりある為全員静聴する様に!!?」

先ずクリスが作戦概要たるEdenI探索をアルファ、デルタを中心にした2部隊で行う事を説明し、発見次第合流、全戦力を以つて叩き潰す事を全員に話した。

更に注意点があるとしてB・Yに前に立たせその説明を行い始めた。

「全員静聴！」

アルファ1から聞いた様に今作戦の注意点が存在する。

先ずCLOWNのゼラキエル、ラファエルについて。

それぞれ水、氷の特殊能力が使えたとされ、更にラグエルやレミエルにあつた防御能力があると予想される為我々は此れに遭遇時にはゼラキエルには冷却弾を。

「ラファエルには火炎弾、及び新型の小型高圧力バーナーを使用し此れを無効にさせ血清弾を使用し無力化、確保を狙う事とする」

「？」

隊長、何故ゼラキエルにラファエルは無力化つて条件が付いているのですか

「？」

B・Y・はゼラキエルとラファエルにはレミエルにラグエルにあった特殊能力による防御があると予想しそれらに対応した武器で防御を無効化させ血清弾による無力化を提示した。

が、此処でデルタ28が何故2人を今までのCLOWNメンバーと違い無力化に止めるか疑問に思い質問をした。

するとB・Y・は理由を話し始めた。

「それは最後の1人であるガブリエル、琴葉紅が原因だ。

奴の日記をEden^{エデン}II^{スリー}で見ただが俺達は今までネフィリムから続く最終進化形態のケルビムやウリエルをジェイクの血から作られた血清弾で倒せてた。

が、奴はそれは効かないと抜かしやがったんだ。

其処でEden^{エデン}II^{スリー}の共有データバンクにあった日記や研究データをBSAAや血清弾やワクチン等を作ってくれたアメリカ軍特殊空母に回して解析して貰い、

ある事が分かったんだ」

Fallen Bullet

「デルタ28の疑問にB・Y・はガブリエル、紅がジェイクの血から作られた血清Fallen Bulletが効かない事を日記で見えてしまい、それが事実なら拙いと感じ入手した研究データや日記をB S A A、アメリカ軍特殊空母に回し解析した所である事が判明したと言ひ、全員それは何かと思ひ耳を傾けた。

「先ずそのある事を発見したのはF O Sのイングリッド・ハニガン氏とアメリカ軍の解析班、更に欧州本部技術班のクエント・ケッチャムで、ガブリエルは初期型T | G e n e s i sに加え現在のT | G e n e s i sの2つを使った事でウエスカーの様なウイルス耐性、適応能力を持つ者の血から作った血清弾が効かない体質になった事が判明したんだ」

「んだよそりや、俺の血から作った特注品が効きやがらないとかチートかよ！

じゃあそのガブリエル様を如何やって倒すんだよB・Y・！」

B・Y・はハニガンやシルバ・ヴァレット艦長率いるアメリカ軍解析班やクエントが発見した紅の特殊体質……初期型T | G e n e s i sに加え現在のT | G e n e s i sを使った事で得た力の1つにウエスカーの様なウイルス耐性等を持つ者の血から作った血清弾が効かなくなる特殊体質を得た事を言ひ、全員がざわつきジェイクも如何やって倒すのかB・Y・に問い質すと、彼は咳払いし全員を一旦黙らせてから説明を再

開した。

「其処で出て来るのが先程のゼラキエル、ラファエル兩名の無力化だ。

実は奴の弱点も研究データ内に理論上ではあるが律儀に書いていた事が判明してな。

それはT—Genesisのウイルス完全適応者、しかも2親等内の、特に兄弟姉妹間の血を配合して生成した別の血清弾……今までのコードネーム発案者のシルバ・ヴァレット艦長は此れを真の血清弾、コードネームを『Sandalphon』と名付け、その生成の為兩名の無力化を狙う作戦になった。

ただ……この作戦には懸念材料があり、ガブリエルの研究データによればゼラキエルとラファエルの組み合わせで真血清弾生成確率が極めて低いと確率的にも示されたらしい」

B・Y・は紅の研究データ内に自身の弱点たるT—Genesis完全適応者兄弟姉妹の組み合わせで作られた血清弾、Sandalphon：罪を犯した天使を永遠に捕らえ幽閉する天使の名を冠した物を作り出す為にゼラキエルとラファエル、フォンとヨナの兩名の無力化を狙うと説明した。

しかし同時にこの真血清弾をこの兩名で作り上げられる確率が極めて低い事も説明しB・Y・もこれには残念がる表情を浮かべており、マキが手を挙げその確率を聞こう

とした。

「バカ隊長、その確率って正確にはどれ位なの？」

「…データに拠ると約0.00000027%。」

クエント曰くこんな狙うならガブリエルを動けなくさせてN2爆弾で吹き飛ばした方がより確実だとさ。

何処かに未だ居る生存者をまとめて吹き飛ばしちゃうからダメだと冗談混じりで言ってみたのだが

「……あのクソ野郎、んなごっついチート体質身に付けて。」

何面倒臭さに磨きを掛けとんねん

マキの問い掛けにB・Yも頭を押さえデータ上の確率で0.00000027%…マキ達はクエントの冗談がマジに聞こえる確率を聞き頭を抱え、茜に至っては殺すのが更に面倒になり冗談じゃないと思いつつ更に説明を聞き始めた。

そして葵はそれを聞き自分がT-Genesis完全適応者じゃない事に初めて落胆を覚え、自身の手を見て溜め息を吐いていた。

「それでだ、もしも真血清弾生成に失敗した場合、ガブリエルはエクシアに当初やっていた絨毯爆撃による殺害やEdenの自爆に巻き込み肉片残さず殺すかの2択になる。」

が、奴はラファエルまでにある全ての変異能力を使える為前者はそれらの特殊防御の重ね掛けで防御突破、後者は自爆装置巻き込みの為の取り押さえは極めて困難だと言えるだろう。

故に俺達はこの真血清弾生成に先ずは賭けてみる。

それが無理なら作戦の練り直しを図る事とする。

以上だが何か聞きたい事は無いか？」

そしてB・Y・^{Sandalphon}は真血清弾生成した先ず賭け、ダメならエクシアを当初殺した方法で殺害するか^{エデンワ}Edenの自爆装置を利用して殺すかの2択だと説明した（なお^{エデンスリー}EdenIIIを自爆させた際の周りの被害は自然公園と周囲数100メートルが完全陥没、葵達の家がギリギリ範囲外だったがその辺りのインフラが止まる程であった）。しかしどれも紅の超人能力により現実的で無くなり全員が真血清弾^{Sandalphon}の生成に望みを託す羽目になっていた。

「…質問は無さそうだな。

なら此れより2時間後のAM:8:30よりゼラキエル、ラファエル捕縛作戦に入る！」

それまでに準備を——」

「私達の捕縛？」

B S A A は如何もお優しい事を言ってくれる素晴らしい組織なのね」

最後に B・Y・ が質問の有無を確認しゼラキエル、ラファエル捕縛作戦開始時間を宣言し、その準備に入らせようとした……その時であった。

周りの空気が夏であるのにまるで真冬の様な寒さになり、更に冷たさに満ち溢れた声があった方向を全員で見つめると其処には C L O W N の紅以外のメンバーが被る共通仮面を被った男女の 2 人組が居り、特に声を発したと思われる少女の足元の半径 1 メートルの地面が完全に凍り付いてしまっていた。

クリス、レオン、そして茜や葵達全員が悟る、この仮面を被った少女こそがラファエル、ヨナ・レティシアなのだ。

「お前は……ラファエル!?」

それに隣に居るのはゼラキエルか!??

何故此処にお前達が居る!??

「愚問だな、旧人類でありながら新人類の 1 人だったアルバートを斃した者、クリス・レットフィールド。」

貴様達はレミエルやラグエルのみならずウリエルまで殺したのだ。

ならばこそその戦力を再評価、脅威度を引き上げて相手の準備が整う前に潰しに掛かるのは定石であろう?」

「…成る程、お前達から見て俺達は抵抗し過ぎた、そう言いたいんだなゼラキエル。

いや、フォン・レティシア」

クリスが直ぐ様2人に対し銃を向けると全員も陣形を整えて銃を構えたりしてヨナとフォンにこの場に居るかを問うと、如何やら相手側もこの戦力に脅威を感じ潰しに来たらしくレオンがフォンの名を告げながら相手目線で抵抗し過ぎたと告げるとゼラキエル、フォンは仮面越しではあるが明らかに見下しながらも如何にもと言った仕草を見せ佇んでいた。

「それにしてもBSAAやA. B. F. 達は避難民の別駐屯地への移動開始が早いわね。

私達を認識した途端フリーの者達が避難民を輸送機に乗せ始めてるわ。

そう言う所は無駄に優秀ね」

「…あんさんらは避難民に興味は無いみたいやな」

「当たり前だ、我らが同志にして未だ抵抗を見せるミカエルよ。

何故我々新人類が何ら抵抗する力を持たぬ塵芥を気にしなければならぬ

?

我々に蟻を潰さぬ様に踏む、或いはスポンジで首を絞めぬ様に説教をするつ

もりか？」

更にヨナ、フォンは如何やら避難民には一切合切興味は無いらしく、アルファチームやデルタチーム等の一部中衛や後衛、更にラムダチームやカイチーム、ジルやクレア達テラセイブが避難民を輸送機に誘導し次々にずん子達や藍を含めた全員を乗せて現駐屯地から離れて行くのを眺めていた。

フォン曰く蟻を踏まない様にするとし、レオン達はとことん自分達を見下すその態度に神経を逆撫でさせられていた。

「ふうん。」

「じゃあそつちのヨナ・レティシア、あんたも其処のバカ兄貴と同じ意見な訳？」

「私がゼラキエルと同じ意見？」

舐められたものね……所詮は死ぬ命、それが何時、如何やって死のうが興味が無いだけよ。

寧ろ今興味、いえ、貴女達的に言えば敵意があるのは貴女達よマキ・ツルマキ。ウリエルすら屠つたその戦力は最早看過出来ない。

この場で確実に葬り去り私が思い描く最終目標達成の邪魔になる一切の可能性を消すわ」

対するヨナの意見は避難民が如何死のうと関係無いらしく、今現在の目的はクリスやレオン達を葬り自分の理想を叶える為の障害を消す事らしかった。

そしてこの言葉で情報共有会議に参加した者達は気付いてしまう、矢張りヨナは紅の日記通りCLOWNの目的を叶える事が無い、寧ろ自分の計画に挿げ替え叶える事を到達点にしている事に。

「…やっぱり貴女は、何もかもが憎くてしようがないんだね…?」

「私の事を知った様な口を聞くな…:と、言いたいけどその通りよルシフェル、私達と同じこの力を持つ可能性を持たなかったアオイ・コトノハ。

私は全てが憎い、生き方を強要した親も、能力が無く、その上でスペンサーなどと云う凡人の身に余る理想に感化されガブリエルの下に私を勝手に誘い、其処でも私に役割を強要したガブリエルや今横に居るセラキエルも、私に妙に気に掛けて鬱陶しかったラグエルやCLOWN内の凡人の癖に態度だけは大きかったレミエルも!

唯一ウリエル位よ、私に余り干渉せずに鬱陶しさも何も感じさせなかったのは。

でもそれだけ、私が全て憎いのは変わらない、だから……」

葵はヨナに全てが憎いのだと問うと当人はほんの少しだけ怒気を見せたが直ぐにそれを収め、仮面を外しその下にあった氷の彫刻の様に整った儂い美少女の容姿を見せながら肯定し、親や唯一余り干渉しなかったマグナを除き紅達やフォンすらも憎いとフォンを憎悪に満ちた瞳で睨みながら口にした。

そうして話す中でヨナはドレスのポケットからタブレットを取り出して何らかの操作する動作を見せ、全員何かあると思いい身構えた。

『……………?』

「何も、起きな—」

『『ザザツ』 H Qより緊急連絡!!?』

ロシアのレティシア邸に衛星レーザーが放たれレティシア邸が消滅!!?』

中に居たレティシア夫妻の安否は不明、繰り返す、中に居たレティシア夫妻の

安否は不明!!?』

「なっ……………!!?」

何か起きると身構えたクリス達だったが、一向に何も起きない事に肩透かしを喰らい掛けたその時、B S A A 隊員全員の通信機からレティシア邸が衛星レーザーで消滅した事がH Qより告げられマキ達は驚愕と言った表情を浮かべ、それを見ていたエイダやセイカはヨナの行動に成る程と言った感想を抱いていた。

「ふっ、何故今衛星レーザーなんて奥の手みたいな物を見せたか分かるかしら?」

貴女達なんて何時でも吹き飛ばせたのよ、その気になれば

けれどそんな手を見せれば優秀なハッカーが居ればレティシア家が提供し

たレーザーを搭載した衛星を動力炉の暴走で自爆させられてしまうわ。

まあそんなハッカーは存在しないわ、だって私が構築した防衛プログラムで守られ、誰もこの私が設計し提供した衛星全てにレーザーが付いてるなんて見抜けなかったのだから」

葵達は絶句しながらヨナの言葉を聞き、更に余程の自信があるのか衛星のハッキングは不可能だと口にしながら清々したと言った無邪気に見えるが恐ろしさを含む喜びの表情を浮かべる彼女の言葉を更に黙りながら聞く。

「それに私はこの手は初めから決めていたのよ、私を生み出して一族の繁栄の道具としか、自分達の理想の物にしか見ていかなかったあの親とすら認識したく無い愚か者2人の抹殺に使うと!!?」

ああ、この目をどれ程待ち侘びたか……あははは、あははは!!?」

「…衛星レーザーで親殺しなんて豪快ねえ」

ヨナは笑顔のまま憎しみの言霊を紡ぎ切り、最初にレティシア夫妻を殺す為だけに衛星レーザーを晒しながら使うと決めていた事を話し、更にその笑い声で何れだけ親が憎かったかをその場に居た全員に見せ付ける。

そんな彼女にセイカはその殺し方に豪快さとその手があったかと言った感想を抱きつつ親を憎むヨナに共感を抱いていた。

「さあこれで分かったでしょう?」

貴女達は初めから私の掌の上で踊り仮初の勝利を手にしたに過ぎないわ。

昨日だって呑気に会議していたり今の作戦説明の時だって貴女達は吹き飛ばせたのよ。

でもそうしなかったのは今までは敵と見做さなかったから、今は私の手で殺した方が早いから、よ。

さあ早く踊りましょうよ、血や炎すらも凍り付く死の舞を…うふふ、うふふふふふふ！」

「…ガチモンの憎悪の塊やないかこの人。

白龍、ウチあんさんの無理難題に怒るで…!!?」

「如何する、如何やればこの人の心を救えるの…!?!?」

ヨナは何時どの時点でも衛星レーザーで何もかも吹き飛ばせた事を口にし、今の時点でも自分から殺した方が早いと称しレーザー発射用のタレットをポケットに仕舞いゆつくり、1歩ずつヨナは狂気的笑みを浮かべながらクリス達に近づく。

そんなヨナの憎しみを垣間見た茜や葵達は白龍の無理難題に怒りながらもこの憎悪に塗り固まった同い年の少女を如何救うか考え始めるのだった。

「え、衛星レーザー…紅、いえCLOWN、貴方達は何てものを…!!?」

「そんな物が私達の上を飛び回ってたなんて……」

「くっ、なんて事なの!!?」

衛星レーザーが放たれた事が知らされた同時刻、輸送機内に避難させられた藍やずん子達は衛星レーザーと言う単語に背筋を凍らせ、ジルもまさか相手がそんな物を用意していたとは思わず焦っていた。

だが、そんな中でも冷静な少女が1人居た。

「すみませんBSAAの隊員さん、この機体にノートPCってありませんか？」

作戦概要の説明端末として渡された物みたいなのは」

「え？」

確かに私が今この機体にそのノートPCを持っているけど何を」

「あるなら渡して下さい、この巫山戯た状況を面白愉快に覆してやるんですから早く貸して下さい」

その少女の名は東北きりたん、昨晩ペンタゴンの防衛プログラムすら突破出来ると公言した11歳の少女であり、葵達に借りを返したいと言っていた者である。

ジルはきりたんの目を見てそれが冗談じゃない、確信と自信に満ちたものだと思抜き後で言い訳を考えるとノートパソコンをきりたんに渡した。

「ちよ、バレンタイン何を！」

「良いから黙ってて。」

この子から何か自信を感じたのよ、私はその勘を信じたいの」

同乗していたラムダチームの隊員はジルの行動に驚き口出ししたがジルは自身が感じた何かを信じたいと言いいそれを黙らせた。

東北姉妹の2人や同乗したクレアはきりたんが何をするのか察しそれに賭け、隣に座っていた藍やウナ、そして対面のさきさらは何をするのか分からず見ていた。

するときりたんはPC起動後に自作のUSBメモリを挿すとPC画面に何らかのプログラム画面が現れきりたんはその画面を冷静に見ながらキーボードを手早く打ち始めた。

「葵さん、茜さん、マキさん…皆さん。」

昨日言っていたツケを今少しだけ払わせて貰いますよ……！」

「東北……？」

「（頼むよ、キリタン……！）」

きりたんは昨晚の女子会で話した葵達にツケを今少し払う時が来たとして初めはバ

かな友人を揶揄う為、そして何時の間にか磨きに磨かれた己の技術を結集させノートP Cにプログラムを走らせて行く。

全てはこの後に予想出来る何十通りの最悪の事態をこの1手で叩き潰す為に。

それを見守る東北姉妹やクレア達は自分達に無い技術を持つ彼女に望みを託し事が上手く運ぶ事を祈るのだった。

EP XXVII : 1-1 『レオン達&葵達の戦い：VS ラファエル&ゼラキエル戦①』

「さあ初めは誰が来る？」

旧人類とそれに加担する者達に誰から先に死に逝くか権利を与えてやろう。

それが新人類たる我等の勤めの1つよ」

「ゼラキエル、人が余韻に浸っているのを邪魔しないで。

…まあ誰から殺されて欲しいか好きにしても構わないわ、如何せ皆等しく死ぬだけなんだから」

ヨナが余韻に浸りながら1歩ずつ近付くが、其処に仮面を捨て、如何にもナルシストな容姿のフォンが急に誰から先に死ぬかの選択を迫り、ヨナはフォンを鬱陶しがっていたが誰が死のうが関係ない為此処では彼を殺さない様にし、同じく誰から来るか好きに選ばせた。

「ならば俺やレオン達で行く、必ずこいつ達を無力化させてー」

「待った大人組、混ざるのはええけど此処はウチら子供組主体で任せてくれへんか？」
「何？」

クリスは頭の中でレオンやジェイク等戦闘力が高い者で固め、残りは巻き込まれない様に待機させようとした瞬間、茜が子供組……つまり葵達10代組を中心に任せないかと提案する。

「アカネ、その理由は……もしや蘭白龍の遺言か？」

だがあの様子では」

「ウチはあの願いを受けた責任がある、せやから絶対それを実行する責任があるんやで！」

だからクリスさん……お願いや……!!？」

「クリスさん私からも！」

ヨナさんの憎しみを……私達が何とかしないとイケないんです!!？」

クリスは白龍の遺言を共有報告で聞いたがヨナの様子から無理ではと言いかけるが、茜は白龍の願いを直接聞いた為その責任があると言い、其処に葵も便乗してクリスに頼み込み彼を困惑させる。

「……人の前で憎しみをどうこうしたいだの何だの……コトノハ姉妹、お前達だけは如何やら私の手で殺さないとならないみたいね。

そして死の間際に悟るが良いわ、他人に下手に関われれば残酷な死しか無いと言う冷血なる真理が待っていると言う事を！」

その会話を聞いたヨナは明確な殺意ある表情を浮かべ、変異能力を強めたのか地面の凍結範囲が3メートルまで広がり更に茜達琴葉姉妹殺害を予告する。

これにはフォンもやれやれと思いつつ自身は葵は兎も角茜は痛い目に遭わせて紅の下に連れ去ると思惑がありそれを止める気が一切なかった。

「おいおいおい、アレヤベエんじゃねえか!」

「分かつてるよジエイク、そんな事は!」

でも葵達は地雷原に突っ込む事承知で大声でクリスさんに頼んだんだ、なら私も……葵達を信じて手伝うだけよ!!?」

ジエイクはヨナの様子から明らかにマグナ以上、ライナスを遥かに上回る危険性があると本能で悟り銃を構えながらも何時でも回避可能な様に足に力を入れる。

そんな横でマキは葵達を手伝うと高らかに宣言しながら茜と葵の間に入ると、ゆかりとあかりも彼女達に並び立ちヨナと戦う姿勢を見せる。

そんな茜達にクリスは如何するべきか判断に迷うが、其処にレオンが話しかけて来る。

「クリス、俺達はおくまでサポートに回り彼女達任せよう」

「レオン、正気か!?」

「ああ……俺はアオイ達を信じたい。」

この目は一切諦めない目だ。

だがもしもの際は俺達が全力でやる、その方向で行くぞ」

レオンはもしも……葵達の行動が全く無意味且つ危ないと言う時は自分達がやるとしつつ葵達のサポートに回り、彼女達の好きにやらせようとクリスに提案する。

此れにクリスは一瞬悩むが、葵達の目には若き自分達の熱意や様々な物を垣間見た気がしていた。

そんな物を見たクリスの判断はと言えば……。

「……分かった。

全員、相手は此れまで以上に危険なウイルス完全適応者だ!!?」

アルファチームは俺が立つ、他はいざと言う時に奥へ退避し、ゼラキエルとラファエルの捕縛をなんとしても遂行せよ!!?」

「……はあ、仕方ない。

デルタチームからは俺とマキが行く!!?」

デルタ4、マキにレールガンを貸してやれ!!?」

それ以外はアルファチームと共に退避だ!!?」

「なら我々はオメガ1と俺以外は退避だ!!?」

……オメガ2、オメガ3、もしもの時は頼んだぞ」

クリスは葵達を信じアルファチームを退避させ、自身は側に置いておいた小型高圧力バーナーを装備し、B. Y. はマキにレールガンを渡す様にデルタ4に命じた以外はクリス同様全員下がらせ、そして『アルファ』もビリーとカルロスに後を託し戦場へと立った。

「さて、私達もサポートとあのキザ男の鼻を折ってやりましょうか」

「大賛成。」

あ、私はラファエルの方に行くよ。

あの子位なら未だ『そっち』に戻せるから」

次にエイダとセイカはそれぞれフォン、ヨナを相手取る事にしてセイカは茜達を庇う様に立ち、エイダは余裕たっぷりの笑みを浮かべフォンを挑発する態度を見せていた。

「なら俺もキザ野郎だな。」

あの顔見ると苛立つぜ。

シエリー、あの嬢ちゃん相手は気を付けるよ」

「分かっているよジエイク、そっちも気を付けてね」

そしてジエイクはフォン、シエリーはヨナの相手をする事になりそれぞれの相手に対し銃を構え陣形を整え始めた。

その内訳はヨナ側はクリス、レオン、茜、葵、マキ、ゆかり、あかり、セイカ、シエ

リー。

フォン側はジェイク、エイダ、『アルファ』、B・Yと、明らかにヨナ側に戦力を偏らせているが此れが正しい戦力配置と全員で思いそれぞれが相手の前に立ったのだ。

「ふつ、僕相手には新人類になっていないウエスカーJr.に死神、それとスパイと運良く生き延びただけでB S A A極東支部のツートップを名乗る小僧と、旧人類のみが相手が。」

まあそれが正しいだろう、我等新人類の中でもヨナは紅や私と違う真の天才！

それを相手に英雄や旧人類に与する新人類やミカエルを当てるのは正に妥当！

だが我が身も新人類なればこそ旧人類如きに負ける通り無し、レミエルやラグエルと違うと言う事を貴様達に見せ付けてー」

『ズドンッ、パシヤ!!×2?』

この戦力配置にフォンは正しく、ヨナ相手にこの様に戦力を割く事が定石と言いつつ、ヨナの力を自身の物の様に言い放ち更に自身も旧人類と見下す者達に負けない、力の差を見せると要約するとそう言っていたが、ジェイクとB・Yがいきなり通常弾のハンドガンを放ち、その口を黙らせる為に口の中に弾丸を振り込んだ。

そして共に揃って一言を口にした。

『独り言多過ぎだナルシスト』

ジェイクとB・Y；更に『アルファ』やエイダもそのナルシスト全開な独り言にうんざりしていた所にファイインプレーをした2人であった。

が、同時に『水に銃弾を撃ち込んだ』手応えの無い感触を確かめ、矢張りライナス達同様の変異能力による防御能力があると4人は悟り、同時にB・Yは背中に背負ったグレネードランチャーの冷却弾が矢張り役立つかもと感じ、自身は早速グレネードランチャーに手持ちを変え構えるのであった。

一方ヨナの方に戦力を割いたレオン達はヨナと対峙するが、その際に吐く息が白く冷え切った物になっておりこの現象は今までの特殊変異能力の強化体だとしており、迂闊に近付けば恐らく凍り付く為アウトになると考えヨナが1歩進む毎に1歩下がりの距離を保っていた。

「如何したのかしら、ラクーンの英雄さん達？

貴方達は私を倒したい、アオイ・コトノハ達は私の憎しみを何とかしたいとほざいた。

ならば私の踊りに付き合うのが礼儀じゃないかしら？」

「とは言っても…」

『ズドンッ、ピキピキ、ポトッ！』

ヨナはさつさと踊る様にレオン達要求して来るが、対するレオンが試しに
Fallen Bullet
 血 清 弾 入りの弾丸を放った。

するとその弾丸はヨナの大体1メートル以内に近付いた瞬間完全に凍結し地面に落ちると言う電磁バリアと違う、絶対零度の障壁と呼ぶ物に阻まれそれが届く事がなかった。

また近付けば此れに凍らされるのは間違い無かった為迂闊に近付けないのだ。

「……覧の様にそつちの方から近付くのは願ひ下げと来て、なのに踊れと要求して来る物だからな。

全く、泣けるぜ」

「あら御免なさい。

私は今そちら風に言えばガチギレって奴になっっているから能力の出力を7割方にしてたわ、本当に申し訳無いわね」

そしてヨナは此れで7割の力で戦っていると宣告した為、此れが10割なら如何なるのかが分からずレオンは珍しく冷や汗を掻いていた。

するとヨナは悪戯をする時の様な笑みを浮かべながら手を振った……その瞬間、ヨナの振った手の先から地面が一直線に凍結しクリス達の方に向かって行っていた。

「うおっ！！？」

「くっ！！？」

クリスとその側に居たゆかりやセイカは急いでこちらに向かって来る氷の道と呼ぶべき物を回避する。

するとクリス達の2メートル後ろにあつた電気ボールが一瞬で全て凍結し、氷の長棒が完成してしまった。

「うひゃあ……アレ当たってたら私もそのままなら大丈夫だけど何か攻撃受けたら碎けて危ないかも……」

「ヨナと俺達は5メートル離れている、そして後ろのポールまで当たるとなるとアレの射程範囲は今の所7メートルと言った所か……！」

「スピード的に今の距離を保てば未だ避けれますが、少しでも早く出来るならウィルス完全適応者のセイカを盾に使って防衛位しか思いつきませんね……！」

クリス達は今の攻撃の射程距離を大体7メートルと推定し、氷の道が此方側に来るスピードはそれなり程度で5メートル離れていればギリギリ避けられる範囲だとゆかりは推察し、無理ならセイカを盾にすると堂々と言っていた。

因みにその盾発言にセイカは特に反論せずそれが一番だと言わんばかりに無言を貫いている。

「…ちよい試すか。」

大隊長、全リミッター解放許可!!?」

「許可する!!?」

そんな中茜は何か試したい事があつたらしく『アルファ』に全リミッター解放を乞う。『アルファ』は即座に許可しフォン対応に集中して行き、茜はそれを聞き首や関節をポキポキと鳴らし始めた。

「さて行くで、雪女さん!!?」

「アカネ・コトノハ…雪女、この国の魑魅魍魎の1つだったわね。」

ならその雪女にミカエルと呼ばれたその力、見せなさい!!?」

茜はヨナを雪女と呼称して突撃し、ヨナはその言葉の意味を理解しているので対してミカエルの称号を得た力が如何なる物かを見せる様に叫び、茜に向かって氷の道を手を振り動きを先読みしながら走らせる。

「そつちはフェイントやで!!?」

対する茜はヨナの攻撃をフェイントで躲し一気に接近、絶対零度に障壁も無視してヨナの頬にパンチを喰らわせる。

すると障壁の影響で全身がゆっくり凍結するだけでなく、ヨナに直接触れた箇所が凍結し右手が完全に凍りつくも、更に茜は左足で腹に蹴りを叩き込みヨナを吹き飛ばした。

無論左足は足裏から足首から膝下まで一気に凍るが、茜はそれらを振り払う動作をするとその下から綺麗な身体、腕や無事な靴などが現れた。

「アカネ凄いい、私じゃああの凍結には再生が追いつかないのに……」

「(……今の触った時の感触、もしかしたらこれ面倒な戦いになりそうや……)」

それを見ていたシエリーは茜と自身の能力差に感心し、これならヨナの取り押さえも可能ではと思っていた。

しかし茜は今の2撃でヨナに直に触れた際の『違和感ある感触』に何か予想が立てられしく、面倒な戦いになると予想しつつヨナが視線の先で起き上がりそうになっているのを見た。

「喰らえ!!??」

其処にクリスがすかさず小型高圧力バーナーをヨナに放射。

するとヨナの足下が溶けた上に絶対零度を障壁が中和されヨナの体に火が着き始め、これを攻撃チャンスと見たセイカが受け取れた血 Fa i e n B u i e t 清弾を2発足に叩き込み動きを

封じようとしたー。

『ピシッ、ピシッ!!??』

しかし、その足に放たれ弾丸は確かに直撃したが、ヨナの身体がまるで『氷に穴が空いた』様な状態になりつつ血Fallen Blut清 弾が貫通し地面に着弾していた。

しかもその地面に当たった弾頭から血清が凍り付き凝固している光景がセイカや葵達の目に映り当人達は何が起きたか分からず困惑していた。

「…………ふふふ、絶対零度の障壁さえそのバーナーで突破すれば行けると思ったのかしら?」

残念ね、私の体内は障壁よりも更に極寒の世界になり、私自身の身体が『氷そのもの』の様になる程の超低温となっているわ。

よって例えそのバーナーで障壁の無力化してもご覧の通り。

ふふふふふふ、貴女達に私の攻略法が分かるかしら、ふふふふふふって」

何とヨナの身体は氷その物と化す程体内温度が外の絶対零度の障壁よりも更に低音と化しており、例えばバーナーで障壁を無力化してもその身体の攻略法も立てない限り

血Fallen Blut清 弾を当てても血清が体内に回らない二重の防御特性を持つ事をクリスやレオン達は理解し苦い表情を浮かべていた。

「やっぱあの感触は氷を殴ったのと同じやったか。」

通りで手応えが薄い訳や!」

「ふつ、身体能力特化の癖に私の氷を受けても無事とは流石ね。

ウリエルも訓練で私の身体をまともに触れた際は表情を微妙に歪ませたのに貴女はそうじゃない……矢張り肉体強度その物は私に比肩するのかしらね？

貴方なら全身氷漬けにしても其処まで早く諦めずに挑んでくれるかしら？」

茜はヨナを殴り蹴った際の『違和感ある感触』が凍土にある分厚い氷その物を殴った様な物だった事をヨナの言葉で確信に変え、格闘戦も余り意味を成すか不明と頭で計算し始めていた。

対するヨナはマグナも自分の身体を障壁を無視して殴った際に表情が僅かだが歪んだ事を引き合いに出し、茜の身体強度その物は自身と同じ程だと思いき早々のギブアップをせず挑んでくれる物と思っていた。

「ならコイツは如何よ!?？」

『バチバチ、ズダアアアアアアン!!??』

次にマキが隙を突いてレールガンを放つとその弾丸は駐屯地のテントを吹き飛ばしながらヨナの障壁を貫通し、彼女の身体に大穴を開けた。

しかし、その穴は……『血が一切流血せずに3秒で再生』を果たし、ヨナは穴が空いたドレスを氷で覆い素肌を晒す事をしなかった。

「確かにレールガンならば私の障壁を破れる…けれどダメージを与えられるかは別。

無意味………全く意味が無い、悪戯に周りを破壊するだけかも知れないわよ、マキ・ツルマキ?」

「…ウツソでしょ、レールガンぶち当てて無事な奴が居るなんて…」

「ゼラキエルならそれを受けたらダメージをかなり負ってしまってたわ。

ラグエルとの戦闘実践で実際に受けた際は腕き苦しんだ辺り、水は電気を浸透させてしまうからレールガンの圧縮した高圧電力を全身に浴びたのかもね、知らないけど」

レールガンを当てたのにケロツとしてるヨナを見てげんなりするとヨナはゼラキエル、フォンならこれで腕き苦しんだと話しつつ自分には意味が無いかもしれない話し、不敵な笑みを浮かべマキや他の面々を困惑させた。

「高圧力バーナーもダメ、レールガンもダメ、なら何が良いんですか!?!?」

「あかりちゃん、冷静になりなさい。」

幾らヨナ・レティシアさんが無敵に見えても矢張り生物、お義父さんの教え通り生物なら何らかの方法でダメージを与える筈よ。

それをこの場で見つけるわよ」

あかりは今までの攻撃が一切ダメな事に匙投げし掛かるが、ゆかりがマグナの教えの

一つ、『生物なら必ず殺せる』を言いあかりを落ち着かせ冷静にヨナの弱点を分析しようとするゆかり。

そのゆかりの言葉を聞きやや無表情気味になりながらヨナは口を開いた。

「…それがウリエルが貴女達に教えた事の1つなの？」

成る程、理に叶ってるわね。

無敵な生き物なんてこの世には存在しないのだから…例えばガブリエルや私であらうと、ね」

「(……………あれ?)」

ヨナはマグナの教えが理に叶った物と話し、ガブリエル、紅や何故か自身を引き合いに出しつつ無敵な生物が居ない事を肯定していた。

そんなヨナの言葉に葵は何か『違和感』を感じ取り、何処にそれがあつたかを思索しようとした。

「さあ次はこちらの番よ。

まずはアオイ・コトノハとマキ・ツルマキ、貴女達に絶望を贈るわ！」

するとヨナは遂に動き出し、茜並の超スピードで葵とマキに迫り出し2人は急に來た事に反応がやや遅れ回避姿勢が間に合わずそのままヨナを真正面から迎え入れる……筈だったが、此処でセイカが動き出し2人の前に躍り出て互いの両手で押し合う形でヨ

ナを止めた。

「あらセイカ・キヨウマチ。

私と踊つてくれるのかしら？」

なら、絶対零度の冷たさと凍り付く事への恐怖を感じながら踊りなさい！」

「悪いけど私頭弄られた所為で怖いって事もあんまり感じないんだよねえ。

だから貴女の踊りに面白愉快に付き合つてやるわよ、この地団駄踏んだやつかみ者さん？」

「(……セイカさん?)」

セイカは両腕が凍らされ、更に全身まで凍りつき始めたのにヨナを離さず受け止める。

対してヨナはやつと自分と死の踊理をしてくれる者が来た事に不敵に笑い、セイカを氷漬けにしようとした。

そんなセイカはヨナの何かに気付いたのか彼女を地団駄ややつかみ者と呼称して押し合いを継続した。

それを見た葵はセイカの言葉を聞き頭の中でヨナの発言全てを精査しながら銃を構えたままにするのだった。

一方対フォン戦、此方側はフォンをヨナから引き離し、B. Y. が早々にグレネードランチャーの冷却弾を使用し、フォンの一部を凍結させた所に他が血Fallen Bullet 清 弾を叩き込む戦略を試した。

するとその対応は大正解だったらしく上手く血Fallen Bullet 清 弾が働きフォンの動きをやや鈍らせた。

「ぐっ、此れがウリエル達を屠った血清弾か。」

成る程、通りで旧人類如きにレミエルは兎も角ラグエルやウリエルまで殺される訳だ……体内のT | G e n e s i s が抑制されるのを感じるよ」

「…なあコイツ、ライナスやマグナみたいな身体能力無いし対策無しに撃って撒き散らした水や血を流した所をそれを水圧カッターの様に飛ばしてくるだけだし、ハッキリ言って弱くねえか？」

フォンは白龍やマグナがやられた理由を悟りながらこの血Fallen Bullet 清 弾に脅威を感じて

いた。

しかし対してジエイク達はフォンの戦闘能力が本当に水依存で最初に撒き散った身体の水化させた事の水や先程の冷却弾を当てた後に有効打を放った事で流血した血を操りそれを水圧カッターの様に鋭くするのみで身体能力は訓練したクリスやレオン、ジエイクよりやや下程度の為一部拍子抜けしていた（しかしそれでもウィルス完全適応者の為全身油断せずフォンを見ている）。

「ふ、ふふふ、確かに僕は才能が無い。

この水の能力が無ければレミエル以下でしか無い、謂わばレミエル並の失敗作だよ。

だが……そんな僕が何ら準備やお前達に必要な対策をせずに来たと思うか？」

「……お前、何を言ってる」

『ぼた、ぼたぼたぼたザアアアアアアアア』

するとフォンは突然自身を卑下し始める発言をし、かと思えば対策をしなかった枠じゃ無いと話し、B・Yはこの発言に何言っているのか不明で口にしていた。

そんな時突如大降りの雨が降り始め、全身水浸しになり周りに水溜りが出来始めていた。

「雨……そう言えば今日は7：00位から突然の大雨注意とか……まさか!?!」

「そのまさかだ!!?」

待っていたのさ、この時をオ!!?」

『グジュグジュ、ブシャ』

その雨に対しB・Y・が何かに気付きフォンを見ると、フォンは待っていたと発言をしながら両腕に鰓の様な穴と鰭の様な部位が生え、更に手が肥大化し鉤爪が生える一部スーパータイラントの様な変異を見せ、そのまま腕を振るう。

すると腕を振るった先から約1秒のタイムラグで先程よりも大きな水圧カッターが発生してジェイク達は慌てて回避した。

「危ねえ!!?」

「タイムラグは約1秒、だが当たれば即死は免れない……対策とはこの事か」
「その通りだ旧人類共!!?」

何故我々がわざわざこの時間帯に来たか理解出来たか!!?」

ならばそのまま死ぬ、我等が理想郷の肥しになれえ!!?」

フォンは雨が降って来た事で正に水を得た魚になり、先程までの冷静な態度から一変し攻撃的な態度になり、ジェイクやB・Y・は此方が素の性格なんだと判断し、矢張り自分達を見下す態度の裏にはこの様な物を秘めているのだと感じ取り、B・Y・はグレネードランチャーを再び構え、エイダは興味が完全に失せた態度を見せながらハンドガ

ンを構えフォンを迎え撃つ。

時刻はA M 7 : 0 3、両者の戦いが如何に転ぶかはまだ誰にも分からない。

EP XXVII : 1-2 『レオン達&葵達の戦い：VSラファエル&ゼラキエル戦』

ジェイク達とフォンの戦いが激化した頃、レオンや葵達の戦いにも変化が訪れていた。

レオン達の周りは雨が降り始めていたが、ヨナとセイカの周りは雨が氷の粒に変わっており、彼女達の周りだけ異常に温度が低い事が窺い知れた。

「……私がいかがい、ですか？」

「そうだよ、それも相当他人を羨んで仕方が無い超が付く程ね!!？」

ヨナはセイカが突如自身をやっかみ者と呼称した事に眉を顰めると、そのセイカは隙を突き全員から離れた位置にヨナを背負い投げし距離を離させた。

しかしその際に手の皮が完全に剥がれ、両手から血が勢い良く流れ始めていた……が、ウイルス完全適応者の再生能力で直ぐに元に戻り、氷を払い再び戦闘態勢に入る。

「さて私はヒントを与えたよ。

皆気付けるかな？」

「……やっぱりセイカさんは何かに気付いているんだ！」

だからああやって挑発を……考えなきや、今までの発言を……！」

セイカは葵達を見てヒントを与えたと言い、それを聞いた葵はセイカが何かに気付いたのだと断定し、全ての発言を思い返して何があったかを精査して行く。

するとゆかりは何かに気が付いたのか声を上げる。

「セイカ、茜さん、私が彼女に話し掛ける時間を稼いで下さい!!？」

クリスさん達も、お願いします!!？」

「ゆかりさん、何か分かったの!!？」

「無理難題どうも、ならやったるで!!？」

「……よし、了解した!!？」

ゆかりは茜にセイカ、クリス達に自身が話す時間を稼ぐ様に言い放つとそれぞれが陣形を取りつつ動き出し、茜とセイカは再び絶対零度の障壁を無視しようと走り出し、クリスは援護としてバーナーを放ち一時的に障壁を中和、2人が動き易くなる様にした。

「甘いわ、周りは水浸しならば私の力が更に発揮出来るわ!!？」

「っ、拙い!!？」

するとヨナの足元から一気に地面が全方位に凍り始め、それを見たクリスは足元にバーナーを放ち続け、自身が凍結しない様に周りを火で囲い炎が凍ろうが溶かし、他の面々は兎に角後ろに走って自身が凍らされない様にした。

「せいやあ!!?」

「はあ!!?」

そんな全方位攻撃を茜達はジャンプしてそれを避け、ヨナに蹴りを喰らわしそれを止めさせた。

それを見たクリスも炎の中から脱出して葵達の前に出る。

「危ない危ない、話し掛ける前に氷の像になる所でした……ヨナさん!!?」

ちよつと話がありますが良いですか!!?」

「敵に話し掛けるなど悠長ね!!?」

それとも降参かしら!!?」

何方にせよ貴女もアカリ・キズナもアオイ・コトノハも殺すわ、この私の手で

!!?」

ゆかりは話す前に死ぬのを回避し、ホツとした後ヨナに向かって話があると叫び始めた。

そのヨナは茜、セイカの2人と素人レベルでは無い氷のナイフを使ったシステマを用いて格闘戦を行い、2人に的確にダメージを与えつつカウンターを受けてもなお攻撃し、話し掛けて来たゆかりのみならず、あかりや葵すら殺すと宣言しつつ茜達に蹴りを食らわせ距離を離れた。

「いいくひやこいわ!!?」

何殴った箇所や殴られた箇所から凍結するとか、ほんまに雪女かいな!」

「茜さんもう少し我慢して下さい!」

…さてヨナさん、貴女は全てが憎い、憎くてしょうがないと言いましたよね?」

「ええそうよ、だから殺すわ、貴女達全員!」

茜とセイカは手、足や触られた箇所を払いかなり体温と体力を持つて行かれたらしく身体を動かして体温を保とうとしていた。

そんな中でもゆかりはヨナに話し掛け、全てが憎い事を再度確認して再び殺害予告を受ける。

「矢張り言葉で止めるのは不可能か、なら何としても武力で止めるしかー!」

「いえクリスさん、レオンさん、意外と言葉で止まるかもしれませんよ?」

「何、本当か?」

クリスとレオンはそんなヨナの様子を見て言葉で止めるのは無理と判断しいよいよ自身等が本気で動こうとした。

が、ゆかりは意外にも止まるかもと言い2人を驚かせた。

「私が貴女達の言葉で止まる?」

「巫山戯た事を言わないでー!」

「ねえヨナさん、全部が憎いつて言うなら………何故お義父さんすら憎いと話さないのですか?」

「…はあ?」

ヨナはゆかりの言葉に怒り足に力を込め走り出そうとした瞬間、ゆかりは何故マグナが憎いと話さなかったのかと語り、それを聞いたヨナは何を言っているんだと言った反応を示した。

「だつて全てが憎いなら余り干渉しなかった筈のお義父さんさえも憎いと感じる筈ですよね?」

なのに何故鬱陶しく感じなかった、何て言つちやつたんですか?」

「…あつ!!?」

確かにヨナさんはお義父さんを憎いつて言つてない!!?」

確かにゆかりさんの言う通りの事しか言つてませんよ!!?」

するとゆかりは全て憎いと発言したにも関わらず彼女が何故マグナが余り干渉しなかっただけで鬱陶しくなかったかと話し、あかりも発言を思い出しマグナが憎いと一言たりとも言つていないと叫んでいた。

「それは私に干渉しなかったからー」

「ええ、貴女の言う通りお義父さんは干渉しなかったでしょうね。」

だって……貴女みたいなタイプの人にはその大きな背中で語り掛ける人なんですから。

多分訓練の後、貴女に話しても多く語らず、背中で伝えたい事を語り掛けてたんじゃないんですか？

恐らく……『これから大きな選択をするから俺の様に間違えるな』って」

「……………っ!?」

ヨナはゆかりの発言を否定しようと余り干渉しなかつた事を叫ぼうとしたが、それに割ってゆかりがマグナの人物像とヨナのタイプの照らし合わせ、養父は言葉では語らず自身達が憧れたその大きな背中で語り掛けたであろう事を口にし、更にその内容も予想して話した。

するとヨナの表情が微妙に驚いた物に変わり、それ以上は口にしない様になっていた。

「無言は肯定と受け取りますね。」

何でこんな些細な言葉選びを間違えたか、多分貴女は道具として育てて来た両親の呪縛から漸く解放されるから舞い上がってしまった単純な言い間違いで本心を見せてちやつたんじゃないでしょうか？」

「あ、ゆかりさん、なら私にも言わせて下さい!!?」

でもって貴女、多分お義父さんの事を逆に気に掛けてたんでしょ!

本当のお父さんみたいだ、こんな父がいたら何れだけ幸せだったか、みたいな

！」

「……勝手な憶測で語るな、養女でありながらウリエルを撃った、私の同類が!!？」

そしてマグナを良く知るゆかり、あかりは其処から想像出来る様々な事を語り、特にあかりはヨナがマグナが父親なら良かったのにと感じていると思ひ、だからこそ鬱陶しくなかつたに結び付くと思ひ付いていた。

そんな2人にヨナは自身と同類と語り叫んでいた。

だがゆかりは笑みを止めず、茜達もゆかり達のお陰でヨナの事を掴み始めていた。

「同類……つまり親殺しと言いたいのですね。」

はい、私達はお義父さんを撃ちました。

グラスホッパーを知る者として、その名に育てられた者の責任として。

でも貴女はそれを今口にして気にしてる……要するにお義父さんに対する想いの答えがそれなんですよ。

だから言える、貴女は全てが憎い訳じゃない。

多分貴女のは……羨望とかそんな可愛らしかった物が重くなり過ぎたんで

しよう。

だからセイカはやっかみと言ったんでしようね。

それから、全部憎いならその懐にしまった大事な衛星レーザーで全部吹き飛ばせば私達の始末とかもつと早かったのにそうしなかった。

やっぱり貴女はちよつと矛盾しているんですよ」

「…っ!!？」

ゆかりの理論立てにヨナは手に力を込めつつ黙って聞く事しか出来ず、更に表情を明確に歪ませた。

茜や葵達はゆかりの意見が正しい、見事にヨナの矛盾点や凶星を突いたのだと感じ次に茜が畳み掛ける事にした：内心白龍に謝りながら。

「ゆかりさんの言葉に否定出来へん時点であんさんの想いの裏事情は大体取れた、で
!

んで、あんさん白龍が妙に気に掛けて来て憎かったとか言つとったけど、白龍があんさんみたいな抜き身の刀に触れてた理由は分からへんの！」

「そんなの知る訳無いじゃない!!？」

大方私が勝手な行動を取らない様にガブリエルから言い付けられていたんでしよう!!？」

大体ラグエルの遺言で私に構うとか、奴は何て言っていたのよ!!？」

この場で笑い物にしてやるわよ!!？」

茜はゆかりの言葉に反論しないヨナに急接近しその手に持った氷のナイフをはたき落とし、格闘戦に連れ込みながら白龍が気に掛けていた理由を知るかを問う。

するとヨナは知らないと話し、更に白龍の遺言で自身に構う茜達にその遺言を問いつ茜を蹴り飛ばしレオンが何とか受け止める。

そして笑い物にすると口にしてそれを聞こうとした。

「君の言うラグエル、蘭白龍が何を言っていたかかって言うてねえ。」

君を救つてあげて、君は身勝手な兄に巻き込まれた加害者であり被害者、その心を救つてあげて、だよ」

「……………何、それ、出鱈目を」

「出鱈目じゃないわ、私も、アカネやマキ達も聞いてたから間違いないわよ」

するとセイカが悪戯つ子的な笑みを浮かべながら白龍の遺言をヨナに聞かせた。

すると彼女は鳩が豆鉄砲を食った様な表情を浮かべ、出鱈目と否定しようとしたがシエリーが援護としてハンドガンを構えつつセイカが嘘を言っていないと話し、レオンや彼に受け止められた茜、マキ、そして葵もまた真剣な表情でヨナを見つめ、否が応でも事実だと認識させた。

「うん、白龍は初め無理難題を私等に押し付けて死んで行つたよ。」

でもってあの感じ、あれは多分……………」

「せやなあ、アレは叶わぬ恋を暴露した一途な男って感じやったなあ……」
「……………えっ……？」

其処にマキと茜が畳み掛け、白龍の言葉は正に一途に一人の女性を愛した紳士的な男の態度だったと口にし、ヨナはそんな事分からなかったと言わんばかりに驚いた表情を見せ、更に周囲の温度やヨナの足元の氷に変化が起き、一番最初に自身等に話し掛けて来た状態と同じになっていた。

「ヨナア!!？」

そんな旧人類共の出鱈目に耳を傾け

『ボン、ガシャン!!？』

「てめえの相手はこつちだ、この無能な糞兄貴が!!？」

其処にフォンがヨナに駆け寄りながら耳を傾けるなど叫んでいたが、B・Y・が冷却弾を当ててジェイクが徒手空拳で凍った箇所を中心に殴り最後に掌打を叩き込みフォンとヨナを再び引き離し、更に『アルファ』が靴に仕込んだナイフで斬り付けつつ蹴り、最後にエイダが独特のキックを決めて完全に両者を引き離した。

「大事なお話中に混ざっちゃうダメって親から教わらなかったのかしら、レティシア家の坊や？」

更にエイダが挑発を決め、フォンの表情を歪ませ彼を激昂させつつヘイトを稼ぎ此方

の4人に完全に目を向けさせ、ヨナに今後近寄せたりする冷静な思考を奪い去って行く。

更にこの場に居るレオン達を祝福するかの如く暗雲は去り朝日が再び照り付け始めた。

「…ラグエルが、私に…?」

そんな筈…」

「はあ、こりゃ自分の事に集中し過ぎて他人の感情に気付けんかったパターンやな。

ええか、あんさんみたいな面倒臭い奴に必要以上に構ったりするのは間違い無く何らかの迷惑なり想いなりどっちかがあるからやで?」

「そして白龍のあの態度は間違い無くヨナさん、貴女の事を愛していた筈だよ?」

例えば自分に向く感情が真逆の憎しみとかそんな物でも、ただ一途に貴女の事を彼処に居る身内とも呼べない人何かと比べ物にならない位見て気にしていたのよ。

それこそゆかりんの言う、背中で語ってたマグナさんレベルで…」

ヨナは如何やら白龍の気持ちなど考えた事が無かったらしい態度を見せ、琴葉姉妹が彼女に白龍が必要以上に気に掛けていた事を女の勘で言い出し、マキも白龍の生き様を思い出し確かにバイオテロ犯だったが同情の余地はB・Y・達が相手取っているフオンと比べても全然あつたと感じながらヨナがいつ攻撃して来ても良い様に態勢を整え

ていた。

「だからヨナさん、貴女が今知らなかった事がある様にこの世界は沢山未だ知らない物だらけなんだよ。」

その内の2つ以上を私達は奪ったけど、それでも私は言うよ。

この世界は捨てた物じゃないって、だから」

「…五月蠅い、五月蠅いうるさいうるさあああああああいつ!!?」

『ガシヤガシヤガシヤン!!?』

葵は更に説得を続けて言葉を紡ぐが、それに対してヨナは痲癩を起こした様に叫び、更に周りの水溜りを一気に凍らせつつ尖った氷の柱を凍結箇所から乱雑に生やして葵達を襲わせる。

「危ない!!?」

「ちっ、痲癩とかガキかいな!!?」

クリスやレオン達は近場に居た葵達を庇って柱を避けさせ、茜やセイカは生えた瞬間から拳で碎き被害を抑えていた。

そんな中茜達はヨナが懐から衛星レーザー操作用タブレットを取り出す所を目撃した。

「ヤバっ、衛星レーザーでウチらを自分毎吹き飛ばす気やアレ!!?」

「雑音なんか要らない、憐みも同情も何もかも!!?」

皆々……吹き飛んでしまええええ!!?」

茜やクリス達は走ってそのタブレット操作を止めようとしたが、ヨナの方が1歩早く操作を終え自身らの頭上にある監視衛星にレーザーを放つ様に操作してしまった。

そして葵達は頭上を見て身構えた――。

「……………あれ?」

「何も、起きない?」

が、先程は直ぐ様レティシア邸が吹き飛んでいた筈なのにその僅かな時間が経過しても何故かレーザーが落ちてくる気配が無く、葵やシエリー達は困惑し、ヨナはタブレット操作を何度やってもレーザーが来ない事に焦りタブレットで状況確認をしていた。

「そんな、何故衛星レーザーが……一体何が」

『Warning, not receiving all satellite signals』

Warning, not receiving all satellite signals』

すると全衛星の信号を受信出来ないとタブレットに警告文が表示され、何が起きたか分からずヨナは混乱し始めた。

「そ、そんな!!?」

さつきまで使えてた衛星が全部信号が途絶えている!!?」

何故なの、私が構築したファイアウォールを突破されるわけが無い、一体何で!!?」

ヨナは混乱して端末を何度も弄るが警告文が出るだけでどの衛星も使えなくなっていた。

それを聞き葵達は何が起きているのかをゆつくりと頭の中で整理して行く。

『…まさか!!?』

すると、ある可能性が女子会参加者達の中に浮かんだ。

その可能性とは……。

ジル達が乗り込んだ輸送機内、其処できりたんは渡されたPCから手の込んだファイアウォールを突破して全衛星にハッキングし、特に日本上空を飛んでいた衛星から先に自爆コードを解析して打ち込み、その際に衛星レーザー発射シグナルが丁度発せられワンタッチの差で全衛星の自爆に成功させていた。

「まさか、本当に衛星をハッキングして自爆させるなんて…この子、本当に凄いわ…」
「あ、危なかったです……後キーボードタッチ分遅れてたら今頃葵さん達はレーザーで吹き飛んでました……全く、下手に強固過ぎるファイアウォールを作るなつての」

ジルはその光景を見てきりたんのハッキング能力の高さに脱帽し、対するきりたんは親端末から衛星レーザー発射シグナルが発せられていた事を察知しており、あと少し自爆コードの打ち込みが遅れたら優先順位でレーザーが発射されていた事を愚痴り、ぐつたりしていた。

「ありがとうきりたんちゃん、葵達を守ってくれて…!!？」

「…ま、ツケを払うって約束でしたからそれをやりましたよ」

藍はきりたんに葵達を守った事に感謝し、きりたんは照れ隠しでツケ払いの約束を果たしただけと話しつつPCをジルに返し輸送機の天井を見上げていた。

しかし、その心の中には達成感があつた為本人は気付かないがきりたんは満足した笑

みを浮かべ、やり切った感を出しながらゆっくり休むのだった。

「そ、そんな……まさか、私の防衛プログラムを誰かが突破して衛星を自爆させたと言
うの……そんな、有り得ない……一体誰が……」

「……流石きりたん、私達が知らない間に……なら、私も!!?」
操作タブレットを凍った自身の足元に落とし愕然とするヨナ。

その間にクリス達はバーナー等で氷の柱を溶かしたり砕いたりしてヨナの周りを取り
囲みいよいよ残るは彼女の二重防御を如何に破るか、それとも言葉による説得を続け
て行くかの何方かになった……その次の瞬間。

「やあああああ!!?」

「なっ、葉!!?」

何と葉がいきなりヨナに組み付き愕然としつばなしのヨナを押し倒してしまふ。

が、まだ絶対零度の障壁等はヨナの精神が乱れて弱まったのみで残っており、葵はヨナに組み付いた部分等から凍結し始めてしまう。

「ぐ、ううううう!!?」

「ア、アオイ・コトノハ何を!!?」

「ヨナさん、貴女は全部憎んでたつて言いましたけどやっぱ皆さんの言う様に自由な人達に憧れて、それを妬んで憎しみに近くなってしまったんですよ貴女は!!?」

それに、貴女をしつかり愛してくれた人も、導こうとした人も貴女の側に居てくれた!!?」

なら貴女の知らない事ばかりがまだこの世界にはあるじゃないですか、だからその矛を収めて投降して下さいよ!!?」

葵の突然の行動に驚くヨナに葵は今までの全てを統括しヨナは矢張り道を選べた人達に羨望を抱き、それが拗れた結果憎しみに近い形にまで堕ちてしまったと改めて思いつつヨナに白龍やマグナの真意を知らなかった事を突き、この世界は未知がまだある、それを知らせようとして投降を求めた。

しかしこの間も葵は凍結して行っている。

誰から見ても無謀な試みと見て取れた。

「わ、私を貴女は許すとも」

「許す訳無いでしょ当たり前事だけど!!?」

私達の街を、友達を奪った貴女や琴葉紅達は許せない!

でも貴女は今残ってる2人と違ってまだ死んでそのまま罪から逃げるか生きて罪と向き合って償う権利が残ってる!!?」

巻き込まれたって言うなら今からその手を掬い上げて罪を償う様に生きる道と一緒に選ばせてあげても良いよ!!?」

葵はヨナを許さないとしつづつ2つの道：死んで罪から逃げるか、生きて罪と向き合うかの道を揭示してどちらかを選ばせると叫んでいた。

しかし凍結箇所が広がって行きいよいよ身体の半分が凍結してしまっていた。

「私に、また生き方を強要すると」

「強要なんかしてないよ!!?」

だからこの場で死ぬ道もあるって言ってるじゃない、話を良く聞いてよ頑固者!!?」

それに、現に貴女に残された道はこの2つだけなんだよ、私はそれを今教えてるだけ!!?」

選ぶのは貴女、あつちに居る兄と呼べない奴や私の父と呼べない奴がCLOW

N入りを強要したのなら、今はもう強要じゃない自由な道を選べる、その土台が今出来上がったの!!?」

そして私が此処まで貴女を庇うのは私達姉妹と貴女が本当に鏡合わせ過ぎるからなのよ!!?」

だから私達が昔選んだ、選ばせて貰った様に自分で選んで!!?」

死ぬか、生きるか、その2択の何方かを!!?」

葵はヨナに今2つの道が出来上がった事を更に揭示し、ヨナはこれを強要と呼ぼうとしたが、葵は鏡合わせと称したヨナの意志でどちらかを選ばせると叫び二者択一の選択を彼女自身に選ばせようとした。

紅やフォンがCLOWN入りを強要したのとは違うと比較しつつ葵はあくまでヨナの意志決定を促した。

そして身体の7割が凍結しいよいよ生命維持が出来なくなる…その瞬間にヨナが葵を蹴って引き剥がし、高圧バーナーを持つクリスの方に軽く飛ばした。

それを見たクリスは葵の側に火を着けて凍結箇所を熱し溶かして体温を正常に戻そうとし、茜も葵に駆け寄りその行動を咎め始めた。

「バカ、あのままやったら間違いなく死んでたで!!?」

葵、一体何考えとんねん!!?」

「え、えへへ。」

無茶だとかそうは思わなかったよ。

多分ヨナさんならこうやって突き飛ばしてくれて信じたから」

「それがもしも違っていたら如何するんだ!!？」

結果的にそれが正しかったと証明はされたが結果論に過ぎない!!？」

死ぬ気だったのか、君は!!？」

茜やクリスは葵の無茶苦茶な行動を咎めるが、葵自身は今のヨナを信じ行動し死ぬ事は無いだろうと思つての行動だと話していた。

しかし矢張り結果論の為クリス達は決して葵の行動を認めず彼女の凍結箇所を溶かしつつ怒つていと言わんばかりの表情を向けていた。

「わ、私は……私は……」

「ヨナさん……もう一度言うから。」

此処で選んで、死ぬか生きるかを。

もう誰も貴女の今の選択を奪わず選ばせてくれるから……だからさ、もう面倒な事を考えずどつちか気軽に選んじやいなよ。

まあ私は何方にしても許す気は余り無いけど」

ヨナは何故今自分は葵を突き飛ばしたのかも分からないと言つた表情で自身の手を

見つめ困惑していた。

そんなヨナに葵は再び死ぬか生きるかの何方かを、許す気は余り無いと付け加えつつ自由を選ばせようとしていた。

マキ達友人組は葵に近付き怒った表情を見せ、レオン、シエリー、セイカはヨナが如何なる行動を取ろうと対応出来る様に囲んでいた。

そして、ヨナが選んだ選択は……。

「……………くつ、あああああああああ…!!?」

声にならない叫びを上げながらの凍結能力の完全解除、つまり武装放棄…投降する道を選んだのだ。

葵はヨナはこの道を選んだ事に満足しつつ体温が戻り次第彼女に近付きもつと話そう、そう思いながら朝日が綺麗な空を見るのだった。

「コイツで終わりだぜ、糞兄貴野郎!!?」

「ぐ、うわあああああああああああああ!!!」

一方ジエイク達の方だが、矢張り油断せず戦闘を行いつつフォンが途中からヨナの方に気を取られ過ぎた隙にジエイクが止めの血Fallen Blut清弾をウイルスが消え絶命しないギリギリまで叩き込んだ結果、遂にフォンは地面に倒れ伏せ勝負が決した。

「ふん、途中から目の前の戦いでは無く彼方に気を取られるとは…貴様に己の運命を切り開く力も意志もなかつた様だな。

三流以下の凡人が」

「く、くそ、ヨナあ…何故旧人類如きの言葉に耳を傾けたんだ、君はそんな子じゃ無い、選ばれた人間だろうに…!!?」

「呆れた、坊やは妹ちゃんが自分の所有物か何かだと勘違いしていたのかしら?」

全くお話にならない、頭の中が本当に救い様が無い馬鹿その物ね」

戦いを終えた直後、フォンはヨナに対し見下している旧人類の言葉に耳を傾けた事に困惑や怒り等の感情を向ける。

対する『アルファ』はフォンが三流以下の凡人と酷評し、エイダもその救い様の無い思考に呆れ果てこれまた酷評をし、彼と言う人間が如何に愚かなのかと存分に知らしめていた。

「さて、この馬鹿野郎の無力化に成功したからさっさと血を抜き取ってから捕縛する

自身の都合の良い解答しか見出さず、その上で紅を殺す為の血清を作り出そうとして
 いると3割正解7割不正解な答えを口にしながら自身に残った最後の力を振り絞り、何
 と笑いながら自身の首を水圧カッターで切り落とすと言う自殺行為に及びB・Y・達
 を驚かせた。

そして血が首の方から漏れ出し、これ以上の採血が不能になりB・Y・は確保出来た
 採血管を密封袋に詰めた後この駐屯地にある空いたクーラーボックスにそれを入れよ
 うと歩き出し……その次の瞬間、既に無意味だが血Fallien Bullet清弾入りのカスタムガバメン
 トを引き抜きフォンの死体に銃弾を怒りのまま叩き込み、何処までも身勝手な彼に対す
 る態度を露わにした。

「本当、救い様が無い愚か者だったわね……もう何も言う事が無いわ」

エイダも呆れを通り越して無表情になり、フォンの死体を背にした後レオン達の方に
 向かいこの事後報告を淡々と済ませに行った。

そして残ったジエイクや『アルファ』も手に力を込め、それぞれフォンに対し怒りや
 呆れ、様々な感情を滲ませた後クリス達の方に合流して行った。

そして4人の一致する考えはただ一つあった。

それは、フォンが自分が見下す者達以上の身勝手な愚か者と言う酷評であった。

EP XXVIIII 『最終幕間：ヨナの過去と最終決戦の幕開け』

フォンが自害し、ヨナが投降してから2時間後のAM9：28、アメリカ軍特殊空母から簡易無菌室用、及び血清生成用器材が輸送機で駐屯地に運び込まれ始めていた。

そしてその輸送機の1機の中から何とアメリカ軍特殊空母艦長であるシルバ・ヴァレット大佐が降り立ち、現在クリス達の前で拘束中のヨナの前に立った。

「……」

「……シルバ、叔父様……」

ヨナは監視衛星からアメリカ軍特殊空母の艦長が叔父であるシルバ大佐だと分かっていた。

が、直に会ったのは数回程度であり今この場に立ったと言う事は自身に何か言う……それも咎める事を言う気なのだろうと感じ無表情でシルバを只々見つめていた。

そしてシルバの取った行動は……ヨナを抱き締めると言う本人すら予想していなかった事だった。

「……えっ?」

「ヨナ、すまなかつた。

お前の苦しみを叔父として理解してやれずこんな事に……本当にすまなかつた、無知だった私を許してくれ……!!？」

ヨナは何で抱き付かれているか理解出来ずにいたが、次のシルバ大佐の一言で全てが解せてしまった。

謝罪……血の繋がりがあつた家族として何れだけ苦しんでいたか、こんな道を選ばせてしまった自身の無知と無力からの謝罪であつた。

しかしシルバは既にレティシア家からアメリカに嫁いてしまつてた為シルバがヨナの現状を理解するのは地理的にも様々な理由からも無理だとヨナは理解しており、にも関わらずシルバ大佐が自身の家族として謝罪していた。

これに対しヨナの反応はと言えば。

「……………」

無言、ただ無言を貫きつつも涙を流し、シルバ大佐が近くに居れば、或いは自身を引き取つてくれたらと言う今はもう無き可能性に情景し、シルバ大佐への申し訳無さが心に溢れ涙を流したのだつた。

そんな確かな家族の光景が10分続いた後、シルバ大佐は一度遺体安置所のマグナに敬礼をした後血清生成準備の指揮に、ヨナは血液採取後にクリス達の尋問を受けにそれ

ぞれ別のテントに向かって行った。

因みにレオンは一応エイダから返された茜と葵の血液サンプルや死滅確認用のT—
Genesisサンプルを、2人の生い立ちを考えてシルバ大佐に念の為渡したのだっ
た。

「では、尋問を開始するが君には黙秘権もある。

言いたくなければ言わなくて良いが構わないか？」

「…良いわ、聞かれた事は大体答えるわ。

もう黙秘しても意味は無いのだから…」

そうして尋問用になったテントにクリスやレオン、『アルファ』、B・Y、そして少女
組が特別に立ち会い尋問が開始された。

ヨナの態度から一応大体答える雰囲気を感じるが捕虜に対する扱い等の条約もあり
一応様式的に黙秘権行使もあると伝えてから1つずつ問い質しが行われた。

「では先ず君の経歴…一応確認だから簡潔に答えてくれて良い。

ヨナ・レティシア、誕生日は1998年6月13日、血液型はO型、レティシア家の若き盟主で博士号を幾つも取得、7歳時点で大学を卒業、そのまま数多くの企業の親元、筆頭株主になり様々な事業で手腕を見せていた、違う部分は無いか？」

「合っているわ」

先ずクリスが経歴を並べ、合っているか如何かを聞くとヨナは合っていると話し早く次の質問に行きなさいと言った雰囲気を出していた。

「なら次はこのバイオテロ組織に加入し事を起こした動機だが…：蘭白龍の言葉等を加味すれば無理矢理CLOWNに入れさせられた挙句今がある、違うか？」

「…そうね、その話に至るまで私の生い立ちとかどんな風に生きて来たかを教えるわ…」

次にレオンが本題であるCLOWNのメンバー入りやバイオテロを起こした動機等に踏み込み出した。

一応レオンも白龍の言葉等からヨナはフォン達に勝手に入らせる様にされたと想像していたが、その事実確認の為に話をする、ヨナは先ず生い立ちから振り返りその話に繋げる様に言い、口を開いて行った。

「…先ず私の兄、いや、兄とも呼びたく無いゼラキエルが当初はレティシア家の盟主に

なる予定だった、けど彼はあの毒親達の思った様な能力を見せずがっかりさせたわ。

其処で白羽の矢が立ったのは当時2歳だった私だった。

私は英才教育と言う名の暴力や過干渉等を受けてしまったわ」

「……やっぱり、自分の道を選ばせて貰えなかったんやな、ヨナさん」

ヨナは先ず家庭事情から入り、其処で先程自害したフォンが両親：ヨナが毒親と呼称した2人の思った通りに能力を発揮せず、代わりに当時2歳だったヨナに英才教育……本人曰く暴力や過干渉に塗れた物を受けたと話し、茜は横から道を選ばせて貰えなかったと口にした。

それに対しヨナは静かに頷き続きを話した。

「その教育の甲斐あってか、私は6歳時点で博士号を幾つも獲得、7歳でレティシア家御用達の名門大学卒業、そしてレッドフィールドの言う通りの一見すれば順風満帆、その実は束縛しかない生活を送ってたわ。

まあこの時はまだそれでも良いと思ったわ、これが私の辿る道なんだって諦めが付いたから……あの時までは」

「あの時……もしかしてCLOWN入り、琴葉紅と接触してしまった時ですか？」

ヨナは一応その毒親達の敷いたレールの上を歩く事に7歳時点で諦めが付いたらしくそれまでは良かったと話した。

しかし、次にあの時と口にした瞬間から表情が険しくなり、葵がこれがCLOWN入りかと思ひ聞いてみるとヨナはドレスが破けそうになる位力を込め始め、全員当たりだと確信して話の続きを待った。

「…きつかけは2008年6月、ゼラキエルがBSAAが纏めたアンブレラやスペインサーの目的が書かれた禁書に興味を惹かれ、スポンサー権限や金に物を言わせて閲覧したのよ。

そしたら……其処から全ては狂って行つたわ。

ゼラキエルはスポンサー信奉者になり私にその思想の先のビジョンを話す様になつたわ。

初めはお金にならないし雑音程度だったから無視してそのままにしたのよ……でも、それから2ヶ月後の8月、私は……兄に旅行と称した誘拐を受けたわ」

『……?』

そしてヨナは2008年の話をし始めた時から表情が怒りや憎しみ、悲しみ等様々な負の感情を煮詰めた物になり詳細を話して行つたよ

如何やらフォンがレティシア家と言うBSAAが国連組織になつた頃からのスポンサー権限を使いスポンサーやアンブレラの記録を閲覧し、其処からフォンはスポンサーの信奉者となつたと話し、更に2ヶ月後に実兄から旅行と称した誘拐を受けたと聞き全

員が驚き、其処であかりが口を挟んだ。

「ちよ、ちよと待つて下さい、誘拐つて両親とか、レティシア家は名家だからお家に執事さんやメイドさんが居るはずですよね!?!?」

誰も気付かなかつたんですか!?!?」

「ゼラキエルが書置きで1週間兄妹で旅行に行くを書いて毒親はそれをあつさり信じてそれつきり。

有能な執事とメイドが気付き掛けたけど……足取りを途絶えさせた上に私にそれを吐けば殺すと脅しも掛けられたから迷宮入りよ」

あかりの質問にヨナは両親はフォンの言葉をあつさり信じてそのまま、更に書置きや気付き掛けた人にSOSを出せば命はないと脅されたと話し、どの道誰も気付けない状況と知り葵達の中でフォンの外道さも増していた。

そしてヨナの話はまだ続く。

「そうやって誘拐された先…:E d e n I^{エデンワン}で私はウイルス完全適応者だったガブリエルに出会ってしまったわ。

私の視線の先でガブリエルとゼラキエルはスペンサーの理想を高らかと話して共感しあった結果私と言う盟主の了解無しに支援を取り付けてしまったわ……そして、ガブリエルが私を脅迫して来たわ。

命が惜しくば協力しろと……ウイルス完全適応者の力をこの身で味わいながら脅迫を受けた私は折れたわ。

もう詰みだ、従うしかないと……こうして私はCLOWNの結成メンバーになつてしまつたわ……」

そしてヨナはフォンの勝手な行動や紅のウイルス完全適応者の身体能力を活かした暴力による脅迫を受けた事でCLOWNの結成メンバーに仕立て上げられてしまつたとクリスやレオン達、そして葵達に話した。

それを聞いた葵や茜は特に頭に血が上り、紅をこの手で仕留めないと同じ被害者が増えると感じ表情を険しくしていた。

対してクリス達も怒りを燃やしたが、CLOWNが2008年8月に結成されたと裏を取りそれを記録していた。

「其処からは貴女達の知る様にレイシア家の資金をガブリエルの方に幾らか回してT—G e n e s i s のゲノム編集に協力したり、CLOWNが使う為の監視衛星も作り上げてロシアに提供したわ……やらないきや命が無かつたから。」

因みに衛星レーザーは私からのせめてもの抵抗心で取り付けさせる計画にしたわ。

全てはこのルールを敷いた毒親とガブリエル達を葬る為に……この頃から

でしようね、自由に生きる人達に対して憎悪……いえ、それに近い羨望や嫉妬を抱いてしまったのは」

ヨナは残りはクリスやレオン達が調べ上げた通りの内容と、その裏で命が無いと脅されていたと話し、更にその辺りから今のヨナ・レティシアが形成され衛星レーザー等を付けたのはせめてもの抵抗心と分かり、それが長年蓄積された結果親殺しにまで結び付いたのだと分かり琴葉姉妹やマキ達は同情の余地所か白龍の言った様に加害者であり被害者と言う複雑な立場だと理解し胸を痛めていた。

「酷い……あの糞兄貴野郎、ガチモンの糞野郎じゃないか!!？」

「これではつきりした事はヨナ・レティシアには情状酌量の余地がある事だ……バイトロに加担やレティシア邸を吹き飛ばしたのは許されませんが、後者は兎も角前者は利用された末なら……極刑を免れる可能性は大いにあるな。」

但し証明する為のフォン・レティシアが死んだのが痛いかな」

B・Y はフォン・レティシアが本当に最低な男だった事に憤り、自分の足を叩いてその怒りを露わにしていた。

そして『アルファ』はヨナが利用された者なら情状酌量の余地があると言いつつフォンが自害し、証明する者が居ない為手痛いとしていた。

後は紅の日記にそれらしい事が書かれてない限りヨナの罪を軽くする事は出来ない

だろうとクリス達も悟っていた。

「…それで、余談なんですけど良いですかヨナさん？」

「ユカリ・ユツキ…貴女の事だからウリエルの事を如何思っていたか聞きたいのでしよう？」

「はい」

其処にゆかりがヨナに話し掛け、ヨナ自身もマグナの事を如何思っていたかを聞きたいと予測が付いた為あっさり口を割り始めた。

「…ええ、貴女達の言う通りよ。

彼が父親なら、とか父親の様に思っていたわ。

だからこそ、ウリエル…いえ、マグナを撃った貴女達の事を許せなかったわ。

例えそれが貴女達3人の事情であっても…だからわざわざこの手で殺しに来ようと思ったのに……」

「それは申し訳ありませんね、私達はお義父さん仕込みでかなりキツク、そして全てを教わりましたから。

だからセイカの言葉が出た辺りから貴女の裏の裏を読む事を優先させて貰いました、お義父さんの教え通りに」

如何やらヨナはマグナの事を父親の様に想っていた事が彼女の口から出る。

そして、だからこそヨナはマグナが死んだタイミングでこちらを襲撃したらしかった。

しかしゆかりはマグナの教えを全て一身に受けた者の1人としてその教え通りにヨナの事を考えたのだった。

これにはヨナも諦め、葵やゆかりには勝てないと彼女の中で確信するのだった。

「あの、もう1つ余談なんですけど、今のT—Gene-sisのウイルス完全適応者って皆能力が違ったじゃないですか？」

ヨナさん、これには理由があるんですか？」

「…ええ、現段階のこのウイルスに完全適応した者の能力はその者の精神性や適応にも個人差が出るから、それらの差で決まるわ。」

因みにレミエルは1番適応率が低くてケルビムと同じく炎を操る能力と高めの身体能力しか目覚めず、マグナは私達の中で3本指に入る身体能力の高さを誇っていたわ」

ついでの余談で葵がT—Gene-sisの変異能力が全員違った理由をヨナに聞くと、如何やら個人差と精神性に関わって来ると判明し、ヨナの場合なら心が凍り付いてしまい、そして内に秘めた物が大きい故に氷になったと葵は予想し、その他にも理由が想像出来た為納得が行っていた。

「では最後にガブリエル、クレナイ・コトノハが潜伏しているEdenワンの位置情報を教えてくれ。

西側の2ヶ所の内何方かが当たりの筈なんだ。

だからそれを教えてほしい、それで尋問は終了する」

「それで尋問を終わりにするなんて優しいのね。

なら……此処よ、ROICE学園北西に1km、其処に立つビルの地下、其処がEdenワンのあるポイントよ。

因みにこっちのダミーポイントにはケルビムが2体配置されているわ。

まあ、監視衛星を爆破された時点で向こうは慌ててケルビムを本拠地に戻すか、それかゲーム続行で一気にB・O・Wをバイオハザード地区全てに解放して大混乱を招くかの何かが奴の性格を考慮しての最有力の選択だと思おうわ」

最後にクリスはヨナにEdenワンの位置情報を聞き出すと、ヨナはROICE学園北西1kmに位置する高層ビル、その地下にあるとあっさり答え、もう1つのダミーポイントにはケルビムが2体配置されているおまけ情報まで開示し、更に紅の性格から予想される最有力手を2つ揭示すると言うサービス精神が豊富な情報掲示をした。

それを聞き茜、葵は互いに見て紅が次に打つ一手を予測しあつた事を示し話に混ざつた。

「なら次来るんはB・O・Wの大量解放や。」

あのクズならそんならいやってこっちの戦力分散を図りつつ時間稼ぎをする筈やで」

「私もお姉ちゃんと同じ意見。」

だから攻めるなら早めにした方が良いでしょう」

琴葉姉妹は紅がB・O・W解放をやると結論付け、Eden^{エデン}に攻め入るなら今直ぐしか無い事を2人で言い、クリス達もこの2人が琴葉紅を良く知る為それが正しいだろうと判断し、ならその為にもヨナとフォンから採血した血から真血^{Sandalphon}清弾が完成するのを願うばかりで、ヨナも自身から採血した事やフォンの血を採取した事から紅用の血清弾を作ろうとしていると悟っていた。

「尋問は終わったかね、諸君?」

「シルバ大佐!」

はい、ヨナ・レティシアからEden^{エデン}の位置情報や彼女が利用された立場である事、更にクレナイ・コトノハが次に取るであろう1手を開示してくれました。

よっていつでも攻め入る準備が可能になりました!」

其処にシルバ大佐が訪れ、それに反応したクリスは尋問終了やヨナから齎された情報を伝え、攻撃準備は何時でも可能と話ながら敬礼していた。

「ふむ、矢張りあの日記の内容は正しかったか……それより、真血清弾生成^{Sandalphon}についての報告だが……残念ながらヨナとフォンの組み合わせは失敗に終わってしまった……」

「矢張りあの確率じゃあ無理があつたか……」

「Sandalphon……叔父様は何時も洒落た名前がお好きね」

シルバはその報告を聞き日記の内容が正しいと独白した瞬間、茜達は矢張り日記にヨナが利用された事を示す内容があつたと悟りホツとしたのと、ヨナとフォンによる真血清弾生成が失敗したと聞き、嬉しさ3割残念さ7割の感情が葵達の中を占めた。

対してヨナはそのコードネームにシルバが考えた物と一瞬で悟りつつ、自身があの確率を計算し切つた為無理が無いとして紅用血清生成失敗については何も言わなかった。

「それで、敵の次の一手とは？」

「はい、バイオハザード地区全てでのB. O. W. の無差別解放です。」

これはヨナ・レティシア、更に琴葉茜、葵姉妹が敵の性格から逆算して間違い無いと裏打ちしております大佐殿」

次にシルバは敵の次の一手について尋ねるとB. Y. が敬礼しながら報告し、裏取りも敵を良く知る3人（内1名は日記や研究データから推察）があり間違い無いとして発言する。

「ふむ……なら私の権限でアメリカ軍のバイオハザード専門部隊や特殊作戦部隊も大

多数突入させよう。

「これでも統合軍大佐だ、顔は多少なりとも利くとも」

「ありがとうございますシルバ・ヴァレット大佐殿。」

今の戦力では正直その手を打たれれば此方の人員が足りないと思っていた所でした」

そしてシルバは自身の顔利きからアメリカ軍の対バイオハザード専門部隊や特殊作戦部隊を派遣すると公言し、その軍隊の力を借りれば足りない分の戦力差も埋められるとしてB・Y・達にとっては願ったり叶ったりだった。

「ではシルバ大佐、早速その部隊の派遣を要請して頂けないでしょうか？」

「うむ。」

此方アメリカ統合軍大佐のシルバ・ヴァレットだ。

現地のB S A A隊員達の要請によりアメリカ軍対バイオハザード特殊部隊、『Silver Bullet隊』から特殊作戦部隊『Black Bullet隊』の派遣を希望したい。

そちらの準備は……………」

クリスは早速シルバに頼み対バイオハザード特殊部隊と特殊作戦部隊派遣を要請し、シルバはそれを聞きテントの外に出ながらその指令を送り始めた。

そしてクリス達もまた準備に取り掛かろうとしつつヨナをアメリカ軍特殊空母に輸送機で送り出そうと彼女を立たせた――。

「隊長、大変です!!？」

この駐屯地に大量のB・O・W. が向かってきていると監視班から報告がありました!!？」

その総数500を突破!!？」

更に埼玉、神奈川、千葉でも同様の事態が発生したとの事!!？」

「何!!？」

「ちつ、相手の方が1歩動くのが早かったか!!？」

が、連絡員から大量のB・O・W. がこの駐屯地に向かっているの他のバイオハザード地区でも同様の事態が発生した事を聞き、クリス達は紅の行動の方が早かったと察知し早急に対応準備に入ろうとしていた。

「待ちなさいクリス・レッドフィールド、私から提案があるわ」

「何、何の提案だヨナ・レティシア？」

すると全員が慌しく準備に入ろうとした所でヨナがクリスに提案があるとして話し掛け、何の提案かクリスは慌しくも耳を傾けた。

すると彼女からとんでも無い要求が飛び出て来た。

「先ず私の拘束を解除して自由にして頂戴。

O. W. そしたら私がT—Genesisの特性を利用して此方に向かって来るわ。を操り自滅させ合わせるわ。

そして、E_{デン}W_ンに同行してガブリエル、いえ、クレナイ・コトノハの打倒に全力で協力するわ」

「何だと?？」

何と彼女は拘束を解いたらT—Genesisの支配種特性を利用してB. O. W. を自滅させ合うと言いつち、更に琴葉紅打倒にすら力を貸すと話しクリス達を驚かせた。

確かに彼女の提案は魅力的だが、幾ら利用されていた者とは言えバイオテロ犯の一人、その拘束を勝手に解除するなど以ての外である為クリスは反対意見が喉を通ろうとした。

「それに私を解放したメリットは他にもあるわ。

E_{デン}W_ン、彼女はクレナイが力を入れて改装した所為で他のE_{デン}と違って通常階層の他に地下階層まである超大型施設よ。

アカネ・コトノハの知らない地下階層の正確なマップを私は知っている。

そして私はクレナイに今までの復讐をする。

如何かしら、此れでもまだ拘束を解かないかしら？」

そんなクリスに畳み掛ける様にヨナは E d e n I の茜の知らない地下階層の話をし、その正確なマップを知る。道案内が出来ると話し、クリスにこれらのメリットを捨てて拘束を解かないかと問う。

すると B・Y がナイフを取り出し拘束具を解いてしまう。

「お、おい B・Y。!!？」

「バカ隊長何やってんのさ、これ重大規則違反だよ!!？」

「規則違反結構。」

俺は目の前の危機と彼女の掲示したメリットを天秤に掛けてみて無視した場合のデメリットが大きいと判断したんだ。

それに琴葉紅の打倒には戦力が幾つあっても良いと思った、だから俺はこの勘とヨナ・レテイシアを信じたい」

B・Y はクリスやマキの咎めの言葉を規則違反上等精神で振り払い、更に目の前の事態に加えヨナの掲示したメリットを捨てる事を良しとしない事や、B・Y 個人がヨナを信じたいと話し、それらを全て加味して拘束を自己判断で外したのである。

これに対しクリス達の反応は……。

「……後で始末書を書いて貰うからな」

「日本の言葉で呉越同舟と言ったか？」

クレナイ・コトノハを斃す為の判断なら俺は悪く無いと思う……B・O・Wとの共闘はこれが初めてじゃ無いからな」

「利用出来る者を利用し、状況の打破を図るその柔軟性は評価出来る。

ならば後はヨナ・レティシアが此方の思惑通りに動く事を期待するだけだ……無論少しでも背信行為を行えば始末するがな」

クリスはB・Y・にこの後大量の始末書を書かせると言つて黙認し、レオンもB・O・W・と共闘するのは東スラブ共和国で経験している為まだ理解があり、『アルファ』はB・Y・の柔軟性の評価とヨナが少しでも背信行為を行えば始末すると言う任務に冷徹な部分を見せつつB・Y・に理解を示していた。

「はあ、バカ隊長後で始末書で泣き付いても知らないから……で、これで私達に協力してくれんのヨナさん？」

「ええ、勿論よ。」

貴女達の信頼に十全に応えるわ……それからデルタチームの隊長さん、信じてくれてありがとう」

「こんな事態さ、猫の手も借りたくなる……それにそちらの目は嘘を吐いていなかった、だからそれに賭けただけだよ」

そうしてマキは呆れつつヨナに力を貸してくれるかを問うと、本人はやる気十分と言った笑みを見せマキや葵達の信頼に応えたいと言ひ、次にB・Y・に礼を述べた。

対してB・Y・は自分の勘と状況からヨナの手を借りる事に賭けたと言ひ銃の準備をしつつ、ヨナにも予備のBSAA制式採用アサルトライフルや自身がカスタムガバメントが来る前に使つていたグロック18C等を渡し、信頼に応える様にと云う雰囲気を出しながらヨナを見ていた。

「よっし、ならサツサとEde^エen^エn^ンI^ンに行くで!!?」

あのクソ野郎の鼻っ柱を折つたるで!!?」

「ああ、無論だ……ああそれとクリス、出発する前にシルバ大佐に伝えて欲しい事がある」

「何だレオン?」

茜は早速準備を整え、右の拳を左手に当てる喧嘩スタイルを見せて紅の打倒を此処に宣告し、ゆかり、あかり、マキ、そして葵も同じ考えを持ちこのバイオテロに終止符を打つ戦いに向かおうと気合を入れていた。

それにレオンが乗り、センチネルナインのスライドを引き彼も大詰めと言う雰囲気を感じ出していた……そんな中でクリスにシルバ大佐への頼み事をレオンはしていた。

その内容とは。

「アオイとアカネ、2人の組み合わせで真血清弾Sandalphonを生成出来ないか試してみたい、ただそれだけさ」

それはウィルス完全適応者の形質が表れなかった、しかし双子の姉がウィルス完全適応者にしてミカエルの称号を（一方的に）付けられていた葵と茜、2人の血の組み合わせで真血清弾Sandalphonが作れないかと言う、半ばヤケクソ気味な賭けに出る頼み事であった。

これを聞いた葵や茜、更にヨナは驚くが確かにもうこの組み合わせでしか事実上真血清弾Sandalphonは作り出せない為理には叶っていた。

「けど私は……ううん、もうこの組み合わせしか無いから仕方無いですよね」

「すまないアオイ」

「大丈夫ですよ、私は私ですから……」

葵も流石にこの組み合わせしか無いと考えが及び、レオンに非は無いらに自身の血が有用ならそれで良いと割り切った。

対するレオンは葵に謝るが、当人は自分は自分と気丈に振る舞い心配させる様な素振りは見せずにいた。

「よし、なら俺達とジエイク、シエリー、そしてエイダとセイカが先行部隊としてエデンEdenに赴き、他はアメリカ軍特殊部隊が到着するまでこの場を守らせよう！」

「正解、半径500メートル。」
 流石にヨナの操れる範囲にも限度がある筈だからな」

これが私の支配範囲よ。

因みにEden内部ではこの力に期待しないで、クレナイの方が支配優先圏が高いから流石に奴の居る場所でB・O・Wは操れないわ」

早速クリスは自分達やジェイク、シエリー、エイダにセイカを先行部隊としてEdenに突入させ、他はこの駐屯地を守らせる作戦を取りヨナの支配能力の詳細も聞き武器を手にしテントから外に出始めた。

「ならばオメガ2、オメガ3も連れて行こう。」

あの2人は我々に比肩する実力者だ」

「せやな大隊長……んじや、最終決戦と洒落込ませて貰うわ、覚悟せえよクソ野郎」

更に『アルファ』はビリー、カルロスも同伴させると言い茜も同意し、そして改造AKのマガジン装弾数を確認してから外に出てビリー達に声を掛け始めた。

「……これが、最後の戦い……」

「葵、不安？」

「そうなら私達が背中を守りますよ」

「だって私達、友達ですからね！」

対する葵は最終決戦、最後の戦いと言う言葉に不安や覚悟等の様々な感情が渦巻き、今までの3日間の戦いを振り返り思いを馳せていた。

そんな中でマキ達が友として守ると言い並び立ち、葵はそれを見てこのメンバーなら不安はないと思いを改めて前を見つめた。

「友達……良いわね、私には居なかつたから……」

ヨナは葵達を見て改めて友とは良き者だったのだと思い知り、自身にはその友が居ない事に一抹の寂しさを感じ羨ましがる様に葵達を見ていた。

「……この事件が終わったら」

「？」

「こんな事件が終わったら、貴女が罪を全て背負って生きるなら、私は全てを水に流す」とは言えないですが、それでも貴女の友達になつてあげますよ、ヨナさん」

すると葵はヨナの言葉を聞き振り返ると、彼女の全てを許す事は出来ないがそれでも友になると宣言し、それを聞いてたマキ達も振り返り同じ思いを抱いた表情を見せ、更に丁度ビリー達に話し掛け終えた茜も混ざり事件が終わり罪を背負うならと言う条件下で友達になると5人はその態度から物語っていた。

「……全く、本当に甘い人達よ、貴女達は……」

それ等を見て聞いたヨナは微妙に表情に笑みを浮かべ、改めて自分のした罪の重さと

この目の前に居る素晴らしき友人達への感謝の感情が混じった涙を流し、そして自身に伸ばして来た葵達の手を取り外に出て行つた。

「……………ふつ、ああ言う光景は良い物だな。

ヨナ・レティシアも罪から逃げずに背負う道を選んだ、なら俺達が出来る事は……………」

「ああ、マキや葵達の道を阻む琴葉紅とか言うクソ野郎を地獄に叩き落としてこの事件を終わらせる事だな……………さて、皆に置いて行かれる前に行こうかレオン」

最後に残つたレオン、B・Y・は先程の光景が眩しく見え良き物に映つた事を共通で思い、更に琴葉紅と言う全ての元凶を叩く為に武器を構えた2人もまたテントから出てクリス達が待つ広場に走つて行つた。

そうして此処に最終決戦の幕が開かれた。

それによりこの物語は終幕へと向かい始めたのだつた。

それがどの様な形かは、元凶の紅や対峙するレオン、クリス、ジェイク、そして葵達にもまだ分からない……………が、確かに言える事は如何なる結末になろうとも全てに決着がつく、それだけは絶対の真理であつた。

EP XXIX 『覚醒』

駐屯地とROICE学園の中間地点。

BSAA先行パイオハザード封じ込め部隊チャーリーチームが目標地点まで向かう全員が乗れる車両を用意し、B・O・Wの大群が大体その場所を通る事から葵達は各チームからレールガンの予備やグレネードランチャー等を受け取って輸送機に乗り、降下地点に到着した瞬間全員おりB・O・Wの大群を少し待つ。

すると直ぐに其処に200を超えるネフイリムやハンターG、リツカーGにエクシアが迫って来て全員その数に固唾を飲んでいた。

「さあ、後少し来なさい。」

「そうすればお前達は……」

そうして作戦通りヨナが前に躍り出てB・O・W達を500メートル範囲内に入るまで待ち、自滅させ合う作戦を行っていた。

そしてB・O・Wがヨナを含めた生きた者達を見つけ走り出した……それから直ぐに500メートル範囲内に入り、ヨナは笑みを浮かべた。

「私の支配下だ！」

さあ私の駒達、そのまま死ぬまで自滅し合いなさい!!?」

『グルアアアアアアアアアアアアアアアア!!?』

ヨナが叫び手振りを交えながら500メートル範囲内に入ったB・O・W・に死ぬまで自滅させ合う命令を下すと、エクシアも何もかもが隣のB・O・W・同士と自滅し合う光景がレオン達の目に映りレオンはプラーガ支配種の力をそのまま思い出し苦笑いしていた。

「ヒュー、これは凄いや。」

B・O・W・共が馬鹿みたいに自滅し合ってるぜ」

「確かにこれなら安全に目標地点まで行けるな…よしクリス、命令を」

「ああ、全員チャージャーチームが用意した車両に乗り込め!!?」

ヨナ、君は道先のB・O・W・に命令を下せる様に助手席に乗るんだ!」

カルロス達はエクシア達が自滅し合う光景を爽快に思いながら眺め、しかし任務を遂行すべくビリーが直ぐにクリスに命令を出させ、彼の命により全員が車両に乗り込むとクリスが運転席、ヨナが助手席に乗り込みエンジンを掛けた。

「これで全てを終わらせてやる…!」

クリスはその一言を呟くとアクセルを入れ目標地点まで車両を走らせ始め、葵達は長かったこの悪夢に終止符を打つと意気込み、周りもまた同様の思いを抱きながら車に揺

られつつ目標地点到達までジツと待つのであった。

そうして道端のゾンビやB・O・Wに死ぬまで自滅し合う命令をヨナが助手席から下しながらROICE学園北西1kmに位置する高層ビルに辿り着くまで残り400になった頃、通信先で神奈川県方面でBSAAの輸送機がケルビムの攻撃を受け墜落したり埼玉県方面もエクスシア達と道端で偶然鉢合わせた為車両がそのパワーで吹き飛ばされる報告等が多数上がり、事態の混沌化が更に加速度的になったとクリスは感じていた。

「はあ、クレナイ…貴方はこんな光景が見たかったのかしらね？」

まあ、私も奴の事をとやかく言える立場じゃないからこれ以上は何も言わないけど…あケルビム、自殺なさい」

「…本当にケルビムまでも支配下に置き自滅させるとは…」

「これがT—Gene-sis完全適応者の特権の1つよ。」

但しクレナイの支配範囲は私を優に上回るから目標地点まで200に入った

辺りからはこの能力に期待しないで、奴の方が支配優先権と有効範囲が広くて高いから……あら？」

そうしてケルビムも自滅させT—Genesis完全適応者特権をクリスに話し、後ろで葵達もそれを聞きながら周りを見ていたヨナが残り300までになった所、前方の道路が事故車両で寸断されてしまいこれ以上は車での移動が不可能になった為、クリスは車を止め降り始めた。

「よつと、あらら…車が止まったと思つたらこれもう歩いてしか向かえない位道路がギツチギチだわ」

「チツ、仕方ねえ。」

此処からは全員仲良し子良しで歩いてくしかねえな」

「だな、じゃあ隊列整えて行くぞ！」

セイカ、ジェイクやその他全員は車両から降りると前方がもう車で進めない事を悟り愚痴りながら歩く道を取り、B・Y. が隊列を組ませ警戒しながら早歩きを始め、目標地点まで向かって行った（因みに茜は既に全リミッターを解除している）。

「そう言えばアカネ・コトノハ。」

貴女もT—Genesis完全適応者ならT—Genesis産B・O・W.

の支配権を持っている筈。

「貴女それを何故今まで使わなかったのかしら？」

「あーいや使つとつたよ、初めてエクスシアに遭遇した時にウチを狙う様に命令しながら。」

でもウチのこの力の有効範囲、10メートルあつたらええなく的に極端に短いなよ。

せやから^{エデンワ}EdenI内部で期待はせんでええよ」

するとヨナが何故茜はT—Genesis完全適応者の支配権を使わないのかを本人に聞くと、実はエクスシア初遭遇時点で使っており、更に有効範囲が10メートル以下と極端に短い事を教え、其方には期待しない様にと釘を刺すのであった。

そうしてビルまで100、50、そして遂に閉じられたシャツターをこじ開けビル内に侵入した。

「…敵影無し!!?」

ヨナ、^{エデンワ}EdenIの入り口は何処に！」

「彼処、中央エレベーターに隠しパネルがあつて其処で指紋認証するのよ

出し方は特定の階のボタンをこの階で順番を守り押すのよ」

クリス達は早速周りを見渡し、敵影が無い事を確認してからヨナに^{エデンワ}EdenIの入り口が何処かを聞くと、ヨナはビルの中心にある中央エレベーターを指差し、其処に隠し

パネルがあると話した為全員で中央エレベーターに集まり、ヨナの言った方法を試すと、通常のフロアパネルの下に指紋認証の隠しパネルが現れクリス達全員間違いないでEdenの入り口と確信する。

「よし大將達、敵の首を狩る為にさっさと乗り込もう」

『残念だが、行かせませぬ』

「っ、この声は!!？」

カルロスが早く全員で乗り込もうと言おうとした瞬間、独特な声がビル内に響き全員、特にクリス達は聞いた事がある為驚いていた。

それは間違い無くケルビムの声であった。

更にケルビムの周りにエクシアが数十体もビルの柱の影等から現れ、クリス達を取り囲んでいた。

「ケルビムに…エクシアがこんなにも!?!？」

「敵の本拠地だからこれだけの物量を残しているとは思ったが…あれだけ外にB.O.W.を放つてまだこれだけいるとはな、泣けるぜ」

『貴様達ヲガブリエルノ下ニハ行かせませぬ。』

裏切り者ノラファエル共々此処デ朽チ果テルガイイ』

クリス達はケルビムのみならず大量のエクシアを見て驚き、骨が折れると言った様

子を見せるとケルビムが紅の下には行かせないと言ひクリス達を取り囲もうと躡り寄り、いよいよ以て最後の戦いだと全員は確信する。

「レッドフィールド、スコット・ケネディ、如何するのかしら？」

さつきも言つた様に此処では支配権は通じない、なら誰かが此処に残りケルビム達を相手にしなくてはならないわ」

『……』

「なら、クリスの旦那達は行けば良いさ」

ヨナも先程の会話を蒸し返し、此処まで来ては支配権を使えないと話しクリス、レオン達に残るかを迫る。

クリス達もこの場に誰かが残らねばならぬと思ひ悩んでいた所、何とカルロス、ビリー、『アルファ』、エイダが率先して前に出ていく。

「なつ、お前達？」

「此処は俺達に任せな、他に方法は無いだろ？」

「ならば早く行くと良いさ。」

何、降りた後にエレベーターを上げてくれればこの化物共を倒した後にさつきと合流するさ」

クリスの反応に対しカルロス、ビリーが振り向きながら笑みを浮かべ、死ぬつもりな

ど無くこの場を片付けたら合流すると話し、既に銃を構えクリス達に行く様にと言う雰
囲気を作り出していった。

「エイダ、『アルファ』、良いんだな？」

「ええ、此処から先にこの化物達が行かない様にしてあげるわ。

勿論、貴方に貸しーですよ。

いつかは借りを返しなさいね、レオン」

「此処は戦場だ、運命は自らの手で切り開け……ただそれだけだ。

さあ早く行け、お前達にはお前達の役割がある筈だ」

エイダも珍しく殿を買って出た事にレオンは良いかと尋ねると貸しーでやってやる
と言う彼女らしい発言が飛び出てレオンは相変わらずだと苦笑し、そして『アルファ』に
至ってはレオン達の役割を果たす様に言い放ち、全くレオン達の方は見ずに銃を構え戦
闘態勢に入っていた。

「アンタら……分かった、任せるぜ」

「大隊長に皆、此処は頼んだで!!？」

さあ、皆早く乗るんや!!？」

「皆さん……どうか生きてまた会いましょう!!？」

ジェイク達はその覚悟を目にし、もう語り掛ける事すら時間の無駄使いだと判断して

ジエイクから率先して乗り込み、次にシエリー、ヨナ、ゆかり、あかり、B・Y、マキ、セイカ、クリス、レオン、そして最後に茜、葵がエレベーターに乗り込み2人の姉妹が指紋認証をする。

『琴葉茜、及び欠落者琴葉葵の指紋認証。

ようこそ、Eden^{エデン}へ』

そうして第1の楽園の名を冠した最後の地獄への扉が開かれ、クリス、レオン達はその道へと踏み入り誘われて行つた。

全てはこのバイオテロを終わらせる為に。

『別レ話ハ済ンダカ？』

ナラバコノ地デ朽チ果ハテ、ガブリエルノ創ル楽園ノ糧ニナルガイイ』

「あら、別れ話なんか一切してないわよ？」

ただ醜悪な化物を倒してさっさと合流するって話だったのよ、耳が悪過ぎて聞こえなかったかしら？」

そんな中で律儀に待つていたケルビムがエイダ達に要約して紅の作る世界の肥しになる様に言つて来るが、そんな物はこの場に残った全員が願ひ下げであり、更にエイダはケルビムが自分達が何を話していたかをしっかりと聞いていないとして不敵に笑い

Fallen^{Fallen}Bullet

血 清 弾 入りの銃を構え先ずは囲んでいるエクスシアから倒そうと思案していた。

「それか人語を介しても俺達の考えまでには及ばないんじゃないか、何せ所詮B・O・W・だからな！」

さあ、派手なパーティーの始まりだぜ!!?」

「ああ、さつさと片付けてクリス達に合流するぞ!!?」

「全員、攻撃開始!!?」

そしてカルロスが気合入れの発言を行うとビリーもクリス達に合流するべく今まで培って来た物全てを出すべく手に力を込める。

最後に『アルファ』が攻撃命令を出した瞬間全員発砲し、数の多いエクシアを捌きながらケルビムの攻撃も避けつつ、更にエイダがフックショットで開けたビルオフィスを縦横無尽に駆け回りながらケルビムにダメージを与える今までのB・O・W・戦の中でも特に激しい戦闘が繰り広げられるのだった。

「ビリー、カルロス、待っているからな」

「エイダ、『アルファ』、必ずまた会おう」

クリス、レオンが4人の身を案じつつ必ず自分達を追ってやって来る事を信じてエレベーターが地下深くまで潜る感覚に揺られながら目的地に着くまで待っていた。

そしてエレベーターが止まり、ドアが開かれると其処にはEde^エn^デII^スI^スI^スと同じ扉があり、エイダ達の為にエレベーターを上げると今度はヨナが指紋認証すると矢張りエントランスホールが広がり、しかし周りの壁は血塗れになり何かがあった光景が広がっていた。

「ヨナさん、此れって」

「ご想像通り、クレナイの日記にあった様にCLOWNが集めた下位メンバー全員も合わせてその場でTIGENESISを打ち、そして私達以外はゾンビ化してこの有り様よ。」

さて、一応マップコピーをしましょう。

ただ、セキユリテイ関係でこの下の地下階層のマップは此処では表示不可だからこの階層のマップだけになるけれどね」

葵はヨナにこの光景を聞くと紅の日記にあった完全適応せずゾンビ化した者達がこの血塗れの光景を作ったと説明し、茜達はあったなその内容的な表情を浮かべ、ヨナが

この場に居る全員のタブレットにE_エde_デn_ンW_ワnの通常階層のマップを送ると、矢張りE_エde_デn_ンI_イI_イと大体同じ作りになっているのをレオン達は確認した：が、彼方には無かった第1管制室の先に更なる連絡通路があり、レオンは表情で此れはと確認を取る。

「此れがE_エde_デn_ンI_イ独自の通路、地下施設に通ずる連絡通路よ。

此処を通つてその先のエレベーターに乗つて地下階層に行く様になる：けれど、その先に行くには第1管制室からエレベーターのセキュリティをOFFにするか私の指紋認証が必要になるわ。

アカネ、一応確認するけどマスターコードは知つてるわね？」

「当然やで、んじやさつさと行くで。

地上の皆が仰山驚く位早く終わらせたで！」

ヨナは此れがE_エde_デn_ンI_イの更なる地下階層行きのエレベーターがある連絡通路であり、その先に行くにはヨナの指紋か第1管制室でマスターコードを使い其処のセキュリティをOFFにしてからでなければ使えないと説明する。

更にヨナは念の為マスターコードを知つてるか茜に問うと愚問と言わんばかりに即答し、改造AKを構え先頭に出る。

その意気込みにクリス達も乗り陣形を組み、最後尾はスナイパーのゆかり、あかり、その防衛の為のマキやヨナとなり施設を走り出した。

そしていざトラップがある……かと思いきや、レオン達がE d e n I I Iに入つた際にあつたレーザートラップすら作動せず素通りになり、そのまま何事も無く第1試験場前まで辿り着いてしまう。

「何だろう、何か拍子抜けつて言うか……」

「恐らくクレナイの事よ、此処まで下手なトラップで掻き乱すよりラスボスらしくこの先で陣取る選択を取っているのよ。」

全く、何処までもゲーム感覚で理解に苦しむわ」

「それ同感やわ」

マキ達は何も無い事に拍子抜けするが、ヨナは紅の思考からラスボスとしてこの先に陣取る選択を取つたと判断し、理解に苦しむと言いながら指紋認証を進めた。

それに茜が同意して同じく指紋認証をし、第1試験場の扉を開け全員が一斉に銃を構え突入した。

「……………」

「……あれ、居ない？」

そしていよいよ戦闘になる…と思いきや此処でも拍子抜けを喰らい、第1試験場にすら紅の姿が無かった。

しかし全員は警戒を解かず試験場の真ん中まで陣形を組みつつ周りを警戒し、何処から来ても良い様に辺り見渡した。

しかし、幾ら待っても紅の姿は無く全員が全員こう思ってしまう。

紅は地下階層の方で待っているのでは、と。

「…ねえジエイク、レオン、クリス、これは先に進んだ方が良いと思うんだけど」

「ああ、なんか此処に居ても時間の無駄っぽいからな」

「よし、なら警戒を解かずこのまま——」

「待っていたぞおおお、諸君ツ!!?」

シエリーが先に進む提案をし、ジエイクやレオンが同意を示したその時、天井から赤髪の男が大人組と子供組＋ヨナ、セイカの間而降り立ち、その男は圧倒的な身体能力を以てクリス達を蹴り飛ばしてしまう。

『ぐあつ!!?』

「きやあつ!!?」

「レオンさん、クリスさん、ジエイクさん、シエリーさん、B. Y. さん!!?」

「ふっ」

『P.i』

更に葵が5人の心配をする声を上げた瞬間、男は懐からタブレットを取り出し何かの操作をすると、第1試験場のクリス達に吹き飛ばされた範囲以外を覆うガラスが張り巡らされてしまい、大人達と葵達は分断されてしまう。

「ぐっ、しまった、油断した!!?」

「アオイ、マキ、ユカリ!!?」

『ズダンツダンツダンツダン!!?』

ガラスの向こうでクリス達は一瞬油断した事を悔い、ガラスに向かつてマグナム等を叩き込むが全く傷が付かず、此れではクリス達の援護が期待出来ない事が窺い知れてしまう。

そしてクリス、レオン達と茜、葵達を分断した男は余裕ある笑みを浮かべ葵達の方を振り向いた。

「出おったな……このマッドサイエンティスト!!?」

「ガブリエル、いえ!!?」

「処断対象、琴葉……紅!!?」

茜、ヨナ、マキが憤りつつその男、ウイルス完全適応者の瞳をカラコンで隠さず更に既に仮面すら捨てた男、琴葉紅を見据え銃を構えたりヨナはウイルスの力を使い足場を

凍結させ全力の戦闘態勢に入っていた。

それに対して紅の反応と言えば。

「やあ茜、それと葵、直に会うのは久し振りだね。

それからラファエル、いや、ヨナに娘達のお友達諸君、改めて自己紹介をするよ。

私は——」

「自己紹介なんか如何でも良いです下衆野郎」

「それよりも現れましたね、全ての元凶、お義父さんを惑わした敵!!?」

「全く、いきなりやってくるわねこのド屑さん?」

「今更父親面しないで、こんなバイオテロを起こして、私の友達や先生や近所の叔父さん達、そして私の日常を奪い去った悪魔…!!?」

紅は茜と葵の父親面をしてゆかり達に自己紹介をしようと言う神経を逆撫でする行為を行っていた。

が、此れをゆかり達がバツサリ切り捨て、最後に葵が悪魔と呼び捨て既に父親とすら思っていない事を示した。

それを聞き紅は苦笑して次に何を話そうか思案していたが、其処にヨナが口を開いた。

「クレナイ、ゼラキエルと共に私の人生を弄んだ最低最悪の男!!?」

今此処でお前に復讐してやる、覚悟なさい!!?」

薄いコバルトブルーのストレートのセミロングヘアがウィルスの力で生み出された寒風で靡き、更にウィルス完全適応者の瞳が怒りで更に赤く輝きその憎悪の深さがどれだけかを示しながら凍結箇所が広がって行き、茜達はヨナの力に巻き込まれない様に陣形を組みつつ自身が最も得意とする獲物を構え紅との戦闘態勢に入った。

「おやおや、君達は如何やら私との会話は不要だと見れるね。」

本当ならもう少し話したかったんだけどね、例えばスペンサー卿の理想とした世界の実現が迫りつつあるからそろそろ矛を収めて共に来ないか、茜と一応レミエル以上の失敗作だけど葵のお友達だから新人類になる素質があるか先に検査してあげるよとか、ヨナが裏切りは不問にしてあげるとかあったんだけどなあ……仕方無いね」

そんな彼女達を見て紅は自分本位ではあるが、話が色々あったと口にしたがこれ以上は聞いてくれないと判断し手を竦めやれやれと言った仕草を見せた瞬間――。

『ブウン!!?』

「な、きやあ!!?」

「ああつ!!?」

白龍同様の電磁による茜以上の超スピードでゆかり、あかりにそれぞれ接近してパン

チやキックを与え、ガラスまで吹き飛びして激突させ、彼女達の肺から酸素を殆ど吐き出させ咽せさせた。

『ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ…!!?』

「ゆかりん、あかりちゃん!!?」

「ちよつと痛い目に遭って私の言葉を聞いて貰おうかな」

マキ達がゆかり達の心配をする中、先に矛を抜いた紅は邪悪な笑みを浮かべながら彼女達をこのまま襲い、無理矢理話を聞かせると宣言して次にヨナとセイカに狙いを定めていた。

「ユカリ、アカリ!!?」

くそ!!?」

「この、壊れやがらねえぞこのガラス!!?」

「無駄だよレッドフィールド、そして忌々しいアルバートの息子。

そのガラスはレールガンみたいな超火力兵器を用いなければ破壊不可能な代物さ。

それを持っているのは弦巻マキ君だが……それを使わせる暇は与えないから」
クリス達は何としてもこのガラスを破壊しようとおの手この手を使うが全く通用せず、更に紅がこのガラスを破壊するにはレールガン並の威力がある兵器を使わねばなら

ないと話し、それを持っているマキは既に充電し始めガラスに向かつて放とうとしていたが、それを見抜いていた紅はマキの目の前まで迫りレールガン毎マキを持ち上げていた。

「な、うわっ!?」

「マキちゃん!!?」

そしてレールガンから振り払う様にマキを手の勢いで吹き飛ばすが、それをセイカが受け止めてお姫様抱っこをしつつ地面に下ろして2人で紅を見据える。

すると紅はレールガンの予備弾薬もマキの懐から奪っており、レールガンの充電をストップさせ弾薬を抜いた後レールガン本体はクリス達の方に、弾薬は逆側に投げ捨て茜達が上手く事を運ばねばレールガンが使えない様にした。

「クレナイ、今までの恨み此処で晴らさせて貰うわ!!?」

「さつきから好き勝手やってんじや無いわよこのイカレ頭!!?」

するとヨナ、セイカは同時に紅に襲い掛かり極寒の冷気を纏ったパンチと単純に素早く、しかしヨナや茜並みに重いキックを放った。

しかし紅はそれぞれを同時に受け止め、ヨナには超高温の、セイカには電磁のバリアを使い分けてそれぞれに対応し、更にセイカの足を振り回した後ガラスに向かつて手加減無しで投げ付ける。

「ぐっ、痛う〜…」

「ちよつと待つててくれないかなセイカ・ウエスカー。」

君達が説得なんて真似をして真面目にヨナを倒さなかつたから彼女の攻略法を知らないだろうから教えてあげるよ。

まず超熱で極寒の障壁を中和、更に体内の超低温も体内に超高温を送り込む事で中和して…」

『ボオオオオオ!!?』

紅はセイカを吹き飛ばした後ヨナの手を払い左手で首を絞め、更に右手でライナスの様な

火炎放射を彼女の体に浴びせ、その上で左手にも超高温の熱を加え彼女の体内温度や極寒の障壁を中和して行く。

そして体温が平温に戻った瞬間。

『ドゴオツ!!』

ドゴオツドゴオツドゴオツドゴオツ!!?』

「かはっ…!!?」

「そうすれば氷の身体も解けてこの様に攻撃が通用するの、さ!!?」

紅は何度も鳩尾に右手のパンチを加え、ヨナに明確なダメージを何度も叩き込みそし

て地面に思い切り投げつけた後蹴りを喰らわせ、ヨナを茜と葵の間にまで飛ばした。

「かはつ、かはつ……!!?」

やってくれるわね、クレナイ……!!?」

「ヨナさん、大丈夫……みたいやな!!?」

にしても難儀なチート能力なんか身につけおつてからに、ちつとはウチにアツサリ殺されてしまい!!?」

ヨナはその耐久力から直ぐ復帰し一瞬心配した茜達を安心させ、その後直ぐに茜とセイカが超スピードで接近し同時にパンチを喰らわせに掛かり、復帰したゆかり、あかり、そしてマキがライフルやショットガンのスラッグ弾で紅を撃つが、超高温の防壁で3種の弾丸が溶けてしまい、更にセイカ達のパンチを受け止めた瞬間その腕を凍結させて2人を釘付けにした。

「やれやれ、聞き分けの無い子供達だ。

これは大人として躰が必要、かな!!?」

『ぐえつ!!?』

「お姉ちゃん、セイカさん!!?」

そして紅はそれぞれ交互に膝蹴りを喰らわせ胃液を吐かせ、それを太鼓を叩く様に楽しみながらリズムカルに2人を痛めつけた。

それを見た葵は2人の間を縫ってUMPに装填された血Failed Bullet清弾を3点バーストで撃ち込む。

だが紅はそれをわざと受けつつ膝蹴りを止めず更に2人を痛め付け、茜をゆかりに、セイカをあかりの方に勢い良く投げ付け4人にダメージを与えてしまう。

「かはつかはっ!!?」

ゆ、ゆかりさん大丈夫:~?」

「な、何とか:~痛っ、ですが今ので利き手を捻挫したみたいです:~!」

「うう、私も手を:~」

「ごめんあかりちゃん、避けられなかった:~」

茜、セイカはウィルスの力で耐久力や再生力が上がってる為ゆかりとあかりをそれぞれ心配するが、2人は如何やら利き手を捻挫してしまい狙撃が出来ない状態になったらしく徐々に状況が悪化しつつあった。

「くそ、こんな事で足止めを喰らってる場合じゃないんだがな:~!!?」

「くっ、ダメ!!?」

何をやっても壊れない!!?」

レオンとシエリーもクリス達に合わせ何度もガラスの破壊を試みたが矢張り傷一つ付かず足止めを喰らってしまい、葵達の救出が出来ずにおり、その表情には明らかに焦

りが生まれていた。

「クツソく、このチート野郎が!!?」

さつさとくたばれ!!?」

「クレナイイイイイ!!?」

「このつ!!?」

残ったマキ、ヨナ、葵も紅に向かつて走り出し、マキはアサルトショットガン、葵はUMPの血Fallen Bullet清弾を撃ち込みヨナは氷のナイフを作り出しシステマで挑み掛かる。

しかし紅はマキ達の弾丸をわざと受け、更にヨナには先程の攻略法でダメージを与え今度はクリス達の方に投げ飛ばし、そして葵に軽く鳩尾に蹴りを、マキは近付いた所を左手で首を絞め上げる。

「かはっ!!?」

「ゲホツ、ゲホツ……!!?」

「が……ぐつ……」

「葵、マキさん、ヨナさん!!?」

それらの光景を見た茜、セイカはそれぞれ一番危ない状況のマキを助けようと動き出そうとした瞬間、それぞれに水が目の前に降り注ぎそれを紅は凍らせ分厚い氷の壁を作り出し2人の動きを封じてしまう。

「マ、マキ、さん…!!?」

意識が飛び掛けてしまっていたが、何とか意識を繋いだ葵は今度はハンドガンで紅の腕を撃つが、矢張り専用の血清しか効かない体質になつてゐる為全く弱る素振りなど無くマキを絞め上げる手の力を緩めずにいた。

「さて、そろそろ一人には復帰不可能のダメージを与えて無駄に抵抗したからこうなつたと茜達に知らしめてやらないとなあ」

「つ、や、止めて……………」

すると紅は捕まえたマキを再起不能…つまり重傷を負わせると宣言して右手をゆっくり上げ、拳を作つて行く。

それを見た葵は紅にそれを止める様に声を上げる。

しかしそんな事で紅は止まる訳が無く再び邪悪な笑みを浮かべ葵をチラ見し、明らかに葵に見せ付ける気だと本人は察した。

「マキイ!!?」

「くそ、マキ…!!?」

「くそ、マキを離せクソ野郎!!?」

クリス、レオン達はその光景を見て仲間が此処で死んでしまふ、そんな直感が頭を過り全員でガラスを叩き何度も破壊しようとした。

しかし、ガラスは無情にも砕けない。

「ま、マキさん!!?」

「や、止めて!」

その間に茜は何とか腕一本分の穴を開け状況を見るとマキが危ないと察し更に力を込めて氷の壁を砕こうとした。

しかしこのままでは間に合わない、そんな考えが頭の隅を過ぎるも何としても助けようと手を動かす。

葵も痛みで動かない身体を這い蹲らせ、俯せになりながら手を伸ばしまた声を上げることが矢張り紅は止まらない。

「ふっふっふ…」

「マ、マキちゃん!!?」

「マキ…!!?」

紅は笑い声を上げながらマキの腹に向かってパンチを放とうと見えている全員に見せ付け、此処でセイカも氷の壁を腕一本分の穴を開けるももう間に合わないと察するも茜の様に諦めずに氷の壁破壊に着手し、ヨナも何とか立ち上がり走り出そうとするが明らかに紅のパンチの方が早く止められそうに無く、しかしそれでも友達になると言ってくれた人を助けようと足掻こうとする。

「や、止める……!!?」

そして葵も口調が命令口調に変わり、明らかに紅対する怒りの感情と力のない自身への絶望の感情が渦巻いた表情を浮かべていた。

だが紅の邪悪な意志は意識を失い掛けるマキの命を刈り取るべく腕の力を最大限まで溜めた。

「ではさよならだ、BSAAの若き隊員さん!!?」

「止めろおおおお!!?」

そしてマキにパンチが振り下ろされ、その腹を貫こうと剛腕が迫った。

その時葵は感情を爆発させながら叫び、伸ばした手に更に力を込めながら紅に鬼の様な形相で睨み付け、声を荒らげた。

更に……誰も確認出来ないがこの時葵の瞳に変化が生じていた。

そう、何時ものやや赤目な瞳からウィルス完全適応者特有の真っ赤な色の瞳に変化していた。

「い、これは……!!??」

一方駐屯地の血清生成所となったテント、其処にシルバが要請した部隊が到着し命令を待っている所でシルバは茜、葵の組み合わせによる血清生成についての報告を受け急遽見に来ていた。

すると其処に表示された文字を見てシルバは驚きを隠せずにいた。

「血清が……Sandalphonが……完成した、だと……!!??」

『Serum production completed』、そしてシルバの言葉から琴葉紅用の血清、Sandalphonが遂に完成したのである。

一方同時刻のEden^{エデン}第1試験場、紅は確かにマキの腹を貫こうとパンチを繰り出しそれが直撃した筈だった。

しかしその右腕は直撃する寸前で何故か本人の意思に関係無く、更に何らかの力が加わった様にプルプル震えながら止まり紅自身何が起きたのか良く分かっていなかった。

「こ、これは、一体何が」

「離れろ……!!?」

すると葵の声が紅の耳に届き、しかしそれは先程までの弱い物では無く背筋に何か冷たい物を感じさせる地の底から聞こえて来た様な声だった。

何故葵に自分は恐怖心を感じたのか、その正体を確かめるべく葵に目を向ける。

すると其処には……ウイルス完全適応者の瞳になった葵が紅を睨み付けており、明らかに葵が何かをしている、そんな直感が紅の頭の中に浮かんでいた。

「バ、バカな、A—2はウイルス完全適応者の形質が無かった筈!?」

それが何故」

「マキさんから離れろ……離れろおおおお!!?」

『ズガアアアアアアアアツ!!?』

「っ、ぐああつ!?」

紅は葵がウイルス完全適応者特有の瞳になっていた事に驚き、事態が理解出来ず混乱していた。

そんな中葵は命令口調のまま叫ぶとその足元の地面がガラガラと崩れ始め、そして紅に強い衝撃波が加えられ対角線上のガラスまで吹き飛ばされた上に叩き付けられ、更に圧迫する様に何らかの力が込められていた。

「な、何だ、この力は…!?？」

「ふうっ!!？」

「ぐああ!!？」

『バリイイイン、ズドオン!!？』

そうして紅は更なる衝撃波を受けガラスすら砕かれながら壁に突っ込んで行き姿をその場から去らされてしまった。

これも全ては葵の『力』による物であった。

そう、葵の目覚めた力は茜の身体能力とは真逆の超能力体質、謂わば『サイコキネシス』と呼ぶべき物が葵の中に今まで眠り、そして感情の昂ぶりや友の危機に際してたつた今日覚めたのだった。

EP XXX 『最終劇、開幕』

AM:10:12、Eden^{エデン}の第1試験場で葵はT-Genesisの力を発揮し、紅を壁の向こうまでサイコキネシスで吹き飛ばした後、マキに近付き安否を確認していた。

「マキさん、大丈夫ですか？」

「ゲホツ、ゲホツ、うん。」

首絞められたから気分最悪だけど何とか無事。

それより葵、その眼にあの力って…」

「…うん、そうみたい。」

私もお姉ちゃんみたいなウイルス完全適応者だったみたい…それより、クリスさん達と合流しよう？」

マキは先程の力を葵に尋ねると淡々とウイルス完全適応者だと言う事を話し、次にクリス達と合流すべく力を集中させ、周りのガラス全てと氷の壁に圧力を掛け破壊する。

これにより全員が自由に動ける様になり、更に葵はレールガンの本体と弾をマキの下に引き寄せて回収させる。

「……うっ」

「わっ、葵大丈夫!?」

「だ、大丈夫です。」

ただ立ち眩みが起きただけです。

多分この力を使い慣れてない所為でこうなるんだと思います……」

すると力を使い過ぎた葵がフラツと倒れそうになりマキが支え転ぶのを防いだ。

如何やら葵曰く力を使い慣れてないから今のが起きたらしく、それならマキは使い慣れたらこうならないと思ひ、何か変なデメリットがあるのかとヒヤヒヤしたがそうじゃない為ホツとしていた。

「葵、その力……やっぱウチと同じ」

「お姉ちゃん……うん、間違い無くそう。」

今まで使えなかったのは私の意思だとか、そう言うのが弱かったから使えなかったんだと思うんだ」

「……驚いたわ、クレナイは如何やら貴女の事を見誤つてたみたいね」

其処に茜、ヨナ、更に解放された全員が集まり先ず茜が力について問い掛けると、葵も生まれた時からこの力を持つていたと予想し、更に使えなかった理由も考察していた。

其処にダメージが完全に抜けたヨナが近付き、紅の見る目の無さを小馬鹿にしつつ誰一人死んでないこの状況を心の其処から安心していた。

「マキ、大丈夫だったか!?」

何処か奴にやられた箇所は他に無いな!?」

「バカ隊長取り乱し過ぎ。」

ほら、私首絞められただけでピンピンしてるよ」

「全くマキさんは無茶し過ぎですね…葵さん、マキさんを助けてくれてありがとうございます…
ざい…痛たた」

其処にB・Y・がマキの下に走って駆け付け、何処か怪我が無いか慌てて確認するが、マキは首絞めを受けたただけだと話し首に付いた手痕を見せてそれ以外大丈夫とアピールした。

そしてゆかり達も手を痛めながら近付きマキを土壇場で救った事に感謝しつつ利き手を摩っていた。

「全員無事…いや、ユカリとアカリが利き手を負傷した以外は無事みたいだな。」

兎に角重傷者や死者が出なくて良かった…アオイ、良くマキを守ったな。

あの時何も出来なかった俺達の代わりに救い出したその勇気と力に感謝する

ぞ」

「…あの、皆さん私があんな力出してうわコイツも普通の人間じゃ無いのかとか思わないんですか?」

そして最後にクリス達が進付き、全員の安否確認をした後葵にマキを救い出した事に感謝し、肩を叩いてその勇氣と力を讃えた。

対する葵は全員自分に今まで通り接する事に驚き、少々ネガティブな質問をすると先ず大人組でまだ葵に喋っていないレオン達から話し始めた。

「別に気にして無いさ。

それに君の人となりはずっと見て来た、其処からの印象を今更変える気は無いさ」

「寧ろあんな力があってこの部隊にはスーパーガールがシエリー含めて5人も居るんだぜ?」

なら負ける気がしねえとしか思わないな」

「それに、貴女は貴女のままでから。」

だから私達は特に気にして無いよ、アオイ」

レオン、ジェイク、シエリーがそれぞれの考えを口にし、葵に対し何ら悪印象を抱かず寧ろ今まで通りと言わんばかりに話掛けて大人の余裕を見せ付け。

「葵、マキや皆を救ってくれてありがとう。」

やっぱり君は勇敢な子だと俺は改めて思ったよ」

「まさか葵ちゃんがあんな力を持つてたなんてお姉さん驚きだよ、後で調べさせてくれないかな？」

「私達友人組は葵さんがどんなだろうと葵さんのままだと宣言しこれ以上は何も言う事は無いです!!？」

後悪いお姉さんから葵さんを守りますよ、ガルルルル！」

次にB・Y・とセイカがそれぞれ感謝や驚きとスパイ特有の調べようとする態度を見せ此方も全然葵の力を気にしておらず、友人組代表としてあかりが話掛けて全員葵の力があるうがなかるうが変わらない事を示した後全員でセイカの前に立ち葵の側に来る事を阻んだ。

「皆さん…ありがとう…!!」

「良かったわねアオイ・コトノハ。」

良い人物関係に恵まれて。

一部余計なのが混じってしまってるのが少し懸念だけれどね」

「ちよつとヨナちゃん酷く無い!?？」

葵は皆の心遣いに感謝し、ヨナも良き人達に巡り会えた事を純粋に褒めていたが、自身を含め余計な者にまで関係を持った事を心配し、今後変に絡まれないからと思った事

を口にし、セイカはそれを聞き大袈裟に傷付いたと言った表情を見せていた。

『話ハ済ンダカ?』

「っ、ケルビム!!?」

そんな場の空気を壊すかの様にケルビムの声が響き全員でそちらを見ると何とケルビムが9体も現れ葵達の前に立ちはだかった。

此れには葵達も驚きケルビム達を見渡していた。

『ガブリエルノ命ニヨリ貴様達ヲ此処カラ先ニハ行カセヌ。

ラファエル、ルシフェル共々死ヌガイイ』

「チツ、こんなところでもたついている暇なんか無いんだよ!!?」

「…仕方無い、此処はエイダ達と同じ作戦で行くか」

ケルビムの足止めにジエイクが苛立ち声を荒らげ銃を構えた。

するとB・Y・がその銃を下ろさせながら前に出てエイダ達と同じく誰かを先に行かせる作戦を発案し、それに賛同し前に出る者達が居た。

「仕方ありませんね、私達利き手を捻挫しちゃいましたしこの先は足手纏いになる可能性がありません。

だから茜さん、葵さん、マキさん、行ってください」

「次に会ったら美味しい物を沢山ご馳走して下さいね!」

「ま、ケルビムがこんなに居たんじゃゆかりちゃん達だけじゃ危ないしお姉さんも残りますか」

先ずゆかり、あかり、セイカが茜達の為にこの場に残ると宣言し、ゆかり達は長物の銃を投げ捨てハンドガンやサブマシンガンに切り替えてB・Y・に並び立った。

「レオン、クリス、ジエイク、3人をお願い！」

私も此処に残ってユカリ達を守るから！

だから3人もクレナイと決着を!!？」

「シエリー……分かったぜ、だが無理すんなよ」

次にシエリーがレオン達を行かせようと前に出て、振り返りながら茜や葵達を守り、そして決着をつける様に促し、クリス達3人は互いを見やりシエリーの願いを承諾し先に進む事にした。

「…仕方無いわね、コトノハ姉妹、受け取りなさい!!？」

するとヨナも前に出ながら懐から衛星操作に使ってたのとは別のタブレットを取り出し、葵達に投げ渡しながら詳細を話し始めた。

「そのタブレットには地下階層のマップが記録されてるわ！」

パスワードは396958よ！

そして地下階層はアカネ、貴女の指紋がミカエルとして登録されているから私

が居なくとも先に進めるわ!!?

クレナイとの決着は貴女達に任せる、だから行きなさい!!?」

如何やらヨナが渡したタブレット端末には地下階層のマップが記録されており、更に茜の指紋がこの先でも使える為ヨナはゆかり達を守るべくこの場に残留を選択をしたのだった。

それも、自らの復讐心を抑えて、である。

此れには茜達もヨナの想いを無碍にする訳には行かず、3人は領き先に行こうとした。

「あ、でもその前に…ふっ!!?」

『ムッ、グオ!!?』

『グシャツ!!?x4』

その前に葵はゆかりやシエリー、ヨナ達が楽になる様にサイコキネシスでケルビム4体をミンチに変え、やや立ち眩みをしたがそれでも膝を付かずに立ち、残る全員にサムズアップをして第1管制室へと6人は走って行った。

『オノレ、ヨクモ…!』

「はっ、B.O.W.にも仲間意識があるとは驚きだよ!!?」

だがお前等をこっから先には、クリスやマキ達の下には行かせない、必ず此

処で食い止めてやる!!?

「全員攻撃開始だ!!?」

ケルビムがミンチにされた個体を見て怒りの声色を見せた事でB・Y・は仲間意識があると感じつつ、クリス達の下に行かせぬ様に武器を構え戦闘を開始した。

ゆかり達利き手負傷組はケルビムとの以前の戦闘経験を活かしてカウンター戦法を取り、B・Y・達もそれに見習って同じ戦法を取る。

そして危うく攻撃が当たる所をヨナが氷の壁で防いだりしつつ、ケルビム5体を相手に残った者達は奮闘するのだった。

レオン達と葵達は第1管制室到着後直ぐに地下階層への扉のセキュリティをOFFにし、走って更なる地下行きのエレベーターに乗って行った。

その中に今まで足止めを買って出た者達を心配する者は居なかった。

全員で生きて再会する、その想いを胸にE d e n I エデンツン 地下階層へと辿り着き銃を構えながらエレベーターの外に出た。

「前方にネフィリム確認、さつさと排除してクレナイを倒す…いや、その前に必要な物があるな」

「ああ、真血清弾Sandalphonだな。

フォンとヨナの組み合わせが無理だったが、今のアオイとアカネならば」

「そっか！

私の首絞めたあのクソ野郎に一泡吹かせられるんだ!!？」

なら茜、薬品生成部屋とか無い？」

クリスは早速前方の此方に気付いて無いネフィリムを倒そうとしたがその前にレオン共々真血清弾Sandalphonの生成をしようと提案し、達もマキも確かに今の葵達ならば作れると思ひ、茜にヨナから受け取ったタブレットのマップを見させていた。

「…あつたで、ウィルス研究、及び薬品生成室が。

此処をAブロック、奥の方に色々ある場所をBブロックになつとるけどAブロックの直ぐ近くに目的地があるぞ！」

「よし、ならさつさと向かってガブリエル様を天から墮としてやろうぜ」

茜は現在自分達の居るAブロックと特殊武器庫や実験場、管制室等がある場所のBブロックからなる場所でのエレベーターの近くに目的地の部屋があると確認し、ジェイクが拳を左手に叩きながら行動開始を促すと全員領き早速目の前のネフィリムに Fallen Bullet 血 清 弾を使い1撃で倒し先に向かい始めた…その時、放送が入った。

『やあ諸君、如何やら最終的にその6人になって私を追って来たのだね。』

そして葵、まさか君があんな力を発揮するとは想定外だったよ。

初めは失敗作にしか思えなかった子がウイルス完全適応者の』

「御託は言いわ!!?」

それよりも今からアンタを倒すから待って!!?」

お母さんやヨナさんを利用し、白龍さんやマグナさんの心の隙間を突いて、関わった人に地獄を見せた外道!!?」

それから…：監視カメラで私を見てるならご注意だよ」

『ん?』

ブフォ、ご、これがあああああ!!?』

『プツン』

紅が監視カメラから自分を追って来た者達の数と所在を確認し、ご高説や葵の力を自分が作り上げた事を自慢しようと放送を掛けて来たが、葵は紅を糾弾しながら何と監視

カメラ越しにサイコキネシスを使い、放送先で明らかにダメージを受けている声があった事に全員驚き葵を見ていた。

「直感だったんですけどあつちが監視カメラで私を見てるなら逆に私もあの男を見ているからサイコキネシスを使えると思つて奴の脳をシェイクする様に使つてみました。

それから透視つて言うんですか、壁を擦り抜けてアイツが慌てて管制室から逃げ出して何んか広い部屋に逃げるのを見えました。

なので今から早速目的の物を作りましょう！」

「……りや葵に盗撮し掛けた奴終了のお知らせやな、ウチも地獄見せたるけど」

「だね」

葵は直感で今のが出来ると説明し、更に透視能力まで使えると説明した事に茜達は葵を盗撮Ⅱ死の図式が出来上がり敵は監視も迂闊に出来ないと思いつつ前に進み始めた。

そしてネフィリムや中を徘徊していたグリゴリを倒しつつ茜の先導で目的地たるウィルス研究、薬品生成室に辿り着き中へ侵入して周りを調べ敵影が無い事や部屋の中の資材を確認した。

「……よし、血清弾用弾頭と薬莖がセットであるな。

敵は頂点の立つ者に逆らう者を殺す為^{Sandaiphon}にこの資材を用意したんだろうな……」

「ならその敵の思惑を利用して早速真血清弾生成に取り掛かろう。

アオイ、アカネ、その機械の中に手を入れるんだ」

『はい／＼オツケー』

そして資材の中にかつて紅が語った頂点に立つ者に歯向かう者を屠る剣となる血清弾用弾頭と葉莖がセットになっている事を確認したクリス、レオン達は茜と葵に血を採取し、血清を作る為の機械に手を入れさせて早速生成に取り掛かった。

この間にジェイクとマキは何か資料が無いか物色すると、マキがガブリエルについてと言う資料を発見した。

「ねえ皆これ見て、此処にガブリエル、紅についてって資料を見つけたよ！」

著者はラファエル、ヨナさんみたい」

「デカしたぜたぜマキ！」

此れであのイカレ野郎の詳細が分かるぜ!!？」

「よし、早速読んでみよう」

マキはヨナが書き起こした紅の資料を見つけ、ジェイクやクリス達に見せ、紅の事を知る為に早速クリスの提案によりマキが血清生成中で読めない茜達の為に音読を開始した。

「えーと、ガブリエルについて、著者ラファエル。

ガブリエルは元々初期型のT—G e n e s i s に加え現在の完成型T—G e

nessisにも適応、強化された為特殊な血清を用いなければ確実に殺す方法が限定されてしまった」

「奴の日記や研究データの事だな。」

そして殺す方法は恐らく衛星レーザーだったんだろうな……マキ、続きを」

ヨナは矢張り紅が現在の体質になった事を事細かに書いており、真血清弾抜きでは殺す方法が限定される事も書いており、その一つが衛星レーザーだったとレオンは推察し、マキに更に続きを読ませた。

「更に奴は私からレミエルまでの変異能力を全て100%で且つ肉体を変異させずに使えるが、此れは奴の能力が私達までの能力を『コピー』出来る事に由来している。

唯一コピー出来ないのはミカエルともしも能力があればルシフェルもだと言っていたが、それは恐らく私達全員分でキャパシティが埋まった事による物だろう。

兎に角奴を殺す誰かか私の為にこの資料は奴に見つからない様にしなければ……だつてさ」

「成る程、あのガブリエル様は唯のモノマネ野郎だった訳か。

はっ、それでガブリエル名乗るとか狡い奴だぜ！」

更にマキが音読した結果琴葉紅の能力はコピーだと判明し、更にヨナの推察では自分達のコピーによりキャパシティを使い切り茜や葵の能力……この場合葵の透視やサイコ

キネシスはコピー出来ないのだと分かりジェイクは狡い男と評した事に全員が頷き他人の物真似でのし上がった男なのだ。茜達は思い、とことん小物が大物振っていたと侮蔑していた。

『やあ茜、葵、今は何処に居るか葵がじゃじゃ馬の所為で分からないけど、音声位なら全体に送れるよ。』

あ、これは一方的な物だから返事はしなくて良いよ』

「クレナイ、また館内放送か。」

一体何を話したい？」

すると紅が館内放送を使い地下施設から通常階層全てに声を流し、葵もタブレットで音声を通して居る事を透視で確認し、目が合えばサイコキネシスを浴びせると思い、更にレオン達は何を言いたいのかを敢えて聞く為に耳を傾けた。

『…茜、葵、そして諸君。』

君達はまだ分からないのかい？

この世界の旧人類は自らを滅ぼし合う為に最終戦争の準備を進めている。

愚かな権力者がそれを目的としているからだ。

だからこそT—G e n e s i sで人類全てを進化させなければならぬんだ。

この施設にはその為の空気感染用ミサイルも用意してある、だから考え直すん

だ。

スペンサー卿の理想通り、この世界を一度綺麗さっぱりリセットし、新人類の
みによる楽園の創造をするんだ。

それしか人類の生きる道が無いんだよ」

そして紅が語って来た事は正にスペンサーの考えそのものであり、自身が忌み嫌うア
ルバート・ウエスカーも辿り着いた答えであるウイルスによる世界リセット、そして人
類の選別とウイルス完全適応者による楽園創造であった。

これを聞いたクリス、レオンは鼻で笑い、そして放送機に向かって彼方が聞いていな
い答えを出した。

「ふん、所詮はスペンサーやウエスカーと同じだ。

自分の理想を他人に押し付け、その他人全てを不幸の底に突き落とす悪魔の発
想だ」

「何度も思っていたが、矢張り奴は唯のテロリストだ。

その考えには絶対に俺達は首を縦には振らない、下らない考えだと笑ってやる
さ」

「…同感だな。

こんなイカれたゲス野郎、生かしてなんか置けねえな」

更に其処にウエスカーの子でありながら、自身の正義を貫くジエイクも混ざり、紅の考えを真つ向から否定して放送機越しに紅を睨み付けていた。

「…確かに世界にバカな連中がうじゃうじゃ居るかも知れないしその最終戦争つて奴の準備をする奴がのさばってるかも知んないけどさ、この世界を滅ぼす理由になんかなないよ、琴葉紅！」

「残念やったな、此処に居る人みーんなお前の考えに共感なんかしいひんよ。

「やっぱアンタは哀れなピエロやで、クソ野郎！」

「琴葉紅…ううん紅、アンタの理想とか言う独り善がりなんか私達は認めない!!？」

絶対！に此処でアンタを殺して、私達の何の変哲も無い、けれども大事な人達が生きる世界を守るわ!!？」

そしてマキ、茜、葵もまた放送機に向かって吠え、クリス達同様全てを否定して紅に同調しなかった。

そしてそれと同時に血液採取が終了して機械の中でそれらが合成、更にアンブルを冷却等を行い其処にT—Geneisサンプルを混ぜ合わせる事により機械『Serum production completed』と表示されると同時にボタンが表示される。

どの弾丸の血清弾を作り出すかのボタンが。

「先ずレオンと俺、マキ、クリスのハンドガン用の9×19パラベラム弾、更にマキとクリスのアサルトライフル用の5.56×45mm NATO弾、後はアカネのAK用7.62×39mm弾とアオイのUMP用40S&W弾とアオイ達用の45ACP弾とついでにシヨットガンのスラッグ弾や俺やレオンのマグナムの奴をありつたけ作るぜ」

「えっ、ちよい待ち今の1回の血液じゃ足りへんよ?」

しかしジエイクはありつたけの自身らの武器の弾丸を作ると言い出し、茜と葵はこの1回だけでは全ての弾丸を補う程の血清は出来てないと分かっている為足りないと言ったりジエスチャーしたが、マキがグリーンハーブから作った今まで使わず貯めていた回復薬を見せ、これで増血も出来る為マキは無情の一言を加えた。

「それじゃあその分だけ血液採取、しよ?」

「…ウチマキさんの事鬼かと思いい始めたんやけど…」

「奇遇だねお姉ちゃん、私もだよ…」

2人は拒否権が無い為また血液採取を執り行い、結果回復薬による増血分も合わせて全員5マガジン、5フルリロード分の真血清Sandai-phon弾生成に成功した。

此れに茜、葵は少しフラ付いたがウィルス完全適応者の特性によりフラ付きは直ぐ収まり、虎の子を懐に隠しつつ紅の下へと走り始めた。

「じゃあ行きましょう、奴はBブロックの右側にある広い部屋に陣取ってます!!?」

「其処は訓練場みたいや、如何やら其処を決戦のバトルフィールドにするみたいやな!!?」

なら其処で今までのツケを全部払わせたるわ!!?」

「勿論よ!!?」

私達の日常を奪った事、後悔させてやる!!?」

そして葵が透視能力でBブロックの訓練場に紅が陣取った事を確認し、全員が歩幅を合わせながら走り茜、マキも気合と敵意をカンストさせ作り上げた真血清弾を叩き込む気満々でいた。

「じゃあ最後の大暴れと行こうぜクリス、レオン!!?」

「ああジェイク、此処で全てのケリを着ける!!?」

「クレナイ・コトノハ、お前の狂った野望は絶対阻止してみせる。」

アンブレラの意志を継ぐ者を許さない、そしてお前やスペンサーの考えに一切共感出来ない者達代表としてな…!!?」

そしてジェイク、クリス、レオンも茜達の前を走りながら全ての決着をつけるべく息を切らさず、しかし此処まで自分達を運んでくれた皆の為に素早く行動し、犠牲になった者達の無念も晴らすべく走った。

全てはアンブレラの意志、スペンサーの思想を継ぐ者の撃破の為、そしてこの世界を T—Gene—sis ウイルスの脅威から守る為に。

「邪魔やでこのバケモン達!!？」

「アンタ達の相手をしてる暇は無いの!!？」

「其処を退けえ!!？」

そうして葵、レオン達はAブロックとBブロックを繋ぐ通路を通り抜け、道行く先に待つB・O・W. を蹴散らしながらなおも走り抜け、そして遂に訓練場の扉の前に着くのだった。

この先に紅が居る、それを葵の透視能力で改めて確認しつつ息を整え、そして6人の戦う者達は事件の元凶が待つ部屋に押し入るのだった。

EP XXXI : 1 | 1 『終焉の刻①』

訓練場に入入したクリス達は中央に後ろを向いて鎮座している紅を発見し、銃を向け臨戦態勢に入る。

「クレナイ!!?」

「お前の狂った野望も此処までだ!!?」

「とつとと観念しやがれ、この自称天使野郎!!?」

「……待っていたよ諸君」

レオン、クリス、ジェイクが叫びながら銃を構え、更にレオンとクリスの間に葵、クリスとジェイクの間に茜、レオンの隣にマキが並び立つと此方に向かないまま紅はその狂気に満ちた口を開く。

「葵があんな力を持つていたのは想定外だった、知っていればマグナの耐久性をコピーせず葵の力をコピーしてたんだがな…」

「ふん、私の力がアンタみたいな私を失敗作扱いして毎日殴って来て、お母さんも殴って泣かせた最低な奴に使われなくて良かったと思ってるわ!!?」

「!」

葵、まさか記憶が？」

紅は葵の力をコピー出来なかつた事を口惜しみ、知っていればと言っていたが、対する葵は能力が覚醒した際に思い出した真実の記憶を吐露しながら自身の力を使われずに済んで良かったと話した。

この会話を聞いた茜やマキは葵の真実の記憶が戻った事に驚き確認を取ると葵は頷いていた。

「仕方無かつたんだ、あの時は力を発揮せずに居た葵を追い込んで力を発揮させようと躍起になってたんだよ」

「は、家庭内暴力を振るうダメ男の定型文ありがとう！

此れで私はアンタを友人の父親なんて思わない、唯のテロリストとして処断出来るわ!!？」

紅は葵に暴力を振るつた身勝手な理由を口にし、マキ達を更に激怒させ最早琴葉姉妹の父親とは感じず、全員が1テロリストとして銃を気兼ね無く撃てるとして引き鉄に掛けた指に力を込めた。

「…なあ茜、葵、そして諸君。

さっきの放送は聞いていただろう？」

なら私の考えに賛同してこの世界をより良き」

「断る!!?」

アンブレラの、スペンサーの意志を継ぐ貴様の考えを俺達は否定する!!?」

「お前は唯のテロリストだ、それも肉親すら道具としか見ない最低最悪な層だ!

お前なんかの為に不幸になった人々に代わって俺達はその怒りを、無念を晴らさせて貰うぞ、クレナイ!!?」

紅は未だに茜達に自身の思想への賛同を求め、話を進めようとしたがアンブレラと、スペンサーの思想と戦い続けて来たクリス、レオンが真つ先にそれらを否定しこの話を切り上げさせる。

「それにお前、俺の親父が大嫌いなんだってな?

ならその血を引いているこの俺がためえみたいなテロリスト野朗の野望を挫けば映画みたいに痛快になるんだろうな!」

「ヒュー、ジエイクさんそれ良いね!

じゃあ私は茜と葵の友人としてアンタをブチのめすわ!!?」

其処に紅が忌み嫌うアルバート・ウエスカアの息子のジエイクが彼の野望を自分が挫けば映画のワンシーンみたいになると言いつつ懐からサングラスを掛け不敵な笑みを浮かべていた。

その姿は正にウエスカアと瓜二つでクリスとレオンを苦笑させた。

更にマキが葵達の友人として戦って倒す宣言をしていた。

「紅、もう此れ以上の問答は無駄やで！」

「今までの、そしてこれから犯そうとする罪を、私達が断罪するわ!!？」

そして最後に茜、葵が吠え賛同者は0となり、それを聞いた紅は溜め息を吐き懐からタバレット端末を取り出しワンタップした。

『警告、T—G e n e s i s 搭載ミサイルの発射シークエンスが開始されました。』

此れより2時間後にミサイルは全世界に向けて発射されます。

中止する場合は中央管制室よりシークエンス中断を行って下さい。

『警告ー』

「本当に残念だ、こんな手段を使う羽目になるとはね。

全ては娘2人を含めた君達が、賛同しないからだ!!？」

『ビュン!!??』

紅は如何やら放送で言っていたウイルスを搭載したミサイルを発射準備に入らせたらしく、更にその理由も身勝手極まり無い物である為全員が怒りを向けたーその際に紅は自身が被つてた仮面を茜達に投げ付け気を逸らそうとした。

「やる事が狡いし古いわこのドクズ!!？」

しかし茜が真っ先に出る前に出てそれを紅に向かつて弾き返すと、紅は手でそれを払い一

瞬足を止めた。

その時クリス達が銃撃を開始し茜と葵が突撃し紅の動きを封じようとした。

「ふん!!？」

しかし紅は超スピードと反射神経が成す回避行動で全ての銃撃を避け切り、茜と葵が視線に入る様に立ちながら極寒の障壁と超高温の体温による二重攻勢防御を施しながら茜達と格闘戦に入った。

「この日をどれだけ待ったやら!!？」

アンタをこの手で地獄に落とすつちゆう誓いを立てたあの日からずっと頭ん中で考えてたで、アンタの殺し方あ!!？」

「この場に来れなかった皆さんの分も合わせて、全部を叩き込む!!？」

「やれる物ならやってみろ、愚かな娘達とスペンサー卿の理想に反旗を翻す旧人類達!!？」

茜は持ち前の身体能力とA・B・F・仕込みの格闘戦術を、葵は茜程では無いが高い身体能力と再生能力、そしてほんの僅かな時間に相手にサイコキネシスを掛けて隙を作る等を行い格闘によるダメージを与える。

しかしヨナ達の力をコピーしている為レールガンや火炎放射、凍結能力等を使われてクリス達に当たらぬ様にそれらを2人で逸らしつつも各種防御により僅かながら肉体

にダメージが入りつつあった。

「ふははははは、私はヨナ達の力を100%使えるのだ!!?」

そんな私が身体能力特化、そしてサイコキネシスのみで攻略出来ると思うなよ

!!?

此処にせめてヨナ達を連れて来るんだったなあ!!?」

「…ソイツは!!?」

「如何かな!!?」

紅は未だに自身が絶対的優位に立っている物として茜達の攻撃を捌くと超電圧スタングンや肉体の半分以上を凍結させる等圧倒的な力を見せ付けていた……だが、そこそが隙となり、茜と葵に両腕を掴まれ取り押さえられてしまった。

「喰らいなこの野郎!!?」

『バチバチ、ズダアアアアアアン!!?』

其処にマキがレールガンを紅に叩き込み、障壁は極寒、肉体の防御は現在超高温だった為レールガンの弾道を防ぎ切れずマトモに喰らい身体に巨大な風穴が出来てしまった。

「グハツ!!?」

『今!!?』

「任せろ…!!?」

『ズダンツ!!X3』

紅はマトモにレールガンを喰らった事で全ての防御が一瞬切れ、此れを紅に触れている姉妹が察しレオン達に合図を送るとフリーの3人は遂に真血清弾を紅に1発ずつ叩き込み、その紅の肉体から当たった箇所血飛沫が上がりマトモな直撃が入った事を知らせていた。

「どうや…!!?」

「…ふ、ふはは。」

君達は先程の戦闘で学ばなかったのかね?

私には血清弾は喰らわないと分かつ…:…うぐつ!!?」

茜と葵は紅と距離を離し真血清弾Sandalphonの効力があるかを確かめると、紅は先の戦闘から血清弾は喰らわないと豪語しながら茜達の方を向く…その時、再生速度が僅かに低下し、更に紅が苦しむ姿が葵やレオン達の目に映った。

「な、何だこれは!!?」

ま、まさか貴様達、私専用の血清を…!!?」

「はっ!!?」

アオイのサイコネシスにビビって監視カメラを見なかったツケが回って来

たな!!?

そうさ、これはこの2人の血から作られたためえを叩き墮とす専用の血清弾だ

ぜ!!?」

Sandalphon

「真血清弾の効力を確認!!?」

このまま戦闘を続行する!!?」

紅の驚きに対しジェイクはサイコキネシスによるダメージを恐れた事を引き合いに出し、この弾丸こそがガブリエルの名を持つ紅を地に墮とす血清だと高らかに叫び、更にクリスは効力発揮を確認した後戦闘続行を宣言。

紅が焦る中全員はそれぞれの役割を自分の中に課し、この戦いに手早く勝利するべく銃や拳を構え、意識を集中した。

そして、ミサイル発射まで残り1時間45分であった。

一方その頃ケルビム5体を相手取って居たB・Y・達だったが、ミサイル発射準備アナウンスが響いた後に残り2体までケルビムを倒していたが全員 Fallen 血清弾 Bullet を含む

弾薬が切れてしまい、ナイフ、スタンロッドを構えたB・Y・とシエリー、セイカが前に疲労困憊のヨナやゆかり達を庇う出てケルビムと対峙していた。

「はあ、はあ、はあ…皆諦めるな、生きる事を諦めるな!!?」

「(とは言った物も拙いな、ヨナも力を使い過ぎて疲労困憊、俺達は弾丸0!

マトモに戦えるのはセイカ位…チツ、こんなところで足止め喰らつてる訳には行かないにほぼ詰んでるか!!?)」

『最早コレマデだ。』

良クゾ我々ヲ相手ニシ、此処マデ戦ツタナ旧人類ト裏切り者共。

ダガ此処マデだ、貴様達ハ地獄ニ墮チルガ良イ!』

B・Y・は状況を見て内心詰んでいる事を察しつつ、早くクリスやマキ達の下に向かわねばと思ひ苦い表情を浮かべていた。

対するケルビム2体はこの状況で全てを終わらせるべく手に炎をチャージし火炎弾を撃ち込もうとして来ており、ヨナはそれを見て無理矢理力を行使しようとしたが膝を突いてししまい最早此れまでかと全員思ってしまった。

『いや、地獄に墮ちるのはお前達だ!!?』

『ズダダダダダダダッ×2』

『グ、グオオオオオオ!!?』

すると其処にビリー、カルロスの声が響きケルビムの背後から銃撃が飛び残ったケルビムは上半身を爆発四散させ、絶命した。

「行け行け行け、E^エd^デn^ンi^ワn^ンを制圧しデータを回収しろ!!？」

それと同時にカルロス達地上に残した4人のみならず、胸に『Silver Bullet Corps』と言う部隊名が書かれた刺繍がなされた部隊が突入して来てB・Y. 達の保護や第1管制室等の制圧をしていた。

「ビリー、カルロス、皆無事だったのか…」

「当たり前だろ、俺達の居ない世界は寂しいだろう？」

「それにシルバ大佐がくれた部隊が到着した、此処は彼らに任せて俺達は先に進んで良いだらう」

ビリー、カルロスはB・Y. に状況説明をし、シルバ大佐が寄越した部隊と共にこのE^エd^デn^ンi^ワn^ンに突入した事を伝えて彼等に回復薬を渡し、服用させ疲労を少々回復させた。

「良く無事だったな、お前達。

己の運命を切り開くと信じていたぞ」

「ふふ、でも少し危なかったわね。」

貴女少し焼きが回ったのかしら、セイカ？」

「いやあ、ゆかりちゃんや疲労困憊なヨナちゃん達守りながらの戦闘はややキツかったですよエイダさん」

『アルファ』も先に突入した皆が自らの手で運命を切り開くと信じていたと話しながらゆかり達の手を引いて立たせ、エイダはセイカにやや巫山戯気味な軽口を叩きつつ、互いに無事だった事を確認し合い弾薬の共有を開始した。

「つと、それより早く地下階層に行こう!!？」

クリスやマキ達が先に突入して、その後ウィルス搭載ミサイルが後1時間40分で発射されちゃうんだ!!？」

『何!!?／何ですって?』

しかしB・Y・は後から合流して来た4人にミサイル発射と言う状況が切迫詰まっている事を伝えると、4人は矢張り地上に居た所為か状況が其処まで悪化してるとは知らずにいて、流石のエイダもレオンを心配し第1管制室の先を見ていた。

「コイツは拙いな、早くクリスの旦那達のところに向かわなきゃな!!？」

「うむ、では早速進撃するぞ！」

それからユカリ、アカリ、ヨナ、此れを受け取れ!!？」

カルロスはクリス達の下に急ごうと全員に促し、『アルファ』が進撃命令を出して全員

走り出そうとした。

そんな所で彼はゆかり、あかり、ヨナの3人にある弾薬が入ったハンドガン用マガジンを渡した。

『『アルファ』さん、これは？』

「Silver Bullet 隊達が我々に寄越して来た物だ。

クレナイ用血清弾、Sandalphonだ。

コトノハ姉妹の血から完成した代物だ、お前達の友人を助け、ヨナは復讐を果

たせ！」

「クレナイ用血清弾！」

そうか、確かにあの2人の組み合わせなら生成可能…!!?？」

「ありがとうございます、これで葵さん達を助けられます!!?？」

ゆかり達はこれが真血清弾Sandalphonと知らされ、ヨナは今の2人、否、元からあの姉妹の組み合わせなら自身やフォンと同様理論上生成可能、しかも双子故に自分達よりも遥かに生成率が高いと判断しながらそれを見ていた。

そしてあかりが最後に礼を言うのと全員走り出し、第1管制室を抜け地下階層行きエレベーターを呼び、に乗り込み始めた。

「待っていてジェイク、レオン、クリス、アオイ達！」

私達も行くから!!?」

シエリーが最後に乗り込みながら先に突入したレオンや葵達の下に駆け付けるべくエレベーターが動き出し、全員はその到着を早く待っていた。

ミサイル発射まで残り1時間30分、時間的に猶予は余り残されていなかった。

「この、愚か者共があ!!?」

今の人類が生き延びる道は此れしか無いと何故理解しない!!

其れこそが唯一つの繁栄の道だと何故分らない!!?」

「お前の様なテロリストの理想などこれっぽっちも共感しないさ!」

この国でバイオテロを起こし、人々を苦しめた罪は贖ってもらおう!!?」

その頃レオン達は紅に何度も真血清弾を叩き込み、目や鼻から血が流れ始めた紅の言葉に耳を傾けず、能力の出が遅くなつて来ているのを良い事にレオン達も格闘戦を行いなながら血清を撃ち込み続け、紅を更に明確に追い詰め続けていた。

「隙ありだよ!!?」

「う、うが、脳があ!!?」

其処に葵がサイコネシスで脳を極力までシイクし始め、紅の動きを鈍らせ隙を晒させた。

「うおお!!?」

其処にクリスが突撃して紅を両腕で首、股関節を固定して持ち抱えた。

そしてそのパワーを活かして床に頭から投げつけ、紅が立ち上がりとした所に頭頂部にダブルスレッズジハンマーを叩き込み再び地面とキスをさせつつ真血清弾Sandalphonを叩き込み距離を離す。

「うぐ、レ、レッドフィールドオオ…!!?」

「オラア、クリスばかりに目を向けてんじやねえ!!?」

クリスにパワー任せのダメージを叩き込まれた為怒り狂った紅だったが、その間にジエイクが割り込み掌打を顎に叩き込み、舌を噛ませつつ顔面や腹にパンチを何度も叩き込み最後は父譲りの掌打を心臓部に叩き込み仰向けに倒れ伏せさせながらジエイクも直ぐ様血清弾を撃ち込む。

そして全員は気付く、紅の能力が本格的に弱る所か『出が遅くなり過ぎてる』と。

「グハツ、ア、アルバートの息子めえ……う、うぐ!!?」

今のでラファエル、ラグエルの能力が使えなく…!!?」

「良い事を聞かせてもろたでクソ野郎!!?」

紅は今までの攻撃と血清によりヨナ、白龍の能力が使えなくなった事を追い詰められた為かうつかり漏らしてしまい、其処に茜がA・B・Fのウィルス完全適応者用格闘技法を完全適応者のパワーとスピードで叩き込み、超高温で皮膚が焼けようが構わず連撃を行い最後は首筋に回し蹴りを叩き込みまた床に叩き伏せる。

「が、がああああ…!!?」

「哀れだな天使さん、人間如きに此処まで追い詰められてしまうなんてな！

そして受け取れ、これがその人間の力と、このバイオテロで苦しみ、失われた人々の痛みと怒りだ…!!?」

茜にダメージを再び貰いながらも紅は立ち上がろうとした瞬間、レオンに飛び膝蹴りを喰らい仰向けに倒れた後何度も顔面にパンチを馬乗りで受け、最後に渾身のパンチを受けて後頭部を床に思い切り叩き伏せられながらレオンに口の中から真血清弾Sandai-phonを何度も撃ち込まれ、蹴き苦しみながらレオンを今までのパワーが嘘の様な弱々しい蹴りを受けさせ距離を離させた。

「スコット・ケネディ、貴様ああああ…!!?」

「オラア、もう一発レールガン喰らえ!!?」

「漸く殺せるで…死ねや、糞親父!!?」

「此れで、地に堕ちて!!?」

『ズドンッ×3』

そしてレオン達が見守る中、葵達は自分達の銜を、更に自身らを生み出した全ての元凶に裁きの弾丸を頭に撃ち込み、それを受けた紅はガクガクと少し震えながら葵達に手を伸ばした…が、直ぐに床に手をパタリと落とし目は白目を向き、遂に力尽きた事を案に示した。

「……これで終いやで、糞親父」

「さよなら、お父さん。」

全ての罪を抱えながら地獄に堕ちて…」

最後に琴葉姉妹に断罪の言葉を投げ掛けられた後、3人はレオン達の下へと歩いて行き全てが終わった事を表情で伝えた。

『警告、後1時間15分でミサイルが発射されます。』

発射中止シークエンス入力には中央管制室にて入力して下さい』

「そうだ、ミサイルがまだ残ってやがったな!!?」

「茜、中央管制室まで先導お願い!!?」

「任せとき!!?」

しかし余韻に浸る事すら許さないアナウンスがE d e n ^{エデン} n ^ワ n ^ン 全体に響き渡り、全員は急ぎ中央管制室へと向かう為茜の先導で訓練場を後にしながら目的地へと走って行った。

『……グチュグチュグチュ』

しかし訓練場を後にしてからそれが起きた為誰も気が付かなかつた。
紅の肉体に異変が起き始めていた事を。

『警告、後1時間でミサイルが発射されます。』

発射中止シークエンスのー』

「だあもう、この地下階層無駄に広過ぎて15分も目的地に到着するのに掛かつた!!

？」

「だが、残り1時間は猶予がある!!?」

焦らず発射中止シークエンスに移るぞ!!?」

「それじゃ恒例の指紋認証やで!!?」

それから15分掛かり漸く中央管制室に辿り着き、残り1時間ある猶予を活かす為に焦らず発射中止シークエンスに移ろうとクリスがマキ達を落ち着かせ、茜が登録された指紋から中央管制室のコントロール機器にアクセスする。

その間にレオン達はこの中央管制室内の全てのデータ抜き取り作業に移り出し、葵やマキ達が茜の指紋認証を受けながら手伝い始め、それぞれが役割を果たして行った。

『警告、発射中止シークエンス認証は1回までです。』

入力失敗をすればミサイルが即座に発射されます。

マスターコードとは別の発射中止シークエンスのパスコードを入力して下さい

い』

「はあ!!?」

マスターコードと別のパスワードと1回しかチャンス無し!!?」

あのクソ野郎何やっとなねん!!?」

「クソ、これでは1時間の猶予も意味がー」

『『ザザツ』クリス、マキ、皆無事か!!?』

しかし、発射中止シークエンスを進めようとした所で6人はマスターコードのSpeakerとは別のパスワードが必要な事に驚愕し、更に1回しか認証を受け付けず入力で即ミサイル発射と言う巫山戯た仕様に怒り、クリスも1時間の猶予が意味を成さない事に憤っていた……その時、クリスとマキの通信機からB・Yの声が響き彼等が通信有効範囲に入った事を理解し、クリスが通信機を取った。

「B・Y、俺達は全員無事だ!!?」

クレナイ・コトノハも施設内で作り上げた真血清弾で処断した!!?」

『あら、私達は完全に出遅れたみたいね』

「エイダか!」

となればカルロス達も無事か!!?」

クリスは紅の処断成功をB・Y達に報告すると通信機からエイダの声が聞こえ、6人は地上に残した組も合流し全員で此方に向かって来ていると理解して安堵していた。

『ああ、シルバ大佐の寄越した部隊が間に合つてE^エd^デn^ンIの通常階層は制圧完了したぞ!」

それより何故ミサイル発射が未だ止まらない!!?」

「それが、マスターコードとは別に何かパスワードが必要なんです!」

それも認証は1回まで、入力失敗するとミサイルが即座に発射される仕組みに

なっていて迂闊にパスコードを打ち込めないんです!!?」

『何だと!』

クレナイ・コトノハめ、厄介だが理に叶ったトラップを仕掛けたな!』

次にビリーがシルバ大佐の寄越した対バイオオハザード部隊と特殊作戦部隊が到着し、通常階層の制圧が完了した事を報告するが何故ミサイル発射シークエンスが止まらない事を問い質す。

すると葵がマキの通信機からパスコードが必要な上に入力ミスが許されない事を伝えると『アルファ』がこのトラップを素直に認められると共に少し焦りを感じさせる声色を通信機から発していた。

『B. Y. 失礼するわ。』

アカネ、貴女が今パスコード入力に入っているのね?』

「せやでヨナさん!!?」

だからあんさん、数時間前までCLOWNやったんだからパスコードの事知らへん!!?」

『ええ知ってるわ、だからこうして彼の通信機を貸して貰って通信しているのよ。』

いい、良く聞くのよ?」

発射中止シークエンスのパスコードは七大天使計画の全コードプロジエクト・アークエンジンの頭文

字がそれになっているわ!

モデルはレミエルから分かる様にエノク書、そしてミカエル、ガブリエル、私の順よ、分かるわね!?!?」

するとヨナが B. Y. の通信機から茜にパスワード入力のための答え：
プロジェクト・アークエンジェル
 七天使計画の1〜7の順番をモデルのエノク書の天使名の頭文字を打ち込む事が
 正解だと説明し、茜もこの計画名と順番は嫌でも覚えている為に入力を開始した。

「よし、『M、G、R、U、R、Z、R』……これで如何や!?!?」
 『パスワード認証中………』

パスワード認証完了、ミサイル発射を中止します』

そして、ヨナから伝えられたパスワードを入力した茜は Enter キーを押し、それによりミサイル発射中止シーケンスが認証され全世界に向けての T—G e n e s i s 搭載ミサイル発射を阻止する事に成功するのだった。

「ふう、ヒヤツとしたぜ……」

『これでミサイルの脅威は無くなったわね。』

ではアカネ、次に施設内にある全 T—G e n e s i s 中和シーケンスに移つて。

此方はパスワード不要よ』

「え、あのクソ野郎がんなもんを用意しとる筈ー」

『私がクレナイに隠れて仕込んだのよ。』

白龍やマグナは気付いていたけど報告しなかった代物よ。

全ては奴の計画の大半を台無しにする為にね……世界に復讐優先だったからまさか此処でこれが役立つとは思わなかったわ』

ジェイクが冷や汗を拭くとヨナは自身が隠れて用意した次に施設内にある全ウイルスの中和シークエンスに移る様に話し、茜はキーボードを打つと確かにそのシークエンスが分かり辛いリンク先にある事を調べ上げ、早速実行に移した。

『全T—G e n e s i s 中和シークエンス開始、20分で全てが完了します』

「此れでこのウイルスはこの世から消えるな……」

「そうだな」

『ああ。』

それと上のアメリカ軍との作戦共有で全員脱出後に地下と通常階層にN2爆弾を仕掛けて爆破する予定だ！

クリス、N2爆弾を仕掛けて脱出準備に移るぞ！』

レオンとクリスは漸くこの事件が終わると呟き、B・Yも同意した所で最終作戦である脱出後にN2爆弾でE d e n i を吹き飛ばす算段を伝え、クリスは懐にあるN2爆

弾のパーツと起爆装置を確認し準備は何時でも出来ると他の5人にジエスチャーで伝えた。

『貴女達は今中央管制室に居るならその先に特殊武器保管庫、そして更に先に地上直結の大型貨物リフトがあるわ。』

それを使つて脱出するから貴女達は先にリフトに向かつて！

私達も合流するわ!!？

……アオイ、アカネ、マキ、ありがとう。

私やユカリ達の分まで奴を叩き伏せてくれて』

「ヨナさん……いいえ、良いんですよ。」

私達もあの偉そうな人には借りがありましたから！」

ヨナは更に脱出経路である特別武器保管庫の先にある大型貨物リフトを伝え、其処で合流する事を伝えると同時に紅への因縁にケリをつけた3人に礼を述べ、通信機先からゆかり、あかりのうんと言う声が聞こえると葵が代表して借りがあったからと話し、そして6人はそのまま中央管制室を後にした。

そして何事も無く特別武器保管庫管理室に辿り着き、其処の中にあるリフトを使い特別武器保管庫へと降りた葵達。

「…よし、この辺りにN2爆弾を仕掛けよう。」

そうすれば地下施設も全て吹き飛ばす計算だ、違うかアカネ？」

「んにや大丈夫やで。」

……此れでウチの復讐も、何もかもが終わりやな」

「アカネ……」

クリスはこの場所にN2爆弾を仕掛けて全てを吹き飛ばせるか茜に確認するとヨナの端末から全部を巻き込めると確認する。

そして全てが終わると思いきや感慨に耽っていた茜にレオンは目的を全て終えた彼女に様々な念を持ちつつ今後彼女が如何なる道を歩むか少し案じていた。

「よし、なら早速設置開始——」

『ズシイイイイインツ!!?』

ズシイイイイインツ!!?』

「っ、何だこの揺れは?!?」

そうしてクリスがN2爆弾の部品を取り出そうとした所、施設全体に響く揺れが発生しジエイク達は何なのかと周りを見渡していた。

その揺れは徐々に茜達の前方方面へと近付いて行き、そして――。

『ズガアアアアアアアンツ!!?』

『ソレ』は特別武器保管庫の壁を崩しながら遂に現れた。

見るに耐えないグロテスクな6メートルを超える巨大な肉塊とその中央から下部までを覆う巨大な牙に包まれた口。

更に肉塊から何本もの触手が生え、口からは床を溶かす溶解性の唾液を垂れ流し如何にも化物と言うナニカがレオンや葵達の行く手を阻んだ。

『ア、ア、アアアアア…』

「あ、あれって、まさか…!!?」

しかし葵達には見覚えがあった。

その肉塊の頭頂部にはある者の肩から顔までが存在したからだ。

無論そのある者とは、その容姿から唯一人しか居なかつた。

『アカネエエエエエエエエエエ、アオイイイイイイイイイイ!!?』

その者の名は琴葉紅。

確かに茜や葵達、クリスやレオン達に血清を撃たれ、更に多大なるダメージを受けて死亡した筈だったが執念により蘇生し、そして血清の影響で体内のT―Gene―sisが完全暴走し、それぞれの悪い部分の特徴が表れてしまった完全なる化物と化した哀れ

な男だった。

EP XXXI : 1—2 『終焉の刻②』

「…クレナイ・コトノハ、見るに耐えない、天使とは掛け離れたお似合いの姿になったな…!!?」

「マジかよ、専用血清を使つて殺した筈なのにあんな天使と呼べないバケモンになつて復活しやがったのか!?」

「いや、寧ろ血清を使つたからこそウィルスが暴走し、理性が保てなくなる程に変異したんだらう!!?」

兎も角、この場で奴を仕留めない限り先には進めないぞ!!?」

レオン、ジェイクはそれぞれ紅が化物然とした姿で復活したのを見て皮肉つたり驚いていると、クリスが真血清弾Sandaiphonを使つた事で暴走、変異したと推察しレオン達も納得し、このままこの化物を放つて置けない為真血清弾Sandaiphon入りの銃を構え臨戦態勢に入った。

『警告、特別武器保管庫でレベル4バイオハザード発生。』

特別武器保管庫を閉鎖します』

「閉鎖!?」

つてあ、リフトが上がっちゃったじゃん!!?」

「こらあ、本格的にウチらでやらなきゃならんらしいで…!!?」
「…良いわ、此処で息の根を止めてやるわ…!!?」

更に警報装置が作動し、管理室から特別武器保管庫直通リフトが上がってしまい退路が塞がれてしまう。

そうしてマキ、茜、葵も覚悟を決め銃を構えた。

すると頭頂部の肩から頭の本体が肉塊の中に隠れ、紅側も臨戦態勢に入り最後の戦いが始まった。

『クリス、マキ、皆!!?』

特別武器保管庫でバイオハザードって何があった!!?』

「クレナイだ!!?」

奴が血清弾の影響で仕留めた筈が変異、暴走して俺達に襲い掛かって来た!!

？」

『何だと!!?』

館内放送で警告が流れた為Bブロックの中央管制室付近に到達したB・Y・達は状況を確認すると紅が変異暴走して復活したとクリスの口から告げられ、流石の『アルファ』も今までに無い状況に驚き声を上げていた。

『ズダダダダダダダダダダダダッ!!?』

「オマケにさつきから真血清弾を肉塊に撃ち込んでるのに全然効き目が無いよ此れ
 ！！？」
 『多分基になったウイルスと寄生生物の悪い部分が集約した暴走だから、血清による

抑制よりも変異が早いよ。

それよりも本体が何処かにある筈よ、それを狙いなさい。

戦闘前に見掛けなかったかしら？』

「…ある。

恐らく頭頂部に合ったが今は肉塊内に入ったクレナイの本体だ！

それが弱点の筈だ！」

Sandalphon

マキ達は触手を避けながら真血清弾を撃ち込んでいるのに効き目が無い事に焦るも、エイダが冷静に弱点らしき物を見なかったか確認するとレオンが先程まであった頭頂部の紅の肩から上の肉体こそが本体だと察し、それを全員に伝える。

『ならマキちゃんはレールガンで肉の壁を破壊するの担当、他は本体を狙い撃ち、行け
 そう？』

「それがセイカさん、透視能力で肉塊の中を見てるんですが本体があちこちに移動して狙い撃てないんです！！？」

しかもサイコキネシスは外側の肉塊と触手までにしか及びません、如何したら

すると肉塊から血と肉片が飛び散り肉塊は少し悶え始めた…そう思った瞬間である。

『グガアアアアアアア!!?』

「っ、マキさん危ない!!?」

『バシヤアアアアアアアア、ジユウウウウウウツ!!?』

何と肉塊はマキに向かって大量の唾液を吐き出し、それを見た茜が超スピードで庇い、更に葵がサイコキネシスを使い唾液を受け止めるとそれを肉塊へと弾き返し、次もこうなると嫌でも理解させる。

しかしマキを庇った茜は背中と左手等に溶解性の唾液が掛かった事で服毎その部分が溶け、肉が爛れたりしたがウイルス完全適応者の再生能力でギリギリ溶解した部分が綺麗さっぱり治っていた。

「お姉ちゃん大丈夫!!?」

「茜、アンタ!!?」

「痛うく……だ、大丈夫やで！」

頭全体に掛かっとなら危なかつたんやけど、ギリギリ背中とかやったからノーカンやで!!?」

葵とマキ達は茜を心配するが、本人は頭に掛かっとなら危なかつたと話しつつ再生し切った所を凶らいマキを伴い戦線へ復帰した。

「…マキ、レオン、ジエイク、アカネ、アオイ!!?」

レールガンでのダメージは3秒程で再生し切った!!?」

ならばレールガンで本体毎肉塊を撃てば恐らく再生阻害を図れる筈だ!!?」

何としても本体毎撃てる作戦を立てつつB・Y・やヨナ達を待つぞ!!?」

「分かったよクリスさん!!?」

「さて、どれ位で彼等が来るかが勝負だな…」

するとクリスはギリギリ肉塊の再生速度を測ってたらしく、3秒程で再生し切る事を全員に伝え、更に本体毎撃てれば更に再生を阻害できる筈と伝え全員でB・Y・達が来るまでの耐久戦が始まった。

その間も少しの唾液を飛ばして来てはサイコキネシスで弾き返したり触手を撃つて引っ込ませたり等を繰り返し味方達が来るのを待った。

クリス達との通信を終えてから2分後、B・Y・達は特別武器保管庫管理室の扉前まで来たが、撃つてもセイカが叩いても壊れない無駄に丈夫な作りになっていた為此方も

焦っていた。

「畜生、クリスの旦那達の為にもこんな足止めを食ってる場合じゃないのに!!?」

「何で頑丈な扉なの!!?」

セイカのパワーでも破壊出来ないなんて!!?」

「くそ、このままじゃマキ達が…!!?」

カルロス、シエリー、B・Yはセイカの力でも破壊不能な扉に焦り、セイカ本人とエイダも舌打ちし、この扉の攻略法を考えていた。

「貴女達、下がちなさい!!?」

「はあああああ…!!?」

『ガシャンツ!!?』

するとヨナが全員を退かして扉の前に立つと自身の力で扉を完全凍結させ、更にヨナはすうつと一呼吸入れると全神経を研ぎ澄ませる。

「やあ!!?」

『ガシャアアアアンツ!!?』

「この手に限るわ!」

「この手しか知りませんでしたよね?」

そうして彼女は凍結した扉を力任せに砕き、何処かの映画で聴いた様な台詞を呟くと

ゆかりがツツコミを入れつつ全員で管理室内に侵入した。

そして実際に起きている戦闘を目の当たりにしながらマイクをONにした。

『アオイ、アカネ、マキ、レッドフィールド達、全員無事ね!!?』

「あ、ヨナさん達!!?」

皆来てくれたんだ!!?」

「へっ、流星はシエリー達だ!」

お早い到着に感謝だぜ!!?」

耐久戦が始まってから3分後、特別武器保管庫にヨナ達の声が響き、葵達は早く着いた事を喜びつつこの予断を許さない状況を伝え始めた。

「ヨナ、敵の肉塊はレールガンでも3秒程で再生し切る程高い生命力を發揮している!!?」

更にアオイのサイキネシスで何とか弾き返しているが敵の唾液は高い溶解性を持つ為足を止められない!!?」

オマケに本体の場所が分からず仕舞いだ!!?」

『分かったわ、でも先ずはリニアランチャーを受け取りなさい!!?』

此れで後は本体の動きを止められれば良いだけよ!!?」

『ガシユツ、ガチャン!!?』

クリスは敵の詳細をヨナに伝えると後ろのビリー達は唯の肉塊にしては戦闘力が高いと驚きつつ、ヨナは冷静に指紋認証とリニアランチャーを特別武器保管庫に3丁出させた。

これを見たクリス、レオン、ジエイクはマキはレールガン役、葵は溶解液パライ担当の為自動的に彼等が受け取り触手を避けながらチャンスを伺った。

「……よし、一か八やな!!?」

「あ、お姉ちゃん!!?」

すると茜は周りを見た瞬間肉塊に格闘戦を突然始め、触手の気を引くと同時にわざと触手に捕まり、大の字に拘束されながら頭頂部付近まで拘束されてしまう。

『アカネエエエエエ、オマエはあ、私のオオオ!!?』

「はっ、ウチはアンタの、何なんや?」

物かいな?

なら発想は古過ぎやで!

それに……」

頭頂部付近で変異した紅と会話する茜はその考え自体が古いとして小馬鹿にし、更に

何かあるのかと会話を溜め込んだ。

此れに紅の肉塊は動きを少し止め茜を見る様な仕草を見せた。

だが、これこそが茜が考えた策であり、更に葵との示し合わせ無しと同じ思考による作戦であり、葵はマキにある箇所を指差して合図を送った。

「またまた、今度は本体每喰らえ!!?」

『バチバチ、ズダアアアアアアアアアア!!?』

『グガアアアアアアアアアアアアアアアア?!?!?』

これこそが双子が考えた作戦、茜が敢えて囮になり肉塊内の本体の動きを止めさせ、其処をマキにレールガンを撃たせた後露出した本体を葵のサイコネシスで止める。

そしてレオン、クリス、ジェイクの3人がリニアランチャーで肉塊每本体を吹き飛ばす作戦であった。

こうしてその作戦は成功し本体をサイコネシスで止め、茜は腕力等で拘束から逃れた。

「今時触手プレイなんかマンネリ過ぎなんやねん!!?」

今やレオンさん、クリスさん、ジェイクさん!!?」

茜は（一応）親に向かつて触手プレイがつまなくなっている事を告げ、マキや葵達を笑わせると同時にレオン、クリス、ジェイクはそれぞれリニアランチャーを構え本体

にヒヤツとした事を茜は雪女だけにといい放ち、あかりが座布団があつたら渡してたと
言いつつ談笑していた。

「ふふ、最近の子達は本当に元気が良いわね」

「ああ……エイダ、良く無事だったな……」

「あの～お2人さん、私も居るのに良い雰囲気作ると気不味いんですけど」

エイダとレオンは互いの無事を確認しながら葵達を見て大人の雰囲気とその場に作
り出していたが、其処にはセイカも居た為気不味くなり話し掛けそれをやめさせてい
た。

「ジエイク、やったわね!!?」

「はっ、当然だろシエリー」

俺があんな小物にやられるわけないだろ」

ジエイクとシエリーも互いを気遣い、しかしジエイクはサングラスを掛けながら顔を
逸らして何処か初々しい反応を見せながら紅に負ける訳が無いと話していた。

「クリスの旦那、やったな」

「流石レベッカが信頼した男だ」

「そしてB S A A北米支部きつてのトップガンだよ」

「ふっ、カルロスやビリー、B・Yも良く無事だったな」

そしてクリス、カルロス、ビリー、B. Y. は短く会話を交わしながら拳を叩き合わせ、互いに健闘を讃え合いつつB. Y. とクリスは忘れない内にN2爆弾をそれぞれ紅の肉塊の一部、紅本体に投げつけて仕掛け残りは起爆するのみになった。

「よし、では全員脱出するぞ！」

誰一人遅れるな!!？」

『はい／了解!!?』

最後に『アルファ』が状況確認しつつ脱出命令を出すと葵、茜が真っ先に反応して小走りで特別武器保管庫を抜けて大型貨物リフトエリアへと走って行った。

『ヨナ・レティシアの指紋確認、貨物リフト起動します』

そして全員貨物リフトに乗り地上へと向かい始めた。

これで何もかも本当に終わり……そう思っていた瞬間である。

「茜エエエエエエ、葵イイイイイイ!!?」

「なつ、クレナイ!!？」

まだ生きているのか!!？」

何と紅の左半分しか残らない上半身でリフト端に掴まり、執拗に葵達を追い掛けて来た事にクリスは驚き銃を構えた。

「ちよい待ちクリスさん。」

これが最後や、この大馬鹿野郎に因縁ある相手で決めさせてくれへんか？」

すると茜がクリスの銃を下ろさせ、彼の懐にある真血清弾入りマガジンも一個抜き取り皆に見せるとゆかり、あかり、ヨナは持っている事を確認し最後に渡すべきシリーズにマガジンを投げ、共に撃つ様にジエスチャーを加えた。

「良いの?」

「ええんやで。」

シエリーさんのおとんの作ったウィルスも使ってT—G e n e s i sを作ったんや。

なら因縁は完璧にあつて今が断つチャンスやで」

シエリーは茜にマガジンを渡された事に良いのかと問うとシエリーにも因縁があるとして茜は矢張りシエリーにも参加する様にジエスチャーした。

それを受けシエリーはマガジンを装填し、ヨナ、ゆかり、あかり、マキ、茜、そして

葵の7人による紅への最後の断罪が始まった。

「あ、茜エ、葵イ……!!?」

そんな事とは知らず最早理性も思考すら保てなくなり壊れたラジカセの様に葵達の名を呼ぶ紅の前に葵達はハンドガンを抜き、そのまま構えた。

「私の人生を狂わせた罪、此処で全て断罪してやるわよ、クレナイ!!?」

「お義父さんを惑わせて、蘭白龍さんも同じ様に惑わした貴方を私達は絶対に許しませんよ!!?」

「今は日本国諜報員では無く、マグナ・グラスホッパーの養女として、貴方を討ちますよ……琴葉紅!!?」

先ずヨナ、あかり、ゆかり達の自身や養父の人生を狂わせられた者同士が先に構えて撃つ準備をし。

「父が作ったウイルスを基にした新ウイルスを作り、私に因縁を作った男……貴方の事は生涯許しはしないわ!!?」

「私の街や友達を巻き込んで好き勝手やった報いだ、BSAA隊員としても1人の人間としても此処でアンタを殺す!!?」

次にバーキン博士のGウイルスを勝手に使い、新型コロナウイルスを作られたシエリーとこの国、街で生まれ育ったがバイオテロで友人毎全てを狂わされたマキが更に銃を構え。

「さよならや琴葉紅……いやおとん。」

此処で全部の禍根、断つとくで！」

「さようならお父さん……もう2度と夢にも現れないで!!?」

最後に紅の勝手な思想により生み出された茜、葵姉妹が銃を向け全ての準備が整った。

そして紅は自身にN2爆弾が仕掛けられている事に気付かないが此処で漸く自らが置かれた状況を理解し、茜達に止める様に叫ぼうとした。

「止めー」

『ズダンツ!!?x7』

止める様に叫ぼうとした紅に7人は問答無用の真血清弾を頭に1発ずつ叩き込み、

頭に7つの風穴が出来た瞬間紅は力尽きて左手を離してしまいそのままE^エd^デe^エn^ンI^{ワン}に絶命したまま地下階層まで真つ逆さまに堕ちて行った。

そしてその哀れな姿に同情する者はこの中には誰一人として居なかった。

「急げ、輸送機内に入れ!!?」

そして地上へと出た所にチャージャーチームの隊員が輸送機を待たせており、全員が乗れる様に席を空けており手招きで急がしていた。

しかし此処でエイダとセイカは立ち止まり、彼女達はフックショットで建物の屋上へと昇りレオン達と別れる道を選んだ。

「エイダ…行くんだな」

「…さよならセイカさん、次会う時は敵じゃない事を祈りたいわ」

「ふふ、また会える時を楽しみにしてるわ。」

じゃあね、レオン」

「グッバイ葵ちゃん達、私も貴女達の敵になるのはちょっと勘弁だと思ってるよ〜♪」
レオン、葵、エイダ、セイカは短い言葉を交わし合った後、エイダ達の方がフックショットで何処かへと去って行きそれぞれが今正に再び別の道を歩んだ、そんな少し寂しい気分にレオンや葵達は包まれていた。

「レオン、アオイ、行くぞ!!?」

「…ああ、今行くぞクリス」

『……………すう』

「おっと、疲れちゃった奴も居るか。

……………そのまま寝てて良いぞ葵、あかり、マキ。

俺達の戦いは終わったんだ、残りは後始末部隊の仕事さ…」

「…此れで、この悪夢も終わりだな」

「ああ、漸くだ……………」

「…長かった様で短かった様な、そんな悪夢だったな」

一息吐くと今まで余り感じなかった疲れが一気に噴出した葵は茜の肩に、マキは隣に座ってたB・Y・の肩に、あかりはゆかりの肩を凭れ掛かり眠りに就きその揺られる輸送機の中で生き残り、戦い抜いた者達…特にB・Y・やレオン、クリス、ジェイクは地獄の戦場から安全地帯の駐屯地へと向かいながらそれぞれ思いを馳せるのであった。

LAST EP 『それぞれの未来』

琴葉紅撃破、及びEden^{エデン}爆破から1日後のAM11:00。

各県に於けるバイオテロはApocalypse^{Apocalypse} Pandora^{Pandora}によりウィルス汚染は鎮静化。

更にB・O・Wはヨナ・レテイシアの献身的な協力により各県でそれぞれが自滅。

更に血清弾2種の存在やBSAA、A・B・F、アメリカ軍特殊部隊2種の活躍により遂に日本に於けるバイオテロは鎮圧に成功した。

「ふう…今回は部下達を失わずに済んだか…」

「ああ、お互い運が良かったなクリス」

この事件でBSAA北米支部アルファチーム、極東支部デルタチームやチャーリーチーム等は戦死者0で切り抜け、しかし矢張り他のチームに被害や死者が出ており何も無かった訳では無かった。

A・B・F 全小隊も連日の戦闘の疲労から重傷者が相次いで出た物も此方は戦死者0であり、しかし被害は少なからず出ていた。

「…終わったんだ、全部」

「せやで、終わったんや」

「5日…悪夢の5日間だったね」

葵、茜、マキはそれぞれが此れまでの悪夢を振り返り、始まりは突然だった事や籠城戦。

そして真実を知る戦いになり、最後は因縁の決着となり葵達の側に居た全員が感慨に耽っていた。

そして今、CLOWNのラファエルだったヨナ・レティシアは様々な罪状によりBSAA極東支部の手で連行される事になった。

「ヨナさん……」

「アオイ、ユカリ、アカリ、心配しないで。」

もしも極刑になったとしても貴女や貴女の友達に救われた事を心から喜んだまま逝くから。

決して世界を呪わないと誓うわ……じゃあマキ、B・Y、連れて行って」

ヨナは拘束具を付けられ、しかし抵抗の意志が無く事件終盤は協力的だった事もあり手錠のみで済んでおり、葵やゆかり達に死刑になろうとも決して世界を呪わずに心の底から救われた事を喜びながら逝く事を誓いマキ達の誘いで輸送機に暗い物が一切無い笑顔のまま乗り込んだ。

「葵、ゆかりん、あかりちゃん心配しないで！」

今まで集めた証拠からバイオテロ関連に関しての減刑を私達が必ずやってあげるから!!？」

「それにレティシア家のメイドや執事から彼女の両親の裏取りをして復讐に走る事をされてたか調べ上げてやる！」

そして彼女を必ず日の光を浴びる場所に連れてってやるからな！

だから心配するな……よし、デルタチーム離陸だ!!？」

マキ、B・Y、更に事情を聞いたデルタチームのメンバー達はヨナの減刑に協力し、そして必ずヨナを更に救い上げる事を誓いデルタチームを乗せた輸送機は離陸して行つた。

更にアルファチームの輸送機がクリスを乗せて飛び立とうとしていた。

「クリスさん、色々とお世話になりました!!？」

「貴方の事は、私達は絶対に忘れませんから!!？」

「ああ、俺も君達のような勇敢な若者達は忘れないさユカリ、アカリ、そしてアオイ！

いつかまた出会って背中を預ける時はまた頼んだぞ……アルファチーム、離陸

開始!!？」

ゆかり、あかりがクリスに声を掛け互いの事を忘れないと話し、もしもまたバイオテロの戦場で出会えば背中をまた預け合う仲間としてクリスは一言頼むと言った後、アル

ファチームを乗せた輸送機もまた離陸して行き、北米支部へと帰って行くのだった。

次はレオン、シエリー達DSOとジェイクがアメリカ軍特殊部隊の輸送機と共にシルバ大佐と共に空母へと帰還しようとしていた。

「アオイ、ユカリ、アカリ！」

一緒に戦えて光栄だったわ!!?」

「私達もですよシエリーさん！」

そしてレオンさんとジェイクさんもお世話になりました!!?」

「ふつ、俺も世話になったぜスーパーガール達」

「アオイ、ユカリ、アカリ、俺達の行く道がまた重なった時はまた共に戦おう。」

まあ、その時が来ない方が良いんだがな……じゃあ、さよならだ」

そうしてレオン達もまた離陸して行き駐屯地に残ったのはA. B. F. オメガ小隊にシータ小隊、そして『アルファ』のみとなりそれぞれが輸送機に乗り込み始めていた。

「カルロスさん、ピリーさん、『アルファ』さん、貴方達にも感謝しています！」

本当にありがとうございます!!?」

「はは、それは光栄だぜアカリ!!?」

それじゃあお互い頑張ろうな!!?」

「ユカリ、アカリ、お前達の中にあるマグナ大佐の魂、しっかりと見させて貰った！」

「これからもそれを腐らせるなよ！」

「……己の運命を切り開いた者達に栄光を」

ゆかりとあかり達は特に世話ななったカルロスやビリー、『アルファ』に手を振り3人は三者三様の言葉を贈り別れの挨拶を済ませた。

そして……葵と茜、死んだと思われていた、しかし本当は生きて今日まで戦い抜いた姉と日常の光を浴びて生きる権利を与えられた妹の別れの時が訪れた。

「お姉ちゃん、行くんだよね？」

「せやで、幾らT—G e n e s i sがこの日本で消えたとしても実は他にもあります。たくなんでオチもあるかもやし、ウチはB・O・W・やバイオテロと戦う道を選んだんや。」

「せやから行くで……偶には手紙を送るから読んでな」

葵と茜は別れの言葉を交わしながら茜はB・O・W・やバイオテロと戦う道を選んだ事の決意やT—G e n e s i sの完全消滅の確認を済ませる事を話し、2人は短い時間、しかし長く感じる時間を抱き合い互いの温もりを忘れない様にしていった。

そして茜から離れて行き輸送機内へと入って行った。

「…………お姉ちゃん!!？」

「もしも私もA・B・F・で一緒に戦うって言ったら如何するかな!!？」

『え、ええ!??』

すると葵が突如茜にA・B・F・に行き共に戦う道を選ぶともしも言ったらと聞き、ゆかり達やカルロス達オメガ小隊全員は驚き、更に珍しく『アルファ』も驚き葵を見ていた。

そして、それに対する茜の答えは……。

「……せやったら先にお母さんに相談してからやで!!?」

勝手に来たたらウチ怒るかんなく!!?」

如何やら来る者拒まず、しかし矢張り母である藍に相談無しには来させないらしくキツチリ藍と話し合ってから来る様にと話し、そしてそれを聞いた葵は頷きながら笑みを浮かべていた。

「……うし、んじゃ次の戦場に行くで!!?」

そして、茜の一言で輸送機のハッチは閉まって行き、双子の姉妹は互いが見えなくなるまで視線を合わせ続けた。

そして、葵は茜を乗せた輸送機が見えなくなるまで見続けながら手を振り、そして一筋の涙を流しながら茜と別れを済ませた。

「あの葵さん、本当にA・B・F・に?」

「……うん、でも先ずはお母さんに相談しなきゃ」

「うわあ、此れ私達の任務が複雑化するかも知れませんがよゆかりさん！」

茜達が去った後ゆかりは葵に先程の言葉の真意を確認すると矢張り冗談では無かつたらしくそのまま藍に相談すると話し、あかりとゆかりは証人保護プログラム要人警護任務が複雑化する事に頭を抱え日本政府に何と説明すれば良いか悩んでしまっていた。

「……葵!!?」

「あつ……!!?」

すると葵、ゆかり、あかりの3人が良く知る声が駐屯地に響いた。

その方向を向いた葵達の目にはずん子やイタコ、きりたんにささらやイア達に加え、テラセイブのクレア。

そして……葵の最愛の母、藍が其処に居た。

「……お母さん!!?」

葵は涙を流しながら藍に甘える様に走って行き、泣きながら2人は互いを抱き合いバ イオテロ最終後に無事に再会が果たされた。

この光景にはゆかり達も流石に素直に泣き、ずん子達も貰い泣きし、ずん子や藍から更なる事情を聞いたささら達も葵と藍が無事に再会できた事を喜んでいた。

「葵良かったわ生きてて……葵、その目！」

「お母さん、うん。」

如何やら私もお姉ちゃんと同じウィルス完全適応者だったみたいなんだ。

それでね……私とお姉ちゃんの血が、紅に……あの人に決定的な致命打を与える血清弾を作れたんだ」

「……そう、じゃあ紅とは……決着を？」

「うん、後記憶も全部思い出しちゃった」

葵は藍に茜と同じT—Gene sis 完全適応者だった事、2人の血が紅を倒す銀の弾丸になった事、真実の記憶を全て思い出した事、そして……全てに決着がついた事、それらを話し何もかもが終わった事を告げた。

「そう……葵、あの時は辛かったよね。」

お母さんが弱くてごめんなさい」

「ううん、お母さんは私を守ってくれたから強かったよ、お姉ちゃんみたいに。」

……それとね、ちょっと相談したいんだけど良いかな？」

藍は過酷な実験生活の際に紅から守り切れなかった事を葵に謝罪するが、対する葵は十分強かったと言い藍の事を誇らしく思っていた。

そうして話を進める中で、遂に葵は自身の中の決意を藍に話そうとしていた。

「ん、何かしら葵？」

「お母さん、あのね——」

葵は自身の決意……姉と共にバイオテロやB・O・W. と戦う道を選ぶ決意を告げ、周りを驚かせて友人間で少しだけ悶着があったが矢張り友人同士で葵の中で決めたなら応援すると告げられ背中を押された。

そして最愛の母の答えと言えば――。

それから2ヶ月後の2014年10月1日。

学園設立の裏にテロ組織CLOWNの存在があり、ROICE学園は一時廃校になり掛けたが、学園生徒やOB、更に保護者会達の意向によりあの痛ましいバイオテロを忘

れず、また教訓にする為に廃校は取り止めになった。

その廃校騒動からやつと生徒達は登校し、そして犠牲になった生徒、教師達の追悼式が執り行われ全員喪服を着ての登校になった。

「姿勢を正し、黙祷!!？」

そして学園長からの追悼の言葉、遺された遺族達の思い出話、救われた者達の感謝の言葉等様々な事が執り行われ（なおマスコミは遺族の大半や学園自体が取材拒否であった）、そうして献花も執り行われつつが無く式は終わり、それぞれのクラスから今日は真つ直ぐ下校する様に教師達から言われ保護者達と共に帰宅するのが大半だった。

「…本当に行くんだね、葵、ずんちゃん達」

「うん、お母さんもウィルス研究をしてた過去からその手の治療薬を作る医療班になる事と、ゆかりさん達の監視の下でね」

「全く、日本政府に説明するのが面倒でしたよ。」

ですが、お陰で私達も同行し逐次報告と相成りました」

しかし帰宅しない者達もいた。

それはB S A Aのマキや、あの後藍も医療班として着いて行く事を条件に東北3姉妹や特別に番犬ずんだもん、監視の為にゆかりやあかりも伴い葵はA・B・Fへと入隊する事になった。

「でもってA・B・Fも遂に国連公認組織、装備が更に潤いますよ此れは」

「だけど『アルファ』大隊長さんはB S A Aみたいな組織拡大はしないみたいなんだよね。」

あくまで自分達がコントロール出来る範囲の勢力のまままで居たいって話で

ね。」

更にA・B・Fも日本のバイオテロ鎮圧の功績が認められ、正式に国連公認組織になり装備が更に充実したのだが、あかりの言通り『アルファ』の意向により必要以上の勢力拡大は行わず現在の『アルファ』大隊長からオメガ小隊までの戦闘班、技術班、医療班、雑務班、そして通信班のみの勢力のままになっていた。

「でも、此れでB S A Aとは敵対しないで済みそうだから良かったよ。

友達を撃つなんてイヤだったし」

「それは私達もですよ。」

そしてマキ達は友人同士で銃を向け合う事態が避けられた事を国連に感謝し、そのまま任務で互いの背中を守られる事を喜び合いながら互いの迎えを校門前で待っていた。

するとB S A Aの車がR O I C E学園前に止まり、中からデルタチーム隊長であるB・Y・と……何とヨナ・レティシアが出て来た。

「ヨナさん、久し振りですね!!？」

「ええ、私も貴女達に会いたかったわアオイ、ユカリ、アカリ!!?」

それから改めてよろしくお願いするわね、ズンコ達!」

「はい、友達の友達は友達で同じA・B・F。入りますから此方こそよろしくお願いします!」

あの後ヨナはレティシア家の資金凍結を一時的に受け、更にロシア連邦の裁判に立たされたがB S A A極東支部が集めたヨナが脅迫されC L O W N入りした事実や真に悪しきは兄のフォンと首謀者の紅だった事、更にはレティシア家の家庭内の教育と言う名の洗脳、暴力を厭わない実態やメイド、執事達の証言による両親への復讐心が自然発生する環境があつた事等や日本でのバイオテロ終盤に於ける協力により事態が更に早期沈静化した事を考慮しB S A Aで禁錮1ヶ月、その後はA・B・F。に出向し社会貢献する様にと言う温情有る判決が下されていた。

「いや、メイドさん達とか色々に被害0で助かったぜ。」

お陰でスムーズにレティシア家内部をより深く掘り下げられたからな」

「本当、自身も含めて全て破滅させるつもりでやったのに吹き飛んだのは家『だけ』
 だったなんて思わなかったわ」

更に何と当時尋問で自宅に軟禁中だったヨナの両親はあの日、軟禁を破り旅行に出掛
 けていた事が判明した。

その事やヨナ自身の独白、執事達の内部告発によりヨナの両親は資金運用権や親権その他諸々を失い、現在は顔に泥を塗られたロシア政府の監視下に置かれ自由を奪われた状態になってしまっていた事が葵に送られたヨナの手紙に書かれていた。

「さて、そろそろお空から迎えが来る予定ですが…あ、来ましたね」

するときりたんは腕時計を見てA・B・Fの迎えの輸送機が校内に着陸する予定の時刻になった時、空からそのA・B・Fの輸送機が校庭に着陸し、ウナやささら達が見守る中葵達はその輸送機に近付くと後部ハッチが開き、その中から葵が特に知る顔の人物が現れた。

それは……双子の姉、琴葉茜だった。

「さ、迎えに来たで。」

早く乗つとき、でないと大隊長に叱られるで」

「分かつてるわよ……久し振り、お姉ちゃん」

「…ああ、久し振りやな、葵」

迎え役に全員と見知った茜が遣わされ、双子の姉妹は軽口を交わした後2ヶ月前の様に抱き合い、今度は藍も加わり家族3人で抱き合った後輸送機に全員乗って席に座った。

「東北、また会おうな!!?」

「葵ちゃん、ゆかりちゃん達、ずんちゃんやきりたんちゃん、皆元気でね!!?」
「マキさんやささらちゃんにウナちゃん、イアちゃん達も元気でね!!?」

そして、それぞれの学友達は別れの、しかし永遠では無い一時のさよならを交わし、輸送機のハッチは閉じて葵を乗せた輸送機は離陸して行き空の彼方へと消えていくのだった。

「…さて、友人達の見送りは終わりだ。

次の任務が待つてるから行くぜマキ」

「おうよ隊長、このマキちゃんがB・O・W. をバツサバサ薙ぎ倒してやるさ!!?」

そして最後にマキとB・Y. の乗った車も走り出して行き、ささら達は学友達に幸があらん事を祈りつつ彼女達を見送り続けたのであった。

またいつか、再会するその日の為に。

それからの、それぞれの動向について。

「…行くぞシェリー、中に入ったら迅速にテロリストを鎮圧するぞ」

「OKよ、レオン！」

DSOエージェント、レオン・S・ケネディとシェリー・バーキンは日夜テロリストを鎮圧し、中にはB・O・W・との戦闘もありながらも無事に任務を熟していた。

全てはウイルスやB・O・W；、バイオテロの根絶の為に。

無辜の人々を守る為に銃を取るのである。

「ふふ、やっぱりレオンは見ていて飽きないわね」

「あーそれ分かりますね」。

それじゃあお仕事行きますかエイダさん♪」

H・C・F・のスパイであるエイダ・ウォンと京町セイカはBSAA等の監視を掻い潜り今日も謎の暗躍をし、ウイルスやB・O・W・を回収しては場を引つ掻き回して行った。

その真意は暗闇に閉ざされており、レオン達でさえそれを掴めずにいた。

「はっ、かかって来やがれバケモンが!!？」

ジェイク・ミューラーはB・O・W・退治専門の傭兵を続け、世界各地のB・O・W・が暴れている地域に現れてはリング1個や日本円にして1000円相当の破格の値段と

その時々で値段は変わるが、安く雇えて必ずB・O・W. を仕留めるその腕は信頼されている。

そして偶に父の様にサンングラスが光ったりしながら今日もまたB・O・W. を仕留めるのだった。

「よいこらしよ、ずんだ餅完成です!!?」

「はい、少し痛いですけど我慢してくださいまし〜」

「このウイルスの抗ウイルス薬は既に開発済みで助かったわ、はいこれでOKよ」

「はっ、こんな小学生にセキュリティをあっさり破られるとか草生えますね」

東北3姉妹と琴葉藍は雑事班や医療班、通信班等で目覚しく活躍し、特に藍のウイルスへの知識やきりたんのハッキング技術は目を見張る物があり常に周りを驚かせていた。

更はずん子のずんだ餅は人気を博し、食事のおやつにこれが無ければやっていけないと言うA・B・F. 隊員が続出し、オマケにイタコの医療に何かを感じた者も多いらしい。

「あゝ、今日もスナイプ&定時連絡終了。」

じゃあゆかりさん、今日もA・B・Fの格闘戦技盗んじやいますか!」

「ふふ、そうですね。」

……お義父さん、貴方の教えを私達は決して忘れませんから」

結月ゆかり、継星あかりはA・B・Fに派遣された日本国諜報員として彼等に協力しつつ、グラスホッパー式格闘戦術にA・B・Fのウィルス完全適応者用格闘技術も組み込み、更にマグナの教えを今日も守り日々を過ごしていた。

その心の中に残る偉大な父の姿を幻視しながら……

「……BSAA、『コネクション』への奇襲に失敗しB・O・Wを討ち漏らしたか。」

これが何らかの禍根にならなければ良いが……」

『アルファ』はBSAAが犯罪組織コネクションへの奇襲作戦に失敗し、研究、開発されていた新型B・O・W、『E型被験体』と呼ばれる存在の輸送を許してしまった事を知る。

先見の明がそれなりにある彼がこのB・O・Wが齎す禍根について思案し、自身らも動く必要があるか否かを確かめるべくE型被験体の情報集めに奔走するのだった。

「ふう、今日も過酷な任務だったなあ」

「まさか火山地帯にB・O・W。研究所を置き、更にタイラントなんかを飼っていたとは……少し相手を甘く見てたな、訓練の練度を詰めるか」

カルロス、ピリーはオメガ小隊員として新人育成をしつつ他の隊以上に回って来る過酷な任務を着実に完了させるのだった。

しかしその新人達はかつての茜並みのじゃじゃ馬娘達の為少々目を離すと危なっかしく何時も肝を冷やすのだった。

「NGO団体テラセイブとして私達は貴方達を許さないわ、次は裁判所で会いましょう!!?」

クレア・レッドフィールドはテラセイブとしてバイオテロ犯達の糾弾や被害者の救済に努め、彼女なりの方法で日夜バイオテロと戦っていた。

これも全てはレオン達と同じくウイルスやB・O・W。の根絶の為である。

「さあかかって来なさい、戦線復帰した私はもう止まらないわよ!!?」

ジル・バレンタインはB S A A隊員として前線に立ち、彼女もクリスの様にオリジナル・イレブンの地位を捨てて更なる戦いに身を投じるかを思索しながらその卓越した技術でバイオテロを鎮圧していくのだった。

『H Qよりデルタチームへ、目標の大型B・O・Wがそちらに向かっている。

速やかに排除せよ』

「了解、よしお前達!!?」

いつもの陣形で行くぞ、誰一人死ぬなよ!!?」

「バカ隊長こそ死なない様にね!!?」

弦巻マキ、B・YはB S A A極東支部デルタチームとしてその戦線に於ける最前列にして切り札として戦い、極東支部エースチームとしてB・O・W排除を迅速に行つてゆく。

余談だがB・Yは日本でのバイオテロ後やヨナの弁護以来、彼女からのSNSのやり取りが増えたらしく、マキは何故か此れに腹が立ちB・O・Wに今日もカスタムショットガンを叩き付け、ゼロ距離で撃ち抜くのだった。

「タイラントタイプ3体確認、オマケに民間人も居る!!?」

オメガ1、及びオメガ16とオメガ17の全リミッターを現場判断で解放するで!!?」

「了解、行くよお姉ちゃん、ヨナさん!!?」

「ええ、行くわ!!?」

此れが私の贖罪の戦いよ!!?」

琴葉葵、ヨナ・レテイシアは琴葉茜達と共にオメガ小隊のそれぞれ16、17人目のメンバーとなりカルロス、ピリーの教育を受けつつも日本での戦闘経験が活きた為かじゃじゃ馬娘が3人に増えたと彼等を悩ませつつも罪無き人々を守って行った。

そしてヨナはB・Y・とのSNSを1日の楽しみにしており、葵は親友のマキにエールを送るのだった。

そして、クリス・レッドフィールドは。

「…『PMCアンブレラ』か。」

アンブレラの名は信用ならんが…此れも任務だ…」

2017年7月18日、アンブレラ社が2007年に社会更正法適用によりPMCとして新生し、アンブレラの負の遺産の根絶とバイオテロリストの逮捕を目的とする会社、PMCアンブレラにBSAAの軍事アドバイザーとしてE型被験体の抹殺と重要参考人逮捕の任務として『ベイカー邸事件』に関わって行く。

「ふう……さて、任務開始だ」

そして……その後のBSAAの対応、及び事件と被害者の『イーサン・ウィンターズ』夫妻の更なる調査に『ハウンドウルフ隊』を私物化して運用等を査察部に目を付けられてしまい警告文を渡されてしまう。

だが事件はまだ終わっていない勘からハウンドウルフ隊を伴いBSAAを離脱。

2021年2月、『E型特異菌』の原種とそれを操る元凶を斃す際に娘を取り返しに来たイーサンがクリスに全てを託す。

更に離脱中にBSAAの闇を覗き見てしまう。

犯罪組織コネクションへの情報漏洩や更なる闇の存在からクリスはBSAAに対してツケを払わせに欧州本部へと襲撃を掛けるのだった……。

BIOHAZARD [V+α]

— — — — —
E N D — — — — —

そして同席した同じく金髪、しかし少女よりも色素の濃く更に長い金髪の白衣の女性は『イヴ』と心の中で名を呼んだ少女に悲痛な表情を浮かべながら抱き寄せ、少女がこれから利用されようとしている計画に胸を痛めていた。

そして、それらを見ていたイヴの考えは…。

「(…やっぱり、私は…『悪い子』、なんだ…)」

自身を『悪い子』と認識し、目の前に居る『母親』を悲しませるだけの存在なのだと感じ取り、早く『自分を終わらせてくれる良い人達』が来る事を願い、月明かりが綺麗な夜空を見上げるのであった。

琴葉葵は今日もまた戦っていた。

あの日本での大規模バイオテロから約3年が経過した2017年7月20日PM15:26、インドの某所にてこの日もオメガ小隊はBSAA極東支部デルタチームと任務を共にし、多種多様のB・O・W・殲滅に勤しんでいた。

「せい!!?」

オメガ1からオメガ17へ、此方オメガ16！

バイオテロに使われたB・O・W.を此方側は処断しました、其方は如何ですか？」

『此方オメガ1、全体報告とBSAAデルタチームの連絡からB・O・W.の殲滅は完了したので。

お疲れ様や皆、後は帰ってパーっとパーティやで！』

『ひゅー、またズンコのずんだ餅が来るのか！

アレ何度食べても飽きないんだよなあ』

そうして3年を経て大人の女性まで後1歩まで成長したコールネームオメガ16、琴葉葵は姉のオメガ1、茜や同期でかつては敵で、今ではすっかり親友のオメガ17、ヨナに状況確認すると任務が完了となり後は帰ってパーティの話になった。

其処にオメガ3、カルロスが通信に割り込みずん子のずんだ餅を食べられる事に喜んでおり早く帰ろうとしていた。

『ふふ、此れでまたB・Y.とSNSが出来るわ。

あゝ早く帰りたい気分だわ！』

『あゝ、マキさん頑張れやなマジで』

更にヨナが毎日恒例のB・Y.とのSNSでのやり取りをしたくカルロスの様に早

い帰還を願ひ、それを聞いた茜はマキに頑張れとしか言えなかつた。

如何やらヨナはあの事件以来自身の無実に奔走したB・Y・に夢中になっており、葵もマキの親友として彼女を応援するしか出来ない苦笑の毎日を送っていた。

「() 飯食べたらず直ぐ別任務？」

だが、某国に帰還した後のP M 18・51、葵、茜、ヨナに待つていたのは大隊長『アルファ』による別任務通達であり、ヨナはずんだ餅は兎も角S N Sのやり取りが出来なくなつた事に内心項垂れつつ表面には見せず、3人は平静を保ちながら任務を受諾し始める。

「うむ、実はアメリカのルイジアナ州ダルウェイと言う田舎町の『バイカー邸』に3年前、B S A Aが仕損じた新型B・O・W・：『E型被験体』第1号のコードネーム『エヴリン』が潜んでいる事が分かり、我等と理念を同じくする『P M Cアンブレラ』とB S A Aからクリスが軍事顧問として此れを追い抹殺、及び犯罪組織『コネクション』の

重要参考人逮捕の任務を遂行中らしい」

葵達はマキの父がありもしない罪から贖罪を果たす為に所属しているPMCアンブレラと、アンブレラの名を嫌うあのクリスが遺恨を余り出さずに新型B・O・Wを追っている事に何か危機感を覚え、3人は互いを見合いながら任務の詳細を聞こうとした。

「では大隊長、私達もレッドフィールド達と共にそのエヴリン抹殺と重要参考人逮捕に向かうのですか？」

「いや、それは違うぞオメガ7。」

確かにクリス達の案件も重要だが彼方は彼方に任せれば良い、問題はDSOのレオンが提供して来たE型被験体とそれが有する新種の菌類、『E型特異菌』に関する別案件があり其方を我々が対応する事になったのだ」

「えっ、レオンさんが特異菌関連のを？」

葵達はクリスと共にエヴリン抹殺とコネクションの重要参考人逮捕任務を帯びるかと思いきや、『アルファ』はレオンが持つて来たと言うクリス達が追うE型特異菌の関連情報と案件を当たる事になったらしく、詳しくそれを聞き始めた。

「実はレオンもまたマークしていたコネクションの一員を逮捕した所、4ヶ月前にロシアの没落貴族『ダールトン一族』がコネクションよりE型被験体第2号とその母親係

を購入し、その力で栄華を取り戻そうと言う愚かしい考えを持ち、更には自身の居城をコネクシヨンの研究所化させ今その被験体や特異菌の力を世に放とうとする計画が水面下で進められているらしい」

葵達はレオンも近頃A・B・Fも逮捕案件が頻発している犯罪組織コネクシヨンの一員を追っていた事を理解し、更にヨナはダールトン一族と言う言葉に反応し、記憶を辿りダールトン一族の情報を抜き出す。

「ダールトン一族……私の6代前のレティシア家との派閥争いに負けて没落した、あの毒親曰く何度負けても食い下がるしつこい敗北者達ね。

では我々は此方の阻止、ですな？」

「うむ」

如何やらヨナの6代前に派閥争いに負けて没落した貴族ダールトン一族がその資産でコネクシヨンからE型被験体第2号を既に購入していた事が判明し、更に城を研究所にした上で馬鹿げた計画も進行中らしくA・B・Fは此方の対処に当たる事となっていた。

「では現時刻よりこの3人で準備を整えた後、現地到着時間の2:30より降下ポイントから徒歩でダールトン城へ突入！」

少数精鋭部隊によるE型被験体第2号の無力化無いし抹殺と重要参考人の母

親系の逮捕！

更にダールトン一族の計画阻止、特異菌感染者の掃討作戦を実行する!!?」

『了解!!?』

葵達は計4つの主要任務からなる作戦を聞き受理の為の敬礼と了解を口にし、此れから始まる未知のB・O・W. が関わる事件に向かう事になるとして、特に3年前までは民間人だった葵は自然と肩に力が入り始めていた。

「なお現地にはB S A A極東支部よりB・Y. とマキ・ツルマキ、更にD S Oからエージェントケネデイが派遣され、更にP M Cアンブレラより特異菌感染防止装備と特異菌用特殊装備が提供される。

それらを有効活用し、更に今回は潜入と新型が相手と言う事でお前達の全リミッター解放を常に俺の許可がある状態にあり且つ任意に解除して良い物とする、以上!!?」

そして『アルファ』は全リミッター解放の任意許可を常に出すと言う異例の事態を3人に伝え、この作戦が如何に重要かを思い知らせる。

こうして葵達に任務であるE型被験体第2号の無力化、又は抹殺と母親系の逮捕、ダールトン一族の計画阻止、特異菌感染者掃討の4つの作戦を発令された。

「スコット・ケネデイのみならずマキやB・Y. も来るのね…日本ではこう言う時に

腕が鳴るわって言うのかしらね？

ふふっ

更に現地でB・Y・とマキ、更にレオンが合流してPMCアンブレラから特異菌用装備2種が提供されると伝えられた3人は、夜明け前のダールトン一族の拠点、ダールトン城に少数精鋭で突入する事になった。

早速気合が入ったヨナを含めた葵達はご飯やずんだ餅を食べた後準備を進めるのだった。

そして現地時間の7月21日AM:2:30。

夜明け前の森に、左肩にA・B・F.のロゴがある黒迷彩服を着た葵、茜、ヨナは降下し、そのままダールトン城が見える丘まで走り暗視機能、サーモ機能付きズームバイザーで目標地点を見ていた。

しかし目標地に『人間の体温を持った者』が徘徊しておらず、逆に暗視で見ると特異菌感染者の末路、『モールデッド』が見回りで徘徊している事が判明した。

「うーん、サーモ機能で見える限り特異菌感染者の死体…菌に耐性やら適応したけど転化した末路、モールデッドしか見回りに徘徊していないね」

「そうね。」

そして夜明け前だから警備が薄くなるのはダールトン一族が特異菌感染者で意識を保つ人間性がある為…但しE型被験体第2号、コードネーム『イヴ』が精神支配下に置いてあり、当主の『ルーツ・ダールトン』はコネクションより治療を受け、正気の可能性大」

「んで、目標は勿論地下に大事に守つとるか…ふん、下らん野望御苦労様やで」

更に月明かりがまだ照らす中で3人は簡易資料でモールデッドや、ある程度転化に融通が効き人間の姿を未だ保つ者達がダールトン一族であり、更に当主以外はE型被験体第2号のイヴにより精神支配を受けてる可能性や、イヴの力をコネクションと協力し世界に売り繁栄を取り戻す計画を当主ルーツ・ダールトンが企てている事を簡易資料で確認しつつ協力者達と到着を待っていた。

「んで、私達に渡されたのは葵達の方も含めた特異菌感染防止、通信や暗視機能にバイタル、ミッシュン表示する次世代マスクとそれに装着高性能除去フィルターに念の為酸

素機、更に尋問で入手したE型被験体2号の詳細資料、ルイジアナで確認されたモールデッドの新型や特異菌感染者の再生阻害をするラムロット再生阻害弾とそれを撃つハンドガンのアルバート01が用意された訳。

但しラムロットは弾数に限りがある為注意」

其処に葵、茜、ヨナが良く知る女性の声が響き全員で後ろを振り返った。

其処に居たのはB S A Aロゴのある黒迷彩服を着こなした弦巻マキであった。

「あ、この声……マキさん！」

B・Y・さんにレオンさん、皆揃いましたね！」

「ああ、久し振りだなアオイ達。

綺麗になつたな」

そして其処にまた黒迷彩服のB・Y・、そして更に渋くなり男に磨きが掛かったレオンが葵達用の装備をアタッシュケースで持って来ており4人の女子達はハイタッチをしていた。

更にB・Y・は懐からチョコレートを取り出して葵達A・B・F・3人組に手渡した。

「遅くなつたがバレンタインのお返しだ、装備と一緒に受け取ってくれ」

「ええ、分かつたわB・Y・。」

はむ…此れ市販のじゃ無い、手作りね。

さて再生阻害弾は…：…えっ、5発ずつ？」

「そうなんだよね、お父さんのPMCアンブレラが寄越せたラムロット弾は物資の関係でコレだけなんだ。

ショットガンのアルバート02もレオンさんとバカ隊長の分しかないし。

だけど、特異菌感染防止マスクに付いたフィルターは新型だから汚染区域でも楽に進められるよ！」

マキは協力者達PMCアンブレラはアルバート01、サムライエッジとコードネームが付いたそれと感染防止新型フィルター付きマスクに更にラムロット弾を寄越してはいたが物資関係でアルバート02二丁含めこれだけしか用意出来なかつた事がマキの口から語られた。

そして全員談笑を終えると各自武器装備を確認し、更に茜はオメガ小隊長としてE型被験体第2号の更なる詳細資料を読んでいた。

「E型被験体第2号『イヴ』、E型被験体の共通特徴として見た目は10代前半の姿をしている。

1号のエヴリンとの違いはイヴはやや特異菌ネットワーク形成に難があり精神干渉が弱く特異菌感染者を操る力はエヴリンに劣る」

茜は他2人に周知する為に音読を開始し、E型被験体第2号イヴの詳細を葵達はその声から頭に入れていく。

「しかし彼女は護身用として肉体の一部をカビで擬態変異させ、剣や盾と言った原始的武器を手から生やして潜入失敗時に此れで敵を抹殺出来る様になっている：しかし矢張りエヴリンと比べ当初の運用力が劣る為E型被験体としては商品価値がやや低め：か」

「成る程ね、他にも胚に特異菌を植え付けて生まれて来させられたとか色々書いてるね：まるで私達みたいだね、お姉ちゃん」

茜の音読を聴いた葵は詳細情報は現地の合流者から聞く様にとコードネームしか聞けなかったイヴの詳細な資料を手渡されながらヨナと共に見て、ルイジアナで暴れたエヴリンとの差異についてを知る。

「成る程、これが第1号のエヴリンとの差異ね」

そして特異菌感染力は変わらないが精神干渉がやや弱いとされ、更に現地での潜入失敗時の自衛手段を持ち合わせた見た目に騙されない方が良いB・O・Wであるヨナや茜は感じていた。

「（…このイヴって子、やっぱり私達みたいだ）」

そんな中写真付きの詳細資料を見た葵は、エヴリンやイヴはT—Genesisとそれから練られた計画で誕生した自身達と似た生まれ方をした子だと知り少し同情が生

まれていた。

「同情しない方が良いぞ葵。」

犯罪組織で育てられてんだ、マトモな教育や倫理観なんか教えられてない筈だ。

エヴリンの方は予想通りルイジアナで大暴れしたんだ、此方も同様の危険性があると考えるべきだ。

なら同様の被害が出かねないと考え、始末するべきだ」

B. Y. は葵の表情からイヴに同情してると見てとり、先のルイジアナで大暴れした報告があったエヴリンの例を出し犯罪組織に育てられた故に常識や倫理が通じないと考え、無力化では無く処断する方に舵を切ってる事をハッキリと告げる。

「……うん、分かり、ました。」

じゃあきりたん、全員の通信同期は完了出来た？」

『はい、出来ましたよ。』

次いでにダールトン城のセキュリティを調べましたが、刑務所とかが可愛く見える嚴重な物でした。

多分被験体2号イヴの逃走を許さない為の物でしょうが……城の近くまで来たら無力化と誤魔化しをしますので皆さんよろしくです」

そのB・Y・の非情とも取れる、しかしB・O・W・である以上仕方無い事だと思いつつも、葵は未だ見ぬイヴに同情を未だしつつ通信兼ハッキング班リーダーとなつたきりたんと全員の通信機能搭載マスクと同期出来たか確認を行う。

「んじやきりたんよろしゆうな」

『はい、じゃあサクサク進みましょう』

全員のマスクから音声のみの通信で無気力な声が響くが、彼女の腕を知る全員はその無気力さに何も言わずに頼りにしていた。

何故ならヨナが作り出したファイアウォールを突破し衛星を自爆させ、更にこの3年で更に腕を上げたのだ。

最早この地上でハッキング対決で勝てる人間は限られているだろう。

「さて、談笑は終わりだ。

早速没落貴族を完全に終わらせる任務に行くぞ…」

「了解だよ、レオンさん！」

そうしてレオン達はA・B・F・制作手持ちワイヤーロープ射出機を茜達から自身等の分も受け取りながら使い丘から降下し、地上に無事着地すると森を進みながらダールトン城に向かって一直線に走り出した。

その中で葵はエヴリンに劣るとされたイヴに過去に忌まわしき父紅が茜と比べ自身

を失敗作呼ばわりして来た事を重ね、もしも話し合いが通じるなら何とか出来ないかと
思案しながら茜達の後続に続くのだった。

そして城の正門前まで辿り着いた葵達だがそんな素直に正門を開けて侵入する訳が
無く、城壁にワイヤーロープを仕掛け、其処から侵入する作戦になっていた。

「それでキリタン、セキュリティは如何なっている？」

『皆さんが到着した時点で城壁や庭園に設置されたセンサーや監視カメラを含むダー
ルトン城全てのセキュリティを掌握しました。』

更に目標のE型被験体第2号と母親系の居場所が分かりました。

地下牢にて幽閉されてる様です。

では皆さん、侵入開始を』

「了解やできりたん。」

ほな行くで!!?」

通信からセキュリティ全てを短時間で掌握したきりたんの指示により第1フェーズのダールトン城侵入が開始される。

レオン、葵達は茜の合図でワイヤーロープ射出機でワイヤーロープを城壁最上部に設置、其処から発射装置に引かれて城壁の上に立ち、更にワイヤーロープを使い庭園に降り立った。

「よし、次は中に侵入だな」

『では1階西側の適当な窓に穴を開けて侵入して下さい。』

西側の方に地下への出入り口があります』

次にきりたんは西側の1階窓から中に侵入する様に指示し、今度はレオンが何処で用意したかガラスカッターを使い円形に窓ガラスをくり抜き、其処から手を入れて鍵を開け、窓から書斎らしき部屋に侵入した。

すると中に入った後に侵入に気付かれない様にヨナがくり抜いた窓ガラスを元の位置に戻し、低温でくっ付けて一見したら何も異変が無い窓に早変わりした。

『中に侵入しましたね。』

では先ず息を潜めて下さい、直ぐ近くにモルデッドが居ます。

此れを倒すと特異菌ネットワークでその個体の信号が途絶するので絶対に見

つからないで下さい』

「了解、じゃあ私が透視を使うから待ってて」

するときりたんは直ぐ近くにモールデッドが徘徊し、見つかるのは勿論倒すのもNGだと告げられ葵が透視を使い人間がカビの集合体と化したモールデッドの徘徊場所を把握し、どのタイミングで出るか葵に委ねられた。

「…よし、今！」

そして葵の合図を下に書斎から音を立てずに6人は飛び出し、且つ部屋のドアを閉め全員忍び歩きで中世の内装が色濃く残る城の廊下を迅速に行動した。

『では皆さん、そのただっ広い西側の1階の現在地から500メートル先の階段まで見つからずに突っ走って下さい。』

其処に地下に続く階段が電子ロック式で隠されています。

皆さんの到着直前に開けますからすぐ中に飛び込んで下さい」

葵達はきりたんの先導を受け西側500メートル先の階段まで一直線に忍び歩きで行くと、丁度モールデッドが葵達を視界から外すタイミングで抜けて行き、残り20メートルになった瞬間きりたんは地下階段の電子ロックを解除し、其処から階段上のモールデッドがそっぽを向いている内に全員階段内に侵入。

そしてそのまま地下階段の入り口は閉じ、葵やレオン達は息を整えてから地下へと進

み始めた。

『皆さん、地下にはモールドデッドは配置されてない上に誰も徘徊していないみたいなのでそのまま地下牢へと向かって下さい。』

階段を降りたら左の方が地下牢で、右は酒造部屋みたいですね』

「ナビゲーションありがとうキリタン。

さて、左に行くわよ」

きりたんは正確なナビゲーションで全員を誘導しているのをヨナはありがたいと口にし、階段を降りて左の扉を開けた。

すると其処には松明に照らされた左右に牢屋が並び、視界の端には曲がり角とその先にも牢屋がある地下牢……なのだが。

「…何やこれ?」

其処には夥しい数の監視カメラがあり、中世と近代がごちゃ混ぜになった歪な空間になっており葵やレオン、B・Y・達はツツコミを放棄して近くに掛けられていた地下牢の鍵を手に取り先を進んだ。

『その先の角を曲がって右側の牢屋の真ん中に目標B・O・Wと重要参考人が居ます。』

それから葵さん達も含めて全員特異菌感染には気を付けて下さい、藍さん曰く

幾らT—Genesisに完全適応した身でもこの未知の菌類に感染、重症化しないとは限らないと言う事なのでマキさん達唯の人組は更に気を付けて下さい」

「了解」

きりたんのナビゲーション通りに奥に進んで行く中で、きりたんは葵達の母で医療班主任の藍からの言伝を注意喚起の映像を交え伝え、全員でイヴの出すE型特異菌に感染しかねない為細心の注意を払う事となった。

「(…うん、身体中カビだらけは嫌だよね)」

その中で葵は頭の中でカビ塗れになった自身を想像し、流石に嫌だと感じつつ歩を進めた。

そして全員で曲がり角を曲がり、更に広く監視カメラの数が増えたエリアに入り…：…そして、目標の牢屋に辿り着いた。

「見つけた、E型被験体第2号イヴと母親係の重要参考人、『ルナ・アーク』女史だ」

B・Y.の一言で全員が広めの牢屋を見ると其処には椅子に座った少女と女性、資料の写真から間違い無くB・O・W. E型被験体第2号イヴと、母親係でコネクション所属のルナ・アークその人でありB・Y.が牢を開け中に6人が侵入した。

「あ、貴方達は…?」

「BSAA極東支部デルタチームとA・B・F. オメガ小隊、そしてアメリカ大統領領

閣下直属のエージェントの6名だ。

コネクションの重要参考人ルナ・アーク、貴様を逮捕しに来た。

そしてE型被験体第2号イヴ、B・O・W.として処断する！」

ルナは中に入って来たB・Y.達に何者かを問うとその返答に顔を真っ青にしていた。

何故ならBSAAにA・B・F.、更にアメリカのエージェントがイヴを始末し、自身を逮捕しに来たと答えたからだ。

そしてこの返答の中で彼女が1番血の気が引いたのは『イヴの始末』であった。

「ラムロット再生阻害弾を装填完了。

∴見た目が10代前半の少女だろうがB・O・W.はB・O・W.だ。

もしも呪うなら己がB・O・W.として生まれた事を——」

「ま、待つて下さい!!？」

私は逮捕でも何でもされます!!？」

だからこの娘は、イヴは殺さないで下さい!!？」

お願いします!!？」

B・Y.が特異菌の再生阻害弾を装填したアルバート01をイヴに向け、辞世の句すら許さぬ剣幕で引き鉄を引こうとした瞬間、ルナがイヴを庇い立てしB・Y.の射線か

ら退こうとしなかった。

「ルナ・アーク、アンタは重要参考人だから必ず逮捕する様に上から指令が下つとるんや。

せやけどイヴは別や、無力化か処断の何方かって命令が降りとるけど、その力を資料で見とつたら絶対生かして置けへんやで！」

すると茜もB・Y・に便乗してイヴを生かして置けないと話してルナを拘束し無理矢理射線から外させようとする。

しかしルナはその拘束に抵抗しイヴの前から退こうとしなかった。

「嫌、お願いですからイヴを、イヴを殺さないで下さい!!？」

コネクションの拠点を知る限り話しますからどうか、どうか!!？」

「あーもう大人しくしててよ！」

此れじゃあどつちが悪者か分かんなくなるじゃん!!？」

そのルナの抵抗にマキも取り押さえに参加し、茜と2人で退かそうとするも、ルナは必死に抵抗し2人掛かりでも抵抗し切ろうとしたためヨナも拘束に参加しようとして動き出そうとした。

「……貴方達、『良い人』、なの?」

「何?」

すると今まで黙っていたイヴが突如話し始め、その場の空気が凍り全員の視線がルナの後ろに居るイヴに向けられた。

「……貴方達、良い人達、なの？」

『悪い子』の私を、殺しに、来て……くれたの……？」

そのか細くか弱そうな少女の口から綺麗な声が出て、たった今自身に銃を向けようとして来た6人全員に良い人か如何かを聞いて来ており、B・Y・はレオン達を見てその質問に応えるかジェスチャーをすると、取り敢えず応えろとなった。

「ああ、俺達はお前みたいな悪い子を退治しに来た者達だよ。

正義の味方か如何かはお前が勝手に想像しろ」

「……そう。」

なら、私を……殺して」

「何……？」

B・Y・がイヴの質問に伝えてどんな反応を示すかを見て、其処から問答無用で撃とうとした所突如イヴ立ったと思えばルナの前に躍り出て、B・Y・に自身を殺す様に見込み銃口の目の前に立って来る。

此れにはレオン達も意外な反応を示した為驚き、一瞬状況整理の為に頭を空にしようとした。

「イヴ、駄目!!？」

お願いだからお母さんの前に出ないで!!？」

「…私、悪い子だから……お母さんに迷惑を、掛けたり悪い人を、喜ばせるの。

だから、私を……此処で、殺して。

その代わり……お母さんを、此処から逃がして、あげて」

そんな中でルナはイヴを静止させようと叫ぶが、イヴは自身の口で自身が如何なる立場に居るかを理解していると辿々しい口調で話し、銃を向けるB・Y・に自身を撃ち、ルナをこの場から逃す様に頼み込み込んで来ていた。

此れにはB・Y・もB・O・W・の方から殺されに来る事は想定外だった為判断が一瞬遅れた。

だが、その一瞬が命取りになった。

『やあ、初めまして侵入者諸君。』

早速で悪いが其処から我々の実験場に落ちてくれたまえ」

突如牢屋内に男の声が響き、全員が周りを見ると牢屋の足場がいきなり真つ二つに割れ、落とし穴と化してルナやイヴを含めた全員が落ちてしまう。

「うおっ!!？」

「くそ……また落とし穴か!!？」

「うわあああ!!?」

「きやあああああ!!?」

全員が古典的な罠に引っ掛かりそのまま重力に従い落ちて行き、その誰も居なくなつた牢屋の中には先程の男の笑い声が響いていた。

『ふはははははは、ふあーはっはっはっはっはっは!!?』

B・O・W. の抹殺の為に来た葵達はいきなり罠に引っ掛かり、更に処断対象は自分で自身を殺す様に要求し事態はいきなり混沌とし始めてしまう。

果たしてE型被験体第2号であるイヴの真意とは?

また葵達はこの任務を無事に成功させられるのか?

ーーーーこの物語は、とある組織に所属する『母』と生物兵器の『娘』が織りなすモノを葵達が目にする物語である。

BIOHAZARD [V+α]

Episode of resident evil Side story [MOTHER'S affection]

EP II 『食い違いと『ゲーム』』

葵達はいきなり畏に掛かり絶賛地下牢の落とし穴から真つ逆様に落下中であり、下はあまりにも暗く床が見えない程深くこのまま落下すれば茜達は兎も角マキ達やルナは命は無いと全員が察していた。

「くっ、間に合いなさい!!?」

『ガシャン!!?』

するとヨナが全員分の斜めになっている氷の床を形成後、それをスライダー状に伸ばして行き床まで一直線に全員が長く冷たい滑り台を滑り出し、約30秒で全員床に滑り落ちた。

「うおあつ!!?」

「いったあい!!?」

するとB・Y・は頭から、マキは背中から床に滑り落ちた為ダメージを変な所で負い、他はレオンがルナをお姫様抱っこしながら滑り落ち、葵がイヴを抱えたまま直立で着地してイヴをそのまま降ろし、他は難無く着地していた。

「あ、ありがとうございます…」

「重要参考人を死なせる訳には行かないからな…さつきもコネクションの拠点を幾つか吐くと言う事も踏まえて死なせたら拙いから守った、犯罪組織の人間を守る理由はそれ位しかないさ…だから吐いてもらうぞ、此処を出た後な」

レオンはルナを守った理由をきつちり答え、コネクションの拠点を吐くと先程イヴを殺されそうになった際に取り乱しながら言ってしまった事で、拠点がどれ程あるか不明な組織の重要参考人としてのレベルが上がった為だった

これにルナは予想通りと言った表情を浮かべつつイヴの様子を見ていた。

「大丈夫だった、えつと…イヴ？」

「…どうして、貴女、私を…助けたの？」

「えつと…咄嗟に」

そんなイヴは葵が自身を助けた事を不思議がっており、理由を聞いて更に不思議がり何故助けられたか分からずにいた。

此れだけ見れば唯の子供だがB. Y. 達はB. O. W. と知っている為油断出来ずにいた。

「たく葵…完全にイヴに感情移入しちまったなありや…それにしても周りは暗いし暗視機能がなきや慌ててたところだった。

後きりたん、罨は全て掌握した筈じゃなかったのか？」

『はい、しかし先程の罠と一部監視カメラは如何やら独自の系統で動いていたらしく、ちよつと私も迂闊でした。』

まあそつちもさつさと掌握して、今相手とセキユリテイのパス書き換えをされては掌握しての妨害で対決&さっきの以外連勝中です』

そのB・Y・は葵がイヴに感情移入：特に同情している事に頭を抱えつつ、きりたんに何故トラップが作動したかを問うと別のシステム系統から動くタイプだったと告げられ、更に相手と絶賛セキユリテイ掌握対決の真つ最中らしく先程の以外は勝つてると言われ流石と思っていた。

「でもバカ隊長、此処から脱出しない限り、イヴを始末しても私達鳥籠の中だから意味ないと私思うんだけど？」

そしてルナ・アークさん？

此処は何処な訳？」

「多分…此処は城の地下に作られた…」

そんなきりたんと通信中のB・Y・にマキは自分達がこの場を直ぐに脱出出来なければイヴ抹殺も意味が無くなると話しこの場から出ようと遠回しに言い、更にルナに暗視で視える機械施設たるこの場所が何なのか聞くと彼女は何か知ってる様で答えようとした…次の瞬間。

『パツ!!?』

パツ!!?』

パツ!!?』

「電気が点いたわね…あら、私達の落ちる場所にクッションがあつたわ。

態々氷の滑り台を作る意味も無かつたわね」

突如周りの電気が全て点き、その施設的全貌が露わになった…そして自身らが落ちる予定地にクッションがあつた為ヨナは氷の滑り台を作らずとも良かったと話しつつ、周りを見渡した。

すると施設全体に放送が入った。

『ようこそ、BSAAのデルタチームとA. B. F. オメガ小隊にアメリカエージェントの計侵入者6名諸君!!?』

我々がコネクションとの協力で作った特異菌地下研究所へ!!?』

『アツヒヤヒヤヒヤヒヤア、ハハハハハハハ!!?』

放送から先程トラップを仕掛けた者の声がした後、下品な笑い声を上げた複数人の声
 が上がり、ルナは「やっぱり」と眩きながら放送器具を見ていた。

「特異菌研究所…つまり此処に居るイヴやE型特異菌を研究してる施設だな？」

良く数ヶ月で此処まで見事な施設を作り上げられたな、没落貴族のテロリス

ト

『流石アメリカ人、我々を短絡的にテロリストと括り付け正義感に酔うなあ。』

我々はただ、このロシアで革新的な革命を起こし、我々の栄華を取り戻したいだけなのだがなあ』

「それを世間一般ではテロリストと呼ぶのさ、学の無い貴族崩れさん?」

レオンはこの場所が特異菌の研究所と知り、放送主にテロリストと呼びつつこの場所をたつた数ヶ月で用意した事にその熱意を軽蔑を込めた関心を示し、放送主と正義感に酔うアメリカ人やら貴族崩れやら売り言葉に買い言葉の軽口の誹り合いが始まっていた。

「…で、今話しとるあんさんがルーツ・ダールトン、ダールトン一族当主で話の内容から間違い無くドクス臭いな奴なんは分かったからさっさとこの爆破せなアカン施設の事をはよ喋れや」

『おっとこれは失礼、ではこの施設の概要を説明しようでは無いか!』

そんな誹り合いの真つ最中に茜は放送主をルーツ・ダールトン、ダールトン一族当主と見定めながらこのいかにも爆破しなければならぬ施設の事を説明する様に命令する。すると放送主はルーツである事を否定せず施設…特異菌研究所について話し始めた。

『此処は我がダールトン城地下の更に深く、世界中から攫った者達をイヴの力の実験台にし、そして特異菌を研究して感染者の限界性能を試験すべく様々なジャンルの『ゲーム』に彩られた脱出系の施設なのだよ!!?』

ははははは!!?』

「またゲームかよ、CLOWNと言いお前等と言いテロリストはゲーム感覚で人殺しをする快感に溺れてやがるんだな、気持ち悪い」

ルーツはこの研究所がイヴの力の実験台と特異菌の研究となる土壌であり、更に特異菌を様々な形で利用すべく多種多様ジャンルの脱出系ゲームとしても機能していると話し、葵達6人この男が琴葉紅等と同類と判断し、更にB・Y・は明確な嫌悪を見せ吐き捨てていた。

『さて、本来なら『正門』前からこの研究所を回ってもらおう所だが、君達の様な侵入者の特別経路から『正門』前までを直指して貰うとしよう。』

では心逝くまで楽しんでくれたまえ、ふぁーはっはっは!!?』

『ギャハハハハハハハハ!!?』

『プツン』

そうしてルーツとそれと共に下品な笑い声を上げていた者達の放送は途切れ、CLOWN事件に関わった6人は様々な感情を抱きながら放送機を見つめ、それから約1分後

にマキがB・Y・に話し掛けて来る。

「で、如何すんの？」

此処でイヴを始末して無理矢理脱出する？

それともイヴの方は保留にして脱出優先？」

「…マキの言う通りイヴを始末しても脱出出来ないという意味が無い。

仕方無い作戦変更だ、この施設を知ってるルナ・アークを保護しつつ『正門』前とやらに行き脱出を図り、イヴの処遇は保留にしつつ特異菌感染に注意を払う事。

……葵がイヴに同情し切っているからな、それも踏まえての措置だよ全く」

B・Y・はマキの言う通りイヴの処遇は葵が彼女に同情し切り下手に処断出来ない事も踏まえ、ルナを護衛しつつ先に進む作戦に変更し茜達も無言で同意し、ルナに説明のジェスチャーをしつつその先の道を見やっていた。

「……この場所は侵入者用の迎撃ルートで、屋敷中のモールデッドを此方に呼び寄せる事が可能なルートになってます。

ただ、モールデッド100体を倒せば『正門』前に進めるルールが人数に限らずありますが……」

「何だ100体程度か、肩慣らしには丁度良い数だね。

皆行くよ」

ルナはこの先が侵入者迎撃ルートであり、100体のモールデッドを倒さなければ『正門』前に辿り着けないと暗い表情で話し事態の深刻さを物語ろうとしていた。

しかしマキ達は過去の此れまでの経験やモールデッドの弱点は頭部と言う資料を統括し、肩慣らしには良いと言い放ち他5人も同じ気持ちで居た。

「あ、貴方達はモールデッドの戦闘力や特異菌のカビが壁等にある場所なら其処から自由に現れる特性を知らないのですか!?!」

それに此処に侵入して100体を倒した事例はこの4ヶ月間一切――

「ルナ・アーク、ウチ達舐め過ぎやで。」

ウチ達はあの日本のCLOWN事件を解決したり色々しとんねん、今更モールデッド100体とか驚きもあらへんわ。

それに、ウチ等をあんさんが知つとる他の侵入者と一緒にされても困るねん」ルナは6人が全く動じない事に事態を理解していないと思ひモールデッドの特性や4ヶ月間の突破事例が無い事を話す……だが、茜が3年前のCLOWN事件に関わり解決した等を話し自身等の戦闘力を此れまでの事例の者達と一緒にされないで貰いたい趣旨で話していた。

「…その侵入者が、BSAAの隊員達でも、ですか?」

「何?」

「…チツ、欧州本部め」

ルナはその侵入者達がBSAA隊員だった事を告げるとレオン達は報告に無い内容に驚き、B・Yは明確に欧州本部に対する愚痴を漏らし、マキも「やつぱり」と口に、この食い違う情報に何か知っている素振りを見せていた。

「マキ、B・Y、それは如何言う事かしら?」

BSAAはダールトン一族の拠点潜入任務を4ヶ月の間にやってそれを隠していたの?」

「私達じゃなくて欧州本部が数回に分けてやったみたい。」

噂じゃどれも失敗したから他の支部に失態を知られない様に初任務っぽくして作戦直前までに隊長や極東支部の皆が調べたらしいんだけど…まさか事実とはね、欧州本部は何考えてんのよ」

ヨナはそんな報告は資料にも報告にも無かった為マキ達に詰め寄ると、マキやB・Y、極東支部は噂程度ではあるが欧州本部が此処に数回潜入作戦をして全て失敗した事を明かし、マキ等2人もまさか事実だったとは思わなかったらしく頭を抱えていた。

「…兎に角私達は精鋭中の精鋭です。」

もし突破出来たらその腕を信頼してこの研究所の事を更に打ち明けて貰いま

すよ?。」

しかし葵はBSAAの失態を今考える事はノイズになるとして思考カットし、目の前の侵入者迎撃ルートの先を進む事のみを考えルナに突破出来たら更に打ち明けて貰うと話しながらA・B・F・制式採用AKを構え、ルナとイヴの護衛に回り始め、他も各々の武器を構え茜とレオンが戦闘になり先に進み始めた。

「…気を付けて下さい、このドアの先は全てカビ塗れです。」

ですから天井、床、壁の至る所に…」

「それだけ判れば良い。」

キリタン、ナビゲートを」

『はい、この先は500メートル直線で250メートル先に正方形の広い空間があります。』

モールドテッドを迎撃するなら其処でお願いします」

ルナはこの先はカビ塗れと言うとレオンはそれだけで十分として、きりたんのナビゲーションにより正方形空間があることが分かり、其処を指す様に走る事を決めたレオン達はA・B・F・組がAK、レオンとB・Y・にこの作戦用にPMCアンブレラが用意したセミオートマチックショットガン、『アルバート・W・モデル02』(トールハンマー)を構え、マキは自身の愛用カスタムショットガンを構えた。

「よし、行くぞ」

レオンの合図でドアを蹴破り、イヴとルナを伴い6人は250メートル先まで一気に走り抜けた。

そして目標地点まで到達すると天井や壁から黒い液体がビタビタと滴り落ち、そして周りの床や壁からE型特異菌の感染者の末路、モールドレッドが一斉に現れ始めた。

「敵性B・O・W.と接敵、此れより殲滅に移る!!？」

B・Y.の言葉を合図に全員が歯車の様に規律良くルナとイヴを守りながら攻撃を開始する。

資料にあった通常のノーマルタイプ、手が剣状の物に変わったブレードタイプ、四つん這いで機動力あるクイックタイプ等が一気に襲い掛かるが此処に居るは精鋭中の精鋭、それ等をタイプ問わず近寄らせず一気に頭を吹き飛ばして行く。

「す、凄、い！」

他のBSAA隊員達よりも個々の戦闘力が高い!!？

本当に此れなら此処を…!!？」

そんな中でルナはレオン達の群を抜いた戦闘力を見て驚き、更にまるで此処を突破して欲しいと言わんばかりな言葉を発して周りに少し視線を向けられるが、葵やレオン達はその一瞬すら油断せずモールドレッドを撃破して行く。

そしてマスク内の記録された撃破総数はあれよあれよと言う内に50を突破すると、壁から『煙を拭いた白いノーマルモールド』が現れる。

「あ、あれは再生力が高く通常火器や手榴弾でも倒せない強化タイプ、WM―002です!!？」

やっぱり、この6人でも…」

「ならコレやな」

『ズダアンツ!!?』

ルナは白いモールドを新型のWM―002と呼称し、通常火器はおろか手榴弾すら効かないと話し絶望感を匂わせる顔をしていた。

が、茜は遂に此処でアルバート01に装填していた虎の子たるラムロット弾を使用。すると白いモールドは忽ち悶絶し、そのまま絶命に至った。

「成る程、白い奴にはこいつが有効か」

「い、今のは再生阻害弾!？」

貴女達は、一体……」

レオンは白いモールドにラムロット弾を使う事を理解し、現れ始めたWM―002に限りあるラムロット弾を使いつつ巨大で耐久力があるファットタイプすら早期撃破しスコアを伸ばして行く。

更にルナは今の弾丸が先の牢屋のやり取りを思い出しながら再生阻害弾だと理解し、この6人は改めて何者なのか：日本のバイオテロを解決に導いたと聞かされた6人の戦士に興味と期待、そして『希望』を抱きながら戦闘を見続けた。

「……………」

そしてイヴもまたこの6人は今まで見て来た『良い人』の中でも強過ぎると理解し、此方もまたルナとはまた違う『希望』を抱き、自身が持つ特異菌感染者やモールデッドを操る力を利用しての援護をせず戦闘経過を見つめていた。

「さて、あれよあれよと言う内に99体だ。」

最後はどんな奴が来る？」

『ふははは、まさかこれ程まで戦えるとは驚いた!!?』

しかしそれも此処までだ、行け、『WM—001』!!?』

そしてB・Y・が99体倒した事を告げた瞬間、ルーツからの放送が流れWM—001と言う何かをその場に呼び出そうとしていた。

すると壁から白いファットタイプが現れ、全員が此れがラスト、WM—001と理解し武器を構えた。

「先ずは此れ!!?」

『ズダアンツ!!?』

『グギャアアア!!?』

葵は早速アルバート01のラムロット弾を使用し、WM―001の再生を阻害させつつ怯ませ、そのまま全員で突撃し始めた。

『せいやあ!!?』

「くたばれ化物!!?」

「はあ!」

先ず女子組が連携キックでWM―001の体勢を崩させると、レオンとB・Y・が更にキックを加えて吹き飛ばし、そして全員が速やかに火力を集中してダメージを蓄積させて行く。

しかしWM―001は通常ファットタイプより耐久力があつた為反撃としてカビ塗れの体液を口から吐き出す。

葵以外は避けるが葵は直線上にイヴやルナが居た為避ける事が出来ず棒立ちになつた。

「あ、危ない!!?」

ルナはイヴを庇う様に抱き抱えたが、その関係で葵に手を伸ばせず彼女に叫びながら悲痛な表情で見続けるしか出来なかつた。

しかし……葵は不敵に笑うとWM―001の体液が葵達に直撃する寸前で『空中で静

止し、そのまま葵は話し始めた。

「特記事項その4アルファ大隊長の許可、及び追加特記事項5の協力的な重要参考人保護の為、オメガ16の全リミッター解除……さあ、ルナさん達諸共私を狙った罰を受けて貰うよ!!？」

葵は不敵に笑ったまま叫ぶと体液が『WM-001に全て弾き返され』、体液を全て浴びたWM-001は自滅した様に体液で腐食し、レオン達もまた先程の様に火器を集中するのみならず、茜がWM-001の口に手榴弾を啜えさせた後蹴り飛ばし距離を離させた。

「これで終いや、元人間のカビカビさん！」

そして茜が捨て台詞を吐くと手榴弾が爆発、WM-001は頭が完全に吹き飛びそのまま倒れ、全身が爆発四散し絶命した。

そしてマスク内の記録された撃破総数はジャスト100になり、天井や壁から滴り落ちた黒い液体は止まり、代わりに放送が鳴り響いた。

『……まさかWMシリーズすら屠るとは、素晴らしい！』

君達是如何やら我等が実験場に招かれる価値がある訳だ!!？

さあ奥へ来たまえ、其処が『正門』前だ、ふはははははははは!!？』

『プツン』

「ふん、苦し紛れなご招待どうもだよ没落貴族」

ルーツは放送から慌てた様子はなく、寧ろ喜んだ声色すら上げてレオン達をこの先にある『正門』前へ誘おうとしてそちらのドアが開く。

そして放送が終わると同時にマキがダールトン一族を挑発しながらルナの前まで来て彼女が無事か否かを確かめていた。

「…WMシリーズを屠るなんて…いえ、先程の何かの力場と言ひ、この場所のスタート地点で出来上がった謎の氷と言ひ、貴女達は一体…?」

「それは歩きながら説明しても構いませんよ、ルナさん?」

ルナは先程葵が見せた力や初めの氷の滑り台と言ひ、葵達が何者なのか気になり出しイヴを庇いながら問い質す。

すると葵は余裕と安心させる様な声色をマスクの中から発し、彼女に改めて自分達が何者かを説明し始めるのであった。

「ククク、まさか彼処を突破する力がある者達が来るとは好都合。

我等の力やE型特異菌の力を思い知らせられるチャンスだ、ふはははは…!

所で監視カメラ類のセキュリティ完全復帰は如何だ、『シャル』?」

「駄目だ親父、あいつ等優秀なコンピューターやAIでも作ったのかこつちの暗号ロツクを解析しては掌握されちまう。

此れじゃあ大体のエリアで支障が出ちまうぜ」

一方肥満体型の男、ルーツは生きている監視カメラから葵達の戦闘力や特殊能力を見て自身達の力やその源流のE型特異菌の力を知ら示すチャンスと笑い、昂っていた。

一方息子の一人たる『シャル・ダールトン』はセキュリティが一向に復旧出来ない事に苛立ちながらセキュリティキーボードを叩いていた。

「ふむ、A. B. F. は優秀な物を作り上げたのだなあ。

是非とも接收したい物だ」

…しかし彼等は見当違いを起こしている上に知らない。

まさかセキュリティ掌握しているのがAIや優秀なコンピューターでは無く、安物パソコンを使った一介の中学生だと言う事に。

「さて、そろそろ『正門』前に着くだろうから此方から彼等にプレゼントを渡さねばな。

モールデッドを100体屠ったその功績から、な…フハハハハ!!？」

『ふっ、きやはははははは!!?』

そしてルーツはレオン達にプレゼントを贈るとしてカーソルを弄り、其処に茜達やレオン達が使った弾やマガジン、更に使わなかった物のマガジンやルナ用のマスクも含めて『正門』前に配置する様にしつつ、再び6名以上のダールトン一族による下品な笑い声がセキユリテイルームに響き渡りレオン達を嘲笑っていた。

それは最後は自分達が勝つと言う油断からくる傲慢で無知な笑い声である事をまだ彼等は理解していなかった。

「成る程…マキ達は3年前のバイオテロを解決した精鋭で、アオイ、アカネ、ヨナはT
—Genesisの完全適応者だったのね」

「ええ、その通りよ。」

「だから私達はあの様な力が使えるのよ、不気味かしら?」

「いえ…コネクションに所属している私が何か言う権利なんてそもそも無いわ…」

一方葵達は自分達の素性を改めて明かし、ルナは目の前の者達が本格的な精鋭且つウイルス完全適応者だと知り驚きに満ちた表情をしていた。

そして茜は口を割ってくれるコネクションの一員に聞きたいと決めていた事をルナに対し話を始める。

「所でルナさん、あんさんからコネクションはT—Genesis、アレを秘密裏に回収とかしてへんよな？」

「…ええ、コネクションはH. C. F. 経由でも知ったあの手に余るウイルスやその産物のB. O. W. には手を引く為に日本で全てが消し飛ぶのを黙って見ていたわ、それは間違い無いわ」

「…ふう、ウチ等の汚点と忌まわしい過去はもうこの世に在らへんか…：まあ喜ばしい限りやな」

茜はT—Genesisがコネクションに回収され未だこの世に残ってるか否かを問うと、ルナは日本で消えるのを組織は待っていたと話してもうあのウイルスは自身達の身の中にある以外は完全に消えた事を理解し、茜や葵、ヨナやマキは安心した溜め息を吐いていた。

そうして話を進めながら前へ進むと中型ゲートが目の前に現れ、それが開け放たれ葵達は中に突入した。

「…此処が『正門』前なの、ルナさん？」

「ええ…此処がイヴを利用して実験を行う前提の……忌まわしい施設よ……」

そして葵達が目にした物は目の前に巨大な丸型ゲート、更に周りに6つの小さな自動ドアがある空間であった。

此処を『正門』前かと問うとルナはイヴを利用する忌まわしい施設と呼称し、腕に力を込めていた。

『ああ、ようこそ侵入者諸君とルナ女史。』

特にルナ女史は今回は見物ではなく実物を見る側に回ってしまったので君用に特異菌感染防止マスク等を渡そう。

そして君達の装備を解析し、弾薬等を正門前に置こうと思う、自由に受け取り給え！』

『プツン』

するとルーツからまた放送がかかると、中型ゲート前の床が開き、其処からテーブルが現れ放送にあったマスクや、何とB・Y・達の装備全てのマガジンや手榴弾、更にはラムロケット弾まで用意され、いよいよ以って紅の様なゲーム感覚で人を殺すサイコパスだと6人は認識し放送機を睨んでいた。

「…どう、するの？」

この実験に、参加、させられた人……皆、死んじやったよ……私の、せいで」
 「違うわイヴ、全てはあのダールトン一族が貴女に命令したのが悪いのよ!!?」

コネクションからの治療で全員精神支配を脱した上に、特殊な機械で貴女の特異菌による殺害防止策を講じた所為で……それに、私が無力だから……!!?」

そうして放送機を睨み付ける中、イヴは葵達に自身の所為で実験に参加させられた：つまり攫われた人は皆死んだと言い、それをルナがダールトン一族が全員精神支配を脱した上にイヴの力での特異菌暴走を抑制する何らかの物で今日までこの様なゲームをしていたと漏らしながら自分の所為だと庇っていた。

「ダールトン一族全員が精神支配を脱してる?」

……ふん、ルーツ・ダールトン様は家族には寛容で自分だけ支配者になるんじゃない族皆同じコントロールが効かない化物になった様だな」

「…如何やら、報告書はアテにならなそうだな…」

B・Y・やレオンはそれ等を聞きダールトン一族は特異菌の力を使える化物になつた上にイヴの精神支配を脱したりした為イヴからのコントロール不能等を聞き報告書はアテにならず、この先面倒な事しか待っていないさそうと判断し、癪ではあるがプレゼントされた自分の分の弾丸を取りこのイカれたゲームを終わらせる決意を固めていた。

「はあ、欧州本部の不祥事と言ひ、報告書と食い違う内容が多いと言ひ、もう何がなん

だかつて感じだよもう！」

「それは私達も同じだわマキ。

けれどそれでも、任務は達成しなきゃ、よ。

……ダールトン一族……ふん、良いわ、現レティシア家当主たる私が先祖同様
貴女達に敗北を与えてあげるわ……！」

対するマキは様々な食い違う情報、発覚した欧州本部の失態等に愚痴を溢すが、ヨナ
が自分も同じと励ましながらかつて先祖がそうした様に自分が再びダールトン一族に
敗北を与えると言い放ちながら弾丸を取り、励まされたマキもまた弾丸を取りゲーム参
加の意思表示を見せた。

「んじゃウチ等のやる事は決まってるんな葵」

「だね……ダールトン一族を此処で斃して脱出、ルナさんにはその間今までの事を話
して貰って、任務を達成させる……以上だね」

残った茜、葵も自身等がやるべき事を口にしながらかつて狂ったゲームの参加の為に弾丸を
取り、更にルナに道すがら食い違う情報や此処であつた事全てを話す様に言いながら
ダールトン一族への敵愾心を見せていた。

こうして6人全員はこのゲームに参加する事になり、ルナはイヴを『守る』為に聞か
れた事に対しありのままの事実を話そうと決めながらマスクを被っていた。

「……………」

そしてイヴもまたこの狂ったゲームが始まる事に無表情のまま嫌悪感と、今度こそ『全部終わらせてくれる』と葵やレオン達に期待を2：8の割合で持ちながら、『母』たるルナを守りたいとも思いながらゲームをまた目の前見させられる道を選んだ。

今度こそはと心に思いながら……。

「……」

そんな内心を葵は常に無表情な彼女から何とか見抜き、皆とはまた別の意志……もしもイヴがB・O・W・以前に利用された者として保護しようと5人に内緒で取り決め、この『親子』は必ず生還させなくてはならない、そう決意しながら銃をリロードし、茜達の横に立ちダールトン一族打倒と脱出と言う目的を果たそうと決意を新たにした。

『カラカラカラ』

「テーブルが下がるな……」

そうして全員が弾薬を取った中、テーブルが床に降りて行き全員が見守る中、新たなテーブルが1枚の紙を乗せて現れる。

そしてテーブルが上がり切った所でレオンが紙を手に取り内容を見始めた。

そして其処にはこう書かれていた。

『脱出ゲーム概要』

如何やらこの狂ったゲームのルールが記載された物だと6人は判断してそれを読み始めた。

例え今は敵の掌の上でも必ずそれを覆し、ダールトン一族に一泡吹かせる為に…。

EP III 『マキルート：マキ流オニゴツコ』

レオン達は武器弾薬を取った後、ゲーム概要書を手に取り内容を黙読していた。其処には以下の事が書かれていた。

『侵入者6人用とルナ女史が其処に居る為の特別ルールを説明する。』

まず①：6人の中から1人が代表でルナ女史とイヴを連れ、6つのドアの先に行く事。

②：その先のゲームをクリアし『正門』解放用カードキーを取って帰る事。

③：此方はイヴは極力狙わないが巻き込み系のモノもある為全力で守る事』

以上簡単な3つの内容があり、全員は意外とルール設定が甘いと感じながらも必ず1人になる為援護は不可能だと思っていた……訳が無かった。

「ふん、待機中の葵が透視能力を使える事を知らないからガバガバルールで来おったな

それにこっちにはナビ&ハッキング最強のきりたんが居るんや、ゲームの場を引つ掻き回させて貰うで」

茜は葵の透視能力ときりたんのナビ&ハッキングでゲーム先の盤面を引つ掻き回し

てしまおうと発言し、全員もそれに同意していた。

『じゃあ私もこの先のエリアの盗聴器やら監視カメラやら全てを掌握して皆さんを助けますね。』

そして中学生の餓鬼に慌てふためくテロリスト…ふっ、草生えますね』

きりたんも通信先で同意し、此処に集った者達が如何なる者達かを知らしめる為それぞれが自身の武器を構え、気合を自分達なりに入れていた。

「ならさっさと下らないゲームを終わらせて文字通り『脱出』するぞ。」

先ずは誰が行く？」

「んじゃ私から。」

レオンさんやバカ隊長、茜達は後に控えさせて相手が1番油断してそうな私を1番手にして一泡吹かせてやるんだ」

レオンはセンチネルナインやアルバートシリーズのリロードをし、誰が1番先に行くかを周りを見やり、居なければ自身が行く気だったがマキが自分が真っ先に行く事を提案し、反対意見が特に無い為1番手はマキになった。

「あ、あの、本当に大丈夫なんですか？」

幾らCLOWN事件を解決した人達でも、この施設とダールトン一族の魔の手

は…」

「余計な心配要らないよルナ参考人。」

私達：隊長と私は特にあの戦いの後、『鍛えた』んだから。

結果は見てれば分かるよ。

じゃあ、どの扉がどの『ゲーム』なのか教えてよ」

対するルナはマキ達に心配をしていたが、マキ本人が要らぬ心配と言い自身とB.

Y. が『鍛えた』と話し、ルナにどのドアがどんなゲームかを話す様に促した。

そしてルナはWMシリーズを屠れたこの人達なら大丈夫だと信じ、話し始めた。

「先ずは右側の上から3つの鍵を探すオニゴツコ系、探知レーザーに触れたら即死亡ラップが発動する密室系。」

暗闇から逃れる為に正しい電気スイッチをヒントから探す探索系、但し此方の密室系以外は最初から最後までダールトン一族が追い回して来ます」

如何やら右3つのうち2つは探索型と密室型を意識し、特に真ん中の密室型の探知レーザーに引掛からない様にし、残り2つは特異菌感染者たるダールトン一族を対処する人選が必要だとレオン達は判断しながらメモを取り、マスクの画面でその内容を共有する。

「左側は上からモールデッドの襲撃を掻い潜り出口を探す迷路系、数々の罠から時間内に次の部屋に向かう逃走系、そして最後が私達が最初に体験した様なモールデッドを

殲滅して奥に進む耐久系の『ゲーム』です」

「ふむ、ふむ」

「そしてどれもこれも最後はダールトン一族と戦わねばならず、脱出の希望をチラつかせて実態は特異菌から得た自身等の力の誇示を目的にした……腐った物です……!!」

「更には左は迷路、罠からの逃走、この場に来る前と同じモールデッド殲滅をする耐久系『ゲーム』と判明しメモを取り、更に最後はダールトン一族が最後の壁となる上に自身等の力を只々見せ付けるだけの腐った物とルナは嫌悪し、彼女は良識があるのに何故コネクションに入っているか分からない実態を滲ませる。

「……あんさん何でそんな良識がありそうなのに犯罪組織なんかー」

「私は初めからコネクションの人間じゃありませんよ!!?」

誘拐されて従わなければ殺すとまで脅されて……すみません、こんなの唯の言い訳に過ぎませんよね……」

茜は何故ルナがコネクションの一員になったか問うと彼女は激昂して自身が誘拐された身であり、更に脅迫を受けてコネクション入りした人間だと口にして其処で言い訳と断じ、泣きそうな顔で黙ってしまう。

それを聞きレオン達はヨナと同様のパターンだと理解し、それ以上の詮索等はこの先の『ゲーム』をクリアした際に聞こうと無言で決め合った。

「じゃあ私、右側の鍵探しの鬼ごっこことやらから行くわ。」

ルナさん、イヴ、行くよ」

マキは早速鍵探し鬼ごっこから始めると言い、レオンは大丈夫かと思いを掛けようとしたがB・Y・が肩に手を置き「大丈夫だ」と一声掛けて来る。

レオンはB・Y・の賭けや判断はエイダ達以外の大体が間違わなかった事を思い出し、そのまま5人でマキ達を見送った。

「……」

「心配しないで、脅されたとか誘拐させられたからって話は言い訳じゃない、貴女の話信じる人は目の前にも居るから」

「えっ?」

マキはドアに入る前にルナに対し過去の経験から信じる人は目の前……つまり自分自身が居ると話し、ルナを驚かせながらドア内に入る。

するとそれはエレベーターで、専用エリアに移動する移動式だった。

「……………お母さんを、信じてくれて、ありが、とう……………」

エレベーターの移動中にイヴが口を開き、ルナの話信じたマキに相変わらずの辿々

しい言葉で礼を述べていた。

それを聞きマキはイヴに対して情報や資料では見えなかったルナに対する確かな愛情を感じ取り、今までの言動からこれが人の命を奪うB・O・W か怪しくなり始めていた。

そしてエレベーターのドアが開き、マキは武器を構えているの1番に外へ出た。

『ハローハロー、ようこそ勇敢なBSAA隊員君！』

早速だが施設概要とルール説明をしようではないか！』

するとルーツの放送が入り、ルール説明と声が掛かりマキは階段やドアが幾つもある施設の周りを警戒しながらこの施設の事やそのルールとやらに耳を傾けていた。

『先ずこの鬼ごっこ系探索施設はイヴにより特異菌を感染させられた人間が鬼役に極限まで追い込まれた際に見せる能力値、再生力を検証し、更に鬼役の力も記録する画期的な施設なのだあ!!?』

如何やらこの場は特異菌に無理矢理感染させられた者達が追い込まれた状況で見せる力や鬼役の記録をすると言う、マキの中で回りくどく更にそれを見て嘲る者達への嫌悪感に満ちた場所だと理解する。

『更に感染してない君は鬼にあつさり殺されない様にしながらこの施設内に隠された3種の鍵を見つけ出し、GOALと書かれた部屋に入り鍵を刺し、其処で決戦場に行き

鬼を倒し、エレベーターロックと『正門』のカードキー入手権を獲得するのだあ!!?」

鬼から逃げるには銃を使うのもあり、隠れるもありの何でもアリだ!!?」

更にこの施設内に3つの鍵が隠され、此処から途中から抜け出せない様にエレベーターロックを施すらしい。

最後は鬼役のダールトン一族の誰かを倒さねばならない、鬼から逃げるには凡ゆる手を使うのがアリとルールを理解し、その瞬間エレベーターがロックされる音が後方から鳴りルール通りと理解して更に周りを警戒した。

『そしてえ、生えある鬼役は君達BSAA隊員から転化したモールドデッドは勿論、我がダールトン一族からはあく、次男の『ラオ・ダールトン』だあ!!?』

「……悪趣味な」

更に放送が続くと幾つかのドアの先からBSAAのワッペンを付けたモールドデッドが現れ、これが元仲間だと理解しマキはダールトン一族に強い怒りを燃やし、そして目の前の10メートル先のドアから180cmを超える長身且つ筋肉質な男、ルーツ曰く次男のラオ・ダールトンがナイフを持って現れ舌でナイフを舐めたりしながらマキにジリジリと迫っていた。

「獲物の前で舌を舐めずってからナイフを舐めて迫る……ふん、武器に頼らなきや強気になれない三流の臭いがしてハズレ枠みたいだね、此処は」

「へっへっへ、如何やら今回は女が相手みたいだなあ!!？」

殺す前にそのマスクを剥いでヤツてやるかあ……ゲへへへへ!!？」

マキは目の前の相手が武器や特異菌感染者の力任せの三下と一瞬で見抜き、下品な笑みと発想を浮かべるラオをハズレと言いつつアサルトショットガンを敢えて降ろし、ルナはその行動にマスクの下から驚き目を見開いていた。

「な、何をしてるんですか……えっと、マキさん!!？」

相手は特異菌感染者で超人化して、再生力も高いんですよ!!？」

早く銃を構えて逃げる準備を」

「逃げる?」

冗談じゃ無いわ」

ルナは相手が人間を止めた怪物だとしてマキに武器を構え逃げる様に促すがマキはそれを一蹴し、拳を構えラオを待ち構えた。

この間にイヴはせめてモールデッドが襲って来ない様に能力で操り、マキをじつと見ている。

「ヒヤッハー!!？」

女狩りだあ!!？」

「ま、マキさん!!？」

ラオが叫びながらマキに走り出し、ルナがイヴを庇いながらマキに手を伸ばしながら叫び彼女に今直ぐ逃げて欲しいと思っていた。

そしてラオが3メートル以内に近付いた瞬間、マキの脳裏に3年前のあの日……：C L O W N 事件を解決し、ヨナの減刑の為の証拠を集め切った日の事が呼び起こされた。

2014年10月18日、琴葉紅が残した日記や研究データの中からヨナが脅されていた部分をピックアップ仕切り、更にヨナの両親の生存や執事達の内部告発を集め切った後、デルタチーム初期メンバー7名で訓練場に集まる様に言い全員集合した。

「何だい副隊長、俺等初期メンバー集めて事件解決パーティーでも開くのかい？」

集合して開口一番はムードメイカーのデルタ7で、冗談混じりでマキにパーティーの話

を振ると、マキは全員を見据え重い口を開いた。

「……ねえ隊長に皆、私達このままで良いと思う?」

「このまま?」

「このままって何の事だよ?」

マキのこのままで良いかと言う発言にデルタ5が何の事かさっぱり分からずにマキに聞き、対してデルタ4は思い当たる節が1つあり、そしてB・Yは何の事か思案して答えを導き口にした。

「…ウイルス完全適応者相手に俺達は同じウイルス完全適応者…しかもA・B・Fの茜や本来敵である京町セイカ、そして民間人だった葵に頼り切りになってた…それを言いたいんだな?」

「そう」

B・Y、デルタ1の発言にデルタ4以外はハツとし、デルタ4は白龍との戦闘経験から矢張りかと思ひ黙って聞いており、そして皆が一様に黙り込んでしまった。

「け、けどよ!」

相手は特殊な防御能力やら何やらがあつて接近戦は無理があつただぜ!!

?

それに血清弾を使って撃破したりしたじゃあ」

「それでも、私達は民間人だった葵やA・B・F.の茜に頼り切りになっていた。

幾ら勝利に貢献したとしても、それは変わらない……そうでしょ、隊長？」

デルタ6は相手が特殊過ぎた、血清弾で貢献出来たと話して何とかマキを慰めようとしたが、対するマキはB・Y.に自身が感じた事実を話しその口を開かせようとした。

そして、B・Y.もその口を開いた。

「……そうだな。

そしてそれを気にしていたのはお前だけじゃ無い。

俺もそれを気にしてクリスにレオン、ジエイクに、更にはこの話題で通信を送った茜にすら葵に最後頼ってしまったと話していた。

そして全員同じ答えが返って来たよ」

如何やらB・Y.もマキと同じ事を思いクリス達に連絡を取り、それで全員が同じ答えを持って返答したと話した。

マキやデルタチーム初期メンバーはその答えは何なのか黙して耳を傾けていた。

「……全員それぞれの合ったやり方だが、ウイルス完全適応者に負けない様に1から肉体と精神を鍛え直すと話してくれたさ。

そして、それは俺も同じ答えだった……皆もそうだろう？

俺達はあの中国のバイオテロや、CLOWNの力を目の当たりにしたんだから

な……」

B・Y・は全員にクリス達や自身がウィルス完全適応者相手に負けぬ様に自らに合ったやり方で鍛え直すと口にしながら全員を見据える。

それを聞いたマキは納得の行く答えが返って来て頷き、そしてデルタチーム初期メンバー達は……マキと同じく、黙って頷いていた。

「じゃあ、証拠集めは終わったから後はヨナの弁護や任務に当たる事になるが、その合間に俺達も鍛えるぞ……全員血反吐を吐くと思うが、デルタチーム初期メンバーの意地で付いて来るんだぞ、良いな!!？」

『了解!!?』

そしてB・Y・から弁護や任務の合間に血反吐を吐く事が確定な鍛錬をするとし、更にデルタチーム初期メンバーの意地で全員付いて来る様に叫ぶとマキを含めた6人はその鍛錬に了解と力強く叫び、その日からそれは始まった。

そして案の定全員が血反吐を吐きながらも、もう2度と民間人やウィルス完全適応者の味方に頼り切りにならない様にそれぞれが鍛えて行った。

そして………。

2017年7月21日。

ロシアのテロリストの本拠地にて、その鍛錬の結果が目の前に存在する特異菌感染者を以ってして示される。

「ヒヤッハー!!?」

「甘いよ」

『。パシツ、グググツ!!?』

特異菌で筋力も増し、超人化したラオに対しマキはナイフを持った手を受け止めるとそれを動かない様に力強く止める所か腕を無理やり捻り始めていた。

「な、何だこの女!!?」

へビー級ボクサーのパワーですら振じ伏せた俺の力が…!!?」

ラオは細身のマキの力が自身と同等以上である事に驚き、へビー級ボクサーすら振じ伏せたと話しながらもナイフを刺そうとしたが全く動かず両手を使いやつとジリジリ動き出した。

「…私や隊長達は3年前、ある民間人の子や味方に居たウイルス完全適応者の子に頼

り切りになっちゃった。

だからもう2度とそんな事にならない様に血反吐を吐く鍛錬に次ぐ鍛錬を繰り返した。

その結果……！」

『ドゴオ!!?』

が、マキはそんな事は関係無く過去と鍛錬を語り始め、そして1撃……たった1撃ラオの鳩尾に右手のパンチを叩き込んだ。

するとラオの身体がくの字に曲がり、どれ程力強いパンチかをルナ達に見せていた。

「ゴツ……ゲエ!!?」

「私達は、ウィルス完全適応者とも、戦える位に、強く、なつたんだよ!!?」

分かったかこの特異菌の力任せの、三下野朗!!?」

マキのパンチを1撃受けたラオはヘビー級ボクサーのボディブロー以上の衝撃……今までに無いパワーを受け、胃液を吐いた瞬間、マキは茜から習ったA・B・F・式格闘戦技のパンチを連続で叩き込み、最後に回し蹴りを首に叩き込むとラオの首は嫌な音を立てながら270度曲がり、そのままビクビクと倒れ込んでしまう。

「……まつ、この程度ならクリスさんやレオンさん達なら余裕で出来るからまだまだなんだけどね。」

さてと……」

そしてマキは自身がまだまだだと語りながらラオが鍵の1個を持つてると思い身体を弄ると、ポケットからKeyと云う札の付いた鍵が出て来る。

そして改めて武器を構え、ラオの首にアサルトショットガンで1発叩き込み顔の大半を吹き飛ばした。

「す、凄い……特異菌感染者を、素手で振り伏せちゃった……」

「ほら、さっさと次に向かうよ！」

資料から特異菌感染者は首や上半身が吹き飛んでも再生するって情報があるんだから鍵探したり隠れんぼしたりするよ!!?」

ルナはまさかマキが此処まで強いとは思わず惚けており、イヴも無表情だが内心は驚きに満ちており、自身の『希望』が果たされると思いながらマキを見ていた。

そんなマキはモールデッドの頭を吹き飛ばすと2人を手招きして部屋に入り、ダクトと一緒に逃げ込ませた。

「あ、あの、あんなに強いなら態々逃げなくても」

「逃げたんじゃないよ、此れはあの三下を挑発してどんな行動を取るかの見定めだよ。」

さて、そろそろ再生するかな……?」

ルナはマキに逃げずに戦えばそのまま倒せたと話したが、対するマキは見定めと返し

ながらマスク内のタイマー機能を使いラオの再生時間を測っていた。

その結果……。

「クソがアアアアアアアアアア!!?」

あのクソアマ何処行きやがったあ!!?」

シャル、早く監視カメラの映像や盗聴機の音をよこしやがれ!!?」

……はあ、ハツキングされて何れも無理だあ!!?」

ならさつさと直しやがれよこのクソポケがあ!!!」

ラオは約30秒で再生し切ったららしく見失った上に自身に屈辱を与えたマキ達の探索を始めていた。

しかし監視役であるシャルと言う者に通信をすると監視する設備全てがハツキングされ使用不能になつてゐる事を知りその場を去りつつ頭に血を登らせながら血縁者を罵っていた。

「…やつぱ三下だわアイツ。」

態々戦つて変に疲れるより挑発路線に切り替えた方が良いわ……それでルナさん、アイツらにもラムロツト弾は有効な訳?」

「あ、は、はい。」

ですが、下手に再生阻害弾を使うと再生が遅くなる代わりに変異を引き起こす

可能性があるので使うなら勝てると思った時に……」

マキはラオが三下の評価を確定させた後余裕を見せながらダクトから出て、ルナにラムロツト弾が有効か効くと答えはYESだが変異を引き起こす可能性がある為使用に注意と喚起され、懐のアルバート01に手を添えながら頭の中で敢えて追い掛けつこに乗りながらダメージを与えて行き、奥で確実に殺す作戦を立てていた。

「…よし、きりたん、葵、鍵が何処にあるか、ラオが何処に向かったか教えて」

『はいはい、先ず残りの鍵は2階に集中してらしく、赤くロックされた扉の先にダクトから侵入して取るみたいですね。』

後3階はハズレなので鍵と入手経路をマーキングしますね』

『それからそのラオって人は左側の階段からマキさん達の頭上の通路を行ったり来たりしてますよ』

マキは次にきりたんと葵に鍵の在り処やラオの居場所を聞くとアサルトショットガンを構え、先ずはBSAA隊員だったモールデッドを眠らせるべく走り出した。

仲間だった者に鎮魂を与えんが為に。

「さてクソツタレなラオさん、鬼さんこちら銃の鳴る方につてね!!?」

『ズドオン!!?』

「其処かクソアアアアアアアアアア!!?」

そしてマキはモールドデッドを敢えて倒して行きながらラオを自らの方に呼び込み、この『ゲーム』の犠牲者の無念を晴らすべく動き始めた。

それを見ていたルナやイヴはその背中から強い怒りが溢れていると察し、ただ黙って後ろを付いて行くのだった。

「クソ、クソ、死ぬよこのクソアマア!!?」

「そんな変な力任せな素人の動きじゃ、レオンさん所か私やバカ隊長すらも倒せやしない、よ!!?」

『バキバキ、ドガアツ!!?』

ズドオン!!?』

マキはモールドデッドを始末しながらラオの攻撃を避けてはカウンターを繰り返し、着実にダメージを重ねた後に様々な方法で首を必ずへし折り一瞬意識を飛ばしては愛用のカスタムショットガンで首を吹き飛ばし、そして現在2階にいた為1階に叩き落とし距離を離し、その隙に次の鍵を取りに向かって行った。

「(本当に、この人達は強い……此れなら、この地獄の施設や悪魔のダールトン一族を終わらせてイヴを此処から逃してくれるかも……事情を話せば、多分……)」

そんな中でマキを見ていたルナはマキやその仲間達に全てを終わらせ、イヴを解放してくれる事を期待して自身の中にあるイヴ関連の事情を話そうかと部屋内のモール

デッドを倒し、2個目の鍵を取る光景を見ながら決めようとしていた。

『あ、マキさん気を付けて下さい。』

ラオつて人、斧に持ち変えて3個目の鍵ある部屋に通じるドアの前にスタンバツてますよ』

「おいおいおい、遂に鬼ごっこを放棄して短絡思考に走つちやつたよ。

なら、もっと挑発を加えてやるかな!」

すると葵から通信が入り、共有画面と透視能力を駆使して割り出した3個目の鍵のルートがあるドア前にラオが待ち構えている事を聞き、マキは遂に鬼ごっこを放棄して完全に頭に血を登らせた事を悟りつつ更なる挑発の為にラオの前に躍り出る事を決めた。

「来やがったなクソアマ!!?」

さあさつさと死にやが」

「五月蠅いよバカ」

『ズドオン!!?』

マキを見つけたラオは走り出しながら斧を構え、振り下ろそうとした瞬間その腕に向かつてアサルトショットガンを放ち腕を吹き飛ばし、斧が下に落ちたのを確認すると直ぐ様CCCに入る。

「く、糞がア!!?」

「……………」

マキは今は左手しか残っていないラオのパンチを捌いた後股間に膝蹴りを思い切り叩き込むとナニかが『プチ』と音を立てて潰れ、その箇所から血が溢れ出しラオは脂汗を流しながらマキを見ていた。

が、直ぐ様更なる急所への打撃を加えて行きそしてアサルトショットガンを口に咥えさせてから撃ち、再び頭を吹き飛ばすと今度はそのまま放置して鍵を手早く取りに向かう。

「よいしよ、このダクトを抜けて…あつた。

よし、このドア開けちゃえ」

そしてマキは鬼ごっここの趣旨を無視して3個目の鍵を入手して敢えてロックが掛かった部屋から外に出た。

するとラオの再生が始まり、頭が復元され切った所でマキを睨みながら立ち上がる。

「こ、このゴリラ女が…:てめえ鬼ごっここの趣旨分かってんのか!!?」

俺が鬼、お前が逃げる雑魚なんだよ!!?」

なのに何で逃げずに向かって来やがんだよクソアマ!!?」

「アンタの再生力を見て、言葉を聞いて確信した。」

アンタは唯のB・O・Wだ。

なら、B・O・Wを殺すのが私の仕事だよ……だから言つてやるよ。

初めから鬼役は私なんだよ三下」

ラオは鬼役の自分から逃げずに戦いながら鍵を集め切ったマキに鬼ごつこの趣旨の話をするが、対するマキはラオの言動等を加味してB・O・Wの1体に現場認定し、ならばB S A Aデルタチームとして初めからB・O・Wを倒す役。鬼は自分だと語り、更に三下と付け加えラオを完全にキレさせる。

「畜生が、鬼は、俺なんだよオオオオ!!?」

「ウザイ」

『ズダンッ!!?』

マキは突撃して来たラオに対し遂にアルバート01を引き抜き、ラムロット再生阻害弾を撃ち込みその後再び格闘戦に持ち込み頭左半分をアサルトショットガンで吹き飛ばした。

「て、てめえ……ぜ、絶対、ぶち、ぶち殺して……」

するとラオの肉体が黒く液化化して行き、床一面にその液体が広がり始める。

マキはこれが資料にあった特異菌感染者の変異が最大になった際の兆候だと勘付いた。

「マ、マキさん、変異が始まって!!?」

「分かつてる、でもこのまま奴等の土台に乗って奥で決着をつけてやるわ……2人共、今死にたくなかったら早くゴールに向かうよ!」

ルナはラオの変異に慌てるが、対するマキは奥で決着を付けるとして冷静にルナやイヴを手招き、ゴールの扉へと入ると鍵を3個使い、中であつた更なる扉を開き奥へと入つて行つた。

「成る程、確かに研究所だね」

ゴールの先の決戦場に入ると周りはガラス張りで、白衣を着た男達が何らかの記録を取つていた。

マキはこの男達こそがこの研究所所属のコネクションの研究員だと理解した。

『ゴウンツ!』

するとマキが立つた決戦場の床が昇降機となり下へ降りて行き、更にルナ達を守る様に防護ガラスが2人を覆いマキと分断された。

「マ、マキさん!!?」

「成る程決戦場はこんな仕組みなんだ……ルナさん、貴女は其処の子を守つてなよ!

……来るなら来いよ、三下」

イヴと共に分断されたルナはマキを心配するが、対するマキはイヴを守る様に叫び、

三下であるラオが変異仕切り決戦場に入ってくる瞬間を待っていた。

B・O・W・を狩る鬼役として、B S A A 隊員や無実の人達をモールデッドにされた怒りを明確に燃やしながらその時を待つのだった。

EP IV 『ラオの最期と作戦完全変更』

マキ達が決戦場に辿り着いた同時刻、セキュリティルームのコネクションの構成員とシャルはハッキングから監視システム一式を取り戻す作業を必死に行なっていた。

「ええいシャル、まだ監視カメラの復旧は出来んのか！

あのBSAA隊員の死に様を早く見せろ!!？」

「ま、待つてくれよ父さん！

今ハッキングが緩んだから…あ、映像出るぜ!!？」

ルーツはシャルにまだ監視システム復帰が出来ないか苛立つが、シャルはハッキングが緩んだ事を機に監視システムを遂に復帰させ映像を出した。

「んな、此れは!?？」

しかし其処に映つたのはルーツの期待した映像では無く、マキが決戦場へと入り更にはラオが肉体を変異させられ、人としての形を保てなくなり掛けていた場面だった。

「う、嘘だろおい…!!？」

ダールトン一族三男のシャルは兄のラオが1度敗北した上で変異寸前の場面を見て驚きを隠せず、周りの構成員達も啞然としていた。

……そしてそれは、これから先の処刑をわざと見せようとしたきりたんの思惑により見せつけられた結果だった事をダールトン一族やコネクション構成員は一切気付かないのであった。

マキはルナ達から少し離れ棒立ちで居る事5分。

突如として上から振動が鳴り響き、更に自動ドアが頭上の壁にめり込むと上から何か
が降り立って来た。

『クソアアアアアアアアアアアアアアアアア!!?』

その声はラオの声であり、変異した姿形はマキの侮辱に使ったゴリラの様にカビの巨腕と4メートル以上の巨体による歩行をするカビゴリラと呼称すべき存在となっていた。

「へえ、アンタがよっぽどゴリラらしいじゃん！」

んじゃさつさと戦おうじゃないさ、私もアンタ達に殺された人達の無念を晴ら

したいからね!!?」

『ウガアアアアアアアアア!!?』

マキはカビゴリラと化したラオを更に挑発しながら今度はアサルトライフルを構え、挑発に乗り突っ込んで来たラオが繰り出した剛腕をスライディングで避け、巨体になり狙い易くなったその後頭部を重点的に狙い始めた。

『このクソアマア、黙って俺に殺されてれば地獄なんか見ずに済んだのによお!!?』

てめえは絶対楽には殺さねえ、じわじわと嬲り殺しにしてやるツ!!?』

変異したラオはアサルトライフルを撃ち続けているマキに対し嬲り殺し宣言を行い再び攻撃を開始する。

しかし、その何れも此れもが大振りである為マキは軽やかに避けながら胸の赤くなつた部品から頭部に掛けてを撃ち続けた。

「おっと」

するとマキは壁際に追い込まれた様に見せ、もう後が無い素振りを見せながらアサルトライフルをリロードする…ように見せて仕掛けを始める。

『追い込んだぞクソアマ、死ねええ!!?』

「あらよっと」

ラオはチャンスと言わんばかりに右ストリートをマキに放ち、その剛腕で細身の彼女

を潰そうとした。

が、マキはスライディングでそれをあつさり避けつつワイヤーを巻いた焼夷手榴弾をラオの頭に括り付け、それを弾けさせた。

『ウガアアア、目が!!?』

「お次は、此れ!!?」

ラオは焼夷手榴弾を目に受けてしまい、跳きながらマキの方に向いた瞬間マキはアルバート01を引き抜きラムロッド弾を放つ。

するとラオは焼夷手榴弾以上に跳き苦しみ始めていた。

『グオアアアア!!?』

「そら、こつちの鉛玉も受け取るんだよ!!?」

そして跳き苦しむラオの赤く隆起した胸部にアサルトライフルを撃ち続け、更に手榴弾を投げ込みマキはダメージを蓄積させて行く。

『こ、このクソアアアアアアアアアアアア!!?』

なら此れでためえは任務失敗だア!!?』

するとラオは右腕をカビを増殖させてゴムの様に伸ばしてマキを攻撃した…と思いきや見当違いな方向に右腕は伸びた。

だがマキはその方向に何があるか分かる為焦る。

「コイツ、させるかあ!!?」

『ゴガアアアアア?』

ラオが苦し紛れに攻撃したのはマキでは無くルナ達だった為、マキは素早くアルバート01のラムロケット弾を上手く弱点の隆起した胸に直撃させ攻撃を防ぐ。

後少し反応が遅れたら失態所では済まなかったが、今のマキやレオン達ならばギリギリ対応可能な範囲であった。

「……セーフ」

「イヴ……」

因みにルナはイヴがきつちり両手からカビを出し盾状にしてた為、例えマキが間に合わなくとも守られていた様であった。

「……悪足掻きであんな事したアンタはもう許さない。」

もうここで終わらせる!!」

しかし、ラオの短絡的な行動はマキの怒りを買う事になり、彼女はそのまま力強くラオに向かって走り出した。

ラオは崩れた態勢から再び腕を伸ばす攻撃を繰り返したがマキは再び予測で避けてアルバート01とカスタムショットガンを抜き出し、2丁を態勢の関係で屈む形になっているラオの胸部に向ける

『なッ!??』

「いい加減寝てろ、雑魚!」

マキは捨て台詞を言い放つとアルバート01とカスタムショットガンを胸部に同時に撃ち、再び腕きしみ倒れた所にカスタムショットガンを胸部に力任せに突き刺し、またアルバート01のラムロッド弾と共に何発も撃ち、ラムロッド弾は2発残しショットガンを全弾撃ち尽くすと胸部が破裂しラオは力尽きるかの様にグツタリしてしまつた。

『ア、ガ、ぶ、ぶっ殺してやる、クソアマあ……はあ、はあ……』

ラオはまだしぶとく生きてマキを見つめ、ぶっ殺すと口にしながら手を動かそうとしたが結局動かずビクビクとしながら虚勢を張るのだった。

「……それ、ぶっ殺したなら使っていいってセリフがある事知ってんの、アンタは?」

『ズドオンドオンドオンドオンドオンドオン!!?』

マキはラオに捨て台詞を吐いた瞬間、リロードし切ったカスタムショットガンを全弾頭に放ち、その頭部を吹き飛ばした。

するとラオは肉体が石灰化し崩壊し始める。

マキはこれが資料にあった特異菌感染者達がダメージに耐え切れず絶命したサインである事を理解し、溜め息を吐きながらルナ達に駆け寄つた。

「ルナさん、大丈夫でしたか!?!」

「は、はい。」

イヴが守ってくれましたし、マキさんが間に合いましたから……」

マキはルナの安否確認したがラムロッド弾が間に合った事とイヴがしっかり守った為傷一つ無く、代わりにイヴが無表情でピースサインをしていた。

「ごめんなさい、もしもイヴが居なかったらルナさんが……」

「いえ、マキさんは充分守り抜いてくれましたよ!」

それより私がイヴを守る力が無い所為で守られっぱなしなのが、少し堪えますよ」

マキはルナに対して謝罪を行うが、逆にルナはイヴを撫でながらこの子に守られている自身の不甲斐無さに対して堪えているらしく、ラオの悪足掻きでのマキの対応は間に合っていたと責めていなかった。

「(そう言われると私も弱るし、逆に堪えちゃうんだよなあ……まだまだ鍛えなきやだね、此れは)」

マキはルナの態度にまだまだ自分は鍛え足りないと猛省し、同じ事態が2度と起きぬ様にする様に鍛え直しをしようと思いつきながら周りを見ていた。

すると床が上がり始め、決戦場が元に戻るとガラス張りの先の研究者達が慌てふため

きマキを見ていた。

「大方私が惨殺されるのを期待してたし、あの三下がルナさん達を狙ったのが想定外だったばいけど結果はご覧の有り様だよ…私ももつと鍛えなきや…：うん？」

周りの研究員達を見てラオの行動や自身の勝利が想定外だった事を予想したマキは改めて鍛え直す事を口にしながらふとラオの石灰化した死体を見ると何かがあった。

石灰化した肉体を払うと何らかの機械が其処にあり、それを手に取って念入りに見ていた。

「此れは…：此れがルナさんが口にしたイヴによる殺害防止策つて奴かな？」

「それです、それが『特異菌コントロール装置』です！

それが彼等の体内にある所為でイヴの特異菌のコントロールによる殺害も不可能になった忌まわしい装置です!!？」

ルナはその機械を見て特異菌コントロール装置と呼び、マキはマスクの音声、画面共有でレオン達にもルナの声とソレを共有し、更に本来なら使えるイヴによる生殺与奪すらこれで使えなくされると知り、舌打ちしながらソレを懐に仕舞い、さらに周りを見始めた。

『ラオの愚か者が!!？』

イヴを狙うなどと愚かな事を!!？

いや、それより其処の女!!?

貴様よくも我が息子を!!?』

すると其処にルーツがラオの行動を憤りつつ彼を殺害したマキに対し怒りを見せながら放送を掛け、マキは予想通りの反応が来た為無視し、ルナにその場で音声共有しながら事情を聞き始めた。

「じゃあルナさん、貴女が抱える事情を話して貰っても良い？」

いい加減気になってんだ、イヴを庇い続けたり、そのイヴが死にたがったりする事に」

『おい貴様聴いてー』

『プツン』

マキがルナに事情を聞き始めるとルーツは更にキレていたが、直ぐに放送が切れて周りのガラスのシャッターも閉まり、代わりにきりたんの通信が来る。

『奴等に話を聞かれない様に監視システムを再び掌握しました、話して大丈夫ですよ。』

あ、ついでにゲートキーも出しますね』

「ルナさん、ウチの通信士がハッキングで奴等に声を聞かれたりしない様に話して大丈夫だよ……此れがエレベーターの奴と『正門』のカードキーか、悪趣味な色」きりたんはハッキングで再び監視システムを掌握し、ダールトン一族に話が聞かれな

い様にした上でゲートキーのロックを解除して決戦場の床から金と赤の彩りをした『Elevator』と『Gate』と書かれた悪趣味な2種のゲートキーが現れ、マキはルナにハッキング等を伝えながらゲートキーを手に取っていた。

「…分かり、ました。」

先ず事の始まりは1年半前、名無しの菌類研究者として欧州で勤務していた際にコネクションに誘拐された事から始まりでした」

するとルナはマキの言葉を信じ、自身に起きた事……コネクションに誘拐された所から振り返り始め、自身の中にあるもの全てを語り始めた。

「私はコネクションに誘拐され、E型特異菌の研究参画を脅迫されながら押し付けられて、それで……人体実験等にも参加させられて目の前で人が死んだりする所を見せつけられて、人殺しの手伝いをさせられました……」

ルナは自身がE型特異菌の研究を無理矢理させられ、人殺しを手伝わされていたと独白し泣きそうになりつつ話を進めていた。

マキはそれを見てかつてのヨナの事を思い出していた。

「それから1ヶ月後に私の知識を引き出し終えた彼等は、丁度良いコントロール役を求めていたとして私にイヴの『母親』になる様に命じて来て、其処で私はこの子に会いました」

そんなルナの手をイヴは優しく握りながら彼女の方を向くと、ルナもイヴを見ながらもう片方の手で頭を撫で、それから1ヶ月後にこのイヴの母親役になったと告げる。

「初めのイヴは貴女達が懸念した通り、一般の道徳も倫理も無く実験場で特異菌を人に感染させては幻覚等を見せ、人を狂わせて殺して来ました……でもそれ等を見て私は思っただんです。

この子には良心や道徳が無いのではなく、そう言った物を教えられていないのでは、と」

マキはイヴを見ながら今日の前に居る子供からは想像出来ない、被験体第1号のエヴリンの様な事を何度もして来たと言いき一瞬アルバート01に手を伸ばそうかと思考した。

が、次にルナが良心や道徳を教えられていないのではと話した瞬間、少し驚きながら彼女を見つめた。

「だから私は母親役である事を良い事に、彼等の目を盗んで可能な限りこの子に教えました。

道徳や良心、彼等が悪人で貴女を利用しようとしてその力をそんな風に使えと教えた」と

「…よくバレなかったね、それ」

ルナは如何やら母親役と言う立場を利用し、コネクションが不要とした世間一般の道徳観や良心、更に彼等が悪人であり特異菌の力を利用してしようとしている事も教えたと話した。

マキはバレたら殺される事をやった彼女に意外に豪胆だと思いつつ話の続きを近付きながら聞き始めた。

「はい、何度かバレそうになりましたがイヴが合わせてくれたお陰で生き延びました。

そして私は、貴女の力は危うくて悪人達を喜ばせてしまう大変な一面もある事も教えて、イヴにわざと『実験で手を抜いて商品価値を下げつつ貴重な被験体としてアピールする』様にも教えて、この子が以降人を殺さない様にもして来ました」

するとルナの口からとんでもない情報が漏れ、彼女はイヴに実験で人を殺さぬ様にしつつ貴重な実験体である事を証明させる為にイヴにわざと実験で手を抜く様にも教えた事を音声共有で6人ときりたんは知る。

『おいおいおい、て事はイヴはエヴリンと同等の力を持つてんのか？』

マキ、確認しろ！』

「失礼、バカ隊長の指示で確認を。

イヴの本来の力はエヴリンと同程度なんですか？」

「はい、この子はエヴリンと同等の力を秘めています。

けど、私がそれを隠す様に教えました」

すると通信先で B・Y がマキに確認指示を出し、マキ伝てにイヴがエヴリンと同等の力を持つか確認した所、ルナは Y E S と答えマキ達は驚きを隠せずに居たと同時に、報告書はほぼ全てアテにならない事が確定した瞬間が今この場で来てしまっていた。

「…だって、私の力……悪い人を、喜ばせるから。

お母さんは、人を殺したり、カビを感染させたりするの、悪い事だからって言うたから、全部の力、見せない様に……したの」

するとイヴが辿々しい口調でルナの言い付けを守っている事を口にし、彼女から手を離れたイヴは少し離れて実際に手を壁に触れさせると其処から大量の特異菌が壁一面に夥しく広がり、足元も侵食されてる様をマジマジと見せ付け、しかしそれを悪い事と認識してる為か直ぐに収めるとルナの隣に立っていた。

「…マジでヤバめな力を持つてんだね、君」

「うん……だから、私は悪い子……。」

良い人を困らせて、お母さんが、来る前まで…良い人を、沢山死なせた、悪い子。

この場所でも……そう。

だから……強い良い人に、殺して、欲しかったの。

お母さんを、困らせるだけ、だから」

マキはイヴにかなり危険性があると言うと対するイヴは自らが悪い子〓母の教えた道徳に背く存在であり、ルナが来る以前とこの施設での実験で人を死なせたと言う罪の意識を持つている事をマキに示しながら彼女に近付き、アルバート〇一に手を添えながら自身の死を望んでいる事をマキに伝えて来る。

「イヴ、それは貴女が悪い訳じゃなくて組織やダールトン一族が……?」

……マキさん、私は確かにイヴに良心や道徳を教える事に成功しましたが、代わりにこの子は良心の呵責が内側で生まれて、貴女達の様な人達に殺される事を強く望む様になりました。

ですがマキさんお願いです、イヴを、この子を殺さないで下さい!!?

この子はただ組織に利用されていた存在なだけなんです、だから……!!?」

するとルナはイヴを抱きしめながらマキに対し、このイヴはコネクションに生み出された後良い様に利用されて来た存在であると主張し、イヴの殺害を取り下げる様に牢屋の時の様に懇願して来た。

それらを聞きマキは逆に聞くべきでは無かった、B. O. W. に同情してしまうと考え始めながらヘルメット越しに頭を抱え、口を開く。

「……ごめんなさい、私の一存では決められないよ。

皆の所に戻ろう、其処で話し合うから」

マキは自身の考え一つでは決めかねるとルナに話し、レオンや葵達の下に戻る様に促し、其処で再度話し合うと言い2人を護衛しながら再びエレベーターカードキーを使い、エレベーターに乗り込み皆の下に向かい始めるのだった。

一方その頃セキュリティルームでルーツは苛立ちを隠さずに自身のテーブルを叩き、手に持ったグラスにワインを注ぎながらシャルに叫び始めた。

「ええいまだ監視システムは直らんのかシャル!!?」

「仕方無えだろ父さん、あつちのAIが矢鱈凄過ぎてこつちのセキュリティを最高レベルにしても掌握し切って来るんだからよ!!?」

「畜生兄貴をぶつ殺しやがったアイツら絶対許さねえ!!?」

ルーツに叫ばれたシャルは隣に居るコネクション構成員と共にセキュリティをあつ

さり突破される事に苛立ちながらマキ達を許さないと漏らし、キーボードが壊れそうな勢いでプログラムを打ち込み続けていた。

「あら、お取り込み中だったかしら、ダールトン一族の方々？」

「むっ……すまないな、BSAAにA・B・F、それからアメリカ大統領の直属エージェント6名の鼠に引つ掻き回されてる所なのだよ。

H・C・Fからの客人、エイダ殿とセイカ殿」

すると其処に黒いジャケツトスーツを着こなしたアジア系の女性、エイダとセイカが現れルーツ達に話し掛けて来る。

ルーツは状況を簡潔に説明するとワインを飲み、未だ回復しないセキュリティ画面と睨めつこを始めていた。

「A・B・Fに：アメリカ大統領直属エージェント？

まさか、レオン達が此処に？

……ふふ、なら私達はやっぱり縁結びの神様に好かれている様ね」
 「(となるとBSAAはマキちゃんに、A・B・Fは葵ちゃん達か。

久々に楽しくなって来たね、これは)」

するとエイダとセイカはBSAA、A・B・Fとアメリカ大統領直属エージェントの組み合わせを聞きレオンや葵達の事を連想し、この回りくどく金の無駄になりそうな

者達に組織から資金援助等の見切りを付け特異菌のデータ回収をするか否かのつまらない任務にスパイスが加わったとして不敵な笑みを浮かべていた。

そして本当にレオン達が来ているなら見切り側に舵切りをする様にしようとも裏で考え始めるのであった。

そうしてマキは葵達の下に戻ると、先程の映像、音声共有でした話をし始め、全員で悩ましく思い始めていた。

何故ならイヴは『人の心』をルナの手で得てしまっており、B・O・Wの所以である人の心を持たず理解しないと言う土台が崩れてしまった為だ。

「ねえ如何すんのさバカ隊長に茜、レオンさんに皆？」

あのイヴはもうB・O・Wと呼べないよ？

マジで処理するの？

それとも保護する？」

「……何かもう一言欲しいな。」

ルナ参考人、連中はイヴの力を放つ予定があるそうだがその様子ならイヴは言う事を聞かない可能性が高いぞ？

「アンタを人質にする以外に何かイヴをコントロールする手段があるのか？」

マキはB・Y・達に処理か保護か何方かと迫ると、B・Y・がルナにイヴを無理矢理コントロールする人質以外の何かがあるかを問い質し、其処で舵切りを決める腹積りになる。

するとルナは思案した後、直ぐにレオン達6人に口を開いた。

「あ、あります！

確かこの施設の1フロア上にイヴをコントロールする為に、かつてトライセル社やアルバート・ウエスカーと言う人が使っていた洗脳薬品、『P30』の改良型を使うと彼等は言っていました!!？」

「……ビンゴだな、なら作戦完全変更だな。

「キラタン、『アルファ』に繋いでくれ」

如何やらルナの話に抛ればウエスカーがかつてジルに使用したP30の改良型を使うと言う段取りがあるらしく、レオンはそれを聞き『アルファ』に作戦の完全変更を伝えるべくきりたんに繋げる様に話した。

『実はルナさんが話した辺りからもう繋いであつて、大隊長も後一言が欲しかったみ

たいです。

では大隊長、指示を』

『此方『アルファ』だ、作戦の完全変更を容認する。

先ずはその施設から脱出とダールトン一族の抹殺を図りつつ被験体イヴの敵によるコントロール手段を全て断て。

そうすればイヴの保護を許可する』

するときりたんは出来る中学生女子だったらしく、『アルファ』に今までの通信や映像を共有しており、彼もまたイヴの保護に一言が欲しかったらしくルナからそれを聞きレオン達の作戦の完全変更を容認する。

その内容は脱出、ダールトン一族抹殺に加えイヴのコントロール手段を断ち切る事と指示して来る。

「あ、ありがとうございます大隊長！」

ルナさん、相手がイヴちゃんをコントロール出来なくなれば保護に変更して良いつて許可が下りましたよ!!？」

「ほ、本当ですか!？」

ああイヴ、貴女もしっかりこの世界で生きて良いって言ってくれる人が私以外にも現れてくれたわよ…!!？」

葵は早速喜びながらルナに作戦変更を伝えると、彼女はイヴを抱きしめながら生きて良い事を強く伝え嬉し泣きしていた。

イヴは話からダールトン達が自分を操れなければ生きて良いと察してはいたが、その実感が持たず少し首を傾げていた。

「ふう、なら保護対象にはしつかり自己紹介しないとな。」

きりたん、一旦マスクを外したいから監視システム等をまだ掌握し続けてくれ」

『はいはい、特異菌放射装置すらも掌握中ですからきりきり自己紹介して下さーい』
するとB・Y・はきりたんにシステム掌握をし続ける様に話しつつ、周りに特異菌がないこの空間で全員はマスクを外してずっとルナやイヴに見せなかった素顔を晒し自己紹介を始めていた。

「先ずは俺からだな。」

アメリカ大統領直属エージェント組織、DSOのレオン・S・ケネディだ」

「BSAA極東支部デルタチーム隊長、デルターのB・Y・だ。」

で、さつきまで暴れてたこつちがマキな」

「弦巻マキだよ、よろしく〜」

先ずレオン、B・Y・、マキから自信に満ちた笑みを見せながらルナ達に話し掛け、特

にマキはイヴの頭を優しく撫でながら満面の笑みを浮かべていた。

対するルナはこんな可憐な女性があんな豪快な戦い方をしたのだと少し失礼な事と思いつつマキ達を見ていた。

「んでウチがA・B・F。オメガ小隊長、オメガ1の琴葉茜やで、よろしゅうなルナさん、イヴっち」

「……イヴっち?」

次に茜がルナとイヴに自己紹介し、ルナはこの茜がああB・O・Wに對する死神のオメガ1と思いいメージが合致しないとまた少し失礼な事を考え、イヴは初めての愛称に首を傾げていた。

「同じくオメガ小隊、オメガ17のヨナ・レティシアよ。」

先祖に敗北した没落貴族程度なら私達の手で地獄に送り届けてやるわよ?」

「えっ、ヨナ・レティシアさんって確か、失礼ですがレティシア家の盟主で、『あの』ヨナさん、ですよね?」

「ええ、元CLOWNのラファエルである『あの』ヨナよ、ルナさんにイヴ」

次にヨナが自身の名をしっかりと告げると、ルナはレティシア家盟主にして元CLOWNのヨナ・レティシアと聞き返すと、自らの罪の象徴たるラファエルの称号も口にしなからイヴの目線に立ち、そのカラーコンタクトで普段はウィルス完全適応者である事

を隠してゐる瞳で力強く守り抜く意志を見せ、無表情のイヴを更に困惑させる。

「そして私がオメガ16、茜お姉ちゃんの双子の妹の、琴葉葵です。」

……大丈夫ですよルナさん、イヴちゃん、貴女達を縛る物や、あの特異菌制御装置は私達が壊すから安心して下さい！」

最後に葵がルナ達に自己紹介し、マキが握り潰し始め、バラバラに砕いた装置も見ながら2人を縛りつけるモノを壊すと誓い、ルナは自身の願いが叶う所まで後少しだけと理解して涙を流していた。

「……………」

そしてイヴは自身の願いたる『悪しきB・O・Wである自身の死』を叶えるのではなく、自身の生存を願う葵達の事を不思議そうな物を見る目で見つめ困惑していた。

が、その無表情の下にある『人の心』に何か温まる物を感じたイヴは、その物に対しても不思議さを感じていたが、何処か居心地の良さも感じているのであった。

「(それにしてもルール概要にラオ・ダールトンの行動、ルーツ・ダールトンのルナの身を案じない発言……まさかな)」

そんな中でレオン、更にB・Yや実際にラオと対峙したマキは彼やルーツの発言、更にルールその物がイヴの身は案じてルナは蔑ろにしている発言や行動、文言に違和感を持ち、まさかとは思いつつも2人の警護を念の為強固にしようと思ひ始めていた。

「(……成る程ね、『確認』して変な可能性は潰すべきね)」

それを葵達は雰囲気を感じ取りつつ同じ考えに至ったヨナは『確認』の1手を打とう
決め、次は自分が行く事を心の中で決めるのであった。

レオン達が抱いた疑念を払拭する為に。

EP V 『ヨナルート：トラップ殺しと増える参考人』

葵達とルナ達の話し合いが終わり、全員がマスクを再び被り行動方針が決まった後、レオン達はきりたんにわざとセキュリティハックを甘くしルーツ達の喋る余地を作らせ様としていた。

「よしキリタン、今だ」

『はいですレオンさん』

そしてレオンの合図できりたんはハッキングを緩め、放送機器等の使用权を向こう側に譲ると、ルーツの怒声がいきなり響き渡った。

『貴様らあ!!?』

よくも、よくも我が子を殺してくれたな!!?』

絶対に許さんぞ!!?』

その話す内容も完全に予想通りの面白味が無き物であった。

その為全員ルーツの話題は無視してマキが『ゲーム感覚』を利用した話題を振った。

「そんな事より私、アンタ達の『ゲーム』をクリアしたんだからさ何かプレゼント…武器

の弾薬とか寄越しなよ。

ほら見えないかな、このカードキー？」

マキは挑発するかの如く2枚のカードキーを見せながら『ゲーム』クリアの報酬を要求する。

それに対してルーツは何やら発音が聞き取れない、音割れする程の叫び声を放つと急に放送が切れ、次に『正門』前に再びテーブルが現れ、其処にマキが使った弾薬一式＋αが揃っていた。

「煽り耐性0だねあれは。」

しかもご丁寧に使った弾丸一式だけじゃなくオマケも付くとか……ふふん、ゲーム感覚の奴はこう言うのを律儀に守るから結構先読み出来るし掌で踊らせ易いんだよね〜」

「CLOWN事件が経験として活きたな」

マキは弾丸一式を取りながらリロードし、ダールトン一族は御し易くまた煽りに弱い事を見抜き此れから先が完全に自分達の独壇場になると予感していた。

そしてそれは他5人も同じく、しかし油断せず確実にダールトン一族の抹殺を図る為次なる行動に出ようとしていた。

「なら次は誰が行く？」

「私が行くわ、左の罾から逃げる『ゲーム』を土台から壊して来るわ」

B・Y・は次に誰が向かうと聞いた瞬間ヨナが率先して動き、左の罾からの逃走ゲームのドアを指差しその『ゲーム』を土台から崩すと宣言し、レオン達は発言の意図を理解すると反対意見無しに話が進み、ヨナはルナとイヴを連れて行く事になった。

「あの、ゲームの土台を壊すってまさか…」

「ええ、私の氷で罾の悉くを砕くわ。」

ルナ、イヴ、少し寒いかもしれないけれど我慢なさい」

ルナはヨナの力、T—Gene—sisウイルスに完全適応した恩恵で氷の力を発揮している事を聞いていた為、自身の予想を敢えて聞くと矢張りヨナの口から罾を砕くと発言が飛ぶ。

それを聞いたルナはイヴが寒がらない様に抱きしめようと思いつつ、ゲームが土台から崩れる様を見たいと言う気持ちもありそれを止めようとはしなかった。

「では行くわ。」

ああそうそう、罾を砕くには砕くけれどルナとイヴは守る事は忘れないから安心なさい」

そしてそれでいて最優先事項を忘れないと宣言しヨナはイヴ達を伴い罾からの逃走ゲームのドアに行き、其処でマキの様にエレベーターで目的地まで降りて行く。

「……悪い人達の、ゲーム、壊すの?」

「ええ、完膚無きまでに壊すわ。」

だからイヴ、貴女も見てなさい。

多分スカツとするって事がどんな事か分かるから」

そんな中でイヴはヨナに対してダールトン一族の『ゲーム』を壊すのかと聞くと、ヨナはスカツとすると言う事を教える為に完膚無きまで壊すと告げ、イヴはスカツとするとは何なのか分からず見守ろうと決める。

そしてエレベーターのドアが開き3人は外の広い空間に出る。

『フハハハハハ、次に選ぶのがこのゲームとはな!!?』

此処は作動した罠から制限時間内に次の部屋へ移動する逃走系ゲームだ!!?

因みに何処かにあるカードキーを部屋内の宝箱から見つけねば次の部屋に行けぬ様になってるので死ぬ気で探したまえ!!?』

するとルーツのルール説明が入り、ヨナは周りを見渡すと確かに一面カビ塗れだが柱等は無い単純に広い空間であり、其処に無数の宝箱がある事を確認した。

しかしヨナは初めからこのゲームを崩す気でいる為カードキーなど見つける気は0だった。

「キリタン、わざと監視カメラ等を生きさせて。」

これから連中に一泡吹かせてあげるためにも、ね」

『はいはい、じゃあ満足するまでやって下さい〜』

ヨナはルーツのルール説明を完全に無視し、更にきりたんにわざと監視システムを生かさせる様に指示を出すときりたんも了承。

そしてマスク越しにヨナは不敵に笑みを浮かべるのだった。

『それでは、心逝くまでゲームを〜』

「ふっ、ダールトン一族が私の命を奪えると本気で思っているのかしら？」

そう、レティシア家盟主たる私に」

ルーツが最後のセリフを言おうとした瞬間、ヨナは言葉を被せ、更に自身がレティシア家盟主……つまりはヨナ・レティシアだと明かし、放送機をジツと見ながら彼等の反応を伺っていた。

『なっ、貴様……今レティシア家盟主だと言ったか!?!?』

「ええ言ったわよテロリスト。

もし疑うなら顔も見せて差し上げますわ。

ほら、良くご覧なさい。

この私、ヨナ・レティシアの顔を」

するとルーツは明らかな怒気を孕んだ声を上げると、ヨナはマスクを外し素顔を見

せ、その後再びマスクを付けて放送機を見つめていた。

『き、き、貴様あ!!?』

ヨナ・レティシア、よりにもよって貴様が我等ダールトン一族の前にぬけぬけと顔を見せるとは!!?』

いや、そもそも貴様等の所為で我等は』

「あら、それはごめんあそばせ、ね。

しかし貴方達は私が言えた義理では無いけどバイオテロを画策している立場の者。

なら鎮圧される運命にあるのが分からないのかしら?』

…最も理解していればそんな事を画策しない筈でしょうけどね、まるで過去の私だわ」

ルーツは完全に頭に血が上り、ヨナに対して怒りをぶつけるがヨナは過去の過ちを自虐として交えながらバイオテロを起こす者の末路を語り、それを理解していないと話して敵の思考を単調にしようとしていた。

『ぐううう、シヤアルツ!!?』

吊り天井以外の全トラップも稼働させモールドッドを最大限呼び寄せろ!!?』

この雌餓鬼をルナ毎殺せえ!!?』

『プツン』

そしてヨナの作戦は完全に破り、相手は自らの手でヨナに全力をぶつけると宣言してしまう。

それを聞いたヨナはそれ全て砕くと思案し、放送機を見ていると天井が下がり始め更にモールデッドが湧き始めた。

「…本当に操り易い連中だわ。」

それにしても吊り天井以外のつて事は元から吊り天井はあってモールデッドも湧く、それでいてイヴも巻き込まれそうだったの？」

「……うん、でも私の、居る場所だけ、天井に穴が……空く仕組みだった……だから、お母さん、離れないで……」

ヨナはルーツ達の煽り耐性の無さに自分達に都合の良い状況を作り易いと感じつつ、イヴに部屋の詳細を聞きこの場合はイヴも巻き込み易く、今はルナが居る為巻き込まれる対象が増えた状況だと理解した。

更に先程のルナ毎と言う言葉と今までの過程からある推察がヨナの中で確信に変わる。

「となれば……先程の言葉からルナ、ルーツ達の貴女への心配の無さも含めて、貴女はこの研究所で始末させられる可能性があったわね、事故として」

「えっ？？」

……た、確かにイヴを操る方法が確立されているなら私はもう不要ですが……ダールトン一族ならやりかねない短絡的な事、ですネ……」

するとヨナは近付くモールデッドを始末しながら壁際に向かい、その頭でルナの生存を今まで考えないやり方や、ラオがイヴ達を狙った際にイヴしか心配していない上に先のルーツの発言を纏めてルナは元から殺害予定と話し、ルナもその考えに至っていた。

「……でも、それって逆を言えば私には好都合な訳であるのよ。」

オメガ17特記事項を2つ、あつさり達成出来るのだから。

と言う訳で全リミッターを現時点で解除、此れよりルナとイヴの保護を最優先にしつつトラップを破壊するわ。

貴女達、少し離れてなさい」

するとヨナはそんな事態すら好都合と呼称し、自身の全リミッターの解除を宣言するとヨナの周りの空気が凍え始め、そしてルナ達に離れる様に言うと言手を添えていた壁から下がり始めた天井に突如として氷が走り出す。

「此れで天井トラップは意味を無くす」

「……此れが、T—Gene-sis 完全適応者の力……」

そしてヨナが一言添えた瞬間、あつと言う間に天井全てが凍り付き天井の降下も止

まっつてしまった。

それをルナは驚愕しながら絶対零度の冷気を放つ彼女を見つめ、近付けば逆に危ないとも思いいヴを伴い2メートル半離れていた。

「全く、私達が焚き付ける前から短絡思考なんて昔の私を見てる様で気分が悪いわ……いや、あの時の私以上に短絡的か。

どちらにせよ、被験体のコントロール役、私達にとつては重要参考人を暗殺しようとするとは良い度胸をしてるわ……完全に叩き潰してやるわよ」

そして近づくモールデッドも絶対零度の障壁等を用いて全て氷漬けにすると、それを拳で砕きながら過去の自身以上の短絡さを持つダールトン一族に対し完全に敵意を見出しルナやイヴを守るべく行動を開始する。

「さて、先ずは次の部屋に行くわ、よ!!?」

『ドゴオオツ!!?』

ヨナは先ず部屋の通り道に居るモールデッドを砕いた後カードロック式のドアの前に立ち、それに全力のパンチを繰り返すとドアが吹き飛び通り道が出来上がった。

それと同時に警報音が鳴り響くが、ヨナはそれ等を無視しつつモールデッドが侵入しない様に部屋の出口を氷で閉しながら進む。

『き、貴様ア!!?』

ゲームの趣旨を理解してー」

「そつちこそE型被験体には暴走抑止、コントロールがある程度必要な為に監視役が要る事を理解してる癖にその役のルナすら殺害しようとする行動や発言を焚き付ける前から漏らしていたわ。」

なら、最早こんな下らない『ゲーム』に付き合う義理は無いわ」

すると『ゲーム』を無視し始めたヨナにルーツは怒声を浴びせるが、対するヨナは母親役たるルナの殺害を表に出している為最早『ゲーム』に付き合う義理立ては無いと話し、次の『ゲーム』の無力化に努めようとする。

するとモールデッドが床を無意味に踏むと落ちて行き何か刺さる音がした。

「成る程、下は針山ね……ならこうするだけよ!!？」

するとヨナは床に手を置くと其処から放射状に5メートル範囲が完全に凍結し、その凍結した足場に乘ると床が一瞬動きそうになりながらも床全てを氷と一体にしてる為か沈む事無く先に進める様になってしまっていた。

「2人共行くわよ。」

あ、滑るから足元注意よ」

「は、はい……この施設の罠はヨナさんには通じ無さそうね……」

ヨナはルナ達を伴い氷漬けで滑る床をゆっくり進ませ、罠その物を無力化しつつモー

ルデッドすら凍らせては砕きつつ前に進み、再びドア前まで来てドアをパンチで破壊し、次の部屋まで進んでしまう。

「さて次は——」

『ボオオオウツ!!』

ヨナ達が次の部屋に進むと部屋の両端から炎が吹き出し、徐々に3人に迫り来ると言う『ゲーム』参加者を焼死させる目的の部屋であるとヨナは理解した。

『フハハハハハハハハ、貴様は氷を操る異能の化物の様だが、この灼熱地獄の炎の前には——』

「この程度の熱で灼熱地獄？」

「はあ、これならまだ……」

『ブウン!』

ルーツはヨナの力を見てこの部屋の炎ならばと豪語しようとした。

しかしヨナは溜め息を吐いた直後、超高速移動で炎の目の前まで行き、そして手を翳すと……『炎が噴射口毎凍り付いてしまった』

『——はあ?』

「レミエルやケルビム、それにBSAAが作った小型超高压バーナーの方が熱かったし、使う者が良かった所為で最後まで熱を凍らせる事は出来なかったわ。」

なのにそれ以下の熱しか無い炎で灼熱地獄を呼称しても…滑稽よ」

ルーツは監視カメラ越しに起きた事象に乾いた声を上げると、ヨナは自身が体験した更に熱い炎の例を挙げながらも片方の炎すら凍らせると、ルーツ達の灼熱地獄を滑稽と断じてそのままドアを今度は蹴破る。

「す、凄い。

炎すら凍らせるなんて」

「これが私、ラファエルだった者の力よ。

それでイヴ、彼等の傲慢な罠が私の様な小娘に無力化される様を見て、貴女は如何感じたのかしら？」

ルナはヨナの力をただ凄いとしか口に出れなかったが、対してヨナは罪の象徴たるラファエルの力と呼称しやや自虐気味な声色で応えていた。

更にイヴに罠を悉く無意味な物にする様を見せ、如何感じたかを聞いた。

「……分からない。

……でも、なんだか、胸の奥が……熱く、なったり、喜ぶのと似た様な、何かを…感じてるの…」

「ふふ、悪者の企みが潰れるのは見ててこうグツと来るでしょう？

それこそが『スカツとする』って事よ。

覚えて置いて損は無いわ」

するとイヴは抽象的な、しかし胸の奥から喜びに似た何かを感じると話す。

ヨナはそれこそがスカツとする事であると話し、ルナは少々悪い方の教育だと思っていたが事実自身も胸が空く思いをしていた為何も言わずにイヴの頭を撫でていた。

「さてお次は…」

『プシューツ!!?』

そしてヨナは次の部屋に入ると突如ハウスダストの様な物が部屋一面に噴出され始める。

そしてヨナのマスクに装備された高性能フィルターが作動し、マスクには『E型菌検出』の文字が流れる。

『フハハハハハハハハ、其処はE型菌を散布し酸素供給器を使いながらカードキーを探す場所だ!!?』

だがルナ女史に渡したマスクには貴様らの様な高性能フィルターでは無い、ただのマスクしかない!!?』

果たしてルナ女史を生かしながら強行突破出来るかな?

フハハハハハハハハハハ!!?』

するとルーツはこの部屋の罠がE型菌を散布する場所であり、更にルナのマスクはヨ

ナの高性能フィルターでは無い単純な感染防止マスクである事を暴露し、このままではルナは菌に感染する事を示唆しながら高笑いしていた。

「……お母さん!!??」

「だ、大丈夫よイヴ、少し息を止めていれば、何とかなるから……!!??」

イヴはそれを聞き初めて無表情を崩し、『母』のルナの心配をする仕草を見せる。

対してルナはイヴを安心させようとして息を止めれば大丈夫だと小型酸素ボンベで息をしながら痩せ我慢をし、母として『娘』に余計な心配させまいと行動した。

「……そうね、息を止めていれば感染はしないわ。」

スウ……」

『カチャツ、ピピピ!!??』

カチャカチャツ、ピツ!!??』

そのルナの言葉を聞いたヨナは大きく息を吸った後、何と自身の高性能フィルターを外し、ルナのマスクに代わりにフィルターを装備させ彼女が普通に息を吸える様にすると言う大胆な行動に出た。

「な、ヨナさん!!??」

「……」

ルナはその行動に驚きヨナを案じるが、そんなヨナは高速移動で特異菌を散布してい

る噴出口の下までいて移動し、自身の氷で噴出口を氷漬けにして機能不全にする行動を息を止めながら行い、そして全てを機能不全にした瞬間ドアを破壊し2人をそれぞれ抱えて次の部屋……マキとの映像記録から決戦場に辿り着き一息吐いていた。

「ふう……ルナ、イヴ、貴女達大丈夫かしら？」

「そ、それは此方のセリフですよヨナさん!!？」

このフィルターが無いとあの中は息を吸えなかったのに……何故こんな無茶を!?？」

ヨナはルナとイヴの身を案じるが、ルナは逆に息を吸わずに一連の行動を1分以内とは言え運動をしながら息を止めると言う狂気の沙汰をした事を咎め、フィルターに手を掛けて返し始めた。

「何故って、貴女はイヴ同様死んではならないからよ。」

貴女は私の毒親と違って、イヴを真つ当にしようとした。

だからこそ私は貴女を死なせる訳には行かなかつたのよ……1人の女の子の立派な親の貴女を」

対してヨナはルナに自身の毒親と比べ、イヴの『母親』をしつかりとしている彼女を死なせない為にこの行動を取ったと反論し、ヨナの親がどんな人物か知らない彼女を困惑させる。

『お取り込み中すみません、その決戦場も特異菌噴出装置があるみたいですよ。』

それ、今後全部此方で止めて置きますね……ヨナさんみたいな無茶をする人が出ない様に』

「ごめんなさいねキリタン、そうしてくれると有り難いわ。」

アカネ達はもしかしたらただけどスコット・ケネディやB・Y・達は普通の人間、下手したら感染して死ぬ可能性すらあるからね……」

するときりたんが通信を掛けて来ると、今度はヨナの様な行動を取る者が出ない様に同様の装置を止めると話し、ヨナもウィルス完全適応者の為感染しない可能性がある琴葉姉妹よりレオン達の心配をしそうする様に要請する。

『ゴウンツ！』

「決戦場が下がり始めた……さて、今度はどんな下品な輩が現れるやら……」

すると決戦場がマキの時と同様足場が下がり始め、更にイヴとルナが隔離されいよいよ未だ見ぬダールトン一族と戦う事になると確信したヨナは、ラオの様な下品な相手があると思いながら身構えていた。

そして決戦場は下がり切り、奥のドアが開かれ、その先の暗闇から蒼いドレスを着た、美しい蒼い髪をしたダールトン一族の女が現れた。

「ふふふ、まさかあの様な方法でこのトラップ場を突破するとは思いませんでしたわ。」

初めまして、ヨナ・レティシア様。

私の名は『カトリ・ダールトン』、ダールトン一族の長女でございます。

どうぞお見知り置きを」

ヨナはどんな罵声や汚い言葉がその女から出るかと少し様子を見ていたがそのダールトン一族の長女、カトリ・ダールトンは礼儀正しくヨナにお辞儀をし、更に何処か柔かな笑顔を見せていた。

「あら、ダールトン一族は皆単純な愚か者しか居ないと思っていたら少しまでもそんな者が来たものね、一見は」

「ふふ、父やラオ達が不貞を働キルナ様を殺害するとおっしゃっているらしいね？」

……大変申し訳ございません。

まさか其処まで恐ろしく思慮無き行動に出るとは思いませんでしたわ。

ルナ様、短絡的な父達に代わり謝罪致しますわ」

ヨナはカトリを一見してまともな者と評価した……が、そのカトリは父ルーツ達を短絡と思慮が無いと言いつつルナにドレスのスカートを持ち上げ謝罪の言葉と同時に謝罪ポーズを少しヨナは困惑させられ、ルナの方を見ていた。

「えっと、カトリ……さんは、私やイヴに食事を何時も運んでくれたり、私やイヴが一緒に居る時間を増やそうと言ってくれた方です……イヴの読心曰く『ルーツ達の様な悪

人では無い』、らしいです……」

ルナはカトリを一応さん付けし、特異菌感染者であるが故に読心が可能な為イヴにも心を読ませたが、結果はルーツ達とは違うと言ったらしい。

そしてヨナはそれらを聞き少し思案すると、自身がレティシア家やCLOWNに縛られていた経験則からある答えを見出した。

「成る程、貴女はダールトン一族と言う家の名に縛られて生きてきた口ね。

まるで私みたい……レティシア家の敷いたレールの上を歩かされ、私の場合は身勝手な愚兄によってCLOWNに、貴女は実の親達からバイオテロを扇動する側にさせられた、と言った所かしらね」

ヨナは自身の経験からカトリが置かれた状況を推察し、過去の自分の様な事になっていると言い放つ。

カトリは無言のままヨナの言葉を受け取り、懐からゆつくりとサイレンサーが付いたロシア産ハンドガンを抜き出し、ヨナもそれに合わせてアルバート01を引き抜いていた。

「……ヨナ、カトリは、ダメ……!!」

するとイヴは此処で明確に敵味方は誰かと言った発言をし、2人の敵対を良しとしな

い事を無表情からやや眉を擡めていた。

それを聞きヨナはある事をカトリに聞こうとしていた。

「貴女、コネクションからの治療は受けた？」

ラオ・ダールトンみたく生殺与奪からも外れた化物になったのかしら？」

「ご自身で、想像なさって下さいな」

ヨナはカトリがコネクションから精神支配の治療を受けたか、またイヴの生殺与奪権から逃れたか気になり問うとカトリは想像に任せると返しながら互いに引き鉄に指を置き、そして――。

『ズダンツ!!?』

『グギヤアアアアアア!!?』

2人は互いの背後に居たモールドッドを撃ち抜き、更にイヴやルナの前に立ちながら隣り合わせになりカトリは素人ながらもしっかりと銃を構え、ヨナは訓練された者の構えをした。

「やっぱり貴女精神支配から脱していないじゃないの！」

E型被験体が正確な読心術を発揮するには感染してそのままの状態になつてなければならぬって資料にもあつたわよ!!?」

「あらごめん遊ばせ！」

私と双子の兄様は貴女達が侵入した時点でこの研究施設に幽閉されて何時殺されるか怯えてた所でしたのよ!!？」

如何やらヨナはイヴがしつかりとカトリを讀心した事から『コネクションからの治療を一切受けていない』事を予測し、イヴが普段から力を使わない為感染者の症状が表れていないのも計算に入れ会話をしていたのだ。

そしてカトリ曰く双子の兄も幽閉され殺される身である事を自白しつつ、強化タイプを含めたモールデッドを倒して行く。

「それに私は他の皆と違って特異菌の力が上手く發揮されない唯の一般感染者と同じと言われて父からは恥晒し、母からは愚か者と蔑まれてましたわ!!？」

兄はラオ並に超人化してもダールトン一族の栄華に興味が無かった為私と同じく冷遇されましたわ!!？」

「成る程、複雑な家庭環境ね!!？」

ダールトン一族にも内情がある訳ね!!？」

更にカトリは超人化出来ず一般的な感染者と余り変わらさずイヴの匙加減で何時でもモールデッドになるか石灰化するかの何方かの為、兄は超人化しても思想の違いから冷遇されていたと話し、ヨナはつくづく自身や琴葉姉妹に似た様な環境に置かれたと感じ取り、このカトリも現場判断で参考人にする事に決定していた。

「キリタン、この施設を掌握してカードキーを早く出して!!?」

『もうやってますよ、後30秒頑張ってくださいね』

「…そう、なら良いわ!!?」

ヨナはきりたんにこの『ゲーム』施設の掌握を行う事を命じていたが、如何やらきりたんはとづくにやってたらしく思えばあれだけ五月蠅かったルーツが決戦場に来てから全く無言な事に成る程と思いつつ30秒耐える様になっていた。

『ゴウンツ!』

「決戦場のセキュリティが解除されてる!!?」

私が死なないと解除されないのに!!?」

すると15秒で決戦場の床が上がって行き、更に周りのガラス張りの研究員達の居る場所もシャッターがマキの時と同様に降りていた。

それを見たカトリは自身が死なないとこの施設が解放される事が無いとうっかり口にしてしまい、ヨナはそれを聞きある事を思い浮かべカトリに叫び始めた。

「貴女、まさか最後に死ぬ気だったの!!?」

「…っ!」

「冗談じゃ無いわ、私達はそんな救える命を救えない碌でも無い結末なんて見たく無いわ!!?」

だから貴女も生きなさい、全力で、足掻いて!!?」

ヨナはカトリに死ぬ気だったのかと叫び、カトリは無言で俯くとそれがYESだったと知り激怒する。

更にカトリに対し生きろと叫び、A. B. F. 制式採用AKを構え救える命を救えない結末を避ける為イヴ達も守りながら銃弾を放ちモールデッドを怒りの表情を向けたまま始末して行く。

『キュオンツ、ピーー!』

するとその間にマキの様に2種のカードキーが現れた為、ヨナは高速移動でそれを掠め取るとモールデッドを更に始末し、ルナ達を閉じ込めるガラスが開いた後破壊したドアを塞いだ氷を自身の手で砕きながらきりたんが掌握し、作動しなくなったトラップ地带にヨナやルナ達は再び足を踏み入れた。

「ほら、貴女も早く来る!!?」

「さもないと置いて行くわよ!!?」

「…ヨナ・レテイシア様、貴女は私に生きろと、生き恥を晒せと?」

「バイオテロリストの片棒を担いだ私にー」

「当たり前よ、それにそれを言うなら私も同罪だし生き恥なんて言うな!!?」

「良いから早く来なさい!!?」

ヨナはカトリにも付いて来る様に叫びながら未だ湧いて出て来るモールデッドを始末しながら手を差し伸べ、家族がテロリストの為罪を禊ぐ為に死のうとしたカトリはこれから生きる事を生き恥と口にした瞬間、ヨナから更に怒鳴られ手を引かれて決戦場からトラップ地帯に出てしまう。

「後は自分の足でエレベーターまで駆け抜けなさい!!？」

私は『3人』守るので手一杯だから早くしなさい!!？」

「…これがヨナ・レティシア様、か。」

御先祖様が勝てない訳ですね」

ヨナはルナ、イヴ、更に参考人に数えられたカトリを守るべく銃の引き鉄を引き続け、エレベーターの前まで走らせる。

それを見てカトリ・ダールトンはレティシアに勝てない訳を自身の中で理解していたが、此れはヨナ自身も救われた恩人5人達のお人好しがうつつた所為だと知らない為理解が及ぶ訳が無かった。

『ピピッ、ブウーン』

「ほらエレベーターが開いたわよ、早く入りなさい!!？」

そうしてあれよあれよと言う間に無数に湧き続けるモールデッドを処理しながらエレベーター用カードキーでエレベーターを開け、カトリを含めた3人は先にエレベーター

ターに入り、最後にヨナがエレベーターに入りスイッチを入れてトラップエリアから脱出した。

そうしてこの中でヨナはダールトン一族と言っても一概に敵と呼べない者も矢張り居るのだと理解しつつレオン達の前に出るまで警戒を解かないのだった。

EP VI 『葵ルート：『親』と『愛』』

ヨナ達は無事エレベーターでレオン達の下に戻って来た後、一緒に連れてくるカトリ・ダールトンに念のため手短に事情聴取をしようと言う話になり、カトリは兄を助ける事を条件にそれを呑み聴取が開始された。

「先ずカトリ・ダールトン、年齢25歳。

特異菌感染者だがコネクションからの治療を受けておらず今もイヴの精神支配下にあると？」

「ええ、そして私の兄同様特異菌コントロール装置は移植されず何時でもイヴが私を殺すか、或いはモールデッドになるか：何にせよイヴから命令を受けたら逆らえない中期から末期の感染者ですわ」

レオンはカトリに聴取し、自身の状態が中期から末期の状態だと話し、イヴが普段から力を使わない事がつくづく良い方に向かっていると感じつつ、更に聴取を続ける。

「では君はルイジアナの例等から特殊な薬液を掛ければ切断された部位が完全に接合されたりするんだな？」

「はい…それから再生力も、爪を剥がした程度ならすぐに再生出来ます…：けれども

他の家族よりも再生力もその他の力が劣り、変異が最高潮に達した化物にならない限り私は限り無く人間のまま、だと思えます」

更にB・Y・は最新の報告書にあつたレイジアナの感染者『ベイカー一家』等の事例である薬液を掛ければ切断箇所を接合すら可能になると聞き、矢張り感染中期から末期の間である事を確認しつつ、カトリが『人間』と言う言葉を使つた為次に茜が最後の聴取を行う。

「んじゃ残り2つやから良く聞くんやで？」

あんさんや兄で長男の『カトル・ダールトン』はルーツ・ダールトン達が目指しとるダールトン一族の栄華に興味が無い訳やな？」

「はい、所詮私達は既に没落して埋もれた存在なんです。

なら、そのまま静かに暮らせればそれで良かったんです…少なくともカトル兄様や私はそう思つてました…」

茜は残り2つの内の1つ、カトリと双子の兄で長男のカトル・ダールトンは没落した一族の栄華を取り戻す事に反発し、特異菌に感染させられながら冷遇された事実を話す。

レオン達は此れによりダールトン一族も一枚岩では無い事を窺い知るのだった

「んじや最後。

ウチ達が手にしたコネクションの構成員が漏らした情報によると、ルート・ダールトン達はイヴをロシア首脳部に放って特異菌を感染、そのまま国を牛耳って世界に特異菌を売る計画やつて話やけど合つとるか？」

「はい、例えそれが4年5年掛かろうとも必ずやり切ると父達は話してました…」

そして最後のレオンが捕らえたコネクション構成員が漏らしたダールトン一族の計画を茜が事実か聞くと、カトリはYESと口にしこの計画の部分のみは報告書通りだと理解し、聴取を終了させる。

「では聴取終了、交換条件でカトル・ダールトン救出も行う。

カトリ・ダールトン、兄は何処に居るかは分かるか？」

「はい、迷路の先にある決戦場で母の『ミラ・ダールトン』に拷問されていると…」

レオン達は事情聴取を終わらせ、交換条件を果たすべくカトリに兄カトルの居所を聞くと、迷路『ゲーム』の先にある決戦場にて拷問されていると話す。

葵は事実確認すべく透視能力をフルパワーで使い、迷路『ゲーム』の先の決戦場まで視透しそれが事実と確認する。

「うん、足を切られたり腕を挽がれたりしながら薬液を掛けられては同じ事の繰り返しを受けてる。

次は私が行くよ皆、迷路なら私の透視能力で丸分かりだから」

「OK、それじゃ行つてらっしやい葵」

葵は次に透視能力がある自分が行くと話し全員から了承を受け、マキから見送りの言葉を受けると領き直ぐにイヴとルナを伴いエレベーターに入り迷路『ゲーム』に行くのだった。

……拷問と、誰がそれをしているかを聞いた際に芽生えた静かな怒りを秘めながら。

「父さん、奴等次は迷路に向かつてやがるぜ！」

間違いなくあのクソ兄貴をバカみたいに助けに向かったぜ!!？」

「ククク、迷路にはモールデッドにハズレルートには罠があると知らず……カトリに絆されて愚かな選択をした者だ、ハハハハハハ!!？」

一方その頃セキユリティールームではシャルとルーツが愚かなカトルを助けに向かったお人好し達を周りのコネクション構成員達と共に嘲笑い、その選択が愚かだと口走つ

ていた。

「……コクツ」

「(グツ)」

その後ろでエイダは『潮時』だと見極め、2人はそれぞれ移動を開始し、その場から誰にも気付かれず去ってしまった。

それもエイダは端末からデータを遠隔回収とダールトン一族が保有するデータを全て裏から消去しつつレオン達の下に、セイカは葬が向かった迷路『ゲーム』の場所にセキリティが安定しない内を狙い専用通路で向かうのだった。

そうして葵達は迷路『ゲーム』エリアへ到達し、恒例のエレベーターロックを受けた後天井を見上げ放送機を見つめた。

『ふぁーはっはっはっはっは!!?』

あの愚かな娘に絆され同じく愚かな息子、いや、子と呼ぶ事すら憚れる者を助

けに其処に向かうとは愚か者達だなあ!!?」

更に恒例の、しかし今回はカトリやカトルを愚かな子と誹り、また自分達も愚かだと嘲笑う内容だった為、親関係に様々な事情を抱えた葵は手に力を込め、壁に対し力強く拳を叩き付け、拳をめり込ませながら声を出し始めた。

「良いからさっさとルール説明しなよ。」

貴方達と話す価値は無いので、さっさと、早く、今直ぐ」

「ア、アオイさん…!!?」

ルナは地獄の底から出て来たかの様な葵の声に驚きつい声を上げてしまう。

対するイヴも無表情ながらも葵は『怒っている』と理解し火に油を注がない様にダンマリとしていた。

『おおつとすまない、それではルール説明をしよう!!?』

その迷路は正解のルートが一定時間で変わり、ハズレルートには恐ろしいトラップが仕掛けられている場所だ!!?』

其処をモールデッドの襲撃を掻い潜りながら正解のルートを見つけると良い

!!?』

では幸運を、フハハハハハハ!!?』

『プツン』

そんな葬にルーツはテンションを変えずルールを説明する。

そして最後に心にも思っていない事を口にしながら通信を切る。

それに対して葬はめり込ませた拳を引き抜き、迷路の入り口にルナ達を守りながら入り始めた。

「あ、あのアオイさん、先程は何故あんなに怒って…」

「…それは私の個人的な理由ですが…あのルーツ・ダールトンやこの先に居る母親と言うミラ・ダールトンに『親』を名乗る資格なんか無いって思ったからです。」

ルナさんもイヴちゃんの『親』を名乗るなら、アイツ等に話す内容を決めたい方が良いでしょう」

ルナは葬がキレた原因を聞くと、個人的な理由と前置きしつつルーツ達に『親』を名乗る資格が無いと話した。

そして葬はルナに対してもイヴの『親』ならルーツ達に話す内容を決めるべきだと話す。

それを聞いたルナは真面目に思索し、此れまでのルーツ達の発言を思い返し始めた。

「さてと、迷路は最初の分岐は右か左、此れが一定時間で切り替わるみたいだけど、切り替わる前に入ってしまったえば意味無しなんだよね、透視で見た限りだと」

すると葵はタイマーをスタートさせつつ最初の分岐ルートに差し掛かると透視能力を駆使して罫が無く道が続くルートに入れば切り替わりが直後に発生しても別段問題が無い事を能力で理解した為右に3人で行く。

すると直後にルートが切り替わった為タイマーをオフにして何れ程で切り替わりが発生するか測り切る。

「1分半ね……ならさっさと正解を選び切ってカトルさんを救わないと。」

ルナさん、イヴちゃん、私にピッタリ付いてきて下さいね」

葵は1分30秒でルートが切り替わる事を理解した瞬間、そのままルナ達にピッタリと付いて来るように促しながらルナ達の体力を考えて休息を取りつつ早歩きを始めた。

その間に全て正解のルートを正確に選んでしまった為か、ルーツが再び放送を掛けて来る。

『貴様、何故正解のルートが分かるんだ!!?』

不正をしているな!!?』

「自分で考えなさいよ親失格者」

ルーツは葵の意味不明な正解ルート選択に不正を唱えるが、結局葵は種明かしはせずそのまま正解ルートを選び続けた。

その中でルナは葵のある言葉に引つ掛かり……と言うよりも確信を得てしまう。

「……ああ、そう言えばCLOWN事件の主犯は……葵さん、だから貴女は私に『親』を語るならと……確かに、そうですね。」

「彼等は親失格です……!」

ルナはCLOWN事件の主犯の名は琴葉紅と思い出し、更に葵や茜のファミリーネームを思い出した為親失格、親の何たるかと言う葵が敢えて語ろうとしなかった部分を理解し、それをこの先の『母親』のミラ・ダルトンにぶつけてやろうと考え出していた。

『……あ、葵さんストップ、お客様が来ましたので全セキユリティを掌握しときますね』

「きりたん、お客さんって……足音」

『コツツ、コツツ、コツツ』

するときりたんから突如『お客さん』と言う言葉を聞き何事かと思いきや、少し離れた所から足音が聞こえ、透視能力を駆使して『何者』かを敢えて確認しつつハンドガンに手を掛け、待ち伏せた。

『カチャツ!!?x2』

そして曲がり角越しに両者は相対する。

片やマスクで顔を隠す葵、片や壁一面に特異菌のカビ塗れの地帯にマスクもせず葵にハンドガンを向ける女性……京町セイカだった。

「セイカさんお久し振りですね、直接会ったのはCLOWN事件以来ですね」
 「その声のトーンはガチギレ中の葵ちゃんだね。」

ごめんね、態々ガチギレ中のタイミングで会いに来ちゃって♪」

セイカは葵の声色からガチギレ中と判断し、そのタイミングで会いに来た事を謝罪しつつハンドガンを仕舞い、イヴ達の方に目を向ける。

対するイヴは初めて会う人間だが、本能的に『表面でしか笑ってない』と察知しルナの後ろに隠れてしまう。

「貴女は…：H. C. F. のセイカ・キョウマチ…：さん…。」

何故貴女がこのエリアに？」

「いや〜ルナさん、私達H. C. F. はある選択を迫られていてね〜。」

それを葵ちゃんや貴女達に伝えるに来たんだよね〜」

対するルナは何度かセイカと出会った事がある為何故此処に居るかを問うと、セイカは葵達にH. C. F. の選択を迫られている事を知らせに来たと言いながらフレンドリーにルナにも話し掛けていた。

そしてそれを聞き葵は大方の予想が付いた為口を開いた。

「H. C. F. はコネクション、と言うよりダールトン一族に資金援助を続けるか否か、つて所ですか？」

「大正解。

次いでに此処で得たE型特異菌のサンプルと情報を持ち帰る事も任務でね。

で、葵ちゃん達にあっさり足を付けられた上にこんな回りくどい施設なんか作つての実験なんかは資金援助は金の無駄で判断を下したつてのを、ね」

セイカは葵に当てられた事をアツサリと話し、E型特異菌のサンプルとデータ回収、更にはダールトン一族への援助停止、足跡を辿らせない様にする目的を話し、それを聞いた葵は話すと言う事は大方の作業が終わつてしまつていと察知し、溜め息を吐いていた。

「……で、サンプルもデータも私達が侵入した混乱に乗じて全部回収したから私達をおちよくりに来たと?」

「おちよくるなんてとんでもない!」

ダールトン一族の成敗のお手伝いをするだけだよ葵ちゃん♪」

更に葵は正解ルートを歩き出しながらセイカの話聞けば、裏を見れば間違い無く自身等の痕跡消しをやる気であると察し、ならば画面と音声共有でせめて証拠を残してやろうと思う……が、セイカは次に悪魔の提案をして来る。

「あ、因みに、私達が居た証拠を公表しないなら、イヴちゃんの真の力を組織には黙つて置くつて交換条件もあるけど、如何する?」

「……成る程、セイカさん達は既にイヴちゃんの力を大体把握して、私達が貴女達を見逃せば『唯の失敗作だった』って話で済ませるって事ですか…裏を言えばイヴを狙い続ける事だ…出来る、そう言う訳ですか…」

通信と画面共有で全員がセイカの存在を把握する中、セイカはイヴの隠している真の力を話さない代わりにH・C・F. が今回ダールトン一族にも関わっていた事を隠す様に強かな交渉をし始める。

『成る程、イヴの現状を理解した上で話してる訳か…抜け目が無いな、京町セイカ』

現在イヴは保護対象に切り替わる途中であり、それが今後も狙われ続けるのは不毛だとセイカは遠回しに察する様にしており、葵や共有中のレオン達は抜け目が無いとして完全に先手を取られると理解し、『アルファ』が通信を全員に掛けて来る。

『此方『アルファ』だ、イヴに対する不確定要素を排除しない限り保護は出来ない。』

現場判断でセイカ・キョウマチの交渉の是非を決めよ』

『アルファ』は今後イヴを保護してもそれを欲しがらる者達が消えないと意味が無い。処断ルートしか無い為現場判断を下す様に命じつつ実際は交渉を呑む様に葵達に促していた。

それに気付いた葵は溜め息をしつつ答えを出した。

「…分かりましたよ、私達も任務をそのまま終わりたいので吞みますよ、その交渉」
「流石葵ちゃん達、話がわかる〜！」

じゃあダールトン一族に天誅を下しに行くわよ!!?」

この先が丁度決戦場だからね。

あー、此処までのルートのモールデッドを片付けた甲斐がありましたわ〜」

そして決戦場の目の前で交渉を呑むと葵が言うのとセイカは葵に抱きつきながらルートのモールデッドを全て片付けたと話す。

それを聞き葵は確かにモールデッドに出会わなかったと改めて思いつつ、A. B. F. 制式採用AKを構えルナを見つめる。

「ルナさん、イヴちゃん、この先グロ注意だよ」

「えっ!?」

葵はルナとイヴにグロ注意と話しながら決戦場に突入する。

すると其処には凄惨な光景が広がっていた。

磔にされた赤髪の男性が化粧の濃い小太りな女に剣で腕や足を斬られては薬液をかけられ再生させられると言う惨たらしい場面が目映ってしまう。

「うっ!!?」

ルナはそのショッキングな光景に吐きそうになるが、何とか持ち直して再び目を向け

それを見る。

磔にされているのは間違いなくカトル・ダールトンであり、それを血塗れで斬り付けていた女はミラ・ダールトンであった。

「あらあらお早いお着きだ事。」

しかもH・C・F.のセイカ様が何故そちら側に？」

「ふふふ、本当に自分達が有益なデータを取り扱つてると信じて疑わないお馬鹿さんがいるなんてね……組織からの指令だよ、貴方達の実験は回りくどい、援助停止つてね！」

ミラは血塗れで話し始め、セイカが何故葵達側に居るかを気にするが、セイカはこの場に居るH・C・F.代表として援助停止を告げながらP90を構えていた。

しかし、対するミラの反応はと言えば。

「あら、そうでしたか。」

なら良いですわ、新しい援助者を見つかるだけですから。

今はこのダールトン一族の栄華を愚弄した息子に『愛の躰』をしなければ、ば!!

？」

『ザシユツ!!?』

ブシユウウウツ!!?』

「ぐあああああつ!!?」

何と能天気になつた援助者を見つけ出すと言ひ放ちながら『愛の躰』と言ふ名の拷問を更に始め、此れにはセイカも想定外の返しだつたらしく口をあめぐりと開けてしまつてゐた。

「…愛の、躰ですつて…!!?」

「そう、これは愛ですよ!!?」

我が一族の悲願を理解しない愚かな子に対する躰、我が一族の悲願成就こそが最上の幸福だと知らせる為の教育なんですよ、おほほほ!!?」

『ザシユツザシユツ!!?』

葵は目の前の女、ミラ・ダールトンが躰と称した拷問を愛、教育と破綻した理論を正しい事であると言信しながらカトルの腕を刺し続け、痛みに耐えようとする彼を折る事に悦びすら見出していると葵達の目には映り、完全な狂人、一般の論理が通じない完全な化物だとマジマジと見せつけていた。

「琴葉紅と別ベクトルで狂つてる…論理が破綻し過ぎて訳分かんないわ…」

それらを見たセイカは自身も狂つてるがギリギリ踏みとどまれてる故に分かる紅と別ベクトルで振り切つた狂気の女、ミラに対し訳が分からないとすら言ひ切り救い様が無い存在だと思つてしまつていた。

「さあ、愛の躰の中にあるのですから早くお帰りなさい、カードキーなら差し上げますので」

「違う、そんなの愛じゃ」

「愛じゃないです!!?」

そしてカードキー2種を投げ付け、再び拷問を開始しようとしたミラに対し葵は愛じゃない…と叫ぼうとした瞬間、ルナがはつきりと愛では無いと叫んでいた。

それに反応したミラは眉を顰めながら振り返り葵達を見やる。

「ア、アオイさんが何が言いたいのか良く分かりました!!?」

貴女達は子供を一族の悲願、欲望を成す為の道具としか見てないんです!!?

そんな物は愛じゃない、それは痛みによる洗脳であり傲慢な理論を正当化して
るだけで間違ってる」

「黙りなさい小娘」

『ビュッ!!?』

ルナはミラのやっている事は愛の躰ではなく洗脳、更には子を道具としか見ていない
と言うミラの本質を突き間違った物だ…そう言い切ろうとした瞬間ミラは持っていた
剣をルナに向かって投げていた。

「…お母さん…!!?」

イヴは咄嗟に前に出ようとしたが明らかに間に合わずこのまま刺さる…そう誰もが、礫にされたカトルすら思った。

『ザシユツ!!?』

「うっ、ぐっ…!!?」

「ア、アオイさん!!?」

しかしそれに反応して庇った者が居た。

本来ならサイコネシスを使い防げる琴葉葵その人だった。

しかし葵は敢えてサイコネシスは使わずルナを庇い、剣を引き抜き遠くに投げ捨てていた。

「アオイさん、何で…!!?」

「良いから続き、話してよルナさん。」

私は此れ位平気だから」

ルナは葵の傷を心配するが、胸に突き刺さり引き抜かれた葵の身体からは夥しい出血をしていたが、直ぐに傷口が再生し始めルナに話を続けさせようとしていた。

親としての、愛についての話を。

「アオイさん……はい。」

ミラ・ダールトン、貴女は、貴女達は間違ってます!!?」

子供は自分の欲望を叶える道具じゃないんです、愛もそんな穢れた物なんかじゃないんです!!?」

葵の話聞いたルナは改めて話を続け、親と愛についての話を続け始めた。

セイカも親に愛された事が無い為興味津々でそれを聞き始めた。

「親とは子を育て、守り、そして正しく導く存在です！」

決して欲望を子供にぶつける権利を持った存在じゃないです!!?」

愛だつてそうです、親の愛もまた子供を守り育む心から生まれる、そんな曖昧ですがでもしつかりと形がある物なんです!!?」

だから言えます、貴女のそれは愛なんかじゃありません!!?」

ルナはイヴを庇い、抱きしめながら親や愛を語り、特に愛は曖昧であり表現が難しいが、確かな形としてある物と叫び今までの静かでやや引き気味なルナ・アークからは想像出来ないモノを見せ付けた。

「だ、だがアンタもイヴを道具としか見てない筈!!?」

お前はバれてないと思ってるけど私は知っておりますわ、イヴに対して私の様に都合の良い事を教えて」

「それは違います!!?」

イヴは今まで知らなかったんです、愛も、道徳も、良心も、何もかも!!?」

だから私は出来る限り教えたんです、この世の中の一般的にそう呼ばれている物を!!?」

私は決してイヴを貴女達のように道具とは思っていません、この子は……私の『子供』です!!?」

だからこそ、全力で『守ります』!!?」

対してミラは何処で知ったかルナが一般的な道徳や良心を教えた事を引き合いに出し都合の良い物を教えた同類と言おうとしたが、ルナは今まで見て来たイヴは組織コネクションの所為で何も知らなかった事を話し、そして可能な限り、自らの都合の良いモノとしてならない様に注意を払って教えた事を振り返る。

そしてイヴを自身の『子供』と叫びイヴを全面的に受け入れる言葉を叫んだ。

「そうだね、親の愛って曖昧だけどハッキリとした形で残って、それを見て子供は育つんだよ。」

対するミラ・ダールトン、貴女のは唯の押し付けだよ……そんなんで愛を語るなんて片腹痛いよ……!!?」

「えっ、うわ!!?」

『ズガアアアアン!!?』

そして葵はルナの言葉を藍が作った愛の形と同じモノを感じ肯定し、対するミラの物

は押し付けと断じ、遂にサイコキネシスを発動させてミラを壁にめり込ませ、次に磔になつたカトルを救い出し薬液をかけて傷を治していた

「す、すまない…助かったよ…」

「貴方の双子の妹さんの頼みですから」

カトルは自らを救つた葵や、その舞台の立役者になつたルナに感謝を述べていたが、葵は唯カトルの頼みとだけ言い再びミラの事を睨んでいた。

「お、おのれ小娘が!!?」

何なのだ今の力は、私達ダールトン一族以外にこれ程の異能の力を持つ者が」

「黙れ」

「あぐうっ!!?」

ミラは葵が此処までの能力を備えている事を想定外だとし、最大限の警戒心を以つて叫ぼうとした瞬間葵はサイコキネシスで口も腕も、心臓や脳、血管以外の動体の動きを封じ、更に透視能力で腹の中に特異菌コントロール装置を見抜き、サイコキネシス中は銃を使えない為セイカにそれを撃ち抜いて貰おうと算段を立てた。

「セイカさん、お腹のあの真ん中辺り、彼処を重点的に撃つて下さい。」

「それであの人は終わりです」

「えっ、そうなの?」

なら、えーい♪」

「……………!!?」

セイカは葵の指示通りにお腹の中心辺りをP90で重点的に撃ち抜き、ミラが悶える
と特異菌コントロール装置が破損した事を確認した葵はミラに対する生殺与奪権がイ
ヴの手に戻った事を確認するとサイコキネシスを解く。

「あがが、が、特異菌コントロール装置がああああ!!?」

「…えつ、アレって変異のコントロールも兼ねてたのルナさん?」

「えつと…はい。」

「ですから『特異菌コントロール装置』、なんです」

するとミラは突如として変異を開始し、葵はその装置が変異すらコントロールするの
かルナに聞くと、答えはYESが飛んできた為葵はサイコキネシスをフル活用して殺す
用意をしようと考えていた。

『ウガアアア、小娘共がああああ!!?』

そして変異が完了するとミラはムカデを思わせる姿に変異し、その俊敏さでセイカの
銃撃も避けつつ突撃して来た……が、葵にとつて通常視界から外れない限り指定サイコ
キネシスからは逃れられない為空中で静止する。

『あ、があああ!!?』

「アンタみたいな母親とも呼べない奴と戦つてる暇はないわ!!?」

このまま今まで此処で死んだ人の無念の分を受けて、惨たらしく潰れて!!?」

『ズンツ、ドンツ、ゴツ、ガンツ!!?』

葵は空中で静止させた変異ミラを上、下、横と縦横無尽に動かして壁や天井に叩き付けていた。

更にその影響でカビの足が挽げてしまい、ダメージが蓄積され変異ミラは何も喋る事が出来なくなる程に全身の損傷が激しくなり、カビの再生力が全く追いついていなかった。

『プシュツ、グチュツ、グジュグジュグジャ!!?』

そして変異ミラは力を発揮する前に葵のサイコキネシスによりミンチボールサイズまで圧縮、潰されてしまいそのまま石灰化。

それを葵はサイコキネシスで最後に壁にめり込ませ、セイカのパワーでも2度と抜けない様にしてしまう。

結果を見ればミラは葵の余計な怒りを買ったまま死に絶え、その姿に同情する者は居なかった、実の息子のカトルでさえも。

「……………『守る』……………」

だがイヴは先程のルナの守ると言う発言に今までに無い温かさを感じ取り、その言葉

を何度も何度も嘸み締めると、無表情であつた筈の表情に僅かな笑みが溢れていた。

イヴはその温かさと言葉を胸にしまい大事にしようと思ひながらルナに抱きついていた。

しかし、イヴの笑みに皆が気が付くのはまだ後少し先の話であつた。

EP VII 『B. Y. ルート：『人間』と『責任』』

葵達はゆつくりとした足取りでエレベーターに乗り、そしてレオン達の下にカトルとセイカを伴い戻って来る。

「カトリ!!?」

「兄様!!?」

双子の兄妹は施設からの幽閉から解放され、地獄の様な時間の中で漸く再会し一安心していた。

しかし、レオン達は一安心が出来ない事が起きていた。

それはセイカ、そして先程エイダが到着し事態は3年前の様な呉越同舟の様相を呈していた。

「ふふ、久し振りねレオン。」

更に男らしくなって良い雰囲気になったわね」

「エイダ……まさかH. C. F. もこの研究所に関わってたとはな」

「だっけどついさつき尻尾切りしましたのでもう関係ないですよ」

レオンとエイダは相変わらず大人の複雑な雰囲気を醸し出し、それを見たルナはイヴ

が見るのはまだ早いと思いの目を塞ぎ、そしてセイカが相変わらず茶々を入れてと言う正に3年前の同窓会の形になっていた。

「コホン!!？」

さて、この『正門』を開けるカードキーは残り3枚、更にこの先にもダールトン一族が居るだろうから奴等の抹殺を図りつつカードキーを集める。

カトル、残りのダールトン一族の人数は分かるか？」

「あ、はい。」

先ず父ルーツ、その双子の弟の『グラン・ダールトン』、更にその下の弟の『バルカン・ダールトン』、更に父の末弟で傭兵だった『アルバ・ダールトン』、そして監視役の三男シャル・ダールトンの5人です。

先程はイヴの力を使わずに母ミラを殺せましたが、シャル以外の4人が化物で、特に父や叔父のグランは何か秘密がある様です…」

するとB・Y・が場を取り持つとカトルに残りのダールトン一族を聞くと残りは5名、監視役を除けば4名になった事を知り後は茜、B・Y・、レオンの3人の内誰かが何処に向かうかを決めようとし、少し3人で集まり話し合い、その結果が直ぐに出た。

「よし、決まったぞ。」

レオンが暗闇『ゲーム』、俺が密室『ゲーム』、茜が『耐久』ゲームをする事に

なり、俺から行く事になった。

…皆、セイカやエイダが変な事をしない様に見張って欲しい」

「あらら、信用無いわね」

先ずB. Y. が密室『ゲーム』を攻略する事となり、マキ達にセイカとエイダを監視する様に伝えると休ませたルナとイヴを伴いエレベーター前まで来ていた。

「…そう言えばまだ言ってなかったな。」

最初に銃を向けた事は済まなかったな、イヴ」

「……ううん、私も…あの時は、撃たれる理由が、沢山あったから…気にしないで……」
するとB. Y. はエレベーターに乗る前にイヴにアルバート01を抜き撃とうとした事を謝罪し、代わりにイヴは理由は沢山あった為気にしない様にとB. Y. を気遣う様な素振りを見せ、何処まで行っても『人の心』を持つとB. Y. は改めて感じ取り、それらを見たルナは蟠りが無くなりホツとしていた様子を見せていた。

「……よし、エリアに着いたな、ミッションスタートだ」

B. Y. はアルバート02を引き抜き、エレベーターを抜けると周りにレーザー感知器が壁と床一面に敷き詰められた狭い部屋に辿り着く。

そして3人がエレベーターから出た直後にエレベーターロックがなされ、それと同時に赤いレーザー光が点灯し、奥の赤い丸ボタンの上の蛍光灯も点灯し、相変わらずな放

送が入る。

『貴様ら、我が妻ミラをよくも殺してくれたな!!?』

しかもエイダ殿にセイカ殿が何故そちらに居るのだ!!?』

我々コネクションをH・C・F・は裏切るのか!!?』

『ふふ、H・C・F・が手を切るのはそつちじゃなくて貴方達ダールトン一族よ。

何せ足が付いて此処に集まったのはCLOWN事件を解決に導いた英雄に、この施設は無駄な出費が多過ぎるわ。

だからH・C・F・は貴方達のE型菌サンプルとデータを回収してさよならさせて貰うわ』

するとB・Y・達をそつちのけでルーツはエイダと口論になるが、エイダは主に2つの理由を挙げてダールトン一族と手を切る事を宣言してしまう。

すると直ぐに放送機の向こうから銃声が響き、何かに向こうで起きたとB・Y・達は察した。

『いやあすまねえな、H・C・F・が手を切る事を聞いた途端にコネクションの連中が逃げようとしたから殺しちまったわ。

研究所の連中も毒ガスでポックリだぜ。

あ、俺シヤル・ダールトンな』

は怒りの余り放送機に向かってアルバート02を八つ当たりで撃とうとしてしまう。

「待つて下さいB・Y・さん、私も頑張りますから大丈夫ですよ!!？」

「ルナ：しかしコレは君では突破不可能だ。」

無茶じゃなくて無理なんだ、絶対何処かのレーザーに触れてしまう。

「そうなれば俺達は死に、奴等の思う壺だ」

するとルナはB・Y・に頑張ると言つて参加する気でいたが、レーザーの密集度からルナでは突破不可能だと素人に見せても分かるレベルでダメであった。

それ等の会話を聞きルーツは嘲笑い、そして放送を続けた。

『ふははははははは、ルナ女史も参加する気満々なのだからやらせれば良からう!!
?』

だがレーザーに1つでも触れたらその時点でゲームオーバーだがなあ!!？」

では心逝くまで——』

『待てえいルーツよ、そのルールに変更を物申す!!？」』

そしてルーツが嘲笑つたまま放送を切りゲームがスタートしようとした…その瞬間、その放送に別の放送が割り込みシャルとはまた別の男の声が響いた。

『アルバ、物申すとは一体何だ!!？」』

『そのレーザー探知は従来通りチャレンジャー、今回はB S A Aデルタチームの男の

みにやらせろ!!?」

その男、B・Y・には因縁がある!!?」

それに余計な物を挟むな!!?」

するとその割り込みを入れた男は如何やらアルバ・ダールトンであり、B・Y・に因縁があるとして従来通りにやらせる様に交渉を始め、ルートは自身の思惑が上手く行かない事に逆上し始める。

『何が因縁だ!!?』

ワシはもう妻と息子を失ったんだぞ!!?』

貴様の我儘は今回ばかりは——』

『ええいならば良い、此方の権限で全てのレーザー光をOFFにさせて貰うぞ!!?』

『な、アルバ——』

『プツン、プーン……』

ルートはラオにミラが殺された自業自得をアルバに押し付けゲームのルールの勝手な変更をしようとした瞬間、アルバ側が勝手にレーザー光をOFFにした上に放送器具を全てOFFにし、B・Y・に奥に来いと言わんばかりに赤い丸ボタンの電灯だけが強調されていた。

「あの、今のは?」

「内ゲバだろう。」

さ、奥に楽に進める様になったから行くぞ。

……それにしてもあのアルバ・ダールトンとかいう奴の声、何処かで……」

ルナは先程のやり取りが何だったのかとB・Y・に問うが、当の本人は唯の内ゲバとして気にせずボタンを押しドアを開け、更に奥に進み始めた。

しかしその中で、アルバ・ダールトンの声に何処か聞き覚えがあると思いつつ更に進み、そのまま何事も無く決戦場に辿り着いた。

「待っていたぞBSAAデルタチーム隊長、再び相見えるこの時を待っていたぞ!!?」

「……お前は、確か……半年前のパイオテロ現場でテロリストに雇われていた傭兵!!?」

すると決戦場の真ん中にその男、アルバ・ダールトンが仁王立ちで待ち構えていた。

それを見たB・Y・は半年前の戦場の記憶が呼び起こされ、其処でテロリストに傭兵として雇われた男を思い出し始めていた。

半年前の1月21日、アフリカの都市でバイオテロが発生し、BSAA西部アフリカ支部の要請により極東支部デルタチームが鎮圧作戦に参加し、其処でB. Y. はB. O. W. を始末し敵の中枢部に襲撃を仕掛けていた。

「BSAAデルタチームだ、今直ぐ投降しろ!!？」

「ひっ、も、もう来やがった!!？」

先生、何とかしてくれー!!？」

B. Y. は中枢部になった銀行のロビーに突入し、テロリストを発見して投降する様に警告すると、テロリストは先生と呼ぶ傭兵を呼び出し、逃げ出してしまふ。

「チツ、奴を逃がす訳には行かないが……名の知らない傭兵さんは行かせてくれそうに無いな」

「当然だ、此れも依頼、金の為だBSAA。」

此処を通りたければワシを倒してからにするのだな」

B. Y. は今直ぐにテロリストを追いたかったが、傭兵が依頼だからとアサルトライフルを構えて互いに全く動けない拮抗状態となり、両者はじつと隙を伺っていた。

『ドオオオン!!?』

『ズダダダダダダダダッ!!X2』

そうして短い時間静止していた瞬間外で爆発が起き、B・Y・と傭兵は互いに物陰に潜り込みアサルトライフルを乱射し始める。

「チィ、罅が明かない!!?」

しかし木のテーブルに隠れたB・Y・は少しずつ弾丸の穴が開くテーブルから離れ始め、傭兵が隠れた柱と別の射線が切れている柱に隠れりロードする。

「…よし!!?」

するとB・Y・はアサルトライフルを構えて柱から飛び出し、傭兵も同じ事を思ったのか互いに円を描きながら銃を放ちながら避け、そして先ずB・Y・が傭兵のアサルトライフルを弾き飛ばすと傭兵もB・Y・のアサルトライフルを弾く。

「シツ!!?」

「フツ!!?」

そして互いにハンドガンを構えようとしてそれすら弾かれると、互いにCQCに移り己の拳と足で相手を振じ伏せようとする。

最初は互いに拮抗し中々攻撃が当たらなかつたが、B・Y・は此れまで培った経験や血反吐を吐く訓練の成果を發揮する事で状況は一変する。

「ぬっ、ぐおっ!!?」

本来なら年季の違いにより傭兵はB. Y. に勝つ事もあり得ただろう。

しかし此処に居るはCLOWN事件を機にウィルス完全適応者と戦う為に血反吐を吐きながら鍛錬をした人間。

人間相手に戦う唯の傭兵とはその土壌が違う為に鎮圧され始め、最後は拳を顔面にク
リーンヒット寸前まで追い込まれる。

『此方デルタ2、テロリストを確保!!?』

任務完了を全隊員に伝えるわ!!?』

そしてその拳がマキの声を以って傭兵の鼻先で止まり、勝敗が何方でも決した事を
B. Y. は理解し、ハンドガンを拾いながら傭兵に銃を構え彼もついでに確保しようと
考えていた。

「貴様、名前は何と言う?」

「BSAAデルタチーム隊長、デルターのB. Y. だ」

「そうかB. Y. か…その名前、しかと覚えたぞ!!?」

『キーン!!?』

すると傭兵はB. Y. の名を問いただと、それを律儀に答えた瞬間閃光手榴弾で
B. Y. の目と耳が眩まされ、一瞬の油断から傭兵を逃してしまう。

「…ち、武器まで拾って行ったか。

あの傭兵……また何時か出逢いそうだな……」

B・Y・は傭兵の引く際の手の良さに感心し、先の名を知らない傭兵はまた何時か戦場で出逢う予感がし、その際こそは逮捕する事を視野に入れて置くのだった。

それが半年前の戦いの記憶であり、現在B・Y・は再び傭兵、アルバ・ダールトンとテロリストとBSAAの対立構図で再び相見えていた。

しかも相手は特異菌感染者という形、である。

「まさか半年前の傭兵が完全なテロリストで、特異菌感染者になるとはな」
「此れも全ては貴様に勝つ為よ。」

あの日以来、あの敗北から酒も不味くなった物よ……故に、勝利の美酒を手にする為、貴様と戦わせて貰う!!?

あの日と同じ格闘戦でだ!!?」

アルバ・ダールトンは如何やらB・Y・に勝つ事に執着し、半年前に負けた格闘戦で

今度こそ勝つと叫び構えを取る。

するとB. Y. はマスクを敢えて外し、そして武器を捨て同じく格闘戦……但し今度は葵達から習ったA. B. F. 式格闘戦技の構えをし、アルバの要求に応えていた。

「あ、あの、B. Y. さん」

「奴がこれでケリをつけるって言ってるんだ。

なら俺は、それに対して責任を取らなきゃならないのさ。

半年前奴に勝ってしまった俺が、な」

そんなB. Y. にルナは心配するが、B. Y. は半年前のバイオテロ事件での出来事が尾を引いてる為自身でケリをつける気であり、2人を後ろに下げて戦闘態勢に入る。

ジリジリと距離を詰め、互いの拳が届く距離まで接近する。

「フツ!!?!」

「シツ!!?!」

そしてアルバのパンチを皮切りに戦闘が始まる。

そのパンチをB. Y. が紙一重で躲すとアルバの首や心臓、腹や耳側の頭等をB.

Y. は素早く叩き込む。

が、途中でアルバは上がった耐久力に任せて拳を受け止め、代わりにB. Y. の顔面に強烈なパンチを浴びせる。

「如何だ、此れが、貴様に敗北してから直ぐに得た、E型特異菌の力だ!!?」

アルバはB・Y・によって味わった敗北に対する怒り、或いは屈辱を全て浴びせる様に連続パンチに加え頭突き、そしてキックを浴びせて彼の体を宙に浮かせる。

そのキックを最後に浴びたB・Y・は頭から落ちるのを避けて左肩から床に落ち、其処で身体が1回転した際に右手を床に付けて受け身を取った。

「B・Y・さん!!?」

「大丈夫だ、問題無い:ペッ」

今回はガラス張りで互いが寸断されていないルナとイヴは明確にダメージを受けたB・Y・に駆け寄ろうとしたが、それを彼は静止し、血を含んだ唾を吐きながら左肩から落ちた際に外れた肩の関節を無理矢理押し込み。左手を握りしめて関節が入った事を示した。

「如何だ、貴様に敗北して以来貴様との戦いのみを想定して費やした感染後も鍛えたワシの力は!!?」

だがまだまだ敗北の味を貴様に思い知らせ切つたらん、簡単に死ぬなよ小僧!!
?」

するとアルバは首を鳴らしてB・Y・に更に現在の力の差を思い知らせるべく姿勢を立て直した彼に接近し、更にパンチを浴びせようとしたが代わりにカウンターアツ

パーを受け少しよろけるが、直ぐに片手を掴み合った取っ組み合いになり相手を振じ伏せようと2人は力を加え始めた。

「成る程、俺だけがターゲツトか。

なら良かったよ」

「良かった？」

何がだ!!?」

「俺以外がお前に狙われなかったから良かったんだよ…!!?」

するとB. Y. はアルバが自身のみをターゲツトに選んだ事を良かったと呼称し、更に理由も自身のみしかアルバに狙われていなかったと叫ぶと不意に足払いをしてアルバを転ばせようとしたと思いきや彼の首根っこを掴むとそのまま背負い投げをし、アルバを先程のお返しに首から投げ落とす。

「ぐ、貴様あ!!?」

「それにな、如何にも俺の所為でアンタは人間の道を踏み外したっぽい訳だからな!

負ける訳には行かぬえよ、アンタに『人間』を辞めさせちまった責任として

な!!?」

そしてB. Y. はアルバ・ダールトンが『人間を辞めてしまった』責任は自身にあるとして、投げ飛ばしたアルバが態勢を立て直さない内に顔面に膝蹴りを喰らわせ、馬乗

りになり何度も顔面パンチを行いダメージを蓄積させる。

「ぐ、ぐお!!？」

「人間を辞めるべきじゃなかった、何て俺がアンタに言う資格は無い!!？」

だが今後ダールトン一族が起すであろうバイオテロにアンタが関わろうつて言うなら、俺は今この場で、アンタの命を奪つてでも、それを止めてやる!!？」

B・Yはアルバが人間を捨てた事に関しては何も言えないが、バイオテロに加担するなら命を奪う事をしてでも止めると言い放ち、半年前に『人間同士』のままに戦い、勝つて今がある者の責任を果たそうと顔面パンチの勢いを強め、最後に痛烈な一撃を叩き込む。

「ぐ、ぐおあ!!？」

その一撃を受け後頭部を床に叩きつけられたアルバの頭から血が口や後頭部から飛び散りその一撃の重さを思い知らせる。

そしてB・Yはそれを浴びせた後少し離れ直ぐ様首に向かって踵落としを叩き込み首の骨を折る。

「ぐ、何故だ、何故特異菌の力を得て、更に貴様に対する特化した戦闘訓練を行ったワシが何故貴様に劣勢になる!!？」

「…自分で考えろ!!？」

アルバはこの4分間の格闘戦で初めは自分が有利だった筈なのに何時の間にかB. Y. が有利になってしまっている現状に困惑し、それをB. Y. に問うが返ってきた返答は自身で考えろと言う問い掛けの否定であった。

「この、若輩者の小僧が!!?」

「はあ!!?」

アルバはB. Y. を若輩者と呼び今度は戦いに対する年季の差を見せようとしたが、B. Y. はそれすら上回り明らかに年齢と合わない戦闘能力を發揮していた。

何故そうなるかは明白である。

B. Y. は蘭祥ランシヤンの地獄をマキ達と生き延び、そしてCLOWN事件も生き延び、其処からデルタチーム隊長として先頭に立つ者の意地としてマキ並に鍛錬を重ねたのだ。

「せいやあ!!?」

「うっ、ぐおあ!!?」

その結果、鍛錬後に1回だけ極東支部を訪れたクリスとその際に戦闘訓練をし、其処で紙一重の際で負けたが彼に比類する実力を得た事を彼等に見せたのだ。

よってバイオテロを鎮圧する者としてB. Y. はマキと共に真に極東支部が有する最強の戦力となりB. O. W. を葬り去って来たのだ。

それが顕著に表れ、パンチやキックを一方的に浴びせ始めたのだ。

「これで如何だ、アルバ・ダールトン!!？」

「ぐおおお!!？」

その為特異菌の力を得て更にB・Y・にのみ狙いを絞り訓練を重ねたアルバすらも、今なお同じ鍛錬を重ねるB・Y・と実力に少々、ほんの少しのみだが差があり攻撃を浴びせられている。

そしてバイオテロに関わった年季がそもそもアルバはあのテロリスト護衛が3回目だった為其方の年季の差はB・Y・やマキが大きく上回るのだ。

「はっ、ふっ、せい!!？」

「ガフツ!!？」

結果、例え相手がE型特異菌の力を得ていたとしてもB・Y・はそれに負けぬ実力を持ってしまったているのだ。

そして更にその拳を、脚を連続で叩き込みダメージを与えて行く。

その為、途中から床に膝をつけるのはB・Y・では無くアルバとなり格闘戦開始12分経過でE型特異菌感染者の鎮圧に天秤が傾き始めていた。

「凄い……これが、マキさんの隊長さんの力……!!？」

それをアルバは此方を狙う気が全く無いが、それでも念の為イヴを庇っていたルナは此れがB S A A極東支部デルタチーム隊長の実力だと肌で感じ、マキと同等かそれ以上

だと思いつながらその戦いを途中から黙って見守っていた。

「はあ!!??」

「ぐ、ぐお……!!??」

そうして格闘戦開始から15分、B. Y. は回し蹴りをアルバの首に叩き込み、彼の首の骨を折りながら錐揉み回転させながら床に叩き伏せて更に追撃の心臓部への踵落としを決めて勝敗をほぼ決しさせた。

此れも全ては蘭祥ランシヤンから始まったバイオテロを憎む彼の血反吐を吐く鍛錬とバイオテロ鎮圧の功績が生み出した結果であつた。

「ガフツ、人間を辞めても……未だ勝てないとは……貴様はどれ程の高みに上り詰めたのだ……!」

「……俺なんかまだだよ。」

俺より強い奴は未だ沢山居るし、何ならその内の1人がアメリカ大統領直轄エージェントとして一緒に来ているさ」

アルバは首の骨が再生したが吐血し、E型特異菌の力を得てなお勝てないB. Y. の強さに驚愕する。

対するB. Y. 本人は脳裏にクリスやジェイク、『アルファ』にカルロス達、更には才能の差で3年の間に遂に抜かれてしまった元民間人だった葵にその姉の茜を思い浮か

べ、そしてその中で2トップに入るレオンが共に来ていると口にし、彼に自分に勝てない様では更に上に居る者に勝てない事を悟らせた。

「…そうか、貴様よりも強き者が未だ居るのか……ははは、世界は広く、そしてワシは井の中の蛙とやらだったのか……おい小僧、いやB・Y、銃を取れ」

アルバは自身は井の中の蛙であった事を知り、何処か満足気に笑いを溢すとB・Y、銃を取らせる様に要求した。

それを聞きB・Yは外したマスクを着用し、更にその場に捨てた銃を全て取り、その中でアルバート02を装備してアルバに歩み寄った。

『こらバカ隊長、何戦闘開始直前にマスク外してんのよ!!?』

此処は特異菌が其処ら中に漂う研究者なんだよ、感染したら如何する気だったのさ!!?』

するとマスクのバイタル表示から自身の特異菌感染はギリギリ無かった事を理解したB・Y、だったが、其処にマキの怒声が響き渡り耳を押さえたかったがマスクの関係で出来ない為アルバを見遣り気を逸らしていた。

『そうよB・Y、貴方はマキ同様に唯の人間なのよ!!?』

私達ウイルス完全適応者と違って感染リスクが高過ぎるのよ!!?』

軽率な行動は控えなさい、貴方を心配する者は此処に沢山居るのよ!!?』

更にヨナもマキに便乗してB. Y. に怒り、当のB. Y. は2人以外に葵や茜も怒つてゐる姿が想像出来た為画面共有でアルバ・ダールトンを地に伏せさせた事を見せながら少しだけ口を開いた。

「…ちよつとした半年前の責任果たしと男同士の戦いだつたんだ、見逃して欲しい。

それでアルバ・ダールトン、俺に銃を取らせて何をさせる？」

「簡単だ、ワシの心臓部付近にある特異菌コントロール装置を破壊しろ。」

そしてイヴにワシが変異する前に『人間』のまま死なせる様にしてくれ」

マキ達の怒声に少しだけ答えたB. Y. はアルバの口から特異菌コントロール装置を破壊する様に聞き、更にイヴに『人間』のまま死なせる様に頼み込んで来る。

此れには音声共有等で聞いていたマキや葵達もまさかテロリストが潔く自死を求め事に驚いていた。

「ダメだ、イヴに『人間』は殺させない。

代わりに俺が変異仕切る前に完全に殺し切つてやる、だからそれで妥協しろ」

するとB. Y. はイヴを氣遣つての事か、『人間』としてのアルバ・ダールトンを殺さず、代わりに自身が変異し切る前に殺すと宣告してアルバを驚かせ、先ずアルバパート1を片手で構えて頭に狙いを定めていた。

「…はっ、イヴを氣遣つてか。」

優しいな、必要以上に……なら、しっかりと殺し切れよ？

さもなければ貴様を更に付け狙うぞ」

「なら安心しろ、必ず殺し切るからな。」

そして『人間』のアンタの命を背負ってやる。

それがアンタの道を踏み外させ、人殺しをする俺が負うべき『責任』だ」

『ズダアアantz、ズダアアantz、ズダアアantz!!?』

アルバはB・Y・を優しいと評し、そして妥協案を殺し切る事を前提で飲み、更に殺し切れなければ付け狙うと宣言しながら笑みを浮かべる。

そうしてB・Y・は殺し切ると発言してからラムロッド弾を頭に2発、更に心臓に1発撃ち込むと今度はアルバート02を頭や全身に連射し、リロードも手早く行いながら再生や変異を始める前に過剰ダメージを与え、そしてアルバート02のマガジンを4個撃ち切った所でアルバの肉体は石灰化し、『人間』のまま絶命する。

「……絶命確認。」

きりたん、カードキーをハッキングで出してくれ」

『了解です』

そして絶命を確認したB・Y・は本来の決戦場の設備作動が成されなかった為もしかしたらカードキーが出ないと判断し、きりたんにハッキングでカードキーを出させる

とそれを手に取りながらルナ達の護衛をしながら部屋を出ようとした。

「あの、アルバ・ダールトンの要求を蹴ったのはやっぱりイヴを気遣って、なんですよ？」

するとルナは先程のやり取りをイヴを気遣って妥協案を出した事を敢えて確認し、それを聞いたB. Y. は周りにモールデッドが居ないか確認しながらエレベーターまで一直線に向かいつつ口を開いた。

「年端も行かない娘さんに人殺しをもうさせたくないだろ。」

それにイヴも『人間』は殺したくなかっただろう？」

「……やっぱりそうだったんですね。」

私、第一印象で貴方は凄く非情な人と思ってきましたけど……違いましたね」

B. Y. はルナが娘が人を殺す場面を見る事や、イヴ自身に人を殺す事をしたくなかったと気遣う発言をし、2人は胸中でそれを肯定し、そのルナはB. Y. が初めイヴを問答無用で撃とうとした第一印象を改め、本当は優しい人物でただB. O. W. やバイオテロを憎むだけだったと思う事にした。

「……」

そしてルナに引き連れられたイヴはB. Y. を元から『強い良い人』だと思っていたが、其処に優しく『責任感』が強いと言う事を追加し、無表情ながらも自分に『人間』の

まま死ぬ気だったアルバを殺させず、そして母にも気遣った事に『ありがとう』と心で思いながら後ろを着いて行き、そうしてロックを解除したエレベーターに乗り皆の下に3人は戻るのであった。

EP VII 『茜ルート：怪物と『守る』事』

B・Y・は皆の前に戻った後マキとヨナ、葵に説教され正座させられていた。

だが必要なカードキーが残り2枚、ダールトン一族も残りは4人になった為茜は静かに深呼吸をし、ルナ達の前に来る。

「んじゃルナさん、イヴっち、休憩は終わつといて一緒に耐久『ゲーム』とやらを攻略してやろな」

「あ、はい茜さん」

「……うん」

茜は早速ルナとイヴに声を掛けてエレベーターに乗り込み『ゲーム』攻略に向かい始めようとする。

その中で茜は『耐久』ゲームはモールドッドから自身達の身を守りながら戦うと考え、銃の弾丸が足りなくなったら拳で戦うことも視野に入れていた。

「あ、待った茜。

受け取れ！」

「何B・Y・さんつと！」

此れアルバート02とマガジンにラムロット弾……」

するとB・Y・は補給したアルバート02本体にマガジン、更にラムロット弾の入ったマガジンを耐久戦に向けた茜の懸念要素を察して渡し、再び正座に戻った。

「成る程、耐久戦ならマガジンが幾らあっても良いって訳ね……ならアカネ、私のマガジンや手榴弾も受け取りなさい！」

「じゃあお姉ちゃん、私も！」

私の迷路では弾を一切使わなかったから有り余ってるよ！」

「じゃあ私も！」

「ヨナさんにマキさん、葵も……あんがとな、皆の物、しっかり使わせて貰うで！」

B・Y・の行動を見たヨナ、葵、更にマキも茜と同じ武器を使ってる為A・B・F・のAKにハンドガンマガジン、アルバート01のラムロット弾に手榴弾をありつたけ茜に渡してさせ準備万端にさせる。

それに対して茜は4人に礼を言い、エレベーターに乗ろうとした。

「おっと、じゃあ私も行かせて貰おうかな茜ちゃん？」

私も葵ちゃんの『ゲーム』でモールドッドを少ししか相手してないから消化不良なんだよね♪」

「セイカさん、ルールは……いや、さっきの『俺達がルール』をやらかした連中のを律

儀に守る必要性はもう無いからアリやな。

んじゃ行くで」

するとセイカも耐久『ゲーム』に参加すると言い始め、それを聞いた茜はルート達が先程の密室『ゲーム』でルナを無理矢理参加させようとさせた事を思い返し、最早向こうも形振り構わないならルールに上品に従う意味もないと感じ、セイカを伴いエレベーターに乗り込んだ。

「あのアカネさん、セイカさんは…」

「ルナさん心配せんで良いで。」

このセイカさん、素性は真つ黒で信頼は出来へんけど腕は信用出来るから。

それに協力するって言ったら律儀に守るタイプやし今の所は平気やで」

そのエレベーター内でルナはイヴを庇いながらセイカの事に一言言おうとしたが、茜は3年前の彼女達の行動から取り敢えず協力や手伝うと言う言葉を使うと此方が利敵行為をやらなければ律儀に協力する事を理解してる為、心配は要らないと話しつつこの先の『ゲーム』に対する警戒心を強める。

「…着いたで！」

ほな、行くで!!?」

そしてエレベーターが着いた先で茜、セイカは真つ先に降りてそれぞれA、B、F、

制式採用AK〔サジタリウス〕とP90を構え外に出る。

すると其処は床、壁一面カビだらけの決戦場であり、モールドレッドが其処ら中から現れる土壌が出来上がってる為茜は確かに『耐久戦』だと理解する。

『貴様ら、ルールを無視して2人で来たな!!?』

それ相応のルール違反は覚悟出来ているんだらうな!!?』

「あんさんらが勝手にルール変更しようとしたからもうこつちもルールに従わんってなつたんやで。」

墓穴掘り過ぎや、没落貴族のテロリスト」

するとルーツの怒声がいきなり飛んでくるが、茜はB・Yの密室『ゲーム』を勝手にルナが参加する様に変更しようとした一例を挙げ最早ルールに従う気は無い事を示しながらルナ達をエレベーターの前に立たせながら周りを警戒する。

するとエレベーターロックが掛かり、黒い液体が滴り落ち、モールドレッド出現の兆候が表れる。

「おつ、モールドレッドが来ますねこれは」

「せやな」

セイカは獲物が来ると思い周りを見るとWM-002や両腕が剣状になりツノの様な突起が幾つも頭に生えたダブルブレードタイプ、更にWM-001が生み出す対象に

張り付き自爆する小型モールドレッド『WM-001a』を含むWM-001以外の凡ゆるモールドレッドが現れる。

『ええいもう良い、此処ではそのモールドレッド達を10分間倒し続け無ければならぬい!!?』

だが本来は出さないWM-002やダブルブレードタイプすら追加した!!?。

自分達がルールに従わなかった愚かさを悔やみながら死ぬ!!?』

そしてルールはルール説明をしたが、如何やら強化タイプは本来は出さない予定だと告げたが、既にB・Yの時の例がある為信用0の為それらの発言を無視してタイマーを10分に設定して早速戦闘を開始する。

「先ず小型が鬱陶しいから先に此れや!!?。」

その中で茜はWM-001aが邪魔な為開幕いきなり手榴弾で小型の集団をダブルブレードタイプも巻き込んで吹き飛ばす。

そしてアルバート01のラムロッド弾でWM-002を今出現した分を倒し切るとサジタリウスを使いその7.62×39mm弾でモールドレッド達の頭を正確に撃ちスイカのように吹き飛ばして行く。

「ははっ、耐久戦だから沢山敵が出ると思ったから来て良かったわ!!?。」

今までのつまらない任務の鬱憤晴らしが出来るわ!!?。」

次にセイカは茜のサジタリウスの射線に入りつつ超速の反応でそれを避け、モールデッドの反応を遅らせるアシストをしながらP90を茜と同じく正確に頭に当てて手早く始末しつつ、近付いたモールデッドはウィルス完全適応者のパワーのパンチやキックで壁まで吹き飛ばし潰れた蛙の様な状態にして始末する。

「イヴ、私の前から出ちゃダメよ!」

その中でエレベーターを背にしたルナはイヴを庇いながら2人の滅茶苦茶な戦い振りを見つめつつ、イヴが万が一戦いに巻き込まれない様に今まで白衣の懷に隠していた護身用ハンドガンを構えていた。

「……………危ない……………!!?」

するとイヴはE型特異菌の意識ネットワークからルナの目の前にブレードタイプのモールデッドが現れる事を察知し、そのモールデッドの行動をE型被験体の力で動きを止めた後、手にカビを纏いそれを槌状にしてブレードタイプの頭を力強く叩き粉砕する。

「っ、イヴ!!?」

その守られたルナもイヴの目の前にノーマルモールデッドが現れた為、3点バーストを頭に正確に当てて頭を粉碎し、イヴを守る。

イヴはそれを見てモールデッドは操れるから必要無い……とは言えず、少し心がぼか

ほかした物を感じていた。

「チツ、やつぱ此れもルナさんも参加を強いるタイプやん!!?」

あのゲームマスター気取りのテロリストが、目に物見せたるで!!?」

オメガ1の全リミッターを現時点で解放、ルナさん達の警護に回る!!?」

その光景を見た茜はこの耐久戦もルナ参加を強いるタイプだと察し、全リミッターを解放してモールデッドをセイカのようにパンチで吹き飛ばし2人の目の前まで下がり始めた。

そして前衛のセイカ、後衛の茜の形が出来上がりルナ達の近くのモールデッドは茜がアルバート02等も使い早急に倒して行く。

『ええい、もっいいい加減死なんか貴様ら!!?』

もう死ぬ、今直ぐに死ぬ!!?』

そうして耐久からルナ、イヴ防衛戦に切り替えてから2分経過した茜達に逆上したルーツは遂にWM-001まで複数投入し、いよいよ以て形振り構わない事を本格的に示していた。

「ウザいわこのカビカビの塊!!?」

それに対して茜はラムロット弾を現れたWM-001計5体に1発ずつ与えて怯ませ、普通の人間には不可能な右腕にサジタリウス、左腕にアルバート02を持ち反動を

無視して正確に撃ち込み超高速移動による格闘戦を交えながらWM-001を2体撃破し、それぞれの銃をリロードしつつ迂闊に近付いたり近場に現れたモールデッドを蹴り上げて行く。

「ほーら太つちよのモールデッドさんサッカーしようよ、貴方ボール、ね!!?」

そらシュートオ!!?」

更にセイカが茜の手により再生力を失ったWM-001をサッカーボールの様にリフティングし、爆発寸前に強烈な蹴りを浴びせて他のWM-001を怯ませ、それを計3回繰り返してWM-001の集団5体がアツサリと倒され、更にそれが『ゲーム』開始から3分半経過しての出来事だった。

「チツ、まだ3分半しか経ってへんの!」

いい加減見飽きたわこのカビカビのバケモン!!?」

せいや!!?」

『ドオオオンツ!!?』

茜はA・B・F・制式採用ハンドガン【デュランダル】でキックが届かない微妙な位置のモールデッドの頭を1撃で粉碎しつつ再び手榴弾を使用し、WM-001αを含めた複数のモールデッドをセイカの安全を無視して吹き飛ばす。

そのセイカは壁を蹴り登り爆風を避けて1体のブレードタイプに狙いを絞り踏み付

ける様に蹴っていた。

「全くもう茜ちゃんったら、私が巻き込まれてたらどうするの、かな!」

「あんさんがあんなんチャチいモンに巻き込まれる訳ないやろ!!?」

「息が合わない様で噛み合ってる…不思議な関係なんですね、お2人は」

その後もセイカはP90を使いつつクイックタイプやファットタイプをサッカーボールにし、茜は各種武器を上手く使い分けながらモールデッドを捌いて行き、ルナは2人が絶妙に噛み合ってることを不思議がっていた。

そして遂には9分まで耐え切り、モールデッドが今までに無い程の数で一斉に湧き、部屋にカビの塊が犇き合っていた。

「もう邪魔やで、さっさと消えなカビカビ軍団!!?」

此れを見た茜は手持ちの手榴弾をルナ達を巻き込まない様に投げ付け、大半のモールデッドを吹き飛ばすと残ったWMシリーズをアルバート01で再生阻害させ、そして残りをサジタリウスにアルバート02の両手持ちで爆散させる。

「はい、此れでラスト!」

そして最後にセイカがWM-001を再びサッカーボールにし、茜にパスし合いながら2人でシュートを喰らわせ、壁に叩き付け爆散させる。

更にセイカが蹴り上げて爆散させて来た壁にはモールデッドの死骸の液体で出来た

ゴールポストが作られており、2人はその真ん中でWM-001を爆散させたのだ。
「……ゴール……」

『ばちばちばち』

「ふう、サンキューやでイヴっち」

それを見ていたイヴは無表情だがゆっくりと拍手して2人の奮闘を称えていた。

そしてタイムマーはジャスト10分を記録し、モールドッドの出現兆候たる滴り落ちる黒い液体は無くなり、代わりに放送が入り始めた。

『ば、バカな……この耐久戦で失ったモールドッドが500を超えた、だと!!?』

僅か10分間で此方が保有していたモールドッドやWMシリーズのほぼ全戦力が、全て全滅しただと!!?

ば、化物か……!!?』

「それめっちゃブーメランやで、没落貴族のテロリストさん？」

如何やら今の耐久戦でルーツは有していたモールドッドのほぼ全てを茜達にぶつけ、それら全てを全滅させられ茜とセイカを、否、侵入者全てを化物認定し恐れ慄いていた。しかしルーツは、ダールトン一族は気付くのが遅かった。

その侵入者が精鋭中の精鋭であった事に、味方と思つてた者達は唯の監視役だった事を。

『ゴウンツ！』

そして決戦場の足場が降りて行き、そうして降り切った先にはアルバよりも老けた、紅黒いスーツを着た男が壁に擦り寄りながら茜達が来るのを待ち構えていた…と言うより完全に怯え切っていた。

「う、うおあ！！？」

き、貴様達が……！！？」

「あらら、私達を見て完全に怯えちゃってるわね〜『バルカン・ダールトン』さんは、ふふ、自分達以上の怪物が居る事を知らずにイキって滑稽過ぎだわあ」

その男、バルカン・ダールトンは茜とセイカを見て化物がやって来たと怯え切り、茜は無言で呆れ切りセイカは嘲笑っていた。

彼等が井の中の蛙過ぎた事を、上には上が居た事を知らなかった事を。

自身達以上の怪物が存在していた事を知ろうともしなかつた無知を。

「ク、クソ、死ねよやああああああ！！？」

『ズダンツズダンツズダンツ！！？』

「……コイツ……！！？」

そしてヤケクソになったバルカンは懐からリボルバーマグナムを取り出し、『ルナを狙って』弾丸を放つと、プツンとキレた茜が先ず肉壁になり、イヴが両手を盾にして茜

の身体で勢いが弱まった弾丸を弾く。

「はあ、結局そんな手しか使わへんのか：イヴっち、其処から盾を展開したまま頼むから動かへんでな」

そして茜はイヴにルナを守る様に指示を出すとアルバート01を手に添えながらゆつくりとバルカンに近付いて行き、それを見たバルカンは更に怯えてスピードロウダーでリロードして何度も何度も茜の心臓や頭をマグナムで撃ち抜く。

「あーダメダメ、そんなんじや茜ちゃんは殺せないよ」。

「まあ私もだけどね〜♪」

だが、茜は現存するT―Gene sis 完全適応者としての肉体耐久度は3人の中で一番高い為例え脳をアンチマテリアルライフルの弾丸で損傷を受けようとも再生し、更には例としてロケットランチャーが左肩に直撃し、その部位周辺が吹き飛ばうとも僅かな時間で再生する。

完全に殺し切るなら頭に過剰ダメージを与えつつ完全に吹き飛ばす以外に存在せず、またこの世の武器でそれが可能なのはレールガンやリニアランチャー等の規格外兵器のみだった。

そしてセイカも茜と同等の能力を有している。

「如何したんや、未だウチはピンピンしとるで」

そんな規格外の化物がこの場には2人も存在し、更にその肉体を貫通してルナの方に飛ぶ弾丸はイヴが守る為に盾で弾いている為、バルカン・ダールトンは完全に『詰み』の状態になってしまっていた。

そして最後のスピードローダーでリロードし、残りの6発を撃ち切ったが茜の黒い迷彩服に穴が少し開き、血が飛び散っているだけで本人は全くダメージを蓄積されず、そしてアルバート01をバルカンの頭に突き付けた。

「ひっ、たのむ助け」

「る訳ないやろこの卑怯者！」

『ズダアアンツ!!?』

バルカンは自分よりも遥かに若い茜に助けを乞うが、茜は初めにルナを狙った為元から助ける気も話を聞く気も0なガチギレを起こしており、そのまま脳天にラムロッド弾を浴びせて脳漿を飛び散らせる。

「ク、クソ、小娘共が…絶対に生かさないうぞ…!!?」

そしてバルカンはラムロッド弾の再生阻害により変異が最高潮に達してしまい、身体が黒い液体と化した後カビの繭を形成し始め、茜は少しだけ下がりこの卑怯者に鉄槌を下すと決めていた。

『ガシャン!』

そして今頃になってイヴとルナをガラス張りで隔離され、しかしイヴはラオの件がある為か盾の展開を止めずにルナの前に立っていた。

「せやで、偉いなイヴっちは。」

「そうやって『お母さんを守る』んやで」

それを見た茜は油断せずルナを守るイヴにサムズアップし、しつかりと『守る』様に言い付けると、イヴは盾を少し傾けてから頷き、再び防御姿勢になる。

そうしている内にカビの繭は破け、中から変異して巨体になり、生物として何と呼称すれば良いか分からない、強いて言えばタイラントに近いバルカン変異体が現れた。

「それがあんさんの変異した姿っちゆう訳やな。」

「んじゃ御託は良いからさっさと掛かって来るんやな卑怯者」

『小娘があああああ!!?』

巨体になり、態度も大きくなったバルカンは右腕を伸ばし茜を掴み、そのまま引き寄せて身体を握り潰そうとしていた。

「ア、アカネさん!!?」

ルナは今にも潰されそうに見えた茜の身を案じ叫ぶ。

だがそれを静かに見ていたセイカはやれやれと何やら呆れた態度を取り全く茜の心配をしていなかった。

「…そんだけなんか卑怯者？」

「んじゃ次はウチの番やで」

『ブチイ!!?』

『んなつ!!?』

そしてその茜は両腕を広げる力のみでバルカンの巨腕を引き千切り、その腕の中からアルバートシリーズを構えた茜がその両手の得物を弱点らしき部分が見当たらない為、兎に角全身に向かつて撃ち始めた。

『ウ、ウガアアアアアアアア?』

するとバルカンは頭にアルバートシリーズを受けた瞬間大きく仰け反り、其処が弱点だと理解した茜はアルバートシリーズをリロードし、再びアルバート02とサジタリウスの二丁持ちで肩に乗り上げると、その弾丸を反動無視で放ち続けた。

「ふふ、此れは私の手出しは無用みたいね。」

あく楽しだし見てて楽しいなあ、自分達が頂点だと信じて疑わない者が惨たらしく死ぬのは」

そしてセイカはバルカンが小娘と呼称していた茜に蹂躪される姿を見て嘲笑い、絶対者と思う者達が失墜する場面を見てまるで自分の父、アルバート・ウエスカーがクリスに負けた場面を思い浮かべながら本当の『笑み』を浮かべていた。

それは茜達が使う銃に『アルバート』の名が付いていた為思い浮かべてしまったのかも知れないが、セイカ自身にしかその胸中は分からなかった。

『クソがあああああ!!?』

「直線的で甘いわボケエ!!?」

『ドゴオ!!?』

一方茜は変異バルカンを一方的に叩きのめし、偶にして来る腕伸ばしも掴んでは身体を回転させて壁に投げつけたり、そもそもカビの腕を握って粉碎する等最早負ける要素は見当たらない。

B・O・Wの死神『オメガー』の力を存分に見せ付けていた。

「此れがオメガー、アオイさんのお姉さん、アカネさんの力!!?」

その戦い振りを見ていたルナは何故茜がB・O・Wの死神と呼ばれるのかをこの耐久戦や変異バルカンとの戦いで存分に知り、改めてこの茜を頼もしく思いつつイヴにこの力が向けられない様になり良かったと思っていた。

「……………」

一方イヴは茜の戦い方を見て、彼女は変異バルカンを自分達の下に攻撃の一切も決して向かわせず立ち回っていると分析出来ていた。

この事からイヴは茜がルナや自身の事を『守っている』事を確かに感じ取っていた。

『ぐっ、ガアアアアアアア!!?』

「何度も言わせんなや、甘いわボケエ!!?」

そして戦いは佳境から一気に終盤に纏れ込み、茜は装備した銃や格闘戦技で変異バルカンを追いか詰め、しかし先程の耐久戦からの疲れを一切見せない無尽蔵の体力も見せつけながら戦いの天秤を傾けさせずにいた。

『バカな、変異した特異菌感染者、しかもバルカンが……!!?』

一方放送機のスイッチが誤操作で入ったのか、ルーツが変異バルカンが一方的に追い込まれる姿を見て恐れて慄いていた。

此処でルーツは改めて、嫌でも理解してしまう。

自分達が如何なる者達を敵に回してしまった事を。

「はっ!!?」

『ギアアアア!!?』

更に茜は本気のキックで巨体の変異バルカンを壁に吹き飛ばし、再び二丁の銃をリロードしてバルカンの頭に弾丸を何度も叩き込む。

そうしている内にバルカンは弱り切り床にグツタリと倒れてしまい、茜はそろそろ終わりと感じて止めを刺しに向かい始めた。

『は、は、は、は、は……』

「此れで終いやで、卑怯者」

『ズドンツズドンツズドンツズドンツ!!?』

そうして茜はアルバート02を4発バルカンの頭に叩き込むと変異バルカンの頭は弾け飛び、肉体も石灰化して絶命する。

結果は茜とセイカが防衛仕切り、そして決戦では茜のみが戦い相手に何もさせない一方的な戦いになっていた。

『ば、バカな、バルカンまでもが…!!?』

「此れで分かったかいな、あんさん達が誰を敵に回したのか。

分かったら其処でビビり散らかせとき、必ずウチ等は其処に着いてその首取ったるで」

そうして決戦場の足場が上がって行き、カードキー2種も茜が手に取った中、ルーツはバルカンまでやられた事に驚愕していた。

それを茜はルーツの首を取る!! 処刑宣言を行い絶対に逃さない意思を見せていた。

『ぐ、ぐ、ぐうううう!!?』

『プツン』

「…ふん、小物が」

そしてルーツは何も言えなくなった後放送機を切り、その小物振りを存分に見せて茜

を呆れさせていた。

その小物振りはかつて茜が討つべき敵だった紅以下の物であり、既に茜の眼中に無い存在であるが、ロシアでのバイオテロ未然阻止の為処断する方針は変えなかった。

「……お母さん、大丈夫……？」

「ええ、イヴが守ってくれたからね。

本当にありがとう、イヴ。

でも、私もイヴを守ったからお相子ね」

「……お相子……」

そんな茜を他所にイヴはルナの身を案じ、対するルナは傷無しの様子を見せながら互いに互いを守った為お相子と口にし、その意味は辞書を見て意味は分かったた為、ルナが何を言いたいかをハッキリと理解して頭を撫でなれながら胸の中にある『気持ち良さ』を感じていた。

「ふう、すんませんルナさん。

ルナさんやイヴつちまで巻き込んでしもたわ」

「いえ、あれだけの数のモールデッドを私達を庇いながら戦って被害は0でしたし、此処に来る間にこれを使うかもと、思っていましたから」

茜はその『親子』の間に入り2人を巻き込んだ事を謝るが、ルナは夥し過ぎたモール

デッドの数を思い出して寧ろ2体しかイヴと自身が倒してない事を素直に驚きつつ、更に懐に隠し持っていた護身用ハンドガンを使うかも知れないと実は思っていた事を明かしながらそれを再び懐に仕舞う。

「ん〜……まあ、任務失敗にならんかっただけマシと思わんとなあ。

それとイヴっち、良く『お母さん』を守つとつたな、偉いで」

「……私、偉い……『良い子』？」

「せやな、イヴっちは『良い子』やで！」

そして茜は取り敢えずルナが最低限の自衛手段を持っていた事を頭に置き、結果良ければと切り替えた後イヴに『母』を守つた事を偉いと口にする。

それを聞いたイヴは自身を『良い子』と茜に尋ねると、茜はイヴ目線に立ちながらそれを肯定していた。

「……とう……」

「ん？」

「……ありが、とう……アカネ……」

するとイヴは茜に対し辿々しくありがとうと、無表情が崩れてほんの少しの、しかし確かに見た目の年相応の可愛らしい笑顔を見せ茜や画面と音声共有していた葵達、そしてルナも初めてイヴが自分以外に『笑顔』を見せた事を驚いていた。

「…………ふふ、如何いたしましいやー」

対する茜は喜んだ声色をマスク越しにしつつ手を差し伸べ、握手をしようとした。

イヴは突然手を差し出されたが、此れが握手のサインとルナから学んだ為握手をする
と、茜の手が優しく、しかし何処か力強くその手を包んでいた。

「…………温かい…………」

その握手にイヴは茜から感じる『温かさ』を感じ取り、そして再び笑みを溢していた。

この忌まわしく、大嫌いであつた特異菌研究所の『ゲーム』施設でイヴはマキからは
強い『決意』、ヨナからは『スカツとする』事、葵からは正しい『親』と『愛』、B・Y・
からは自身の行動、言動への『責任感』、そして茜からは『守る事の良さ』を知り、それ
は今までに無い物だが『良い物』と感じより人間らしくなつて行くのだった。

EP IX 『レオンルート・『正義』と『使命』、そしてイヴの『決意』』

茜やセイカ、ルナ達が戻つて来た事により遂にカードキーは残り1枚、更にダールトン一族も残りはルートツとシャル、未だ見ぬグラン・ダールトンのみとなり全員で残るルートをレオンが攻略すれば後はなし崩しのに任務完了となると考えていた。

「なら早くこんなカビ塗れで汚い場所からルナ達と共におさらばしなきゃな。」

ルナ、イヴ、最後の『ゲーム』をやるぞ、キリタン、正解の電気スイッチを暴いてくれ」

「はい、じゃあ行きましようレオンさん」

『サポートはお任せ下さい、奴等が短絡的にセキュリティ要員を潰したお陰でハツキングが放題ですからね』

そしてレオンはこの下らない最後の『ゲーム』を終わらせる為ルナ達を伴いつつ、きりたんに正解の電気スイッチの場所をナビゲートする様に頼みエレベーターへと向かい始める。

「待ちなさいレオン、私も行くわ。」

何か事故があつては拙いからね、貴方達は

「エイダ……分かった、行くぞ」

其処に感染防止マスクを被つたエイダが事故の確率を減らすべくレオン達と共に行く事を進言する。

それをレオンは少し悩んだが茜達の事例から今回もルナを殺す為に敵は動くと判断してエイダの随伴を了承し、4人でエレベーターに乗り始める。

「レオン、エイダ、最後の最後でへましましたなんてやるんじや無いぞ!!？」

「ファイトですよ、レオンさん!!？」

其処に正座が終わつたB・Y・や葵が片やミスをしないう様にと言う忠告、片や純粹な応援をしてレオンの双肩に全てが掛かっている事を彼に嫌でも伝わらせる。

「……ふっ、泣けるぜ」

レオンはエレベーターが閉じた瞬間そんな期待等に何時もの口癖を言い放ちつつ、寧ろ逆に肩の力が抜けて自然体になりその瞳に油断も隙も無い、葵達が良く知る歴戦の戦士レオン・S・ケネディとなりこの先に待ち構える物が如何なる物だろうと突破する土壌が出来上がるのだった。

一方セキュリテイルームにて、周りのコネクション構成員の死体が散乱し床が血塗れとなつたこの場所で遂にシャルは自分の番が来てしまい席を立っていた。

「頼むぞシャル、お前は力は弱いがその頭脳は一族で1番だ。

奴等を暗闇に紛れて」

「分かつてるよ父さん、じゃあ言つて来るわ。

…チツ、結局セキュリテイ掌握されつばなしで立つ瀬が無いぜ…」

ルーツは自身や双子の弟たるグランを残せば最後のシャルに自分達の全てをベツトし此方の方もまたシャルの双肩に一族の全て…最早三男のシャルやルーツの双子の弟しか残らない一族の運命が掛かっていた。

しかしシャルは寧ろハツキング戦で1度も勝てなかつた事を引き摺り、相手が何者なのかも知ろうともせず『ゲーム』場に向かうのだった。

そしてレオン、エイダはルナやイヴを護衛しつつエレベーターから降りると周りを見渡すと、辺り一面は真っ暗闇であり暗視機能が無ければ詰んでいたと2人は思うが、肝心のルナがその暗視機能が無いマスク+イヴは未だ夜目になっていない為迂闊に動けずにいた。

『侵入者よ、よくも此処まで我が一族を追い込んでくれたな!!?』

だがそれも最後だ、この『ゲーム』場では正しい電気スイッチを押さねば先に進めず暗闇に閉ざされたままになる!!?』

そしてその暗闇の中で殺人鬼役のシャルから逃れなければならない!!?』

暗闇とシャルに怯えながら死ね!!?』

そして早速ルーツの最後のゲーム説明を行われるが、ダミースイッチを押した場合のデメリットを全く語らず、更に茜からだだが最早心にも思っていない健闘を讃える言葉を掛けず死ぬ様に言つて来ており、いよいよ後が無いとレオン達は感じ取り敵が更に短絡的になると考えていた。

「ふっ、此処まで単純な思考になり始めたテロリストの処断程簡単な事は無いな」

「ええそうねレオン。」

さて、お嬢様方は私達から離れない様にー」

「死ねえええええ!!?」

「つ、もう来たのね、がつつき過ぎよシャル・ダールトン!」

そしてレオン達は周りの警戒をし、更にエイダがルナ達に視線を向けた瞬間ゲームスタート直後にエイダを狙いシャルがナイフを持ちながら襲い掛かって来た。

それをエイダはがつつきと呼称しながら蹴りで距離を離させるが、シャルはエイダに狙いを定めて再び襲い掛かろうとしていた。

「おい、しつこい男は嫌われるって知らないのか?」

『ズドオンツ!!?』

「グエツ!!?」

其処にレオンがアルバート02を構えながら割り込み、シャルの顔面に向かって弾丸を放ちエイダやその先に居るルナ達を守る。

「あら、今のは私でも対処出来ただけれど?」

「何時までも3年前の貸しを返さないのは如何かと思つたからな。」

それに君は大丈夫でもルナ達はこの暗闇ではダメだ。

まあ、だからこそペンライトを使うんだがな」

エイダシャルを1人でも対処出来たと事実を話すも、レオンも3年前の『貸し1』を返す為に動いたと話し、2人は少し笑うとレオンはペンライトを取り出して通路を照ら

す。

すると道端に頭を撃ち抜かれてビクビクとしていたシャルが倒れていた。

「あら用意が良い事。」

でも良いのかしら、この『ゲーム』にライトを持ち込んでも？」

「別に禁止と言われてないからな。」

ならそのルールの穴を利用してやるさ。

さてキリタン、正解の電気スイッチは何処に？」

『この先にある右から3番目の部屋の奥ですよ』

そのペンライトをエイダに突っ込まれるが、レオンは言われてないから別にOK理論を出し、相手の俺ルールに明らかに喧嘩を売り付けており、エイダはそれでこそレオンと思っていた。

そしてきりたんのナビゲートで正しい電気スイッチの場所を把握し、ルナ達をエスコートしながら走り始めた。

「……レオンと、エイダは……恋人？」

「イ、イヴ！」

デリケートな話を振らないの！

ごめんなさいレオンさん、エイダさん」

「ふふ、気にしなくて良いわ。

それよりお嬢ちゃん、私がレオンと恋人かは……」

するとイヴがレオンとエイダの雰囲気から2人はルナが持つて来た本に描いてあった恋人なのかと唐突に問い掛けると、ルナは2人に謝るが本人達は気にしていなかった。

それよりも悪戯心が思い浮かんだエイダはその質問に応える様な素振りを見せ……。

「……大人になれば分かるわよ。

それまでは内緒よ、ふふふ」

「……とまあ、こんな感じにちよつと複雑な関係さ」

イヴのほつぺに指を当てながら大人になれば分かると言つてボカし、更にレオンも複雑な関係と話して答えになってない答えをイヴにする。

するとイヴは頭の中で考えを纏め、口には出さないが彼等を恋人未満、友人以上と言う彼女なりの解答を思い浮かべつつ正解の電気スイッチまで辿り着いた。

「さて、此れで点くだろ?」

『ポチツ、パツ!!?』

レオンはきりたんのナビゲート通りなら電気が付き次の場所に進める様になると思いうスイッチを入れると電気が点き、暗視機能がOFFになった。

「此れで先に進めるわね。」

さて、早く次に向かってあのストーリーカーさんを」

「オイ、何で1発で正解の電気スイッチが分かるんだよ!!?」

そうして電気が点いた後エイダは早く次に向かう様に促し、最初襲って来たシャルをストーリーカー認定して部屋から出ようとした瞬間、再生が終わったシャルが部屋に駆け込み何故正解が1発で分かったのかを問い質していた。

「あらら、もう起き上がったのね。」

呆れる程早い再生速度だこと」

「こつちには優秀なナビゲート兼ハッキング役が居るからな、だから正解は丸分かりさ」

エイダはその再生速度に呆れた様子を見せつつ、レオンは優秀なナビゲート役、きりたんが居たからこそ分かったとシャルに告げながら再びアルバート02を構えながらルナやイヴを庇っていた。

「ナビゲート兼ハッキング：あのハッキング仕掛けてた奴か!!?」

一体どんな優秀なコンピューターを使っているのか、それとも超高性能AIなんだよ!!?」

こつちが逐次更新したファイアオールを全部突破するとか人間じゃねえだ

ろその案内役!!?」

「…あら、壮大な勘違いをしてるわね。

レオン、ネタ明かしなさい」

するとシャルはレオンの言う案内役に対しての溜まりに溜まった鬱憤を吐露し、更になどんな者なのか全く理解してない為見当違いな解答を口にする、エイダはこの哀れな者達にその解答をレオンに明かす様に言う、レオンも軽く笑いながら正解を明かした。

「俺達のナビゲート兼ハッキング役の名はキリタン・トウホク、A・B・F・随一の通信班にしてその辺の安物PCでお前達を散々翻弄した中学生の女の子さ」

「……はあ???」

『ピンポンパンポーン、どうもこんばんわです。』

貴方達のザルセキュリティを散々引つ掻き回した東北きりたんです。

で、こんな中学生如きに負ける大人が居るって本当ですか？

ふっ、草生えますね』

レオンはきりたんの素性やどんなPCを使っていたかを口にすると、シャルは信じられない様に叫び声を上げてしまう。

すると通信システムすらも掌握仕切り、遂に全施設のシステムを手中に収めたきりたんはシャル達を小馬鹿にする通信を全館内に流し、それを聞いたシャルは絶望し切って

いた。

「キリタンさんって、皆さんが良く通信で言ってた…中学生の方だったんですか…」

「う、嘘だろおい…マジで中学生のガキに、俺は…」

「分かったら其処を退いて貰うぞテロリスト、お前達の下らない『ゲーム』は此処で終わらせる」

そんな解答に初めて聞いたルナも驚き、更に絶望感漂うシャルに対してレオンは問答無用で再びアルバート02を頭に放ち、次のエリアに入りまた正解のスイッチを入れ、それを繰り返し始める。

「畜生、こんなの信じねえぞ!!?」

俺が、俺がガキに負けたなんざあり得ねえ!!?」

絶対AIだろ今の!!?」

「だから唯の中学生よ。」

いい加減力量の差を認めなさい、三下の没落貴族さん?」

『ヒュンツ、ドオオオン!!?』

するときりたんに負けていた事を認められない再びシャルが襲い掛かって来るが、それをエイダは炸裂弾の鏝が付いたクロスボウの弓を放ち、シャルの頭を再び粉碎しつつ電気スイッチを入れてまた次に進む。

「く、くそ、俺は、俺は……」

「いい加減認めろ、お前達は下らない不相応な計画を立てて、俺達をこの場に入れた時点で既に詰んでいた事をな」

シャルは負けを認められず最初の威勢が嘘の様にヨロヨロとしながらレオン達を追つて来るがまたアルバート02を放たれ頭を綺麗に吹き飛ばされ、またピクピクとしながら倒れ伏す。

「……ん、未だモールデッドが居る様だが……」

「ノーマルタイプしか居ないわね。」

本当に茜やセイカに全てをぶつけてこのザマの様ね、哀れだわ」

それを見届けたレオン達は次のエリアに進むと、其処には未だモールデッドが居り、しかし明らかに強化タイプでは無いノーマルタイプしか居らず本当に茜とセイカにはぼ全てのモールデッドを叩き潰れたのだと理解する。

そして2人はノーマルタイプでも油断せずに的確に処理し、電気スイッチを入れて次に進む。

「この野郎、アメリカ人が正義の味方なんて今のB級映画でも流行ら」

『ズドオンツ!!?』

「……お前に少しだけある男の話をしてやる。」

「1日だけの新米警官でラクーンシティ事件を生き延びた、ある男の話だな」

すると懲りずにシャルが襲い掛かって来るが、レオンはアルバート02を意識を遮断しない様に足に放ち、そして蹴り上げながら頭を踏み付け、ある男……自身の過去を明かし始めた。

「そのある男は1998年9月のラクーンシティ市警に配属予定だったが、街は既にTウィルスに汚染されてゾンビが屯し始めていた為自宅待機命令を受けた。

だが男は街の様子が心配になりラクーンシティに向かい、其処でアンブレラやB・O・W.を知ってしまった」

レオンは簡潔に自身が体験した過去を口にしながら、それを聞いていたルナはそのある男はレオンの事ではと思いつつ黙って話を聞き、イヴも有名な本で語られてるラクーンシティの悲劇とある男の過去を聞いて行く。

「その男はGウィルスやそれを取り巻く様々な思惑や危機を乗り越えて生き延びたが、様々な事を知り過ぎた為、男はアメリカ政府のエージェントとなり、その後も様々な事件に関わって来た。

そうしてその男……レオン・S・ケネディは今日もこうしてお前達のようなバイオテロを画策する者達と戦っている。

全ては、この世からバイオテロを根絶する為にな……！」

『ズドオンッ!!?』

そしてレオンはある男が自身だと明かした後、バイオテロに対する明確で静かな怒りを吐き出しながら足蹴にしたシャルの頭を再び吹き飛ばしてその場に倒れ伏せさせていた。

「…あの、レオンさん。

辛く無いんですか？

ラクーンシテイ事件と言えば私も幼児だった時代の事件です。

そんな時からウイルスやバイオテロと戦うなんて…」

ルナは現在23歳であり、19年前の事件…自身が4歳の時に世界を震撼させたラクーンシテイ事件からレオンが戦い続けている事を知り、それを辛く無いかと敢えて問い質した。

自身ならず何処かで発狂し、折れるであろうその終わらない地獄に向き合い続けるレオンに。

「辛く無いと言えば嘘になる。

何度も挫折し掛けたし、ラクーンだけじゃなくベンフォード元大統領やトール
オークス、ランシヤン蘭祥、そして日本で多くの命を救えなかった。

だが、今はもし此処で止まれば今まで死んで行った人達に顔向け出来ない。

だからこの戦いが『呪い』であろうとも続けるさ……それが、俺の中に僅かに残った『正義感』って奴から来る義務だからな」

それに対してレオンは挫折し掛けた事もしつかりと言いながら、しかし止まれば犠牲になった人々に顔向け出来なくなるとマスクを外しながらルナやイヴを見ながら言い、その瞳に宿る『正義』から来るバイオテロへの怒りと巻き込まれた人々を守る使命を見せ、改めてレオン・S・ケネデイがどんな人物かを2人に見せていた。

「そしてそんなレオンは私がこの世で唯一興味を惹かれる人なのよね。
だから……ついつい悪戯を仕掛けてしまっわ」

其処にエイダも話に混ざり、レオンが興味深くそして悪戯心を擦られると話しつつも、何処か通じ合っている様をルナやイヴに見せていた。

「……『正義』……使命……バイオテロを、許せない……怒り。
それが、レオンが……戦い続ける、理由……」

そしてイヴはボソツとレオンが戦い続ける理由を口にし、ルナが教えてくれた事と接合して行き、レオンが今なお戦い続ける理由を知り、彼女はレオン・S・ケネデイは明確な『正義』を持つ良い人だと感じるのだった。

「ち、畜生が、ラクーンシティ帰りが来ているなんて聞いてねえよ……」

「ああ、聞いてこなかったからこっちも言わなかったからな」

そうしてまた再生して立ち上がるとしたシャルに対してマスクを付け直したレオンはアルバート02を放ち、頭を何度も何度も吹き飛ばして人を辞めたバイオテロ画策者の対応を見せ付ける。

そして明らかな実力差が有り過ぎる為か最早シャルを眼中に置かないレオンは電気スイッチを押して遂に決戦場に辿り着く。

「…カードキーが初めからあるな。」

キリタン、まさかハッキングしてか？」

『はい、もう施設の全システムを掌握しちやつたのでカードキーもサクサク手に入る様になりました。』

じゃあ残りのシャル・ダールトンの始末をお願いします』

初めから最後のカードキーが出現していた事にレオンはきりたんの仕事と見抜き、彼女から最早敵ですら無いシャルの始末をしてこのエリアを去るだけになった。

そして、そのターゲットたるシャル・ダールトンはよろよろと現れ、今にも力尽きそうな状態になっていた。

「ち、畜生、お前等に勝つにはこの手しかないみたいだ…」

『ズドンッ！』

するとシャルは自身の腹部をハンドガンで撃ち抜くと、突如として変異が最高潮に達

して行きカビの繭が形成される。

この状況からシャルは自ら特異菌コントロール装置を破壊し、変異して戦う道を選んだらしい。

「ふん、最後は化物になって勝とうとする。

芸が無さ過ぎるんだよ没落貴族。

此処で終わらせて」

「……待つて……」

レオンはアルバート02を構え、変異体になるシャルを芸が無いと酷評しながら処断しようとし、エイダも同じくクロスボウを構えるが其処にイヴが前に出て来て2人に待つ様に声を上げる。

「イ、イヴ!?」

何をする気なの!?？」

「……あのシャルって、人だった……怪物。

あの怪物は……この施設の、ゲームの……立案者の、1人……。

だから、私に……決着、つけさせて。

お母さんを、悲しませた……悪い化物を、倒したいの……」

ルナがイヴを案じ駆け寄るとそのイヴは3人にシャルがゲームの立案者の1人だっ

たと話し、特異菌コントロール装置が消えた今自身の力でルナを悲しませた化物を倒すとハツキリと口にした。

これには3人は驚き、音声共有で聴いていたB・Y・達が通信をレオンに送つて来る。

『レオン、やらせてやれ。』

俺の場合アルバは『人間』のまま死んで行つた。

だが奴、シヤル・ダールトンは違う。

明確に『人間』を辞めたB・O・Wだ。

そしてイヴがそのB・O・Wを理由があつて斃したいと言つてるなら気持ちを汲むべきだ、と俺達は思った』

如何やらB・Y・達は理由があるなら今のイヴに『人間』を殺させないが、人間を辞めた『B・O・W』ならば殺して良いと判断を下したらしく、レオンも実の所イヴの口からその言葉が出た時にやらせるべきかと少し悩んでいたのだ。

そしてB・Y・や葵達の判断により考えを固めた。

「…了解だ。」

イヴ、お前が思うままにやると良いさ。

それが、君が『人間』である事を証明する事だからな」

「……ありがとう、レオン……」

レオンはイヴに変異するシヤルを任せ、見守る方針で固める。

しかし、万が一があれば直ぐ守れる位置とアルバート01を構え、事の成り行きをじつと見ていた。

『うおおおおおおお、このアメリカ人野郎がああああああ!!?』

そしてカビの繭が破れると其処からカビの身体で構成された、カマキリの様な見た目になった変異シヤルが現れる。

そしてレオンに向かって行こうとした…所で腕が突然石灰化を始め変異シヤルは驚いていた。

『なっ、ま、未だ変異したばっかなのに何で身体が崩壊し掛かって……まさか、イヴ、てめえなのか!!?』

「……貴方は、貴方達は……この場所で、多くの、人達を……私の目の前で、苦しめて、殺して、お母さんも……悲しませた……!」

するとイヴは迪々しい口調ではあるが、シヤルに対して強い怒りの感情を示しながらゆつくりと変異シヤルに近付き、肉体の崩壊スピードを早めさせて行く。

『う、うわ!!?』

よ、よせ!!?』

俺は、俺達はお前の所有者なんだぞ!!?」

「……そのお母さんから、悪い事……良い事……常識や、良心を、教えてもらつた…。

そして、今日、マキからは、人任せにした時の無力感からの、怒りを…。

ヨナからは、スカツとする事や、生きるのを……諦めない事……。

アオイや、お母さんから、親や、愛を教えてもらつた…!」

変異シヤルが叫びながら止める様に命じるが、イヴを所有物としか見てない彼等の命令は既に、『人間』として見てくれたルナや葵達のお陰や、ルナを悲しませた事で従う気は0であつた。

更にイヴはこれまで教えて貰つた事を振り返りながら更に近付いて行く。

「…B. Y. からは、行いの、責任を、アカネからは、守る事の、良さ……そして、レオンからは、正義感や、使命を……感じ取つた…。

だから、私は……私を『人間』と、見てくれた人達の、為に……お母さんの自由の、為に……私は、この力で、貴方達『化物』を、倒す!!?」

貴方達に、もう……此れ以上、お母さんや、多くの人を、悲しませたりはさせ

ない……!!?」

『ぐ、ぐああああああああ!!?』

『パラパラパラ』

更にイヴはレオン達から感じ取った物を口にし、其処から自身の中にあつた望みである『B・O・W』である自身の死』を捨て去り、新たに『人間として母や他人を悲しませ、苦しませる者を許さない』正しき怒りと芽生えた正義感から生まれた自身の新たな『使命』を強く口にし、E型被験体の力により変異シヤルを完全に殺し切るのだった。

「イヴ……」

「お母さん……ごめんなさい。」

力、勝手に、使っちゃった……」

「ううん、貴女は貴女が正しいと思つて力を使ったの。」

それにその『心』は、私も正しい物だつて信じてる。」

だから……ありがとうイヴ、お母さんや、他の人達を想つてくれて」

その光景を見たルナはイヴにゆっくり近付くと、イヴはE型被験体の力を使った事を叱られると思つていた。

だが、ルナはその逆にイヴのその想い、『心』から来た行動は正しかったと信じている事を口にして、ただ優しく抱きしめてありがとうと言葉にする。

「……お母さん……!!？」

それを聞いたイヴは嬉しさを、様々な感情が入り乱れて表情を崩して泣き出し、しかしその涙には悲しみは含まれていない。

正の感情に満ちた涙：所謂嬉し泣きであり、決して辛い物では無いとイヴ自身も胸の内を感じ取り、暫し『親子』の時間をこの場で過ごすのであった。

そして、ルナとイヴが『親子』としての時間を取った後レオン達はエレベーターで葵達の下に戻る。

すると葵達女性陣からイヴは大歓迎されていた。

「イヴちゃん、あのイヴちゃんの決意かつこよかったよ!!？」

「うん、君はやっぱりB・O・W.なんかじゃない、立派な『人間』だよイヴ！」

「……………」

その歓迎ムードにイヴは困惑しながらも、不思議と母に褒められた時と同じ心地よさを感じ取り笑みを浮かべながらその歓迎をしっかりと受け止めていた。

「良かった、と言うべきだな。

あの子はもう俺達が倒すべきB・O・W.じゃない、守るべき『人間』と証明

されたんだからな」

「ああ。」

さて、ダールトン一族は残り2人、そして『正門』を開くカードキーが揃った訳だ。

早速開けて此処から出るぜ、全員このデカイゲート開けるから歓迎は其処までにして整列だ!!?」

そしてレオンやB・Y・もそれを見て互いに良かったと思いつつも、未だやるべき事が残っている為全員に声掛けをして整列させ、近くにあつた端末に6枚のカードキーをリードさせ遂に今まで開かなかつた『正門』が開け放たれた。

「…門の中身は巨大エレベーターだった」

「成る程、外に出るってこう言う意味か。」

「よし、全員乗り込め!!?」

「先ずは研究エリアに向かいP30改良型を全て破壊するぞ!!?」

『あ、毒ガスは中和済みですよ』

マキは門の中身がエレベーターだった事を口にする、B・Y・が外に出るなら此れだと納得しつつ、先ずやるべき事の1つであるイヴを操る手段たるP30改良型の破壊を目指し研究エリアのボタンを全員が乗り込んだ瞬間押し、エレベーターは上がり始め

た。

その補足情報としてきりたんは毒ガスの中和を済ませたと話す。

そして全員は残りの任務を達成すべくそれぞれ意気込むのであった。

「イ、イヴめ!!?」

よくもシャルを、ワシの一族繁栄の望みを託した最後の息子を殺したな!!?

こうなれば改良型P30を使ってワシの道具にしてくれるわ!!?」

一方ルーツはシャルを殺したイヴに憎悪を向け、カトル、カトリ以外の一族の繁栄を
目指す者が残りは双子の弟グランと自身以外に居らず、後が無くなってしまっていた。

そしてP30改良型を手にするべく施設内を走り出した。

『(私に見られてる事を忘れて走り出すなんてアホくさ、ですな)』

だが、その姿は全システム掌握をしたきりたんに双子の弟グランの居場所共々見られており、きりたんはルーツが丁度レオンや葵達とP30改良型保管室前で鉢合わせる様

にセキュリティを弄り調整を始めるのであった。

そして、この葵やレオン達の任務はいよいよ最終局面を迎えた。

果たしてこの先如何なる結末になるか……それを、予測は出来ても正確な答えを知る者は誰も居なかった。

EP X 『ダールトン一族の最期』

葵達はエレベーターに乗り、直ぐ上の研究エリアに辿り着いた瞬間走り出した。

全てはイヴを操る手段を潰す為、彼女やルナの『自由』の為に力強く足を床に叩き前へ進んでいた。

「この先に薬品エリアがあります!!?」

P30改良型も多分其処に…あつ!!?」

「なっ、貴様等!!?」

ルナはこの先の薬品エリアにP30改良型があると予想し、曲がり角を曲がりそのエリアの一室を目の前に捉える。

すると部屋の中から小太りの男、ルーツ・ダールトンがレオンや葵達を見て驚愕していた。

「こんなにも道が開くのが遅く、そして彼等が早く到着するのが想定外だったのだらう。」

そしてその手には何等かの外付けの機械が握られていた。

「っ!!?」

『ズダダダダダダッ、バキーン!!?』

「ぐあああああ!!?」

あつ、しまった、P30が!!?」

葵はルーツの手に持つそれがP30改良型の入った機械だと予測し、ルーツの腕を中心にサジタリウスを放ち続け、そして地面に落としたりそれに銃弾を浴びせ破壊した。そしてルーツはアツサリ答え合わせをした後、口惜しくその機械を見つめ、そして銃を向けて来る葵やレオン達を見つめ直していた。

「ぐうう、貴様等何処までもワシの、ダールトン一族の栄華への道を阻みおつて!!?」

くそつ、貴様等は必ず殺してやるから覚悟して置け!!?」

そしてルーツは状況が芳しく無い事を判断すると悪役特有の捨て台詞を吐いてその場から脱兎の如く逃げ出した。

その姿を見た葵やレオン達は滑稽だと感じていた。

『はい、以上ルーツ・ダールトンと皆さんが上手く鉢合う様に調整した東北きりたんでした。』

では先程の小物が入った部屋に入ってください。

其処に破壊する物と必要な物、両方が揃ってますよ』

「ナイスだよきりたん!!?」

んじや早く入るで!!？」

そして通信先でレオン達がルーツにタイミング良く鉢合わせた種明かしきりたんがり、更に『破壊すべき物』と『必要な物』が取り揃えられている事を伝えると茜やルナが先行して中に入る。

そして葵達も入ると中には様々な薬品や、先程見たP30改良型が入った機械が多数あり、その機械全てを破壊すればイヴは晴れて自由の身になると葵達は容易に想像出来た。

「えっと、カトルさんとカトリさん用の『特異菌治療薬』と、それとイヴの身体を保つ為の『肉体保全薬』とその生成データを……あ、あつた!!？」

ダールトン一族保有のデータが全部消えたつて言つてたからこつちも消えたつとばかり……」

「ふふふ、そのデータだけは必要と思つて特別サービスで残してあげたわ」

するとルナがスポーツバックにカトル兄妹に必要な特異菌治療薬、更にエヴリンにも使われていた保全用化学物質（ルナは肉体保全薬と呼称）をありつたばかり集め、更にPCからエイダが特別に残した肉体保全薬の生成データをコピーすると言う慌ただしくも必要な物を全て迷わず取り寄せていた。

「やつぱり、イヴちゃんも資料通りエヴリンと同じ薬が無いと……」

「…はい、急激に老化して死んでしまいます。

だからそうならない様にこの薬は、イヴがこれからを安らかに生きる為に必要なんです。

エイダさん、データ残しありがとうございます。

後は…」

その間に葵はイヴもエヴリン同様肉体保全薬が無ければ急激に老化、そのまま短期間で死亡する事をルナの口から聞き、イヴが『これから』を生きるにはこの薬品が必要だった事を明かされる。

そしてルナは薬品その物に素材と必要な物を取り揃え、データも抜き取った後デスクから離れイヴの隣に立った。

「コイツの破壊だな…後は俺達任せろ」

「イヴちゃんの自由を、此れで!!?」

『ズドオンツズドオンツズドオンツ、ズダダダダダダツ!!?』

そして残りはP30改良型を全て処理するだけになり、レオンや葵達は横並びになりアルバート02やサジタリウスを放ち続けそれ等を全て破壊し切り、イヴを縛る物は残りはダールトン一族の長であるルーツと双子の弟グランのみとなった。

「よし、此処にN2爆弾を仕掛ければ城や周囲を地下施設毎吹き飛ばせる…設置完

了。

きりたん、ルーツは何処に！」

『お城の応接室で双子の弟さんらしき人と一緒に皆さんを待ち構えています。

最短ルートのエレベーターを示しますので早く行ってください』

そうしてB・Y・は作戦終了用のN2爆弾を設置し、きりたんに逃げたルーツは何処に居るかを確認すると城側の応接室に逃げ込んだと聞き、ルーツを示された後全員でエレベーターに駆け込み地上の城へと上がり始めた。

「……じゃあ、私達は此処までね。」

地上に上がった後は貴方達に全てを任せても大丈夫そうねレオン、葵、茜」

「エイダさん、セイカさん……はい、残りは私達が片付けます。」

なので、巻き込まれない様にお別れですね」

「ふふ、短い間だったけど皆にまた会えて、話せて楽しかったわ。」

じゃあ皆また何処かで、敵として会わない様に願ってるよ♪」

そのエレベーター内でエイダ、セイカは手を貸すのは此処までだと口にし、残りはレオンや葵達に任せて離脱する事を伝える。

それを聞いたレオンは無言で頷き、葵が別れの言葉を口にするのとエレベーターが開き、エイダ達2人が先にドアから出てセイカが別れを告げ窓を開けて何処かに去って

行った。

「皆さん、良いんですか？」

「あの方々を好き勝手に行かせても……」

「良いんだ、そう言う交渉だったし、それに彼女達を縛り付ける事なんか出来ないさ。それよりも、ルナやカトリ、カトルにイヴの安全確保が最優先だ。」

一旦白の外に4人を避難させるぞ」

ルナやカトルはエイダ達が何処かに行ったのを懸念したが、エイダと長い付き合いなレオンが代表してこれで良いと話しつつ、カトル兄妹やルナ、イヴを避難させる話になり6人はこの先の最終決戦を前に保護対象の避難優先をする事になった。

「分かりました。」

じゃあイヴ、一緒に」

「……ううん、避難するのは……『3人』……」

そうしてルナもそれに了承するとイヴの手を引いて避難しようとした……が、イヴはルナから手を離し、避難するのは3人だと言い始め、つまりはイヴは最後までレオン達に着いて行く事を告げ周りを困惑させる。

「イヴ……だけど危険よ！」

ルーツ・ダールトンがまだ隠してる手があるかも」

「それでも……それでも、シャルの、様に……あの狂った『ゲーム』を、作った……あの人を、許しちゃいけない……だから……!」

ルナはイヴが提案して来た事を危険だと告げ、何とか説得を試みたがイヴは『ゲーム』を作り上げたルーツを許しては置けないと告げて最早梃子でも動かないと言った状態になり、その様子はかつての葵を見ている様でB・Y・やマキにヨナ、レオンと茜に葵は懐かしみながら仕方無いと言った様子を見せた。

「……はあ仕方無いね。」

ならイヴ、付いて来るなら足手纏いや周りに迷惑は掛けちゃダメだよ?」

「イヴっちもあくまでも保護対象なんやし、此処で死なせたらルナさんに会わず顔が無いからな」

「ルナさん、イヴちゃんは私達が守ります。」

なので行かせてあげて下さい、子を守るのが親の使命なら、見送るのもまた……ルナさんなら分かりますよね?」

そうしてマキ、茜、葵が率先してイヴを連れて行く事に賛成し、ルナを困惑させたが葵の子を見送る事も親の使命だとハッキリと言われ、有無を言わずそうするべきである事をこの場で分かせられてしまう。

そんな葵達の言葉を聞いたルナは、自身も覚悟を決めてイヴを見つめる。

「……分かったわ、イヴ。

でも無理はしちやダメだからね！

……ふふ、まだ守ってあげないとって思ってたのに、いつの間にか……」

ルナはイヴを無理をしない事を前提に行かせると告げ、イヴも静かに頷き言う事を聞いていた。

そしていつの間にか守るべき子供から大きく自分の手を離して羽撃いた事を少し寂しく思いながらも同時に頼もしく見つめ、少し抱き締めた後ルナはイヴを葵達に託してレオン達が侵入前に念の為城の外に設けたセーフゾーンに城門から行くのであった。

そしてイヴを引き連れた6人は城の3階にある応接室へと雪崩れ込み、それぞれ銃を構え、イヴは手からカビの剣を生やして応接室の先に居た2人：ルーツと、瘦せ型だがルーツに似た者『グラン・ダールトン』を見据える。

「此れで下らない『ゲーム』も終わりだ、ダールトン一族」

「今直ぐ投降するなら命だけはこの場では助けてロシア連邦当局に身柄を引き渡してやる。」

「それも嫌ならこの場で始末してやるぜ、没落貴族!!?」

「ふ、ふん!!?」

「誰が投降する物かこの下賤な庶民風情が!!?」

「それにイヴをこの場で操れずとも貴様等さえ始末すればイヴを取り戻せる!!」

?

「だから死ぬ、今この場で直ぐ!!?」

「レオンとB・Y・がゲームセット宣言を行い、またB・Y・は投降を取り敢えず呼び掛けて後はロシア連邦で死刑なりにさせようと遠回しに言うが、ルーツは未だ諦めが悪く小物の癖に未だ大物振りイヴを取り戻す為にレオン達を始末すると豪語していた。」

「さあ行くぞグラン！」

「我等の力、奴等に見せる時だ!!?」

「……」

「そしてルーツがグランに『力』を見せる時だと言い放ち、互いに銃を引き抜き構える。」

「そして——。」

『ズダンツ!!x2』

何と互いの頭を撃ち抜き、その瞬間互いに変異が最高潮に達し始め更には黒い液体が1つになり始めていた。

「此れは……キリタン何が起きてる!!?」

『分かりません、こんな事例、クリスさんから送られた最新の情報にすら……恐らくルーツ、グラン両名は融合しながら変異し始めてます!!?』

その城から早く外に出て下さい、外には『狙撃手』が待機してます!!?』

レオンもこの現象には驚ききりたんに何が起きてるか問うと、きりたんは今までに無い事例と映像からの推察でダールトンの双子が融合をしながら変異し合っていると話し、レオン達から城の外に『狙撃手』が待機している事を添えながら出る様に指示する。

「此れがカトリ達が言っていた秘密ね。」

成る程、確かに隠し球には相応しいわ、通用するかは別だけれど」

「狙撃手、ゆかりさんとあかりちゃんか!」

ならイヴちゃん、早く外に出るよ!!?」

此処は危ないよ!!?」

「……うん………あつ……」

ヨナはカトル兄妹が語っていた秘密がコレと理解し、通用するかは別としても隠し球には良いと答え、更にきりたんの通信を聞き葵達はゆかり達も来ている事を察し、イヴ

を引き連れて外へと窓からワイヤーロープ射出機で降り、急ぎ門付近へと陣取り始めた。

するとイヴは不意に意識が何処かに飛び始める。

此れはイヴが無意識に特異菌ネットワークを通じ誰かからの呼び声に応えた物であつたのだ。

そしてイヴの意識は特異菌ネットワーク内に向かい始めた。

特異菌ネットワーク内の、イメージ空間内にて。

先程の応接室と全く同じ間取りの場所にあるソファーにイヴは座っていると、その向かい側には先程変異し始めたグラン、更に既に死したアルバの両名が居りイヴが来た事をグランは喜んでいた。

「良かった、良く私達の呼び声に応えてくれたねイヴ」

「……貴方達は……」

「待つてくれイヴ、我々には敵意が無い事は特異菌を通じて分かっているだろう？

頼むから、話を聞いて欲しい」

グランはイヴに対して敵意、悪意が無い事を読心と特異菌ネットワークから伝わらせ、話を聞いて欲しいと頼み込みながらイヴに何かを話そうとしていた。

それをイヴは黙って聞き始めた。

「ありがとう話を聞く気になってくれて。

はあ……あの施設や計画はルーツやシャル、バルカンにミラが中心になり立てた事は君はもう分かるね？

けど中には反対する者も居た、カトリ達が表立って反対した勇敢な子達なら、我々2人は否定しつつも逆らい切れなかった、哀れな弱虫だ……」

グランはイヴに施設の成り立ちや『ゲーム』立案者がルーツ達だった事の確認をし、ダールトン一族の中には計画に反対していた者も居た事を告げる。

2名は勇敢に反旗を翻したカトル達、もう2人はアルバ、グランの様に否定しながらも兄達に逆らう勇気が無かった臆病者と告げ、その心は後悔に満ちている事をイヴに伝えていた。

「カトル達に罪は無いが、我々2人は兄達を止められなかった、勇気が無かったんだ。

その罪が今日までに多くの人を巻き込み、そして死に追いやってしまったんだ。

だがその中で君は折れず、またレオン・ケネディ達のお陰で精神を大きく成長させ遂にはルーツ達を止める決意をしてくれた。

そんな君に、厚かましいが頼みたい事がある」

グランは自身等の勇気の無さや罪に懺悔している気持ちや、今までの施設に居て人である事を折れなかった事、レオンや葵達のお陰で精神を成長させルーツ達を止める決意をした彼女に頼みたい事があると言い放つ。

対するイヴは黙ってそれを聞きつつ、次の言葉を待っていた。

「……君に、君達に頼みたい事は一つ、兄を……ルーツを止めて欲しい。

我々勇気が無かった者達や、ルーツ達の罪を償わせて欲しい。

もう死ぬ事では償えないけど……それでも、ルーツを止めてダールトン一族の罪を、その手で断罪して欲しいんだ……私達のお願いを、聞いてくれるかい？」

グランは最後に残った妄信に囚われたルーツをイヴや、これを聞けないレオン達に止める様に、断罪をさせる様に頼み込んで来る。

既に化物になり死ぬ事では償えないと告げながら、厚かましいとしながらも最期の願いをイヴ達に託して来る。

そしてそれを聞いたイヴの解はまた一つであった。

「……分かった……」

イヴは一言だけ分かったと返して、グランとアルバに安息を与える言葉を口にして最期の願いを聞き届ける選択をした。

その願いを聞く事こそが『人間』である事の証明だとイヴは解釈しながらだったが、何よりグラン達の願いを蔑ろにはならないと『心』が叫んでいた為に二つ返事で彼等の願いを聞き届けたのだ。

「……ありがとう、イヴ……」

そしてすまなかつた、カトル、カトリ……」

グランがイヴにありがとうとカトル兄妹への謝罪を告げると、特異菌ネットワークの繋がりが此処で切れ、イヴの精神が現実世界に回帰し始める。

それを見ていたグランや、確かに道を踏み外したが『人間』のまま死んだアルバは悲しく、しかし何処か満足気にそれを見届けていた。

そしてイヴは気付かなかつたが、この特異菌ネットワークにはイヴのみならずカトル達も入り込んでおり、彼等はグラン達の懺悔を聞き2人の叔父を赦す選択をしていたのだった。

「イヴっち、大丈夫かいな！」

「はっ……!!？」

「……今、グランと…アルバの、懺悔や…お願いを聞いた、よ……！」

「グランやアルバの？」

「特異菌ネットワークか、2人は何て言ってた？」

イヴが現実世界に精神を回帰させると茜が心配しながら肩を揺らしており、其所で気付くとイヴは辿々しくもグランやアルバの懺悔や願いを聞いたと口にし、資料からレオンは特異菌ネットワーク内のやり取りだと判断し、イヴに何を伝えたのか聞き始めた。

「……多くの、人を巻き込んだ事を…ルーツ達を、止める勇気が、無かった事を…ごめんなさいって…化物に変わった兄を…断罪して欲しいって…後悔、しながら頼んで、来たの…！」

「…そっか、カトル達以外に2人もこの狂った一族の罪に後悔した『人間』はちゃんと居たんだな…なら止めてやるよグラン、アルバ。」

「アンタ等の願い、人間代表の俺達が受け取ってやるよ!!？」

イヴはグランとアルバの後悔に加え、ルーツを止める様に、罪を断罪する様に頼んできた。

事をしっかりと伝えると6人は見合いながらその最期の願いを聞き入れ、B・Yがそれを強く吠えながら城の方を見遣った。

すると城の応接室辺りが大きく崩れ、其処から庭園に全長15メートル級のカビの化物が姿を現した。

『はあーはっはっはっはっはっ!!?』

此れが特異菌を研究して作り上げた我等が成果、特異菌感染者同士の変異融合だ!!?』

最早貴様等に勝ち目など無い、此処で死に果てろおおお!!?』

そうして現れたその声はルーツ・ダールトンの声のみで、グランの意志は微塵も感じられず、またこの10メートル級の化物は足が無く体と頭が一体になり、其処に4本の腕が生えた歪な物になっており、正に罪の象徴、ルーツの醜悪な精神が表に出た様な存在と化していた。

「…その姿、貴方みたいな下衆には凄くお似合いな姿になったね。」

良いよ、その罪を私達7人が…いや、『9人』が断罪するよ!!?。」

『はい、なので私達も援護しますよ葵さん、マキさんに皆さん』

『ブシャツ!!?x2』

葵は変異融合ルーツの姿をその醜悪な精神性に似合う物と吐き捨て、罪の断罪をこの場に居る7人のみならず、葵達がダールトン城を覗いた丘で、A・B・F・製作対物ライフル「グラスホッパー」を使い狙撃をしているゆかり、あかりを含めた9人でやると話すと、そのゆかりからSOUND ONLYの通信が全員に響き渡り早速狙撃が開始され最後の戦闘の幕が上がる。

『むぐ、狙撃とはちよこざいな!!?』

その狙撃に変異融合ルーツは鬱陶しく感じ取り丘側を見ていた。

ゆかりとあかりが使うグラスホッパーは名の通りマグナが個人所有していたパソコン内に遺された『タイラントを狙撃で殺す』コンセプトで設計されファイル保存された物を基に製作されたゆかり達専用ライフルであり、それが運命なのかゆかり達の手に収まった養父の遺物とも呼ぶ代物であった。

「ほらほら、狙撃に夢中になって足元がお留守よルーツ・ダールトン!!?」

「喰らいな、このデカカビオバケ!!?」

すると其処にヨナ、マキが攻撃を開始し始め、先ずヨナが足元…と言うより地面に接した身体を凍らせパンチで粉碎し、マキはアルバート01で身体中にある膿の様な部分を狙い始めていた。

すると何方も効果覩面だったのか、変異融合ルーツはバランスを崩した身体を2つの腕で支え始め、其処にアルバート01のラムロッド弾を受けた為直ぐに再生する砕けた部分や撃ち抜かれた部分が再生阻害され変異融合ルーツは逆上を始めた。

『き、貴様等、巨人殺しにでもなったつもりか、軟弱な人間共があ!!?』

「はっ、ウチ等はそないな大層なもんじゃ無いで、唯の『人間』や!!?」

『ズダアアンツズダアアンツズダアアンツ!!?x3』

変異融合ルーツは神話の巨人を殺した英雄になった気でののかとマキ達に問うが、茜は倒れない様に支えて居る腕を伝い、自由な方の腕に乗ると自身が改造を施し、銃身が長過ぎる上に銃口の口径も人間の男でも肩が外れる代物になり、その銃口が2つも付いた単発火力最強の、純白のリボルバーマグナム「アルビオン」を遂に引き抜き、その弾丸を放ち膿を潰す。

『がぁ、おのれよくも!!?』

「俺達を忘れて貰っては困るな…!」

「喰らいやがれ、化物が!!?」

茜のアルビオンの威力に変異融合ルーツは怯むと、其処に空かさずレオンとB・Y・がアルバート02で支えている腕に出来た膿を潰して行き、腕で支える力が抜け始めた為もう片方の腕2本で肉体を支えようとする。

因みにこの間もグラスホッパーの狙撃は続き、身体の膿を的確に潰して行っていた。

「この場で死んだ人達全ての無念を込めて……はあ!!？」

『ブチブチ、ブチイ!!？』

『ぎがあおあああ、う、腕がああああ!!？』

そして其処に葵がサイコネシスで4本の腕を全て引き千切り、宙に浮かせたまま狙撃の餌食にさせて行き、頭頂部周辺では茜がアルピオンで何度も何度も頭らしき部位を撃ち抜き、ダメージを着実に蓄積させて行く。

「マキ!!？」

「OKヨナ!!？」

その隙を見逃さないマキとヨナは身体の膿をアルバート01で撃ち抜き、其処にレオン達も加わりラムロッド弾の雨霰を浴びせる。

すると膿の下から特異菌コントロール装置が露出し、全員それに注目する。

「あれは特異菌コントロール装置、グランの分か！」

それともルーツの分か!!？

葵、透視で分からないか!!？」

「……はい、特異菌コントロール装置はあの1個だけです!!？」

他にもあったみたいですが、他は皆さんが膿を攻撃してる間に負荷が掛かって

壊れてます！

つまりは……イヴちゃん、止めを刺して!!?」

『ズシイイイインツ!!?』

B・Y はそれがルーツか、グランの物を葬に確認させると、如何やらルーツは複数の特異菌コントロール装置を身体に備え付けたらしいが、他の装置は全員が膿等を攻撃し続けた為負荷が掛かり破損している事が判明した。

そうして葬はサイコキネシスで変異融合ルーツを地面に叩き伏せさせると、イヴがその合図を待つて走り出した。

『や、やめろイヴ!!?』

頼むから止めてくれえ!!?』

「……止め、ない!!?」

『バギイツ、バチバチイ!!?』

イヴはサイコキネシスで押さえられた変異融合ルーツに対して攻撃を仕掛け、止める様に懇願して来た『化物』に対してイヴは『人間』として止める事無く、特異菌コントロール装置にカビ剣を突き立てて破壊し、地面に降り立つ際にレオンに受け止められゆつくりと地面に降り立った。

『な、なんて事を、イヴ……お前は、ダールトン一族の栄華の夢をたった今壊した!!?』

呪われろ、呪われてしまえ、忌まわしい所有者に逆らつたB・O・Wがぁ!!
?」

ルーツは身勝手な言葉をイヴに投げ掛け、彼女が未来永劫呪われる様に呪詛を掛けながらイヴの力により肉体が石灰化し始める。

いよいよ此れで全て終わり、全員が勝利を確信し、しかし油断せず武器を構え、葵はサイコキネシスを止めない。

「…………呪われても、私は、『人間』として…………生きる。」

そして…………貴方達の所為で、死んだ人や…………私が、死なせた、人達の間まで…………最後の1秒まで生きる、から。

だから…………もう、此処で終わって…………ルーツ・ダールトン…!!?」

その呪詛に対してイヴは自身の意志で『人間』として、罪を背負いながら生きる決意を口にし、ルーツ・ダールトンへの生殺与奪を更に強めて行き更に石灰化のスピードが早まって行く。

『く、くそ、ダールトン一族の…………栄華…………が…………』

『ピキピキ、ガラガラガラ…………』

そして変異融合ルーツは最後までダールトン一族の栄華と言う妄信を捨て切る事無く完全に石灰化、そのまま死亡しカトル、カトリ以外のダールトン一族が此れで死亡し

た事になり残る任務はこの城を吹き飛ばすのみになるのだった。

『さあ早く脱出して下さい、戦闘終了を確認してゆかりさん達を乗せて輸送機が飛んで来ています。』

皆さんもその城から完全に出て任務を完了して下さい』

「ああ、分かってる。

全員行くぞ！」

それに対しきりたんは任務完了を促すとレオンは了解と答え、イヴも含め7人は走って城門に向かい始め、最後の締めを取るべくダールトン城の完全脱出を目指し始めた。

「(……さようなら………今まで、犠牲になった………人達。

そして……私の、『大嫌い』だった、実験場……)」

そしてイヴは後ろを少し振り返り、今まで犠牲になった攫われた拳句狂った『ゲーム』に殺された人達に対する鎮魂、そして忌まわしき実験場たるダールトン城への別れを思い城門を潜り外へと出る。

そして、長い夜は明けもう直ぐ日の出の時間が迫るのだった。

LAST EP 『得られた『自由』と『未来』』

戦いを終えて、セーフゾーンで待機させたルナ達を急ぎ輸送機で回収した後、カトル達に治療薬を注入させながらゆかり達も乗せた輸送機は離陸して行き、B・Yは安全空域に達した所でN2爆弾起爆装置のスイッチに手を掛けていた。

「……これで終わりだ、身に余る野望を抱いた没落貴族共」

『カチッ!』

『ズドオオオオオオオオオオオンッ!!?』

窓の外を眺めたイヴはN2爆弾で城や周囲の森が一気に消し飛び、あの施設の全てが破壊され遂に自身やルナを縛る悪夢が今漸く終わりを告げた事を理解した。

するとそれと同時に地平線から太陽の光が刺し始め、イヴ達の門出を祝福するかの様な温かな朝日が照らし始めていた。

「……これで、自由になったよイヴちゃん、ルナさん、カトルさん、カトリさん」

「……『自由』……」

イヴは葵の口から出た『自由』と言う言葉に耳を傾け、此れから先はレオン達から学んだ様々な物が必要になる。

しかし、それでも何者にも縛られて生きる事の無い、確かな自由が待っている事を実感していた。

また、犯した罪から逃げてはならない、責任を取りながら生きなければならないともイヴは感じており、彼女は密かにある思いを胸に秘めながら、その朝日を浴び続けるのだった。

ダールトン一族のバイオテロ計画阻止から数日後の東ヨーロッパにあるとある村の

一室にて。

黒い衣装に身を包んだ女性がコネクションから得たイヴの情報を読み上げ、そしてその報告書をいきなり破り捨てていた。

「矢張りE型被験体など失敗作、我が娘の器には足り得ない!!?」

にも関わらず、失敗作如きが我が娘と似た名前、イヴなどと言う名を冠するな
ど虫唾が走る!!?」

E型被験体を失敗作と罵った女性は娘の器等様々な単語を口にするがこの場には事件に関わった者やこの女性に関わる者は居らずその意味は不明であった。

しかし、分かる事はイヴ^{E.V.E}と言う名前その物に嫌悪を示し、そしてこの痼癩を起こしていた、と言う事のみである。

「矢張り探さねばなるまい、我が娘、愛しき『エヴァ』の真の器になる者を……その為
になら、我が大願を邪魔する者は全て排除するだけだ……」

そして女性自身は自身の娘、『エヴァ』と言う子の『器』になる者を求めて今日もこの村で
非人道的な実験を繰り返して行く。

その目的は身勝手であるが、失った『娘』を取り戻そうとした『母親』が成す悲しき
宿業であった。

そして、葵達がルイジアナで同じく特異菌の事件に巻き込まれた者と共にそれに関わ

るのはまだ先であつた……。

それから時は流れ、ダールトン一族の計画阻止から3ヶ月後の2017年10月21日。

任務帰りの弦巻マキはB・Y・を奢らせ役として伴い、とある店で葵達と待ち合わせをしていた。

「そろそろ来るかなあ〜?」

「大丈夫だろう、急な任務が入りました〜なんてならなきや来るし、その急な任務にもこつちに連絡が回る筈だし……お、客人がお見えだ」

マキは葵達が来るのを今か今かと待ち続けていたが、この後財布が少し寂しくなるB・Y・は葵達に急な任務があればキャンセルの連絡があると話しながら周りを見渡し、そして其処に特徴的な髪色をした双子とそれに随伴する『6人』が現れた。

そう、それは葵に茜、ゆかりにあかり、ヨナに……そしてイヴであった。

「皆おっひさ〜!!?」

『イエーイ!!?』

「……えーい」

マキは早速葵達に駆け寄るとハイタッチを行い、それに合わせてイヴもピースサインをすると全員を自分達が座っていたパーティ席に招き入れ、早速全員でガッツリ注文を頼んでいた(因みに喫煙席の為ゆかりがマグナが吸っていた絵柄と同じ葉巻を同じジツポライターで蒸している)。

「モグモグ……やっぱりこのお店美味しいですね〜!」

「いや〜、皆と任務が被らない日にこうやって沢山食べ物を食べるって幸せだよね〜。

ね、バカ隊長?」

「そうだな、俺の懐が少し寂しくなったのが残念だな」

そして全員が幸せそうにステーキやパスタ、ピッツアにパフェ等を食べる中でB・Y・は懐の財布が前払いで寂しくなった事を嘆いていたが、それでもこのメンバーが集まって食べる光景を見られるだけでも幸せ者だと割り切りながらステーキを頬張っていた。

「それにしてもイヴちゃんには驚きましたよね。」

私初見ではあんな行動力がある子だとは思いませんでしたよ」

「それを言うなら私達もだよゆかりさん。」

まさか『A・B・F・に入りたい』って自分から言っただけなんて思いもしなかったんだから」

そうして葉巻を吸いながら3ヶ月前の事件解決直後を思い出したゆかりは、今対面席で座ってるイヴがまさか行動力の塊だとは思わず、葵達やヨナ達も合わせて事件解決直後の事を思い出していた。

「…A. B. F. に入隊したい、だど?」

7月21日午前10時、A. B. F. 本部にカトル、カトリ兄弟が緊急搬送され、更にルナやイヴの身柄の安全確保に乗り出そうとした中、何とイヴはA. B. F. に入りたいと『アルファ』に頼み込み、周りに居た茜やルナ達を驚かせていた。

「ちよ、ちよつと待ってイヴちゃん。」

それって此れからもずつと戦うって意味なんだよ?

分かってて言ってるの?」

「……うん。」

私は……多くの、罪を、犯した……。

沢山の人の、命を……奪っちゃった……。

でも、生きてて良いって、言われた。

だから、それに、報いる為にも……沢山の人が、B. O. W. に、不幸にされない為に……私、戦いたいんです……!」

「イヴ……」

イヴは自身が例え人の世の常識を知らなかったり、ダールトン一族の所為とは言え多くの人の命を奪っていた。

だが葵達は『人の心』を持つ彼女に生きて良いと言う返しきれない恩を与えられていた。

その恩や贖罪、そしてB・O・Wに不幸にされる人を一人でも減らす為に戦いたいと決意を口にし、此れはルナもルーツの時と同様見送るのが正解だと感じていた。

「……君の意思は分かった。

だが実戦に赴くには訓練が必要だ。

その訓練は厳しいが……耐えられるか？」

「……はい……耐えます……」

『アルファ』は訓練が厳しい事を口にし、それを耐えられるか敢えて聞くと、イヴの瞳はしっかりと強い意志を以て答え、周りが静かに見守る中で『アルファ』の答えは……。

「良いだろう。」

だが君の肉体は保全薬を定期的に摂取しなければ急激に老化する欠点を持つ。

ならばその欠点克服と君の体調管理役の為にルナ女史も医療班として参加す

る事になる。

だが代わりに君の母の身柄は全力で保護する事を約束しよう」

イヴがA・B・Fに参加するなら体調管理役として医療班入りする事も自動的に決めながら『アルファ』はイヴの参加を許した。

それに領いたイヴは次にルナの方に少し申し訳無きそうな表情で見つめて来た。

「……………めんなさい、お母さん……………」

勝手に、決めちゃって……」

「良いのよ、イヴ。」

貴女が心で正しいと思った事をしたのなら、私は全力でサポートしてあげるから……だから、その選択を誇りに思っただけだよ」

ルナはイヴの選択を尊重する言葉を掛け、頭を撫でながらその勇気と決意に彩られた選択を咎めなかった。

更にルナも医療班に入る以上は更に知識を付けようと決め、彼女もまた決意を固めるのであった。

「では本日正午より仮入隊扱いとして訓練、それから足りない知識の補強として訓練時間以外は勉学を行う。」

オメガ1、訓練で手を抜くなよ？

それからオメガ16、イタコとズンコに勉学をさせる様に伝えて来い」

『了解!!?』

そうして茜が直接訓練をする。最も訓練が厳しく実戦入りを直ぐにしなければならぬオメガ小隊に仮入隊し、更に勉学をイタコ達にさせて正しい知識と更なる常識を身に付けて行く事になった。

この中でビリー、カルロスを含む事件に関わらなかったオメガ小隊員達は直ぐに根を上げるか耐え切るかの賭けをしていたりなどがあつた。

だが、その結果はといえば……。

「んでこの3ヶ月、みっちり扱いたし勉学も割とムズイ奴をやらせたんやけど、結果は……」

「キャアア、スリよ〜!!?」

その結果を茜が口に出そうとした瞬間、スリが発生してその犯人の男が走って逃げようとした……が、いの一番にイヴが反応しスリの犯人の直ぐ目の前に立ち行く手を阻んだ。

「退きやがれガキ!!？」

「……甘いよ」

スリ犯はイヴの10代前半の見た目に惑わされパンチで退かそうとした瞬間、イヴは一言甘い口にした瞬間パンチを払い、更に足を払った後に払った手を捻りながら背中に周り込みスリ犯を取り押さえてしまう。

「い、いてててててて!!？」

「……スリの現行犯、逮捕だよ」

「……とまあ、あんな感じにメツチャ飲み込み早過ぎて直ぐ実戦入り、更に辿々しかった言葉も直った訳や。」

つまりあの子才能の塊やったって訳なんやで」

茜の訓練やイタコ達の教育の結果、元から才能等があった為か茜の扱きにも平然と耐えた上にパワー負けする相手に勝つ手段すら身に付け、更に辿々しかった言葉もすつかり直り少し寡黙な少女と言った感じになりB. O. W. から人間に変わった者の末恐ろしさをB. Y. 達は垣間見ていた。

因みに賭けはビリーとカルロスの2人勝ちであった。

「……警察に引き渡して来たよ。」

じゃあ……また食べ直そうかな。

すみません、このパフエをもう1個……」

「……ふう、将来有望株がまた1人増えて素晴らしきかな」

「そうね、可愛い後輩が出来て私も嬉しいわ」

そうして皆が見守る中でまたパフエを頼み始めたイヴを見た全員は将来有望な若者がまた1人増えた事を喜び、特にヨナは可愛らしい後輩が出来た事に嬉しさが満点であり、此れからの非日常の後にある掛け替えの無い日常に彩りが更に加わった事に笑みを溢すのだった。

そしてそれはヨナ達のみならず、B・Y・達もそうであった……。

こうして、1人の特別な力も無い『母親』の限り無き愛と、様々な人の生き様により1人の少女は生物兵器から『人間』へと変わり、その出自に囚われずに生きる事が許された。

そして、それからのそれぞれの動向について。

「大人しくしろテロリスト共。

お前達は全員逮捕する」

レオン・S・ケネディはDSOとして戦いに身を投じ、時に葵達を助けたり助けられたりを繰り返しながら、また今日もバイオテロリストを逮捕して行く。

その中には犠牲になる者も居たが、レオンの手により救われた命も多く、彼はもう2度と挫折し、酒に溺れる事無くこの呪いとも呼べる戦い抜く事となるだろう。

その心に確かな正義感や使命を宿しながら。

「ふう、今日も1日任務完了です！

それにしてもゆかりさん、お義父さんに益々似て来たね」

「ふふ、ありがとうあかりちゃん」

結月ゆかり、継星あかりは今日もグラスホッパーでのスナイプを行いタイラントを含

めたB・O・W・を殲滅している。

その中でゆかりは葉巻等が似合う女性になり、その背中に未だ追い付けてないと思う
マグナ・グラスホッパーに益々似て来たと専らの評判だった。

そしてゆかりも、マグナに似て来た事を誇りに思い、あかりと共に狙撃の腕や格闘戦
技を磨くのであった。

「ええ、これでオーダーは終わりよ。

……じゃあ、次のオーダーを待つわ。

ふう、やっぱりレオン達が絡まないとつまらないわね」
「ですわね。」

あー、今からでもちよっかい掛けに行こうかな〜

エイダ・ウオン、京町セイカはH・C・F・で仕事を熟すが、レオン達が絡まないと
簡単過ぎて面白味が無くなる為やる気がやや落ち気味だった。

しかし、その分次に会う時の楽しみが増える為その日を心待ちにしながら再び闇の中

を暗躍するのだった。

その暗躍が世界に闇を齎すのか、或いはパンドラの箱の如く最後の希望になるかは彼女達しか知らない。

「はい、此れで肉体保全薬の定期注射は終わりよ。

今日も任務だから頑張つてね、イヴ」

「…うん、お母さんも頑張つてね」

ルナ・アーク、イヴはA・B・F。入隊後にイヴの戸籍を作り彼女は正式にE型菌を操れる少女『イヴ・アーク』として生きて行く事になり、そしてルナは医療で、イヴは特異菌の力を用いたオメガ小隊の新メンバーオメガ18として活躍して行く。

こうして今回の事件の中心人物2名は片方は娘への限り無い愛によりB・O・W。から人へと変わる土壌を作り上げ、もう片方は葵達が見せた様々な面、そして母の愛情

により人間に変わり母の愛は人型B・O・Wの未来をも変える事を証明したのだ。た。

そうしてイヴはまた今日も人間として任務を熟すのだった

「…………BSAAが怪しい動きをしている、か…………」

『アルファ』はクリスやB・Yの手紙からBSAAが何やらキナ臭い動きをしている事を察知。

何か大事になる前に調査をすべくきりたんに極秘裏にBSAAの極秘データのハッキングを行わせるのであった。

それらは全て、BSAAから感じたアンブレラ社と同じ臭いと直感から感じた焦燥感による物であった。

そしてその焦燥感が現実の物になるのは最早時間の問題でもあった。

「カトル兄様、今日も星が綺麗ですわね」

「ああ、こんな景色の良い場所を提供してくれたA・B・F.には感謝しか無いよ……何時か、イヴや彼女達に礼を言いたいな」

カトル・ダールトン、カトリ・ダールトン兄妹はダールトン家最後の2人としてダールトン城以上に景色が良く、しかし唯のコテージで余生を過ごしながらこの場所を提供したA・B・F.や救ってくれた葵達に何時かで会えたら礼を言いたいと口にしながら、星や月を眺めるのだった。

「……大隊長やB・Y・さんにマキさん、クリスさん達の頼みで調べ上げてますが……BSAAは一体何を考えているんですか……此れじゃあまるで……」

東北きりたんは『アルファ』、クリスに頼まれたB・Y・とマキ、そしてそのクリスの依頼でBSAAのダルウエイの対応、『イーサン・ウィンターズ』夫妻や『ゾイ・ベイカー』の扱い等を極秘に調べ上げ、今のBSAAがまるでかつてのアンブレラ社に似て来た事に一抹の不安を覚え、クリス達への情報の横流しをBSAAにバレずに行いながら隊員達のナビゲーションも熟す日々を送っていた。

「さあさあ、オメガ小队のお通りやで!!?」

「観念なさい、テロリスト達!!？」

琴葉茜、ヨナ・レテイシアはオメガ小隊ととしてバイオテロ激戦区を鎮圧し、またイラントクラスのB・O・Wを氷漬けにしては粉碎するコンビとして名を挙げる。

茜はT-Genesisが無くなるうとも戦い続けると決め、ヨナはA・B・Fへの貢献が大きかったがまだまだ贖罪の日々は続くのであった。

「……なんだろう、特異菌事件は未だ終わってない気がする。

そもそもE型特異菌は新種の菌類をコネクションが改良した物って資料にあった。

なら原種は何処に？

……きりたんに調査依頼、出そうかな？」

琴葉葵はE型特異菌が何処から来た物なのか、またその原種とはなんなのかと言う疑問をダールトン事件以来抱き続け、きりたんに調査依頼を持ち掛ける。

其処で同じ考えに至っていたクリス達はまだ動いている事を知り、自身も任務を遂行しながらきりたんから送られる資料を纏めるのだった。

そしてB・Y、弦巻マキは。

「……最早BSAAを信用出来ない。

俺達デルタチーム初期メンバーは離脱するが、極東支部の皆、後は任せたぞ」
「じゃあ行くよ隊長。

……『ハウンドウルフ隊』やクリスさん達と合流しよう」

2020年、クリスの頼みで続けていたが、遂にBSAA査察部にダルウェイ、東ヨーロッパや『イーサン・ウインターズ』夫妻の調査を続けていた事を目を付けられ謹慎処分を受ける。

しかし、其処で得られたBSAAの対応等から組織その物を信用出来なくなり、B・Y・達デルタチーム初期メンバーは協力してくれた極東支部の皆にBSAAの未来を託し、自身等は同じくBSAAを離脱したハウンドウルフ隊やクリスと合流を果たす。

「さて……A・B・F・やクリス達との極秘協力捜査開始だ。

この特異菌事件の元凶を、『ミランダ』の目的を洗い出すぞ、良いな？」

『了解！』

そして2部隊はPMCアンブレラやA・B・F.の極秘裏の協力を受けつつコネクション、更に特異菌事件の裏に隠れた元凶『マザー・ミランダ』が如何なる目的かを調査する。

そして、2021年2月。

その目的を洗い出した直後に東ヨーロッパに移住したウインターズ家に侵入したミランダの始末をするべく別任務中で来れなかったオメガ1、オメガ17達の代わりにオメガ16、成長したオメガ18を軍事顧問に添えてミランダに襲撃を仕掛けるのだった。

B I O H A Z A R D [V + α]

E p i s o d e o f r e s i d e n t e v i l S i d e s t o r y [M o t
h e r ' s a f f e c t i o n]

l l E N D l l

EPISODE OF VILLAGER [The story of a great father]

EP I 『巻き込まれたウィンターズ家と巻き込んだ葵達』

2020年、A・B・F.に1通の手紙が送付された。

其処にはきりたん達が調べ上げたBSAAの極秘データの数々に加えもう1通、中に隠された書類が添付されておりそれを葵達は目を通していた。

『――警告文――』

BSAA極東支部デルタチーム隊長B・Y、及び副隊長マキ・ツルマキへ。

君達がクリス・レッドフィールド同様ダルウェイに関する機密情報に無断アクセスを繰り返し、そしてその情報を第3者に漏らしている事は我々査察部は知っている。

これはB S A A内でも特に重罪であり、君達は我々の信頼を裏切っている』

その文字羅列は正に調べ上げた今のB S A Aその物であり、信頼を裏切ったのは寧ろB S A A側だと葵達は憤っていたが、その続きを更に読み何が書かれて居るかをじっくりと見た。

『よってC L O W N事件解決の功労者ではあるが、B S A A 査察部は君達に半年の謹慎処分、更にデルタチームの解散、そして何処に情報を横流しにしたのか、更に東ヨーロッパで何をしようとしているか告白して貰う。

さもなければB S A Aからの除名と更なる重罪を課す事になる。

もう一度言う、何処の第3者に機密情報を漏らした？

君達が言う『ミランダ』とは誰だ？

3ヶ月以内の回答が無い場合上記の重罪を課す事となる、それを肝に銘じ良く考えて行動する様に。

B S A A 査察部よりー』

「……………巫山戯てる!!？」

BSAA側もダルウエイの事件が自分達のミスで起きた事を隠蔽工作した癖にクリスさんやB・Y・さん達に……!!?」

「葵さん落ち着いて、私達も同じ気持ちですが、恐らくこれにも……」

葵は2017年のダルウエイで起きたベイカー邸事件の真相がBSAAがE型被験体第1号『エヴリン』を取り逃がした事から端を発している事を隠蔽し、硫化水素ガス噴出事故に挿げ替え『イーサン・ウィンターズ』夫妻軟禁や唯一の生存者『ゾイ・ベイカー』を死亡したものとした資料がクリス達から送られて来ていた。

そしてB・Y・達の様な警告文をクリスは受け取り、裏面に一文を添えていた為ゆかりが宥めた後葵達もその裏を見た。

『……………』

そして食堂に集まった葵、茜、ゆかり、あかり、ヨナ、更に東北三姉妹やカルロスやビリー、イヴ達は皆その裏面を見て矢張りかと思いながらその文面を見ていた。

其処にはこう書かれていた。

『BSAAは最早信用出来ない、俺達デルタチーム初期メンバーはHWに合流する』

「B・Y・、マキ……」

「…まさかお義父さんが言っていた事が現実になるなんて……」

「クリスマスさんもH.W.、『ハウンドウルフ隊』を伴ってB.S.A.A.を離脱してもうてる。

なら、ウチ等も腹あ括って行くしか無いんちゃうか、大隊長？」

ヨナはB.Y. やマキの心配をし、あかりはマグナが6年前に忠告した事が現実になった事に様々な感情を抱き、そして茜はA.B.F. は腹を括る必要があると話し『アルファ』を見ながら指示を待っていた。

「…クリスマス、そしてデルタチーム初期メンバーと言う信頼と信用の置ける同志がB.S.A.A.から離反した、此れは最早看過出来ない事態である。

よって我々A.B.F. はB.S.A.A.と一旦距離を置きつつ、彼等の動向を探る必要がある。

そして、クリスマス達への支援を秘密裏に行いつつ我々の使命を果たそう。

各員配置に付け、此れより24時間体制で行動をする!!？」

『了解!!?』

大隊長『アルファ』は各員に24時間体制で配置に付き、A.B.F. の使命であるバイオテロ根絶をしつつB.S.A.A.の動向を探り、そしてクリスマス達への支援を極秘に行う事が決定し、食堂に集まった全員は食事を摂った後直ぐ様動き出し始めた。

その中には無論ハッキングのプロにして未だB.S.A.A.に機密を抜いた事がバレてい

ないきりたんにオメガ小隊全員の姿もあった。

「…アオイ……」

「大丈夫だよイヴちゃん…そう、大丈夫……」

そして3年間で相応の成長をして葵を心配するイヴに、すっかり大人の女性になるが、まるで自分に言い聞かせる様に大丈夫と言う葵はマキ達の支援が無事通る事を祈りながら任務に赴きつつBSAAに対する不信感を募らせて行くのだった。

そして2021年2月、クリスやB. Y. 達の調査により特異菌事件の裏に居た東ヨーロッパのある村とその教祖にして特異菌を操り、エヴリンを遥かに上回る生体兵器と化した女『マザー・ミランダ』の狙いはウインターズ夫妻から生まれ、BSAAが隠していた極秘情報であるエヴリンの力を継ぎ、それを上回る生後半年の女の子、『ローズ・マリィ・ウインターズ』の誘拐であることを突き止めた。

「クリスさん、マキさん、B. Y. さん、今行きます…!」

更にミランダは特異菌の力から得た擬態能力で『ミア・ウインターズ』に化け侵入しようとしている言う報告があり、A. B. F. も一刻も猶予が無いと判断してベード、イブシロン小隊、更にクリス達の強い要請によりオメガ小隊がミランダの処断作戦に参

加する事になった。

だが間の悪い事にオメガ小隊は葵、イヴを念の為待機させて残りは別任務に向かった後であった。

しかしそれでもクリスマス達の要請、そして未だ見ぬウィンターズ家を救うべくオメガ16、オメガ18はベータ、イプシロンに随伴し、現地に赴くのであった。

そして現地の日が沈んだ夜、闇夜に紛れてウィンターズ邸を囲んだハウンドウルフ隊、デルタチーム、そしてA. B. F. 3小隊は息を潜めながら合流する。

「クリスさん、マキさん、B. Y. さん、久し振り。」

……出来ればもつと良い形で会いたかったよ」

「それは俺達も同じ気持ちだアオイ。」

しかしオメガ小隊が君や…元E型被験体のイヴ、いや、オメガ18しか居ないのが懸念材料だが…：兎に角作戦概要を伝える。

全員通信を開け」

そして葵とイヴは険しい表情になっていたが、かつて共に戦った面影があるクリスや、成長したB・Y・やマキ達と再会や初対面を果たし、そして通信機を開き全隊員に作戦概要を伝え始めた。

「作戦は迅速的襲撃作戦だ。

保護対象のイーサン・ウインターズが同じく保護対象のローズマリー・ウインターズを2階に寝かし付けた後、ミアに化したミランダを銃撃。

そのまま奴を殺し、イーサンとローズが感染してないかサイトCに移送し検査を行う」

葵とイヴは作戦概要を聞き、ふとこの作戦にイーサン側に何か裏打ちで伝えていないのだろうかと言う事を懸念し、マキ達を見るとお手上げをし、葵が敢えてA・B・F.を代表してハウンドウルフ隊隊長アルファのクリスに質問をする。

「クリスさん、それはイーサンさんにお伝えしてますか？」

「いや、していない。」

時間が無さ過ぎた、ミランダが此処まで早く動き出し、そしてウインターズ家

に侵入するとは思わなかった。

更にミランダが特異菌を感染させた疑いがある上に、迂闊にイーサンに伝えればミランダにバレて強行策を取られ兼ねない。

よって俺達からは『現時点』でイーサンには何も伝えていない」

葵のイーサンに伝えたか否かと言う質問に対してクリスは時間の猶予の無さ、感染の疑い、更には迂闊に伝えた場合に発生し得る強行策等の危険性等を伝え、葵はそれ等を聞きあのCLOWN事件で勇敢さを見せた葵達の『英雄』であるクリスが此処まで焦る事態になっている事を察し、何も言えなくなり目を伏せていた。

「……だが、B・Y・達との話し合いで移送開始直前、つまり襲撃で奴を仕留めた後に伝えられる限りの事……今のウィンターズ家内部が危険な事、彼等が特異菌に感染させられた疑いがあり移送しなければならぬ事を伝える事にしてある」

「！」

それ本当ですか！」

「うん、クリスさん折らせるのに一悶着があったけどね。」

見なよバカ隊長の頬、クリスさんに思いつき殴られた痕だから」

するとクリスは移送開始直前にイーサンにある程度の説明を行いつつ移送を行うと口にし、葵はバツと顔を上げて何時ものクリス『らしさ』がこの猶予が無い事態でもま

だ出ている事に明るさを取り戻す。

すると補足としてマキがB・Y.とクリスが喧嘩になった事を伝えてその頬に絆創膏、更に唇が切れた痕を見せB・Y.本人は殴られ損な顔をしていた。

『隊長、イーサンがローズを抱えて2階に上がり始めたぞ。』

作戦開始だ』

！

此方も了解した『ケイナイン』！

……B・Y.、止めの為に俺に付いて来てくれ。

俺は口下手だからな」

「ちっ、しゃあねえ。

憎まれ役を買ってやるよ」

すると通信からハウンドウルフ隊の通信兵ケイナインの報告が上がり、作戦開始を全員に伝える。

それを聞いたクリスは止めに説明役でもあるB・Y.を伴う事を告げ、そのB・Y.もBSAAからの退職金代わりに頂いて来た愛用カスタムガバメントのスライドを引き、憎まれ役を買う事になった。

「オメガ16、オメガ18、私達も狙撃後は中に突入。

ローズちゃんの確保を最優先にするよ」

「了解しました、デルタ2。」

オメガ18、配置に着くよ」

「…了解」

そして葵達も互いにコールネームで呼び合い、気を引き締めて葵達はA・B・F・制作に暗視兼サーマルゴーグルを取り付け、マキはハウンドウルフ隊と同じゴーグルを付け狙撃態勢に映った。

『よし、目標がイーサンから良い位置に離れてる……3、2、1、Fire!!?』

『ピシユンツ!!?』

ピピピピピピピピピシユンツ!!?』

ハウンドウルフ隊の『アンバーアイズ』からの狙撃タイミング指示により取り囲んだそれぞれの隊、葵やイヴ、マキはミランダに銃弾を撃ち込み続け、彼女が倒れる様をまじまじと見ていた。

しかしその中で葵達は気付いていた、『ミランダは最初の狙撃を意に介していなかった』と言う化物特有の耐久力を見せた事を。

『クリス、何でお前が?!?』

『悪いな、イーサン』

『目標確認、始末する』

『止めろ!!?』

……そんな、どうして……!!?』

そして通信先でクリス、B・Y・がミランダに止めを入れた事を音声、銃声込みで察知し、マキと葵達は急ぎ2階に駆け込みローズを確保する。

「おぎやあ、えああん!!?」

「ごめんねローズちゃん、少しの辛抱だから我慢してね……」

葵は泣き始めたローズに頭を優しく撫でながら声を掛け、階段をマキとイヴ、クリス達の部隊員達と共に降りて行き、其処で暴れない様に囲まれながら立たされたイーサン・ウィンターズを初めて目撃する。

その男は見た目は本当にごく一般のアメリカ人であり、しかしイケメンかと言えばイケメンな36歳の男であった。

「異常無し」

「ローズ……おい娘に何を……!!?」

ハウンドウルフの1人の隊員がクリス、B・Y・に報告を入れ、再びローズが泣き出すとイーサンは激昂しながら2人や葵達に駆け寄り今にも殴り掛かりそうな剣幕を張っていた。

「……………」

あれ、この人………」

そんなイーサンを見てイヴは何かを感じ取りながらイーサンをじっと見つめ、この『感覚』がもし本当にそうなら何故ローズがエヴリンを上回る力を持ちながら生まれたのかを自然と察していた

「確保しました、どうぞ」

「ローズちゃんにも今の所異常は見当たりません、アルファ」

隊員がクリスにローズを引き渡すと葵はローズに異常は今の所は見当たらないと報告し、しかし相手は特異菌を操るミランダの為、彼女が死のうとも予断は許されない状況下にありクリスは移送準備、B・Y.は何とか話をしようとしていた。

「おいローズに触るな!!?」

「待てイーサン・ウィンターズ、今ウィンターズ家内部は危険なんだ！

頼むから黙って付いて来てくれ！」

「危険だと、ミアを殺したクソ野郎共が!!?」

お前等が居る方がずつとローズが危険だ!!?」

さつさとローズを離せ!!?」

イーサンは案の定ローズを抱き抱えたクリスに激昂して飛び掛かろうとしたが、B.

Y. が間に入り此処は危険と話して宥めようとしたがイーサンには意味が無く握り拳を作りB・Y. を殴ろうとしていた。

「危険なのはローズだけじゃ無くてアンタもだよイーサン！」

アンタに何も知らせなかつたのは悪かつた！

けど時間が無さ過ぎたしアンタも、ローズも特異菌に感染してるかも知れないんだ!!?

頼むから付いて来てくれ!!?」

「特異菌…感染…何の事だよ、そんな事を言つて誤魔化そうつたつてそうは」

「イーサン、止めとけ」

B・Y. はそんなイーサンを見て危険なのは2人共、特異菌に再び感染した可能性がある事を伝えて付いて来る様に懇願する。

するとイーサンの脳裏に3年前の『ベーカー邸事件』、エヴリンの悪夢が蘇るが、それを振り払いこの2人は誤魔化そうとしてると決め付けローズを取り返そうとした瞬間、クリスから一言止めとけと言う言葉が飛んだ。

『ガツ!!?』

「ぐあつ……………ローズ……………!!?」

「……………運び出せ」

すると背後からハウンドウルフ隊員が近付き、銃で殴り付けてイーサンを気絶させてクリスはそのイーサンを運び出す様に指示した。

此れには葵も一刻を争う任務だから仕方ないが半分、もう少し良くならなかったと言うのが半分な感情を抱き、葵は自身が嫌な大人になったものだど内心自己嫌悪しながらイーサンとローズが護送車に入れられる姿を見ていた。

「……デルタ2、オメガ16、オメガ18、車を一台貸すからイーサン達の車の後ろを付いて行ってくれ。

サイトCでもっと上手く説明するならお前達が適任の筈だ」

「すまんクリス、マキ、皆。

もっとと上手く説明出来れば良かったんだが……思ったより口下手だったわ、俺」

クリスは念の為葵達に護送車の後を付いて行く様に指示し、サイトC到着後に更に上手く説明する様に頼み込み、B・Yは全員に思ったより口下手だったと自己嫌悪に陥り頭を掻いていた。

「……でも、化けてる偽物とは言え奥さんと同じ姿の人を殺されたら、ああなるから仕方無いと思う」

だが、あの様子ではまたB・Yの説明不足では無くイーサンが上手く聞いてくれる

状態では無かったとフォローに回ったイヴは、ある事を確かめたいと思つていた所だつた為渡りに船となり随伴車に自身等の武器弾薬を後部貨物に入れ助手席に乗り始めた。

「はあ、嫌な大人になつたな、私」

「それめっちゃ私にもぶつ刺さつてるよ葵」

更に葵は自身を嫌な大人になつたと思ひながら運転席に乗り込むと、後部座席に乗り込み出したマキは自身も嫌な大人になつたと思ひながらシートベルトを締め、そして護送車が発進し始めた瞬間アクセルを踏み後ろにピツタリと付いて行くのだつた。

そして雪道を進む事数時間、イーサン達の安全、且つ迅速な移動の為に夜明け前の暗闇に包まれた森を2台の車のライトで照らしながらスリップを起こさない程度のスピードで走つていた。

「目的地まで後数十分位かな。」

…それにしても、ミランダがミアさんに化けたなら、本物のミアさんは何処に

？」

「……………多分、生かして置く必要なんか無いだろうから…………」

「…………」

運転しながら葵はミランダが化けていた対象である本物のミア・ウィンターズは何処に行つたと疑問符を浮かべるが、マキは葵達も何処かで考えている事を口にし、ミアの生存は絶望視しか無いと嫌でも思わせられ、既に死んだミランダに対する怒りが沸々と湧き始めハンドルに力が入って行く。

だが……………此処で予想だにしない事態が発生する。

『ギユアアアア、ズガアアアンツ!!?』

「つ、きやあつ!!?」

『ギユルルルルル、ズガアアアアアンツ!!?』

何と前を走っていた護送車が横転し、添乗していた武装兵やイーサンが外に投げ出され、更にその後ろを走っていた葵達もまた巻き込まれない為に急ハンドルを切つた為横転。

同席していたマキ、イヴは頭を打ち気絶してしまい葵もウィルス完全適応者の耐久力

で気絶まではしなかったが、ダメージが思ったよりも受けてしまい動けなくなってしまう。

「(うう……一体何が……)」

「はははは、予定外な事が起きたが……遂にローズを手にしたぞ……」

「おぎやあ、えああん、うあああん!!？」

すると葵の目には護送車の中から資料にあつた黒装束の女……確かに殺した筈の、ミアに化したミランダが蘇生し、擬態を解きローズに手を伸ばしていた。

「(ま、拙いローズちゃんか……でもまだ生きてるかも知れないイーサンさん達にマキさん達の事を考えたら、迂闊に動けない……!!?)」

葵は目の前で起きた凶行をマキ達や車から投げ出された隊員やイーサンを見過ごす事が出来ずにローズかマキやイーサン達の命を天秤に掛け、迂闊に動けば助けられる命が逆に救えない事を考えてしまい動こうにも動けずにいた。

「……………ふん、失敗作如きめ」

するとミランダは葵……と言うより、助手席のイヴを見ながら失敗作と謗るとローズを抱き抱えてそのまま奥の森へと姿を消して行った。

それから念を入れてミランダが完全に去ったと思う10分以上経過した後イーサン達の安否をしようとシートベルトを外し、マキやイヴも横転した車に上手く寝かせな

「がらイーサン達の安否確認へと動いた。

「……痛う、駄目、クリスさんの添乗した部下の人達は皆死んでる……。」

夜明けまで後1時間、まさか夜明け前が油断し易いを実行させられるなんて

……!!?

兎に角、生きている3人を温めないで。

持つてて良かった緊急用テント……」

葵は1人、イーサン達の安否確認をしてイーサンのみが生きている事を確認した後、横転した車の後部貨物から緊急用テントを武器弾薬をガラガラと落としながら取り出し、そのまま広げてイーサン、マキ、イヴの3人を手当てしながらテント内で寝かせて自身は武器と通信タブレットの確認をしていた。

「……良かった、私達の武器もタブレットも無事だ。」

夜明けまで残り40分、クリスさん達に連絡しないと」

葵は全てが無事な事を確認した後武器弾薬も雪の上では無く護送車内に詰め込み、次にテント内に入り込みクリスに連絡を取るべくタブレット端末を取り出し、通話をタップした後予め教えて貰った通話先である『Alpha』をスライドし、緊急通話を掛けた。

なお向こうには葵の通話名は『Ω16』となっている。

『アオイか、そろそろサイトCに到着する予定時刻だが、何かあったのか?』

「はい、クリスさん……申し訳ありません。」

護送車が、収容していた殺害対象のミランダが蘇生して、襲われ横転しました

…

『何だと?!?』

クリスは葵からの連絡に何か不安を感じ取ったのか連絡に直ぐに出て何かあったのかを問い質して来ると、葵は始末した筈のミランダが蘇生し、護送車襲撃を話しこれを知ったクリスには寝耳に水であった。

まさかあれだけ全身に狙撃した上にB・Yのフルオートガバメントと合わせて頭部に10発を超える弾丸を止めに入れたのに生きていた為である。

「更に、ミランダは目的通りにローズマリー・ウィンターズを誘拐、恐らくこの地点から察するに……クリスさん達が監視していた『村』へ戻ってしまってます」

『アオイ、お前はそれを見ていたのか?』

なら何故止めなかった?!?』

「現場には気絶したマキさん達以外に貴方の部下やイーサンさんの安否確認をする必要があったんです、それで気絶ないし死んだフリをするしか……」

更にミランダが当初の予定通りにローズを誘拐した事を報告し、クリスは何故止めな

かったと返して来るが葵もマキ達の命以外にイーサン達の安否確認をする為に自身も気絶したフリをしてやり過ぎすしか無かったと話し、クリスは通話先で壁を叩いていた事が音で分かる。

『落ち着けアルファ。』

オメガ16、此方デルタ1だ。

デルタ2にオメガ18は気絶中なんだよな？

ならアルファの部下は、イーサン・ウィンターズは無事なのか？』

「B・Y・さ……いえ、デルタ1。」

アルファの部下は運転手、添乗した武装兵2名の死亡を確認。

ですが、保護対象のイーサン・ウィンターズはデルタ2達と同じく幸いな事に気絶で済んでいます」

通話先でB・Y・がクリスを宥めながら通話を代わり、淡々と添乗したクリスの部下やイーサンの安否確認をすると、葵もコールネームを使いイーサンのみが無事だった事を伝え、通話先では落胆と安堵が入り乱れた溜め息が2つ吐かれていた。

「う、うう……葵、此処は……？」

「デルタ2、目が覚めたんですね!!？」

先程車が横転したのは覚えてますか!？」

「…うん、派手に横転して頭ぶつめたよ…って、ウィンターズさんにイヴ？」

ちよつと葵、私が気絶した間に何が!?!?」

其処にマキも目覚め、横転した事を覚えているのも確認した後イーサンとイヴが横になつている事を見る。

その瞬間マキは慌てて状況確認をして来た為、葵はクリス達に説明した内容と同じ事を伝える。

「…そんな、あの女、まさか死体に擬態を？」

そして素でタイラントクラスかそれ以上の耐久力と生命力があった訳なの…：いや、悔やんでも仕方無いか。

隊長、アルファ、此方デルタ2、状況確認終了しました」

『デルタ2、通話で確認した。』

なら俺達は今からそちらに向かいローズ奪還とイーサンの保護をする。

デルタ2はオメガ16、オメガ18と共にその場で待機を」

マキはミランダの死体への擬態と言う予測、更に本当の化物クラスの生命力を有した事に少し悔やんだが、頬を叩きクリスに葵の通信タブレットから連絡を入れる。

そのクリスは今から部隊を伴いイーサンの保護とローズ奪還をする作戦を立て、マキもそれに一瞬従おうとした瞬間、葵がタブレットを自身の側に寄せ反論を行ない始め

た。

「そんな悠長な時間は残されていませんよアルファ。」

私達はこれからミランダからローズマリーを奪還する先行隊として『村』に行きます。

貴方は私達に合流する様に行動して下さい！」

『何だと!?!?』

お前達だけでローズ奪還は無茶だ!!?』

そもそもイーサンは如何する気なんだ!!?』

葵は最早先程以上に猶予が無い事を口にし、この場に居る自分達が先行隊となりローズ奪還を図り、クリス達はそれに合流する様に反論をする。

するとクリスは無茶だと言い放ち、更に保護対象のイーサンは如何するかとクリス側の反論をし、その場に置いてけぼりに葵がする訳無い為彼の扱いを問い質したのだ

それに葵は一呼吸入れ、応え始めた。

「:イーサン・ウィンターズの扱いです、彼を一人にする訳には行かない為我々に随伴させ、共にローズマリー・ウィンターズ奪還を図ります」

『何だと!?!?』

アオイ、お前は民間人を巻き込む気なのか!?!?』

葵はクリスがかもしかしたらと懸念した事：イーサンを共に連れて行き、そのままローズ奪還を狙うと言う民間人を巻き込む事をやらかすと言う不祥事驀地な事をやらかす事を告げる。

それを聞いたクリスは当然それに対して激情するが、葵は何時もの屁理屈込みの理論武装で反論を仕掛ける。

「彼をこの場に置いて行く訳にはならず、更に先程以上の猶予が無い事態になりました！」

それに、ミランダが誘拐したローズちゃんはいーサンさんの娘です！

最早彼は赤の他人じゃない、当事者なんです!!?

彼には何が起きたか知る権利と、娘さんを取り返す権利があります!!?

だからクリスさん、私は貴方達の反対を押し切つてでもこの判断を貫かせて貰いますよ!!?」

葵は猶予無し、イーサンの置いてけぼりは論外としつつミランダが誰を誘拐したのか改めて言い放ち、7年前の自身と同じく真実を知る権利やローズと言う掛け替えの無い娘を取り戻す権利を主張して真つ向からクリスと対立していた。

「…此れは民間人を巻き込みたく無い、自分達だけで決着をつけたいクリスさんに昔の葵みたいな状況を案じた葵の意見の正しさはいーブン。

けどウィンターズさんを巻き込むリスクがあるけど、クリスマス達は如何するかな……?」

これをカスタムショットガン等を手入れし始めながら黙って聞いていたマキは、流石にこの場面ではクリスの言い分も葵の言い分も正しくあり、同時に葵のはイーサンを最悪死なせるハイリスクがあると思いきりクリス達がどんな判断を下すか分からずに居た。

そして彼等の判断1つで自身の立ち位置を決めようとしていた。

『……だが、イーサンを巻き込むのは……』

『アルファ、残念だがローズマリー誘拐の時点でもうイーサン・ウィンターズは巻き込まれた、巻き込んでしまったんだ。』

此処は葵の言う通り猶予が無いんだからその通りにさせるべきだ、但しイーサンを必ず守る様に言い付けながらな』

そんな中でもクリスはイーサンの身を案じる余り答えを出し切れずに居たが、其処にB・Y・のアシストが入りイーサンは既に巻き込まれた立場にあり、最早巻き込む云々の議論が無駄な事を彼に察する様にする。

そして葵の言う通り議論している猶予も無い為葵の案を飲み、しかしイーサンを必ず守る様に言い付けると言いながらそれを第2目標に指定したのを葵は察せた。

『……分かった、ならオメガ16はアルタ2達と共にイーサンを伴いローズ奪還を図

れ。

だがミランダはお前達だけでは勝てない、だから俺達が来るまでは奴との戦いは避けるんだ、良いな?」

「了解ですアルファ、では此れよりオメガ18とイーサンの意識が回復次第行動を――」

「う、うう……如何なってる……?」

そうしてクリスは、この場と通話先に居るCLOWN事件を解決した仲間達や元E型被験体だったイヴを信じ、漸く葵の案に首を縦に振りつつ、ミランダとの戦いだけは絶対避ける様に言付けし葵もそれに了承、イヴとイーサンの目が覚め次第行動開始と言おうとした所でイーサンが目を覚まし始め、更にイヴも静かに同時に目を覚ました。

「イーサンとオメガ18の意識回復を確認しました。」

此れより彼に状況説明しながら行動します。

……イーサン・ウインターズさん、意識はハッキリしてますか?」

「お前達は……ああ、ミアを殺して、ローズを攫ったクソ野郎達の仲間だ!!?」

おいお前等、よくもミアを殺したな!!?」

それにローズは、俺の娘は何処にやった!!?」

葵はイーサンとイヴの意識が回復した為通話を切り、彼に意識がハッキリしてるかと

問うと数時間前の事を思い返しミアに化けたミランダの殺害、及びローズを連れ去ったクリス達の仲間だと認識し、ローズを何処に連れて行ったかと騒ぎ始め女だろうと容赦無く殴る剣幕で葵の首根っこを掴んでいた。

「ちよつと待ちなつてウィンターズさん、私達の話を」

「黙れ、誰が妻を殺した連中の話を聞くか!!？」

さつさとローズの居場所を吐け!!？」

「…イーサンさん、その事についてお伝えしたい事が幾つもありますので先ずは落ちて置いて下さい。」

私を殴るならその後で」

マキは興奮し過ぎたイーサンを葵から引き剥がそうと間には入ろうとし、イヴはそれ等の様子を見ながら武器の手入れを始める。

そしてイーサンはマキ達の話の聞く気が0で葵にローズの居場所を吐く様に迫り、正に娘を取り返そうとする父の姿を見せていた。

そんなイーサンに葵は伝えるべき事が幾つもあると話しながらその手を包み、冷静且つ相手を刺激しない様に話し掛けていた。

「伝えたい事だど？」

「一体どんな言い訳がしたいんだクソ女共!!？」

対してイーサンは葵達を罵りながら葵の『言い訳』を取り敢えず聞いてから殴る気になり、葵にそれを言わせようと片手を離し握り拳を作っていた。

「先ず状況が切迫話まっつてしまっているので端的に言います。

貴方の娘のローズちゃんは……『敵』に攫われました」

「……何……!?？」

そして葵は猶予が無い事態に陥っている為、初めに言うべき事であるローズの今現在の状況を端的に、『敵』に攫われたと口にする。

それを聞いたイーサンは殴ろうと言う気が吹き飛び何が起きているのか頭の理解が追いつかず、驚きの余り作っていた拳が緩んでしまった。

そして葵は其処から状況を開示して行き、ローズを奪還する話の道筋を頭の中で作るのであった。

——この物語は、やや本筋から外れてしまった、然しただ一人の娘と妻を救い出すとうとする偉大な父の姿を、葵達はその目に焼き付ける物語である。

BIOHAZARD [V+α]

EPISODE OF VILLAGER [The story of a great

f
a
t
h
e
r
】

E P I I 『現状把握と『村』とライカン』

『Pillllllllllll!』

夕刻にて、ローズを寝かしつける妻のミアと共に居たイーサンは側に置いていたタブレット端末から電話が鳴り始めた為それを手に取ると、其処にはローズの検査をしたくれた医師から電話と画面に表示されたので受信をスライドして電話に出る。

「先生」

『ウインターズさん、娘さんの診察結果について、お伝えしたい事があるので木曜の午後4時で、如何ですか?』

「分かりました、伺います」

如何やらローズの『検査』の結果が出たらしく木曜午後4時に何う予定になった様であった。

何故検査が必要かと言えば自身やミアはベイカー邸事件にてE型特異菌に感染し、その後治療を受けてからローズが生まれた為BSAAからも念の為検査を勧められ、東ヨーロッパに引越してから生まれた我が子の専属医師を紹介されたのである。

「先生からだ、来週来いって」

ローズを寝かし付けた後ミアはイーサンの近場に座り、電話の内容を聞いていた……が、何処か浮かない顔をしておりイーサンは少しそれが気になり声を掛ける。

「なあミア、悪く考えるなよ、もう話し合っただろ？」

「そうね、此処のとこその話ばかり」

イーサンはローズは心配無いと思いつつながらミアに話しかけていた。

が、彼女の口からは自身の考えとは全く違う答えが返って来る。

「何度も言ってるわよね？」

心配なのはローズじゃないって」

「じゃあ何が心配なんだ？」

ミア：…ローズならあの通り元気だろ？」

何が問題だ？」

イーサンはミアが何を心配し浮かないのか分からず、ややヒステリック気味になっている彼女を気に掛けローズは心配要らないとした上で何が問題なのかと部屋から出ようとする彼女を呼び止める。

「私達の事よイーサン！」

貴方は…分かってない！

分かってないの…！」

「ミア、何の話だ？」

何かあるなら話せよ、なあ言ってくれよ」

だがミアはイーサンに対して問題なのは自分達で、イーサン自身が理解していないと叫び出してしまふ。

それをイーサンは困惑しながら話を聞こうとしたが、懐に仕舞ったタブレットから再び電話が鳴り始めてしまふ。

「クソ、こんな時に……」

電話を取り出して相手を確認した後ミアはそのまま部屋を出て行ってしまふ。

そして部屋に残されたイーサンはこんなタイミングで電話を掛けて来た相手にウンザリしながら一旦溜め息を吐いていた。

「……そう、此れが貴方の記憶なのね。」

イーサン・ウインターズさん」

「っ……」

すると背後から聞いた事の無い少女の声が出た為イーサンは驚いて振り返ってしまふ。

と言うのもイーサンは、声は違うが『雰囲気』が似通った物があつた為またあの悪夢の存在が再来したのかと思つたからだ。

そう、ベイカー邸事件の原因たる生物兵器エヴリンが。

「……エヴリン、じゃ無い……?」

しかし其処に居たのは黒髪が特徴だったエヴリンでは無く、金髪で赤目が特徴の迷彩服と小さな体格に合う様にオーダーされたのだろう一般サイズでは無い防護ジャケツトを着た少女が立っていたのだ。

「……お前は、一体誰なんだ?」

「……私の事は起きてから分かるから、早く起きよう、イーサン・ウィンターズさん?」
イーサンは少女を何者かと問うと『起きたら分かる』と返され、更に起きる様に促された瞬間、此れは自分の夢なのだと自覚し始め意識が夢から遠退いて行く。

しかし自分の夢ならあの知らない少女は誰かと疑問が残りながら、イーサンは意識を浮上させるのだった。

「う、うう……如何なってる……?」

「イーサンとオメガ18の意識回復を確認しました。

此れより状況説明しながら行動します。

……イーサン・ウインターズさん、意識はハッキリしてますか？」

イーサンは見知らぬ簡易テント内で目覚めると青髪と赤目が特徴の女が電話を切り、自身に話し掛けて来る。

その周りを見れば右隣には目の前の女と金髪の女が、更に左隣には先程の夢に出た少女と瓜二つ……と言うよりそのままの少女が自分と同じタイミングで起き上がっていた。

そしてイーサンは気付く、この女達は最愛の妻ミアを殺し、更に愛しき娘ローズを攫ったクリスの仲間だと。

「お前達は……ああ、ミアを殺して、ローズを攫ったクソ野郎達の仲間だ!!？」

おいお前等、よくもミアを殺したな!!？」

それにローズは、俺の娘は何処にやった!!？」

イーサンはミアを殺され、更にローズを攫われた怒りから初めに話し掛けて来た女の首根っこを掴み掛かり、ローズの居場所を吐かせようと剣幕を張った。

「ちよつと待ちなつてウインターズさん、私達の話を」

「黙れ、誰が妻を殺した連中の話を聞くか!!？」

さっさとローズの居場所を吐け!!？」

金髪の女がイーサンと青髪の女の仲裁に入るが、怒りのままに掴み掛かるイーサンには全くの無意味であり更にローズの居場所を吐く様に叫び出す。

すると青髪の女がイーサンの手を包み込みながら冷静に口を開き始めた（なお少女はテント内に合った武器の手入れをこの状況で行っていた）。

「…イーサンさん、その事についてお伝えしたい事が幾つもありますので落ち着いて下さい。

私を殴るならその後で」

「伝えたい事だと？」

一体どんな言い訳がしたいんだクソ女共!!?」

青髪の女はイーサンに伝える事が幾つもあると口にしたが、イーサン自身はそれを言い訳と捉え片手を離し、下らない事を言おう物ならその場で殴ってしまおうと周りの全員を含めクソ女と認定して拳を作り出す。

だが、その青髪の女から自身が全く予想だにしなかった事が真剣な表情で、その口から飛び出して来る。

「先ず状況が切迫話まっつてしまってますので端的に言います。

貴方の娘のローズちゃんは……『敵』に攫われました」

「……………何……………!!?」

青髪の女はローズが彼女達が『敵』と呼ぶ者に誘拐されたと口にし、イーサンは状況が掴めず思わず疑問の声を上げてしまう。

そうして此れがイーサン・ウィンターズにとってクリス達の仲間である女3人……琴葉葵、弦巻マキ、イヴとのファーストコンタクトとなった。

葵は武器の手入れを即時終了させ、懐炉をイーサンに渡してからテントの外に連れ出し横転した車、更に葵が並べた武装兵の遺体を見せ始めていた。

「此れは……一体、何なんだよ……」

「イーサンさん、私達は『敵』の殺害後、貴方やローズちゃんが特異菌に感染させられてないか検査をする為にサイトCと言う場所に移送途中でした。

しかし、始末したと思っていた『敵』は収容してた護送車内で蘇生、そのままローズちゃんを攫って行っただです」

イーサンはこの状況に困惑する中、葵は側に落ちていた作戦概要書をイーサンに見せながら状況を説明し、更にローズが攫われた方向を指差し、確かに其方に足跡等が付いていた。

だがイーサンの中で葵の語る始末した筈の『敵』が、ミアの為、そんな事が出来る訳が無いとして嘘を吐いていると思えば戦概要書を破り捨てながら再び怒りを向け始める。

「ミアにそんな事出来る訳が無いだろ！」

彼女は唯の人間だ!!？

お前達、やっぱり嘘を吐いているんじゃないだろうな!!？」

「うん、ミア・ウインターズさんには不可能だよ。」

だってこれやった奴、ミアさんに化けた『敵』がやったんだから」

「……何だつて？」

だがその怒りの言葉にマキは自身達の不手際を口酸つぱくする様にしながら此れをやった者はミアでは無くミアに化けた別人がやったと話し、それを聞いたイーサンは乾いた返事が出てしまいがちながらマキ達を見る。

「……アオイ、マキ、このまま此処で棒立ちしながら説明してたらローズが危ない。」

移動しながら話そう」

「そうだねイヴ。」

……イーサンさん、この先は危険ですので我々が用意した武器の中にある予備を渡します。

それで奥へ進みながら、事情を話します」

葵達が話す中、サジタリウスやデュランダルを装備したイヴが悠長にしてればローズが危ないと話し、それを聞いた葵達は自身等も武装しながらイーサンにデュランダルの予備を渡す。

対してイーサンは余りにゴツく基銃が分からなくなったそのマガジンを1度抜き、弾は45ACP弾を使つてると知りながらマガジンを入れてスライドを引き、葵達への警戒心を解かないまま進み始めた。

「……ああ、そう言えば自己紹介が未だでしたね。

私はA・B・F・オメガ小隊所属、オメガ16の琴葉葵です。

此方は同じくオメガ18のイヴ。

そして此方はデルタチーム所属のデルタ2、弦巻マキです。

改めてよろしく願います、イーサンさん」

「……さん付けは要らない」

すると葵は未だ自己紹介が済んでいなかった為自分達の所属、名を口にしながら夜明け前の凍える森を白い息を吐きながら話し掛けていた。

対してイーサンは名前の後にさん付けされるのは語呂が悪く、更に警戒心を解かずフレンドリーな形を取りたく無い為にさん付けを葵達に止めさせた。

そして雪道を歩く中で、葵は事情を話し始めた。

「先ず貴方と我々の認識の違いを解消します。

イーサン、私達は特異菌を操る『敵』を殺す為に追っていました。

その『敵』の目的が貴方の娘さんの拉致が目的で、生体兵器としての肉体に宿る擬態能力で奥さんに化けたソイツはウィンターズ家にまんまと侵入したんです」

「何？」

さつきから特異菌ってルイジアナと同じ……それにミアに化けたって、じゃあ本物のミアは何処に居るんだよ！」

葵は認識違いの解消の為、自身等の目的が特異菌を操る『敵』の存在の抹消と話し、更にソレがミアに擬態してウィンターズ家に侵入したとイーサンに話した。

するとイーサンは先程から特異菌と話してる葵にあのベイカー邸事件の記憶を呼び起こされた上に、その話が事実なら本物のミアは何処に居るかを聞いた。

「分からない、私等も奴を追ってる中でミアさんに化けたのを見て直ぐに対処に追われたから……それに奴の事だからミアさんが生存してる確率はかなり低いと思う……ごめんなさい……」

「そんな、ミア………だったら、だったらそのミアに化けたクソ野郎は誰なんだよ!!?」

何で俺に説明しなかったんだよ!!?」

その問い掛けにマキは『敵』がミアに化けたのを確認して対処に迫られた為本人の行方が分からず、更に『敵』が態々本人を生かす理由が無い、生存は絶望的と言う事実を口にしながら謝罪する。

イーサンはそれを聞き絶望に包まれながら憤り、『敵』の正体と事情説明無しについてを叫んでいた。

「……敵の名前は『マザー・ミランダ』、この先にある『村』を治める教祖で、私達E型被験体やE型特異菌事件の裏には犯罪組織コネクションと共にその名があった。

そしてイーサン、貴方に事情説明をしなかった理由はクリス的には巻き込みたく無い、自分達だけで決着をつけたかったからと、侵入を許してからは迂闊に裏打ちして強行策を取られたり貴方が感染させられたかも知れないから」

その憤りに有刺鉄線のカビのスコップで上げてイーサン達を潜らせたイヴが敵の名はミランダ、事情説明無しだった理由を一通り話すとイーサンは自身をE型被験体と話すイヴを見ながらエヴリンを幻視してしまう。

「お前、エヴリンと同じ……」

「……うん、エヴリンは第1号、私は第2号。

だけど優しくして強い人達が私に人の心とかを教えてくれたり、人間として生きて良いって救ってくれたの。」

「ただど……今は私の事より何故貴方達ウィンターズ家、ひいてはローズが狙われたか話さないとならない」

「イーサンはイヴに怯えた様子を見せるが、イヴは自身が人の心を持ち、更に人として生きて良いと救った者達が居た事を簡潔に話す。

「だがイヴ自身が何故ローズが狙われたかを話すと口にし、葵やイーサン達は何故か散乱する動物の死骸を無視しながら話を進め始める。」

「イーサン、ローズちゃんが狙われた理由はあの子が特別な『力』を持っていて、それをミランダに知られた所為なんです」

「ローズが、特別？」

「如何言う事だよ、B S A A や紹介された先生は何も異常は無いってー」

「そのB S A A が隠してたんだよ、検査の結果で力を持っている事を。」

「私達やクリスさんはそれを機密情報にアクセスして知ったんだけど、何故かミランダもそれを知ってしまっただけだよ」

「葵はローズが狙われた理由を『周りに敵が居る』事を察知しながら話し、対するイーサンは検査で異常はなかったと口にするが、元B S A A のマキが機密情報にアクセスしてそれを知った上でミランダにまで何故か知られたと話しながら一件の民家に辿り着き、葵達は『敵』を撤く目的で中に入りイーサンも続く。」

「何でローズがそんな……」

「……多分イーサン、貴方とE型菌に感染したミアの子だからだと思う。」

イーサン、多分2人の中に未だE型菌が残留してたんだと思う。

実際私と精神感应出来たし……そんな2人の子供だから特別だと思う。

ただ、私達もローズの力の実態全てを把握して無いけど」

イーサンはローズが何故そんな力を持つのかを呟くと、イヴはイーサンやミアの体内に未だE型菌が残留していた可能性を指摘し、先程の夢の中で精神感应が起きた為その可能性が否定出来ない物であり、故にローズが力を得たと憶測を話す。

但しその実態全てを把握していない事を添えながら話しつつ、葵達は物音がして血の跡が続く家の地下に向かっていた。

「……なあ、所で何でこんな場所に来るんだ？」

ローズを急いで見つけなきゃならないんだろ？」

「それは……さつきから黙ってましたが、私達敵に囲まれてるっぽいです。」

なのでそれを撒く為に……静かに！」

『ドガシヤアン、ガラガラドガアアツ!!?』

イーサンを地下に招いた後葵達は地下のタンスを開け鼠を出すと、『敵』からの追跡を撒く為にこの場に入ったと言おうとした瞬間、葵はイーサンの口を押さえると次に上の

階から『何か』が暴れる音が鳴り渡り、地下の屋根Ⅱ家の床が軋み思わず床抜けするかも知れない程の暴れ振りを『何か』がしていた。

「……音が止んだし、上には『何も居ない』、行きましょう」

その音が一通り鳴り渡り、一旦止むと葵はイーサンの口から手を離し3人は武器を構えながら歩き出そうとする。

「なあ、今上で暴れた何かが俺達を囲んだ敵か？」

「はい、私の透視能力で姿を確認した上でイーサンの身の安全の為撒く選択をした次第です。」

「……取り敢えず上にはもう居ないみたいなので出ましょう」

イーサンはたった今『何か』が暴れた事を葵達が言った囲んでた者かと問い掛け、葵も素直に認められると何故地下に入ったか理由を教えながら地上に続く階段を登り始める。

すると家の中が荒らされ、ダンスが倒れて床には更なる、今度は新鮮な血が付いており葵は家の中に入った時点で透視能力を使わなかったのを悔いた。

この家の家主を意図せず『デコイ』にしてしまったのだから。

「……葵、人は完璧じゃないんだ。」

だから悔いるよりも…」

「…そうだねマキさん。」

イーサン、少し下がって下さい。

ふんぬっ…！」

マキはこの家の状況から葵の考えを読み、完璧な人は居ないとフオローを入れると一呼吸置いてイーサンを下がらせ、倒れたタンスを持ち上げると音を立てない様に立て掛ける怪力を彼に見せた。

「お、おい。」

さつきお前…アオイは透視とか言ったり今の怪力と言い、まさか普通の人間じゃないのか？」

「よっと、はい。」

私はとあるウイルスに完全適応した者として、今みたいな事の他にも一つ使える物があります。

それでもまあ、B・O・Wとは違って人の倫理観を持ち合わせていますから…」

イーサンはたった今葵の見せた怪力や透視という単語から普通の人間じゃない、ベイカー家の様な存在かと思いきや、葵は簡潔にウイルス完全適応した存在だと説明し、

しかし生物兵器と違い倫理観を持ち合わせていると話しながら葵達3人がイーサンより先に先程まで無かった空いた穴から外に出て周りを念の為警戒する。

「…何もいないみたいだな。」

それで、そのミランダって奴が俺やローズを感染させた疑いがあるって話は如何したんだ？」

「……それだけど、私がE型菌を操れるからちよつと分かったんだけど、イーサンとローズの中にはこうやって間近に接触して、他の菌に感染してないって事が今分かったわ。」

だからそつちは杞憂だったから、今はローズ奪還が優先」

イーサンも外に出てデュランダルを構えてクリスにさせられた戦闘訓練で周りを警戒すると、辺りには何も居ない事を確認した後葵達にミランダが特異菌に感染させた疑いの件を聞くと、イヴがE型被験体の力で他の菌には感染してない、杞憂だった事を説明した上でローズ奪還が最優先だと話して柵を登り、雪の丘道を進み出した。

そして、夜が明け始め4人は小さな丘に辿り着くと城から鐘の音が鳴り響く『村』が見えた。

「此処は一体……」

「…ようこそイーサン、此処がマザー・ミランダが治める、クリスさん達が監視してい

た『村』です。

この何処かにローズちゃんはず、そして低い確率ですがミアさんも居る筈です、行きましょう」

イーサンがこの村が何処なのかと口にする、葵が此処こそがマザー・ミランダが治める『村』だと話し、更にこの村の何処かにローズやミアが居ると話すと、イーサンは未だ見ぬ敵であるミランダに敵意を、愛しき娘には取り戻すと言う決意を胸に葵を中心にした4人は丘を滑り落ち周りに家畜が死んでる異様な村内部に侵入を果たした。

「……があっ!!?」

「っ、イヴ如何したの!!?」

「おい、お前大丈夫か!!?」

するとイヴが村に入った瞬間頭を押さえながら苦しみ悶えて地面に倒れ伏し、葵やイーサン達は何が起きたのか分からずイヴに駆け寄る。

するとイヴは息を荒くしながら立ち上がり、葵の手を掴みながら立ち上がる。

「はあ、はあ、大丈夫……ただ、この村に入った瞬間。

私の特異菌ネットワーク形成能力が反応して薄らだけど……私が居たダールトン城を遥かに上回る意識情報が流れ込んで来てそれに当てられた……けど、思考をカットして何とか元の状態に戻った。

「ただどアオイ、マキ、イーサン、此処はクリス達の報告通り唯の村なんかじゃない…!!?」

イヴは如何やら特異菌ネットワークの力が無意識に反応してしまい、この村にイヴが囚われたダールトン城を遥かに超える意識情報が1度に流れ込んだ為に苦しんだ事を伝える。

現在は思考カッターを利用して普通に振る舞うが、この村は報告通り異常だと話して3人を警戒させる。

「…分かった。

だが、村なら人が居るはずだ…こんな変な光景だが、ローズを見た人が居るかもしれない。

アオイ、敵はミランダであって村人じゃないなら聞き込んでも良いか？」

「…はい、情報無しだとローズちゃんは探せない為村人に話を聞くのはアリです。

貴方の言う通り敵はミランダとその配下で村人では無いですから。

但し、ミランダへの敵意は隠して下さい。

この村の住人は特異菌の力によりミランダを崇拜する様に意識操作されると報告にありますから、波風立てて変な事になりたく無いです」

「(最も、その村人が『生きていれば』、何ですけどね…)」

イヴの話から此処はこの光景の更に何倍も異常だと理解したイーサンは、敵はあくまでミランダだから聞き込みをするかを問うと、葵はミランダの敵意を隠しながらOKと話して聞き込みを開始し始めようとした。

しかし葵やマキは長年バイオテロと戦い続けた勘からその村人が『生きていれば』と思いつつ、警戒しながら近場の家に入った。

「……誰も居ないのか？」

スープも温めっぱなしで周りは荒らされて……まさか、さつき俺達を取り囲んでいた『何か』が村人を……？」

「……ちよつと待つて下さい。」

透視能力を使って半径700メートル以内に『人』が居ないか確かめます」

イーサンは家の中すら異様な光景が広がっている事に一抹の不安を覚え、先程の家で暴れた何かが村人を襲ったのではと嫌な考えが過つてしまう。

すると葵は透視能力を使い半径700メートル以内に誰か居ないかを探し始める。するとその視界にショットガンを抱えて隠れる老人が映り……そして周りを先程の『敵』も居た。

「近場に生きてる人を見つけました、ショットガンを抱えてるお爺さんです。」

早めに行きましょう……但し物音を余り立てない様に。

矢張り『敵』が村を徘徊しています、それもかなりの数が……」

「マジかよ……分かった、アオイ、その爺さんのところに案内してくれよ」

葵はイーサン達に生きてる村人の存在と『敵』が徘徊している事を話すとマキ達は警戒心を最大限にし、イーサンは半信半疑で家の外に出てその場所を目指す。

すると目の前で何かが引き摺られる、ラジオが無造作に流れる、先程無視した様に山羊の頭が吊るされてたりする光景が広がっていた。

「何だよこれ……此れもお前が言う敵の仕業か？」

「恐らく。」

さて、着きましたので皆さん口裏を合わせて下さい。

私達3人は軍事演習中に逸れた者、イーサンは居なくなつた娘さんを探してたら遭難してゐる所を私達が見つけた、共に暖を取れる場所がないかを探した者と言つて下さい。

人を信用させるには嘘の中にある程度真実を交えた方が警戒され辛いですから」

イーサンは周りの光景の異常さを葵達が警戒した『敵』がやっているのかと聞き、葵は恐らくと答えた後口裏合わせをしてイーサンを保護した遭難者、自身らを軍事演習中に逸れた3人と設定を話し全員が領いてゆつくりと家の中に入る。

しかし3人は気付く、『血の臭い』がこの家からすると。

「…ん？」

このナイフ使えるな。

それに近場の木箱から……やっぱり、『回復薬』が入ってたぜ)」

するとイーサンは家の中でナイフを確認すると近場の木箱に何かを感じたのかそれを破壊すると『回復薬』…E型特異菌感染者や被験体が回復目的に使う薬液が出て来てイーサンはしたり顔になっていた。

それを見てたイヴは矢張りイーサンの体内にE型菌が残留してると思い、BSAAは何をしてたのかと内心憤りを覚えていた。

「さて……すみません、私達は軍事演習中に逸れた軍人3名と遭難者1名です、中に居る事は分かっていますのでどうか武器を下ろして話を聞いて下さい」

その間に葵、マキが家内のカーテン越しに設定した体の話を掛けると、中から本当にシヨットガンを抱えた老人が現れ、イーサンは葵の透視能力が本物だと分からされ内心マジかよと思いながらそれを見ていた。

「ほ、本当にアンタら、他所者だが軍人なのか？」

「はい、それで私達は遭難者を保護後に暖を取れる場所を探してましたが…この場所
で何があったんですか？」

「(…この人、やっぱり報告通り私のとは『何か違う』けど特異菌に…)」

老人は葵達に警戒していたが、其処にマキが葵の設定で話を進め始める。

…実際は何が起きてるかは少しは把握しており、はらわたが煮えくり返っているがそれを隠しながら話していた。

そしてイヴは自身のE型菌とは違うが別の特異菌に老人が感染している事を察知し、報告通りならばこの『末路』も知っていた。

「わ、分からん、ワシ等は普通に暮らしてたのに奴等が…あつ!!?」

『ガシャン!!?』

『グオオオオ、グオオオオオオオオ!!?』

老人は安心仕切り何があつたかを言い始め、奴等||葵達が現在警戒している『敵』に襲われた事を口にしながらテーブルに向かい始める。

だが人間は気が緩むと警戒心が薄れる。

老人は足をテーブルにぶつけてしまい瓶を床に落とし割ってしまう。

そして物音を立ててしまった結果、『敵』に勘付かれてしまう。

「しまった…:…奴等だ…!!?」

「(奴等、つまりは…)」

「お爺さん、何が来るかは分かりませんが援護します!!?」

葵達は老人の焦り様から自分達の敵、この村を襲う『B. O. W.』が来た事を察知し、何が来るか分からないと嘘を吐きつつデュランダルやカスタムシヨットガンを構えて室内戦の陣形を取り狭い室内に展開する。

「お、おい、今のは一体」

『ズドオン、ズダンツズダンツズドオン!!?』

イーサンは敵の正体が分からず今のは何かと問うと老人は窓に向けてシヨットガンを放つが外し、しかし他3名はギリギリ敵に弾丸を当て殺していた。

イーサンはその窓からチラツと人型の何かが倒れる姿を目撃する。

「今のは何なんだよ、おい!!?」

「……仕方ない、ふううう!!?」

イーサンは先程の物が何かを葵の近くに来て問うが、戦闘中の為それに応える暇がなかった。

そして葵は老人から化物認定されるのを承知で透視能力を使いつつサイコキネシスを発動、屋根の上に居た敵を全て倒して屋根の上から落とす。

「い、今のは……嬢ちゃん、アンタ一体……!!?」

そして今ので1度は信用を勝ち取った老人から警戒心を再び向けられ葵にシヨットガンが向けられてしまう。

イーサンは老人を射線に入りかけ後退りをしてしまう。

……だが葵の透視能力も万能では無い、あくまで視界内に捉えた範囲の者しか見れないのだ。

そして今回は屋根の上ばかりに気を取られていた、その為『床下』は気にする事が出来ずそれに気付けなかった。

『ズガアアアアア!!×2?』

「きやあつ!!?」

「うっ、クソ、うおっ!!?」

「葵、イーサン!!?」

葵とイーサンは床下に潜んでいた敵に引き摺り込まれてしまう。

それを見ていたマキ、イヴの手は間に合わず分断されてしまう。

そして葵、イーサンは手に持っていたペンライトを付けると、床下には死体が散乱していた。

「っ、死体だと!!?」

あつちも…何なんだよ、此れは!!?」

「……」

イーサンは余りに多い死体に驚きを隠せず、葵はマキ達が気になり上を透視すると、

マキ、イヴは老人を連れて外の小屋に立て籠った事を確認して今はイーサンの護衛に集中する事に専念する。

「ミランダつて特異菌を操る奴が治める村なんだから此処、ならこの死んだ村人は実験台か何なのかよ、おい!!?」

「……はい、此処はイカれた特異菌の実験場です。

そして、村人を襲うモノは……」

『ドサツ』

イーサンは憤りを隠せず葵にこの村の事を改めて聞くと、矢張りと言う答えである特異菌の実験場だと話して再び悪夢が完全に甦ったと悟る。

すると奥から死体が転がり、その奥でモゾモゾと何か動く物にイーサンは目を取られてしまう。

「っ、危ない!!?」

『グシヤアアア!!?』

葵は警戒が薄れたイーサンの横を警戒すると其処から『敵』がイーサンに襲い掛かろうとした為庇うと左腕を噛まれてしまう。

「ア、アオ」

『グシヤアアア!!?』

「ぐあ!!?」

は、離れる…!!?」

葵が襲われた事に気を取られたイーサンはもう1体敵が来ている事に気付かず、彼は左手を噛まれてしまう。

そして2人共家の外に力任せに壁を突き破られながら投げ出されイーサンは左手の小指のほぼ全てとその辺りの小指球部、更に薬指を半分を、葵は手首下の前腕を食い千切られてしまう。

「クソ、なんだあの化物は!!?」

「くつ、アレが報告にあつたB・O・W・か…!!?」

『グルアアアア!!?』

そして葵、イーサンがそれぞれの反応を示す中B・O・W・が2体家の中から出て来て狼のような威嚇行動をし、再び襲い掛かろうとして来ていた。

「止めろ、下がれ…!!?」

「く、敵性B・O・W・確認、排除開始!!?」

葵、イーサンはデュランダルを構え頭に目掛けて1発撃ち込む。

するとイーサンは余りの反動に右腕が持ち上がるが、戦闘訓練のお陰で頭にヒットさせ1撃で屠るのだった。

葵も言わずもがなである。

「く、クソが…何なんだ一体…」

「………」

イーサンが悪態を吐き、葵が黙って絶命を確認してこの不意打ちを凌いだと2人は内心ホツとしていた。

……そして此れが、葵達が報告により聞いていたB・O・W 『ライカン』との初戦闘であった。

EP III 『襲来と老婆と村人』

葵とイーサンがライカンを2体倒した後互いに噛まれた箇所を痛がりながらも葵は T—Gene sis 由来の再生力で欠損した箇所が既に治り始めていた。

しかしイーサンの方は痛ましく、止血措置を取らないと失血死しかねない程手の欠損が酷かった。

「葵、イーサン、大丈夫!?!?」

「…イーサンの方は酷い怪我、止血しないと。」

マキ、手伝って!」

「す、すまん…油断しちゃった」

すると小屋に立て籠ったマキ、イヴが駆け寄り葵の方は再生が早く止血等の必要が無かったが、イーサンの方が酷かった為マキとイヴは急ぎ簡易キット内から止血剤と包帯を取り出し、イーサンの左手を応急処置していた。

イーサンは油断したと反省し、次はこうは行かせないと気を引き締め、葵も同じ気持ちを抱いていた。

「な、なあ、アンタら本当に唯の軍人なのか?」

そもそもその娘さん、さっきの妙な力と言ひ今も怪我が治つとるし、何者なんだ？」

「…深い事情は言えませんが、私達は此方のイーサン・ウインタース氏の誘拐された娘さんや行方不明の奥様を追つて此処まで来たんです。

嘘を吐いた事、この転がつてる化物の様に變な力を持つていた事、それら全てを詫びます。

「…ですが貴方を助けようとした意志は本物です、それだけは信じて下さい」
 するとこの小屋、及び家の家主の老人が小屋の中から出て来て葵達を不気味がるが、葵は本当の目的の『1つ』を明かし、嘘を吐いた事や化物の様な力を見せた事を詫びつつ助けたかった意志は本当だと口にして頭を下げていた。

「…分かった、アンタ達は見ず知らずのワシを助けようとした。

その恩を仇にして返したくないからそれを信じるよ…ワシはグリゴリ・スタンだ、軍人さん」

「…信じてくれてありがとうございます、グリゴリさん」

すると葵達が自身を救つた事が大きかったのか老人、グリゴリは葵達を信じると口にして葵に手を差し伸べ握手させながら葵を立ち上げさせる。

「取り敢えず生存者1人を救えたか…この爺さんがローズの居場所とかを知つて

なら良いんだが……」

対するイーサンも止血と応急処置を終えて立ち上がり、このグリゴリがローズの居場所、ひいてはまだ諦めていない本物のミアについて知ってるかどうかを気にしながらも、取り敢えず目の前にある命を救えた事に心が洗われローズを誘拐されてからの焦燥感に一時的な落ち着きを取り戻した。

それからイーサン達は各々の自己紹介をしながら、グリゴリの家の中にあつたチェンカッターで門のチェーンを開け、更にグリゴリが予備武器としてハンドガンを装備して隣のラジオが鳴る家へと入りラジオに反応が無い事を確認し、ドア前に柵を置きバリケードを作る。

「そうか、アオイ達はこのイーサンの娘さん、ローズちゃんや居なくなつた奥さんを探す任務を受けた、あんな化物を殺す軍隊に所属してるんだな……」

後から仲間も来ると……それにしても、村の外は化物が人を殺すのが当たり前前の世界になつるとるなんて知らなかつたわい……」

「はい。」

ですから私達は攫われたローズちゃんの保護とミアさんの捜索を優先し、同じく目的で2人を探して遭難したイーサンを保護。

その後彼を守りながら共に探す様に命令を受けました」

「(それにしてもラクーンシティ事件すら知らないなんて、ミランダの奴の情報統制は凄まじいな)」

グリゴリは葵とイヴ、マキがB・O・W.を殺す部隊に所属し、イーサンから家族写真を見せながら話を進めるが、その中でイーサン達は村の外の事を知らな過ぎるグリゴリにミランダの情報統制が凄まじく、またその統治能力の高さも障害となると内心考えていた。

「それで爺さん、ローズやミアを見かけなかっただろうか？

ローズは間違い無く方角的にこの村に入っていくまでは分かっていたんだが……」

「いや、分からん……ワシ達もあの化物に襲われて自分の事で手一杯で……すまん、イーサン」

「……分かりました、では貴方を先ず何処かに避難させてから地道に探す様に……来る!!?」

イーサンはローズや、ミランダに殺された可能性を否定する為にミアの事も聞くが、矢張りと言うべきかグリゴリ……と言うより恐らくこの村人全員はライカンの対処で手

一杯で他人や村の外に気が回らない故に首を横に振っていた。

葵はそれを確認し、グリゴリを先ず避難させてから地道に探す…そう段取りを話していた所で彼女は表情を険しくする。

『グルアアアアアアアアアア!!?』

『…!!?』

すると外からライカンの声が殺到し取り囲まれている事を理解する。

すると葵は精神集中をし、透視で見えたライカンをサイコキネシスであり得ないレベルで身体を捻じ曲げる。

それらを見たライカンは危険本能からその場から離れて行く。

「…よし、追い払いました。」

兎に角避難場所を探さないと拙いです、早く此処からー」

『ー誰か…まだ生き残っている人が居たらうちへ来て。』

畑の側の、私の屋敷よ』

「!」

他にも生き残りが…?」

葵が次の指示を出そうとした所でラジオから声が鳴り渡り、如何やら畑の側の屋敷に生き残りが居ると判明し、更にその声を聞くとグリゴリの表情は見るからに明るくな

り、声を上げ始める。

「『ルイザ』だ!!?」

彼女も生き残っていたんだ!!?」

ああ、此れもマザー・ミランダのご加護だ…!!?」

「失礼グリゴリさん、そのルイザって人の屋敷へ向かう道は?」

「あ、ああ。」

この場所なら…この隣の家にな奴等の襲撃から床下に逃げて抜け穴を作った者達が居った。

其処から抜けて、共同墓地から行けば畑へと向かえる筈!」

グリゴリはルイザと言う女性が生き残っていた事をミランダに感謝し、4人はミランダへの崇拜をする意識操作は正しいと感じながらグリゴリからルイザの屋敷に向かうルートをマキが聞き、全員で武器を構えながら家の中に落ちてたハンドガンの弾(但し葵達には使えない)を回収して外に出る。

「…静かに!」

「!!?」

お、追っ払ったのにもう戻って来おったのか…!!?」

「チツ、しつこい化物共だな…!!?」

そして、屋敷へと続く道の抜け穴を使うべく隣の家に向かおうとした瞬間、屋根の上
にライカンがスタンバっていた事を葵が透視で察知し、グリゴリは恐怖心を、イーサン
は悪態を小声で発しながら家の外階段を登り始め、そして全員が中に入った……所で風
が吹き、中の食器が割れてしまう。

『グルアアアアアアアアア、グルアアアアアアアアア!!?』

「クソが、何でタイミング良く風が吹きやがるんだよ!!?」

「……さつきみたいに入り口にバリケードを張って、奥へ逃げよう!!?」

その音にライカンが反応し、先程みたく、しかし先程以上の数が一斉に押し寄せイー
サンは更なる悪態を吐くが、イヴが冷静に先程と同じ様に入口に柵のバリケードを置
く。

そして奥に行く中で葵は先程みたくサイコキネシスを使いライカンを殺すが、さつき
と違い逃げる素振りを見せなかった。

「さつきは逃げたのにあのB・O・W.が逃げ出さない!!?」

まさか、奴等を操る存在が近くに……」

「葵、それ考えるより奥の穴を通って外行くよ!!?」

この数じゃ、私達の武器を総出で使わないとならないよ!!?」

葵はライカンを操る存在が近くに居るのではと考えて透視で周りを見ようとしたが、

マキが奥に進む様に急かした為中断してイーサン達を護衛しながら家の奥に進み始める。

「ん、コイツは……使えそうだ！」

「あつ、シヨットガン？」

ならイーサンにグリゴリさん、私の弾薬受け取って!!？」

2人が使う弾と同じだよ!!？」

「おおすまんマキ!!？」

するとイーサンはテーブルに置かれたシヨットガンを入手して下部スライドを引き弾を何時でも撃てる状態にした瞬間、マキがイーサン、グリゴリに自身が持つシヨットガンの同じ規格弾を渡し、準備万端で地下へと降り始めた。

その間、マキ達はスクラップやガンパウダー等を確保しながら抜け穴から外に飛び出した。

「敵性B・O・Wと戦闘を開始します!!？」

デルタ2、オメガ18、保護対象を守りながら囲まれない様に注意を!!？」

「はいよオメガ16!!？」

「……守る!!？」

そして葵の合図にマキ達はサジタリウス、カスタムシヨットガンをライカンに向かっ

て放ち始め、囲んで来そうな個体から率先して倒し始めて行く。

「俺もローズ達の為だ、負けてられるか!!？」

「女子供に戦わせて、大の男が戦わんのは可笑しな話だわい!!？」

それに合わせ護衛対象のイーサン達もライカンに向けて発砲し、次々と現れるライカン達を殺して行く。

しかし、先程から殺しても数が減らない所か音に寄られて益々集まって行き、イーサンはジリ貧に感じ始めていた。

「チイ、オイアオイ達!!？」

「このままじゃジリ貧じゃ無いのか!!？」

「仕方ありません、屋根の上に登って迎撃しましょう!!？」

…それにしても、先程とは違って統率が取れた動きを…：矢張り近場に操る者が…?」

イーサンの叫び声に葵達5名は梯子から屋根の上に登りながら其処で周りを囲まれぬ様に銃を撃ち続け、鉈や刃物を持って迂闊に近付いて来た個体には葵の怪力キック、マキの本気パンチ、イヴのカビ剣等で応戦して行くが、此処で葵は統率の『取れ過ぎた』動きをするライカン達に矢張り近場に操る者がいると考え出していた。

「くう、奴等火を付けた弓矢まで撃つて来おった!!？」

矢張り『あの婆様』が言っていた『ライカン』は恐ろしい!!?」
 「婆様?」

それに今ライカンって、何故あのB・O・Wの名前を」

グリゴリは火を付けた弓矢まで使って来たライカンに恐怖を感じ、周りに火の手が上がる中気になる単語である婆様や何故か知ってるB・O・Wの名前に違和感を覚えそれを聞き出そうとした。

『グサツ!!?』

「ぐあつ、う、うわあ!!?」

『イーサン!!?』

だが弓矢がイーサンの足に目掛けて飛び、それが刺さってしまった。

更にそのイーサンの隙を突きライカンが1体イーサンを屋根の上から落とし、イーサンは川まで転がり落ちてしまう。

それを見た葵達はそのライカンを殺害後、葵がグリゴリを抱き抱えて飛び降り、イーサンの下に走って駆け寄る。

『グアアグウ!!?』

「げっ、馬にまで乗ってワラワラと集まり出した!!?」

「…戦力差、かなりヤバ目。」

「これアオイが居ても詰んでるかも」

「く、くそう、折角嬢ちゃん達に救われた命が此処で終わるのか…!!?」

その最中、馬に乗ったり屋根を伝ってライカン達が集まり始め葵達は周りを取り囲まれてしまう。

葵は苦し紛れにサイコキネシスを使ったりするもその分以上のライカンが集まり最早手が付けられない程の数に四方八方囲まれてしまう。

『フウ……グオオオオオオオ!!?』

「うわっ、ボスの存在来た……こりゃあ、最悪葵やイーサン達だけしか生き残らないかも……」

更に屋根の上から巨大な戦槌を持った大型B・O・W；ハウンドウルフ達からのコードネーム『ウリアシュ』が現れイーサン達を威嚇し、マキはいよいよ自身の命運が尽きたかと思いつつイーサン達を守るべくカスタムショットガンを構え、イヴも左手に大型のカビ盾を形成しながらサジタリウスで威嚇し、葵も襲い掛かって来た瞬間サイコキネシスを使い殺すと決めながら待ち構えていた。

『ゴーン、ゴーン、ゴーン』

『グアアグウ!』

『…はっ?』

すると城から鐘の音が鳴り渡ると、ライカンやウリアシユ達は突如としてその場を去り始め葵達の口から乾いた声が上がった。

そしてイーサンは刺さった弓矢を抜き、回復薬を足に掛けて治すが何が起きたかサツパリな為グリゴリに問い掛け始めた。

「痛う…なあ爺さん、あの化物共は鐘の音を聞いた途端居なくなつたんだが一体…？」
「わ、分かん。」

だが城の鐘が鳴ると奴らは現れ、また鐘が鳴ると奴らは消える…消えるのはマザー・ミランダのご加護だと思いたいんだが…」

『シャリン、シャリン』

すると開けた赤い門の方向に杖をついた謎の老婆が立っており、更に自身の存在をイーサン達に気付かれると門の中の方へと入って行ってしまふ。

「あ、あの婆様だ！」

ワシ等にライカンを教えてくれた婆様は!!？」

「何？」

お、おい待て…！」

「…ライカンの名を知る人…油断ならないかもしれない…」

するとグリゴリがその老婆こそが自身等にライカンの事を伝えた警告をした者だ

と話しイーサンは痛がる足を押さえながらも老婆を追い始める。

だが葵、更にマキやイヴはライカンの名を知る老婆に対して警戒心を表に出さない様にしつつも追い掛け出し、そして直ぐに追い付くと何やら杖で地面にシンボルを描いていた。

葵達はこれが村に使われるシンボルと思いつつイーサンが声を掛け始める。

「…生にも死にも、栄光を与えん…」

「なあアンタ、此処に居ると危険だ。」

……何をやってるんだ？

なあ聞こえてるのか？」

「……………!!?」

このお婆ちゃん……いや、この人他の人達よりも異常な特異菌の反応がある

!!?」

何なのこの人……まさかこの人……」

老婆は何かを呟きながら地面にシンボルを書き続け、イーサンの問い掛けに鈍い反応しか示さず年相応の耳の遠さを見せ付けていた。

しかしイヴだけは反応が違った。

A・B・Fで培った表情を表に出さない訓練から平静さを装いながら、自身のE型

菌が示す老婆の体内の特異菌の反応が異常な値を示している事を察知し、イヴは心の中でこの老婆の『正体』に勘づき始めていた。

「ああ…其方か。」

あの子の父親だな？」

「あの子…まさか、ローズの事か!!?」

「ははははローズ！」

そうともローズじゃ！

あの子に危険が迫ってる、マザー・ミランダが村に招き入れて全ては闇に墮した!!?」

すると老婆はイーサンをローズの父親だと言い、更に危険が迫っている事、マザー・ミランダが村の中に確かに『招き入れた』事を口にしてグリゴリも含む全員がその言葉に警戒心を露わにし、更に流石の葵やマキも此処まで事情通な老婆に対して唯の老婆から『怪しき者』へと警戒をランクアップさせる。

すると再び城の鐘が鳴り渡り始めた。

「城の鐘が災いを告げておる！」

奴等が来るぞー！」

「ば、婆様またあの化物、ライカンがやって来るのか!!?」

げる事しか出来ずそれを案じた葵はイーサンに目を向ける。

すると一瞬目を離れた隙に老婆が『透視先から消え去り』、葵の中でそれにより老婆の正体に行き着き、今は敵に回すまいと思いつながら周りを探索した。

「……この乱れ書き、あの婆ちゃんの物かな？」

するとマキは床に村のシンボルが描かれた蠟燭が沢山点いている民家内に乱れた書き置きを見つけ、葵達もそのメモの内容を見ていた。

内容は以下であった。

『おお、ライカンよ。

お伽話の、悪魔の狼共よ。

我等を食らいに来るが良い。

血肉を食らいに来るが良い』

「間違いなく婆様の物だ……何だが、まるでライカンに食われる事を喜んどうる様な……」

「この村の惨状で頭がイカれちゃったのか……」

「(……違う、あの老婆は危険人物……とは言えないね。

クリスからの命令もあるんだから……)」

グリゴリは文面からも老婆の書き置きだと思い、更にイーサンは村の惨状で精神が可笑しくなったのだと口にし憐んでいた。

が、正体に行き着いたイヴや葵は逆の感想を抱くも、今伝えて余計な火種になる事を良しとせずそれを胸の内に止めることにした。

「この先が城か……だが何かを嵌めなきや入れない様だな」

「この先は四貴族様の一人、ドミトレスク夫人様が治める城なんだが……あの婆様やイーサン達の話があるからのう。

特別に門を開けるクレストを託そう。

…本当なら村の皆で決めねばならんが、こんな惨状では…」

イーサンは立看板からドミトレスク城と書かれた場所に向かうが、門は2箇所何かを嵌めなければならぬギミックがあり開かなかった。

グリゴリは様々な事からイーサン達に門を開けるクレストを託すと即決し、人柄の良さを見せていた

そして共同墓地から小教会に入り、『巫女のクレスト』を手にするとグリゴリが道案内を始める。

「こつちだ、この先がルイザの屋敷だ！」

城の門を開けるもう一つのクレストもルイザが管理しておる！」

「道案内ありがとうございますございますグリゴリさん。」

「ただ畑の中にライカンが居ますから、私の力で潰します!!?」

グリゴリが先導しながら畑に入り、クレストの片割れをルイザが管理していると話しながら小走りで進み出すと葬は透視とサイコキネシスを駆使して畑に隠れたライカンを駆除し、ルイザの屋敷前の門まで辿り着く。

しかし門は開かずグリゴリは焦り始めていた。

「くそう、ルイザ、ルイザ！」

「ワシだ、グリゴリだ!!?」

「門を開けてくれ!!?」

「…ダメですね、中の人達は怯え切つて家主さんっぽい人…多分ルイザさんの話も無視して開けようとも」

「父さん、誰か…」

「……待つて下さい、隣の家に負傷した人を含めた2名が取り残されてます!」

グリゴリは門を叩き、ルイザ達に開けてもらおうとしたが結局聞き入れられず、透視を使った葬も家主以外が怯え切っていると話していた瞬間、隣の家屋に誰かが居る事を勘付き5人は家屋内に入り込む。

すると負傷した男性と若い村娘が其処に居た。

「おお『エレナ』、『レオナルド』も!!?」

何とか生きておったか!!?」

「グリゴリ、グリゴリ貴方なの!!?」

と、兎に角ドアを閉めて!

ああマザー・ミランダ、私達にもしつかりとご加護があつたのですね…!!?」

「……で、其処の他所者共は誰だ?」

するとグリゴリはその家屋に居た人物と顔見知りであり、それぞれ村娘がエレナ、その父親らしき人物で刃物を武装し、負傷しながらも葵やイーサン達に警戒心を露わにしているレオナルドの2名が居り、レオナルドの警戒を解こうとグリゴリが話し始める。

「あ、ああこの人達はワシの命の恩人だ!

村の外でライカンの様な化物を殺すのを専門とした軍人のアオイ、マキ、イヴの3人に、娘さんや奥さんを探しに来たイーサンだ!

皆人柄が良く、見ず知らずワシの命を身体を張って守った恩人だ!

「えつ、じゃああの化物達を倒してくれるの!!?」

ああ、マザー・ミランダ…!!?」

「…私達だけでは無理ですが、仲間が来る予定なので必ずやあの化物達を退治し尽く

すと約束します」

グリゴリの紹介によりエレナは葵達3人は化物退治の専門家と聞きマザー・ミランダの加護が舞い降りたのだと思ひ彼女に感謝し、レオナルドは信じられないと言つた様子で葵達を見ていた。

そして葵は仲間が来たら必ずライカン達を退治し尽くすと約束を交わした。

…ライカンを操るマザー・ミランダの殺害を隠しながら。

「しかし、他に生存者があの屋敷に居るみたいだが…誰も開けてくれる様子が無いんだな」

「ええ、多分皆ライカンに怯え切つてて…だから、私は出血が酷いお父さんを診てなければならぬから門の裏手に回つて開ける事も出来なかつたの!!?」

「ならレオナルドさんの信頼を勝ち取る為にイーサン、私と行きますか」

「…」

イーサンはエレナに誰も門を開けない事を告げると彼女は家屋に空いた穴を指差し、其処から裏手に回れる事を示唆するがレオナルドが負傷した関係で動けない事を話すと、マキがイーサンを伴い門の裏手側に回る事を話した。

その間もレオナルドは信用ならないと言つた表情を葵達に向けるが、直ぐにイーサンが再び家屋のドアを開ける。

「門を開けた、早く来るんだ！」

「随分と、遅かったな……」

「ナイスですよイーサン。」

「じゃあエレナさん、レオナルドさんのもう片方の方を支えますから行きましよう」

「あ、ありがとう……アオイ達は優しいのね……」

そしてレオナルドのちよつとした悪態を流しながら葬は彼のもう片方の肩を支え、イヴとグリゴリが周りを警戒しながら直ぐに門を潜るとイーサンが門を閉め、取り敢えず屋敷の玄関前までやって来た。

「……なあエレナ、この村で何があつたんだ？」

「何であのライカンとか言う化物が？」

「私にも分からない、マザー・ミランダのご加護がある筈なのに……」

「おい皆、グリゴリとエレナだ!!？」

レオナルドが負傷しとる、早く此処を開け………待て『ユリアン』、銃を下ろすんだ」

イーサンは村の惨状を理解していない為、特異菌に感染している事を胸に仕舞いつつエレナに話を聞くと、マザー・ミランダの加護がと話し葵達の言う通り、そしてエヴリ

ンの件を思い出し精神操作が相当進んでいると感じ、ならばあのライカンはと嫌な予感を感じながらも玄関先に視線を移す。

するとグリゴリが中に居た人物、『ユリアン』にショットガンを向けられており一触即発状態になっていた。

「ユリアンお願い銃を下ろして、私達を中に入れて！」

「黙れ叫ぶな、血の臭いで奴等が寄つて来る!!？」

それに他所者が！

「このままじゃ父さんが……！」

「俺の知つた事じゃねえ！」

するとグリゴリに混じつてレオナルドを支えたエレナも話に混じるが、ユリアンは負傷したレオナルドの血の臭いでライカンが集まる事を指摘しつつ他所者のイーサン達を中に入れてたく無い事も踏まえて口論になり、葵達は不毛だと思いつつ成り行きを見守っていた。

「何の騒ぎ……！」

すると中から葵が透視で見た家主ルイザが現れ、その場を収めようとイーサン達の前に来ていた。

それを見てグリゴリはホツとした表情を見せ始め、其処からルイザの信頼はこの目の

前のユリアンより厚いのだと感じていた。

「こいつ等、死に損ないや他所者を中に入れようと……」

『こいつ等』ですって？

彼等は友人よ。

さあ入つて、こつちよ、中へ」

ユリアンが更なる悪態を吐こうとした所でルイザはエレナ達を友人と言つて中に招き入れ、レオナルドとエレナは先に入つて行く。

するとルイザはイーサン達の前に来て見慣れぬ人物と、葵達の武装からやや怪訝な表情を浮かべていた。

「貴方達、村の人じゃ無いわね？」

「ああ、彼等はイーサン、アオイ、マキ、そしてイヴだ。

彼等の内3人は誘拐されたイーサンの娘さん達を探す任務中に此処に来た化物退治専門の軍人で、見ず知らずのワシの命を助けてくれたんだ。

アオイやイヴは不思議な力を持つとるが、その人柄は信用出来るぞルイザ」

すると残つたグリゴリがイーサンや葵達の説明をし、葵達を化物退治専門の軍人だと説明しつつ任務は誘拐されたローズやミアを探す事と、見ず知らずの自身を助けた事から人柄は信用出来る事、葵とイヴが不思議な力を持つ事を伝え何とか信用を勝ち取ろう

としていた。

「成る程…良いわ。

エレナやグリゴリの知り合いなら信じましょう、入ってイーサン達。

ユリアン、見張りの仕事に戻って」

「あ、なら2：2で分かります。

何時あの化物、ライカンが襲って来るかも予測不可能なので…イーサン、イヴ、中に入って。

私達はユリアンさんの見張りの仕事のお手伝いをします」

「そう…見ず知らずの人を助けようとする意志、確かに感じたわ。

ならイーサン、イヴ、グリゴリ、中へ」

そうしてユリアンの怪訝な顔を無視してルイザはグリゴリの話信じイーサン達全員を中に入れようとした所で葵がマキと共に見張りを買って出て、理由もライカンが何時襲って来るかも分からない為と話しながら門の外を警戒していた。

そしてルイザは葵の人柄を肌で感じ、その見張り役をユリアンと共に任せ他3人を中に招き入れるのだった。

「…ふん、他所者が」

「はい、私達は他所者だよ。

けど、あんな化物に襲われてる人を見捨てる程薄情な人間じゃないので貴方も、中の人も守りますよ」

「……ふん！」

ユリアンはルイザ達が入ると葵達に更なる悪態を吐くが、マキが化物に襲われた者を助けられない程薄情な人間じゃないと意趣返しをしつつユリアンも守ると言い、それを聞いたユリアンはマキの喧嘩腰精神だが確かに誰かを助けようとする意志を感じてそれ以上何も言わずに門を開け始め、3人で見張りを始めた。

「……それにしても、透視して分かったけどこの村の人全員は特異菌だけじゃ無い、何かの『寄生体』を植え付けられてる。」

…B・O・W；ライカンの『正体』もあるし、中のイーサン達が大丈夫なら良いんだけど……」

そして葵は、透視能力で村人全員の体内には特異菌以外にもう一つ寄生体が存在する事を察知し、ライカンの『正体』込みで中に入ったイーサン達に何が無ければ良いのだかと思ひ始めていた。

……そして葵は後悔する事になる。

寄生体の事を話さなかった事、見通しが甘かった事、そして何より『全員で中に入らなかった』事に対して。

何故ならその懸念した事が現実になるその時がもう目の前に差し迫っているのだから。

EP IV『救えぬ命と弄ぶ者』

「待つてて、奥の様子を見て来る」

ルイザの家に入ったイーサン、イヴは少しだけ待つように言われ、その場にあつたメモ書きやこの村のアルバムを見ていた。

メモには曰く、家畜をやられて冬を越せない、エルネストと言う人物が消えた事、ミランダが見捨てたのかと言う不安が書き綴られていた。

「…報告が正しいならライカンの目撃例はローズがこの村に入る前から密かにあつた。

それでローズを見つけ、連れて来たから実験対象の村人全員を…つて事が思い浮かんだけど、口外しないでね、不安を煽りたくない」

「あ、ああ……お前、本当にエヴリンとは違うんだな。

人の心が通つてると言うか…」

「…それはお母さん、そして葬達が人の心を、責任を、愛を、様々な事を教えてくれたから。

お母さんと会う前までは間違い無く私はエヴリンと同じだった、だからそれや

色んな罪を私は背負ってる……」

イヴはハウンドウルフやデルタチームの監視からライカンの目撃情報は今よりも前からあった事、目的のローズを手にした為実験場の村人の抹殺を示唆したりするも、不安を煽りたく無い為口外しない事をイーサンに言う。

対するイーサンはイヴをエヴリンと違うと言うが、イヴは様々な事を学んだからと言いつつ、エヴリンと同じ罪があると言いつつ何処か悲しそうな表情を浮かべていたのをイーサンは見逃さなかった。

「こつちへ」

すると奥の様子を見終わったのかルイザが2人を奥へと案内し始める。

イーサンは葵やイヴが言っていた事……ミランダ関連は口に出さない、ボロを出さない様にしようと思いつつ後を付いて行く。

「さあ、みんな待つてるわ」

ルイザがカーテンを潜り部屋の中に入るとイーサン、イヴも合わせて中へと入り始める。

すると其処にはグリゴリやレオナルド、エレナ達を含めて数名の生き残り……中にはレオナルド以上に負傷した者や酩酊した者が居た。

「何だこいつ等は、他所者が殺しに来たのか！」

「黙って『アントン』、グリゴリ達3人を助けてくれたのよ」

「誰も助けなんか頼んじやいない!」

酩酊した男性、アントンはイーサン達を見るや否や酒に酔った勢いで叫び始めた為、ルイザはグリゴリ達を助けた事を言つてその事咎める。

すると他人に頼り慣れていないレオナルドはイーサン並の悪態を再び吐くが、別段イーサンやイヴは気にしていなかった。

村社会に於いて他所者の扱いなどこの程度、グリゴリやルイザ達が特別なのだと思つていた為である。

「どうぞイーサン、イヴ、座つて」

「無事だったのは…村でこれだけか?」

イーサン、イヴはルイザに椅子を用意されて座ると、周りを改めて見たイーサンが無事な村人はたったこれだけなのだと思ひ口に出す。

するとアントンがそれを聞き酒に任せた醜態を晒し始める。

「無事?」

無事だと?

此れの何処が無事だつて言うんだ!?

動けもしねえ怪我人に、バカみてえに泣くしか出来ねえ女!

お前もだ！」

アントンはイーサンに始め叫び始めたが、その対象は段々とこの場に居る村人全員に向けられて行き、遂には家主のルイザにまで当たり散らす様になる。

それを見てイーサンは良い顔をしなかった…が、もつと良い顔をしなかった人物が此処に居た。

「血塗れの死に損ないのジジイ共に、他所者まで連れ込みやがって…!!？」

この家が安全だと？

安全な場所なんかねえ！

外の…腰抜け連中も、とっくにぶつ殺されてる。

明日には…ゴクゴク、明日には俺達も皆死ぬ。

そいつのクソ亭主みてえに…泣くんじゃねえ『ロクサーナ』!!？」

「もう止めー」

『ピコーン！』

アントンのボルテージがヒートアップして行き、不安を煽る事を口々にし、そして他人を誹り始めた時点でルイザが止めに入ろうとした…所で、この中で10代なイヴが立ち上がり、アントンに向かってカビで作ったピコピコハンマーで頭を叩き、アントンやグリゴリ以外の周りはそのカビで作ったピコハンに驚きイヴに視線が集中し、何を口

にするのかと注目してしまふ。

そうしてイヴは息を吸った後……。

「……この村の人の貴方が真つ先に諦めて如何するの？」

私の知り合いが言つてた、生きる事を諦めるなつて。

他所者の私が言えた義理じゃ無いけど、それでも言わせて貰う……不安を煽らず、何とか諦めないで。

化物退治の専門家が、この家に来たんだから」

イヴはアントンにA・B・F.として戦場の中でB S A AだったB・Y.の言葉を思い出し、死に掛けの部下に生きる事を諦めるなど言い無事に生還させた事を脳裏に思い出しながらそれを口にし、更に化物退治の専門家が来たと言いピコハンを崩して自身の武装を一通り見せた。

凡そ10代の見た目なイヴには似合わないゴツ過ぎる銃と先程のカビのピコハンを見てアントンは其処で黙り込む。

「そうだ、その子や外の2人の女性は村の外から来た化物退治の専門家なんだ！

そして今みたい不思議な力を持っている！

そんな人達が、この時期に村に来たのはマザー・ミランダのご加護があつたからに違いないんだ！

後から彼女達の仲間が来る事にもなつとる。

だからアントン、イヴの言う通り生きる事を諦めず、頑張ろう……！」

其処にイーサン達に救われたグリゴリが加わり、此れもマザー・ミランダの加護による奇跡的なタイムミングだと話し込む。

更に後からイヴや葵達の仲間が来る事も話し、生きる事を諦めない事に同意した彼はアントンを大人しくさせる事に成功し、次にルイザが口を開いた。

「……ありがとうグリゴリ、イヴ。

兎に角、此処は代々私の家族を守り続けて来た家。

酔っ払いであれ何であれ、誰でも歓迎する。

此処に居れば安全よ」

「……チツ」

そしてルイザはその広い心を以てアントンに最後に声掛けをし、グリゴリやイヴの言葉が効いたのか渋々座っていた椅子へと戻り始める。

「……一体何が起こってるんだ？」

誰か教えてくれ」

「分からない、ただ普段通り静かに暮らしていたらある日突然……化物が現れて、襲って来たの。

何度も…何度もやって来てそれでー」

「待つてルイザ、旦那さんは？」

まさか…」

イーサンはこの村で何が起きたのか…恐らくミランダが裏で関わっている事を脳裏に思いながらもボロを出さない様に問うと、ルイザからある日突然ライカンに何度も襲われたと口にしており、取り敢えずライカン襲来はローズが来る前から起きていた可能性が高いと感じていた。

「…報告通り、ね」

イヴも報告に矛盾は無く、村人を救おうとクリス達が裏でミランダにバレない程度に手を尽くしていた事も聞き及んでいた為それでも死んだ村人を悼んでいた。

そしてエレナがルイザの夫の話を振るとルイザは顔面蒼白になりながら口を開く。

「いえ…か、彼は何処かに居る、絶対」。

村の人や…：…それこそ、イヴの仲間の方に助けを…：…ええそうよ、きつと助けを呼びに行つたのよ」

「…：…もしも私達や、仲間が貴方の旦那様を見つきましたら、必ず保護致します」

ルイザは夫は助けを呼びに行つたと口にし、イヴの事も見ながら話を進める。

それを聞きイヴは仲間や自分達がルイザの夫を見つけたら保護すると約束して、彼女

の焦燥感を少しだけだが和らげさせた。

「祈りましょう……彼が、私達の為」

「そうね、さあ一緒に」

するとロクサーナの提案でルイザの夫に祈りを捧げる事を提案すると、イヴやグリゴリの言葉で頭が冷えたアントンやレオナルド、更に奥に居た怪我人の『セバスチャン』を含めて皆で円を囲み、イーサンとイヴもそれぞれエレナ、ルイザの手を取り形だけが祈りに参加する。

『大いなる者よ、聞き入れ給え。

畏敬の念と共に捧げん。

無限の闇より、運命を定めし手が我等に差し伸べられん事を。

深夜の月が、黒き翼で舞い上がる時、我等は自らを犠牲とし、最後の灯りを待つのみ。

生にも、死にも、マザー・ミランダに……栄光を捧ぐ』

「(これが祈りだつて?)

此れじゃまるで……)」

「(……ミランダ、自分の都合の良い風に意識操作して、この村の人達を……許さない……

！)」

「祈りの言葉を聞いたイーサンは此れではまるで自らを生贄に捧げる物だと感じ、イヴはミランダの本性をクリス達から知らされてる為その心に怒りが満ち、イーサンとイヴの互いの握る手は力強くなりミランダに対する念は祈りとは真逆の物になっていた。

「さあ、お茶の支度を。」

エレナ、手伝って」

「その祈り、前にも聞いた。

墓地に居た老婆から」

ルイザはエレナを伴いお茶の支度をしようとする、イヴがイーサンをチラ見して来た為、彼は適当な事を：祈りを墓地に居た老婆から聞いたと言い、それを聞きグリゴリも反応を示す。

「ああ、この村に伝わる大事な祈りなんだ。

この祈りを捧げれば、マザー・ミランダのご加護を得られるんだ。

そしてあの婆様は、ワシ等にライカン共の襲来を…」

「はははは、あの婆さんか。

あのババアならもう完全にイカれちまつてる」

グリゴリは祈りは村に伝わる大事な物、マザー・ミランダの加護が得られると口にし、葵達から話を聞いてたイーサンは内心ミランダに侮蔑の感情を抱いていた。

更にレオナルドも悪態込みで話に参加し、老婆がイカれていると話すと此れにはイーサンもあの乱れた書き置きを見た為同意していた。

「でもあの人は……とても献身的よ。」

「だからきつと彼女にもご加護がある筈だわ」

「……………私は、あの人が怖い……………」

「えっ、イヴ?」

それに対しルイザはグリゴリ同様老婆は良い人だと口にし、彼女にもマザー・ミランダの加護があると口にしていた。

すると不意にイヴがイーサンやルイザにしか聞こえない小声で、老婆に恐怖心を漏らしてそれを聞いたイーサンはイヴの方を見ていた。

「ふふふ、ふはははははは、はははあウウウウ……」

『ドサツ!!?』

ボウ!!?』

するとレオナルドが不意に笑い始めた瞬間、突如声から苦しみの声色が漏れてテーブルに倒れ臥してしまう。

その際にランタンが床に落ち、炎が燃え広がり始めた。

「おい、何してる!!?」

「レオナルド如何したの？」

大丈夫？」

アントンは燃え広がり始めた炎を踏み消そうとするが、勢いが止まらず燃える速度が上がり始めイヴは既に外に出ないと焼け死ぬと判断して立ち上がり始める。

するとルイザがレオナルドの身を案じて彼に近付き始める。

「……………？」

危ない！！？」

『カキイイン！！？』

するとイヴはレオナルドの異変……目が既に人間の物では無く、外のライカン達と同じになった事を見抜き彼が手にした鉋包丁をカビ剣で弾き返しルイザを救う。

「クソが！！？」

『グルウウウウ、グアアグウ！！？』

「ぎ、ギヤアアアアアアアアアア！！？」

更に其処に背後からアントンがワイン瓶で殴り掛かるが、ターゲットが彼に変更になつた程度でレオナルド……否、『元レオナルド』のライカンはアントンの首筋に噛み付き彼を殺してしまう。

そしてイーサンは今まで考えたくかったこの村が特異菌の実験場、村人は実験台とライカンの存在が \parallel として繋がってしまい、最悪の事態になったと思つていた。

「きゃあ、いや、いやアアアア!!?」

「く、くそう、止めるんだレオナルド!!?」

次にロクサーナに飛び掛かり彼女も直ぐ様殺してしまう。

その惨状を見たグリゴリはレオナルドだったライカンにショットガンで発砲、それにダメージを与える。

その間にセバスチャンは逃げようとしたが、火の勢いに追い付かれ身体中を焼かれ始めしてしまう。

『グアアグウアアアウウウ!!?』

「もう止めなさいレオナルド!!?」

だがレオナルドライカンはグリゴリのショットガンを物ともせず立ち上がるとグリゴリに襲い掛かろうとするが、其処に先程救われたルイザがショットガンを構え参戦。

2人掛かりでレオナルドライカンを命を賭して止める氣でいた。

「イーサン、イヴ、エレナを連れて早く逃げなさい!!?」

「それとイーサン此れを、もうワシには必要無い!!?」

君達に救われた老い先短い命、此処で使う!!?」

「で、でも父さんー」

「クソツ!!?」

行くぞエレナ、アレはもう君のお父さんじゃない!!?」

ルイザ、グリゴリは命懸けでレオナルドライカンを此処で止めるつもりでキツチンへ続く廊下前に陣取り、更にグリゴリはイーサンに自身のハンドガンを弾毎渡し、エレナも逃がそうとしていた。

そのエレナは父がライカンになった現実を受け入れられずそれに手を伸ばそうとしたが、銃を受け取ったイーサンはエレナを連れ奥へと引つ込む。

「イヴ、貴女も早く行きなさい!!?」

私達は彼を足止めする、その代わり貴女達は生きる事を諦めないで!!?」

「お前さん達はイーサンの娘さん達を救い出すのが任務だろ、ならば早く行くんだ!!?」

「……………つ、ごめんなさい!!?」

そしてデュランダルを構え未だ残っていたイヴをルイザ、グリゴリがイーサン達が逃げた廊下に逃げ込ませ、更にグリゴリが優先順位の上位であるローズ奪還等を口にし、それを達成させるべく銃撃を開始してイヴを行かせようとした。

それをイヴは彼らの意志はもう曲がらないと判断し、3年半前に芽生えた良心が痛み

ながら彼女達に謝り、イーサン達の後を追って行った。

一方その頃外を見張っていた葵達は背後から銃声と焦げ臭い臭いがして来た事を察知し、急いで門を開けていた。

すると炎がルイザの屋敷を焼いており、中で何かがあったのだと2人は直感し、そして2人はライカンの正体をクリス達から聞いていた為で誰かがライカン化したのだと悟る。

「こゝ、此れは…」

「くっ、何で見通しが甘いよ私!!?」

「あ、葵待つて!!?」

ルイザの屋敷が燃え、呆然と立ち尽くすユリアンを他所に葵は超人能力で2階、そして空いている屋根裏部屋の窓までジャンプして行き、葵の焦燥感を目の当たりにしたマ

キもワイヤーロープ射出機で屋根裏部屋まで上がり、葵の後を追った。

すると其処には屋根裏部屋にまで登って来ていたイーサン、イヴ、エレナが居た。

「3人共無事ですか!!?」

「アオイ、マキ!!?」

ああ、車で壁をブチ抜いて此処まで来たんだが……エレナの父さんが……それを止める為にグリゴリの爺さんとルイザが……!!?」

「……」

葵達はイーサン達3人の無事を確認したが、レオナルドがライカン化した事やルイザとグリゴリが彼を止めるべく残ってしまった事を口にし、マキは絶句し葵は全員で入らなかった事を後悔し始めていた。

「……エレナ、生きる事を諦めるんじや無い!」

娘は、ローズはきつとあの城に居る!!?

それに妻のミアもこの村の何処かに……!!?

けど2人を探す前に君を必ず避難させる!!?」

「駄目よ、あの城に行けば貴方達の命が無いわ!!」

それに私1人なんて……父さん?」

イーサンは先程から憔悴したエレナにイヴが口にした生きる事を諦めるなと言う言

葉を口にし、彼女に生きる活力を生ませようとし、更にローズを探す前に避難させるとも言う。

が、エレナはドミトレスク城の『噂』を知ってる為逆にイーサン達を案じ、更に1人生き残った所で……そう口にしようとした瞬間、レオナルドライカンがゆつくりと屋根裏部屋前まで上がって来る。

「つ、2人共下がって!!?」

「ダメ、イヴ撃たないで!!?」

『エレナア……』

イヴはレオナルドライカンを確認した瞬間デュランダルを構え処断しようとしたが、エレナが射線に入った為撃てずにいた。

更に追い打ちを掛ける様にレオナルドライカンは僅かに理性が残ってるのか、それともオウム返しなのかエレナの名を呼んでしまう。

「私を呼んでる!」

父さん!!?」

「止める危ない!!?」

『ガシャアツ!!?』

エレナはその言葉に反応してしまい、今にも崩れそうな屋根裏とレオナルドライカン

のいる足場を繋ぐ木の板を勢い良く駆けてしまい、その板が崩れエレナは自制しているのか娘を襲おうとしない化物と化した父親と共に足場に取り残されてしまう。

「じつとしてろ！」

ほら、手を伸ばせ!!？」

「エレナさん、お願いです、生きる事を今放棄しないで下さい!!？」

「…エレナ!!？」

「ほら早く、手を!!？」

その崩れ掛けた足場の上にイーサン、葵、イヴ、マキは回り込みそれぞれ手を伸ばしエレナに生きる様に説得を試みた。

しかし、此処でエレナが取ってしまった選択はと言えば……。

「イーサン、皆行つて！」

イーサンの家族を救つて!!？」

「エレナ諦めるな!!？」

さあこつちだ、早く手を!!？」

エレナは手を取らず父だったモノと運命を共にする選択を取ってしまった。

その選択が示すかの如くレオナルドライカンはエレナより先に落ちエレナはイーサン達を見つめたままになってしまう。

イーサン達はなおも諦めず手を伸ばし続けて彼女を救おうとした。

葵もサイコキネシスを使おうと決めてエレナを浮かしていた。

『カー、カー!!?』

「っ、何このカラス!!?」

「きやああああ!!?」

「ああエレナ、畜生!!?」

すると葵の集中を乱すかの如くカラスがイーサン達に纏わり付き、その瞬間エレナは炎の中へと落ちて行きその手を誰も取る事が出来なかった。

そしてマキがカラスを怒りのままカスタムショットガンでスイングして屋根裏部屋の窓の外に出すが、後に残ったのは誰も救えなかったと言う悲しみだけだった。

「如何して……皆死んじまうんだ……!!」

エレナ……こんなの酷過ぎる……?」

「そんな、私、サイコキネシスを使って……あ、ああ……!!?」

「くっ、あのカラスさえ邪魔しなきゃエレナさんは必ず助かった筈なのに……!!?」

「(……あのカラスからも……まさかあのカラスは……!!?)」

イーサン達はそれぞれ絶望し、特に葵はサイコキネシスを使ったにも関わらずエレナを救えなかった事に絶望し、マキもカラスの邪魔さえなければ助かってたと口にしてい

た。

だがこの中でイヴはあのカラスにも『老婆と同じ異常な特異菌反応』があつた事に気付いており、しかし今敵に回せば命は無いて言ひ出せずにいた。

「何で……こんな……それに、アオイ達、ライカンの正体が村人だつたつて知つてたんじゃ無いか……？」

なら何で……!!？」

「……教えられると、思いますか？」

貴方の隣人は何時か化物になる、化物の正体は元村人ですよ、なんて……こんな、残酷な真実、言えると思えますか……!!？」

イーサンはフラフラしながら屋根裏部屋の窓まで歩き、葵達3人にライカンの正体を最初から知つていたかと問い詰める。

すると葵が泣きながらイーサンに反論を始め、教えられる理由が一切無かつた事を口にし逆にイーサンを問い詰めてしまう。

それを見たマキは間に入り2人を引き離すと窓の外から2階、そして地面に降り立ちマキから口を開いた。

「……こんな事になつたのも、エレナさん達があんな風に死んだのも、全部ミランダの奴が悪いのよ……葵達は誰も悪くない、悪いのはマザー・ミランダとか言うクソ女が……!!？」

「畜生、エレナ、爺さん、ルイザ……マザー・ミランダ、見つけたら必ずぶつ殺してやる……!!?」

「……私も、久々にガチギレしましたよ……ミランダも、その配下も絶対に許さない……!!」

「……」

マキは全ては特異菌を操るミランダが悪いと説き、それに対してイーサン、葵、イヴ達もまた同意見となりミランダに対する正義感から来る正しき怒りを胸に秘め、拳に力が入っていた。

そしてイヴはルイザの家の中で手にしたドライバーを使い、片割れの『悪魔のクレスト』が保管されてる小屋のロックを外しクレストを手にした。

『ズダアン、ズダアン!!?』

「や、止めて、ミランダ様……!!?」

「っ、今の、ユリアンさん!!?」

するとショットガンの銃声が2発と声が響くと葵はユリアンの物だと悟り、門を飛び越えて目の前の光景を見る。

すると其処には確かに居た、ローズを攫い、今もユリアンを目の前で殺害した自身達が倒すべき敵、マザー・ミランダが。

「ミランダアアアアアアアアアア!!?」

『ズガアアアアアアアアアア!!?』

葵は本気でキレていた為、クリスからのミランダを合流前までは敵に回すなと言う指示を無視してサイコキネシスを使用、ミランダを吹き飛ばした上で身体を何度も地面に叩き付けたり骨や身体をバラバラに捻ったり等をして怒りのままに力を奮っていた。

「アイツがミランダか、このクソ女が!!?」

『ズダダダダダダダッ、ズドンッズドンッズドンッズドンッズドンッ!!?』

「ちよつと葵、イーサン、未だ奴を敵に回したら駄目だつて、気持ちは痛い程分かるけど今は耐えて!!?」

そして門を開けたイーサンはグリグリから託されたハンドガンとデュランダルの2丁持ちで銃撃を開始、葵と共にミランダを攻撃するが未だ比較的冷静だったマキ、更にイヴが2人を止めに入り2人を落ち着かせる。

そして畑に倒れ伏したミランダは……捻れた身体をミシミシと元に戻しながらイーサンや葵達を見据えた。

「成る程、確かに厄介な『敵』だな、アオイ・コトノハ……ふっふはははは……!」

ミランダは葵の事を明確な敵視をし、更に厄介と呼称した後畑の中を進み、そして葵の透視から逃れる様に無数のカラスに擬態してバラバラに飛び去っていつてしまう。

「よし、門が開いた。

ふん、『行けば命が無い』か…」

そのすぐ後にドミトレスク城への門をクレストのギミックを解いて開き、イーサンが先に進もうとする。

しかし、葵は途中で透視で気付いた事があり立ち止まる。

「葵、如何したのさ？」

「居る、この先にミランダと配下の『四貴族』全員が」

「何、さっきのクソ女に加えて配下が居るのか？」

なら好都合だ、一網打尽にしてローズを奪い返してやる!!？」

マキの問いかけに葵はミランダと、その直属の配下たる『四貴族』が全員集合している事を見てしまいジツと覗いていた。

対するイーサンは一網打尽のチャンスだと捉えて先に乗り込もうとした。が、イヴがイーサンの服を掴みそれを止める。

「…駄目、さっきの見てなかったの？」

アオイの本気のサイコネシスを受けてもケロツとしていた相手なんだよ？

下手に挑めば返り討ち。

だから、此処は二手に分かれよう？

ミランダ達を避けつつ真正面から城内部へ行く組、正面から行った人達がもし捕まったら救出する組。

それからミランダに攻撃を仕掛けない、これ絶対条件だよ」

イヴは慎重に行く提案をし、正面から敢えて行く組とそちらが捕まった際の救出組に分かれる事、更に絶対条件としてミランダには手を出さない事を口にしていた。

その提案は理に叶っており、戦力分散は危険だが全滅するよりもマシな手法でもある事でもあると葵達は思っていた。

「なら俺は真正面から行ってやる！」

ミランダに手を出せないのが口惜しいが……奴らを避けてローズを探せば良いんだ、ならば俺はそっちに行く」

「……はあ、私も真正面。」

イーサンだけじゃ危なっかしいし、さっきの私は頭に血が上り過ぎてた。

だから今度は大丈夫だよ、皆」

すると案の定イーサンは真正面組を選び、デュランダルやグリゴリの形見のハンドガンを構えながらもミランダに手は出さない様になると約束をしていた。

それに反応して葵もイーサンに同行すると口にし、頭が冷えたお陰で冷静な判断を下せる為マキも此れなら大丈夫と思っていた。

「なら私達が救出組だね。」

20分経過して通信機から通信がない様なら突入するから」

「うん……今まで通信傍受も考えて使わなかったけど、四の五の言ってられないね」

そうして自動で救出組に決まったマキ達は全員通信機をONにして通信傍受の可能性があり使わなかったが、もう侵入がバレてる為なら引つ掻き回すと葵は思いながら通信機をONにする。

「じゃあ20分間隠れて待ってて下さいね。」

私達も潜入頑張りますから」

「あいよ〜」

「じゃあ行くぞアオイ」

そして葵、イーサンは城に向かって走り始め、その後ろ姿をマキ達は見送りつつライカんとは無用な戦闘を避けるべく隠れる場所を探し始めるのであった。

……そんなマキ達の近くに、馬車が近付いている事に2人は気付き、何なのかと思ひ警戒心を強めその馬車の正体を見るのだった。

EP V 『『シヨール』とデュークと蟲人間』

マキ達に見送られ、イーサンと葵はドミトレスク城の城壁内へと入り込み始める。

その際に葵は溜め息を吐き過去の記憶を呼び起こされる。

「おい如何したんだアオイ、怖気付いたのか？」

「いえ、城潜入つてのがイヴを利用して悪さをしようとした没落貴族達との戦いの時と同じ様だなんて感じたんです」

「…そう、なのか。」

だが今のイヴがあんな感じならかなりの武勇伝があるんだろな」

イーサンは葵から過去に似たシチュエーション、しかもイヴを利用して悪事を働こうとした者達が居たと話す。

イーサンも矢張りイヴもエヴリンの様な時代があつたがあの子から葵達がかなり暴れた上に『人間らしさ』を教えられたのだと思つていた。

「今度聞かせてあげたいですよ、イヴのお母さんの本当の愛と、私達の没落貴族達を千切つては投げた話を」

葵は笑みを浮かべながら当時の話を聞かせたいと話し、そして城壁から城へと繋がる

門のレバー前まで辿り着きイーサンがそれを引き上げようとする。

「これはこれは……」

『っ!!?』

「未だ生き残りが居たとは。」

「タフな奴等も居たもんだ」

その瞬間、イーサン達が歩いて来た方向から巨大な鉄槌を持つソフトハットと丸サングラスを着用する髭が生えた男が現れる。

その周りは葵のサイコキネシスの様に物が浮き、そして漂っている異能者だと一目で分かる人物だった。

葵は資料で見た事がある、この男こそがミランダの配下、四貴族の1人『カール・ハイゼンベルク』である。

「貴方は、ミランダの配下の1人、ハイゼンベルクね！」

「何、コイツがあの子の腰巾着か！」

「……ほう、他所者か。」

「面白え」

するとハイゼンベルクは自身を知りつつ、更にミランダに忠誠心の欠片も無いイーサンと葵を一目で他所者と見抜き、一言言うと腕で2人に周りの物をぶつける素振りを見

せる。

「させない!!?」

すると葵は真つ先にイーサンを狙った鉄の棒をサイコキネシスで止め、弾き返すと「ほう」とハイゼンベルクは感心し、更に中に浮いた物を勢い良くイーサン達に叩き付けようとするが、その悉くを受け止めては弾き返すを繰り返していた。

イーサンは目の前で起きている異能者バトルに驚きながらも、葵が味方なのが心強いと思っていた。

「ハツハアー!!?」

サイツコーだぜお前!!?

まるで俺みたいな事が出来る他所者の女、そうかお前がミランダの奴がビビってたアオイ・コトノハか!!?」

「五月蠅い!!?」

「っ、うお!!?」

するとハイゼンベルクは葵の事に注目し始め、ミランダすらも恐れていたと話していた所で葵はハイゼンベルクの声を雑音扱いし、周りの樽や箱をぶつけた瞬間最高威力のサイコキネシスをハイゼンベルクに叩き付け、壁にめり込ませながら押し潰そうとしていた。

「アンタの能力のタネは分かった、私みたいなサイコキネシス使いかと思ったけれど操れるのは鉄だけ!!？」

つまりアンタは磁力人間ってだけよ!!？」

本物の化物の力、此処で見せてやるわよ!!？」

「ぐ、があ!!？」

な、成る程、こりやミランダの奴がビビり散らかす訳だ!!？」

だがな…後ろが、お留守だぜ!!？」

『グサツ!!？』

葵はハイゼンベルクとの対決で周りの木箱を操らない、鉄しか操らない事から磁力を操ると見抜き、そのまま絶対的な優位を作り上げる。

しかしハイゼンベルクはそれでもなお余裕を見せ、ミランダが恐れた事を再三告げた直前後ろが留守だとしながら何か深々と刺さる音がした…イーサンの方から。

「ぐあつ!!？」

「つ、イーサン!!？」

「おっと、余所見厳禁だぜ嬢ちゃん!!？」

「しまつ……ツツ!!？」

イーサンの背後から鉄棒が背中から腹を突き破りながら刺さり、葵がそれに気を取ら

私の娘達なら存分に愉しませる事が出来ます。

それに我がドミトレスク家にお任せ頂ければ、貴女様に最高の血をご用意する事をお約束致しますわ」

「其処退いてよブサイク！」

アタシが見えないでしょう!!?」

そうして葵はイーサンが完全に起きるまでは目の前に居るミランダやハイゼンベルクとその他の四貴族の話を完全に無視し続ける事にしていた。

「うう……うお!!?」

「あ、起きましたねイーサン。

ごめんなさい捕まっちゃいました」

するとイーサンが目覚まし、目覚めの一番に捕まった事を謝罪し、話を続ける白ドレスの巨女『オルチーナ・ドミトレスク』や近寄っていた息が臭くブサイクな『サルヴァトーレ・モロー』、黒服を着て顔を隠す『ドナ・ベネヴィエント』が操るビスクドールの『アンジー』を無視を決め込んでいた。

「待て……つまり……」

「ねえ起きたよおー！」

「テメエら五月蠅えぞ!!?」

するとハイゼンベルクが話をしようとした所でアンジーが元から目を覚ましていた葵では無く漸くイーサンが目を覚ました事を叫ぶとハイゼンベルクがモロー共々五月蠅いと叫んでいた。

近寄つて来た息の臭いモローやイーサンが起きるまで気を引こうとあの手この手を使つてたアンジーを鬱陶しく思つてた葵は此れにだけは同意していた。

「何だ…此処は…アイツらの中の一人はさっきの…」

「此処は城壁内部の更に奥ですね。」

で、ミランダに四貴族全員大集合で両手が塞がつてる、余り手向かわない方が身の為っぽいですね……」

イーサンは意識を取り戻してから状況確認をしようとする、葵が場所に加えてミランダと直下の配下、四貴族に囲まれ両手が使えない事を話しながら2人で成り行きを見るしか無かった…葵一人なら打開策はあれどイーサンが居る為それを実行出来ないのもあった。

「コイツ等を独り占めにして何が面白いってんだ？」

「この俺なら、全員が楽しめるショー見せてやれる」

「ふん、何て下らない。」

安っぽいサーカスなんて誰が見るの？

「この者達が苦しむ様は私が保証しますわ」

「どうせ誰も居ねえ城でコイツのナニを切り落として、そつちの嬢ちゃんの血を一滴残らず啜ろうつてんだろ？」

如何やらハイゼンベルクはドミトレスクの言い分に不服があり、我こそはと名乗りを上げるがドミトレスクはそれを安っぽいサーカスと見下し、対するハイゼンベルクもイーサンと葵に対する処遇を口にして中には下品な表現や、葵は自身の血を啜られると聞きならば T—G e n e s i s の強い毒性で殺してやると逆に考えていた。

「互いの言い分は分かった。

片や一方は理屈に及ばぬ様だ。

だが、我が意は決したぞ。

ハイゼンベルク、この者共、お前に委ねよう」

すると此処でミランダが口を開き、自身の決定を口にした。

その結果、ハイゼンベルクかイーサンと葵の処理をする事が決まる。

「マザー・ミランダ！

如何言う事ですか!?!?

ハイゼンベルクは幼稚な上、貴女への忠義も疑わしいと言うのに！」

その結果に不服があった為かドミトレスクは立ち上がり、そのタイラント級の巨体を

マジマジと葵達に見せつけ、長パイプを右手の指で添えながらイーサン、葵を見つめていた。

「私めにお任せ下されば、滞り無くこの者達を…」

「ガタガタ言つてねえで、自分が負け犬だと認めちまえよ！」

餌が欲しけりやこの嬢ちゃんの分かれた仲間を当たりな！」

「その口をお閉じ坊や!!？」

今は大人が話してるの！」

「坊やだあ？」

テメエこそミランダ様に楯突く気か？」

するとハイゼンベルクがその異論に負け犬と評しイーサン、葵をそつちのけで口論が始まる。

此れには葵もまた一枚岩じゃ無い敵、但しボスが圧倒的な力で操っているタイプの相手だと思ひ始めていた。

「お前は責任と言う物を全く理解していない様ね!!？」

「図体がデカくなるとエゴまでデカくなつちまうみてえだな！」

「ケンカ！」

ケンカ！

やっちやええ！

やっちやええ！

「おい、俺達の事は無視かよ！」

その口論は白熱するとハイゼンベルクとドミトレスクは互いを罵り合い、モローが笑いアンジーが喧嘩を煽る叫び声を上げ、此れにはイーサンも堪らず悪態を吐き葵はミランダが居る所為で自滅は期待出来ない為黙っていた。

「静まれ！」

我が命は絶対だ、異議など認めぬ。

身の程を弁えるが良い！」

「如何も『お母様』」

するとミランダが4対の黒き羽を広げその場を静め、更に異議は認めないとしてドミトレスクの言論を一蹴する。

それに対してハイゼンベルクは何処か皮肉混じりな声色でミランダを『お母様』と呼びつつ自身の『ショー』が開ける事を喜んでいた。

そして良く見れば周りにライカンが集まり出し、いよいよその『ショー』が始まる事を予感させる。

「では親愛なる…獣の諸君。

長らく待たせたな、いよいよゲームの始まりだ！

……そんなじゃ期待してるぜイーサン・ウインタース、アオイ・コトノハ。

準備はいいか？

うるあ!!?」

「おい、よせ……!!?」

『ドスンッ!!?』

そしてハイゼンベルクはドミトレスク達やライカンに大振りな演技を見せた後イーサン、葵に期待していると話しながら鉄槌をイーサンに向かって振り下ろし、上手く足間にそれが降ろされた為彼は無傷で居た。

「またイーサンを……!!?」

「だって嬢ちゃんじゃ耐久力の所為で当ててもつまらないだろう？」

じゃあ10……9……8……」

「クソ、イカレ野郎共と化物が!!?」

葵は再びイーサンを狙ったハイゼンベルクに怒りを向けるが、対するハイゼンベルクは葵のT—G e n e s i s完全適応者の耐久性を考えて葵にこれを当ててもシヨールは楽しくならないと話し、そしてカウントダウンを開始しイーサンは更なる悪態を吐く。

「イーサン、彼処に穴があるから飛び降りましょう!!?」

「畜生が、それしか無いか!!?」

「3...2...1...ショータイム!!?」

葵はライカンに囲まれる中で穴を見つけ、更に透視で逃げる経路を把握してイーサンに飛び込む様に促し、彼もそれしか無いとして走り出し、そして2人で飛び込んだ。

その瞬間カウントダウンが終わりハイゼンベルクの『ゲーム』が始まる。

「ああ、クソツタレが!!?」

「あのイケオジ風男、覚えてなさいよ!!?」

『良いぞ、そうだ走れ!』

イーサンと葵はライカンに囲まれ、追い掛けられながら狭い通路を走り、ハイゼンベルクの悪趣味な声援を背にしながら前にライカンが現れた為横穴に方向転換、木のバリケードを破壊して更に狭い一本道の、落ちたら真つ逆様な天然石橋に降り立つ。

『その調子だイーサン、アオイ!』

はははは!』

「おいアオイ、お前の怪力やサイコキネシスは如何したんだよ!!?」

「未だです、未だ使うタイミングと言う物が...イーサン前!!?」

ハイゼンベルクの声援は続き、イーサンは葵の T - G e n e s i s より得ているパワーを何故使わないのかを疑問に思い叫ぶが、葵は『タイミング』を凶っている...する

と前方の穴からウリアシユが再び現れ、イーサン達の前に立ちはだかる。

「お、おい此れでも未だパワーを使わないのか!!?」

「仕方無い、飛び蹴り1発!!?」

『ドガアツ!!?』

イーサンも痺れを切らし始め、未だ葵に動く気はないかと叫ぶと葵はウリアシユの顔面に飛び蹴りを1撃喰らわせ退け反らせた。

『グウオオオオオオオオオオ!!?』

しかしそのパワーある抵抗がウリアシユを怒らせたのか、その戦鎚を振り下ろして橋を崩してしまいイーサン達は其処から真つ逆様に落ちてしまう。

「うわああつあ、あああああ、ぐう!!?」

『未だ生きてるのか、やるじゃねえか』

「針天井…ああもう見飽きたトラップだよもう!!?」

ウリアシユに落とされた際に縦穴に入った2人は未だ周りをライカンに檻越しに囲まれ、更に針が付いた天井が自身らに迫り来る、ダールトン城でも似た様な物を画面共有で見たトラップを葵自身が体験し見飽きたと呼称していた。

「ああ畜生……アオイこつちだ!!?」

「正解良く分かりましたねイーサン!!?」

『はは、全くよお……噂通りのしぶとさだな』

イーサンはしやがみながら木材の先の吹き抜けを発見し、それを破壊して奥に進むと葵は正解が分かっていた為イーサンを純粹に誉めていた。

するとハイゼンベルクは噂通りのしぶとさと話し、2人の素性を知ってる体で話していた。

そして針天井トラップを吹き抜けから退避して降りると、目の前に針山ローラーが現れ回転し始めた。

『おい、まさな俺がお前達逃すと思ったか？』

ドナとモローが退屈しちまつてるからな。

そんな派手に内臓をプチ撒けて、盛大なファイナーレの幕開けと行こうじやないか!!?』

「ああ、くそ……アオイ、彼処に穴が」

「いえ……その必要は無いですよ！

ふん!!?」

そしてハイゼンベルクがそのトラップを以てファイナーレとすると宣言した瞬間、イーサンは周りを見渡し壁に小さな穴が空いている事を確認し葵と共に其処へ隠れようと言いつけるが、葵は此処が『図っていた場所』だと理解し、その怪力で手枷を破壊して

針山ローラーの前に鎮座した瞬間、サイコキネシスを遂に使用してローラーを止める。

『あ、おい!!?』

「日本産とアメリカ産のミンチが出来上がるって思った？」

残念、出来上がったのはこの国特産の鉄屑だよハイゼンベルク!!?」

『グシャ、グシャ、グシャリッ!!?』

ハイゼンベルクが抗議の声を上げようとした瞬間、葵はローラーにサイコキネシスを叩き付けてそれを潰して行き、最後には無害な丸い鉄のボールにした後元ローラーを蹴り上げ、壁にめり込ませた。

そして手刀でイーサンの手枷を割った後、ニヤリと笑っていた。

『おいおいおい、あんまり興奮めさせる様な事は』

「私達のモットーは敵の『ゲーム』を台無しにする事よ。」

それを知らずに『ゲーム』を仕掛けたのはそっちの落ち度だよ。

それと…監視カメラで私を見てるならご注意」

『何い?』

……うつ、ごえつ!!?』

『ブツン』

ハイゼンベルクは今の葵の行動に完全に趣旨が違う旨を話そうとした瞬間、葵達CL

OWN事件やダールトン事件解決組は『ゲーム』破壊をモットーにし、テロリスト達のそれ等を悉く壊して来ていた。

それを話した後葵は監視カメラ越しにサイコキネシスをハイゼンベルクに放ち、彼の脳をシエイクして放送を無理矢理切らせた。

「今のは？」

「監視カメラ越しにハイゼンベルクの脳にサイコキネシスを当てました。

私出来るんですよ、透視とか監視カメラ越しでも相手を指定したサイコキネシスを放つ事が。

そしてこの手の『ゲーム』は最高潮でそれを壊してやる、それが私のやり方なんですよ。

迷路系なら透視で始めからコンセプト破壊しますが」

イーサンと葵は奥に進みながら、先程の葵の行動を問うとハイゼンベルクに監視カメラ越しにサイコキネシスを当てたと言い、更には迷路では無い、この手の『ゲーム』ならば最後の最後にコンセプト破壊してやると言い放ち、イーサンはルーカスの様な相手と葵は何度も戦っていた事を悟りつつハイゼンベルクに最後にザマア見ろと思っていた。

「さて、先程捕まった場所に着きましたよ。

イーサン、レバーを」

「ああ……アオイ達が味方だと心強いな。

エレナ達の事は……本当に気の毒で未だ引き摺つちまうんだが……ローズの為に力を貸してくれてありがとう」

「例ならローズちゃんを助けた後に。

それよりも、私はミアさんの生存を未だイーサンみたいに諦めてませんから。

……絶対に見つけ出して救いましょう、2人を」

そうしてハイゼンベルクに最初に捕まった場所に辿り着き、イーサンはレバーを引くと葵、マキ、イヴが味方なのが心強いと漸く認め、力を貸す事に礼を述べると葵は未だ早いと返し、更にミアの事を諦めていないとまで言いイーサンに完全協力する姿勢を見せる。

始まりはミランダの存在から生まれた誤解だったが、葵達が共に行動を取る事で此処で漸くイーサン達の間の関係性が氷解する。

「よし外だな……雪が降って来たしマキ達は大丈夫だろうか？」

「……アレから20分以上経過。

もう救出に動き始めていても可笑しく無いですね。

通信を入れます。

此方オメガ16、デルタ2にオメガ18……待つて、近くで私の通信機越しの
声が届きました」

城壁から外に出て葡萄畑に来たイーサンと葵はマキ達は無事かを確認すべく通信を
送るが、その通信音声を葵の耳が割と近くで聞こえた事をイーサンに話し、彼も何事か
と思ひ道なりに進み始めた。

すると其処には馬車があり、中から馬車の前扉を埋める程巨漢の男が現れた。

「お待ちしておりましたよウィンターズ様、コトノハ様」

「何故名前を……？」

「貴方、何者ですか？」

その男がイーサンと葵のファミリーネームを口にし、初対面なのに何故名を知つて
るのか警戒心を露わにする。

すると馬車の横扉が開き、中からマキ、イヴが出て来る。

「えつ、マキさんにイヴ!?」

如何してこの馬車に……」

「いやあ、葵達と分かれた後にこの人が馬車で来てそれで……」

「……救出に向かわずともウィンターズ様達なら必ずやミランダ達の下から去る事が
出来ます。」

その際に貴女方が捕まってしまうては本末転倒です。

どうぞ馬車にお入り下さいませ、ツルマキ様、アーク様』つて言つて馬車に乗せて貰つて此処まで…」

するとマキ達は分かれてから直ぐにこの男に出会い、其処で説得を受け馬車に乗せて貰い、ドミトレスク城前まで連れて来て貰つた事を明かし、葵やイーサンは益々この男の目的が分からず困惑し、男の方を見た。

「この村では貴方達はもう有名人ですからねえ。

何でもウインターズ様のご家族をお探しと、ミランダの打倒を目標にしてるだとか…。」

確かに此方の城は怪しい雰囲気ですな」

「ああ、お前もな」

男は村人が消え去つたこの村で既にイーサンや葵達が有名人だと話し、更に目的をイーサンの方のみならず葵達の方までピタリと言い当てて怪しい雰囲気を醸し出し、葵達は怪しい行動を見せれば銃やサイコキネシスを叩き込むと決め、イーサンは悪態を吐いていた。

「ほほほほほ、私は商いをしているだけ…」

「はあ、此処で？」

「ああ申し遅れを、『デューク』と申します。

如何です？

武器に弾薬、傷薬に：欲しい物は何でも提供しましょう」

その男、デュークは商いをしてしていると話し、全員こんな村やドミトレスク城前でそんな事をしている不自然さに更に不気味さを醸し出すが、不足している武器弾薬、更には傷薬まで提供すると至れり尽くせりなサーピス精神を見せていた。

それに対する葵達の答えは互いに見合いながら頷き、葵から切り出す。

「分かりました、その商いの腕を見せて貰います。

但し条件としてこのタブレットに写真を撮らせて貰って、CLOUDで仲間に

共有して貰いますね」

「ええええ勿論。

もし貴女方のご友人方に出会いましたらその時は商いとして商売をさせて頂きますとも！」

「：OK、じゃあ写真に撮って隊長達のCLOUDに共有しとくわ」

葵は商いの腕を見せて貰う代わりに仲間達、クリスやB・Y・達に写真を共有させると言うある意味では指名手配の様な措置を取るが、デュークはそれを快く快諾し、マキが写真を取りCLOUDにその写真に『Duke』とメモして共有化し、そうして彼の

商品を見始めた。

「『何、買うんで？』……ん、昔の友人の口癖でしてね」

「あーはいはい……って、サジタリウスやデュランダルのマガジンに、私らのショットガンの弾薬から弾薬の設計図、イヴのグレネードランチャーの各種弾にアタッシュケースに私らの回復アンブルにイヴやイーサンの回復薬まで……?!?」

「……本当に何でも揃ってる、貴方何者？」

デュークは昔の友人の口癖を披露しながら武器弾薬を見始めると、何と武器を収めるアタッシュケースから弾薬の設計図、更に本来出回っていないサジタリウスやデュランダルのマガジンや弾薬等があり本当に何者なのか疑問に思い始めた葵達。

「(サジタリウスにデュランダ、それにこのマガジン……私の『ペンドラゴン』まで予備弾薬を用意してるなんて……本当か何者なんだろう、この人)」

更に葵はサジタリウス等の A・B・F の銃のマガジンのみならず、自身が改造したデザートイーグルを基銃とした、茜のアルビオンと同じく彼女達やヨナにしか扱えぬ様にカスタマイズしたマグナム銃『ペンドラゴン』のマガジンまで存在する事に驚きを隠せずに行った。

だが、此処で少し問題が発生する。

この村の通貨『L e i』が無かった為購入不可なのだ。

「やば、この村の通貨だからドルも円もポンドもルーブルも使えないじゃん。

如何したら…」

「おやおやお金にお困りの様ですね。

なら今後はライカン達の落とす結晶等をや宝物を集め換金すると良いでしょう。

更に、今回は特別サービスでこの村の通貨に皆様のお金を換金致しましょう！
村を出る際にはお金は全額お返し致しますので、如何でしょうか？」

「…それマジ？」

破格過ぎるわ…」

葵達は村の通貨、ルーマニアの通貨でもあるLeiを持っていない為買物不可能だと話す。

するとデュークは次からはライカン達が落とす結晶、更にこの村の宝物を換金する様にアドバイスを贈ると同時に全員のポケットマネーを村の金に換金し、そして村を出る際に全額返金すると言う破格サービスを行いマキを逆に引かせる。

「さあ皆様、如何いたしましたでしょうか？」

「…取り敢えずハウンドウルフ隊やデルタチーム、それにA・B・Fの補給路が確保されるまではデュークの商品利用をした方が効率的だと思おう。」

アオイ、マキは？」

「…うん、女は度胸！」

持つてるお金を全部換金して、そのお金をイーサンにも渡して買い物をする!!
?

これで決定!!？」

「即決だなアオイ達…」

そうしてイヴの言葉から葵達はポケットマネー全額を換金し、補給路確保までイーサンにも山分けしてデュークの商品を利用する事に決定して葵、マキ、イヴは全額をデュークに渡す。

するとかなりの額のLeiが帰って来た為、それ等をその場でイーサンに山分けして傷薬に回復アンプルに弾薬等の商品購入をするのだった。

「今後ともご鼻根に。」

ああ、それと銃のカスタマイズをしたい時もご利用下さいませ。

最も、コトノハ様やツルマキ様達の武器は既に特注品、下手なカスタマイズをすればバランスが崩れる芸術品ですので、此方は主にウインターズ様にご利用なさる事になるかと」

「取り敢えず助かったぞデューク、それにアオイ達。」

さて、いよいよ向かうとするか……」

デュークは葵やイーサン達に今後も利用する様に、更にイーサンが主に利用するであろう銃のカスタマイズの事も話すと取り敢えずイーサンはデューク、そして葵達に礼を述べて城の正面玄関を見やる。

そして、中へと侵入する。

「……人の気配が無いな」

「正面には……『ペイラ、カサンドラ、ダニエラ』って3人の女性の肖像画、横のドア前には1月5日、レドニクって人が男1、女3を『納品』、1月28日にミランダが奥様、ドミトレスクと会談……つまりこの時点でローズちゃん誘拐を計画してた訳だ。

後2月1日にデュークと商談つてある。

あの人マジで商いしてるし……」

イーサンは人の気配が無いのを確認し、更にマキが周りを探索し正面の肖像画の女性達、更に来客名簿を目に通しミランダは1月28日時点で計画をドミトレスクに伝えていたと予想し、更にデュークは本当に商いをしているだけとしてこの来客名簿の中でも浮いた存在だった。

そして横のドアを開け、甲高い叫び声が聞こえたホールに出ると葵達は周りを調べ

『グサツ!!?』

「ぐああ!!?」

『イーサン!!?』

「決めたわ、この男をお母様の下に運んで、後は鬻りながら狩り殺すわよ『カサンドラ』、『ダニエラ』」

「良い考えね『ベイラ』お姉様!

あははははは!!?」

そして蟲人間、ベイラ、カサンドラ、ダニエラの肖像画に描かれた3名はイーサンを引つ張り始め、奥の部屋に連れ込み始めようとした。

残した葵達は狩り殺すとしながら。

「…イーサン待つてて、今助け」

「俺の事は良い、先にローズを探してくれええ!!?」

葵、マキ、イヴはイーサンを助けようとしたが、そのイーサンが自分よりもローズの身を案じて3人に探す様に叫びながらベイラ大量に奥へと連れて行かれてしまう。

村に潜入し、作戦開始から1時間以上が経過した現在。

未だ分からぬローズを探し出し、更に恐らく生きてこの村の何処かに居る筈のミアを探し出す為イーサン、葵達は始まりの関門たるドミトレスク城の洗礼をイーサンの身を

以て受けるのであった。

EP VI 『ドミトレスク城潜入』

イーサンがベイラ達に連れて行かれてしまい葵は急ぎ透視を使い彼の安否確認をすると、その先にある寝室にドミトレスクが居り、其処でイーサンの手を切り彼の血を啜る光景が目映った。

「拙い、イーサンがドミトレスクの前に連れてかれて、今血を少しだけ啜られてる！」

「ヤバいじゃん!!?」

早いとこ助けにー

「ゲホツ、ゲホツ!!?」

葵達はイーサン救出の為に急いで動き出そうとした…その時、先程開いていた誰も居ない部屋から声上がり、そちらの方に葵は透視で目を向けると…其処には先程外に居た筈のデュークが何故か居た。

葵達に気付かれる事無く。

「えっ、デューク?」

えっ、何で外に居た筈なのに彼処に居るの!??

しかも手招きしてる……」

「……デュークの所に行こう、呼んでるなら理由がある筈」

「けどイーサンが……未だ手招きしてる……分かった、イヴを信じて行つてみる」

葵はデュークが手招きしている事に不気味がりながらイーサン救出の方に行こうとするが、向こうが手招きし更にイヴの提案によりデュークの居る部屋に向かう事となり、3人でその部屋へと入った。

「お待ちしておりましたよ皆様。」

如何やらウィンターズ様が捕まってしまった様子で」

「そう、だから早く彼を救出しないと」

「そう焦らずにコトノハ様。」

ウィンターズ様は自力で抜け出す事が出来るでしょう。

しかし、その際に貴女方が向かえばドミトレスク夫人や娘の三姉妹がウィンターズ様を人質に取り貴女方を捕まえるでしょう。

そうならない為にも此処で待機を」

其処に居たデュークは葵達の状況を正確に把握しており、イーサン救出の為に動こうとする葵に自制を促し、更にイーサンなら自力で脱出する事、無理に救出に向かえば逆自身達が捕まる事になる等を話して落ち着かせる。

マキやイヴもそれを聞き、確かに今向かえば捕まるだけと思い、葵の方を見ていた。「それで、この部屋に待機の理由は？」

間違い無くドミトレスクもあの蟲姉妹も此処に来るわよ？」

「いえいえ、この部屋はー」

『あの女達居ないわね？』

見渡す限りなら外商室が怪しいわ、早く行くわよ姉様達!!？」

葵が何故この部屋に待機か、デュークがその理由を語ろうとするとカサンドラの声が響き渡り外商室に向かって入ろうとして来るのを察知する。

それを聞き葵達は銃を構えて応戦態勢に入ろうとした。

『駄目よカサンドラ！』

お母様の言い付けで何があろうとも外商室に入ってはならない事を忘れたの？

それより私達はそれぞれの持ち場に行くわよ、良いわね？」

『…はい姉様。』

もしも外商室に居るんだったら運が良かったわね生娘達！

でも其処を出たら必ずその血を啜り尽くしてやるから覚悟する事ね、あははは

ははは!!？」

「…と、この様にセーフゾーンになってるのですよ、ほほほほほ」

だがベイラがカサンドラを止め、デュークの居る部屋はドミトレスクが何があるとは言つてはならないと口にし、カサンドラが捨て台詞を吐くと羽虫の音がしてその場から三姉妹が去つて行つた事を知らせる。

デュークはそれを誇りながら口にする。葵はいざと言う時はこの部屋は逃げ込む選択肢が増えたのを確認する。

「さて、此処がセーフルームだとして、イーサンは如何やつて助ける?」

「…10分、10分待つて此処に来なかつたら突入する。」

でも10分以内に此処に来られたなら……」

マキは冷静にイーサンを助けるか葵に告げると、葵は10分だけ待つて来なかつたらイーサンを救出に動くと口にし、扉の方を見ていた。

すると直ぐに扉が開き、両腕の真ん中が裂けた様な痕を残したイーサンが現れ3人を見て安堵していた。

「良かった、あのイカレ女達に捕まったのかと…」

「デュークが手招きでこの部屋に入れてくれたからね。」

で、その手は…」

「ああ…あの連中に天井に吊るされたよ。」

全く中世かよ此処は：それとデューク、今更だが何で此処に？」

葵はイーサンに両手の事を聞くと天井に吊るされたと話し、中世の拷問器具にフックで天井に吊るす物があつた事を思い出し、アレを無理やり外して回復薬を掛けたのかと葵達は理解して思わず手を摩つていた。

対するイーサンは何故デュークが居るのかと問い詰め始めていた。

「ほほほ、商いは場所を選びません。

それでウインターズ様、娘さんの手掛かりは見つかりましたかな？」

「いや、未だだ」

「もし娘さんがいらつしやるとしたら、この城の主人の部屋が一番怪しいでしょうな、そうでしょう？」

デュークは商いは場所を選ばないと話した後イーサンにローズを見つけたかと話すと、彼が首を横に振るとドミトレスクの部屋が怪しいとアドバイスを一同に贈り全員でドミトレスクの部屋をまず目指そうと決める。

その中でイヴは模型の横にあるメモを読んでいた。

「おおアーク様お目が高い！」

その模型は異端の烙印を押されたノルシュティンが遺した迷球模型の遊具。

古城、丘の館、水車、鉄塔の全部で4つの模型があり、その中には何でも彼が

愛した4人の妻の遺骨が色水晶で彩られ収められているとか。

専用の鉄球を見つけ、遊具をクリアした暁にはその遺骨、高値で買い取らせて頂きますぞ！」

するとデュークはその模型遊具がノルシュテインと言う人物が遺した物で、中に色水晶で彩られた人骨が収められていると話し、葵達も確認すると確かに色水晶の人骨がありこれを買収するデュークもやや悪趣味だと思いつつ部屋を後にしようとする。

「ああそれと、奴等から逃げて来た時にこの指輪を手に入れたんだが……この目の部分、外れそうじゃないか？」

「確かに……うん、あつさり外れましたね。」

「じゃあ行きましょう、ドミトレスクの部屋へ」

するとイーサンは懐から緋色の目の宝石が付いた此れまた趣味の悪い指輪を葵達に見せると、葵は少し弄りその指輪から目の部分を抜き取り、何処で使う用途は分からないが取り敢えず持つておこうとして、4人はデュークの部屋から出てドミトレスク城を走り出す。

「葵、アテはある訳？」

「一応！」

透視を使ってドミトレスクが専用通路であちこちを回ってるけど城主の部屋

なら1階には先ず無い筈だから上を目指そう！」

マキは葵にアテがあるかを伝えるとドミトレスクが常に専用通路を使い徘徊していると話し、更にデュークの言い分ならばローズが例え居なくとも手掛かりはある筈の城主の部屋を目指すべく、ホールから2階に上がる。

その途中、デュークの部屋の目の前の床から4つの顔の無い像が出て来ており、此れが四天使かと思いいながら2階の閉じたドア前に来る。

「……これ片目無い、イーサンさっきのを」

「ああ……多分此れで……よし開い……っ!?」

『ブウウウウンツ!!?』

イヴはイーサンに対し片目の無い女が象られたドアに先程指輪から外した石を嵌める様に言い、それが嵌まるとドアの鍵が開きイーサンが開け進もうとした瞬間、蟲が集まって行きイーサンと近くにいたイヴに群がり、イーサンの右手に侵入し食い破つて来ると、先程通つて来た通路に蟲が集合しカサンドラが現れる。

「うふふ、男をバラすのは久し振りだし、貴女達も美味そうねえ！」

先ずは逆さ吊り……それから頸動脈を切つてあげるわね。

生きたまま?

死んでから?

どつちが良い？」

「げっ、蟲女!!？」

「チツ!!？」

カサンドラが現れ、その身体が構成された瞬間イーサンは手のお返しに右手にグリゴリが託したハンドガン、左手にデュランダルを装備し連射と単発狙撃の両者を担う2丁拳銃で対処しようとする。

が、カサンドラの身体は蟲に分裂し弾を避ける為銃が効かない事実が此処で判明する。

「クソ、銃が効かないのか!!？」

「…なら構つてゐる暇は無い、一旦奥へ！」

「イヴに賛成、今は退散するよ皆!!？」

カサンドラに武器が効かないと理解した瞬間、イーサンと葵達はイヴの合図で道なりに奥へと進み、奥の部屋に木の板で塞がった抜け穴があった為カサンドラに構わず其処へと降りた。

するとカサンドラは何故か蟲にもならず追跡を諦め、4人は上を見ていた。

「…追つて来ないのか？」

「何故なんだ？」

「うーん、何かヒントになる物があれば……あ、これ侍女のメモ書きかな……内容から連中は小さな粗相をしただけで地下送り、私も窓を開けて怒られたから送られちゃう、どうしようって奴」

「1958年……ふう、この先に侍女が恐れる何かがあるのね……」

イーサンがカサンドラが追って来ない理由を不思議がると、マキは近場にあつた侍女の恐怖に彩られたメモを発見、地下には何か恐ろしいモノが控えてると全員で共有して奥に進むと音楽が聞こえ始める。

「奥にドミトレスクが居る……何かワインを持って試飲してみたいけど、進む道はこつちしか無いからこの下の穴を通って行きましょう」

「仕方無いな……頼むから見つからないでくれよ……」

葵は壁越しの部屋からドミトレスクがワインを音楽を流しながら試飲してる光景を透視で目撃し、更にこの先にしか道が無い為イーサン達も含め4人は渋々その部屋に続く穴を通り始めた（先頭は葵）。

するとドミトレスクが音楽を止め、丁度部屋から出て行く。

それを見届けた後葵は穴から出て、他3人も部屋に侵入する。

「それでアオイ、次は何方に？」

「其処の階段を降りて、1つ仕掛けを解いて地下牢から上に行くんですよイーサン。」

その仕掛けはさつきと解きますから遅れない様にして下さい」

「んじや行きますか」

イーサン、マキ、イヴは葵の導きで階段を降り、更に其処に燭台を動かし、松明に火を灯す仕掛けをサイコキネシスを使い手早く解くと地下牢へと侵入する。

其処は拷問器具や、人間が吊るされたりする吐き気を催す場所であった。

「此れは…此れがさつきのメモにあつた地下を恐れる理由かよ、クソが！」

「…メモにも適合、破棄とか色々あるし、タルには血が入つてる…イーサンは血を啜られた、つまりはそう言う事をする場所つて事。

壁にも兄さんに助けを求めるダイイングメッセージが…」

「行こう、此処は見てて怒りしか湧かない」

イーサンはこの地下牢を見て悪態を吐き、イヴは冷静に見えるが内心は怒りに満ちており、マキもその怒りを隠さず牢の崩れた箇所等を進み奥へと向かう。

『ハアアア……』

「っ、敵性体と遭遇、殲滅する！」

「…此れがドミトレスク達の被害者の末路なの……？」

…許せない!!？」

「チツ、せめて俺達が安らかに眠らせてやるよ!!？」

「ドミトレスク…!!?」

その途中、牢屋から骨と皮のみになったゾンビの様に動きが鈍重な化物が現れるが、全員が此れがドミトレスク達の被害者、その末路だとその場で悟り、イーサンの2丁ハンドガンに加え、マキ達もショットガンやデュランダルでそれらを殺し、結晶等を回収するとその中に牢のメモにあったイングリドの名がある首飾りを葵が手に取る。

「……せめて安らかに。」

じゃあ3人共、あの階段を上がって奥へ。

其処からまた地上部に出れます」

そうしてドミトレスク達の手により化物にされた哀れな被害者の骸達を斃し、奥へと進むと入り組んだ鉄格子のある迷路に辿り着く。

イーサン、葵達は早速其処を突破しようとした……瞬間例の蟲達が集まり、ベイラが現れる。

「カサンドラがしくじった所為で、こんな面倒な事に……」

温かい血のお風呂に浸かって、この疲れを落としたいわ」

「うわ、蟲女の長女!?」

アンタなんか相手してる暇なんか無いのよ!!?」

「クソ、お前の妹で銃が効かないのはもう分かってるんだ!!?」

マキの言う通り無視してやる!!?」

ベイラに対しマキとイーサンが悪態を吐くと、葵は試しにサイコキネシスをベイラに向かつて指定の物を放つが、ベイラの身体を構成する無数の蟲の少数にしかならない事を理解し、その瞬間前方に力場を飛ばすサイコキネシスに切り替えベイラを壁に叩き付ける。

「うあつ!!?」

この小娘が、私に何てー」

「黙れ蟲」

「きやあつ!!?」

ベイラが葵のサイコキネシスに怒りの言葉を放とうとしたが、葵は怒りからベイラに同じサイコキネシスをぶつけ足止めをする。

その後直ぐにイーサン達に追い付き3人が木のバリケードに今止められているのを確認する。

「退いてて皆、おりゃ!!?」

『バギイ!!?』

するとマキが本気のパンチを繰り出しバリケードを一撃で破壊する。

その後奥の厨房に向かおうとしたが、それを見計らったかの如く鉄格子が降りて4人

を阻み、更に蟲の羽音からベイラが背後に居り何かをしたのだと全員が判断する。

「何処へ行くつもりなの？」

坊や達」

「…アイツ、アオイのサイコネシスをマトモに受けてもケロツと……やっぱり蟲だから余り効果が？」

「（…この世に生きてるなら殺せないものは無い、例え化物でも。」

何か、何か方法が…!!?）」

ベイラは葵のサイコネシスに対しても余り効き目が無かったのかケロツとしており、全員で武器を構えるもそれも効果が無い事はカサンドラで実証済みな為全員で構えるしか出来ず、近付いて来そうなベイラを葵がサイコネシスで吹き飛ばし、それを受けた後に蟲形態になり力場を避ける事を繰り返す千日手になりイーサン達は焦り始めていた。

「…ん？」

そう言えば粗相をした中に暑いから窓を開けたら突然ベイラ達3人が閉じろって叫んだってメモが…相手は蟲……もしかしたら!!?」

『ズダンズダンズダンッ!!?』

「何処を狙って…いや窓、まさか!!?」

マキは漁ったメモの中に一文、たった一文のみベイラ達3人が過剰に反応した物を思いつき、「窓に向かつて」ハンドガンを放つ。

するとベイラは一瞬は何処を狙っているかを嘲笑おうとしたが、窓に向かつて銃を撃つた事に狼狽始めていた。

『バキイーン、ブオオオオオオツ!!?』

「ぐああああああ!!?」

おのれ人間共があ!!?」

すると窓が割れ、外の『冷氣』が部屋を満たしベイラがそれを浴びた瞬間、蟲形態になれず身体が凍り付き始めた光景がイーサン達の目の前で広がり、マキ以外の3人は一瞬呆気に取られ、マキはしてやったりと言った表情を浮かべる。

「ピン!」

この国は1年を通して平均最低気温が10℃位しか無いから連中は蟲だけに寒い気温内では活動が限られるんだ!!?」

「成る程、となれば…ふん!!?」

「あ、があ!!?」

マキが何が起きたのかを相手が蟲である事を前提に話し、全員で寒さに弱い事を共有

する。

更に葵は指定サイコキネシスをベイラに改めて放つと、蟲が全て凍っている為サイコキネシスから逃れる事が不可能になりベイラその物を押さえつける事に成功する。

「となれば今はもう銃が効き放題か……なら喰らいやがれクソ蟲女!!？」

「…地下の人達の報いを受けて!!？」

「そらそら、化物退治のお時間だよ!!？」

葵がサイコキネシスでベイラを取り押さええた瞬間、イーサンとマキがショットガン、イヴがサジタリウスを乱射しベイラに向かって弾丸を、地下の化物と化してしまった人々（体の骨格から女性）の無念を晴らすかの如く叩き込む。

「あ、ああ、あああああ……!!？」

するとベイラはその身体を崩して行き、最終的に全身が特異菌特有の石灰化…地下の化物の落とした物が結晶から結晶化し、トルソーとなり完全に死亡する。

此れによりドミトレスク三姉妹は冷気が弱点だと完全に立証される。

葵達はそれを回収すると、厨房の鉄格子が上がる。

「ふう、取り敢えず此れで蟲女共は冷気が弱点だつて分かったな」

「だね、後は窓や吹き抜けがある場所に誘い込むか……」

「……これ、役立つかも」

イーサン達はドミトレスク三姉妹の攻略法を確認し合い、次にイヴが背中に背負った専用グレネードランチャー…接近特化な上に火力や力が茜達と比べて低めなイヴ用に作られたそれとある弾頭を摩りつつ、厨房に行くところ見よがしに取って下さいと血に漬けられたワインをイーサンが手に取る。

「チツ……これは銘柄は『サン・ヴィエルジェ』、処女の血かよ……この厨房や地下牢の光景、それ全部合わせてマジで血の加工工程が入ったワインなのかもな、クソが」

「こっちのメモには粗相を起こした侍女は幽鬼になつて徘徊してるつてある。

幽鬼……と言うより、アレはもう血を抜かれてそれを求める吸血鬼つて所ね
…」

「……ドミトレスク、と言うよりミランダはやつぱり生きていちゃいけない。

確実に殺さないと…」

イーサンはサン・ヴィエルジェのワインボトルを今にも叩き割りかねない様な目をしてながら今まで見た物から来る当然の悪態を吐き、マキは 地下の侍女の末路が幽鬼と呼ばれている事、イヴはドミトレスクやミランダを生かしてはいけないと口にしながら全員で墓の方を見る。

「……先ずそのボトル、多分2階の…ワインルーム？」

で使うと思いますよ、隠し扉とワインボトルを置くギミックが見えますから。

それとドミトレスク達を生かして置けないのは大賛成、だから先にこのトルソーとかをデュークに売り払ってイーサンをカスタマイズしましょう。

∴私も皆みたいにキレてるから気持ちは良く分かります、だからこのドミトレスク城の『B・O・W』である三姉妹とドミトレスクを殺しましょう」

葵はカラコンに下にある瞳が輝きながらイーサン達の方に向き、ドミトレスク達をB・O・Wと呼びながら3人に賛同しつつ、ワインボトルはギミック用だから割らない様に釘付けし先ずはイーサンのグリゴリの形見のハンドガン、ショットガンをカスタマイズする事を進言しながら食堂途中の通路からイーサンのハンドガンに使えるコンペンセイターを手に入れ、早速取り付けて食堂、そして内鍵を開け其処から先程のメイホールに戻りデュークの下に走って戻る。

「おや皆様、何か御入用で？」

「ああ、この結晶やあの蟲女のトルソーを売りに来た。

そしてこのハンドガンとショットガンをカスタマイズしてくれ」

「おお、ご利用ありがとうございます！」

では早速換金とカスタマイズを致しましょう！」

デュークがイーサン達に話し掛けると、代表してイーサンがトルソーや∴幽鬼から出た結晶を良心を痛ませながら売り払い、トルソーに関してはザマア見やがれと思いつつ

それなりのお金が入った為ハンドガンとショットガンを現時点でカスタマイズ出来る限界までやり、ついでにハンドガンのロングマガジンを購入、それをイーサン達は受け取りながら装備させ部屋を後にしようとしていた。

「またの(ご)利用、お待ちしております」

最後にデュークが声掛けし、全員領きながら2階のワインルームに駆け上がる。

すると明日の言う様なギミックと、メモ書きが置かれており其処にはオルチーナ、つまりドミトレスクのワイン醸造の歴史や『独自の工夫』を加え、その中で最も良い出来の物がサン・ヴィエルジェのボトルに保存されると書かれていた。

「チツ、何が独自の工夫だ！」

「こんなワイン、さっさと如何にかしてくれアオイ!!？」

「はい、ではこのワインを其処の棚にこう置きまして…やつぱり隠し扉ギミック用でしたとさ。」

中には…中庭の鍵、ギャグか何か？」

イーサンは地下や厨房の光景からサン・ヴィエルジェを気味悪がり葵に手渡すと、葵はそれを迷わず隠し扉となってる棚のワインを飾る台に置く。

すると棚にワインが収納され隠し扉ギミックが解かれ、中にあつた宝箱から中庭の鍵を頂く。

「なあ、サイコキネシスとかあるなら扉をブチ破って進まないのか？」

「確かにイーサンの言う案が良いんですが…私達はB・O・W.の退治屋にしてバイオテロリストの目論見を全て壊す『仕事』をしています。

だから敢えて彼方の手に乗りつつ全てを壊してやるんですよ、人間を辞めたりした連中の、全てを」

「…成る程な」

イーサンは葵の力で無理矢理道を作れば良い案を出すのが、葵が代表し人間を辞めた『生物兵器』の目論見も何もかもを破壊する為に敢えて向こうのギミック等に乗っていると話す。

其処には油断も慢心も無い、クリスと同じただ純粹なB・O・W.やバイオテロへの怒りをイーサンは感じ取り納得する。

そうして一行はワインルームから出て1階メインホールに戻って来る。

「お城の案内をする？」

「カサンドラの方か…さつきからしつこいぞ、このクソツタレな蟲女共が!!？」

「…待って皆、今から面白い物を見せてあげる」

其処に再びカサンドラが現れ行く手を阻もうとするも、此処には窓が無い為冷気を浴

びせられないがイーサンは罵りを口にするが、其処にイヴが今まで大事に温めていたグレネードランチャーを解禁、それを構えながら前に出始めた。

「あらお嬢ちゃん、貴女から私達に血を提供してくれるのかしら？」

「…貴女の弱点はベイラで看破済み。」

そのベイラを斃して次は貴女の番になりたいの、カサンドラ？」

「なつ、お姉様が…あり得ない、失敗作如きが出鱈目を言うな!!？」

カサンドラは相も変わらずな余裕を見せるが、イヴがベイラを殺した事を宣告した途端態度を豹変させ、今にもイーサン達を殺す様な視線を向けて来る。

その間に黙々とイヴは『青い柄』の弾頭を装填し、カサンドラにその10代の少女には似合わない得物を向ける。

「…勝手に信じないならどうぞ、でも先ずは此れを喰らって」

『ボンツ、ガシヤアツ!!?』

「ああああああああ、身体が身体が凍る、何をした小娘があ!!?」

するとカサンドラに発射された弾頭は直撃すると突如彼女の肉体が外の寒気に晒した状態と同様になる。

イヴは何を装填し放つたのか……それは冷却弾、それもヨナ監修により彼女の力も込められた特注弾であった。

「…冷却弾、貴女達が冷気に弱いつてもう把握済みって分かったでしょう？」

それで如何するの？

尻尾を巻いて逃げるか、此処で死ぬのか何方か好きな方を選んでよ、何方にしても最後は死ぬのは変わらないから、B・O・W。」

「くそ、この屈辱は忘れないわよ!!？」

絶対にアンタ達は殺してやる、必ずよ!!？」

するとイヴは主導権を握った事でカサンドラに対し今殺されるか、後で殺されるかを選ばせる。

するとカサンドラは怒りの言葉を口にしながら2階へと走って上がって行き、それをイーサン達は未だ自分が優位に立っていると思う彼女を今は見逃すのだった。

「ふん、何とでも言ってる。

薄汚い蟲女が」

最後にイーサンが他3人の気持ちを代弁し、逃げたカサンドラを尻目に全員で前に進み始めた。

全てはローズの発見を第1目標、城の『B・O・W』殲滅を第2目標にして。

この城で死んだ者達の無念や怒りをぶつける為に。

そうして4人はドミトレスク城の中庭に出るのであった。

EP VII 『ドミトレスクの怒りと葵達の怒り』

イーサン達はカサンドラをわざと見逃した後、中庭に出て唯一開いてる扉を開けると、其処にはドミトレスクが居り、全員息を潜めて彼女が進行ルートの先に行くのを待った。

「…アオイ、行ったか？」

「はい。」

そしてドミトレスクの行った先が城主の部屋でした……けど、ローズちゃんが見当たりません」

「嘘でしょ？」

「じゃあアイツ等をボコしてローズちゃんの居場所吐かせるしか無いじゃん」

イーサンは葵の透視によりドミトレスクが部屋に入り、更に其処が城主の部屋だと見た目から判別するが、其処にローズは居らず全員が目に見えて落胆し、マキはドミトレスク達からローズの居場所を吐かせる選択肢が無い事を理解する。

「そんな、ローズ……」

「イーサン……大丈夫ですよ。」

ミランダの目的はローズちゃんを持つ力です。

だから絶対に生かさなければならぬ、つまり死ぬ心配は無いんです。

ですから私達はB・O・Wを殺す際にローズちゃんの居場所を吐かせる、それだけですから頑張らしましょう」

イーサンが特に落胆してゐる中で葵はローズの安否はミランダが目的としてゐる為間違いない無く約束されてゐると話し、自分達のB・O・W退治にローズの居場所を吐かせるが追加されただけど話し彼に頑張ろうと鼓舞してゐた。

それを聞きイーサンはクリスや葵はこんな絶望感漂う中でも諦めず戦つてたのだと改めて感じ、ローズの父である自分が頑張らずして何が父親かと奮い立った。

「…ありがとうアオイ。」

そうだな、あの蟲女共やクソツタレ城主にローズの居場所を俺にやった様な拷問を逆にやり返して吐かせれば良いんだ。

なら簡単だな、此処には俺だけじゃない、B・O・Wの退治屋が3人も居るんだからな！」

「…そうだよイーサン、お父さんらしくドツシリ構えて、ローズを救おう」

イーサンは葵、マキ、イヴを見ながら彼女達が居る事で自分だけでは出来なくとも、4人で出来る事があると思ひながら改めてローズの搜索をする事を決める。

それを見たイヴはルナとはまた別の、父親の力強さを感じ取りながらそれで良いと口にし、階段を上がり2階へと踏み入り、城主の部屋付近を通った…その瞬間。

『ガシャアアン!!?』

『よくも私の娘を痛め付けてくれたわね!!?』

ドミトレスクは部屋の中でベイラを殺され、カサンドラが冷却弾により追い払われた事をダニエラから知らされたのか家具を壊し、母親らしく娘を案じ、そしてその娘達に刃を向けたイーサン達への怒りを吐き出していた。

「…何とでも言ってる、クソツタレ城主が」

「B・O・W. に家族思いって物があるのは驚きですが、所詮生体兵器。

…あんな風に人を幽鬼に変えたり、解体したりしてワインを作る連中に良心は痛みませんよ」

しかしイーサンや葵達はそれを聞こうとも良心は痛まなかった。

何故ならドミトレスク達は幾ら家族思いであろうが人の娘を攫った者の配下にして残虐なB・O・W.、呵責など無くその手に持つ銃の引き鉄を引かない選択肢など存在しなかった。

そして近場の部屋に入ると、其処は鉄分臭い血の沐浴場に出る。

「うっ…予想はしてたが、改めて見て鼻で臭いを嗅ぐとヤバイ。

ドミトレスク達はマジでイカれてやがる！」

「こんな物で身体を洗うなんて本当に連中に人間の心は無い、マジで唯のB. O. W. だわ……葵、次の道は？」

「この下、浴場の仕掛けを解く必要があるよ皆」

その咽せ返る臭いに全員が吐き気を催し、ドミトレスク達が唯の生体兵器である事を裏付けるこの浴場や地下独房、厨房の光景に彼女達に対する怒りが更に増し、マキはややキレ気味に葵にルートを聞くと、葵はこの浴場の仕掛けを解きまたに下に向かう事を告げる。そしてイヴがそれらしい像と壁に書かれた文字を読み解いていた。

「…『男と女は目を合わせてはならない、卑しき農民は誰からも見向きされず、女と目を合わせる事も許されない』」

丁度此処にはそれっぽい像があるよね？」

「ならその通りにやるぞ、葵と俺は女の石像同士を見合わせて、マキは農民の像を男の像の方に向かせるんだ。」

この文通りなら馬に乗った男の像は動かさ無い方が良い」

イヴが仕掛けらしき文を読んだ後イーサンが他2人に指示を出し、石像をそれぞれ文通りに示し合わせて動かす。

すると血の湯船が抜けて行き、下に向かう階段が現れ全員それを見ていた。

「大正解。

じゃあ行きましようか」

「だな…さて、この地下には何があるんだ？」

葵、イーサン、マキ、イヴの順に階段を降り、地下への梯子を降りて行く4人。

そして降り切った先にあつた光景は…血の湯船が可愛く見える、死体袋がぶら下がり血が床を満たし、イーサンの足首までが浸かる血の池の地下だった。

「何だこれは…!!？」

アイツら、どれだけの人を犠牲にしたらこんな…!!？」

「…最低でも1958年、もしかしたら更に遡って村人を取っ替え引っ替え、新しい村人を精神操作で仕立て上げては寄生体を埋め込んだりしてこんな風になりましたってシナリオが頭に浮かびましたよ…ミランダ、ドミトレスク…!!」

「…イーサン、アオイ、少し抑えて。

怒りを抱く気持ちは皆一緒だから」

イーサンと葵はこの光景に更なる怒りが増し、葵に至ってはカラコンの下にあるウィルス完全適応者の目がガラガラと輝き始めていた為、イヴがその怒りを抑える様に促し、2人はドミトレスクや残り2人の娘と戦う事になったらこの怒りをぶつける事にし、奥へと進み始める。

「…チツ、咽せ返って仕方無いぞこの場所は。」

早く此処を抜けるぞ！」

「はい…皆、幽鬼が来ます!!？」

イーサンはこの咽せ返る空間に嫌悪を示し、手早く抜ける事を提案し葵が同意をすると同時に独房に居た幽鬼が再びこの場に現れ、奥に進んだ途端起き上がりイーサン達に襲い来る。

「此処は狭いので私のサイコキネシスで幽鬼を殺します!!？」

…貴女達の怒りや無念は必ずドミトレスク達にぶつけますから今は許して下さい
「さい」

葵は狭く展開出来ない場所の為サイコキネシスで幽鬼の身体を捻ったりしながら殺し、落とした結晶やL e i を拾い上げて奥へと進む。

そして最奥の階段の幽鬼も殺した後、イーサン達は紐を引っ張り上がり下がりする手動リフトに辿り着く。

「…なあ、コレ4人一気に乗れるか？」

「無理。」

私が先に行って上で紐を引きます。

それで降りないならサイコキネシスで無理矢理上げ下げしますので待ってて

下さい」

イーサンは敢えて4人一気に乗れるかを問うと、葵が即答で無理と答え、先に行きリフトの紐を引っ張って下げる、無理ならサイコネシスで無理矢理と話してから上へと上がって行き、その後は3人共サイコネシスを使うまでも無くリフトで上がりその先はテラス、ベランダに続いていた。

「城主の部屋はこの先にありますね…あ、電話」

「今時珍しいアナログ電話、しかも明らかにレトロな奴か」

イーサン達は電話が鳴り響く中でベランダを渡り歩き、途中イーサンが木の足場を崩した為他3人がその場で止まり葵は透視で目視、イーサンは直接ドミトレスクが鍵を壁に掛けそのまま化粧台に置かれた電話に出始める姿を見る。

「マザー・ミランダ、残念な報告なのですが。」

ハイゼンベルクは愚かにも：イーサン・ウインターズ達を逃した様です」

如何やら4人はその声から電話相手がミランダだと窺い知り、葵は強化されてる聴力も用いてミランダの声を聞いている所、彼女はドミトレスクの報告に空返事しかしておらず興味が無さげと言った感じであった。

「奴等は私の城に踏み入り、娘達の手を焼かせています。」

もし見つけたら……いえ、ミランダ様。

儀式の重要さは私も重々承知しております。

必ずやご期待に」

『カチン、ガシヤアアン!!』

「儀式など知った事か！」

ドミトレスク家に仇なす者は決して許さない…!!?」

するとドミトレスクはイーサン達の始末をしようとミランダに提言するが、対するミランダは葵が聞き取れた範囲で『貴様、儀式を忘れたか?』と一言口に出され、一応口ではドミトレスクはその『儀式』に了解をし電話を切るが、直後化粧台を持ち上げて投げ捨て、怒り狂ったまま部屋を後にするのをイーサンと葵は見た。

「…アオイ、『儀式』って何なんだ?」

「分かりません、ただローズちゃんが関係してるのは間違い無い筈。」

だから私達の目的はその『儀式』の阻止が目的に上がりますね…:…それにしてもドミトレスク、儀式を無視して此方を殺しに来るその素振り。

人間臭いですが唯のB・O・Wの暴走にしか私達には見えませんよ」

イーサンは『儀式』の事を葵に聞くが、マキ達も合わせてサツパリだが間違い無くローズが関わって来ると推察し、木の足場を飛び越えてイーサン側に飛び移り目的に『儀式』の阻止を追加する。

その中で葵は冷ややかにドミトレスクの態度をB・O・W.の暴走と見ており、完全にキレて最早人間扱いはず殺せる時に殺すB・O・W.殺すウーマンと化していた。

それはマキ達も、そしてイーサンも同様である。

「さて此処から入れるけど、おっと鍵に読み物」

そうして城主の部屋に入り込みドミトレスク城で使えるの鍵を4人は手にしつつ近場の読み物を漁り始める。

「『ミランダお母様に呼ばれる。』

『御子』の父や卑しき侵入者の処遇を話し合えとの事。

血の繋がりは無いとは言え：奴等と兄妹扱いされるのは虫唾が走る。

特にあのハイゼンベルク!!?

下品で粗野な、卑しい血の男。

お母様が止めなければこの手で引き裂いていた。

何故：お母様は私を奴等と同列に扱う？

城を与えて下さったのも、従順な娘や不死の血肉を与えてくれたのも私が特別だからでは？

喉が渇く』：娘も与えられたものか、クソが」

其処に綴られた物は御子の父Ⅱイーサンや葵達の処遇に関して呼び出しを受け、更に

他の四貴族、特にハイゼンベルクと同列に扱われるのを嫌っている事。

城も娘も生体兵器になった後に与えられた事が窺い知れた。

それによりイーサンはエヴリンの様な家族『ごっこ』を思い起こした。

「娘『だけ』は本当に大事か……B・O・Wにも家族思いなんて物があるなんてやっぱり驚きだね」

「……でも、結局はB・O・W。」

同情の余地は無いよ」

しかし葵は娘『だけ』は先程の怒りから本当に大事に扱っている母の側面はあると思
うが、イヴがそれだけでB・O・Wに変わり無くその末路は変わらない事を代弁して
メモをカビ剣で一刀両断する。

それは正に此れからのドミトレスク達の末路を示すに相応しき物であった。

「さて、早くこの部屋から出てローズちゃんを探しに」

『ガチャツ、キイイ』

「なっ、ドミトレスク……ヤバイ！」

それらを見てマキが早速鍵を使い部屋から出ようとした……その時、ドアが向こう側か
ら開き身長2メートルを有に超えるドミトレスクがイーサン達の前に立つ。

如何やらその様子から鏡でイーサンと目が合っていたらしく、相手が1枚上手に出て

いた。

「見つけたわ。

アンタの娘は此処には居ないって言うのに、全く…」

「手掛かり位は見つけ出したいだろこのデカブツ…つぐ!!?」

『イーサン!!?』

ドミトレスクがイーサン達に近付き、更にその長い腕でイーサンの胸元を掴み持ち上げる。

それに反応した葵達はカビ剣やゼロ距離ショットガン、イーサンを掴む手にサイコキネシスを当ててイーサンを離させようとするが、ドミトレスクは凄まじい再生能力を見せ、その悉くを受けても全く動じずイーサンを床に叩き付ける。

「ちっぽけな鼠共の分際で小賢しくも私の城に入り込み…そればかりで無くその薄汚い手で娘達に…手を掛け!

今度は私の大切な物まで…盗もうと言うの!!?」

冗談じゃ無いわ!!?」

『バギイ!!?』

「うわあああああ…!!?」

ドミトレスクは何度も何度もイーサンを床に叩き付けた結果、その床に穴が空きイー

サンは重力に従い真つ逆様に落下して行ってしまう。

それも先程から攻撃を加えている葵達の目の前で。

「イーサン!!?」

「この!!?」

「うぐつ、ああ!!?」

それを見た葵は迅速な救出の為ドミトレスクの全身にサイコキネシスを叩き込み壁にめり込ませ、その間にマキ、イヴがワイヤーロープでイーサンの下まで降りて行く。

それを見た葵はサイコキネシスを解き、その直後に爪を瞬時に伸ばして来たドミトレスクの攻撃を爆転で避けながら穴へと落ちて行き、イーサン達は其処を退いていた為誰も下敷きにならずそのまま着地する。

「其処で待っているが良いわ!」

地獄の底まで追い掛けて、その体を切り裂いてあげるから!」

「畜生、何とでも言えデカブツ女が!」

「けどあの再生力は驚異的ですね…今は戦いを避けて奴から逃れましょう。」

弱点を見つけるまでは」

そして城主の部屋からドミトレスクがイーサン達の殺害予告をし、対するイーサンは何時もの悪態を吐き葵は冷静にドミトレスクの再生能力を脅威と感じ、戦いは今は避け

る方向へとシフトして穴へ入り奥へと進み始める。

其処は鉄格子がある迷路上の通路で、レバーを上げてその中を急いで進み次のレバーまで進む。

「つ、イーサン危ない!!?」

その時透視でドミトレスクの接近に気付き、イーサンを押しした葵の腹にドミトレスクの鋭利な爪が突き刺さり、そのまま持ち上げられ振り払う様に籠のある通路に吹き飛ばされる。

「あ、葵!!?」

「…アオイ!!?」

「クソ、このイカれた女吸血鬼が!!?」

『ズダダダダダダダントツ、ズダントツズダントツズダントツズダントツズダントツ!!?』

葵が吹き飛ばされたのを皮切りにマキはカスタムショットガン、イヴはサジタリウス、イーサンは2丁ハンドガンでドミトレスクの全身を乱れ撃つ。

その弾丸の雨霰は並のB・O・W.なら絶命まで持つて行くレベルであった。

だがドミトレスクは当たった箇所から再生し、次にイーサンに爪を下から振り被った。

「まずっ…」

『ザシユツ、ブシユアアアアアアアアアア!!?』

「ぐあああああ、くそ……!!?」

それをイーサンは反射でガードしようとした瞬間、グリゴリのハンドガンを持つ右腕を綺麗に切られてしまい其処から血が噴き出てしまう。

それを見たマキ達はグレネードランチャーやハウンドウルフにも支給されたアサルトライフル『ドラグリーン』も使い更に攻勢を強めるもドミトレスクは見向きもせずイーサンに再び掴み掛かる。

「逃げられると思った？」

バラバラに切り刻んでやる！

可愛い我が子や愛しい家族達に会う前にね!!?

あはははははは!!?」

「ぐあつ!!?」

クソツ、コイツジャック以上の不死身かよ……!!?」

そしてドミトレスクは葵とは別方向にイーサンを投げ付け殺意を剥き出しにする。

マキ達は葵かイーサンか何方を守るべきか、考えるまでも無くイーサンの方へと駆け寄りイヴがイーサンの右腕を拾い再び弾丸や爆撃を加える。

が、全く効果が無く悪戯に弾丸のみが減る一方だった。

「ドミトレスクの城を荒らした罪を思い知ると良いわ!!?」

そしてその床にまで届く鋭利で長い鉤爪を擦り付けながらイーサン達に躰り寄り、そして再びその爪で今度はマキ達每切り裂こうとし、イヴが咄嗟にカビ盾を作り出すがこれも切り裂かれる直感が働きもう終わった。

そう3人は思った…その瞬間、ドミトレスクの手の動きがピタリと止まり、プルプル震えながら動かそうとする素振りを見せていた。

「な、何…腹から心臓にかけてを切り裂きながら投げ飛ばしたのに生きていると言うの、アオイ・コトノハ!!?」

「…ゴフツ、悪いけど私はその程度では死ねないのよ。」

私を殺すなら、遊ばずに頭を3枚下ろしにするべきだったね…ふうっ!!?」

「あ、ああつ!!?」

するとドミトレスクの背後からカラコンが外れてしまい、ウィルス完全適応者の瞳が露出し、更に腹から胸に掛けて夥しい出血をしたお腹を押さえた葵が現れ、サイコキネシスをフルパワーで使いドミトレスクをイーサン達の通路の頭上に磔にし、3人が攻撃されるのを防いでいた。

「さあ早く、今の内にレバーを…!」

「す、すまないアオイ……ううぐ!!?」

『ガゴンツ!!?』

葵に促されたイーサンは先程のレバーの場所まで戻り残った左腕でレバーを上げてその先、ドミトレスク城の鍵を使う扉まで一気に走りイヴに開けて貰い中へと駆け込む。

「葵、早く来て!!?」

「も、もう良いぞアオイ!!?」

「……はい、では最後に!」

「きゃあ!!?」

マキ、イーサンがOKと叫び葵を呼び込むと、葵は礫にしたドミトレスクを次は宙に浮かした後壁に向かって叩き付け、そしてそのまま一気に走り抜きマキ達が居るドアに駆け込みそのまま石像に付いた如何にも取って下さいと言う仮面……デュークの店前の広間に現れた顔の無い石像に使うと思われる物を取るとその足場が昇降機となり上へ昇り始めた。

「あははははははは!」

幾ら逃げようとしたって無駄よ!」

そして昇降機が昇る際に声色からダメージが0のドミトレスクがドア前に追い付き、

そして一旦逃げられたのを察知したが逃げてでも無駄と口にしてその気配をドアから離れさせて行った。

「ぐ、ううう……！」

「ふっ、ぐっ……！」

そうして一旦逃げ切ったイーサンと葵はそれぞれ回復薬、回復アンブルをそれぞれ使い右腕を癒着させたり損傷した臓器や皮膚の再生を促進させ2人はダメージを回復させる。

「……良し……」

「回復完了……：はあ、想像以上の化け物ね、ドミトレスクは」

「イーサンも葵も無茶し過ぎだよ全く……」

イーサンと葵は昇る床が中庭に続くのを察し、一息吐くとマキがブーメラン気味な発言をするが2人はそうだった為突っ込まず、黙って聞き中庭に着いた途端周りに幽鬼が現れ始めた為再び立ち上がり銃を構えた。

「全く息吐く暇も無いってこの事ね！」

「……一つ忠告。」

ドミトレスクの爪、アレ私の盾も切り裂けると思うから出会ったら逃げに徹してね」

「了解だよ……たく、あの女吸血鬼め、後で覚えて置けよ……!!?」

そうして周りに居る幽鬼を倒しながらドミトレスクの爪はイヴのカビ盾も切り裂くと想定され、彼女から逃げる様に促されるとイーサンは後でやり返す為に悪態を吐き、葵達もまたドミトレスクを倒す手段を脳内で模索し始める。

そして中庭でドミトレスク城の鍵を使う扉を開け中に入り2階へ上がり道なりに進む。

「此処は歌劇場の2階か……」

「……そうみたいだね。」

あ、アオイ、マキ、イーサン、此れ」

イーサン達は周りを見ながら警戒をし、此処が歌劇場の2階と下のピアノ等を見ながら判別していると、イヴが何かを見つけたらしくイーサン達を呼び集める。

其処には読み物……ドミトレスクが記したであろう物があつた。

『術後1日目。』

『処置』が終わってから三人共死んだ様に動かない。

『長女』となる娘の口から羽虫が出る。

蠅の様にも見える。

術後2日目。

3人の体に、無数の虫が湧いている。

体の各部分が虫に食われている様にも見える。

窓を開けると、虫がポロポロと床に落ちる。

如何やら、冷気に当たると硬直する性質らしい。

慌てて窓を閉じる』

其処にはドミトレスクが3人の娘を作り出す工程であろう記録が記され、4人はドミトレスクの倫理観の無さから矢張りB. O. W. である事になり無しと思ひ、葵は『処置』と言う文字から恐らく村人に寄生しているあの寄生体を移植したのだと思ひ更に読み進める。

「術後4日目。

ほぼ全身を虫に食い尽くされた。

ヒト型の黒い塊が蠢いている。

昼過ぎ、娘達の部位毎に虫の色が変化して来る。

顔の虫は青白く、唇の虫は赤くといった具合。

術後6日目。

虫の塊が娘達の姿に戻る。

もう人間にしか見えない。

3人は起き上がり、私を見つめる。

虚な視線だが、親子の情を感じる。

名前はもう決めてある。

ベイラ、ダニエラ：そしてカサンドラ』…」

そうして読み終えた時、葵達はドミトレスクの娘達が如何にして生まれたのか知り、更にこれが親子なのかと葵の手はプルプルと震え、その記録をタブレットの写真に保存した後サイコキネシスでグシャグシャと潰して行き、最後には怒りのまま踏み付けていた。

自身も作られた存在だが確かに愛はあった、だがこんな物では無い。

そう葵とイヴは感じドミトレスク家に嫌悪感を示した後黙って奥に進み始めた。

「アオイとイヴ、キレてるな」

「あんな物を見て親子とかほざかれたらそりゃキレルよ。」

イヴは元E型被験体、そして葵は元T—G e n e s i s用の計画で生み出された実験体。

「だけどどつちも母親の本当の愛で人間になれたから一層嫌悪が、ね」

イーサンは葵達がキレてる理由をそれとなくマキに聞くと、その答えを彼女は示し、何方も本来ならB・O・W. と呼ばれる側に生まれた存在ながら母親の愛により『人

間』として生きられる権利を得ていた。

それに対してドミトレスク家は正に真逆、化物が化物を生み出し親子と呼び合う歪な関係の為余計に許せない感情が強まっているのだ。

「…アオイ、此れあの模型の金属球じゃないかな？」

「……みたいだね、後でデュークの所に行ったら試してみよう」

そんな中で葵は怒りながらも心の中で懺悔しながらサイコネシスで幽鬼を殺し、奥でイヴが金属球を見つけデュークのところで試そうと言った後Uターンし、歌劇場の1階へと降りるともう其処で道が途切れており、残りは上の逆側しか無かった。

「で、無造作に置かれてるピアノ」

「……まさかな……誰か、そのピアノ弾いてみてくれ」

「…じゃあ私が、楽譜通りに」

するとマキやイーサンはもしかしたらと思ひピアノを誰かに弾く様に言い、それにイヴが反応してピアノを弾き始める。

その間に葵は読み物を漁り始め、あの蟲姉妹の蟲に学名は無く、肉食で『カドウ』と言う物が関係し繁殖能力は無し。

摂氏10度以下で生命活動を停止する等が書かれ、矢張り自分達の推察通り弱点は冷気だと確定させる。

「…弾いたよ……あ、鍵」

するとピアノの中から葵はベイラから逃げる際に見かけたドアの模様の鍵を見つけ、そのまま手に入れる。

そうして2種の鍵を手にした一行は次はどこに向かうかをその場で少し話し合う。

「で、次は如何すんの？」

此処を探索してみる？

それとも本館の方を荒らしてみる？」

「……そうだな、先ずはこの別館を潰すに一票かな俺は。」

反対に本館を潰したいなら……」

「……いえ、如何やら此の館にはダニエラが居るみたいです。」

ならあのドミトレスクが悔しがる顔も見たいので此方から潰しましょうか」

「……イーサンやアオイに賛成」

するとイーサンの別館潰しに葵とイヴが乗っかり、理由も単純にドミトレスク家からの嫌悪感と家族『ごっこ』を終わらせる為にそうしており、マキは2人は今までの光景や書物でガチギレ寸前の為下手に触れない方が良くと考え歌劇場1階の鍵を開けて再び2階に上がり始める。

『ジャリイイイイン!!?』

「待たせたわね」

「な、ドミトレスク!?」

するとその階段の上には既にドミトレスクが待ち構えており無駄弾を使いたくない為かイーサンとマキは後ろに下がりはじめた。

だが、葵とイヴはと言えば……。

「ええ、透視で見えてたから待ってたわよドミトレスク……貴女の家族『ごっこ』を終わらせる為にね」

「家族ごっこですって?」

言うに事欠いてドミトレスク家を家族ごっこと呼ぶのか小娘!!?

なら良いわ、望み通り3枚下ろしに」

「遅い」

如何やら葵は透視でドミトレスクが待ち構えている事を察知しており、彼女に対し家族『ごっこ』を終わらせると宣告し完全に煽った後、怒りで爪を振りかぶろうとしたドミトレスクに先程と同じフルパワーのサイコキネシスを放ち、宙に浮かせ何度も別館の壁に叩き付けて行く。

「があ、またこの……おのれ小娘如きが」

「言いたい事はそれだけ?」

なら……」

「……私達の目の前から消えて!!?」

『ドガアアアアアアアアアア!!?』

「ああああああ……!!?」

そして有無を言わずドミトレスクを壁に叩き付けつつ、イヴも両手でカビハンマーを作り最大の力を込めて叩き込み、別館に穴を開けながらドミトレスクを何処かに飛ばしてしまう。

葵とイヴの背中からは怒りが漏れていた。

そうしてイーサンとマキは思った、本当の『家族』を知る2人に対しこのドミトレスク城はその所業、更に家族『ぶっこ』も含めて全てが神経を逆撫させる物しか無いと。

「さあ行きましょう、化物退治の時間ですよ……」

そして葵が遂に今日2度目のガチギレを果たし、ドミトレスク達への処刑宣告を言い放つ。

確かに個人的な理由が強過ぎるかも知れない、だがドミトレスク達の所業を考えれば今後もし生かせば犠牲者は増える一方だとマキやイーサンは判断し、武器を構え直しダニエラの下に向かい始めた。

全てはこの邪悪な意志に満ちた城の B. O. W. を殲滅する為、ローズの手掛かりを見つける為に…。

EP V I I I 『ドミトレスク家の最期』

ブチキレた葵、イヴを連れたイーサン達は未探索の反対側、別館に入る際に入手した地図からソラリウム側へとやって来てピアノから手にした鍵、鉄格子を開ける物から鉄格子の鍵を使い侵入する。

すると蟲が集合し、ダニエラが現れた。

「うっふふふ、やっと私に会いに来たのね？」

皆私に夢中になるのよ……」

「あ、そうなんですか。」

なら一旦黙ろうか？」

『ガジャアアアアアアンツ!!?』

ダニエラが口を開いた瞬間葵は開閉する天井を何とサイコキネシスで破壊、完全に吹き抜けにしてしまい常時冷気が部屋を満たす状態になってしまう。

「きやあつ！」

もう、意地悪なのね！」

「ええ意地悪ですよ。」

だから今からその口と全身を動けなくさせてあげますよB・O・W・、ダニエラ・ドミトレスク！」

「えつ、な……ツツツツツツ?!?!?!」

更に葵はダニエラが此れ以上何も話せない様にしつつ全身をサイコキネシスで吹き抜けになった天井の真下に固定、狙い撃ち放題にした。

この時ダニエラは思った、この女はお母様が言った通りの危険人物だったと。

「んじゃグツバイダニエラ」

「もう蟲は懲り懲りなんだよ、だから消え失せろ！」

「……敵B・O・W・、討滅する」

『ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダツ!!?』

そしてマキ、イーサン、イヴは慈悲も無くB・O・W・たるダニエラをドラグーン、シヨットガン、サジタリウスで蜂の巣にしてダニエラはそのまま結晶化、トルソーとなり葵に冷淡な目を向けられたままそれを回収する。

更にこの中にダニエラが最後に何を思い死んだのか誰も知らない、知る必要が無かった。

何故なら相手はB・O・W・なのだから。

「さあちよつと奥に行きましよう。」

其処に最初に回収した仮面と同じタイプの方があつて、更に奥のアトリエには隠し通路がありますよ」

「じゃあ行くっか」

「だな。」

こんな所にもう用は無い」

そうして哀れなB・O・Wに誰一人として同情する事無く奥へ進み今度は何処か喜んでいる様な仮面を入手、更に奥に進みアトリエに入る。

すると其処には巨大なドミトレスクの絵が壁に掛けられていた。

「まあアトリエだからね。」

で、この部屋のギミックは：『この部屋で五つの鐘を鳴らせ』。

あー、確かに其処らに鐘があつたりすると思えば：」

「…じゃあ、鳴らせよう」

マキは自画像にアトリエだからと納得し、近場のメモを見て鐘を5個鳴らせばギミックが作動すると理解して4人でそれぞれ1個ずつ鐘を鳴らす。

だが最後の1個だけが見つからずイーサン、マキ、イヴは困惑していた。

「なあ最後の1個は何処にあるんだ？」

「えーと、この部屋の中見る限り無いね。」

可笑しいな、この部屋で五つ鳴らさないといけないのに」

『ズドンッ、カーン!』

だが、葵は透視で何処に鐘があるか把握してた為無表情のまま階段を上がり、デユランダルで窓の外にあった鐘を鳴らした。

するとドミトレスクの絵が隠し扉になり道が開く。

「おい、この部屋で鐘を鳴らさなきゃならないのに外にあるのかよ?」

「ええ、だから『この部屋で』五つの鐘を鳴らすんです。

軽い頓知ですな全く」

葵は頓知が効いたギミックを解除した後呆れ気味に隠し通路を伝い屋根裏部屋へと出る。

其処に倒れていた幽鬼を1体殺し周りを探索しイヴは読み物、マキは宝の場所が記された地図の切れ端、イーサンはボルトアクションライフルを手に入れイヴの周りに集まる。

「…『死花の短剣』なる物が、城にあると聞く。

それは中世の品で、何でもその刀身には古今東西の凡ゆる『毒』が塗られているとか。

妄想に取り憑かれたかつての当主が悪魔や魔物を殺す為に作らせたそうだ。

実に興味深い…が、もう誰も所在を知らない。』

これ、探してドミトレスクに刺したら如何なるかな？」

イヴは読み物の死花の短剣に興味を持ち、此れがドミトレスク城にあり、更にドミトレスクに刺せば如何なる効果を發揮するかを他3人に問いてみていた。

葵もそんな物があれば確かに耐性が無ければ並以上のB・O・W。でも毒で死ぬと思ひ、頭の隅に留めつつイヴの頭を撫で、全員で奥へと進み出す。

「…屋根裏の先は城の屋根部分……っ？？」

「今のは……幽鬼？？」

頭を撫でられ素直に喜ぶイヴはその先が屋根に続いているのを確認した…その瞬間頭上を手が羽に変異し、舌が長くなつた幽鬼が数体通過する。

此れもドミトレスク達の犠牲者であり今は自分達を襲う敵ならばと、イーサンはライフルを構え屋根の上に落ちる様に撃ち落とす。

其処に葵とイヴも加わり、デユランダルで狙撃する。

「…今ので全部か？」

頼むから安らかに眠ってくれよ…。

じゃあスーパーパーガールアオイ、次は何処に向かえば良いんだ？」

「そうですねスーパーパーザーイーサン、この先にエレベーターがありますが、屋根の

上にはまたデュークの部屋前の像に使う仮面があります。

だからこのあたりも漁り尽くしてからエレベーターに乗りましょう」

そうして幽鬼を全て処理してイーサンは十字を切った後葵をスパーガールと呼び次に向かう場所を聞くと、葵もイーサンをスパーファザーと呼び、この屋根にも先程の仮面と同種の物がある為結晶やその他落ちてる物等を拾いつつ、イーサン、葵、マキはエレベーターで待ち今度はイヴが仮面を取りに行くと言合ひで決まる。

「…えい」

そして掛かったロープに此れまた掛かった手掴みロープウェイでぶら下がり其処から一気にイーサン達がいる側の上の柱まで滑り辿り着く。

其処で明らかに憤怒と言った表情の仮面を取り梯子でイーサン達の近くに降り立つ。

「…はい此れ。」

じゃあエレベーターで降りよう」

「助かる、ありがとなイヴ。」

さて、このエレベーターは確かロビーに見かけた物の筈だが…」

イヴはヒラヒラと仮面を見せた後、4人で少し窮屈気味にエレベーターに乗り降りると其処は矢張りロビーであり、あの三姉妹の絵画が飾らせている場所に出た…が、何と出入り口が完全に鉄格子で塞がれ、外に出られなくなっていた。

「おいマジかよ」

「…寧ろ好都合かな、あつちから殺して下さいって言ってるならそうしてやりますよ」
 イーサンは出入り口が塞がった事に悪態を吐くが、葵達は寧ろ好都合だと受け取り其処から残ったカサンドラ、更に最後にドミトレスクを殺すと道筋を立て、A. B. F. や元B S A AらしくB. O. W. 退治に乗り出す気で居た。

するとロビーのドアが開き、其処からいきなりドミトレスクがキレた表情を葵達に向けていた。

「この人間風情と小娘共が！

幾ら逃げ回った所でお前達に先は無いのよ!!?」

「…なら道は自分達で作る!!?」

ドミトレスクが鉤爪で切り掛かった瞬間4人は避け、イヴがカビハンマーを作り出して頭を渾身の力で叩き、更に葵がフルパワーサイコキネシスで天井に磔にして動けなくさせる。

最早葵の手によりドミトレスクは倒せないまでも対処法は確立されてしまった。

「それで次はどうするのさ?」

最後の姉妹を倒す?

それともこの宝の地図が死花の短剣って賭けてみる?」

「それなら先ずドミトレスク姉妹最後のカサンドラを殺してから宝探しをした方が良
いですよマキさん。」

あの蟲に追い回されるのは精神衛生上良く無いです」

「決まりだな、なら行くぞ！」

そうしてイーサン、葵達はドミトレスクの魔の手から逃れた後最後の姉妹たるカサン
ドラを殺すべくホールの2階へと上がり、そのままカサンドラと遭遇した通路まで走
る。

すると案の定カサンドラが現れる

「さつきはよくもやってくれたわね小娘が!!？」

お前から先に殺してウインターズ共を絶望させてやるわ!!？」

「…それは願い下げ」

更にカサンドラはイヴに冷却弾を撃たれた事を根に持っているらしく最優先で殺そ
うと宣告して来るが、イヴは早速冷却弾を装填し、この通路で三姉妹を殺す気で構えそ
して再び冷却弾を当てる。

「ぎゃあああああ!!？」

私の身体が、身体があ!!？」

「隙ありだよB・O・W・カサンドラ・ドミトレスク！」

「成る程、この部屋の仕掛けはこうでええと…あ、マキさん。

向こうに武器庫がありますから其処から弾薬等を取って、そして飾られてる物を持つて来て下さい」

「あいよ〜。

よいしょ…」

葵は部屋の仕掛けを理解し、透視で周りを見ると隣に武器庫、更にこの仮面に似た、しかし獣骨の標本が飾られておりそれが使えないかマキに取って来させる。

更に葵は棚から銀の指輪を発見しこれは換金する物であると判別してマキを3分待つ。

すると直ぐ戻って来て目的の物を手にしていた。

「この獣骨の標本がブツなの？」

「恐らくは。

で、台座を取って裏目を見ると…はい、仮面と同じ突起がありました。

で、これをつけるとあら不思議ですね、罠が解除されました」

そうしてマキから台座が付いた獣骨の標本を手渡され、それを台座から取り石像に嵌め込むと鉄格子が降りて外に出られる様になった。

それを見たイーサンはベイカー邸と同レベルの不思議建築だと思ひ手を挙げていた。

「さて、最後は宝の地図からベイラが現れたあの場所の鉄格子の扉ですね。

迅速に行きましょう」

そうしてイーサン達はその場から立ち去りメインホールへ行くと、その1階にはドミトレスクが居りイーサン達を発見する。

「カサンドラ、無茶をし過ぎた様ね…」

「二丁前にお母さん気取り？」

家族『ごっこ』に付き合うのは沢山よ、オルチーナ・ドミトレスク!!?」

そうして再び鉤爪を引き摺りながら何処か悲しげな表情を浮かべながら葵達に近づくが、最早今まで見て来た物からそれ等を家族『ごっこ』と断じ、葵は再びフルパワーのサイコキネシスで壁に磔にし、イーサン達を厨房から地下へと行かせ自身は暫くドミトレスクと対峙していた。

「家族『ごっこ』だと、この卑しき小娘共と人間風情が!!?」

このドミトレスクの高貴な血筋を全て根絶やしにしようと言うのか?

それも何も知らない貴様達如きが!!?」

「ええ、B・O・W. は全てこの世から根絶やしにするよ。

貴女も、その蟲娘も全てB・O・W.、だから殺す!

此れ以上あの村の人達や幽鬼達の様な犠牲者を増やさない為に!!?」

ドミトレスクは何処までも自分達本意な意見を述べた上で自身達の血を高貴な物と呼称して葵達を糾弾しようとしたが、既にイーサン達を先に行かせた葵はドミトレスク達をあくまでB・O・W・と断じて殺害宣言を行い、更に村人や幽鬼達の様な犠牲者を増やさぬ様にと自身のクリス達から学んだ正義感からドミトレスクの言葉を切り捨て睨み合いが続く。

「葵、宝は取ったからもうそのおばさんに構つてゐる必要は無いよ!!?」

「了解です、じゃあ次はしっかりと殺しに行きますから覚悟して下さい、B・O・Wのおおばさん!!?」

『バギバギバギ!!?』

その時マキ達が走つて戻り、宝の地図にあつた物は取つたと話した後葵とマキはドミトレスクをおばさん呼ばわりしつつ、横の壁にめり込ませそのままドミトレスクを壁を粉砕しながら離れた奥へと追いやつた。

「ぐああああああ、おばさんだこの小娘共があああああ………!!?」

「……うん、年齢上は。」

あ、アオイ、宝の地図にはこんなものしか無かつたよ」

遠くへ追いやられながら自身をおばさん呼ばわりした葵達に憤慨するドミトレスクだったが、何処まで飛ばされたか最早葵にしか分からずイヴは最後に年齢上と付け加

え、更に宝の地図の位置にあった物を葵に渡す。

それは碧眼に似た石であり、葵は懐に仕舞った指輪と組み合わせるとピッタリと嵌り、最初にイーサンが手にしたのと似た一つの指輪が完成する。

「此れはデュークの所で売るしか無いね……死花の短剣はもしかしたらこの仮面を嵌めた扉の先にあるかもだし、一旦デュークの所で準備しよう」

「だな。」

「じゃあデュークの所に行くぞ」

葵が一旦デュークの店で準備をしようと話すといーサン、更にマキ達も同意して反対意見のままでミトレスクが戻らない内に外商室へと入り込む。

するとデュークが柔かにイーサン達を迎え入れる。

「此れは此れはご無事で何より、如何でしたか？」

「ああ、空振りだった……だがドミトレスク三姉妹は殺して後は直ぐ其処の石像に仮面をぶち込んで奥へ行くだけだ。」

そしてドミトレスクも殺せるならローズの居場所も吐かせる」

「何ともそれは……少々残念ではありますが、ドミトレスク夫人から聞き出す算段があるならそちらをお試ししては如何かと？」

それと、その準備のための商品もご用意させて頂きますよ」

デュークはイーサン達が空振りだった事を想定内か違うか微妙な反応を示すが、既に三姉妹は倒し、仮面を集め切り更にはドミトレスクにローズの居場所を吐かせるとイーサンは宣言するとその瞬間商いの顔に戻り商品を並べ出す。

するとマキは金属球を使い早速迷宮模型を攻略し、真紅の結晶骨を手にしトルソーや結晶等每売却する。

「おお、換金ありがとうございます！

そしてマガジン等のお買い上げ、銃のカスタマイズもありがありがとうございます、今後ともご贖員に」

「ああ……さてさてこの仮面をぶち込むか」

そしてイーサン達は換金から買物、銃のカスタマイズを済ませた後4人でそれぞれ仮面を持ち石像に嵌め込むと、文字が書かれた扉が開け放たれ奥に続いていた。

イーサン、葵達は迅速に奥に進むと礼拝塔らしき場所が見え、其処からイーサン達は小走りで奥へと向かう。

「此処は礼拝する場所みたい、だな」

「はい……あ、あの棺の中に短剣があります！

恐らくあれが件の死花の短剣ですよ！」

イーサンは周りを見ながら警戒していると、葵は透視により棺の中に短剣がある事を

周りに伝え、全員で棺を開きイーサンが短剣を手にした……その瞬間イーサンは背後から何者かに捕まれ振り向かされてしまう。

何者かは言うまでも無い、ドミトレスクだ。

「お前達の所為で全てが台無しよ!!?」

「イーサン!!?」

「アオ……ぐああ、く、このクソ女が!!?」

ドミトレスクはイーサンを串刺しにしようとするが、鉤爪を突き立てるが、葵がサイコキネシスと庇った事でイーサンには先端部が少ししか刺さらなかった様になり、イーサンは深々と刺された葵の分とお返しに死花の短剣をドミトレスクへと突き立てた。

「ああああああ!!?」

ううう、うああ!!?」

「があつ!!?」

「イーサン!!?」

それを突き立てられたドミトレスクは明らかに苦しみ悶え始め、葵とイーサンを突き飛ばすとイーサンは葵のサイコキネシスでギリギリ縁で踏み止まり、葵も同じく踏み止まりドミトレスクを見る。

すると見る見る内に化物に変異して行き、マキとイヴも外側に出て来ていた。

それと同時に変異が終わり、壁を突き破りドラゴンの様な姿になったドミトレスクが姿を見せる。

『その肉も…骨も…その体全て、貪り喰ってやるわ!!?』

「拙い此処じゃ戦えない、皆ワイヤーロープで!!?」

「はい、イーサン捕まって!!?」

そしてドミトレスクが空を飛び、イーサン達を掴もうとした瞬間葵がイーサンを掴み、他3人がワイヤーロープ射出機で礼拝塔を捕まらない様に回り、そして足場となる場所を見つけ降り立ち葵やイーサンの傷もアンプルや回復薬を使い治し、そして対角線の階段の上に変異したドミトレスクが降り立った。

こうして、雪が止み日が照る中変異ドミトレスクとの戦いの火蓋が今切って落とされた。

「やっと中身に見合う姿になったな、化物め!」

「敵性B・O・W・変異を確認!!?」

此れより殲滅行動に入る!!?」

「…ドミトレスク、此処で終わりよ!!?」

「ミランダの前哨戦だ、さっさと片付ける!!?」

4人は思い思いの言葉を口にしながらサジタリウス、ドラグーン、2丁ハンドガンを

ドラゴンの様な姿になった変異ドミトレスクの人間『だった』部分に攻撃を集中して行き何とかその場から退かせる。

そして奥へと向かい四方を警戒すると、マキ側から飛んで来た。

『お前達を滅ぼしてやる!!?』

ああ血が、肉が、娘が、何もかもが足りない!!?』

全部お前達の所為だ!!?』

「何が私達の所為だ、アンタ達から先に仕掛けて来た癖に!!?」

『あははは、運の良い奴等ねイーサン、小娘共!!?』

ミランダ様の他にこの姿を見た者はお前達だけよ!!?』

レデイの素顔を見た罪を償いなさい!!?』

お前達を決して許してなるものか!!?』

変異ドミトレスクは支離滅裂ながら、イーサン達への怒りを最大限にぶつけて来ておりその言葉の節々から殺意が漏れ出していた。

だがマキの言う通り仕掛けたのはミランダ達、ミアに化けローズを攫う計画を立てなければこうならなかったのだ。

互いの言い分で正論なのはイーサン達、しかしB・O・Wにはそれは通じない。何故なら人の心無き化物だからだ。

「このクソツタレが!!？」

ローズの居場所を吐きやがれ!!？」

「オラア、私等のシヨットガン喰らえ!!？」

『がああ!!？』

ローズの居場所だと、何も知らぬ愚か者が我がドミトレスク家をよくも!!？」

そして言葉が通じないならとイーサン達はライフルやシヨットガン等を切り替えながら弾丸を浴びせダウンを取る。

更にイーサンはローズの居場所を問い質すが、変異ドミトレスクはイーサンを何も知らぬ愚か者と誹り何も言う気が無かった。

ドミトレスクからは何も聞けない、そう判断した葵はサイコネシスで動きを封じ込み、イヴがグレネードランチャーの炸裂弾を解禁、変異ドミトレスクに爆発する弾頭を浴びせて行く。

その威力に変異ドミトレスクも堪らず跪いていた。

「此れも、喰らいなさい!!？」

『ズダアアンツズダアアンツズダアアンツ!!？』

『ギヤアアア!!？』

血が、血が足りない、もつと血をオオオ!!？」

そして葵は規格外銃ペンドラゴンを解禁、3発撃ち込んだ瞬間変異ドミトレスクの身体が血塗れだった物に更に大きな風穴が開き、明らかな大量出血を起こした。

その瞬間変異ドミトレスクは建物に突っ込みイーサン達を喰らおうとしたが外れ、悪戯に上への逃げ道を増やしただけになった。

『さっさとその肉を喰わせろ!!?』

「よし、上に行くぞアオイ、マキ、イヴ!!?」

「はい、一気に決めます!!?」

イーサンは上に行く事を敢えて提案し、ドミトレスクを其処に誘き寄せて一気に叩こうと脳内作戦から口を開くと全員一緒だったらしく、羽虫を飛ばしイーサン達を喰らおうとする変異ドミトレスクを無視してそのまま螺旋階段を上り最上部へと辿り着く。

『もう他に逃げ場は無いのよイーサン、アオイ共!!?』

恥ずかしがらずに正直に言いなさい、この私が恐ろしいって!!?』

あつははははは!!?』

変異ドミトレスクは周りを滞空し、イーサン達が自身を恐れているかを問い詰めるがそれに誰も答えず静かに、今の最大火力を叩き込む準備を進めていた。

それに変異ドミトレスクは気付いて挑戦を受けているのか、それとも気付いていないのか滞空した後塔に突っ込んで来る。

『それじゃ…楽にしてあげるわね!!?』

「ああ…お前がな、イカれ女吸血鬼!!?」

「これで終わりよ、オルチーナ・ドミトレスク!!?」

そうして塔の壁を崩しながら突っ込んで来た瞬間イーサンは2丁ハンドガン、マキはシヨットガン、イヴはグレネードランチャーの火炎弾、そして葵はペンドラゴンを放ちその身体をズタボロにし遂に血を噴き出させた。

『ああああ!!?』

おのれよくもウインターズ、コトノハ共お!!?』

「これで終わりだクソツタレ吸血鬼!!?」

さあ死ぬ前にローズの居場所を吐け!!?」

さもなきや死ぬ前にもっと弾丸を喰らわせてやるぞ!!?」

イーサンは最後にまたローズの居場所をドミトレスクの口から吐かせようとしながら近寄り、2丁ハンドガンをリロードして構える。

そして最後の悪足掻きにイーサン達に噛み付こうとした瞬間、変異ドミトレスクの足場が崩れ去り今にも彼女は落ちそうになる……だが、その油断をドミトレスクは見逃さずイーサンと葵を落ちるのを構わず両手で掴み一緒に引き摺り落ちて行く。

「ぐあ、くそお!!?」

「くつ、イーサン!!?」

『遅過ぎたわね…お前達は2度とローズには会えない!!?』

己の無力さを知るが良いわああああ!!?』

そして礼拝塔をそのまま2人は変異ドミトレスクと共に最下層まで降下して行き、最後には2人共手を離されそのまま床に激突するかと思いきや、意外と変異ドミトレスクの身体の面積が大きかった為それがクツシヨンと化し2人に掛かる衝撃を和らげた。

「葵!!?」

「…イーサン!!?」

するとマキ、イヴも慌ててワイヤーロープで降下しては緩めて落ちてまたワイヤーロープを掛けてを繰り返し最下層に降下し、2人の下に降り立つ。

その瞬間変異ドミトレスクは最後の力を振り絞り起き上がり、イーサン達を見つめながら口を開き始める。

『呪つてやる…アアアアアアアア…!!?』

『パキパキパキ、ガラガラ…』

「…呪われてるのはお前等の方だ、クソツタレ共が!」

そしてドミトレスクは結晶化し、最後はその結晶像が残り、イーサンはそれを手にし

ながら呪われてる側はドミトレスク、そしてミランダ側だと吐き捨てていた。

葵達もそれに同意しながらドミトレスクの哀れな末路を見て冷淡な表情でそれを見ていた。

「…アレ、彼処に何かあるよ？」

するとマキは奥の方に何かがあるのを発見し、イーサン達はそれに近寄る。

それは何かは分からない汚れたフラスクであった。

「…何なんだ、このー」

「ひっ!?？」

イーサンはフラスクを持ち上げその周りを見るが何も分からずにいた…が、他3人中でイヴは何か怯えた表情を浮かべ、腰を抜かして顔面蒼白になりながらそのフラスクを今にも泣きそうになりながら見ていた。

「ど、如何したの、イヴ!?？」

「ちよつとイヴ、大丈夫なの？」

「……………」

葵やマキはイヴがこんな怯えた表情を見せるのは初めてで何があつたか心配していたが、イヴはフラスクから視線を離せず2人の呼び掛けがまるで聞こえていなかった。

するとフラスクを取ったからかギミックが発動し、外への門が開き漸くドミトレスク

城から4人は出られる様になった。

「これでやっと出られる……ローズ……」

イーサンは漸くこの狂った城から出られる事に清清し、イヴの反応からフラスクに何かがあると思ひ雑に扱わない様に大事にしまいなから歩を進め始めた。

「イヴ、何があつたの？」

それにあのフラスク……何か嫌な予感がしてならない……」

その後をイヴを支えながら葵、マキが続くが葵はイヴの様子、更にフラスクから何か嫌な予感がしてならないと思ひ謎の焦燥感に駆られ始めていた。

だが、葵は此処でフラスクの中身を透視すると言う選択肢が取れなかつた。

何故なら、それをすれば更なる絶望の淵に立たされると感じそうする勇氣が湧かなかつた為であつた……。

EP IX 『絶望と苛立ちと他が為の涙』

イヴを支えながら歩いてきたイーサンや葵達は、近くの小屋で例の細工が出来た、赤い煙突の家に運んでくれと言う読み物を読み、その過程でイヴが支えを自ら解きながら俯いて後が続く。

そして一行は鎖で塞がれた門を開けて洞窟内部へと足を踏み入れていた。

「イヴ、さつきから如何したの？」

「何があつたの？」

「………何で………そんな………」

「……イヴ？」

洞窟を進む中でマキはイヴの様子を気に掛けるが、肝心のイヴは心此処に在らずと言つた様子で葵やイーサンも心配し始めていた。

それも先程フラスクを取つた辺りからこうなつてゐる為フラスクに關係があるのかと感ずるが、イーサン達はイヴの様子からか、本能的からかその確認をする事が出来なかつた。

「………大いなる者よ聞き入れ給え」

「あ、この声あの老婆だ」

そうして洞窟を奥に奥に進むと、あの狂った老婆の声が響き渡り、その先には小さな扉がありそれを開けると矢張りあの嫌悪感しか無い狂った老婆が其処に居た。

「深夜の月が黒き翼で舞い上がり、最後の灯りを待つのみ。

生にも、死にも、マザー・ミランダに栄光を捧ぐ」

「おい覚えているか？」

あの城で俺達は危うく死に掛けたぞ！」

村に伝わる祈りの言葉…如何聞いても生贄の呪詛を唱える老婆にイーサンは食って掛かり葵達も周りを囲む。

イーサンは死に掛けたと大袈裟に言っている様に見えるが実際ドミトレスクに葵もイーサンも皆殺され掛けた場面がある為間違いでは無い。

「……………」

「(…イヴ?)」

しかしイヴは葵の後ろに隠れてしまっている矢張り普通では無い状態であった。

何時ものイヴならこの老婆の正体に勘付いていても囲む様に配置を取る筈であったのに此れである、葵とマキは異常な何かを感じざるを得なかった。

「死に掛けたと言う事は生きていると言う事。

賢者と交わす問答じゃ」

その件の老婆は鍵を箱に仕舞いながら煙に巻くかの如き返答を行い、そんな問答はマキも聞いていない為少し苛立ち、葵は老婆の正体に行き付いている為姑息な問答をすると思う。

そうして村人が全滅したかも知れない時の反応もありイーサンも苛立ちながら老婆を更に問い詰める。

「惚けるなよ、未だローズが見つからない。

あの子は何処に連れて行かれた？

何か知ってるなら答えろよ！」

「ふははははは、もう手遅れじゃ！」

いや正しくは手遅れに『なり掛けている』か？

あの子は生贄となる、命に捧ぐ為に」

すると老婆はローズが手遅れ、生贄という言葉を発し常軌を逸した返答を行い、矢張りミランダはローズを何かに利用しようとしている、それも生贄と命に捧ぐと言うワードからローズの力で何かの蘇生を狙っていると、葵とマキは筋道を立てて解答を導き出す。

「中世の話じゃあるまいし、あの子は唯の赤ん坊だ！」

生贄だとかそんなのとは無縁な、現代に生きる俺の娘なんだ！」

「4つの家紋を探せば、道は開けるかも知れぬぞ？」

イーサンはそんな老婆に更に苛立ち、ローズはどんな力を持つとも自身にとつては唯の生後半年の娘、その答えに変わりは無かった。

すると老婆は壁に描かれた壁画の隅にある家紋、1つは間違い無くドミトレスクの家紋でそれを探せばと杖で示しながら話し掛けて来る。

「謎掛けしてる場合じゃない、探してるのは娘だ！」

「謎が解けた時、謎掛けでは無くなる。」

ふふふふ、あははははははは……！」

「イカればババアが……ん？」

待てよ、この模様見覚えが………あ、おい待て!!？」

イーサンはその問答を謎掛けと断じてローズの居場所を知ることの老婆から答えを引き出すとするが、矢張り煙に巻き老婆は扉の方に去って行く。

更にイーサンは壁画の真ん中の模様に見覚えがあった為それに気を取られ老婆を扉の先に行かせてしまった。

「……この模様、マキさん、家紋はドミトレスクの物もあるから四貴族として真ん中には……」

「…うん間違い無い、アンブレラ社のロゴマークだ」

「アンブレラ？」

何であのイカレ企業で、今はPMCになったアレのロゴマークなんかこんな村に？」

だが葵、マキは四貴族の家紋を無視して中央の模様がアンブレラの物だと、関わりがある2人が看破してイーサンもラクーン事件や様々な生物兵器の発端となった企業のマークが何故あるか葵達に問うが、2人もお手上げであった。

「…チツ、あのババアの言う通り此れを回るしか今は道が無いか…」

「みたいですね、そしてアンブレラ社が如何関わるかも…もしかしたらこの村、想像以上に私達にも因縁があるかも知れませんね。」

兎に角イーサンやマキさんはイヴを連れて先に行つて下さい。

少しだけ写真を撮つたりしますので…後イヴは何か様子が可笑しいから、マキさんお願い」

そうして葵は箱を開けて中にある双翼が付いた鍵をイーサン達に渡し、マキにイヴを任せると理由を付けてそれと無く3人を先に行かせて、タブレットを取り出し壁画や周りの写真立てが置かれた…恐らく献花台や中央の大きな写真を撮り、CLOUD共有に保存してクリスやB・Y・達が確認出来る様にしつつ後ろを向き、閉じた扉に向かつて

小声で話し始めた。

「…マキさん達の手間、迂闊な事は言えなかったけど貴女の正体は分かってる、だからローズちゃんを攫って村をあんな風にした罪を必ず支払わせますから覚悟して下さいね。

……………ミランダ

「……………やれる物ならやってみるが良い、小娘」

葵は透視で其処に未だ老婆が息を潜めている事を見抜いており、そして自身が村で行き着いた答えを示し、扉越しに全ての罪を断罪させると老婆……………ミランダに宣告する。

すると透視越しに老婆はミランダの姿になり、此方も小声で挑戦を受けるものとして答えると次に蛇に擬態し、壁の間を擦り抜けて行った。

「……………さてと、イーサン達が多分直ぐ其処で待つてるから行かないと」

そうして葵は透視を解きCLOUDの写真に撮った物に『アンブレラ?』や大きな写真に掛けられた白い布を少し持ち上げ撮った物や小さな同じ写真に『同じ写真が幾つもある、献花台もある、此れがヒント?』とメモ書きを加え、直ぐ先に居たイーサン達に追い付く。

「お待たせしました。

調べ物は直ぐ終わったので行きましよう」

「ああ……ふん！」

そうして階段を上がった先に居たイーサン達に葵は追い付くと、マキはCLOUD共有で自身の頭で分かったアンブレラに、葵が気付いた同じ様な写真が幾つも存在すると細かな部分も見つけた事にグッドサインを出していた。

そうしてイーサンがレバーを上げると外に出て、謎の広い空間に出る。

「何だ此処は？」

「分かりません……こう言う時にナビゲートが……」

『イーさん、葵さん、マキさん、イヴ、応答願います、此方東北きりたんです』

そうして謎の広場で周りを見て、中央にまたアンブレラのマークがある事を確認しながらこんな時こそナビゲートが必要だと思いながら呟くと、葵、マキ、イヴの通信機からたった半日以上しか経過していないのに懐かしく感じる声が鳴り、葵は急いで通信機を取る。

「此方オメガ16、琴葉葵です!!？」

通信班、応答を!!？」

『ああ良かった、やっと繋がりました……！』

皆さんお待たせしました、クリスマスさん達のお陰で補給路確保に加えて通信設備を村の各所に仕掛けられました。

それと皆さんが撮ってくれた物も全体共有出来ました。

後は皆さん新装備のアレは壊れてないですね？」

「勿論、早速同期するよ！」

すると葵は通信先の主、きりたんの声から補給路や通信班が隊員と中継する機材を村に仕掛けた事を聞き、葵とミランダ襲撃作戦前に渡されたマキ、そして相変わらず様子が変なイヴは左耳に付ける片耳イヤホンに小型カメラが付いた物：A. B. F. 制作
 新型通信、映像共有機を装備し通信機にコードを取り付け同期を開始する。

「なあ、それは何なんだ？」

それと、今の声は？」

「此れはA. B. F. が開発した通信、映像共有機で通信班が状況把握して的確なナビゲートをする事を目的に作られた新装備です。

難点はこう言ったクローズドサークルな場所には通信機材を仕掛けないとまらないですよ、代替え電波とか無いので。

それと今の声の子は東北きりたん、私の頼れる友人でA. B. F. 通信兼ハツキング班のエリートです！」

イーサンは葵達が装備し始めたそれやきりたんの事を聞くと、葵は自信満々な表情で新装備である事やきりたんを褒めつつその立場を明かす。

これに対しイーサンは通信が起きたと言う事はきりたんの言う通りクリス達が村に侵入したと理解し、後で何も教えなかった事に対して殴ろうと決めていた。

「はい同期したよ、見えるきりたん？」

『はい、3人分の映像も音声もはつきりと。』

それとイーサン・ウインターズさん初めまして、ナビゲートの東北きりたんです。

気軽にきりたんと呼んで下さい』

「ああ、そうか…後呼び捨てで良いぞキリタン」

そうして通信機越しにイーサンはきりたんと言葉を交わし、声色からは悪気が無さそうな少女の声と判別し、葵達の様に呼び捨てさせる様にする。

イーサン的には葵達の仲間ならと思いつきさせたのだ。

これも全ては彼と葵達の間で明確な信頼関係が構築された為だ。

『それで状況確認なのですが、現在ローズマリー・ウインターズの奪還の目処は立ちましたか？』

「ううん、村や怪しそうなドミトレスク城を当たったけれどローズちゃんは今居なかった。代わりに何かを知ってそうな商いと、村で出会った狂った老婆から四貴族を回

れば道が開かれるとか言われたよ。

後、ドミトレスクの処断に成功したわ。

ただその後からイヴの様子が変なのだけ……」

そうしてきりたんは談笑は終わりとして状況確認を葬に状況確認を始め、対する葬は簡潔に説明を行いドミトレスクを倒した事を話した。

だが、その後からイヴの様子が可笑しい事も話しながら彼女を見て、未だ俯いた状態である事を示した。

『そうですか……イヴの様子が変なのは気になりますますが先ずは村の小教会で補給隊のイータ小队、それから護衛のデルタチームのB・Y・さんと合流して下さい。

其処は恐らく『祭祀場』ですので、橋を渡り『聖杯の祭壇』経由で村へ戻って下さい。

そうすれば共同墓地まで行けます』

「隊長が来てるのか。」

了解、じゃあ皆行こう。

……イヴ、行くよ？」

きりたんはその場が祭祀場と呼ばれる場所であり、近くの橋を渡り聖杯の祭壇と呼ばれる場所から村の共同墓地まで戻れる事をナビゲートし、葵達は未だ何らかの理由で可

笑しくなってるイヴを伴い小走りで進み始める。

すると橋付近には矢張り死体が散乱し、そして橋の上等にはライカンが存在し此方を見ていた。

「チツ、お前等何か構ってる暇は無いだよ！」

ローズを急いで探し出さなきゃならないんだよこっちは!!？」

「イーサン落ち着いて、イヴも気を入れて。」

B・O・W、ライカンと戦闘を開始する!!？」

イーサンはライカンを見てルイザの屋敷の事を思い出しつつ、更にローズの行方を探る為に構ってる暇は無いと悪態を吐く。

それをマキが落ち着く様に言いつつイヴの背中をポンと叩き気を入れさせライカんと戦闘に入った。

しかし、イーサンのライフルに加えやや可笑しなイヴが居てもこの面子にはライカン数体等敵では無かった。

「忌々しい化物が…お前等が元村人であろうが、ルイザやエレナ、グリゴリの爺さん達にした所業を許さないからな…!!？」

「……………」

そうこうしてあつと言う間にライカンを撃破し石橋を渡り歩くとイーサンは改めて

ルイザ達の事を口にし、それを聞いた葵達も同じ気持ちでいた。

しかし、戦闘が終わるとまたイヴの様子が落ち気味になり、いい加減何があったのか葵は心配になり始めていた。

「ねえイヴ如何したの？」

ドミトレスクを処断した辺りから変だよ？

何があったの、出来れば教えてよ？

力になれるなら私達は支えてあげるから」

「……………ごめんなさい」

『えっ？』

葵はイヴがドミトレスクを殺した辺りから可笑しくなった事を問い質し、それにはイーサンやマキもあんなに寡黙だが冷静、しかし人間らしく喜怒哀楽を持ったイヴが今は哀の状態になる事を気にしておりイヴを見ていた。

するとイヴが口にした事は、謝罪の言葉だった。

それもイーサンを見ながら。

「ごめんなさいイーサン、私が、私達が力不足なばかりに…」

「イヴ、まさかローズやミアの行方が未だ分からない事やこの事態を気にしてるのか？」

「だつたら気にするなよ、俺は十分お前やアオイ、マキ達に助けられてるんだから」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…」

イーサンはイヴがミアやローズの行方が分からない事や村の惨状、特にルイザ達のを気にして悲しみに暮れていたと思ひ、彼女を励ます言葉を掛けるがイヴは壊れたラジカセの様に只々謝罪の言葉を口にしていた。

『本当に可笑しいですね、イヴはちよつとやさつとの事じゃ動じないしホラー映画も涼しい顔で見たりするのにこんな…』

「…でも今は作戦中、足を止める訳には行かないよ。」

ほらいヴ、背中を押してあげるから行こう」

それをイーサン、葵、マキ、通信越しのきりたんは本当に様子が変わだと思ふが、今は足を止める訳には行かずマキがイヴの背中を押しながら歩を進める。

だが葵はこのイヴの様子から何か途轍も無い嫌な予感…今までに無い事態に直面しているのではと考え始め、しかしそれが何なのか分からずに橋を渡り、聖杯の祭壇へ続く門を開ける。

すると其処には何故かまた先回りしたデュークが居た。

「来ましたね、此処なら会えると思っていました」

『ああ、あれが謎の商いデュークですか。

確かに怪しきプリンプリンですね』

「きりたんちよつと静かに」

デュークがイーサン達に挨拶の言葉を口にするると通信機からきりたんの遠慮の無い失礼な言葉が飛び出して話が脱線し掛けた為、葵が静かにと言った。

しかしその内心は嫌な予感が何故か大きくなり出してはいた。

「はあ、無駄骨だった」

「そうですか？」

でも何か手に入れられたのでは？」

「ああ、何かは分からないが……」

イーサンは前に出始めデュークと言葉を交わしローズの行方も掴めない無駄骨だった事を告げた。

するとデュークは何か良く分からないフラスクを手にした事を知っており、イーサンは反応して懐からフラスクを取り出して彼に見せた。

「おや、娘さんがその中に居るじゃないですか？」

『……えっ!??!』

「何を言ってる？」

てしまう。

『うつ、おえええ…』

「その瓶には頭部が入っている様ですね」

マキ、更に通信機からスキヤンしたのかきりたんは同時にその場で嘔吐し、葵は言葉を失いながらフラスクから視線を離せず、イヴは遂に涙を流しながら謝り続けていた。

そしてこの中で最も絶望に直面したのは父親たるイーサンである。

この残酷な現実を受け入れられず、しかし此れの中身がローズ『だった』物だと知り膝を崩してフラスクに手を伸ばしていた。

「いや…そんな、何で……」

「ローズ様はー」

「ちよつと黙つててくれ!!?」

いや…こんなのあり得ない、嘘だと言つてくれ!!?」

「娘さんは未だ死んではおりませんよ。」

特別な力をお持ちなのです」

イーサンは絶望に打ち拉がれながらフラスクを手に持ち、それを見るしか出来なかった。デュークが何故ローズの力を知ってるのか、死んでいない等そんな事は最早イーサン

の中では如何でも良かった、ローズをこんな目に遭わせた者達……マザー・ミランダ達への怒りがドミトレスク城で感じた物を遙かに上回る、憎悪と呼べる物が彼の中で渦巻いていた。

「ミランダ……あのクソ女共、よくもローズをツ……!!？」

「助ける方法ならあります。

村の西側に赤い煙突の家があります、其処に居る男を訪ねなさい。

この話の続きは、その後で」

「勿体振るなよ、何なのかさっさと答えろよ!!？」

「私を信じなくても結構、ですが娘さんの為です。

どうぞお好きに、全てはお客様次第。

「どうぞでしょう？」

更にデュークは助ける方法があると言いつつ、先ず村の赤い煙突の家を目指せと要求しイーサンは怒りのままデュークに当たり散らしていた。

しかしデュークは只静かに、商いとしてローズの為だと口にしイーサンにそれを信じるか否かを選択させていた。

マキは嘔吐から復帰し、葵はイヴの背中を押してイーサンの近くへと寄る。

彼が如何なる選択を下すのか聞く為。

そして、フラスクを見つめながらイーサンが下した決断は…。

「……騙したら、タダじゃ置かないからな」

「ぶははははははは！」

「クソツタレが…!!?」

イーサンが下した決断は一旦はデュークの話に乗り、彼が騙したらその報いを受けさせるであつた。

対するデュークは笑い声を上げ、好きな様にすると良いと態度で示しそれをイーサンは悪態を吐き睨み付けていた。

そうして葵達の方を向き、無言のまま先に行くと言う姿勢を見せ、葵達はそれに続いて行き共同墓地に続く階段に出た。

「クソ、ミランダツ…!!?」

絶対に、絶対にぶつ殺してやる、あのクソ女も、腰巾着共も全員!!?」

「イーサン…」

「…ぶつ殺すのは良いが、方法は如何する?」

闇雲に真つ正面からミランダにぶつかれば殺されるだけ。

だから俺達は迅速的な襲撃作戦を取ったんだがな?」

イーサンは一度立ち止まり、ミランダへの憎悪を露わにして側の石ころを蹴り上げて

何かに当たらなければこの怒りが収まる事が無かった。

そんなイーサンに葵、マキ、イヴは何と声をかけたら良いか分からずに居たが、そのイーサンに声を掛け如何やってミランダを殺すのか問う者が共同墓地の側に居た。

それはミアに化けたミランダに止めの銃撃を入れた者の1人、B・Y・だった。

「B・Y・さん……」

「……お前がB・Y・、マキの隊長……お前がミランダを殺していればこんな、そもそも俺に話していたらローズはこんな目に遭わずに済んだんだぞ、このクソ野郎!!？」

「ああ、そうだ。」

通信で聞いていた、全ては俺達のミスでローズはそんな風になり、お前は絶望のどん底に堕ちてしまった。

殴るなら好きにしてくれ、但し全てが終わってからな。

……先ずは商いが口にした場所に向かうぞ、俺も話しながら付いて行く」

するとイーサンはあの夜の事を思い出し、そしてこの状況になったそもその原因はこのB・Y・やクリスがミランダを殺し切らず、更に自身に何も伝えなかつた事に起因して居るとフラスクを見せながら当たり散らす。

それをB・Y・はマキ達と同世代とは思えない程落ち着き、更に自身達のミスだとハッキリと告げながらイーサン達の後を付いて来始めていた。

「イーサン・ウインターズ、今のお前にあの夜の事で何かを言えば言い訳に過ぎないから端的に言う。」

ミランダをあゝの銃撃で殺し切れなかった事でお前やローズマリー・ウインターズにこんな目に遭わせてしまった。

だから俺達はお前への支援を惜しまない。

ミランダを今度こそ殺す為にな

「…仕留め損なつた野郎がそれを口にするのかよ」

イーサン達は民家…それも書き置きからレオナルド、エレナの家だと判別し、更に心を痛めながらその中でB・Y・が支援を惜しまないと口にするが、イーサンはミランダを仕損じたB・Y・への信用はクリス並に下であり、この場に居る葵やマキ達の方が信用出来ると思つていた。

そして書き置きから穴の空いた馬小屋から先に行くと思ひながら反対側の出入りに顔を向ける。

「ああ、仕損じたさ。」

そしてローズマリーは生きているながらもそんな目に遭っている、全ては俺達の責任さ。

だからそのミスした分を取り返す、商いの話が本当ならローズマリーは生きて

いるのだから未だリターンが効く。

お前も娘が助けられると思つて商いが示した道を歩いている、違うかイーサン・ウインターズ」

そしてB・Y・はイーサンの言葉を淡々と返し、開き直りでは無い純粹にミスした分を帳消しにすると話しながら穴の空いた馬小屋に辿り着き、其処に居たライカンをもB・Y・が殺しながら先に進むが、トラクターが邪魔で先に進めない十近くにある遺体をトラクターに巻き込まない場所に安置させたいと葵達は思いB・Y・を見ると、彼は頷き死体を動かしてトラクター下のジャッキを持ち上げるグリップを探しに迂回を始める。

「…大体、何で俺に何も言わなかった！

何か一つでも伝えてくれたらこんな」

「それはクリスとも話したさ。

だが民間人を関与させる訳には行かないつてのと、お前に何か伝えてミランダが潜入失敗を悟つて強硬策を取つたり特異菌感染の疑いがあつた上に時間が無かつた為無理だった。

だから全部を終えた直後に何とか伝えるつて俺がクリスを折らせたんだ、何も知らせず連れていくのは違うつてな。

それに…」

そうして周り道をしながらイーサンはB・Y・に何も伝えなかつた事を非難するが、此れをB・Y・は自分から言えば言い訳になる為彼からこの話が振られたら話す様にしてた為理由を口にし、更にクリスは何も伝えず慌てて連れて行く気だったので対し自身はミランダ殺害直後に状況を説明してから連れて行こうと対立し、クリスを折らせたと言げながらある事を付け加え始める。

「それにお前、隣に居る妻の姿をした奴は本人を殺して成り代わつたかも知れない下衆女だつて知つてたらその感情を抑えて演技出来たか？」

…出来ないだろ、だつて最愛の娘の事でこんなに当たり散らすんだ。

同じく最愛の妻の事になればその場でミランダを殺しに掛かつて返り討ちにされてローズマリーを攫われたらどうな」

「…っ!!?」

B・Y・は淡々とローズでこんなになる家族想いなイーサンがミアに化けたミランダに対し演技は不可能だと告げ、更にミアに化けたミランダに対しイーサンが取るであろう行動を予測して話し強行策…イーサンを殺してローズを奪い去ると言う最悪の展開を告げ、イーサンはそれを否定出来なかつた。

葵達もイーサンの人となりは見て来た為黙つてB・Y・の言葉を聞いていた。

「…さて、民家を探つてもジャッキグリップが無かつたからこの立ち入り禁止つて場

所しか無いな」

そうしてB・Y・が先頭を歩き、入れる民家を探り尽くしたがジャツキグリツプがいつからなかった為立ち入り禁止と書かれた門の鎖を破壊し中へと入る。

そうして周りを見る中で一つの家屋に写真がありイヴが裏を見て『外を見る』と書かれていた為そうすると、窓からいきなりライカンが現れ襲い掛かって来る。

「クソが!!？」

今は」

「待てイーサン・ウインターズ、お前は今少し荒れてる。

だから頭を冷やす為に俺に任せて置け」

イーサンはローズの事や反論出来なかった事で荒れに荒れていた為銃を構えてさつさとライカンを殺そうとしたが、B・Y・がそんな状態のイーサンを止めて外に出てライカンと戦い始めた。

それも素手で圧倒し、最後は踵落としてライカンの頭を粉碎しそのまま中に戻って来る。

「弾が勿体無いからな。

それでイヴ、何か分かったか？」

「……………多分、こーう」

するとB・Y・はイヴに写真の意味が分かったかと聞くと、目の前の戸棚に外に書かれたナンバーを入れてロックを外す。

すると中からジャッキグリップ、更にM1911、所謂ガバメントがありイーサンがそれらを手に取っていた。

「ふむ、グリップは良いとしてイーサン・ウインタース、その大事そうにカスタマイズしたハンドガンとそのガバメント、如何するつもりだ？」

まさかハンドガン三丁で戦うなんて言わないよな？」

「…このハンドガンは、グリゴリって爺さんがくれた形見なんだ、手放したく無い。

それにアオイから貰ったデュランダルも…」

「なら良かったな、イータ小隊にガンスミスが居るからその銃を基にガバメントのパーツや色々を組み合わせてお前専用銃を作ってくれるぞ」

するとB・Y・はイーサンにハンドガンの事で話し始めると、イーサンはグリゴリから渡されたハンドガンを大事そうに撫でて手放したくない旨を話す。

更にデュランダルも葬がくれた最初の銃の為手放せないと信頼関係の証になつていった。

それを聞きB・Y・はA・B・F・イータ小隊にガンスミスが居ると告げて、グリゴリの銃を基に専用ハンドガンを作り上げると話し出しながらグリップをイーサンの手

から取りトラクターまで戻って行く。

「……ガンズミスか……あの野郎の言う奴の腕は大丈夫なのか……？」

「イーサン、イータ小隊は葵やイヴが居る組織、A・B・Fの小隊だよ。

腕はかなり信用出来るよ。

……後バカ隊長の事を余り責めないであげて。

あいつ本当にイーサンに何も伝えない何て可笑しい、ミランダを殺してからでも伝えるのは遅くないだろってクリスさんに真つ向から対立して殴り合いになった位クリスさん並にイーサンやローズちゃんの事を気にしてたから……初めて会う人なのにね」

イーサンはB・Y.の言うガンズミスが信用に足るか判断出来ずにいたが、マキがそのガンズミスは葵達の組織の人間と話して信用に足る事を告げる。

更にB・Y.、そしてサラツとクリスにもフォローを入れて両者は意見は違えどイーサン・ウインターズやローズマリー・ウインターズを気にしてたと話す。

それを聞きイーサンはクリスやB・Y.がウインターズ家を気にしたのは理解したが、未だ余計なお節介だと思いい気を許す事が出来ずに居た。

「……イーサン、私からもやクリスさんやB・Y.さんの事は……」

「アオイまで……はあ、善処する。」

それからイヴ……ローズの為に泣いてくれて、そして俺を気に掛けてくれてありがとうな……やっぱりお前はエヴリン何かとは違う、立派な人間だよ……」

「イーサン……」

そして葵もマキに続きクリスやB・Yの事を責めないで欲しいと話し掛け、イーサンはその意図を理解して少しだけ頭を冷やそうとしたのか善処すると告げる。

そしてイヴに対しローズの為に泣いた事や自身を絶望させたく無い為にただ謝るしか出来なかつた事をエヴリンと違うと言いながらありがたいがとうと口にした。

それを聞きイヴは今まで心に残つた痼りが僅かに緩み、そしてその言葉で様々な感情が噴出し再び涙を流すのであつた。

EP X 『新たな銃とそれぞれの戦いの始まり』

ジャツキグリップを手にしたイーサン達はその後直ぐ現れたライカンの群れを撃破し、それでジャツキを上げてトラクターを持ち上げる。

葵でもトラクターは力で持ち上がらない&今の精神状態では上手くサイコキネシスを使えない為に。

B・Y・はそれ等も察して敢えてジャツキグリップを探すのに固執し更にはジャツキグリップを探す前に彼女達の為に、此れ以上遺体を傷付けぬ様にトラクターが倒れ込んでも巻き込まない位置に安置させたのだ。

「…すまない名を知らない村人さん、何も知らずに死んだ無念は、全てミランダにぶつけてやる。

さて、トラクターを持ち上げた訳だがこの下を通るか、それともワイヤーロープで何処かの屋根に上がり西側に行くかだが」

B・Y・は遺体に無念を晴らすと約束し、矢張り自身達と同じくミランダへの怒りは同じであり、そして葵達の言う様なお人好しで、且つクリスと同じくB・O・W・やそれを利用する者を許さない正義を持った青年だとイーサンは感じ始めていた。

そうしてトラクターの下を通るか屋根から行くかを皆に聞いた瞬間、イヴ、葵の順でトラクターの下をスルスル抜けて行った。

「…まあ近場の屋根はトラクターの所為で崩れてるし、さっさと行きたいならこうだな。

マキ、先に行つてくれ。

俺とこの…B・Y・は後から行く」

「あいよ」

イーサンは葵とイヴの即決に周りの家の屋根は使えないと自身を納得させてマキを先に行かせる。

その後イーサンかB・Y・、何方が先に行くかになつたがB・Y・は銃を構えて周りを警戒し始めていた為、イーサンが葵達より遅いスピードでトラクターの下を這いずつて行く…その時であつた。

『ドガアアアアアツ!!?』

「あ、畜生め!!?」

『ズダダダダダダダダダダダツ!!?』

イーサンの上のトラクターが大きく揺れ、葵が怪力で、イヴがカビの支え棒でトラクターを支えマキがドラグーンを乱射していた。

イーサンは急ぎトラクターから出てハンドガン2丁を構え、B・Yもトラクターから這いずりイーサン達の側に行き周りを警戒していた。

「アオイ達、今何が?」

「ライカン……だけど少し大型で手に串刺す刃物を複数巻きつけて頭も兜を被った個体がトラクターの上に飛び乗って、そのまま何処かに……ふう、ジャツキのお陰で支えは要らないみたい」

如何やらイーサンが通った瞬間に特殊なライカンが通過したらしく、マキの射撃も掻い潜り何処かに去ったと言う。

そうしてトラクターの支えを葵達は取ると、トラクターはジャツキの支えのみでまだ浮き立っていた為此れ以降も通れると判断しそのまま周りを警戒する。

すると道の先にライカンが複数また現れる。

「チツ、雑魚が……葵達、『銃撃は』行けるか?」

「はい、まだサイコキネシスは安定して使えないですが……戦闘開始します!!?」

「なら俺もやらせろ!」

B・Yはライカン達に少し苛立ち、葵達に労わる形で銃での戦闘は可能か聞き、葵はサイコキネシスがまだ使えず、イヴは泣き切った為改めて感情が落ち着いてきたのかカビを集約出来、マキは言わずもがなであった。

そしてイーサンも2丁ハンドガンで戦闘参加してライカンを蹴散らし先に進み始めた。

すると、先程葵が答えた特殊なライカンが、イーサン達が村に来た時に通った道の先に現れる。

「コイツがその特殊个体か、確かに他のライカンより歯応えがありそうな見た目の化物だな!!?」

「よし、戦闘開始!!?」

イーサンはその大型ライカンを歯応えある化物と叫び銃を構えた後、B・Yの合図で戦闘を開始する。

イーサン、葵、イヴの3人は頭の兜にハンドガンを集中砲火し、兜を引き剥がすとマキ、B・Yがドラグリーンで弾丸節約しつつ身体中を撃ち抜き隙を作った。

「今だマキ、合わせろ!!?」

「モチ、おりやあ!!?」

『バキツ、ドガツ!!?』

『グルアアアア……!!?』

その瞬間マキはB・Yの合図で大型ライカンに突撃し、合わせてパンチで吹き飛ばした後踵落として大型ライカンを絶命させその格闘戦能力の高さをイーサンにマジマ

ジと見せ付けていた。

イーサンはドミトレスク城でマキが木の板張りをパンチ一発で破壊した事を思い出し、改めて普通の人間勢で最高峰の実力者だと、B・Yもそれに並べて見ていた。

「凄いなマキは。」

スーパージョーカーのアオイ達とはまた違った『強さ』があるんだな……其処のB・

Yも」

「此れ位ならクリスや葵の仲間達も出来る……だがこの作戦に葵のオメガ小隊全員が今参加出来なく『させられた』のは痛手になってるな……」

「えっ、出来なく……させられた？」

如何言う事ですか、B・Yさん!?!?」

そうしてイーサンはマキ、ついでにB・Yの実力を賞賛すると、B・Yがクリスや他の仲間達も同じ事が可能だと口にしマキも笑みを浮かべながら頷いていた。

が、次マキが鉄格子の鍵を開けながらその隣に居たB・Yの口から衝撃的な事が語られた。

それはオメガ小隊、葵とイヴの部隊が意図的に参加出来なくさせられたと言う物で葵達は驚愕し、イーサンも耳を傾けた。

「実は俺が一旦お前達に合流したかったのはそれを知らせる為だ。」

葵達、茜達は嵌められたんだ…ミランダに」

『ミランダ？！』

その場で留まり家の中で井戸に使いそうなハンドルをイーサン達に渡しながらB・Y・は茜達がミランダに嵌められたと語り、イーサンを含めた全員が其処でミランダの名前が出て更に驚愕する。

そしてその内容を語り出す。

「奴はオメガ小隊の戦闘能力に驚異を抱いていた、特に葵の双子の姉にして葵と同じT—G e n e s i s 完全適応者、オメガ1の茜と茜達と同じウィルスに完全適応しているヨナ・レテイシア。

そして葵やオメガ小隊全員が俺達と揃って奴の殺害に乗り出されたら遂行される危険したミランダはコネクションを通じて偽のバイオテロ事件を引き起こしていたんだ。

その場に居たB・O・W・も、生存者も、テロリストさえもコネクションの捨て駒で構成された足止め要員だったんだ」

B・Y・は自身等やクリス達とオメガ小隊全員、特に茜やイーサンも名前や容姿をCLOWN事件の報道やレテイシア家当主として知り、今は対バイオテロ部隊に所属してると言うヨナが揃うのを恐れたミランダが犯罪組織コネクションを通じて彼女達を足

止めたと語り、その周到さに固唾を飲んでいた。

何故ならあの襲撃前に既にミランダに1手2手も先に打たれていたのだから。

これにはイーサンも深刻さを頭で理解し、その後の会話を聞き始める。

「そ、それはお姉ちゃん達が現地で知ったんですか?？」

「ああ、それもエイダ・ウオンと京町セイカの現地でのタレコミでな。

アイツ等曰く『早くこの場を後続に任せて葬達の所に行かないと、全てが手遅れになるわよ?』と。

だから今茜達は後続にその場を任せ急ぎA・B・F・本部に帰還、補給を済ませて此方に向かおうとしているが：最悪合流は夜中になるかも知れないとの事だ」

『B・Y・さんの言う通りですよ皆さん、ナビゲートよりお伝えしました』

その中で葵は茜達がそれを知ったのは現地でかと問うと、B・Y・はエイダ達の入れ知恵があつた事を話し、合流は最悪夜中になるとも付け加えきりたんも既に持ち直したのかそれが事実だと通信機から伝える。

イーサンや葵達はミランダの周到、徹底した対策振りに戦慄しある種の恐怖心に似た感情をイーサン達全員が抱いてしまっていた。

「これで分かっただろ？」

お前達だけではミランダに絶対に勝てない、今居る俺達やクリス達の力を合わ

せても勝率が怪しい今までに無い冷酷にして真に此方を掌で踊らせる生体兵器だと。

だからお前達はミランダとは自分達だけで戦うな、会ったら一旦逃げるんだ。

それが奴に勝つ為の道にも繋がる」

そうしてB・Y・は結論として葵がクリスからも聞いたミランダには自分達だけでは絶対敵わないと締め、イーサンや葵達に逃げる様にも伝えながら梯子を登り始める。

それを聞き終えたイーサンや葵、マキやイヴはB・Y・の冷静且つ怯えてる訳でも無いのにミランダに勝てないと口にした事で改めてあの化物に自分達だけで挑むと言う気持ちが見失せるのであった。

とてもこの4人でも敵う相手では無い為である。

「さて赤い煙突の家に着く、中に入るのは？」

「…私達4人で、B・Y・さんは見張りをお願いします」

そうして屋根伝いに赤い煙突の家に辿り着き、B・Y・が中に入るメンバーは誰かと告げると葵は4人で、B・Y・が見張り役をする様に伝えると彼は頷く。

そして更に梯子を登って赤い煙突の家の崩れた屋根から中に飛び降りると、イーサンと葵達はライカンの唸り声が響いている事を察知し、イヴがカビ剣で不意打ちし首を切断する。

「チツ、デュークめ…此処にはライカンしか居ないじゃないか…で、アイツは何でこんな家に？」

「机の上に箱と書き置きがあります。

先ず箱を調べて…『双翼の鍵は3つの部品を真の姿を取り戻す』、そして鍵の部品…この鍵未完成だったのか…。

そう言えば礼拝塔を出た直ぐの小屋に例の細工が出来上がったとか何とかの書き置きがありましたからこれかもですね」

イーサンは悪態を吐きながら周りを見渡し、4人で棚や机の箱を調べると、箱の中から双翼の鍵と合わせると言う部品とそれを記した紙があり、早速葵はそれを組み合わせて『四翼の鍵』とし、更にその横の読み物を読み始めた。

それは…この家の家主の書き置きであり、そして2月1日から9日、今日までの記録が綴られた物だった。

『2月1日、ミランダ様に山羊2頭を献上。

2月3日、ミランダ様に毛織物を献上。

指定された薬品と器具を数日内に用意する様言われる。

何に使われるのだろうか？

2月8日、ミランダ様からの連絡無し。

やけに家畜共が騒がしい。

2月9日、夜明け前、件の品を岩の教会まで届ける様言われる。

其処で私は…恐ろしい物を見た』

葵がその内容を音読し、イーサン達もテーブルを囲う様にそれを見つめていた。

其処で葵は未だ予備のカラコンが無い為ウィルス完全適応者の瞳がギラギラと輝き始め、腕もプルプルと震え始め、横で見えていたイーサン達もその内容を見て怒りの感情が再び湧き始めていた。

『其処には四人の貴族様と、見知らぬ赤子を抱くミランダ様が居た。

ミランダ様が何かを呟き、そつと…その子の顔に触れた。

すると…何と言う事だ…見る間に赤子の身体が…白く…結晶の様に変わって行くではないか。

そして…その結晶を…ああ！

私は思わず尋ねた。

一体何故、こんな事を？

ミランダ様は微笑み、言った。

この子は選ばれし子、如何なる姿になろうと、やがて元に戻る、と。

そして…貴族様達が結晶を一人ずつ授かり、去って行った。

私はミランダ様への礼儀も忘れその場を逃げ出した。
恐ろしい。

「一体あの子は…何なのだ」

それはローズが結晶化させられバラバラにされた事、薬品や器具はフラスクと中に入った黄色い液体、それ等を理解するに至る物であった。イーサンはその書き置きをクシヤクシヤにして投げ捨て、葵達が離れた瞬間テーブルを蹴り飛ばしていた。

「クソ、ミランダに腰巾着共が!!?」

「…確かにその怒りは御最もですよイーサン。」

ああ、またキレてしまいましたよ………頭の血管が切れそうです」

「右に同じく」

葵は漸く精神の揺り幅がマイナスからプラスに変わって来た事でサイコキネシスを使える様になり、そのクシヤクシヤになった書き置きを手元に引き寄せる。

そしてイーサンの怒りに対し葵は当然だと眩き、そして他3人もまた怒りを露わにしてミランダ達を絶対に許さない理由がまた一つ増えたのだった。

そして外に出るとB・Y・が佇んでいた。

「…如何やら中でミランダ達に怒る物を見たらしいな。」

「見せてくれないか?」

「どつどつ」

中での騒音やイーサンの叫び声からB・Y・は怒るに値する何かを見たのだと確信し、それを見せる様に言う。と葵がサイコキネシスでB・Y・に書き置きを飛ばし、それを受け取ると彼はタブレットに撮りながら黙読し、そしてそれ等が終わるとイーサンと同じくクシヤリと紙を握り潰し、そして家の中に入りテール付近に捨て去る。

その目にイーサン達と同じ怒りを宿しながら。

「…もう用は済んだ、後は小教会に向かおう」

「イヴの言う通りですよイーサン、突つ走らない様氣を付けて下さい」

「お前等もな」

そうしてイヴから用が済んだと言葉が飛び、葵はイーサンに突つ走らない様に言いつつ小教会に向かい始める。

するとイーサンは他3人にも同じ事を吹き、その声色は怒りに染まった物で、しかし未だミランダに勝てない事の無力さへの怒りも混じらせながらも彼女に突撃せぬ様に自制しながら小教会へと辿り着いた。

「待つてろ、開ける様に合図を送る」

『コン、コンコンコン、ドンドン、ドン、ドンドンコン。』

カチッ』

「ウィンターズやアオイ達と合流したか、デルター」

小教会到着後にドアのノック音の強さを調節しながら叩くと、中から葵とイヴが知る補給路、通信設備確保部隊イータ小队隊長、サジタリウスやデュランダルを作り上げたガンズミスイーターが他隊員達とパソコンを囲みながら居た。

「イータ小队の皆さん、補給路と通信設備確保御苦労様でした！」

「アオイの嬢ちゃん達も、ドミトレスクをぶっ倒したんだろ？」

お陰でライカン共とはハウンドウルフ隊と共に数体しか戦わず奴等の目を盗んで侵入出来たんだからな。

ほら、補給弾薬に……あ、カラコン失くしてるじゃねえか。

ほれ、予備カラコン」

葵とイヴは早速イーターやイータの隊員達に敬礼し、その任務達成を労う。

対するイータ達はデュークのみでは少し限界がある弾薬や回復アンプルやイヴやイーサン用回復薬、更にイーターが葵がカラコンを無くした事に気付き丁度持ってた予備カラコンまで渡してデューク並の至れり尽くせりとなった。

「でだイーサン・ウィンターズ」

「イーサンで良い」

「じゃあイーサン、クリス達は葵達の連絡を受けて迅速な準備をして大体葵達が村に

侵入してから3時間辺りで俺達と共に村に来た。

それからは俺達、デルタとイータ小隊達は共同で通信や補給路確保をし、クリス達ハウンドウルフ隊はこの村の何処かにある研究室の搜索、菌糸の採取と分析を6名中5名が3：2で別れ、クリスが村外れの工場に単独潜入調査中だ。

クリスに会うのはもう少し掛かるが：お前の事を気にしていた、とだけ言つて置く」

イーサンはB・Y・に呼び捨てを要求して話を進めて行くとB・Y・達は通信や補給路の確保をして葵達やクリス達の両面支援をし、クリス達はそれぞれ動き別々の調査を行っていると言にし、パソコンにも同じ内容が書かれていた。

そしてデルタチーム、イータ小隊はその後は囷になりミランダの注目を引く作戦となっており、更に『Ω16達にEWを任せ、もし会ったら全員がRW奪還の支援を惜しまない様に』と書かれクリスの不器用な優しさが垣間見えていた。

「クリス：あの野郎、なら直接言つて来いよ」

「クリスも負い目があるんだ、ちよつとだけ許してやつて欲しい。」

それとイーター、イーサンのハンドガンの専用カスタマイズを依頼したい。

基銃はこの銃にしつつ、原型を崩さずにこのガバメント等のパーツを使つて最高の銃を仕立ててくれないか？」

「ふむ、じゃあ握力と腕の筋肉、手のサイズの採寸をするからちよいと来い」

イーサンはクリスにやや険しくもB・Y・に諭されてか余り悪態は吐かず、しかしB・Y・にもう少し許して欲しいと頼まれ手を挙げる。

そしてそのB・Y・はイーターにイーサンが使うグリゴリの形見たるハンドガンを原型を崩さず最高の銃に仕上げる様にとオーダーする。

それを聞くとイーターはイーサンの握力等を測り、更にその銃を見て首を縦に振りながら口を開いた。

「OK、此れなら直ぐにオーダー通りに完成させられる。

ウインターズ、少しの間ハンドガンを預かる。

なあに、直ぐに出来るから何か村でやって来な」

「…マジで原型崩すなよ?」

コイツは、この村に来た時に助けた爺さんの形見の銃なんだからな。

じゃあアオイ、少しの間何処に行く?」

「……ならルイザさんの屋敷へ。」

あの人達としつかりと別れの挨拶が出来てませんでしたから」

イーターはオーダー通りに完成させられると豪語しながらイーサンから銃を預かり、直ぐにメイキングを開始する。

そうしてイーサンは銃を預けると、葵に何かやる事を聞くとルイザ達に別れを告げない事を口にされイーサン達4人は沈んだ顔を浮かべる。

「ならそのルイザの屋敷へ案内してくれ。」

銃が完成するまでの間護衛する」

「…分かった、行こうアオイ、マキ、イヴ。」

ルイザ達に、別れを言いに………B・Y、道はこつちだ」

するとB・Yがイーサンの銃が完成するまで護衛するとして付いて来る気であり、それを聞いたイーサンは葵達3人に加えて彼を伴い、小教会から出てルイザの屋敷に向かった。

その目の前の畑にあったユリアンの遺体は血の跡を残して消えており、ライカンに運ばれてしまったと思いきつい表情を浮かべていた。

そして門を開け、完全に崩壊したルイザの屋敷に辿り着く。

「…また来たよルイザ、グリゴリの爺さん、エレナ、レオナルド、アントン、ロクサーナ、そして…ああ、最後の1人の名前を聞きそびれてた。」

此れじゃあ、ちゃんとした別れは出来ないな…」

イーサンは屋敷の前で犠牲になった皆の名を口にして行く。

しかし、セバスチャンの名前のみは聞いていなかった為言葉を交わしたのに不完全な

別れにしかならないと思いい更に更に苦い表情を浮かべ、葵達も同じ表情を浮かべていた。

するとイヴが前に出て、屋敷と接する地面に触れて目を閉じ始めていた。

「イヴ、まさか意識ネットワークを？」

ダメよ、この村自体が実験場だから頭の中が焼き切れるよ！」

「…大丈夫、屋敷とその周囲に範囲を何とか絞れば…」

葵はイヴが特異菌の意識ネットワークにアクセスしようとしてると気づき、この村でやれば来た当初の様な情報処理し切れず頭が焼き切れると断言して止めさせようとしたが、イヴはルイザの屋敷とその周囲に絞り込めればと言い意識ネットワークのアクセスを開始する。

するとイヴから脂汗が流れ始め、明らかに苦痛に満ちた表情を浮かべるがそれでも止めようとせず、意地で続ける。

「……………ツ!!？」

ゲホツ、ゲホツ!!？」

「イヴ、おい大丈夫か!!？」

「大丈夫、イーサン……………分かったよ、あの怪我してた人の名前。」

セバスチャン、それが怪我してた人の名前……………」

そして案の定イヴは頭がオーバーフローを起こし、目から血涙が如き血が流れて咳き

込みイーサン達を抱き抱えると、イヴはセバスチャンの名を口にして調べ切ったと言った表情を浮かべていた。

それを聞いたイーサンや葵とマキは、無茶したイヴの頑張りに報いる為に彼女を支えて立たせ、そして改めて名前を告げ始めた。

「…そして最後にセバスチャン、救えなくて済まなかった…命を賭けて俺達を逃してくれてありがとう。」

ユリアンと一緒に安らかに眠ってくれ…」

「…ルイザ、グリゴリ、最後まで私達に祝福があらん事を祈ってくれてありがとう…アントン、余り酒を飲んで皆を困らせないでね……………さよなら……………」

「エレナさん、レオナルドさんと一緒に浄土で村の皆さんと幸せに……………さよならなら」

「貴女達の無念は、ミランダにぶつけてやるからどうかその眠りを妨げられる事が無い様に…」

イーサン、イヴ、葵、マキの順でルイザ達に別れを告げるとそれぞれが十字を切ったり、手を合わせて別れの礼を尽くし、此処で何があったか分からないB・Yも無辜の村人が死んだのだと流石に理解し、鎮魂の念を捧げていた。

そうしてイーサン達は改めて周りを見ると、グレネードランチャーの弾丸や宝箱が散乱しておりそれを手に取って静かに呟き始める。

「…これはルイザ達が俺達に託した物なんだ、俺はそう思う」

「ですね、なら大事に使いましょう。」

此方の宝箱は…ルイザさんの名が入った首飾り、中には鍵があつて宝石が取り外し可能。

……ルイザさん、鍵の方だけ使わせて頂きます」

イーサンはそれ等がルイザ達が託した物だと口にする、葵もそれに同意しながら宝箱を開く。

すると其処にはルイザの首飾りがあり、中に鍵があると透視で目撃して宝石を一旦外し、鍵のみを取り外して首飾りはイングリドの物と同様売らずに手元に残す選択を取る。

この首飾りは遺品で、使い道は残されたイーサン達に委ねられる為誰一人として鍵を使う事は咎めずに居た。

「…さあ行こう、別れはこれで終わりだ。」

後は…残りの貴族と、最後にミランダを殺してローズを必ず取り戻す」

「はい……ああB. Y. さん、少しでも頼みたい事があります。」

此れは多分マキさんやイヴも一緒の事を思つてます」

「何だ葵改まって。」

CLOWN事件からの付き合いだ、気軽に頼んでくれ」

イーサンは別れを済ませた後1歩力強く踏み出し、最終的な目標を四貴族とミランダの打倒、そしてフラスクになりバラバラになったローズを元に戻して取り返す事を告げ、葵達も頷く。

すると葵はB・Y・に頼み事をし始め、彼はCLOWN事件からの付き合いとして気軽に口にする様に言つて来た為葵はそれを口にする。

「ミア・ウインターズさん、本物のミアさんの搜索をお願いします。

例えミランダが成り代わつて行方知れずになつていてもあくまで行方が分からないだけ、この村の何処かに居るかも知れません！

だから、僅かな可能性でも生きている可能性に賭けたいんです…お願いします
！」

「…そうか、葵は、いや、イーサン達はミアも諦めてないのか…なら相分かった、デルタチームがミア搜索も請け負う。

だからお前達は先ずローズのフラスクを取り返すんだ」

葵はミア生存を諦めていない事をB・Y・に告げ、マキやイヴ、イーサンも同じ目で彼を見ていた為その思いを受け取り、デルタチームがそれを引き受けると公言しイーサンはB・Y・も大局より僅かな可能性に賭けてくれた、そう感じ取りB・Y・に礼を述

べようとした。

「B・Y、その、ミアが生きてるかもって思ってくれて」

「礼なら未だ良い、ミアを見つけてからだ。」

それに俺達はどうせ囿になるんだ、そのついでに人探しを追加されただけの話だ」

しかしそれをB・Y、自身がストップを掛け、囿になるついで十本人を見つけてからと理由を付けて礼は未だ敢えて受け取らなかつた。

イーサンは此れを少し捻くれてるが、受けた物をやり切るまでは礼とかを受け取れない責任感の強い質なのだと理解しそれ以上は言わずに小教会へ戻る。

「おう、丁度良く戻って来たな。」

カスタマイズが丁度完了した、後は銘柄を彫るだけになったぞ」

「早いな。」

……………銘柄、なら『サターン』って彫ってくれないか？

村人の無念をぶつける、此れ以上に無い名前だと思う」

「サターン……まんま村人、ね。」

了解だ、彫ってやる」

するとイーターが既にカスタマイズを終えて後は銘柄を彫る作業となり、イーサンは

サターンと彫る様に要求し、イーターはそれに理解を示してそれを彫り、そしてイーターの手にグリゴリの形見はサターンと言う名の銃となり戻って来る事となった。

「凄い、まるで自分の身体みたいにグリップが綺麗に馴染む……それでいて爺さんの銃の形が崩れてない」

「1から作る訳じゃ無かったし、カスタマイズは簡単だった。

威力は勿論だが何よりデュランダルとは逆に連射に重きを置いたカスタマイズにしといたぞ。

まあ、未だ試運転して無いがな」

イーターはグリゴリの形見の銃がニュートラルの時よりも手に馴染むと感じ、軽く手をスナップさせたりしてその馴染み様と基銃の原型がすっかり残ってる事に素直に感心していた。

イーターは連射を重視したカスタマイズにしたと説明するが未だ試運転は発砲して無い為性能が未だ未知数であった。

イーターは適当にライカンが居ないか外を見ると、丁度4体のライカンが小教会を睨んでいた。

『グルルルル……!』

「試運転相手なら見つかつたぞ。

さあ来やがれ元村人の化物共、完全に人間を止めさせられたお前等を寝かせてやる!!?」

『ズダダダダダダダダダツ、ズダンツズダンツズダンツズダンツズダンツズダン??』

そうしてイーサンは4体のライカン相手に右手にサターン、左手にデユランダルのカスタマイズハンドガン2丁による発砲を行いライカンを4体一気に沈める。

サターンはイーサンの連射速度にピツタリと合い、それによりライカンは蜂の巣になりデユランダルの単発威力もライカンの頭を飛ばし正に2丁拳銃のスタイルに合った仕上がりとなっていた。

「…良し、此れならもう怖い物なんか無い、寧ろルイザ達が付いて来て居る感じすらする…:イーター1、最高の銃をありがとう。」

じゃあアオイ、マキ、イヴ、デュークの所に向かおう」

「ですね…B・Y・さん、イータ小隊の皆さん本当にありがとうございました、また生きて会いましょう!!?」

「隊長死ぬなよな!」

「…グッドラック」

イーサンは最高の仕上がりとなったグリゴリの形見…:サターンにルイザやグリゴリ、

エレナ達村人の意志が宿った様に感じ取り、例えミランダでも恐れる事は無くなったとして葵達を連れてデュークの下へ走って向かう。

葵達もイータ小隊やB・Y・に次も生きて会う事を誓いながら後に続き走り出そうとした。

「待ったマキ、選別だ!!?」

「つと…此れ、レールガン!!?」

でもこの村じゃ使えないよ、未だ生き残りが居るかもだし」

「分かってる、だからそれはミランダとの決戦用、後は四貴族の中でクリスの勘が危険と感じたハイゼンベルクとの戦い用だ!!?」

だが必要と思えば使うのを躊躇わず使え!!?」

その前にB・Y・はマキを呼び止め、規格外兵器のレールガンを予備弾頭毎投げ渡し、ハイゼンベルクやミランダとの決戦用、後は使う時と思つた際に使えと命じる。

マキはそれ等を聞き無言で頷いた後走り出し葵達に追い付きデュークの下へと行くのであつた。

「さて…デルタチーム、イータ小隊と共に本命のHWの存在を気取られ無い様に、またイーサンや葵、マキ、イヴのローズ奪還組も動き易くする為に囮作戦を執行する…が、葵達の頼みだ、恐らくは村に居るであろうミア・ウインターズ本人の搜索もデルタチーム

が請け負うことになった、良いなお前達!!？」

『了解!!?』

そしてそれを見守ったB・Y。もまたイーサン達の頼みであるミア搜索も目的に入れてイータ小队の面々と共に危険な囮作戦を決行する。

もしミランダが本気で潰しに来れば全滅すらあり得るこの作戦、しかし本命のイーサン達とクリス達が水面下で同時に動ける様になるのに必要な作戦を決行し、デルタチーム他6名もまたそれに二つ返事で了解と答え、覚悟を決めて動き出した。

こうして邪悪と狂気が満ちる村でそれぞれの戦いが始まる。
その戦いの行く末を知る者は未だ誰も居なかった。

EP XI 『道標とベネヴィエント邸』

B. Y. 達と別れた後イーサンと葵達はデュークの下へ向かう。

其処には矢張り柔かに待つていたと言わんばかりなその姿があった。

「如何です？」

「何かわかりましたか？」

「羽の金細工を持つていた鍵と組み合わせさせて四翼の鍵になったり、ミランダの腰巾着共が1人ずつローズの結晶を持つて行った事だ。

要するに、この鍵を使って連中の下へ向かえばローズの瓶を取り返せるんだろ？

「その後は如何する？」

「まあ慌てず、先ずは瓶を集め切る事が先決です。

そして、四貴族のお話を少し致しましょう」

デュークはイーサン達に何が分かったかを問うとあの紙の内容や鍵を組み合わせさせた事。

此れにより行ける場所が増え、其処にミランダの配下が居てそれ等から瓶を取り返せ

ば良いとイーサンが答え、更にその先の元に戻す方法を聞こうとした。

しかしデュークに慌てずフラスクを集め切る事を告げられ、更に配下の四貴族の話を始め。

「この村を統治する冷酷な教祖ミランダの下には、4人の貴族が仕えています。

1人は貴方方が倒したドミトレスク夫人。

2人目は村の奥深く、霧の谷に住む人形使いのドナ。

彼女の屋敷に入った者は2度と戻って来られません」

イーサンはミランダの腰巾着としか捉えていなかった四貴族の話を開始始め、葵達も自身等が調べ上げた四貴族の情報に齟齬が無いかを確かめるべくきりたんの音声録画と共に聞き始める。

1人は既に死んだ吸血女のドミトレスク。

2人目はドナ・ベネヴィエント、人形使いで霧の谷に住むと言われ、その点は間違いでは無いとして首を縦に振る。

「そして3人目は、風車を抜けた先の湖に住む怪人モロー。

その湖には他にも恐ろしい怪物が棲むと言います。

最後にして最も危険なのがハイゼンベルク卿。

人里離れた工場に潜んでいます。

噂によれば、彼の工場には想像を絶する恐怖が待ち構えているのだとか」

3人目のサルヴァトーレ・モローはこの村の風車の先にある湖に住む、更に何らかの怪物が湖を偶に徘徊していたと言う報告がクリス達ハウンドウルフ隊やA・B・F、デルタチームの監視から為されており正しかった。

そして現在クリスが単独潜入調査している村外れの工場に居るカール・ハイゼンベルク。

葵が直接対峙した事等やクリスが単独で乗り込んだ事から四貴族中最も危険だと言うのも正しかった。

するとデュークはイーサンが書いていた村の地図に何かを書き記し始める。

「重ね重ね言いますが娘さんを助けたくば4つの瓶を集める事です。

今回だけは特別にそれぞれの場所を地図に記して置きました。

また村には貴重な品が眠っています、何れもきつと貴方達の役に立つでしょう」

「…本当だ、私達の調べた四貴族の住処の情報と正確に一致してる。

情報もしっかり取り扱う商い、此処まで来ると凄いな」

イヴが先ず地図を見るとドナ達が居を構えているとされる場所の情報と正確に一致する物が書き足され、更に貴重な品と言う物の場所まで書かれて情報の扱いまで商い精

神が宿っている事に此処まで来ると感心すらしていた。

「それに貴重な品……それって多分お宝って事だよな？」

換金とかそんな感じにして弾薬を買う様になって事？」

「ええはい。」

ツルマキ様やアーク様、コトノハ様の補給路が確保されても接触タイミングはミランダの目を盗む関係上限られてしまうでしょう。

なら、この商いの商品やカスタマイズも利用しつつローズ様を取り返す算段を立てるのが最も最効率と私は思いますよ？」

そして貴重な品も換金等をして金策し、デュークの商品を買う事をマキが聞くと本人は肯定し、更に補給路確保もデュークの言う通り用意周到なミランダの目を盗みながらやらなければならぬ為慎重に接触タイミングを図らなければならぬ為彼の商品や銃のカスタマイズ等を利用する事こそがローズ奪還の一番の近道だと、葵達のみならずイーサンすら感じていた。

「何故此処まで……？」

「貴方は村の、ドミトレスクとも接点を持つてた商い。」

それなのに何で村の外部、しかもミランダ打倒を目標の一つにしてる私達に

？」

「いえあくまで顧客サービスの一環ですのお気になさらず。

そしてもう一つ、商いは客を選ばず私の商品を求める者に商売をする、此れが私のモットーですよ。

「それでは今後ともどうぞご最良に」

イーサン、そして葵は此処までの手助けをして来るのか理解出来ずデュークに問うが、此れは顧客サービスとされ気にせず、更に誰が相手でも商品を求める者に商売すると宣言しながら今後も利用する様にと言われイヴ、更にマキも感じた物凄い商い精神に感心し、ならばローズ奪還の為に最大限利用しようと4人は頷き合った。

「さて、最初にハイゼンベルクに捕まった時に居たあのビスクドールを操ってた奴の所に行く前に万全な準備をしよう。

デュークから記されたこの地図、ルイザの物も書かれてるが首飾りは売らないとして、首飾りの中にあつた鍵は何処で使う？」

「そうですね、なら透視で周りを見て……あ、祭祀場への扉の先に廃墟がありましたよね？」

「其処に宝物の箱が見えます」

そうしてイーサンは先ずドナの下に行く前に準備をするとして金策をしてデュークの品を買ったりしようと言い始め、全員それに賛成した。

が、ルイザの遺品として地図に記してあった首飾りは売らず中の鍵を何処で使うかを透視持ちの葵に聞く。

すると祭祀場への扉の目の前にあつた廢墟に宝箱があるのを葵は発見し4人で走り出した。

「さて、中身は…此れはゴブレット？

如何にも貴重品そうだな…ルイザ、使わせて貰うぞ。

後は村の井戸に使うこのハンドルを使つたりして、今行けて入手出来る物を片っ端から手にするぞ」

「あいよ、それでデュークにこのドミトレスクの結晶每売り付けよう。

…村の皆、ミランダを殺してこの悪夢を終わらせる為にちよつと使わせて貰うよ」

イーサン達はゴブレットを手にした後、村を探索し金策出来る物を見つけたり弾薬等を発見してからデュークにドミトレスクの結晶每売り付けて商品を買ひ準備万端にしてドナ・ベネヴィエントの討滅及びローズのフラスクを奪ひ返すことになった。

そうして集め切つたのだが幸いな事に葵の透視能力が此処でも活き本来見つけるの

に掛かる時間等を短縮し物の15分程度で現時点で行ける村の探索を済ませ、デュークの下で現在組み合わせて完成する物以外の売れる物を売っていた。

ドミトレスクの結晶毎。

「おお、ドミトレスク夫人！

死してなお美しい、このくびれが……ふむ……。

おっと失礼、他の品々の売却、及び商品購入とウィンターズ様の銃のカスタマイズありがとうございます。

しかしこのハンドガン……サターンは短時間でカスタマイズされたとは思えぬ芸術品！

此方のカスタマイズもわたしの手で加えられるのは少々程度、それ以上はバランスが崩れましょう」

そのドミトレスクの結晶を最後に売った所、葵達がジト目するレビューを開始したがそれに気付いたデュークは失礼と一言言い、商品購入と銃カスタマイズに御礼を申し上げると同時にサターンは完成された芸術品だと言いデューク側からカスタマイズするのは少々と予め言われる。

「良いさ、こうやって俺達の準備を万端にしてくれるんだからな。

……さあ、行くぞ3人共、先ずはこの鍵で今開ける霧の谷側に行くぞ」

「はい、ドナ・ベネヴィエントも四貴族の一人ですから油断せず行きましょう」
「んじやデューク、また何かあつたら売り付けて商品買うからよろしく」

それをイーサンは準備を整えさせるだけで十分だと言ひ、まだまだ謎多き人物だが商
い精神だけは本物と評価した後霧の谷、ドナの下に向かうと宣言する。

葵達も同意し油断せず行く為に銃を構えながら扉前まで進み、最後にマキがデューク
によりしくと言うと彼は頭を下げ、4人が扉を潜るのを見送る。

「…じゃあ、相手が人形使いでもドミトレスクみたいな事になる可能性があるから、油
断せず行こう」

「ああ。」

さあ走るぞ」

最後にイヴがドナ・ベネヴィエントが人形使いと一見戦闘力が無いと思えても特異菌
による変異でドミトレスク級の力を発揮するかもしれないと主にイーサンに忠告し、そ
れを聞き終えると走り出した。

そうして周りは直ぐに霧に包まれて行き、その行き先の木には人形の首が吊るされた
不気味な雰囲気が表示始める。

「悪趣味だな。」

気味が悪いしきつさと抜けるぞ」

「…了解」

「それにしても霧が深い、逸れない様に気をつけましょう」

イーサンはこの悪趣味な物と理由を付けて小走りで深い霧の中を走って行き、葵達は互いに逸れぬ様気を付けながらその後を付いて行く。

そんな霧深い道を真つ直ぐ進むと吊り橋があり、少しゆつくりになるが進んで行き余り木の足場を崩さずに渡り切る。

すると門が現れるが、その先で異変が起きる。

『イーサン…』

「何…?」

何とその門は一人でに開くとミアの声が響き渡り、更に直ぐ先にはローズを抱えたミアが立ち、イーサンや葵達を見つめていた。

「イーサン、クリスの友人の皆、付いて来て。

伝える事があるの」

「ミア?

おい、今ミアが…」

「はい、私達も見えましたし聞こえました。

ですがローズちゃんはフラスクに入れられて今もこうして…いきなり消えま

したし、まさか幻覚？」

『?』

あの、皆さん何をーザーザアアアツ、プツン!!?』

そのミアはイーサン達に付いて来る様に言うと言くと直ぐに消え、しかしローズの現在の状況からそれは幻覚ではと葵が予想を立て、マキ達もフラスクを確認して再びミアらしき人物が消えた先を見据える。

すると通信先のきりたんが何かを言おうとした瞬間通信機からノイズが走り、通信が切れてしまう。

「えっ、ちよつときりたん!!?」

きりたん!!?」

……通信が途絶えた、この通信機最新式で設備さえ整えたらこんな谷でも通信が届く様に作られてるのに……!!?」

「……通信機遮断、更にミアの幻覚らしき物……ドナ・ベネヴィエントが私達を誘ってる?」

「なら乗ってやる、恐らく幻覚……の様な物はミランダの腰巾着の人形使いが態々見せてるんだらう、通信機遮断も奴の仕業なら乗ってやって本物のミアの居場所を吐かせてやる!!」

態々ミアの幻覚をどんな方法か知らないが見せて来たんだからな!!??」

マキは通信機の通信が遮断された事に焦り通信機を叩くが、うんともすんとも言わず最新式通信機なのにと焦る。

そんな中イヴが真つ先に冷静になって考えた結果、ドナが此方を誘い込んでいると考え葬もそれに頷いていた。

そしてイーサンは態々ミアの幻覚を見せた。本物のミアの居場所を知ると考え、怒りながらも冷徹にドナを確実に倒す機満々で進み始めた。

「ローズは…普通じゃない。」

イーサン、何とかしないと」

「ミアはローズを愛していた、ならこんな事は言わない…!!?」

「皆居なくなる…ローズでさえ…そんなの耐えられない…」

「ミアらしい事を言つて騙そうとしやがって…幻覚ならあのベイカー邸で散々見たしこつちには専門家のイヴも居る、いい加減こんな幻覚を見せるのを止める…!!?」

そうして歩を進める毎にミアが現れてはイーサン達にローズの事に絡めた話をしては消えると言うのにイーサンは怒り心頭になって行き口がどんどん汚くなるが、葬が背中をちよつと叩いて落ち着く様にジェスチャーすると、一旦深呼吸をしてイーサンは心を落ち着かせた。

「済まない葵、皆…ミアやローズの事になると」

「…誰だつて愛する家族の幻覚を見せられたら怒るよ。」

それでこれがドナ・ベネヴィエントの力なら、こんな幻覚でイーサンを惑わそうとしたり神経を逆撫させるのが目的なら、本性は相当な加虐的な物だと思う」

「あのビスクドールを操つて話をしてたから間違いないかもね」

イーサンは冷静さを失い掛けた事を反省すると、イヴは最愛の家族の幻覚を見せられたらこうもなるとフォローを入れ、葵達もこれは仕方無いと思いつつながら、ドナの本質についてをイヴが考察すると、葵はあの四貴族集合時から話したビスクドールからもそれが本性だと断定し、危険度を引き上げる。

そうしていると一つの墓に辿り着く。

「この墓…名前が欠けてるね」

『…ア・ベネヴィエント』、生年1987年、没年1996年。

9歳までしか生きられなかったのか」

「それにしても、アの部分から先を意図的に切り抜いたつて事はミアさんが此れつてミスリードを図りたかつたのでしょいかね？」

でも残念、ミアさんの経歴は私達も把握済み、だからミスリードにもならな

いよ」

その墓に刻まれた名前が欠けており、丁度アの部分からしか読み取れずイーサンのみであればミアの事とミスリードをさせられたかも知れない。

しかし此処に居るは対バイオテロ専門の人間3人、ミアの経歴も調べ尽くされて且つイーサンに襲撃の真相も何もかも話した為彼はこの程度では騙されない様になった。

「さて、この先に扉がありますね…『思い出を捧げよ』とか書いてあります」

「思い出？」

皆それらしい物は持つてるか？」

そうして墓を後に先の扉に向かうと鍵が掛かっており、横には思い出を捧げよと書かれておりイーサンは3人を見やる。

すると葵が服のチャックを少し下げ、首から下げた青いハートの飾りのネックレスを取り出す。

マキはBSAA時代で初任務時のドックタグ、イヴはルナが買ってくれた髪留めを外し、イーサンは出したいが無いが家族写真を取り出す。

「で、捧げよだからポストに投函するのかな…」

「んじゃ入れよう」

『スツ、カチャ。』

キイイ……』

「本当に開いた、しかも1人で……」

そうして思い出に關係する物を投函した瞬間、1人で扉が開いた事をイーサンは不気味がるとその先にエレベーターがあつた為皆でそれに乗り上へと上つて行く。

すると少し停電が起き、先程エレベーターの壁に何も書かれていなかった筈が、其処には『一緒に来て、皆』と書かれており明らかに何か不自然な事が続け様に起きていた。

「何が如何なつてるんだ……」

「分からないです……兎に角先に進みましょう。」

この先がベネヴィエント邸の筈です」

「全くホラー映画じゃあるまいし、怪奇現象風味を出して……んじゃ、ローズちゃん取り返しに行きますか!」

そうして4人は気にせず窮屈なエレベーターを抜けると、目の前に滝がある霧の谷の最奥地、四貴族の1人ドナが住まうベネヴィエント邸が見えて来る。

イーサン達はローズのフラスクを奪い返すべくその家の中に突入する。

そして玄関ホール階段の壁には人形使いドナの素顔と思しき人物とあのビスクドールの掛けられていた。

「全く立地条件最悪じゃん、目の前に滝があるとか、崩れそうで落ち落ち寝れないよ」

「ああ、全くだな。」

それで葵、フラスクは見えるか？」

「えーと、家に地下があるらしく其処にあるみたいですね。」

それとイーサン、最初にハイゼンベルクの『シヨール』は覚えてますね？

あの時動いてたビスクドールがフラスクを……」

マキは家の立地条件の悪さを指摘し、イーサンもミアやローズともこんな場所には住まうまいと思っていた。

そうしてフラスクの場所を聴きながら玄関から移動してリビングを見てると、葵は下を見ながら地下にフラスクがあると言い、更に最初に捕まった際に見たビスクドールがフラスクを持っているとも告げる。

「……罨だね」

「だが目に見える罨でもローズの為だ、行くしか無い」

「ですね、それじゃあ行きましょう」

イヴは黄色い花の資料を見ながら罨と断言する。

だがイーサン達は目に見える罨でもローズ奪還の為に踏み抜くしか無いと考え、葵が合図を出すとリビングからエレベーターの通路へと行き、再び窮屈ながらも地下へと降りて行く。

イーサンはその声に憤りを示しながら姿を見せる様に要求する。

すると電気が点き周りを警戒しようとした…が、マキがいの一番に装備が全て消えている事を叫び、イーサン達も同じでやられたと感じていた。

更に後ろのドアにはナンバー錠の鍵が掛けられ閉じ込められたとイーサン達は直感する。

だがその中で葵、イヴは何やら更に深刻そうな表情を浮かべていた。

「クソが、あの停電中に全部やられたのかよ!!？」

葵、此れを仕掛けたクソ女が何処に居るか…：葵、イヴ、如何したんだ？」

「可笑しい…あり得ない…私、サイコキネシスと透視が使えなくなってるんです!!？」

それに…：身体能力も、T—G e n e s i s の力抜きの物しか出せなく…：!!
？」

「…こつちも、体内のE型特異菌を操れなくなってる！

カビの剣とかが作れない、何が如何なって…！」

イーサン達は葵、イヴの特殊能力すら使えなくなっていると聞き、本当の異常事態に直面したと感じ周りを拳を構えながら警戒していた。

すると先程布が掛けられていたテーブルには何処か見覚えのある造形の人形が置かれ、イーサン、葵達達はそれを囲む。

すると、其処にあの夜のミア…に化けたミランダの遺体の写真が置かれており、全員が嫌な想像を浮かべていた。

「おい、写真のはミアに化けたミランダの奴だが、この人形はまさかミアを模した…」
「…悪趣味にも程がある人形ですな全く。」

…多分ですけど、この人形を弄って仕掛けを解けとかそんな感じでは無いでしょうか…全く、本当に何が如何なつて特殊能力さえ使えなくなったのか…」

イーサンがいの一番にこの人形がミアを模した物かと発言すると、全員否定せず葵が人形を弄り仕掛けを解く様にと解釈して悪趣味全開な人形の左腕を調べ始めていた。

その間にも特殊能力が使えなくなった理由を頭の中でパーツを組み立てる様に整理して行く。

すると二の腕から銀の鍵が出て来てそれを手に取った…瞬間、部屋のラジオから音声が始めた。

『お腹を蹴った！』

信じられる？

この子、本当に元気だわ』

「今の音声、ミアさんの…イーサン、聞き覚えは？」

「…ミアがローズを妊娠していた時期のだ。」

だが何故その音声が…？」

如何やらミアの音声の流れ、イーサンはそれがローズを妊娠していた時期の物だと判別する。

だがそんな音声は何故この部屋のラジオから流れたのか不思議がり、意味が分からず何が何だかさっぱりだと言った表情を浮かべていた。

「兎に角未だ調べられそうだからもう少し人形を調べてみようよ」

「…賛成、その間に私と葵が一例の現象を考えてみる。」

……………多分だけど当たりはつくけど、まさか此処まで…？」

「イヴ？」

だがまだ前に進むには何も分からない状態の為イーサンとマキは更に人形を弄り始め、葵とイヴは一連の物を考える組に分かれて考え出していた。

この中でイヴは当たりをつけたらしいが、何か信じられないと言った様子で思い耽り、葵はその当たりについて未だ分からずパズルのピースを手探りで嵌めて行く様に思考する。

「…取れたのは右腕に左足、それとこの血塗れの結婚指輪。」

その内左足の中にはゼンマイ、動かせた左目には右腕の内側にあつたみたいな模様、口の中にはフィルムがあるが傷付けず取るにはピンセットみたいな物が必要

…」

そしてイーサン達は現段階で人形を解体出来る部分を片っ端から調べ上げ、其処で血に塗れた結婚指輪に何処か見覚えがあるゼンマイを手に入れる。

更に右腕と左目には模様が刻まれ、口の中にはフィルムがある事を確認し終えていた。

「取り敢えず葵が取った鍵はその扉で使うみたい。

葵、イヴ、隣の部屋に行くよ」

「了解ですマキさん。

イヴ、行こう」

「…うん。

………それにしてもそうなら相当強力な………抜け出す為には………」

マキは最初に葵が取った鍵は隣の部屋に行く為の物だと判別し、葵達を呼び鍵を開けながら呼ぶ。

そして葵とイヴはそのままマキ達に追い付き、隣の部屋に入る。

その際にイヴがぶつぶつと何かを呟き、葵は彼女がかなり正解に近付いているのではないかと考え出し屋敷に入った際の起きた出来事、その前後を考え出して正解を導き出そうとした。

「で、血塗れの結婚指輪を洗って血を落としたんだけどさ……あのダイヤル錠、もしかしてこの指輪に彫つてある数字で開くんじゃ？」

「まさか、この数字は結婚記念日にミアに贈った……いや、まさか……」

そしてマキが丁寧に指輪を洗いイーサンに渡すと、その裏面に彫られた数字がダイヤル錠の解錠ナンバーではと言ふと、イーサンは結婚記念日の贈り物をした日だと話してあり得ないと否定しようとした。

が、それ以外にナンバーは見当たらない為試しにナンバーを入れると本当にそのナンバーで解錠してしまう。

「……如何かしてやがる」

「全くですね……じゃあ、先に進みましょう」

「(……)……やっぱりこれは……でも途中から抜け出す方法が見当たらない………此れは、荒療治になるかも知れない……)」

イーサン達はこんな風に謎解きに自身とミアの物が関連する事にやや苛立ちを覚えて愚痴を溢すと、葵やマキも悪趣味だと改めて思い先に進み始める。

しかしその中でイヴはいち早くこの事態の真相に辿り着いたのか顎に指を当てながら考える仕草をし、そしてこの事態解決にも荒療治が必要になるかと思ひ始めながらイーサン達の後に続くのであった。

「おい、嘘だろ……」

そうして少しだけ先に進み、ドアが勝手に開くと言う怪奇現象に見舞われたがイーサン達は無視し、物置部屋に押し入り其処でメモ書きに『イーサンとの思い出のオルゴール、でももう鳴る事は無い』と言う意味深めいた物があり、そして少しだけ奥に進みイーサンは驚きを隠せずにいた。

「何で、俺の家にある筈のオルゴールがこんな所にあるんだ……?？」

何故なら其処にはウインターズ邸に安置され、ローズもその音色を気に入っていた物……葵達がウインターズ邸に突入した際にも見かけたイーサンの思い出の詰まったオルゴールが鎮座していたのだから。

EP XII 『暴かれた幻覚』

某国上空、1機の輸送機：A・B・FのロゴマークがあるそれがA・B・F本部
 に向かい全速力で飛んでいた。

中に居るは葵達の部隊、オメガ小隊であり葵の双子の姉である茜や友人のヨナ、ビ
 リーにカルロス達がそれぞれの座席に座っていた。

「おいもつと早く飛ばせへんのか!?!」

此れじゃあ本部に着く頃には夜になるで!!?」

「分かつてますよ隊長!!?」

でも此れが精一杯なんです!!?」

「畜生、ミランダ…!!?」

まさかコネクションを通じてウチ等と葵達を分断させる罠を既に張ってたな
 んて…!!?」

隊長席で茜は運転手にもつと早く飛ばせないのかと憤り、運転手も此れが全速力と言
 い放ち茜はコネクション、そしてミランダの罠に嵌った事に自分達は迂闊だったと考
 え、更に既にきりたんの報告からミランダへの作戦が決行され、それが失敗に終わり葵

達がイーサンを伴い村に向かいローズを奪還しようとしてる事等を聞いていた。

「クリスの旦那達が仕留め損なうなんてな……」

「それだけミランダが化物なんだろう。」

それに今回のこの偽のバイオテロ事件、裏で糸を引いていたのもミランダだった。

奴は今までに無い想像を遥かに超える存在なんだろうさ」

先ずカルロスが口を開きあのクリスやB・Y、更に葵にマキ、イヴに加えベータやイプシロン小隊、HW隊にデルタチーム初期メンバーと猛者ばかりを集めた襲撃が失敗に終わり、ミランダの目的を達成させた事に頭を抱え、ビリーはミランダの化物振りと力に振り回されない周到さから今までに無い想像を絶する者だと説いていた。

「エイダ達の言葉を信じるならそうだけれど、実際に通信機から生存者すらコネクシヨンの構成員だと後続のイプシロン、ニュー小隊から報告が引つ切り無しに上がってる。」

エイダとセイカ、2人が現地でくれた情報は正しかったと言う事よ」

最後に通信機の中から生存者すらコネクシオン構成員と後続部隊の報告が次々に上がる事をヨナが口にし、エイダとセイカが現地で茜達にくれた情報：「此れはミランダが仕掛けた罠よ、早く戻らないと全てが手遅れになるわよ？」と言う言葉が事実だと裏

付けられている事にまんまと嵌められたが半分、急ぎ戻らねばが半分の気持ちで輸送機に揺られていた。

「くそ、くそ!!？」

葵、マキさん、イヴっち、クリスさん、B・Y・さん達：イーサン・ウィンターズ、ウチ等が辿り着くまで無茶しちやアカンで：!!？」

茜は珍しく焦った表情でタブレットを弄り、葵達により共有された様々な情報から現在ローズがバラバラにされ、それを葵達が奪還に動きクリス達はミランダの目的周りや何故ミランダがローズを知ったのか等の調査、B・Y・達とイータ小隊が囚役兼ミア・ウィンターズの搜索を葵達から依頼され遂行中の中で彼女達の身を、未だ見ぬイーサンを含めて案じていた。

「先の作戦の後続は腕は確かなエイダ達だけでは無い、頼れる人達も来たから心配は無い：後はアオイ達を助けに行くだけね：」

そしてヨナが口にした偽バイオテロは後続にA・B・F.の2部隊のみならずエイダ達、更にエイダ達のタレコミでやって来たDSOのレオン、シェリー達に任せ機体は燃料やエンジンが焼き切れる心配も他所に全速力で飛んで行く。

全ては葵達の救出の為に。

その頃イーサン達は物置部屋でオルゴールを鳴らしピンセットを手に入れ、そのピンセットから口のフィルムを取り出し最後に書斎の隠し部屋から鋏を手に入れミアを模した人形の胸の包帯を切り、其処からメダリオンを手にして未だ行っていない工房横の通路先に向かう事になった。

「クソ、さっきから何なんだよこの現象は!?」

ミアが俺に隠し事をしてるみたいなのラジオ音声や電話、一体何なんだよ!!?」
「イーサン落ち着いて!」

多分と言うか絶対此れドナ・ベネヴィエントが仕掛けて来てる心理戦を含んでる筈!

迂闊に熱くなって乗らないで、奴の思う壺だよ!!?」

「マキ……ああ、そうだな……所で、葵とイヴは何でさっきから黙っているんだ?」

しかしイーサンはラジオや電話から一方的に流れて来るミアが何か隠し事をする様な音声に苛立ち、更にこの現象がずっと続いている為心象穏やかでは無かった。

が、マキのアドバイスで少し冷静さを取り戻し、その後は葵とイヴが何故黙ってるか

2人に聞き始める。

「ああ、私はこの現象について考えたんですよ。

私は後少しで推理道具が揃う感じです。

多分イヴも……それでイヴは何か分かった事はあるの？」

「……ある、と言うより確信。

でも抜け出す方法を考えないといけないから未だ教えられない。

ただ言える事は、ヒントは『このベネヴィエント邸に入る前から提示されている』、だよ」

「ベネヴィエント邸に入る前から……」

葵とイヴはそれぞれこの現象について考えていたらしく、葵は後少しでパズルのピースが揃うと話し、イヴは既に答えには行き着いては居るがこの現象から抜け出す方法を考え出さないとならないと言って答えを出し渋っていた。

しかし重要なヒントとしてベネヴィエント邸に入る前からヒントその物が提示されている事を話した。

「……分かった、答えとか全部分かったら教えてくれ。

それで、メダリオンを填めたは良いが此れの開け方は……多分あのミアを模した人形の右腕と左目の模様、だよな？」

「多分ね、だから此れをああしてアレをそうすれば…はいオープン」

それからイーサン、マキは目の前の謎解きに集中し、メダリオンを填めた後に模型人形にあつた模様を揃えると古びた石階段が現れ、それを降りて行くとフィルムを揃えて回した映写機に映つた井戸も現れ一気に不気味さを増していた。

「全く、ホラー映画じゃあるまいしこんな不気味な井戸が何であるんだか…：…んじゃ井戸には私とイーサンで降りるから葵とイヴは待機で」

「了解、何かあつたら互いに呼び合しましょう」

そうして揺り籠が不気味に揺らぐ部屋内にある井戸にイーサン、マキが侵入して行く。

そして井戸の底には先程のミアの模型人形らしき物がバラバラにされて浮かんでおり、其処から2人は息を呑みながら同じく浮いていた配電盤の鍵を入手する。

「…如何かしてる」

「確かに、悪趣味ってレベルじゃ」

『ガジャアアアアアアン!!?』

おぎやああ、うあああん、えええん…!!?』

「何だ、アオイ何かあつたのか!!?」

イーサン、マキは模型人形がバラバラになり浮いていた事等を踏まえ悪趣味を通り越した悪意を感じながら梯子を上り始める。

すると何かが壊れる音と赤ん坊の泣き声が響き渡りイーサン達は葵とイヴに何かあったのかと思ひ急いで登ると、其処には壊れた揺り籠をじつと見つめる葵達が居た。そして赤ん坊の泣き声は未だ響く。

「何だ、何があつたんだ？ 2人共？」

それにこの赤ん坊の泣き声は……？」

「分かりません、井戸に少し意識を向けてたら突然揺り籠が壊れて、それでこの赤ちゃんの泣き声が……」

「……悪趣味」

イーサンが先の上に上がり、葵達に何があつたのかを聞くと如何やら突然揺り籠が壊れた上に赤ん坊の泣き声が響き渡っているらしかった。

謎の答えに辿り着いているイヴは悪趣味とだけ話し、マキも上がりミアの模型人形があつた部屋へと戻つて来る。

すると其処には井戸の底に移動した様に人形無く、代わりに血の跡と腸の様な物が廊下が続いているのを目撃する。

「……………」

「…ねえ、あれつてもしかして……………臍帯、だよね？」

何であんな物が…」

『きつと大丈夫、大丈夫よ、大丈夫。』

問題無い、大丈夫、大丈夫…』

イーサンは余りの現実離れした光景に何時もの覇気が無くなり、マキは廊下にある物が臍帯…臍の緒だと見抜いてしまい此方も同じ様に呆気に取られ、葵は固唾を飲む事態になつていた。

更にラジオからはミアの音声…更に息遣い等がラマーズ法だとも感じ取れ3人はやや青褪めていた。

この中でイヴは率先して前に出て部屋から出ようとしていた。

「…配電盤の鍵があるなら、そっちに行こう？」

……………本当に悪趣味」

「そ、そうだな、行こう…」

イヴの言葉からイーサン達は覚悟を決めてエレベーターに続く廊下へと出る。

そして足元には矢張り臍帯がありそれが延々と続きイーサン達3人の歩を重くする。

そうして一步一步前に進んで行き、ある程度の場所から臍帯が途切れていた。

そして……………。

『ベタツ、ベタツ!』

『!!??』

『アーハツハツハ!』

「パアパア〜!」

そして廊下の先から臍帯に繋がれていたモノ：醜悪な姿でイーサンを見ながら。パアと呼ぶ悍ましき化物が姿を現し、イーサン達4人に迫って来ていた。

「ヒイ!!??」

「う、うわああ、に、逃げて!!??」

「クソ、何なんだよコレは!!??」

「……………悪趣味、ううん、もう悪趣味なんかじゃ済まないね、此れ……………」

その余りの醜い姿に並大抵、それこそリツカー並に醜悪な化物でも見慣れた葵が小さく悲鳴を上げ、マキやイーサンはパニック状態になりながら180度反転して奥へと逃げて行く。

その中でもイヴは何故か冷静なままで何かに対して悪態を吐いていたが、イーサン達はそのような事を気にする余裕が無く走り、人形があつた部屋まで戻ってしまう。

「ああクソ、如何するんだアオイ、マキ、イヴ!!??」

「アレのスピードは遅いですからこの卓で回り込もうとして来た時に全速力でエレーター前まで走りましょう!!?」

「ああもう、何なのよあの化物は?!?」

見るのも堪えないよあんなの!!?」

イーサン、葵、マキはそれぞれパニックになりながらも『化物』のスピードを考えて卓を回り込もうとした瞬間に全力ダッシュで配電盤まで走ろうと決め込みその案で行く事になる。

『あああううう、パアパア』

「……今!!?」

そして案の定『化物』がイーサン達の部屋まで追い掛けて来て卓を右側から回り込みイーサン達に迫ろうとしていた。

それを見た葵が合図を出して4人は全力疾走で配電盤まで走り、鍵を使い配電盤を開けると黒電話があった通路の扉に填めるレリーフが入っておりそれを見て黙って全力疾走でその扉前に行き、そして中へと入った。

「はあ、はあ、はあ……何なんだよ、あの『化物』は……アレが赤ん坊なのかよ……」

「うう、吐き気して来た……」

「……………マキ、我慢。」

配電盤にヒューズが無かったでしょ、だから代わりのヒューズを取りに行こう」

イーサンは息も絶え絶えになりながらあの『化物』が赤ん坊、しかもミアを模した人形から出た奇怪なモノだと思ひ完全に気を吞まれており、マキは吐き気を催し、葵に至つては黙り込んでしまふ思考が纏まらずにいた。

その中でイヴは何故か冷静なまま扉の方を見ながら次にヒューズを取ると言つて先に進み始めようとしていた。

「お、おいイヴ、お前アレ見て何とも思わないのか？」

肝が据わつてるとかそんなレベルじゃないぞ？」

「…肝を据わらせる必要は無いよ。」

だつてコレ、『実害は無い』んだから…」

「は、はい…?」

イーサンは厨房を進むイヴの異様な冷静さに逆に寒気を感じてそれを問い質すと、そのイヴは『実害は無い』と言つて何時ものイヴらしさが失われない冷静振りを見せ、イーサン達を困惑させる。

その中で葵はパニック状態が続きながらもイヴの冷静さからパズルのピースの組み立てを再び始め、イーサン達の後ろで息を整えながら思考を纏め始める。

「イヴはアレが実害は無いつて言つて、加えて此れ等一例の現象に答えを見出してヒントはベネヴィエント邸に入る前から出てたつて言つていた……：此れ等全部を統合して答えを導き出すなら……まさか、でもそうとしか……けれど、私やイヴまで嵌る程の？」

だとしたら、ドナ・ベネヴィエントを舐めてたかも知れない……」

葵は寢室に入った辺りで思考が纏まり、イヴが見出したと思われる答えに行き着くと自身やイヴが嵌る『それ』を仕掛けたドナ・ベネヴィエントは別ベクトルで厄介過ぎる敵であり、内心ドミトレスクを斃した事から何処か油断が生じていたと反省点まで見出してイヴを見つめ、そして視線が合うとイヴは頷き答えは『それ』だと葵に確信を持たせさせていた。

「よし、ヒューズを取るぞ……」

『カチ、プツン!』

その中でイーサンはヒューズを取り出し、電気が消えた所でペンライトを点けてマキ共々身構えながら来た道を戻り始める。

その先頭をイヴ、次に葵がジリジリと進み始め、物音が立つ暗闇の先へと進み始める。そして再び先程の扉前に辿り着いた……その瞬間。

『あああ、はははあは、はあははは！』

「パアパア〜！」

「ツツツツツツツ？」

「に、逃げるよ皆！！？」

案の定『化物』が扉を開けて現れ逃げ道は寢室方面しか無くイーサンとマキは再びパニック状態と化しUターンを開始し始める。

葵も答えには行き着いても現状何も出来ない為同じくUターンしようとした：そんな中でイヴはそのまま前へと進み出し、『化物』に対してわざと捕まる様な行動を取る。そして案の定身体を掴まれその巨大な口に押し込まれ始めた。

『yummy』

『イ、イヴウウウ！！？』

「イヴ…！！？」

『化物』はイヴを美味しいと言いながら食べてしまい、そのまま丸呑みにされてイーサン達はイヴを目の前で食べられてしまった事に完全に冷静さを失い、葵はイヴが何か『賭け』に出たと思いつながら失敗した際のリスクに見合っていない行動に冷や汗を掻きながらその成り行きを見ていた。

「クソ、イヴが！！？」

「イーサンダメ、武器が無いからアレと戦えない!!?」

…くつ、イヴ…!!?」

イーサンはイヴを救おうと手を伸ばすが、マキがそれを止めて奥に逃げる様に押し止め、しかしイヴが『化物』に呑まれた事に涙を流して自身の無力さに絶望していた。

そして答えに行き着きかけてる葵もまた此れでイヴを失えば自身の力の無さに嘆き、一生の傷を負う覚悟を以てその行動を止めなかつた。

『ペアペア、あうあああ!』

ああう…ああぎや!』

「な、何だ!?」

『あ、あああああああ!!?』

『バシヤアツ!!?』

そんな中で突如『化物』は腕き苦しみ始め、イーサン達は何事かと思いながらそれを見てると『化物』はその場で破裂、その中から拳を突き上げたイヴが血塗れで現れ、イヴ自身はその感触を不快に感じながらも一溜め息を吐き上手く行つたと言う顔を見せていた。

「イ、イヴ!!?」

お前、大丈夫だったのか!?」

「…ピース。」

それとアオイ、答えは分かった？」

「…うん、今ので確実に。」

「だけど実感が無いと言うか、未だ掴め切れて無いと言うか何だけどね」

イーサン達はイヴに駆け寄り、安否確認をするが当本人はピースサインを出して余裕を見せていた。

しかし何か実感が掴み切れて無いと言い手を握っては離すを繰り返し違和感がある素振りを見せていた。

そして葵もイヴの行動で漸く一例の現象に答えを見出し、此方もイヴ同様違和感を感じて集中を途切れさせない様にしていた。

「答え…：つまり、この現象にアタリが付いたのか、2人共？」

「…うん、でもまさかE型被験体の私まで嵌るって思わなかった、ドナ・ベネヴィエントは私やエヴリンを上回る『幻覚使い』だよ」

「…幻覚！」

あ、そうか、だから初めからヒントはあるって言うし、イヴは答えに近かったのか…：でもそのイヴや葵まで嵌るって相当ヤバイ幻覚だよ、此れ？

如何やって抜け出すのよ？」

そしてイヴ、葵はイーサンとマキに種明かしをして此れが一例の現象全てが幻覚だと話し、マキやイーサンもハツとしてそうならば全てが納得行く現象や最初からヒントはあつたとイヴが言うのも領けた。

だがそのイヴや葵も嵌る幻覚にマキは相当強い幻覚使いだと認識し、逆に抜け出す方法が全く見当たらなかつた。

「…今のも幻覚と理解した上で体内の特異菌を操る感覚を最大限に研ぎ澄ませて、幻覚を一時的に掌握出来たからやれた事。

でも相手も馬鹿じゃない、同じ手は2度と通じない…後は如何するかがまた問題」

「そう都合良くは行かないって訳か…」

如何やらイヴがやった方法はE型特異菌を操り、相手の特異菌由来の幻覚に対して掌握を行えた事によりあの『化物』が爆散する様なビジョンになった様である。

しかし幻覚面では明らかにドナ・ベネヴィエントがイヴを上回る為もう脇を固められて同じ手は使えないだろうとイヴは考えていた。

イーサン達も同じ考えで、如何にか幻覚から抜け出さねばと考え始めていた。

「……………兎に角皆さん、先ずエレベーターに向かいましょう。

先ずは上に上がらないと話になりませんよ」

「そうだな……よし行こう……幻覚と分かってはまだ恐ろしいな……」

その状況下で葵が先ず地上に戻る様に促し、イーサンとマキも同意して歩き始める……が、幻覚と分かつともあの醜悪な『化物』やこの空間に慣れない為イーサンは珍しく意気消沈気味になり、マキも同様だった。

そして葵はイヴが体内の特異菌を操れたのなら自身の体内に間違い無く T—G e n e s i s はあると考え始め、次は自分が賭けに出る番だと思い始めていた。

「よしエレベーターに着いた、ヒューズを入れて……」

『ああああああ、パアパア……!』

「ぎやあ、また来た!!?」

「……もう同じ手は使えないし、幻覚に構ってられない、早く乗り込んで……」

そうしてイーサン達は漸くエレベーター前に辿り着き、ヒューズを入れた途端あの『化物』が再び現れ、マキはエレベーターのボタンを連打し早く開く様に慌てて操作していた。

イヴも同じ手は2度と使えない!!今度丸呑みにされたら助からないと圧縮言語で話し、エレベーターの扉が開いた瞬間4人は飛び乗り上に上がるボタンを押して扉が閉まる。

『ああああ、パアパア……、あああああああきや!!?』

でも早く私を見つけないと、お友達にブツ殺されちゃうからね!!？」

マキは現れた女性を改めてドナだと確認すると、例のビスクドールが動き出しアンジーと自己紹介をしつつ、周りの人形を操りその手や足に付いた刃物でイーサン達に襲い掛かり始め、4人はそれを振り払いアンジーを見据える。

「チクタク…命懸けで探しな」

「待てこの野郎！」

「アタシを見つけてごらん！」

アンジーはその後何処かに逃走して行き、イーサンは待てと言うがそれで待つ敵など居らず、そのまま飛び去ってしまう。

そして全員が『化物』との鬼ごっここの次はアンジーとの隠れんぼに付き合わされ、更に何処までが幻覚で何処までが実態か把握し切れない為イーサン、マキは特に苛立っていた。

「クソが!!？」

お遊びに付き合ってる暇はこっちは無いんだよ!!？」

「あのちよい高値で売れそうなビスクドール風情が、人間様に楯突くんじやないよ!!？」

「…ふう、ええ全くですよ。」

イーサン、マキさん、イヴ、2階に行きましょう」

イーサンやマキは人形風情が人間に楯突き命を狙う事やローズの為に時間を掛ける暇など無いと悪態を吐き、イヴはもう一度幻覚掌握が出来ないか試していたが矢張り脇を固められ無理であつた為珍しく舌打ちをしていた。

そんな中葵はすつと歩き始め、『ただ一点を見つめて』2階へと向かい始めた。

それに対してイーサン達は互いを見合い、葵の後ろを付いて行き始める。

「さあ着きましたよ。」

居るんでしよう、アンジー…B・O・W、ドナ・ベネヴィエント」

「きやははははは、すつこいねえ!!?」

いきなり私の隠れ場所を見つけるなんてねえ!!?

それにしても、ローズさえ産まれなきやこんな事にはならなかつたのにねえ!!

?

そうして2階の突き当たりの部屋にてアンジーを発見し、葵は腕を組みながらそれをアンジー、そしてドナ・ベネヴィエントと呼び冷淡な目で見つめていた。

するとアンジーは隠れんぼの1回目をいきなり見つけたイーサン達を褒めると同時にローズを貶し、その内にある本性を包み隠さずイーサン達に見せていた。

「黙れこのクソ人形が、俺の娘をとやかく言う筋合い何かお前にあるか!!?」

「それにあんなのを地下で見せて来たアンタは間違い無く人の心なんか理解しない
B・O・W・よ!!?」

そんな奴が偉そうに何か物を言えると思うなよ!!?」

「…ええ、全くです!!?」

イーサンはアンジーの言葉に激昂して鉄を見せて今にも飛び掛かりそうになり、マキもこのベネヴィエント邸に来てからの幻覚から来るフラストレーションに遂にガチギレを起こし、目の前のそれをB・O・W・だと吐き捨てて指を鳴らして本気のパンチでアンジーを破壊しようとしていた。

そんな中葵はそれ等に同意し、アンジーに向かって何かを掴む様に手を伸ばすと不意にアンジーが首を手で掻いていた。

「あ、が、ま、まさかアンタ、アタシの幻覚を…!!?」

「ううん全然、今も幻覚に掛かりばなし。」

だけど、この身体に持つて生まれた力は幻覚下でも失われない。

それをイヴが証明してくれたお陰で意識を限界まで集中して漸く捕まえたよ

…!!?」

如何やら葵はイーサン達が2階に上がる前に予想した通り、先程から透視とサイコキネシスが使える様になっていたらしく、流石のアンジーも躓き苦しみながら驚き幻覚を

破ったかと問いて来る。

が、葵は特異菌を操れない為幻覚掌握など不可能である…しかし、イヴが力は失われない事を証明した為集中を切らず力を引き出す感覚をずっと保った為、此処に来て漸く力を取り戻したらしかった。

「さあイーサン、マキさん、イヴ、後はアレを『撃つだけ』ですよ！

早く銃を構えて!!？」

「アオイ、まさか銃も最初から失われては…!!？」

だが、俺達は幻覚の中に居るから銃には触れないぞ!!？」

「そうだよ、残念だったねこの化物」

「黙れ」

そして葵はイーサン達に目の前の『敵』を撃つだけだと叫び、銃を構える様に命じた。

イーサン、マキは此処で漸く装備も幻覚で認識出来てなかった事を理解するが、葵達と違い只の人間の2人や幻覚下に置かれたイヴは銃に触れた感覚が全く無く構え様が無かった。

それをアンジーは嘲笑うが、それを葵がサイコキネシスを強めて黙らせる。

「大丈夫、人間の意志って強ければこんな幻覚如き普通に破れる物なの。」

私を信じて、イーサン、マキさん、イヴ!!?」

「…ああ、信じるぞアオイ!!?」

うおおおお!!?」

「この、生物兵器が!!?」

「…眠って!!?」

葵はイーサン達に人の意志の力を説き、それがこんな幻覚如きに敗れる事は無い、必ず幻覚側を破れると、自分を信じる様に叫ぶ。

それを聞いた3人は葵の前に出て腰に装備してる筈のデュランダルやサターン、マキ用カスタムガバメントを引き抜く動作を行いそれを撃つ仕草を強い意志を、鉛玉を叩き込むと言う絶対の意志を以て行う。

「ひっ、や、やめ、人形ちゃん達アタシを守って…ア、アアアア!!?」

するとアンジューの身体中から血が噴き出すと同時に視界がぼやける現象が発生するがイーサン達は構わずに銃を撃つと言う感覚を更に強めそれを行なっている仕草をする。

その中で周りの人形達がイーサン達の手や足等を刃物で刺して来て抵抗をし、全員に激痛が走るが構わずに銃を撃ち続ける仕草をする。

「や、止めて、助け…アアアアアアアアアア…!!?」

そしてアンジーが助けてと懇願をするが、それを無視してイーサン達は撃つ仕事を続けていると、やがてアンジーは顔から寄生体の触手が出て来てグロテスクな姿になりつつ断末魔の悲鳴を上げる。

そして視界が再びぼやけると、同じ部屋で壁にドナ・ベネヴィエントが全身に銃創を作りながら凭れ掛かり、そのまま結晶化して行つた。

「ハッ!?」

……俺達、銃を構えて、人形じゃなくて人形使いを……」

「恐らくこれが答え合わせ、この人形使いドナ・ベネヴィエントは私達の側にずっと居て、強い幻覚を見せ付けていたんでしよう。」

それに、私の透視には確かにアンジーは動いていましたが大元はドナの方が映ってましたよ……」

そしてイーサン達は銃を構えており、しかも撃っていたのは人形側では無く人形使いのドナだったと驚いていた。

その中で葵は推察や2階に居たのはアンジーのみならず大元のドナが見えていた事を明かし、3人はそれが答えなのだ、目の前で結晶化したドナを見ながら納得していた。

「さて、このビスクドールと鍵は貰って行きますよ……あ、イーサン。」

1階にフラスクがありますから取りましょう」

「あ、ああ………ん？」

内ポケットに……」

葵はその後、ドナの遺骸から容赦無くビスクドールのアンジーと鍵を回収し、鍵をその場で組み合わせて『四翼の胎児の鍵』にし、その部屋から去って行く。

イーサンもそれに続きハンドガンを仕舞い先に進もうとした所で内ポケットにポストに投函したはずの写真の存在に気付き、その裏面を見てダンマリとしていた。

「……ああ、私達の思い出の品も、投函したと思いつまされてた訳ですね」

「あ、ホントだドックタグが戻ってる」

「……髪留めも」

すると葵達はイーサンの方を振り向き、最初のポストに投函したと思われた思い出の品も戻って来ており、あの時点で幻覚に完全に嵌ったと全員が理解しながら1階に戻り両足が入ったフラスクを取り、イーサンに渡してベネヴィエント邸を後にしようとした。

が、イーサンは写真の裏面を見てそれから目を離さずにいた為葵達は不思議がりイーサンを見やる。

「イーサン？」

「あ、ああいや、何でもない。

さあ、次に行こう……」

マキがイーサンに話し掛け、何かあったかを聞くが本人は何でもないとして次に向かうと口にし、葵達に並走して走り始める。

その中でイーサンはジャケットの内ポケットに手を当て、その裏面に書かれた一文に想いを馳せながら前へ進み出した。

そしてその一文とは。

『ローズの事をずっと守ってあげてね、イーサン』

「ああ、勿論だミア。

そして、君の事も必ず助け出すからな……」

その一文とは、ミアからローズに込めた愛の言葉とイーサンへ宛てたメッセージであり、それを見たイーサンはより一層ローズやミアへの想いを強めて一歩踏み締めた。

この誓いだけは必ず貫く、ミアも助け出す、そう夫として、父としての当然に抱く感情を秘め、再びこの村を走り出すのであった…。

EP X I I I 『更なる化物と怪人モローと再会』

イーサン達はドナ撃破後、再び名が欠けた墓地の階段を通りエレベーターで元の場所に帰り始める。

その中で葵達は通信機がONのまま、幻覚の所為できりたんの通信が途切れた様に見えると思込まれたと気が付き通信を入れ始める。

「此方オメガ16、通信班此方は復帰しました、応答を」

『ああ良かった…今まで何も無いのに驚きっぱなしの皆さんを見て幻覚にやられてると思ひ流石に焦りましたよ』

「やっぱり幻覚だったのか…すまないなキリタン、だが幻覚の主は斃した。

フラスクも手に入れたし、もう大丈夫だ」

葵は帰りの道すがらに通信を入れてきりたんを安心させ、きりたんも幻覚に嵌った葵達を見て焦ってたらしく一呼吸入れて状況整理を聞き始めていた。

イーサンもフラスクを手にした上で幻覚の主ドナを斃した事を話し、取り敢えずは安心となった。

『そうですか…ならそのまま祭壇を通って湖に行くんですね？

四貴族のサルヴァトーレ・モローが如何なる力を持つているか分かりませんが
気を付けて下さい。

ドナでさえ皆さんを幻覚に嵌めたんです、何が遭つても可笑しく無いです』
「了解だキリタン。」

俺達も用心して湖に向かう事にする」

「じゃあ定時連絡は以上、行動に移るよ。」

さて……じゃあドミトレスク城から抜け出して来た幽鬼達を眠らせましょう」
きりたんと通信しながら湖に向かう事が確定し、そのままドナの一件もある為用心し
ながら挑む事にして葵は通信を一旦切る。

そしてその周りから地面から這い上がり始めたドミトレスク城の幽鬼達を見てイー
サン達は銃を構え鎮魂の意を込めて弾丸を放ち地に沈める。

「さて、じゃあ近場で金策出来る物とかを取り準備をしましょうか、金属球とか：
あ、イーサン。」

この小屋に今使ってるショットガンよりも威力強めなショットガンがありま
すよ。

使つて行つて下さい」

「本当か？」

……ああ、確かにコイツは村にあった奴より良い物だ。

次からはショットガンはコイツメインにするか」

葵は手を叩き、早速次のモローの戦いに備えて金策等の準備をする事になった。

マキは近場にあつた金属球を手にし、イーサンは葵の指示から村にあつた物より強力なショットガンを手にし、今の段階なら前のショットガンの弾を撃ち尽くしてから此方を使おうと決める。

そして葵の案内の下、金属球を使う模型がある家に入る。

「さて井戸からは……村にあつた人形の頭か、組み合わせたらはい、人形の完成。

葵、中は何かあつた？」

「……ドナの幻覚にやられた庭師のメモに、楽器職人の鍵……あの村では入れなかつたベネヴィエント家庭師が預かつてる鍵に、この日記読めばドナの本質が丸分かりだよマキさん」

マキは近場にあつた井戸から人形の頭を手にし、村にあつた人形の体と組み合わせる完成させて次に葵に中にあつた物を確認する。

そうして葵とマキはベネヴィエント家庭師の日記を読み、曰くドナが対人恐怖症でありミランダの養子になりアンジーも前より生き生きし、クラウディアの墓や庭園に黄色い花を植えてると死んだ家内が見え、それを聞きドナはもつと会わせるとした内容だつ

た。

「……ふうんクラウディアね、あの墓の主か。」

それより庭師は此れ、幻覚にやられてドナの家の中で同じ目に遭った感じだよ
ね葵？」

「だね、対人恐怖症でありながら他人への依存が強く加虐的……これがB・O・W・
ドナ・ベネヴィエントの本質の統括になるね。」

全く、悪戯に力を得ると醜い本質が表に出るって言うけど此れは典型例過ぎる
よ」

マキと葵は庭師の日記や自身達が遭った目を統括しドナの本質触れる事が出来、それ
を悪戯に力を得た分醜く本性が出たと纏めて葵達はドナはB・O・Wである事に
変わりないと結論付ける。

そして隣の模型攻略中のイヴやイーサンの下に来る。

「イーサン、イヴ、模型は如何なってます？」

「ああ、丁度終わって漆黒の結晶骨が手に入ったよ、後はもうデュークの所に戻るだけ
だ。」

それにしても、隣の会話が聞こえてたぞ？

あの人形使いみたいな奴はもう懲り懲りだ」

そのイーサン達に突如ライカンよりも巨体で更に狼に相応しき姿のB・O・W・が現れ、イーサンに狙いを定めた後足に噛み付き鋭い爪で身体を切り裂き、しかし何れも致命傷にならない程度の力加減で鬨る様にイーサンを傷付ける。

それを見た葵は即座にサイコキネシスを発動させ、新型B・O・W・を浮遊させ遠くに吹き飛ばした後近場の小屋に避難し、イーサンは回復薬を使い息を整えていた。

「はあ、はあ、はあ、何なんだ、あのライカンよりも狼らしい化物は…俺を鬨る様に傷付けてたぞ……！」

「分かりませんが、報告に無い新型の大型B・O・W・で間違い無いでしょう……ん？
この人……この書き置き……この人、まさかルイザさんの旦那さん!!?」

「何!!?」

イーサンと葵は大型B・O・W・に警戒しながら小屋内を見ると、其処に書き置きを遺した男性の遺体があり、そしてそれを讀んだ葵はその男性こそがルイザの旦那であり、助けを呼びに行つたがあの大形B・O・W・に鬨り殺されたを示していた。

そして水車小屋にあのB・O・W・を殺す武器がある事を読み取り、2人は無言で見合い、ルイザの旦那の仇を取る事を決意する。

「じゃあ葵、足止め頼む。」

俺は水車小屋に……」

「はい…1、2、3!!?」

そして123の合図で小屋から飛び出し、イーサンは水車小屋へと走り出し、葵は大型B・O・Wの足止めをする為サジタリウスを放ちつつ気を引き、近付くとサイコキネシスで吹き飛ばすを繰り返してイーサンが件の武器を取るのを待った。

「よし、葵取ったぞ!!?」

「食いやがれこの化物!!?」

「ナイスタイミングですよ!!?」

「それじゃあ殲滅開始です!!?」

するとイーサンが水車小屋からグレネードランチャーを持ち出しながら飛び出し、これが普通の銃弾が余り効かない大型B・O・Wの特攻武器だと知りつつイーサンは問答無用で放ち、葵もペンドラゴンを引き抜きその強力無比な威力の弾丸を3発浴びせる。

『G A A A A A A A A A A A ……!!?』

『パラパラパラパラ…』

「…大型B・O・W殲滅完了。」

サジタリウスの弾丸でも十分でしたが、殲滅重視の為ペンドラゴンを使用…」

「ルイザの旦那さん、仇は取ったぞ…」

そうしてB・O・Wの遺骸たる結晶を手に取り、イーサンはルイザの旦那に仇を取った事を小屋を見ながら伝える。

そして老婆が閉じた女神像に続く道を門の鍵を破壊して先に行くくと、共同墓地側からマキとイヴが走って葵達の下に来る。

「葵、イーサン今の爆音何があつたの!?」

「ああ、大型の、ライカンよりもデカイ化物狼が現れて水車小屋の中にあつたグレネードランチャーや葵のペンドラゴンで殺してたんだ。」

ただ、ルイザの旦那さんの遺体を見つけちゃったよ……」

「……そう、なんだ。」

ルイザ、ごめんなさい、貴女の旦那さん……救えなかった……」

イーサンが状況を簡潔に話し、新たに現れた大型B・O・Wを手にしたグレネードランチャーや葵のペンドラゴンで斃した事やルイザの旦那の遺体を発見した事を口にする。

するとイヴは口を噛み締めながら、振り絞る様な声で亡きルイザに謝罪していた。

そして冷静なマキは楽器職人の家で手にしたライフルのロングマガジンや、欠けた墓のプレートを見せる。

「私たちの収穫はこれと後熊のぬいぐるみ、それで何だけどここのプレート……あのベ

ネヴィエント邸に続く道にあつた意図的に削られた墓の奴だと思うけど、行つてみる？」

「…行つてみましょう。」

ただ、あんな大型B・O・Wが他にも居る可能性がありますのでもう分担保は止めてフォーマンセルで行動を徹底しましょう」

「そうだな、あんな化物をツーマンセルで対応とか愚策も良い所だからな…クリスみたいな規格外戦力は良いとしても、俺が足手纏いだからな、この中じゃ」

マキはベネヴィエント邸に続くエレベーター前の墓にこのプレートを填めに向かう事を提案し、葵もイーサンも賛同しつつツーマンセルは危険だとしてフォーマンセルを今後徹底すると話す。

更にクリスから戦闘訓練を受けてたイーサンは現状自身が足手纏いだと認識し、規格外戦力の3人に付いて行くのがやつとだと把握してる為それも理由に付け加えていた。

「自分の能力を過小評価も過大評価もせず、しっかりと認識してるならそれで一人前ですよイーサン。」

じゃあ行きましょう、あの墓前に」

「ああ…ありがとな、アオイ」

そして再びベネヴィエント邸前に向かい始める前に、葵は自身の能力を正確に把握し

てるイーサンをそれで一人前、クリスの訓練の成果が出てると遠回しに話しイーサンはそれを素直に受け取りつつ再びベネヴィエント邸前まで走り始めた。

そうして道中は何も無く嵐の前の静けさの様な不気味な雰囲気醸し出す霧の谷にやつて来たイーサン達はあの墓前に続く階段前にやつて来て周りを警戒し始めた。

流石にあの狼の様なB・O・W・みたいな二の轍を踏まない様にする為である。その心構えが効いたのか分からないが、墓前に辿り着くと唸り声が響く。

『ウガアアアアアアア!!?!』

「っ、村の初めに見た大型B・O・Wの亜種を確認!!?」

殲滅行動に入ります!!?」

「嫌な予感が当たったぞ畜生が!!?」

「…斃す!!?」

唸り声を上げ、葵達の下に降り立ったそれは巨大な戦斧を持った初めのライカン襲来時に見かけた大型B・O・Wに似ており、戦闘力もそれに準じているとイーサン達は思いながら展開して一纏めに戦斧で切られない様にする。

そうしてドラグーンやサジタリウス、イーサンとイヴのグレネードランチャーをそれ

ぞれ叩き込むが、怯みはすれど弱る素振りを見せなかった。

『グオオオオオオオオオオオ!!?』

「うお危ない!!?」

クソ、この化物め!!?

危うく3枚下ろしになる所だったぞ!!?」

「…つ、幽鬼が出現!!?」

皆気を付けて!!?」

戦斧の巨人はイーサンを叩き斬ろうとジャンプしながら得物を振り下ろすが、イーサンはそれを避けながらイヴと共にグレネードランチャーを叩き込むが、効いているのか怪しくなる様な耐久力を見せる。

すると周りから幽鬼が出現し、マキが幽鬼殲滅に、葵がペンドラゴンを引き抜きつつ幽鬼を踏み台にし巨人の肩に乗り、頭に弾丸を浴びせる。

『ウガアアアアアア!!?』

「きやつ、こいつペンドラゴンにも耐えてる…!!?」

皆気を付けて!!?」

「クソが、さっさとぶつ倒れやがれ!!?」

『ウガアアアアア!!?』

しかし葵のペンドラゴンすら耐えた巨人は今度は葵に戦斧を振るい攻撃してくるが葵はそれを避け、このB・O・Wは強いと判断して全員に気を付ける様に促した。

そうしてイーサンが悪態を吐き、マキが幽鬼を殲滅した後再び戦列に加わり銃撃や爆撃、カビ剣の斬撃を加えて行く。

それを続けて約10分後…。

『ガアアアアア…』

「はあ、はあ、敵性B・O・W 排除完了。」

以降同種と遭遇時はサイコキネシスによる殲滅推奨とします…。」

「たく、ただプレートを填めに来てこの弾薬の消費量、割りに合わないぞ…。」

漸く巨人を倒したイーサン達は息を切らしながら弾薬の消費量を見てあの狼型B・

O・W 以上に割に合わないとし、葵がサイコキネシスでの撃破を告げると全員賛同しつつプレートを填める。

すると墓に刻まれた名は『クラウディア・ベネヴィエント』になり、中には遺骸と金杯が入っており、それに加えて巨人の結晶も回収する。

「クラウディア、あの人形使いの姉妹か何かだろうな。」

…そう言えば今の巨人、この墓を守る様に戦ってたな。

まさかドナの家に招かれた庭師の末路か？」

「真相は闇の中、既に調べ上げる手段は無いです。

イヴが特異菌ネットワークに繋がれば分かるかもしれませんが、その前にイヴの脳が焼き切れるから反対です。

イヴ、やつちや駄目だよ？」

「…分かつてる、戦力を此処で減らす訳には行かないから」

イーサンはその中で庭師の日記にあつたクラウディアの名を思い出し、此れがドナの姉妹か何かだと予想し、更に巨人の戦い方や日記を統合して先の巨人は庭師がそうなた姿なのかと思い始める。

しかし葵は真相は闇の中とバツサリ切り、イヴに真相を確かめさせようともさせずデュークの下へと向かい始める。

イヴも流石に戦力を減らすのは愚策と理解してる為後に続き、マキがカスタムシヨットガンを構えながら殿を務め走り出した。

「ああアンジー嬢、なんとも可愛らしい。

ビスクドールは大変人気があるのです」

「まあビスクドールが人気なのは認めるから、弾薬等を買わせて」

「ああそうでした、では、商品は此方になります！」

イーサンと葵達は疲れ切ってデュークの下へと戻り結晶やアンジー、組み合わせで完成した人形、新しい物が手に入った為イーサンの前のショットガン等売り捌き割に合わない巨人との戦いで消費した弾薬やグレネードランチャーの炸裂弾、閃光弾のレシピ等を買ひ漁り、新たなショットガンをカスタマイズすると、息を整えて全員で湖方面を見やる。

「ふう…さて、そろそろ湖まで行くぞ。」

皆、準備は良いか？」

「息も整いましたので大丈夫ですよ」

「んじや行きますか」

「…サルヴァトーレ・モローの撃滅、及びローズのフラスク奪還作戦開始」

そうして改めて門を開き、モローの撃滅とローズのフラスク奪還を開始して走り始める。

門を開け、水車小屋まで走ると葵達の通信機が鳴り、葵が代表して通信に出る。

「此方オメガ16、何かありましたか？」

『はい、湖…と言うかこれ人工湖ですね。』

其処に行くなら耳寄りな情報が、人工湖にはH W 2名、そしてR隊長にデルタ1が訪れてます。

其処で一旦合流して情報整理をしてみてください」

きりたんの通信からH W：ハウンドウルフ隊の2人、更にクリスにB・Y・が人工湖に訪れたいる事を告げられ、葵はそれらを頭の中で整理し第1目的はフラスク奪還のまま、第2目的をクリス達との合流に変更しモローは第3目的に格下げして口を開く。

「了解、通信終了します。

イーサン、皆、湖にクリスさんとその部隊2名にB・Y・さんが居るみたいで
す。

補給と通信を兼ねて急いで行きましょう」

「何、クリスが？」

…分かった、あの野郎に一言二言言いたい事が山程あるから願ったり叶ったり
だ。

それじゃあ行くぞ」

「はいよ。

ふう、変に拗れなきや良いけど…」

葵は早速イーサン達に湖にはモローのみならずクリス達も居る事を伝える。

イーサンは拳を鳴らしながら我先にと率先して向かい、マキは話が拗れないか心配するが、イヴは絶対拗れて口喧嘩になると思いつつ口にしなかった。

「さてこの先が進めますが…うえ、何これ」

「粘液の塊…か？」

何にせよ触りたくも無い位気持ち悪いな。

だからこそ」

『ズドンッ、ブシユウ』

「この手に限るな」

葵は早速村に来た際は進めなかった道を進むと、湖方面の道に謎の粘液の塊があり女性2名、女子1名、男性1名それぞれ気色悪いと反応を示すと、イーサンがショットガンで粘液の塊を撃ち破壊。

したり顔でそのまま先に進み葵達も同じ物があればイーサンの様にしようと決めた。

そして風車に続く門は閉じ、横の片道梯子が粘液の塊で封鎖されてる為今度はマキがショットガンを撃ち破壊する。

「よいしょつと、風車まで来たね葵、イヴ、イーサン」

「ああ…約1名身体能力で粘液の塊じゃなく門を飛び越えてアレに拒絶反応を示してたがな」

「だって気持ち悪いんですから。」

あ、それと風車小屋の横にあの模型遊具がありますからフラスクを取り戻したりを終えたら金属球を探しましょう」

イーサン、マキ、イヴが片道梯子を登り風車側に来ると葵は持ち前の身体能力で門を飛び越えて侵入し、明らかに粘液の塊に拒否反応を示していた。

その代わり金属球を使う模型遊具が透視で風車小屋の側に見えた為それを教えてから風車小屋内に入り地下に行く道を進み、昇降機があった為4人はそれを使い更に地下に降りた。

「さて、進める道は1箇所、他は門で封鎖中だったり段差な上に木の足場だから壊れるからそつちに進むしか無し。」

…あの粘液が続いているが如何する？」

「なら今度は私が行こうじゃないのさ。」

粘液の塊なら私のショットガンが喰るわ。

てな訳で葵とイヴは待機で」

「了解しました、2人共気を付けて」

その先は門が施錠されたり等で1箇所しか先に進めない為イーサン、マキが先に行き何があるかを調べ、オメガ小隊の2人組がその場に残り2人が帰って来るのを待って

た。

そして坑道を進み、横道を抜けると階段があり生活スペースが存在し、更にテレビの音も聞こえた為2人は息を潜め、狭い隙間を進む。

すると窓の先にはモロー、さらに目の前にはフラスクがありイーサンは有無を言わず手に取る。

「うおおええ…」

『ビタビタ!!?』

『(げっ、何も無いのに吐いた、汚い奴!』

「ああ、お母様!」

貴女の為に、俺は何でも…うううう…はあ、はあ…ッ!」

するとモローがいきなり吐きイーサン、マキは思考が一致しモローは汚らしい奴と認定され不快な目で見ていた。

するとモローはミランダへの忠誠心の独り言を話し、不意に此方を向くと2人と目が合い、イーサンはローズの両腕が入ったフラスクを見せびらかして挑発を始める。

「此れは貰って行く」

「Good bye、汚らしい怪人モローさん?」

「ま、待ってくれ!

それはお母様の大事な子なんだ……！」

「巫山戯るな、アイツの物じゃ無い！」

2人はモローに一言挑発を入れてその場を去ろうとすると、モローはローズのフラスクをミランダの『大事な子』だと主張し、それがイーサンの神経に触ったのか彼はモローに対してミランダの物では無いと叫びその場を去ろうとし、マキが先にその場を抜ける。

「お、お前、聞きたい事あるだろう？」

「悪いな、こっちは優秀な仲間が居るんだ。」

調べ物なら彼女達の仲間がやってくれるさ。

俺達はローズのフラスクを奪い返すだけだ！」

「ま、待ってくれ!!？」

『儀式』の事を話すから少しだけ待ってくれ!!？」

モローはイーサンに何も知らない為聞きたい事があるのだろうかと言いつつ、イーサンは此処までにミランダの目的がローズの『力』であり、何らかの事にそれを使うと知ってる為後はB・Y・達、イータ小隊、クリス達辺りが調べ尽くす為聞く必要が無いとして去ろうとした瞬間、モローは一番大事な情報たる『儀式』の話をすると言い出し、イーサンはマキを見ると聞き出せるなら儲け物と表情で言われ、聞き始めた。

モローはフラスクが無ければ他の貴族達に馬鹿にされると話し、同情を誘おうとしたがイーサン達は既にドミトレスクにドナと2人を斃した為残るはこの当人とハイゼンベルク位しか居ない為知った事じゃ無いとして去ろうとした。

するとモローは悪足掻きにもう少しと明らかな時間稼ぎをしようとしてると感じイーサンは見向きもせず去ろうとしたが、突如モローが笑い始めイーサンは気を取られてしまう。

「お前、何が可笑しい?」

「馬鹿だなお前等、話し過ぎだ。」

終わりだぞ、入口を塞いでやった!」

『イーサン、デルタ2、粘液の塊が入口を塞ぎました、何かあつたんですか!??』
「…やってくれたわね三下!」

如何やらモローの時間稼ぎは十分終えたらしく、通信機から葵が出口が例の粘液の塊で塞がった事を緊急事態として伝えて来ており、マキはモローを三下と叫び、イーサンは舌打ちをしながらその場を急いで去り始める。

「此処は…俺様の…テリトリーだ。」

お前達は…何処にも…逃げられない!」

「クソ、化物が!」

『卑怯なコソドロ共めがあああ！』

俺のは、逃がさないからなあ！

待て、逃すもんかあああ！

謝つても、もう遅いぞお！』

「ああもう汚らしい粘液と化物だよ!!?」

モローは粘液の塊を操り、イーサン達を逃がさない様に道を塞ぎ始めるが、塞ぎ切る前にイーサン達は抜けて行きモローがそれを怒っていたがイーサンやマキは寧ろこの汚らしい粘液の塊とモローを毛嫌い走るのを止めなかった。

そして坑道から抜けて葵達と合流する。

「イーサン、マキさん、此れは一体!」

「サルヴァトーレ・モローの仕業だよ!!?」

あの化物がこの粘液の塊を操ってたし、何も無い所でゲロを吐いたりで汚らしいつたらありやしないよ!!?」

「…女の敵。

取り敢えずフラスクは手に入ったみたいだから残りの目標…HW達と合流、次いでにモローを撃破しよう」

葵、イヴは何があつたのかを聞くとモローの仕業だと話し、本当に汚らしい奴である

とマキは叫びイーサンも粘液の塊を見ながら舌打ちをしていた為、ただけ汚らしいかを待機してた2人は理解し、イヴがはつきりと女の敵と宣告した後、クリス達との合流と次いでモロー撃破をやる事にして、取り敢えず粘膜の塊が出た関係で壊れた門を進み外に出る。

「取り敢えず外に出たが、後は如何する？」

如何やって湖を渡る？」

「デューク曰く怪物が居るから泳ぐのは却下、ボートで先に向かきましょう」

4人は周りを見て先にイーサンが如何進むかを口にする、葵がボート…但し2人までが限界、で進む事を提案し、イーサンも詰めたりバランスを取れば大丈夫だと思いつながら小屋を見るとメモ書きが置いてあった。

其処には坑道の奥の小屋にボートの鍵を預けた事や親方が怪物に喰われた事が書かれており、矢張り泳いで渡るのは危険だと判断する。

「じゃあ坑道の奥へ急いで向かいますようか」

そして葵の一言で坑道に戻り、未だ通つてなかつた場所を通り奥の小屋まで辿り着き其処でボートの鍵を入手する。

だが、其処で大型を含むライカンの群れに遭遇して臨戦態勢に入る。

「邪魔すんなこの野郎!!？」

イーサンは2丁拳銃、マキはカスタムショットガン、葵とイヴはサジタリウスでライカンの群れを突破し先程のボート前の小屋に戻ると、其処にもライカンが居た為葵がサイコキネシスで手早く始末し先ずはマキとイヴでボートに乗り込む。

そして先に進みマキを下ろすと次にイヴがイーサンと葵を乗せてゆつくり進み出す。

この時葵は自身やイヴが小柄な体型で助かったと思いつつマキの時よりもゆつくりと進む…そんな時。

『ザハアアツ!!?!』

「なっ、今のは?!?!」

「巨大な…魚?」

アレが湖の怪物…急いで洞窟に入りましょう、あのサイズなら目の前の洞窟には入れない筈」

イーサン達の目の前を巨大な怪魚…恐らくデュークの言っていた湖の怪物だと思い、葵が指示を出してイヴが目の前の洞窟に入り中の栈橋前で止まり全員降り始める。

『あ、葵さん。』

その洞窟内が合流ポイントです、互いに情報共有したり、イーサンの蟠りを解消してやって下さい。

先方にはそろそろ来ると伝えてあります』

「了解きりたん、通信終了。」

…イーサン、奥の小屋へ」

「いよいよクリスの奴と会えるって訳か…」

するときりたんから連絡が来てこの先の小屋が合流ポイントだと伝えられ、更にHW側にも伝えてあると至れり尽くせりだと思いきりたんに内心礼を贈りつつ通信を終える。

それ等を聞いてたイーサンはいよいよあの夜に何も伝えなかつた薄情者に会えるとなり拳を鳴らし右ホルダーにあるサターンに手を添えつつ進み始める。

それを見てた3人は溜め息を吐きながら並走して小屋へと入る。

「…此れは特異菌の菌糸…いや、『菌根』のサンプルね。」

HWは分析、諜報任務をしつかり進めてるみたい」

「そうか…：…だつたら俺にも説明を入れろよなクリス!!?」

『ガチャツ!!?x2』

イヴは小屋の中で特異菌のサンプル分析しているとノートPCとウネウネと動く根の様な物…『菌根』の一部を見て判別し任務は着々と進んでると口にした。

そしてイーサンは人の気配を察知しクリスの名を叫びながらサターンを引き抜き、そして向こう側に居たクリスもハンドガンを構え、互いに眉間に銃口を突き付け一触即発

の事態になった。

「隊長!!？」

「イーサン!!？」

H W、ハウンドウルフ隊の1人と葵が両者の一触即発な事態に声を荒らげ、対するクリスとイーサンは互いに銃を突き付けながら……何方からとも無く銃を下ろし、ホルダーにしまい睨み合いになった。

それをB・Y・が事の顛末を見ており、やれやれと口にしながらB・Y・からイーサンに話を掛け始める。

「無事な様だなイーサン、葵、マキ、イヴ。」

んじや予定通り互いに情報交換し合うぞ……良いなクリス？」

「……ああ」

「……取り敢えず開口1番に下手な謝罪の言葉を出さなかった事だけは褒めてやるよ、クリス……！」

そうしてB・Y・の誘導の下でデルタチームとイータ小队、ハウンドウルフ隊、イーサンと葵達の情報交換が始まり、クリスの開口1番はそれに対するYESであり、イーサンに下手な謝罪をすればそれこそ火種にしかならない為その言葉は胸に仕舞う。

対するイーサンも下手な謝罪が出なかったただけはマシだとしてクリスに対する塩対

応は変わらないながらも話す気になり取り敢えずは情報交換の場が整う。

「…隊長、ナイスアシスト」

「心臓に悪いですよ、イーサン、クリスさん…」

それ等を見てたマキはB・Y・のアシストに親指を立て、葵は心臓に悪いと言ってクリスとイーサンの間に入る様に立ち位置を変えて先程の様な事が起きない様にした。

そしてイヴはサンプルをずっと眺め、自身のE型特異菌と内心比べ始めて大体は一緒だが少し違うと感じ取り、この話で何が飛び出すのかを冷静に聞こうとしつつ、葵と共に間に入るのであった。

E P X I V 『情報交換と襲撃のモロー』

イーサンとクリス達は合流後、イータ小队越しの弾薬補給を済ませた後B・Yの差し入れのピッツアを食べながら立ち話し合いの場を設け、イーサンとクリスの間の空気が悪い為先ずはB・Yから口を開き始める。

「先ずイータ小队と合同の陽動作戦、及び依頼されたミア・ウィンターズ搜索だが陽動の方はB・O・Wが釣れるわ釣れるわで重畳。

H Wとイーサン達が動き易くなってる…が完全じゃ無い。

矢張り俺達だけでB・O・W全ての気を引くのは無理だし、葵達が遭遇した狼型の大型B・O・Wが厄介だ、イータも手こずってる。

そしてミアの方は村を風潰しに探したが全然見つからん、すまないイーサン」

先ずイーサンとクリス達はB・Yの報告から陽動は大体上手く行ってるが、イーサンと葵が遭遇した狼型B・O・Wに手こずっているらしく完璧では無いと言いつけられる。

更にミアは村中を探し回って居ないと話しイーサンに頭を下げていた。

クリスもミア生存は絶望視している為矢張りかと言った様子を見せていた。

「いや、探し回ってくれただけでも有り難い。」

それに村中を探して居ないなら、やっぱり村以外の場所に居るんじゃないのか？」

「俺達もその線と考えてる。」

「この湖に居なきやもう地下の何処かに居るしか無いってな」

イーサンはB・Y・に有り難いと話し、更に村中を探して居ないなら別の場所にと言
うとB・Y・も同じ事を考えいたらしく地図を広げ村に大きな??印を付け、其処に矢印
で『地下?』と書き添えてもう地下の何処かに居るしかないと互いに認識し合っていた。

「じゃあ次にクリス、イヴのE型菌とあのサンプルの分析による差異の結果は如何
だった?」

「部下達の分析の結果だが、99.95%ベイカー邸のサンプルやイヴの特異菌と一
致し、差分はE型の人為的加工部分のみと思われる。」

つまりこつちが原種だと俺達は見解を示し合った。

そして村に点在したミランダの研究室や実験室を探索した結果、矢張り村の外
から誘拐等をされた者も存在し、代表例がドミトレスクだ」

次にクリスからイーサンや葵、B・Y・達に共有情報としてイヴやベイカー邸のE型

菌サンプルと此方のサンプルの差異の結果を調べ上げたり、研究室等から村の外から誘拐されて来た者が居り、その代表例があのだミトレスクだと話し、城で見たワイン加工の歴史から照らし合わせてイーサンと葵達も間違い無いと思っていた。

「そして…『組織』との繋がりを示す証拠はまだ見つからず難航中だ

。引き続きハイゼンベルクの工場を搜索して手掛かりを見つけ出す」

「そっか、そっちは難航中ね。」

了解、なら俺達は俺達のやる事をするわ。

んじゃ次にイーサン、葵の報告を」

するとクリスは濁す様に『組織』と言う言葉を使い、此れらはB・Y・達も想定していた為か次の話題であるイーサン達の方に話を振り始める。

対するイーサンは此れは一般人の自分が関わってはならない領域なのかと判断して何も言わずに現状報告を始める。

「ああ…先ず四貴族だが、ドミトレスクと人形使いのドナは斃した。

フラスクもゲロ吐きモローの奴から奪い取ってやった。

こっちは順調って感じだ」

「更にモローの口から『儀式』の事を聞いたのは収穫でした。

恐らく足止めをする為に話さざるを得なかったのですが、ミランダの目的が此れで判明しました。

ミランダはローズちゃんの利用して自分の子供の蘇生を図ってるみたいですよ」

イーサンは順調に物事が運んでいると話し、更に葵もミランダの目的が知れたことは収穫だとし、クリス達も領きミランダが何故ローズを狙ったのか理由を知れて後は如何やってローズの力や存在を知ったのかを調べるだけとなった。

「それにしても死者の蘇生とか、そんな事出来るのか？」

「…特異菌の意識ネットワークにその人の意識があつて、何らかの…ミランダの言う『儀式』をすればデータを引き抜く様にローズにその意識を移す事が可能なんだと思う。

此れはE型被験体の私にも出来ない事…ミランダ独自の力だと思う。

其処にローズの力を媒介にする感じだと…」

イーサンは素朴な疑問に既に死した人間の蘇生が可能なのか聞くと、イヴがローズに意識ネットワークに残留する意識をデータダウンロードの様にする事で可能性はあると話す。

しかし結局ローズが犠牲になるしか無く、更にこのフラスクにバラバラで入れられた状態の為憤りしか無かった。

「…巫山戯るなよ、結局の所ローズを犠牲にするって事だろ!!？」

そんな事認められる訳ないだろ!!？」

「ああ、だからミランダは狂ってる。」

この村全体が、四貴族すらもサルヴァトーレ・モローが洩らした我が子の蘇生の実験台なら尚更だ…」

「…暴走した母親の歪んだ愛情。」

でもそれは、真に愛とは呼べない。

私はアオイやお母さん達からそう教わった。

だから、ミランダは絶対止めないとならない」

そのイーサンの言葉にB・Y、イヴがそれぞれ反応して何れもミランダと言う女が如何に狂っている事を示す別々の視点からの物であり、最早人間としても母親としても歪み切った存在だと結論付けられた。

「…結論は固まった様だな。」

このまま作戦は続行し、ミランダを殺しローズを取り戻す。

デルター1はオメガ16達のオーダーであるミア搜索を続行しつつ、敵性B・

O・W・の目を引き付けろ。

俺は再び単独で工場に赴き捜査を続け、俺の部下達にはミランダの目的が明らか

かになった今俺と別口で捜査、更にデルタチーム達と合流、攪乱を半数に分け参加させる」

そして最後にクリスが思い口を開き作戦変更は無し、ミランダ殺害とローズ奪還を続行する事になった。

更にB・Y・デルター1に葵：オメガ16達のオーダーを続行しつつB・O・W。を惹きつける様に命じた。

更にクリスは再び単身ハイゼンベルクの工場へ行き、イーサンは知らないがこの場の全員が求める『証拠』を見つけようとし、他の部下は別口で同じ捜索、更にB・Y。達に合流して攪乱を半数に分け行おうと話した。

「そして…イーサン、デルタ2、オメガ16、オメガ18、お前達はローズの奪還を最優先に行動してくれ。

他でも無いローズの為に。

その為なら俺は…：俺達全員が協力を惜しまない」

「…言えたじゃないかクリス。

ああ当たり前だ、このままローズは俺達4人で取り返してやる！

そして最後にミランダの奴を斃してやる!!？」

最後にクリスはイーサンと葵達にローズ奪還を最優先に行動する様に言い、且つその

為なら協力を惜しまないと口にする。

イーサンはクリスから聞きたかつた言葉の1つが漸く出た事にしたり顔になり、当然の様にローズ奪還に意欲を示して最後にミランダを斃すと告げると、クリスも領き返し2人の関係がある程度の改善が今此処に為された。

「…後、B. Y. に散々言つたがこの件が終わつたら言いたい事が山程あるんだ。

覚悟しとけよクリス」

「ああ、勿論だイーサン」

「…ふう、一時は如何なる事やらと思つたけど、何とかなつて良かったわ」

更にこの件が終わつたらB. Y. に言つた物を口酸つぱく言う事もイーサンは告げ、クリスはそれを受けて勿論と言ひ何か言われる事を覚悟している目をしていた。

そうしてマキが溜め息を吐きながら如何にかなつて良かったと呟いた。

その時ハウンドウルフの1人がクリスとB. Y. にやや慌ただしく近付いて来る。

「隊長、デルター、外で異常な揺れを観測した。

直ぐに移動しよう！」

「揺れだと？」

「震源は？」

「不明だが、このまま此処に居ればミランダに知られる」

如何やらもう此処に留まればミランダに居場所がバレてしまうと告げており、全員早急に移動しなければならぬと息を呑み、近場に置いていた自身の武器を装備して小屋から出ようとした……その時、湖からイーサン達が目撃した怪魚が迫り小屋に突撃を仕掛けかかっていた。

「な、あの怪魚はさっきの」

「イーサン、アオイ危ない!!?」

「マキ、イヴ!!?」

それを見たクリスはイーサンと葵、B・Y・はマキとイヴを咄嗟に押して怪魚の突撃から避けさせるが、その突撃により小屋は倒壊、イーサン達4人は近場の木の足場に急いで泳ぎ這い上がる。

「ゴホッ、ゴホッ、皆無事か……!!?」

「ゲホッ、ゲホッ、平気……つ、サルヴァアトール・モロー!!?」

「……!!?」

4人は互いの無事を確認し合い、その後クリス達の安否確認をしようとした瞬間湖からモローが近場に這い上がり、全員その布から隠されていた醜い膿の様な背中を持つ姿に嫌悪感を示しながら戦闘態勢に入っていた。

「お前等……出口は水中だ、逃げられない……!」

「だったらアンタを斃してゆっくり脱出してやる…!!?」
「…うう、ダメだ、もう遅い…。」

ミランダ様は…既に儀式の…準備を進めてる…!」

モローは出口は水中で逃げられないと告げるとマキがカスタムショットガンを構えて処断してから脱出をする事を宣言する。

するとモローはミランダが『儀式』の準備を進めている事を告げイーサンや葵達は如何やら時間が残り少なくなつて来ていると理解し、同時にモローが時間稼ぎ要員と理解する。

「お前はその時間稼ぎか、哀れだな!」

「なんて事を…ミランダ様と一緒にするのは…このオレなんだ!」

お前じゃない!」

「何を言つてるのかサツパリね、サルヴァトーレ・モロー!!?」

それにさつきから背中 of 膿の間から触手が出たりゲロを吐き掛けたりしてて今までのB・O・W・以上に気色悪いよ!!?」

更にモローはイーサンに向かってミランダと共にするのは自分と意味不明な言葉を告げる。

此れに対して葵が気色悪いと吐き捨てながら何を言っているのか意味不明だと会話を

を切り、サジタリウスを構えて引き鉄を引こうとしていた。

その瞬間モローは激しく嘔吐し、木の足場が緑色の吐瀉物塗れになる。

「お前何か変だぞ！」

「もうダメ…ガマン出来ない…助けて…！」

うう…どうして…ああママ…どうして…！」

どうしてえ…！」

『ザバアン！』

『グウブルウウオオオオオオ！！？』

イーサンがモローに変だと言うがその本人は何かミランダに何故と叫び嘔吐しながら湖へ落ち、その瞬間葵の透視にモローがああ怪魚に変異する瞬間を目撃する。

「あの怪魚、モローが変異した姿みたいですよ！！？」

それと此処じゃ戦えません、一旦引きましよう！！？」

「ああその様だクソ、足場が壊される！！？」

皆走れ！！？」

「…汚らしいB・O・W！！？」

「うおお、間に合ええ！！？」

更に変異モローは足場に突撃し、先程の小屋の様に崩そうとして来た為、葵が一旦引

く事を提案して全員それぞれの反応を示して階段を登り橋を走り抜け最後に全員で橋の向こうの岩場に飛び移り事無きを得た。

そうして全員で一息を吐き、その場から離れ始める。

「あんなの如何すれば……」

「サイコキネシスで潰せば一発なんです、アイツ私の能力を警戒してか最大威力の集中をして掛ける前に水中の障害物や深く潜ったりしてこつちの範囲に入ろうとしないんですよね。」

サイコキネシスの最高威力は射程が通常の吹き飛ばしとかよりも短めなのが難点ですよ」

イーサンは水中の変異モローを如何倒せば良いか呟くと葵が最大威力のサイコキネシスなら一撃だが、射程難と水中不覚に逃げたり透視で見える障害物で間を幾つも隔ていたり、明らかに葵のサイコキネシス対策の動きをしており此れもミランダの入れ知恵だと全員悟る。

そうして足場から降りると『モロー診療所』と書かれた看板があった。

「アイツ、村の主治医かその家系だったのか」

「ならミランダの人体実験に何度も参加してる筈。」

そんな良心の欠片も無いB・O・Wは処断に限りますよ」

『もしもし此方きりたん。』

映像からモローを斃す事が確定したのがわかりましたので先ずその近くの水門を如何にかして下さい。

「そうすれば有利に戦えます」

イーサン達はモローが村の診療医、又はその家系だったと知り、更に葵はモローが医師ならミランダの人体実験に付き合つたと推察し、温情無しで処断すると口にする。すると通信機からきりたんの水門を操作して水を抜く様に指示を出され、確かにそうすれば有利に戦えると判断し、水門操作場内に入る。

「あらま、電源が落ちてる。」

そして相変わらず居るデューク」

「おほほほほ、水門を操作したいのでしよう？」

それならば先ず電力の風車の復旧をしなければなりませんぞ」

「…サンキューデューク。」

えーと…水門の操作手順はクランクで風車を回してからレバーを操作、か。

先ずは風車を動かそう」

マキはレバーを上げるが電源が落ちてる事とまた何故か先回りしているデュークを見つめる。

そのデュークは水門操作の為には電力となる風車の復旧を伝えて来る。

イーサンはそれにサンキューと返し、水門操作手順を見た後外に4人で出て風車に向かう。途中の車でメモ書きを見つける。

「なになに、クランクにガタが来てるから壊れたら反対側の2号機から替えを取りに……まさか、この風車のクランクはもう使えないのか!?？」

「……ちよつと急いで見ましよう」

イーサン達はクランクにガタが来たと言うメモ書きからもうこの風車の物は使えず、反対側〓湖の向こう側の風車のクランクを取らなければならないと思ひ、葵が急いで見に行く事を促す。

そして風車のクランクが付いた滑車に葵がツツツと触り、普通の力で回してみるとクランクが壊れてしまう。

「……私の所為じゃ無いですよ?？」

「ああ分かつてる。」

だが、となるとモローを躲しながらあつちの風車まで行かなきゃならないのか

……

「ちよつとキツイけど行くしか無いね」

そうして目標を予備クランク確保に変更して風車を降り、水没した家の屋根の上に乗

り周りを見渡す。

すると途中で道が途切れてはいたが、崩せそうな建物を見つけると葵がサイコキネシスで崩し完全な足場に変換する。

「よし、後は渡るだけだが……」

『グウオオオウウウ!!?』

「……そう簡単には行かないか、サルヴァトーレ・モロー!!?」

そうして湖の足場を渡る途中で変異モローが一行に襲い掛かり食らい付こうとするが、全員で走り怪魚の餌になるのを避けつつ次の建物に着き荷車を水に落とし足場にして良いとしたが、明らかにイーサンが飛び移る距離が足らずもう一個落とさねばならなかった。

「畜生、ならあのレバーを動かして足場を……うえ、臭うな……!!?」

「それに蛆虫ウジャウジャ、気色悪い」

そしてイーサンが建物横のレバーの操作盤を開けると、蛆虫が湧き臭いも最悪な状態のレバーが現れ、イーサンは意を決してこのレバーを引き、前方には先程と同じ荷車の上に乘った足場が、更に後方には上に戻る為の回り道の為の足場が出来上がる。

「如何する、誰か支えにして上に戻って全員を上げて即座に滑車を降ろして足場を作って向こうの建物に行くか、回り道して行くか?」

「……この建物、私達の体重でも飛び移るだけで足場が崩れそうな位脆くなっています。これはマキさんが上に登ってイヴを上へ上げて待機、私とイーサンで回り道をするのが良いかも。」

後方の足場は2人までしか並走出来ませんし」

「…仕方無いその案で行くよ。」

葵、イーサン、喰われないですよ！」

そうしてマキが上に戻りイヴを引き上げて待機、イーサンと葵が並走して回り道をする事になり良く足場を観察する。

すると途中に色付きレバーがあり、葵は透視で対応した色付き足場がある事を確認してルートを把握、イーサンにそれを伝え始める。

「イーサン、彼処に青いレバーがありますよね？」

アレを上げたら青い足場が出て次にその足場の先にオレンジのレバーがあり同じく上げて一旦向こう側へ行く道を開通させます！」

そして白いレバーを上げて、オレンジと青のレバーを再び上げて此処から見て左手の道を開通させます！」

「ああ分かった！」

イーサンに道作りの手順を伝え切ると、2人は走り出し青いレバーを上げて足場を出

させる。

が、それはグラグラとしており今にもまた水中に落ちそうな不安定な物であり、葵は此処でレバーが複数ある理由を理解する。

電力が純粋に足りて無いのだと。

「クソ、あんまりグラつくから落ちないかヒヤツとしたぞ！」

で、白いレバーを上げたらまた同じレバーを上げて行けば良いんだな!!?」

「はい、そしたら全速力で走って下さい!!?」

イーサンはこの足場に悪態を吐きながら再び手順確認し、白いレバーを上げた所で2人はその場にある青、オレンジのレバーを上げて足場を出させ、途中のレバーも葵のサイコキネシスで上げて足場の浮上時間を延長して回り道側に漸く辿り着き先を進み始める。

『俺が1番だあ!』

「五月蠅いですよ、いい加減親離れしなさいママっ子!!?」

『うわあ!!?』

ぐう、見ててよ、ママア!!?」

次は…絶対…上手くやるよ…ママ…』

イーサンと葵が足場を渡る途中で変異モローが突撃して来た為葵がサイコキネシス

で弾き飛ばしそのまま渡り切り、先程の建物付近にあった荷車まで辿り着きそれを水に落としてマキ達と合流、変異モローの言葉を無視しつつもう一つの荷車を落として足場を完成させ、それを渡る。

そして粘液の壁をマキがショットガンで破壊した後、近場のレバーを上げ沈没船を上げる。

「大物が釣れたな！」

「これで向こうまで一気に渡りましょう!!？」

イーサン達は沈没船の上に飛び乗り、その後現れた粘液の壁を破壊して遂に反対側の風車に辿り着く。

其処から梯子を下ろして上まで一気に駆け上るとクランクを取りその場を去ろうとしたが、変異モローが飛び付き此処も何時崩れるかわからなくなった上に続く梯子が壊れて進めなくなっていた。

「チツ、なら風車を梯子代わりにして登ってやる!!？」

するとイーサンはクランクを回して風車を止め、それを梯子代わりにして全員で上に登る。

すると其処にロープがあつた為イヴがドミトレスク城から持ってた手持ちロープウェイのぶら下がり部を渡し、他はワイヤーロープ射出機で代用し風車1号機まで渡る

うとする。

「皆さん、私は最後にして渡って下さい!!?」

多分変異したモローが飛び付いて来るのでそれをサイコキネシスでダメージを与えつつ吹き飛ばします!!?」

「あいよ葵!!?」

「…ファイト、一発!」

「うおお!!?」

すると葵が自身を最後にして渡る様に提案し、マキ、イヴ、イーサンの順でロープを渡って行く。

すると本当に変異モローがイーサンに向かって飛びついて来た為、葵がサイコキネシスでそれを捕まえ身体を一部捻り、ダメージを与えて弾き飛ばす。

そうして最後に葵が渡り切り全員無事モローの水上アトラクションを突破するのだった。

「危ないところだった、サンキューなアオイ」

「いえ、奴のイーサンへの異様な執着心を見たら多分ピンポイントで狙って来ると思ったので…じゃあ風車を回しましょう」

イーサンが礼を述べると、葵はモローの発言からイーサンに変に執着していた点を述

べると3人は確かに何故かイーサンに対して執着心があった事を思い出す。それから葵の一言でイーサンが克蘭クを回して風車を動かす。

「良しー」

無事に風車が回つたのを確認した4人は水門操作場に戻り配電盤を操作し、レバーを引き上げて様子を見る。

すると水門が開き、水が勢い良く抜かれて水没した家屋等が露出し始める。

すると水門の向こう側で変異モローが苦しむ様子が見られ、確かな手応えを感じ、イーサンも手をグツとして小さなガッツポーズをし、全員で外へと出始める。

『俺の大事な……水……！』

よくもおお！』

「おや水を抜かれて御立腹な様子、このまま止めを刺すよ!!?」

するとモロー診療所方面へ変異モローが水を抜かれた事を怒りながら向かい、全員で後を追いつけ止めを刺しに向かい出す。

そして建物内にモローの手記と思われる物に実験の内容が示されており、更に其処に『カドウ』と言う単語を葵達は見つけ出す。

「……このカドウを植え付けられた人がライカンに……」

「成る程、あの寄生体の名前はカドウですか……そして実験をしたモローはギル

テイ、倒した後コイツの黒情報を更に洗い上げる為に山奥へ行きますよ」

「ああ……器、ミランダが欲しがる、村人全員が実験台……ローズ……そう言う事か、ミランダはローズを見つけるまではそうやって『儀式』の器とやらを探してたわけか、クソツタレが!!?」

そうして手記を読み終え、葵はタブレットに村人の体内の寄生体の名「カドウとメモを添えた写真で送り、イーサンは今までの点と点が線として繋がった事に憤りを覚え、全員同じ思いで下へ降りていく。

そして変異モローが倒壊した建物の一部を突き破り現れる。

『ミランダ母さん。』

オレ……今度こそやるよお!』

「アンタに次は無い!!?」

B. O. W.; サルヴァトーレ・モロー!!?」

「此処でケリを着けてやる、汚らしい化物が!!?」

そうして戦闘が開始され、全員が火力重視の武器を装備して一気に片付ける勢いで銃撃、爆撃を開始する。

その中で変異モローは吐瀉物を飛ばして来るが、葵は変異紅の一戦の経験から強酸性と見抜きサイコキネシスで全て止め、弾き返す。

しかしモローにこの酸は弾いても効き目が薄く此方のダメージを増やさない程度にしかならないと判断し、ペンドラゴンでその身体を射抜く。

『そんな目で俺を見るなあ!!?』

「五月蠅い、薄汚い化物が!!?」

「コイツでさつさと終わらせてやるよ、皆行くよ!!?」

更に樽爆弾が置かれていたのでそれを使い怯ませると変異モローはイーサン達の侮蔑の視線に対して物言うが、イーサン達は構わず攻撃し、更にマキの合図でそれぞれが動き出す。

先ず葵がサイコネシスで取り押さえ、イヴは両手をカビの差金にして怪魚部分の口を無理やり開きつばなしにさせ、イーサンとマキがゼロ距離ショットガンでモロー本体を撃ち抜いて行く。

『お願い、ミランダ母さん：俺、頑張るからあ!』

「じゃあその頑張りを無駄にしてやるよ!!?」

皆離れて、レールガンを使う!!?」

変異モローはミランダに見捨てられまいと必死に蹴きサイコネシス等から逃れようとするが力の差があり過ぎた為か無理であり、その台詞を聞いたマキは全てを終わらせる為にレールガンを解禁し、この一撃を以て終わらせるつもりでいた。

の足元に落ち回収する。

そして最後にイーサンがモローは汚らしい奴と吐き捨てながらマキにレールガンを返却すると、他の3人も同意してモローとの戦いに幕を閉じる。

こうして4人は順調に四貴族を倒して行き、残るはデュークが最も危険と称したカール・ハイゼンベルクと、首魁のミランダのみとなりこの戦いのゴールが見えてくるのであった。

EP XV 『交渉台と砦へ』

イーサンと葵達はモローを斃した後早速出口に向かい始めると、其処はモローの自室であり、机の上にはカドウと瓶にネームシールが貼つてある物と、今までに組み合わせて来た鍵の最後のパーツとなる金細工が置かれていた。

「コイツがカドウ…寄生体か」

「…此れから特異菌反応がある。」

多分此れは感染を媒介する物だと思う」

「成る程、ミランダはコイツを使って特異菌を村人に感染させて、上手く行けば四貴族の様な奴に。」

適合失敗すれば死ぬかライカンになるかの二択だった訳か…腐ってるわ!!？」

イーサンとイヴ、マキは金細工を組み合わせて六翼の胎児の鍵を作り上げ、イヴが特異菌反応から中間媒介が此れと断定し、モローの手記から此れを植え付けられたら死ぬかライカンか、或いは四貴族達の様になるとマキが分析しタブレット端末に感染媒介とメモして写真を撮った後マキ用カスタムガバメントでその瓶を完全に破壊、中のカドウを殺すと言う過激な行動に出ていた。

「…まあマキさんの気持ちは分かりますよ、はい」

一方葵とはある手記を見つけて懐に仕舞い、マキの今の感情が分かるとフォローを入れつつ宥めさせる。

イーサンやイヴも溜め息を吐き、『贈り物』の名を持つこの寄生体に嫌味を感じていた…その時、砂嵐の走ったテレビに馬の頭部と蹄鉄のマークが映し出される。

『思った以上にやるな、ドナやモローをアッサリ殺ちまうとはな』

「その声、ハイゼンベルクですな。」

またサイコキネシスを掛けられたいですか？」

『おいおいおい待ちなよ嬢ちゃん、俺は単に交渉をしに連絡しただけだぜ？』

それと此れは音声だけを送ってて監視カメラは別にあるからテレビに睨めっこしても無駄だぜ』

テレビから流れて来た音声は最後の四貴族たるハイゼンベルクの物であり、葵のサイコキネシスを警戒して監視カメラは別にあると言いつつ交渉をしに連絡したと口にし、4人は見合わせて口が上手く理論立てが上手な葵と当事者のイーサンが交渉役になった。

「交渉だと、今更謝罪する気になったのか？」

『これは謝罪じゃなくて交渉だぜ！』

先ず筋道を話そう、お前達はタフでミランダがビビる力を持つスーパーガールが居る、それは認める。

だが瓶を集めた所で如何やってローズを元に戻すんだ？」

「…成る程、その情報を掲示するからこっちの要件を飲めと、そう言いたいんですね
カール・ハイゼンベルク」

イーサンは皮肉混じりに謝罪しに来たかと言うとハイゼンベルクはイーサン達の戦闘力の高さを認めつつ単なる交渉と言いつ切り、ローズを如何に元に戻すかを皮切りにする。

すると葵が相手の意図を読み要件を満たせばローズを元に戻す方法を教えると話すと、テレビから拍手が聞こえて来る。

『その通りだぜ嬢ちゃん、話が早くて助かる。』

それでだ、先ずはその為のテストとして村の外れにある砦に俺の瓶がある。

それを取りに行きな、出来たらお前達を認めて手を貸そう。

先ずは墓地まで戻ってみな』

『ザザツ』

「ムカつく野郎だ」

ハイゼンベルクは葵の察しの良さに意気揚々と話し、自身の瓶を村外れの砦に置いた

と話し、それを取れたら認めると口にし墓地へ戻る様に促すとテレビは砂嵐の状態になり通信が切れたと全員察する。

そしてイーサンはハイゼンベルクをムカつく野朗と悪態を吐く。

「ええ全くですね……こんな事をよりにもよつて奴からイーサンに提案して来るなんて神経を疑いますよ」

「？」

葵、それは如何言う……」

すると葵はハイゼンベルクからイーサンに対してこんな交渉を仕掛けて来た事に嫌悪感をはつきりと示し、イーサン達は何故なのか気にしてた所で葵は懐に仕舞つてたモローの手記を手渡し、それを読ませる。

「……!!？」

アイツ……!!？」

「ねっ、だから神経を疑うんですよ。

さて、確か村外れの砦からライカンが来てるってクリスさん達の報告があります。であるなら、それ相応の準備をしましょう、イーサン、皆」

「……あ、よ」

そしてそれを見たイーサンは今まで以上の怒気に包まれ、葵はその手記を改めて懐に仕舞うとクリス達ハウンドウルフ隊からの以前からの報告で村外れの砦方面からライカンが来ていると話し、3人に相応の準備……デュークのシヨップで買ったたり売ったりカスタマイズしたり等を行いつつ、今行ける範囲の村のデュークが示した宝を漁り尽くす事を提案し、マキは二つ返事で了承する。

「……………ハイゼンベルク……………!!?」

「……イーサン、気持ちには分かるけど足を止めてたら何も解決しない。」

だから行こう……その怒りはハイゼンベルクと会った時まで仕舞って置いて行こう」

対するイーサンはモローの手記の内容からハイゼンベルクに対する憎悪を強め血が滲む程握り拳を作る。

するとイヴがその手を握り、ハイゼンベルクに会うまでそれは仕舞って動く様に促すと、イーサンは静かに頷き葵とマキの後を追うのであった。

それから先ず船乗り場にあつた宝箱の中身を回収し、モローの手記の一つにあつた山

の奥へ向かい金属球やモローの隠し武器と地図にあったイーサンが使う事になったマグナムを手に入れ、その小屋内に更なる手記で其処は秘密の研究所で、狼型B・O・Wはモローが被験体にカドウを植え付けた後に脊髄に狼の血を入れて完成した物（内容的に失敗作）らしくモローのマッドさを更に露呈させる。

「モロー……ミランダに次いでイカれたマッドサイエンティストですね、死んで当然……あ、透視で外にあの狼型B・O・Wが居るのを見つけちゃいました」

「マジかよクソが！」

さっさと始末するぞ!!？」

「……気を付けて行こう」

そして葵は統括してモローもマッドサイエンティストであり死んで当然と口にしたところで透視で外を見ると、件の狼型B・O・Wが居り全員で戦闘を開始し、地雷やグレネードランチャーを駆使して処断し、山を降りて模型遊戯を手早く終わらせ翠緑の結晶骨を手にしてその場を後にする。

「さて村に戻ると其処には……『こっちだ』って立て看板が……」

「巫山戯た野郎が……」

日も傾き始め、村へ戻ると大きな立て看板で誘導する書き置きがされており、イーサンは憤りを感じながらそれらを今は無視し、今は準備を進めることを優先し始める。

『もしもしきりたんです。』

ルイザさんの屋敷前の畑に例の狼型B・O・W；オマケになんか歴戦の風貌を漂わせる奴が居るとデルタチームから報告がありました。

ソイツにイータ小隊が死亡者は居ませんが負傷者多数で撤退させられましたが、如何しますか？』

「後顧の憂いを断つ為に砦に向かう前に始末します。」

「デルタチームにそう連絡してきりたん。」

後、イータ小隊の皆さんにお疲れ様でしたと伝えてね」

するときりたんの通信から狼型B・O・W。の中でも強い個体にデルタチームとイータ小隊がルイザの屋敷前の畑で遭遇し、イータ小隊は負傷者多数で撤退を余儀なくされた事を知らされる。

葵は後からそれが障害にならない様にすべく、此方から仕掛けて始末するのとイータ小隊にお疲れ様と伝える様にきりたんに話して通信を終える。

「あの地雷やグレネードランチャーの爆撃、ドラグリーンとかの威力の高い鉛玉で漸く殺せる奴の強化個体が相手ね。」

なら不意打ちでレールガンで撃ち殺すよ」

「…それが一番、無駄弾を減らせる」

するとマキがレールガンの不意打ちで仕留める案を出し、イヴも賛成して更に葵達も領きそれで強化系狼型B・O・Wを斃す事となり、それから村の彼方此方を周り宝箱を漁り次に聖杯の祭壇の先の橋にあったクランクを回す木橋を下ろしに行こうとした………所でデュークが何故かカドウを持ち吟味してる場面に遭遇する。

「デューク…それ悪用したら私達総出で貴方の命を奪りに行くから」

「ああ、此れは失礼しました！

何分商い精神の所為で珍しい物には目が無いのです。

しかし、悪用は致しませんのでご安心を」

「…嘘吐いたら命は無いから」

それ等を見て葵達はデュークに殺気全開の警告を発して悪用したら命は無いとし、デュークは高い精神が悪い方に働いただけと釈明してその場を収める。

そしてイーサン達は木橋を下ろした後2人乗りが限界のボートでドミトレスク城方面はイーサン、葵が向かいの宝箱を全て開け、以前回収した首飾りと宝石を組み合わせてドミトレスクの首飾りを完成させる。

「じゃあマキさんにイヴ、そっちは任せましたよ」

「あいよ、サクツと終わらせて来るわ」

更にマキ、イヴが逆方向の洞窟内に侵入すると、其処にはハウンドウルフのPCや弾

薬類があり、内容は菌コロニーが村の地下全体に拡がってる、意識ネットワークは最早データストレージと見做せると書かれていた。

「…そしてミランダはその菌コロニー内にある自身の子の意識を抜こうと…巫山戯てる……あれ、最後何か書き込みがある？」

『追記：R隊長とデルターからΩ16達へ、この弾薬等を有効活用してくれ』

「クリスさんにバカ隊長、きりたんからそう言う報告が無いからやっぱり無事だったんだ。」

「了解ですよ」

イヴは菌コロニーから自らのこの意識を意地でも引つ張り出そうとするミランダの狂気に辟易しPCを閉じようとした所で追記を確認して読むと、クリスとB・Y・が弾薬類を有効活用する様に書かれており、それ等を全て回収して外に出ようとした瞬間、奥の根が動き出し幽鬼が沸いたがそれ等を無視しマキ達は手早く外に出て木橋で先に待機していたイーサン達と合流する。

「マキさん、イヴ、向こうは如何でした？」

「ああ、クリスさん達が洞窟内で菌コロニーの調査を菌根の目の前でやってたみたい。

そしてイヴが最初に倒れ掛けた理由も意識ネットワークがもう肥大化し過ぎてデータストレージになったからみたい。」

それとクリスさん達から伝言、弾薬類を有効活用してくれだってさ」

「そうか、クリスもB・Y・達も無事だったか：まあキリタンから死んだって報告が無いからそうだろうと思っただがな」

そして葵はマキから報告を聞き、イヴが無言でイーサンに今のショットガン用フオアグリップを渡し更に情報と弾薬類を共有する。

イーサンもクリス達がそう簡単に死ぬ訳が無いと思いながらそれ等を聞き改めてデュークの元へ行き得た宝物や結晶を売り捌く。

「此れはモロー様の？」

此れは何というか『グロテスク・アート』ですな」

「そうだな、じゃあ銃のカスタマイズや商品を買うぞ」

「はいはい、ご購入とカスタマイズありがとうございます！」

では幸運を！」

イーサン達はモローの結晶をグロテスク・アートと呼称したデュークに否定せず売却、購入、カスタマイズをするとその場を後にし、いよいよルイザの屋敷前の畑に居る狼型B・O・Wの強化個体と、向こうに見つからない様に遭遇する。

「槍とか刺さったり弾倉が幾つもあるのにピンピンしてる：見た感じで分かる、あれはヤバイ。」

てな訳で葵、サイコキネシスで宙に浮かせて!!?」

そしてマキも元B S A AにしてB・O・W・と長く戦い続けた勘から件の個体は特異菌：カドウ系巨人型B・O・W・達と同様タイラントクラスの単体戦闘力を持つと肌で感じ、葵にサイコキネシスを使う様に指示する。

「了解です!!?」

ふうふう!!?」

更に同じ勘を持つ葵もサイコキネシスを最大限にまで強めて使い、近場の空中に引き付けつつ向こうの腕き攻撃が当たらない位置に配置するとマキのレールガンが唸り、ルイザの屋敷や村を傷付けず弾丸は空へ走り、B・O・W・は結晶化する。

「よし、これでイータ小隊達の悔しさとか晴らせただろう。」

じゃあ、看板の方に行くぞ」

「…ゴー、ゴー」

結晶を回収し、負傷し撤退したイータ小隊の無念を晴らしたイーサン達はいよいよ六翼の胎児の鍵で開く扉の先へ向かい、砦方面へ向かい始める…が、葵は透視で製材所らしき場所にあのクラウディアの墓で戦った巨人型B・O・W・と同個体を発見してしまふ。

「マジですか…」

「如何したアオイ？」

「こつちの獣道側に製材所らしき場所があつて、其処にクラウド・ベネヴィエントの墓に居たB・O・W・と同個体が居ます」

「マジかよ…」

葵が止まった事にイーサンは何かがあつたかを聞くと、あの巨人型B・O・W・亜種が居ると伝えられ、イーサンすらもゲンナリし、マキ達も溜め息を吐いていた。

先程の狼型B・O・W・の強化個体の件もあり、後顧の憂いを断つべくイーサン達は急ぎ製材所の中へと侵入し、扉一枚を隔てた先で肉を潰す音が聞こえていた。

「葵、またさっきの作戦で行くよ。」

今度は窓に配置させて」

「OKです。」

1、2、3！！？」

『ガシャン！！？』

マキは先程と同じ作戦を取る事にし、葵も了承して扉を蹴破り突入。

巨人型B・O・W・亜種をサイコキネシスで捕らえ、窓に配置した所でレールガンを放ち、窓を破壊しながらB・O・W・の上半身を吹き飛ばし結晶化させ葵はそれを手元に引き寄せる。

「ふう、此れで憂いは」

『ガアア、ガアア!!?』

「つて今度は空飛ぶ幽鬼かよクソが!!?」

「…落とす!!?」

イーサン達は一安心しようとした所で翼を生やした幽鬼が群れで侵入して来た事で再び戦闘態勢に入り、イーサンは2丁拳銃、マキはカスタムショットガン、葵とイヴはサジタリウスで幽鬼の群れを撃ち落として行き、後続が切れた所で戦闘を終える。

「つたく、休まる暇もないぞ…」

「はい……あれ、何か手記がありますね?」

イーサン達は鎖鍵付きのドアを開閉させ、次いでにあった宝箱から女神像を拝借し、外に出ようとした所で葵が誰かの手記を発見して黙読する。

「葵、内容は?」

「ミランダに禁じられてる外の情報をデュークから古新聞を買って得てたらある製薬会社のエンブレムに見覚えがあつて、それが村の聖杯にあつた紋章と同じつて事と、昔この村に滞在した男がいたとか何とか…エンブレムは間違い無くアンブレラですね。

村人もビックリでしょうね、自分の村の紋章とアレのエンブレムが同じなん

て。

それにしても昔居た男：気になりますね」

マキは葵に手記の内容を聞いた所、村人が聖杯の紋章とアンブレラのエンブレムが同じ事に驚いていた事であった。

クローズドサークルのこの村ならその反応は正しいが、逆にアンブレラ社を知る外の人間が見れば当初の葵達の反応になる為、矢張り偶然の一致で片付けられない事柄だと聞いていたイーサンすら思っていた。

「…よし、これは共有して置こう、注釈を入れて」

更に葵は昔村に滞在した男Ⅱ外の人間の存在に興味が惹かれ、それ等をタブレット端末に写真を撮りメモ書きを添えてCLOUD共有に送る。

その注釈は『昔村に外の人間が居たらしい、何者かは分からないけど何か鍵を握っているかも?』であった。

『此方きりたん、葵さんの興味がそそられる手記には私達も興味ありますね。』

何故外の情報を得る事を禁じたミランダが村に外の人間を滞在させて、滞在中からそのまま何もせず出て行かせたのか……此れも村の歴史、ミランダの裏側を更に解く鍵かも知れません。

それも調査対象に含めますね』

そうしてきりたんから通信が入り、クリス達やデルタチームが行なっている任務に対

して追加オーダーでその男の事を村で可能な限り調査する事を全体通信で知らせ、葵達
はクリス達に負担を掛けるのが気が引けたが自分達はローズ奪還が最優先の為そちら
まで手が回せないのが実情だった。

「…じゃあローズちゃんのスラスクを取りに向かいましょう。」

その為には先ず、外のライカンの群れを突破する必要がありますがね!!?」

「望む所だ、ローズは必ず救う!!?」

その邪魔をするなら俺がお前等をぶつ殺してやる!!?」

そうして葵がドアを蹴破ると外にはライカンの群れが待ち構え、イーサンはそれを望
む所だと意気を込めてサターンとデユランダルを放ちライカンを殺し、イヴもカビ剣で
ライカンの首を刎ねたりマキはゼロ距離ショットガンで頭を飛ばし、葵はサイコキネシ
スを使い全身を曲げる等で絶命させ砦に向かい出す。

「此れが砦の入口…こ丁寧にライカンがかなり居るな!!?」

「恐らく巢か何かなんでしょうね、ですが押し通ります!!?」

「オラオラア、ローズちゃんの瓶を取り返しに来た私等を止められると思うな!!?」

そうして行く内に砦の入り口まで辿り着き、ライカンの更なる群れをそれぞれの武器
で仕留めつつ仕掛けを解いて砦の内部へと侵入して行くイーサンと葵達。

しかし砦の入口でこの村で最初のライカン大量襲撃以上の数が居た。

よって当然内部はそれを更に上回る、大型ライカンも含めた群れに遭遇する。

「チツ、やつぱりライカンの巣か!!?」

「しかし関係ありません、迎撃用意!!?」

「…排除開始!」

それぞれ2丁拳銃やライフルにショットガン、グレネードランチャーにサジタリウス、ドラグーンを活用して近・中・遠距離のライカンを次々と駆逐して行き、更に扉の中に入り奥へと進む。

その途端ライカンの食事ゾーンの直ぐ横穴を通り抜ける気付かれたら更なる戦闘を強いられそうになったが、イーサン達は此れを何とかやり過ぎし更なる奥地へ到達する。

「何か此処、良くゲームである決戦のバトルフィールド感があるね」

「決戦……ライカン達のボス……となれば、あの巨人か!!?」

『グウオオオオオオオオ!!?』

全員でその決戦場らしき場所に降り、周りを見渡せばイーサン達の向かい側の吹き抜けがあり、更にイーサンがライカンのボスと想起した瞬間亜種個体では無い、大型B・O・W・が出現しイーサン達に向けて咆哮を上げる。

「最初の村でのリベンジマッチだ、必ず斃してやる!!?」

「矢張り来ますか！」

大型B・O・W 確認、撃破します!!?」

「お爺さん達の分の怒りも此処でぶつけてやるよ!!?」

「……………殲滅!!?」

イーサン達は思い思いを口にし、大型B・O・W との戦闘を開始し、相手の戦槌を避けながらあの時には無かった武器も併せて使用し、地雷にパイプ爆弾、手榴弾にグレネードランチャー等で怯ませてからのペンドラゴンやイーサンのマグナムを含めた一斉射撃でダメージを蓄積させる。

『グウオオオオオオオ!!?』

『ガアアアアア!!?』

「苦し紛れにライカンを呼んだみたいだ!!?」

「……………でも関係ない、全て斃す!!?」

すると大型B・O・W は咆哮を上げ、ライカンを呼ぶが此れが苦し紛れだとマキは勘から予測し、イヴも関係なく全て斃すとしてサジタリウス、ドラグーンで呼び出されたライカンを次々と屠る。

そうしてフリーになったイーサンと葵が大型B・O・W と相手取り、戦鎚の振り回しを避けながら葵がカウンターキックを頭に決める。

イーサンは少しだけ感慨に耽けつていると横から葵がイーサンの腕に手を置き、更にローズのフラスクを取りに行く様に促すとイーサンはマキ達も見ながら頷き、奥の鉱石の通路を抜けて階段を降りると、テレビの横に胴体のフラスクが置かれておりそれをイーサンは手に取る。

『ツッ?』

『おぎやああ、ええええん、えええええん!!?』

するとイーサン、イヴが謎の光景が脳裏に浮かび、それを良く見れば初めの護送車が横転し、其処にミランダが泣くローズに手を伸ばすと言う内容であった。

「何だ、今のは…」

「…今のは多分、ローズの見た記憶…」

「2人共、何かあったんですか?」

イーサンはそれに戸惑いながらイヴを不意に見ると、彼女はそれをローズの記憶と判断する。

更にこの記憶の光景は葵、マキには見えていないらしくE型菌が残留してると思われるイーサンとE型被験体のイヴが精神感応してそれを見た2人は思い、後でそれを葵達に言おうと思っていた。

『ザザッ』

『やっぱり思った以上にやってくれるじゃねえか。』

『ウリアシユ』とその亜種個体だけじゃなく、モローの野郎が作り上げた『ヴァルコラック』をアルファ個体諸共始末してフラスクを手にするとはな!』

するとテレビにまたハイゼンベルクの家紋が映し出され、そのハイゼンベルクの音声
が流れて来る。

更にウリアシユやヴァルコラックと言う名を口にし、イーサンはあの巨人がウリアシユ、ヴァルコラックはモローが作った狼型B・O・W. と判別し、ハイゼンベルクはそれ等の亜種個体すら斃して来たイーサン達に歓喜すらしていた。

「ふん、いつまで隠れてる?」

お前達を引き摺り出してやる」

『あつはつは、そうがつつくなつて。』

もう少しで全てカタが付く。

手を貸してやるよ、だがその代わりに……』

「何ですか、此方も時間が無いので早く言つて下さい、カール・ハイゼンベルク」

イーサンはハイゼンベルクやミランダを引き摺り出すと宣告しテレビを睨むが、当人は手を貸すから事を余裕を持って言う。

但し何らかの条件付きらしく何か勿体振り舞にすら早く言う様に迫られる。

『先ず俺の所に来い。

瓶は祭壇に納めろよ、そうすれば場所は直ぐに分かる。

じゃあな、イーサン、アオイ達』

『ジジツ』

「チツ、クソ野郎」

そうしてテレビ通話は終わり、イーサンは悪態を吐くと奥に向かい秘宝を回収、ボートには2人しか乗れない為イーサン、イヴが初めに乗り次はイヴとマキ、マキと葵の順で乗り降りを繰り返し栈橋から少し奥に進むと牢屋を見つけ、其処に人体実験の手記が置かれており、その中にはクリスの報告にあつたドミトレスクの記録があり、ハウンドウルフは此処を調べたのだと把握する。

「成る程、ドミトレスクが血を啜つてたのは血液疾患か…同情の余地なんか無いがな」
「そうですね。」

では行きましようか、聖杯の祭壇に」

ドミトレスクが先天性血液疾患である様に血を啜っていた事を知るイーサン達であつたが、結局はB・O・W.の為同情の余地など一切無く振り返り、そのまま近場の梯子を登り小教会の裏手へと出る。

そうしてイーサン達はハイゼンベルクに誘われるまま聖杯の祭壇へと赴いて行く、た

とえそれが罨でもローズを元に戻す手掛かりを得る機会を失わない為に。

∴しかし、それもハイゼンベルク次第である事をこの4人は身構えながら確信していたのであった。

EP XVI 『交渉、その結末』

イーサン達はウリアシユ等の結晶を売り、弾薬を購入すると4人でフラスクを手を持ち、ゆっくりと祭壇に納める。

1つ、2つ、3つ、そして4つ目を入れた瞬間、再びイーサンとイヴの脳裏にローズが見た光景が浮かぶ。

「今度のは…… まさか、あのクソ野郎達にバラバラにされた時の……」

「……イーサン、イヴ、もしかして精神感応でローズちゃんの記憶を？」

「……察しが良いねアオイ。」

そうだよ、ローズが精神感応で私達に見せてくれてるんだよ。

自分が見た光景を……」

イーサンとイヴは今度はローズがバラバラにされた時の光景を見てしまい、それを精神感応でローズの記憶を見た事を察した葵はそれを聞くとイヴ曰くローズ側から精神感応をして記憶を見せてると話す。

この事から生後半年度でそんな事が出来るローズは矢張りミランダが狙う程の力の持ち主だと如実に示していた。

「だがローズは俺とミアの掛け替え無い娘だ、どんな力を持つとうが関係無い、必ず元に戻す！」

「…だねイーサン。」

私等もその為に力を最後まで貸すよ」

しかしイーサンはローズは自分の娘であり、必ず元に戻すと言う決意を口にする。

それにマキが領きつつ最後まで手を貸す事を約束し、ローズのフラスクが納められた祭壇の上に手を翳し、葵、イヴ、そしてイーサンもその手に自身の手を重ねて決意を改めて固める。

その時、祭壇の固定具が外れてそれが『聖杯』となった。

更に祭祀場への道の燭台に火が灯る。

「祭祀場へ行かつて事ですな。」

じゃあ祭壇…いえ、聖杯は私とイーサンで持ちますな。」

マキさんとイヴは周りを警戒して下さい」

「…うん、ライカン一匹も近付けさせないから安心して」

「じゃあ行くぞ…この先にハイゼンベルクの奴が居るんだらうな……絶対……」

葵は状況から祭祀場へ向かう様に判断し、イーサンと2人で聖杯を運び始めマキとイヴに護衛を任せる。

2人はドラグーンとサジタリウスを構えながら扉を開けて周りを警戒し石橋を渡り始める。

すると突如地震が起き、全員周りを見渡す。

「今のは……？」

『此方きりたん、震源地不明の揺れを確認しました。』

皆さん大丈夫ですか？」

「うんきりたん、今聖杯の祭壇にローズちゃんのフラスクを納めてそれを抱えて祭祀場へ向かう途中だよ。」

それにしても、此れがクリスさん達の言ってた揺れ……まさか、『菌根』が活性化して村全体が揺れてる？

だから震源地を特定出来ない？」

イーサン達が困惑する中できりたんからの緊急連絡で震源地不明の揺れを確認したと報告が入り、葵は此れがクリス達が湖で話した揺れだと確信する。

更に憶測として、自身達がこの村に来たもう1つの目的……破壊対象の『菌根』が活性化してると思ひ、マキとイヴも可能性が高いと思ひ葵を見ていた。

「……なあ、聞きそびれてたんだがその菌根って何なんだ？」

特異菌に関連してるのは間違い無いし、名前からしてアレらの根本の存在って

分かるだが」

「…はい、イーサンは湖で木の根の様な物をクリスさん達が研究してるのを見ましたよね？」

アレが菌根、特異菌の根なんです。

そして根や枝があるなら大元がこの村の何処かにある…それを破壊する事が私達のもう一つの目的であり、特異菌事件を断つ一歩になります」

イーサンは菌根の事を改めて聞くと、葵はこの特異菌事件に於いて大元があり、それが菌根でありその大元の破壊がミランダ抹殺と合わせた目的だと話し、イーサンは成程と理解しつつクリス達が破壊するのに躍起になるのも此方が原種であり大元だからと頭で整理する。

「てな訳で目下菌根を搜索中なんだけど、ローズちゃんの件があるから元に戻して取り戻しつつ、ミランダを抹殺して菌根を破壊するのが全体任務になる訳。

私達がローズちゃん奪還で、クリスさん達が諜報、バカ隊長や他の皆が囷になつていたのはそれが理由」

「確かにクリスならB. O. W. が殺せるなら直ぐに殺す筈だな…昨夜の襲撃みたいにな。

大体納得が行ったぞ、助かったよアオイ、マキ、イヴ」

「…礼なら、全てが終わってからね」

更にマキが補足説明をしてクリス達が村中を諜報し、B・Y・達が囹になってた理由を話すとイーサンは昨夜の襲撃を思い出し、アレでミランダを殺せれば残りは四貴族と菌根だけになってた筈だったと納得し、説明した3人に礼を言うといヴがB・Y・の受け売りを口にし、他3人はニヤけさせる。

そして祭祀場に辿り着き、例の紋章前にイーサンと葵は立ち、その側にマキ達が警戒する。

「じゃあゆつくり置くぞ」

「はい…よいしょっと」

『ガチャン、ズズズズズズズ』

イーサン、葵は聖杯を紋章の上に置くと祭壇みたく固定され、何処かで何か大きな物が動く振動が伝わり、葵はきりたんは何が起きてるかを確認し始める。

「きりたん、何が起きてるの?」

『ハウンドウルフの『アンバーアイズ』さんとデルタチームのデルタ6さんから村外れのハイゼンベルクの工場に続く橋が掛かり始めたと報告がありました。』

聖杯設置と連動してるみたいですね』

きりたんはアンバーアイズ達からの報告と葵達が送る映像から祭祀場に聖杯に置い

た事でハイゼンベルクの工場に続く橋が掛かり始めたと報告し、イーサン達はハイゼンベルクがフラスクを納めれば分かると言う言葉を改めて理解する。

すると聖杯の周りの足場が昇降機となり、頭上が例の紋章の壁で塞がり一方通行となる。

そして足場が降り切ると目の前には洞窟とその先に出口が見える。

「…ハイゼンベルクの工場はあの先です。」

さて、ローズちゃんのフラスクが納められた聖杯を置いて行って良い物か…」

『ガキなら心配するなイーサン、アオイ達、それで良いんだ。』

はっ、良いから橋を渡ってとつと来い！』

「…チツ、あの野郎…」

葵は早速ローズを置いて行く事に躊躇を示すとハイゼンベルクの放送が入り、橋を早く渡る様に命令して来る。

その口調や態度からイーサンは拳を握り締め、葵達も眉や米噛みを引き攣らせながら武器を構えながら葵達と並走して洞窟を抜け橋を渡り始める。

そして橋を3分の2以上渡り切ると再び放送が入る。

『おぉー！』

イーサン・ウィンターズ、アオイ・コトノハ、マキ・ツルマキ、イヴ・アーク！

ようこそ！

まさかドナとモローまであつさり殺してミランダの厄介な戦力を削るとはな。

だがアメリカや日本、中国にロシアじゃもつと酷い目に遭つたんだろ？」

「……こつちの素性は把握済みと」

ハイゼンベルクは態々ようこそと言ひ放ち、更にイーサン達がそれぞれの地で酷い目：トラウマとなる、戦う決意を固めた目に遭つたと口にし、イヴが素性を一方的に把握されてると口にし、全員で腹の底に怒りを溜めて行く。

『お前達が気に入った。』

ローズとミランダの事について話がしたい。

中に入って来い。

心配するな、罨なんかじゃねえ』

そうして開いたフェンスの門を潜り、ハイゼンベルクの瘰に触る放送に耳を傾けながら工場の敷地内に入ると中に入るように言われた為イーサン達は真つ直ぐ工場の入口に向かうとそれが開き中に入る。

「さて、奴は何処に居る……？」

「……此方は開かないのであつちの扉に行きましょう」

イーサン達は周りを見て行ける場所を探すが、正面のドアは向こう側からしか

開かない様になっており、葵の指揮の下、横のドアを開けて階段で下へと降りて行く。更にその先の扉を開き、行き止まりの部屋に入る。

「…此処にも居ないのか？」

ん、あの布は？」

イーサンは周りを見渡し、ハイゼンベルクが此処にも居ない事を確認すると不意に布が掛けられた場所を見つけ、葵達もそれに近付き布を取る。

すると其処にはイーサンにミアや葵達、更にクリスに他の四貴族にミランダの写真が貼られていた。

特にドミトレスク達の写真には赤く??が書かれており、明らかに異様な光景だった。

「何だこれは…」

「…っ!!?」

イーサンはそれらを見て異様に思い込むが、その横で葵がある一文を見つけ全体が写る様にタブレット端末で写真を取り直ぐにCLOUD共有をする。

「辛いよな?」

『!!?』

すると背後からハイゼンベルクの声が聞こえて来た為、葵達は武器を構えて威嚇する。

しかしハイゼンベルクは余裕ある態度を崩さずに口を開く。

「当てるやろう、他の奴等の様に俺を倒せばローズを救えると思ってるんだろう？」

「娘は治ると聞いた！」

「ふう、良いか？」

分かつてねえ様だが……

『ブルルン、ブルル、ブルルン！』

ハイゼンベルクはドミトレスク達のように自分を倒せばローズは救えると話し、イーサンはデュークから言われた救える事を口にする。

葵達もハイゼンベルクを睨みながら警戒するが、そのハイゼンベルクは何かを言おうとした……瞬間、下から何かのエンジン音が聞こえて来る。

葵は透視で下を見るとそれと『余計な物』まで見てしまう。

「クソツ、五月蠅えな。」

おい静かにしてろ！

……悪かった、イーサンまあ座れ。

嬢ちゃん達は済まないが立っててくれ、俺が何かしたらイーサンを守れる様について形を取る為にな」

ハイゼンベルクはその音の主に対して排気口を開けて静かにする様に叫ぶとその

音はピタリと止む。

更にハイゼンベルクはそれに謝罪し、ハッチを開けっ放しの排気口に椅子の脚を掛ける様に置きイーサンに其処に座る様に言い、此れは明らかに落とす気があると葵達が思う。

だがハイゼンベルクは葵達が何時でも動ける様に立たせる様に言い一応フェアな形を取る。

「…イーサン、座って下さい。」

何かあれば救い上げます」

「……………分かった、座る。」

それで、話って何なんだ？」

「ふう…良いか、お前達はミランダに踊らされている。」

A. B. F. オメガ小隊が此処に来られなかったみたいにな」

葵はイーサンに何かあれば救う前提で座る様に言い、イーサンはそれに従い座るとハイゼンベルクの話の聞き始める。

するとハイゼンベルクはイーサンや葵達がミランダに踊らされていると口にし、更にオメガ小隊が来られなかった事も引き合いに出しながら話を進める。

「先ずお前達の仲間の自作戦、ローズの瓶を上手く奪い返せる様にするとかの作戦は

ミランダには関係無いんだ、初めから囷なんか見向きもしてない。

それっぽく演出してただけでお前達は良い様に奴に踊らされてたんだよ」

「何ですって、何を根拠に」

「根拠は、ローズの瓶を奪い返されてるってのに全然ミランダが動かない点だ。

儀式にはローズが必要なのに何故だ？

当たり前だ、最後はミランダが総取りする様にこの舞台は仕組まれてるんだからな！」

ハイゼンベルクはB・Y・やイータ小队達の囷が効果が無かった事を告げ、マキは何を根拠にしてるか口にするると彼はミランダがこの期に及んで未だ動かさずと言う点を指摘する。

更にこの一連の事件は最後にはミランダが勝つ様に仕組まれているとも話す。

「…総取り、何故言い切れるの？」

「E型被験体のお前なら分かるだろうイヴ？」

この村の連中はカドウが埋め込まれてる、つまり何時でも奴の好きな様に殺せて、ライカンにする事が出来る。

お前がモールデッドを作れる様にな。

オマケにだ、俺が調べ上げた事だが俺達用済みになった四貴族はアイツの子供

の器になる可能性があるだけの偽りの子で、しかも俺達が死ねば菌根が完全に目覚める仕組みになってやがる！

そしてイーサン、ローズの父親のお前は奴の家族になる資格があるか試されてんだよ！」

イヴがハイゼンベルクに何故総取りが出来るか敢えて問うと、イーサンからはエヴリンを彷彿とさせる様に村人の生殺与奪を握り、ライカンに何時でも変異可能だった事を明かす。

つまり村人は絶対に救えないと確定し、イーサン達の中で腑が煮え繰り返っていた。

更に彼は話を続け、自身達はローズが見つかるまでの器候補で、用済みになった今は殺せば菌根が目覚めるトリガーになってるとさえ明かした。

此れには葵達も寝耳に水であった、何故なら菌根を刺激しない様に立ち回ったつもりが逆に目覚める様に動かされていたのだから。

「つまり…あの図体のデカイクソ女に…ブサイクなサイコ人形…ウスノ口の怪物…最後にこの俺で入れ替えて誤だ、巫山戯んなよ!!？」

「お前達の事情なんか知るかよ、俺は村人の無念を晴らして娘と妻を取り返したいだけだ!!？」

奴の家族になるつもりは無い!!？」

「俺だつてそうさ、俺自身の自由を取り戻したいのにこのザマだ!!?」

だから最初はあのガキを利用してしようと考へてた、ミランダがビビる位のヤベエ力を持つてたから……」

『ブルルン、ブルルルルン!!?』

ハイゼンベルクは怒りをブチ撒ける様に話し、他の貴族達を侮蔑しながら刃物を自身の力で写真刺して行き最後はミランダの写真を一閃する。

対するイーサンはミランダの家族になるつもりは無いと叫ぶが、前例たるハイゼンベルクが自身の落ち振りを見せ、其処にローズの力を利用してしようと考へていたと口にし、イーサンの堪忍袋に触れるがその瞬間下からまたエンジン音が響いた。

「いい加減にしろよ、何度言わせんだ!!?」

「自分の作り物の管理も出来ないんですか?」

「ああ、ありや完全な失敗作だからなクソが……」

それでだ、俺と手を組まないか?

一緒にローズを奪い返して、ミランダをブチ殺してやるんだ!

ハイゼンベルクは下のモノに叫びを入れ再び鎮まらせると葵は透視で見たその管理が出来ないかと言うと失敗作と返される。

そしてハイゼンベルクはサングラスを外してイーサン達に手を組み、ミランダと共に

殺してローズを奪い返す事を提案して来る。

しかしイーサンはその会話の中で看過出来ない物がありそれを怒りのまま叫び始める。

「お前、さつきローズを利用するとか言ったよな？」

あの子は人殺しの道具じゃない俺の娘だ!!？」

そんな事を言う奴に俺が手を貸すと思うか!!？」

「まあまああ待てよイーサン、この話には続きがあるんだよ！」

確かに初めはローズを利用する案を考えた、だが!!？」

代替案がこの村に、お前と一緒にやって来たんだよ!!？」

そう、其処の嬢ちゃん達とその愉快的仲間達さ!!？」

イーサンはしっかりと聞いたローズを利用すると言う案をこの男は立てていた事にキレ、そんな者と手を組む気はないと叫ぶがハイゼンベルクは続きがある、代替案がやって来たと言口にする。

それは葵達とその仲間達であると言う。

それを聞き葵達はハイゼンベルクに視線を外さない様にする。

「先ずマキ・ツルマキとその仲間は元B S A A極東支部のエース中のエース、あのゴリラ野郎と並ぶ実力者だ!!？」

更にE型被験体であり、その力を使わなくても戦闘力の高いイヴ・アーク!!?、そしてミランダがビビり散らかす力を持った一角、イヴの先輩でありT—Gene s i s ウイルスの完全適応者のアオイ・コトノハ!!?。

更に時間さえ稼げればアオイの仲間であり、同じウイルスに完全適応して奴がこの村に揃わない様に仕掛けたヨナ・レテイシアとアオイの双子の姉、アカネ・コトノハ達までやって来る!!?。

あのゴリラ野郎達だけじゃ頼りなかったが、此れなら確実にミランダをブチ殺せる!!?」

ハイゼンベルクは嬉々としてマキやB・Y・達デルタチーム初期メンバーにイヴ、更にT—Gene s i s 完全適応者の葵と仲間達、更に時間稼ぎが出来ればミランダが揃わない様に仕向けた茜達までやって来る事を告げそれだけ戦力が揃えばミランダに勝ると豪語していた。

つまりこの時点で葵達の力を借りられればもうミランダに勝てる算段が付いていると言うのだ。

因みにハイゼンベルクのゴリラ野郎は誰を指すかとイーサン達は考えたが、パンチ力が段違いなクリスが浮かんでいた。

「…アオイ、お前達は良いのかそれで?」

良い様に使われるって感じだぞ？

それに……」

「うーむ、持ちつ持たれつ……私等が警戒したハイゼンベルクを監視下に置けるメリツトはあるけど……」

「……アオイに任せたい、ハイゼンベルクと手を組むか」

イーサンは葵達を案じてハイゼンベルクに良い様に使われると言い、且つある事がイーサンの中で蟠りになっていた。

この中でマキは考えるが答えを出し渋り、イヴも葵の一存に任せたいと話す。

こう言う時には葵は間違った選択は取らないとイヴもマキも知っているからである。

そうして葵の判断はと言えば。

「……………良いですよ手を組んでも。」

但し、此方が言う条件を飲んで下さい」

「確かに一方的に組もうはフェアじゃねえからな。」

良いぜ、条件は何だ？」

「先ず1、私透視で地下を見たのですがあれは何なんですか？

2、この事件終了後はある程度自由にしますが地下のアレがあるから好き勝手やらせない様に一定の監視下に置かせて貰う事。」

そして3……3は、貴方自身の罪をこの場で数えて下さい。

それらをクリアしたら手を組みましょう」

「あー、成る程な。

その3つか……じゃあ時間も惜しいからさっさと達成させて貰うぜ」

葵は手を組む代わりに3つの条件を突き付けて来る。

それを聞いたハイゼンベルクは頬を掻き、それら3つの条件を達成すべく口を開き始めた。

「先ず地下のアレは、村人の死体を利用した俺の『鋼の軍団』製造工場さ」

「何だと、お前!!？」

「おつと待てよ、あくまで死体を利用してただけだ、マジで。

決して生きた人間は使っちゃいねえ。

が、道徳に反するのは分かっている……だがこうでもしなきゃミランダに対抗する軍団を作れなかったんだ、済まないとは思ってる。

で、監視下に入るのはいかに結構。

別に大それた事をしたい訳じゃない、ミランダの手から離れて自由に生きて自由に死にたい、それだけだからな」

第1条件の葵が見た物の告白……村人の死体を利用したハイゼンベルクの鋼の軍団を

自身で口にし、イーサンに叫ばれるまでも無く死体以外は使つてない、道徳に反するのを承知でいた。

ミランダに対抗するためとは言え済まない口にし、更に監視下に置かれる事を良しとしてあくまでもミランダから脱却したい事を言葉から滲ませる。

「それで俺の罪か………正直数え切れねえから分かる範囲で数えるが、先ず鋼の軍団製作に死体とは言え村人を利用した事。

イーサン達にやったシヨを他の奴にもやった事、ミランダに曲がりなりに加担した事、それから………ああ、お前等に一々癩に障る事を言つたりやつたりだな。

そして未遂だがローズを利用しようとした事だな、済まなかつた」

そしてハイゼンベルクは自らの重ねた罪をイーサン達の前で告白し始め、様々な事を懺悔室で神父の前でその罪を悔い改める様に話し、自身の性格からの癩に触る言葉から村人の死体を利用した事、果てはローズを利用し掛けた事等多岐に渡り罪を数えた。

此れ等をイーサン達は黙って聞き残るは葬が如何なる判断を下すかを見守っていた。

「…本当に、数え切れる範囲でそれだけですか？」

「ああ、此れ以上は数え切れねえ。

いやマジだぜ？」

「……ふふふふ、あははは、あはははは!!？」

すると葵は不意にハイゼンベルクにそれだけかと聞き、ハイゼンベルク自身も数え切れないと言ひ懺悔が終わった……その瞬間葵は腹から高笑いをし、ハイゼンベルクの罪の告白を嘲笑うかの様な態度を見せた。

「な、何だよ、何で笑つてやがるんだ!?!?」

「此れが笑わずにいられますか?」

貴方は一番懺悔しななければならぬ事に全く触れず、そして触れないと言う事はそれに対し何とも思つていないんですよ!

さあイーサン、父親の貴方なら分かるハイゼンベルクの一番の罪を白日の下に晒して下さい!!?!?」

葵はハイゼンベルクの罪の中で一番懺悔しなければならぬ事を口にせず平然としていた事に彼が表面でしか謝罪をしていないと見抜き、その懺悔をしなければならぬイーサンに向かってハイゼンベルクが犯した最も重い罪をこの場で言う事を叫ぶ。

そしてイーサンは、父親の自分なら分かるハイゼンベルクの罪が何なのか……腹に溜めていた怒りをやつと吐き出せると思ひそれを口にす。

「ああ、一番にお前が懺悔しなきゃならない事はただ一つだ!

ローズをバラバラにした事の言い出しつpegがお前だつて事だよクソ野郎が

!!?!?」

「ついで？」

「サルヴァトーレ・モロー……マッドサイエンティストでママっ子で汚らしいB. O. W. でしたが、私達が貴方と手を組むか否かを判断するに至る手記を残していた事には評価しますよ、ええ。」

「さあ見なさい、此れがそのモローの手記ですよ！」

イーサンはローズがあのような様……結晶化させられた後バラバラにさせられフラスクに詰められたのはハイゼンベルクが言い出した事であると怒りのまま叫び、ハイゼンベルクが一瞬たじろいだ瞬間葵は懐に仕舞っていたモローの手記を彼に投げ付け、それが胸に当たると丁度ハイゼンベルクの足元に落ちてそれが目に留まる。

「さてカール・ハイゼンベルク、それが見えるなら音読してあげましょう。」

『ミランダおかあさまからローズのびんをひとつあずかった。』

みんな仲がわるいから自分だけぎしきのなかまはずれにされると思ってる。

だから4にんが1つずつローズをあずかるってハイゼンベルクが言い出したんだ。

みんなあつまらないときしきできないように。

おかあさま『すきにしろ』って』……如何ですか、此れを見て聞いてイーサンに對して何か思う事はありますか？

無いですよね、所詮『人間のフリをしたB・O・W。』なんですからー！

葵はその手記の内容を敢えて音読し、ハイゼンベルクにすっかり聞こえる様に口にし
た。

それらを音読し切った後、葵は表面でしか平謝りしていないハイゼンベルクをB・
O・W・と言い放ち、人間では無い事を高らかに口にし交渉のテーブルをひっくり返し
始めていた。

それらを聞きハイゼンベルクはモローの手記を踏み付けながら手を震わせイーサン
達を睨み付けていた。

「以上でもう分かったでしょう、貴方は人間の心なんてとつくに捨てたか落としたか
元々無いか…何にせよ私達はB・O・W・とは手を組まない！

人の心がある誰かのコントロール下に置かれてたり、人の心を持った生体兵器
と呼べなくなった『人』なら手を組みますが貴方は自身の意志を持つ生体兵器、思考判
断が出来て自立するモノだからそれに該当しない!!？」

アテが外れて残念でしたねカール・ハイゼンベルク、貴方が人の心があればまだ
組む目はあったけどそれが無いなら私達が手を貸してやる道理は無いです!!？」

ローズちゃんを戻す方法なら自分達で探しますからどうぞ好きにミランダ
に反逆して返り討ちに遭えば良いわ!!？」

マキ、イヴがイーサンと葵の言葉を内心肯定し武器に手を添える中、葵はハイゼンベルクへの糾弾を止めず人の心さえあれば、と口にしながらハッキリと手を組まない事を告げて交渉のテーブルを完全にひっくり返した。

更にローズを元に戻す方法を自身達で探し、ハイゼンベルクには勝手に反逆して死ねば良いとまで言い放ち葵も腹に溜めていたハイゼンベルクへの怒りをぶちまけながら睨みつけていた。

「……ツツ!!?」

『ガシヤンツ!!?』

ガシツ!!?』

「うおっ!!?」

「イーサン!!?」

するとハイゼンベルクはイーサン達の選択に怒りに震え、次の瞬間にはイーサンの椅子を蹴り排気口に落ちそうになったイーサンの手を取る。

それにマキは声を上げ、3人は当然の帰結として武器を構えハイゼンベルクに銃口を向ける。

しかしハイゼンベルクがイーサンの手を掴んでいる為、このまま撃てば下に彼を落とすしてしまう為撃つに撃てなくなっていた。

「如何する、最後のチャンスだぞ？」

考え直して手を組むか、それとも下に落ちて地獄を見るか？」

「やってみろよ、クソ野郎！」

ハイゼンベルクはイーサンに対し最後通告を行い、手を組むなら下に落とさないと言うがイーサンの心は既に決まっております、何時もの悪態を吐き手を組まない意志を示した。

「…ふん、ご愁傷様」

「うああ!!？」

「イーサン!!？」

ふうふう!!？」

それに対しハイゼンベルクは遂に痺れを切らせてイーサンの手を離し、ハッチの空いた排気口に彼を落としてしまう。

それを見た葵はハイゼンベルクにサイコキネシスを最大限で放ち、壁にめり込ませつつマキ達がワイヤーロープ射出機でイーサンの下に降りるまで時間稼ぎをする。

そして2人が降りた後葵もそのまま降りて高い身体能力で着地、イーサンに駆け寄る。

「大丈夫ですかイーサン！」

「ああ、何とか」

『『シュツルム』、やっちまえ!!?』

『ブルル、ブルルルルル!!?』

葵がイーサンの安否確認をし、3人で彼の無事に胸を撫で下ろそうとした瞬間ハイゼンベルクが上からシュツルムと呼ぶモノに命令を下す。

するとさっきのエンジン音が響き渡り、その方向を見ると上半身がエンジンとチエーソープロペラと一体化した様なB・O・Wが居り、葵が透視で見たハイゼンベルク曰く失敗作な物だった。

「何だコイツは!!?」

『ズダダダダダダダダッ、ズダンツズダンツズダンツズダンツ!!?』

カンカンカンツ!!?』

「正面からの攻撃じゃビクともしない、それに此処では戦えないから逃げましょう!!」
?

ふんっ!!?」

イーサンはその容貌に驚き、サターンとデュランダルを放つが全く効果が無く弾丸を弾かれてしまう。

葵は正面からの攻撃は効かない十二の地形では満足に戦えない為一旦逃げる事を提

案しつつサイコキネシスをぶつけ少しだけ距離を離し、全員で走り始める。

「あんなのを作つてるとかマジ気がしれない……って行き止まり!!?」

「…皆、ダストシユートに入つて!!?」

「それしか無いか、うおおっ!!?」

マキはシユツルムを作つたハイゼンベルクの狂気の一端を目にして気がしれないと口にした所で行き止まりに当たり、全員で立ち止まってしまふ。

しかしイヴがダストシユートに入る案を提示し、イーサンもそれしか無いと思い全員で時間差で降りて行く。

因みにシユツルムはその間に追い付いて来る為葬が殿となり、サイコキネシスで動きを封じて他3人が降りて時間経過した所でダストシユートに入る。

「よつと!」

ふう、全員怪我は?」

「無い、無事だ…。」

ハイゼンベルクめ、後で一泡吹かせてやる!!?」

「それにしてもイーサンと葵は正しい判断をしたと思うよ。」

ローズちゃんをバラバラにして何とも思わないクソ野郎と手を組まないって言つたんだから」

「…2人共、ナイスだよ」

最後に落ちた葵がイーサン達の無事を確認し終わると、イーサンはハイゼンベルクに悪態を吐き他の貴族達同様一泡吹かせる事を宣告しながら上を見ていた。

そのイーサンと葵にマキ、イヴは2人が正しい判断を下したとはつきりと言い交渉を蹴った2人を労っていた。

葵達は自身の判断は間違えてないと自信を持ちながら頷きつつ、廃材置き場で工場からの脱出を図る為その場から歩き始めるのだった。

EP XVII 『鋼の軍団と合流のB. Y.』

イーサン達は廃材置き場から先に進み始め、途中幽鬼に似たバイザーを付けた敵を蹴散らしつつ通気口を抜け梯子を上り通気口のハッチを開ける。

すると其処には、葵が透視した村人に死体を利用するハイゼンベルク曰く鋼の軍団生産工場の光景が広がっていた。

「此れが奴ご自慢の鋼の軍団の生産ラインって訳か、クソが」

「其れにしても、此れ全部が村人の遺体なの？」

総人口がライカンと合わせてもう一つの都市クラスの数になるんだけど？」

「やっぱりドミトレスクの様に村の外から誘拐してカドウ移植実験を何度も何度もやってたんでしようね…ミランダもハイゼンベルクも、最低な奴ですよ」

「…なら此処は壊す、絶対」

その光景に胸の奥から嫌悪感が込み上げて来るイーサン達はそれぞれの考えを口にした後、イヴの工場破壊に賛同して前に進み出す。

するとエレベーターに相変わらずデュークが居り、最早見慣れたとしてシヨップによる。

「これはこれは、その様子と此処に來たと言う事はハイゼンベルク卿との交渉は決裂した様ですな？」

「奴は只のB. O. W.、交渉の余地なんて無かったのよ。

それより、この工場の破壊と脱出に尽力したいからデュークも商品をいつもみたいに買わせて下さいよ？」

「ええ勿論、お客様のお願いなら商いとしては是非とも聞き入れますとも！」

では皆様、ご武運を」

「ああ。

さて、先ずはこの階を周るか……」

イーサンと葵達はハイゼンベルクが交渉に値しない存在だとデュークに漏らした上で協力を取り付け、そのまま現在の階を探索を開始する。

途中制御装置で塞がれた扉を葵の手刀で壊して開けて、幽鬼擬きを撃破しつつ先に進むと鑄造室に辿り着く。

「ふむふむ……進める場所は1箇所しか無いですね。

イーサン、こっちの階段へ行きましょう」

「ああ……それにしてもこのレントゲン、あの製造ラインに流れた奴の物か？」

悪趣味な野郎だ」

イーサンはレントゲン写真を見て悪趣味と吐き捨てて周りを見渡し、扉も向こう側から施錠されていた為階段から進むと矢張り幽鬼擬きが居り射殺してそのまま奥へと進む。

すると奥の部屋で何かが椅子に座っており、イーサン達は慎重にそれに近づく。

「コイツが鋼の軍団って奴なのかな…?」

「ああ、スナイパーのスコープで覗いたらこんな感じだった」

「ふむ…じゃあイーサンと私で奥へ行き、マキさん達は離れて待機してて貰いますか？」

動き出して後ろから襲われる危険性を削ぎたいです」

その椅子に座った腕にドリルが付けられ、心臓部にコアの様な物が取り付けられたそれをマジマジと見た後、イーサンと葵のみが奥へ行き、鑄造室で使う型を手に入れる。

その方の模様は鑄造室の壁にあった模様の窪みと同じであり、それに必要な物だと2人は理解する。

「よし、後はコイツを鑄造室に持って行って型の物を作る」

『ギョルルルルルル!!?』

「っ、イーサン走って!!?」

イーサンが型を取り、その部屋から去ろうとした瞬間椅子に座ったB. O. W. が起

動し始め、それに気付いた葵はイーサンを伴いマキ達の下まで走り武器をそれぞれ構える。

「…やっぱり胸のコア部分を守ってる、ならガードを引き剥がして一気にやつて！」

『ボシユン、ズドオオオン!!?』

『グオウウ!!?』

B・O・Wが胸のコアを守りながら躊躇り寄つて来たのを見るや否やイヴはガードを引き剥がす為にグレネードランチャーで攻撃。

炸裂弾の爆発で怯み胸のコアのガードが解かれ、此れによりその部分への一斉攻撃が可能になる。

「今だ、撃て!!?」

「しゃおらあ!!?」

「此れで終わりよ!!?」

イーサンの合図で2丁拳銃とマキのカスタムショットガン、葵のサジタリウスが一斉に胸のコアへと向かって放たれる。

それらの弾丸を受けてコアに火花が走り、遂には壊れるとB・O・Wは呻き声を上げながら倒れて爆散する。

「ふう…何とかなつたな」

「はい……それにしても此れが鋼の軍団……」

『此方きりたん、ハイゼンベルクのセキュリティ突破に時間が掛かり連絡が遅れました。』

「応答をお願いします」

イーサンは今の銃撃で何とかなったと口にし、葵も同意するがもしも此れが1対1の戦闘であつたなら……自分達ならやや苦戦する程度、イーサンの戦闘力でも苦戦する程度に戦闘力はライカンを上回るだろうと推察していた。

すると通信機から先程から何故か来なかつたきりたんの声が理由を説明すると共に応答を願っていた。

「此方オメガ16、ハイゼンベルクとの交渉は決裂。

奴をB. O. W. と認定して工場内を脱出のために探索中です。

セキュリティ突破と言う事は情報を抜いたり、此方のCLOUD共有は届きましたか？」

『彼お手製の鋼の軍団、『ゾルダート』シリーズの情報をすっぱ抜き、更に他隊員にも通信が届く様にもしつつ情報共有完了しました。』

では製造室に戻りつつ交渉決裂時の内容をお話下さい」

葵は気掛かりだった情報共有が出来たか否かを確かめるとそちらもハイゼンベルク

のセキュリティ突破をする事で出来たと告げられ、更に鋼の軍団ことB・O・W・ゾルダートシリーズの情報も抜いたらしく、イーサンはきりたんが優秀過ぎると感じつつ葵達がエリートと言った事を領きながら互いの情報を交換すべく取り敢えず鑄造室へ向かい始めた。

『成る程、交渉決裂原因は彼がローズちゃんのバラバラの言い出しつぺなのにそれを詫びずに話を進めて平謝りだと見抜いたから、ですか。』

葵さん、ナイス判断だと思いますよ。

そのままハイゼンベルクと組めば後で後ろから、なんて事態も考えられました」
「ありがとうきりたん。

それにしても私達を襲った『アイン』でライカンを数匹バラバラにしたゾルダートシリーズに幽鬼擬きの『ハウラー』、それに失敗作と断じたシュツルム…戦力としては確かに危険だし、もしもハイゼンベルクに人の心さえ在れば…ううん、もしもなか無いからこの考えは捨てよう」

そうして鑄造室へ来て情報交換を始め、きりたん側からはハウラー（此方は大した事無し）やゾルダートシリーズの情報を得てイーサン達はライカン3匹をアインでさえ1分程でバラバラにする戦闘力に戦慄していた。

きりたんはハイゼンベルクとの交渉決裂の原因を聞ききりたんも間違っていないと話し葵が正しかった事を口にしていた。

『それと葵さん……貴女が送ってくれたこの写真、左に赤字で『B S A A C o m e !!?』とありましたが……』

「急いでだから注釈を入れずにC L O U Dに送ったけど、気付いてくれてありがとうきりたん。」

うん、ハイゼンベルクはコネクションだけじゃ無くB S A Aともコンタクトを取ってる可能性が高くなったわ」

「何、ハイゼンベルクが?」

更にきりたんは葵が送った写真にB S A Aの事が書かれていた事に気付き葵に問う。

すると葵は推察からハイゼンベルクはB S A Aともコンタクトを取り付けている事を口にし、B S A Aの庇護下にあつたイーサンは初めのミランダやローズの検査を偽る等の時点でB S A Aに不信感を僅かに抱いていたのだが、此処に来てそれが更に膨れ上がりが始めていた。

「兎に角この話の続きはクリスさんかB・Y・さんと合流出来たら煮詰めたいです。

イーサン、すみませんがこの話の続きはまた後でお願いします」

「…分かった、なら先に進もう。

型をこの機会にセットして待てば……よし、あの壁の模様のレリーフが出来上がったぞ」

葵はクリスかB・Y・の何方かが合流出来たらこの話の煮詰めを行いたいと話し、イーサンはそれに納得して型を鑄造機に入れ、そしてレリーフが出来上がりそれを壁に詰め込む。

「よし、これで壁がー」

「っ、イーサン危ない!!?」

『ドッ、ズシシユユユユ!!?』

イーサンは早速レリーフを填めて壁が上がり通路が出来上がる…その瞬間葵は透視で先に敵が居たのを目撃してイーサンを突き飛ばす

そしてその位置関係上葵に透視先で見えた敵…ゾルダート・アインのドリルが心臓に突き刺さりドリルでシェイクされながらダメージを負うも、葵は自身の耐久力で蹴り飛ばして無理矢理ドリルを引き抜かせながら後退りさせる。

「ゴフッ！」

ハイゼンベルク：油断も隙も無い！」

「ア、アオイ!!？」

クソが、あのメカ死体が!!？」

「葵少し下がって!!？」

しかし無理に引き抜いた関係で更に傷が広がり吐血と出血が酷くなり葵は一時膝を突く事になり、イーサンとマキ、イヴは葵を少し引き摺り鑄造機前まで下がらせるとゾルダート・アインはジリジリと躰り寄り始める。

獲物を確実に仕留める為に。

「この機械化死体が」

『ドン、カーン!!？』

スタツ!!？』

「うおら!!？」

イーサンは悪態を吐きながら銃を構えアインを攻撃しようとした：次の瞬間、天井のダクトが壊れアインに直撃、一瞬ガードが緩んだ瞬間その目の前に人が降り立ちそのコアに目掛けてパンチを行う。

するとコアが破壊されながらアインは宙を舞いながら吹き飛ばされ爆発する。

そしてそれを成した人物はイーサンや葵、特にマキが良く知る者………B. Y. だつ

た。

「た、隊長！」

「ようイーサン、マキ、葵、イヴ、助けは要らなかつたか？」

「…ふつ、タイミング良過ぎだろ」

B. Y. はイーサン達に近付き、少しだけ皮肉を言うと言ふと負傷した葵の手を引き立たせる。

その頃には葵は自己再生が完了しており、確かに助けは要らなかつたが合流出来たらと思つていた所だった為ナイスタイミングだと思つていた。

「…B. Y.、まさか私達がハイゼンベルクの工場に行く事を心配して工場へ潜入したの？」

「まあそんな所だ、クリスからのオーダーでもあるがな」

「クリスが？」

ふつ、あの野朗…偶には良いタイミングで良い仕事を出すよな、不器用だがな」
B. Y. はイヴからの問いにクリスからのオーダーが入った事を良い含めながらイーサン達の安否を気にして来たと言ふし、イーサンもクリスの不器用な優しさをまた垣間見てニヤけており、全員心強い援軍に歓迎ムードで迎えていた。

「さて、移動しながら話をするか。」

きりたん、全体に通信を送りながら盗聴を防いでくれ」

『了解です、久々のハッキング職の真骨頂を見せてやりますよ。』

あ、それから朗報ですよ。

茜さん達オメガ小隊が帰還し、補給を済ませて直ぐに村に向かって出撃しましたよ』

「それは朗報だな。

後少しで茜達も来る、此れなら少しは安心が可能か……」

B. Y. は通信機をONにし、きりたんにハウンドウルフやデルタチーム全体に音声を届ける様に話し、更にきりたん側からオメガ小隊が帰還しすぐ出撃したと報告を受け、此れならばミランダ打倒を本格化出来ると考えながら出撃から到着までの時間を計算、腕時計のタイマーをセットしながらアインの結晶を回収して話を始める。

「先ず葵が送ってくれた写真から俺達全員が推察が更に正しい事が証明された。

ミランダはコネクションに通じている、それは確実だがもう一つ確かめたかった事……ミランダ、或いはミランダ側の誰かがB S A Aにコンタクトを取っていると言う証拠を俺達は見つけたかったんだ」

「……そう言えば組織との繋がりやの証拠とか言ってたがアレはB S A Aの事を指してたんだな。

成る程、ミランダに反逆しようとしているハイゼンベルクの身辺を洗うのは道理つて訳か」

B・Y・は葵の写真のお陰と彼女の功績だとしながら自分達が菌根破壊、ミランダ打倒以外にもう一つだけ探りたかった事……ミランダ側とB S A Aに繋がりが無いかの捜査を極秘で行なっていた事をイーサンに明かし、イーサンもハイゼンベルクがミランダに敵意を持つならB S A Aにコンタクトを取る事は不思議では無いと思う……が、此処で何故B S A Aに対してそんな捜査を行ったかイーサンは表情で語り、B・Y・もそれを目にしながら口を開く。

「不思議に思わなかったか？」

B S A Aがこの国にお前達を証人保護として引越させた事、ローズの検査結果の偽装、そしてそれからミランダのローズの力を知り、ウインターズ家への侵入。

何もかも上手く出来過ぎているんだよ、話が。

そして俺達は確かめなきゃならなかった、B S A Aが何を狙ってるのか、何をしたいのかを」

B・Y・がイーサンに不思議に感じなかったのかと問い、此れまでの様々な出来事に対してB S A Aが何かしら絡み、そしてミランダが動き易い様に全ての土台が作り上げられ今となってみればB・Y・の言う通り何もかもが出来過ぎだ話だと思っていた。

そして彼はB S A Aの目的をクリス達と共に探っていた事を口にし、その先の言葉をイーサンは待った。

「で、調べ上げた結論としてはB S A Aも菌根を狙っている、その為に色々と裏で動いていたって訳さ。」

ハイゼンベルクがB S A Aとコンタクトを取っている事が状況証拠として上がった事もこの結論の強度を高めている」

「B S A Aが菌根を？」

「一体何の為に！」

「其処は分からない……分からないが、何か嫌な予感がしてならない。」

だからクリス達も俺達も、A. B. F. 全体もB S A Aから距離を離そうって話になったんだ。

だがB S A Aも菌根を狙うなら連中は第三勢力だ、その混乱に乗じて俺達は先に菌根を見つけ破壊しローズを奪還しミランダを殺す。

それだけさ」

そして機関室のシャフトを破壊し、ハウラーも次いでに蹴散らしながらB S A Aが菌根を狙っている事を明かし、イーサンはその為に自分達を利用された事を憤り、何故だとB. Y. に問い詰めるが彼等も肝心な部分が未だ解明出来ていない事を告げる。

しかしB S A Aが第三勢力である事は明確な為ミランダと争つてゐる所で自身達は任務である菌根破壊とミランダ殺害を狙うのみだと話し、その目にはB S A Aへの憤りとミランダ打倒の正義感が鬨ぎ合った色を映していた。

「…分かった、なら俺からも何も言わないし教えてくれた事は感謝する。」

だが、ローズを取り戻してミランダの奴を殺すなら俺も」

「…ふう、民間人のお前を巻き込むのは忍びないんだがな…クリスも介入するとややこしくなるって言つてた訳だが…：…良いぜ、だが俺達から離れない事と一人で突つ走るなよ？」

お前の側には仲間が居るんだからな」

イーサンはB・Y・の説明を聞いた上でローズ奪還とミランダ殺害に自分を参加させる様にB・Y・に要求し、彼は少しだけ考える素振りをして作戦参加にOKを出し、更にイーサンの周りに仲間が居る事を告げて突つ走らない様に言付けをする。

するとイーサンは葵達を見ると、確かに彼女達と言う明確な『仲間』が居る事が心強いと感じながら笑みを浮かべ、歩を進め出した。

「ふむ、梯子を登りダクトを抜け、少し進み壁を破壊したらショットガンの弾薬にこの見覚えがあるシリンダーが…」

「まあ…んなもんか。」

それより電力供給の為の歯車の型を探すぞ」

「あ、それならあつちに透視で見えますよ」

そして更に先を進み、アインが陳列してゐる通路を進むと破壊可能な壁を見つけ破壊し、其処にあつた弾薬に換金用と思われるシリンダーを見つけ更に電力が供給されてない為その先を進み、また制御装置で塞がれた扉を突破しその部屋で歯車の型にゾルダートの資料を発見する。

「成る程、こうやって実験してたつて訳か、ハイゼンベルクは仲間にしなくて正解だったな」

「矢張り死体とは言え村人を利用するその汚らしさ、あのクソ野郎は許せない……」

「2人共熱くなり過ぎです、その怒りはハイゼンベルクに直接ぶつけましょう」

B. Y. とイーサンはハイゼンベルクの実験資料に強い怒りをそれぞれ覚えるが、葵が一見冷静に、しかし内心同じ怒りを抱えたまま2人を鎮め、部屋の内鍵を開けて先程の通路へと出る。

するとアインが2体も起動し、イーサン達に襲い掛かり始めた。

「でも2体なら……ふん!!？」

今ですイーサン、マキさん!!？」

「ああ、ナイスアシストだアオイ!!？」

「機械化死体兵だか何だか知らないけど、B. O. W. なら倒すだけだよ！」

オラア!!？」

だがそれを葵はサイコキネシスを発動させて動きを封じた後、イーサンとマキがショットガンで胸のコアを破壊し爆散させ戦闘を即終わらせる。

そして鑄造機で歯車を作り上げてそれを必要な機械にセットし、レバーを下げた電力供給を開始する。

すると部屋に吊るされたゾルダート達のコンベアが動き出し施設に電力が通った事をそれで示していた。

「よし、先へ行くぞ」

『ああイーサン、アオイ達。』

お前達には失望したぞ。

お前達となら、一緒にミランダを倒せると思ったが。

全く、残念だ』

「ふむ、ハイゼンベルクの自分語りか、聞き流す程度に聞くぞ」

イーサンが早速電力供給をして先に進もうとした所でハイゼンベルクが工場内放送を掛けて来た為、B. Y. が聞き流す程度としながら聞く選択をし、起動したアインを破壊し進みながら聴き始める。

『あの女はな…俺達を自分の『子供』にして村に閉じ込めやがったんだ。

何十年齒向かう事も出来なかった。

お前達に分かるか、俺が味わったこの屈辱が！

俺は他の『きようだい』とは違う、俺はただ自由になりたかったんだ！

あの女から！

力が必要だった、あの女を殺せるだけの圧倒的な力が！

そいつ等は俺の力の化身だ。

力在る者が勝つ、それが宇宙の真理だろ？

俺の誘いを受けるべきだったな』

ハイゼンベルクは何十年と味わった自身の屈辱と怒りを吐露し、ドミトレスク達と違う自由になりたかったと話していた。

そして鋼の軍団、ゾルダート達は自身のミランダを殺す為の力の化身であり力有る者が勝つと言うリアリストな面を見せ、締め括りに手を組むべきだったと口にして放送を切った。

それ等を聞いたきりたんを含めた一行のそれぞれの感想と言うと。

「イカれ野朗め」

「力有る者が勝つなら、最低のエンディングを見せてやりますよ」

「同情は出来ても共感は出来ないね」

「…身勝手の極み」

「所詮はB・O・W. かって事さ、人間とは価値観が違う」

『何言ってるのコイツ?』

それぞれがハイゼンベルクには共感はず手を組みずして正解だと改めて心の中で感じつつ、イーサンはローズの事を棚に上げて自分語りをしたハイゼンベルクをイカれ野郎と口にし、それが全てを物語っていた。

ハイゼンベルクは人間の価値観は当に捨て去り相入れないのだと。

イーサン達はそれを噛み締めながら更に先へと進み出し、アインやハウラーを倒しつつ制御装置の扉を開錠して先に進む。

「道はこつちで合ってるよな?」

『はい、ハイゼンベルクの工場内の見取り図を抜き取り、皆さんの信号を逆算して正しい順路を間違いないで進んでますよ。』

なので迷わずGOGOです』

「きりたんのこの手の場所でのナビゲーションは間違いは無いですから安心して下さいイーサン」

イーサンは地図も無しに先に進む事に不安を覚えたが、きりたんは絶対の自信を、更

に葵が間違いは無いと言い周りもきりたんのナビゲートを信じている事を改めて思い知る。

霧の谷、湖ではナビゲートは不要な場所だった分この工事こそが本領発揮場面だとイーサンも理解し、以降は黙って先へと進む。

「よし、このまま進むー」

『ドスン！』

ギュルルルルルルル!!?』

「進ませてくれる訳無いよなクソが!!?」

そうして階段を登りある程度進んだ瞬間上からコンテナが降って来たのみならず、中からドリルを両手に装備したゾルダートが出て来る。

そして道が狭い為一時交代し通路で地雷を設置しつつ待ち伏せを開始する。

「てか今のゾルダート、胸にコアが無かったぞ!」

アレが発展型の『ゾルダート・ツヴァイ』って奴か!」

『はい、そして抜いた研究資料通りなら背中にコアがある筈です!」

何とか背中を向かせて下さい!』

「なら任せて、サイコネシスで転ばせる!」

イーサンはアレがアインの発展系のツヴァイだときりたんに聞くとYESと返答が

来るのみならず、背中にコアたる『カドウ制御リアクター』がある為背中を向かせると言い放つ。

それを葵がサイコキネシスを使い何とかすると言い待ち構えた。

そしてツヴァイは地雷を踏み抜いた瞬間イーサン達は足に一旦銃撃すると、葵がサイコキネシスを使い転ばせ背中のリアクターを丸見えにさせる。

「今だよイヴ!!?」

「…はっ!!?」

『ザシユツ、ドオオオン!!』

そして葵がイヴに合図するとイヴはカビ剣を作り出しリアクターを突き刺し破壊、ツヴァイすらも難なく撃破に成功する。

イーサン達は一息吐き気を休めていた…そんな所で葵は周りを透視で警戒していた所、背後からドリルを鳴らさずツヴァイが近付いて来ている事を察知。

そのままサイコキネシスを使い引き寄せた後、もう1体のツヴァイをバラバラに引き裂き爆発させる。

「悪いですけど不意打ちは通用しないよ、ハイゼンベルク」

「後ろにも来ていたのか…全く、この工場は今まで以上に休まるタイミングが無いな

…!」

葵はハイゼンベルクに聞こえていると前提して不意打ちは無駄と口にして冷淡に結晶を回収する。

対するイーサンは休まるタイミングが掴めないと愚痴を零し、此れにはB. Y. やマキ達も同意して周りを全力警戒する方向にシフトし、武器を何時でも放てる様にしつつ前へ進み出した。

「ああ、此処のリフトの降りない部屋に続いていたのか…ホラさつさと降りやがれ！」
そうして電力が落ちていた関係で使えなかつたリフトをB. Y. が口悪く降ろさせ、通路を確保してその先の扉を開き周りを見て警戒態勢で先に進み、再びツヴァイが現れたが地形を利用して挟み撃ちで倒し制御装置付きの扉を開錠し先に進む…その瞬間再びシュトルムがイーサン達の前に現れた。

「クソ、またかよ!!？」

「皆さん、殿は私が努めますから早くあっちの扉へ!!？」

私がコイツを引き止めて直ぐに向かいますから!!？」

「ああ、任せた葵!!？」

行くぞマキ、イヴ、イーサン、まだ奴と戦う時じゃない!!？」

イーサン達はシュトルムの襲来に驚きつつも葵がサイコキネシスを使いシュトルムの動きを封じ、B. Y. の指示でイーサン達は横空きの扉を開けて葵を待つ。

そして葵はそれを見届けた瞬間サイコキネシスでシュツルムとの距離を離し、スライディングを駆使して狭い足場を擦り抜けイーサン達の下へ行き扉を閉める。

『ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン!!?』

「…本当に休まる場所が無いな、クソが！」

「全く、先は長そうで嫌になりますね…あ、きりたん正確なマップは教えずナビゲートだけしてね。」

本当に長いと知ると萎えるから」

『了解です』

イーサンは扉をプロペラで叩くシュツルムに対し悪態を吐きながら次の扉を開けてエレベーターのレバーを引き、デュークの居るエレベーターをこの階まで呼び出して中に入り銃弾を購入する。

この休まる事の無い、まだまだ先の長い工場をB・Y・が加わったイーサン達が突破出来るかまだ誰にも分からなかった。

EP X I I I 『工場攻略、そしてシュツルムとの戦い』

イーサン達はデュークのシヨップで弾薬を補給した後、早速エレベーターの外へ出て先に進むと横穴を見つけ更に奥へと進み出す。

すると先程の様にハイゼンベルクからの工場内放送が再び入る。

『ミランダにとって俺達はただの『子供』、愛情なんか持つちやいない、これっぽっちも。

あいつには人間的な感情なんて無い、必ず殺してやる』

「…その人間的な感情を捨てたのを気付いていないんですね、哀れですよハイゼンベルク」

「ふん、お前等の内輪揉めなんか知るか」

ハイゼンベルクはミランダに人間的な感情など無い上に憎悪対象である事を告白し、必ず殺すとまで豪語する。

しかし対して葵はハイゼンベルクに対してその人の心、感情を捨て去った事に気付いていない事を逆に哀れみ、イーサンは相変わらず悪態を吐き無関心を貫いていた。

葵の態度にマキが肩に手を置き無言で彼女を見やると、葵は一つ頷き気持ちを切り替

え中に居たハウラー達を蹴散らしながら進む。

「さて、ダクトを進み上部に粉砕用のシャフトがある場所に来たな。

これで約半分と言った所か」

『はい、其処を登ればB2区画に到達出来ます。

つまり本当に約半分進みましたよ』

「これだけ進んで約半分、ううん、漸く半分か……」

B・Yはクリスから事前に聞いた工場内の広さから逆算し約半分まで進めたと口にするときりたんも肯定してその地点が約半分までの位置だと口にする。

マキも漸く半分と理解し、溜め息を1つ吐くと武器を構えつつ慎重に進み始める。

葵、イヴもマキと同感と言った表情を取り葵に関しては360度を透視を駆使して警戒する。

そして、その警戒心はし過ぎる物では無く当然の物になる。

『ブオオオオオオオ!!×5』

「な、ゾルダート!!?」

しかもジェットエンジンで飛んで来やがったぞ!!?」

『気を付けて下さい、それは『ゾルダート・ジェット』、ジェットパックで短時間ながら高所へ飛ぶ事が可能になり、更にジェットパックによる地上での高速移動が可能に

なったツヴァイの発展型です!!?」

ジェットパックを付け、上半身がアーマーで守られたゾルダートが現れるときりたんがそれはゾルダート・ジェットと名称、特徴を話し危険度が更に増したゾルダートだと声色からも分かる様に叫んでいた。

それが5体も飛んでやって来て内2体はイーサン達を囲む様に佇み、そしてドリルを回し始めていた。

「2体が邪魔、上には粉碎シャフト…ならやる事は1つ!!?」

はっ!!?」

『グ、グオオウア!!?』

『ガギギギギギギギギ、ドオオオン!!?』

葵は状況を見て散開するのに邪魔なジェットを2体排除する為の手っ取り早い方法を考えると、早速それを実行する。

その方法とは、2体のジェットをサイコネシスでジェットを粉碎シャフトに押し付け破壊すると言うある意味やられたら恐ろしい手段であった。

「ナイスだ葵、これで残るは3体だ！」

イーサンとイヴ、マキ、俺で残りを片付けるぞ!!?」

「…潰す!!?」

「アオイが作ったチャンス、無駄にはしないさ!!?」

行くぞイヴ、マキ!!?」

B・Y・はこの瞬間が好機と判断し自身は前の1体、イーサンやマキ達には後ろの2体を相手取る様に陣取り早速戦闘態勢に入り突撃を始める。

B・Y・の動きを見たジェットはカウンター気味にドリルを突き出す。B・Y・はスライディングで躲し胸の制御リアクターにドラグーンを乱射、すれ違い様にそれを破壊し切り背後で爆散する。

「くろう、おりゃあ!!?」

また胸にリアクターが来たなら好都合、零距离取ったよ!!?」

『スタアンスタアンスタアンスタアンスタアンスタアンスタアン!!?』

ドオオオン!!?』

次にマキはカスタムショットガンを軸盾にしながらジェットの零距离まで近付くとそのカスタムショットガンをそのままリアクターに突き付け、7発撃ち込んでリアクターを破壊した後蹴り上げ、通路から落ちながらジェット2体目は爆散して行く。

因みにカスタムショットガンは、ジェットのドリルを受けてもなお傷付かずそのまま使用可能なまでに強度が高かった。

「くろう………イーサン、今!!?」

「すまないイヴ！」

この機械化死体が、いい加減くたばれ!!?」

『ズダダダダダダダダダ、ズダンツズダンツズダンツズダンツズダンツ!!?』

『バチバチ!!?』

ズドオオン!!?』

イーサンとイヴのコンビは、周りの同個体が速攻で斃されたのを危険視したジェットの高速移動からのドリルによる突進攻撃をイヴが両手でカビ盾を作り出し受け止め、その間にイーサンがサターンとデュランダルによる一斉掃射でリアクターを破壊。

これによりゾルダート・ジェット軍団は機械脳の結晶となり回収出来る分をイーサン達は回収した。

「すまないイヴ、まさか初めから突進を仕掛けて来るとは…」

「…うん平気。」

私もイーサンも怪我が無いから問題無いよ。

さあ先に行こう、上のシャフトの制御装置を壊して…」

イーサンはゾルダート・ジェットの突撃に反応が遅れ、結果的にイヴを盾にした事を謝罪するが、イヴは全く気にせず手を見せて怪我が無い事をアピールして先に進む様に促す。

これに対しイーサンはイヴが明らかに気遣っていると悟り、少々不甲斐無さを感じた所にB・Y・がやって来て肩を叩き、その分はこれから返せば良いと無言でアピールし、イーサンもサターンとデュランダルをスライドさせ気を改めて引き締めた。

「……………そうだイーサン、お前に言わなければならなかった事がある。

アレからもミアを探し続けたんだが：地上で彼女の姿を見つけ出す事は出来なかつたよ」

「そうか……………ならやつぱり未だ見てない何処かの地下が怪しいって事になるな。

B・Y・、探し続けてくれてありがとうな」

するとB・Y・はミア搜索の結果をイーサン達に話し、地上にはミアは居なかつたと話しもう村全体を探し尽くした事を伝える。

するとイーサンは悲観的にはならず、ならばと未だ見てない地下が何処かにあると言つて未だミアも諦めずB・Y・に探し続けた事に礼を入れた。

此れも一重に葵達が共に戦ってくれたお陰でもあつた。

「…うし、シャフトの制御装置を破壊して止めたよ。

上に登るー」

『ビィビィプツ、ビィビィプツ!!??』

それからマキとイヴ、葵達がシャフトの制御装置を破壊して粉碎シャフトを止めて先

に進む道を開通させ、そのまま進行しようとした……その時、葵の通信機に緊急連絡用の通信が入り、葵は立ち止まり通信機の回線を開く。

「此方オメガ16、誰が緊急連絡を？」

『……………』

「……………!!？」

了解です、イーサン通信機を少し貸しますので通信に出て下さい」

葵は誰から通信が来たかをコールネームで確かめるとその声を聞き一瞬驚き、連絡主とイーサンに繋がりを作る為イーサンの近くに行き、通信機を少しだけ貸し与えて通信を取らせた。

「…此方ウインターズ、お前は誰なんだ？」

『……………』

「…マジかよ。」

分かった、少しだけ期待して待っているぞ」

イーサンはコールネームが無い為ウインターズと名乗り、通信先の何者かに話し掛けるとその声はイーサンが聴き慣れた声であり、マキやイヴ、B・Yもその通信内容に驚きながら通信機を見つめ、そしてそれぞれがその瞳に確かな強い意志を感じさせながら頷き合う事になる。

「アオイ、通信機を返す。

…良かったな、俺達には未だミランダへの対抗策がある。

ハイゼンベルクなんかと違ってな」

「はい、ですが油断せずに行きましょう。

こう言う時に限ってこそ足を掬われ易いんですから」

イーサンは葵に通信機を返すと独り未だ対抗策があると呟くと、冷静な時、特にこう言った場面では慎重派な葵は油断をせず気を引き締め、再び360度を透視で監視しながら上に登って行きシャフトを通過する。

それから先に進み、其処にあったダクトを塞ぐ滑車を動かして金属球の模型の型を手にした後、戻って机にあったゾルダート強化プランの資料を読む。

「成る程、さっきのがその強化プランのジェットで、更に装甲を全身に纏った『ゾルダート・パンツァー』とか言う奴もいるのか」

『はい、ですが恐らく弱点は衝撃…地雷や手榴弾、グレネードランチャーの炸裂弾で装甲を剥がせるかも知れません。

其処を狙い一気に叩く作戦が良いと思います』

B・Yはパンツァーの存在も認知すると、きりたんが資料通りに爆発系の衝撃に装甲が弱い事を指摘し、全員でそれ等を頭の中に叩き込み出会ったらその戦法で速攻撃破

を狙う事とした。

「で、この先何かが回ってる音がするんだが…」

『その先は巨大な扇風機…所謂換気扇が回ってます。』

因みにその扇風機の先が進む道になってます』

「……………はあ、仕方ないですね。」

私が行って破壊して来ます、皆さんは待つてて下さい」

その会話後にイーサンは先の通路で何かが回ってる事を指摘するときりたんは巨大な扇風機が回っている+その先が進むべき道とナビゲートする。

それに頭を痛めた葵はその扇風機を破壊しに向かい動き出す。

すると案の定吸い込まれそうになったが葵は手摺りに捕まったままデュランダルで扇風機の制御コアを破壊。

そして壊れて吹き飛んで来た物をサイコキネシスで操り壁へ掛けて置きイーサン達の安全を確保した。

「では先に向かいましょうか」

「ああ…たくハイゼンベルクめ、変な構造の工場地下なんか作りやがって…」

イーサンはこの工場の構造に悪態を吐きながら先へ進むと、扇風機の先に通気口がありパイプを伝い梯子を登り、ダクトを開けて1人ずつ奥へと押し入る。

するとその先にエレベーターがあり今回はマキ、イヴ、B・Yの3人とイーサンと葵の2人で分かれて上へと登り、先にマキ達が降りてイヴが再びエレベーターを降ろしてイーサン達を乗せて上り始めると工場内放送が再び鳴り渡る。

『あの女がもう直ぐローズを使つて儀式を始めるだろう。』

そうすりや、何もかも終わりだ。

あのがキも、この村も全て。

だが心配無い、その前に俺がローズの力を使つてミランダを殺す！

あははは、ローズの『力』を知らされてもこのザマだ、本当にバカな親父とその仲間だ!!?』

ハイゼンベルクは儀式がミランダは手によりもう直ぐ始まると口にし、その上でその前にローズを利用してミランダを殺す事をイーサン達に宣告する。

そしてイーサンや葵達をローズの『力』を知つてもこの有様だと言う事を誇り嘲笑つていた。

そして道すがらの部屋で鍵の型を取りながらイーサン達はそれを聞きそれぞれの思いを口にする。

「お前やミランダなんかにはローズを渡してやるものか！」

「未だ挽回が効く、ならばそのチャンスは逃さんよ」

「ハイゼンベルク、人の心を捨てたB・O・W。」

貴方やミランダの思い通りにはさせない」

「こつちが必ずローズちゃんを奪い返してやるよ、ミランダの腰巾着！」

「…ローズを利用するならもう何も言わない、ただ処断するだけよ」

イーサン達はハイゼンベルクとミランダの思い通りにさせぬべく先へと進みそうして漸くB1に到達。

その後直ぐ様エレベーターを呼び、再びデュークのショップで弾薬補給を済ませるとB4へと行き、鑄造室までの道をきりたんにナビゲートして貰う。

途中アインやツヴァイが出て来るもののイーサン達の敵では無くあっさり突破され鑄造室に辿り着く。

「では先ず鍵を作りましょう。」

金属球はちよつと後回しにして下さい。

直ぐ其処に鍵を使う場所がありますから」

「分かった……よし出来た、アオイ付いて行こうか？」

「いえ、此れを使う部屋の中にはハウラーが4体しか居ませんから大丈夫ですよ。

直ぐ戻ります」

イーサンは葵の要請で鍵から先に作り上げ、それを渡すと葵は走つて向かつて行き、

1分程で戻って来た。

但し、あのシリンドーにシャフトを組み合わせてハイゼンベルクの鉄槌を完成させた状態で、しかもそれをやや重そうにしながらも片手で持ちながら。

「アオイ、その鉄槌はハイゼンベルクの！」

「はい、シリンドーを組み合わせたら出来上がりました。

少し重たいですが私なら武器として振えます。

なので有り難く使わせて貰いましょう」

「…はは、本当に抜け目が無いな、アオイは。

さてと、金属球も出来上がったぞ」

イーサンは葵がハイゼンベルクの鉄槌を持って来たのを驚いていたが、利用出来る武器は利用してハイゼンベルクに一泡を吹かせようとする彼女の姿勢に思わず吹いてしまふ。

葵はそれを見てムツとしたが金属球が出来上がりイーサンがそれを懐に仕舞うのを見届け、再び透視を開始すると入って来たドアの方から装甲を纏うゾルダートが向かって来るのを目撃し一旦鉄槌を置きサジタリウスを構える。

「装甲を纏ったゾルダート、恐らくゾルダート・パンツァーが来ます!!？」

皆さん展開して下さい!!？」

「何!??!」

「いよいよ虎の子がお出ましって訳ね!!?!」

葵の警戒態勢にイーサンは驚き、マキはいよいよ来たかと思いい全員で部屋内に展開し、扉を囲う形で待ち構える。

すると葵の言う通りドアを蹴破り装甲を纏ったゾルダートが現れる。

イーサン達も此れがゾルダート・パンツァーだと理解し警戒心を最大限にする。

「イヴ、グレネードを!!?!」

「…もう構えてる!」

『ポスンツ、ドオオン!!?!』

『グオオオオオオ!!?!』

イーサンがグレネードランチャーを使う事をイヴに指示すると既に構えており炸裂弾が発射される。

すると装甲が剥がれリアクターが剥き出しになるが、今度は機動力が増してその3対のドリルが正面にいたイヴを襲おうとするが、それを葵がサイコキネシスを使い距離を引き離しイヴにサジタリウスを構えさせる猶予を与える。

「今だ、撃って撃って撃ちまくれ!!?!」

『ズダダダダダダダダダダダダダダダ!!?!』

『グガガガガ、オオオオ…!!?』

B・Y がそれぞれ2丁拳銃、サジタリウス、ドラグーンと連射性が高い武器を構えた全員に一齐に撃つ様に指示し、リアクターをガードするパンツァーを無理矢理引き剥がしてそのままリアクターに弾丸を直撃、破壊に成功しゾルダートシリーズ最強のパンツァーが爆散する。

「やったか!」

「…未だです、未だ此方に同じくドアの先から2体も向かって来てます!!?」

「…なら私はこの階段側からドアを蹴破った瞬間にグレネードを放つ、其処を皆撃つて!!?」

イーサンがやったかと口にする、パンツァーが未だ2体もドア側から向かって来ている事を叫ぶ。

それを聞いたイヴは先程の反省からか階段の側まで下がり其処からドアを押し開けた瞬間にグレネードを放つと全員に伝え、其処が狙い目だとイーサン達に理解させる。

『ドガアツ!!?』

「今よ!!?」

そして2体目のパンツァーがドアをドリルで押し開けた所に今度は墓が叫び、イヴは先程と同じ様にパンツァーに炸裂弾を発射し装甲を剥がし、再び一齐射撃を行う。

これを2度繰り返し向かって来る。パンツァーを全て排除にイーサン達は成功する。しかし相手はゾルダートシリーズ最強の個体。

消費した弾薬は少なく無く、このままゾルダートシリーズと戦い続けたらジリ貧になる事は目に見えていた。

「クソが、此れじゃあジリ貧も良い所だ!!?」

何とかこの工場自体を如何にかしなないと…」

「その心配ならする必要は無いぞイーサン。」

手筈は既に整いつつある、後は実行に移すだけになっているさ」

「…:そうかクリスさん!!?」

単独潜入しているならこのゾルダートシリーズの危険性も私達より早く熟知してる、なら相応の手段を用意してる筈!!?」

イーサンが悪態を吐きながら鑄造室…:工場の全体を見渡しながら何とかしなればと口にする、イーサンに心配入らないと口にしながらパンツァーとの戦闘で吹き飛んだドアの先、エレベーターの方へ向かい出す。

それを葵は、葵達はクリスの存在を思い出してI早く潜入調査していた彼ならばこの工場自体を如何にかする手段を講じていると考えてB・Yの後を付いて行き始めた。

「(さてと、『いつち』の修正もしとくべきだな)」

その間にB・Y・は腕時計を見やり、そのタイマーの時間を修正し始めた。

オメガ小隊の到着時刻、此れこそが作戦成功の要でありミランダ打倒への光明である。

B・Y・はそのタイマーを更に『短く』セットして武器を構え直して先へ進み始めた。タイマーを短くした理由は無論、あの緊急通信が切つ掛けであった。

そうしてエレベーターに着くまでに更にパンツァーを2体倒し、流石の葵達も1日に要した

連続戦闘や移動に体力を取られ出し、金属球で最後の色水晶の遺骨を手に入れた後デュークのショップにて弾薬補給と共に休憩を少し挟んでいた。

「皆様大分お疲れの様子ですね？」

流石にドミトレスク夫人達との戦いから此処まで休まずに戦い続けて疲労が出始めたと言った所でしようか？」

「ああ、体力に自信があつても流石に疲れちまうよ。

だが未だハイゼンベルクや奴の失敗作が残ってる、後少ししたら上に向かう

するとハイゼンベルクの放送が再び入り、それと同時に部屋の壁の先からドン、ドンと何かがぶつかる音が響き渡りハイゼンベルクの言うあいつ、シュツルムがこの先で待ち構えている事は明白だった。

『皆さん、シュツルムは矢張り正面からの攻撃は無意味で背部にリアクターがあります。』

また突進のみしか出来ません。

その性質を利用する戦いや閃光弾使用をオススメします。

それと奴は熱暴走をする危険性があり、そうなった場合何をしでかすか分からないので要注意をお願いします』

「分かったよきりたん。」

さて、此れが役立つかな？」

更にきりたんからシュツルムの情報を貰い葵が礼を言うとその手に持った鉄槌が役立つ時が来たと予感しそれを持ちながら扉を開けて先に進み始める。

そして壁ばかりが広がるエリアに来た…その瞬間再び最初の時みたくシュツルムが壁を崩して現れる。

「時間は掛けられない、さっさと斃すぞ!!？」

「…先ずはこれ!!？」

『ボシユン、キイイイイインツ!!?』

B・Y. が早速速攻撃破を宣言するとイヴが間を縫いグレネードランチャーの閃光弾をシュツルムの足下に当てる。

するとシュツルムは此方を見失ってしまったのかあらぬ方向へ突撃し、イーサン達はそれを避けつつ壁に激突し少しめり込んだシュツルムの背後を取る。

「喰らいやがれイカれたプロペラ野郎が!!?」

「おりゃあ!!?」

「てえい!!?」

『ズダダダダダダダダダダダダダ!!?』

其処にイーサンが2丁拳銃、B・Y. とマキがドラグーンでリアクターを攻撃する。するとシュツルムのエンジンから火が吹き始め、明らかに効いている事が見て取れた。

するとシュツルムがめり込んだ壁から脱出後再びイーサン達の方に向くと、火が付いて熱暴走が始まった為か最初よりもスピードがアップしながら突撃し始める。

「…今!!?」

『ガギギギギギギギギ、ガアアン!!?』

すると葵が鉄槌をバットの様に振り、シュツルムのプロペラの真ん中をベースボール

の要領で打ち返し鉄槌に少し傷が付いたがシュツルムを右斜め上に弾き返す事に成功する。

そして再び壁にめり込んだ隙に今度はイヴも加わりサジタリウスでリアクターを攻撃する。

その攻撃の影響でシュツルムのエンジンから完全に火が吹き上がり完全な熱暴走が始まった事をイーサン達は理解する。

「よし、このまま同じ要領で攻撃を」

「待て、奴の動きが変だ！

全員散れ!!?」

イーサンは勝てると手応えを感じ、イヴも同様の反応を見せながら再び閃光弾を構えようとした。

が、B・Y・がシュツルムの動きが変だと察知して全員に急いで散開する様に命じる。

するとシュツルムはプロペラを勢い良く回し、エンジンから上がった火を熱風として利用してイーサン達を攻撃する。

「マジかよ!!?」

その熱風の炎の攻撃にイーサンは驚きながら回避すると、先程イーサン達が居た場所

がシュツルムと直線上で燃えていた。

もしB・Yが気が付かず散らなければ全員焼き焦げてしまっていたと思いがつと
していた。

するとシュツルムは熱風の後に再び…主人のハイゼンベルクの鉄槌を持っている所
をか葵に向かつて更にスピードアップして突撃をする。

「しつ、い、い!!?」

葵はシュツルムのしつこさに呆れ、主人の物を勝手に持ち出した事への何らかの反応
に主人思いだと7：3の割合で感じつつ再びシュツルムを弾き返そうとする。

しかしスピードが上がった分パワーも上がった為思う様に吹き飛ばせず拮抗し合い、
ハイゼンベルクの鉄槌もバキバキと音を立てて壊れ始める。

「アオイ!!?」

「葵!!?」

「この…：…舐めるなあ!!?」

『ガキイイイイイン!!?』

ドスンツ!!?』

イーサンとマキの叫び声に背中を押され、葵はこの時限界以上の怪力を発揮し拮抗し
たシュツルムとの鉄槌による押し合いを制し壁へ再び壁に、今度は先程より深くめり込

ませる事に成功する。

しかしそれと同時にハイゼンベルクの鉄槌は完全に折れて破損し使えなくなつてしまふ。

だがそれは葵の腕もフリーになつた事を示し、今度は5人で一齐にリアクター攻撃を開始する。

「いい加減鬱陶しいんだよ、壊れやがれ失敗作の屑鉄め!!?」

「ふうふうふうふう!!?」

『ズダダダダダダダダダダダダダダダ!!?』

ドオオオオオオオオンツ!!?』

イーサンのシュツルムに対する罵りと葵の気合入れの叫び声と共に銃弾の雨がシュツルムのリアクターを襲い、更に最後にイーサンと葵はそれぞれのマグナムを構えてリアクターを撃つ。

その結果シュツルムのリアクターが破壊され、シュツルムは爆散し失敗作でありながら強敵だつた機械化死体の試作B・O・Wの撃破に成功した。

「はあ、はあ、もう動くなよ……!」

「ふう、ふう………もう見るのもウンザリよ」

「はあ………兎に角勝てた。

これで残りはハイゼンベルクだけ……」

イーサン、葵は肩から息を吸いそれぞれシュツルムのしつこきを口々にし、その結晶を回収しながら残骸を睨みつけていた。

其処にイヴがこの工場で此処まで来て残る脅威はハイゼンベルクのみになった事を告げるとマキ達も含めて全員領きハイゼンベルクとの避けられない戦いに心を向き合わせる。

この間に葵は壊れた鉄槌のシャフトを床にサイコキネシスで突き刺しある程度役立つ事にその床を墓標代わりにしていた。

「さて、ハイゼンベルクを倒せば菌根が完全に目覚める。

そうなればミランダが次に取る動きは……間に合ってくれよ、茜達……！」

そしてB・Y・は懸念事項のハイゼンベルクを倒した後のミランダの行動や菌根の覚醒に意識を向け、腕時計のタイマーを見ながら茜達オメガ小隊の現着を待っていた。

そうでなければミランダ打倒は不可能であり、逃げるしか出来ない為でもあったからである。

そうして時刻は既に夜を周り、文字通り時間との勝負となりつつあるのであった。

EP XIX 『ハイゼンベルクとの決着』

シユツルムとの戦闘後イーサン達は先へと進み放送機材と葉巻、そしてハイゼンベルクの書き置きが置かれた部屋へと押し入るが、其処にはハイゼンベルク本人は居らず仕方無く書き置きを読んでいた。

「…息子と実験台は変わらない、ミランダを殺さないで自分の人生は自分の物にならないか。

そしてローズを利用して、面白い身体……E型菌が残留してる俺やミランダがビビるアオイ達を上手く仲間に引き込めれば、か。

ふん、最初から利用する気満々だった訳だクソ野郎が」

「だがミランダが狂っているのは間違つて無い。

必ず奴を殺しローズを取り戻し菌根を破壊する、その為にも先ずは全員で此処を抜けるぞ」

その書き置きにはミランダへの憎悪、イーサン達を利用する気だった事を仄めかす事が書かれておりハイゼンベルクの魂胆が見える物であった。

イーサンはそれに悪態を吐き、B・Yが指揮を取り工場を抜ける事を指示して先に

進み始める。

「(…面白い、『身体』…?)」

しかしイヴは何か引つ掛かりを覚え、その書き置きを懐にしまい共に進みイーサンは昇降機、他はワイヤーロープで上へ上り遂に工場の出入り口に続く扉前まで辿り着く。

外では雷が鳴り、雨が降りそうになっていたがイーサンはローズが気掛かりな為早く外へ出ようと扉に手を掛けた：瞬間、周囲の金属が磁石で引き寄せられたかの様な動きを見せ渦を巻く。

「悪くねえ、大したもんだウインターズ、コトノハ達。

中々しづといが、俺にも予定があるんでな。

テメエ等には消えて貰う…ふん、ふん、ふん!!?

うううう!!?」

「ハイゼンベルク!!?」

それに此れは…下がれ、奴が何かして来る!!?」

其処にハイゼンベルクが上側から金属を伝い現れ、イーサン達への殺害予告をする。周囲の金属がハイゼンベルクへと引き寄せられイーサン達は銃撃しながら元来た扉まで下がれる所まで下がると瓦礫が落ちた…と思った次の瞬間、巨大な丸鋸がそれを切り裂き、イーサン達の視界の先には金属を身に纏った変異ハイゼンベルクが居た。

『此れで…終わりだ…死ね!』

「っ、皆飛び降りて!!?」

「くっ、うおあ!!?」

変異ハイゼンベルクはその丸鋸でイーサン達の足場を切り裂き落下させようとしたが、葵のワントンポ早い進言で全員が葵を信じて彼女に近付きながら飛び降りると上から足場だった瓦礫が落ちて来るが運良くそれ等はイーサン達には当たらず、そして地下の最奥の水場、足場が見えた瞬間葵がサイコキネシスを使い全員を浮かせ落下死をさせない様にその場で一時静止させ、そして落下エネルギーが無くなった所で解除して着地、着水させた。

「くっ、アオイ、マキ、イヴ、B・Y。大丈夫か!!?」

「ああ、すまん葵助かった…!」

「いえ…アレがハイゼンベルクの変異体…マトモな銃撃は効かなかったからペンドラゴンやグレネードランチャーみたいな爆撃、更に威力の高い弾丸を叩き込む必要ありです…!」

イーサン達は互いの無事を確認し合った直後葵が変異ハイゼンベルクを分析して今通用する武器ではサジタリウスやドラグーンは除外してグレネードランチャーや規格外武器が必要だと判断していた。

一方B・Y・は周りを見渡し、此処がB4の更に下、B5区間だと判別し更にダクトを見つけてそれを開けていた。

「隊長、この先に何かあるの?」

「ああ、もしかしたらだが……ああ間違いない此処だ!

クリス俺達だ、電気を点けてくれ!!?」

「クリス!!?」

マキはB・Y・の挙動が気になり問うと彼はダクトの先を通り瓦礫を退かした瞬間其処が自身の記憶にある場所だと確信し、クリスの名を叫ぶ。

それを聞いたイーサン達は急いでダクトを抜け其処へ入ると電気が丁度点き、自走砲と電気のスイッチに手を掛けたクリスの姿が目映った。

「イーサン、アオイ、皆無事だな?」

その様子だとハイゼンベルクにしてやられたみたいだな」

「ああ、あの野郎俺達を殺す為に足場を崩しそうとしゃがった。

だがアオイのお陰で助かった所だ」

「そうだったか……兎に角無事で何よりだ。

ハイゼンベルクとの交渉を蹴った事は通信で聞いてる。

だから此れから奴との戦いになる。

その為にあの自走砲を使う事になるだろう、休みつつコレを整備しながら状況整理しよう」

クリスは先ず全員の安否を確認するとイーサンが代表して葵のお陰で助かったと話しそれを領きながら聞くと、ハイゼンベルクとの戦いには直ぐ側にある自走砲が必要になる事を説明してイーサン達に整備を手伝わせつつ少し休みながら状況整理をし始めた。

「成る程、アオイが交渉を蹴った最大の理由はローズのフラスクの件がハイゼンベルクが言い出した事で、それをイーサンに謝罪し懺悔する事が無かったからか」

「はい、奴にはもう人の心は無いB・O・W。かどうか確認するには罪の告白で奴が全ての罪に良心の呵責があるか、イーサンにそれを懺悔するかが手っ取り早かったですから」

「…アオイのあれはナイスムーブ、下手したら私達ハイゼンベルクに最後は後ろから攻撃された可能性もあったから。」

ハイゼンベルクの事だから用が済めばそのままザックリする気だった筈」

クリスは葵達からハイゼンベルクの交渉が決裂した最大の理由を彼女達の口から聞き、イヴも手を結んでいれば最後に後ろから攻撃された可能性を指摘し葵の判断が正しかった事を補強する。

一方マキは工場を如何するか気になったのかクリス達に聞き始める。

「そーいやクリスさんに隊長、この工場はどうすんのさ？」

戦闘力のあるハイゼンベルクお手製のB・O・Wが自動生産する工場。

「こんなの残したら後で誰かが利用……とか考えられそうじゃん？」

「それなら問題無い、この工場に爆弾を設置して爆破する手筈になっている。

だからマキ、今はハイゼンベルクの事に集中しろ。

菌根は……完全に覚醒してしまうがハイゼンベルクの様子だ、戦いは避けられないし痺れを切らしたミランダが動いて奴を始末する可能性もあるからこの際それは隅に置いて奴を倒すでしょう」

「それとイーサン、此れを見る。

数分前部下から届いた監視画像だ」

マキの問いにB・Yがクリスと決めた段取りを話し、工場の爆破をする事を告げ自走砲整備を進めさせていた。

更に懸念事項の菌根の覚醒は最早避けられないと状況整理から全員で共有してこの

際破壊する事に変わりが無い為、ならば障害となるハイゼンベルクを消した方が良いと判断しその方向で話を進める。

するとクリスはイーサンにタブレットにある監視画像を映しながら渡してそれを見せる。

「これは、ミランダ？」

「その先を見てみる」

「……………つ、ローズ!!？」

其処にミランダと、彼女がローズの入った聖杯からフラスクを浮かべ、何か…恐らく儀式の最終準備を始めた事を示す画像があり、イーサンは慌ててその場を離れようとしたが、葵とマキ、イヴが手と服を掴み視線で落ち着く様に促す。

だがイーサンは少し考えローズを今直ぐにでも救わねば…と思ったが、今までの仲間達との行動、会話の積み重ねで未だローズには危害は加えられない、自分だけでは勝てない事を悟り一息吐いて葵達を見つめる。

「すまない皆…1人で突っ走ろうとしちゃった」

「いえ、私達も少し酷な選択をさせましたのでお相手様ですよ」

「だがイーサン、今の判断は正しい。」

お前や、アオイ達を加えた4人だけではミランダには勝てない。

だから戦力を整える必要がある…要するに俺達全員で力を合わせると言う事だ」

「それなんだがクリス、少し耳に入れる事がある、オメガ小隊の事だ」

イーサンの突っ走ろうとした謝罪に葵はお相子様と受け答え、自走砲メンテナンスに戻る。

するとクリスはそれが正しく、ミランダに勝つには全員の力を合わせるしか無いと言
いイーサンも葵のサイコキネシスを受けても平然としたあの光景を思い出しそれに頷
く。

此れもイーサンが葵達と行動を共にした積み重ねによる物であった。

するとB・Y・はクリスにオメガ小隊の事と切り出し、クリスもそれが気になりB・
Y・に視線を向ける。

「オメガ小隊、アカネやカルロス達に何かあったのか？」

「ああ、直接の緊急通信が葵の通信機に入ったんだ。」

イーサンに通信に出させて、その内容は『後少しで、計算では2時間以内にウ
チ等も辿り着く、そしたらミランダからローズちゃんを取り返すで！』ってシンプルな
奴だ。

つまり茜達はA・B・F・本部で補給を済ませて予想以上に早く現着してく

れるらしい。

アレから1時間、もう少しで反撃の狼煙を上げられるぞ」

B・Y・は工場内であつた通信内容：オメガ小隊隊長の茜からの緊急通信の内容をクリスに告げ、クリスもそれを聞き思わず目を見開きツキが此方に向き始めたと感じていた。

更に腕時計のタイマーを見せ残り1時間で着く予定を話しイーサン達もそれに頷きを返しながら希望は近付きつつあるとイーサンは初めて聞く葵に似た力強い声から確信を持つていた。

『此方きりたん、その通信は正しいですよ。』

茜さん達は予定より早く帰還し、補給後に皆さんの分の弾薬等も積みめれる分積めてそのまま本部を起ちました。

B・Y・さんのタイマー設定通りに到着する予定になってます」

それを通信機からきりたんが証明の補強をし、全速力で戻った甲斐があり予定より早く帰還してから村に向かいB・Y・が設定したタイマーの通りに到着する予定としクリスにも明確な反撃のタイミングを確認させる。

それを静聴したクリスは静かに頷いた後エンジン部に移動する。

『ブルルル、ズドオオオン!!?』

「ならばハイゼンベルクを排除した後の行動が重要になる。

奴を消せば恐らくミランダが直ぐに動き出す、その前に一旦退避して茜達オメガ小隊の現着を待ち、そして其処から一気にローズを奪い返す。

この段取りで行くぞ、良いなイーサン？」

「ああ、あのクソ女がビビってたアオイの姉達、アカネ達オメガ小隊つて連中が着いたら必ず一泡吹かせてやるさ!!？」

だから………ローズは、その時に必ず取り戻す……!!？」

クリスは自走砲のエンジンを吹かせてから主砲でエレベーターの扉を爆破し、段取りを話し始めてハイゼンベルク排除後は退避する事を告げる。

イーサンはローズの事が頭にチラつき、しかし戦力が足りない今ではミランダに勝てない現実と板挟みになりながら苦渋の決断を下す。

葵はその決断でイーサンが自身を責めない様にするべく口を開く。

「…イーサン、必ずローズちゃんを取り戻せます。

だから、その決断はローズちゃんを見捨てた、何て思わないで下さい。

勝つ為に退く事も勇氣ある立派な事なんです………親として、娘さんを取り返したいけど相手が化物の所為で上手く取り戻せない、だから今は退くと選択した貴方は正しいですよ、イーサン」

「アオイ……ああ、俺一人だったら奴に間違い無く一人で突っ走っていたらどうな……ありがとう」

葵はイーサンの決断が立派な勇気ある事だと話し、更にそれはローズを見捨てた訳では無いとしてその決断が正しいと論じていた。

イーサンももしも葵やマキ、イヴ達が居らずクリスと和解が少しでも遅れていたり戦力の図式が見えなければ無謀な行動を取っただろうと話した上で彼女にありがとうと口にし、握手をしていた。

「よし、では此れより行動を開始する。」

俺は戻って爆弾を仕掛けて来る、イーサン達はエレベーターを使い、地上で会おう。

B. Y.、イーサンやアオイ達を任せろぞ」

「相分かった、任せておけクリス」

「ああ、クリスも爆弾を設置する時にハイゼンベルクご自慢の鋼の軍団に遅れを取らなよ。」

「ふっ……ああ、気を付けるさ」

そしてクリスの一声の下それぞれが行動を開始し、事前に磁力に影響されないポリマー製自走砲を誰が使うかを決めていた為イーサンが乗り込む事になり、クリスは爆弾

設置、他はイーサンと共に行動となり特にB・Y・はイーサン達を任せられそれに頷き返し、そしてイーサンもクリスに軽口を言いながら5人でエレベーターへ乗り始めた。

「よし、行くぞー！」

「全員散開!!？」

そして地上に出る際も扉を主砲で破壊し、歩兵の葵達が先に出て規格外武器やグレネードランチャー保有者はそれを構え、そして自走砲が外に出た瞬間上から変異ハイゼンベルクが雨が降る地上に降り立つ。

『つたく…ゴキブリ並のしぶとさだな。』

そんなガラクタと豆鉄砲、磁力で役立たずのレールガンでやり合う気か？

良いだろう、ならミランダと殺り合う前の肩慣らしと行くか。

カタを付けようぜ、お前等の死体も俺の軍団に加えてやるよ！

ほら、撃つて来い！」

「ああ、ならリクエストに伝えてお前が死ぬまで撃ち続けてやるよクソ野郎!!？」

『ズダダダダダダダダダダダダダダダダ!!』

ズドオオオン!!??』

イーサン達は襲い来る変異ハイゼンベルクに対し銃撃を開始、赤く光る部分を攻撃し、厄介な攻撃を繰り返す前に怯ませてそれをキャンセルしたり、丸鋸の切り裂きを

イーサンが自走砲に付いたチェーンソーで他の者達の盾になりつつ攻撃を続ける。

しかし、ハイゼンベルクの言う通り強い磁力が働いてる為レールガンは射軸が曲がり最悪味方を巻き込む為マキはそれを使えず代わりにドラグリーンで対処していた。

『さあ、この鋼鉄の肉体に跪け！』

まあ、これだけはあるのクソ女に感謝しないとな、ヤツに貰った力で奴を殺す、此れ以上に無い親孝行って訳だ!!?』

「その前に俺達がお前を消してやる、親孝行の前に此処で処断してやるぞB・O・W、カール・ハイゼンベルク!!?」

変異ハイゼンベルクはその力を存分に振るいその力でミランダを殺す、それが親孝行と豪語しながら攻撃を繰り返し続ける。

しかしB・Y・がそうなる前にこの場で処断すると宣言しながら頭部や赤く光る部分を銃撃し続け怯ませ続ける。

葵もペンドラゴン、イヴはグレネードランチャーの炸裂弾を使用しながらその鋼鉄の肉体にダメージを蓄積させ続け、この場で殺し切る勢いで銃撃、爆撃は続く。

『俺の気持ち分かるか？』

奴に支配されて来た俺の気持ちが！

村の連中はどいつもこいつも救えねえクズだらけだ!!?』

俺は自由を求めて戦う戦士だ!!?

あのガキの力も取り込んで俺は最高のパワーを手に入れる!!?」

「巫山戯んなよこのド腐れ男!!?」

お前なんかが村の人達を、エレナさんやルイザさん、レオナルドさん達をとやかく言う資格なんかあるか!!

それにローズちゃんをアンタの好きにさせるか!!?」

「…やっぱりお前は人の心なんかこれっぽっちも無い只のB・O・Wだ、ならこつちも手を抜かず処断する!!?」

「マキ達の言う通り、ローズをお前みたいな腐れ外道の好きにさせてたまるか!!?」

『ズドオオオオオン!!?』

変異ハイゼンベルクは自身の憤怒を口にしながら村の人々をクズと称し、その上でローズを取り込み更なるパワーを得るとまでその口から紡がれ、マキやイヴはその言葉に怒りを示し、イーサンもまた怒りを滲ませながら主砲で変異ハイゼンベルクを攻撃する。

『おい—』

俺も暇じゃないんでなイーサン、アオイ達!

お遊びは終わりだ!』

すると変異ハイゼンベルクは何処か余裕が失せて来た上に身体から炎が吹き始め、いよいよダメージ蓄積が耐えられない程になり始めたのか広場の中央に移動し始める。

更に其処で磁力を強め始め、葵はサイコネシスを使い引き寄せられない様にカパーを始めるが運悪く近場に居たイーサンが自走砲毎引き寄せられ作られた右腕に捕縛され、左の丸鋸で自走砲が斬られ始める。

『調子に乗るんじゃないぞ！』

いい加減しつこいんだよ!!?!』

「ぐうううう、それはコツチの台詞なんだよ!!?!」

『ズドオオオオオオオオオオン!!?!』

変異ハイゼンベルクの言葉をイーサンはそのまま返すと主砲でその頭部を爆撃して拘束から振り解かれ化物の目の前の地面に落下し受け身を取る。

自走砲も横転し使用するには葵がサイコネシスを使いしつかりと立て直さねばならないが、イーサンが目の前に落ちたのを好機と見た変異ハイゼンベルクは丸鋸でその身体を切り裂こうとした。

しかしその瞬間工場が大爆発を起こし跡形も無く吹き飛ぶ。

「クリスカ、全く良いタイミングだよアイツは!!?!」

『クソ！』

俺の…鋼の軍団が…!!?

ぶっ殺してやる、あのゴリラ野郎…だが先ずはお前等だ!!?」

「ふつ、クリスさんの侵入に気付いておきながら油断して自由に行動させてたんですか?」

ならバカとしか言い様が無いですなハイゼンベルク!!?」

イーサンはクリスの爆破のタイミングの良さに救われ、変異ハイゼンベルクはクリスを放つて置いたツケを此処で払う羽目になり足を掬われてしまう。

そのハイゼンベルクの言葉を聞いた葵はその短絡さにバカとハッキリと告げてイーサンをサイコキネシスで自身の下に引き寄せて再び攻撃を開始する。

『さあ派手に死んで見せてくれ!』

いよいよ大詰めだな、これで最後にしてやる。

さあ如何する気だ?

絶望的だぞ、だろ?

もう諦めろ!

生身の身体でこの俺に勝てる訳がねえ!

ダビデとゴリアテのつもりか?

いいや違う!

「お前等は只の人間共だよ!!?」

「ああそうさ、英雄なんかじゃ無い、俺達は化物を殺す人間さ!!?」

「だから貴方は此処で終わる!!?」

変異ハイゼンベルクはその鋼鉄の肉体を自慢するかの様に銃撃を気にせずダビデとゴリアテを引き合いに出してそれ等とは違うと口にし丸鋸を地面に擦り付けながらイーサンと葵に向かい始める。

対するイーサンと葵はそんな大それたモノでは無い、只の人間だと叫んだ上で此処で終わりと宣告し互いのマグナムを頭部に向けて発射。

それに合わせてマキ、イヴ、B・Yも頭部に銃撃と手榴弾やグレネードランチャーの爆撃を頭部に炸裂させる。

『ズドオオン』

『グアアアア!!?』

ぐうう………ふう、あばよ、イーサン・ウィンターズ達!

俺の話に乗るべきだったな!』

『う、うわあああ!!?』

それ等が炸裂し大ダメージを負った変異ハイゼンベルクだが、再び中央に向かい一呼吸入れると磁力を最大限にまで強め金属類を持つイーサン達全員が浮く程の磁界を作

り出す。

葵は他の全員をサイコキネシスを使い引き寄せ、更に自走砲が浮いたのも確認してそれを引き寄せイーサンに操縦桿兼引き鉄を持たせ自分達も操縦席付近にしがみ付く。

そうして変異ハイゼンベルクの頭上で舞い、当のハイゼンベルクもプロペラを頭上に展開し互いに迎撃の準備を始める。

『ははは、あの世で娘を待つてろ！』

ローズの力は俺が頂く、ミランダ毎潰してな!!?』

『…(´)愁傷様!!?』

『ズドオオオオオオオオオオ!!?』

『グアアアア?』

止めろ…嘘だ…こんな奴等にやられる筈は…まだ…俺は…ミランダを…!!?』

『ドオオオオオオオオオン!!?』

変異ハイゼンベルクはそのプロペラで吸い込み全て粉微塵に切り裂こうとしたが、イーサン達は示し合わせたかのように言葉を使い自走砲の主砲でプロペラを破壊しそのダメージが決め手となり変異ハイゼンベルクはミランダへの復讐の未練を垂れ流しながら爆散する。

一方地面に落ちた5人は自走砲や他の大きな金属類に潰されず立ち上がり此処に最

後の貴族ハイゼンベルクは倒れ、その機械脳の結晶はイーサンの手に戻される。

すると葵の通信機から通信音が鳴り、周波数を合わせて通信に出る。

『アオイ達、今の爆音はハイゼンベルクをやったんだな？』

「はい、これで四貴族は全て倒された事になりましたね。」

同時に菌根が完全に覚醒するトリガーが揃いました…」

「クリス、後はオメガ小隊…アオイの姉達が来るまで退避する、だから合流地点を」

「あああ、あ、ああああ…」

通信はクリスからの様でハイゼンベルクの排除完了を確認し、葵がそれにYESを出してミランダの主要な僕は死に絶えた事を告げ、次にイーサンが合流地点を決めようと言話を進めようとする。

すると近場の薪台から赤子…イーサンは聞き間違えないローズの声を聞き、しかし此処に居る訳が無いとして銃を構えながら全員で警戒を始める。

すると薪台から鳥が飛び立ち、その視線の先にミア…ミアらしき人物が立っていた。揺らぐ木の根の様な物を背景にしながら。

「ミア…いや、お前は…！」

『イーサン？』

まさか…！

逃げろ、今直ぐ逃げるんだ!!?」

「大事だろう?」

私達の娘は?」

「ああ俺の全てだ、そしてお前の娘じゃない…!!?」

イーサン達は現れたミア:否、ミアに化けた『その者』の正体に勘付き銃を構えながら受け答えをする。

クリスは通信先で状況を察知し逃げろと叫び、B・Y・とマキは隙を窺い始めるが木の根:菌根が動き始めている為タイミングが限られると思ひ、対する葵とイヴは地面に既に菌根が周りを囲みだしていると透視と特異菌で察知し逃げられないとして何時でもサイコキネシスや銃撃を放つ用意をしていた。

「ふふ、それは違う、私にとつてもだ。

それで、ハイゼンベルクを消し、それから如何する?」

何か手があるのか?」

「ああ、お前が障害だと恐れてこの村に来させなかつた連中が今から村に来る!」

ソイツ等や此処にいる仲間、クリス達と一緒にローズを取り戻してやる!!?」

「ふつ、そうか…だが愚かだな。

妻に入れ替わっても気付かずに……哀れな…イーサン」

ズ邸を入れれば更に十回や老婆等を合わせれば更なる数の敵の首魁、菌根を操る者、マザー・ミランダと相對する事になるのであつた。

EP XX 『襲撃、そして…』

「くっ、ミランダ!!?」

『バチバチ、ズダアアアアアアン!!?』

「ッ!!?」

『ボシユン、ドオオオンツ!!?』

ミランダの出現で逃走経路を塞がれたイーサン達は最早目の前に迫ったこの女に背を向ける事が自殺行為だと悟り、イーサンは再び2丁拳銃やマグナムで、葵は片手でペンドラゴンを撃ちつつ更にサイコキネシスを掛け、マキはレールガン、イヴはグレネードランチャー、B・Yはドラグーンと自身の出せる最高火力でミランダを攻撃し、その身体を風穴だらけや関節を変な方向に捻じ曲げたり等をして攻撃を加えて行く。

「ふふふ、気は済んだか？」

ならば止めて置いてイーサン・ウインターズ、アオイ・コトノハ達。

お前達の武器やアオイ・コトノハ、失敗作の力のみでは私は殺せない」

「なっ、レールガンを受けても死なないなんて……化物にも程があるでしょ……!!?」

「…チッ!!?」

やっぱり茜達の力が必要か…!!?」

しかしそれ等全てを平然と受け切り、ダメージを負わせた所でミランダはその場で傷だらけの身体を瞬時に回復させ、試しては無いがドミトレスクでもレールガンを受ければ無事では済まないにも関わらずそれすら超える再生能力を見せ付けイーサン達に攻撃は無駄だと思ひ知らせて全員の心に絶望感を叩き込ませる。

「クソが…!!?」

「ふふふ…所でイーサン、特異菌の力を持つエヴリンを覚えているか？」

ローズはその力を引き継いだ、いや…あの子はエヴリンや其処のエヴリンと同じ失敗作のイヴすらも凌駕するだろう。

あらゆる者の精神を操作出来る…その肉体が欲しい!」

「黙れイカれ女め!!?」

『カアア、カアア!!?』

するとミランダは余裕を見せ付けながらイーサンや葵達すら把握していなかったローズの力を語り始め、その力がエヴリンやイヴを上回る事を淡々と語り出し、そして自身の子を取り戻す為にその力と肉体を奪おうと言う狂気を見せ付ける。

イーサン達は怯まず、代表としてイーサンが悪態を吐くがその瞬間ミランダは烏に擬態しイーサンは見失ってしまう。

しかし葵は透視で見逃さず真つ先に銃を向け警戒を始める。そのお陰かイーサン達もその方向を向き警戒心を高める。

「心配は要らぬ、ローズは復活する。」

この菌根は全て記録しているのだ。

村人に死も、例えば貴様達が此処で死のうともその意識も記憶も…。

そして、ローズはその時私の娘として生まれ変わる！」

「ローズは俺の娘だ、お前の子じゃない!!？」

「死んだ人は生き返らない、貴女の子供も死んだままよ!!？」

『バサバサバサ!!??』

ミランダは語り続け、ミアの姿に擬態しながら菌根は全て記録しているとし、更にイーサン達が死ねばその記憶も意識も記録されるとも話を続ける。

更にミランダはモローが明かした自身の子を蘇生する為にローズを使う事も語るとイーサンがすかさずローズは自身の娘だと主張し、其処に葵が死した者は生き返らないと付け加え2人でその身体を押すと再び鳥に擬態、またイーサン達は見失いかけるが葵が再び視界に捉え続けた為全員でまたその方向を向く。

「何故ローズが誕生したのか、両親に因子があるのか？」

イーサン、お前もまた興味深い存在だ。

だがお前の力は把握出来た、モルモットとして生かして置く必要も無い」

「あのクソババアも…いや、それよりもミランダ、臆病者め！」

隠れてないで出て来い!!？」

「…ダメ、周りの特異菌の反応が強過ぎてミランダを追えない！」

アオイ、ミランダは何処!!？」

「今のは、まさか地面の菌根と同化して…イーサン!!？」

『ブスツ!!？』

更にミランダはあの老婆の姿に擬態し、葵とイヴ以外はあの老婆もミランダだったと把握し、ハイゼンベルクの言う通り全て踊らされていた事を察知する。

そしてミランダはローズが誕生した理由を考察し、イーサンを生かして置く必要は無い!!この場で始末すると宣告する。

イヴも周りの特異菌の反応が強過ぎる為それがジャマーになりミランダを追えず、今度は葵も地面に広がる菌根と同化してその姿を見失いながらミランダの言葉からイーサンの身が危険と直感で判断し彼の方を向く。

その刹那、地面から手がイーサンに伸びて心臓を鷲掴みにしながらその目の前にミランダが現れる。

「が、ああ…!!？」

「恐れるなイーサン、死は一瞬だ。

菌根はお前も記録する……………!!?」

何故抜け、いや、何故私は手を離し……………そうか貴様か、アオイ・コトノハ!!?」
「…イーサンの方を向いて正解だった、お陰でサイコネシスを掛けられるタイミン
グが合った……………ミランダにも、イーサンにも!」

ミランダはそのまま驚掴みにした心臓を引き抜こうと力を込めるが何故かその右手
が引き抜けず、それ所か心臓を掴んだ指すら離してしまふ現象に見舞われ此れを葵が
やったとして憎々しく睨み付ける。

すると葵はイーサンが危険だと判断した自身の判断が間違っていないなかったとしてサ
イコネシスをミランダ、更に心臓の血管が一部切れたイーサンに掛ける。

そしてミランダを引き剥がすと同時にイーサンの切れた血管や心臓の血流を操り血
が胸に穴が空いた分しか漏れなくさせつつイーサンの心臓を正常に動かさせていた。

「イヴ、イーサンの胸に早く回復薬を!!?」

「っ、うん!!?」

更に此処で葵はイーサンの近くに居たイヴに胸に回復薬を掛ける様に命じ、それに反
応したイヴは回復薬を2本も使い心臓の血管とその周りの穴が空いた皮膚や骨を癒着
させ、イーサンの傷を完璧に回復させることに成功させる。

「ガハツ、ガハツ!!?」

うつ………済まないアオイ、イヴ……!」

「……ミランダ、イーサン達が受けた傷の分を今此処で受けなさい!!?」

『バキバキ、グジュグジュ、ブシユウツ!!?』

イーサンは穴が空き、微量の血が体内に残った為それを咽せ吐き、意識を朦朧とさせながらも葵とイヴに感謝しつつまだ抵抗の意志を見せ膝を突き構えが不安定になりながらもサターンを構える。

そしてイーサンの安否を確認した所で葵は無駄だとも腹の底で分かりつつもサイコキネシスでミランダを捻じ曲げたり引き千切ったり内臓を潰したりとやりたい放題やり、更に脳まで潰す行為にまで及びミランダを殺そうとしていた。

「葵、援護する!」

マキはイヴと共にイーサンの退避を!!?」

「了解、イーサン逃げるよ!!?」

其処にB・Y・が葵の援護の為に再び銃撃を開始しつつ、マキにイヴと共に戦闘不能になったイーサンを退避させる様に命令し、マキはそれを受諾。

2人でイーサンの肩を背負いその場から逃げ出そうと引き歩き出す。

「小賢しい小娘だなアオイ・コトノハ、矢張り貴様から殺さねばこの場の全員を殺せぬ

か……だが油断したな!!？」

「つ、イーサン、マキ!!？」

『ドツ、グシャアアア!!』

「イ、イヴウウ!!？」

それ等の光景を首を捻り切られてはその場で即座に再生して首から下が切り離せないミランダが葵がこの場の中で最も厄介な事を再認識し、葵から殺さないと全員の始末が不可能だと口にする。

が、葵が自身に気を取られ過ぎた事を油断と称した瞬間、イヴがイーサンとマキを突き飛ばすとその足場からイヴの身体を貫く様に菌根が伸び彼女に重傷を負わせ、それを見たマキは叫び意識が朦朧とするイーサンも無言で手を伸ばしていた。

「イヴ!!？」

くっ、この!!？」

『バキバキ、ドオオオン!!？』

「うっ、ガハッ、グボツ!!？」

うっく……」

『バシャバシャ!!？』

葵はイヴが菌根に貫かれた光景を見るとその菌根をサイコキネシスで折りイヴに刺

さったモノを、イヴが回復薬を持ったのを確認して引き抜き彼女は自力で穴の空いた右胸や足等に回復薬を掛け、更にイーサンを伴ったマキが更に回復薬を掛けてイヴを再生させる。

そして傷が塞がった瞬間ダメージの為にイヴは意識を失い、更にイーサンも朦朧とする意識を繋ぎ止めるので必死であり、自身の全体重をマキに掛けてしまったイヴを守れない事に不甲斐無さを感じていた。

「如何だアオイ・コトノハ？」

貴様が無駄な抵抗をするからこうなるのだ。

更に…」

『ズバアアアアアア!!?』

「うっ!!?」

「ッ!!?」

其処にミランダが葵が抵抗をするからこうなると理不尽な宣告をし、更に此処でミランダは菌根を数本操り銃撃をしていたB・Y・やマキ、更にイーサン達の周りに菌根を突き刺す寸前で止めて彼等4人全員を人質に取る。

それを見た葵はミランダを憎々しく睨むが、ミランダにとってそれは既に虚勢と化しサイコキネシス下でも邪悪な笑みを浮かべていた。

「さあ如何する？」

「このまま無駄な抵抗を続けて仲間を粗末にするか、それとも抵抗を止めるか？」

「……………くつ、なら私から狙いなさい！」

貴女にとつてこの中で一番邪魔なのは私、他は何時でも殺せるなら私の方からにして！

それとも貴女はイーサンの言う通り臆病者なのかしら!?？」

「はははは、勇ましい、いや蛮勇だなアオイ・コトノハ！」

その発言は癪に觸るが、良いだろう。

望み通り貴様から殺してくれよう！」

『グサアアアア!!??』

葵は選択の余地の無い選択を迫られ、サイコキネシスを解きながらもミランダにとつてこの中で脅威なのは自身だとハッキリしてる為か挑発を掛け、他の4人が狙われず自身のみが狙われる様に仕向ける。

その行動にミランダは高笑いで返し、望み通りと菌根を葵の腹に突き刺し、その菌根を自身の下まで伸ばし葵を眼前に引き寄せる。

「あ、葵いいいい!!??」

「クソ、未だ時間が掛かるのか!?!?」

それを見たマキはミランダの方を向きながら葵に手を伸ばしの名を叫ぶ。

B・Yも腕時計のタイマーを見て残り25分もあるオメガ小隊現着予定時刻に焦りを感じ、葵が折角繋ぎ止めた自分達の命を粗末にしない様に踏み止まりながらもそれには限界があり、雨に混じり嫌な汗が頬を伝う。

「ゴフツ!!?」

「ア、アオ、イ……クソ、が……!!?」

『ズダンッ!』

葵は腹を突き刺された事により吐血し、その血がミランダに掛かるがそのミランダは邪悪な笑みを浮かべながらそれを見ていた。

一方マキがミランダの方を向いたお陰で葵とイヴの2人に命を繋ぎ止められ、マキに左肩を支えられたイーサンはフリーの右手で意地で持っていたサターンを1発再び発砲しミランダの脳天を撃ち抜く。

が、まるで効果は無くミランダは何時でも屠れるゴミを見る目でイーサンを見つめていた。

「無駄だ、止めて置けイーサン。」

折角この女や失敗作に繋ぎ止められた命を粗末にするのか?

私はそれでも良いぞ、折角のこの女の頼みを無碍に扱うのもまた主導権を握る私に与えられた権利なのだからな」

「イ、イーサン、マキさん、B. Y. さん、私は大丈夫ですから…イヴを…!!？」

「く…クソ…俺は、何て、無力、なんだ…!!？」

仲間も…娘も…誰、も、救え…ない…!!？」

ミランダはイーサンに対し1回だけの警告を発し、菌根を更にその喉元と心臓付近に伸ばしつつ何時でも殺せる事を強調して来る。

其処に吐血し、ダメージを負った葵から気絶中のイヴを守る様に頼み込まれ、イーサンは自身の無力さを口にしながらダランと右手を下ろし何も救えないと悔しさを滲ませる。

そしてそのイーサンが感じる悔しさは今立っているマキやB. Y. も同じであり、齒を軋ませながら葵がこれからミランダに公開処刑されるのを見せ付けられる事や無力さを抱いていた。

「さてアオイ・コトノハ。

今の攻撃で内臓は2つか3つ貫いたにも関わらず平然とするその耐久性、矢張り貴様は此方側の者であり厄介な戦力である事に変わりない。

だが、菌根から素晴らしき力を受け賜うた私と違い貴様は死ぬ瞬間がある事は

把握している。

脳を少々欠損しようとも再生するが、その脳を含めた頭部全体を破壊し、心臓を同時に潰せば確実に殺せるとな。

故に処刑方法として菌根で脳を破壊し切り、我が手でその心臓を握り潰してくれよう！」

そしてミランダは葵の不死性にも限界がある事を高らかに、4人に聞こえる様に声で発し、その間も身体を小さな菌根で貫きながら身動きを取らせぬ様にし、そして頭部の完全破壊と心臓を潰す事でより確実に殺せると笑いながら宣告し、その為の巨大な菌根を出現させつつ右手を構えていよいよその処刑を繰り出そうとする。

「葵!!?」

「葵つ!!?」

「アオ……イ……!!?」

マキ、B・Y、イーサンはそれぞれ葵の名を叫びその処刑を止めようと再び3人で、特にイーサンは最後の力を振り絞り銃を構えて発砲しようとした。

一方葵は自身の死自体は恐れてないが、此れからミランダは間違い無く自分を殺した後イーサン達を殺すであろうと考え、それが頭を過ぎる度にまたマキ達の様な悔しさを滲ませながらミランダを睨み付けていた。

「さあ死ぬ、アオイ・コトノハ！」

安心しろ、菌根がお前を記録し、その後イーサン達も記録するのだからな!!？」
そしてミランダの宣告の下菌根がいよいよ勢い良く葵の頭部に向かい、処刑が開始された。

その言葉には葵の想定通りこの後イーサン達も殺害する事を仄めかしながら。

その言葉を聞き葵が更に悔しさに表情を歪ませる中遂に菌根が眼前に迫る………その瞬間、何かが高速でその場に接近し、イーサン達や葵を突き刺したり頭を潰そうとした菌根がミランダの足毎凍り付きその場で静止し、更に周りの雨も氷の粒となり地面に落ち始めた。

更にミランダの目に高速で接近した2人組の姿が映る。

「なっ、貴様達は」

『はあ!!?』

『ドゴオ!!?』

ミランダがその2人の者に驚愕した瞬間、その2人は葵以上の、人間離れた圧倒的な怪力でミランダを殴り付けて地面と氷で癒着した足がその威力でミランダ本体と碎かれながら離れ離れになり、葵の頭を潰そうとした巨大菌根を巻き込みつつ10m以上も吹き飛ばされる。

「あ……お姉、ちゃん……良かった……た……」

「……遅かった……じゃ、ないか……」

そしてその葵と瓜二つの女性……琴葉茜が妹の葵やイーサン達を見渡した後力強くオメガ小隊現着と叫び、ベリリーやカルロスを含めた全員がミランダに向けて銃を構え、デルタチームもデルタ4のレールガンやハウンドウルフ隊も銃を構え、茜やもう一人の女性、ヨナの真横にクリスが立ちミランダと対峙する。

それを見た葵は安堵し、イーサンは少し軽口を叩いた後気絶し、意識が絶たれる。しかし、その表情は先程までの苦々しさは無い爽やかな物であった。

「おのれ、小賢しい者共め。」

何故貴様達が此処に居る!!？」

「私達はまんまと貴女の作戦に引つ掛かった。」

けれどちよつとしたタレコミで全速で本部に帰還、その後補給を済ませて再び全速力でアオイやイヴ達の下へ来たのよ。

まさかミランダ、貴女がアオイ達を襲つてる最中とは思わなかったけれどね
！」

「しかも予定より20分以上早い、良く間に合わせてくれた…すまんアカネ、ヨナ、
ピリー、カルロス。

さあ、反撃の狼煙は上がった！

ミランダ…今度こそケリを付けるぞ!!？」

凍つて碎かれた足が再生したミランダは気絶したイーサンや葵達を他所に憎々しげ
に茜達を見渡すと、ヨナが誰とは言われないがタレコミにより本部に帰還しそれから村に
着いた事を告げる。

更にクリスが予定より20分以上早いとまで口にする、B・Yは腕時計のタイ
マーを止めてリセットし、現時刻の表示にしながらクリスの横に立つ。

そしてクリスが力強くミランダにケリを付けると宣言すると全員が銃を構えて戦闘
態勢に入る。

その瞬間この工場跡地を含む村全体に地震が発生して辺りを揺らす。

「…ふつ、菌根が完全に目覚めたか。

貴様達が居るのはやや気掛かりであつたがもう遅い。

夜明けが訪れれば我が儀式は完成し、我が大願は成される！

此れまで長かったが遂に我が願いが叶う時が来た！

ローズを依代に漸く我が子と再会を果たすのだ!!？」

『バサア、カアカアカアカア!!？』

「待てミランダ!!？」

クソ!!？」

しかしその地震をミランダは菌根が完全な覚醒を果たしたと判別し、自身の大願………イーサンにとっては勝手に娘を巻き込んだ、クリス達には村人達やローズ、四貴族すらも使った狂った実験が完成する事を告げると鳥に擬態しクリス達を置き去りにしその場から立ち去ってしまう。

それをクリス達は憎らしげに見ながらB. Y. が現時刻を見ながらヨナの力で雨が氷の粒となるその場でクリス達に話し掛け始める。

「クリス、夜明けまで数時間だ、如何する？」

「……つまりは未だそれまで猶予があるとと言う事だ。

夜明け前までに装備と体力を整えてミランダ襲撃と菌根の破壊を行う！

それまで迂闊に奴を刺激して此方が全滅するのを防ぐぞ、良いな！」

『了解!!？』

B. Y. が現時刻をクリスに知らせ、この後の方針を如何にするかを問うとクリスは

焦らず現実性がある案を出し、全員にそれを周知させるとデルタチームにオメガ小隊含め全員が了解と復唱する。

すると茜は葵を抱き抱えながらクリスに話し掛け始める。

「それなら撤退したイータ小隊の置き土産やウチ達の持つて来よつた装備や弾薬を扱うておくとええで。」

それと、葵達は何するんや?」

「イーサンや葵達は俺達とは別の安全な場所に一旦避難させて、もしも目覚めたら俺達と合流させて一緒にローズを取り戻す様にする。」

それまではマキが護衛をする事にした方が良い。

マキ、文句は無いな?」

「無いよ、突撃部隊と一緒にさせたらイーサン達が寧ろ危ないし、なんなら護衛も付けないから私が適任だつて分かるよ。」

代わりに隊長に茜達、失敗しないでよ?」

茜は気絶した葵達を如何するかとクリス達に問うと、B・Y・が自分達とは別の安全地帯に移動させてマキを護衛にすると話し、マキもそれに理由も話しながら了承する。

その代わりにマキからB・Y・達に失敗すると言われるとクリス達は全員力強く頷き返す。

「それじゃあ各自で行動しましょう！」

アカネ、マキと一緒にイーサン・ウィンターズ達を運ぶわよ」

「分かつとるで。」

葵、今は少しゆっくり休むんや。

ウチ等がローズまでの道を開いとくからな」

「んしよ、じゃあ一旦任せたよ皆……」

そうしてヨナの言葉を皮切りに各自が行動を開始しヨナはイーサンを、茜は葵を、マキはイヴを抱き抱えながら安全地帯へと連れて行き始める。

その中でマキは一旦退避する自分達の代わりに任せたと全員に告げると、その全員が無言で頷きながら工場跡地を後にし、それぞれが定位置や安全地帯へと移動を始める。

こうしてイーサンも葵達もギリギリの綱渡りを仕切り生き残る事になった。

此れより始まるは雌伏をしていた者達の反撃の時間である。

それから数時間が経過し各自装備を整え、少々の休憩を挟み体力を回復させ葵達を安全地帯に避難させた後、クリスの車にB・Y、茜、ヨナが乗り込んでおり作戦開始の合図を待っていた。

そしてクリスはタブレット端末を取り出すと3人も取り出し始めた。

「全員装備を整えたな？」

なら画面を共有し、状況を振り返ろう。

昨夜、俺達はミアに化けたミランダを始末したが奴は生きていた」

『死体にまで擬態出来るとはな』

「俺達はローズとイーサンを移送した、ミランダが感染させた可能性があつたからな。

B・Yもその場で説明しようとしたが矢張り妻に化けた奴を撃つた事でイーサンは逆上しており、無理矢理運ぶ事になった。

アオイ、マキ、イヴの3人を護送車に同伴させてな」

クリスは今までの事を振り返り始め、始まりであるミアに化けたミランダがウインターズ家に侵入し、ローズを攫おうとした所を振り返り、画像を次々に変えて行きB・Yのイーサン説得の失敗から無理矢理の移送、葵達の同伴とそれを見送るクリス達の

画像が映っていた。

更にクリスは会話を進める。

「だが護送車が襲われ、アオイの提案でマキ、イヴ、そして渦中にあるイーサンを引き連れて攫われたローズ奪還作戦が決行され、B・Y・達が囚役を買い俺達はミランダの目的の更にその先を調べる事になった。

そしてミランダはローズを使い自身の子の蘇生を図っている事を知れた。

最後に四貴族全てを倒した直後、ミランダはイーサン達を襲った。

アオイ達のイーサンへの対応、アカネ達が既の所で間に合い幸いな事にイーサンが死ぬ事は無かった。

だがローズを自らの欲望のままに使う事、護送車の隊員や村人達の命を弄んだ事は許されない、報いは必ず受けさせる」

更に葵が撮影した護送車の写真やその後の経緯を話し始め、其処にはイータ小隊とデルタチームがライカンと戦う場面や、葵が撮影した注釈付き画像、ハウンドウルフ各隊員が写した物等が流れ最後は重傷を負いつつも生き延びたイーサン、葵、イヴがマキ、茜、ヨナに安全地帯に運び出される画像で締め括られていた。

そしてクリスは多くの命を弄んだミランダに報いを受けさせると話して煙草をB・Y・と共に蒸し始める。

「…イーサン達を守れたとは言え、一体何時まで続くんだ…」

『何の事だ？』

任務か？』

「全てだよ。」

俺達が事件を追って3年、B S A Aのベイカー邸事件発端の隠蔽を含めたら6年半位経つぞ。

俺達は時間を掛け過ぎた、そのツケがローズ誘拐を奴に果たさせた事だ…」

「せやな、だからこそ此処でカタあ付けんといけへんや。」

B・Y・さんもミア・ウインターズの事を諦めてへんやろ？」

クリスが1つ愚痴を溢すとクリスの部下の1人が反応し、それをB・Y・が横から答え1つの事件を追うのに時間を掛け過ぎた事を話す。

其処に茜も加わり故に此処で全てを片付けなければならぬと話し、且つ葵達の頼まれ事だったミアの件を未だ諦めてないと聞きB・Y・本人は無言で頷いていた。

そして、それ等を通信で聞いていた全員が同じ思いを抱いていた。

『『スクアッド』なら何時でも行けるぜ』

『デルタチームもだ、隊長行こうぜ』

『オメガ小隊も行ける。』

ハウンドウルフアルファ、デルター1、オメガ1、オメガ17』

「了解よ、行きましようアカネ、クリス、B・Y。」

それから通信機から力強くハウンドウルフ隊、デルタチーム、オメガ小隊が出撃可能だと告げられるとヨナの言葉を皮切りにクリス達は車から出る。

すると空から輸送機の音が聞こえそれを見やると、B S A Aの機体が村に向かって飛んで行く。

「B S A Aのお出ましか。

流石早いな」

「繋がってたハイゼンベルクが死んだんだ、そりゃ慌てて来るだろうさ、ふん」

「任務変更は？」

「いや、変更は無しだ。

ミランダを始末し、ローズを救う、ただそれだけだ。

もう失敗は出来ない」

「じゃあひと暴れするか、昔みたいにな」

クリスはB S A Aの対応の早さに皮肉混じりで早いと言うとB・Yが裏で繋がってたハイゼンベルクが死んだ事で慌てて来たと分析をして毒気吐きながら2人で煙草の火を消していた。

其処にハウンドウルフのスナイパー『アンバーアイズ』、通信兵『ケイナイン』、機関銃を持つ『ロボ』、隊の若手の『ナイトハウル』、女性隊員の『タンドラ』等全員に加えデルタ3と7、ビリー、カルロスを含めたオメガ小隊も集結し茜達を含め頭を戦闘モードに切り替える。

『任務開始!!?』

『了解!!?』

「ケイナイン、BSAAの動向が知りたい、探ってくれ」

「了解！」

任せな」

そして各隊の隊長から任務開始を合図に各隊員が合流しつつ展開し、クリスは事前の打ち合わせ通りにB・Y・茜、ヨナとフォーマンセルを組み正面突撃し、これまでの調査で漸く突き止めた菌根本体の大体の位置に向け進軍を始める。

その中でクリスはケイナインにBSAAの動向を探らせる任務を与え、それにデルタ5に加えオメガ14、15も加わる。

此れにより勢力図はクリス達ハウンドウルフ+B・Y・達デルタチーム+茜達オメガ小隊対ミランダ対BSAAの三つ巴となりいよいよ以て決戦の火蓋が切られるのであった。

其処にケイナインがミランダがミアに擬態してた事を初めは半信半疑だった事を告白し、ナイトハウルもウィンターズ邸やハイゼンベルクの工場で銃弾を頭も含めて数え切れない程受けたのに生きてる事を不気味がり、茜がその声にウィルス完全適応者として自分達以上の化物と称し、改めてミランダの恐ろしい能力に説得力を持たせる。

そして村に続く小高い丘にアンバーアイズやデルタ6にオメガ13達が村をスコープで覗いていたが、クリス達が来た事に気づき其方を向く。

「おいアルファ達、見てみる」

クリスはアンバーアイズからライフルを受け取るとスコープを覗き見し、B・Y・や茜達はバイザーで村を覗き込む。

すると其処には菌根本体とその地下にあると思われる共同墓地から巨大な菌コロニーが隆起し、更にはBSAAが村に火を放ち初めから生存者の有無の確認もしない無差別攻撃を仕掛けてる場面が4人の目に映る。

「BSAA…此処までするとは…畜生」

「やっぱBSAAと距離を置いて正解だった訳だよクソが」

そしてBSAAの機体の1機が菌コロニーの根で払われ墜落し、クリスはそれ等一連の光景を見て思わず悪態が飛び出し同じくBSAAだったB・Y・も同じ感想を抱き表情を歪ませていた。

「まるで地獄だな、如何やって目標に近づく？」

「先ずはアイツを片付けないとな」

「援護は任せろ、さあ行こう」

「ええ行きましょう……この事件に終止符を打つ為にも」

アンバーアイズはこれ等を地獄と呼称しつつ、目標たる菌根とミランダに如何に近づくか4人を見ながら問うとクリスは巨大菌コロニーの破壊を先ずは先決と判断する。

其処から4人は狙撃組と分かれて正面から突撃すべく銃を構えて丘を降り始める。すると直ぐにライカンの群れが現れクリス達に襲い掛かり始める。

「敵性B・O・Wの集団とコンタクトした！」

『予想より数が多い、気を付けろ！』

『此方デルタ3、ロボやオメガ3達とともにこっちも化物共と遭遇した、全員気を引き締めな!!?』

クリス達とライカンが接敵すると同時にナイトハウルやロボ、デルタ3やカルロス達も同時接敵し、想定以上の数にそれぞれが苦虫を嘔み潰しながらライカンと戦闘を開始する。

正面突破のクリス達はドラグーンやサジタリウスのフルオートを正確に頭部にヒットさせながらライカンを絶命させて先へと進軍し、他の隊員達が置いた第1物資ポイン

トに辿り着く。

『西ルートクリア、先行する』

「了解」

『BSAA機を見つけた、警備2人……ふっ、行けそうだ』

「油断しない事よ、相手は素人では無いのだから」

するとタンドラから同行したデルタ4達と共に西ルートを制圧し先行する連絡が入り、更にケイナイン側からもクリスが与えた任務の1つであるBSAAの動向調査から着陸した機体を見つけ、オメガ14達と共に制圧を開始しようとしていた。

其処にヨナが油断せず行く様忠告を入れつつ物資を回収。

直ぐ様近場の門を開ける……その瞬間地面から菌根が地面から隆起し、更に改めて菌コロニーを目視する。

『何だあのキモいのは？』

『あれ全て……特異菌か……？』

『マジかよ……ドンだけだよ……！』

「恐らくミランダも彼処だ、急ぐぞ」

ロボやナイトハウル達はその巨大過ぎる菌コロニーに絶句し、同行しているビリーやカルロス達も言葉を失い掛けていた。

その直ぐ後にクリスが気合入れとして急ぐ様に指示すると各々が動き出し、菌コロニー…其処に居るであろうミランダや菌根本体を目指し更に歩を進め出す。

そのクリス達の前に今度はヴァルコラックの群れが現れ行く手を阻む。

「大型の変異種B・O・W.を確認！」

『菌の微粒子で汚染されてるかも知れない、マスクは外すなよ？』

「こいつ等がイータ小隊を苦戦させたつたヴァルコラックつちゆう奴かいな！」

ほらワンちゃん、ウチが調教するから掛かって来いや！」

クリス達がヴァルコラックと戦闘を開始した直後にナイトハウルからマスクを外す事をせぬ様に全体に忠告をする。

その間にB・Y.とヨナ、クリスは自分達が相手する分を撃ち殺すが茜は弾が勿体無いかからかヴァルコラックを素手で相手取り、葵を超える圧倒的な身体能力で自身の分も直ぐ様片付ける。

しかしBSAAが村を焼いた為火の手で正面から進めなくなっており、クリス達は止むを得ず迂回を開始する。

『隊長、俺だ。』

今から砲撃支援の準備に入る、時間をくれ』

「了解！」

『此方タンドラ、奥の廃屋に物資を置いておく。

自由に使って』

「あんがとタンドラ！」

その迂回ルート進行中に如何やらロボ達が砲撃支援に入るらしく、その時間を稼ぐ様にクリス達に要求する。

更にタンドラ達は物資を置いて行きクリス達に使わせる様にしながら進撃していた。それからクリス達は物資を回収しつつ近場の廃屋からライカンを排除しつつ更に進行する。

「アンバーアイズ、捉えてるか？」

『ああ見てる、目標まで200』

「よし、ならさっさと雑魚を蹴散らして先に進むぞ!!?」

『此処まで巨大な特異菌コロニーは聞いた事が無い』

「ええ、私達もよ！」

アンバーアイズから目標まで距離200と聞きB・Yはライカンをドラグーンの掃射で片付けルートを確保し、通信機からナイトハウルが目の前に広がる巨大特異菌コロニーに脱帽していた。

其処にヨナもダールトン一族テロ未遂事件を皮切りにA・B・Fで取り扱った特

異菌事件でもこんな物は自分達すらも初めてだと叫びつつライカンの群れを凍結させ
砕きながら4人で進む。

『良く見えてるぜ隊長達、突っ込みな！』

「了解！」

『おふくろが見たら死んで地獄に来たと思うかもな！』

「せやな!!？」

ロボがそのまま突っ込む様にクリス達に叫び、次にアンバーアイズがこんな光景を母親が見たら地獄に来たと勘違いすると軽口を叩くと茜も同意しつつ大型ライカンを含めた群れを全て打ち倒し、遂に共同墓地前の女神像の広場：巨大菌コロニーの目の前まで到達する。

「目的地に到着、デカ過ぎるな…。」

良いぞロボ、座標にぶちかませ！」

『了解！』

ボス！」

『外すんじゃないぞクリスとロボの旦那方？』

クリスは菌コロニーの巨大さにやや脱帽気味になるが、直ぐ様ターゲットロケーターを使用し始め、ロボに砲撃ポイントを指示し始める。

B・Y：茜、ヨナはクリスに邪魔が入らない様に防衛しつつ周りを警戒し、その間にカルロスが茶化しを入れていた。

そしてロボの砲撃が菌コロニーへと一直線に向かい直撃する。

『ビンゴ！』

やっただぜ！』

『群れがそつちに向かった』

「ええ、見えてるわナイトハウル！

アカネ、B・Y、クリス、先ずはライカン達を粗方片付けてからもう一度ロボに砲撃させるわよ!!？」

『了解!!？』

ロボの砲撃が当たるや否やライカンの群れが出現し、クリス達に襲い掛かり始める。

ヨナはこれではロボがリロードを終えてもロケーターで指示を出せない為粗方片付ける方向で話を進め、クリス達もそれを承諾、ライカンの群れを撃破し始める。

『タンドラ、10体以上此方に来たぞ。』

片付けるぞ』

『無論よオメガ2、デルタ4達』

『ちつ、こつちも来た。』

菌が猛スピードで増殖している、何かが刺激してる影響だな。

アンバーアイズ、オメガ6、10、13、デルタ6も遅れるなよ!」

更にタンドラやビリー、ナイトハウル達側にもライカンの群れが現れいよいよ地獄が更なる深淵を覗かせる様相を呈しアンバーアイズ達スナイプ組に忠告を入れて彼等もそれぞれを援護すべく無言で狙撃を開始していた。

一方クリス達も茜の身体能力やヨナの氷、B・Y・達との連携でライカンの群れを片付けるとクリスが再びロケーターのレーザーを菌コロニーに照射、そしてロボが再び砲撃を加える。

『またヒット!』

はっ、倒壊寸前ってとこだな』

『こう言う時に限って更に攻撃が激しくなる、全員油断するな』

『BSAAがB・O・W.と交戦してる。』

奴等の狙いも矢張り菌根みたいだな』

「はん、想定通りってとこだな!!?」

『奴等だ、囲まれるなよ』

ロボの砲撃でいよいよ菌コロニーが破壊寸前に至ると、ビリーが周りに油断するなと告げてライカンの群れを掃討し始める。

するとケイナインからBSAAがライカンと交戦し、菌根が狙いだと憶測を立てるとB・Y・が毒気を吐きながらアンバーアイズからライカン、更には再び現れたヴァルコラックまで現れたと連絡が入り囲まれぬ様に相手取り始め、正面突撃4人組は能動的にそれ等を撃破し始める。

『何れだけ居るの？』

全員無事？』

『菌から湧き続けている、此奴はキリが無いぞ』

『チツ、特異菌由来だからモールデッドと全く同じ性質を持ちながら戦闘力はあれ等より上で菌ネットにデータがあればコピー可能って訳か！』

『勘弁してよー！』

余りの数にタンドラから連絡が入り全員無事の確認をするとアンバーアイズからライカン等が菌から湧き続けている事が告げられ、カルロスがモールデッドを引き合いに出しつつそれと同じ性質且つ上の戦闘力を持つと叫び、タンドラも先行突入していたイサンや葵達、囷だったB・Y・達が何れだけ苦労してたか理解して愚痴を零していた。

『うおっ、此奴等武器も使うのか！』

『ふっ、向こうもそう思ってるさ』

「B・O・W・達の切れ目は…今やクリスさん、ロケーターを!!？」

「ああ!!?」

ケイナインが軽口でライカンが武器を使う事に驚いているとナイトハウルも向こうも同じと軽口で返し合ひまだまだ余力がある事をそれぞれが示し合わせる。

それ等を聞いて他も負けてられないと感じ銃撃を続け、更に茜が正面から来るライカン、ヴァルコラックの群れの切れ目をサジタリウスを乱射しながら観察し、その時が訪れた事をクリスに叫びロケーターで再び菌コロニーにレーザーを照射。

そしてロボの3発目の砲撃が直撃、菌コロニーが周りのB・O・Wを巻き込み爆散する。

『ドカーン!!?』

はは、ざまあみろ!』

「良くやった、菌根はあの下だ」

「ふう、取り敢えずは此れであのクソ忌々しい人狼共の勢いが削がれる筈……」

ロボが菌コロニー爆散を喜んだるとクリスが辛い、B・Yは中心となつてた物が吹き飛んだ事でライカンの勢いが大分削がれる筈と汗を掻きながら口にし、此れで途中撤退したイータ小隊の無念を晴らしたとまで思いながらクリスの後に続き、菌コロニーがあつた場所にポツカリと空いた穴を見つける。

「地下へ侵入する、お前達は地上で待機してろ」

「デルタもだ、まだまだライカンは残ってるしBSAAが此処に近付かせない様邪魔してくれ」

「オメガ小隊もウチとオメガ17で突入する、他はハウンドウルフとデルタチームの援護や」

「ふう、なら早く行くわよ皆」

正面突入組の4人は穴の内部へと侵入し、部下達には地上で待機しつつBSAAの菌根接近阻止を命じてその勢いのまま奥へと侵入する。

だが、その直ぐ先の開けた場所にて葵達が倒したウリアシユに鎧を着せ、巨大なモーターリングスターメイスを持った大型のB・O・Wがクリス達の行く手を阻む。

「菌根を守る番人か！」

「あんさんを相手しとる暇はウチ達には無いんや、さっさと片付けたるわ!!？」

菌根の番人に対しクリス達は銃撃を開始するが鎧が邪魔で身体に傷が一切付かず、メイスを振り下ろして来た瞬間茜とヨナがそれを怪力で受け止め投げ飛ばし、唯一剥き出しの背中の中の弱点を見つけ4人で一気に撃ち込むがこのウリアシユはそれ等に怯まず再びメイスを振り回してクリス達を翻弄する。

「これじゃ埒が開かん。」

ロボ、少し手こずってる、お前の手を借りたい！」

『正気か？』

其処は地下だぜ？』

「天井が開いている、其処から撃て！」

『そっちへ移動する、それまで辛抱してくれ』

「よし、ロボが来るまで攻撃するぞ茜、ヨナ!!？」

クリスはこのウリアシユをさっさと片付けるべくロボに再び砲撃させる様に指示を出す。

その指示にロボも少々引き、地下の為砲撃で崩れかねない可能性を頭に入れるがクリスは天井から直に撃つ様に指示を繰り返しメイスを避けながら攻撃する。

それにB・Yも続き、茜とヨナもその身体能力で一瞬で背後に周りアルビオンやサジタリウスを乱射しウリアシユにダメージを蓄積させ続ける。

『あんな達の真上に着いた』

「よし、ロケーターで指示する!!？」

「クリスさんの時間稼ぎするで皆!!？」

そうしてロボが真上に辿り着くとクリスはすかさずロケーターを取り出し、茜達はクリスがウリアシユにロケーターを照射し続ける時間を稼ぐべく連携した動きを取りつつ背中にもダメージを蓄積、更に茜がその怪力でメイスを受け止めた瞬間それを奪い取

り、鎧のウリアシユに何度も叩き付けた後ヨナに投げ渡し彼女もそれで怯ませる。

此れが出来るのも一重に葵を上回る身体能力を持つが故である。

そしてロケータターのレーザーを照射し続けた結果鎧のウリアシユの頭上からロボの砲撃が直撃、そのまま倒れ込む。

「やったぞ、効いたか?」

「見る限り効いてるっぽいが!」

「…ふん、ほら返すわ、貴方の得物」

鎧のウリアシユにクリス達が与えた以上のダメージが入りクリスも流石に効いたかと叫び、B・Yも警戒しながらその様子を見ていた。

するとヨナがメイスを鎧のウリアシユに投げ返し、それを受け取ると近場の茜、クリスに叩き込もうとするが直ぐ様結晶化し、ボロボロになって崩れ去った。

「…敵性B・O・W、排除。」

このまま進む、お前達は上で待機してろ」

そして番人が消え去った事で横穴を塞いだ菌の根が崩れ去り、クリス達4人はその横穴を見ながら部下達に上で待機する様に命じ奥へと走り出した。

『ミランダがミアに化けていたなら本物のミアは?』

「地上には見当たらなかった、だから残るはもう地下しかあり得ない。」

生きている可能性が低くとも、僅かな可能性に、イーサン達が俺達に託した願いに賭けたい」

ケイナインがミランダのミアへの擬態から本物のミアは何処にと零すと、それをイーサンや葵達から託されたB・Y・が僅かな可能性に賭けたいとミアの事を未だ諦めていない事を告げながら先へ先へと進む。

『だが分からないな、ミランダは如何やってローズの事を知った？』

『菌目当ての『お友達』から？』

「その『お友達』も如何に情報を抜いたかが懸念材料よ、もしも私達全員の憶測が正しいなら……」

「後で調べれば済む、作戦に集中しろ」

更にナイトハウルがミランダが何故ローズを知ったかと話すとタンドラは『お友達』、コネクションから知ったと推論を出すとヨナがそれが作戦内でも懸念材料と話し、A・B・F・や今作戦に協力した全員が立てた憶測が正しいなら……そう話した直後にクリスから作戦に集中する様に注意され4人は走りながら奥へと走る。

そして大きく開けた場所に出て……遂にそれを発見する。

「あつたぞ、此れが菌根か……」。

此方ハウンドウルファルファ、菌根を発見した」

『これで全て終わりに出来るな』

「せや、漸くや」

クリス達は地下に蠢く赤い物体：菌の根の大元、菌根を発見したと全体通信を入れアンバーアイズも全て終わらせられると呟くと、茜が腕を組みながら漸くと答え他の3人も同感であった。

その間にクリスはN2爆弾のパーツを組み立て終わると菌根に向かって投擲、そしてそれが刺さりピッピッと音を鳴らし起爆の時を待っていた。

「クリスがN2爆弾を設置した。」

此れで村に根ざした菌糸毎吹き飛ばせられる」

『直ぐに離脱して起爆を』

「ミランダが未だだ。」

今度こそケリを付ける、このまま進む」

『了解。』

それから隊長達、祭祀場にミランダを確認した』

「監視を続ける、俺が指示するまで手を出すな」

クリスのN2爆弾設置からアンバーアイズが離脱して起爆を提案するが、クリスはミランダが未だだと一蹴する。

自分達の手で全て終わりにすべく更に奥へと進み始めた。

これにはB・Y・達も同感で、ミランダがこの爆弾で殺せなかった可能性を考えてその手で抹殺の道を選ぶのだった。

更にアンバーアイズからミランダが祭祀場に居ると確認し、この奥を見るなら好都合だとして走り始める。

『それにしても、イーサンに何もかも話しても此れじゃあアイツが報われないぜ』

「だが葵達はその命を繋いだ、後はミアを見つけ出すだけなんだ…彼は本当に報われるべき人間なんだ、ずっとB・O・W・と戦い続ける道を選んだ俺達とは違う、普通の日常に居るべき存在なんだ」

「ああ、だからこそミランダとはさっさとケリを付ける……イーサンにこの『呪い』は選ばせる訳には行かない」

奥に進み始めたと同時にアンバーアイズがイーサンに粗方説明して此れでは報われないと零すとB・Y・が葵達が命をギリギリ繋ぎ止め、後はミアを見つけ出すと僅かな可能性に全てのコインをベットし、更に自分達とは違う日常の世界を生きるべき人間なのだとも口にして報われるべき存在だと強調する。

其処にクリスも加わり、この『呪い』である戦いをイーサンに伝播させぬ様にすべく奥にあった扉を開く。

すると其処は、地上に無かったミランダ自身の大掛かりな研究室であった。

「此れはミランダの研究室？」

「なら丁度良い、手分けして調べろぞ」

「せやな。」

ウチは其処の机を、B. Y. さんは反対側を、クリスさんはこの正面の机を、ヨナは残った机を」

クリス達はそれ等を見てそれぞれが手分けして調べ上げ始め、クリスは正面にある机の4つの本から四貴族のミランダの評価を目にし、ドミトレスクやハイゼンベルクと言ったカドウ適合率が特に良好な存在でも最後の一文には『エヴァの器には不適』と添えられ、クリスはこのエヴァと言う名がミランダの子の名前だと判断する。

「カドウが大量やな…B. Y. さんそっちは如何や？」

「ミランダの奴、スペイン風邪が流行っていた時代から生きてて偶然菌根と接触して村の人々の精神を操作してたらしい。」

娘の名前はエヴァ、儀式の内容もローズを菌根の制御器である聖杯で復元して一体化させるらしい、其処からエヴァの意識を引き抜く気だろう。

更にエヴリンはエヴァの胚に特異菌を用いてコネクションが作り上げた失敗作とかも書かれてるし、1番知りたかった何処でローズを知ったのか…それがコネク

シヨンから情報を得たつて記されてる！

だがコネクシヨンがローズの事を知つてたとなれば矢張りBSAAから情

報が…」

「ちよつと皆、此れを見て!!?」

茜はカドウや今までのB・O・Wのデザイン画等を見て辟易しつつ反対側のB・Yに話をする、彼の口からミランダが100年以上生きた怪物であり、そんな時代から娘のエヴァ蘇生を図つてたと知り怖気が走り、更にはコネクシヨンがローズの事をミランダに伝えたと同時に話し全員の憶測から立てられた懸念材料：BSAAからの情報漏洩が現実味を帯びたと告げた瞬間、ヨナから全員を呼ぶ声が響き3人はその机に集まる。

其処には手紙と写真があり、クリス達はその手紙を読み愕然としていた。

「…何だよ、これ…我が師ミランダ?」

雑事に忙殺、雪道で死に掛けた医学生?

生物を感染によつて変異させる事に感銘を示して、それが自身の理想である

『人類の高次への進化』を体現させる手段…?」

「せやけどミランダは娘のエヴァの蘇生、コイツは人類全体の進化と思想の違いから村を出てつて、専攻のウイルスによる爆発的感染が相応しいと判断…」

そしてアフリカの奥地で始祖たるウィルスの発見、研究基盤となる企業もお友達と興す予定、その名前はアンブレラで洞窟の紋章が由来、その理想実現が近付いて来た、全てはミランダの教えがあつてからこそ……終生の師に敬慕を込めて、『オズウエル・E・スペンサー』……まさか、葵達が興味を引いた昔村の外から来た奴つちゆうのは……!!?」

「スペンサーが、村に？」

馬鹿な……」

クリス達はその手紙の送り主がアンブレラ社の創始者であり、あらゆる者の運命を狂わせたスペンサーである事を知り愕然とし、ヨナすらも言葉を失い、CLOWN事件が起きる原因だったスペンサーの理想、その手段を見出したのもミランダがスペンサーを救い、その研究成果を彼に教えた為であつたのだと。

そう、この村こそがポイントゼロ、発端の更なる深淵、全ての始まりであると知りクリス達は信じられないと言つた表情を浮かべ、だが情報は残さねばと茜が写真を撮りそれを保存した。

『カラン！』

「誰が居る……！」

すると奥の牢屋から何か金属物が転がる音がし、クリス達は警戒しながらその牢の鍵

を破壊し、侵入する。

その瞬間右からパイプを手にクリスに殴り掛かろうとした女性が居り、クリスはそれに即座に反応してパイプを弾き飛ばして4人は銃を構える。

その女性の姿形はイーサンの妻『ミア・ウィンターズ』ではあるが、ミランダが擬態している可能性があり警戒心を解けなかった。

「手を上げろ！」

アンバーアイズ、ミランダは今何処に居る!?!？」

『未だ祭祀場だ、何かの準備をしてる模様』

「……………て事は、本物なんだな。」

良かった、本当に良かった…僅かな可能性が現実になった……………初めましてだ
ミア・ウィンターズ、俺はB・Y、こっちは茜とヨナ、皆クリスの仲間だ、安心してくれ」

クリスはアンバーアイズからミランダが祭祀場にいると聞き一息吐き、B・Yも漸くイーサン達のオーダーを達成出来た事にホツとし、自己紹介をしてクリスの仲間だと話し警戒を解かせた。

「無事で良かったミア、だが如何して此処に?！」

「突然捕まって…色々検査された」

『ミアと言ったか？』

ミア・ウインターズ？』

クリスはミアにこんな場所に何故居たかを問うと、ミアも状況を上手く把握出来ておらずミランダ達に突然捕らえられて誘拐された事を告げる。

するとアンバーアイズがミアの名を聞き驚き、通信機からはデルタチームからは安堵、オメガ小隊やハウンドウルフからは困惑の聲が上がりその生存にそれぞれが驚いたと言った感想を示していた。

「ああ本人だ、そっちの状況は？」

『宛ら戦争だが何とかかなりそうだ』

「任務を優先なさい、私達は此れからミランダ抹殺の為祭祀場に向かうわ」

「待つて、此処に置いて行くつもり？」

クリスはアンバーアイズから状況確認をすると、如何やら地上は何とかなりそうだと話されるがヨナが任務優先を呼び掛け、そして4人で祭祀場に向かう事を告げる。

すると背後からミアの抗議の聲が上がり、4人は其方を向く。

「約束したはずでしょ、私達の事を守るって！

全て貴方の言う通りにした、こっちに引越したのだから…。

家族と一緒になら…それで良いと思つたから！

ねえ答えて、夫は…今何処に居るの！

私の娘は何処!?？」

「イーサンは、この村にローズや君を救いに来ている」

「えっ…?」

ミアはB S A時代のクリスから言われた通りにした事を告げ、それも家族と一緒にやらそれで良いと判断したからだとも話しイーサンやローズの行方をクリス達に投げ掛ける。

するとクリスはありのままに、イーサンがこの村にやって来てローズを救いに、ミアを探す為に居ると目を見て話していた。

「俺達はアンタに化けたミランダを殺そうとして失敗してローズを誘拐されちゃった。」

けど茜の双子の妹の琴葉葵や俺の部下の弦巻マキ、そして葵の後輩で、昔はエヴリンと同じ存在だったイヴと一緒に粗方の事情を話して、アンタの生存が絶望視されてるにも関わらず俺にミアを探してくれて最後まで諦めずに願いを託してくれたんだ」

「んで、ローズちゃんは今ちよいエグい状態になつとるけどあんさんも多分分かつてるやろ、ローズちゃんが特別な力を持って生まれた事を。」

そのお陰でしつかり生きとる。

ウチ等はミランダのババアを抹殺するんやけど一緒にローズちゃんを奪い返したるで」

「イーサンは重傷を負ったけど、既の所で命を繋ぎ止めて今は安全地帯で仲間が守つてる。

そしてもしも作戦の最終段階中に目覚めたら：共にローズを取り返す約束をしてるわ」

更にB・Y・はイーサンは最後までミアが生きっていると諦めず自分にその願いを託して探索させたとし、茜はローズが正確な状態は暈しつつその力で生きている、ミアもローズがその力を生まれ持つて誕生した事を知ってたと推察しながらミランダを殺すと共に奪い返すと話す。

最後にヨナがイーサンが作戦中に目覚めたら共にローズを取り返すとして話を締め括り彼女に状況はもう最後の方にまで進んでいる事を察しさせる。

すると大きな揺れが部屋を襲い、菌根の覚醒率が更に引き上がった事をクリス達は察する。

「ミア、来い。

此処ももう危険だ」

「待つて、イーサンは本当に来ているの？」

「ああ、E型菌が残留してて身体で結構無茶をしたがな……さあ早く此処から逃げるん」

「待つて！」

「違うの……」

クリス達はミアを引き連れ最早何時崩れるかも分からない研究室から脱出しようとするが、ミアは未だイーサンが来ている事が信じられない様子で引き止めると、B・Y.がE型菌が残留した身体で無茶しながら戦って来た事を仄めかして走ろうとした瞬間、4人はミアに違うと言われて立ち止まり彼女を見やる。

「違う？」

「何が違うんだ？」

「……本当は隠し通したかったけど、其処まで知られてるともう隠せない……貴方達は彼が本当に特別だつて知らないのよ……」

クリスの問いにミアは彼女自身の中で隠し通したかった事、しかし多くの人に目撃され最早隠せないと悟り、イーサンに隠されていた事を話し始める。

その内容はクリス達も驚く想定外の内容だった……。

EP XXI 『イーサン・ウィンターズ』

ミランダからの心臓への直接のダメージ、四貴族やライカン等との戦いによる疲労、茜達の到着への安堵から深い深い眠りについていたイーサンだったが、目覚めた瞬間見た事も無い場所に居り困惑していた。

「う、うう……如何なっているんだ……アオイ、マキ……イヴ……」

「ふふふ、ふははは……」

「誰だ、誰が居るのか……?」

すると葵達では無い誰かの声が響き、イーサンは立ち上がるが周りは雪、そして右側は川で左右何方も先が見えない程霧が濃く、何処を歩けば良いのか分からない状態と化していた。

「寒い……如何してこんなところに……?」

クソ……凍えそうだ……。

畜生……体が……うう……」

アテもなくフラフラと歩いていたイーサンだったが、身体中が凍える様な寒さに襲われて足が覚束無くなって行き、遂に倒れ掛けてしまい膝と手で身体を支えなければなら

ない程に身体を動かす事が出来なくなってしまう。

「バカみたい、お前」

「その声は…『エヴリン』？」

如何してこんなところに…？」

そして先程の声の主が哀れむ様な、蔑む様な声でイーサンに声を掛けて来る。

イーサンは眼前の先を見ると其処には3年半前に自分が殺した生体兵器、E型被験体第1号『エヴリン』が立っていた。

更に表情は分からないが確かな声でイーサンに衝撃的な事を口走る。

「お前は、死んでる」

「死んでる…？」

何言ってるんだ…俺は、確かにミランダに心臓を抜かれ掛けたが、アオイ達のお陰で…。

いや、仮にそうだとしてもダメだ、俺はローズを、助けに…」

「違うよ、ミランダの所為じゃない。

お前は、ずっと前から、死んでる」

「何を…何を言ってるんだ、俺は…くっ…」

エヴリンはイーサンが死んでいる、それもずっと前から話し、イーサンはとても信

じられず身体を無理矢理動かして前に進もうとしたが思う様に身体が動かさず遂に倒れ込んでしまう。

そんな顔や目すら動かせないイーサンの目の前までエヴリンは歩いて近付き、その眼前には彼女の黒い靴があった。

「ほらね、ミランダに殺されたんじゃない。

1度も可笑しいと思わなかったの？

今まであんなに傷付いて来たって言うのに？

思い出して」

エヴリンの1つ1つの言葉は自分が否定したい、見て来なかった部分を刺しその声に導かれある光景がイーサンの中で思い浮かぶ。

それは3年半前、自身やミア、生き延びた『ゾイ・ベイカー』を苦しめ悪夢のドン底に突き落とした家、イーサン達の運命を弄んだベイカー邸の風景だった。

「3年前のあの日、ベイカー邸で……お前は、ジャックに、殺された。

お前はとつくに、死んでたんだ」

そしてその中で特異菌で可笑しくなったミアを止む無く攻撃し、左腕を切り裂かれながらも彼女を撃ち活動停止させた直後に背後からベイカー邸の主人でゾイの父『ジャック・ベイカー』が現れ、イーサンに右ストレートを入れて更に追い討ちのストンプを加

え、次の自身が覚えてる光景は別館から本邸に足を掴まれ引き摺られて行く物だった。つまり、エヴリンの言い分ではジャックの攻撃で絶命したとイーサンに言葉を投げつけているのだ。

「いや、そんな馬鹿な…あり得ない…」

「だから動ける筈が無いんだよ」

「いい加減な事を言うな…!」

「動ける、筈が、無い!」

「分かる?」

イーサンはその衝撃的な告白に心が絶望感に蝕まれ、否定をし続けてもエヴリンは動ける筈が無いと言い続け、その結論を曲げようとはしなかった。

そしてイーサンは自身の中には絶望に苛まれながら声を荒らげ始める。

「巫山戯るな!」

「じゃあ…今までの、俺は…いや、俺…俺は、自分で…」

「ローズ…ミア…俺は…」

イーサンは絶望感の中でも脳裏にローズの無邪気な笑顔、ミアとの思い出が通り腕に力を込めて地面を握りそして立ち上がる。

だが、その瞳に右腕がカビ…特異菌塗れであり、その姿はまるでモールドッドとも言

うべき物に変貌している事に驚きながら手を挙げ始めてそれを見る…その中でもエヴリンはイーサンの心を抉る言葉を言い放つ。

「分かったでしょ？」

お前の体は全部カビで出来てるんだよ。

ふはははは、お前はもう2度と家族には会えないよ」

「家族…？」

お、俺の家族…!!？」

駄目だ、ローズ…ローズを…助けないと…俺の…、娘を…」

「お前はもう死んでる、死んでるんだ！

あつはははは、はははははは！」

イーサンはモールデッド同然の自身の身体を何とか動かそうとするも膝を突き、手で這いずらせながら前に進む事しか出来ず最早満足に動かせぬ身体に鞭打ち再び立ち上がらせさせる。

その間もエヴリンはイーサンに死んでると言う事実を突き付けその心を、精神を、全てを抉り出す。

そうしてなんとか立ち上がりその視界にエヴリンを映しながら前へと進み出す。

「俺が、ローズを…必ず…助ける…!!？」

「…そう、貴方の手でローズを助けるのよ、イーサン・ウィンターズ」
「…誰だ、お前！」

エヴリンの背後から光が刺しながらその方向に決意を口にしながら向かい始め、嘲笑うエヴリンを他所に視界を光で遮られながらも1歩1歩確かに歩く。

そんなイーサンとエヴリンの間に突如、イーサンがこの激動の1日で見知った顔が其処に現れ、エヴリンも驚きながらその少女を見た。

「…初めまして、エヴリン。」

私は……………E型被験体第2号、イヴ……………貴女の後には生まれた、E型菌を操る者にして、大切な人達に人の心を教えられて人の道を進む者よ」

「なんだ、何なんだそれ!!？」

お前は、『此処』に何の権利があつてやつて来た!!？」

何をしに来たんだ、お前!!？」

「…勿論、イーサンを呼び戻しに来たの。」

私の、私達の大切な仲間を」

エヴリンはイヴの存在に激昂し、『此処』に来られたのが余程気に入らなかつたのか、又は自身とまるで逆の道を進んだイヴへ嫉妬したのかエヴリンはイヴを指差しながら何をしに来たと叫ぶ。

対するイヴは何時もの無表情に近い冷静な顔と声でイーサンを呼び戻しに来たと口にしてイーサンをジッと見ていた。

「イ、イヴ……俺、俺は……」

「……大丈夫、今までのやり取りをちゃんと一言一句聞いていたから。

イーサン、貴方は確かにモールデッドの様な存在……うん、E型菌に完全適応してしまつた者かもしれない。

でもねイーサン、貴方には奥さんのミアが居て、娘のローズが居て、それで全部だつたでしょう？

だから貴方は貴方、例えベイカー邸で1度は死んでしまつても……貴方は、私達と一緒にローズを助けようと『生きて』奮闘しているあの子の最高の父親、私達を知るイーサン・ウィンターズなの」

イーサンはイヴにエヴリンが告げた事を口にしようとしたが、イヴはそれらを理解しながら1度は死んだ事を受け入れながらも、それでも今までローズの為に奮闘し今もそう言う存在、ローズマリ・ウィンターズの父親であり自分達を知るイーサンであり、其処に加えて『生きて』と言う言葉を添えて今までエヴリンに決り取られた心を埋めながら表情の见えないエヴリンと違い確かな笑顔をイヴは見せていた。

「イヴ……俺は、『生きて』、いたんだ……？」

「…うん、『生きて』る、私達と出会った時も、ローズが生まれた時も、ベイカー邸から出た時も……そして今も」

「違う、ソイツは死んでるんだ!!?」

もう2度と家族に会えるもんか!!?」

「…ううん、生きてる。」

私には、私達には聞こえる、彼の心臓の鼓動が…『人の心』がローズを助けるつて訴え掛けてる事を。

だから…行こう、皆が待つてるよ」

イヴはエヴリンと違いイーサン・ウインターズは生きていると話し手を添えながら、彼を見据えながら今まで『生きて』来た証を立てた事を話した。

更にエヴリンの言葉を否定し、イーサンが持つ『人の心』が大切な娘を助け出そうとすると訴えてる、その為に心臓が脈打つ事を口にしながらイーサンの手を持つと2人の身体が重力に逆らい浮いて行き更に光もイーサン達を祝福するかの様にエヴリンの背後からイヴの後ろに周り回り一面の霧を晴らし、エヴリンの表情を…嫉妬と、何処か悲しみに満ちた表情を露わにした。

「ま、待て、待て!!?」

イーサン、お前、お前は!!?」

「…エヴリン、お前とは最悪な記憶しか無いが………ある意味お前が居なかつたら俺はミアを救えず、ローズが生まれて来なかつたかも知れない。

だから……最悪過ぎる記憶の存在でしか無いが、お前を忘れない。

お前がやった事も、言っていた事も全部」

エヴリンは手を伸ばしながらイーサンとイヴを憎らしげに見つめるが、イーサンはその存在が悪辣で自身のトラウマでしか無い存在だが、それでももしも彼女が居なければ今が無いとして忘れない事を告げる。

それらを口にして行く中でイーサンの身体はカビ塗れの物から人間のそれに変わって行きローズを取り戻す決意に満ちた瞳でエヴリンを見つめた。

「…さようなら、私と同じで、真逆の道を進んでしまった可哀想な貴女。

もしかしたら私が辿る道だったかも知れない『人』………私の、『お姉ちゃん』」

一方イヴはエヴリンを自身のifとして語り、だがそれでも、可哀想な存在だったとしてもそれまでは生きた『人』と呼び、そして『姉』と言う言葉で締め括り優しげな瞳でエヴリンを見ていた。

それらを見て聞いたエヴリンは様々な感情が渦巻く瞳で2人を見ながら涙を流し、イーサンとイヴを見送りながら影となり消えて行き、そして周りの風景も朝の陽射しに

包まれながら消えて行き、其処でイーサンの意識は白い光に包まれながら途切れて行った。

あの光景を、エヴリンの呪いの言葉やイヴの祝福の言葉を脳裏に刻みながらイーサンは目を覚ますと身体は不意に揺られ、目の前には葵とマキが立ち、横には同時にイヴが目を覚まして3人は笑みを浮かべた。

「アオイ、マキ、イヴ…此処は…？」

「漸くお目覚めですかな」

「デューク…？」

周りは見覚えが無い物がぶら下がり、更に馬の蹄の音が聞こえて何なのか気になり出した所でデュークの声が聞こえ、此処が彼の馬車の中だと気付き、葵達に視線を合わせた。

「いやあごめんなさい、あの後気絶しちゃって1時間で目を覚ましたんですが、もうお姉ちゃん達が作戦準備に入ってイーサンとイヴを守らなきゃってマキさんと一緒に身

構えてたんですよ」

「んで2人が目を覚ささないで更に数時間位経過したらデュークが来て、『お2人は必ず目覚めます、なので馬車にお乗りください、行くべき場所に案内致します』って事で2人を乗せて今がある訳」

「そうか………なあアオイ、マキ、少し話したい事があるんだ、聞いてくれないか？」
 葵は先ずイーサンにいの1番で謝罪し、気絶後に1時間で目を覚ましてイーサンとイヴをマキと共に守ってた事を、マキはそれから数時間後にデュークが来て4人が行くべき場所に案内すると言ひ馬車に乗せて貰った事を明かした。

それを聞きイーサンは安心するとイヴを1回見やり、彼女が頷くのを見ると葵達に自身を意識を失っている間にあつた事、エヴリンから言われた自身の真実を告白し始めた。

「…てな訳で、俺は如何やらベイカー邸で死んでいて、身体はモールドッドの様になつちまつてるらしいんだ。

イヴは『生きて』るって言ってくれたがな」

「そうですか…カール・ハイゼンベルクの言つた面白い身体つてそう言う…BSAAは何処まで隠蔽してたんだか、少し怒っちゃいますね…。

あ、イーサンの身体については何も言う事はないですよ、だってイーサンは

イーサンなんですから……それにしてもエヴリンが……となると深層意識に残存思念が……彼女も報われたら……ブツブツ」

「ふむふむ成る程、イーサンの再生力ってそんな感じだったんだ……」

でもやっぱイーサンはイーサンだし、一緒にローズちゃんを奪い返す事に変わり無しだから一緒に頑張ろうじゃん!!？」

「……軽いな、アオイもマキも」

イーサンは意を決して話した自身の肉体に隠された真実を口にする。すると葵もマキも『イーサンはイーサン』と言って受け入れマキは気兼ね無く手を振られて笑顔を見せ、葵はエヴリンの存在に触れイヴを知っている為か彼女が報われたらと口にしながらBSA Aへの悪態等をブツブツとしながら考え込んでいた。

それを見聞きしイーサンは2人の軽さに軽く笑みを零し、横のイヴは「ほら、大丈夫だったでしょ」と言った笑みを浮かべイーサンを見ていた。

「おほん、皆様のお話が済みましたら私からもお話致しましょう。」

ハイゼンベルク卿とは激しい戦いでしたな、ましてやミランダまで現れるとは」

「最悪でしたよ、ハイゼンベルクを消したら直ぐ動くと思ってたけど彼処まで早いとポロポロになるよ本当に」

「…それで、俺やイヴは何れ位寝てたんだ？」

「もう直ぐ夜明けです」

4人で話に華を咲かせてると其処にデュークが入り込み、ハイゼンベルクとの激闘後にミランダが現れた事を口にする。葵は最悪と称し、マキもイヴも、そしてイーサンもアレで生き残れたのが不思議な程ミランダの力を痛感し、幾らモールデッド同然な自身の肉体を加味しても此れでは勝てないと思っていた。

しかし気絶前に現れた葵と瓜二つの女性…恐らくその女性こそがミランダが恐れた者の一人、葵の姉の琴葉茜だと思ひ、彼女達やクリス達で力を合わせればギリギリ行けるか行けないかと頭の中で計算し、茜達の力に期待を寄せるしか今は出来なかつた。

そしてデュークが行くべき場所に案内すると言つた事で今ミランダの下に向かつてると思ひ座して待つ事にしていた。

「あ、それとクリスさんが渡したタブレットの画像を見て下さい。

其処に希望がありますよ」

「え？」

…このアカネって奴、素手であのヴァルコラックとか言う狼型B・O・Wを殺してるな…レティシア家の当主は氷使い…クリス達は相変わらず強いな…此れが菌根…ん、此れはミランダの研究室…つ、ミア!!？」

「うん、隊長達がミランダの研究室で幽閉されてたミアさんを見つけ出したんだよ。」

そして保護した：もう一度言うよ、ミアさんは生きてる！

だからローズちゃんをミランダから奪い返すだけだよ!!？」

すると葵はクリスから渡されたタブレット端末を開く様に言うと言き、画像欄を見るとクリス達の戦闘場面やB S A Aとの三つ巴等の画像があったり、自分達が苦労したウリアシユの番人版の様な物とヴァルコラックを相手取り圧倒するクリス、B・Y、茜、ヨナを見て脱帽し菌根の画像を見た後ミランダの研究室の画像、そしてミアの姿を写した画像を見て飛び上がりそうになり、マキが残るはローズを救い出すだけとなったと話し自身が諦めなかった可能性が実を結んだ事を喜び、クリス達に感謝し目尻が熱くなっていた。

「…所でデューク、これは聞いても無駄だと思うけど…結局貴方は何者なの？」

「へっへっへっへっへ、私自身も存じかねます。」

期待した答えを出せず申し訳ありませんアーク様、そして皆様。

……さあ、着きましたよ」

「いや、今までの武器弾薬の件諸々も含めてもう気にしないさ、助かったよデューク」するとイヴが気になっていた事の1つであったデュークの正体について、期待してはいないが敢えて問うと意外な事にデュークすら自身の存在を知らないと言いこの答え

に葵も拍子抜け所か更に疑問が生まれていた。

が、今まで商売とは言え此処まで助けてくれたのは事実だとしてイーサンは気にせず目的地に辿り着いた所でマキ、イヴ、イーサン、葵の順で外へと出ようとしていた。

「ウィンターズ様、貴方様はコトノハ様達のお陰で人の世との繋がりを繋ぎ止められました。この先もしもミランダに遅れを取ってしまったら人の世に戻れなくなってしまう。」

「お覚悟は？」

「…ふつ、愚問だよ、そんなのとづくに出来てるさ」

するとデュークが最後の忠告としてミランダに遅れを取る＝死に瀕してしまえば人の世に戻れない…エヴリンの言った様にミアやローズ達の下に戻れなくなると老婆心からか口にし、その覚悟を問うとイーサンは覚悟は出来てると言って馬車から出て聖杯の祭壇へと降り立ち、デュークのシヨップを4人で最後に利用し始めた。

「おお…これは機械と生命のアッサンブラージュ！」

ハイゼンベルク卿の鼓動を感じますな」

「ふつ、最後まで四貴族ソムリエありがとうな。」

じゃあミランダやハイゼンベルクとの戦いで失った分の弾薬等を買って…：

此れでこの店も見納めになるな」

「はい。」

ではどうかお気を付けて…」

「ああ、世話になったな…あつちにはメモと物資が置いてあるな」

デューク ショップを最後に利用した後彼から励ましの言葉を受け取った後物資の方を見ると、貼り付けられたメモ書きに『ウチ等の物資を此処に置くで、葵やイーサン・ウィンターズ達が此れを受け取ると信じて、by：琴葉茜』と書かれており如何やらクリスやB・Y、茜とヨナがイーサンや葵が受け取ると信じて大量の弾薬等の物資を置いて行った事が書かれていたのだ。

そしてこの先に自分達を信じて待つ者が、そして斃すべき存在や取り戻すべき愛しき子が居ると確信したイーサン達はそれ等を取り祭祀場への道を見据えた。

「…じゃあ行くぞ、3人共」

「ええ、最後まで一緒ですよ」

「ミランダの奴へのリベンジマッチと行こうじゃないさ!!？」

「…必ずローズを取り戻そう、『皆』で！」

そしてイーサンの掛け声と共に葵、マキ、イヴは菌根蠢く砦を走って行き、そのまま祭祀場に向かおうとした。

しかし、その行く手を阻む為に菌根から幽鬼が這いずり出てイーサン達の前に立ち

だった。

「邪魔をするな！」

「相手をしてる暇なんか無いんですよ!!？」

「もう私等は止められないよ!!？」

「…処断する!!？」

イーサン達はモールデッドの特性を同時に思い出し、この幽鬼達はドミトレスク城の犠牲者、そのコピーであるとして一気に処断する選択を取る。

イーサンは2丁拳銃で全身を撃ち抜き、葵は蹴り、マキはパンチで石橋の下へ落として行きイヴはカビ剣で頭から胸までを斬り裂いたり首を切断したりと容赦無しに倒し、遂に石階段を登り菌根を力尽くで開くと其処には見聞違える訳の無い存在、ミランダが佇んでいた。

「ああ可愛いエヴァ…私の愛しい娘。

さあ出ておいで…」

ミランダは儀式の最終段階を終え、聖杯を特異菌で満たし自らの力を込めてエヴァの名を呼びそのカビの海から我が子を呼び起こそうとしていた。

そして、そのカビの海からローズの肉体が完全に復元された『赤子』が現れる。
「エヴァ……おまえなのかい。」

ああ！

何れ程会いたかったか」

ミランダはその『赤子』をエヴァと呼び抱き抱え上げると歓喜に満たされ、1000年以上抱いた悲願が今此処に達成されたと心の底から喜んでいた。

……だが此処でミランダに異変が発生する。

「何だ？」

……ああ、ああ！

私の力が奪われて行く！」

ミランダの目から血涙の様にカビの液体が流れ始め、自身の力が急速に『赤子』に奪われて行く事を察知し始めた。

そう、儀式は失敗に終わったのだ。

此処に居る赤子はエヴァでは無い、聖杯で復元され、更にミランダの力を奪い始めたローズなのだ。

そしてミランダの背後から人の気配がし始める……イーサン達が丁度この時に来たのである。

「ローズ！」

ミランダ！！？」

イーサン達はミランダに向けて銃を構えて陣形を取り、威嚇し始める。

すると葵はミランダの目からカビの液体が流れている事に気付き、更にイヴはミランダの力が急速に弱まって行き、逆にローズの力が強まるのを感じ取っていた。

イヴは間違い無くローズがミランダから力を奪い出していると察し、此れなら自分達だけでも勝ち目が出始めだと思い始めていた。

「ちっ、邪魔者共めもう来たか！」

「さっさとローズを返せ！」

早く！！？」

「小賢しい、今度こそ息の根を止めて……」

『ズダアアンツ！！？』

「今だ、ローズを！！？」

イーサンは勘からミランダは今は自分達を相手取る暇は無いと感じ此処ぞとばかりにミランダを威嚇し、ローズを離す様に命令し始める。

一方ミランダはイーサンの要求等呑む気は無く、儀式に失敗したなら再び執り行えば良い、邪魔者は消すと言う思考からイーサン達の息の根を止めるべく動こうとした：そのタイミングでミランダの右側頭部に銃弾が命中し血飛沫が上がる。

更にその方向からクリスの声が聞こえ、イーサンは直ぐ様ローズを奪い返し抱き抱えた。

だがミランダはそれすらも無視してローズをイーサンの手から奪おうとしていた。

「くっ、この、離せ!!?」

「この時を夢見て生涯を費やして来たのだ：なのにそれを奪おうと言うのか?」

「この子は：誰にも渡さん：」

「ミランダ、貴女の娘は生き返る事が無かった、その意味を考えなさい!!?」

ミランダは血涙の様なカビの液体を流しながら自身がこの時の為に何れ程の時を費やしたかと身勝手な理論をぶつけてイーサンの手からローズを奪い取ろうとする。

その瞬間葵が何故エヴァが生き返らなかつたのかそれを考えると叫び、イーサンに手を貸してローズをミランダの手に奪わせない様に動き出す。

「黙れ：子供も居らぬ小娘如きが：!!?」

ふん!!?

我が大願が成される時が来たのだ!」

「くっ、止めろ!!?」

『ローズは、この私のもののおお!!?』

しかし子供が居ない、ミランダからすれば小娘な葵がそれを説いた事が逆鱗に触れたのか、菌根を操り2人を振り払うと同時に自身とローズを菌根の中へと取り込ませて行き明らかに変異体へとなる様子が見て取れた。

それと同時に周りの地形も菌で埋め尽くされ、簡単に援護が入れない状況になってしまふ。

「如何なっている!!?」

「ごめんなさい、私が逆鱗に触れてしまったみたいです!!?」

「…イーサン、アオイ、ミランダはローズに力を奪われた状態にあるよ！

つまり、今こそ勝機があつて、ミランダからローズを奪い返せる千載一遇のチャンスだよ!!?」

「成る程だから必死になってローズを…情報ありがとうイヴ!!?」

さあイーサン、葵、私達全員の手でミランダからローズを奪い返すよ!!?」

イーサンが動揺する中で葵がこの状況を作り出した事を謝罪しながら銃を構える。

するとイヴがミランダがローズに力を奪われた状態にあり、今こそローズを取り戻す逆転のチャンスが訪れたと話す。

それを聞いたマキはミランダが葵の言葉に逆鱗を抱いたのは間違い無いがそれ以上に焦っていると判断し、『全員』でミランダを処断しローズを取り戻そうと鼓舞を入れるとイーサン達は一齐に立ち上がり銃を構える。

そうして蠢く菌根が消え、中から翼を生やした神々しくも禍々しい、身体が結晶の様に白くなつた変異ミランダが現れる。

そして今此処に、村を訪れてから為る戦いの最終決戦の火蓋が切つて落とされるのであつた。

EP XXI 『最終決戦』

イーサンと葵達は体勢を立て直し、それぞれ銃を構えて変異ミランダを迎え撃ち始める。

その変異ミランダはまるで踊る様な動きを見せ銃弾を避けては爪や指の伸びた腕で攻撃を始める。

『お前達の役目は終わった、ウインターズ、コトノハ、ツルマキ、失敗作。

我が『偽りの子』等を始末し大いなる菌根を目覚めさせると言うな。

ローズのことなら何も心配要らぬ、私が真の幸福を与えてやるからな。

だからお前達は安心して死ね、永遠にな』

「お前だけは許さない、村人達も含めて全部な!!?」

「敵B. O. W.、変異ミランダと戦闘開始!!?」

イーサン、マキさん、イヴ、全て終わらせるよ!!?」

ミランダはイーサン達の役割を菌根を目覚めさせる為に四貴族を始末した事と定義し、更に本当の親たるイーサンの意志を無視した身勝手な自論でローズを幸福にすると言いつちイーサン達の神経を逆撫でさせ、銃に籠る力が増して行き引き鉄を引く力も相

対的に強く為る。

更にイヴはミランダの事を哀れなモノを見る目で見つめ、カビ剣でカウンターを加え蹴り上げる。

『失敗作如きが、何だその目は！』

何故そんな目で見つめる！』

「…葵の言う通り、儀式は失敗に終わった。

つまり、エヴァは復活を拒んだって事よ。

それを理解せず戦い続ける貴女は哀れよ、ミランダ…！」

『黙れ、この失敗作め!!?』

「此れには完全同意だよ、ミランダ、アンタは何もかも間違えた上に娘から拒絶された、その意味が分からなくなってる時点でアンタは終わってんのよ!!?」

イヴはエヴァが復活しなかった理由を更に根掘り葉掘り考察し、それに気付かないミランダの事を哀れんでいたが既に人では無くなった変異ミランダには通じずイヴに激しい攻撃を加え彼女にカビ盾でガードに回るしか出来ない様にする。

しかしその好きにマキがカスタムショットガンを用いりながら攻撃を加え、イヴと違いもう『終わってる』ミランダに慈悲も何も無く始末しようとする。

すると変異ミランダは地面に潜り、高熱のカビを拡散させ飛ばしてくる。

「それは隙ありよ!!?」

その攻撃に葵が反応して全てサイコネシスで弾き返し、小さな物だがダメージを与え、更にペンドラゴンを右手、サジタリウスを左手に持ちながらそれ等の弾丸を全て変異ミランダに叩き込み大きなダメージを与える。

その瞬間変異ミランダは翼が生えた形態から、黒い6本足の蜘蛛を思わせる足を背中から四方に生やし、イーサン達を見つめる。

『何故諦めないウインターズ?』

子を愛する気持ちはお前にも分かるだろう!!?』

私とて同じ事!!?』

「如何して分からないんだ!!?」

ローズはお前の娘なんかじゃない!

俺の子だ!!?」

「そうです、ローズちゃん、ローズマリィ・ウインターズは貴女の娘では無い!!?」

イーサンとミアさんの娘です!!?」

そんな簡単な事すら分からないB・O・Wは此処で抹殺します!!?」

変異ミランダはイーサンに子を愛する気持ちを話すが、イーサンと葵がローズはミランダの娘では無いとそれを一蹴し攻撃を更に加える。

すると変異ミランダは高く跳び上がり、高台からイーサンと葵に向かってその鋭利な足突き刺そうと跳ね上がりながら向かい始める。

その刹那、祭祀場を覆うカビの壁の一角が完全凍結し、それが外側から砕かれると同時に2つの影が高速移動で葵達の前に立ち、それを受け止める。

茜とヨナが、更にその崩れた壁からクリスとB・Y・が侵入して来たのだ。

「お姉ちゃん、ヨナ!!?」

「クリス、B・Y・!!?」

「イーサン、アオイ、マキ、イヴ、共にローズを取り戻すぞ!!?」

「さあミランダ、ウチ等も含めた決戦や、これで終わりにするで!!?」

葵、イーサン、そしてマキやイヴ達も突然のクリス達の参戦に驚くが、直ぐ様クリスが共に戦い、ローズを救い出そうと叫ぶと同時に茜、ヨナが殴り掛かり変異ミランダを吹き飛ばし更に4人が加わりクリスとイーサン、茜と葵、B・Y・とマキ、ヨナとイヴの2人チームとなりそれぞれ攻撃を避けつつ反撃をタイミングを合わせて行いダメージを与え始める。

『忌々しい者共め、我が大願の邪魔をするその罪深さを悔いながら死ぬ!!?』
 「何が罪深さだ!!?」

他人の娘を攫い、自身の欲望に使ったお前の方が余程罪深い!!?」

ミランダ、今まで弄んだ命の分を此処でその命で償え!!?」

「スペイン風邪で娘を失ったまで同情してやる。

だがその後の所業で全てマイナスに振り切った!!?」

所詮お前は菌根と接触した時点でもう人間じゃない、B・O・W. になつたんだ!!?」

ならば、俺達は只生体兵器の責様を処断するだけだ!!?」

変異ミランダは参戦したクリス達に自身の願いを邪魔する者と忌々しく叫ぶが、クリスがミランダの方が余程罪深いと切り返し、B・Y. は生体兵器と化した者を処断するとバイオテロやB・O・W. と戦い続ける道を選んだ者の覚悟を示しながら銃身が焼き尽くまで手に持った銃を撃ち続ける。

「ウチ等に子を失つてもうた親の気持ちなんか分からへん。

せやけどその子、エヴァが復活しなかつたんならもうそれが答えや!!?」

此れ以上罪を重ねて娘を泣かすなやミランダ!!?」

「私から言える事は一つよ、貴女は狂ってる!!?」

だからこそその狂つたB・O・W. を私達は殺す、この手で!!?」

更に茜は結婚しても無い上に子が居ないからミランダの気持ちは正確に分からないが、イヴと同じくエヴァが復活しなかつた事が全てだと、娘を悲しませるなど叫びその

6本の足を素手で折りながら銃撃を加える。

ヨナは狂ったB・O・W。だと言うシンプルな言葉で処断する宣言をし再生した足を凍結させ、拳や蹴りで碎きながら茜達と共に銃撃をしダメージを与え続ける。

『おのれ、小賢しき者共め、何故私の邪魔をする!!?』

ウインターズ以外は子を失う悲しみを理解していない部外者だと言うのに!!
?』

「子を失うだとかは関係無い!!?」

俺達はB・O・W、生体兵器をこの世から全て消す為に戦っている!!?」

そしてイーサンの娘のローズも取り戻す、そのために此処まで来たんだ!!?」

「せやからミランダ、アンタは此処で抹殺するで!!?」

この手で、必ずや!!?」

蜘蛛形態でクリス達に何故邪魔をするかと問いを投げかける変異ミランダに対し、クリス達はシンプルに抹殺する為と片付け議論など必要無し、この生体兵器を野放しにする訳には行かないとクリス達の正義感が訴えかけ中や拳に力を込めさせる。

その答えに変異ミランダは憎々しげにイーサンを含む全員を睨み付ける。

その間にマキはレールガンに手を掛けるが、ミランダの体内のローズを吹き飛ばす可能性が高い為使えずにいた。

「…マキ、ローズの精神感応かずっと続いている。

レールガンを使っても問題無いから撃つて、あの子が伝えて来てる!!?」
「ホント?」

「その言葉を信じるからねイヴ!!?」

『バチバチ、ズダアアアアアアアアアア!!?』

『グアアア、貴様アアア!!?』

しかしイヴが先程から続くローズの精神感応からレールガンを使っても問題無いと言いつつ、それを信じて即決したマキはレールガンのチャージを開始し、即座に発射する。

変異ミランダの肉体を大きく貫通し、カビの壁すらも破壊するその威力に変異ミランダは大ダメージを受けるが、その体内に取り込まれたローズはイヴの精神感応から全く傷付いて居らず、逆にミランダを盾にして防いでると理解し将来的に未恐ろしい力を持つ事を見抜いていた。

「今だ、火力を集中しろ!!?」

「さっさとローズを返せ、化物!!?」

『ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ!!?』

レールガンでダメージを負った隙をクリスは見逃さずイーサン達を含めて全員で一

斉掃射を加え更にダメージを蓄積させて行く。

するとミランダはレールガンのダメージを再生させた直後、蜘蛛形態から翼を生やした飛翔形態へ姿を変え空を舞い始める。

『菌根が絶望の淵に居た私を救い出し、この素晴らしき力を授け賜うたのだ!!?』

「ああそうだ、菌根の所為でイカれたんだ!!?」

「この天然B・O・Wが、ええ加減ローズちゃんを放せや!!?」

変異ミランダは菌根から得た力を素晴らしき物だと叫び説くが、イーサンは菌根があつたからこそミランダ自身も村人達も全て可笑しくなつたと叫び、茜は今までのウィルス産と違う天然B・O・Wに辟易しつつアルビオンを撃ち込む。

その瞬間ミランダが突撃して来るが、これを茜、ヨナ、そして葵達が受け止めて葵がサイコキネシスで静止させた後、残る2人が目にも止まらぬラツシュを掛け最後に蹴りとサイコキネシスで変異ミランダを吹き飛ばす。

『小娘共め、たかがウイルスに完全適応が出来ただけの分際で我が力に拮抗しようなどど!!?』

「この力があつて良かったとつくづく思いますよ。」

貴女みたいな狂った存在を止める最大限の抑止力になるんですから!!?」

「最も、私達の体内のT—Genesisを作り上げたクズな研究者にしてバイオテ

口犯で、私の人生を滅茶苦茶にした奴だけは何があっても赦しはしないけれども、ね!!
?」

葵、茜、ヨナは変異ミランダの執拗な攻撃を捌き、その力にミランダが苛立ちを覚えていてると葵はこの力が抑止力になれる事を良かったと腹の底から叫びつつ攻撃を避けたりサイコキネシスを加えたりしていた。

一方ヨナはこの T—G e n e s i s を作り上げた琴葉紅だけは絶対に赦さないと公言し、葵達も其処は完全同意であり頭の中に浮かんだマッドサイエンティストを振り払いながら変異ミランダを攻撃し続ける。

「いい加減朽ち果てるミランダ!!?」

お前はもう存在しちやならない生物を逸脱したモノだ!!?」

『黙れ小僧、私の愛しきエヴァを想うこの心を否定し生体兵器と見做し殺そうなどと傲慢な思想を持つ愚か者め!!?』

「アンタが何を思おうと B・O・W. には変わりない!!?」

村人達をあんな目に遭わせて、その上で娘の為とのたまってローズちゃんを食い物にするアンタの方が余程傲慢だ、ミランダ!!?」

変異ミランダがカビの小さな塊を浮かべた所で B・Y. がそれを撃ち落とし、ミランダを存在してはならないモノとして銃口を向ける。

対する変異ミランダはエヴァを想う心を否定しB・O・W・と叫ぶB・Y・達こそ傲慢な愚か者と叫ぶが、間髪入れずマキがその所業を挙げてミランダの方こそが傲慢だと糾弾し返しレールガンを撃ち込みつつB・Y・同様その存在は許されないとして戦闘を続行する。

『ふん、如何に抗おうともお前達も死んで菌根の中を漂うのだ。』

そう…永遠にな!!?』

そうして戦闘が激化する中、変異ミランダは特異菌の球体をを両手に収まらないサイズの物を作り出し、先程の熱カビの巨大な爆弾版をイーサン達にぶつけその破壊力で一気に殺そうと画策して来る。

だが大きな技には隙が必ず生まれる物、それを仲間がカバーして連携し、上手く事を進めるのが定石だがミランダはただ一人しか居ない孤独な存在。

その隙を守る仲間など居ない…故にイーサン、葵、茜がマグナムを構えてそれを狙い撃とうとしていた。

「隙ありなんだよ、ミランダア!!?。」

『ズダンツズダンツズダンツ!!?』

ドオオオオオオオオオオオオオオ!!?』

『グウウアアアアアアアアアア!!?』

そしてその攻撃が活きたのか巨大な特異菌爆弾は変異ミランダの頭上で爆発し、彼女に大ダメージを与え再び最初の形態にまで押し戻してしまふ。

だが此処で変異ミランダは悪足掻きにもイーサンやクリス達全員の視界を奪う為祭壇の灯りを蠟燭頼りになる程の闇に包み込む。

「くっ、視界が!!？」

「…そう、なら!!？」

視界を奪われたクリス、イーサン達は固まり何処からかミランダが襲い来るかを警戒し始める。

するとイヴがローズからの精神感応がずっと続いておりこの状況の攻略法を見出し、グレネードランチャーを閃光弾に切り替えて離れた地面に放つ。

するて暗闇に包まれた視界が元に戻り、其処に地面から変異ミランダが現れ始め今度こそイーサン達を殺そうと動き始めていた。

『もう良いではないか、後は全て私に託すと良い。』

さあ、ゆっくり眠れ』

「そうは行くか…!!？」

「貴様なんかにはローズを託す程俺達は落ちぶれていない!!？」

変異ミランダはその手でイーサンとクリス達を引き裂こうとしつつ、後の事全て…

ローズの事すら含めて託し死ねと命じるが、イーサン達は覚是をながらそれを拒み銃撃を行い変異ミランダを押し返す。

すると再び変異ミランダは地面に潜ると、今度は葵達の方へと襲い掛かり始める。

『死ね、死ね、死ね、死ね、死ね!!?!』

「死ぬんはアンタの方や、ミランダ!!?!」

「此処まで来て死ぬ訳には行かない、だから全力で抵抗するわ!!?!」

茜と葵に真つ先に飛び掛かりその手を振おうとしたが2人に受け止められ、零距离でアルビオンとペンドラゴンの連射をされてしまい変異ミランダは仰け反り、その瞬間掴んだ手を離し双子特有の合いの手無しの蹴りを叩き込み変異ミランダを吹き飛ばす。

その瞬間イヴは変異ミランダにグレネードランチャーの焼夷弾を使い身体を燃やし、ヨナが氷で下半身を凍らせるとマキとB. Y. が同時にパンチを加えて下半身と上半身を分断させつつ蹴りで凍った下半身を砕く。

『私は我が娘を必ずや取り戻す!!?!』

菌根とローズが真に1つになる時、我が愛する娘は再び蘇る!!?!

私は百年待ち侘びた!!?!

百年だ!!?!

今日この日の為に!!?!』

「お前の事情なんか知るか!!?」

俺とミアの娘を、お前なんかに奪わせて堪るか!!?」

「その執念で此処まで生きた怪物だとは認めます、けれどローズちゃんを好きにして良い権利なんか無い!!?」

そもそも村人の皆さんも貴女の玩具じゃない!!?」

再び地面に溶け込み、粉碎された下半身を再生させた変異ミランダは拡散する熱カビをイーサン達に放ち、それを地面から生えた菌根で躲したりサイコキネシスで弾く中、百年待ち侘びた事を叫ぶミランダにイーサンと葵が代表してローズも村人達もミランダの道具などでは無い、奪われてなるものかと高らかに叫び熱カビが出切った後銃撃を再び開始してその身体に銃創を作り上げて行く。

『村人も、4人の新たな『子供』も、百年に渡る我が孤独を埋める事は無かった!!?』
「それがお前の本質だからだよ!」

お前は誰も愛せやしないんだ!!?」

「そして何より貴女の本質はハイゼンベルクの様な奴にすら、恐らく四貴族全員に見抜かれてた!!?」

貴女と言う存在は矢張りこの世に在ってはならないですよ、マザー・ミラン

ダ!!?」

ミランダは村の統治者『マザー・ミランダ』として作り上げた村人も四貴族も孤独を埋める事は無かったと主張するが、イーサンはそれを踏まえて本質だと、誰も愛せない狂った者と言い切る。

其処に葵も加わりハイゼンベルクや他の貴族達にすらその本質を見抜かれてた事を推察し、その上で娘一人に執着して村人の運命を狂わせたマザー・ミランダを在つてはならない存在と結論付け、サイコネシスで腕を捻じ曲げ引き千切つたりした後にペンドラゴンを放ち更にダメージを与えその身体に深刻なまでに傷を負わせ、此れ以上は最早耐えられぬ程のモノを遂にイーサン達は負わせた。

『もう良い、遊戯も此処までだ!!?』

「うおあつ、くつ!!?」

「なつ、クソツ、イーサン!!?」

「畜生菌根が…!!?」

変異ミランダは祭祀場全体の菌根を操り全員を拘束し、特に抜け出せそうな葵達は念入りに拘束し片腕すら使えず、ヨナに至つてはイヴ共々菌根の分厚い壁の中に閉じ込めて出られぬようにしつつ、クリス達も菌根で拘束し誰一人イーサンを助けられぬ様にす。

そうしてイーサンも足等に巻き付いた菌根をナイフで切り取り、腕を自由に動かせる

イーサンはマグナムを3発ヘッドショットするが、ミランダは構わずイーサンの右手を切り付けつつマグナムを弾き飛ばしイーサンの武器を1つ失わせる。

しかしイーサンは次に使う武器は決めており、デュランダルとサターンの2丁拳銃を腰のホルダーから取り出し構える。

「村人の、ルイザやエレナ、レオナルドの爺さんやグリゴリの爺さん達全員の無念を思い知れ、ミランダアアア!!?」

『ズダダダダダダダダダダダダダダダ、ズダンツズダンツズダンツズダンツズダンツズダンツ!!?』

『ぐううううう、この、程度オオオオオオオオオオ!!?』

2丁拳銃で、特にサターンを弾切れになるまで撃ち続け村人全ての無念を銃弾1発1発に込めて撃ち込んで行き変異ミランダの身体中に風穴を開ける。

だが百年の妄執を抱き続けたミランダを殺すには未だ至らず、再び変異ミランダはイーサンの武器を弾き飛ばしてしまい残りは背中にある武器だけだが其方は菌根で縛られてる故最早ナイフ1本しか使えぬ状況に陥ってしまう。

「クソがつ、此処まで来て!!?」

『ハアアア…!!?』

『イーサン!!?』

イーサンは此処まで追い詰めてなおミランダを殺し切れぬ事を無念や事情の無力さに怒りを覚え、目の前の変異ミランダもいよいよ止めを刺そうと両手を構える。

その瞬間イーサンの横から茜、葵の双子の声が響き其方を向くと2人は片手に持ったアルビオン、ペンドラゴンをそれぞれイーサンに向かって手首の力のみで投げ渡す。

それを上手く受け取ったイーサンは右手にペンドラゴン、左手にアルビオンを構え変異ミランダに銃口を向ける。

「コイツで終わりだ、ミランダッ!!?」

『ズダアアアッ!!×2』

『ガアアアアアッ、ああ、ああああ…!!?』

イーサンは茜と葵、2人が自身用に改造した規格外マグナムを肩の骨が外れながらも変異ミランダに撃ち込み3発の弾丸が変異ミランダの頭にヒットし、大きな血飛沫を上げて仰け反って行きその身体が徐々に結晶化して行き、遂にミランダに止めを刺したのだとイーサン達は確信に至る。

『私の娘…!』

私のエヴァアアアア!!?

ああっ…!!?』

『パラ、パラパラパラ……』

そうしてミランダは娘エヴァの名を口にしながら絶命し、祭祀場周りの特異菌の壁も菌根も結晶化し完全に崩れ去り、登り始めた朝日がクリス達を照らしながらは拘束が外れ自由になる。

その時に茜と葵がイーサンの両肩の外れた関節を押し込み、それぞれのマグナムを受け取るとイーサンと共にミランダの遺骸を見つめる。

「おぎやああ、おぎやああ…!!？」

「ローズ！」

「シーシー、大丈夫だローズ…もう大丈夫だ…」

するとその遺骸が崩れ去ると、中からローズが泣きながら現れ、イーサンが抱き抱えあやし始めると落ち着いた泣き方になって行き、此れで漸く激闘続きの長い1日が終わったと全員が思い、クリス達全員がイーサンに駆け寄った。

「イーサン…やったな、奴は終わった」

「ああ、漸くな…ありがとうアオイ、それとアカネ…最後のアレが無かったら俺は奴を斃せなかった」

「ええんやでイーサン」

「私達は、私達がやるべき事をしたままでですから…ローズちゃんを救い出したのは紛れも無い貴方、イーサン・ウインターズ…『最高のパパ』さんですよ」

クリス、茜、葵が中心になりイーサンを労いローズを救い出したのはイーサンだと告げ、茜や葵は知らない最高の父親とはこう言う存在なのだと言胸に刻み、その姿や志を目に焼き付けていた。

その間にB・Y・達はイーサンの武器を回収してマキがイーサンの肩に手を置き、イヴがイーサンの許しを得てからローズの頭を撫でてその無事を何より喜んでいた。

「さあ次は早く離脱しよう。」

菌根本体にこの村毎爆破出来る爆弾が仕掛けてある。

それを起爆させ、全てを終わらせる為にも此処から」

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』

「何だ、この揺れは？」

そんな中クリスが全員に離脱する様に命じ始め、茜達も菌根本体にN2爆弾が仕掛けである事を直ぐ様思い出し、近場に居る者をそれぞれゆっくり立たせるとクリスは起爆装置を見せながら離れようと口にする……その瞬間謎の揺れが周囲を襲い、そして各々が驚く中、祭祀場の前方にある空間の地下から件の菌根本体が徐々にその姿を現し、クリス達を戦慄させる。

「拙い……!!？」

「……あの菌根から、ミランダの意志を感じる……彼女が菌根を操ってる!!？」

「そんなのアリかよ……!!??」

イヴは精神感応が働き菌根本体にミランダの意志を感じ取り、その妄執が菌根本体に影響を与え操っている事を口にする。

それを聞いたイーサンはウンザリしながら銃を抜こうとしたが、N2爆弾が邪魔になり迂闊に撃つて当たりでもしたら自分達諸共吹き飛ぶと考えて銃を抜けずにいた。

そしてそれは、クリス達全員も同じだった。

「クソ、急いで離脱を!!??」

「……ダメ、ミランダが操ってるから逃げてても追つて来る!!??」

今は逃げようが無い!!??」

「じゃあ如何すれば!!??」

「だから………私が菌根にアクセスして、何とかする!」

クリスの離脱の言葉にイヴがミランダの意志がある限り離脱不可能だと叫び、イーサンは如何すればと叫ぶとイヴ本人が答えを口にする。

それは菌根本体にアクセスすると言う、イヴの脳が焼き切れる事間違いない無しな手段を行うと言うのだ。

「ダメよ、村に入った時やルイザの屋敷前の事を忘れたの!!??」

脳が焼き切れて死ぬだけよ、だから走って離脱を!!??」

「それじゃダメなの!!?」

幾ら逃げてもあれは何処までも追って来て離脱なんて出来やしない、だから菌根本体にアクセスして『エヴァの意志』を呼び起こしてミランダを止めて貰う!!?」

幸い聖杯があつた場所は此処、だからアクセスは可能!

でも万が一ダメなら……その時はお願い、皆」

「待て、ダメだイヴ!!?」

止めろお!!?」

葵はその無謀な手段に猛抗議し、イヴの手を引き走り出そうとしたがその手をイヴは振り払い、菌根本体を止めねば離脱など不可能と話し、聖杯があつた場所に立つとエヴァの意志を呼び起こしミランダを止めて貰うと説明して精神感応の準備に入る。

するとイヴは最後にもしもダメだった際の事を全員に頼むと、菌根と向き合い地面にE型菌を張り巡らせ菌根本体にアクセスを始める。

その無謀な賭けにイーサンはダメだと叫び近付こうとしたが、イヴの行動までに間に合わず彼女の意識はローズを抱いたイーサンの目の前で現実から菌根内部へと向かい始めるのだった……。

LAST EP 『全ての終わり、そして…』

イヴは葵達の静止を振り切り菌根本体にアクセスを開始する。

しかし葵が予測した通り、イヴの脳に重大なダメージが発生し始め、菌根本体にアクセスなどこのままでは不可能であった。

「うう……クリスやイーサン、アオイ達が頑張ったんだ！」

私だって、私だって…頑張らなきゃいけないんだ!!?」

だがイヴはそれでも菌根本体へのアクセスを止めず脳に直接菌根が分解、吸収して来たる者達の情報全てが流れ込む。

そして意識ネットワーク下のイヴの身体が焼き切れ始め、これは現実世界でも脳が焼き切れ始めている事を表していた。

だがイヴは止めない。

葵が、イーサンが、皆が命を懸けてミランダを打倒しローズを取り戻したのだ。

ならば今度は自身が命を賭す時だと考え、菌根へのアクセスを続けた。

「うっ、く、ううううう!!?」

しかし現実是非情な物か、E型被験体のイヴではこの情報量は受け止めきれない、情

報の嵐に意識を引き千切られ菌根を漂う1意識になつてしまうのだ。

にも関わらずイヴはまだ止めるつもりは無い……………全てはイーサン達の活路を開く為であるのだから。

「くっ、うう、うううう……………」

そうして情報の嵐に意識隊の身体が焼き切られ掛けた…正にその時、イヴの手を引く小さな白い手が菌根の情報全てを受け止め、イヴへの道を開いていた。

そしてその小さな手の存在を抱く男の姿もあつた。

そう、今まで傷付き戦いローズを取り戻したイーサン・ウィンターズであつた。

「イヴ、この真つ黒な嵐は何なんだ!?!」

それにお前の身体、かなり焼き切れてるぞ、まさかこれが菌根本体の情報とアクセスの代償なのか!?!」

「…イーサン……………て事はこの小さな手は……………うん、ありがとう。」

後は『2人』で行けるから……………」

イーサンは身体が漂う中でこの黒き嵐が菌根本体にある全ての情報と仮定し、今のイヴの状態が菌根へのアクセスの代償と悟り彼女の心配をしていた。

一方イヴは自分に襲う情報の嵐は無くなり、後は真つ直ぐ道を進むだけになりその小さな手…ローズに後はイーサンと2人で行くと言ひ、次にイーサンの手を取り前へと漂

始める。

「お、おいイヴ大丈夫なのか!?？」

「…うん、ローズが私達に道を示したから…。」

さあ行こう、菌根の中にあるエヴァの意識の所へ…」

「ローズが…？」

そう言えば俺は何でこんな所にと考えたが、ローズが連れて来てくれ…うっ
？」

イーサンはイヴの身を案じ続けると、そのイヴはローズが道を示したからと話し、此
処で漸くイーサンも自身が何故此処に居るかを理解して抱いていたローズを見やる。

その時ローズの身体が光に包まれ、黒き嵐が全て消え去ると同時にイーサンは眩い光
に目を瞑り、少し経ち目を開くと其処はあの村であり、エレナやレオナルド達が楽しく
日常を謳歌する光景が見て取れた。

「レオナルド…エレナ…皆、こんな風に村で日常を…。」

「…さあイーサン、行くべき場所は一つ。」

さつきからローズがずっと示してる場所…共同墓地へ行こう」

イーサンはエレナ達が楽しく雑談し合い、作り過ぎた食事のお裾分けすらしていた村

社会で良くある光景を目の当たりにして目尻が熱くなる。

それはイヴも一緒であり、しかし自分達には行かねばならない場所があると話し、ローズが先程から精神感応で示してる場所……共同墓地へと2人で走り、周りの村人にぶつからない様に向かう。

すると、共同墓地の一角に座り込む10代の少女の姿がイーサン達の目に映り、そしてその子こそが本能的にミランダが愛して止まなかつた娘、『エヴァ』だと悟る。

「…お前がエヴァ、なのか？」

「…貴方達は誰？」

またママが菌根の糧にしてしまった人なの？」

「…違う、私達は菌根にアクセスして貴女に接触しに来た者。」

私はイヴ、貴女のお母さん程じゃないけど特異菌を操れる者。

そして此方はイーサン・ウィンターズ、実世界で……ミランダを終わらせた人よ」
イーサン達はエヴリンに何処か似た少女のエヴァに話し掛けると、彼女はミランダがまた菌根の糧にしてしまった被害者だと誤認するが、イヴから説明がありイーサン達は被害者では無い、ミランダを終わらせたものだと思いと聞くとエヴァは目を見開き、同時にやつと悲劇が終わりになったのだと思ひ泣き崩れていた。

「ウィンターズ……そう、貴方がローズのパパなんだね……良かった……もうママは、村人や

貴族さん達を実験に使ったりする事の無い、私と同じ眠りに就いたんだ……ありがとう、イーサン、イヴ……」

「いや、俺達2人だけじゃ無い、他にも仲間が居たからこそミランダを終わらせたんだ。」

だが、今奴は菌根に溶け込んで菌根本体を操って俺たちに迫って来てるんだ」「……そんな、ママは、未だ諦めてないの……?」

私は、誰かを犠牲にして蘇りたく無いのに未だ……!!?」

エヴァはイーサンが儀式に使われたローズの父親なのだとなり、更にイヴはミランダの様な存在だが彼女の様な狂気は無く、寧ろ人間と何ら変わり無く、更に口振りからイーサンと共にミランダを終わらせた事を悟りただありがとうと口にする。

しかしミランダは未だ諦めてないと知るとその表情は曇り、自身の考え……誰かを犠牲にしての蘇生は望まない事を口にする。

それを聞いたイヴはエヴァの手を握り、彼女の目を見ながら立たせて会話を続ける。「……だから貴女の意志が必要なの。」

エヴァ、今から私達に付いて来て。

貴女の言葉で、意志で、ミランダを止めるのよ。

今菌根と意識が融合したミランダなら、貴女の言葉で止まる筈だから……!」

「無理よ、今までだって菌根の中からずっとママに話し掛けても言葉が届かなかったんだから…!!?」

今更私の言葉が届くなんてあり得ない…!!?」

「やってみなきゃ分からないだろエヴァ！」

もう一度言うがアイツは菌根と意識が融合した状態なんだ、つまり1番菌根に近い状態にあるって訳だ。

だったらダメ元でもう1度お前のママに、お前の意志を伝えるんだ、その口で！

そしてミランダを止められるのはもうエヴァ、お前だけなんだ！

頼む、俺達に付いて来てくれ!!?」

イヴやイーサンはエヴァに今のミランダを止められるのは彼女だけと説得し何とか付いて来させようとする。

しかし彼女もまた百年もの間菌根内部よりアクセスして来るミランダにその所業を止める様に叫び続けたが無意味で、無力化に支配された状態にあった。

しかしイーサンは諦めず説得をし続け、ミランダを今止められる可能性があるのはエヴァだけだと力強くハッキリと告げ、俯くエヴァを奮い立たせようとしていた。

「…エヴァ、ミランダは百年もの間孤独を感じ、埋める事が出来なかったと言ってた。

つまり貴女に執着して心は狂い果てた、けれども貴女を求めるその姿は………相容れない敵だったけど、自分の子を救いたい母親だったよ。

だから、今なら貴女の言葉で止まる、絶対に………だから、一緒に来て」

「エヴァ、菌根の所為で何もかもがイカれちまったが、それでも最後に全てを正しい方向に変えるチャンスが巡って来たんだ。

だから頼む、一緒に来てくれ！

でなきゃ俺の娘がアイツの手に掛かっちゃう！

自分本位で頼むのは申し訳ないと思ってる、だけど家族の為なんだ…頼む!!

？」

イーサンとイヴはエヴァの説得を更に続ける。

此処がエヴァに訪れた最後のチャンスなのだと、自分本位である事を語りつつもエヴァが立ち上がらねば全てを止められぬ、エヴァこそが暴走したミランダを止める最後の希望なのだと小さな体の彼女の意識に刻み付ける。

それ等を聞いた上でエヴァは最初こそ俯いていたがイーサン達の話聞いた事で頭を上げ、何かを決心したかの様にイーサン達に一つ問い掛けを行う。

「本当に、私がママを止められるの？」

「…うん、止められる。」

「そうでないとミランダは母親である事を放棄した生体兵器でしか無くなる」

「…その話をしたって事は、来てくれるんだな、エヴァア？」

「……………うん、ママの所に行く」

エヴァアがイーサン達にミランダを止められるかを尋ねるとイヴが確信めいた発言をし、イーサンも改めてエヴァアに目線を合わせ、付いて来るかを尋ねるとエヴァアは肯定すると同時にイーサンとイヴの手を握る。

そうして2人はミランダの意識体の居場所にまで行くのみとなり、2人はエヴァアの歩幅に合わせて歩き始める。

イーサンは直感から、イヴはローズの精神感応により分かった居場所…この菌根の意識ネットワーク内の祭祀場に向かい出す。

そして門を開けると、ドス黒い水のような菌根の記録の塊がイーサン達を襲う。

「…っ……………!!？」

「くっ、此れは…エレナ達の記憶…!!？」

それにミランダの意志が混ざった物…なのか!!？」

「…大丈夫、ローズが守ってくれてる。」

さあ行こう、全てを終わらせに…」

エヴァアをイーサン達が庇うと菌根の中に溶けたエレナやルイザ達、更に四貴族達の記

憶とミランダの黒き意志が混ざり合い濁流の様にそれが襲い掛かるが、イヴがローズが3人を守っていると答え、歩き始める。

するとイーサンの左手には小さなローズの温もりが確かにあり、それがこの濁流を掻き分けているのを目にしつつ右手でエヴァを離さない様に歩き出す。

そして聖杯の祭壇から石橋を渡る頃には濁流の勢いも強まり、ミランダの激情が伝わり始めるがそれでも3人は止まらず、遂に此方側の祭祀場へ辿り着く。

「ウインターズ、ウインターズ!!？」

ローズを、エヴァの器を寄越せえええ!!？」

「……………イーサン」

「…ああ。」

ミランダア!!？」

イーサンとイヴはエヴァを庇いながら暴走し、ドス黒い意識体となったミランダを目標撃する。

それを見たイヴはイーサンに声を掛ける様に促すと、イーサンはミランダに対して叫び出す。

するとミランダは驚きながら振り返り、イーサンとイヴを目にする。

「ウインターズ、失敗作…!!？」

「そうか、ローズの力でこの場まで来たか…!!？」

「ならば話は早い、ローズを寄越せ、我が愛しきエヴァの器を!!？」

「その執念だけは褒めてやるよミランダ！」

「だがな、お前は今菌根の中に居るんだ、なら会うべき人間が1人居る筈だろ！」

「それを忘れたのかお前は!!？」

「何だと…?」

「イーサン達を目撃したミランダはローズが此処まで運んだと即座に判断し、イーサンに対してローズを渡す様に要求する。」

「だがイーサンは食い下がりながらもこの菌根の中でミランダは1番に会うべき人物が居る事を指摘し、ミランダが眉を顰めた瞬間、2人は1歩左右に移動してエヴァの姿をミランダの目に映す。」

「するとミランダの激情とも言うべきドス黒い濁流の勢いが緩やかになり始め、更にミランダはエヴァに向かって走り2人を退けて抱きつく。」

「ああエヴァ、私のエヴァ…!!？」

「どんなに会いたかったか、どんなに求めたか…!!？」

「ああ、エヴァ……もう少し待ってておくれ、直ぐにでもローズを手にしてそ

れから」

「ママ……もうおしまいにしよう？」

「……えっ？」

ミランダはエヴァに抱きつきながらこの邂逅を待ち侘びた事を口にしながら、更にローズを手にしうと口にしてイーサンを警戒させたが、エヴァが一言……終わりにしようと口にした瞬間ミランダは呆けながらエヴァを見ていた。

それは百年もの妄執をたつたひと突きで崩す残酷で、娘の切なる願いであった。

「エヴァ……けど、ママはお前の為に」

「私は……もう死んだの。」

だからもうそれ以上は求めてなかったの。

でもママは私を蘇らせたから菌根で実験を繰り返した……何度も、何度も。

私は、望まなかったの……確かにスペイン風邪で死んじやったけど、それが運命

だったの。

だから……もう終わらせよう？

私とママはもう菌根の中で会えた、それでもう終わろうよ……私の大好きなママ

……

「あ、ああ、ああ……エヴァ……そんな、私は、ああ、あああ……!!？」

ミランダはエヴァの為と口にしたが、エヴァ自身がそれを否定しつつ自身の死が運命

だった事を語り、そして菌根の中で巡り会えた事で全て終わらせようと口にした。

それらを聞きミランダは涙を流しながら地に膝を突き、自身が築いて来た物全てが崩れ去る音を聞きながらエヴァの大好きなママと言う、こんな化物になってなお大好きと言う娘の愛にミランダは遂に敗北を認めてしまいイーサン達への敵意が消え去り、ドス黒い意識体も普通の意識体に戻るのだった。

「……………」

「イーサン、イヴ、ローズ、ありがとう…私とママは此処で終わるから、後はお願いね…」

「…ああ、菌根を爆破して全てを終わらせる。

だから…アンタ等はゆっくり眠れよ…」

イヴは黙りながらその妄執の終わりを目に焼き付ける。

するとエヴァがミランダに抱きつきながらローズを含むイーサン達にミランダと自身は『此処』で終わると告げる。

それを聞いたイーサンは菌根を爆破して終わらせる事をエヴァ達に告げ、更に眠れと告げた瞬間エヴァ達から光が差し、イーサンとイヴの意識はローズの手引きで菌根の中から消えて行く事を感じながら目の前が白一色となるのだった。

「イーサン、大丈夫かイーサン!!?」

「はっ、クリス！」

そうか、菌根の中から戻って来れたのか…ありがとう、ローズ…！」

「イヴ、イヴ!!?」

「…大丈夫だよアオイ、マキ、アカネ、ヨナ…:…さあ此処から離れよう、もう全部終わるから」

そうしてイーサン、イヴの意識は現実世界に回帰し、イーサンは抱き抱えたローズを撫でてあやし、イヴは全て終わる事を葵達に告げて菌根を見つめる。

すると菌根の動きが止まり、まるで自制するかの如くふるふる揺れながら暴走が抑制され始める。

「此れは…イヴの算段は成功した訳ね、クリスさん、皆さん早く離脱を!!?」

「ああ、全員離脱しろ!!?」

イーサン、行くぞ！」

「ああ……さよならだ、村の皆……」

葵は菌根の動きからイヴがやろうとした事が成功したと判断し、クリスに離脱を促すとクリスも離脱判断を即座に出しイーサンを伴い走り始めた。

そしてそのイーサンは村人達に別れを告げると駆け出し始め、ハウンドウルフのケイナイン達が確保したB S A Aの輸送機まで全力で駆け抜ける。

すると輸送機が見え始め、其処には確かにミアの姿もあった。

「ローズ、イーサン!!？」

「ミア、ローズと俺は無事だ!!？」

「さあローズを！」

輸送機内のミアもイーサン達の姿に気が付き、イーサンとローズの無事を確認するとイーサンからローズをそっと渡され、抱き抱えるとイーサンもミアに抱きつき家族の再会を喜ぶ。

そんな中クリス達7人も走りながら輸送機に入り込み、パイロット席の隊員に指示を出し始める。

「出せ、離陸しろ！」

『此方きりたん、後は皆さんの離脱で作戦は完了です、早くして下さい』

「つ、奴等何を考えてる…」

「…コネクションへの機密情報漏洩、ミランダをわざと刺激する様なウインターズ家のこの国への移住措置、そしてB・O・W・使用…もう間違い無い、B S A Aは俺達の知る組織では無くなった…!!?」

そんな中ケイナインがある座席に座らせたB S A A兵士をクリス達に見せると、それは人間では無くタイラントに近いタイプのB・O・W・であり、B・Y・は、否、クリス達全員は今までの事とこの生体兵器使用が決定打となりB S A Aの闇をその目で目撃する事になった。

これには葵達も憤り、特にクリスとマキとB・Y・は腑が煮え繰り返り、その目に怒りの色を宿していた。

「隊長、指示を」

「チーム全員を集めろ、B S A A欧州本部へ向かう！」

…ツケを払わせてやる」

「デルタチーム全員へ、ハウンドウルフに同行しお礼参りへ行くぞ!!?」

クリスとB・Y・は即座にB S A A欧州本部へ向かい全てのツケを払わせようと指示を出し、ケイナインや通信機越しのデルタチーム全員は同意し連絡を取り合い次の行動を決めていた。

その中で仁王立ちする茜に葵達の視線が集まって行き、そして茜も決心が付いた目をしながら通信機を取る。

「きりたん、此方オメガ1。」

BSAAの決定的な国連法違反事項を見つけたし。

動けるチーム全員をBSAA欧州本部へ向かわせるんや………A. B. F. を舐め腐った事を後悔させたるわ」

『了解です、全戦闘班をBSAA欧州本部へと向かわせます。』

…私達もクリスさん達と一緒に敬礼参りをやりましょう』

「…決まりだね、じゃあイーサン達は途中で安全な場所に降ろしてそれから殴り込みを」

茜も腹を括り、BSAAがB. O. W. 使用を看過出来ないと現場判断をしA. B. F. 総出でこれを糾弾しに行く事を取り決める。

きりたんもそれに怒りに満ちた声色で同意し、葵はイーサン達ウインターズ家を途中で降ろしてから行こう…そう口にしようとした瞬間イーサンはシートベルトを外すとクリスの前に行き、真剣な表情で葵達も予想は出来た、しかしそうして欲しく無い一言が口に出される。

「待ってくれ皆、俺も行く」

「イーサン!?」

「ミア、B S A Aが俺達をこんな目に遭わせる様にしたならローズの父親として、ミアの夫としてしつかりとツケを払わせてやらなきゃいけないんだ。

だから分かってくれ、もうB S A Aにこんな事をさせない様に一度殴り込みに行かないとまた同じ事が繰り返される。

そんなの俺には許せない。

だからクリス、B・Y、アオイ、マキ、イヴ、アカネ、ヨナ、頼む…俺も行かせてくれ！」

イーサンはミアの夫、ローズの父としてB S A Aへ殴り込みに行きツケを払わせてやらねばならないとミアに告げ、ローズを見た後にクリス達を見据え自身を同行させる様に頼み込む。

クリスはそれを聞き、見て断ろうと勝手に付いて来る気でもあり、それでも義理堅く頼み込んで同行許可を得ようとしていると感じ葵達を見るが、肝心の葵達も同じ事を思ってたらしくお手上げポーズを取り、クリスは溜め息を吐きながらイーサンの肩に手を置く。

「…なら無茶はするなよ、折角拾った命なんだからな。

こんな事で失ったら俺はミアにもローズにも顔向け出来なくなる」

「ああ、無茶はしないさ……ローズが元気に大きく育つてくれるまで見守る為にもな」
クリスはイーサンの父親としての態度に折れ、無茶をしない代わりに同行許可を下ろし、イーサンはローズが元気に育ち自分達から羽ばたくその時まで見守る為にそれを飲む。

「じゃあイーサンはまた私達とフォーマンセルを組んで無茶せず必ず生きて帰りましょうね、ミアさんとローズちゃんの下に」

「ああ、勿論だアオイ」

そして葵、マキ、イヴがイーサンに近付き、村でのフォーマンセルを組む事を取り決めイーサンも同行する事が決定事項となった。

それ等を見ていたミアはイーサンが無茶をしないと言う言葉を出した為それを信じ、再び自分達の下に帰って来る事を祈りながらローズをあやしていた。

こうしてイーサン達の乗った輸送機は朝日に照らされながらBSAA欧州本部へと向かい始め、この先にまた戦いがあるがその朝日は彼等の正義感を祝福するかの様に照らしながら空へと昇り始めるのだった。

それから幾許か時が経ち、1人の10代半ばのミリタリージャケットを着た少女が黒い絵本をベンチに座りながら読んでいた。

その本のタイトルは『Village of Shadows』、内容は母親と共にベリーを摘みに来た少女が母親から離れ森で迷子になり、4体の怪物達に誘われ森の奥へと進んで行き最後は魔女の手により呪いで鏡に閉じ込められ、しかし少女の両親が助けに来て父親は戦い、母親は愛の力で鏡から少女を救い出し、父親は魔女との戦いで犠牲となり母親は父親の叫びにより少女を抱き抱え森から離れて行き、そして焼け落ちた森は父親の犠牲を思い起こさせ少女は今でもベリーを摘みに行く悪夢を見ると言う物であった。

「…………でも、絵本通りにはならなかったね…父さんは帰って来た、絵本の怪物も魔女も倒して…」

しかし少女は現実では絵本通りの内容にはならなかった。

自身の父…イーサン・ウィンターズは魔女Ⅱミランダや怪物Ⅱ四貴族達を倒した上で生きて帰り、自分が成長するまで見守ってくれた。

そして現在はクリスの所属する組織とA・B・Fの監視下に入り、日々回って来る任務を熟していた。

そして絵本を閉じた後、指に填めた指輪を見つめた後、黒い車が来たのを察知し立ち上がり運転手のエージェントが降りた車まで歩いて行く。

「君の出番だ。」

頼むぞ、『エヴリン』

「っ、2度とその名前で呼ばないで!!?」

するとエージェントはジョークなのか、それとも何か意図があるか分からないがローズをエヴリンと呼び彼女の神経を逆撫させ、ネクタイ每首根っこを引っ掴まれてしまう。

それには流石にエージェントも巫山戯過ぎたと感じたのか直ぐに弁明を口にし始める。

「おいおいただの冗談だろ、ローズ?」

「クリスも知らない『力』をアンタで試してやっても良いんだよ?」

『ウイイイイン』

「はいローズストップ、この人には後で言うておくから此処は私の顔を立てて抑えて、ね?」

「…………ふう……」

『ドン！』

ローズはクリスが把握していない自身の力を此処で試しても良いと口走り完全に一悶着が起きようとしたその時、後部座席の窓ガラスが開き中に居た『青髪の女性』がサングラスをズラしながらウインクをし、その場を収めようとする。

その女性……………ローズを常にサポートし、ウイルスに完全適応の力でB・O・W・を屠り、老化が20代で止まってる琴葉葵の義理立てに免じてエージェントの首根っこを離し車に向かって押しながら助手席へと向かい始める。

『何時でも撃てるぞ?』

「待機してろ、問題無い。」

只のガキだ」

「オメガ16からも待機で。」

別に良くある喧嘩程度ですから。

それに乙女心が分からないブラックジョークの所為ですから」

其処に不意に通信が入りローズを撃てると話してるとエージェントは彼女を只のガキと言いなながらネクタイを直し、葵はローズ側の味方に回ってる為かエージェントのブラックジョークの所為と言いエージェントの肩を竦めさせ、葵は笑みを浮かべながら

ツーンとエージエントの視線を流していた。

「未だコントロール出来ない…」

「…ゆつくり、焦らず感情を静めれば良いよ。」

貴女の味方は少なくとも此処に2人居るから」

助手席に座ったローズは未だ自分の感情面のコントロールに難があると愚痴る。

それを後部座席に座っていたもう1人の女性：E型被験体第2号であり、保全薬の量を減らし普通の人間と同じスピードで老化する様にルナ達に頼み込んだ20代前半の姿になったイヴが座って居り、その直ぐに昂る感情を抑えるのは焦らなくとも良いと言い、横で葵が手を振り味方は2人は此処に居る事を示しローズに彼女達には勝てないと思わせる大人の女性らしい冷静さを見せていた。

「やれやれ、男の俺は肩身が狭いよ。」

…そう言えばローズ、彼に似て来たな」

「…ふつ、知ってる」

そうして味方してくれる人が居ないエージエントは肩身が狭いと軽口を叩きつつ、ローズに彼、イーサンに似て来たと話す。

するとローズは笑顔を見せてただ知っていると答え、自分を命懸けで救った最高の父親を誇りに思う素振りを見せていた。

そしてそれは、後部座席に座る2人や今は此処には居ない弦巻マキや琴葉茜達にも同じ感情を向けており、葵達はそれを知ってる為こそばゆく感じてはいるが悪くは無く、今もローズの身を案じる両親の為に彼女の力になろうとより一層葵達はこれから向かう任務に向けた算段をエージェントが走らす車の中で頭に組み立てて行くのだった。

所変わりウィンターズ邸のソファにて、イーサンはローズの身を窓を見ながら思索していた。

其処にミアがコーヒーを注ぎイーサンの前に置き話し掛け始める。

「イーサン、ローズは大丈夫かしら？」

「…大丈夫さミア、ローズにはクリスやアオイ達が付いている。」

それに…」

ミアはローズが心配でイーサンに大丈夫かと案じる言葉を掛けるが、当のイーサンは自身の命を救い、更にローズを救うのに尽力した葵達にクリスが側に居るから平気だと口にしながらコーヒーを飲み始める。

…その身体はミランダ達との戦いでダメージで既に緩やかな崩壊が始まっており、イヴの力でも延命不可能な、保って残り数年の命であるが、そんな身体でもローズの事を心配するよりも信じる方に感情をシフトさせていた。

何故なら葵達が側に居るだけで無く…。

「なんとたつてローズは俺と、ミアの自慢の娘なんだからな。」

ミランダ以上の怪物が現れたつて元気で帰つて来るさ」

「…ふふ、そうね」

それはローズが自慢に思う最高の父親として、ローズを信じているからこそであり、そして何より親バカとも取れる娘への全幅の信頼があるからこそ発せられた言葉であるからだ。

それを聞きミアも同じ感情を抱き、イーサンの隣に座り手を重ね合わせながら窓からの日差しを受けつつ自分達の自慢の娘の帰りをゆっくり待つのであった。

残りの命をローズの帰りを待つ父親として使い尽くすと決めながらその友人達の訪問も、何時来ても良い様にしながら空を見上げるのであった。

B I O H A Z A R D [V + α]
E P I S O D E O F V I L L A G E [T h e
s t o r y
o f
a
g r e a t
f a t h e r]
I | E N D | |